おそらくはありふれた究極的なやりかた

Hastnr

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恋するＳＡＯヒロインズと黒の剣士キリトさんがご都合主義系ＶＲ空間で平和に爛れた日常を送るハーレムオムニバス集。

オムニバスなのでどこから読んでも大丈夫。

サブタイトル末尾の（）内は主な登場人物を、［▲］はＲ―１８に該当するシーンが無い話を示します。

原作世界線とゲーム世界線のいいとこどり世界線です。

原作最新刊や最新ゲーム等諸々のネタバレがありますのでご留意ください。

ｐｉｘｉｖにも同じもの投げてます。

要望を投げたい時は活動報告のどれかへ。

感想や高評価をもらえると嬉しいです。

目次

第一部

00. SWORD Alliance Organize

1

01. 氷の狙撃手は黒の剣士の夢を見るか？（シノン） 14
02. 《閃光》の異名を持ち旦那を自在に操る高貴なる血盟騎士（アスナ） 34
03. 絶えざるままに待ちいたり（ユウキ） 73
幕間. Fuel My Soul［▲］ 90
04—1. 魔竜使いと嫁 白夜篇（シリカ・アスナ） 113
04—2. 魔竜使いと嫁 黒夜篇 130
05—1. Hollow Delusion（フィリア・シノン） 153
05—2. Fragment of Memory 175
06—1. 剣理殺人刀（リズ・レイン）［▲］ 196
06—2. 剣理活人刀 216
06—3. BLADE ARTS Ⅲ 255
06—4. BLADE ARTS Ⅳ 285
07. サブクエの多い料理店（リーファ・フィリア） 313
08—1. せいおうのおしごと！（アリス・アスナ） 353
08—2. この素晴らしいネトゲの嫁は本当に祝福を!? 386
09—1. キス・アンド・プレイ（アスナ・ユウキ） 412
幕間. Awakening R ／ Rising S［▲］ 441
09—2. キリトを待ちながら 455

10―1．騎士団長犯し（アリス・アスナ他）―― 495
10―2．限りなく透明に遠いブラック―― 527
11．夜は長いし語れよ乙女（色々）―― 559
12．ターンKターン（セブン・レイン）―― 586
13―1．月光のカルネヴァーレ（ロニエ・アスナ他）―― 625
13―2．月下に捧ぐ―― 664
幕間．背負う過去／繋がる未来【▲】―― 695
14―1．週末のハーレム（全員／ロニエ・ルクス）― 708
14―2．（リズベット・サチ・アスナ）―― 744
14―3．（ロニエ・アリス・イーディス）―― 773
14―4．（アリス・イーディス）―― 797
14―5．（シリカ・シノン）―― 825
14―6．（アルゴ）―― 851
14―7．閑話休題―― 871
14―8．（リーファ）―― 886
14―9．（ユウキ・リーファ・アスナ）―― 910
14―10．（アスナ・ユウキ・他）―― 937
14―11．（アスナ・ユウキ・他）2―― 958
14―12．（レイン・セブン・ストレア・フィリア・全員）
996
第二部
無様チン媚び尊厳破壊セックス大好きアスナさんとＳＡＯＰ一層からエロスキル熟練度上げプレイする話―― 1020

第一部

００．ＳＷＯＲＤ　Ａｌｌｉａｎｃｅ　Ｏｒｇａｎｉｚｅ

ＶＲ。

フルダイブ型仮想現実空間。

それは、人が手にした新たな世界。あるいは人類が開けてしまった何個目かのパンドラの箱。

地球を覆う光速の網に放たれた世界の種子（ザ・シード）は、サーバーという大地の中で芽吹き、様々な可能性と光景を内包した世界として育っていく。

たとえばそれは銃火響く荒野の世界かもしれない。怪異と猫が蔓延る和の世界かもしれない。妖精たちの舞い躍る大樹の世界かもしれない。あるいはそのどれでもない、全く新しい世界かもしれない。

世界の形は違えど、一つだけ共通している事がある。それは、どんな世界であろうとも、人は『快楽』を求めるという事。

ここ、桐ヶ谷和人の自宅に据え付けられたプライベートサーバマシン上に芽吹き、育った世界もまた然り。

（……さすがに、喉が乾いたな）

焚きしめられたアロマの香りと、ソレ以上に濃密な男女の匂いに満ち満ちたベッドルーム。

柔らかなウォーターベッドの上に預けていた上半身をゆっくりと起こしつつ、桐ヶ谷和人――もとい、キリトは左手をゆっくりと動かし、空中に呼び出したコンソールウィンドウを操作すると、目当ての品をオブジェクト化する。

微かなサウンドエフェクトと共に現れたのは、ガラス瓶（ボトル）に入った『スカイ・ダイビング』と呼ばれるカクテル。元は『ＧＧＯ』に実装されていたカクテルレシピの一つだが、未成年プレイヤー対応にアルコール成分や作用は削除されている。

混ざりあったホワイト・ラム、ブルー・キュラソー、そしてライムジュースが作りだす、晴天の空と同じ青色をしたドリンク。それがたっぷり入ったガラス瓶を傾けて中身を嚥下すれば、キュラソー独特の風味と爽やかなライムの後味が舌の上を駆け抜けていく。

「キリト……私にも、ちょうだい」

小さな声に惹かれて視線を下に向ければ、蒼空色の髪の間から大きな猫耳を生やした少女――シノンがいる。

先程まで繰り広げられていた行為によって排出された汗でしっとりと身体を濡らし、痕跡を下半身に残したままのシノンは、うつ伏せに寝転びながらじっとキリトの方を見つめている。

リアルとは違い、情欲をぶつけ合った後の事を気にしなくていいのはＶＲの大きな強みの一つだ。

彼女の口元に瓶を運ぶ代わりに、キリトは空いている手で彼女の細い体を抱き寄せる。互いの体を密着させれば、一糸まとわぬ姿を晒すシノンの肌の感触が同じく何も着ていないキリトの体にダイレクトに伝わってくる。

キリトはカクテルを口に含むと、静かに目を閉じて待つシノンの唇に唇を重ね、蒼い液体を口内へダイレクトに送り込んだ。

「んんっ――♪」

男の唾液が混じったカクテルを、シノンはこくこくと喉を鳴らしながら嚥下していく。やがて送り出される液体が尽きても、唇同士が離れることはない。焦らすような舌先の動きに誘い込まれたキリトの舌が、シノンの口内を嬲る。

主人（あるじ）が誰なのかを言外に教え込むような長く濃密な口づけが終わりを迎えたのは、絡め合った互いの舌の上からライムの味がすっかり消え去った後だった。

「――ん、はぁっ……ごちそうさま」

「おそまつさまでした」

繋がっていた唾液の橋が見る間に千切れていく中、ようやく呼吸する自由を許されたシノンは、キリトの胸板に頭を預けながらその艶めかしい両足を男の左足へ絡める。体を擦り寄せ、肌と肌を密着させる

その仕草は、飼い主にマーキングを行う本物の猫のようで至極愛らしい。

寄りかかった肌の上に浅い口づけを落としながら余韻を味わうシノンの後頭部へそっと右手を回し、薄青の後ろ髪を軽く弄びながら、キリトはもう一度『スカイ・ダイビング』を味わおうと左手を持ち上げる――が、その瓶が口元に届くより早く、キリトの背後から伸びた細い手が蒼い液体の入ったガラスボトルを奪い去った。

「……いきなりなんだよ、アスナ」

「『なんだよ』じゃありません。ちょっと呑み過ぎだよ、キリトくん」

「これ、ノンアルなんですけども……」

「知ってます。でも、今のうちからお酒の味を覚えすぎちゃうのは……ちょっと、よくないと思うよ？」

むむむ、と眉根を寄せてボトルを奪い去った陽色の髪の少女――アスナは、言うが早いかコントロールウィンドウを呼び出し、そのままボトルを己のストレージへとしまい込む。互いのストレージは共有化されているが、心配そうな目で見つめてくるアスナを無下にするのもバツが悪い。

「……以後、気をつけます」

「よろしい」

大人しく降参の意を示しつつ、キリトは己の隣に腰を下ろした彼女の体を、空になった右腕でいつものように抱き寄せる。

『ＳＡ：Ｏ（オリジン）』で使用しているアバターで――正確に言えばそれのコピーで――ログイン中のアスナも、キリトやシノン同様に何も身につけていない。ふわりと漂う石鹸の清らかな香りと、夫婦の指輪を除いては。

わざと痕跡を残して挑発するシノンとは対象的に、アスナはしっかりと清めた体で雄を誘惑しつつ、キリトの首筋に己の唇を触れさせる。必然、最近また大きくなった豊満なバストがキリトの腕に当たり、柔らかかつ張りのある絶妙な感触を齎したのは言うまでもない。

「ふふっ。ＶＲＭＭＯ界にその名を轟かせる『黒の剣士』様も、奥さん相手だとタジタジってわけね」

「言うなよ、シノン……」
痛い所を突かれてボヤく男の腕に抱かれたまま、シノンは片目を一度閉じ、含みのあるウィンクを送る。
「まあ、こっそり呑みたくなったらいつでも『ＧＧＯ』にログインしたらいいわ、キリト。
ちょうど、私のプレイヤーホームにバーカウンターでも増設しようと思ってたとこだから」
「もー、シノのん。キリトくんに、あんまり変なこと教えないでよー。
キリトくんって意外と影響されやすいんだから、うっかり悪い道に走っちゃったらどうするのよ」
「あら。片手の指じゃ足りない数の女の子と関係を持ってる人は、とっくに悪い道に走ってると思うけど。
ねえ、キリト？」
揶揄するようなシノンの瞳と、頬を膨らませて可愛らしく怒ってみせるアスナに見つめられ、キリトは曖昧な苦笑を浮かべて頷くほかになかった。

シノンが言うところの『片手の指じゃ足りない数の女の子』と、キリトがこうした関係になった大きな要因の一つは、この空間の存在そのものにある。
ここは『ザ・シード』を用いた技術研究の場兼、愛娘であるユイの遊び場として、キリトが自宅のサーバマシン内に作り始めた半閉鎖型（プライベート）ＶＲ空間。元々は１００メートル四方のごく狭い空間でしかなかったが、キリトが思いつくままに拡張を重ね、更にはユイ経由で話を聞きつけたアスナや他の女性陣達のリクエストを取り入れ続けた結果、当初の想定の百倍近くにまで成長を続けていたという来歴を持つ。
環境制御など、大方の機能は『ザ・シード』のパッケージに内包されている上、各ロケーションのベースにネット上で公開されているフリーウェアを使用したこと、更に『例のバイト』で稼いだ金とバイクパーツ数点を諦めて捻出した予算でサーバ機自体のスペックアップを行ったことで、キリト個人のリソースでも管理は十分に可能となっ

ていた。
とはいえ、配布されているモジュールをそのまま突っ込んだだけでは味気ないし、内部処理への無駄な負荷が発生するのもまた事実。
そういったモジュールの構成や相性、グラフィック面の差異を確認し、必要なら適宜手を加えて調整するのが最高権限管理者（アドミニストレータ）たるキリトの主な仕事だった。
キリト達が現在居るこの家も『ＳＡＯ』、そして『ＡＬＯ』内『アインクラッド』第２２層で購入した湖畔の家とほぼ同じ物――いや、正確に言えばほぼ同じ物『だった』。
外観こそあの湖畔の家と全く同じだが、内部に施されたカスタマイズの規模はもはや常軌を逸している。
レストラン顔負けの調理設備が整えられた大型システムキッチンを始めとして、広大な浴室――しかも『露天風呂付き和風温泉』と『岩盤浴付きパルテノン風スパ』の二種類――はもちろんのこと、オシャレなカフェスペースやそこそこしっかりとした規模のトレーニングルーム、バイクや車はもちろん戦車も停められそうな大型ガレージ、更には屋内プールに剣道場や弓道場、果てはシューティングレンジなどという設備までが構築されている。
加えて、扉のいくつかはワープゲートになっており、常に適度な日が差す昼寝にはもってこいの草っぱらから、郊外の牧場や古代ローマ風の円形コロッセオ、絶海の孤島から地の底の洞窟といった様々な場所に即座に転移できるようになっていた。
当然言うまでもないが、各人専用の私室もしっかりと用意されている。内装用オブジェクトは、アスナやリズを始めとした女性陣の強い要望――これをワガママと言うのは野暮というものだろう――に応える形でキリトが労力を費やしに費やした結果、多様なバリエーションが実装済みである。
これらを可能にした技術的背景には、『アスカ・エンパイア』等で実装されている混雑避けのインスタンスショップシステム・フレームワークの存在がある。簡単に言えば、同一構成の空間を大量に作り出し、そこへ次々にプレイヤーを転送する事で同じ空間に存在する人数

に制限をかけるというシステムなのだが、キリトはこの一部に独自の改良を加え、家屋内空間の拡張ツールとして実装していた。

――実装後のテストも兼ねて、この空間にログインできる者であれば誰でも自由に設備や部屋を追加できる様にしていた結果、今ではちょっとしたダンジョン顔負けの規模にまで成長してしまったのは、キリトにとっても予想外ではあったが。

なんだかんだで、ルームカスタマイズを始めとした諸要素のバグ取りも終わり、次の機能拡張内容（アップデート）についてキリトが思案し始めた頃――現実の世界で、例のラフコフ残党による襲撃事件が起きた。

キリトは――もとい、桐ヶ谷和人は生死の境を彷徨うどころか『死』の側へと大きく踏み出し、無事かどうかすら定かではないまま拉致されて行方不明となった挙句、ようやく仮想世界（アンダーワールド）の中で発見された時には心神喪失寸前にまで追い込まれていた。

筋弛緩剤の過剰投与による肉体への影響が大きかった事は言うまでもない。ただそれ以上に、『ＳＡＯ』時代から罪の痛みに軋み、悲鳴を圧し殺し続けてきた和人の魂魄（フラクトライト）そのものが、異界の中で叩きつけられた過大すぎる負荷（ストレス）によって粉々に砕け散りかけていたのだ。

幸い、多くの人間達の尽力と僅かな奇跡が重なった事で和人はどうにか己の有り様を取り戻す事に成功し、アンダーワールドを舞台に繰り広げられていた陰謀は結実寸前でどうにか食い止められた。

もし運命という名の織物を形作る縦糸の一本でもズレていよう物なら、もっと悲惨な――例えるなら、蒼い薔薇が人知れず散るかのような――結末が待っていたかもしれないと関わった者全てが理解する程に危うい、薄氷を幾枚も踏んだ果ての勝利であった。

兎にも角にも。

天に神は無く、地の底に異界あろうとも、なべて世は事もなし――と、無事に生還を果たしたキリトがのほほんと日常を謳歌する一方。その陰で、密かに策謀の爪を研ぎ、虎視眈々と実行の機会を伺い始めた勢力があった。

その名も《ＫＫＡ》――正式名称『キリトに片思い同盟（Kataomoi for Kirito Alliance）』である。

かつて、結城明日奈という伝説の女性（レジェンダリークラス・ヒロイン）が、キリトの周辺一帯を支配していた。その圧倒的な勢力により、かえって《ＫＫＡ》の面々は統率が取れていた。

しかし、『まあ、キリトが幸せならば』と自ら一線を引きつつも、胸の奥の想いを延々と燻らせ続けてきた彼女らにとって、今回の出来事は衝撃的に過ぎた。言うなれば、ガソリンを限界まで溜め込んだダムにコンクリート製の蓋をしていたら、そこにミサイルが着弾して大穴を開けたようなものだ。金色の髪をした娘が地の底から運んできた特大のミサイルが。

キリトが抱え続けてきた、人を殺したという罪への苦しみ。人を死なせたという罪への痛み。そして人を犠牲（サバイバー）にして生き残ってしまった罪（ズル・ギルト）の重圧によって、キリトが自己存在消失寸前まで追い込まれていた事を知り、言葉を失わなかった者は誰一人としていない。

――『桐ヶ谷和人というこの超巻き込まれ型体質のお人好しは、もう少し幸せになって然るべきなのではないか？』と考えなかった者も、誰一人としていなかったのは言うまでもないだろう。

新たなメンバーが加わった勢いも相まって、半ば箍が外れかけた《ＫＫＡ》の面々ではあったが、決して理性や常識というものまでが失われた訳ではない。ただし一部の面子は除く。

もとより『アスナに負けたくない』、『キリトに振り向いて欲しい』という気持ちこそあれど、それが『アスナからキリトを略奪したい』とイコールであるかと問われて、首を縦に振る者がいない――わけではないが、少なくとも首を縦に振る者の方が少ない集団なのだ。そうでなければ《ＫＫＡ》など最初から存在できようはずもない。

結局、具体的な行動に移りあぐねたまま、ああでもないこうでもないと思案ばかりを重ねる彼女らに――まさかの結城明日奈その人が接触を図ってきたのは、さほど夏の暑さを感じないある土曜日の午後だった。

「今後、キリトくんに振りかかるであろう諸々は、『キリトくんを愛している』私達でなんとかするのが一番いいと思うの。

だからね。ここにいるみんなとは――《協定（Alliance）》を結んでおこうかな、って」

エギルの店を貸し切り、店主を追い出したうえで開催されたアスナと《ＫＫＡ》の会合。

居並ぶ《ＫＫＡ》の面々を前に、開幕から躊躇なく本題を切り出して核心を突いてくるあたり『閃光』の威名は未だ衰えず――などと考えられるだけの余裕を持った人間がどれだけいたかは定かではない。

少なくとも、いつもどおり明日奈の肩に載っていた遠隔通信プローブは突然バッテリーが切れたかのようにしばらく動きを止めていたし、最近ＶＲ界隈で名を上げつつあるトレジャーハンターは落とし穴に落ちたら目の前に金貨財宝の山がある事に気づいた時のような顔でフリーズしていた。

なにせ《ＫＫＡ》の面々が事前に想定していたのは、『いい加減すっぱり諦めなさい』という正妻様よりの最終通告だったのだ。それが蓋を開けてみれば、明日奈の口から出てきたのは想定とは大きく違う内容だったのだから、混乱しない方がどうかしている。

明日奈の言い分はこうだ。

此度のラフィン・コフィン残党による襲撃を発端とした一件。その解決にあたり、セルフ・イメージを回復させ、戦う意思と力を取り戻したキリトが大きな役割を果たした事は言うまでもない。

問題はその過程だ。

最終決戦の折、アスナ、シノン、リーファという一際『濃い』三人のフラクトライトから抽出した記憶を総動員しても、キリトの欠損したセルフ・イメージは回復しなかった。その後に起きた奇跡にも等しい偶然と幸運が重ならなければ、キリトは己を取り戻す事の無いままアンダーワールドで屍を晒していたのは火を見るよりも明らかだ。

幸い、事件は解決したとはいえ、アンダーワールドを取り巻く環境は未だキナ臭い。大企業の令嬢として、幼い頃から権謀術数渦巻く大人の世界に触れてきた明日奈は、同じようなことがまた起きかねないと直感的に理解している。

その直感が現実となった時――そこに、キリトが巻き込まれずに済

む可能性がどれだけあるというのか？　アンダーワールドを救い、世界初のボトムアップ型ＡＩの信頼を得る希少な存在を、どこの誰が放っておくというのだろうか？　仮に放っておいたとしても、あの絵に描いたようなお人好しが首を突っ込まずにいられるというのか？

その『もしも』に備え、キリトのセルフ・イメージを補完できる者を可能な限り増やしておきたい。一人あたりが提示できる記憶の量が多ければ尚更好都合。更にいずれ手を回してくるであろう、キリトのヘッドハントを狙う組織によるハニートラップ対策も兼ねられる点を考えれば、まさに一挙両得。

そんな企ての内容を、明日奈は一切包み隠さず披露してのけた。

あれだけの戦いと、あれだけの苦しみを乗り越えてきた黒の剣士に、自分一人では与えられないだけの幸福を味わってもらいたい――と、最後に言い添えた上で。

『【Ｓａｖｅ　ｔｈｅ　Ｗｅｌｌｎｅｓｓ　ｏｆ　Ｏｕｒ　Ｒｅｃｋｌｅｓｓ　Ｄｅｓｉｒｅ（向こう見ずな私達のキリトくんの幸せを守る協定）』。

――乗ってくれるなら、悪いようにはしないわ。少なくとも今よりは」

《ＫＫＡ》の面々が少なからぬ興味を示した事を感じ取った明日奈は、そのまま自らの申し出についての仔細を説明する。

『ＶＲ空間内であれば、キリトとどのような関係になっても良い』。

『他の子がキリトと関係を深めようとしても邪魔をしない。手伝うのは可とする』。

『ただし現実世界では、学校を卒業するまで、ハラスメント防止コードに触れる類の行為に及んではいけない』。

『キリトの身に何かが起きた時は、持てる力の全てを使って彼をサポートする』。

後に《ＳＷＯＲＤ協定（Ａｌｌｉａｎｃｅ）》と呼ばれることとなる明日奈の提案に対し、《ＫＫＡ》構成員達は多様な反応を見せた。

ある構成員は氷の彫像のような冷静さで沈思黙考し、ある構成員は衝撃のあまり天に昇る幼竜の如き勢いで椅子から立ち上がろうとして転びかけ、ある構成員はわたわたと慌てながら自分の考えをまとめ

ようと躍起になるあまり口の端からロシア語が飛び出す有様。
　そんな混乱の中、意外にも真っ先に口を開いたのは、キリトの義妹・リーファ――もとい、桐ケ谷直葉だった。
　同性でも一瞬ドキリとしてしまう程に蠱惑的な笑みを浮かべた明日奈が静かに答えを待つ一方、両手で自分の頬をぱん、ぱんと二度叩いて気合を入れ直した直葉は、明日奈の榛色の瞳を真っ直ぐに見つめて口を開く。
「その……明日奈さん。本当にいいんですか？　もし、あたしがお兄ちゃんに、す、す、好きって言って、こっここ恋人になっちゃっても！」
「うん。あ、もちろんキリトくんがＯＫするなら、っていう条件はつくけどね」
「嫌じゃ……ないんですか？　寂しくないんですか!?　お兄ちゃんが、明日奈さん以外の女の人を好きになっちゃっても！」
　過去の自分が味わった切なさをぶつけるように叫ぶ直葉の問いかけに対し、明日奈は静かに首を横に振る。
「私はね。もう、普通の人の人生三回分くらいはキリトくんに愛してもらって、沢山の幸せをもらったの。
　アンダーワールドで王様になっちゃったキリトくんに、２００年かけてたっぷりとね。
　もちろん、キリトくんが私の側から居なくなるっていうのは絶対に嫌だけど……もともと、キリトくんの愛はとっても大きいから、そこら辺を心配する必要は無いかなー……って」
「それは、うらやまし……じゃなくて。その記憶は、封印しちゃったんじゃ……」
「うん、そうだよ。だから、映像や体験としてはっきり覚えているわけじゃないけど……それでも、私の魂（フラクトライト）は、ちゃーんと憶えてるみたい。
　キリトくんと過ごした、とっても長くて、あっという間の２００年があった事を。だから大丈夫。
　もしかしたら……記憶喪失するのもこれで二回目だから、脳と心が

慣れちゃってたのかもね」

達観したかのような明日奈の言葉に、直葉は感情を向ける先を失って口をつぐむ。

仮想世界においては誰よりも長くキリトの側にいた明日奈には、自らの提案によって書き換わっていくのであろう先々の未来がしっかりと見えているのだろう。それが恐らく、キリトにとって良い方向に傾くであろうことも。

「それにね、直葉ちゃん。そういう事を私がとやかく言うのは、今更遅すぎると思うのよね」

「遅すぎるって、いいますと……？」

「――だってみんな、ちょくちょくキリトくんと同じベッドで寝たりしてるじゃない。

『ＳＡＯ』でも、『ＳＡ：Ｏ（オリジン）』でも、『ＧＧＯ』でも――それもたぶん、すっごく無防備な姿で」

空気が凍った。より正確に言うならば、凍りつかされた。瞬間冷凍などという言葉が可愛らしく思えてくる程に短い刹那のうちに。

淑女らしいふんわりとした笑顔を崩さぬまま、『こっちは何もかも知っているのよ』という無言の重圧を放つ明日奈を前にした《ＫＫＡ》の面々の様は、まさに蛇に睨まれた蛙。あるいは邪神級モンスターの全体必中強制スタン攻撃を喰らった初心者冒険者の群れも同じ。

『なんでそれを知っているのか』――などと、今更問うのは愚の骨頂だろう。なにせ、明日奈なのだ。キリトと自分達の間に漂う雰囲気を察し――いや、なんだったらキリトの顔を見ただけである程度以上の確信を得ていてもおかしくない。

あとはそこから情報の断片（フラグメント）をかき集め、起きていた事の想像（ホロウ）を確たる物にし（リアリゼーション）、言い逃れのできない致命的な証拠（フェイタルバレット）として用意する事ぐらい、明日奈なら容易くやってのけるだろう。

その様子に気圧され、誰もが引きつった笑みを浮かべる以外は何もできなくなる中。どうにか精神状態を回復させたシノン――もとい、朝田詩乃は、中の氷がすっかり溶けたグラスをカウンターに置いて、ゆっくりと立ち上がった。

「……明日奈がそこまで言ってくれるなら、私にとっては渡りに船だけど、いいの？

私、やるとなったら本気で狙いに行くわよ。キリトが、明日奈や他の子に目移りしてられなくなるくらいに」

「もちろん、いいよ。

キリトくんを本気で夢中にさせられるって言うのなら――どうぞご自由に」

挑発的な詩乃の言葉に、明日奈もまた自信に満ち溢れた台詞を返す。

裏に含みのあることをわざと滲ませたそのトーンと、己こそが『正妻』、『本妻』、ついでに言うなら『抜刀妻』という雰囲気を隠そうとしない余裕たっぷりの明日奈の態度に――《ＫＫＡ》の面々はようやく理解した。

明日奈は何も《幸せのおすそ分け》などという可愛らしいことを考えてここに来ているのではない。

『今後もキリトの側に居たいというのであれば、安全圏内で指を咥えて傍観するのをやめて、さっさと勝負の舞台（ＨＩＧＨＥＲ ＧＲＯＵＮＤ）に上がってきてその資格を示せ』

――という、【最後通牒（Ｄｏ ｏｒ Ｄｉｅ）】を叩きつけに来たのだと。

名も無いダムを覆うコンクリートの天井にミサイルが開けた大穴目掛け、着火済みのライターを放り込んで爆破セレモニーを開催しに来たのだと。

そうまで虚仮にされて黙っていては、女が廃る――その場にいた明日奈以外の全員が、全く同じ心境に至ったのは今更言うまでもない。

たとえそうなることが、明日奈の目論見通りであったとしてもだ。勝つことしかこだわらないのが男の業（カルマ）なのだとしたら、負けることを許せないのは女の業（カルマ）なのだろうから。

かくして、その日。構成員全員の賛成を以て《ＫＫＡ》は解散。

同時に旧《ＫＫＡ》構成員は、誰一人欠けること無く《ＳＷＯＲＤ協定》への参加を表明した。

一方その頃、プライベートＶＲ地区（エリア）のキリトは、着実に空間内拡張

性を伸ばしていた。
　幸か不幸か、以前より苦心していたソードスキルの再現、および発動時用のライトエフェクト実装に目処が立ってしまった事もあり、キリトの注意力の大半はそちらに向けられていた。
　もし、そんな状況下でなければ、さしものキリトも何かに気づいたかもしれない。俗に『虫の知らせ』等とも呼ばれる本能的な――あるいは動物的な――直感によって。
　まるで、平城を守る御堀が突如として重機で埋め立てられたかの如く、自らを取り巻く状況が一変した事に。
　そして、酒池肉林を謳歌するにはお誂え向きすぎる理想郷を、自らの手でうっかり創り上げてしまった事に。
　――こうして。
　少しばかり戦いに疲れた黒の剣士と、彼を心より慕う多くの女性達（ヒロイン）による、据え膳を喰らい、純潔を奪われ、肌を合わせ、褥を共にし、情交を結び、枕を重ね、房事に及び、色事に励み、男女の関係を結んで秘め事に溺れ獣のようにまぐわう日々は、あまりにも静かにその幕を開けた。
　その後約一ヶ月に渡り、キリトは恋と愛と欲望の嵐のど真ん中に放り込まれ、実に目まぐるしい日々を駆け抜け続けることになるのだが、その顛末と紆余曲折はまた別のどこかで綴られるべき物語だろう。
　これは、そんな刺激的な日々を駆け抜けた結果、男として――あるいはかつて異界の王にまで登り詰めた者として――ようやく腹を括った（開き直った）黒ずくめの彼と、色とりどりの彼女らによって繰り広げられる、おそらくはありふれた日常のお話。

01．氷の狙撃手は黒の剣士の夢を見るか？（シノン）

居住空間のレイアウトには、住む人の性格が出るという。

それが現実の世界に比べ、カスタマイズ性に圧倒的な自由度を誇る仮想世界であれば尚更だ。

そんな仮想世界に於いて、『現実の自分の部屋とさほど変わらぬレイアウト』を設定している人間がいるとすれば、それは余程の変わり者か、あるいは実用性第一主義者と判断していいのかもしれない。

「――シノン、居るか？」

そのどちらでもない〝彼女〟の部屋の前に立ち、キリトは扉を二度ノックした。

最高権限管理者（アドミニストレータ）にはユーザーログイン通知機能が付随するため、シノンがログイン済である事は知っている。いざとなれば彼女の空間座標を即座に把握したり、鍵のかかった部屋を強制的に開けることもできるとはいえ、『マナー』や『エチケット』はどこにでもある。

どれだけ深い仲になろうとも、守るべき一線というものはあるのだ。

『待って。今、開けるわ』

扉の向こうから微かな声が聞こえてから数秒の後。解錠を示す効果音（サウンドエフェクト）と共に、目の前の扉がゆっくりと開く。

「こういう場合、『お邪魔します』って言うべきなのかな。シノン」

「……微妙な所ね。ここ、一応あなたのお家の一部なんだし。

まあ、それはともかくとして……入って、キリト」

そう言って出迎えたシノンに招かれ、キリトは彼女の私室へ足を踏み入れた。

『ＧＧＯ』最強のスナイパー・『シノン』。『氷の狙撃手』の異名を持つ、ＢｏＢ優勝経験も持つ女傑（クール・ビューティ）。

そのアバターを使用してログイン中の彼女――『朝田詩乃』が、キ

リトのプライベートＶＲ空間に用意された私室スペースに再現しているのは、現実の世界で自分が暮らしているのとほとんど変わらない間取りだった。

ちなみに、キリトがこの空間にログインする際に使用するのは、もっぱら『ＳＡ（オリジン）：Ｏ』のアバターだ。それは今日も例外ではない。

こうして他のＶＲＭＭＯからアバターデータを流用できるのも、システムの中核に『ザ・シード』を据えた恩恵の一つだ。

「そういえば、先週はありがとう、キリト。

キリトが手に入れてくれた装備、有効活用させてもらってるわ」

「どういたしまして。俺も楽しかったし、『ＨＳＧＣ』がまた開催されたらぜひ呼んでくれ」

そう言って、冷蔵庫や二口コンロが設置された一人暮らし用のさほど広くないキッチンスペースをシノンの後に続いてキリトが通り抜ける。

『ＨＳＧＣ』――正式名称を『Ｈｉｇｈ　Ｓｐｅｅｄ　Ｇｕｎｎｅｒ　Ｃｕｐ』という、『ＧＧＯ』の特色の一つである『乗り物』をフィーチャーしたタッグ制の新イベント。

一台の乗り物にドライバーとガンナーの二人一組が乗り込み、規定のチェックポイントを通過して最も早くゴールに辿り着いたプレイヤーが優勝となる、『ＢｏＢ』や『ＳＪ』とはまた少し趣の異なるイベントだ。

概要のみ聞けば普通のレース系イベントと変わらないように思えるが――なにせ開催されているのは『ＧＧＯ』。スタート地点から第一チェックポイントまでの火器封鎖エリアを抜けて以降は、敵チームの車両や人員に自由に攻撃を加えてよいというルールになっている。

当然、火器封鎖エリアを越えた途端、各チームの車載火器やガンナーの対戦車ロケットランチャー等が一斉に火を吹き――結局、参加した全５０チームの中で、どうにかゴールまで辿り着けたのはたったの３チームしかいなかった。

銃撃戦になることを想定し、参加者の大半が装甲車や兵員輸送車、あるいは高機動戦闘車や火器付きホバークラフトで参加する中、見事

優勝を掻っ攫ったのはトライクにまたがったキリトとシノンのタッグ。武装や装甲をほとんど搭載していないビークルでの参戦、そして勝利に、イベントを中継していたグロッケンのバー内は大いにどよめいたらしい。

「でも、あれ。最後はちょっとだけ危なかったわよね……」

「ああ……危うく、負ける所だったよな」

『ＨＳＧＣ』終盤。

先頭を行くキリト達と、その後方にぴったりとくっついてきた高機動型ジープとの優勝を掛けた一騎打ちという状況。

連装式大型グレネードランチャーを両手に一丁ずつ構えた小柄なガンナーが、先を行くトライクめがけて炸薬弾を雨あられと降らせてくる中。わずかな間隙を縫ってシノンが放った弾丸が、ついにジープのエンジン部を直撃。

機関部をぶち抜かれ、燃料に引火したジープはその場で爆発炎上。これで優勝は間違いないと、シノンが胸をなでおろした瞬間――爆炎の中を貫くようにして飛び出してくるピンク色の人影が一つ。

その人間とは思えない加速性に、シノンは一瞬、それが今しがた爆散させたジープのドライバーであることを――更に言うなら、見知ったプレイヤーである事を認識できなかった程だ。

（まさか、レンとフカ次郎まで参加してるとは思わなかったよな……）

要を為さなくなったジープを捨て、二本の脚で砂礫の大地を駆けるピンク色の人狩り兎（ヴォーパル・バニー）――レン。

爆炎すらもアシストとして活用し、文字通りのロケットスタートで一気に速度を上げたレンの姿をサイドミラー越しに視認した時、キリトは驚愕のあまり危うくハンドル操作を誤りかけた。

無論、驚愕に襲われていたのはシノンも同様だったらしく、小柄な追走者を狙って放たれた対物ライフルの弾丸は僅かに狙いを外し、レンの体を直撃するコースを逸れた。もしその逸れたヘカートⅡの弾丸が、レンが腰に下げた愛銃・Ｐ９０を直撃して彼女の速度を少しばかり減衰させなければ、レースの行方はわからなかったかもしれない。

結局、半泣きになって罵詈雑言を叫びながらもレンは最後の最後まで喰らいついてきたが、最終的には僅差でキリト達が先にゴールし、優勝賞品である超高精度スコープはシノンのものとなった。

なお、Ｐ９０を破壊した詫びとして、レンとフカ次郎にはグロッケンのレストランで美味い飯をたらふく奢ってやる羽目になったが、その金のほとんどはキリトが出した。おかげで優勝賞金のほとんどが飛んでいったが、使い道としてはさほど悪いものではないだろう。

「それで、シノン。呼ばれたから来たけど……今日はどうしたんだ？」

シノンに案内されるままキッチンを隔てる扉を抜け、キリトは彼女の生活スペースへ脚を踏み入れる。

キッチン同様、こちらの部屋の内装も、シノンが現実で暮らす部屋のそれとほとんど変わらない。唯一違う所があるとすれば、現実ではシングルサイズであるシノンのベッドが、こちらでは大型化している事ぐらいか。

――ちょうど、二人で寝転んだらしっくり来そうなサイズにまで。

「その……特に、何かあったわけじゃないんだけど……」

そのどこか弱々しい声はどう考えても何かあった時の声音であるし、そのうつむき加減の顔から覗く表情はどう考えても何かあった時の曇り具合を見せている。いくらキリトが自他ともに認める朴念仁であるとしても、さすがにそれが分からないようであれば、彼女の部屋に招かれる資格など今すぐ剥奪されるべきだろう。

ベッドの端に腰掛けるシノンに視線と言外の仕草で隣に座るよう強請られ、キリトは大人しく彼女の隣に腰を降ろすと、逡巡する彼女が場の主導権を握るより早く口を開いた。

「なあ、シノン。『ＨＳＧＣ』と言えばさ」

「何？」

「シノンはスコープが手に入ったからいいけど、俺は何も貰えてないんだよな。賞金もほとんど残らなかったし」

「……そういえば、そうね。賞品を一つしか用意しないなんて、ザスカーも意外と気が回らないのね」

「だろ？　だからその代わりに、俺の相棒（ガンナー）から賞品を貰おうと思って

さ」
「それは構わないけど……今、あげられるような物なんて持ってないわよ？」
「知ってる。だからさ」
きょとんとするシノンの体に腕を回して彼女の体を優しく抱き寄せれば、シノンは特に抵抗することなく、キリトの胸板に頭を預けてきた。
全てがデータで構成された仮想空間とはいえ、互いの体を通して伝わるこのぬくもりと拍動は、きっと本物なのだろう。
「シノン。君が眠るまで、側にいていい権利を俺にくれないか。
……昨日、ちゃんと眠れてないだろ？」
彼女の蒼い瞳を真っ直ぐに覗きこみながら、キリトは核心に触れる。観念したかのようにため息をついたシノンが素直に頷いたのは、それから十秒ほど後のことだった。
「――まったく。なんで、そういう事ばっかりカンがはたらくのよ。あんたは……」
「カンというより、経験と観察に拠るものだけどさ」
キリトは何も見栄を張って嘯いたわけではない。シノンがこんな顔をする時、何に苦しんでいるか分からない程付き合いの浅い間柄ではないのだ。
「……ちょっとした変態ね」
呆れたような声で詰りつつも、シノンは大人しく抱きすくめられたまま、その細い体をキリトの腕の中より離そうとはしない。
――かつて、トラウマの治療のためにメディキュボイドを使用していたシノンは、システム上の不具合により《ＳＡＯ》にログインしてしまった事がある。キリト達と知り合ったキッカケもそれだ。
慣れないフルＶＲ空間、しかもデスゲームという異常に異常を重ねた状況下に突如追い込まれた彼女が不安を憶えないわけはなく、それは時折、不眠症状として顕著にあらわれた。
そんなシノンが安心して眠れる数少ない場所の一つが、攻略組トッププレイヤーの一人であったキリトの側――そんな事情もあり、キリ

トは何度か彼女と寝所を共にしたことがあった。同じベッドで朝を迎えたりしたこともありはするが、誓って疚しいことはしていない。安心させるために手をつないだり、不可抗力で抱きついたりはした事はあるが。

そんな、《ＳＡＯ》で不眠に苦しんでいた当時と同じような表情をしていたシノンの体をベッドの上に倒し、キリトもその隣へ仰向けに寝転んだ。

「……ねえ、キリト。もう少し、そっちに行っても……いい？」

「ん？　ああ、もちろん」

「……ありがと」

ダブルベッドが必要な程の間隔から、シングルベッドでも並んで眠れる程にぴったりと身を寄せてきたシノンは、そのままキリトの左半身を自分の枕代わりに占領する。

彼女の頭が定位置についた事を確認し、キリトは伸ばしていた左腕を曲げると、空いていた左手でシノンの後頭部に触れる。指先に絡み、そしてすぐさま解けていく蒼色の髪の感触が心地いい。

「キリトの指、くすぐったい」

「嫌か？」

「ううん……。いやじゃない」

キリトの問いかけに応えるシノンの涼やかな声の中には、たっぷりの安堵と隠しきれない甘えが少しだけ溶け出していた。

とくん、とくん、と脈打つキリトの心臓の音を確かめるように体を密着させたままじっと見つめてくるシノンから少しだけ視線を外し、キリトはコンソールウィンドウを空中に呼び出すと、空いていた右手をウィンドウに伸ばして装備解除コマンドを入力する。

外見データのみを流用した見た目だけの装備とはいえ、戦闘用も兼ねた衣服のまま横になってはあまりリラックスできるものではない。手早く装備を外しシャツとハーフパンツというラフな姿になったキリトがウィンドウを閉じると、今度はその隣にシノンが同様のウィンドウを開いた。

「前から気になってたんだけど……管理者権限って、他の人のウィン

ドウやデータも操作できたりするの？」
「まあ、一応。そういうアカウントだからさ」
「ふうん……。隠さないのね」
「隠される方が嫌だろ？　悪い事には使わないから、それで勘弁してくれ」
「じゃ、私の代わりにこのボタン押してくれたら、信じてあげる」
開きっぱなしになったシノンのコンソールウィンドウに表示された『装備解除』コマンドの実行ボタン。そのボタンにキリトが指先で触れると、ウィンドウが閉じると同時に聞き慣れた効果音が響き、シノンのアウター装備がストレージに格納された事を伝える。
タンクトップ型の水着を思わせる、『ＧＧＯ』アバター仕様のアンダーウエア姿になったシノンは、「ありがと」と小さな声で告げてそのまま静かに目を閉じた。
このまま彼女が寝落ちするまで隣にいよう――腕の中で無防備な姿を晒すシノンの抱きまくらか湯たんぽにでもなったつもりで、その体をしっかりと抱き寄せたまま、キリトはただぼんやりと静かに時を過ごす。
「……夢を、みたの」
時計の秒針が二回りする頃。目を閉じたまま横たわるシノンの唇から、ぽつり、ぽつりと言葉が零れ落ちる。
「キリトと一緒に『ＳＡＯ』をクリアしたことも、現実世界に帰ってこれた事も、何もかもが夢で……。
たった一人で、誰もいない『ＳＡＯ』に囚われ続けている……そんな、夢」
「……」
「目を閉じたら、また同じ夢を見ちゃう気がして……そんな事で眠れなくなっちゃうなんて、子供みたいよね」
少しだけ震えた声で自嘲するシノンの寂しさが、触れあう肌を通して伝わってきたせいだろうか。彼女の体を抱く左腕の力を、キリトは無意識に強めていた。
「――前、ある人に問われたことがある。

『目を覚ましたら、まだアインクラッドに囚われたままかもしれない』――そう思ったことは無いか、って」

強まった男の力に驚いたのか、あるいはキリトの答えを確かめるためか。シノンは閉じていた両の瞼をゆっくりと開け、キリトの瞳を真っ直ぐに見つめた。

「思ったことは何度もある。そう望んだことはない。……でも」

「……でも？」

「そこにアインクラッドがあって、シノンがあの城に囚われているのなら――俺は何度だって『ＳＡＯ』にダイブする。７５層だろうが１００層だろうが全部突破して、シノンを現実世界に連れ戻すよ」

『夢も仮想世界も似たようなもの。全ては泡沫に過ぎない』――かつて、キリトに問いを投げかけた白い髪の少女は、何かを諦めたかのような表情でそう語った。確かにそれは真理の一端なのかもしれないが、しかし決して真実そのものではない事をキリトは知っている。

目を覚ませば全てが消え去る夢とは違い、世界そのものが崩れ去った後でも仮想世界で紡いだ記憶や絆が消え去るわけではないのだから。無論、今この腕の中にある温もりも、消え去りはしないモノの一つだ。

「……そういう事を本気で言えちゃうのが、キリトの悪いところよ」

「そ、そうか……？」

「でも、おかげで今夜は安心して眠れそうな気がしてきたわ。……ありがと、キリト」

氷を融かす春の日差しのような暖かさを含んだ声でそう言い、シノンは再び瞼を閉じた。

左腕に彼女の体を預かりつつ、キリトはそっと右腕を動かして空中にコンソールウィンドウを呼び出すと、自動ログアウト設定の項目を確認する。

《アミュスフィア》とのデータ連携に問題は無い。このままシノンが深い眠りに落ちれば、キリトのシステムを経由した後の脳波データを受け取ったアミュスフィアが、ハードウェア自体の仕様に従って彼女を自動でログアウトさせる。あとはそれを待つだけだ。

「……ねえ、キリト」
「ん？　悪い。起こしちゃったか？」
「い、いいえ。そうじゃなくて……」
ふるふると首を横に振って否定しつつ、シノンはゆっくりと両の瞼を上げる。その瞳からは、明らかな戸惑いの様子が見て取れた。
「……このままだと、私。普通に眠れちゃいそうなんだけど……いいの？」
「ああ。自動ログアウト設定も有効になってるし、問題は何も――」
「そういうことじゃなくて……」
目は口ほどに物を言うというが、蒼い瞳を潤ませながら何かを訴えかけようと見つめてくるシノンの言葉は歯切れが悪く、キリトが意図を読み取るには目も口も共に情報が不足している。
「……キリト。その、今日は……しなくて、いいの？」
不足していた情報が埋まるどころかオーバーフローするまで、約10秒あれば足りた。
対物ライフルから放たれた弾丸を真正面から受けて無事でいられる人間がいるだろうか？　いや、いない。
では、大理石のように怜悧な普段の印象がどこかに吹き飛んでしまうほどに頬を赤らめ、羞恥と期待が入り混じったような視線を向けてくるシノンの潤んだ蒼い瞳に至近距離で見つめられ、理性を無事に保てる人間がいるだろうか？　いや、いない。
少なくとも、宇宙船の装甲板よりも遥かに硬いと一部界隈で有名な、キリトの超高圧鍛造加工済クリスタライト積層式理性装甲は一撃でぶち抜かれ、ものの見事に砕け散った。
「それは……正直、したいですけども……」
「……けど？」
「シノンが弱ってる時に〝そういうこと〟をするのは、なんていうか……弱みにつけこむみたいで、最低だろ」
粉々になった理性をどうにかこうにか寄せ集めて積んだ防壁で、溢れ出しそうな欲望にブレーキをかける。
既に多くの女性と関係を持ち、いつ誰に刺されても文句は言えない

――実際、彼女ら以外に刺されたり斬られたり殺されかけた経験は山のようにあるが――立場とはいえ、いや、そういう立場だからこそ、自らにセーブをかける必要があった。

でなければ、本当に獣になる。しかも、『兎』とか『虎』とか『狼』のそれと変わらない所まで行ってしまう事を、キリトは既に痛感していた。

「シノンが気を使ってくれるのはすごく嬉しいけど、今日は……」

「――ねえ、キリト。わかってる？」

ぎりぎりの所で踏みとどまろうとするキリトの言葉を、シノンが有無を言わさぬまま制する。

「……つけこんでほしいから、部屋に呼んだんじゃない……バカ」

飢えた獣の檻に、血の滴る新鮮な肉を投げ込んだ時、『喰われる』以外の結末がどこにあるというのか。

破片を積んだだけの防壁めがけてグレネードを投げた時、『吹き飛ぶ』以外の結末がどこにあるというのか。

少なくとも、今のシノンはキリトにとっての最上の獲物であり、わずかに俯きながら最後の言葉を絞り出すその様は最後まで残った理性の欠片を吹き飛ばすには十分すぎる破壊力を秘めていた。

（……ああ。これは、もう）

さよなら理性。こんにちは獣性。また会おう自制心。ようこそ嗜虐心。

完全にスイッチの入ったキリトは、腕の中に抱いたシノンごと自らの上半身を起こすと、そのまま彼女の唇を奪う。

倫理コードなどという無粋なものを解除する必要はない。元より実装していないのだから。

「ひや、んんっ――♡」

唇と唇を重ね、無理矢理こじ開けたシノンの口内に己の舌を送り込む。それと並行して片手をシノンの後頭部に、もう一方の手を細い腰に回して力づくで抱き寄せ、極めて冷徹に彼女の逃げ場を奪う。丁寧に作られた弓のように靭やかな肢体を密着させ、薄布一枚越しに互いの熱を感じ合いながら、ただひたすらに唇を貪り合う。

「んっ……んんっ……ぁふ♡」

つややかな唇の端から甘やかな吐息を漏らすシノンは、今や呼吸する自由すらキリトに差し出していた。

息継ぎする間もなく男の舌に口内を蹂躙され、一方的に弄ばれ続けながらも抵抗はみせず、むしろもっともっとと貪られる事を望む。新鮮な空気を取り込むのは、酸欠寸前になってようやく緩む拘束の合間だけ。そして、まるで呼吸する時間すらも惜しいとでもいうかのように短い息継ぎを終えた途端、再びキリトの舌を口内に招き入れると、彼を逃すまいと自らの舌をねっとりと絡めて奉仕する。

そんなシノンの背に回していた手の位置を、キリトは戯れにゆっくりと下方向へスライドさせる。不躾な男の手がほっそりとした腰を経て、適度に引き締まりつつも扇情的なカーブを描く臀部に至る。その手の持ち主がキリトで無ければ、今頃身体的にも社会的にも抹殺されているだろう。そうする代わりに、シノンは腰を少しだけ前に動かし、キリトの下腹部を覆う布を内側から押し上げる硬い物体へ自らの下腹部を浅くこすりつける。

健気にアピールするシノンの仕草に愛おしさを感じつつ、キリトは彼女の頬に手を当て、長々と続いていた口づけに一旦幕を引いた。

「キリト……」

「ちょっと待っててくれよ、シノン。

――システムコマンド。オブジェクトＩＤ・『大型クッションタイプＣ』、マルチジェネレート」

キリトの音声命令（ボイスコマンド）に従ったシステムが、ベッドの上に白いクッションを複数生成（ジェネレート）する。小さな山のように積み重なったクッションを背もたれ代わりにして体勢を整えたキリトは、シノンの身体を正面から抱きしめるようにしながら、彼女を自分の脚の間へと座らせた。

「――脱がすぞ、シノン」

優しく、しかし有無を言わさぬ強さと共に耳元で囁いてやれば、瞳を情欲にとろけさせたシノンは躊躇いもせずに首をこくりと縦に振る。

素直な彼女の頬に軽い口づけを落とした後、キリトはコンソール

ウィンドウを呼び出し、管理者権限で彼女の装備情報に割り込むとシノンが身につけていたもの全てをストレージへ格納する。

聞き慣れた効果音と共に顕になるのは、しなやかながらも主張することを忘れない均整の取れたボディライン。そして氷の彫像を思わせる白い肌。しかして、その肌の内より迸る愛欲の熱は、シノン自身の理性と、その姿を見つめる事を許された男の理性を共に蕩かし尽くすだけの熱さを秘めている。

首の下から爪先まで、産毛の一本すらも生えていないその姿は、まるで神々の美をたたえて捧げられた彫像の如し。

瞬く間に一糸まとわぬ姿へと変えられたシノンは、肌を晒す羞恥を表情にありありと浮かべつつ、キリトの首に腕を回す。

「……離れちゃ、イヤ」

「ああ、わかってる。どこにもいかないよ、シノン」

シノンの身体を引き寄せ、再び唇を重ねる。先程まで繰り広げられていた貪るように激しい口づけとは異なる、甘くゆったりとしたリズムでキスを交わし、互いの存在がここにあることを確かめ合う。

唇と唇の間から幾度となく溢れる、熱い吐息と水音。いやがおうにも昂らされる女体の柔肌に手を這わせたキリトは、彼女の形の良い乳房を撫で回し、色素の薄い先端部を指先で弄ぶ。

「ひゃっ……んんぅっ♡　キリ、ト……それ、ふやぁっ、だめぇ……♡」

「管理者権限で却下させてもらう」

切ない声を上げるシノンを、キリトの手と口は無慈悲に辱め続ける。

柔らかな肌色の双丘を優しく揉みほぐす一方で、不意のタイミングで乳首を強めに刺激する。反射的に上がる嬌声を抑えようとするシノンの唇をこじ開け、室内に艶めいた歌声を響かせ続ける。

与えられる快楽と身の内よりあふれる熱に浮かされたシノンは、無意識のうちに腰を動かし、自身の下半身をキリトの下半身を覆う布に擦り付ける。固く大きな柱上の物体によって下から押し上げられた布地に、シノンの秘所から溢れ出した粘質液が染み込み、言い訳しようのない黒黒とした痕跡を残した。

「ほんとに可愛いな、シノンは。それに、すごくやらしい」
「あっ、あんたが、んんうっ♡　私をこんな風にした、んっ、でしょ……！　やあ〃っんっ♡」
　盛りのついたメス猫のように腰をへこへこと振って、シノンは布地一枚向こうにある雄の象徴をねだる。
　彼女の秘所に触れるキリトの中指と人差し指の先で、くちゅくちゅという粘ついた水音があがり、肉壷の奥から溢れ出した劣情の証が絡みつく。彼女の内側を擦り上げ、より深い官能に堕ちていけるように導きつつ、しかし達する寸前で押し留めながら焦らし続ける。
　男の太い指の刺激に一段と高い嬌声を上げるシノンの眼前に、彼女の秘所をいじったばかりの指を差し出す。キリトが何も言わずとも、シノンはその指を口に含み、自分の奥底から染み出した蜜を丁寧に舐め取った。
「……キリト、キリトお……♡　わっ、私、もう……」
「ん？　何か言ったか？」
　当然、シノンの声は聞こえているし、この状況で彼女が何を求めているか分からないはずもない。
　わざとらしくとぼけてみせたキリトは、シノンの頭にぽんぽんと触れて指舐めを終えたことを褒めてやりつつ、唾液まみれになったもう片方の手でコンソールウィンドウを呼び出す。
「……意地悪」
「ごめん、やりすぎた」
　ともすれば泣き出しそうな顔をみせるシノンに謝りつつ、キリトは残っていた自らの装備を全て解除した。
　長らく拘束されていた肉棒は、解放と同時にぶるん、という効果音がつきそうな程の勢いでしなるように飛び出し、その存在を主張する。
　可能な限り控えめに見積もっても標準の太さと長さを大きく上回るキリトの赤黒い雄の象徴は、天を衝けとばかりに力強く反り返って主の興奮度合いを如実に表しながら、大きく張り出した先端部でシノンの下腹部に触れる。

かつて自らの純潔を喰らい、これまで幾度となく己を貫いたキリトの一物の感触と、どこかグロテスクなその形状を目にしたシノンは、まるでチャームでも喰らったかのように陶然としたまま腰を浮かせる。準備はできていると言うかのように。

「シノン」

「――きて、キリト」

シノンの腰を持ち上げたキリトは、彼女の脚と脚の間に屹立した肉棒の先端を充てがう。ぐじゅりという音を立てて互いの性器を触れ合わせて狙いを定めた後、シノンと真正面から見つめ合ったまま、その細い身体を真下へと引き下ろす。

「――あっ……！　くぁうっ、おぉっ――あいかわらず、お、っきい……♡」

少女の奥から湧き出る蜜を潤滑油とし、狭い肉の通廊を強制的に押し広げながら進む太い肉棒の感触に、シノンが甘い鳴き声をあげる。

キリトの脳から背筋に駆け抜けるのは、雌穴の入り口から奥までの全てを支配していく感触と本能的な悦楽。その悦楽を更に容赦無く貪りたいというギラついた欲求を抑えながら、キリトはシノンの身体を支え、互いの身体を再び密着させた。

「キリトの――あっ……奥まで、んっ、きてる……♡　私のなか、いっぱいにされてる……♡」

「痛くないか？　シノン」

「だいっ、じょうぶ……もう、キリトの形、んんっ……ちゃんと、憶えちゃったから……♡」

根本まで完全に挿入された肉棒に貫かれ、張り出した亀頭に子宮を刺激されるシノンの口から、与えられる悦楽に酔いしれる吐息とともに喘ぎ声が溢れ出す。いわゆる対面座位の体勢で繋がったシノンの体に、膣内を貫く肉杭の形が今日もまた刻み込まれていく。

キリトの首に両腕を、腰に両足を回して、愛する男を離すまいとぎゅっとしがみつくシノン。そんな彼女の腰と背に手を回し、バランスを崩さないよう支えてやるのは言うまでもなくキリトの務めだ。

「じゃあ――動くわね、キリト」

「ああ。頼む」
　発情に蕩けた表情のまま、シノンはもう一度口づけを交わすと、密着させていた腰をゆっくりと上げる。ゾクゾクするほどの悦楽を全身で味わいながら、シノンは肉棒の先端が自らの内から抜ける寸前の高さまで腰を持ち上げる。根本から半ばまでが露わになった肉茎はたっぷりと滲み出た女の蜜によってコーティングされ、天井のＬＥＤライトから降る光を反射してぬらぬらと妖しくテカる。
　腰を上げきり、頂点で味わえる快感をじっくりと堪能したシノンは、キリトに体を支えられながら先ほどとは真逆の動きで腰を沈める。わずかでも離れたくないとでも言うかのように、器用に腰だけを動かして肉棒を受け入れていくその姿は、締め付ける雌肉の感触と共に雄の本能的な繁殖欲求を刺激する。
「――っっぅっんんっ！　はあぁっ、あ〝っ〝……♡」
「そういえば、シノンはこの辺りが弱いんだったよな」
「ひゃっ――んっ〝、やぁあああああっっっ♡♡」
　支える手の力によってストロークの軌道が微妙に変化した事で、張り出したカリの部分がシノンの内壁を抉る。根本まで突きこまれた肉棒が子宮口を刺激し、そこが誰の子を孕む為の場所かを直接教え込む。
「お〝っ、あっ、んいひぃっ♡　あああっ♡　やっ、やぁああんっ♡♡」
　下から上へ、そして上から下へと繰り返され続けるピストン運動によって、シノンの感じやすい部分はダイレクトに刺激され続ける。脳神経が焼ききれそうなほどに激しく与えられる快楽は許容量をとっくにオーバーしており、シノンは半ば忘我の境地で腰を上下させ続けていた。
「やああっ、んんんっ！　――キ、リト、しゅき、あっ、ああ〝っ♡
あ〝ーっ、あ〝あひぃぁやああっ♡」
「俺も、好きだぞ、シノン……！」
　シノンの耳元で愛を囁き、気まぐれに唇を奪う。上下する彼女の腰の動きに合わせ、キリトもまた下から肉棒を突き上げる。今や一突きごとに軽く達する程に登り詰めさせられたシノンは、互いの腰が密着

する度に接合部からぷしゃぷしゃと愛液を撒き散らしながら、膣肉で雄の象徴を包み込み射精を促す。

抑え込んでいた昏い欲望を己の体を動かす燃料として焚べ、キリトは腕の中に抱いた女を幾度となく突き上げ、シノンの媚肉を貪り続ける。

そして訪れる、腰の中身を全て引き抜かれそうな、冷たく、そして熱い独特の感触。体中の神経間隔と熱量を集め、番う相手に子を宿させる準備が整った事を示す放精の兆候に支配され、キリトの思考は一点のみに集約されていく。

「っ……！　シノン！　シノンの中に、全部出すからな！」

「きて、全部、んんっ、きてぇ、キリトぉっ！　――あ゛っ、っふ、ああ゛ああっ♡」

射精したい。この女を己の物としたい。この雌に自分の子を孕ませたい。

己の内より沸き立つ原始的な欲求に突き動かされたキリトは、腕の中に抱くシノンに今日最も激しい抽送を叩きつける。ラストスパートに入った今、両腰をがっちりと固定されたシノンに最早逃れる術はない。

シノンに出来るのは、男の体に両手両足を絡めて与えられる快楽を享受し、その果てに来るモノを待つことだけだ。

そして――彼女の蜜壺の最奥までを深々と貫き、キリトは溜め込んだ全てを解き放った。

「――っ、シノン！」

「キリ――――――ぁぁあああ゛あ゛っ♡♡♡　んゃっ、やあああああっっっ♡♡♡」

最後の一突きで深い官能に達したシノンの肉壁が、愛する男の子種を求めて収縮する。その動きに導かれるように、キリトは白濁した精液を放出する。

子宮口にぴったりと押し当てられた亀頭から勢いよく吐き出される子種汁は、どっぷりと重く、そして濃い。ただでさえ深い絶頂の中にいるシノンの体は、男の種を受け入れた衝撃と喜びに本能的な快楽

を呼び覚まされ、子宮を満たす精液の感覚によって幾度も幾度も絶頂の中へと叩き込まれていく。

その歓喜に打ち震える膣内が連鎖的に蠢き、深々と突き刺さるキリトの肉棒を再び刺激し、さらなる射精を誘発した。太い茎で栓をされ、迸る精液を一滴残らず子宮で受け止める悦楽に溺れさせられたシノンは、自分の体を支える力すらも失い、くったりとした様子でキリトへもたれかかった。

「……おつかれ、シノン」

「――――……や、あっ……」

未だ絶頂の中から帰ってこれていないシノンを抱きとめつつ、キリトは汗に濡れた彼女の髪を優しく梳く。

ふと、己の分身をシノンの股ぐらから引き抜こうかと思ったが、以前同じことをした時にシノンがご機嫌斜めになった事を思い出して取りやめとした。

（ま……あとで、いいか……）

ぼんやりとそんな事を考えつつ、キリトはクッション側に体重を預け、行為中より少しだけ深く姿勢を倒しながらシノンが『戻ってくる』のを待ち続けた。

それから約数分の後。どうにか正気を取り戻したシノンが見せた、行為の余韻に浸るどこかしっとりとした雰囲気と悦楽に蕩けた顔に思い切り興奮してしまったキリトは、思わず彼女をベッドの上に押し倒してしまうのだが――まあそれは、キリトとシノン、そして他の愛人（ヒロイン）達にとってはいつものことだ。

無論、精巣が空になるまでぶっ通しで、いわゆる『種付けプレス』の体勢でシノンの胎内に精を放ち続け、彼女の足腰が立たなくなるまで幾度となく絶頂の快楽を味わわせてしまうことも、だが。

――――――――

「……ねえ、リーファ。私の顔に、何かついてる？」

第一回『ＨＳＧＣ』終結から１０日後。キリトのプライベートＶＲ

空間の一角。

眩しい太陽の光が降り注ぐプールサイドに置かれたビーチチェアに寝そべりながら、シノンは隣にいる視線の主に問いかけた。

「い、いえ！　そういうわけではないんですけど……」

金色の髪を括ったポニーテールが目を惹く少女――リーファは、わたわたと慌てた様子でシノンの問いを否定する。シノンもリーファも水着姿ではあるが、泳ぐほどの気分には少しだけなれず、パラソルの下でビーチチェアに寝転がりながらまったりと時間を過ごしていた。

「ただ、その……今日のシノンさん、なんだか機嫌が良さそうだなー……って」

「そう？」

「はい！　まあ、なんとなくそう思っただけですけど……」

「……そう見えるのだとしたら、たぶん、今朝見た夢のせいね」

「夢、ですか……？」

今ひとつ飲み込めていないという表情のリーファをよそに、シノンはサイドテーブルに置かれていた青いハワイアンドリンクに口を付ける。

これはアスナお手製のレシピを《ＡＬＯ》から移植したものらしく、味は折り紙付きだ。少なくとも、《ＧＧＯ》で実装されているドリンク類では勝負にならないのは確かだ。

「ええ。とっても素敵な、いい夢よ」

「いいなー。どんな夢なんですか？」

「それは秘密」

「えー！　そんなー！　ここまできたら、気になっちゃいますよ！」

不満な顔を見せるリーファを適当にあしらいつつ、シノンは空中にコンソールウィンドウを呼び出し、『ＭＭＯトゥデイ』の配信ページを開いた。ちょうど、第二回『ＨＳＧＣ』の開催およびＡＲアイドル・ユナとのコラボレーションが発表されたばかりらしく、画面上は興奮したコメントで埋め尽くされていた。

「だったら、あそこにいるあなたのお兄さんに聞いてみたら？　たぶ

ん、ヒントくらいは知ってるだろうから」
「お兄ちゃんに、ですか？」
きょとんとするリーファの視線が、プールの側に立つ白い飛び込み台の上を先端に向かって歩く義兄・キリトと、その両腕に抱えられたフィリアの姿を捉えた。
「――き、キリト！　無理！　これ絶対無理だよおおお～～～～!!」
少なめに見積もっても３０メートルはあろうという高さの飛び込み台。その端に立ったキリトの腕の中に捉えられたフィリアが、甲高い悲鳴を上げながら必死に身を捩る。
ＳＴＲ値の違いか、もしくは男女の肉体の違いによるものか、そうでもなければ管理者権限でも使っているのか。明るい髪色をした哀れな女性を拘束するキリトの腕はビクともしない。
それはつまり、フィリアの運命は既に定まっている事を意味していた。
「飛び込みしてみたいって言ったのはそっちだろ？　大丈夫だって。ダメージや痛覚判定は入らない設定にしてあるし。
だいたい、《ＡＬＯ》じゃもっと高い所から飛んだり落ちたりしてるじゃないか」
「そうだけど、そういうことじゃなくて!!」
「よーし、じゃあ行こうか、フィリア。後ろでユウキが待ちきれないって顔して待ってるし」
「い～～～～や～～～～～!!　あとでアスナに言いつけてやる～～～～～～!!!」
フィリアの抗議も虚しく、キリトは一切ためらうこともなく飛び込み台の上から身を躍らせる。そのまま二人の体は水面目掛けて真っ直ぐに落ちていき、それから数秒の後に大きな水柱を上げた。
「うっわ、お兄ちゃんとフィリアさん、大丈夫かな……あたし、一応様子見てきますね」
「ええ」
「あ、戻ってきたら、さっきの夢の内容、教えてくださいよ？」

「そうね……考えておくわ」

期待に目を輝かせながらビーチチェアから立ち上がり、プールに向かって歩いていくリーファの背中を見送ったあと、シノンは『ＭＭＯトゥデイ』を開きっぱなしにしたまま目を閉じた。

欲しい情報は耳で聞くだけで事足りるし、もし寝落ちしてしまっても大した問題はない。

もう、《ＳＡＯ》に囚われる悪夢を恐れる必要はない。たとえそこが悪夢の中だろうとしても、ひとりぼっちでは無いのだから。

（――ちゃんと来てくれるあたり、ほんと……ズルい人なんだから）

シノンを――『朝田詩乃』を、恐怖と絶望の底から救い出してくれた英雄。

迷宮の闇も、悪夢の闇も切り裂いて現れた、白と黒の剣を携えた二刀流の剣士。

また《ＳＡＯ》の悪夢を見たとしても、今朝のようにきっと――否。絶対に現れてくれる『黒の剣士』。

彼のパーソナルカラーに染まった視界の中で、その姿を思い返すシノンの顔には、いつのまにか穏やかな微笑みが浮かんでいた。

――――――

０２．《閃光》の異名を持ち旦那を自在に操る高貴なる血盟騎士（アスナ）

かつて、結城明日奈という伝説の女性が、桐ヶ谷和人の周囲を支配していた。その圧倒的な嫁力により、かえってその一帯は統率が取れていた。

そんな明日奈が、夫の周囲で頭角を表しつつあった女性達を取り込むべく掲げた協定を《ＳＷＯＲＤ協定》という。

《ＳＷＯＲＤ協定》への参加を表明した者達の間に階級や立場の差は無い。発起人の明日奈ですら他のメンバーと同じ立場にあり、仮に何かを協議の議題に上げる際には、多数決によって可否が決定される。

だからこそ、だろうか。『誰が、どうやって、キリトの寵愛を得るか（あるいは与えるか）』――そんな緩やかな競争意識は常に存在し、彼と彼女らの関係をより濃密に深めていくためのスパイスとして作用していた。

こぞって妍を競いこそすれ、それが険悪な方向に向かないのは、お互いに強い仲間意識があることが大きい。皆が皆、数多くの苦難を共にしてきた仲間同士なのだ。今更誰かを排除するというのもナンセンス極まる。

そんな彼女らとキリトが拠点としているのが、キリトが自宅サーバマシン内に構築したプライベートＶＲ空間だ。

一部の面子から『ヴァーチャル九龍城塞』、『決戦無軌道増殖都市』、『ドラゴン&ダンジョンズ』、『戦乙女だらけのヴァルハラ』、『ろくでもない円卓』、『Ｖａｕｌｔ／ｖｅｒ．Ｋ』、『色々な意味でアンダーワールド』、『キリト帝国』――などと、適当かつ好き放題に揶揄されつつあるこの空間にログインできるのは、管理者であるキリト本人か、ログイン権限を持つ者に限られている。

当然、『ログイン権限を持つ者』ニアリーイコール『キリトのお手つ

き』であることは今更言うまでもないだろう。単純にイコールでないのは、キリトとアスナの実の娘であるユイもまた、この空間へのログイン権限を持っているからだ。

元々、ユイがいつでも使える遊び場としても作られているこの空間は、キリトの涙ぐましい努力（主にサーバーシステムの多重化＆冗長化＆高性能パーツへの換装などその他諸々）によって、基本的に２４時間３６５日稼働している。故に、たとえキリトがログインしていなくとも、ログイン権限さえ持っていれば誰でも好きなときに遊びに来る事ができる場になっていた。

「――お兄ちゃん、いつ頃戻ってきますかねー」

「そうね……メカトロ部の人達からの呼び出しって言ってたから、結構かかるんじゃないかなあ」

そんなＶＲ空間の一角。天蓋付きの大きなベッドが配置された、良く言えば『寝室』、悪く言えば『ヤリ部屋』の中。

愛する者と快楽を共有した後の幸福な気怠さに全身を包まれながら、結城明日奈――もとい、アスナは呟く。

「寝ちゃってもいいよ、リーファちゃん。キリトくんが来たら起こしてあげるから」

「ありがとうございます、アスナさん……。そのときは、お願いします……ぁふ……」

アスナの体の上にうつ伏せに倒れ込んだままどうにか欠伸を堪えるリーファは、今にも睡魔に負けてしまいそうな顔をしていた。

アスナ、そしてアスナ同様に《ＳＡ：Ｏ》のアバターでログインしたリーファ、そしてキリトを交えた３人で、劣情の赴くままに肌を重ね、頭の中が真っ白になるほどたっぷりと愛しあったのは今から少し前の事だ。

言うまでもなく底無しであるキリト本人はもちろん、帰還者学校の試験や実家絡みの諸々で『そういうこと』をする機会がなかったアスナや剣道の対外試合を数日前に終えて昂ぶっていたリーファが溜めていた欲望を、獣の交尾じみた激しさで一旦充足させ、さて次は少しだけスローテンポに褥を共にしながら互いの身体を味わい尽くそう

――メカトロ部からキリト宛に急用を告げる連絡が入ったのは、そんな雰囲気になった矢先だった。
「……お兄ちゃん。『ユウキのプローブ絡みの件なんだ。大急ぎ……じゃなくて、全力で終わらせてくる』って言ってましたよね」
「うんうん。『手は抜かないから心配するな』って言ってくれたみたいで、嬉しかったなあ」
「最近のお兄ちゃん、気合入ってますからね。
『ＡＲ技術を併用すれば、遠隔プローブシステムを次の段階に進められるかもしれない』って」
「そうそう。キリトくんが次はどんなサプライズをみせてくれるのか、すっごく楽しみ」
「あたしもです」
キリトの妹――とどのつまり自身の未来の義妹を胸元に抱き寄せたまま、アスナは彼女の金色の髪を優しく撫でる。
事後の余韻のまま少々はしたなく開かれた股座からは彼女の兄が放った白濁汁が溢れ出し、アスナの脚の間からあふれた同じ男の精と混ざりあってベッドシーツを汚す。到るところに飛び散った体液は、もはやアスナのものかリーファのものか判然としない。
キリトが多くの女性と関係を結ぶようになって以来、女性陣複数名とキリトによる交わりは自然発生的に増えていった。当然、アスナ自身もその例外ではない。キリトを共有する――あるいはキリトに囲われた――面々とは一通り閨を共にしているが、回数として特に多い面子を挙げるならユウキやリズ、そして今ここにいるリーファというあたりになるだろうか。
「キリトくんが戻ってきたら、またいっぱい気持ちいい事しようね……リーファちゃん？」
「はーい……アスナさん、大好きです……♡」
「私も、リーファちゃんのこと、大好きだよ……♡」
蕩けた声を零しながら、半ば夢心地のリーファはいずれ義姉となる女の胸元に顔を埋める。甘え上手な未来の妹を抱き止めながら、アスナは彼女の背中を指先でゆったりと撫で続ける。

「……前に、バーストリンカーの皆さんが未来から来た時にも話しましたけど……。あたし、アスナさんみたいな素敵な人がお姉ちゃんになってくれるかも……って事が、すっごく嬉しいんです」

「『なってくれるかも』じゃなくて、『なる』んだよ。

それにね。私も、リー……ううん、直葉ちゃんが私の妹になってくれる日が来るのが、今から待ちきれないよ」

「えへへ……♪」

照れたように笑いながら、リーファはアスナの胸元から鎖骨、首筋、頬へと昇る道筋に、ついばむようなキスの雨を降らせていく。恋人同士のキスより遥かに軽く、しかし友人への親愛を表すキスより遥かにエロティックな、戯れじみたキス。

そんな睦み合いに心地よさを覚えるのは、胸の内に温かく宿る温かな感情のせいだろう。アスナがリーファに対して、そしてキリトの閨に傅く他の女性達に抱くその感情は、同性愛でもなければ姉妹愛とも違う。リーファの方もそれは同様だ。

言うなればそれは、世間一般の道徳性や倫理感に少しだけ背を向けた者だけが得られる甘やかな官能。同じ男の腕の中で激しい悦楽に浸るはしたなさを共有した者同士だからこそわかる、共犯関係にも似た重く濃密な仲間意識。互いに感じる不思議な愛おしさは、そんな間柄だからこそ生まれるのだろう。

――そしてたった今、この部屋の扉を開けた彼女もまた、アスナ達と同じ共犯関係を結んだ者の一人だ。

「キリト、はっけーん――って、あれ？」

本来そこに居るべき男の姿がないことに困惑し、太陽を思わせる明るい髪色をしたトレジャーハンター・フィリアは、入り口をくぐってすぐの所で脚を止めた。

今日は《ＳＡ：Ｏ》用のアバターでログインし、白いバスローブに身を包んでいるフィリアの視線が、ベッドの上であられもない姿を晒すアスナとリーファの方を向く。

「あれ、二人だけ？　キリトは？」

「メカトロ部の人に呼ばれて、今ちょっと落ちちゃってるの。ね、リー

ファちゃん？」
「そうですそうです。なんでも、ユウキさんのデバイス絡みの大事な話らしいですよ」
「そっか。それなら仕方ないね」
納得したように頷きつつ、フィリアはバスローブを脱いで一糸まとわぬ姿になり、そのままいそいそとベッドの上に昇る。
この部屋にいる間、女性陣は基本的に服を着ない。衣服を着る事を許されるのはキリトただ一人。いつの頃からか自然と決まった不文律だが、異を唱える者は誰もいなかった。なにせ、こんな部屋は他にいくつでもある。今更その一つや二つに文句をいうのは愚の骨頂だ。
それに何より、こういう場所がある事自体が都合がいい。恥や外聞といった現実のしがらみを捨て、貪欲に悦楽を求める淫らなオンナとして振る舞えるのだから。
「そ・れ・で。わたしがいない間、キリトとずいぶんお楽しみだったみたいだね。お二人さんは」
「そうなんですよー。お兄ちゃん、今日もすっごく激しくて……ほんと、途中で何回失神させられそうになったか……」
挑発的に笑うリーファは、アスナの首筋に軽いキスを何度も落としつつ、そのまま彼女の隣へ滑り落ちるようにして身体を横たえる。
部屋のストレージから大きなクッションをオブジェクト化したフィリアは、それを抱きかかえるようにしながら、アスナを挟んでリーファの反対側へに腰を下ろした。
「あーあ、いいなー。私も混ざりたかったなあ……」
「大丈夫ですよ、フィリアさん。お兄ちゃんならその内戻ってきますし、まだ全然満足してなさそうでしたから。
ね、アスナさん？」
「うん、そうそう。昔からほんと底無しだし、キリトくん」
「『昔から』って……さっすが、２年プラス２００年間、キリトのお嫁さんしてる人は言うことが違うなあ……」
「ふふん、でしょー？」
得意満面な顔で頷いてみせるアスナに、フィリアは呆れたような笑

みを返す。
　そんな二人の光景を横目に見ながらアスナに頭を撫でられていたリーファは、ふと何かに気づいたように上半身を起こした。
「前から聞こうと思ってたんですけど……アスナさんとお兄ちゃんって、普段はどんな風にえっちぃことしてるんですか？」
「い、いきなりすごい質問してくるね。リーファちゃん……」
「だって気になるじゃないですか。ねー、フィリアさん？」
「確かに。すっごく気になる。聞かせてほしいなー、アスナがどんな風に、『昔から底無し』のキリトに愛されちゃってるのか……じ～～～～っくりと」
　興味津々といった様子の二人に挟まれたアスナに、逃げ場は無い。助け舟を出してくれるホワイトナイト――彼の場合はブラックナイトと言うべきだろうが――は、現実世界で奮闘中だ。
　観念したようにため息を付きつつ、アスナは呼び出したコンソールを片手で操作し、ベッド上方の空間に大型モニターを呼び出す。ちょっとした家庭用スクリーン並の大きさを持つモニターが起動するのを待つ間に、アスナは手元のコンソール画面をスワイプし、何十個もの動画ファイルを収めたフォルダにアクセスする。
　バイオメトリクス認証などを含む三十数層のセキュリティによって厳重に保護されているフォルダの名前は――『プレイログ』。
「私が説明するより、見てもらった方が早いわよね。それで、どれがいい？　リーファちゃん」
「うわっ……すごっ……」
「そう？　リーファちゃんだって、こういうのこっそり録画して残してるでしょ？」
「いえいえ、そっちじゃなくて。全部の動画にちゃんとサムネとタイトルつけてるのが几帳面なアスナさんらしいなあって……。
　あたしなんて、適当に『1』とか『2』とかつけてそのままにしてますし……」
　この空間内の様々な場所で行われてきた『プレイ』の『ログ』――わかりやすく下品な言い方をすれば『ハメ撮り動画コレクション』の

数々を眺めながら、リーファは感心したようにほうほうと頷く。
　撮影日時が新しい順にソートされた、『パパとママによる愛娘の前で保健体育生実践』、『休日お籠り混浴温泉旅』、『素人ウンディーネ・ガチ危険日生中出しＡＶデビュー』、『街ナカ露出お散歩・特別ゲスト《絶剣》さん』、『たのしい捕虜尋問・《ＧＧＯ》編』などの実に胡乱なタイトルに彩られた様々な動画ファイルを眺めること暫し。
　一つの動画に目を留め、リーファはコンソールに指先を伸ばした。
「じゃあ……これにしようかなー。この『血盟騎士団副団長による《黒の剣士》監視記録』っていうの」
「これ？　これはちょっと……みんなに見せるには、恥ずかしいやつかなーって……」
「逆に聞きますけど、恥ずかしくないやつあります？」
「……うん、無いわね」
　どうしようもない事実に頷いたアスナは、リーファが指定した動画を選択し、空中に浮かんだ大型ウィンドウへと転送する。動画ファイルのローディングは一瞬で終わり、コンソールには『再生』を示す三角マークが表示されたボタンが描画されている。
　そのボタンを押す直前で手を止め、アスナは横に控えるリーファ、そしてフィリアに視線を向けた。
「リーファちゃん。分かってるとは思うけど……私のが終わったら、次はリーファちゃんがキリトくんと恥ずかしいことしてる動画、たっぷり見せてもらうからね」
「はーい♪」
「もちろん、フィリアもだよ？」
「わたしも？　まあ、それは別にいいけど……」
「じゃあ、これで交渉成立ね。じゃーあ、そんなとこ居ないで、フィリアもこっち来たら？」
「いいの？　それじゃあ、閃光のアスナ様のお隣にお邪魔しまーす……♪」
　アスナの招きに応じたフィリアが、リーファのちょうど反対側の位置に体を横たえる。

二人の視線が空中の大型ウィンドウに注がれていることを確認した後、アスナは再生ボタンに指先で触れ、映像の封印を解き放った。

旧《ＳＡＯ》第６１層・セルムブルグ。

『地中海を望むリゾート地』とも形容されるその一帯は非常に広く、人は少なく、開放感がある。故にその地価と住宅価格は高い。部屋と内装に凝り始めれば、数百万コルがぽんと飛んでいく。

もっと低階層にあるゴミ溜め（アルゲード）の安部屋などとは比べ物にならない品質を誇るセルムブルグの住宅街は、価値の分かる特定層の為だけに用意されたと言っても過言ではない。

そんな高級住宅街の一角に、結城明日奈の――《閃光》のアスナの居室は存在していた。

７５層でキリトがヒースクリフを撃ち破った後、突如として発生したバグによって『７６層以上』と『７５層以下』のフロアで相互通行ができなくなって以来、その部屋を訪う者は途絶えたままだ。そして《ＡＬＯ》に旧アインクラッドが実装されてしばらく経つ今でも、セルムブルグ自体が高階層に位置することが災いし、その状況は変わらない。

故に、あの部屋を訪れる手段は現状どこにも存在しない。

キリトのプライベートＶＲ空間の一角に、かつての家主が〝記憶〟を頼りに再現した、この部屋を除いては。

「――ねえ、キリトくん。私達が初めて会った日のこと、覚えてる？」

「第一層のボス攻略会議の時、だよな」

キリトが即答してくれた事に嬉しさを覚えつつ、アスナはこくりと首を縦に振った。

恋を知り、色を知り、そして今や愛を知る彼女の顔に浮かぶ笑みは、野の花も恥じらい俯く程に眩しく、そしてどんな傾国の美女よりも蠱惑的だ。

部屋にはソファが用意されているが、そこに座っているのはキリト

一人だけ。どんなオスの理性も吹き飛ばし獣に変えてしまう微笑みを湛えるアスナは、キリトの膝の上を椅子代わりにして独り占めしながら、そっと彼の腕の中に体を預けた。

「キリトくん、『俺と組まないか』って誘ってくれたよね」

「ああ。ボス攻略までの暫定措置のつもりだったけど……一応、パーティとして登録もしたよな。

あの時は、アスナがまさか本名でプレイしてるとは思わなかったけどさ」

「もー、仕方ないでしょ。ＭＭＯなんてほとんど初めてで、何も知らなかったんだから。

……今にして思えば、最初に私に構ってくれたのが下心の無いキリトくんで本当に良かったわ」

「アスナ様のお褒めに預かり恐悦至極。

まあ、あの時の俺に妙な下心があったとしても、アスナならすぐに見抜いてどうにかしてたと思うけどな。それにほら、倫理コードだってあるし」

「うーん……それは、ちょっと怪しいと思うよ？」

体と体を密着させるようにして距離を縮めたアスナは、キリトの耳元に唇を寄せる。最近また大きくなったバストを押し当てながら、甘く蕩ける声音を愛する者の聴覚へダイレクトに送り込み、キリトの内に眠る欲望の火に燃料を注いでいく。

「あの頃の私、不安と焦りでどうにかなっちゃいそうだったから……。

そんな時、初めて優しくしてくれたキリトくんの言うことだったら……何を言われても、無条件に信じちゃったかも」

「……たとえば、『倫理コードを解除するといいことがある』とかでも？」

「うん♪　もちろん、もっとえげつなーい、えっちなことでも、なんでも……♥」

腰を支えていたキリトの手に籠もる力が、僅かに強まった事をアスナは感じる。

優しい恋人の身の内より立ち上る気配の中には、既にどろりと黒く

濁った劣情の色が混じりはじめ、その事実そのものがアスナの興奮を更に掻き立てる。

「きっと、何も知らないアスナ(わたし)は、優しいキリトくんの口車に乗せられて倫理コードを解除して……そのまま、キリトくんの『オンナ』にされちゃうの。

《はじまりの街》にある、どこかの宿屋の狭い部屋の中で『はじめて』を奪われて……そのまま何日も何日も、優しく、激しく、頭の中が真っ白……ううん、真っ黒(キリトくんの)色になるまで抱かれ続けて……♥

そしてアスナ(わたし)は、昼は『閃光』のアスナとして、夜はキリトくんだけのアスナとして生きていく事になるのよ、きっと」

「いいのか？　いくら《閃光》サマでも、俺みたいな《ビーター》と長いこと一緒にいたら、皆の信用を無くしそうで……心配だな」

「そこはほら、仮にも血盟騎士団の副団長ですから。ちょっぴりいい加減なビーターさんが真面目に攻略してくれるように、毎晩自宅でお説教しています――って言えば、疑う人なんて誰もいないよ」

勿体つけるように一度言葉をきったアスナは、キリトのこめかみに軽くキスを落とし、そのまま彼の耳たぶに唇を触れさせる。艶やかな唇で吸い付き、舌先でつんつんとつついて刺激した後、かぷりと甘く噛みついてたっぷりと愛撫する。

キリトの意識を、耳に――聴覚に集中させ、自分の言葉をはっきりと聞かせるために。

「だってそうでしょ？　皆の信頼を集める《閃光》のアスナが、実は最初からキリトくんに完全屈服してて、ステータスやスキルどころかリアルの名前も住所もぜーんぶ公開済みで……♥

しかも、《黒の剣士》様の強さをベッドの中で教え込んでもらいながら、毎晩毎晩無責任膣内射精(ナカダシ)おねだり敗北宣言しちゃう淫乱変態妻だなんて……そんなの、誰が信じるっていうのかしら？」

明日奈自身の言葉で《閃光》のアスナを貶め、キリトの為の雌に堕としていく。自らのアイデンティティを、愛する者の為だけに黒く塗り替えていくたび、アスナの脳髄に自虐的で歪んだ快感が電流となって駆け抜けていく。

そんな真似ができるのは、ここがデスゲームとは全く縁のない様々な意味で安全なＶＲ空間であるからだ。そして何よりも、たとえアスナがどれだけ自らを堕落させようとキリトならしっかり受け止めてくれるという甘えにも似た信頼と、キリトがその信頼を裏切らないという強い確信があるというのが大きい。

「そうだな……。確かにそんな話、俺だって『実際にやってみないと信じられない』かもな」

――実際、キリトが信頼を裏切った事は一度として無い。

今宵の糧となるであろう獲物を追い回し、ついに落とし穴の真上に誘導することに成功した狩人のような嗜虐的な声音と共に、キリトはわざとらしい程にはっきりとアスナを誘導する。

無論、そうするように仕向けたのは――狩人の為に罠をしかけたアスナ自身だ。焦がれるほどに待ちわびていた愛する者の手による最後の一押しを心で受け止めながら、アスナは自ら仕掛けた悦楽と被虐の罠へと堕ちていく。

「も、もう……急にそんな事言われても……。私だって、別にそういう事がしたいわけじゃないのよ？

――で、でも……『キリトくんがどうしてもっていうなら、仕方ない』……よね？」

「ああ。今からアスナがすることは全部、『俺が言うから仕方なくしている』だけなんだ。

だから……『アスナが何をさせられたとしても、それは全部俺のせい』だからな」

キリトの言葉は、アスナが心の中に最後まで残していた理性の枷を砕くには十分すぎる威力を秘めていた。

名残惜しさと感謝の意を示すように頬と頬を触れ合わせたあと、アスナはキリトの膝の上から下り、そのまま彼の前に立つと、装備品管理ウィンドウを呼び出す。乙女の白い指先が伸びる先にあるのは、『装備全解除』の文字が描かれたボタン。ごくりと唾を飲み干して覚悟を決めた後、アスナはそのボタンを押した。

途端、聞き慣れたサウンドエフェクトが響き、アスナの衣服、そし

て下着が次々に解除されていく。本来そのままストレージに入るはずの布達は、事前にキリトに仕込んでもらったシステム的な介入によって、アスナのすぐ側の床へと再配置される。

綺麗な折り目の入ったプリーツスカートと清楚さを醸し出すトップスは丁寧に折り畳まれた状態で重なり、その上に白いニーソックスが一組配置される。そして、汚れなき純白色のブラジャーとショーツが、まるで見せびらかすように一番上に配置されたのと同時に、アスナは一糸まとわぬ姿へと変わっていた。

起伏豊かなれども絶妙に均整の取れた理想的なプロポーション。若さという特権が作りだす白くきめ細やかな肌。アスナが羞恥に頬を赤く染める中、大きく張り出した胸を飾る桜色の先端部は、固く屹立しながら彼女の興奮を隠しようもない程にはっきりと示している。

「――すごく綺麗だ、アスナ。ほら、こっちに」

「うん……ぎゅってして、キリトくん……」

夫婦の指輪一つを除いては何も身に着けていない姿となったアスナは、最愛の男に招かれるまま、キリトの腕の中に収まる。

裸身のアスナを抱きしめながら、キリトは彼女の後頭部へ手を伸ばし、左右二房ずつ編み上げた丁寧なクラウンハーフアップを慣れた手付きで解いていく。それが、今からアスナをたっぷりと辱め、そしてそれ以上に濃密に愛する事を示す合図である事を知っているのは、キリトとアスナの二人だけだ。無論、そうと察している者は意外といるだろうが。

自分だけが一糸まとわぬ姿であるという事実に密かな被虐欲求が満たされ、そして更に高まっていく心地よさを感じながら、アスナは愛する男をそっと胸元に抱き寄せる。

「キリトくん、わかる？　私の心臓……すっごくドキドキしてる。キリトくんに全部見られて、これから気持ちいいことをするんだって……もっともっと『キリトくん離れ』ができない女の子にしてもらえるんだって期待してる、あなたのお嫁さんのココロの音……♥」

「ああ、よく聞こえるよ。それに俺だって、アスナ以上に心臓がバクバクしてる」

「心拍モニター……は、こっちにはまだ無いんだっけ。そのうち実装してね？」
「実装予定リストに入れておくよ。……ところで、アスナ」
「うん。またちょっと、大きくなっちゃったみたい」
《ＳＡＯ》時代と比較するのもおこがましいほどに豊かさを増した白い双丘。その柔らかな質量と共にキリトの頭を抱きかかえながら、アスナは上質な蜂蜜のようにとろりとした声音で事実を告げる。
このプライベートＶＲ空間にログインするためのアバターは、各ＭＭＯからコピーした各人のアバターデータを流用している。アバターに大幅なカスタムができないのは常識だが、それはあくまでゲームの仕様上そうなっているに過ぎない。
キリトの支配権限が及ぶこの空間内ならば、アミュスフィアによる再スキャンを活用し、リアルに発生した差異をアバターに反映させたり、アバターそのものにある程度カスタマイズをかける事ができる。
アスナのアバターデータに差異が――即ち、成長が見られるのも、前者の機能を使ったためだ。
「キリトくんのせいなんだからね。いろんな世界で、私を好き放題弄んでくれちゃって……」
面目ないとでも言いたげな渋面を作るキリトの頬を軽くつねってやったあと、アスナは唇と唇を重ねる。それは、初心な恋人同士が初めてするような軽い口づけ。過去に幾度となく繰り返してきたその行為は、常にアスナの心を暖かく満たし、そして新たな欲望を芽吹かせる。
「んんっ……♥　さーって、今日の装備は……これにしちゃおっかなー♥」
キリトの腕の中に体を預けているのをいいことに、空中に装備品管理ウィンドウを再度呼び出したアスナは、自分の体に新たな装備をまとわせていく。
装備者自身を販売アイテムとして設定し、価格を1コルに強制決定する【浅ましき淑女のための白いロンググローブ】。下品な振る舞いをすればするほど興奮を覚えるようになる【高貴なる端女の白いニー

ソックス】。

その二つを装備したことでセット効果が起動し、アスナの下腹部には受精確率と妊娠願望を３００％アップさせる【繁殖用家畜の烙印】が、舌にはキリトの肉棒と体液の味を極上の美味と感じるようになる効果を持つ【精液中毒者の刻印】が發現する。下腹部に現れた淫猥なピンク色の烙印は、複数のハートに蝶が組み合わさった複雑かつエロティックなデザインをしており、舌上に現れた刻印を見識ある者が見れば、双剣のディティールを茨の中に忍ばせた黒い薔薇の姿を描いていることが分かる。

――言うまでもない事だが、安全性第一主義のアミュスフィアに、使用者の肉体や神経へ洗脳じみた効能を発揮させるような危険機能はない。仮にあったとしても、キリトはその機能を使用することはない。故に、アスナが今装備しているアイテムが持つ効果は全てただの設定テキスト（フレーバーテキスト）でしかないが、設定は『設定されている』という事が大事なのだ。言い訳として使えるのだから。

血を思わせる深い紅色に染め上げられた革で作られた【黒金鎖が繋ぐ永遠の結婚首輪】を左手に、球状パーツが十数個連なった先にふわふわとした犬の尻尾がくっついた【躾けられた雌犬の尻尾】を右手の中にオブジェクト化したアスナは、キリトの目を真っ直ぐに見つめながら微笑む。

「これと、これは、キリトくんの手で直接つけてくれると嬉しいなー……って♥」

女神の如き清廉さと夢魔の如き淫靡さを兼ね備えた微笑と共に、ぺろりと舌を出して黒い刻印をはっきりと示しながら、アスナは自らを飾る最後の二つをキリトへ恭しく差し出す。

「まったく。しょうがないなあ、アスナは」

二つの装備品を受け取ったキリトは、ソファの近くにあったテーブルの上に首輪を置くと、空いた左手でアスナの体を強く抱き寄せて位置を固定。同時に、右手の中にある尻尾をくるりと逆手に持ち替え、球状をした先端部をアスナの臀部へ充てがう。

もちろん、狙う先は生殖行為の為の部位――ではなく、もう一つの

穴。
　現実空間とは違い、ＶＲ空間に於いては使用されることのない部位めがけて、キリトは球状パーツの先端部をぐいと力強く押し込む。抵抗を感じるのも束の間、最初の一つが押し開いた道の後を、二つ、三つと続く球体が貫いていく。
「〜〜〜っっ♥♥♥　あ〟、っ、はひゅっ、んひいぃっぅ……！　キリトくん、キス、キひゅして……♥
　こえっ、出ちゃうぅ……！」
「ダメだ。ちゃんと全部できるまで、お預け。ほら、もう半分だぞ。頑張れ頑張れ」
「んみゅううっ！　い、じわる……ほんとに、意地悪なんだからぁ……ふあああっ♥」
　――現実空間における『不便さ』『不都合さ』を無視できる都合の良さは、ＶＲ空間の良いところだ。現実世界で『こういうこと』をする場合、当然諸々の下準備が必要となってくるが、ＶＲ空間であればそういった面倒な部分を一切省略できる。それになにより、現実世界とは比べ物にならないほどに安全だ。
　獲物の心臓にナイフを突き立てるような残酷さの中にたっぷりの愛情が込もるキリトの手が、アスナの肛内に【躾けられた雌犬の尻尾】の球状部分（アナルパール）を押し込んでいく。
　球状部分はさほど大きくない上に、体内に入る直前に潤滑液を放出するように設定されているため、アスナが痛みを覚えることはない。故にアスナは、ただ愛するものに蹂躙される悦びと、排泄器官を弄ぶ背徳的な快感に身をくねらせ、艶めいた声を挙げ続ける。
「よーし、これが最後の一個だぞ――そらっ！」
「――んぎぃひぃいいいいいいっ!!」
　ずぶり、と音が立つ程の勢いで押し込まれた最後の球体がアスナの体内に飲み込まれて姿を消す。今やその臀部から伸びるのは、アスナの髪と同じ色をした雌犬の長い尻尾だけだ。
　このアイテムには、ケットシーのプレイヤーに生える尻尾と同じ仕組みが搭載されている。その仕組み自体はキリトがシリカやシノン、

それにアリスの協力を得ながら進めて実装したもの。そして、尻尾そのものはリズが手ずから作成したものだ。

「よく頑張ったな、アスナ。偉いぞ。ほら、約束のご褒美だ」

「えへへ……んんっ――♥」

発情と興奮で頬を真っ赤に染め、蕩け堕ちた瞳から熱い涙を零しながら、アスナは心の底より待ちわびた口づけを味わう。恋人同士の、夫と妻の、主人と奴隷の、《黒の剣士》と《閃光》の――数多の思いと熱を積層させながら、唇と唇をゆったりと重ね合わせる。

その首元で、かちりと小さな音を立てて――紅の首輪の留め金がはまる。直後、黒く染まった金鎖がオブジェクト展開時の微光を伴いながら生え伸びていき、キリトの手の中へ迷いなく収まった。

「……ベッドに行こうか、アスナ」

「うんっ♥」

黒金の鎖と共に己の命運を握った男に導かれるまま、アスナは寝室を目指す。両手を床につけつつ尻を高く上げた、跳躍する寸前の蛙を思わせる屈辱的な姿勢を誰に言われるでもなく取り、さらに両足を左右に大きく広げる。

秘すべき股座を露わにしながら腰をくねらせ、愛の蜜を床に落としながら、たっぷりと慰み者にされる未来の為によたよたと歩く。理性ある人の歩みではなく、本能に支配された獣の歩みで。

何年かの後、白く美しい花嫁衣装を着て歩むヴァージンロードとは何もかもが真逆の――しかし同じ結末を迎える道を、アスナは興奮に吐息を荒くしながら歩む。腸内に挿入されたアナルパールは不規則な振動と共にアスナを刺激し、突き出した尻を撫でるキリトの手と相まって官能を導く。

リビングから始まったごく短い道筋の中で幾度となく達しそうになりながらも、アスナはどうにかこうにかベッドルームに辿りつく。

かつて、はじめてキリトと夜を共にし、そしてプロポーズされたあの部屋と寸分違わぬように再構成された寝室。その部屋の大半を占めるベッドの縁に腰掛けたキリトの脚の間に四つん這いの姿勢ですり寄ったアスナは、そのまま彼の股座に顔を寄せ、愛おしげに頬擦り

しながら自らの熱と興奮を伝える。
「ねえ、キリトくん。私ね、今日はとってもとっても、危ない日なの。だから……気をつけて、ね？」
左右反転した『装備全解除』の文字が映るウィンドウ――つまりはキリトが自分の装備管理ウィンドウを呼び出し、そして全ての装備を解除するボタンを押す光景をウィンドウの裏側から見つめながら、アスナは実にわざとらしく警告する。
直後、指輪以外の一切の装備がキリトの体より排除される。
とっくの昔に臨戦態勢となっていたキリトの男根は、邪魔な装備から解放された事を喜ぶように勢いよく飛び出ると、ぺしりと音を立ててアスナの頬を打擲する。
その勢いに「ひゃんっ」と小さな驚きの声を上げつつも、アスナはキリトの股座から顔を離そうとはしない。精緻な人形のように整った顔をグロテスクな肉棒に擦り寄せながら、反対側には白い指を添えて挟み込む。
「ふふふっ、あっつぅい……♥　私を……ううん、沢山の女の子をオンナに変えちゃった、キリトくんの凶悪ち●ぽ……♥
こ～んなに太くて、固くて、おっきな、キリトくんのおち●ぽを奥までずぷずぷ～って押し込んで……♥　ゼリーみたいに濃ぉい精液を私の子宮に好き放題射精しまくって、ユイちゃんに弟か二人目の妹を作っちゃおう――なんて考えたら、絶対にダメなんだからね？」
「わかった。気をつけるよ。
――でも……もし俺が、『嫌だ。絶対にアスナを孕ませる』って言ったら？」
「どうしちゃおっかなー……♥　ＳＴＲ値じゃキリトくんの方がずっと上だから、どうにもできないかも♥」
脈打つ剛直に頬を滑らせながらキリトの股座から距離を取った後、アスナは自分の顔を肉棒の先端と向き合う位置に移動させる。張り出した亀頭とアスナの顔を隔てる空間は、今やほんの数センチにも満たない。
立ち上る濃密な雄の臭いを深々とした呼吸と共にたっぷりと吸い

込みながら、アスナは心底嬉しそうに微笑む。
「ふふっ♪　匂いだけでわかっちゃうよ♥　『早く外に出たい』って言ってるキリトくんの熟成濃縮精子が、この中にい～～～っぱい溜まってるの……♥
　こんなの、もしナカダシされちゃったら……危険日じゃなくても一発で受精しちゃう♥　お腹をおっきくした腹ボテ騎士にしてもらえちゃう♥
《閃光》のアスナが、《黒の剣士》様の優秀な子種に蹂躙されて喜ぶ膣内射精大好き肉便器だって、みんなにバレちゃうよぉ……♥♥♥」
「なんだか、そうされたがってるように聞こえるのは……俺の気のせいかな。アスナ」
「気のせい、気のせい♥　あ、もちろんキリトくんの赤ちゃんなら親子でボスレイドが組めるくらい欲しいなーとは思ってるけど、今は、まだ……だーめっ♥
　たとえキリトくんが私のご主人様になったって、喜んでおねだりしてあげると思ったら……大間違いなんだからね？」
　差し込まれた尻尾をふりふりと揺らし、飢え乾いた雌犬のようにだらしなく口を開けたまま、アスナははあはあと発情の吐息を零す。
【浅ましき淑女のための白いロンググローブ】を装備した両手を見せつけるように差し出し、肉棒に触れる１０本の指先をゆったりと前後させながら、期待に満ちた眼差しと共にキリトを誘う。そのアイテムに付随する設定効果（フレーバーテキスト）を管理者たるキリトが知らないはずがない――それを全て、わかったうえで。
「……しょうがない。アスナがそこまで嫌がるんじゃ、諦めるしかないか」
「――え？　えっ？」
「あ、いや、違う。間違えた。最後の手段を使わせてもらうしかないか……」
　愕然とした表情で固まりかけたアスナの様子を見て焦りを覚えつつ、キリトは物品購入用のウィンドウを呼び出すと、そこに並ぶ賞品を値段の安い順にソート。結果、一番上に来ることとなった商品価格

『1コル』のアイテム――『《閃光》のアスナ』を選択し、購入する。
ちりん、という軽いSEと共に、アスナのストレージに1コルが振り込まれる。それは、今この瞬間、アスナの全てがキリトの物になった事を意味していた。一切合切、アスナの望むままに。
「ふう、危ない危ない。偶然、アスナが売ってたからよかったものの、そうじゃなかったらどうなってたか……」
アスナを買い占めた手で、アスナの髪を、頬を、肌をさらりさらりと撫で回しながら嘯くキリトの声音は、どことなく棒読みだった。そんなキリトの様子すら、今のアスナには愛おしく思えてしまう。
「あーあ。うっかり、キリトくんにお買い上げされちゃった……♥
ねえねえ、キリトくん。早速だけど……ユーザー認証をさせてもらっても、いい？」
「もちろん」
「ありがと。それじゃあ……♥」
キリトの許可が出た直後、アスナは両膝を揃えて床に座り直す。育ちの良さが垣間見えるぴしりとした所作で正座し、姿勢を美しく整えなおした後――床に頭が着くほど深々と上半身を前方へ倒した。
それは所謂、『土下座』の姿勢だ。
「お買い上げいただきありがとうございます。今この瞬間から、私の身体も、心も、全てがキリトくんの所有物となりました。
《閃光》なんて呼ばれていきがってるくせに、たったの1コルでキリトくんに人生まるごと売り渡して心底喜んじゃってる被虐嗜好騎士を、どうかキリトくん専用ち●ぽケース&性処理ホールとして、どうぞ飽きるまで好き放題ご利用ください♥
毎晩毎晩キリトくんの事を想いながらオナニーしないと眠れないムッツリドスケベお嬢様のアスナを、キリトくんのおち●ぽで完全屈服させて、《黒の剣士》様専用子宮に赤ちゃん孕ませていただく栄誉をお授けください♥♥♥」
淫靡な誓いの言葉と共に隷属を示すアスナの背で、雌犬の尻尾がゆらりゆらりと愉しげに揺れる。やがて、ゆっくりと面を上げたアスナの顔には、喜びと興奮が入り混じった妖艶な笑みが浮かんでいた。

もう後戻りはできない、そして後戻りするつもりもない。愛しい雄のためだけに存在する雌として、アスナはどこまでも深く堕ちていく。

「じゃあ、アスナ。最初はどうしたらいいか、分かってるよな？」

「うん、もちろん♥　キリトくんが新鮮な精子をい～っぱい作れるように、溜まってる分をすっきりさせてあげるんだよね。

私の――お・く・ち・で♥」

双剣戴く黒薔薇の刻印を見せつけるように舌を出し、アスナは自らの唇をぺろりと一舐め。

艶やかに濡れる反射光をまとう唇を、まるで永遠の愛を誓う花嫁のように突き出し、キリトの肉棒の先端へ口づける。

「――んぅっ……♥」

挑発的な上目遣いの視線でキリトと見つめ合いながら、アスナは密着させたままの唇全域を擦り付けるように、ゆったりとした動作で顔を動かしていく。キリト以外の男を知らず、そして今後も知ることはない唇に、興奮する雄の汁を刷り込み、匂いを移していく。

夫であり飼い主であるキリトの肉棒にまとわせるための唾液を口内にたっぷりと溜め込みながら、アスナは淫靡な口づけを捧げ続ける。そんなアスナを制するでも急かすでもなく、キリトはただ彼女のしたいようにさせ続ける。

「そうだ、アスナ。この間のあれ、少し改良したんだ。使ってみるか？」

「んっ♥　んっんっ♥」

「よし。それじゃあ……」

肉棒の先端から唇を離さないアスナの横で、コンソールウィンドウを呼び出したキリトは何某かのプログラムを起動させる。

準備完了の合図代わりにぽんぽんと頭に振れるキリトの手の感触を堪能したあと、アスナは以前教わったように、意識を喉元に集中させた。

『――あ、あー。マイクテスト、マイクテスト。聞こえてますかー、キリトくん』

「よく聞こえてるよ、アスナ。どうだ、この間より音質がよくなってるだろ？」

『うんうん！　それに、トーンも自然になってるし……すごいね、キリトくん』

「いや、俺がすごいっていうわけじゃなくてさ……実は、レインとセブンに、ボイスエンジン周りの調整と、テストを手伝ってもらったんだ。アスナの方こそ、この間より簡単に喋れてるじゃないか」

『キリトくんの教え方が上手だからだよ。腹話術みたいで、まだちょっぴり変な感じはするけどね』

そう語るアスナの唇は、相変わらずキリトの一物にぴったりと密着したまま。そんな状態で、腹話術の心得の無いアスナがまともに言葉を紡げるはずもない。

加えて、二人の耳に届く『アスナ』の声からは、肉声とはほんの僅かに異なる部分――例えて言うなら、上質なノイズキャンセリング・ヘッドホンを通したかのように、肉声には付き物のごく僅かなゆらぎが排除された、独特の調子を感じ取る事が出来た。

『これ、私の考えてることをスキャンしてる――わけじゃないんだよね？　キリトくん』

「ああ。さすがに『思考』を『出力』するみたいな真似、俺にはできないし……。できたらできたで、考えてることが丸聞こえになるのは流石に、な。

これは単に、《ＡＬＯ》の『沈黙』デバフと、《ＳＡ：Ｏ》の『呪いの料理』の仕組みを応用してるだけだよ」

『《ＳＡ：Ｏ》の呪いの料理って……食べると変な語尾が勝手に付くって噂の、あれだよね？』

「ああ、その通り。あの料理、食べたプレイヤーの音声を解析して、それに近い合成音声をその場で作ってるみたいなんだ。

そして《ＡＬＯ》の沈黙デバフは、プレイヤーの声帯に送られる電気信号をアミュスフィアが解析して、ゲーム内で音声エンコードされないようにしてさ。

あとは、まあ、その二つの仕組みをごによごによと……」

『――つまり。私が喋ろうとした事を声帯への信号から読み取って、それを合成音声に喋らせているってこと？』
「さすがアスナ。大正解だ」
よく出来た教え子を褒めるような手つきで、キリトの手が指通り滑らかな髪を優しく撫でれば、アスナは褒められた喜びを尻尾をぶんぶんと振ることで表す。亀頭全体にキスを重ね、唇を触れさせきったアスナは、そのまま顔を少しずつ前に進めるようにしながらキリトの肉棒をゆっくりと口内に収めていく。
『それじゃあ……キリトくんのおち●ぽ、いただきまーす……♥』
溜め込んじゃった作り置きザーメン、ぜーんぶ私の口の中にぶちまけて……好きな時に射精していいからね♥』
「うぉっ……アスナの口の中、すごいな……。温かくて気持ちいいよ」
『でしょ？　キリトくんが気持ちよくなれるように、頑張って温めておいたんだからね』
合成音声システムを使って会話しながら、太い雄の象徴を口いっぱいに頬張ったアスナは、肉棒の根本に向けてその端正な顔を近づけていく。
絡ませた舌で舐め回し、溜め込んだ唾液を丁寧にまとわせ、時折頬の内に肉槍の先端を擦りつけながら、ゆっくり、ゆっくりと進んでいく。榛色の瞳でキリトを見つめながら行われる口腔奉仕には、射精を促すような性急さは無い。それはまるで、極上のディナーを味わう時のように、キリトの味と匂いを味覚と嗅覚にしっかりと覚え込ませているかのようだ。
そうして、敵との間合いを油断なく詰める剣客のようにじりじりとした速度で肉棒を口内に納め続けたアスナの唇は、ようやくその根元部分へとたどり着いた。
『ふぅっ、やっと、全部入った……♥　キリトくんので、口の中いっぱいになっちゃった♥』
「苦しくないか、アスナ？」
『大丈夫だよ。息なら鼻からできるし……それに、息を吸う度にキリトくんの匂いがいっぱい広がるから、頭の中がふわふわして気持ちい

いくらい♥』

淑女らしからぬ荒い鼻息を幾度となく繰り返すアスナは、情欲と興奮、奉仕の喜びに満ちた瞳でキリトをじっと見つめる。

アスナの首に鎖を片手に握ったまま、もう片方の手で彼女の髪を撫でるキリトの手付きは、そのどこかサディスティックな雰囲気とは相反するものすら感じるほどに優しい。

『ねえ、キリトくん。そう言えばさっき、ボイスエンジンの調整とテストを手伝ってもらった……って、言ってたよね』

「ああ」

『そのテストの内容って……もしかして、いま私がしてることと、一緒だったりする？』

「……さすがだよ、アスナは」

『やっぱり……♥』

レインこと、枳殻虹架。そして、セブンこと、七色・アルシャービン。

幼い頃、数奇な運命に翻弄されて離れ離れとなり、《ＡＬＯ》を舞台に繰り広げられた『クラウド・ブレイン』騒動を経て再会した心優しき姉妹。《ＡＬＯ》ではアイドル的な存在として認知されている二人も、アスナ同様にこの空間へログインする権限を持っている。

レインはアイドル活動で、セブンはＶＲテクノロジー研究で忙しい日々を送ってはいるが、暇を見つけてはちょくちょくここを訪れ、キリトを気安く伴っては日頃のストレスを解消している。

それが何を意味するかは――まあ、今更言うまでもないだろう。

『どうせキリトくんのことだから、テストと言いつつ、二人ともめちゃくちゃにしちゃったんでしょ？』

「て、テストは真面目にやったぞ！　……まあ、めちゃくちゃにも……したけど」

『もー、やっぱりそんな所だろうと思ったよ』

キリトの腰に両腕を回し、抱きつくようにして身体を支えながら、アスナは肉棒への本格的な奉仕を開始する。

粘ついた吸引音を響かせながら、雄の象徴の根本に口づけていた唇

を後方へゆっくりと引く。久しぶりに外の空気に触れたキリトの肉竿は、ねっとりとしたアスナの唾液によってくまなくコーティングされており、天井から降る光を反射してぬらぬらと妖しい輝きを纏う。

『まだ1●歳のセブンちゃんの、小さなお口を……こーんなえっぐいサイズのち●ぽとディープキスさせて、男の味を覚え込ませちゃったり……♪

レインさんの大事な商売道具（おくちとのど）を、キリトくんを気持ちよくするためのフェラホール代わりに使いまくった挙げ句、姉妹丼をおいしくいただいちゃったんだ……♥』

「否定すべきなんだろうけど……全部事実だから、どうにも……」

『ふふっ、まあしょうがないよね。二人とも可愛いし、私と同じでキリトくんのこと大好きだし……♥

それに、お嫁さん達のストレス解消に付き合ってあげるのも、旦那さまの大事なお仕事だもん♥』

語るべき言葉を全て合成音声システムに投げ渡したアスナは、本来発声に使用されるべき己の口と喉をただ肉棒へ奉仕するためだけの器官として使い続ける。

可憐な唇を常に肉棒のどこかに触れさせ続けたまま、瞳と瞳で見つめ合いながら披露されるのは、夫に仕込まれた淫らなテクニック。

唇の端よりじゅぷじゅぷと水音を上げて、肉棒の先端から根本を何度も行き来する濃密なディープ・スロートを、騎乗位で腰を振っている時のように不規則なリズムで繰り返しながら、アスナは一心不乱に肉棒をしゃぶり続ける。時折、亀頭だけを口に含んでは、敏感な鈴口を舌先でつついて悪戯したかと思えば、顔がキリトの股座に触れるほど根本まで深々と咥え込んだ状態で動きを止め、片手でキリトの陰嚢を揉みほぐし、優しくマッサージする。

『ここに、いっぱい溜まってるんだね……。みんなが欲しくてたまらない、キリトくんの赤ちゃんの素……♪

――みんな、いい子にして待っててねー。今日は、キリトくんのお嫁さん一号が、キミたちをそこから出してあげるからねー……♥　もちろんその後は……仲間はずれがでないように、一滴残らずごっくん

してあげる♥

《閃光》のアスナが《黒の剣士》様のオンナだって匂いだけではっきりわかっちゃうくらい、雄臭ぁい熟成汁で体内まるごとマーキングしちゃおうね～♥』

合成音声であってもそうとわかるほどに媚びた声音でキリトの陰嚢に語りかけながら、アスナは肉棒を舐め上げる速度を少しずつ早めていく。繰り返される水音は否が応でもボリュームを増し、唇に弾かれるようにして肉棒からこぼれ落ちたアスナ産の唾液が床の上へ飛び散っていく。

尻を高く上げた四つん這いの姿勢となり、アスナは更に深いピストン運動を続ける。その前後する動きに連動する形になった豊満な胸が肉のぶつかり合う音を奏で、肛門に挿入されたアナルパールから伸びる尻尾がふりふりと揺れる。

口も、喉も、全てを肉槍に奉仕する為のツールとして用い、溢れる先走りの汁を丹念に舐め取りながら、アスナはただひたすらにキリトの放精を煽る。その時が近いと、身体が覚えているが故に。

「あ、アスナっ……！　俺、そろそろ……！」

『うん、うんっ♥　きて、キリトくん♥　キリトくんの好きなだけ、思いっきり射精してっ♥』

「じゃあ、遠慮なく――うっ、で、でるっ!!」

身体ごと前に突き出すような体勢で、キリトの肉棒を根本まで深々と飲み込んだ直後。

ただでさえ太い肉の槍が、アスナの口内で一際大きさを増し――解き放たれた精液の奔流が、アスナの喉を襲った。

子種が渋滞をおこす程に詰まりきった濃密な精液は、当然その勢いも苛烈。食道を蹂躙し、胃袋を直撃するような激しい射精の衝撃に目を見開かされながらも、アスナはごくりごくりと喉を鳴らし、愛する者の体液を懸命に嚥下していく。密着したキリトの肌の匂いと飲み干す精の匂いに支配された嗅覚が、快感を示す信号を伴いながらアスナの本能を刺激する。

『んふっ、んんっ……♥　キリトくんのせーえき、どろどろで濃すぎる

よぉ……♥

びゅーびゅーって、すごくて……喉の中に絡んで……。こんなの、幸せすぎてクセになっちゃうよ……♥』

射精が終わるまでの時間は、実際には長くても一分程度だったのだろう。しかしアスナにとってみれば、それはもはや永遠に続く快楽を与えられたに等しい。

あまりの勢いと量に飲み干しきれなかった精液をどうにか口内に押し留めたまま、アスナは射精を終えたばかりの肉棒をいたわるように唇を這わせる。そうして、最初に咥え込んだ時の動きを逆回しにしてトレースするかのような動作で肉棒を口の中より引き抜いた。

射精を終えたばかりだというのに相も変わらず屹立したままのキリトの雄々しい肉槍には、自らが放った白濁液の痕跡は一切残っていない。それが、引抜かれる際にアスナの唇と舌によって丁寧に舐め取られたおかげであることは言うまでもない。

大きく口を開き、中に溜まった白濁液の量をたっぷりと見せつけたあと。アスナはしばしの間、濃厚な精液を舌の上で転がし、にちゃにちゃとした音をわざと立てながら咀嚼する。

『んーっ♥　濃くて、苦くて、粘っこくて……すっごく美味し……♥

キリトくんの『お前は俺の物だ』っていう意思が、伝わってくるみたいで……なんだか、飲み込むのがもったいないよ～』

「ははっ。アスナが欲しくなったら、またいつでもご馳走するよ」

『ほんと？　じゃあ……』

目と口を閉じたアスナは、舌を器用に動かし、口内に溜まっていた精液を全て絡め取り、舌の上に集める。そうして感触と味を愉しみきったあと――ごくりと喉を鳴らして、一滴残らず飲み干した。

「――ごちそうさまでした♥　いっぱい出してくれて、ありがとう」

射精後の肉棒への労りを込めて、鈴口にもう一度口づけを捧げたあと。アスナはアイテムストレージ操作ウィンドウを呼び出し、【妖精牧場で絞ったシルフのミルク】を選択して実体化。グラスに入った白いミルクを一息に呷る。

ミルクをまとった舌先で自らの唇を舐め回したあと、口内全体に

たっぷりと行き渡らせてから、こくこくと小さな音と共に飲み干した。
「お待たせ～♪　お掃除完了したよ、キリトくん。
本当なら、女の子同士でシェアしながらキレイにするのが一番いいんだけど……今日は私一人だから、これで許してね？」
「許すも何も、むしろ、そこまで気を使わせちゃって悪いくらいだよ。アスナ」
「いいのいいの。私がしたくてやってることだし。
それより……お口の中、リーファちゃんの味になっちゃったから……キリトくんの味で上書きしてもらえたら、嬉しいなー……？」
アスナは膝立ちになり、親鳥からの給餌を求める雛のように顔を上に向ける。
望んで雌に堕ちた女剣士の身体を、キリトの両腕が抱え上げ――同時に、その唇を奪う。それは、アスナが願った通りの、強引にして強権的な口づけだった。
導かれるままに挿し込まれたキリトの舌が、口内に残ったミルクの痕跡を刮げ落とすように力強く暴れまわる。そのまま背中をベッドに押し付けられ、逃げ場を失ったアスナに向けて一方的に送り込まれるキリトの唾液が、アスナの口内を己が物とせんとばかりに塗り込まれていく。
「キリトくん……んんっ♥　きりひょぅん♥♥」
僅かに残っていたリーファのミルクの後味が、キリトの味に塗り替えられて久しいが――それでも口づけは終わらない。下腹部に当たる固い一物の感触に期待を昂ぶらされつつ、アスナは愛する者と唇を重ねる心地よさにただひたすら酔い続ける。
唾液と唾液が混ざり合うくちゅくちゅという水音に混じり聞こえる、キリトの熱い吐息。先程までの激しさから一転して、アスナの口内を丁寧になめ尽くすかのようなゆったりとした舌の動き。体に回される固く力強い腕の感触。その全てがアスナを狂わせ、愛欲に溺れさせていく。
キリトが悪漢の罠にはまり、命を落としかけたあの日。アスナを守

るため、キリトが人を殺したあの日。キリトに唇を奪われた、あの日――あの日以来、アスナはキリトと交わす口づけの虜になった。それよりずっと前からキリトの虜だった心に、身体がようやく追いついたあの日以来、アスナはずっとキリトの虜であり続けている。

――結局、長い口づけが終わりを迎えたのは、時計の秒針が十度は回りきったあとのことだ。

「アスナ。脚、広げて」

「うん……」

ふわふわとした夢心地に包まれた意識の中、アスナはおずおずと両脚を広げる。尻穴への刺激と肉棒への奉仕、そして目眩くキスに酔わされたアスナの身体は既に雄を迎え入れる準備が整っている。

水でもなければ汗でもない、ねっとりとした粘り気を帯びた分泌液をだらだらと溢れさせる秘所に、キリトの視線が突き刺さり、それが更にアスナの官能を刺激する。

「すごいな……。触ってないのに、もうどろどろだ……。そんなに興奮してくれたんだな」

「き、キリトくんだって……♥　興奮してるくせに……」

「ああ、してるよ。……っていうか、この状況で興奮しないわけないじゃないか」

アスナの上から覆いかぶさるようにして身体を寄せ、キリトは巧みに彼女の逃げ場を断つ。その股座で雄々しく反り返る肉棒の先端部が、アスナの下腹部に触れ、今から為される行いの意味を知らしめる。

「溜まってた分を飲み干してくれたお礼、たっぷりさせてもらうからな……覚悟しておけよ、アスナ」

有無を言わさぬキリトの口調に、アスナは期待に満ちた表情と共にこくこくと首を縦に振る。

乙女の下腹部から脚の間へつながるセクシーなラインの上をマーキングするかのように、キリトの亀頭がゆっくりと滑り進む。やがてその太い肉槍の先端は、愛蜜を溢れさせるアスナの性器、その入口へとたどり着く。

人が人たる以前より続いてきた生殖行為。番う相手の子を孕まさ

れる本能的な予感に命じられ、アスナは恥じらいを捨てて大きく脚を開き、キリトを迎え入れる準備を整える。
「行くぞ」
「はい……♥」
蜜壺の入口に幾度となく軽いタッチを繰り返し、溢れる愛の印しを肉棒の先へまとわせたあと。両腕に力を込めてアスナの身体を固定したキリトは――己の分身を、アスナの膣内へ力強く押し込んだ。
「あっ――っ、ぁあああっ……！　んんっ、きゅううううっ♥♥♥」
最奥までを一息に貫く、遠慮も何も無い抽送。処女ならば今頃痛みのあまりに悲鳴を上げているような行為であるが、２００年以上もの永きに渡りキリトに貪られる愉悦を味わい続けてきたアスナの膣は、何の支障も無いまますんなりと肉棒を迎え入れる。
正常位の体勢で密着した腰と腰の間で、アスナの蜜壺から溢れ出した愛液がぐちゅりと淫靡な音を立てる。強烈な交合の快感に支配され動けないでいるアスナの体を、キリトの両腕が固く抱きしめる。
「ここで……《ＳＡＯ》のあの部屋で、アスナを初めて抱いた時も、こんな感じだったよな」
「ううん……全然、違うよ……。ん、んんっ……あの時のキリトくん、もっと初心で、優しかったもん……」
「そ……そうか？」
「そ・う・で・す。
――なのに、今じゃすっかり女の子特攻スキルビルドで固めちゃって……『夜』の方も大変手慣れたご様子で……一人だけレベル上げちゃって、ずるいよ」
わざとむくれることで逆に雄の歓心を得ようとするアスナの誘いに乗りながら、キリトは彼女の髪を手ぐしで二、三度梳き、深く繋がったままたっぷりと口づけを交わして機嫌を取る。
初めてアスナを抱いた時は無我夢中だったキリトも、今ではこうして繋がったまま軽口を叩きあえる程度には大人の余裕というものを身に付けている。踏んだ場数と閨に引き込んだ相手の数を考えれば、余裕が身につかない方が不思議かもしれないが。

「まあ、今更あの頃には戻れないからな……。
せめて、アスナには今の俺を、たっぷり堪能してもらうとするか――そぉらっ！」
「――んんんっ……やああ、あんんっ！」
アスナを腕の中に納めたまま、キリトは本格的な抽送を開始する。
ゆっくりとした動きで、アスナの胎内から肉棒を引き戻し、亀頭が膣穴から抜けるぎりぎりまで深く腰を引く。シンプルなその動きだけで、アスナの体中を快楽が蹂躙し、切ない嬌声を上げさせる。そして、その快楽が頂点を越え、ほんの少しだけ退いたタイミングを狙いすまして突きこまれるキリトの肉棒が、さらなる悦楽をアスナの体に刻み込んでいく。
「ふうっ、んんっっ♥　やっ！　あっ、あああっ、あ〝っ、あっあっあっぅ、やっ、やあああ〝ああっ♥♥♥」
破城槌のように激しく、寄せては返す波のように際限なく。快楽を以て悦楽を引き寄せ、悦楽を以て官能を呼ぶピストン運動が行われる度、アスナはより高い刺激に翻弄され、より深い性感の中に溺れていく。
アスナの弱点はもちろん、感じる場所やタイミング、触れて欲しい場所、聞きたい言葉――これまでの経験から得てきた情報を最大限に有効活用しつつ、キリトはひたすらにアスナを責め立てていく。
「おっ、お〝っ♥　おく、奥の方ぐりぐりってするのずるいよおっ……♥　だめ、だめだよこれ、じゅるいよぉっ♥　こんなの、憶えたら……ひぅっ♥　い〝っ、イキ癖っ、ついちゃうからあぁぁああっ♥　んひっ、おふぅううぅぁぁっ♥」
「あのなあ、アスナ……そんな可愛いこと言われると、もっとイジメたくなるだろ」
呆れたような顔でピストン運動を続け、アスナのGスポットに的確な刺激を与えつつ、キリトは管理者用コンソールを起動。アスナが装備している【躾けられた雌犬の尻尾】の装備情報に割り込みをかけると、『疑似抽送モード』を起動させる。
システムよりの命令を受け取った直後、アスナの肛内に収まる球体

の一つ――犬のそれを模した尻尾部分との境目にある一番手前の球体が、一気に膨らんで大きさを増す。その直径は、ちょうどキリトの一物のそれと一致していた。その一つ目を皮切りに、アスナの腸内奥部に挿し込まれた球体部分へ膨張は次々に伝播していく。

一番浅い部分から奥へと連鎖的に続く膨張が、まるでキリトの肉棒とアナルセックスをしているかのような錯覚をアスナに与える。無論、脊髄を駆け抜ける背徳的な快感と共に。

「んひっ――あっ――あ〝ーっ♥　ああ〝ーっ♥♥　お〝っ、おし、お尻に……ごりゅごりゅきでるぅうううう♥

キリトくんので、前も、うし、っろも♥　お〝っ、はひゅっ♥　ぱんぱんってされるの、きもちぃっ、よすっ、ぎ――おおほおおおっ♥♥」

「おおっ、これは、かなり……思ってた以上に、こっちにも伝わってくるな……」

根本から先端まで膨張を連鎖させたアナルパールは、今度はその動きを逆回しにするように、先端から根本へ順々に収縮していく。その動きが、肉穴から一物が引き抜かれる時に近い感覚を及ぼした直後、再び膨張。

膨張と収縮が織りなす擬似的な肛門抽送に、蜜壺を貫く太い肉棒によるピストン運動が重なり齎される快楽の渦が、アスナの感覚神経を蹂躙し、理性の軛をいともたやすく粉砕していく。

熱に浮かされた頬を真っ赤に染め、口の端から唾液を零しながらキスをねだり、キリトの肉槍で一突きされる度に交合部から愛液を溢れされる今のアスナの姿には、普段の清楚な雰囲気は一切残っていない。

「ふーっ、ふーっ♥　あ〝っ、やぁっ、あっ、あ〝ーっ♥　はひゅっ、ふぅっ♥　んんっ〝、やあ……っっっ――♥」

「おいおい、いいのか《閃光》サマ。こんな時分勝手なビーターに、好き放題やられっぱなしで」

「いっ、いいのぉっ♥　おっ、はあっ、はあっ――んんんっっ♥

好きな、人らから……キリトくんだからぁ、い〝っ、いい、のぉ……

♥　キリトく、んんっ、だからぁ……あひぃっ♥　めちゃくちゃに、されたいのぉっ♥　――あっ♥　また奥、ぐりゅってされ――ーあ〃ぁああっ、んやあああああっっ♥♥♥」

今や一匹の雌の獣となったアスナは、本能的な喘ぎ声の中にどうにかこうにか人の言葉を紡ぎながらキリトの問いかけに答える。

扇情的な旋律を耳にしながら、キリトはＳＴＲ値――つまりは膂力の差と、上から覆いかぶさるような正常位体勢の優位性をフルに活用。アスナから一切の逃げ場を奪いつつ、杭打機のように力強い肉棒抽送を以て、アスナの肉壷を支配する者が誰かを大胆かつ丁寧に教え込んでいく。

生殖に特化した大型サイズの雄の象徴に、自らの弱い所を的確に攻撃され続けるアスナは、結合部からはしたなく愛液を吹き散らしながら幾度となく達する。恥も外聞も何もなく、いずれ番い子を成す相手より与えられる肉体的快楽に酔い痴れ、いつか己を娶り妻と為す相手より与えられる愛情に溺れ続ける。

「はひゅっ♥　あぅ〃っ♥　あっあっあっ……っっ♥　やっ、だぁ、だめぇ♥　も、やぁっ――あああっ♥」

「アスナ。キスしようか、ほら」

「するぅ、キスするぅ！　あ〃っ、あっ、っんん、ふうっ――んんっっ……♥♥」

キリトの手が、紅い首輪に繋がった鎖をぐいと引き寄せる。有無を言わさぬその誘いに導かれるまま、アスナは愛する夫と唇を重ねると同時、ほぼ無意識の動作で彼の首に両腕を回して強く抱きつく。

ベッドとキリトの間に挟まれ身体を動かす自由すら捧げて快楽に浸りながら、アスナは口内に挿し込まれるキリトの舌を貪るように激しく吸い付く。

肌の上に浮かぶ玉のような汗によって滑らないよう、愛妻の身体に腕を回して今まで以上にしっかりと固定したあと――キリトは肉棒を出し入れするペースを、徐々に加速させていく。

「このまま、中に全部出してやるからな……アスナ……！　泣いても、何しても無駄だから、覚悟しておけよっ……！」

「うん、うんっ♥　はひゅ、あ〝っ、キリトくんのぉ、ああっ♥　ぜぇっ、全部、ナカに欲しい……♥　おっおっお〝ぅ、おふーっ♥　あひぃっ♥　そ、のままっ、濃いの、いっぱい出して……んんぅううっ♥　……あ、赤ちゃん、つくっちゃお……♥♥♥」

息も絶え絶えなアスナによる、精一杯の誘惑。その誘惑に対し、キリトは言葉を返さず――ただ、今までは見せなかったハイペースのピストン運動を以て答えとする。

「――んんんっ!!　おほぉっ♥　あ〝っ♥　やぁ〝っ♥　まっ、まりゃ、いっぎゅ♥　いぎゅのおおおおっ♥♥　やあっ♥　おっおお〝っ♥　んやあああああああああっ♥♥♥」

十分に温まりきっていたアスナの体が、ここにきて更に速度と威力を増した肉棒の連続抽送攻撃に耐えきれる道理などどこにもありはしない。

避妊など微塵も考えず、ただ目の前にいる女の胎内に己の精を放つ――繁殖欲求という、生物が持つ根源的な欲望を満たさんがため、そして己の下腹部に渦巻く欲望を解き放つため、キリトはただひたすらに深く重く早い抽送を叩きつけていく。

そうして、幾度目かの突きこみの後。

陵辱じみた激しい性交に咽び泣く膣肉によって締め付けられ続けた肉棒、ついに我慢の限界を迎えるコンマ数秒前――アスナの最奥部まで貫かんとばかりに、キリトは己の一物を奥の奥まで押し込んだ。

「アスナ……アスナ！　でっ……ぐうっ、射精るっ!!」

――そして。

アスナの子宮口を力づくで抑え込んだキリトの亀頭から、白濁した液体が一気に解き放たれた。

「〜〜〜〜〜〜ツツツ！　あっ、やあああああああっ♥♥♥　いいっっ、くゅうううう♥♥　あっ、あ〝ーっ♥♥　……あ〝、、はひゅ、やあああああっ、あ〝、あ〝あーっ……♥♥♥」

どくりどくりと脈動する雄の象徴から放たれる、白濁した大量の精液。

子宮口に密着した、女を孕ませる為のゼロ距離射精。その量、そして濃さは、それが本日二度目の射精である事を忘れてしまいそうなほどの域に余裕で到達している。

止めどなく送られてくるキリトの精子が、その量と質を以て子宮全体を実に容易く征服してのける中。それによって齎された至福の感覚が、快樂を意味する信号となってアスナの脳髄を駆け上り、深い絶頂を刻み込んでいく。

「う、おおっ……アスナの中で、絞り、取られる……」

背中を弓なりにのけぞらせ、脚の間からぷしぷしと愛液を吹き出すアスナの体を抱え込みつつ、キリトは陰嚢で生産したばかりの新鮮な精液を一切の遠慮無く吐き出していく。

濃密な雄の種汁を受け取る度、アスナの下腹部に刻まれた淫紋が妖しい光をうっすらと放ち、キリトの精子以外では受精できないように子宮を書き換える。愛しい男に心を捧げ、体で服従する、少しばかり歪んだ喜びがアスナの胸を満たし、深い官能の味となって魂を侵食していく。

「んっ……♥　あぅ……んん……♥　キリト、くん……♥」

「アスナ……」

事後の悦楽に狂わされ、半ば忘我の境地にあるアスナは、とろけた声で口づけをねだる。

彼女の体に膣内射精を叩き込んだ時と同じ体勢のまま――つまりはアスナに覆いかぶさるような正常位体勢のまま、キリトは再びアスナと口づけを交わす。貪り合うような激しいものではなく、互いの唇に触れ合うだけの、軽く甘やかな口づけではあるものの、その唇と唇はずっと触れ合わせたままだ。

『――なあ、アスナ』

例の合成音声システムを使用し、キリトはキスをしたままアスナへ呼びかける。

『どうしたの、キリトくん？』

『その……したばっかりで本当に申し訳ないんだけどさ……もう一回、いいかな』

『もちろん♥　二回でも、三回でも……キリトくんがしたいだけ、いっぱいしようね♥

あ、でも……。できたらでいいんだけど……次は、キリトくんともっとイチャイチャしたいなあ……ダメ？』

『ダメだ――なんて言う理由を探す方が、難しいな』

二度の射精を経て未だ硬度を喪わない肉槍で繋がったまま、キリトはアスナの体を手繰り寄せるように動かし、そのままゆっくりと引き起こす。

快感と共に訪れた気怠さが未だ残るアスナは、キリトの体に半ばより掛かるようにして体重を預けつつ、彼の脚の間に腰を落とすようにして少しだけ体勢を整える。

「キリトくん……ぎゅーっ、って……」

「ああ、分かってるよアスナ。ほら、おいで」

「ふふっ……あったかぁい……♥　お腹の中も、外も……キリトくんでいっぱいだね……♥」

所謂『対面座位』の姿勢で繋がったまま、キリトの両腕がアスナの体を優しく抱きしめる。

榛色の瞳を愛情と快楽に蕩かし、キリトの腕の中に収まったアスナは、キリトの肌にキスの雨を幾度となく降らせながら、新たな睦み合いの中に自らを溺れさせていった。

「――へー、アスナって、普段はこんな感じでキリトに甘えてるんだ……」

「なんかちょっと意外かも……アスナさんって、もっとＳっ気強いと思ってました」

空中に浮かんだウィンドウに流れる、アスナの痴態。対面座位で繋がったままぐにぐにと腰を動かし、自らの性器で肉棒に奉仕し始めたアスナの録画映像を眺めながら、フィリアとリーファは思ったままに感想を呟く。

「ふふっ。だって、しょうがないじゃない。キリトくんには、私の弱い所全部知られちゃってるし……♥」

それに、キリトくんってどっちかっていうとSな人だから……責めてもらった方がお互い気持ちいいっていうか……ね？」

「はいはい、ごちそうさまでーす」

アスナの色気づいたのろけ話に息を合わせて返答し、くすくすと笑い合うフィリアとリーファにつられ、アスナもまた相好を崩す。

ごく限定的な部分においては、既に二人とも——というか、《ＳＷＯＲＤ協定》に与している女性全員がアスナの妹のような存在である。同じ雄の寝所に侍るような間柄で無ければ、自分のはしたない姿をキリト以外の誰かに見せることなど永遠に無い。

一糸まとわぬ素っ裸の状態で川の字に並んで寝転びながら、揃ってそんな映像を見上げる日が来るなど、普通では考えられなかっただろう。

「……ねえ、アスナ。ところでなんだけど」

「なあに、フィリア？」

「さっき、途中で『リーファの味がするミルク』飲んでたよね？　あれって、いったい……？」

さっきまで見ていた映像の内容を思い返しながら、怪訝な表情を見せるフィリア。彼女の問いに答えたのはアスナではなく、ミルクの生産元——つまりは、アスナの隣に寝転んだリーファその人だ。

「フィリアさん。森林エリアの真ん中あたりに、白い教会があるのは知ってます？」

「うん。知ってる知ってる」

「実はですねー。あの教会、地下に隠し扉が用意されてまして。そこにある秘密の通路が、秘密の妖精牧場に繋がってるんです」

「隠し扉に、秘密の通路……！」

トレジャーハンターとしての血が騒ぐのか、期待と興奮に目を輝かせるフィリアが、リーファの話に食いつく。

「その妖精牧場を管理しているのが、おに——げふん、黒いスプリガンなんですけど……あたし、こないだそのスプリガンとデュエルして、

見事に負けちゃいまして」
「ど、どうなったの……？」
「そんなの……決まってるじゃないですか♪
力づくで牧場に連れ込まれて、ち●ぽとお薬でいーっぱい躾けられて……ご主人様の搾乳家畜に堕ちちゃいました♥
特におっぱいは念入りに弄ってもらって……おかげで、今じゃホルスタインよりたくさんミルク出せるようになっちゃったんです♪」
どこか誇らしげにそう語るリーファの瞳には、キリトの肉棒を目にした時のアスナと同じ、本能に忠実な雌の情欲がありありと浮かんでいる。陶然とした笑みを湛え、自らの豊満な胸をさわさわと弄るその様子からは、リーファに行われた苛烈な調教の片鱗が見て取れる。
驚きと興奮に圧倒されて息を呑むフィリアに、アスナはしっとりとした視線を向けた。
「――それでね、フィリア。今度その牧場に潜入して、牧場主のスプリガンを倒してリーファちゃんを助け出すための作戦を立ててるんだけど……協力してもらえない？」
「もちろん！　私の大事な友達を家畜にして、あんな幸せそうな顔させちゃうキリ――じゃなくて、スプリガン！　絶対に許さないんだから！
それで、アスナ。どういう作戦でいくつもりなの？」
強い口調とは裏腹に、フィリアはまるで遠足を来週に控えた小学生のように、実に楽しげな雰囲気を放っている。そんなフィリアを優しく抱き寄せ、アスナは彼女の耳元に唇を寄せる。
「真正面から行くのは危険だから……潜入作戦にしようと思うの」
「具体的には？」
「まず、リーファちゃんの紹介で訪れた搾乳家畜志望者のフリをして、牧場に入り込むの。
そうしたら、リーファちゃんを一発で家畜に堕としちゃった薬物調教が始まると思うから……相手を警戒させないようにその調教メニューを全部こなして、完璧な家畜になるの。
特に、《ＡＬＯ》のフィリアは牧場主と同じスプリガンでしょ？　同

じ種族の子が、おっぱい絞られることと、ち●ぽハメられることしか頭にない雌畜に堕ちたら、相手だってきっと油断するわ」

「いいね、それ。それでそれで？」

「調教が完了して、私達の身も心もキリ――その黒いスプリガンの物になったら、相手も隙きをみせると思うから……あとはそこを狙って、三人がかりでやっつけちゃうのよ！」

「なるほど、完璧！　さっすが、《閃光》のアスナの二つ名は伊達じゃないって感じだね」

くすくすと笑みを零しながら、アスナはフィリアと共に『絶対にうまく失敗するための』作戦を立てていく。もし、この作戦がアスナの目論見通りに成功した暁には、妖精牧場から出荷されるミルクにシルフだけでなく、新たにウンディーネとスプリガンの雌のミルクが加わっていることだろう。

「それじゃあ、アスナ。妖精牧場でちゃんと家畜に成れるように、キリトが戻ってきたら、調教される練習いっぱいしようね♥」

「うん、そうだね♥　じゃあ、リーファちゃんには、私達のサポートをお願いしてもいい？」

「もっちろんです！　先輩家畜として、手取り足取り、なんでも教えちゃいますからね♥」

ベッドの上で裸を晒した女三人は、互いの肌に緩く触れ合いながら、たった一人の男に溺れてどこまでも堕ちていく為の算段を巡らせる。

心はともかく、体のつながりはＶＲ空間内限定。とはいえ、そう遠くない未来、現実空間でも同じ男の腕の中で、ＶＲ空間同様に乱れ悶える事は確定しているのだ。ならばその未来に向け、仮想世界で刺激的なプレイに励み、体を慣らしておくのはむしろ必要なことと言って差し支えない。

身の内をじりじりと焦がす劣情の火を分け与えるように、自身と同じ竿に貫かれた二人の妹の肌へ、アスナは濃密な口づけを落とした。

――そして、十数分後。用事を片付けてＶＲ空間に帰ってきたキリ

トが、彼女らの練習にたっぷり付き合ったのは、いまさら言うまでもないだろう。

０３．　絶えざるままに待ちいたり　（ユウキ）

（――やっぱり、随意飛行機能の再現は難易度が高すぎる……。《ザ・シード》規格を使って入出力している情報は大して変わらないはずなのに、何をキーにしてプレイヤーのモーメントを制御しているんだ……？）

願望が尽きないところは、人の良い点であり悪い点でもある。

一つ叶えれば、また一つ、そしてさらにまた一つ。際限無く溢れ出る欲望を抱えているのは、このプライベートＶＲ空間の支配者・キリトもまた同じだった。

（羽根展開のＯＮ／ＯＦＦ機構は、ケットシー族の尻尾で使わている制御モジュールの応用で再現できそうだからいいとして……。

そこから実際にプレイヤーを飛ばすとなると……進行ベクトルに空力制御、Ｇ負荷計算と軽減判定をしつつ翼を連動させて……考えなきゃいけないことが多すぎる。

ああ、せめてログデータか何かをもらえれば……）

屋外に設置された岩風呂の縁に頭を預けて仰向けに寝転び、青い空を眺めながらキリトは深々と嘆息した。

今や小規模ダンジョンが裸足で逃げ出す程度には増築されたキリトのＶＲ空間内邸宅。その一角に設置された『屋外露天風呂付き和風大型浴場』は現在、キリトの貸切状態である。

現在、同サーバー内にはキリトの他にアスナとユウキもログイン中ではあるが、二人とも今はリビングルームでアスナが淹れたお茶を楽しみながら、帰還者学校から出された課題に取り組んでいるはずだった。

地下から汲み上げた源泉をそのままかけ流す贅沢な暖かさに包まれながら、キリトは次の大規模アップデート――『《ＡＬＯ》と同等の随意飛行機能実装』に向けて思索を巡らせる。

（どうするかな……。《ＡＬＯ》で飛び回っていっそ感覚的に掴んだ方

が早いんじゃ――ん？）

『かぽーん』という、温泉に居ると何故か時々聞こえる不思議な音を模したメッセージ着信通知音が響く。視界前方に開いたシステムウィンドウをキリトが見てみれば、そのメッセージ差出人欄に表示されている名前は――ユウキ。

腕を伸ばしてウィンドウに触れ、キリトはメッセージを開封した。

【キリト、どっかにお出かけ中？　部屋に行ったら空っぽだったんだけど】

（【ちょっとアイデアに詰まったから、風呂に入って気分転換してるよ】……っと。

……もしかして、随意飛行より先にボイスチャットを実装した方がいいんじゃないか、これ）

ウィンドウに入力した文をそのまま返信した後、キリトは湯船に寝転んだままボイスチャット機能の実装プランをざっくりと練り始める。即座に実装できるかと言われれば難しいが、時間さえかければ不可能ではないだろう。

大まかなプラン構築に没頭して五分ほど経った後のことだ。内湯と外湯を隔てる扉が開かれる小さな音が、キリトの耳に届いたのは。

「おっじゃましまーす、キリトー♪」

「……ゆ、ユウキ？」

濡れ羽色の長い髪を入浴用のアップスタイルにまとめ、白いバスタオルを体に巻き付けた小柄な少女――ユウキ。《絶剣》の二つ名を《ＡＬＯ》中に轟かせる彼女は、キリトの姿を見つけると、にっこりと笑いながら岩風呂へと近づいてきた。

両耳が長くぴんと尖っている様子を見るに、今日は《ＡＬＯ》で使用しているインプ族のアバターでログインしているようだった。

彼女のバスタオル姿は《ＳＡ：Ｏ》で一度だけ拝み、その下に隠されたしなやかな肢体はこの空間で何度と無く貪った事があるが、その健康美はユウキ自身が持つ溌剌さと相まって毎度毎度興奮を催させる。

「課題はどうだった、ユウキ」

「アスナ先生のおかげでサクッと終わっちゃった。キリトの方は順調……じゃ、無いんだっけ」
「まあな。……そういえば、アスナは？」
「アスナなら、さっきシリカに呼ばれて、《ＡＬＯ》に行ったよ。

なんかねー。クエストの進行に完成度の高い料理アイテムが必要らしいんだけど、シリカやルクス達の料理スキル熟練度じゃどうにもなんないんだって」
「なるほどな……。確かに、アスナの手を借りる必要があるな。それは」

体を起こしたキリトが岩の湯船の中で座り直している間に、ユウキはコンソールウィンドウを呼び出し、ストレージ内に格納していた木製の湯桶をオブジェクト化。岩風呂のそばにかがみ込んで湯を汲み入れたあと、ユウキはそのまま自身の装備解除ボタンを押した。

白い薄布が一瞬で消え去り、晴天の元に露わとなるのは彼女の裸身。夜明け前の空を思わせる髪色と見事なコントラストを生み出す、眩しいほどに白い肌。普段は金属製のブレストプレートと少年っぽい雰囲気に隠されてわかりにくいが、存在をしっかりと自己主張しているバスト。細い脚の間から見え隠れする秘奥には、どうやら体毛は存在していないようだった。
「――むー。キリトの、えっち」
「な、なんだよいきなり」
「だって、ボクの方じーっと見てたでしょ？　もう、えっちなんだから」

木桶の湯を何度か体に掛けながら、ユウキは挑発的な笑みを浮かべてキリトを揶揄する。意趣返しのつもりか、ルビーのような紅の瞳から放たれた視線がキリトの体を舐めるように奔った。

にんまりと笑う彼女に片手を上げて降参の意を示し、キリトはユウキを己の側へと手招く。
「えっちで悪かったな。……ま、とりあえずこっちに来ないか。ユウキ」

「もちろん！」
　ほとんど透明といい湯に爪先から身を浸らせたあと、ユウキは湯の中を進んでキリトの側まで近づく。彼女はそのまま正面から向かい合う位置へ陣取り、おもむろに両手を伸ばしてキリトへ抱きついた。
　なぜか小動物の求愛行動を想起させる彼女のムーブを、拒む理由は特にない。キリトは両腕を彼女の小さな背に回して引き寄せ、そのまま己の脚の間へと座らせた。
「……ほんとにえっちだね、キリトは」
　下腹部に当たる男の象徴――剣よりも固く、湯よりも熱いその感触に頬を染めながら、ユウキは今更照れたように呟く。
「あのな……ユウキとこんな状況になったら、俺じゃなくても大抵の男はこうなるって」
「そうなの？」
「そうそう。それに、こんな近くで、そんな可愛い顔しながら上目遣いでじーっとこっちを見られたら――」
「――キス、したくなっちゃう？」
　その問いかけに、キリトは黙って首を縦に振る。
「やっぱり、そうなんだ……実は、ボクもおんなじ気持ちだったりして」
　そう言って、ユウキは両の瞼を閉じ、唇をゆるゆると突き出す。彼女の細い腰に手を回し、そっと抱き寄せたキリトは、そのままユウキの唇を優しく奪う。
　たっぷりと時間をかけて唇と唇を触れ合わせ続けたあと、餌をついばむ小鳥のように軽いバードキスを何度も行い、そしてまたゆったりと唇を重ねる。不規則なリズムで与えられるキスの雨に、ユウキは時折微かな笑い声を漏らす。愛らしいユウキの後頭部に空いている手を宛てがいながら、キリトは彼女の頬、そして額に唇を触れさせる。
「ひゃふっ……。くすぐったいよぉ、キリト」
「いやじゃないだろ？」
「うん……♥　こういうのも、好きかな。でも、やられっぱなしはヤだから……おかえし♥」

キリトに抱き寄せられ肩まで湯に浸かったまま、ユウキは下腹部へ片手を伸ばすと、そこに押し当てられている長大な肉棒に触れる。ほとんど力を入れない、肌の感触だけを伝えるかのように緩く握った右手で肉棒を包み込み、そのままゆっくりと上下させる。

力も、速度も、雄の放精を促すほどの物ではない。せいぜい、『くすぐったい』というのが関の山だが、ユウキなりのおかえしとしてはちょうどいいくらいだろう。

「……ね、キリト。答えたかったらでいいんだけど」

「ん？」

「ボク達が使っているアバターって、リアルのボク達を元にしてるけど、１００％リアルのままってわけじゃないよね」

「そうだな。アバター自体ある程度ランダム性もあるし、髪の色とか、カスタマイズできる要素も結構あるからな……」

小さな手で大きな一物を刺激しながら、首筋をぺろぺろと舐めてくすぐってくるユウキの舌がキリトを愉しませる。そんな中、キリトが思い返すのは《ＧＧＯ》で使用したアバター。それも普段使用している方ではなく、死銃事件を追うためにこっそりと『ＢｏＢ』へ参戦した際に使用したアバターだ。

風になびくほどに髪が長く、女性と見間違われるほどに中性的なあのアバターは菊岡が用意した物ではあるが、アレが一番リアルとの差異が大きいのは間違いないだろう。

また、望んでそうしたわけではないキリトを除いたとしても、《ＡＬＯ》でのアスナや、リズ、リーファなどのようにリアルと違う髪型や髪色を楽しんでいるプレイヤーは多い。シリカやシノン、アリスのケットシー組に至っては現実世界ではまずありえない猫耳や尻尾といった物までついている。

アバター生成時のランダム要素如何によっては、たとえば現実世界では長身の人間が、仮想世界ではその半分程度の身長しか無いチビアバターを使用する可能性すらある。もっとも、キリトが知る限りそういった差異の大きいプレイヤーに出くわしたことは無いが。

「キリトはさ、アバターをいじったりとかしてないの？　ボクは髪を

伸ばしてるけど」
「そうだな……特に、何かしたような憶えは無いな。ここでも、他のＶＲＭＭＯでも」
「え。……じゃあ、これも……リアルのまんま？」
　自らの手で触れ、そして下腹部に押し当てられている肉棒と、その持ち主であるキリトの顔を交互に見つめながら、ユウキは半ば唖然とした表情で呟く。
「そうだよ。……というか、そこだけ何かしてると思ってたのか。おい」
「えへへ……まあ、ちょっとだけ。ほら、あの時みたいな事、自分にもしてるのかなーって思っちゃって……」
「あの時？」
「ほら、ボクとアスナとキリトの３人でした時……って言ったら、わかる？」
「えーと……思い当たる節がありすぎて、どれの事だか正直わからないんだよな……」
「うっっっわー……やっぱり、キリトはえっちすぎだよ……」
　恥ずかしがりつつもそれに嬉々として参加していたユウキが、さらりと自分のことを棚に上げているのは無視しつつ、キリトは己の記憶を手繰り寄せるようにして辿る。
　このいたく愛らしい黒髪少女が言っているのは、田舎に伝わる豊作祈願の儀式という体で、巫女服姿のユウキとアスナに一晩中種付けを行った時のことだろうか。
　それとも、『キリトくんの部屋でまったりお家デートがしたいなー』と二人に言われたのでシノンに倣って仮想空間内に自室を再現してみたら、実際は部屋に入るなり興奮した二人に押し倒された時のことだろうか。
　あるいは、アラビアンな踊り子の衣装を身にまとった二人を金貨がぎっしり詰まった袋で買い上げ、淫靡な舞と腰使いを散々堪能してしまった時のことかもしれない。
　もしくは――と、じっと記憶を遡っていたキリトの腕の中で、ユウ

キはふるふると首を横に振る。
「ほーら、アレだよ、アレ。《ＡＬＯ》の種族間戦争ごっこ。スプリガンとインプの間で戦争してたら、こっそりスプリガンと同盟を結んでたウンディーネに急襲されて……ボクがアスナにつかまっちゃった、アレ♥」
「ああ、あの時にか……。確かに、アバターをちょっといじったりできるけど、自分には使ってないぞ」
「へー、そうなんだ。でも、ボクとしてはかなり楽しかったよ、アレ。大人の《ＡＬＯ》って感じでさ」
恍惚の笑みと共にそう告げたあと、ユウキは再び目を閉じてキスをねだる。
肯定の返事の代わりに、キリトは再び彼女の唇を奪う。ただし、此度はより深く、より濃密に。舌を挿し入れ、ユウキの口内で彼女の舌と絡ませ遊ぶ。
やがて離れた唇と唇の間には、唾液の端が幾本もかかり、そしてぷつりぷつりと途切れ落ちていく。
「ボク、キリトとするキスが一番好き……かも。心の中が、ぽかぽかーってするんだよね」
「疑問系なのはおいておくとして……じゃあ、二番目は？」
「うーん……それ、結構難しい質問なんだよね……。アスナとするキスもいいんだけど、シノンにキスされた時の、腰のあたりががふにゃふにゃになっちゃう感じも好きだし……」
「ほほう。人のこと、えっちだなんだって言っておいて……このキス魔め」
「えへへっ。ごめんね、キリト」
悪びれずに笑うユウキは、キリトの鎖骨の辺りに唇を触れさせ、キスマークができそうな程に強く吸い付く。
こういう関係になってからだいぶ時間が経ったせいか、女性同士による睦み合いはそれほど珍しい光景ではなくなった。個人差はだいぶあるが、ユウキはどちらかというと同性とのじゃれ合いに抵抗感がほとんど無い方だ。少なくともキリトにはそう感じられる。

ただ、ユウキも他の女性陣もしっかり一線は引いている。同姓間での性的な行為は、あくまで『いずれキリトに捧げる体をより淫らに育てあげながら、自らがキリトのオンナであることを再認識させる行為』であり、そのスタンスを崩さないように注意している。ユウキ曰く、プレイや調教の一環という範疇から抜け出さないようにしている、のだとか。

「なあ、ユウキ。だいぶ長く湯に浸かってるし、一旦上がって、『休憩』しないか？」

「気が合うねー。ボクもちょうど、キリトと『休憩』したいなーって思ってたんだよね……♥」

意味ありげな声音で同意を示したあと、ユウキは頬擦りするようにしてキリトの胸板に頭を寄せる。紅玉色をした瞳をキリトが見つめ返せば、ユウキは小さく首を縦に振り、キリトにその身を委ねた。

彼女の小さな体に両腕をしっかりと回したキリトは、ユウキを抱きかかえたまま岩風呂の中で立ち上がった。

「わわっ。意外と力持ちだね、キリト」

「だろ？　まあ、内部パラメータで判定されてるだけだから、あんまり胸を張れた話じゃないんだけどさ」

「確かに。……あ、でも、こないだ聞いたよ？　リアルでも、みんなのこと軽〜く抱っこできるくらいには筋力をつけるんだーって、リーファに教わって色々トレーニングしてるんでしょ？」

「なっ……だ、誰から聞いたんだよ、それ」

「もっちろん、リーファだよ。で、もうみんな持ち上げられるようになった？」

「まあ、どうにか……アリス以外は」

体重、なかでも特に女性のソレに関する話をするのは大変失礼な事であるとわかった上で、キリトは気まずそうに答える。

若干ではあるが、アリスは——重い。

その体を形作るのが、ラースで開発されていたマシンボディ・通称『ニエモン』をベースに、アリスの外見に合わせたカバーユニットを被せたものなのだから当然と言えば当然なのだが、重いものは重いの

だ。

とはいえ、歩くだけで道路にヒビが入るようなレベルではなく、せいぜい日頃の業務で鍛えた宅配便スタッフであれば一人でぎりぎり運搬できる程度。ならば、キリトに持ち上げられないという道理はあるまい。

パワードスーツを作った方が早いのではないか――という脳の片隅から聞こえてくる某教授の囁きを無視しつつ、キリトは日々の合間を縫っては己の体を鍛え続けていた。鋼鉄の体に収まったアリスに、しょぼくれた顔をさせないために。

「頑張ってねー、キリト。アリスだけ仲間はずれなんて、かわいそうだもん」

「ああ、そのつもりだよ。

――もちろん、ユウキだって、いつかちゃんと抱き上げてやるからな」

「あははっ。それはすっごく嬉しいけど……何年か待ってもらわなきゃいけないかなあ。キリト、それまでちゃんと覚えてられる？」

「自慢じゃないが、記憶力の弱さには自信がある。……けど、忘れないよ、絶対に」

「そっか。じゃあ……ボクも頑張るよ、キリト。もし忘れてたら、ほっぺたつねってやる～」

すでにつねるつもりでいるのか、ユウキは人差し指を伸ばし、キリトの頬をぺしぺしと軽く叩いた。

――かつて、《ＡＬＯ》内で時間流の乱れが発生し、『バーストリンカー』達がいる約２１年後の時間軸と、現在の時間軸が混濁するという異常事態が発生したことがあった。幸いにも事件は一応の解決を見せ、時間の乱れも修正された。そして、ユウキとアスナはその折、あるバーストリンカーから興味深い情報を得ていた。

不治の病を患い、幼い頃からメディキュボイドを使用していたある患者が、バーストリンカー達のいる時代に回復をみせた――そんな情報を。

無論、それがそのままユウキの生存を意味するわけではない事は誰

もが承知している。バーストリンカー達がいた未来とこの時代が真っ直ぐ繋がっている可能性は高くないし、そのメディキュボイドがユウキの使用している物とは限らない。現に、今ですら2号機が存在しているのだ。性能と有用性を鑑みれば、3号機、4号機と増えていかない可能性の方が低いだろう。それに、現在動いている例の計画の事もある。

それでも、たとえ、そうだとしても――それは十分すぎる程に有益な、未来からの贈り物だった。

「今日は……こっちで休もうか、ユウキ」

露天風呂の端にある一角。天然木の無垢材を惜しみなく使った板敷きの休憩スペースに、キリトは足を踏み入れる。屋根に覆われたその休憩スペースには、デッキチェアに似た長椅子数脚とサイドテーブルが置かれている。近床の一部には厚いタオル地の布が広く敷かれており、ゆったりと寝転んで『休憩』することができるよう配慮されていた。

設計時点で計算されていたのか、内部には周辺の湯船から立ち上る熱気がほんのりと流れ込むようになっており、急な湯冷めを喰らう心配は無さそうだ。

「……お外っていうのも、悪くないよね」

厚い布の上に腰を下ろしたユウキは、キリトに向けて微笑みかける。

上気した湯上がりの裸身。その玉のような肌の上を滑り落ちていく汗の雫。人形のように可愛らしい顔立ちと、くりくりとした紅の瞳。入浴用にまとめていた髪を解けば、ユウキの持つ少女らしさが一気に解き放たれ、キリトの劣情をより一層刺激する。

「あははっ。そんなギラギラした顔しなくても、ボクは逃げたりしないよー。キリト」

「……そんな顔してるか？　俺」

「うん、してるしてる。……ま、ボクもキリトのこと言えないんだけどね」

手近な場所にあった枕を背もたれ代わりに上体を倒したユウキは、

挑発的に笑いながら下半身を突き出す。
　両脚をはしたなく広げながら腰をくねらせ、正面にいるキリトへ向けて自身の脚の間をたっぷりと見せつける。とろりとした女体の蜜が溢れ出す、一本筋が通ったスリット部。まぐわいの気配に興奮してひくひくと震える小さな窄まり。飢えた鳥を誘い交配する花木の如く、秘め隠すべき場所を色香と共に晒す。
「病院のＶＲルームだと、さすがにこういうことはできないでしょ？だから……溜まっちゃうっていうか」
　キリトの、そして反り返り屹立する雄の象徴に視線を向けながら、ユウキは自らの股座に手を這わせる。
　割れ目の表面を撫ぜる細い指先に、溢れる情欲の滴りを纏わせながら、己の膣内に指を少しずつ差し入れていく。くちゅり、くちゅりと粘ついた水音が上がる度、ユウキの口から熱の籠もった吐息が漏れる。
「ん、っ……♥　キリト、さ。ボクが時々、夜中にこっそりここにログインしてるの……知ってるでしょ？」
「まあ……一応な」
　仮にもキリトはこの空間の製作者であり管理人である。万一の不正ログインに備え、ログイン／ログアウト履歴情報を定期的にチェックしている以上、誰がいつログインしたのかを知る事は簡単だった。
　特にユウキの――深夜、誰も居なくなるのを見計らったかのようにログインし、３０分から1時間ほど滞在したあとログアウトするという少し変わった履歴は否が応でも目に入った。
「じゃあ、ボクが……あふぅっ♥　こっ、こーういうことしてたのも、知ってた？」
「いや、全然」
「そうなんだ……じゃあ、教えてあげる……♥　ボクって、結構……んゅっ♥　えっちな子、なんだよ……♥♥」
　興奮するユウキの指の動きは一層早まり、股座から響く粘ついた水音は更にボリュームを上げる。
　以前、ユウキの奇妙なログイン履歴に気づいたキリトは、本人にそ

れとなく事情を聞いてみた事があった。メディキュボイドとのデータ連携に何か不備があったのではないかと気を揉んだが故の行動ではあったが、ユウキは理由を話してはくれず、妙に慌てた様子で煙に巻くばかりだった。しかし――まさか、そんな事情があったとは。

「キリトがね、みんなと、えっちしたあとのお部屋に忍び込んで……んんっ、あっ♥　ニオイを嗅ぎながらしちゃったり……♥

はっ、裸でっ、外に出たりして……ひゃあっんっんっ♥　いっぱい、おなにー……しちゃった……♥」

はあはあと荒い吐息を漏らし、時折びくりと腰を震わせながら、ユウキは貪欲に悦楽を貪る。

普段の活発にして快活な姿とは真逆の、淫靡さに満ち満ちたその姿にキリトは思わず生唾を飲み込む。それを見計らったかのように、ユウキは己の蜜壺の中より指を引き抜く。濃密な口づけを交わしたあとのように粘質の液にまみれて糸を引く指先をぺろりと一舐めしたあと、ユウキはその指先を再び股座に持っていき、自らの媚肉を左右に割り開いた。

「ほら、見て、キリト……♥　キリトと、ちゅーして……思い出しながらぐちゅぐちゅしてたら……こんなになっちゃった……♥♥」

露わになる、興奮にひくひくと蠢く薄ピンク色の肉襞。開かれた両脚の間から、もぎたての果実のようにたっぷりと愛蜜を溢れ出させるその秘所を惜しみなく魅せつけながら、ユウキは目の前にいる雄を誘う。

その誘いに一も二も無く乗ったキリトは、ユウキの体を抱きかかえるようにしながら覆い被さり、張り詰めた肉棒の先端をユウキの蜜壺に宛てがう。

「ユウキ。キスしながら挿入れるから、舌、出して」

「おっけー……♥　キスハメ、頭がぽやーってなっちゃうから……ボク、大好き♥」

小悪魔の笑みと共に頷いたあと、ユウキは目を閉じる。代わりに開けられた彼女の口に己の唇を重ね、舌を差し込みながら――キリトはゆっくりと腰を下ろし、自らの剛直をユウキの中へと沈めていく。

「――んっ♥　んんぅぅううっ♥　んっう゛んぅうんっっんんんっ♥♥♥」

潤滑油代わりに従えた愛液をまとうキリトの太い肉棒が、ずぷずぷと音を立てながらユウキの膣内を奥へ、奥へと侵略していく。そのシンプルな行為によって作り出された快感に酔い痴れるユウキの嬌声は、唇同士で繋がったままの口内で反響し、くぐもった音となって外へ漏れ出る。

女の細い指とは比べ物にならない質量と硬度によって押し広げられる産道が伝える、暴力的なまでの快樂。人前での自慰行為によって昂ぶっていたユウキの体は、キリトの肉棒が前へ進む度に与えられる快感によって何度も達し、さらなる愛液を撒き散らす。

「んぅぅうっ――ん゛っ、んぶっ！　んんっっっっっぅぅう゛ぅうっ♥♥♥」

小柄なインプの啼き声が、互いの口内に木霊する。びくびくと体を震わせるユウキを膂力と体格の差で完膚なきまでに抑え込みながら、猛る一物で深々と貫くキリトの様はもはや一種の陵辱じみている。もし、ユウキの両腕がキリトの体とより密着するために使われていなければ、レイプしているのと大差なかっただろう。

みちみちと容赦なく締め付けてくるユウキの膣内に、肉棒の先から根本までを挿入し終えたキリトは、深く繋がった状態でようやく腰を止めた。そのままユウキの四肢を抑えこんで自由を剥奪したキリトは、静かに唇を離し、肉棒が収まりきった事を言外に告げた。

「はひゅっ……あふっ♥　はーっ、はぁーっ……♥　お腹の中ぜんぶ、キリトのでいっぱい……♥」

玉の汗を肌の上にいくつも浮かべ、ユウキは劣情に満ちた吐息を繰り返す。肌と肌を触れ合わせたまま、キリトは彼女の艶やかな髪を撫で、インプの尖った耳先を弄ぶ。その心地よいくすぐったさに身を捩る事も許されないほど、がっちりとロックされた状態で組み敷かれたユウキにできることは、与えられる肉の悦びを享受する事だけだ。

たっぷりと時間をかけ、甘えたがりなユウキの狭い膣内に己の分身のカタチを覚え込ませたあと。キリトはもったいつけるようにゆっ

くりと腰を引き――そして、本格的な抽送を開始した。
「ひっ――――ッあアあ〃あぁあぁぁあぁあ〃ぁっ♥　んっ〃♥　んぉお〃おっ♥　」
　上半身はユウキに密着させたまま、腰と膝を活用して肉棒を先端ギリギリまで引き抜き、そして互いの腰が触れ合うほど深々と挿し込む。
　真上から真下へ、そして真下から真上へ。パイルバンカーを思わせる重く激しいピストン運動は、とっくの昔にキリト専用となった膣道を容赦なく穿ち貫き、大量の快楽物質を脳内に迸らせる。
　キリトの腰がユウキの股座と密着する度、どちゅ、どちゅという、過剰な水分を纏った肉同士がぶつかり合う音が響き、足裏が天井に向く程高く上げられたユウキの両脚が快楽信号に連動して震える。
「あひゅっ♥　やっ♥　らぁっ、あぁあっ♥　あ、頭、んぉ〃っ♥　あたま、なでなでしながりゃ、どぢゅどぢゅってするのりゃめぇえっ♥　ひぁっ、あっひぃいいいっ♥」
「へえ。どうしてダメなんだ、ユウキ？」
　快楽に翻弄され続けているせいで舌足らずな喋りになりながらも、ユウキはどうにかこうにか人の言葉を紡ぐ。そんな幼気な少女を容赦なく貫きながら、キリトはわざと問いかける。
「だって、らって……おっ、憶えちゃう、からぁあああっ♥　あ〃っ♥　っっっうっ♥　キリトに、なでなでさりゃたら、せっ、せっくしゅしてる時のことぉ♥　んひぃいぅっ♥　やっあっ♥　おぅ、ふっ、お、おもいだしぢゃうかりゃあああぁ♥♥」
「そうか。じゃあ……いっぱい撫でてやるから、ちゃんと覚えるんだぞ、ユウキ」
「ひぁ――あっ、やあああっぁあああ〃ぁあっ♥♥♥」
　最初から覚え込ませる為にそうしていた――とは噯にも出さぬキリトは、ユウキの髪を手ぐしで梳き、慈しみの籠もった手付きで撫でる。
　無論、その最中も肉棒の抽送は止めず、むしろより激しさを増しながら、ユウキの感じる部分に擦り当てていく。頭一つ分小さなユウキ

を抱え込むように抱きしめながら、頭を撫でられる感触、キリトの声、匂い、触れ合う肌と力強い腕の感触――そのどれか一つからでも即座に思い出せてしまえるよう、ユウキの体と心に交合の肉悦を叩き込んでいく。

そんな逞しい雄との交尾に歓喜するユウキの肉体は、キリトとの間に子を為さんと、吸い付くような膣道と子宮口の動きを以てただひたすらに肉棒へと媚びる。その蠢きによってキリトの射精欲求は徐々に高められ、抽送のリズムが少しずつ早くなっていく。

「あっあっあっあっ♥　あんっ、だっ、めぇぁえ♥　んんっ♥　はひゅー、ひぅううっ♥　っぅっあっ、あっ、あぁぁあ〃んぐんっ♥♥」

雌の本能とこれまでの経験から感じ取る、キリトの射精の兆候。自らの体の全てを、一瞬の快楽の為だけに使いつくされるというその事実にゾクゾクとした官能を覚えながら、ユウキは無意識の内に腕へと力を込め、キリトへとしがみつく。雄を己から逃さぬように、あるいは己が雄から逃げられぬように。

それを合図にしたかのように、更に抽送の速度を上げるキリトの雄の象徴。その感覚に翻弄され、膣内射精される事への確信に溺れながらも、ユウキはしっかりと感じ取った。

自らの内側でより一層膨張した愛しい男の肉棒が、最奥部に叩きつけられ――子宮口に密着した亀頭から、一気に精液が解き放たれる、その感触を。

「――っっっうううぅぅう♥♥♥　あ〃、あ〃っ、あ〃あーっ♥♥♥」

い、いっ、ぎゅ――あああふあぁあっあああああぁあああっ♥♥♥」

品の無い喘ぎ声と共に深く重い絶頂へと叩き込まれたユウキは、ぷしゃぷしゃと愛液を吹き散らしながら端なく達する。

ユウキの胎内を思うままに蹂躙した肉槍から放たれた、たった一人によるものとは思えない程の量を誇る濃密な精液が子宮内を満たし、雌を孕ませ専有する絶対権限を確立。キリトに抑え込まれた体勢のまま、ユウキは内側から伝えられる極上の快感を改めて記憶していく。

ぴんと張り詰めた脚とは逆に、びくり、びくりと痙攣する体。唇の端から溢れる唾液。放たれた精液が逆流すらもできないほどみっちりと蜜壺を支配していた肉棒を、キリトがゆっくりと引き抜けば、白濁した子種汁がごぷりと音を立ててようやく溢れ出す。

「はあっ、はあ……♥　んゆ……♥　き、りと……んっ、射精、しすぎだよ……♥」

「そう言われても……どうにもならない、としか。可愛すぎるユウキにも責任がある」

行為後の余韻と、独特の幸福な気怠さに包まれるユウキの隣へ、キリトが身を横たえる。

その片手はユウキの頭に沿えたまま、さらさらとした髪を指先で弄る。

「やっぱり……キリトは、えっちだ」

「そういうユウキもな」

「ふふっ、そうだよー。ボク、結構えっちな子だから……これからも、一緒に気持ちいいことしようね。キリト。

ずっと、ずーっと……ね♥」

くすくすと微笑むユウキに、しっかりと頷きを返しながら、キリトは彼女の細い体をそっと抱き寄せる。

大人しくキリトの腕の中に収まる直前、ユウキの視線が一瞬、キリトの下腹部へと向いた。

「――ねえ、キリト」

「ん？」

「質問なんだけど、さ。『お掃除コース』と『もっと休憩コース』……どっちが、いい？」

「……おすすめは？」

「ボクとしては――『もっともーっとたっぷり休憩コース』がおすすめ、かな……♥」

紅い瞳が、妖艶に微笑む。

答えを口にする代わりに、キリトは再びユウキへ襲いかかると、有無を言わせずその唇を奪った。

二人の休憩時間は――どうやら、もっと長く続くようだった。

なお、数日後。

「……っていうことが、こないだあったんだけどさ。実際どうなの、アスナ？」

「なんで私にそれを聞くのよ、ユウキ……」

「だって、アスナなら《ＳＷＯＲＤ協定》発効前に、本物を見たことがあるんじゃないかなー……って思ってさ。

やっぱりリアルのキリトも、ここと同じで魔剣クラスなの？　夜もスターバースト・ストリーム１６連撃なの？」

「――もっとすごいよ、リアルのキリトくん」

「……え？　えっ？」

「あとスターバースト・ストリームじゃなくて、ジ・イクリプス――ううん、それ以上ね」

「えええええええええっ!?」

という会話があったかどうかは、彼女らのみぞ知る。

幕間・Ｆｕｅｌ Ｍｙ Ｓｏｕｌ［▲］

人が他人を『顔見知り』というカテゴリに落とし込む時、そこには概ね二種類の意図が含まれている。

一つは『顔見知り以上の関係と言えるほどに親しくない』相手。

もう一つは『顔見知り以上の関係になりたいとは微塵も思わないが、不幸なことに顔は知っている』相手。

「……」

「……」

キリト――もとい、桐ヶ谷和人にとって、目の前に居るこの男はまさに『顔見知り』だった。主に前者の意味で。

もっとも、向こうにしてみれば後者の意味だろう。ＡＲデバイス・オーグマーを付けたその横顔が、何よりも雄弁に彼の感情を物語っている。

「では、桐ヶ谷さん。ご面会の準備ができましたら番号でお呼びしますので、こちらに座ってお待ち下さい」

「あ、ありがとうございます……」

老若男女、多種多様な人であふれる病院の待合室。

面会の手続きを済ませた和人をここまで案内してきた女性看護師は、男二人の間に漂う気まずさを無視してそそくさと仕事に戻っていく。

ここを除いて、待合室の椅子に空きは無い。かといって、どこかに立って待つというのもなかなかの不審者ぶりを発揮してしまう。選択肢が無いことを理解した和人は、背負っていたデイパックを床に置くと、公共施設などによくある三人がけ用の椅子の端に渋々と腰掛けた。

「……」

「……お前も面会か。まさか、こんな所で会うとはな」

「それはこっちの台詞だ。エイジ」

真ん中の空席を挟み、反対側の端に座る男――エイジ、もとい、後

沢鋭二。

かつて《ＳＡＯ》クリアを目指して仮想世界で剣を振るい、そして譲れぬ者の為に現実世界で刃を交えた二人の剣士は、テレビから流れるバラエティ番組の歓声と、待合室を行き交う人々の声に紛れるように言葉を交わす。

互いに因縁浅からぬ相手。共にただ前を見つめ、視線をぶつかり合わせる事はしない様からは、男二人の間に刻まれた溝の深さと埋められぬ距離が見て取れる。

当然と言えば当然だ。片や、愛する者の記憶を奪った男。片や、愛する者の蘇生を妨げた男。どう転んでも仲良くできるはずもない。殴り合いが始まらないだけマシというものだ。

真ん中の空席に気まずい沈黙という空虚な存在が堂々と居座るなか、鋭二は何かに観念したかのように深々とため息をついた。

「言いたくもないし、言えた義理でも無いが……僕は、お前に礼を言わなければいけない」

絞り出すようなその声は、険を含みながらも今までに無い程に真剣な声音をしていた。視線こそ交わさぬまま、和人は鋭二の言葉の続きをじっと待つ。

「お前には、ユナを……黒ユナを救ってもらった。しかも、二度も。今、彼女がこの世界で歌っていられるのは……たぶん、お前のおかげだ」

「そんな大したことをした覚えは、無いんだけどな……」

「アーガスの跡地に忍び込んで、旧ＳＡＯサーバーにダイブする真似までしておいてよく言う。

それに……《オーグマーⅡ》の件。あれはたぶん、お前が絡んでるんだろ？」

「……さて、何のことだか」

明確に否定も肯定もせずに、和人はただ曖昧に笑う。

拡張現実デバイス・オーグマー。ＡＲゲーム《オーディナル・スケール》と共に一大ムーブメントを巻き起こし、拡張現実ブームの火付け役となった最新デジタルデバイス。

そんなオーグマーに『内蔵バッテリーおよび給電システムの急速劣化』という不具合が発覚し、急遽無償交換対応が行われたのは二カ月ほど前の事だ。

交換後のオーグマーは、交換前のものと区別するため《オーグマーⅡ》と呼称されているが、見た目は旧来のオーグマーとほとんど変わらず、バッテリーユニット周りが交換された以外に大きな差はない――と、されている。あくまで表向きは。

旧来のオーグマーが《記憶スキャニング機能》と《フルダイブ機能》を搭載していた事を知る者は少ない。そして、悪名高き『ナーヴギア』より受け継いだその二つの機能をハード・ソフトの両面から排除し、アミュスフィア並の安全性を構築したのがオーグマーⅡと呼ばれるデバイスの実態であることを知る者となれば、もっと。

『これはあくまで独り言だが……ＡＲデバイス絡みのプロジェクトには経産省のお偉方も絡んでいてね。

面子という者があるんだよ、大人の世界には。そう簡単に何もかも明るみに出来るわけじゃない。

それに――いくら君がＶＲタカ派とはいえ、ＡＲ技術がこのまま埋もれていくのは惜しいだろう？　キリトくん』

今は亡き――という扱いになっている――菊岡が語っていたとおり、オーディナル・スケールの裏で進行していた陰謀は明るみになることは無かった。教授は表舞台からひっそりと姿を消し、オーディナル・スケールはランキング一位が実質引退状態という歪さの中にありつつも、週末になればどこかでイベントが開かれている程度には活況を維持している。オーグマーⅡ自体の販売数も未だに右肩上がりだ。

――あの事件で大きな被害を受けたＳＡＯサバイバーの一人として、そして真実を知る者の一人として、和人には何もかもを世間にぶちまける権利がある。そうすべきだ、と思ったことは一度や二度ではない。

その権利を放棄する代価として、和人が菊岡に呑ませた要求は二つ。

一つは、オーグマーが持っていた強制記憶スキャン機能とフルダイ

ブ機能を完全に排除し、今度こそ無害なデバイスとして世に送り出すこと。

そして、もう一つは――。

「『オーグマーⅡの広域分散型高速並列処理ネットワーク網を利用した、先進医療研究加速支援計画』。

……頭の固い霞が関の連中が、こんな事を思いつくはずがない」

機器にかける処理負荷が高い二機能の排除によって、大きく浮いたオーグマーⅡのリソース。そのリソースをグリッドコンピューティング基盤として活用することが、和人が菊岡を脅して実現させたもう一つの要求だった。

『分散型基盤活用最先端医療研究加速推進支援網計画（GRID Medical-research Acceleration Network Project）』。

――縮めて《ＧＲＩＤＭＡＮ　Ｐｒｏｊｅｃｔ》と称されたこの計画は、ＡＲ界隈にも一枚噛む事を狙ったレクトの技術的協力、それにオーディナル・スケールで味を占めた様々な企業による協賛を得られた事でどうにかスタートダッシュに成功し、現在も最先端医療研究を強力に後押しするツールとして活用されている。その一部に、アンダーワールドで醸成された加速世界研究技術も絡んでいるのは言うまでもない。

形の上では和人の要求を菊岡が呑んだが、実際は菊岡にも菊岡なりの目的があって和人の要求に従ったフリをしていたのだろう。加えて言えば、和人が思いつく程度の事をあの重村教授が考えていなかったとは到底思えない。

分散基盤活用の展開が斯様なまでに早かったのも、恐らく教授がサブプランとして残していた仕組みを菊岡の側で再利用したからだろう。それをわからないほど和人は子供ではなく、そしてわかっていないふりをする程度には大人だった。

基盤の稼働開始当初このネットワークを形成していたのは、日本国内のオーグマーⅡ、並びにレクトや各種研究機関の演算システムだけだった。しかし時が経つに連れ、米国、ロシア、中国、ＥＵ諸国など、世界各地に存在する高度医療研究機関が協力を表明。オーグマーⅡの世界展開と重なったことも幸いし、現在では世界規模の分散並列型

高機能ネットワークとして稼働している。
　人と人を、そして世界と世界を繋ぐ事が出来るのは、決して悪意に満ちたデマゴーグだけではないのだ。
「オーグマーⅡが――いや、ＡＲデバイスそのものが社会から排除されなかったおかげで、ユナは今も『現実の先に実在するアイドル』として生き続けることができている。
　しかも、『人命を救う研究に貢献する』というオマケつきでな」
「最後のはともかく、俺がいなくてもユナは人気者だったさ」
「モニターの向こうにしかいない、ただの偶像としてか？　そうなれば……きっと、ユナは喜ばない」
　ユナが輝くべき場所は、手の届かない彼方ではなく、手が届くかもしれない現実の先。その意見には、和人も賛同できる部分があった。
「腹立たしい話だが、僕には逆立ちしたってできなかっただろう。下手をすれば、オーグマーごとユナだって葬られていたかもしれない。だから。……感謝している」
　ぶっきらぼうにそう告げると、鋭二は再び大きなため息をついた。できることなら言わずに済ませたかった――そう考えていたのが露骨なほどにはっきりと見て取れる所作だ。それでもちゃんと礼を言うあたり、存外に律儀な男なのかもしれない。
「そうか。……まあ、俺もエイジには助けられたし、おあいこって事で」
「僕がお前を助けた？　……冗談なら、せめてもう少しマシなものにしてくれ」
「冗談？　いや、そっちこそ。
　――『アンダーワールドにダイブする真似までしておいて、よく言う』」
　和人の意趣返しは、どうやら上手く行ったらしい。重たい空気の中でも、鋭二が言葉に詰まる気配ははっきりと伝わってきた。
　アンダーワールドで人界と暗黒界、そして現実世界のプレイヤーをも巻き込んだ大戦争が始まったあの日。和人自身の意識は最後の最後まで目覚めることは無く、そこで起きた出来事の全てをリアルタイ

ムで理解していた訳ではない。
数多くのＭＭＯプレイヤーが、キャラクターデータロストも覚悟の上でアンダーワールドにコンバートし、力の限りを尽くして戦ってくれたという事実を和人がはっきりと知ったのは、だいぶ後になってのことだ。
《ラース》のスーパーアカウント『ステイシア』、『テラリア』、『ソルス』の姿でログインしたアスナ、リーファ、シノン。
《ＳＡＯ》時代からキリトと共に同じ時間を過ごしたリズやシリカ、エギルやクライン、それにフィリア、ストレアといった愛すべき腐れ縁達。
《ＡＬＯ》各種族の領主達。そして最強の剣士として名を轟かす《絶剣》ユウキと、彼女が率いるギルド《スリーピング・ナイツ》の面々。自称『多刀流』のレインはもちろん、かつてあのユージーン将軍をも下した蒼き猛雄・スメラギや、『逆二刀流』のルクス。
《ＧＧＯ》で友誼を結んだクレハ、ツェリスカ、そしてキリトより一歩先に『アファシス』を目覚めさせたあのＵＦＧ使い。更には祭と聞いて我慢できずに駆けつけた凶毒鳥・ピトフーイと、彼女に首根っこを引っ掴まれてやってきた巨漢・エム。
そしてもちろん、キリトが名も知らぬ大勢のプレイヤー達。
《ＡＬＯ》、《ＧＧＯ》、《ＳＡ：Ｏ》、《アスカ・エンパイア》。中には《インセクサイト》や、なんと《オーディナル・スケール》からコンバートしたという者まで。ＶＲ・ＡＲの垣根すらも超え、様々なＭＭＯからアンダーワールドに集った一万名を大きく超える勇士（プレイヤー）たちは、己が持つ力の全てを解放し、襲い来る悪意に抗い続けた。
圧倒的な数を誇る敵勢力の前に、多くのプレイヤーたちが傷つき、倒れてゆく中、戦線がぎりぎりの状態を保ち続け最後まで崩壊することがなかったのは、彼らの士気の高さと磨き上げられた実力はもちろんの事、顔の広いとある情報屋が各ＭＭＯ内のコネをフル活用して味方をかき集めたのと並行して、あの七色・アルシャーヴィン博士が直々に情報発信を行い、デマに踊らされて海外サーバーから流入するプレイヤーの数を抑えた事が大きく作用していた。

そんなプレイヤー達の中に――大盾とバスターソードを携え、白と紅の鎧をまとって戦った騎士がいたそうだ。その騎士は最も過酷な戦場に立ち、苦境に陥る味方のために己の体を盾（タンク）と為し、苛烈な戦いを繰り広げていたらしい。何人かのプレイヤーが話していたそんな思い出話を、和人は耳にしたことがあった。

――もっとも、戦場の混乱の中で紡がれた目撃談、その全てが真実とは限らないのは当然だ。なにせ、翼を持つ『銀色の烏』の如き戦士と、どこか『黒い蓮』を思わせる異形の剣姫の姿を見たという話すらあるくらいなのだ。見間違いや勘違いという可能性は大いにある。

「……さあ。なんのことやら」

砂を噛んだような表情で露骨に答えをはぐらかす鋭二とは対象的に、彼の頭部に装着されたオーグマーの極小ＬＥＤ部分が、何かをアピールするかのようにチカチカと瞬いた。

――オーグマーは、あくまでナーヴギアの機能縮小版でしかない。そして、オーグマーⅡへの無償交換措置に強制性は付与されていない。

もし、オーグマーⅡへの交換措置を無視した捻くれ者がいたのだとしたら。

もし、オーグマーに隠されたフルダイブ機能を解き放てるＡＩが、その隣にいたのだとしたら。

もし、そのＡＩが、和人とも面識のある者だったのだとしたら。

白銀色の髪を靡かせながら、そのＡＩはあの日のように願ったのかもしれない。

『エイジ、あの人を助けて』――と。

『番号札９６１番をお持ちの方。ご面会の準備が整いましたので、受付カウンターまで起こしください。繰り返します。番号札９６１番をお持ちの――』

「――っと、悪い。俺はもう行くよ」

「勝手にしろ」

床に置いていた荷物を持ち上げつつ椅子から立ち上がった和人は、そっけなく告げる鋭二に背を向け、病院の奥にある受付カウンターへ

と歩き出した。
次に会う機会があれば、もう少しまともに話をすべきなのかもしれない。きっと遠くない未来、いつかまたこの男と同じ戦場に立つ日が来るかもしれないのだから。
――そんな事を考えながら廊下を歩いていると、ポケットに入れっぱなしにしていた携帯端末がぶるりと振動する。一応、この廊下が携帯端末使用可能エリアであることを確認した後、和人は携帯端末を開き、新着の存在を通知するメッセージアプリを起動した。
【定期検査終わったよー。今回も結果良好！　キリトはまだかかりそう？】
【いや、もう着いてるよ。これから病室に行くから、もう少しだけ待っててくれ】
【おっけー】
ＳＤサイズにデフォルメされたユナが『待ってるよ♪』という文言と共にぴこぴこと可愛らしく動くスタンプを貼り付けたユウキに苦笑しつつ、和人は端末を再びポケットにしまいこんだ。
《絶剣》ユウキ――紺野木綿季の戦いは、今もこの院内で続いている。
先進ＶＲ医療機器・メディキュボイドを用いた２４時間フルダイブを継続しながら、多剤併用療法によって病魔の発症を押さえ込み続ける孤独な戦い。己の命を燃やしながら病に抗い続けるその過酷にして壮絶なる旅路は、現在のように一時の平穏を享受することはあっても、生きている限り終わることは決してない。
勝利のみを許される路の果て。辿り着く先に待つのは、彼女の生命そのものが尽きる終焉の日。
――そのはずだった。ほんの少し前までは。
今、彼女の旅路の果てに待つのは『死』だけではない。
遥かなりし２０世紀より数多の研究者達が心血を注いできた『ＨＩＶ』の完全除去。連綿と続いてきたその長く険しい旅路は、今ここに結実の時を迎えようとしている。
その大きな後押しとなったのは、《ＧＲＩＤＭＡＮ　Ｐｒｏｊｅｃ

t》によって世界中に構築されたネットワークによる超高速演算だ。従来行われてきた動物実験やシミュレーションに比べ、何万倍も早く、そしてより高精度な結果データを得ることを可能にした演算基盤の登場により、研究は文字通り飛躍的に進歩を遂げた。

その研究によってついに実用化の目処がたった、『ＨＩＶ』完全除去を目的とした新種の治療薬――その臨床試験フェーズ被験者の一人として、木綿季もまた志願していた。

『アスナ。ボク、出るつもりだからね』

『出るって……何に？』

『卒業式だよ、卒業式。帰還者学校の卒業式に出て、自分の手で卒業証書をもらうんだ。

だからさ……。絶対、見に来てよね？』

『――っ！　……うん、うん！　絶対、絶対見に行くからね、ユウキ……！』

『わっ、な、泣かないで、アスナ……。キリトも、見てないでなんとかしてよぉ』

『……悪い。俺も……少しだけ、泣いていいか……』

『もう、二人とも……アンダーワールドじゃ王様だったくせに、ほんと……泣き虫なんだから……』

あらゆるリスクも、うまくいかない可能性も、何もかも全て承知の上で臨床試験に志願すると決めたあの日。

《ＡＬＯ》内のあの家で、泣き出したアスナ達に釣られて大粒の涙をぽろぽろと零しながら、それでも誇り高く微笑むユウキの姿を、和人は今でもはっきりと覚えている。

それから、しばらく時間が経った。ユウキの、そしてユウキと同じく臨床試験に志願した被験者達の戦いは、今も世界中で続いている。

ＶＲＭＭＯ内とは違い、医療関係者でも無ければ研究機関に属しているわけでもない和人に、ユウキの戦いを直接サポートする術はない。ならば、精々彼女の友人として出来ることをしよう――そう決めた和人は、既に新たなプロジェクトに着手している。それこそ、現在ユウキやユイが使用している遠隔プローブを更に進化させた新シス

テム――『フルダイブコントロール式・遠隔操縦ドローン』だ。
ＶＲ空間にダイブしているユーザーの動作情報をドローンに送り、現実の世界で自分の体を動かす代わりにドローンを動作させる――発想としてはごくありきたりな物だが、和人はそこにオーグマーⅡ、そしてＡＲシステムを連動させた。
つまり、旧来の遠隔プローブに付いて回った『使用する側の自由度の低さ』をドローンの機動性を以て一気に解消すると同時に、ＡＲカメラを通すことで『使用者のアバターを視界に捉えることができる』上、オーグマーⅡの感覚フィードバック機能を応用し『フルダイブ中の使用者と触れ合う』ことすらも可能とする――予定だ。今組んでいるプログラムが完成し、ユーザーテストで合格のお墨付きを貰えれば、だが。
（……っと。早く行かないと、ユウキに怒られそうだ）
アメリカの新興ベンチャー企業『ジャンク・ユニオン』社にフルカスタムオーダーをかけ、今朝ようやく届いたばかりのＡＲシステム対応型最新式ドローン『Ｄｙｎａ―Ｄｒａｇｏｎ』が入ったデイパックを担ぎ直す。
ユウキのあの機敏さにしっかりついていけるだけのパラメータ設定を今日こそ完了すべく、和人は病院の廊下を再び歩き出した。

負け犬とは常に惨めなものだ。たとえそれが仮想世界であっても、あるいは現実世界であっても。自らの野望を真正面から打ち砕いた相手に、文句の一つも言ってやるどころか、礼まで言う羽目になってしまうのだから。
都内でもトップクラスの設備が揃った大病院。特別な患者用の個室エリアとして用意された上層階に向けてエレベータが登り始めても、エイジ――もとい、後沢鋭二の心は晴れはしなかった。
二刀流。解放の英雄。黒の剣士。
仮想世界界隈では今や伝説の存在に片足を突っ込んでいるあの男

も、現実世界ではただの青年。力も、技も、《オーディナル・スケール》のランクも、抱えた想いの重さも全て己の方が勝っていた。負ける道理など一つたりとてありはしなかった。

――だというのに。あの男は鋭二を真正面から打倒し、重村教授の悲願を結実寸前で打ち砕いた。

不思議と『憎い』とは思えなかった。

ただ――ひたすらに『悔しい』。それだけが、ワインボトルの底に溜まるオリのように心の内に沈み込んでいく。

「――素直じゃないね、エイジは。お礼くらい、笑顔で言ったらいいのに」

「いきなり人の後ろに立つのはやめてくれ、ユナ。心臓に悪い」

「驚いてないくせに。そういうトコも、素直じゃないんだから」

自分以外誰も居ないはずのエレベータの中、背後から聞こえてくる聞き慣れた彼女の声。

透明感という言葉をそのまま音に乗せたかのような美声にあえて振り向かずに応じてみれば、不満げに頬を膨らませたユナが、わざわざ足音のＳＥまで響かせながら、鋭二の正面までやってきた。

「今日はイベント用ＰＶの撮影だって言ってなかったか？　ユナ」

「そうそう。でも、機材にトラブルが起きちゃったんだって。だから、エイジの顔を見に来ちゃった」

現実世界と、仮想世界の間――頭部に装着したオーグマーが映し出す拡張現実に存在する歌姫は、オフの時間帯は鋭二のところに遊びに来ることが多い。大切な人の為に、大切な君を生贄に差し出そうとしていた――その事実を知って、尚。

重村教授が隠遁した今、彼女の身柄――というのは適切かどうか不明だが――は、カムラ社、そして《アリオルーム》という芸能事務所の管理下にある。その二社が、ユナのコピーＡＩを複数作成し同時運用するという愚行に走ったせいで、自己同一性を基盤とするユナの自我は崩壊寸前まで追い詰められた事があった。

それを食い止めるために、鋭二は協力者――よりにもよってあの男――と共に旧《ＳＡＯ》サーバーへとログインし、どうにかユナの自

我崩壊を阻む事に成功した。
　当然、カムラ・アリオルーム両者には事の顛末を話し、ユナコピーの運用を止めるよう話を付けに行ったのだが、重村教授の庇護を失った鋭二の言葉を、金とコネと計算で動く企業が聞くはずもない。
　このままでは、またユナ自身が崩壊してしまうのではないか――忸怩たる思いを抱える鋭二の前に、救いの手は唐突に現れた。天に浮かぶ鋼鉄の城でも、異次元からでもなく――地の底にある加速された世界から。
　世界初の真正人工知能・アリス。
　彼女の存在を世に知らしめるキッカケとなったあの記者会見で、一人の記者が『オリジナルＡＩとコピーＡＩの同時運用についてどう考えるか』と質問を投げかけた。具体名こそ出さなかったが、それがユナとユナコピーの事を指していたのは言うまでもない。
　その質問に対し、アリスは『どう控えめに言っても良心的とは言い難い』旨を己の言葉として返答し――そして、炎上した。
　アリスが、ではない。
　アリオルームが、である。
　公式ページは3日に渡ってダウンし、オーグマー内外を問わずＳＮＳにはアリオルームへの批判が殺到。しかもそのタイミングで、アリオルーム社長が以前出演していた番組で『ＡＩの同時運用における効率性イズメイクマネー＆パワー』だの『危険性は実際少ない』だの『バグったら潰す。ディスイズノーリスク』だのとつらつら語っていた動画が発掘された事がトドメとなり、アリオルームはユナの複数同時運用を即時停止するコメントを出した。
　かくして、一つに統合された黒ユナは、今日も今日とて拡張現実世界での生を謳歌している。暇をみつける度に鋭二をからかいに来るのは相変わらずだ。
　好事家の間では『ユナ派』『アリス派』『《ＳＡ・Ｏ》でたまに見かける小さくて可愛いチュートリアルＮＰＣ派』の三派閥が形成されているという噂も聞いたことがあるが、鋭二にしてみれば『バカらしい』の一言に尽きる。

ユナが一番に決まっているではないか。
「ねー、ねー、エイジ。たまには、エイジの方からあたしに会いに来てよ」
「……僕が行っても、門前払いにされるのがオチじゃないか？」
「そこは大丈夫。あたしが『エイジが来たらすぐにあたしの所に通してね』って、スタッフさん達にちゃーんと言っておくから」
「いや……それはそれで、かなりまずい気がするが……」
アイドルが同業者でもない一人の男に会いたいと言ってしまうのは、このご時世においても色々問題なのではないだろうか。かといって、鋭二が会いに行かなければ、不満を溜めたこのおてんば姫が何をやらかすかわかったものではない。
いずれは恥を忍んで顔を出さざるを得ないだろうが、その時にはユナに面倒がかからないよう、カムラにいる知り合いにそれとなく話を通してからにしよう――そんな事を、鋭二は記憶の片隅に留め置いた。世界初のＡＲアイドルに、妙なスキャンダルが出回るのは向こうも望まないだろうから。
「あたしがいーったらいーの。――って……」
「どうしたんだい、ユナ？」
「機材、もう直っちゃったんだって……。スタッフさん達が帰ってきて、って言ってる。
……あーあ、つまんないなー」
廊下の床面を爪先でぐりぐりと弄りながら、ユナは露骨にしょぼくれてみせる。頭を下げて視線を床に向けつつも、時折何かを期待するような上目遣いの視線を、ちらりちらりと鋭二の方へと向けてくる。
どこでそんなスキルを覚えた――いや、『誰に教わった』のか。即座に犯人の目星を付けつつ、鋭二はいつものように彼女の頭に手をあて、眩いほどにつややかな白銀色の髪を優しく撫でた。
「ユナ。君を、そして君の歌を待っている沢山の人達の為に……もうひと頑張りしてくれないか」
「……エイジも？　エイジも、あたしの歌を待っててくれてる？」
「ああ、当たり前じゃないか。君のファン第一号だぞ、僕は」

鋭二がそう言った途端、ぱっと頭を上げたユナの顔には、華やぐほどにまぶしい笑顔が浮かんでいた。彼女のこの笑顔を見る度に、ユナを喪わずに済んだ事への喜びが胸を満たし――彼女を贄として捧げかけた罪の痛みが、細剣の鋒の如く己の胸を刺す。

その笑顔を向けられる権利が、こんなにも弱く愚かな己にあっていいのだろうか？

「そういうことなら、頑張らないと！　サイッコーのお仕事してきちゃうから、期待しててね！　エイジ！」

「ああ、期待してるよ。ユナ」

「終わったらまた遊びに来るから♪　それじゃ、またね！」

すっかり上機嫌になったユナは、ぱたぱたと手を振りながら霞のように消えていく。今頃はもう仕事場に辿り着き、いつもの明るさを振りまいていることだろう。

彼女のモチベーションを回復させられた事に安堵しつつ、鋭二は一人廊下を歩む。

――埃一つ無い清潔な道の奥に、目的地の病室はあった。個人情報保護の為か、病室の前の表札に入院者の名前は書かれていない。そこに誰が居るかを知るには、オーグマーのようなＡＲ機器を通し、なおかつ装着者が特別な許可を得ている必要があった。

たとえば、今の己自身のように。

「――僕だ」

二度ノックしたあと、それだけを告げる。わざわざ名前を名乗らなくとも、扉の向こうにいる者なら声だけで誰なのか察してくれるし、声紋認証システムは正常に起動する。

事実、オーグマーの小型スピーカーから微かなＳＥが響くのと同時、起動した声紋認証システムが扉の前に『入室可』を示す緑色のＡＲアイコンを表示させた。

ふっ、と軽く息を吐くことで緊張を緩めようと努力したあと、鋭二は病室の扉を開けた。

「ごめん、遅くなった。頼んでた品が時間通りに届かなくてさ」

青空の見える大きな窓から、燦燦と降り注ぐ陽光に照らされる広い

個室。白を基調としつつ、どこか高級感を漂わせるその部屋は、たった一人の〝眠り姫〟の為に捧げられたもの。その〝眠り姫〟の玉座であるベッドは、扉からの視線を遮る白いカーテンによって隠されていた。

頼まれていた品が入った手提げ袋を持ち直し、後ろ手で扉を閉めなおしたあと。返答の声が無いことを訝りつつ、鋭二はカーテンを避け、〝彼女〟が身を横たえるベッドの側に立った。

「……？」

そこにいたのは、鋭二が想像していた通りの女性ではあったが、その様相は想像とは幾分異なっていた。

薄青色をした滑らかな病院着に身を包みながら、ベッドの上に仰向けに横たわる彼女。その頭部にはまっているのは――フルダイブＶＲ機器・アミュスフィア。今もなおフルダイブ中なのだろうか、その胸は呼吸に連動してかすかに上下しているものの、鋭二の入室に対しては何のリアクションも起こさない。

下腹部のあたりで重ねられた綺麗な両手。フルダイブする直前まで使っていたのだろうか、その傍らには電源が入ったままのタブレット端末が一つ、無造作に置かれていた。不思議と画面はロックされておらず、起動状態の電子書籍アプリが一冊の絵本の表紙を表示している。

「――『眠れる森の美女（スリーピング・ビューティ）』？」

絵本のタイトルが、無意識に口をついて出た。

皮肉めいたタイトルを前にして怪訝な表情をしていることを自覚しつつ、鋭二はタブレットをスリープ状態に落とすと、ベッドサイドに置かれていた面会者用の椅子に腰かける。

「……」

ＶＲヘッドセットを装着したままベッドの上に横たわり、死んだように眠る彼女の姿を見るたび、鋭二は内臓を鉄の刃でかき回されるような痛みを覚える。

実際、そうされた方がまだマシだっただろう。体に負った傷ならいつか癒える。神経を走る痛みは薬で誤魔化せる。

しかし、心に負った傷は――天に浮かぶ鋼鉄の城で彼女を守れなかった弱さと、彼女を取り戻す為に現実世界で為した悪鬼の所業を思い出す度に感じる、この重く鋭い痛みをごまかしてくれるような薬など――何処にも存在するはずない。

（まあ、しょうがない……。今日は、帰るか）

手提げ袋を丸ごとサイドテーブルの上に置き、鋭二は椅子から立ち上がった。ふと、彼女に少しだけ触れて、この名残惜しさの慰めとしてもいいだろうか――心の中で鎌首を擡げた欲望を、しばしの逡巡の後に振り払う。

一瞬でもそんな誘惑に駆られてしまった己自身に呆れながら、鋭二はベッドに背を向けた。

「――起こしてくれないの？　エーくん」

背後から聞こえてきた声に、鋭二の心臓がどくりと音を立てて高鳴る。その一瞬で、出口に向かうはずだった脚は完全に停止した。

どうやら、入室してからずっと揶揄われていたらしい――そんな事にやっと気づき、気まずい思いを抱きながら鋭二は再びベッドの方へと向き直った。

「おはよ、エーくん。５秒ぶりかな？」

アミュスフィアを額のあたりまで持ち上げ、悪戯っぽい笑みを浮かべる〝眠り姫〟――重村悠那が、鋭二を見つめていた。

「――おはよう、悠那」

見事に引っ掛けられた気恥ずかしさを誤魔化すように、前髪をかきあげながら鋭二は再び椅子に腰を下ろす。

その様子をにこにこ顔で見届けたあと、悠那はアミュスフィアを外してオーグマーⅡを付けなおす。そしてベッド脇にあるリクライニング操作ボタンを押して、分厚いマットレスごと上半身を起こす。ちょうど、鋭二と目線の高さが同じになるように。

「全く……狸寝入りができるくらいには調子が良さそうで安心したよ。悠那」

「エーくん、もしかして……怒ってる？」

「これくらいの事で怒ったりしないよ。……まあ、少しばかり呆れて

はいるけど」
　ため息をつく鋭二に、悠那は両手を合わせ、『ごめんね』と言い添えながら詫びる。それにウィンクまで付けられてしまっては、鋭二はもう何も言えない。
　元より、悠那を問い詰める気はほとんど無かった。代わりに、もっと大事なことを確認する。
「まあ、それはともかく……本当に体調は大丈夫なのか。悠那」
「うん。そっちは本当に大丈夫。先生にも『リハビリをとてもよく頑張っていますね』って褒められちゃった。すごいでしょ？」
「そうか……それなら、いいんだ。安心した」
「この調子なら、１年くらいでどうにかなりそうなんだって――歩けるように、なるまで」
　部屋の隅を見つめる悠那につられ、鋭二もまた同じ場所――そこに置かれた車椅子を、見つめる。２０世紀からほとんど姿を変えていない、軽量アルミフレームにゴム製の車輪をつけた躯体――それが、今の悠那の脚代わりだった。
　世界初のフルダイブＶＲ機器にして、後に数多の人間の命を奪った悪魔の機械・『ナーヴギア』。フルダイブＶＲＭＭＯ《ソードアート・オンライン》の発表と同時に爆発的な人気を得たその機器が、凄まじいまでの品薄となった事は言うまでもない。高額転売を目論んだ一部のど阿呆共が、２１世紀に作られた化石のような転売規制法に引っかかって次々にお縄となった事で転売市場すら壊滅した。
　故に、入手できた者は、ベータテスター、もしくは凄まじい強運――あるいは不運――の持ち主か、あるいは『開発サイドに強力なコネを持つ者』に限られた。
　そして幸運なことに、悠那の父にして、アーガス社外取締役である重村教授は、まさに『開発サイドに強力なコネを持つ者』だった。娘にいい格好をしたがった彼は、権力をフルに活用してナーヴギアと《ＳＡＯ》の入手を急ぎ、結果的に二台のナーヴギアを確保することに成功。
　そして、悠那と鋭二は揃って《ＳＡＯ》の虜囚となり――悠那は、死

んだ。

《ＳＡＯ》における死。それ即ち、現実における死であることは言うまでもない。では、その確実性を担保しているものは何か？　それは『ナーヴギア』――より正確に言うならば『ナーヴギアに搭載された超高圧電磁パルス発生システム』である。

《ＳＡＯ》での死を現実の死たらしめているのは、仮想世界の剣や怪物共ではなく、現実世界に存在する悪魔のような機構なのだ。

結論から言えば、重村悠那が使用していたナーヴギアには不具合があった。

重村教授がどうにかこうにか入手したナーヴギアは、小売店輸送時の不手際で破損した物や最終検品時に弾かれた物を工場で修復したもの――『リファービッシュ品』などとも呼ばれる、完全な新品とは言えない類の品だった。

アーガスにナーヴギアの製造・修理を委託されていたとあるファクトリーは、実に丁寧な修理を行った。アーガスより渡された設計仕様書をしっかりと吟味し、そこに書かれている仕様を正確に理解。新品同様の状態まで修理を終え、アーガスの要求通り重村教授宅に配送した。

故に、ファクトリーサイドのスタッフに一切の瑕疵は無い。たとえ、ナーヴギアに茅場以外誰も知らない殺人システムが組み込まれていたとしても――もっと言うなら、その殺人システムの出力を極秘管理する繊細なパーツにわずかな不具合が残っていることを発見できなかったとしても、誰に彼らを責める権利があろう？

仮想世界のあの牢獄で、ユナのＨＰが尽きたきっかり１０秒後――現実世界で、ナーヴギアが重村悠那の脳を焼いた。

しかしその出力は、彼女の脳に大きなダメージを与えこそすれ、生命活動を停止するにはわずかに足りなかった。

それから、しばらく後の事になる。《ＳＡＯ》第１００層が突破され、失意のうちに生還したノーチラス――もとい、後沢鋭二が、『重村悠那が植物状態になって生きている』事を知ったのは。そして、重村教授が『ＳＡＯサバイバーの記憶を活用した重村悠那復活プロジェク

ト』を持ち掛けてきたのは。
全てを喪った絶望の中、鋭二に齎された微かな希望――それが茅場が為したことと同様の悪魔の所業だと知った上で、鋭二は喜んで悪魔に魂を売った。パワードスーツをまとい、悠那を救わなかった全ての者に刃を向ける復讐鬼となる道を選んだ。
嗤いながら多くの人間を傷つけ、狂喜と共に記憶を奪い続けたその修羅道の果てに――敗北した。どこにでもいる、ただのゲームプレイヤーに。
――悠那が目を覚ましたのは、それから一か月ほどが過ぎた後の事だ。
その詳しい理由は、今でも分かっていない。
ＳＡＯサバイバーからかき集めたユナの記憶の断片や、悠那の人格をベースに作られたモジュールである黒ユナの活動データを試験的に幾度か転写した事が脳神経の活性化に繋がり、当初の想定よりだいぶ遅れた形ので覚醒を誘発したのではないか――隠遁する直前、重村教授はそんな類推を残していった。
もっとも、鋭二にしてみれば理由などどうでもよかった。悠那が生きて、そこにいる――その事実さえあれば。
たとえ、目覚めた彼女が歩行障害を患っていたとしても。
そして、己が為した罪の全てを、彼女に知られてしまうのだとしても。
「その……リハビリは、辛くないのか。悠那」
「大丈夫大丈夫。まー、確かに楽じゃないけど……でも、エーくんが思ってるよりずっと楽しいよ。
新しいリハビリ友達もできたし」
「友達？」
「そうそう。紺野さんっていう女の子なんだけど……もうね、すっごく可愛い子なの！
ＶＲリハビリルームで時々会うんだけど、『天真爛漫』って言葉を絵に描いたような子でね。会うたびに、なんだかこっちまで元気をもらえちゃうんだー」

「悠那がそこまで言うなんて……相当だな」
フルダイブシステムが医療の現場に活用されるのは、今や珍しい光景ではない。
特に導入が素早かったのはリハビリ分野だった。肉体の動作困難を抱えた患者を、一度ＶＲ空間にフルダイブさせ、そこで実際に手足を動作させることで四肢を動かすイメージを具体化させる――そんな手法は、今や各地の病院で実際に利用されている。
悠那がこの病院で、歩行トレーニングと並行して進めているのも、まさにそういったＶＲ空間リハビリの一つだった。
「それで、エーくん。頼んでた物、持ってきてくれた？」
「ああ。これでいいんだろ？」
鋭二がサイドテーブルの上に置いていた手提げ袋の中から取り出したのは、フルダイブＶＲＭＭＯタイトルの一つ――《アスカ・エンパイア》のゲームパッケージだ。
和のモチーフをふんだんに取り入れた《アスカ・エンパイア》は、国内市場においては、上から何番目だかに入る程度には人気のＶＲＭＭＯらしい。少なくとも鋭二はそう聞いている。
取り出されたパッケージを受け取ろうと悠那が腕を延ばす。その手がパッケージに触れる直前で、鋭二はその手をひょいと躱すようにしてパッケージを引いた。
「む。さっきのお返しのつもりですか～、エーくん？」
「まさか。僕はそんな子供っぽい事しないさ」
「えー？　それじゃ、あんな悪戯をした私がまるで子供みたいじゃない」
「『まるで』じゃなくて『まさに』だよ、悠那」
頬を膨らませてむくれる悠那に、鋭二は真剣な顔で向き直る。
「悠那。僕がこれを持ってきたのは、あくまでお医者さんの許可があるからだ。頼むから、それだけは忘れないでくれ」
「ちゃんとわかってるよ、エーくん。
『万が一体調に異常が出たり、ドクターストップが掛かったらすぐにやめる』、『リハビリもちゃんと続ける』っていう約束、守ればいい

んでしょ？」
「『消灯時間後にこっそりログインしない』が抜けてる」
「……あ、バレちゃった？」
「ああ。全く……先生に怒られて、アミュスフィアごと取り上げられても僕は知らないからな」
　呆れを露わにしたため息をついた後、鋭二は《アスカ・エンパイア》のパッケージを、悠那に手渡した。
「エーくん、ありがとう！　大事にするね」
「どういたしまして。
　……そういえば聞いてなかったけど、どうして《アスカ》を選んだんだ？」
「んーとね。さっき話した、紺野さんにオススメしてもらったの。《ＡＬＯ》や《ＧＧＯ》とは違ってＰｖＰ要素がほとんどないから、ＶＲＭＭＯ復帰タイトルにするには向いてるって」
「そうか……まあ、確かに」
　その『紺野』さんという女性の事を鋭二は全く知らないが、彼女の言うことには同意できる。
　あの《絶剣》が名を轟かせたおかげで決闘スタイルのＰｖＰ熱が一気に高まっている《ＡＬＯ》や、《ＡＬＯ》以上にＰＫ上等というハードな《ＧＧＯ》に比べれば、確かに《アスカ》は平穏で、ＶＲＭＭＯからしばらく距離を置いていたプレイヤーが選ぶには適していると言える。
　それが、《ＳＡＯ》なんてクソゲーに巻き込まれて命を落としかけた人間ならばなおさらだ。
「……ねえ、エーくん。エーくんにもう一つ、お願いしたい事があるんだけど」
「ソフトをインストールしてくれ、とかかい？　悠那」
「それは自分でできるから大丈夫。
　その……良かったらなんだけど。エーくんも一緒に、《アスカ・エンパイア》始めない？」
　彼女の無邪気な申し出に――鋭二は、黙って首を横に振った。

たったそれだけの動作に、鋭二は己の心が内側から掻き毟られるような痛みを感じる。

「――ごめん、悠那。それは、できない」

絞り出すように、声を出す。

本音を言えば、彼女の申し出を受け入れたかった。また、悠那と共に仮想世界で生きてみたかった。

その気持ちに従うには、今の鋭二は弱く、そして罪に塗れすぎている。新たなＶＲＭＭＯで、新たな知己と共に新たな冒険に飛び出していくであろう彼女の側に立つ資格は、とっくの昔に失われているのだ。

『彼女が退院するまでの間に限る』という条件付きで、悠那に会うことを重村教授に許されているというだけで――満足すべきだった。

「……そっか。うん……じゃあ、しょうがないよね。エーくんにもエーくんの事情とかがあるわけだし、うん」

ほんの少しだけ、悠那は残念そうな顔をした――そう思ってしまったのは、自惚れなのだろうか。

その迷いに答えを出すより早く、悠那はいつもの笑みを浮かべると、鋭二に向けておもむろに両腕を伸ばした。

「じゃ、代わりに。今日も一緒にお散歩してくれる？　エーくん」

「あ、ああ……それなら」

悠那の両脚の膝裏と背中に腕を回し、鋭二はそのまま彼女の体を持ち上げる。オーディナル・スケールでの記憶回収計画前、万一パワードスーツが機能不全に陥った事を想定し、血の滲むような思いでトレーニングを続けた事がこんな所で役立っている。

鋭二のその努力を差し引いたとしても――悠那の体は、軽かった。誰よりも長く眠り続けたＳＡＯサバイバーなのだ。その体が帯びる疲弊は、かつて鋭二が目覚めた時以上のものであるのは当然だ。

それでも、重村悠那は生きている。触れ合う体に伝わる心臓の鼓動と仄かな体温の温かさが、その事をはっきりと証明している。

その体の軽さと、命の重さを共に感じながら、鋭二は悠那の体をゆっくりと下ろして車椅子へと座らせた。

「今日はどこへ行こうか、悠那」
「んー……まずは売店。のど飴切らしちゃったし。それで、その後は中庭に行きたいな。今日、すっごくいい天気だし。
運転よろしくね、エーくん」
「ああ、了解した」
一瞬だけオーグマーを操作し、悠那の外出許可――といっても院内とその周辺だけだが――が下りていることを確認する。
「――ところで。ユナにまた変なこと教えただろう、悠那」
「……あ、それもバレちゃった？」
「当たり前だ」
「むー……そーいうところは、鋭いのになあ……」
「そういう所って？」
「べっつにー。なんでもありませーん」
なんでもないわけがない声でそう告げたあと、悠那はぷいとそっぽを向く。
少しだけ不機嫌になった悠那の様子に戸惑いながらも、鋭二は車椅子の後部レバーを握り、ゆっくりと前方へ押し出した。

怪異蔓延る和の世界――《アスカ・エンパイア》。
かつて『眠れる騎士達（スリーピング・ナイツ）』が駆け抜けたその世界で、己の弱さと罪を抱え込んだ〝血塗れの剣士〟と、天に浮かぶ鋼鉄の城から落ちてきた〝眠り姫〟が、奇なる縁に導かれて再会を果たすのは――もう少し、先の話になる。

０４―１．魔竜使いと嫁　白夜篇　（シリカ・アスナ）

キリトの個人サーバにて運用されるプライベートＶＲ空間。そこに作られた無数の部屋は、大きく二種類に分けることができる。

『鍵のかかる私有部屋』と『鍵のかからない共用部屋』の二種類に、だ。

前者はログイン権限を持つ各人が個人的に使うための部屋だ。入室に必要な鍵情報は各人のアカウントに紐付けられているため、もしそれ以外の人間が入ろうとするならば、部屋の主から招かれるか、最高管理者権限を以て強制的に解錠するかのどちらかしか無い。

対して、後者は文字通りの共用スペースである。多少の例外はあるが、ログイン権限さえあれば誰でも自由に立ち入り、自由に使うことができる。

蒼い髪のウンディーネ――もとい、アスナが今いるこのカフェテリアも、そんな共用スペースの一つだった。

「――あれ、このお茶。前よりなんだか良い香りがしませんか、アスナさん」

「そこに気付くとは、さすがシリカちゃんね。実は、茶葉のブレンドを少し変えてみたの」

明るい珪砂色の髪の間から、それと同じ色をした大きな猫耳を生やしたケットシーの少女――シリカは、アスナに褒められ、気恥ずかしそうにはにかんだ。

その容姿と雰囲気から普段は年齢以上に幼く見られがちな彼女だが、実際はアスナ達と然程大きな年齢差があるわけではない。そしてこの空間にログインできているという事は、シリカもまたアスナの『姉妹』――頭に『義』ではない漢字一文字が付くタイプの――である事は言うまでもないだろう。

「その……アスナさんも、キリトさん待ちですか？」

「うん、そうだよ。シリカちゃんも？」

「はいっ」

白い丸テーブルの向こうから問い返すアスナに対し、シリカはこくりと首を縦に振って応える。

今のアスナ、そしてシリカのように――プライベートＶＲ空間内の共有スペースで、キリトがログインしてくるのをゆったりと待つ。その行為自体が、キリトを閨へ誘っているのと同義――そんな暗黙の了解が浸透したのは、いつ頃だっただろうか。

ノーリスク・ハイリターンを絵に描いたようなキリトのＶＲ空間ができてからというもの、黒き王の後宮に集う女性陣は、己の内に滾る青く情熱的な欲望を抑え込む必要が無くなった。若さという特権から危険性が除去されたのだ。そこに残るのは、青春の中に溢れる本能的な情欲と互いへの燃え盛るような愛情だけだ。

かつてはキリトの方からが大半だった『お誘い』も、今では女性陣の方からキリトに仕掛ける事の方が圧倒的に多くなってしまった。当然、その誘い方も気分次第で大きく変わる。

たとえば、今のアスナ達のように、キリトがログインしてくる事を知っていて、彼の到着をただのんびりと待つ事もある。

あるいは、「お前との大変不適切な関係をより強固なものにしに来ました――と言ったら、寝所に導いてくれますか？」と涼しい顔で宣う金色の騎士や、「アタシと気持ちいいことしようよー、キリト」と上目遣いでねだるＭＨＣＰのように、直球ど真ん中の誘惑を仕掛けてくる事もある。

また、他のＶＲＭＭＯで一緒にダンジョンへ潜ったあと「キリトのおかげですっごいお宝が手に入ったから……お礼、させて」と遠回しな言い方をするトレジャーハンターや、「《ＡＬＯ》で使う新しい水着、どれにしようか迷ってるんだよね。だからー、お兄ちゃんの意見、じっくり聞かせてもらえない？」と意味ありげな視線を向けるスピードホリックのように、あれこれと口実を用意する事もある。

――結局、誰も彼もが溺れているのだ。この甘く蕩ける、肉欲に塗れた蜜月の日々に。

「今日はどんな事しよっか、シリカちゃん。なんだか悩んじゃうよね」

「はい。あ、でも……そうですね。この間は確か、あたしがアスナさん

をテイムしましたよね」
「うん、そうそう。シリカちゃんにテイムされて、ペットにされちゃったのよね。私」
少しだけ温くなった茶に口をつけたあと、アスナはこくこくと頷く。
遡ること何日か前、キリト、それにシリカを加えた3人で事に及んだ際、アスナはシリカのテイムスキルに屈し——たという体(テイ)で——シリカのテイムペットへと堕ちた。
テイムスキルの効果で《常時強制発情》、《絶対命令服従》、《全装備強制解除（指輪除く）》の永続バッドステータスを刻み込まれた状態で、シリカのご主人様——とどのつまりはキリトに引き合わせたあと、シリカはいつもと変わらぬ笑みを浮かべたまま、足元に跪くペットに向けて淡々と命令を下した。
『じゃあ今から、あたしとキリトさんは新婚夫婦のらぶらぶえっちをしますから、アスナさんはそこで見ててくださいね。
え？　「どうして」って……だって、ペットがご主人様達と一緒にえっちできるわけないじゃないですか♪
特別に、あたしがキリトさんに抱かれてるとこ見ながらオナニーするのは許してあげますから、それで我慢してくださいね。
ただし、あたしの許可なくイッたり、オナニーするのを止めたりしたら……お仕置きですからね』
——優秀なペットであるアスナは、シリカの言いつけをしっかりと守った。
二人のご主人様が、いつもより幾分ゆったりとしたテンポで肌を重ね、愛情に満ちた交合をじっくりと愉しんでいるそのすぐ側で、惨めなほどに激しく自慰行為に耽りながら、絶頂しないよう必死に自分を抑え込み続けた。
結局、イクことを許されたのは、シリカが『夫』の精液を胎内で5度受け止めたあと。顔の上に跨ったシリカの股座から溢れ出す濃厚な精液を舌で舐め取りながら、キリトの肉棒で貫かれた瞬間、アスナは大量の潮を撒き散らしながらはしたなく絶頂を迎えた。

「――だから、今日はあたしがアスナさんのおもちゃにされるべきだと思うんですよね」
「そう？　私は別に、この間の続きでもいいよ。なんだかんだでキリトくんのノリもよかったし」
「うーん……でも、今日はちょっぴり、テイムされる方の気持ちも味わいたい気分といいますか……」
　茶菓子として供したアスナお手製のクッキーを齧りながら、シリカはいまだ迷う。
　いざ事に及ぶ前、女性陣の間でこうした根回しめいた話し合いがされることは珍しくない。皆基本的にヤりたい盛りであることは共通しているが、求めるプレイの内容が全く同じであることはあまり無いからだ。
　アスナ自身の事を考えてみても、ただの結城明日奈として愛情をたっぷりと感じながら優しく抱かれたい時もあるし、《ＧＧＯ》で囚われの身となってキリトのセックススレイブにしてもらいたくなる時もある。また、時にはウンディーネの神殿娼婦として黒いスプリガンに春を鬻ぎたくもなるし、王妃ステイシアとして夜伽に興じたくなったりもする。
　二人きりで交わる時ならば、そういった状況をそれとなく作るなり、あるいは押し倒されてから耳元でそっと囁くなりすれば、あとはキリトの方からうまく合わせてくれるためそれで事足りる。だが、いわゆる３Ｐとか４Ｐとか５Ｐとか１２Ｐ――現状想定されうる最大人数――となるとそうもいかない。
　最大多数の最大幸福、と称するのはいささか正確ではないだろうが、それに近い結果を目指すため、誰が何を求めているのかをある程度把握しておく事は重要だった。
「ねえ、シリカちゃん。どうせなら、私の部屋でお風呂にでも入りながら話さない？」
　キリトくんがログインしてくるまで、まだ時間あるし」
「いいですね、それ。大賛成です」
「じゃあ、早速行こっか」

「はいっ」

カフェテリアを後にしたアスナは、シリカを伴ったまま廊下を歩く。その目的地はアスナが所有しているいくつかの私室、その内の一つだった。

キリト曰く『サーバの記憶容量等の諸々から判断するに、一人あたり５０部屋まで作っても全く問題ない』――というお墨付きが出ていることもあり、女性陣の大半が複数の私室を持っている。アスナもそうだし、シリカもそれは同じだ。

入浴用として誂えた一室――三方向に広がるガラス張りの壁から満月の昇る夜空と夜景を望む、ナイト・オーシャンビューが売りの浴室へと続く扉を開け、アスナはシリカを中に招き入れた。

「……アスナさんって……こういうお風呂部屋、いったいいくつ持ってるんですか……？」

「うーんと……そんなに多くないよ。ここと、あと５部屋くらい。普通の銭湯風のと、天然檜風呂と、青空と海が見える露天風呂と、バブルバスのと……あとは、うちのお風呂を再現したので全部かな」

「さ、さすが……」

呆気にとられつつ、シリカは装備全解除ボタンを押して裸身になると、窓際に置かれた大きなバスタブへと近づく。

壁や床に埋め込まれるように一体化している白いバスタブは、一般的な大人５人くらいなら同時に入れそうな程には大きい。仮想空間特有の、透明度が高く屈折もしないお湯がなみなみと入ったバスタブに入るべく、シリカはバスタブの縁に手をかけた。

「あ、待ってシリカちゃん」

呼び止められて振り返ったシリカの視線の先で、一糸まとわぬ姿を晒すアスナがストレージから小さなガラス瓶を取り出す。ぽん、という軽い音と共にコルクの蓋を引き抜いたアスナは、シリカの眼前にその小瓶を差し出した。

「これね、私が時々使ってる、お気に入りの入浴剤なんだけど……よかったら使ってみる？」

「どんな入浴剤なんですか？　ローズマリーとか……それとも、『草津

の湯』みたいな感じのですか？」
「ふふっ。なんだと思う？　嗅いでみて」
小瓶の口に鼻先を近づけ、シリカはすんすんと匂いを嗅いでみる。
白色をした中身から立ち上る、鮮烈で、欲に塗れ、それでいて魅惑的な――本能の一番深いところを刺激する香り。嗅覚がその信号を脳髄に伝えた瞬間、シリカはその香りの正体を即座に理解した。
「これ……キリトさんの、精液ですよね」
「大正解♪」
空いている手でシリカの頭（と猫耳）を撫でつつ、アスナはにっこりと笑う。
「これね、ストレアさんにお願いして、こっそり作ってもらった特製入浴剤なの。
これをお風呂のお湯に入れると……お湯をね、ぜーんぶキリトくんの精液に変えてくれるのよ。
それでね、良かったらなんだけど……シリカちゃんも試してみない？」
「是非」
「ふふっ。シリカちゃんなら、そう言ってくれると思ったよ」
一も二もなく頷いたシリカの横で、アスナはバスタブの湯に向けて小瓶をそのまま放り込む。湯に触れた瞬間、瓶は破壊エフェクトを伴いながら消滅し、中に入っていた入浴剤が透明な湯の中に音もなく溶けていく。
変化は、すぐに始まった。入浴剤が溶け込んだ部分を起点に、透明な湯が白く濁った精液に置き換わっていく。ぼこぼこと沸き立つような音と共に増殖し始めた白い領域は、数秒で透明な領域を喰い尽くし、バスタブの縁に触れた所でようやく止まった。
ほんの少し前までとは比べ物にならないほどに粘性と濁り具合を増した液面からは、小瓶から漂っていたのと同じにしてより濃厚な雄の香りがこれでもかという程に立ち上っている。その香りを鼻を通して肺の奥まで深々と吸い込んでから、シリカはようやく口を開いた。

「……これ、全部。キリトさんの精液なんですよね……」
「そうそう。今までキリトくんが出してくれた精液の情報を解析して、それを大量にコピーしてるって、ストレアさんも言ってたわ。奥の方は少しだけ深くしてあるから、ちょっとだけ気をつけてね」
そう言って、アスナはバスタブの縁をまたぐように左脚を上げ、白濁した精液の中に自分の身を沈み込ませていく。官能に蕩けた恍惚の表情を浮かべるアスナの脚に、腰に、腹に、胸に、腕に――どろりとした濃厚な精液が絡みつく。
そして肩はもちろん、入浴用に髪をアップにした事で顕になっていたうなじの一部まで深々と体を沈めたアスナは、湯の中から片手を出してシリカを優しく手招いたあと、指先に絡みついた精液の塊を口に含み、はちみつを舐める小熊の様に丁寧に舐め取った。
アスナの淫靡な仕草に、ごくりと喉を鳴らしてつばを飲み込んだあと――シリカもまたバスタブへ脚を踏み入れた。
「あっ……意外と温かいんですね。普通のお風呂に入ってるみたいです」
「でしょ？　もちろん、他のお風呂と同じで、目に入れても痛くなったりしないし、中で息もできるように設定してるから安心してね」
「さすがアスナさん、気が利いてますね……」
苦笑しつつ、アスナと対面するような位置へシリカは腰を下ろす。
ねっとりと張り付くような感触と共に、キリトの精液が肌を撫でながらシリカの体を包み込む。液面から沸き立つ精臭が呼吸の度に嗅覚を支配し、条件反射的にシリカの興奮を呼び起こす。
少しだけ体を動かす度に、どろりとした精液の液塊が追従してくる。雌を孕ませることに特化した元気な精子、その一粒一粒についばまれているような感触は、シリカが想像していた以上に心地よかった。
「アスナさんがドハマリする理由、ちょっとわかった気がします……」
「でしょう？　ほら、もっと側においでよ、シリカちゃん」
「は～い♪」
両手足をバスタブの底へ付けた四つん這いのような姿勢で進むシ

リカを、アスナは両腕を伸ばして迎え入れ、そのままぎゅっと抱きしめる。
「ふふっ、シリカちゃんの肌、すべすべで気持ちいいな～♪」
「手付きがやらしいですよー、アスナさーん。ハラスメント通報されても知りませんよ～？」
「女の子同士だから通報できませ～ん♪　それに、もし通報されても、キリトくんが握りつぶしてくれまーす」
「あっ、ずるいですよそれー」
　小柄なケットシーの肌に手を這わせ、アスナはバスタブの中にどっぷりと溜まった精液を塗りたくっていく。元より首から下のほとんどを精液に浸けている状態とはいえ、ただ液体が触れているのと、塗り込まれるのとでは感じるものもだいぶ違う。
　細胞一つ一つに至るまでの全てに、キリトの精の匂いをマーキングされているかのような感覚に、シリカはゾクゾクとした退廃的な快感を覚えていた。
「んっ、んぅっ……♪」
「ふふっ。いい顔してるよ、シリカちゃん。女の子が人前で簡単にしちゃいけない、とろっとろの顔になってる」
「そういうアスナさんだって……♥」
　白濁した精汁の海の中より少しだけ身を起こしたアスナは、淫蕩な女の貌で微笑む。彼女のなめらかな肌の上を滑り落ちた精液の群れが、豊満な胸の谷間に溜まっていく。胸元に抱かれたシリカは、胸元に顔を埋めるようにして口を近づけると、アスナの肌に舌を触れさせながら精液を舐め取っていく。
　ねっとりとした子種汁を舌の上で転がせば、独特の香りと苦味が口の中いっぱいに広がっていき、粘つくのどごしと共にごくりと喉を鳴らして飲み干せば、繁殖欲求を刺激された雌の身体が疼き始める。
「美味しい？　シリカちゃん」
「はい、とっても……♪」
「好きなだけ飲んでね。減った分は自動で補充してくれる仕組みになってるから。

もちろん、肌に塗ってみたり、シャンプーしてみたりするのも気持ちよくておすすめだよ」

精液まみれの片手を持ち上げたアスナは、アイテムウィンドウを開くと、木製のジョッキをオブジェクト化する。質の良い天然木を丁寧に削り出して作られたジョッキを腕ごとバスタブの中に沈めたアスナは、バスタブの中を軽くかき回すように腕を動かしたあと、再びジョッキを持ち上げた。

溢れんばかりの――というか、収まりきらなかった白濁液で側面をコーティングされているかのような状態となったジョッキの中には、アスナとシリカの大好物がなみなみと充填されている。

すっかり重くなったジョッキを落とさないよう、慎重な手付きで持ち上げるアスナの顔に、笑顔以外の何かが浮かんでいようはずもない。

「でもやっぱり一番は……これだよねー♪　いただきまーす♥」

側面を垂れ落ちる精汁を舌で丁寧に舐め取ったあと、アスナはジョッキの縁に口を付け、白く濁った中身を喉へと流し込んでいく。

舌に絡みつきながら口内を支配していく雄の体液。本来は雌を孕ます為に生成された子種達を束の間味わったあと、アスナは喉をごくり、ごくりと鳴らしながら一気に嚥下していく。

一杯目は、飢え渇いた体を落ち着けるため、息継ぐことすらせずただただ飲み込む。待ちに待ったずしりと重い精液が食道を駆け抜け、胃袋に落ちていく度、アスナの体はキリトの為だけに生きる雌として作り変えられ、アスナの心は内側からキリトに支配されていく。

底に残ったわずかな分すらも啜り上げるようにしてジョッキを空にしたあと、アスナはバスタブ表面付近にジョッキを這わせ、二杯目となる精液を掻き集めると、それを再び口元へと運んだ。

「中に溜まってる新鮮なのも最高なんだけど……空気に触れてる部分も、また独特の風味があって美味しいのよね」

うらやましそうに見つめるシリカを一瞥したあと、アスナは再びジョッキを傾けた。

二杯目となる今回は、中身を一気に飲み干すような事はしない。ま

ずはたっぷりと口の中に含む。下品な振る舞いと知りつつも、アスナはわざと口を開け、ぐちゃぐちゃと音を立てながら濃密な精液を咀嚼する。噛めば噛むほど溢れ出す濃厚な雄の味。その味を舌に、そして口全体に覚えこませながら、鼻腔に抜けていく精臭をじっくりと堪能する。

時間を贅沢に使い、口の内側全体に精液を塗り込むように舌を動かしてから頭を後ろに倒す。粘つく液体を喉へと送り込みながら口を開けたアスナは、そのままガラガラと喉を鳴らして『うがい』を始めた。

「――んぐ、んんぅっ……ぁうっ……」

ねっとりと濃厚な液体にどうにか空気を流し込み、半ばえづくような形になりながら、アスナは精液で喉を潤していく。それは本来、喉から汚れや雑菌を落とすための行為。しかし、アスナが企図するのはそれとは真逆――より濃く、より深く、声音一つにもキリトの気配が漂う事を願って、喉奥に精液の塊をなすりつけていく。

アスナの姿を見ただけで、声を聞いただけで、気配を感じただけで――この極上の雌には、既に存在の全てを捧げて番った最上の相手が既にいるのだと、キリト以外の全ての雄が本能的に理解して諦める事を願いながら、泡立つ精液を一滴たりとも残さずに飲み込む。

「……っ、ふうっ……。ごちそう、さまでした……♥」

いつものクセで口を大きく開けたアスナは、この場にいないキリトに向けて、大事な精子をキレイに飲み干したことをアピールする。自らが優秀な精子便所であることを強調するそんな行為が、たまらなく心地良い。もしこの場にキリトが居れば、『よくできました』と言いながらご褒美に頭を撫でてくれただろう。

しかし、もしもご褒美がキスだったなら、アスナは間違いなく拒んでいただろう。なにせ口の中にはまだ、キリトの精子の後味が残っている。そしてその後味は、そしてキリトの精子そのものは、全て一切の例外なく『キリトを愛する少女達の物』だ。

（だから、キリトくんにはあげない……♥　この子達は全部、私達だけのものだから……♥）

故に、たとえそれがキリトから生み出された物であろうと、キリトへ渡すわけにはいかない。それは女性陣の共通認識であり、フェラチオ等の口腔奉仕系プレイの後、わざわざ口内を別の味に塗り替える理由でもあったりする。

あっというまに二杯目を空にし、恍惚の表情を浮かべて喜びに浸るアスナの手から、空になったジョッキがこぼれ落ちる。精液の海に落ち、比重演算に従ってそのままずぶずぶと沈み込んでいくジョッキを見送ったあと、シリカはアスナの瞳を正面から見つめた。

「アスナさん」

「なあに、シリカちゃん」

「その……アスナさんの髪、洗わせてもらってもいいですか？」

「うん、もちろんだよ。お願いするね。シリカちゃん」

膝立ちの状態になって浴槽を進みながら、シリカはアスナの背後へと回る。

リアルではミルクティーを思わせる美しい淡色の髪をしているアスナだが、今日のように《ＡＬＯ》仕様のアバターでログインしている時に限っては、その髪色は流水の如き青に染まる。

その美しさにシリカが視線を奪われている間に、アスナは後頭部に付けていたヘアクリップを外して、入浴用にまとめていた髪を解く。絡まる事もなくほどけた長い蒼髪は、その半分ほどが白濁した液面に触れた。

「じゃ、かけちゃいますね」

「はーい。たっぷり仕様の贅沢コースでお願いするね、美容師シリカちゃん」

「贅沢コースですね、任されました！」

両手の中になみなみと精液をすくったシリカは、それをアスナの頭の上に持っていき、指盃を静かに傾けた。

粘性の高いどろりとした白濁液が手のひらから流れ落ち、アスナの頭の上に落ちる。頭皮に沿って流れ始めた精液は、何本かの太い筋に分岐しながら伝い落ちつつ、アスナの蒼い髪を白く染め上げていく。

精液風呂の中にもう一度手を浸し、指先にたっぷりと精液をまとわ

せたあと、シリカはアスナの髪へと触れた。
「――アスナさん。アスナさんはどうして……あたし達がキリトさんとお付き合いすることを認めてくれたんですか？」
「それは……最初に言ったでしょ。キリトくんをうんっと幸せにしてあげたいから、って」
「……本当に、それだけですか？」
アスナの髪を痛めないよう優しい指使いを心がけながら、シリカは蒼い髪に白濁した精液を揉み込むようなシャンプーを始める。ぐちゅぐちゅという粘着質な音と共に泡立つ精液を指に纏わせ、普段自分がしているシャンプー以上の丁寧さでアスナの髪を洗う。
「あたし、思うんです。キリトさんを幸せにするだけなら、アスナさんが隣にいるだけで十分なんじゃないかって。
なのに、アスナさんがあたし達にこんなチャンスをくれたのが、なんだか不思議で……」
「シリカちゃん……それは、その……」
「も、もちろん！　何か裏があるとか、アスナさんが悪巧みをしているなんて思ってませんよ！
ただ、その……なんだか、自分の中で納得がいかない部分があるというか……」
歯切れの悪い言葉を零しつつも、シリカの手は止まらない。長い髪の根本から毛先まで、プロの美容師のように丁寧に指を滑らせ、白く濁った雄の体液で包み込んでいく。
大抵のＶＲＭＭＯでは処理負荷軽減のため、プレイヤーの髪は独特の質感を持った薄いフィルム状のオブジェクトで再現されている。何十万というプレイヤーの同時接続を捌きつつ無数のＭｏｂやＮＰＣを即時制御しなければならない以上、処理負荷軽減は開発陣のモットーであり、そのせいで髪の毛の感触再現が切り捨てられるのは仕方のないことではある。
逆に言えば、最大同時接続人数が２０人にも満たず、ＭｏｂやＮＰＣを出す必要のないこの空間では、髪の感触の再現性にリソースを大きく割り振る事ができる。シリカがアスナの髪を丁寧に洗うことが

できるのも、そういった事情が関係していた。
「キリトくんをたくさん幸せにしてあげたいっていうのも、その為に皆を引き込んだのも本当よ。《ＳＷＯＲＤ協定》を持ちかけた理由の９０％はそれ」
「ということは……それだけじゃないんですね」
「……考えてみたのよ。仮に、私が《協定》を持ちかけなかったとするじゃない。
　そのまま何年かして、私とキリトくんが普通に結婚したとして……シリカちゃんは、大人しくキリトくんを諦められる？」
「無理です。絶対に諦めません」
「でしょ。私だって、立場が逆だったら同じこと言うもん」
　即答するシリカに苦笑しつつ、アスナはほんの少しだけ視線の角度を下げてバスタブの水面を見つめた。
「仕方ないよね。私にとっても、皆にとっても……キリトくんは命をかけたって惜しくない運命の人だもの」
「はいっ」
「だからね。そんな風に皆と一生冷戦を続けていくくらいなら……いっそ、皆をそこまで夢中にさせちゃったキリトくんに、まるごと責任取ってもらっちゃうべきかなって」
「そうだったんですか……。なんというか……器がとんでもなく大きいですね、アスナさん……」
「ふふっ。実際、そうでもないのよ。これでも結構、利己的に考えた結果だし」
　シリカの指先に髪を預けたまま、アスナは長い脚を白濁液の中で抱え込む。
「ほら、ここ最近……キリトくんったら、いろんな事件に巻き込まれっぱなしだったでしょ？　しかも全部……私の手が届かない所で。
　もちろん、《ＯＳ》の時は皆がキリトくんを助けてくれたし、《ＧＯ》の時はシノのんが、アンダーワールドではアリスさんやユージオさん達が力を貸してくれたからどうにかなったけど……。
　この先、同じようなことが起きた時……また私はそこにいないかも

しれない。キリトくんを助けてくれる誰かだって、いないかもしれない。そう思ったら……考えが止まらなくなっちゃって」

道に迷った幼子の様に、膝を抱え込み俯くアスナの声の中には――誤魔化しきれない震えがほんの少しだけ入り混じっていた。

「私も、キリトくんも、シリカちゃんも……そして、皆も。少しずつ大人になっていく。今、皆を繋いでいるこのあったかい《環（リング）》から、永久に遠ざかってしまう日だって来るかもしれない。

その日が来たあと、もし、私がまたどうにもできないような所で、キリトくんがひどく傷つくような事になったら……今度こそ、私は私を許せなくなる。

何もしなかった自分を、何の備えもせずに安穏と過ごしてきた自分を――《閃光》の名に賭けて、絶対に許さない」

「アスナさん……」

空気が重苦しくなったことを察したのか、アスナは慌てて声のトーンを戻した。

「もちろん、私だって自分のことを憎みたくないし、キリトくんの助けになってくれる人が増えるならそれに越したことはないしね。

だから、みんなを引き込んだの。これが、残りの９％」

「なるほど……あれ、計算合わなくないですか？　全部合わせても９９％ですよね？」

きょとんとした顔でシリカが洗髪の手を止めたタイミングを衝き、アスナは体ごと後ろに振り返った。シリカの丁寧な指運びによって、根本から先端までたっぷりと精液を塗り込まれた蒼い髪――今や白い部分がほとんどだが――を重たく揺らしながら、アスナはシリカと再び向かい合った。

「まあ、その……１％分だから、本当に大した事じゃないんだけどね……」

「はい」

「――私一人だと……体が、保たないかな……って」

「……あっ、そういうアレですか」

「そういうアレよ」

これまでの経験を元に、シリカはアスナが言わんとする旨を察した。言わずもがな、夜の夫婦生活の話である。

とは言いつつも実際の所、アスナが現実世界でキリトと肌を重ねた『日数』はそこまで多くはない。調べたことがあるわけではないが、一般的な学生カップルの平均と比較すると、おそらく少ない方に入るだろう。

何かあるたびにキリトが事件に巻き込まれるせいでそんな事をしている余裕があまり無かったというのが主な理由なのだが、『回数』となると――平均の数値など鼻で笑えるとアスナは確信していた。無論、こちらも調べたことは無いが。

「というわけで、これからも末永～く協力よろしくね。シリカちゃん」

「はいっ♪」

元気よく頷くシリカに向けて微笑みかけながら、アスナは広げた両腕をシリカに向けて伸ばす。すぐさま意図を察したシリカは、身体を少しだけ前に出し、アスナの腕の中へ大人しく収まった。

「さあって、と。シリカちゃんにたっぷりシャンプーしてもらったし……今度は私がシリカちゃんをキレイにしてあげるね」

「よ、よろしくお願いします。あたしもシャンプーしていただけるんですか？」

その質問には敢えて答えず、若干緊張した面持ちのシリカを正面から抱きしめたまま、アスナはゆっくりと身体を前に倒す。半ば押し倒されるような体勢になったシリカの身体が、背中から少しずつ精液の海の中に沈んでいく。

「――ねえ、シリカちゃん。知ってる？《ＡＬＯ》で魔法ビルドしてるウンディーネが、最初に覚える魔法」

「えっと……ヒール系、とかですか？」

「残念だけど、ハズレ。正解はね……液体の動きを操作する、水系攻撃魔法よ」

にっこりと笑いながら、アスナがそう言った瞬間――白濁した液面がぼこりと泡立ち、四方八方からシリカの身体を囚えた。

まるで精液そのものが何かの意思を持ったかのような素早い動き

で、シリカの四肢が絡め取られる。たちの悪いことに、シリカを捕まえている部分だけは異常なほどに強度と粘性を増しており、とてもではないが引きちぎることはできない。

「あ、アスナさんっ!?　こ、これっていったい……!?」

「ふふっ。怖がらなくても大丈夫よ、シリカちゃん。これ、ストレアさんがおまけで実装してくれた機能でね。

《ＡＬＯ》の水魔法みたいに、この中にあるキリトくんの精液限定で、ある程度自由に動かすことができるようになるの」

「え、えっと……つまり……？　あたしはいったい、どうなっちゃうんでしょうか……？」

困惑するシリカの視界の中で、シリカの四肢を絡め取っているのと同じ白い流体が、アスナの体にもまとわりついていく。雄の匂い立ち込める濁った水面へ、シリカ共々少しずつ引きずり込まれながら、アスナはただ優しく笑う。

「つまり――キリトくん純度１００％の精液の中に漬け込まれたまま、このザーメン流体で体中隅から隅まで優しく、優しく……嬲られちゃうんだよ♥　もちろん、私も一緒に。

精液に包まれながら、体にたっぷりザーメンイキ癖覚え込ませて……♥　キリトくんのチ●ポで子作りすることしか頭にない雌豚ウンディーネと淫乱ケットシーを作りながら……キリトくんが来るのをゆーっくり待とうね♥」

妖艶に笑いながら見下ろすアスナの髪から、精液が一筋、地獄に垂れる蜘蛛糸のように糸を引きながらこぼれ落ちる。その精液の雫がシリカの唇に触れたのとほとんど同じタイミングで――バスタブ内に溜まっていた大量の精液が一斉に隆起し、二人をまとめて呑み込んだ。

――そして、それから数十秒が経過した。

最初こそ時化のごとく暴れ蠢いていた白い水面は今やすっかり凪いでおり、隆起するどころか波すら起きない。蒼い髪の水妖精と砂色の髪の猫妖精は、白く濁った液体溜まりの奥深くにまで沈み込んでしまったらしく、今やその姿をバスタブの外から伺うことはできない。

分厚い精液層が音すらも封じ込めた結果、今や浴室内は無人と思えるほどの静寂を取り戻していた。

故に、妖精達の声は誰にも届かない。触手ではなく、ましてや他人の手でもなく、愛する男の精液そのものに全身隈無く愛撫され、際限なく与えられる子種汁で胃の腑を満たす歓びに浸る二人の痴態を目にする者はいない。

たとえ、押し止められ続けたあとにようやく与えられる絶頂の悦びに咽び泣こうとも。発情期の動物のように浅ましい啼き声を上げようとも。

ただの雌へと堕ちてゆく妖精達の嬌声は――誰にも、届かない。

０４―２．魔竜使いと嫁　黒夜篇

プライド。

単純に訳すれば『誇り』となるその言葉には、もうひとつ、『群れなす獅子』という意味が含有されている。

サバンナに君臨する支配者にして、プライドの王たる存在・鬣靡かすオスの獅子（ライオン）は、自らの周りに侍る十数頭の雌獅子達と自由気ままに交わり、自らの血を引く子を成させるという王者の特権を有している。

そんな雄ライオンと同様、最高権限管理者――とどのつまりはこの空間の王たるキリトもまた、この空間に集う麗しき女性たちと、いつでもどこでも自由に肌を重ねる権利を有していた。

無論、キリトがそういった類の事に及ぶ際は必ず相手の承諾を得るようにしている。その過程をすっ飛ばすのは、女性陣から明確な『お誘い』があった時だけだ。

例えばの話だが、共有スペースを歩いている誰かをいきなり押し倒し、その場で裸に剥いて襲うなどという野蛮な真似はしたことがない。これまた例えばの話だが、欲望に負けたキリトが、そういった強引な手段を取ったとして、喜んで受け入れそうなのが何人かいるとしても――だ。

兎にも角にも。

大型ガレージ、シューティングレンジ、プール、剣道場、メイドカフェ、ビーチ、牧場、昼寝部屋、ローマ風コロッセオ、リズの工房にストレアの実験室（おもちゃばこ）――多種多様な施設が取り揃えられたこのプライベートＶＲ空間そのものが、一種のプレイルームと化して久しい今となっても、キリトのスタンスは変わっていない。

そんなキリトですら、理性に嵌めた固いタガが緩む場所。内に滾る昏い欲望と情動を抑え込まずともよい場所。誰もが交合のみを目的として集まる場所。

プライベートＶＲ空間の一角に構えられた複合施設型娼館『黒夜

館』は、そんな場所だった。
「――待ってたよ、キリトくん」
壁に据え付けられたランプが放つ妖しい光が、紅いビロードの絨毯を照らす。娼館に脚を踏み入れたキリトを出迎える蒼い髪のウンディーネ――アスナの姿も、同様に。
雪のように白い肌の上にまとうのは極薄の生地で作られたベビードール。ブラックカラーの薄布はそのほとんどが透けており、目隠しの役目など一切果たさぬまま、アスナの裸身を飾るアクセサリと化している。下腹部だけはどうにかショーツによって隠されているが、ごく小さな三角形の布を除いた他全てが紐で構成されたストリングタイプのTバックとあっては、もはや下着としての機能はほとんど無いに等しい。
それでも、『黒夜館』唯一の客であるキリトの情欲を煽るという役目だけは立派に果たしていたが。
「どう？　キリトくん。裁縫スキルの練習も兼ねて、新しく作ってみたんだけど」
「……あのお嬢様のアスナが、こんな格好してくれてると思うと……正直、興奮が止まらないです……」
「ふふっ。喜んでくれたみたいだね。苦労して作ったかいがあったよ。
ちなみに、鑑賞料は５０億コルね」
「それはまた……安すぎるな。倍出したって足りないくらいだ」
管理者特権でたった今生成した１００億コル分のデータを、極上の娼婦のストレージに惜しげも無く放り込んだあと。とてもではないが良家のお嬢様とは思えない淫靡な笑みを向けてくるアスナに先導され、キリトは娼館の奥へと進んでいく。
隣にそっと寄り添うアスナの体から立ち上る、ほのかなミルク石鹸の香りがキリトの嗅覚を心地よくくすぐる。今すぐ押し倒して、その身体を思うままに貪りたい――そんな欲望がキリトの中で鎌首をもたげる。そうしたとしても、アスナは嫌がらないだろうという確信と共に。

熱の籠もった視線に気付いたのか、アスナは不意に脚を止めて振り返ると、キリトの体へぎゅっと抱きついた。
「私のこと、今すぐ抱きたいな～って思ってるのが丸わかりだよ、キリトくん。
でも……もうちょっとだけ、我慢してね？　今日の私は、デザートだから」
「デザート？」
「うん。メインディッシュは、特別な濃厚スープにじーっくり漬け込んで、キリトくんだけにしか発情できない体になっちゃった可愛い可愛いケットシーちゃん♪
オナホ嫁志望のウンディーネを使うのは、メインディッシュをじっくり堪能してから……だよ？」
キリトの唇にそっとキスを落とし、焦らされる楽しみを与えて劣情を押し留めたあと。アスナは再び前を向き、キリトを娼館の奥へと導いていく。
機先を制されたお返しとばかりに、紐下着によって丸見えになっているヒップへキリトが戯れに手を伸ばしてみれば、淫らなウンディーネは「やぁんっ♥　キリトくんのえっち♥」と可愛らしく啼きながら身をくねらせる。
むにむにとした独特の感触の中にしっかりとしたハリと柔らかさが同居する極上の尻を堪能しながら、キリトは娼館内部を進んでいく。
ポールダンスやストリップショーを鑑賞する為のクラブルームや、ＳＭプレイ用の器具が用意された調教部屋、公園などによくあるような男子公衆トイレを模した部屋やホリゾントが設置された撮影スタジオなどの部屋を通り過ぎたあと、アスナが開けたのは『壁の部屋』と呼ばれる一室の扉だった。
「ここか？　アスナ」
「うん、そうだよ。今日はここにしたの」
頷きつつ、アスナは部屋の中へキリトを招き入れる。
コの字型に配置された半透明素材の壁によって内側と外側に区切

られたその部屋は、女性陣が『他人の視線や気配を感じながら抱かれたい』となった時によく使われる部屋。

壁の内側がプレイスペースであり、外側が観賞用のスペースとなっている。部屋を仕切る壁は、設定次第で普通の鏡にも、ただの透明な板にもなれば、観賞用スペースから内側を覗くマジックミラーにできたりもする。

また、外側がぼんやりと透けて見える程度の曇り具合に調整した上で、人影めいた映像を外側に投影し、更には以前実装した合成音声システムに状況対応型自然言語処理パッケージで自動生成した台詞を喋らせれば、まるで本当に壁の外側に誰かがいて、はしたない行為をじっくり鑑賞されているかのような気分を味わう事ができた。

かつてリソースを可能な限り節約してＮＰＣを実装できないものかと思案したキリトが、試験的に組み込み、そして諦めて放棄したプランの再利用ではあるが、プレイに使うだけならこれで十分すぎる程に有用だった。

「ほら、あれ見て。キリトくん」

アスナが指で指し示す先――マジックミラーモードに設定された壁の向こう側にあるのは、ごく一般的なキングサイズのベッド。大きなベッドとは裏腹に、その上にいるのは珪砂色の猫耳と尾を生やした小柄なケットシーの少女ただ一人だった。

ＶＲヘッドセット――アミュスフィアのご先祖様とでも言うべき、視界を映像で埋め尽くすだけのレトロタイプのみを身つけた少女は、興奮した吐息をはあはあと漏らしながら、抱き枕に覆いかぶさったまま腰を激しく上下させている。それはまるで、雄に下から貫かれる雌のように。

「――ふふっ。シリカちゃん、キリトくんと交尾したくて我慢できなかったみたい。

『私がキリトくんに抱かれてる時の動画見ながら待っててね』って言ったら、おんなじ動きで必死に腰振っちゃって……シリカちゃんって本当に可愛い♪」

「……なんで動画の中身まで知ってるんだ、アスナ？」

「だって、あのヘッドセット私のだし。動画をセットしたのも、私だし」

男を惑わす妖艶な笑みを浮かべたアスナが、キリトの耳元に唇を寄せる。

「どうする？　キリトくん。ここで、シリカちゃんのエアセックスをオカズに、精液便所を使ってイラマオナニーしちゃう？」

それとも……女の子を一発で雌に落としちゃう、この最高のおち●ぽで……『キリトくんと交尾したいよー』って鳴きながらヘコヘコ腰振りしてるシリカちゃんを……襲いに、行っちゃう？」

アスナの細い手がキリトの下半身へと伸び、固くなった逸物を衣服越しにさわさわと撫で回す。

それは誰の目にも明らかな挑発。据え膳残さず喰らい付くし、毒も皿も、もちろんデザートも味わってしまえという誘い。

そんな挑発に容易く乗ってしまうほど、キリトは与し易い男ではなかったが――眼前で無防備な姿を晒し、襲われる事を期待する二匹の獲物を見逃してやれるほど、寛容な雄でもなかった。

「――襲うよ。シリカも。アスナも」

「ふふっ……♥　じゃあ……行こ？」

再び先導しようとするアスナをそっと制し、キリトは自ら先んじて壁の内側へと通じる扉へと向かう。待ち受ける物の仔細が明らかになり、そして彼女らを襲うと決めた以上、ここから先のフェイズは男の方が気合を入れて進んでいくべきなのだろうから。

コの字型になった壁の外側、その端に設けられた扉を開けたキリトは、アスナを伴ったまま内側のスペースへと足を踏み入れた。

レトロなＶＲヘッドセットから供給される音声によって開扉音が遮られたのか、ベッドの上では相変わらず、シリカが抱き枕を相手に騎乗位の真似事を続けている。キリトが部屋の片隅で待つ中、コンソールウィンドウを呼び出したアスナはＶＲヘッドセットを遠隔操作し、流れていた動画を停止させた。

「――っ!?」

「はーい、シリカちゃん。そこでストップ。動いちゃダメだからね」

「は、はいっ……」
突如動画再生が止まったことと、アスナの声が聞こえてきた事に驚いてびくりと身を震わせつつも、シリカは指示通りに動きを止める。そのままアスナが抱き枕をストレージにしまい込むと、シリカはぺたりとベッドの上に座り込んだ。
「じゃあ、キリトくん。あとはよろしくね」
「ああ」
アスナから場の主導権を受け取り、キリトはベッドの上へとのぼる。男の体重を受け止めたベッドがぎしりと鳴る中、キリトは小さな体を正面から抱きしめるようにしてヘッドセットを外した。
「お待たせ、シリカ」
「キリトさん……」
蕩けたメス猫の瞳と見つめ合いながら、キリトは回した腕をゆっくりと引き寄せる。
「その……キリトさん。えっと、さっきの……見ちゃいました？」
「ああ、見た。上手だったぞ、シリカのエア騎乗位」
「い、言わないでください……恥ずかしいです」
真っ赤に染まった頬をごまかすように、シリカは体を押し付けるようにしてキリトへ抱きついた。
男の腕の中にすっぽりと収まったシリカの体から立ち昇る、発情した雌の匂い。そして、その中に入り交じる清らかな花の香りがキリトの嗅覚に己の存在を主張する。
「今日のシリカは、いつもよりいい香りがするな……。
でもこの香り、どこかで……思い出した。プネウマの花の香りだろ？」
「さっすがキリトさん、大当たりです」
「やっぱりな。これ、俺が実装した覚えが無いってことは……もしかして、自分で作ったのか？」
「はいっ。リズさんに調香の仕方を教わって、再現してみたんです。
あたしとキリトさんの……大切な、思い出の香りを」
喜びと恥ずかしさでふにゃふにゃとした笑顔を浮かべるシリカの

体を抱きしめながら、彼女がまとう花の香りをキリトはじっくりと堪能する。天に鋼鉄の城在りし頃、彼女がテイムしたフェザーリドラ・ピナを助ける為に、キリトはレアアイテム『プネウマの花』を求めて共にフィールドを彷徨った事があった。

ほのかな懐かしさに浸りつつ、柔らかな肌の感触と花の香りで男を誘う小悪魔系ケットシーの唇を――キリトは静かに奪った。

「ん、んっ……♥」

背に回ったキリトの手にしなやかな尻尾が絡むのとほぼ同時に、シリカの舌がキリトの口の中へと滑り込んできた。珍しく攻勢に出てきた彼女の舌を受け入れつつ、尻尾に絡みつかれていない方の手で、キリトは猫耳の裏側をさわさわと撫でてやる。

くすぐったさに身をよじるシリカが、キリトの口内に響かせる唾液の水音がたまらないほどに興奮を昂ぶらせていく。

「はぅっ、んんっ♥」

ケットシー組共通の弱点である尻尾を緩く握ってやると、シリカは堪らず声を漏らす。それでもどうにか唇を離さなかったシリカが、キリトの舌へ懸命に吸い付き続けていると、蒼い髪のウンディーネがそっとその背後へ腰を下ろした。先程までの挑発的な下着を脱ぎ捨てて一糸まとわぬ姿を晒すアスナの視線が、キリトを妖しくねめつける。

二人の妖精の間で混じり合う石鹸と花の清らかな香り。そして、匂い立つ雌と牝の香り。黒き王への捧げ物として自らを差し出した妖精達の香りに誘われながら唇を貪り続けたキリトは、シリカが酸欠に陥る寸前でようやく唇を開放してやった。

激しく熱いキスの洗礼を浴び、くたりと脱力したシリカの身体は、そのまま背後にいるアスナへと寄りかかった。

「はっ……は、ひゅう……」

「いっぱいキスしてもらえてよかったねー、シリカちゃん♪　じゃあ次は、もっともーっとキリトくんに溺れちゃおっか」

背を預かったのをいい事にシリカの体に両手を回したアスナは、そのまま小柄なケットシーを抱き寄せてうつ伏せの姿勢を取らせると、

キリトの方へ尻を向けさせた。
　ぴったりと閉じられたスリット部から垂れ落ちる女の蜜。そしてきゅっと小さな後ろの窄まりが興奮と羞恥にひくひくと蠢く様は、得も言われぬほどに淫靡であり、雄の征服欲求を激しく刺激する。
「それじゃあ、シリカちゃん。ちゃんとおねだり、できるよね？」
「はい、頑張ります……♥」
　ゾクリとするほどに蠱惑的な笑みを浮かべるアスナに支えられ、四つん這いの姿勢を取ったシリカがゆっくりと振り返る。
　細長い尻尾を興奮にぴんと張り伸ばし、己の両手の指先が食い込む程にしっかりと尻たぶを掴むと、シリカは自らの尻肉を左右に割り開いた。一本線を描くように閉じられていた秘裂が連動して押し広げられ、溜まった愛蜜がどろりと流れ出してキリトを誘う。
「あ、あたし、シリカは……キリトさんのザーメン風呂の中で何回もイッちゃうような変態ケットシーです。
　今日は、アスナさんにおねだりして、アスナさんお気に入りのおもちゃを貸していただきました。
　どうかそのおもちゃを、あたしにも使ってください……♥」
　シリカがそう言い終えるのと同時に、共有ストレージから一つのアイテムがオブジェクト化され、キリトの側へ落ちる。ストレージの共有相手であるアスナが操作したのだろうと確信しつつ、キリトはオブジェクト化されたアイテムに視線を向けた。
　端的に言えば、それは巨大な注射器だった。ただし先端についているのは針ではなく、円錐形に近い形をしたノズル。濃い緑色をした液体がみっちりと充填されたシリンダー部はキリトの腕より二回りほど太い。そのシリンダーにつながったピストンヘッド部は限界まで引かれ、中に詰まった液体の容量がちょっとやそっとではないことを無言の内に物語っていた。
「へえ、『ジュエルメイカー』か……。なあシリカ、これがどんなおもちゃなのか、ちゃんとわかった上でおねだりしてるんだよな？」
「はい、わかってます。アスナさんにも説明していただきましたし……その……。

アスナさんがそれを使って、キレイな蒼色の宝石（ジュエル）をたっくさん産卵してる動画も見せてもらいましたから♥」

アスナそっくりの、年相応とは言えぬ淫猥な笑みを浮かべながらシリカは首を縦に振る。

「そうだったのか。ちゃんと予習ができてて偉いじゃないか、シリカ」

「えへへ……♥」

ご褒美代わりに、キリトは砂色の髪と猫耳の裏側をたっぷりと撫で回す。

大型注射器――もとい、正式名称を『ジュエルメイカー』というそれは、リズが作成したプレインググッズの一つ。シリンダー部分に詰まった薬液は、女性陣の後ろの穴へ注ぎ込まれることをトリガーに変化し始め、最終的にそのほとんどが適度な大きさの球状物質へと固体化する。

ジュエルメイカーの名が示す通り、女性達の体内で作り出される固体は、まるで宝石のような色合いと透明度を持っている。残った薬液から生成される無色透明のローションに包まれたその宝石を排出――否、産卵する際に感じる冒涜的で背徳的な快楽は、開発者兼実験台であるリズはもちろん、アスナやフィリアをも虜にしてきた。

「それじゃあ、早速だけど……いくぞ、シリカ」

「お願い、します……♥」

緑色の液体が詰まった本体部分を抱え直した後、キリトは慎重に狙いを定め、先端のノズル部分をシリカの後ろの穴へと宛てがう。アスナに上半身を抱かれたままうつ伏せの姿勢で尻を突き出したシリカが、今か今かとその時の訪れを待つ中、キリトは腕に力を込めて先端部を押し込んだ。

「――ひぁうっ！」

小さな喘ぎ声と共にジュエルメイカーの先端部分がシリカの体内に呑み込まれ、ノズルにつながった円筒部がぴったりと尻肉へ密着する。そのまま突き出された格好となったピストン部分に掌を当て、キリトはゆっくりと前方へ押し込んだ。

「あっ――んんぅ〜っ♥　あ、お、お腹、すごぉっ……♥　おふゅうっ

♥♥」

ピストン部分が前に進むのと正比例する速度で、緑色の液体がシリカの腸内に送り込まれていく。その総量が、小柄な少女の身の内に納めるには多すぎる事は誰の目にも明らかである――が、それで何の問題も起きないのがＶＲ空間のいいところだ。

びくびくと身体を震わせて未体験の快楽に酔うシリカの体を支えながら、アスナは珪砂色の髪を優しく撫でてやり、彼女が無駄に力まないよう手助けする。

「気持ちいいよね、これ。身体の奥の奥――普段、えっちで使ってるところとは別のところが刺激される感じがして、きゅんってしちゃうよね」

「は、はひゅうっ♥　ん、あっ、あん〃んっ♥」

「ふふっ。もう半分入ったよ、シリカちゃん。残り半分、頑張れ頑張れー♪」

アスナの応援を聞きながら、キリトは相変わらずのゆっくりとした速度でピストンヘッドを押し込んでいく。勿体つけるようなジリジリとした動きでヘッドは進み、やがて中身は全てシリカの体内へと注ぎ込まれた。

空になったジュエルメイカーを引き抜けば、ぽっかりと口をあけたシリカのアナルがひくひくと震えている光景が目に入る。管理者権限でシリカのストレージにアクセスしたキリトは、円錐形の突起がついた黒いアナルプラグを取り出すと、シリカの後ろの穴へ挿し込む。薬液の影響で滑った尻穴に呑み込まれたアナルプラグは、その形状を生かしてシリカの穴をしっかりと塞いでみせた。

「ん〃、ふぉおっ……♥　これ、すごぉ……♥　おひり、と、あたまぁ……ぐちゃぐちゃになっちゃいまひゅ……♥」

「よく頑張ったな、シリカ。じゃあ、お待ちかねのご褒美だ」

装備解除ボタンを操作し、キリトは遅まきながら衣服を脱ぐ。露わになる男の筋肉質な裸身と、天を穿けとばかりに振り上がる肉棒を目にしたアスナの顔に、とろりとした媚笑が浮かぶ。その美貌と至近距離から見つめ合うシリカも、アスナの様子に自らの背後で何が起きて

いるのかを察したらしい。
次の行為に備えてより一層尻を突き出し、一匹の牝として媚びてみせるシリカの腰を軽く掴みながら、キリトは自らの分身の先端部を、蜜を溢れさせる肉花の入り口に充てがい――そして、ゆっくりと押し込んだ。
「――んぅっ……♥　あっ、んんっ、キリ、トさっ……んうぅうっっ♥♥」
きつく締まる膣道をみちみちとこじ開けて進む太く硬い雄肉の感触に、シリカはたまらず歓喜の悲鳴を上げる。臀部を開き、肉棒を導くために使われていたシリカの両手をそっと掴んで前方向に持っていきながら、キリトは深く、より深くへと己の分身を沈めていく。
小柄なシリカの体に覆い被さり、絶対的なサイズ差に物を言わせて蜜壺を押し拡げて征服していくその様から想起されるのは、人の秘め事というよりはむしろ獣の交尾。シリカという一匹のメスを守護し、喰らい、子を宿させる者がここにいるのだと、ここにしかいないのだと、体へ徹底的に教えこむ傲慢にして強権的な行為。
「あ〝っ……♥　いっぱい、きてま、す……♥　キリトさんの、おっきいの……♥♥　あたしの奥まで……もっと、もっとぉ……♥
硬いので、お腹の中広げられるの……すっごく好きです……♥」
その行為を、シリカは受け入れる。体の自由を阻害され、ただのメス猫として犯される以外に何もできないこの現状を喜び、快楽にただ打ち震える。
いずれキリトの子を宿す場なのだからという理屈の元、シリカが望むまま秘所を無遠慮に貫き進む、灼けるように熱い硬い肉の塊の感触。ぐちゅぐちゅと無秩序に蠢きながら、体の内側を蹂躙する未知なる薬液の感覚。対照的な悦楽の二重奏が、シリカを肉悦の深みへと沈めていく。
実際、沈み、溺れ、堕ちていくのは簡単だった。なにせシリカの目の前には、もうとっくの昔にキリトのメスへと堕ちきった、気高くも浅ましき白き閃光という大先輩がいるのだから。
「よかったね、シリカちゃん。キリトくんからご褒美もらえて。

シリカちゃんの体は、私がしっかり支えててあげるから……シリカちゃんは、おま●こしてもらう事だけ考えて、いーっぱい気持ちよくなっていいんだからね♥」

キリトの挿入と連携するかのような滑らかな動作で、シリカの体の下に潜り込んだアスナの囁きがシリカの耳に響く。魔性の声でメス猫を昂ぶらせ、極上のベッドのように柔らかな体でシリカを抱きしめたまま、アスナは自らの脚をシリカの脚にそっと絡ませ、シリカが反射的にでも股を閉じられないようにそっと拘束する。

やがて、シリカの子宮口を穿ちながら、ようやく逸物の根本まで全てを納めきったキリトの腰が密着する頃には、シリカはもはや指一本すら動かせぬ程に硬く、そして幸せな拘束の中に陥っていた。

「ねえ、キリトくん。シリカちゃんの膣中……どんな感じ？」

「そりゃあ、もう……スゴイぞ。挿入れた途端に、ぎちぎちと締め付けてきて……気を抜いたら、すぐに絞られそうだ」

「そうなんだ……♥　シリカちゃん、そんなにキリトくんに気持ちよくなってもらいたいんだね……♥

体の一番奥、女の子の一番大事な所に、びゅーっ、びゅーって射精してもらいたいんだ……♥

本当にえっちな子だね、シリカちゃんは♥　ね、キリトくん？」

「ああ……すごくえっちな子だよ、シリカは。

だから、シリカをえっちにした男としては……ちゃんと責任取ってやらないとな」

これもある意味では夫婦の共同作業というのだろうか。

左耳から聞こえるキリトの声と、右耳から聞こえるアスナの声が、シリカの精神を幸せで染め上げ、そしてどろどろに蕩かしていく。どんな抵抗も意味がない。仮想世界で《黒の剣士》と《閃光》に責められて、無事でいられる者がどこにいるというのだろうか。

「ほーら、シリカちゃん。せっかくおち●ぽ入れてもらったんだから、ちゃんとキリトくんにお礼言おう？

『私のおま●こを、キリトくんの精液コキ捨てるオナホ穴として使ってくれて、ありがとうございます』って」

「あ、あたひの、お、おまん――んひいいいぃっ！　ぎっ、リトひゃん、いま、今動くの、おっ、おぉっ、だっだめれぇしゅううう♥♥」

シリカが喋りかけたタイミングを狙って、キリトは肉棒をゆっくりと引き抜き、そして深々と挿し込む。激しく前後させても何の問題も無いほどに濡れぼそる膣道を堪能しながら、太い肉棒をゆったりとしたリズムで繰り返し叩きつける。

「あっ、あふっ♥　んんっ♥　おぉっ、おぐっ、奥、ぐりゅって来まひゅううううう♥　あっあっやらぁこれあっあああぁあぁああぁ♥」

腰と腰が離れ、キリトの肉棒が抜かれる度に名残惜しげに吸い付くシリカの蜜壺は、突き込まれる度に愛蜜を溢れさせながら、雄の象徴を歓んで迎え入れる。

望外の快感に襲われる小さな体は、反射的な動作でそれに耐えようと試みる。だが、上からは逞しい雄に抑え込まれ、下からは同じ雌に支えられているせいでそれも叶わず、シリカはただひたすら性交の快楽に晒され続けた。

「おぉっ♥　ほおぉっ♥　ちぃんぽっ、しゅご……あっぁ♥　そ、そこっ、そごっとんとんしゅるのらめれしゅ♥

あっあっあっぅぅっあぁっそれずる、じゅるっ――あああああっ♥

ひっ……ひっぃいぐぅうぅいいうううううっ♥♥」

既に知り尽くされ、そして増えていく一方である己の弱点を連続で抉られたシリカは、一際大きな快感の波に襲われながらも、無意識に体を仰け反らせて肉棒の抽送を遅らせようとする。

そんなシリカの儚い試みを、絡めた己の脚とキリトの腕を以て優しく防いでやりながら、アスナは愛情を込めた囁きをシリカの聴覚へと送り続ける。

「好きなだけイッていいんだよ、シリカちゃん。我慢なんてしなくていいの。

キリトくんのち●ぽで、おま●こいっぱいにしてもらう事だけ考えながら、何回でも何回でも気持ちよくなって……自分の体と心に、たくさん教えてあげるの。

『私はこれからも、この先も、ずーっとキリトくん専用の女の子』なんだよーって。

『この先何があったって、キリトくん以外のち●ぽじゃ絶対に気持ちよくなれないし、キリトくんの精子以外じゃ絶対に妊娠しない』って♥」

全身いたるところから与えられる快楽が渦となり、シリカを溺れさせていく。愛しい男に抱かれながら、憧れた先達に道を示してもらえることのなんたる幸福か。

理性なき獣のようなはしたなさで快楽を貪るシリカに微笑みかけながら、アスナは幼子に物事を教える母親のようにゆっくりと言葉を紡ぐ。

「そうやって、ＶＲシステムの中でいっぱいえっちしてるとね……リアルの体も、どんどんえっちになって、どんどんキリトくんの事を好きになっていくの。

私だってそうだったもん。リアルで初めてキリトくんのおち●ぽを見た時ね、私、思わずキリトくんの足元に跪いて……そのままキリトくんのおち●ぽにキスしちゃってたんだよ。しかも、ほとんど無意識に。

ね、キリトくん？」

「ああ、あったあった。アスナ、いきなりぽーっとした顔になっちゃってさ……。すごくキレイだったけど、流石にちょっと驚いたよ」

「だって、だって……なんていうか、本能で理解しちゃったんだもん……。

『ああ、私はキリトくんの為に生まれてきたんだ』って。『キリトくんの男らしくて立派なおち●ぽ様に全てを捧げるために、女の子として今まで生きてきたんだ』って、直感しちゃったんだもん……♥」

隙あらばイチャつき始める永久新婚夫婦は、意味をなさぬ喘ぎ声を上げて肉棒に酔いしれるシリカを挟みながら器用にキスを交わす。唇と唇を吸いあい、水音を立てて舌と舌が絡みあわせながら行われる激しいキス。初な恋人同士がするものとはレベルが違う、心の奥底までつなげあうような濃密なキス。

そんなキスを交わしながらも、二人のシリカを責める手が止まる事はない。キリトはどちゅどちゅと粘着質な音が上がる程に激しくシリカの蜜壺を犯し、アスナもまたシリカのバストに手を這わせ、屹立した乳首をつまんで刺激する。

雄だけが与えられる快楽によって何度も昇天させられ、雌だけが知る弄び方によって色欲の中に沈み込まされながら、シリカはただただ悦楽に融けた媚声で鳴き続ける。

「あっあ〝っんんっはぁっ……ん〝ぅうっ♥　やぁっんっあぁあ〝ああっ♥♥　ちんぽぉっ♥　きりとひゃんのちんぽしゅごひいいいいっ♥　すき、あっあぁあっあ〝っんぅうぅう♥　しゅき、あぁあっ、しゅきっれしゅぅ♥　♥」

満足に呂律も回らなくなる程によがり悶える雌猫の声をＢＧＭに従えて、たっぷりとキスを堪能したあと。名残惜しげな顔で唇を離したアスナは、シリカの頬にそっと手を当てた。

それを合図にしたかのように、二人の上から伸し掛かるキリトの腰使いが一層激しさを増した。シリカの股座から飛び散る愛液の雫が、重なりあう三人の下腹部を汚していく。矢庭に荒くなる夫の吐息を浴びて満足げに微笑みながら、アスナは再びシリカの耳元へ唇を寄せた。

「――だからね、シリカちゃん。シリカちゃんも、私みたいに堕ちちゃおう？

キリトくんの今日一回目の特濃精子、子宮で全部受け取って……『ここはキリトくんと、キリトくんの赤ちゃん専用の場所』ってマーキングしてもらいながら、子作り交尾でイキ癖つけちゃおうね」

「あっあっあぁぁっ♥♥　はひっ、はひぃいいいっ♥　キリトひゃんのせーし、おっ、ほぉっ〝♥　くらっ、ひゃいいいいぃ♥」

それは、人が己を呼ぶ声に応じる時のように。あるいは、獅子の王がプライドの雌と交わる時のように。

本能的な繁殖欲求の高まりと共にシリカの願いを聞き届けたキリトは、彼女の狭い膣道を今一度深々と貫く。雄の遺伝子を乞い願う膣肉が太い肉棒を全方向から締め付ける中、シリカの子宮口に亀頭を

ぴったりと押し当て――抑え込んでいた全てを解き放った。
「あひっ……せー、えき、きて、いぎゅ、いぎゅうぅぅぅぅぅ〃ぅぅぅ♥♥
あ〃――あ〃ーっ、あ〃っ、おっ、おぐっ、灼げちゃ……あ〃っ、あ〃ー、あ〃ーっ♥　あああああ〃ぁぁあぁあーっ♥♥♥♥♥」
雌の体を押さえ込みながら腰と腰を密着させ、体の最も深い部分に叩き込む射精。雌の体は、雄を喜ばせる為にあるのだと教えこむ種付行為。
びくびくと震えながら愛液を撒き散らし、絶頂につぐ絶頂を味わうシリカの胎内に、たっぷりと時間を掛けて大量の精液を流し込む。膣道が繰り返し収縮し、精液を貪欲に搾り取りながら種付けを促す度に、シリカは体を震わせながら口の端より声にならぬ声を上げ続ける。
陰嚢にたっぷりと溜め込まれていた精液は、シリカの子宮を容易に満たす。雌に己の子種を植え付けるという、雄の至上命題――それを別の雌に手伝わせるという、王の如き交尾特権を行使し堪能するキリトの顔と、子宮いっぱいに濃厚な精液を叩き込まれるという極上の悦楽に浸るシリカの顔。その両者の顔を交互に眺めながら、アスナはくすりと微笑む。その笑みはまるで天に座す女神のようであり、同時に地の欲望にまみれた娼婦のようでもあった。
「おつかれさま、シリカちゃん♥　ちゃんと上手に膣内射精（ナカダシ）イキできたねー。えらいえらい」
一先ずの肉壷奉仕の務めを果たしたシリカの髪を撫でて労をねぎらいつつ、アスナは彼女の両足に絡めていた己の脚を動かし、拘束を解いた。
キリトがシリカの両手を解放してやったのは、それから少し遅れての事。空いてしまった片手をシリカの肌に触れさせつつ、もう片方の手でアスナの手を握りながらキリトは行為の余韻に浸る。そうして、この後に続く己の番への期待感に満ちたアスナの瞳と見つめ合いながら、時を過ごすこと暫し。
ようやく快楽の波が落ち着き、シリカが正気を取り戻したのを見計

らい、キリトは納めたままにしていた逸物をシリカの膣内から引き抜いた。

「んんっ、やあっ……♥　あふれ、ちゃ……♥」

愛液と精液にまみれながら姿を現す太い肉槍は、たった一回の射精で萎えようはずもなく、蜜壺を貫く前と同じように天を向いて屹立している。

押し止める栓となっていた太く固い逸物を失ったシリカの股座から、どぷりと音を立てて白濁液が溢れ出し、アスナの下腹部に滑り落ちていく。卵子一つに対し、何十、いや、何万もの精虫が同時に群がっていきそうな程に濃厚な精液を、肌の上で受け止めたアスナが微笑む一方、キリトは脱力したままのシリカの体に手を添えると、そのままアスナの隣へ仰向けに寝かせた。

「あっ、はあ……♥　もう一回、ですか？　キリトさん……♥」

「もう十回くらいはするつもりだけど……でも、まずその前に」

未だ力が戻らぬシリカの片膝に手を添え、キリトは彼女の股を左右に開かせる。仰向けの姿勢でベッドに背を預けるシリカの姿は、まるで潰れたカエルのように無様であり、そしてその無様さが尚更扇情的でもあった。

「そろそろ、こっちも出来上がってる頃だと思うからさ。まずはそっちを試してみようか、シリカ」

「たっ、試すって……何をですか……？」

その答えを口にする代わりに、キリトは大きく開かれたままのシリカの股座、その下方部に突き出たもう一つの栓――黒色をしたアナルプラグを指先でぴしりと弾く。プラグを通して薬液――否、既に反応を終えた球状宝石（ジュエル）とローションに伝わるごく軽い振動ですら、今のシリカを身悶えさせるには十分すぎる程だ。

シリカの反応を確かめたあと、キリトはシステムコンソールを呼び出し、アナルプラグのアイテムデータに手を加え始めた。

「今、シリカの体の中にあるジュエル全部と、このプラグを繋いで一本にしたんだ。

これをさ……一気に引っこ抜いてみたら、面白いと思わないか？」

「お、お腹の中のを……一気に……？」
「ああ。たっぷり入れたから、かなりの数が出来てるはずだ。それを一つ残らず、思いっきり引っ張り出してやるよ」
「はひっ……♥　キリトさん……あ、あたし、その……イッたばっかりで……♥
　まっ、まだ体中、びっ敏感になってて……♥」
「ああ。わかってる」
「そ、そんな時に、そんなことされたら……あたし、あたし……♥
きっと、からだ、こわれちゃいます……♥
　おっおっお尻で気持ちよくなっちゃう、変態さんなんだって、頭に刻み込まれちゃいます……♥」
　脚を開いたまま抵抗する素振りも見せず、期待と興奮に染まりきった雌の表情を浮かべるシリカの様子を見れば、その躊躇いが口だけであることは容易に察せられる。もちろん、それを察したのはアスナも同様だ。ぬいぐるみを抱きしめる姫君のようにシリカの体を抱き寄せ、ベッドの上から動かないよう固定したあと、アスナは小さな頷きをキリトへと送った。
「悪いな。もう時間切れだし――それに、とっくに手遅れだよ。シリカは」
　そういって、キリトはアナルプラグの先端部分を二本の指で挟み込むようにして握り――水平方向へ一切の容赦なく振り抜いた。
　そのモーションをソードスキル《ホリゾンタル》と認識したシステムが自動的にライトエフェクトを展開。数珠状に何十個も連なった、ゴルフボールより一回り大きな球状宝石（ジュエル）が、青紫色の光を纏いながらシリカのアナルを蹂躙し、外へと引き抜かれていく。
「ぴっ、いっ――んぅ〜っ〜――ぴぁあああ〜あ〜あぁぁ〜あ〜あああ〜♥♥♥♥♥」
　肛門から腸内を通り、体の中身を全て引きずり出されていくかのような暴力的にして圧倒的な快感が、シリカの脊髄を駆け抜け、脳の快楽中枢を蹂躙する。横にいるアスナの抑えがあるおかげで、振り抜きの力でシリカの身体がずれる事もない。故に、シリカ自身が体内で作

り出したおもちゃによって擦られる純粋な感触だけが、容赦なくシリカを支配していく。

現実世界でも体感する、排泄時の快感。それによく似た――されど性的欲求のみを追求した、仮想空間だからこそ味わえる非現実的な悦楽。ただでさえ強烈なその感覚に耐えるには、愛しい男に抱かれて深い絶頂を味わったばかりの身体は、あまりに非力で、そして無力だった。

「あ、っ――あひぁ、っ――――――♥♥♥」

ライトエフェクトが収まり、引き抜かれた勢いを失ったジュエルが部屋の床へと落ちる。ぽっかりと口を開けたアナルは、大量のローションを溢れ出させながらひくひくと蠢き、大きなジュエルを強制排出させられた衝撃に酔い痴れる。

そのジュエルの色が、インペリアルトパーズを思わせるシャンパンイエローカラーだと分かる頃には、シリカは身体をびくびくと痙攣させながら、幸せの内に意識を手放していた。

かつて一人の英雄が、子供を喰らう牛頭の怪物を倒さんがため、何人たりとも脱出できぬと謳われた迷宮に挑んだ。そんな英雄に恋をした王女は、彼の無事を願い、迷宮を脱する際の道標となる糸玉を手渡した。そして迷宮の奥底で怪物を打ち破った英雄は、その糸を辿り、見事帰還を果たしたという。

俗に言う、《アリアドネの糸》。まだ幼子の頃、その話を本で読んだアスナは、英雄の冒険譚と王女の愛に胸を躍らせ――それと同時に、こんな疑問も抱いた。

『大好きな人がとても危ない場所に行くとわかっているのに、どうしてアリアドネは彼を止めようとしなかったのだろう』――と。

幼い頃に抱いたその疑問に自分なりの答えを見つけられたのは、それから十数年の後――アスナ自身に大好きな人が出来たあとのことだ。

そんな、愛する人の顔を見下ろしながら、アスナはうつ伏せになっていた身体をゆるゆると動かし、ワンストローク分だけ腰を上下させた。

「んんっ……♥」

一番深い部分で繋がっていた逸物が、ほんの少しの間だけアスナの身体を離れ、そしてすぐにまた蜜壺を満たす。その感覚に強い喜びと安らぎを覚えてしまう事実に、自分がどうしようもなく一匹の雌である事を自覚する。

英雄を導く女神。獅子の元に集う雌獅子。邪竜に攫われし姫君。古来より現代に至るまでありふれた存在である彼女達と同じように、アスナもまた、愛と欲望の下、寵愛を得るために後宮に身を置き、そして数多くの同志を迎え入れる道を選んだ者だった。

深い心地よさと共にアスナが視線を下へと向ければ、愛する人の黒い瞳と視線がぶつかった。

「――動こうか？　アスナ」

「ううん……♥　もうちょっとだけ、このままでも……いい？」

「ああ、わかった」

仰向けの姿勢でベッドに身を預け、アスナの敷布団あるいは抱き枕状態になったまま笑うキリトに、アスナもまた微笑みを返す。

何時間か前の宣言通り、アスナとシリカを相手に十回、更にはおまけでもう何回かの行為をキリトが終えたあと。お互いの身体を休める目的も兼ねて、アスナは繋がったままでゆったりとした時間を過ごす性行為――いわゆるポリネシアン・セックスじみた交わりに耽っていた。

どちらかが我慢できなくなって腰を動かす度、相手が本格的な行為の再開を提示するが、この穏やかな時間が終わるのがもったいなくてついつい首を横に振る――そんな事をもう5度は繰り返しているが、これが意外と愉しい。

シャンパンイエローカラーのジュエルを再び腸内に押し込まれ、そしてその全てを自力で産卵することに成功したばかりのシリカがなんともいえぬ幸せそうな顔で脱力している様子を横目に、アスナは愛

する人と己自身の全てが融け合うような性愛、その片鱗をまったりと味わっていた。

「……あっ♥　今、中でびくってした」

「そんなことまでわかるのか……」

「もちろん。キリトくんのおち●ぽの大きさも、硬さも……たっぷり出してくれた、重たい精液の感触も、ぜーんぶ♥」

胎の内に溜まった大量の精子達が、アスナという雌の卵に向けて我先に襲いかかる光景を想像して頬を緩ませながら、アスナは蕩けた声音で囁く。

「私も、シリカちゃんも、もちろん他の皆も……もうとっくの昔に、キリトくん無しじゃ生きていけない女の子にされちゃってるんだからね。

そこら辺をちゃんと考えておくように。『君子危うきに近寄らず』、だよ？」

「はい。肝に銘じます……」

近寄るどころか、薄紙一枚分の厚さより尚近くまで絶体絶命の窮地に肉薄し続けてきた事を思い出したのか、キリトは頬を引きつらせたままなんとも言えぬ表情で首を縦に振る。『避けて通るは君子の教え、受けて立つのが漢道（おとこみち）』という言葉に従うならば、キリトが歩んできたのは間違いなく後者の方だ。

とはいえ、その首肯がその場しのぎの嘘などという事は無いのだろうが――それでも、アスナは確信する。

たとえ、これまで幾度となく傷ついてきたのだとしても。たとえ、誰も傷つかぬ優しい世界という避難場所へ逃げ込むことができるのだとしても。

彼の目の前に、理不尽な悪意に晒される誰かがいるのならば。その背後に、守るべき誰かを庇っているのならば。きっと、彼は立ち上がる。両刃の剣を手に、自らが傷つくことすらも厭わず立ち上がれてしまうのだと。

「でもね、キリトくん。もし、もしもだよ……。今までみたいに、どうしても危ないことに首を突っ込まなきゃいけなくなっちゃう時が来

たら……。

その時は……無茶しすぎだけは、しないでね」

「『無茶しないでね』じゃないのか？　そこは」

「だって、いっつも無茶するじゃない。キリトくんは。そんな人に『無茶するな』なんて、それこそ無茶な話だと思わない？」

痛いところを突かれたと言わんばかりの顔で、キリトは言葉を詰まらせた。

きっと、迷宮に挑む英雄を見送ったアリアドネも、アスナと同じような気持ちだったのだろう。苦難が待ち受けていると知りながら、それでもこの人は前へと進む。それを止めることは、きっと誰にも出来ない。ならばせめて、微力でも彼の助けとなろう――そんな想いと共に、彼が帰る場所への道標を預けたのだろうと。

ただ一つ、アリアドネとアスナに明確な違いがあるとすれば――。

「キリトくんが誰かのために戦って、傷ついたら……その時は私が――ううん、私達がキリトくんを助けに行くから。現実世界でも、仮想世界でも、どこへだって駆けつけてあげるんだからね」

「でも、アスナ……俺は……」

「わかってるよ。キリトくんが、私達に傷ついてほしくないって思ってることくらい。

でもね、それと同じくらい、私達だってキリトくんに傷ついてほしくないし、苦しんでほしくないんだよ。

そうだよねー、シリカちゃん？」

不意にアスナに水を向けられたシリカは、キリトの隣に寝転んだままコクコクと頷く。

キリトとアスナが休憩している間に正気を取り戻していたらしく、シリカの瞳にははっきりとした意識の光が見て取れる。とはいえ、下半身は男女の体液で汚れたままではあるが。

「あたしも、キリトさんがピンチの時は必ず助けに行きますから！

その、アスナさんほど上手くはできないかもですけど……全力で頑張りますから！

だから、どーんと頼りにしてもらっていいんですよ！」

ぐっ、と可愛らしいガッツポーズをきめながら力強く宣言するシリカの様子に、さしものキリトも破顔し、そして改めて首を縦に振った。

「――わかった。じゃあ、また俺が何かに巻き込まれたら……その時は頼りにさせてもらうよ。アスナ、シリカ」

「うんっ」

「はいっ！」

英雄が戦場に赴く時、剣を手にその側で共に戦える者。プライドの王を弑逆せんと企む身の程知らずなオスが現れた時、容赦なく牙を剥ける雌獅子。邪竜を討たんとする愚者が表れた時、その前に立ちはだかれるだけの気概を秘めた姫君。

その有り様こそ、アスナ、そしてシリカを含め、キリトの閨に侍る権利を持つ乙女達全員に共通しているもの。キリトにただ守られるだけでなく、キリトをただ守るだけでもなく、共に苦難に立ち向かうという強い意思で繋がれた、鋭く靭やかな剣の群れ。

還る者無き迷宮を舞台にした神話の最後、アリアドネと英雄は別離の運命を迎えてしまう。その正確な理由は分かっていないが――たとえそれがどんな理由であったとしても、麗しき剣の乙女達とキリトが離れ離れになることは決して無い。

たとえそこが天空の鋼鉄城を繋ぐ昏き迷宮でも、銃火響く争いの荒野でも、もう一つの現実世界でも、彼と彼女らが隔てられることは無いのだから。

（大好きだよ、キリトくん。ずっと一緒にいようね……）

ぞくりと疼く下半身から伝わる興奮した怒張の感覚に、激しい行為の再開を予感しながら。キリトの左頬へ、アスナはそっと口づけを落とした。

05―1・Ｈｏｌｌｏｗ　Ｄｅｌｕｓｉｏｎ（フィリア・シノン）

――その話をフィリアが持ちかけてきたのは、特にいつもと変わらぬ水曜の夜。

《ＧＧＯ》に大型アップデートが入り、雪原フィールドが実装される数週間前の事だった。

「……曜日限定の新ダンジョン？」

「そうそう」

キリトのプライベートＶＲ空間の一角に設けられた、汎用型のベッドルーム。窓から差し込む満月の光が、夜の昏さを中和して作り出す心地よい薄闇に包まれたその部屋の中には、当然だがベッドが存在する。

体重をしっかりと受け止める分厚いクッションと、その上に敷かれた滑らかなシーツ。遡ること６００秒ほど前まで行われていた行為の残滓を受け止めたシーツの上には、薄灰色の痕跡がいくつも染み込んでいる。

『純白』という言葉をシーツから奪った首魁――キリトは、ベッドの上に仰向けに寝転びながら再び口を開いた。

「《ＧＧＯ》にデカいアップデートが入ったなんて話は聞かなかったけど、いつのまにそんなのが実装されてたんだ……？」

「それがね、キリト。……どうも『実装された』わけじゃなくて、『元々あった』みたいなの」

「……？　どういうことなんだ、フィリア？」

小さなクッションと、そこに乗ったキリトの右腕をまるごと枕にしながら寝転ぶ少女――フィリアの視線が、怪訝な顔をするキリトの瞳とぶつかる。

外ハネの癖っ毛が可愛らしい薄小麦色の髪と、透き通る碧緑色の瞳が特徴的なそのアバターは、フィリアが《ＧＧＯ》で使用しているも

のだ。ぱっと見ただけでは《ＳＡ：Ｏ》のアバターと大きな差は無いが、《ＧＧＯ》仕様の方が僅かに瞳の色が濃い。こうして至近距離で見つめる事ができれば、その差異に気づくことは可能だろう。

尤も、吐息が混じり合う程に近い距離でフィリアと見つめ合う事を許される者は少ない。ましてやそれが男性ともなれば、そんな権利を持つ者はこの世にたった一人しかいないのだが。

「キリト。ジャンクヤードエリアの端の方に、ジャンプするクジラみたいな形をした宇宙船の残骸があるのは知ってる？」

「クジラ……？　……ああ。あの、艦首が地面から斜めに突き出てるでかいやつか」

「当たり。よくわかったね、キリト」

「なんとなく思ったんだよ。フィリアなら、あの残骸をそう言うかも……って」

「えへへ……。なんだか、嬉しいなあ」

満面の笑みを見せるフィリア。視線ともどもキリトの方へと向けたその体を包むのは、男女の秘め事の余韻を除いた他は何も無い。

交わりの熱冷めやらぬフィリアの肌と、そこから立ち上る雌の香りがキリトの本能を刺激し、そしてその中に入り交じる雄の精臭が支配欲を満たす。

この部屋に来てからそれなりに時間が経っているが、精を放ったのはわずか七回ほど。今すぐにでも彼女に襲いかかって続きに取り掛かってもいいのだが――月明かりが照らす薄闇の中、こうしてただ寄り添い寝転ぶ時間の心地よさは、キリトの内なる獣性を抑える理由としては十分だった。

「それでね、キリト。この前、その残骸の近くで、メタルグランドワームとプレイヤーが戦ったみたいなの」

「メタルグランドワームって言ったら……地面を掘って進んでくる中型Ｍｏｂだよな。……まさか、ワームが宇宙船の壁に穴を開けたとか？」

「それがね……どうも違うみたいなの。

噂だと、逃げ回るワームにキレたプレイヤーが、ワームが掘った穴

に手持ちのグレネード弾をありったけ叩き込んだらしくて……その爆発で地面がえぐれて、土の中に埋まってた入口の扉が出てきたんだって」

ほうほうと頷きながらフィリアの話を聞くキリトの脳内に、一瞬、髪留め代わりにナックルガード一体型ナイフを刺した小柄なグレネーダーの姿が浮かび上がる。

益体もない発想を振り払うため、髪をかきあげでもしたいところだが、生憎と両腕は共に動かせない状態にある。頭を軽く振ることで代用としたあと、キリトは改めてフィリアの方を向いた。

「で、その扉の向こうにあるのが……曜日限定の新ダンジョンってわけか」

「その通り。調べた限り、日本時間の金曜日になると扉が開いて、それ以外の日は何をしても開かないんだって」

「……もし、金曜の２３時５９分に突入して、そのまま土曜日になったらどうなるんだ？」

「それ、もう試した人がいるみたい。０時になると同時に、外へ強制転移させられたんだって」

「おおう、そんな仕掛けまであるのか。いよいよもってただの残骸とは思えなくなってきたな……」

「でしょ？　私の勘がね、あの宇宙船の残骸にはきっとものすっごいお宝が眠っているに違いないって言ってるの！

だからね、キリト。明後日の夜、《ＧＧＯ》でトレジャーハントに協力してくれない？」

興奮に目を輝かせたフィリアが、両腕を支えにして上半身を起こす。

一端のトレジャーハンターの顔つきをしたフィリアの碧緑色の瞳は、『もちろんだ』と快く首を縦に振るキリトを捉えたあと、そのままキリトの左腕方向へ視線を滑らせた。

「シノンも、よかったら一緒にどう？　《ＧＧＯ》の事なら、やっぱりシノンが一番頼りになるし」

「――そうね」

少しばかり高い位置にあるフィリアの視線が見下ろす先。キリトの左腕を枕代わりに寝転びながら文庫本のページを捲っていた《氷の狙撃手》――もといシノンは、個人ストレージに本をしまいこみ、フィリアへと視線を合わせた。

今のシノンが、フィリア同様に一糸まとわぬ姿であることは言うまでもないだろう。白い肌の上に浮かぶ幾筋かの汗と、首筋と胸元、そして下腹部に残るキスマークへ無意識に指先を這わせるその姿は、彼女もまた先程までの行為に加わっていたことを如実に示していた。

「新しいダンジョンには興味あるし、喜んで協力させてもらうわ。フィリア。

……でも、そうね。私とヘカートⅡを駆り出すっていうなら、タダってわけにはいかないかな」

「じゃ、じゃあ、獲得したドロップ品と、お宝の金額分を山分けで……」

「大丈夫よ、フィリアから弾丸一発分だって取る気は無いから。……ねぇ、キリト？」

氷のように透き通ったターコイズブルーの瞳が、何かを期待するような雰囲気と共にキリトを見つめる。

「……銀座でケーキがご所望でしょうか。《ＧＧＯ》最強のスナイパー様」

「気持ちだけ受け取っておくわ。ユウキのドローンやサーバのパーツ代で、今月厳しいんでしょ？」

「なっ……!?　ドローンはともかく、パーツの件は誰にも言ってないと思うんだけど……一体どこからその情報を……？」

「この間、ユイちゃんが『パパがＳＳＤとＨＤＤを増設してくれたおかげでミラーリングが捗ります！　ＵＰＳも最新の物に切り替わったのでますます安心です！』ってはしゃいでたのよ。

システム的なことはよくわからないけど、ここに関わるパーツってことは……安い買い物じゃないんでしょ」

シノンの言う通り、実際安い買い物ではなかった。サーバの性能向上と保守に取り掛かる度に高確率で発生する、ゼロが４つつくレベルの出費は、ごく普通の学生であるキリトにとっては中々に厳しい。そ

れに見合う収入源は無くもないが、死んだはずのあの男とその関連機関の被検体（モルモット）になる回数はあまり増やしたくない。

眉根を寄せたまま、なんとも気まずそうに頷くキリトの様子に、シノンはくすくすと笑みを零した。

「あのお店のケーキはすごく美味しかったけど、お財布には優しくないものね……。

代わりと言ってはなんだけど……次の『ＳＪ』、私の相棒として一緒に出てくれるだけでいいわ」

「『ＳＪ』？　『ＢｏＢ』じゃなくて？」

「そ。もし、第三回『ＢｏＢ』優勝者タッグ兼『ＨＳＧＣ』初代優勝者チームが、『ＳＪ』まで制覇したら……とっても面白いと思わない？」

「――それは確かに、面白そうだ」

「じゃあ決まりね。契約料は……これで、ね」

そう言ってシノンは両腕をキリトの首に回し、上から覆いかぶさるようにして有無を言わさず男の唇を奪う。今日何度目となるかわからない口づけの主導権をシノンに握らせたまま、キリトは空いてしまった手を彼女の腰に回し、シノンがキスしやすいようにそっと支える。

「ん……もっと、ぎゅっとして……♥」

シノンは裸身をぴったりと密着させ、唇と唇の間から水音が溢れる程に情熱的な口づけを貪る。舌を絡ませ、口内全てを愛しい男に捧げるその振る舞いを見て、《氷の狙撃手》と呼ばれるスナイパーと彼女が同一人物であると理解できる人間がどれほど居ようか。

普段のクールな雰囲気とはかけ離れた彼女の背中――より正確に言うなら、今まさにキリトの手が伸びている、腰と尻の境目よりほんの少しだけ上のエリアには、蜘蛛の巣に絡め取られた蝶を思わせる大ぶりのタトゥーが、黒黒した色で彫り込まれている。

――ただ、遠目に見ただけでは気づけないだろう。その蝶の羽が、曲線的に戯画化された弓を組み合わせたデザインで構成されている事も。そして、蝶を囚える蜘蛛の巣、その糸の中に、まるで遥か彼方の銀河系を描いたＳＦ映画に出てくるような細身の剣が一振りだけ

描かれている事も。

《ＧＧＯ》など、アバターのパラメータを書き換えることでタトゥーを入れられるゲームは珍しくない。ただし、この空間に実装されているのは、既存のアバターの肌の上にタトゥーのグラフィックを描画しているというだけの単純なものだ。

当然、元になっているアバターデータを変更しているわけではないため、ここで入れたタトゥーを他のＶＲＭＭＯに引き継ぐことはできないが――それが逆に気軽さとなり、日替わりでタトゥーを入れたり、デザインを別のものに変更したり、あるいは消したりするのも今では珍しい光景では無くなっている。

そしてその描画システムは、また別の形でも役立っていた。

「――ねえ、キリト。見て見て」

ベッドの上にぺたりと座り込んだフィリアがキリトの名を呼んだのは、口づけをたっぷりと堪能したシノンが元の位置に戻るのとほぼ同じタイミングだった。

「これね。この間、《ＧＧＯ》でドロップした『アファシス』用の防具なんだけど……」

空中に呼び出したアイテムウィンドウをフィリアが操作すれば、聞き慣れた装備アイテムオブジェクト化ＳＥが響く。直後、フィリアの爪先に光の粒子が集まり出す。その粒子が、爪先から頭部方向へ駆け上っていくのと同じタイミングで、フィリアの体が徐々に装備をまとっていく。

夜の薄闇とは一線を画す深い黒色をした、エナメルやラテックスを思わせる質感の素材が、フィリアのボディラインをナノ単位の精度でトレース。一分の空きもなくぴたりと貼り付きながら、彼女の爪先から首元までを隙間なく覆っていく。

つやつやとした特殊素材が淡い月明かりを照り返して造る独特な光沢、そして陰が、フィリアの起伏豊かなスタイルを強調する。ある意味では裸よりもエロティックな姿となったフィリア。その黒いボディスーツの脚や太腿の一部、肩や手の甲などに、ダークイエローの追加装甲が展開される。

「……どう？　こっちだと、アファシスじゃなくても装備できるんだよ」

首から上以外の全てを黒とダークイエローのボディスーツで覆い、とろりとした笑みを浮かべるフィリアの姿があまりに扇情的で、キリトは思わず生唾を呑んでいた。

《ＧＧＯ》がＶＲＭＭＯである以上、ステータスなどの諸条件によってアイテム装備の可否が発生するのは当然だ。しかし、この空間に於いては、元データのグラフィックと接触や質感判定などの一部を流用し、アイテムとして出力しているだけだ。ステータスやその他諸データを参照し、装備可否を判定するという仕組みそのものが存在しない。アファシス用の装備をフィリアが使用できるのも、タトゥー同様に描画システムの恩恵だった。

「ほら、触ってみて。キリト。すべすべしてて、とっても気持ちいいよ……♥」

「ほう……それじゃあ、遠慮なく」

獲物を前にした女豹のように、四つん這いの姿勢でキリトの側へと身体を寄せながら、フィリアは声と視線で雄を誘惑する。興味深げな視線をフィリアに向けるシノンに左腕を預けたまま、キリトは右腕を伸ばし、手のひらをフィリアの頬へ優しく触れさせた。

「確かに、気持ちいいな」

「もう。そっちじゃないよー、キリト」

「おっと、そうだったか。でも、こっちもすべすべしてて気持ちいいよ、フィリア」

「そう？　じゃあ、もうちょっとだけね……♥」

言葉の上では怒ってみせつつも、フィリアは頬に触れる手を引き剥がそうとはしない。むしろ、飼い主に甘える猫のようにそっと身をくねらせ、撫でられやすい態勢を作る。

実際、フィリアのすべすべもちもちとした肌は手触りが実によい。《ザ・シード》規格が持つＭｏｂ行動制御処理やＮＰＣ内部制御処理をほぼ全て封印する事で浮いた処理リソースを、髪の毛や肌の接触感覚処理につぎ込んで大幅なグレードアップを行った甲斐もあろうとい

うもの。代償としてＮＰＣをこの空間内に展開できなくはなったが、この感触とフィリア達の笑顔に比べたら安いものだ。

「なんだか、こうしてると……フィリアが俺の『アファシス』になったみたいに思えてくるな」

「本当？　確かキリトって、まだアファシス手に入れてないんだっけ……。

――じゃあ、せっかくだし。今だけ、私がキリトのアファシスになってあげようか？」

「お願いします、ぜひ」

《ＧＧＯ》における最新アップデートの一つ・プレイヤーサポートＡＩ『アファシス』。それをあと一歩の所で手に入れ損ねた例の件が、未だに尾を引いているキリトにとって、フィリアのその提案は魅力的に過ぎた。一も二もなく即答したとして、誰にか彼を責められようか。

「ふふっ。それじゃあ……キリト専用サポートユニット・アファシス。個体名『フィリア』。

不束者ですがどうぞ末永くよろしくお願いします、キリト……ううん、ご主人様♥」

「よろしくな、フィリア。早速だけど……所有者認証（アクティベート）、いいかな？」

「もちろん。喜んで」

本物のアファシスのように振る舞いながら、フィリアはそのまま体を近づけ、キリトと唇を重ねる。

「ふふっ……♥」

キスを通じて伝わる、フィリアの柔らかな唇の感触。触れる肌を通して伝わる、フィリアが纏うボディスーツの滑らかな感触。体全体をキリトに擦り付けるようにしながら、浅く軽いキスの雨を降らせ、異なる『すべすべ』の感触を使ってキリトに奉仕する。

興奮した心臓が百度脈打つ程の間、口づけは幾度となく交わされ――キリトの口の周りを己の唾液でべとべとにしたあと、フィリアはようやく唇と唇の間に距離を作った。ボディスーツで覆った身体だけは、しっかりと密着させたままで。

「――ね。すべすべしてて、気持ちいいでしょ。キリト。

私もね、キリトの体にぴとーってくっついてると……ドキドキして、すごく気持ちいいんだよ♥」

キリトの体に擦り寄ったまま、フィリアは視線を横へと動かし、同じ男の、違う腕に絡みつく女の瞳をじっと見つめた。

「ところで。キリトの〝相棒〟さん？」

「何かしら。キリトの〝アファシス〟さん？」

ターコイズブルーの瞳が、碧緑色の瞳をじっと見つめ返す。

片や、無防備な獲物をスコープに捉えたときのような。片や、お宝のある部屋に仕掛けられたトラップを解除した時のような。期待と興奮を隠しきれない笑みを浮かべた二人の女――あるいは、二匹の雌は、キリトの体を左右から挟み込み、その腕に自らの体を絡め取らせたまま、しっとりと言葉を交わす。

「せっかくキリトのアファシスになったんだし、今日はちょっと趣向を変えて……。

これでご主人様を気持ちよ～くしてあげようかなって思うんだけど……シノンも協力してくれる？」

そう言って、ストレージウインドウを操作したフィリアは、二つのアイテムをシノンの手元に直接オブジェクト化する。

妙に粘度と透明度の高い何らかの液体が入ったプラスチックボトル、そして軟質素材で作られた思しき透明の円筒を受け取ったシノンは、少しばかり高い位置に掲げてしげしげと眺める。直後、サブウインドウが展開され、シノンが手にしたアイテムの名前が表示された。

『ごっくんできちゃうラブローション』と『非貫通型オナホール（カスタムタイプ・スケルトンカラー）』という、実にありきたりな名前が。

「悪くないアイデアね……あなたのご主人様も嫌がって無さそうだし、さっそくやっちゃいましょう。フィリア」

「あ……一応、キリトにお伺いを立てておいたほうがいいかな……？」

「大丈夫でしょ。あっちはさっきからずっと、臨戦態勢みたいだから」

二人の視線は一瞬だけキリトの雄の象徴へと向き、その後にキリトの方へと向けられた。

好きにしてくれ、という意思を込めつつ、キリトが左右の手で彼女

らの背中をぽんぽんと叩いてやれば、光沢質素材を纏うアファシスと一糸まとわぬ姿の相棒は、揃ってにたりと笑ってみせた。

「それじゃあ、フィリア……はい、あーん」

「あーんっ」

首を傾けて上を向いたフィリアは、シノンに促されるまま口を大きく開ける。プラスチックボトルの蓋を開けたシノンは、先端部をフィリアの口内に充てがうと、ボトルをぎゅっと握りつぶすようにして中身をフィリアの口の中へと注ぎ込んだ。

ねっとりとしたローションをボトルの半分ほど流し込んだ所で、シノンはボトルを放り捨てる。持ち主の手を離れたボトルが発光エフェクトを伴いながら消滅する光景を横目に見ながら、フィリアは口を閉じ、そのままもごもごと舌を蠢かす。

『こうやってローションをお口の中で温めながら、唾液と一緒に撹拌してあげて……っと』

「手伝うわよ、フィリア」

『ほんと？　じゃあ、お願いね。シノン』

合成音声システムで作られたフィリアの声と会話しながら、シノンは両手を伸ばしてフィリアを抱き寄せ、そのまま彼女の唇を奪う。

瞼を閉じて口づけを交わす乙女達の横顔が、ちょうどキリトの真正面に来る位置に陣取り、シノンは唇を薄く開く。そこを通って流れ込み始めたローションがシノンの口内を覆うより早く、するりと滑り込んだフィリアの舌先が、宝を探すハンターのようにシノンの口の中で動き回り始めた。

『ふふふっ。シノンの口の中、あったかい……あ、ここちょっとだけキリトの味がして、おいし』

『そういうフィリアの舌も、結構美味しいわよ。このまま食べちゃいたいくらい』

粘つくローションを互いの口内で行き来させながら、シノンとフィリアは唇を密着させたまま舌を絡め合う。合成音声システムを使って会話しつつ、時折見せる微かな所作だけでキリトを挑発しながら、たっぷりの唾液とわずかな空気をローションに含ませてより上質な

粘液へと育てていく。
　ぐちゅぐちゅと鳴る粘ついた水音を唇の端から溢しながら、シノンは一層強くフィリアを抱き寄せると、誘い込んだ彼女の舌へ自らの舌を這わす。舌先を軽く上下させて先端を刺激し、舌を捻るようにして奥へと引き込む。うねらせた舌の裏面でフィリアの舌をねぶりながら、口蓋に舌の表面を押し当ててたっぷりと唾液を溢れさせていく。
『シノンのキス、っていうか、舌フェラ？　すっごくえっちい……♥』
『フィリアのお褒めに預かるなんて光栄ね。
　ま、それもこれも全部、あなたのご主人様にたっぷり仕込んでもらった賜物なんだけど――ね、キリト？』
　フィリアとキスを続けたまま、シノンは片方の瞼を上げると、己に舌技を仕込んだ主犯格である黒髪の男をじっと見つめる。怜悧な、しかして揶揄１００％の視線に射抜かれたキリトが苦笑していると、合成音声システムから再びシノンの声が流れ出した。
『とぼけた顔しちゃって。《ＧＧＯ》で私と模擬戦（トレーニング）する度、こっちでたっぷり拷問（オシオキ）してくれたの……忘れたとは言わせないわよ』
「え？　いや、さすがに拷問までした覚えは無いぞ……シノン」
『いいえ、したわよ。言い逃れが出来ないレベルのを、何回も、何回も……』
「……差し支えなければ、内容を聞いても？」
『決まってるじゃない。汗まみれですっごい雄臭くなったあなたの勃起ち●ぽを私の目の前に突き出しておきながら、キスも頬擦りも禁止して、ニオイだけでお預けさせるなんていう……酷い拷問よ』
『うっわあ……キリトのチ●ポが目の前にあるのに、ペットみたいに我慢させられるなんて……♥　キリト、ひどすぎるよ……♥　そんな事されてマトモでいられる子なんて、私達の中にいるわけないのに……♥』
　シノン同様に片瞼を上げたフィリアが、キリトを横目でじっと見つめる。言葉の上でこそ詰りながらも、その視線には主人に媚びる雌の色がありありと浮かぶ。
　無論それは、唇を重ね、舌を絡め合いながら粘液をやりとりするも

う一匹の雌も同様に。

『この人、「シノンがちゃんとおねだりできるまではお預けだぞ」って言うから……私、頑張っておねだりしたのよ？

裸になって、頭がブッ飛んじゃう危ないおクスリいっぱい飲んで、餌を待つ犬みたいに大きく開けた口から精一杯舌を突き出して……なのにキリトったら、「よし」って言ってくれるまで12秒もかかったのよ？』

『そんなにお預けさせられたの？　キリト、やっぱりひどすぎ……♥

私だったら途中で絶対泣いちゃうよ♥』

『ひどい話でしょう？　だから……今日はたっぷり、キリトにお返ししてあげましょ』

口内のローションを唾液ごとフィリアの口の中に押し戻したあと、シノンはようやく唇を離れさせる。そうして、口と口の間に掛かった粘液の橋が千切れ落ちるのを待ち、フィリアの口元にオナホールを差し出す。

狭い開口部へ両側から指を差し入れ、入り口を広げたシリコン製の筒を真上に向けたまま、シノンはこくりと頷いてフィリアを促した。

「いいわよ、フィリア」

『はーい』

キリトに見せつけるようにゆっくりと口を開けたフィリアは、中に溜まったローションを最後に一混ぜすると、そのまま顔を下へ傾けた。

重力演算に従ったローションがフィリアの口から溢れ落ち、細い滝のように連なりながらオナホール内部へと注ぎ込まれていく。シノンとフィリアが丹念に作り上げた粘液は、オナホールそれ自体に搭載された漏斗めいた機能によって、一滴たりとも無駄になることはない。

やがて、ねっとりと滑り込んだローションがホールの奥の奥までを満たしきる。その底面を掌でとんとんと軽く叩き、隅々まで行き渡ったことを確認したシノンは、キリトの胸板の上に頬を寄せるようにして身体を倒した。

「キリト……」

獲物を手に掛ける直前の狩猟動物を思わせる、獰猛な視線がキリトの瞳を間近で射抜く。ごく自然な所作でキリトの左腕を絡め取り封じる動きと共に。

無論、彼の瞳を狙う視線の主はシノン一人だけに非ず。宝箱に仕掛けられた罠を解除し終えた時のような、期待と興奮に満ちたハンターの視線が、キリトを至近より貫く。

「キーリトっ♥」

口の中をすっかり空にしたフィリアも、シノンと同様にうつ伏せに寝転び、キリトの体と己の体を密着させる。

右腕をフィリアの柔らかな肢体に、左腕をシノンの靭やかな肢体に封じられているとあっては、さしもの《二刀流》にも打つ手がない。無論、膂力（STR）という武器を用いれば、彼女らの体を跳ね除けることは可能だが――雄の本能を左右から刺激する、柔らかにして滑らかなバストの感触を力づくで振りほどく理由がどこにあるというのだろうか。

「ねえ、キリト。今から私とシノンに、どんなことをされちゃうと思う？」

「優秀なアファシスであるフィリアが正義の心に目覚めて俺を解放してくれると思う」

「残念だけど、はっずれー。正解は……シノンをいじめた罰として、キリトにはこのオナホールを使ってもらいまーす♪」

朗らかな微笑みと共に主人の訴えを却下したフィリアが伸ばす片腕の先にあるのは、先程ローションを注ぎ込んだばかりのオナホール。シノンの左手とフィリアの右手によって左右から支えられたオナホールは、キリトの下腹部で屹立する逸物の真上まで運ばれたあと、開口部が下に向くようにくるりと縦回転させられた。中身が溢れてこないのもホールに搭載された機能の賜物である。

諸々の準備が整ってしまったことを理解したキリトが、諦めと共にフィリアから目を逸らすと、反対側にいるシノンと自然に目が合った。

「キリト。あなたがこんなおもちゃで気持ちよくなっちゃう時の顔

……特等席でじっくり見ててあげるわね」
「見逃してくれたり……は……？」
「するわけないでしょ。私、一度狙った獲物は逃さない主義だから」
氷の冷徹さを以て言ってのけたあと、シノンは、そしてフィリアは、息ぴったりの動作でオナホールの開口部を肉棒の先端に充てがうと、そのまま真下へと降ろす。
亀頭によってみちみちと押し拡げられた開口部は、どうにかこうにか逸物を受け入れることに成功した。柔らかなシリコン素材で作られたホールは、シノンとフィリアの手によって少しずつ押し下げられ、ぐちゅりと音を立てて太い肉槍を呑み込んでいく。
「う、おあっ……！」
フィリアとシノンの口内で温められ、ねっとりと熟成されたローションに包み込まれながら、素材の感触と内側に刻まれた特殊形状から伝わる独特の感触が、女体を貪る時とはまた異なる快感となってキリトを襲う。
ホールを動かすリズムやペースはもちろん、今や生殺与奪すらも思うがままにしながら、シノンとフィリアは妖しく微笑む。
「いい顔ね、キリト……。なんだか、私までゾクゾクしちゃう。
ほんのちょっと前まで、自分の腕の中であんあん啼かせてた女二人に捕まえられて……一方的に弄ばれてるっていうのに、ね」
「そんなにこのオナホが気持ちいいの、キリト？　なんだか、浮気されてるみたいで複雑……ねえ、シノン？」
「ええ、そうね。キリトの事を好きでもなんでもない、ただのおもちゃにしこしこされて、こんなにち●ぽを固くしちゃうなんて……変態ね」
耳元に注がれる甘い声音と、熱の籠もった吐息。腕に伝わる、柔肌と光沢素材の感触。媚びるように太腿に擦り付けられる雌の秘裂と、蔦のように絡みつく細い脚。優しく、されど容赦のない悦楽をキリトの左右から浴びせかけながら、シノンとフィリアは透明なアダルトグッズを上下させ続ける。
男のツボを心得たかのように緩急のついた上下運動に焦らされな

がらも、気丈に我慢しつづけるキリト。その耳朶や首筋にシノンが甘く噛みついてじゃれついている間に、フィリアも右耳へ唇を寄せる。
「ねえ、キリト。キリトも……やっぱり、一人でこういう事してるの？」
「そりゃあ……まあ、俺も若くて健全な男ですから……。さすがにこういう……道具を使ったことは無いけどさ」
「ふぅん、やっぱりそうなんだ」
「そういうフィリアこそ……いや、なんでもない。忘れてくれ」
「残念でした。キリトのアファシスはとっても優秀なので、忘れてあげませーん♪」
　場の勢いと流れで、女子に気軽に聞くべきではない内容を口にしたことに気づいたキリトだったが、取り繕おうにも時既に遅し。
　言わんとしたことをフィリアにしっかりと聞き咎められ、『デリカシー無さすぎだよ、キリト』というお小言でも頂戴するかと覚悟したキリトだったが――意外なことにそうはならなかった。
「……まあ。……私もね、若くて健全な女の子……だし？」
　若干の躊躇いと共に放たれた、オウム返しのようなその言葉が意味する所は一つしかない。蜂蜜に砂糖を溶かし込んだ甘い囁きでキリトの鼓膜を喜ばせつつ、ホールを動かすフィリアの手が止まることはない。
「ほら、私って一人暮らしでしょ？　リアルの部屋で、一人でシてるとね……どうしても、キリトのことばっかり妄想しちゃうんだ」
「お、俺の事を？　……ちなみに、どんな内容なんだ？」
「色々だよ。《ＳＡＯ》でホロウ・エリアから助け出してもらった後みたいに、キリトが私の隣で添い寝してくれる……とか。
　でも、一番多いのは……キリトにね、ひどいことされちゃう感じの妄想かな」
　ゾクリとするほどに官能的な声が、フィリアの唇から零れ落ちる。寄り添い奉仕する全身と共に、声や言の葉すらも雄を魅了する為の道具として使うその様からは、ホロウ・エリアで初めて彼女と出会った時に感じた張り詰めた痛々しさは微塵も感じられない。

「たとえばね、デート中のキリトとアスナに、私の部屋をラブホ代わりに使われちゃったりする妄想とか。

私のベッドの上で、二人がいちゃいちゃエッチしてるところをた～っぷり見せつけられながら、お風呂の用意をさせられたり、時々お掃除フェラを許してもらったり……みたいな」

「……言い訳できる余地が一切ないレベルで最低だな、俺」

「しょうがないよ。だって、私の妄想上のキリトだもん。

それにほら、実際はラブホ代わりにするどころか、あんまり遊びにも来てくれないし。たぶん、シノンの方もそんな感じでしょ？」

「ええ、フィリアの言う通りね。たまにバイクで送ってくれる時だって、部屋の前まではエスコートしてくれるけど……拍子抜けするくらい簡単に帰っちゃうのよね、この人。

我慢強いと言うか、義理堅いというか……」

左右からちくりちくりとお小言を突き刺されながら、キリトは曖昧な苦笑いを浮かべる。

年頃の、しかも一人で暮らしているような女性の部屋に気安く上がらない程度の常識、そして自制心は、キリトだって持ち合わせている。よしんば部屋に上がったからといって、即座に理性が吹き飛んで獣になるような事は無いとはいえ――『間違い』というのはいつ起こるかわからない。

彼女らと末永く人生を共にしていく為にも、責任を取れない若輩の間は、現実空間で己に掛ける理性の枷を固くしておくに越したことはない。たとえ、キリトの決意をわかった上でからかいのネタにしてくる女性が両隣にいるとしてもだ。

「他にもね、キリト。いっぱい、妄想したんだよ……♥

危険日なのに、たまたま近くまで来たからって理由だけで……キリトにお遊び感覚で種付けセックスされちゃうのとか♥

公園の男子トイレに連れ込まれて、キリト専用の肉便器にされちゃうのとかも……♥　あ、これはこの間シたよね。すっごく気持ちよくて、何回も気絶しちゃうかと思った♥」

フィリアの言葉に、先日愉しんだ若干ハードなプレイを思い出させ

られたキリトの怒張が、尚一層硬さを増す。
　その感触をオナホール越しの指先で察知したのか、シノンはむむと眉根を寄せると、フィリアに対抗するようにキリトの耳元へ唇を近づける。
「ねえ、キリト。フィリアほどじゃないけど、私も結構……『妄想』するのよ」
「シノンも？」
「ええ。たとえば……いつもどおり部屋の前まで送ってくれたあなたが、急に『送り狼』の本性を表して……力づくで部屋に押し込まれた私は、朝まであなたに好き放題されちゃう……そんな妄想とかを、ね」
「それはまた……生々しい妄想だな」
「ええ。生々しいでしょう？　だから、あなたに家まで送ってもらうとね……時々、考えたりするの。
『私の妄想どおりなら、ここでキリトが襲いかかってきて……無理矢理犯されちゃうんだ』――そんな事ばっかりを」
　どこか、そうなることを期待するような――否、『そうなることを期待している』としか聞こえない挑発的な声音で、シノンは甘やかに囁く。寄り添う素肌を通して伝わるのは、フィリアへのわずかな嫉妬が入り混じった、氷を溶かすほどの熱だ。
「これはある人から聞いたんだけど……。仮想世界でいっぱいセックスしてから、現実世界で同じ人に『初めて』を奪われるとね……抱かれてる間に、現実の体も思い出しちゃうそうなの」
「思い……出す？」
「ええ、そう。誰かさんの立派なち●ぽで開発されまくった頭と心が、処女（バージン）を捧げたばっかりの体を内側から侵食していって……いつのまにか、頭が真っ白になるくらい気持ちよくさせられちゃうんですって」
　誘惑の睦言を注ぎ込みながら、上下するオナホールとシンクロさせるような動きで、シノンは股座をキリトの太腿にこすり付ける。発情期の獣のようなその行為はまるで、キリトの肉棒を包み込んでいるのはシリコン製のおもちゃなどではなく、自分の秘所だと無言の内に主

張するかのようだ。
「ね、キリトも……想像してみて。
嫌がる私を押し倒して……ぱんぱんっ、ぱんぱんって音を立てながら、女の子の一番深いところをち●ぽで一突きする度に……私の抵抗がどんどん弱くなって、あなたを受け入れてしまう所を。
はじめてのはずなのに、男の人に襲われるなんて怖くてたまらないはずなのに……とっくの昔にあなたの雌にされてた事を思い出した途端に、とろっとろに蕩けた顔で悦び始めるシノン――いいえ、『朝田詩乃』の姿を……♥」
キリトとシノンを繋ぐ過去の事件も、本名すらも差し出しながら、シノンはひたすらに愛する男の情欲を煽る。
当然、そんな事をされてフィリアが黙っているわけもない。
「シノンだけじゃなくて……『竹宮琴音』のことも想像してよ、キリト……。
キリトにやりたい放題されても、お便所扱いされても嬉しくなっちゃえる媚びっ媚びのお手軽ま●こ……キリトの好きな時に呼びつけられて、便利なザーメン処理器として使い潰されたがってる女の子のことを……♥」
シノンに負けじと、ナノ素材に覆われた体を一分の隙も無いほどに密着させながらフィリアもまた誘惑の睦言を囁く。愛する男の肉棒をオナホールで扱き、空想の中に己の痴態を描かせながら。
そして、フィリアがそうするならば――シノンが黙っているワケも無いのもまた道理。
「フィリアにそんなひどいことしちゃダメよ、キリト……そのかわり、私のことを考えて。
あなたが命がけで守ってくれた女の子を、あなた好みに躾け直すところを想像しながら……いっぱい気持ちよくなっていいんだから……♥」
「だーめーっ。キリトには、私のことを考えてもらうの。
キリトがホロウ・エリアから助け出してくれた悪い子を、お仕置きセックスでち●ぽ中毒にさせるところを想像しながら……いーっぱ

い気持ちよくなってもらうの♥」

自らの言葉に昂る、少女達の熱い吐息。その熱量に正比例するかのようにして、オナホールのピストン運動は激しさを増していく。

人という生物種が成り立った頃より、他の雄の精を掻き出すために形成されているカリ首にこそげ取られたローションが、太い肉棒によって限界まで押し拡げられた接合部からぶちゅぶちゅと音を立てて溢れ出ていく。

「わかるでしょう、キリト。シノン（わたし）は心から愛している人にレイプされてるのに、悲しむどころか、気づいたら自分から腰を振って精液おねだりしてるような浅ましい女だって……♥」

「わかるよね、キリト。フィリア（わたし）は世界一大好きな人のオナニー道具と同じ……ううん、それ以下の扱いをされてるのに、もっともっと使ってほしいって思っちゃう変態なんだって……♥」

「部屋の中に上げたらどうなるか分かってたのに、我慢できずにキリトを誘惑しちゃう子なんだから、遠慮なんてしなくていいの」

「呼び出されたら何をされるわかってるのに、喜んでキリトの言うことを聞いて抱かれちゃう子なんだから、キリトの好きなように使って」

「隣の部屋だけじゃなくて、アパート中の全部の部屋に、私の喘ぎ声が聞こえちゃうくらい乱暴にシて……♥　近所の人達全員に、私はキリトのち●ぽに逆らえない淫乱な雌なんだってバレちゃうくらい、激しく……♥」

「私の部屋中ぜーんぶ、キリトの匂いでいっぱいにして……。部屋に帰ってくる度に『ここにキリトが居てくれたんだ』って思い出して、すぐに発情オナニー始められちゃうくらいたっぷりマーキングして……♥」

左耳にシノンの声が注がれ、右耳にフィリアの声が流れ込む。全身尽くを使いながら雄の本能を掻き立て、空想上の現実にいる己を愛する男への捧げ物として辱めていく。

その蜜声と共に動き続けたオナホールは、今や射精を促すためだけの激しい上下動へとシフト。全神経がひたすらそこに引き寄せられ

ていくかのような感覚がキリトを襲う。
　今にも陰嚢から飛び出そうな子種達の気配を察したのか、あるいは日頃から抱かれ続けているおかげか。キリトが達する気配を、シノンとフィリアは敏感に感じ取った。
「ふふっ、キリトのおち●ぽ……すっごくびくびくしてる……♥」
「そろそろ射精したいんだね、キリト……。いいよ、いっぱい我慢した分、いつでも好きな時に気持ちよくなって……♥」
「シノンは俺のモノだって教えこみながら……♥」
「フィリアは俺のモノだって刻みこみながら……♥」
「受精させて欲しくてぐちょぐちょに泣いてるシノンのおま●こに、びゅーっ、びゅーってザーメン叩きつけて……私の子宮、あなたの重たくて濃厚なザーメンで全部満杯にして♥」
「ち●ぽを気持ちよくする為の穴として使ってもらえてすっごく喜んでるフィリアのおま●こに、特濃精液をどぷっ、どぷっ、て好き放題注ぎ込んで……私の卵子、キリトのつよ～い精子でたっぷり輪姦して♥」
　そうして、シノンとフィリアは、キリトの耳元に唇を寄せて――。
「キリト、愛してるわ」
「大好きだよ、キリト」
　まるで示し合わせたかのように全くの同タイミングで放たれる、純粋さと色香に満ち満ちた愛の囁き。
　その声がキリトの理性を溶かすのと同時に、オナホールの最後のワンストロークが、キリトの肉棒を根本まで深々と呑み込んだ。
「――っっ!!」
　射精の引き金となったのは、ホールの動きか、それとも囁きだったのか。
　シリコン素材の筒越しに、乙女二人の嫋やかな指に包まれたまま、キリトの肉棒はついに精液を解き放つ。
　丁寧に焦らされ、そして煽られ続けた逸物は、びくりびくりとその身を震わせながら陰嚢が生産した濃密な子種汁を次々に送り出す。大切な精液を一滴たりとも逃さないよう設計されたオナホールの先

端部は、射精を感知すると同時にまるでコンドームかのように膨らみながらと、大量の精液をその内部にしっかりと溜め込んでいく。
「相変わらず、すっごい量だね……キリト♥　見てるだけで妊娠させられちゃいそう……」
「これ……女の子の中に無遠慮に出しちゃっていい量じゃないわよね、絶対……」
「シノンの言う通りだよ、キリト。……まあ、でも？　現実世界のキリトがどうしてもって言うなら……私は、いいけど？」
「――だ、そうよ。よかったわね、キリト。ああ、もちろん私は遠慮しておくから、フィリアに任せるわ」
「え？　シノンはいいの？」
「ええ、そう。だって、この人の子供を産むのは、もう何年かあとにするって決めてるもの。
……といっても、キリトが本気で襲いかかってきたら……抵抗した所で無意味でしょうから、あとはキリトの思うままに孕まされちゃうんでしょうけど」
蠕動する肉棒が一回分の射精を終えるまでの間も、シノンとフィリアは誘惑の言の葉を紡ぐ。シリコン製の偽女性器を通して伝わる、肉棒の蠕動に心を満たされながら、キリトが射精を終えるのをじっと待つ。
やがて、水風船のように膨らんだオナホールの先端部分が、白濁した欲情の証を受け止めきったのを確認したあと、二人はゆっくりとオナホールを真上へと引き抜いた。
「……いただき」
先端部にどっぷりと重い精液を押し留めたオナホール。それをシノンがこっそりと自らの個人ストレージに格納する一方で、フィリアの白い指は射精を為したばかりの肉棒を優しく労る。
「キリトも、キリトのおち●ぽさんも、お射精いっぱいお疲れ様でした♥
でも……出したばっかりなのに、まだまだ元気なんだね……♥　もしかして、満足してなかったりするのかなー？」

親指と人差指で作ったリングを逸物に添わせたフィリアは、付着したローションの残滓を拭き取りながら指の輪をゆったりと上下させる。何度めかになる射精を終えたばかりだというのに一向に硬度を失わない肉棒に添えられた指先が、無言の内に次の行為を誘う。

据え膳食わぬはなんとやら、とも言う。食い意地は汚い方という自覚もある。ならば、次にすることは一つしかない。

耳元で散々煽(おねだ)りを重ねてきた可愛い雌達を再び味わうべく、キリトはゆっくりと上体を起こした。

趨勢。潮目。物事の流れ。

そんな風に称される何かが大きく変わる直前、『今がその時だ』と理解できてしまう時が希にある。俗に天恵、あるいは勝負師の勘などとも呼ばれるその直感的な知覚。それを、キリトも過去に何度か得た事がある。

たとえば、今この瞬間のように。

「――フィリア、シノン」

名を呼ぶだけで、意思の疎通は事足りた。自分以外の二人が何を望み、何を期待しているのかも、今は手に取るように分かってしまうのだから。

キリトが体を起こすのとは対象的に、シノンは体を倒し、ベッドの上にあったクッションを抱くようにしてうつ伏せに倒れ込み、小ぶりなヒップをキリトに向ける。

「さっき射精したばっかりなのに……本当、あなたの精力ってどこから湧いてるのかしら」

「そうだな。強いて言うなら、目の前にいる可愛い二人から……かな。シノン」

「ふぅん……♥　じゃあ、こんな風にしたら、もっとすごいことになったりするの？」

クッションに半身を預けて姿勢を安定させたシノンは、勿体つけるように両脚をしずしずと左右に割り開き、そのまま自らの秘所を見せつける。透明な蜜をたっぷりと溢れさせながら露わになる薄ピンクの肉壷は、受粉を求めて香りを放つ花々のようにキリトを誘惑する。

そして、当然。キリトを誘惑する雌花は、決して一輪だけに非ず。

「えへへ……♥　すごいこと、なっちゃったみたいだね……キリト」

寝転ぶシノンの隣へ、フィリアもまたうつ伏せに身体を倒す。シノン同様に脚を開き、乙女の秘すべき場所を思い切り晒す。ボリューム感のある安産体型のヒップをぐいと突き出す様が、雄の繁殖欲を刺激

しないはずがない。
　身体同様にナノテクノロジーの粋を集めて作られた特殊素材で覆われた肉の花弁は、姿こそ直接見えはしない。だが、精巧にトレースされて浮き上がる淫靡な形と、その内側より溢れ出した蜜でナノ素材をより黒く染めてキリトの劣情を刺激する。
「ほらみて、シノン……キリトのち●ぽ、あんなに大きくなってる……♥」
「ええ……♥　あれでまた犯されちゃうのね、私達……♥」
　白い両脚の間に咲いた花弁と、黒い両脚の間に浮かび上がる花弁のコントラスト。男の理想を現実化したかのような光景を作りだし、欲望を容赦なく掻き立てながら、フィリアとシノンは陶然とした声音で言葉を漏らす。
　なお、キリトの記憶が正しければ、今日はフィリアに2回、シノンには3回膣内射精をしている。今もなお挑発的な腰の動きで誘惑してくる二人の雌からその白濁した痕跡が溢れ出てこないのは、偏に『精液吸収（サキュバス）・倉庫格納（ストレージ）』というシステムの賜である。
　これは所謂『三つの穴』のうち、口以外の箇所で精液を受け取めたあと、一定時間の間に意図的な放出行為が行われなかった場合、穴の中に残った精液をコンドーム型の収納容器に入れて各人の個人ストレージに転送するというなんとも安直なシステムである。
　このシステムの設計・実装アドバイザーを勤め、約３０回にも及ぶ過酷なテストの被験者も務めた某Ｓ女史曰く『キリトくんの精液って、（射精から一定時間経過後にアイテムＩＤが振られて）アイテム化されてから自動消滅処理が実行されるのは知ってるでしょ？　それをお姉ちゃん達に教えたら、消去されるのはなんかもったいないし、いっそストレージに保管しておきたいって話になって……』との事らしい。
　というわけで、キリトは夜も寝ないで開発に没頭し（ていたら案の定アスナとアリスにバレ、健康維持の為に二人に日替わりで膝枕されながら半ば強制的に昼寝させられ）て、そして先日ついに実装に成功した。Ｓ女史曰く、評判は上々とのことらしい。

――などという事を思い返しながら、キリトはコンソールウインドウを呼び出し、球体型自動撮影ドローンを空中に展開する。そんな光景を、氷の狙撃手が見逃すはずもなかった。
「あら、キリト。撮影したいの？」
「ああ。二人がすごくエロく誘ってくれたから、残しておきたくなってさ……嫌だったか？　シノン」
「いいえ。でも、どうせ撮るんだったら……」
訝るキリトに含みのある笑みを返したあと、シノンは自らの上に覆い被さるフィリアの耳元に何事かを囁く。暫しの後、フィリアが首を縦に振ったのを合図に、二人は自らの装備情報を管理するウィンドウと、ペンタブ型の入力インターフェースを呼び出した。
「ねえねえシノン。なんて書こっか？」
「そうね……まずはオーソドックスに『ｋｉｒｉｔｏ　Ｏｎｌｙ』にしておこうかしら」
「あっ、それいいね。じゃあ私は……『キリト専用』にしよーっと」
ペンタブ型入力ＵＩに表示された、人型をした簡易３Ｄモデル。シノンとフィリアがそのモデルに筆を走らせると、同時にそれぞれの体へ言葉が書き込まれていく
シノンの白い脚の上には、黒々とした『Ｋｉｒｉｔｏ　Ｏｎｌｙ』の文字。黒いナノスーツに覆われたフィリアの太ももの上には、白いインクで『キリト専用↓』の文字。無論、矢印の向く先にあるのは、キリトの肉棒を求めてやまない二人の蜜壺だ。
「おおっ……！　これは、なんというか……すごくいいな、シノン」
「でしょう？　前にセブンとこういう事したって聞いて……私もちょっとだけ試してみようかなって」
「ねえねえ、キリト。カメラの映像、私たちの方にも送ってくれる？　モデルに書いたのがどんな風に出てるのか、直接見てみたいんだよね」
「ああ、今送るよ。フィリア」
淫靡な光景に生唾を飲み込みながら、キリトは二人の顔の近くにモニターを展開し、そこへカメラドローンが撮影した映像をリアルタイ

ム送信する。
「うわあ……こんな風になるんだ……♥　私達、すっごい変態さんみたい……♥
　ねえ、シノン、シノン。今度は自分じゃなくて、お互いの体に書いてみるっていうのはどう？」
「あら、奇遇ね。ちょうど私も、フィリアと同じ事言おうと思ってたの」
　ペンタブ型ＵＩを交換したフィリアとシノンは、お互いの体を飾るための言葉をそこに書き込んでいく。
　フィリアの頬に『ザーメン中毒』の文字が躍れば、お返しとばかりに『無料おくちま●こ』の文字がシノンの頬を飾る。『Ｒａｐｅ　ｍｅ　Ｐｌｅａｓｅ♥』『Ｉ’ｍ　Ｆｒｅｅ　Ｆｕｃｋ　Ｐｕｓｓｙ♥』がシノンの肌に描かれていく横で、『ポータブル精液便所♥』『受精予約済♥』がフィリアの体に書き込まれていく。
　共にセミロングの髪型をしているおかげで露わになっている美しい背中は、彼女らにとっての最高のキャンバス。二人はそこに『黒のち●ぽ様には勝てませんでした♥』『即墜ちクソザコま●こ（笑）』『土下座でハメ乞いするのだ～い好き♥』『叩かれて喜ぶマゾケツはこちら↓』というような、卑猥で侮蔑的な文言を次々に配置していく。
　更に、空いているスペースに女性器を模した下品なマークや正の字を書き込んだあと、二人は出力モードを〝落書き〟から〝タトゥー〟へと切り替え、互いの右頬の少し上にバーコードを刻み込む。そのバーコードは決して適当に描かれているわけでは無く、特殊なシステムを通してそれを読み込めば、二人のパーソナルデータ――各アバターの全裸３Ｄモデルと、スリーサイズや性感帯、自慰の頻度や使うネタ、好きな体位やプレイなどの人前には出せない情報がたっぷり――と、これまで撮影したハメ録り映像のリストが表示される機能つきだ。
「フィリア、シノン……二人とも、すごくキレイだ」
　全身至る所に淫らな言の葉と紋様を描き上げた二人の雌は、興奮した雄の様子に満足げな笑みを浮かべながら視線を向ける。

「ふふっ……我慢しなくていいのよ、キリト……♥」
「妄想現実の私達の次は、仮想現実の私達も可愛がって……♥」
発情の吐息を零しながらシノンとフィリアは腰をゆっくりとくねらせ、意味深な上下運動を繰り返す。
挑発的なその腰の動きは、雌華の中に雄が生殖器を突き入れる際のピストン運動を模した物。愛しい男の欲情をより高めるため、二人は空想の中のキリトを相手に、つかの間の妄想セックスに浸る。
太い肉棒に下から貫かれ、腰砕けになりながら弄ばれる妄想に溺れるシノン。後ろから肉棒を突き込まれ、気づけば自らその動きに合わせて腰を振る妄想に沈むフィリア。もう十数秒の後に現実化する未来の光景を頭の中に描きながら、二人は興奮の吐息を漏らし、発情の蜜を溢れさせていく。
「それじゃあ、遠慮無く。まずは……フィリアからな」
「私から？　やった♪」
ご機嫌な声と共に突き出される、ナノ素材で覆われたフィリアの秘所。そこに、キリトは固く張り詰めた亀頭を押し当てる。
たっぷりと溜め込まれた愛蜜が、ぐじゅりという音を立ててナノスーツの内側から染み出して肉棒の先端を濡らす。フィリアの蜜壺を蓋するように展開されていたナノ素材は、キリトの肉棒が押し込まれたことで僅かに内側へと沈み込んでいく。
「ふぅん、私はお預けなのね。キリト？」
「悪いな、シノン。ちょっとだけ待っててくれよな」
「ええ、いいわよ。狙撃手は待つのが仕事だもの。
……ただ、契約料を支払ってくれるっていうなら、大歓迎だけど？」
「望むところだ」
可愛らしく拗ねてみせるシノンの体を抱き寄せ、キリトは彼女の唇を奪う。舌を挿しこみ、唾液を交わらせ、フィリアが思わず嫉妬してしまうほど情熱的に。
これから焦らすことになる分、たっぷりと時間をかけて口づけを結び続ける。やがて、ミーアキャットのように体を起こしていたシノンは、くたりと脱力してクッションの上に倒れ込んだ。

「契約料は足りたかな、シノン？」
「ん、はあっ……♥　確かに……いただいたわ……♥」
愛しい男と交わす口づけに酔いしれ、頬を赤く染めたシノンをキリトの指先が撫でれば、シノンは舌を伸ばしてその指先をひと舐めして甘えてみせる。
あとでシノンもたっぷりと可愛がろう――そう心に決めつつ、キリトは改めてフィリアの腰を掴み、彼女の体を貫く準備を整える。
「いくぞ、フィリア」
「うん……あっ、ちょ、ちょっと待ってキリト！　今、装備を解除するから……」
「必要ないよ、フィリア」
挿入の障害となるナノスーツを解除すべく、装備コンソールを開こうとしたフィリアの掌をキリトは後ろから掴む。そのまま指と指を絡ませあうように握り混みながら、キリトは黒いナノスーツをまとうトレジャーハンターの上に覆い被さった。
「せっかく、フィリアが俺のアファシスになってくれたんだ。だから今日はこのままフィリアを抱きたい」
「そ、そんなの……できるの……？」
「ああ、当たり前だろ」
獣の交尾を思わせる姿勢でフィリアを征服したキリトは、腰を力強く押し出し、彼女の蜜壺の入り口に押し当てていた肉槍を前へ進める。フィリアの肌を覆い、蜜壺を閉ざすナノ素材ごと。
「あ、待っ――ひゃんぅうっ♥♥」
野太い雄の象徴、その先端が侵入してくる感触に、フィリアが切なくも歓喜に満ちた悲鳴を上げる。
外部からの圧力に対して柔軟に対応するナノ素材は、溜め込んだフィリアの雌汁をたっぷりと溢れ出させながらキリトの肉棒にぴたりと張り付きながら抵抗を続ける。それでも構わずキリトは挿入を続け、結果、肉棒は0．1ミリにも満たない薄膜によって包み込まれてしまった。
「やぁっ♥　なんだか……すごく、んっ、変な感じだよ、キリト……。

あそこが……おま●こ、気持ちいいはずなのに……妙に、もどかしくてっ……あぁうっ♥」

「なるほど……。ゴム付きセックスはお気に召さないか、フィリア」

「うんっ♥　キリトとのせっくすを邪魔されてるみたいで、すっごくイヤっ♥　私がセックスしたいのはキリトだけ。絶対に、ゴムなんかじゃないよ！」

肉棒と肉壺が直接触れあう事を拒むナノ素材をコンドームに見立ててキリトが揶揄すると、フィリアは首をこくこくと縦に振って同意する。

そんなフィリアの顔の横に、外部からの圧力を感知したナノスーツの管理システムが警告ウィンドウを表示する。ウィンドウに表示された映像の中では、固く太い棒状の物体に圧迫された事でスーツの限界を超えた形状変化に晒されている股間部分が赤く点滅し、ナノ素材が持つ耐久値の急減少を警告する。

「あっ……キリト、見て見て。ここ、んくっ、壊せちゃうみたい！」

「やっぱりな、思った通りだ。じゃあ……このまま押し込むぞ、フィリア？」

「うん、もちろん！　こんな避妊具（じゃまなの）、このままキリトのち●ぽでぶち抜いちゃって！　新品アファシスのゴム付きま●こ、返品不可の中古品に変えてほしいよぉ♥」

「よし、任せろ。フィリアを返品も売却もできない使用済みアファシスにして……一生、俺の所にしかいられなくしてやるよ」

「うんっ♥　してしてっ♥　キリトっ♥」

フィリアの指に絡めていた手を解いたキリトは、彼女の腰をしっかりと掴む。煩悩の数を一つか二つは増やしてしまいそうな程に魅惑的なヒップ目掛けて、キリトは腰を突き出し、肉棒を更に奥深くへと進ませていく。

みしみしと音を立てて圧し延ばされながらも、ナノ素材は装着者の体内に侵入しようとする肉棒を押しとどめようとする。高レアリティ装備の名に恥じぬだけの耐久値と防御力を誇るナノスーツ――しかし、昂ぶる美姫を前にして荒ぶる夜の王を前にしては、さしもの

レア装備も無力に等しい。
抵抗を物ともせず力尽くで押し込まれた逸物は――ついに、ナノ素材の耐久値を削り尽くした。
「あ――んんうっっ♥♥♥」
ぶちり、という音と共に乙女の秘所を守る薄膜を貫いた逸物は、そのまま子宮口（ポルチオ）を穿ってフィリアに歓喜の声を上げさせる。それはまるで、フィリアの純潔を奪ったあの夜の行為を極端に強調して再現したかのように。
「わかるか、フィリア」
「うん……。わかるよ、キリト……♥　私のはじめて、また、キリトにもらわれちゃったね……♥」
「ああ。だからこれからは……いや、違うな。前も、これからも、フィリアはずっと俺だけのモノだ」
「うん、うんっ♥　ずぅっと、キリトのものになるよ、私っ♥
はふうっ……硬くて、あったかいキリトのおち●ぽ……♥　私のおま●こ、キリトとちゃんとせっくすできてうれしいって、きゅんきゅんしてるよぉ……♥」
焦らされてから与えられた交合の熱に酔いしれ、瞳を蕩けさせるフィリアを後ろから貫きながら、キリトは彼女の褐色の髪を丁寧に撫でる。
片手の指どころか、両手の指でも収まらない数の女性達と心を通わせ、体を重ねるようになってしばらく経つ。交わった回数がどれだけ増えようと、彼女らの純潔を奪った夜のことをキリトは忘れていない。緊張と恐怖に少しだけ体を震わせたフィリアが『顔を見られると、恥ずかしいもん……』と、後ろから抱かれる事を望んだ夜の事も、当然。
「……動くぞ、フィリア」
耐久値を失った部分が消失しきったのを確認したキリトが宣言すれば、フィリアは恥ずかしげに頷き、両手でかき抱いたクッションに顔を埋める。
片手を彼女の髪に触れさせたまま、キリトはもう片方の手でフィリ

アの腰を固定し、本格的に己の腰を前後させる。
「あっ――♥　んっ、んんっ♥　あっ、やあん♥　んぐ、んんんううっ♥♥」
　ナノ素材の防壁を失った膣内は、肉棒の侵略を歓喜の涙と共に受け入れる。産道をこじ開ける太く大きな逸物に、フィリアの熱情をそのまま反映したかのような熱さで絡みつきながら、懸命な雌穴奉仕で子種を乞い願う。
「まったく、フィリアのアファシスま●こは優秀だな……さっきから搾り取る気満々じゃないか」
「あひ♥　ひうっ、うんっ♥　キリトのぉ、あふぁっ♥　あっあっ、アファしひゅ、らもんっ♥　んんんうぅっ♥」
　カリ首で敏感な部分をこそげるようにして肉棒を引き抜く度、媚肉は名残惜しげに締め絡み、フィリアは体をびくびくと震えさせて快楽に沈む。続けざまの突き込みで亀頭を子宮口にぐりぐりと押し当ててやる度、フィリアは口元をクッションに当てていても隠しようが無いほどに大きなあえぎ声を響かせる。
　悦楽に溺れるアファシスの姿は、キリトの野蛮な征服欲を満たし、同時にフィリア自身の羞恥心を強く掻き立て、さらなる悦楽の呼び水とした。
「……そうだ、フィリア。せっかくだし、もっとエロいアファシスになってみようか」
　フィリアの蜜壺に深々と肉棒を突き刺したところで一度動きを止めたキリトは、フィリアの耳元に顔を近づけ、小声で囁くようにして問いかける。
「ふぇっ……？　私が、んんっ……♥　もっとえっちになったら、キリト、もっと可愛がってくれる……？」
「当たり前だろ。あ、もちろん、そうならなくても全力で可愛がるけどな」
「わかってるよ……♥　キリト、優しいもん……♥」
　雄の象徴に貫かれたまま、フィリアは両腕を支えにゆっくりと体を起こし、そのまま後ろへ反らせる。

「キリトが望むなら……もっとえっちなアファシスになるよ、私♥
でもその代わり、私にも……契約料、ちょうだい？」
「喜んで」
やはり、さっきのシノンとのあれが効いていたのだろう。
そっと目を閉じたフィリアを抱き寄せ、キリトは彼女の唇を奪う。
力強く、強引に。それでいて優しく、愛情深く。
「んっ……♥」
重ねた唇をキリトの舌先がつつけば、フィリアは薄く唇を開いて男の舌を受け入れる。ねぶり絡まる舌と混ざり合う唾液が、くちりくちりと音を立てながら互いの口内を行き来する。
蜜壺の底の底まで貫く肉棒で繋がったまま行われる濃密な口づけ。互いの存在の境界線が曖昧になり、一つに蕩けていきそうな程の官能にフィリアは内側から満たされていく。
愛する男の舌に、腕に、そして男性器に、己の全てを委ねてただの雌として溺れる——その喜びを感じられる事が、そして、その喜びを共有できる友が大勢いることが、フィリアは素直に嬉しかった。
満足した証に、フィリアは自らの舌でキリトの舌を軽く押し返す。それに気づいたキリトが体を少し引いたことで、唇と唇が離れていく——口づけそのものには満足したはずなのに、キスの終わりはどうしても寂しい。
「フィリア。口、開けてくれるか」
「こう？」
「ああ。そのまま、舌も出してくれ」
キリトに言われるがまま、フィリアは大きく口を開けて舌を突き出す。その様子に、キリトは満足げに頷いた。
「ちょっとだけそのままでいてくれよ、フィリア。
——シノン、この間使ってたあれ。まだ持ってるか？」
「ええ、ちょっと待って。今用意するわ」
ベッドに横たわったまま、二人が交わる様を悠然と眺めていたシノンは、キリトに名前を呼ばれて身を起こすと、個人ストレージを操作していくつかのアイテムを選択。それら全てをオブジェクト化する。

広げたシノンの掌の上にじゃらじゃらと現れたのは、様々な色や形をした錠剤の小山だった。
「この間の使い残しで悪いけど……色々あるわよ。フィリア」
「シノン、これって……もしかして」
「ええ、そう。私がキリトにおねだりするときに使った、頭がぶっ飛んじゃうあぶないお薬（デジタルドラッグ）。
たぶん、アファシスにも効くと思うわ。……さて、どれを使ってみたいのかしら？　フィリア」
フィリア、そしてキリトと正面から向かい合う位置に移動したシノンは、薬を手にしたまま人を惑わす女神のように微笑む。
言うまでも無いが、飲んだところで現実世界の肉体や精神には何の作用も及ぼさない。グラニュー糖を錠剤の形に成形しただけのアイテムに、効果説明（フレーバーテキスト）と一部システムのアンロック機能を持たせただけのものなのだから当然だ。プラシーボ効果すら発生し得ない。
ただ、それが砂糖を固めただけの安全なものだとわかった上で、人としての尊厳も何もかも捨て去ってしまえる効果が設定された危険な薬を摂取するのは――とても倒錯的で、そしてとても愉しい。
「――ね、キリト」
「ん？　どうした、フィリア」
「その、私のお薬……シノンに選んでもらってもいい？　私と同じ、キリトの雌奴隷友達に」
「もちろんだよフィリア。それじゃあ……頼めるか、シノン」
「ええ、任せて。いいものを見繕ってあげるわ」
シノンがこくりと頷いたのを合図に、フィリアは目を閉じ、改めて口を大きく開けて舌を突き出す。
体を支えていた両腕は、キリトの腕に引っ張られるような形で後ろに回されて、そこでがっちりと固定された。おかげで今のフィリアは、フィリアの両腕ごと上半身を引くキリトの腕と、膣内をみっちりと占領するキリトの肉棒に支えられて膝立ちしているような体勢を取るハメになっていた。
抵抗しようにも何も出来ない――そんな姿勢のまま、餌を待つ雛の

ように口を開けるフィリアに微笑みを向けながら、シノンは手にした薬剤の山の中から投与すべき薬を一錠ずつ選び、可愛いアファシスの舌の上に載せていく。

「これはね、ち●ぽで一突きされる度に、キリトの事がどんどん好きになっちゃうお薬。

こっちは、最初に膣内射精（ナカダシ）してくれた人が運命の人だって思い込むように、頭の中を書き換えるお薬。

感度を上げるお薬と……あとは、牧場にいるときみたいに、母乳をたっぷり出せるようになる薬も混ぜてあげるわね」

なんとも愉しげな笑顔を浮かべたシノンは、フィリアの舌の上に様々な錠剤を置いていく。

シノンがセレクトするドラッグカクテルの完成を待ち続けるフィリアは、自らの最奥を遠慮無く串刺しにしたまま居座り続けるキリトの肉棒によって、時折達せられては体をびくりと震わせ、愛液をこぼれ落としていく。システム側による物理演算調整がなければ、舌の上に錠剤を留め続ける事など叶わなかっただろう。

やがて、明らかに人体の許容量をオーバーしている量の薬剤を載せ終えた所で、シノンはようやく満足げに頷いた。

「まあ、初めてならこれくらいが適量かしら。ねえ、キリト？」

「適……量……？」

「なんでそんな怪訝な顔するのよ。私の時は、これの倍くらいは飲ませたくせに」

確かに飲めとは言ったが、薬剤の量と種類を決めたのはシノンだったはずだ――という野暮な抗弁をキリトがぐっとこらえている間に、シノンはくすりと微笑みながらフィリアの方に視線を向けた。

「フィリア。お薬、口の中に入れてくれる？　ああでも、まだ飲んじゃだめ。

口も開けて、顔は上に向けてね」

シノンに言われるがまま、フィリアは舌の上に乗せられた錠剤を一端口内に収め、再び上下の唇を開きながら顔を真上に向けた。

よくできたペットを褒める飼い主のようにフィリアの髪を軽く撫

でた後、シノンは残った錠剤を自らのストレージに戻しつつ、新たに別のアイテムをオブジェクト化した。
「そのままだと飲みにくいでしょ？　とっておきのいいもの、あげるわね」
　先端部分に白濁液をたっぷりと溜め込んだ、透明な円筒形の筒――とどのつまりは先ほど使ったばかりのオナホールを取り出したシノンは、先端部を摘まんで抑え込みながら、筒内に溜まったローションだけを開口部から吸い出す。そして、そのオナホールをフィリアの口の真上に持って行くと、先端部を握り潰すようにして、中身の精液をフィリアの口の中へと注ぎ込んだ。
「はい、どうぞ。せっかくあげるんだから、お薬も、精液も……残しちゃダメよ？」
「んっ、ぁう……♥　いふぁりゃひ、まふゅ……♥」
　絞り出すのも一苦労な程にどろりと濃厚な子種汁を口内で受け止めたフィリアは、わざと口を開けたまま舌を大きく動かす。見下ろすシノンとキリトの二人に、己の口の中がよく見えるように。
　雌に子を宿させる為に作られた雄の体液を舌の上で堪能しつつ、甘い砂糖菓子の一錠一錠を丁寧にコーティングし――そして、ごくり、ごくりと喉を鳴らしながら嚥下していく。一刻も早く飲み干したい。永久に味わっていたい。そんな風に矛盾した欲求を抱えながら。
「美味しい？　フィリア」
「んぐっ……♥　とっふぇも、んぶっ、おいひぃ……♥」
　濃厚な味わいに溺れ、鼻に抜ける臭気に昂ぶり、重く絡みつく喉越しに酔い痴れる。
　そうして、薬一錠、精液一滴残す事無く、全てを胃の腑に収めきった頃。微笑むシノンの瞳の中に映り込んだ自分自身の顔を見たフィリアは、ようやく己が交尾の事しか頭にない最低の雌の顔をしていることを自覚した。
　何の前触れも無く静止するのをやめたキリトの肉棒がフィリアの蜜壺から引き抜かれ、そして再び突き込まれたのは、まさにそんな瞬間だった。

「――おぐっ♥」

それはまるで、敵の防御が最も弱まった瞬間を狙って突き込まれる、狙い澄ました刺突の一撃。

精液臭に染まった吐息と共に、フィリアの口から下品な喘ぎ声が思わずまろび出る。

「へえ、早速クスリが効いてきたみたいだな。フィリア」

そう嘯くキリトの肉棒が、フィリアの体を後ろから容赦なく貫く。膝立ちの姿勢を取ったフィリアの両腕を、手綱のように引いて制御するその姿は、まるで鞍の付いた馬に跨がる騎手の如し。

キリトに行動の自由を奪われ、一方的に犯されている。だというのに、フィリアはどうしようもない程に身を焦がす激しい悦楽を覚え、同時に深い安らぎを感じることをやめられない。

「んおぐっ♥　あっ、あぐっ♥　おほぅっ♥　きりと、きっ、りとおぐっ♥　いひっ――いいぐいいっ♥」

重く心地よいピストン運動に揺らされ、交尾の快楽に灼かれて呂律の回らなくなった舌と唇で、フィリアはどうにか愛しい男の名を呼ぶ。

肉棒が出入りする度に、フィリアの蜜壺からは愛液が次々に溢れ出し、太ももを伝ってベッドシーツへと滑り落ちていく。

「あ♥　あっ♥　あっ♥　おっ、おぅぐっ♥　んんんぐっ♥　キリトの、ひんぐおっ♥　ひゅひっ、ひゅぎぃいいいいぐっ♥」

「もう、フィリア。それじゃあ、キリトになんて言いたいのか伝わらないわよ」

「らっれ……♥　おっ♥　あひゅっ♥　お、おぐにっ、まっぐ、またきへえぇえっ♥　んんぅうぅんっ♥♥」

軽い苦笑を浮かべたシノンは、乱れ悶えるフィリアの頬にそっと両手を当てると、正面から唇を重ねる。そのまま間髪を入れずに舌を送り込み、フィリアを快楽の坩堝に沈めるピストン運動の振動を共に感じながら、ねっとりとしたディープキスを交わす。

『どうせ、喘ぐのに忙しくて口はまともに動かないんだし……伝えたいことはこっちでしゃべりましょ？　フィリア。

こういう時のために、キリトが作ってくれたシステムなんだから……使ってあげないともったいないわよ』

重ねた唇の端々から零れる、唾液と舌が絡みあう粘着質な水音と、愛情深く犯される歓びに浸る雌の嬌声。まともな意味を成さないそれらの音に比べると、合成音声システムは遙かにクリアで、そしてフィリアが喋りたい事を容易くエンコードする。

『キリトのち●ぽ、なんでこんなに気持ちいいの……♥　ずるいよ、こんなのチートだよ……♥

太くて、固くて……私のよわいところ全部、ごりゅごりゅっていじめてくれるから、どんどん大好きになっちゃう♥

あっ、またイク♥　そこ、そこされるとまたイっちゃ――あっ……♥』

シノンに口を塞がれたまま、フィリアの体が絶頂に震える。

射精を促すように蠕動する蜜壺に精液を搾り取られそうになりながらも、どうにか堪えることに成功したキリトは、フィリアが快感をじっくり感じられるよう、ピストン運動の速度を緩やかな物に落とす。

『ふふっ。フィリアの舌、イクたびにびくびく動いちゃって……♥

それにしても、ち●ぽとあぶないお薬で、女の子をセックス用アファシスに洗脳するようなひどい人を嫌いになれないなんて……相当手遅れよね、私達』

『うんっ♥　手遅れ手遅れ♥　キリトのち●ぽに絶対逆らえない、お手軽ま●こにされちゃって喜んじゃう最低の女の子だよ、私達♥』

『まったくね。……ねえ。もし、キリトと出会う前の自分に戻れるとしたら、戻りたい？』

『絶対にイヤ。こんな幸せ、手放せるわけないよ……』

『奇遇ね。私も、同意見』

合成音声システムから流れる堕落の睦言。シノンの舌先が奏でる粘ついた水音。フィリアの唇の端から漏れる昂ぶった雌の喘ぎ声。織りなされる甘美な三重奏が部屋の中を包み、より深い官能をもたらしていく。

しばしの間、その響きを堪能したあと。シノンは重ねていた唇共々、フィリアの両頬に当てていた手をそっと離した。
「そろそろ溜まったかしら」
「溜ま……？」
困惑するフィリアを意に介さず、シノンは両手をフィリアの胸元へと持って行くと、そのままナノスーツに覆われたバストをぎゅっと揉み拉いた。
「ふぇっ……――んっう゛っ♥　んっん゛んんひいいぃぃぃぁおおおぉ♥♥」
突然の事に戸惑う余裕があったのはほんの一刹那。
太い肉槍に犯される快感の中に、突如、シノンの手で母乳（ミルク）を絞り出される悦楽が加わったことで、フィリアは再び嬌声を上げさせられていた。
「なんっ、れぇっ♥　ふーっ♥　ふう、ふぅーっ♥　なんっで、おっぱい、でちゃ――ひいいぃいんん♥」
「あら、さっきちゃんと言ったじゃない。おっぱい出せるようにするクスリも飲ませてあげるって。
よかったわね、フィリア。セックスできて、ミルクも絞れるアファシスなんて、《ＧＧＯ》のどこ探しても見つからない超レア物のお宝よ」
ただでさえキリトに両腕を引っ張られているせいで、胸を反らすような体勢を取らされているフィリアに、シノンの搾乳を拒む手段は存在しない。
五本の指を器用に使い、シノンはナノスーツ越しにフィリアのバストを丁寧にマッサージしながら、乳房にたっぷりと溜め込まれた濃厚な母乳を容赦なく絞り出していく。
黒いナノ素材からあふれ出すフィリアの母乳は、そのまま絞り手であるシノンのストレージにどんどんと格納されていく。その量と勢いは、本物のホルスタインにも負けていないほどだ。
「あっあっあっあっ♥　んひ、ひいぃぃいいいん♥　ふっ、ふーぅっ♥
これだめ、だめええぇぇ♥

んおっ♥　おっぱい、と、ち●ぽおっ♥　一緒にされるとぉ、おほぉっ♥　おかひくなっ、りゅうううう♥♥♥

キリトっ♥　キリトキリトおっ♥　い、いぐ、いぐぅ♥　まらいっぢゃうううう♥♥　たしゅっ、たしゅけれえええ♥♥♥」

口から唾液を溢し、胸から母乳を絞られ、股の間からは愛液をぷしゃぷしゃとまき散らしながら、フィリアはされるがままに犯され続ける。まろび出る言葉とは裏腹に、フィリアの体は貪欲に肉悦を求め、その顔には蕩けたメスの媚笑が浮かぶ。

故に、フィリアの膣内を穿つ肉棒の動きが緩むことは無い。むしろ、蠢く雌穴に導かれるように、その速度と勢いを増していく。フィリアの一番深いところに、今まさに陰嚢から駆け上らんとしている自らの子種を送り届けるために。

「このまま……中に、出すぞ。フィリアの頭の中、俺のためだけに書き換えてやるからな！」

「はひゅっ♥　はひゅぃいい♥　して、してほしいよぉっ♥

わ、わたしも、ぅううう♥　あっ……くぅ、くりゅぅ、おっぎいイぐのくりゅううう♥　キリトと一緒に、ひいいいぃ♥」

熱に浮かされたまま、フィリアはぶんぶんと首を縦に振る。そんなフィリアの尻たぶをも押しつぶしてしまいそうな容赦の無い抽送が、肉のぶつかり合う激しいビートを奏でていく。

そのビートの間隔は見る間に縮まっていき――そして。

「――っぐ！　フィリア、フィリア！」

腰を深々と密着させたまま、キリトはそこで動きを止め、フィリアの子宮目掛けて精液を解き放った。

「あっ――♥♥　あ〝っ、あああああああ♥　いっひょに、いっちゃぁあああああああ♥♥♥

イぐっ、イグいぐいぎゅぅぅう〝あうううう〝ううううう〝ううううぅ♥♥♥」

落書きとナノスーツで覆われた背中を大きく撓らせながら、フィリアもまた深い絶頂に達する。

子宮に叩きつけられる、灼けそうな程に熱く、そして濃密な精液の

奔流。女として、雌として、恋人として――愛する男に満たされていく感触が何度も何度も繰り返しフィリアを襲い、そのたびに至上の法悦を味わわせていく。

「あ、あああ〜っ……はーぁっ、はーっ……♥♥　あひぃ、んぁっ……♥♥♥

　精子、いっぱい……♥　あ〜っ、あふっ……♥」

　だらしなく舌を突き出したまま、達する度にびくびくと震えては全身で快楽を味わうフィリア。そのたびに、既にぐしょ濡れとなったベッドシーツの上に愛液の滴がしたたり落ち、濃厚な母乳が噴き出されていく。

　とうに腰砕けになっている体は、後ろからキリトに、前からはシノンに支えられていなければ、今頃はベッドの上に倒れ伏していただろう。

「おつかれさま。フィリア。素敵なアファシスっぷりだったわよ」

「うん……♥　ありがと、シノン……」

　同じ戦場を駆けた戦友を労るような、あるいは幼子を褒めそやす母親のような慈愛に満ちた微笑みと共に、シノンはくたりと脱力したフィリアの体を抱き留めると、その頬へ口づけを落とした。

　二人が織りなす優しくも美しい光景を眺めながら、ようやく一回分の射精を終えたキリトは、フィリアの両腕を引いていた手を離し、代わりにフィリアの胴に腕を回して支える。

「預かるよ、シノン」

「ええ、お願い」

　シノンが脇に避けた事で空いたスペースに、キリトはまだ脱力したままのフィリアの体をうつ伏せに寝かせる。体と体を繋げたまま、フィリアに覆い被さるようにして、キリトもまた彼女の頬に唇を触れさせる。

「悪い、フィリア。ちょっと……乱暴にしすぎた」

「そんなこと、無いよ……♥　んんぅっ……♥　キリト、大好き……♥」

「俺も……愛してるよ、フィリア。いつものフィリアも、アファシスの

フィリアも、どっちも大好きだ」
「えへへ……♥」
睦言と共に、もう一度頬にキスしたあと。キリトはゆっくりと身を起こし、フィリアの性器から肉棒を引き抜いた。
軽い悪戯心と共に、二本の指先でフィリアの雌華を左右に割り開けば、内部にたっぷりと注ぎ込まれた雄の白濁液がしばしの時間を挟んでから溢れ出してくる。
これが現実世界ならアフターケアをするべき所だが、仮想世界においてはむしろそのままにしておく方がよい。その為のシステムも組んであるのだから。
「――これもそのうち、ストレージに格納されるのよね」
音も無く、気配も無く。キリトの隣にするりと腰を下ろしたシノンは、どこか感慨深げにつぶやき、そのままキリトの肉棒へむしゃぶりつく。男女の体液を白くまとった雄の象徴は、そのまま一気に根元まで飲み込まれてキリトの視界から消える。
『ねえ、キリト』
「ん？」
『この間、小耳に挟んだんだけど……《ＡＬＯ》で、また新しい剣を手に入れたって本当？　しかも、二振りも』
「ああ。手に入れたというか……作ってもらったんだよ。ちょっと色々あってさ」
『ふぅん……』
どこか意味ありげな上目遣いでキリトを見つめながら、シノンはお掃除フェラを続ける。
――鈍い方だという自覚は大いにあるキリトではあるが、さすがに今のシノンが何を言いたいのか程度は察すること出来た。
「もちろん、『エクスキャリバー』もあるけどさ。できれば、あれは切り札として最後の最後まで温存しておきたいんだ。
あれは、《ＡＬＯ》での俺の《お守り》みたいな物だからさ」
『別に、エクスキャリバーの事は気にしてたわけじゃないわよ。でも……お守り……キリトのお守り、ね。

……まあ、悪い気分じゃない、かな』

もしシノンが《ＧＧＯ》のアバターではなく、《ＡＬＯ》のアバターでログインしていれば、今頃その尻尾をぶんぶんと振っていたに違いない。たとえそれが犬ではなく猫妖精の尻尾だとしても。そう想像するに足るだけの明るい雰囲気を放ちながら、シノンは肉棒に吸い付いたまま顔を上下させる。

「それにほら、エクスキャリバーって、ちょっとじゃじゃ馬というか、俺が思った以上に斬れるしさ……。

普段使いしてると、周りからのやっかみもすごくてさ」

『それは大変悪うございましたね。私そっくりのじゃじゃ馬で』

「ああ。だから、あいつを鞘から抜く度に、ちゃんとシノンの事を思い出せる。

いつも、ここぞという時に助けてもらってるよ、シノン」

『……そういう言い方は、ずるいわ』

照れたような面持ちで、シノンは不意に動きを止める。肉棒を深々とくわえ込んだまま唇を離さない、律儀な相棒の頭を片手で撫でてやりながら、キリトは同じベッドの上でじっと聞き耳を立てているアファシスに向かって声をかける。

「もちろん、《ＳＡ：Ｏ》にいるときは『エンペラーソード』に助けられてるよ。フィリア」

「っ!?　それは、その……どういたしまして……」

驚きと羞恥、それに喜びと自信。こっそり話を聞いている事に気づかれていないつもりだったのだろうか――思わずあげてしまった顔にそんな複雑な表情を浮かべたフィリアは、誤魔化すように笑うと、そのままシノンの隣へと身を寄せる。

「さっすが、《二刀流》さん……。そういう所、ずるいなあ。ねー、シノン？」

『ええ、同感』

ゆっくりと身を起こしたフィリアの背に腕を回し、キリトは彼女の体を抱き寄せ、ごく自然に唇を重ねる。シノンの奉仕を受けながら、フィリアとそんな事が出来るあたり――いや、そもそも何人もの女性

と複雑な関係を築いている時点で、己は『ずるい』人間なのだろう。
それを今更改めるつもりは無いが、誤魔化すつもりも無い。
仮想世界で、そして現実世界で。積層のように降り積もってきたたくさんの思い出と、これから紡いでいく日々の中に、彼女らの姿を欠くことは想像すらできないのだから。
キリトを――桐ヶ谷和人という人間のアイデンティティを構成する、かけがえのないぬくもり。虚像のように見えにくく、しかし必ず在り続ける大切な断片。
あの日、砕け散った己を再び立ち上がらせてくれた希有なる想いに、今も支えられている事を感謝しながら、キリトは――掃除を終えてようやく顔を上げた我慢強い狙撃手を満足させてやるべく、フィリアごとシノンの体をベッドの上に押し倒した。
この後、シノンとフィリアの個人ストレージに格納された、とあるシステムと連動した某収納容器型アイテムの数が増え、そして減ったりするのだが――それはまた、別のお話。

06―1．剣理殺人刀（リズ・レイン）［▲］

空中戦。

それは《ＡＬＯ》が最大の特色として誇る一大要素。

《ＳＡ：Ｏ》、《ＧＧＯ》、《アスカ・エンパイア》などの他メジャーＭＭＯには存在しない『背中の羽根』を用いて空中で行われる戦闘。

多くの空中戦は、相手より高い位置を奪い合う所から始まる。何故か？　答えは単純である。高さとは即ちエネルギーであり、エネルギーとは即ち破壊力であり機動力であるからだ。

相手より高い位置を占めた側は、下方に位置する相手に向けて降下することで、重力加速を大いに活用した非常に効率的な一撃を加えることが出来る。一方、相手に高所を明け渡した側は、重力に逆らって上昇しながら応ぜざるを得なくなり、必然的に速度や一撃の威力も減ぜられてしまう。

これは二合目以降も同様である。降下加速を得た側はその加速力を用いて素早く再上昇出来る一方、上昇した側は相手の追撃に備えるだけの加速度を得るため、泣く泣く降下して体勢を建て直さざるを得なくなるからだ。

かくして、羽根持つ妖精達の空中武闘は『∞』の軌道を描きながら幾度となく繰り返される。

一部では『双輪懸（フェアリィ・ダンス）』とも呼ばれるこの空中戦闘機動は、高い実力を持つもの同士がぶつかりあうほどより美しく、より乱れなき模様を描くとされ、その光景に魅了された多くのプレイヤーを空と闘争の舞台へと駆り立て続けてきた。

繰り返しにはなるが、双輪懸の基本は『相手より高い位置を占めた者が圧倒的優位に立つ』。そこに尽きる。

そして、戦闘における基本中の基本は『相手より多く頭数を揃えた側が圧倒的優位に立つ』。これに尽きる。

――しかし、何事にも『例外』は存在するものだ。

ここ、音楽妖精族（プーカ）領地の一角に存在する大峡谷地帯・《ドラグーンケ

イブ》上空において、今まさに繰り広げられている空中武闘は――その例外によって支配されていた。

漆黒の死神の姿をした、例外中の例外に。

『――《トロール》、《ユーウォーキー》戦闘続行不能。《アラハバキ》、《ホットボルト》……共に、応答ありません。いかがいたしますか……我が主《アスカロン》』

わなわなと唇を震わせながら、どうにか報告を済ませたナビゲーションピクシーの声が耳元で聞こえる。

レネゲイドクラン『ブラッドクルス』の盟主たるサラマンダーの男・キャラクターネーム《アスカロン》は、両手剣の柄を握る手の力を我知らず強めていた。

『ブラッドクルス』はＰｖＰを主目的としたレネゲイド――多種族の妖精で構成されている事を意味する――クランである。これまで幾度となく敵プレイヤーを屠り、金やレアアイテムを巻き上げてはリメインライト化してきた。

《ＡＬＯ》においてＰｖＰやＰＫは禁忌ではなく、プレイスタイルの一環として認められている。

彼らが主な狩場としている、ここ『ドラグーンケイブ』は良質の金属素材の産地でありながら凶悪な敵Ｍｏｂが少ないため、よくレプラコーンやプーカ、スプリガンといった生産・アイテムハント系の妖精が集まってくる。そんな連中をこっそり尾行し、連中が高く売れる素材アイテムを集められるだけ集めた所を急襲する――それが『ブラッドクルス』のプレイスタイルだ。

何を咎められる事があろう。これはゲームであり、遊びなのだから。

今日も今日とて、クランメンバーの一人《アラハバキ》から、『素材を集めに来たと思しき女性レプラコーンの二人組を発見した』という報告を受けたアスカロンは、その二人を獲物と定めると、いつものようにクラン全員を招集して包囲網を形成。

彼女らが『狂乱せし賢者（アルハザード）のランプ』と『辰気まとう銀星（フォーリンダウン・シルバー）の欠片』という、なかなかのレアアイテムの採掘に成功して気が緩んだ瞬間、

ケットシーの《バロウズ》が得意とする強力なスタン魔法を使用させ、哀れなレプラコーン二人を一気に麻痺させる事に成功した。

あとはいつものように彼女らの身ぐるみを剥ぎ、金やアイテムを吐き出させるだけ吐き出させた上で、リメインライト化するだけ。そう判断したアスカロンは潜伏させていた仲間を呼び集め、獲物を威圧するために包囲網を狭めた。

――その瞬間に起きたことを、アスカロンは未だに正確に把握できては居ない。

確実にわかっているのは、直上から凄まじい速度で飛来した黒い何かが、アスカロン達の眼の前に急降下してきたことだけだ。

それは暗闇色をした天の鉄槌(いなずま)か、あるいは怒り狂った嵐の化身か。プレイヤーであることすら理解できなかったそれの正体が、黒い装備を身にまとったスプリガンだと判別できた時には、既に《アラハバキ》と《ホットボルト》の両名は悲鳴を上げる間もなくリメインライト化させられており、アスカロンも片腕が欠損扱いとなる程の大ダメージを負っていた。

おそらくは、斬られた――単純にして不可解なその事実を飲み込めぬまま、アスカロンは咄嗟に空中への退避を命じたらしい。

奇襲を免れ、辛くも生き残ったメンバーは計7名。アスカロン、バロウズ、ユーウォーキー、トロール。インプ族の《ガルム》に、シルフ族の《アベンジ》。そして、アスカロンが保有するナビゲーションピクシー《イナダ》だ。

しかし、アスカロンがダメージ回復に専念するために戦場から距離を置いたこの僅かな間に、機に逸ったトロールとユーウォーキーは、アスカロン達を追って空に上ったスプリガンの剣によって斬り伏せられ、リメインライトに変わりながら地表へと落下していった。

(ありえん……たった数分、たった一人で、しかも高度優勢を明け渡しておきながら……!

トロールとユーウォーキーをあれほど容易く屠ってみせただと!!

あのスプリガンはバケモノか!?)

結果的には敗北したとはいえ、敵が無防備になりやすい地上から空

中への第一次上昇を狙って、トロールとユーウォーキーが攻め手を選んだのは間違いではなかった。唯一の誤算は、敵がこちらの想定を数段――否、数十段上回る上昇加速性を持っていたということだけだ。

攻撃準備動作に入っていたトロール達を二刀両断した事で、結果的にたった一人で『ブラッドクルス』を半壊の憂き目にまで追い込んだ黒いスプリガンは、アウトレンジから射掛けられるバロウズの矢を物ともせず、ガルムとアベンジを相手に今も空中戦を繰り広げている。

右手に漆黒の、左手に純白の両刃剣を携えた剣士が繰り出す見事な技。ガルムの斧槍を受け流しつつ、アベンジの連接剣を背面で受けて弾き返すその剣技の冴えは、敵が相当な手練であることを否が応でも伺わせる。頭上をバロウズの矢で牽制していなければ、戦場の趨勢は彼奴の側に大きく傾いていただろう。

「……まさか、あれが噂の《絶剣》とやらか……？」

「否定します、我が主。かの《絶剣》はインプ族とのこと。スプリガン族である彼奴とは別人と推定します」

「……え、そうだったっけ？」

「はい。先月もお伝えしましたが、なんでもかんでも《絶剣》だと思うのはやめましょう、我が主。

主が『まさか、こいつが《絶剣》か？』という旨の発言をしたのは、これで１０回目です」

「ああ、うん。気をつけます、はい……」

呆れた様子でため息をつくイナダに、アスカロンは素直に詫びる。

たまたま『ブラッドクルス』メンバーの都合がつかなかったとある日に、なんとなく一人で潜ってみたらそのまま踏破できてしまったダンジョンの最奥部で、ボスＭｏｂからドロップしたこのナビゲーション・ピクシーは、主やクランメンバーの耳が痛くなる事すら躊躇わずに言ってのけるありがたい存在である。

「まあ、それはさておくとして――で、イナダ。このまま撤退したとして、全員が無事に済む確率はどれくらいだ？」

「皆無です、我が主。敵の速度は恐らく、我らの内で最も早いアベンジの最高速度に匹敵……いえ、最悪の場合、凌駕している可能性すら存

在します。
　誰かを足止めに残さなければ、後方より喰い付かれて全滅する可能性が高いと判断します」
「そうか……承知した。レアアイテムをストレージに保管しているのは、確かガルムとバロウズだったな」
「そのとおりです、我が主」
　それだけ確認できれば、十分だった。ついに欠損ダメージ状態から回復した左腕に力を込め、得物であるツヴァイヘンダー・『偽剣アスカロン』の柄を固く握りしめる。
　――己がプレイヤーネームと同じ名を持つ大剣を得たあの日から数えて今日に至るまで、味わった敗北はたったの二度。
　一度目はサラマンダーの将軍・ユージーン。二度目はウンディーネの猛者・スメラギ。
『二度ある事は三度ある』とは言え、このような所で偶然相見えただけの名も知れぬスプリガンを相手に、アスカロンが三度目の敗北を喫するつもりなど欠片もあろうはずがなかった。
「イナダ。生き残った連中に伝えろ。『即時撤退せよ。あのスプリガンは俺が相手をする』――とな」
「――っ……承知！」
　背中の翼をぶんと大きく羽ばたかせ、アスカロンは天高く垂直上昇。高度確保を完了した直後、飛び去る仲間達とすれ違うタイミングで、己の肩に乗っていたイナダをアベンジに引き渡す。
　そうして、戦場に残る最後の一人となったアスカロンは、怨敵目掛けて一気に急降下。《二刀流》を操るスプリガン目掛けて正面から襲いかかり、上段より渾身の一撃を叩きつける。
　フィールドボスクラスの敵Ｍｏｂすら一刀両断するアスカロンの一撃。その一撃を、スプリガンは両手の剣を交差させ、真正面から受け止めてみせた。
「――ほう！　我が一撃に耐えるとは……相手にとって不足無し。
　首を取る前に名を問うておこうか、スプリガン！」
「生憎、名乗るほどの者じゃなくてな！　あんたこそ、真っ向勝負とは

えらく堂々としてるじゃないか！」
「なあに、尻追い戦（ドッグファイト）は趣味でないだけの事よ！」
互いの相対距離が皆無となるのも一瞬。剣と剣がぶつかりあって生まれた激突音を引きちぎりながら、二騎の妖精は猛加速と共に再び距離を開ける。
降下軌道を取っていたアスカロンはセオリー通りに重力加速を利用し、反転しつつ急上昇。確保された高みの中、視界の遥か下方にようやっと反転を終えたスプリガンの姿を捉えたアスカロンは、偽剣の刀身を肩に担ぐような上段の構えを取り直し、再び突撃体勢に移る。
（さて、どう出る……黒いスプリガン！）
凄まじい相対速度が両者の相対距離を貪りつくす。早鐘を打つ心臓の鼓動三つ分の間に、再び剣の間合いへと辿り着いたアスカロン。その大剣の間合いから逃れるべく、スプリガンはアスカロンの下方へ抜けて駆け違う事を狙ってか、僅かに仰角を下方へと向ける。
「よい判断だ――だがな!!」
「っ!!」
上段に対して、上に逃れるは戦を知らぬ愚物の振る舞い。下に逃れるは戦に慣れた武者の成道。ならばその成道を封じてこそ、戦に長けた戦巧者。
間合いが縮まりきる寸前。アスカロンは上段に構えていた両腕を自らの胴の側へと引き込み、振り下ろしから即座に刺突の構えを取り直す。片手剣やレイピアならまだしも、ツヴァイヘンダー級の大物では通常ありえないスイッチングに虚を突かれたスプリガン目掛け、アスカロンは偽剣の切っ先を突き込む。
天を舞う妖精。その最高速度が生み出す破壊力が一点に集中される刺突撃の威力をまともに受けて、無事でいられるものは無い。それを知っているが故に、スプリガンは飛行姿勢が崩れるのも構わず遮二無二に防御態勢を取り、双剣を以て切っ先を受け流した。
「――くっ、あああっ!!」
「ほう、これすらも躱すか！」
その防御行動は無駄ではなく、必死必殺の一撃はスプリガンの側を

掠めて、双剣との間に無数の火花を散らしながら流れ去るに留まる。
しかし、その結果だけを以てアスカロンの目論見が外れたかと問うならば――答えは『否』だ。この一撃すら、『偽剣アスカロン』の本領を発揮するための過程にすぎないのだから。
「褒めてやろう、名も知れぬスプリガン。貴様は我が全力を出すに値する、稀有なる相手だ」
降下加速を用い、アスカロンは再び反転。そのまま一気に高度を上げ、天頂高くに陣取りながら、下方を飛び回るスプリガンを見下ろす。体勢を大きく崩した事が災いし、スプリガンの飛行速度は先程の半分以下までに落ちている。奴がアスカロンのいる高さにたどり着くまでには、ある程度以上の時間が必要になるはずだ。
本来であれば、この位置より三度目の強襲をかけるのがセオリー。そのセオリーを敢えて捨てたアスカロンは、空中に静止したまま愛刀を再び上段に構え直す。更に、刀身が背に触れる寸前まで、深く。陽光を喰らい尽くせとばかりに、鋭く。
奇手の一撃を以て稼いだ時間を贄とし、丹田に力を込めながら、己が持つマジックポイントの全てを『偽剣アスカロン』へと注ぎ込む。熱量（カロリー）を無理矢理吸い上げられているような冷え冷えとした感触が腹の内を奔り、同時に偽剣の刀身が白い輝きを放ち始める。
「故に……我が奥義に相見え、果てる栄誉をくれてやる！」
偽剣の話をしよう。
偽剣とは、真作を真似て構築され、真作を持つに能わぬ者によって行使されなければならない。
レジェンダリー・ウェポン『聖剣アスカロン』の贋作として造られた『偽剣アスカロン』は、あらゆる面で真作に遅れを取る。一撃の威力、武具自体の強度、斬れ味は言うに及ばず、真作が持つ『竜種装甲無効化』のエクストラ効果も持ち合わせていない。
更に致命的なのが特殊効果の差だ。
討ち果たした竜の炎を吸収し己の力へと変えたという設定を持つ『聖剣アスカロン』は、振るう度に刀身より魔法の炎を放ち、ただでさえ長大な刀身の斬撃範囲を更に倍化させるという。

一方『聖剣アスカロン』によって討たれた竜の死骸より鍛え上げられた『偽剣アスカロン』に宿る特殊効果は、当然ながら真作ほどの使い勝手はない。真作同様、内に強力な竜の炎を宿しこそすれ、その炎を放とうとするならば空中あるいは地上に一定時間静止し、自らのＭＰ全てを燃料として捧げてチャージを行う必要がある。

せめてもの救いとして、チャージ時間に応じて竜炎の射程範囲が伸びるという特殊効果がついてはいるが、地上戦に於いてそんな悠長にチャージをしている時間があるはずもなく、自在に飛び回れる空中戦に於いて大技がそうそう当たるものではない。

『当たらなければ無意味だ』。そう考える賢者たちは、聖剣アスカロンの柄を握る資格を持つ。

『当たる状況を作ればいい』。そう考えた愚者だけが、偽剣アスカロンの使い手足りうる。

「避けられまい！　避けられるはずがあるまい!!

――高度優勢を明け渡し、数で勝る敵中に敢えて飛び込むほどの仲間思いならば、尚更！」

双剣を構え、下方より全速で駆け上ってくるスプリガンの渋面を遠くに見るアスカロンの顔には、獰猛な狩人の笑みが浮かんでいる。

最初の奇襲の折、奴は二人を斬り倒しながらも先行して空に上がろうとはしなかった。奴が空中に舞い上がったのは、こちらの団員が全員空に昇った後の事。

シルフ族のアベンジ以上の速度を持つと類推されるプレイヤーが、なぜそこまで出遅れる？　そして、数で勝る敵を圧倒する剣の腕を持ちながら、奴はなぜ一度たりとも高度優勢を得ようとしない？

気づいてみれば簡単だ。

――庇っているのだ、奴は。足元に残してきた、あのレプラコーンの片方、あるいは両方を。

出遅れたのではなく、待っていたのだ。敵がレプラコーン達の側から離れるのを。高度優勢を得ようとしなかったのも、敵の注意を己にひきつけ、地上にいる仲間たちを意識させないため。

ならば、勝利への道筋は単純極まる。

奴と地上のレプラコーンを結ぶ軸線上に陣取り、炎が地上に届くだけのチャージ時間を稼ぐ。そして、それは今この瞬間達成された。

「地上の連れごと――消し飛べえええええッ!!」

振り下ろしたアスカロンの刀身が、太陽をも灼き滅ぼす閃光をまといながら、超高温竜炎（ドラゴンブレス）を解き放つ。偽剣アスカロンが誇る奥義（アウトロウ）は、死と滅びを体現する紅蓮の奔流となってスプリガンを襲う。

無数のデメリットを踏み越えた先にある、魔法の速度と斬撃の威力を兼ね備えた奥義。そんな物を真正面から受けた者の末路は『リメインライト化』の一つに尽きる。

盾もなく、大した鎧も無く、魔法防御があるわけでもないあのスプリガンが、耐えきれる道理がどこにある。荒れ狂う炎の中、黒い妖精は塵と化す。それが不変にして絶対の結末なのだ。

――そのはずだった。

何事にも『例外』は存在するという、単純にして理不尽なその事実さえ無ければ。

（――馬鹿な）

世界を流れる時間そのものが酷く重たく、粘性を持ったかのように感じる。

刹那の瞬間が、永劫に等しく引き伸ばされたかのような錯覚の中、アスカロンは目の前で起きている出来事をようやく理解する。

（馬鹿なっ！　こんな、こんな事が……!!）

断ち割られている。

竜の炎が。絶対の一撃が。己が頼みとする最強最後の奥義が。

その炎に焼き払われるはずだったスプリガンによって。黒い剣士が携える二振りのロングソードによって、正面から真っ二つに斬り裂かれている。

「消し飛ぶのは――お前の方だ!!」

ありえざる雄叫びを聞く。ありえざるその姿を視界に捉える。ありえざる敗北の理を肌で知る。

ほんの一瞬前屠ったはずの敵が未だ健在であることと、無敵の炎を斬り破るという絶技は、既にアスカロンの理解の範疇を越えていた。

（……ありえん。こんな、こんな理不尽が……あるというのか。この世界には、まだ）

滝を遡り竜へと至る魚の如く、炎の奔流を穿ち貫いて迫り来る漆黒の悪夢を前にしながら、それでもアスカロンの内心は驚くほどに静かだった。

例えばそれは、地より放たれた流星が大気圏を突き破るかのような。あるいは、ただの人間が対物狙撃銃の銃弾を叩き斬るのと同じ程度には非現実的な光景。

偽剣アスカロンの奥義を斬る――つまりは『魔法を斬る』。そんな事が出来ないかと夢想した時もあった。それが不可能であることは、アスカロン自身が身を以て知っている。一瞬の判断が生死を分ける戦場にありて、魔法というスキルが持つごく小さな着撃判定そのものを打ち払う事など出来るはずがない。

そう思っていた。今、この瞬間に至るまでは。

（なるほど、我らが束になっても……勝てぬわけだ。……ああ。やはり、名を聞いておくべきだったな）

武の鬼道を歩んだ者の逃れ得ぬ運命（さだめ）、今がその時。

十六連の剣閃が一帯を為した流麗なる剣技と、三度目となる敗北の味を噛み締めながら、リメインライトへと変わったアスカロンの肉体は地上へ向け真っ直ぐに堕ちていった。

紅蓮の炎は風に散り、たった一つ残った小さな魂の火は真下に落ちていく。

周囲からようやく敵の姿が消えたことを確認し、黒いスプリガン――もとい、キリトは腹の中に込めていた力を安堵の息と共に緩めた。

左右の手に携えていた二振りの騎士剣が、鞘に戻る事を待たずして砕け散ったのは、それとほとんど同じタイミングだった。

（……よく、保ってくれた。ありがとな）

空となった両掌を見つめながら、キリトは内心でつぶやく。

漆黒の剣『黒瀬童子』。白磁の剣『ディス・イズ・ジ・エンド』。何代目かになる、《ＡＬＯ》でのキリトの愛剣達。

共に同じ職人の手によって造られた二振りの兄弟剣は、キリトの無茶苦茶な――空中からのノーブレーキ降下強襲で敵を一刀両断し、あまつさえソードスキル『ソニックリープ』『ヴォーパル・ストライク』の連続攻撃（スキルコネクト）を以て炎の奔流を真正面から打ち破るという運剣に耐えきり、その使命を全うした。

しかも武器の耐久値に直接ダメージを与えてくるタイプの敵Ｍｏｂと戦闘を終え、耐久値回復もままならぬままＰｖＰに雪崩込むという想定外の事態にありながら、だ。並の品であれば、良くてあのサラマンダーの一撃を受けた時点で、悪ければ最初の奇襲の時点で刀身が粉々に砕けていただろう。

ほんの少しの間だけ感傷に浸ったあと、キリトは背中の翼を羽ばたかせ、地上に残してきた彼女たちのもとへ向かった。

「――リズ！　レイン！　二人とも、大丈夫だったか？」

地上に降り立ったキリトが駆け寄る先は、採掘場に取り残されていた二人のレプラコーン。

《ＡＬＯ》で知己となった赤く長い髪が目を惹くレインと、《ＳＡＯ》時代からの付き合いがある桜色の髪をしたリズことリズベット。

スタン効果が残っているのか、採掘場そばに置かれていた荷車に寄り掛かるように座り込んだまま、二人はどうにかこうにかという様子でキリトと視線を合わせる。

「あんたのおかげで、どうにかね。……ううん、まだ全身ピリピリする……」

「わたしも、なんだか痺れが残ってる気がする……。鉱石を取りに来ただけなのに、なんでこんな目に……」

「来るのが遅くなってごめん、二人とも。ほら」

リズとレインの方に腕を差し伸ばし、キリトは二人の体を引き起こす。男の手に引かれよろよろと身を起こした二人は、服についていた土埃を払いつつ、軽く身なりを整えた。

「別に気にしてないわよ。もともと、護衛を頼んでた訳じゃないし。

ね、レイン？」
「リズっちの言う通りだよ、キリトくん。むしろ、助けに来てくれるなんて思ってなかったから、びっくりしちゃった」
「あら？　あいつらに囲まれた時、小声で『助けて、キリトくん……』って言ってたのはどこのどなたでしたかなー？」
「そ、そっちだって！　キリトくんが来てくれた時、わたしの隣で幸せオーラ全開にしてたくせに～！」
けらけらと笑うリズにからかわれ、レインの頬が髪色に負けないくらいの赤色に染まる。
実際、キリトがここを訪れたのは偶然の産物だ。『ドラグーンケイブ周辺に、レアな装備を落とす敵Ｍｏｂが出現する』という噂に期待を込めて足を運んでみれば、現れたのは『レアな装備を落とす敵Ｍｏｂ』どころか『レアな装備の耐久度を容赦なく落とす敵Ｍｏｂ』。
完全な無駄足を踏んだ帰り、採掘場の上空をフライパスしていると、リズとレインがＰＫ集団に囲まれているのを発見し――後の顛末は言うまでもないだろう。
「しっかし、あたしはともかく、レインの不意を突いて麻痺させるなんて……厄介な連中もいたもんね」
「うん。あの人達、結構手練のＰＫクランだと思う。いいアイテムが手に入って油断してたってのもあるけど……『危ない』って感じたときには、もう魔法を回避できる余裕もなくて……」
「ここ、結構いい採掘場だったんだけど……面倒なことになりそうね。キリトはどう思う？」
「……そうだな。俺もレインの意見に賛成だ。
あれだけの頭数がいながら、リズとレインに存在を気取らせなかったあたり……採掘しにくるプレイヤーから察知されにくいポイントを把握してるんだろう。ここをメインの狩場にしてる可能性は大きいと思う」
謙遜するリズは言わずもがな、レインも《ＳＡＯ》時代から場数を相当に踏んだ手練。そんな二人に一方的な奇襲をかけられるとなれば、少なくともそれなり以上に腕が立ち、頭の回るクランと見ておい

て間違いは無い。
　恐らく、自らの存在を秘匿する為、領主や情報屋に注目されない程度の襲撃頻度を保ちながらＰＫを行っているのだろう。
「……で。二人とも、どうする？　街に戻るっていうなら、送っていくけど」
「そうね……。欲しい物は手に入ったし、お言葉に甘えさせてもらうわ。レインは？」
「わたしも戻るよ。さっきのクランみたいなのにまた襲われても困るし」
「わかった。じゃあ、一緒に帰ろうか」
　そう言いつつ、キリトは右手でアイテムウィンドウを呼び出すと、ストレージに格納していた武器をオブジェクト化する。
　万物を絶つ金色の大剣――レジェンダリーウェポン《エクスキャリバー》が実体となり、主たるキリトの背に顕現する。『黒瀬童子』と『ディス・イズ・ジ・エンド』を失った今、キリトが持つ剣はこの『エクスキャリバー』一振りのみだ。多少目立つとはいえ、さっきの連中のような手合が再び現れる可能性を考えると、無手のままでいるわけにはいかなかった。
「……あれ？　今日は二刀流じゃないの？　キリト」
「それが……リズが作ってくれた剣、両方ともさっきの戦いで折っちゃってさ……」
「あー、そういうこと……。まったく、どこいってもあたしの最高傑作をぽんぽんぽんぽんへし折ってくれるわね。
　われらが黒の剣士サマは」
《ＳＡＯ》はもちろん、《ＡＬＯ》や《ＳＡ：Ｏ》で手にした幾本もの剣の事を思い返し、キリトは苦笑する。
　かつてキリトが使い潰してきたその一振り一振り全てに、リズは大変な労力を注いでいるのだ。その苦労の重さを思えば、リズには頭が上がらない。
　剣士たるもの、己が得物と定めた一振りを生涯の剣とすべし――ＶＲＭＭＯ全盛の現代に於いても残り続ける、そういった古式ゆかしい

風潮は嫌いではないが、しかし従えない性分（プレイスタイル）だ。ならばせめて、職人たる彼女が捧げてくれる剣は最大限大事にしたい。たとえその末路が、耐久値を使い尽くした上での消滅か、新たな剣への転生のどちらかでしかないとしてもだ。

「……ま。限界まで使い込んでくれるのは、職人冥利に尽きますけども。うちの売上にも貢献していただけてますし」

「はは……。また頼むよ、リズ。いつものとおり――」

「予算無制限。今できる最高の剣を一振り――いや、今回は二振り必要なんでしょ？　ちゃーんとわかってるから、任せときなさい。

それじゃ、早く帰りましょ。次に鍛える剣について、細かい打ち合わせもしたいし」

「ああ、行こうか」

再び背中の翼を展開したキリトが宙に舞い上がり、一拍遅れてリズとレインが続く。ここを狩場にしているＰＫクランが一つとは限らない。キリトは念のために周囲を索敵しつつ、リズ達を負荷をかけない程度の緩い速度を保ちながら先頭を切って空を征く。

そうして飛び続けることしばし。ほんの少しだけ飛行速度を上げたレインが、おもむろにキリトの隣に並んだ。

「ねえねえ、キリトくん」

「ん？　どうした、レイン」

「さっきの戦いの時もそうだけど……キリトくん、あんまり『エクスキャリバー』を使わないよね？

いつも、リズっちが造った剣ばっかり使ってるし」

「確かに、そうだな」

「だよねだよね！　それでね、剣士兼鍛冶師の端くれとしては、その理由がなんとなーく気になっちゃいまして……」

端正な顔立ちに曖昧な苦笑いを浮かべつつ、レインはどこかもじもじと照れた様子で問いかける。

――実のところ、かつてリズ本人にも同じような内容を問われた事がある。そして、キリトの答えは今も変わっていない。

「確かに、エクスキャリバーは強いよ。ステータスだけ見るなら、どん

なプレイヤーメイドの剣より上を行く。
　でもさ、なんていうか……リズが造ってくれる剣は、馴染むんだ」
「馴染む？」
「ああ、『しっくりくる』って言えばいいのかな。俺が思った通りに振り回せる、体の一部みたいな感じなんだ。
　……その点、エクスキャリバーはじゃじゃ馬でさ。強いには強いけど、リズの剣ほど素直に言うことを聞いてくれない――そんな感じがするんだ」
「そうなんだ……。キリトくんにそう言われると、なんか納得しちゃうかも」
「だろ？　それにほら、いざという時ならともかく、普段からエクスキャリバーを抜きまくるのはシノンに悪いかなって……」
「あははっ、なるほど。確かにそれは一理あるかも。二人の思い出の剣なんだよね、それ」
　キリト同様に剣士であり、そしてリズと同じく鍛冶師であるレインには、キリトの言わんとする事がちゃんと伝わったらしい。
　二人のその話を後方に控えながら聞いていたと思しきリズは、どこか自慢げな様子で羽根をはためかせると、キリトの隣へと並んだ。
「伊達に《ＳＡＯ》の時からこいつの装備の面倒見てきてないのよ。ねー、キリト？」
「ああ、リズにはいつも助けられてるよ。でも、まさか《ＡＬＯ》や《ＧＧＯ》でも世話になるとは思ってなかったけどさ」
「ふふん♪　今後とも、リズベット武具店をどうぞ末永くご贔屓に。うちの大事なＶＩＰ会員さん？」
「『ＶＩＰ会員』じゃなくて、『いいカモ』の間違いだろ？」
「あらあら、よーくわかってるじゃない」
　げんなりした顔で苦笑するキリトを挟み、リズとレインはくすくすと笑いあう。
　エクスキャリバーは『最強』の剣。ステータスだけを見れば、比肩しうる剣は一振りたりとて存在しない。仮に実装されるとしても、それはきっと《ＡＬＯ》が何度目かの大規模アップデートを迎えた後、つ

まりは遠い先の事だ。
故にリズが造る剣は決して『最強』の剣ではない。
しかし、キリトにとっての『最良』の剣であることは間違いない。
全てが0と1で構成されるデジタルな世界であっても、数字だけでは割り切れない確かな何かがある——そう信じるに足るだけの想いが籠もった剣があったからこそ、キリトは今まで戦い抜くことができたのだ。
他愛もない話をしながら飛び続ける内、気づけば近くにあるプーカ領の村が見えてきた。入り口の手前で羽根をしまったキリト達は、村の正面に設置されたゲートを徒歩で潜った。ここまで来てしまえば、もう誰かに襲われる心配はない。
「さーて、帰る前に軽く食事でも……」
串焼きの屋台でも出ているのだろうか。広場の方から漂ってくる獣の脂が焼ける香ばしい匂いに、キリトの空腹中枢が刺激される。
牛でも豚でも鳥でも羊でも、なんなら蛙の肉でもいい。とりあえず歩き出そうとしたキリトの袖を——レインがくいくいと引いて押し留めたのは、そんなタイミングだった。
「……ねえ、キリトくん。前にスヴァルトエリアでしてくれたあの話って……まだ、有効かな？」
「話って？」
「ほら。わたしが、キリトくんの武器を鍛えるっていう、あの話だよ。もし、まだ大丈夫なら……キリトくんの新しい剣は、わたしに造らせてほしいの！」
白い両手でキリトの左手をぎゅっと握りしめながら、レインはいたく真剣な眼差しをキリトに向ける。真っ直ぐに見つめながら答えを待つ深い琥珀色をした彼女の瞳から、キリトは視線を逸らすことが出来ない。
「レイン。すごくありがたいけど……でも、どうして急に？」
「助けてもらったお礼——っていうのもたっぷりあるけど。わたしだって、レプラコーン鍛冶師の端くれだよ？
あんなにいい顔しながら、リズっちの剣の良さを語られたら……同

じ職人として嫉妬しちゃうよ。
……それとも、やっぱりわたしなんかじゃダメ……かな？」
自信なさげな表情で見上げてくるレインの瞳は、拒絶されることへの不安に潤んでいる。
そんな彼女を前にして『ダメだ』と言える程、キリトは無情な人間ではないが――それでも、今はレインを拒絶しなければいけない。
口約束とはいえ、新たな剣の鍛造については既にリズに依頼した後なのだ。いくら仲間同士とはいえ、それを今から別の職人に任せるなどと言って約束を翻してしまっては、リズに対して礼を失する。
《ＳＡＯ》の時から、彼女が造り、鍛え、磨き上げてきた武器に、キリトは命を預けてきたのだ。その恩義と信頼は軽々しく扱って良いものではない。
「……レイン。気持ちはうれし――」
「はい、ストーップ。キリトもレインも、一旦落ち着いてリズ様のありがたーいお話を聞きなさい」
断りの言葉を口にしようとしたキリトに先んじ、リズが唐突に声をあげた。機先を制されたキリトが口を噤む中、リズはぴしりと指先を突きつける。
キリトの手を握ったまま、きょとんとした顔で困惑するレインに向けて。
「レーイーンー。キリトにお礼がしたいっていうあんたの気持ちはよーくわかるけどね。
うちの大事な常連さんを、店主の目の前で掻っ攫っていこうとするのは、ちょーっとどうかと思うわよ？
レインだって、イベントのトリを任されてたのに、いざ本番って所でいきなり別のアイドルがトリになったら……いい気分しないでしょ？」
「うっ……それは、確かに……。ごめんね、リズっち……」
「ふむ。わかればよろしい」
痛い所を突かれ素直に詫びるレインに、リズはどこか仰々しい動作でふんふんと頷く。その仕草と雰囲気からは、リズが本気で怒ってい

たわけではないことがよくわかるが、一国一城ならぬ一店の主としては譲れぬ一線があるのもまた確からしい。

そんな彼女の視線が、しょぼくれた様子で俯くレインと、その側に佇まざるを得なくなったキリトの間をちらりちらりと行き来する。やがて何度か小さく咳払いした後、リズはおもむろにキリトの方へと視線を向けた。

「ああ、そうそう。キリトに大事なことを言い忘れてたんだけど」

「大事なことって？」

「納期よ、納期。あんたクラスの使い手を満足させる剣を二振りとなると、完成までに結構な時間がかかっちゃうのよね。それでもいい？」

「それは……」

『構わない』――と言いかけたキリトを押し留めたのは、何か企んでいる時特有の含みのある笑みを浮かべたリズの視線。視線の主が浮かべる表情は、クリスタライト・インゴットを取りにアインクラッド５５層の雪山に向かう直前、『金属を取るには鍛冶師の協力が必要』と宣った時の悪い笑みとよく似ていた。

隣で落ち込むレインに気づかれないようリズに小さく頷きを返しながら、キリトは答えを口にする。

「――ものすごく困る。なにせ、エクスキャリバーは俺の《お守り》みたいなものだからな。

できるなら、いざという時までは温存しておきたい」

今この瞬間、キリトとリズは共犯関係を結んだ。

『グッジョブ』とでも言いたいのか、キリトにだけ見える絶妙な角度でこっそりとサムズアップしたリズは、わざとらしくため息をつきながら腕組みをしてみせた。

「そうね……お得意様だし、最優先で仕事させてもらうけど……。いくらあたしでも、一人じゃ限界ってものがあるのよね」

「そこをなんとか、頼む」

「そう言われてもねぇ。

……よし。こうなったら、リズベット武具店に期間限定で入店して

くれる凄腕鍛冶師を探すしか無いわねー。
　ねえ、キリト。うちで働いてくれそうなプレイヤーの心当たり、ある？　できれば、剣を一振り、最初から最後まで鍛えられる即戦力な子がいいんだけど」
「そうだな……職人ビルドしてるプレイヤーの知り合いは多くないけど……」
　すっとぼけるリズの調子に合わせ、キリトもまたすっとぼける。そしてほんの一瞬だけ、己の徒歩ゼロ秒圏内でしょぼくれる彼女に視線を向けたあと、キリトは再びリズの方を見つめて頷いた。
「――《ＡＬＯ》随一の妹思いで、特殊効果付きの武器作成が上手くて、歌って踊れるアイドル系レプラコーンで良ければ……一人だけ心当たりがある」
「それ、本当!?　あたしの求める条件にぴったりじゃない！　誰のことを言ってるんだか全っ然わからないけど、是非とも紹介してくれない？」
「ああ、もちろん。
　――というわけで。どうかな、レイン？　リズの所で、職人を募集してるそうなんだけど」
　かくも堂々と嘯きながら、キリトは困惑している赤い髪のレプラコーンに水を向けた。
　わたわたと混乱しながらキリトとリズの間で視線を彷徨わせていたレインは、事態の流れをようやく理解すると、熟れた苺のように頬を真っ赤に染めたまま、ゆっくりと視線を上げてリズの方を向いた。
「え、えっと……リズっちのお店で、鍛冶師の求人を出してると聞いたんだけど……」
「ええ、してるわね」
「応募します」
「採用♪」
　キリトのソードスキルが敵を斬るのと同程度の速さで新規従業員の採用を決めたあと、リズは改めてキリトの方を向いた。
「さーって、従業員の当てもできたし。早速だけど打ち合わせにいき

ましょうか、キリト」
「そうだな。じゃあ、リズの店に……」
「それでもいいけど……ほら、うちの店って人気店だからしょっちゅうお客さんが来るじゃない？
落ち着いて相談するのにはちょっと向いてないと思うのよね！　ねっ、レイン？」
「……そ、そうだね！　私も、リズっちの言う通りだと思うよ！　キリトくん」
少しだけもじもじとした様子の鍛冶師コンビの指先が、キリトの指に触れる。先の戦闘で固く握りしめられていた拳を労るような二人の手付き、そしてキリトに向ける視線の中には、どこか意味ありげな色がたっぷりと含まれている。
以前のキリトであればそれに気づくことはできなかったかもしれないが、今は違う。そして、それに気付いてしまった以上――そこから先へは、男の方から誘うべきだろう。仮にもキリトは、あの世界を管理する者なのだから。
「確かに、それもそうだ。
……じゃあ、もう少し落ち着ける所に行こうか。二人とも」
紅をさしたかのように頬を赤らめた二人は、首を微かに縦に振ると、《ＡＬＯ》からログアウトしていく。
妖精の世界から消えていく二人の姿を見送ったあと、キリトもまたコンソールを呼び出し、《ＡＬＯ》からログアウトした。
《ＡＬＯ》と同じ『種子』から育ちながら、限られた者達しか入ることを許されない世界――とある個人宅のサーバ内に作られた仮想世界へ再度ログインしなおすために。

06―2．剣理活人刀

営業曜日：不定期。
営業時間：店主の気分次第。
メニュー：その時次第。
従業員：基本的に店主のみ。稀に臨時従業員の勤務も有り。
そんな、一風変わったカフェ――しかもただのカフェではなく、いわゆる『メイドカフェ』がもしもどこかにあるとしたら、商売として成り立つのだろうか。常識的に考えれば、それは非常に厳しいと言わざるを得ないだろう。
しかもそこに『特定の客以外は入店できない』という要素が加われば、もはや利益とを目的とした活動は不可能に近い。
故に、そんなメイドカフェは存在しない――少なくとも、現実世界には。
「――おかえりなさいませ、ご主人様」
来店客の到着を告げる小さな鐘の音と共に、メイド長の清らかな声が出迎える。どこかレトロな雰囲気を残すメイドカフェ『七色虹亭』に、その紅の髪と清楚な佇まいはとてもよくマッチしていた。
「ただいま、レイン。予約してなかったんだけど、席は空いてるかな」
「もちろん。ご主人様の為に、スペシャルシートを空けておきました」
楚々とした仕草で、レインはたった一人の主人を店の奥へと誘う。丈の長いロングスカートと一体となった黒いワンピースの上に、フリルのついた白いロングエプロンを重ねた正統派のメイド服。かつてメイドカフェで働いていただけあって、特徴的な紅い髪を白いヘッドドレスで彩るその姿はいつ見てもサマになっている。
アイドルとしての活動に重心を置くべく、メイドカフェでのアルバイト自体は辞めてしまったレインだが、現在はここ――キリトのプライベートＶＲ空間内に小さなメイドカフェを構え、気が向いたときだけ店を開けていた。
「ささ、こちらへどうぞ」

レインの言うスペシャルシートは、店の入口からはちょうど死角になる位置に用意されていた。周囲を壁で囲われたブースめいた席に案内されたキリトが、高級レザー製と思しきソファに腰掛けると、レインもその隣へ腰を下ろした。

「スペシャルシート特典として、私が直接、ご主人様にご給仕させていただきます」

「なるほど。それは確かに、スペシャルだな」

「そう言っていただけて何よりです。それではご主人様、ご注文はいかがいたします？」

一流のメイドとして振る舞いながら、レインはコンソールウィンドウにメニュー表を表示してキリトの方へと向けた。その内容は意外と本格的で、お茶請けやドリンク類を始めとして、パスタやオムライスなどのカフェ系の食事メニューに加え、アルコール類や手作りのスイーツ、変わったところではボルシチやピロシキなどのメニューが数多く記載されていた。

正直な所、がっつり食事を摂ってしまっても問題ない程度には空腹を覚えているキリトだが――この後の『行為』の事も考え、軽めの物で済ませる事に決める。

「じゃあ、この……チーズトーストとドリンクのセットを。ジンジャーエールで頼むよ」

「はーい。かしこまりました」

キリトの注文を入力した後、レインはウインドウの隅にあった注文ボタンを押す。微かな効果音と共にメニュー表としての役目を終えたウィンドウが閉じても、レインはソファから立ち上がろうとはしなかった。

「ちょっと待っててね。今、優秀な新人メイドさんがお料理してるから」

「新人？　いつの間に……」

「意外な所でご縁があってね。おかげで、キリトくんのお世話っていう優先度の高い業務に集中できて大助かりだよ」

仔犬のように愛くるしい仕草で身を寄せてくるレインの姿に、キリ

トの顔からも思わず笑みが溢れる。甘える彼女の背にキリトが左手を回せば、レインはもっとスキンシップを求めるかのようにより一層体を近づけた。

「そういえば、レイン。最近、アイドル活動の方は順調なのか？」

「おかげさまで、結構上手くいけてるよ。時々だけど、アイドル合同イベントにも参加できるようになってきたし。固定ファンもだんだん増えてきたよ」

「さすがレインだな。どんどんステップアップしてるじゃないか」

「えへへ、ありがとう。それもこれも、キリトくんやみんなが応援してくれてるおかげだよ」

ひとしきり照れたように笑ったあと、レインは身体をもたれかからせ、抱きつくようにしてキリトの胸板に顔を埋めた。その仕草に若干驚かされつつも、キリトは彼女の髪を優しく撫でながらレインを受け入れた。

「レイン？」

「あのね、キリトくん……。アスナちゃんが、キリトくんを皆で幸せにしようって持ちかけてきてくれたとき……私、本当はちょっとだけ迷ったの」

「……うん、まあ、そうだよな普通……」

いくら正妻（アスナ）様ご公認とはいえ、現代社会を生きる真っ当な女性がいきなり一人の男の後宮に入れと言われてそう簡単に首を縦に振れるものではないのは当然だろう。

――などというありきたりな事をキリトが考えていると、レインはふるふると首を横に振った。

「違う違う。たぶん、キリトくんが考えてる方じゃないよ。私が迷ってたの」

「え？」

「ほら、アイドルってだいたい恋愛厳禁でしょ？　私が迷ってたのは、そっち」

「お、おう……」

ハーレムに入るのは即決したのだろうか――というキリトの疑問

を軽く受け流すレインの、上目遣いの視線がキリトの瞳を捉えた。
「キリトくん。私が『アイドル活動に専念するために《ＡＬＯ》を引退する』って言ったとき……わざわざバイト先へ探しに来てまで、止めてくれたでしょ」
「ああ。そんなこともあったな……あの時は焦ったよ。『当店に指名制度はありません』なんて言われてさ」
「あはは、あったあった。でもおかげで七色ともまた姉妹に戻れたし、今でもすっごく感謝してるよ。
――で、それを踏まえて……私は思ったのです」
「思ったって……何を？」
「今みたいに、アイドルとＶＲゲームは両立できるけど……さすがに、アイドルと『キリトくんの恋人』の両立は難しいんじゃないのかな、って」
キリトの胸板の上に人差し指をあて、ぐるぐると回して『の』の字を描きながら、レインは訥々と言葉を口にする。
実際、レインの言う通りであることは間違いない。
アイドルがラブソングを歌うことは許されても、恋愛に耽ることは許されないのは、西暦２０２０年を越えた現代に至ってもそれは変わらない。たとえばの話、ＡＲアイドル・ユナに突然恋人の存在が発覚しようものなら、各種メディアやＳＮＳ上での騒ぎはえらいことになるだろう。
レインが――もとい、『枳殻虹架』がアイドルとして躍進していくのであれば、男の存在は邪魔にしかならない。芸能関係に疎いキリトにも、それは容易に察せられた。
「キリトくん。私ね……キリトくんの事、大好きだよ。すごく大切な人だって思ってる。
でも……アイドルのお仕事も、アイドルでいることも、同じ位に大切な私の夢なの。どっちか選ぶなんて、できない。
だからね、その……。キリトくんの恋人になるのは、私が『レイン』でいる時だけ……このＶＲ空間限定の恋人でも、いい？」
「ああ。当たり前だろ、レイン。むしろ、ここにいる間だけでも俺の恋

人で居てくれて嬉しいよ」
　ほんの少しだけ不安そうな顔色をにじませるレインを、キリトは力強く抱き寄せる。その腕の強さに、わずかに驚いた様子を見せたレインだったが、それでも体を離そうとはしなかった。
　たった一人の男の元へ集う、十人以上もの女性。その関係を恋人と呼ぶのであれば、彼と彼女らが堂々と恋人でいられるのは、このプライベートＶＲ空間だけだ。元より大っぴらにしにくい関係であること、現実世界でイチャつきにくい諸事情を抱えた者が何人かいること、未だ一学生の身分であるキリトには何か問題が起きた時に責任を取れないこと――そんな事情が重なった結果の産物ではあるが、それが結果的にレインにも都合よく働いていた。
「よくばりすぎかな、私。大好きなアイドルのお仕事も、大好きな人も諦めたくないなんて」
「いやいや、レインの『よくばり』っぷりなんて普通だと思うけどな。俺だって、剣一振りじゃ物足りないから二振り目も持ってるような『二刀流』だし……」
「恋人関係は『多刀流』だけどね」
「うっ、よりによって本家本元の多刀流サマにそれを言われると……」
　言葉を詰まらせるキリトをからかってやりつつ、レインはゆっくりと顔を上げ、キリトの瞳を正面から真っ直ぐに見つめた。
「これからも、アイドルの『枳殻虹架』を応援よろしくね。キリトくん」
「ああ。いつかレインが……枳殻虹架がトップアイドルになる日まで、全力で応援させてもらうよ」
「ふふっ、ありがと。それとね……」
　怪訝な顔をするキリトと視線を合わせたまま、レインは一度言葉を切る。そのまま二、三度、ゆっくりと深呼吸をしたあと、改めて口を開いた。
「その……『枳殻虹架』がアイドルを引退する時は、絶対、『一般の男性の方と入籍しました』ってプレスリリースを出すって決めたんだ。だから……そっちもよろしくね？　キリトくん」
　それだけ言って静かに目を閉じたレインは、そのまま唇を差し出

す。これから多くの人へ、華やかなメロディに彩られた歌声を紡ぎ届けていくのであろう艶やかな唇。その稀有なる唇を、凡俗な欲望にまみれた一人の男に捧げる。

レインを含めた数多くの女性と男女の契を結び、彼女らの想いを全て受け止めると腹を決めた時点で、キリトは彼女らの人生そのものに責任を取ることを決意している。故に今、レインが差し出す口づけを拒む理由などどこにもありはしなかった。

「約束するよ、レイン。『一般の男性』としてさ」

固く静かな決意と共に、歌姫の小さな顎に手を添えたキリトは、彼女の唇をそっと引き寄せて口づけを――。

「えー、ご主人様に店長サマ。

大変いい雰囲気のところ申し訳ありませんが、あたしはいつまで待ちぼうけを食らってればいいんでしょうかね」

――交わそうとした、まさにその寸前。スペシャルシートが収まるブースの入り口から聞こえてきた、揶揄と不満が入り混じった声が、重なろうとした唇と唇を押し留めた。

驚いて振り返ったレイン越しに、もう一人のメイド――桜色の髪が目を惹く彼女の姿を捉えたキリトは、観念したように片手を上げた。

「えーっと……どこらへんから待たせちゃってたかな……リズ」

「ご主人様がメイド喫茶に足繁く通ってレインを指名しまくった挙句、『俺の所へ帰ってこいよ。妹と一緒にひいひい言わせてやるからさ』ってがっつり口説きました――って話をしてたあたりから」

「すまん……本当にすまん……。

待たせたのは謝るから、だからその悪意ある脚色付きの誤解を広めるのだけはやめてくれ……」

「しょうがないわねえ。ご主人様たっての願いとあらば、呑まざるを得ないのがメイドの悲しい所よ」

やれやれとでも言いたげなため息をつきつつ、リズことリズベットはようやく首を縦に振った。

右手に持った銀盆の上に、注文通りのチーズトーストの乗った皿とジンジャーエールの入ったグラスを載せたリズの出で立ちは、レイン

同様のメイド服。ただしその方向性は、レインのそれとは１８０度真逆ではあったが。

純白のフリルがたっぷりと使われた、太ももの半ばにも届かないミニ丈のスカート。白リボンがあしらわれた黒いオーバーニーソックスが強調する脚のラインと、スカートとの間に除く肌色の絶対領域。そして足元を淫靡に演出するダークカラーのハイヒール。

メイド服の胸元と肩口には大きなカットが施されており、両肩はもちろん、深い谷間を造る柔らかそうな双丘、その北半球を惜しげもなく見せ付けている。首に締めた細いリボンタイや肘上から指先までを覆うロンググローブはもちろん、通常は白一色であることが多い頭飾り（ブリム）すらも黒染めにしているのは、やはり主たる男の趣味を慮っての事なのだろう。

そんなトータルコーディネートは、家事仕事とは別の方面で主人に奉仕するメイドだと無言のうちに指し示していた。

「ご注文のチーズトーストとジンジャーエールでございまーす」

「ありがとう、リズ」

実に扇情的なメイド服を身にまとったリズは、注文された品をテーブルの上に置くと、そのままキリトの隣に腰を下ろした。見せ付けるように組まれたリズの両脚から覗く絶対領域に理性を溶かされそうになりつつも、キリトはどうにか視線をテーブルの上に戻すことに成功した。

白い丸皿の上に載せられた、二枚のチーズトースト。少しだけ厚めにカットされた食パンをカリカリになるまで焼いたあと、チーズを載せて軽く温めるという一手間を加えることで、小麦由来の香ばしさと乳製品の風味の両方を堪能できるというシンプルかつ奥深い一品。４つにカットされたトーストの断面に、とろけたチーズが流れ込む光景がキリトの食欲中枢を誘惑する。

人間が持つ三大欲求の一つ・食欲が大いに刺激された事で、残りの欲求が相対的に低下する。結果的に理性を取り戻したキリトが、ひとまずは食事を済ませようとした所で、横から伸びてきたレインの手がトーストの載った皿に触れた。

「レイン……？」
「まあまあ、いいからいいから」
虚を突かれたキリトが動きを止める中、レインはチーズトーストの一切れを指先で摘む。とろけて伸びるチーズの糸を器用にまとめたあと、レインはキリトに向けてトーストを差し出した。
「当店よりのスペシャルサービスです。はい、ご主人様。あーん」
「え、えっと……さすがにそれは……」
「あーん？」
「あ、あーん……」
微笑みを浮かべるレインが放つ、有無を言わさぬ圧力。それに屈したキリトが口を開けると、レインは口の中へトーストをそっと給仕する。ちょうど一口で収まるサイズだったトーストを口内に納めながら、キリトは若干の気恥ずかしさと共に咀嚼した。
外はかりっと、中はふわっとした食パンの食感に、まろやかなチーズの味がよくマッチしている。味付けはチーズの塩気のみだが、それで十分な程に味覚が満たされていくあたり、中々に質のいいチーズを使っているのだろう。
「おふっ、あつっ……いやでも、うまいな。これ……」
「でしょ？　特別なミルクを使った、当店自慢の手作りチーズを使ってるからね。
ささ、もう一つどうぞ。ご主人様」
差し出されるがまま、キリトは二切れ目のトーストへ齧り付く。シンプルであるが故に、よりはっきりと分かる素材の良さが舌の上に広がっていく感覚が実に心地良い。
あっというまに二切れ目を胃の腑に納めると、レインとは反対側に座ったリズがジンジャーエールの入ったグラスにストローを突き入れ、しずしずと差し出してくる。スペシャルの名を冠するだけあって、まさに至れり尽くせりといった具合だ。
「ありがとう、リズ」
「どういたしまして。チーズとは違って、こっちはごく普通のジンジャーエールだけどね。

まあ、あたしの愛情がたっぷり籠もってる分、特別な逸品ってことにしといて」

「そのつもりでいただくよ。……そういえば、さっきレインが言ってた『特別なミルク』っていったい……？」

ストローを唇の端に挟み、キリトはグラスの中身を吸い上げる。よく冷えたジンジャーエールは、リズの言う通り何の変哲もないジンジャーエールだったが、これまた彼女の言う通り愛情が詰まっている事は間違いない。

しゅわしゅわとした炭酸が弾ける感触と共にキリトが喉を潤しているその横で、おもむろに口を開いたのはレインだった。

「実は最近、この辺りで牧場を経営してるっていう女性と知り合って……そこの牧場で取れる新鮮なミルクやバターを仕入れられるようになったの。ね、リズっち？」

「そうそう。父娘で牧場を運営してるそうなんだけど、不思議なことにお父さんの姿を見たこと無いのよね……。

飼ってる雌牛の品種も『シルフ』とか『ウンディーネ』、『スプリガン』、『プーカ』っていう変わった名前のばっかりらしいし……」

「不思議だよねー。教会の近くに行くと、気持ちよさそうな啼き声が時々聞こえるんだけど……うー、やっぱり気になる。あの娘さんに聞いてみようかな」

「それがいいわね。今度『レプラコーン』っていう新しい品種をまとめて仕入れるそうだから、その時に聞いてみましょ」

ニヤニヤとした笑みを浮かべて言葉を交わすメイド達の間に挟まれたキリトにできることと言えば、口に含んだジンジャーエールを吹き出さないように笑いをこらえることのみだった。

その後も、愛しき妖精達から絞った濃厚ミルクで作ったチーズを載せたトーストをレインに、愛情の篭もった特製ジンジャーエールをリズに供され続けることしばらく。

すっかりテーブルの上を空にしたキリトは、満足げなため息をこぼした。

「ごちそうさま。レイン、リズ。想像以上に美味かったよ」

「「どういたしまして、ご主人様」」

綺麗に声を重ねた二人のメイドが、コンソールウィンドウを操作してテーブルの上の食器を手早く片付けていく。あくまで優雅に、しかし無駄のない所作で。

そんな光景を微笑ましく眺めながら――キリトはようやく、己の身に異変が起きている事を理解しつつあった。

「……ん？　『ステータス異常』？」

視界の左端上部、通常ならＨＰバーなどのプレイヤー情報が並ぶエリアに浮かび上がるアイコン群――プレイヤーのステータスに変化が加えられた状態を示すものに気づき、キリトは思わず怪訝な声を出していた。

表示されたアイコンは計５種類。敵も味方も見境なく攻撃対象とする『バーサーク』。自身の体力が徐々に回復する『リジェネレート』。異性Ｍｏｂから受けるダメージが増えるが、与えるダメージも増える『テンプテーション』。飼いならし成功率を上昇させる『テイムアシスト』。敵Ｍｏｂから逃亡できなくなる『ウォーモンガー』。

どれもこれも商業ＶＲＭＭＯでデフォルトに存在するバフとデバフばかりであり、《ザ・シード》規格をベースとしたこの空間内に存在している事自体はさほど不自然ではない。

ただ、商業ＶＲＭＭＯほどに本格的な戦闘システムを実装していないこの空間におけるバフ、そしてデバフは、『アイコンが表示される』以外に何の意味もないのだが。

「――どうかされましたか？　キリトくん」

「あれ？　どうしたのよ、キリト。鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔しちゃって」

手早く片付けを終えたメイド達が、左右からキリトの瞳を覗き込む。男が不意に立ち上がったりできないよう、両の太腿の上にそっと手を置き、にんまりとした意味深な笑みを浮かべながら。

「キリトくん、なんだか苦しそう……なんだか、女の子が目の前に居たら無理矢理襲っちゃいそうな顔してる……。ね、リズっち？」

「いやいや、あのキリトに限ってそんなことあるわけ……うわ、あ

るわね。
　しかもこれ、割とヤバい時の顔だわ」
「どうして急に……もしかして、さっきのトーストかジンジャーエールに何か入ってたとか？」
「そ、そんな……！　あたし、変なものなんて一切入れてないわよ!?
――愛情はたっぷり入れたけど」
　心配そうな顔をしようとしつつもそれに失敗しているレインは、至近距離でキリトを見つめながら、空いている片手で男の股座をさわさわと撫でる。
　一方、その反対側でわざとらしく狼狽してみせながら、リズは露わになっている自らの胸の谷間に二本の指を挿し込むと、中から半透明の小さな袋を引っ張り出す。その袋にキリトが視線を向けた途端、システムがフラグの起動を検知し、アイテム情報を示すサブウィンドウが展開される。
　そこに映し出されたのは、『優しいあの人もケダモノに変えちゃうバフ&デバフ付与スペシャルブーストドラッグ　――武具店より愛を込めて――』とかいうアイテム名だった。
　胡乱の極みもいいところだが、当然ジョークアイテムだ。見た目も名前も薬物とはいえ、アミュスフィアの中で使えるアイテムなのだから体に害があろうはずもない。たとえそれを経口摂取しようが、あるいは静脈注射されようが肉体にも精神にも何の影響も及ぼさない。
　できることといえば、せいぜい『ステータス異常アイコンを表示させる』というのが関の山だ。
「おい……『愛情たっぷり』ってそういう事かよ、リズ……！」
「ようやく気づいた？　まぁったく、相変わらず鈍いご主人様ですこと。ねー、レイン？」
「確かに、そうかも……って、そういうことじゃないでしょ。もう」
　一向に悪びれる様子の無いリズを軽く嗜めたあと、レインは改めてキリトの方へ視線を向けた。当然、片手は男の股座に置いたままで。
「この度は当店のメイドが失礼をはたらきまして……誠に申し訳ありませんでした、ご主人様。『七色虹亭』の店長として、心よりお詫び申

し上げます。
それで……ご迷惑をおかけした代わりと言ってはなんですが、当店のスペシャルサービスをご賞味いただけないでしょうか」
「スペシャルサービス？」
「はい。店主である私も含め、お詫びに誠心誠意サービスさせていただきます♥」
きっと、ご主人様にはお気に召していただけるかと……♥」
たっぷりの媚びと共にへりくだって見せながら、レインはストレージから小さな鍵をオブジェクト化し、そっとキリトの掌の上に乗せた。
鈍い銀色をした、何の変哲もない鍵。もしここが現実世界であれば、その鍵がどの部屋の扉を開けるためのものかをキリトに知る術はない。
なにせ、現実世界ではアイテムを注視したらサブウィンドウが立ち上がり、『生意気メイド調教部屋（オシオキルーム）の鍵』などというアイテム名が表示されることは無いのだから。
信賞必罰。功績には報償で報い、罪科には必ず罰を与えること。
人の上に立つ者として良き人間たらんとするならば、信賞必罰を守るのは基本と言える。たとえばそれが一国を治める王であっても、あるいは見目麗しいメイド二人を従えた好色な主であるとしても同じ事だ。
ゆえに、玉座に座った主の脚の間に跪き可憐な唇で太い逸物に奉仕し続けている紅い髪のメイドのように――主をしっかりと喜ばせる者には、ちゃんと報いてやるべきなのだ。
『んっ――いかがですか、ご主人様？』
「すごく気持ちいいよ、レイン。また、上手になったな」
『えへへ。そう言っていただけると、お仕えする者としては冥利に尽きるよ……♥』

塞がってしまった唇の代わりに合成音声システムを使ってキリトと会話しつつ、レインは脇に流れてしまった紅い長髪を軽くかき上げ、目の前の肉棒へ愛おしげに口づけを重ねる。

キリト専用娼館『黒夜館』の一角。レインが渡してくれた鍵で開いた扉の先は、その館の一室へと続いていた。しかも、ただの部屋ではなく、ＳＭグッズや大人のおもちゃの使用を目的とした通称『調教部屋』に。

『どうしましょうか、ご主人様。このまま一度、すっきりなさいますか？』

普段の彼女ではなく、あくまで性処理役のメイドとして振る舞いながら、レインは上目遣いで主の意向を問う。無論、その間も口腔による奉仕を休むことは無い。反り返った肉棒の裏筋を、舌の表側でなぞるように丁寧に舐め上げ、亀頭を唇で包み込むようにして先走りの汁を受け止める。そのまま頬をすぼめ、唇で輪を作ったまま顔を前へと進めて肉棒を根元まで飲み込む。

『こちらの方も、たっぷり溜まっておられるようですし……あまり我慢するのも、体に毒だと思うんだけどなー？』

ずっしりとした重量感を感じさせる陰嚢を片手で優しく揉み拉きながら、レインは頭ごと唇を上下させて、キリトの肉棒へのフェラ奉仕を続ける。

唾液でコーティングされた肉棒を吸い上げる度、レインの唇からはじゅるじゅるという粘ついた音が響く。亀頭の先から肉棒の根元までをレインの口が丹念に行き来するたび、ぐぽぐぽと下品に奏でられる音漏れと共に。

「そんなこと言って、本当は自分が欲しいだけなんじゃないのか。レイン」

『うん。だって私、キリト君のメイドだよ？　ご主人様からいただけるものは、なんだって欲しいに決まってるよ。

なでなでのご褒美でも、お給金でも……ここで熟成されてる、濃くて美味しい精液でも、なーんでも♥』

口全体、そして喉奥まで使って奉仕しながら、レインは主よりの褒

美をねだる。長い舌が蛇のように蠢きながら、肉棒にまとわりつく——そのねっとりとした感触と愛情の篭もる刺激は、陰嚢に溜まっていた精子達を導くには十分に足りる。

「レイン、このまま口の中で……」

『はあい、承知しました。ご主人様♥』

許しの言葉を得たレインは、さらなる激しい口腔ストロークで主の逸物を責め立てる。やがて、より一層堅さを増した肉棒の感触から射精の兆候を見て取ったレインは、肉竿を頬の内側でしごきあげるようにしながら顔を引き起こす。

亀頭だけを口に含みながら、レインが目を閉じたまさにそのタイミングで——熱く滾る子種汁達が、レインの口内目掛けて一斉に噴き出した。

『わぷっ、んふっ……♥　ご主人様のご褒美ザーメン、元気いっぱい……♥

おちんちんも口の中でびくっびくって震えながら、いっぱい精液だそうって頑張ってくれてる……♥』

どくどくと吐き出される精液を受け止めながら、レインは奉仕する喜びと共に濃厚な精臭に酔い痴れる。叩きつけられる白濁した奔流の感触に、ふうふうと荒く乱れたレインの鼻息が、彼女の興奮を如実に表していた。

普段ならこのまま精液を飲み込む所だが、あえてレインはそうせずに白濁液を口内に溜め込む。そうして、ともすれば口の端から溢れ出してしまいそうな程に多量な精液をどうにかこうにか口内に収めきったあと。レインは唇の縁を肉棒に這わせ、付着した唾液と精液をこそげ取りながらキリトの逸物より唇を離した。

「ふうっ……ありがとな、レイン。金玉の中身、全部吸い上げられるかと思ったぞ」

『ご主人様がお望みなら、いつだってそうするよ。

でも、一回分の射精でこんなに出るんだから……溜まってるの全部出されちゃったら、私、精液で溺れ死んじゃうかも♥』

レインは口を大きく開き、射精されたばかりの精液をキリトに見せ

つける。どろりと重たい白濁の海の中では、レインの紅い舌が溺れるような仕草で蠢きながら、にちゃにちゃと卑猥な音を響かせつつ子種を攪拌している。

そう遠くない未来、一流のアイドルとして世界に羽ばたいていくであろうレイン。誰もがうらやむその唇に、己の子種を吐き出してマーキングしたのだという事実が、キリトの征服欲を満たしていく。それは同時に、レインが抱く被征服欲とでも呼ぶべき、少々マゾヒスティックな欲望を満たす事をも意味していた。

口内全体で精液を味わい、わざと音を立てて咀嚼しつつ、レインはゆっくりと立ち上がるとそのままキリトに背を向ける。清楚なメイド服を装備解除し、レースをたっぷりとあしらった黒いランジェリー姿になったレインの足が向かう先は、同じ男を主と仰ぐもう一人のメイドのもとだ。

「……なによ、自慢しに来たってワケ？」

『うん、その通り。ほらみて、リズっち。キリトくん、私のお口まんこの中でこんなにたくさん出してくれたよ？』

妖艶な眼差しと共に、レインは大きく口を開けてキリトが射精したばかりの精液を見せつける。

紅い舌の動きに追従し、風船ガムのようにおおきなあぶくを作り出す精液を眺めさせられるもう一人のメイド――もとい、リズベット。挑発的なレインに対し、持ち前の負けん気で力強い不敵な視線を返すリズベットだったが、二人が置かれた立場の差はその程度で覆せるような物ではない事は簡単に見て取れた。

何せ、過激な下着一枚とはいえなにがしかを身につけているレインに対し、リズベットは生まれたままの姿を晒している。その上、天井から伸びる鎖に繋がった手錠によって両腕の自由を奪われているとあっては、最早その差は歴然だった。

「べ、別に……うらやましくなんかないし」

『そう？　せっかく分けてあげようと思ったけど……じゃあ、私が全部いただいちゃうね』

「えっ、待っ……」

両腕を真上に伸ばさせられた状態で拘束されている以上、リズには何もすることはできない。

ごくり、ごくりと喉を鳴らしながら、レインが精液を飲み干すのを止めることも。キリトのお情けに預かれなかった事に、愕然とした表情を浮かべる自らの顔を隠すことも。

「――はぁっ……美味しかったぁ♥　粘っこくて、お腹の中にずしっとくる感じが、もう最高……♥

体の内側からキリトくんの女にされてくみたいで、ゾクゾクしちゃう……♥」

物欲しそうなリズの目を見つめたまま、レインは個人ストレージから『プーカのミルク』をオブジェクト化。小瓶に入った白いミルクに口を付け、口内全体に行き渡らせるようにしながら、残っていた精液の残滓ごと嚥下する。

精子一粒すら残さず空っぽになった口内をリズに見せつけたあと、レインはくるりと後ろへ振り返り、キリトの方を向いた。

「さて、ご主人様。スッキリなさった所で……始めよっか。オシオキ」

「ああ、そうしよう。オススメの商品リストを用意してくれるか、レイン。金に糸目はつけなくていい」

「はーい♪　お財布の大きなご主人様、だーい好き♥」

丸出しにしていた逸物を閉まって玉座から腰を上げたキリトは、ストレージウインドウを開いていそいそと準備を始めるレインの隣へ歩みを進める。

拘束されたまま事態の推移を見守っていたリズと目が合うのは、半ば必然的だった。

「ふふふ。簡単にあたしをどうこうできるとは思わない方がいいわよ、キリト。

この鎖も手錠も元はあたしが作った物なんだから、こっそり仕込んでおいた解除コマンドで――」

「ああ、それか。さっき潰しておいたよ。もちろん管理者権限でな」

「え？」

「常連客に向かって一服盛るとはいい度胸だ。その度胸に免じて、

たっぷりお返しさせてもらうからな。リズ」
「えっ？」
　無防備な姿を晒しながら唖然とするリズの肉感的な体を、キリトはそっと抱き寄せる。普段アスナやリーファ、それにルクスが近くにいるおかげであまり目立つ事は無いが十二分に豊かなサイズをしたリズの胸が、体に押し当てられて潰れるむにゅりという感触を楽しみながら、キリトは彼女の耳元に唇を寄せる。
「リズ。やめたい時の合言葉は……」
「いつも通り、『転移結晶』でしょ。ちゃんとわかってるわよ」
「それならいいんだ。あと、これは一応オシオキだけど……無理はしなくていいからな」
「それもわかってるわよ。……でも、ありがと」
　密やかに囁くリズのつややかな唇と軽い口づけを交わした後、キリトは体を離した。
　いかなる行為に及んでいても、相手が『転移結晶』と口にした時は直ちに止める。そういった緊急エスケープ手段を取り決めておくことの重要性はキリトも理解しており、現にこうしてしっかりと用意している。
　たとえここが、何をしようと現実の体は傷一つ負わないＶＲ空間だとしても――いや、むしろ体が傷つかないからこそ、望まない行為で相手の心を傷つける事が無いよう、丁寧に気を配るのは当然のことと言えた。
「さて、と。リズに脱出の手段が無いことをわからせたところで……レイン」
「はい、ご主人様。こちら、当店おすすめの商品リストでございます」
「ありがとう。さて、どれにするかな……」
　うきうきとした笑顔を隠そうともしないレインが、アイテムリストが表示されたコンソールウィンドウを差し出す。
　商品名と金額の他、商品のサムネイル画像と簡単なアイテム説明が並んだごく標準的なリストをざっと眺めながら、キリトは攻め手を脳内で構築していく。

そんな風に思案を始めて、約１０秒後。キリトが初手に選択したのは、リズ自身がかつて開発したアイテム『ジュエルメイカー』――その、最大容量版だった。

「――ひっ!?」

聞き慣れたＳＥと共にジュエルメイカー最大容量版がオブジェクト化され、同時にリズが引きつった悲鳴をあげる。

ジンジャーエールを思わせる淡い黄金色の薬液をみっちりと充填した、大人の腕でも抱え込めるかどうかという程に太いシリンダー。注入口を真上に向けて調教部屋の床から天井目掛けてまっすぐそびえ立っているその容器は、太さのせいで天板も広く、誰かが妙な形の短い背もたれが付いた椅子だと言い張れば納得してしまいそうな程だ。

その強烈な太さとバランスを取るかのように、薬液を収めるシリンダー部分も長い。優に１メートルは軽く越すほどだ。その支えとなっているのは、薬液を押し込む為に使用されるピストンハンマー部分。自重でシリンダー部が堕ちていかないのは、おそらくシステム側による補正が働いているためだろう。

「とりあえずは、こいつから使ってみるか。カメラの用意を頼むよ、レイン」

「オッケー♪　カメラドローンちゃん、起動！」

コンソールを操作してカメラドローンを起動させたレインが、早速録画を開始する。その事を確認した後、キリトはリズの背後へと回る。そのまま彼女の両膝の裏に手を回すと、股をぐいと左右に割り開くようにしてリズの体を持ち上げた。

その動きに反応したカメラドローンが、自動で焦点を調整。隠す物なく晒されたリズの秘所を、はっきりと映像データとして記録していく。

「なっ、なななんで撮るのよ、キリト！」

「なんでって……あのサイズのジュエルメイカーを使うのは初めてだから、記念にさ。

それにほら、あんなすごい量をこれからリズの中に入れるんだか

ら、記録しておかないともったいないだろ?」
「もったいなくない！　絶対にもったいなくない！　っていうか、あんな量全部入るわけないでしょ!?」
「そうか?　やってみなくちゃわからないだろ。挑戦する前から諦めるなんてリズらしくないぞ」
「諦めるとか諦めないとかの次元じゃ無いわよこれ！　死ぬ！　絶対死んじゃう!!」
　唯一自由になる首から上をぶんぶんと振って、リズは必死に抵抗する。端から見るとリズの意思を無視して強制的に拷問へかけようとしているかのような光景だが、もし本当にリズが嫌がっているのであれば出てくるはずのワードは一向に出てこない。また、ある程度自由に動かせる手首から先を使ってコンソールを操作すれば一瞬でここからログアウトできるのだが、なぜかそうする素振りは一切見受けられない。
　つまりは――そういう事なのだ。
「ほら、リズ。力抜かないとちょっときついぞ」
　何でも無いように囁きながら、キリトはシリンダーの端部分から伸びている注入口の真上にリズの体を持って行く。
　両脚はカメラに向けて広げさせたまま、慎重に位置を調整。注入口の先端とリズのアナルの位置がちょうど重なったところで、リズの体を少しだけ下ろす。
「ちょっ待っ心の準備が――――んんんうっっ!!」
　ずぷり、という手応えと共に、注入口がリズのアナル内に消える。
　キリトの両腕に脚を支えられたまま、天井と平行になったシリンダーの先端部分に軽く腰を下ろす格好になったまま、リズは突然の肛門侵略に身もだえる。
「んぉ、あ〝っ……♥　ふひゅぃ……。
　あ……あっ、あんた、ねぇ……。んっ、女の子に、いきなりなんてこ……あああああダメダメダメまだ離さないで！　やだ！　お願いだからぁ!!」
　今のリズの体、そして体重を支える要――つまりは両膝の裏に回さ

れたキリトの腕の力が緩むのを感じ取った瞬間、リズは思わず叫びだしていた。

仮に今ここでキリトが両手を離せば、リズの体重は全て真下にあるシリンダーを直撃する。そうなったとき、内部に充填されたジュエルメイカーの薬液がどうなるかは――想像するに難くない。

「わかったよ、リズ。ゆっくりやろうな」

「ええ、そうよ！　ゆっくり、ゆっくりだからね！」

「――しかし、こうして近くで見るとよくわかるけど……リズの肌ってキレイだよな。手触りもすべすべだし」

「そ、そう？　ありがと、キリト。……でもなんで急に？」

「手触りもすべすべだし」

「ね、ねえ！　何で今二回言ったのよ!?　ねえ!?」

何かを察したリズの叫びが調教部屋の中に木霊する。

しかし、時既に遅し。その叫びが終わるよりコンマ数秒早く、キリトの両手がリズの膝裏からうっかり外れた。それと同時に、リズの両腕を拘束していた天井の鎖がなぜか緩む。

仕方ない。誰でもミスはするし、どんなアイテムにも不具合はある。それが偶然重なったというだけなのだ。キリトがわざと手を離したように見えたのも、レインがコンソールに向かって何か不自然な操作をしていたように見えたのも、きっと目の錯覚だろう。

たとえその偶然の重なり合いの結果、リズの体、そしてその自重がシリンダー部を直撃したとしても――それはきっと不幸な事故なのだ。

「ひ――――んあ〜　おぉおああぉおほおふぃいいいひいいっっぃいいい

ピストン部は動かず、薬液は圧迫され——結果、唯一の出口である注入口から噴出する事になる。

つまりリズは今、半ば自分自身の手で、ジュエルメイカーの薬液を自らの体内に注ぎ込んでいるような状態に陥っていた。

「お、お゛ぅ゛っ♥　お゛ぢり゛、おぢりぃいぃ灼げる゛うぅううふゅ゛ううう゛う゛う゛うぅ♥♥

い゛っ、いひい゛ぃぃいぃい♥　ごわれっ、ごわ゛れ゛りゅ゛ううぅぅうぅぅぅ♥♥」

人間一人分の重みに圧迫されて間欠泉の如く噴き出す薬液が、リズの体内に容赦なく叩きつけられる。こういった、過激を通り越してもはや危険とでも言うべきプレイをしても何の問題も起きないのはＶＲ空間のいいところだ。

「うわー、リズっちすっごい。どんどん入ってくよー。全部で何十リットルあるのかな、これ」

「ちゃんと録画出来てるか、レイン？」

「ばっちりだよ。キリトくんこそ、今度こそリズっちの体、支えてあげてね？」

「ああ。後ろに倒れたりしたら危ないからな」

端から見ているレインとのんびりと会話しているキリトが背を支えている合間にも、シリンダーはリズと共にどんどんと沈み、それに正比例する速度と勢いで薬液がリズの体内へ消えていく。そろそろ人体の限界を越える程の量が注ぎ込まれようとしているが、ＶＲ空間なので何の問題も無い。

また、ＶＲアバターは基本的に人体の臓器や器官までは再現しないため、薬液を注ぎ込みすぎて内臓が破裂したりすることもない。

ただそれは同時に、物理的な容量限界が存在しないという事も意味している。つまり、注がれた物の量と重さは内部パラメータを書き換え続けながら延々と記録されていき、同時に肉体の持ち主はその感触を際限無くフィードバックされ続ける。

「お゛っお゛っお゛ぅっ゛♥♥　おひぃ゛っ♥　止ま゛って、どま゛っ゛でぇえぇえひいいひひいぃいいい♥♥」

注入された薬液の重量は、そっくりそのままリズ自身の重さに加算される。重さが増えたことで薬液にかかる圧力は増し、圧力が増した事で噴出の勢いも加速し、そしてまた大量の薬液を流し込んで重さを増す。そんなループ構造がリズの肉体を激しく苛み、冒涜的な快楽を味わわせ続けていた。

その体が倒れないように後ろから抱きかかえて支えるキリトの腕の中で、リズは背中を三日月のように反らせながら、びくりびくりと体を震わせる。口の端からは喘ぎ声と共に唾液が飛び散り、カメラに向かって開かれた股座からは愛液が止めどなく噴き出してはシリンダー部分を濡らしていく。

「ん゛お゛っ゛♥　んひっ゛♥　ひ゛ぃ゛いいいぃぃいぃぃいぃっ♥
んっお゛ぉおぉおぉ゛おほおお゛おおおほおぉぉぉお♥♥♥」

発情を迎えた動物のように啼き喚くリズ。その体に全ての薬液が収まりきるまで、トータルで１０分以上を要した。

「お゛ほおぁおぉおおあぁぁぅ……あ゛ぅっ……♥　はひゅっ……♥」

ようやく空になったシリンジは、容器の上端をピストンハンマー部分に密着させたまま静止し、まるで変わったデザインのスツールであるかのようにリズの体を乗せている。

ぐったりと脱力したリズの体を支えたまま、キリトは彼女の体を持ち上げ、刺さりっぱなしになっていた注入口を引き出した。

「よーし、お疲れ。リズ。偉いな、ちゃんと全部入ったじゃないか」

「――おふっ……♥　きっ……きりとの、ばかぁ……♥　はなさないれって、いったのにぃ……」

「悪い悪い。つい、手が滑ってさ」

「ばか……ばーかぁ……♥」

役目を終えたジュエルメイカーの容器が消滅していく傍らで、キリトはリズのアナルへ黒々とした栓をはめ込む。まだ力の入らないリズの体からキリトが手を離せば、ようやく保持力を取り戻した鎖がその体を引き、つま先が僅かに床につく程度の高さでリズを宙づりにした。

ゆらりゆらりと微かに揺れるリズの体は、大量の薬液を体内に注ぎ込まれているとは信じられない程、少し前までと同じボディラインを保っている。それもそのはず。リズの体内に入っているのは巨大シリンダーに充填されていた薬液そのものではなく、『これだけの量のジュエルメイカー薬液を体内に格納している状態です』というデータなのだから当然だ。

両腕を真上に上げたサンドバッグのように吊られたリズの体を優しく抱き寄せながら、キリトは彼女の唇に己の唇を重ねた。

「んんっ……♥」

最初の行程を無事に終えた女をねぎらう優しい口づけに、リズはほとんど無意識に甘える。もう少ししたら次なる責め苦が襲い来るのだという予感に浸り、そして期待しながら。

下腹部を圧迫するジュエルメイカーの薬液は、体内で絶えず蠢きながらリズを刺激する。気を抜くとすぐに甘い声が漏れ出てしまいそうになる自分を抑え込みつつ、リズは唇同士のふれあいを堪能する。

そうして、しばしの口づけの後。名残惜しさを残して離れていく唇の感触に誘われ、リズが閉じていた瞼をゆっくりと上げれば、メニューリストをキリトへ差し出すレインの姿が視界に映った。

「お次は何をご所望ですか、ご主人様？」

「そうだな……。頑張ったリズにはご褒美をあげたいし……。よし。じゃあこの可変鞭（マルチウィップ）を頼むよ」

「はい、可変鞭ですね。かしこまりました」

頷いたレインがコンソールを操作すると、キリトの手の中に一振りの黒い鞭がオブジェクト化される。平べったくなった先端部分に、よくしなる軸とグリップ部で構成されたその鞭は、いわゆる乗馬用鞭に非常に近い構造をしていた。

その可変鞭を二、三度軽く振って感触を確かめたあと、キリトは先端部分をリズの頬へ押し当てながら、ぺちぺちと音を立ててなで回す。

「頑張った女の子にあげるご褒美が鞭って、ちょーっとひどいんじゃない？　キリト」

「普通はそうだろうな。でも、リズはこういうの嫌いじゃないだろ？」
「……ん。まあ、ね」
嘯きながら、キリトは鞭の先端をゆっくりと下へスライドさせていく。
首筋に触れ、鎖骨をなぞり、たっぷりとボリュームのあるバストを撫でて屹立した乳首を突く。肌の上を撫でる固い鞭の感触に熱い吐息を溢しながら、リズは首を縦に振った。
「まったく……キリトのせいであたし、お尻に変な物入れられたり、鞭で叩かれて喜ぶよう変態になっちゃったじゃない。
……あんたのとこ以外に嫁にいけない体にしてくれちゃった責任、きっちり取んなさいよね？」
「言われなくても、俺以外の誰にもやる気は無いよ。リズ」
リズの肌の上を滑り落ちる鞭の先端が、彼女の下腹部に触れる。いずれキリトの子を孕む場所、その直上を鞭の先で撫で回されながら、リズはいつものように勝ち気な、そしてなんとも嬉しげな笑みを浮かべていた。
その顔をもう一度見つめ、瞳と瞳で視線を交わし合ったあと。キリトはゆっくりとした足取りでリズの背後へと回る。
「まずは、ウォーミングアップから行こうか。リズ」
手にした乗馬鞭をゆっくりと振り上げる。その構えが顕すのは、《ＳＡＯ》時代から付き合いのある単発袈裟斬りソードスキル・スラント。
モーションを認識したシステムが、乗馬鞭に発光エフェクトをまとわせた瞬間――リズのきれいな背中目掛けて、キリトは乗馬鞭を振り下ろした。
「――くぅうっ!!」
斜め上方から振り抜かれる鋭い一撃が、リズの背を直撃する。
平たく加工された先端部が肌に触れた瞬間、ぱあんっという破裂音を奏でて打擲されるリズを昂ぶらせる。同時に、体内に伝わる振動がは先にどっぷりと詰め込まれたジュエルメイカーの薬液、そして硬化しつつあるジュエルボールにも伝わり、不規則な蠕動となってリズを

体内から嬲る。
「ふむ。毎度毎度思うけど、やっぱり剣とはちょっとばかり勝手が違うな……」
「そ、そうなの……ところでキリト。まさか、一発で息切――ひぅっ!!」
リズの言葉が終わるのを待たず、キリトは二撃目を見舞う。横一閃を描くソードスキル・ホリゾンタルを叩きつけ、容赦なくリズの背を嬲る。
鞭が奔った部分にダメージエフェクトが適用され、赤い光が傷跡のように描かれる中、リズは鋭い一閃の感触と衝撃に悶える。まるで引き絞られた弓のように大きく反られたリズの背に、キリトは続けざまに鞭を叩きつける。
「んんっ！　くゅぅっ!!　あっ……♥　はあんっ♥」
打擲の一撃が奔る度、普段のリズの様子からは想像できない程に甘い鳴き声がこぼれ落ちる。ダメージエフェクトの赤い光は次々に増えていき、リズの背中はあっという間に傷跡で染まっていく。
《ＳＡＯ》時代から鍛えたソードスキルを存分に活用して鞭を振るうキリトに、手心を加えているような様子は微塵も無い。単発ソードスキルはもちろん、二連撃、三連撃と、様々な技を容赦なく叩き込んでいく。
「きり、っとぉ♥　んっ！　もっと、もっとお！　いっぱい、叩いて、んぐっ♥　いっぱい、教えこんでぇっ♥
キリトの剣のぉっ〟！　振りかた、使い方――あたしに、全部ぅうぅっ♥♥」
「ああ。ちゃんと体中で覚えて……またいい剣を造ってくれよ。リズ。
そぉら、もう一発だ！」
「くひぃいいいっ!!」
一際強烈な一撃に、リズもまた一際大きな悲鳴をあげる。
こういう関係を結ぶようになって以降、新たな剣を鍛つ前、キリトとリズの間で行われるようになった密やかな儀式。振るわれる鞭の

一撃を通して、キリトの剣閃の速度、威力、最も勢いが生まれる瞬間――その全てをリズの体に直接教え込む。

たとえばこれがアスナやユウキ、リーファやアリスあたりだったなら、キリトと直接斬り結んで掴む事が出来るだろう。だが、リズがそうするには戦闘系スキルが不足している。職人系ビルドなのだから当然だ。

故にリズは、使い手の癖を理解しその力を最大限引き出す一振りを造るため、自らの体にキリトの全てを直接刻み込む苦行へ挑み続ける――というのを口実にして、少しばかりハードなＳＭプレイにハマっていた。わざとキリトの不興を買うために一服盛ったりするのもそのためだ。

「ほら、リズ。次はどこを叩かれたいのか、レインの目を見ながら言ってみろよ」

「おっ、お尻ぃ♥　おしり、思いっきりオシオキしてよぉ♥　キリトぉ♥」

「よしよし、わかったわかった」

キリトはコンソールを操作し、リズを吊るチェーンの長さを伸ばす。手首の位置がゆっくりと下がっていくのに合わせて、リズは体を前に倒しながら尻を突き出す。

じくじくと熱い滴を垂れ流す女性器と、黒い栓が突き刺さった尻穴を晒しながら、リズは期待満面の笑み浮かべたままふりふりと尻を振る。その挑発的な仕草に、知らず知らずのうちにサディスティックな表情をさせられながら、キリトは乗馬鞭を振り下ろした。

「――くうぅっ♥！　ぴゅひぃっ♥」

「相変わらず叩きやすいな、リズのデカ尻は！」

「ひぅっ♥　んんんぅぅぅ♥　びしって、びしってくるの好きぃいいっ♥」

打撃のリズムが一辺倒にならないよう緩急を付けながら、キリトはリズの臀部へ乗馬鞭を叩きつけていく。

人体の構造上、背中より遙かに脂肪分が多く柔らかい臀部は、鞭の一撃を余すところなく受け止める度にぶるりぶるりとダイナミック

に震える。その感覚が被虐者であるリズを興奮させ、その手応えが嗜虐者であるキリトを昂ぶらせる。

本来、打撃を伴うＳＭプレイにおいて、こういった肉付きの良い部位以外を狙うのは危険な行為とされる。だが、それに従わなくても安全が担保されるのが仮想空間の便利なところだ。

「……ね、ねえ。キリトくん」

「ん？　どうした、レイン？」

おずおずと声をかけてきたレインに、キリトは鞭を振るう手を止めて視線を向ける。

胸元に手をぎゅっと寄せ、視線をあちこちに彷徨わせる落ち着きの無さを披露したあと、レインは改めて口を開いた。

「えっと……キリトくんは、リズっちが変なお薬を飲ませたから、その罰としてこういう事をしてるんだよね？」

「ああ。確かに、そういう面もあるな」

乗馬鞭の先端でリズの尻肉をぺちぺちと撫でながら、キリトは頷く。

「その……私、思ったんだけどね。

お店のスタッフがしたことの責任は、店長も取るべきっていうか……リズっちばっかりに責任負わせるのもよくないっていうか……ね？」

ハムスターの鳴き声のようにか細い声に、躊躇いと羞恥を含んだ上目遣いを添えて、レインがどうにかこうにか言葉を口にする。彼女が何をどうしたいのかは、さすがのキリトでも理解できる――が、同時に妙な悪戯心も湧く。

はあはあと吐息を漏らすリズの口元に手を伸ばし、舌先を二本の指で弄びながら数秒ほど思考を巡らせたあと。結局、キリトが選んだのはひねくれた回答だった。

「悪いな、レイン。何が言いたいのかよくわからないからさ、もっとはっきり言ってくれないか？　レインが何をしたいのかをさ」

「うぅ……わかってるくせに。今日のキリトくん、いつもよりいじわるだよぉ……」

「イヤなら無理しなくていいんだぞ。これはフリとかじゃなくて、本当に」
「大丈夫、言う、ちゃんと言うから……よし。
わっ、私も……リズっちみたいに、キリトくんにオシオキしてもらいたいです……♥」
「……そこまで言うなら、仕方ないな。リズみたいにたっぷり可愛がってやるよ、レイン」
熟れたリンゴの様に頬を真っ赤に染めて嘆願するレインに、キリトは満足げな頷きを返す。そのまま視線を下に向ければ、現在オシオキ真っ最中のもう一人の鍛冶師と目が合った。
「ふぅっ、ふう……なによぉ、キリト。あたしは放置プレイってわけ？」
「ご明察。ちょっとレインと遊んでくるから――」
そう言って、キリトは唾液にまみれた指をリズの頬で拭う。そうして指先を綺麗にしたあと、リズの尻穴を塞いでいた栓を何の前触れも無く引き抜いた。
「ひゅいぅっ!?」
「俺が戻ってくるまでちゃんと我慢してるんだぞ、リズ。できなかったら、ご褒美抜きだからな」
「おっ、ほおっ♥　ぐうっ、ら、楽勝よ、こんなの……！　ひゅうひぃっ♥」
体内に詰め込まれたジュエルメイカーを押しとどめる栓を失ったリズは、括約筋に必死に力を込めて肛門を締める。既に球体化（ジュエル）を終えた薬液を体外へ排出しようとする本能に抗うリズは、玉のような汗を浮き上がらせながら被虐の悦楽に溺れる。
そんなリズの横を通り過ぎたキリトは、コンソールウィンドウを操作して二人掛けのソファを呼び出すと、レイン共々ソファに腰を下ろした。ちょうど、リズとは正面から向かい合う位置だ。
「おいで、レイン」
「うんっ」
黒い下着姿でソファに座るレインを、キリトはそっと抱き寄せる。

端から見れば華奢だが、こうして抱きしめてみるとレインの体は適度に肉感的であることがわかる。

彼女の後頭部に回した手で、キリトがつややかな紅い髪を優しく梳いていると、レインがそっと耳元に唇を寄せる。

「その……リズっちみたいに、叩いてくれないの？」

「いやいや、いきなりそこから始めたらただの暴力だろ。

特にレインは、ああいうことするの初めてなわけだし……できるだけ気持ちよくなってもらえるよう、ゆっくり慣らしていくからな」

「優しいんだね、キリトくん。ぜひ、よろしくお願いいたします」

「こちらこそ」

柔らかなレインの体を抱きしめたまま、キリトはコンソールウィンドウを操作し、彼女の下着を装備解除する。一瞬で生まれたままの姿となったレインが気恥ずかしそうに身を預けてくる中、キリトは彼女の体を強く抱きしめた。

互いの温もりと心臓の鼓動を伝え合いながら抱擁を続け、レインの体のこわばりを少しずつ解いていく。

「えへへ……なんだか、変な感じ……。

これからキリトくんに苛められちゃうのに……ぎゅってしてもらうと、安心してきちゃう……♥」

「安心させたくてやってるんだよ。レイン、ちょっと緊張してるみたいだったからさ」

「誰だって緊張するよ、こんな状況……でも、キリトくんにぎゅってされるのは好き」

「じゃあ、キスされるのは？」

「もちろん、もっと好きだよ」

そう言って微笑むレインの唇を、キリトの唇が奪う。

ほんの少しだけ、ミルクの後味が残る口内にするりと滑り込んだ舌先を、レインは優しく迎え入れる。愛情を確かめ合うように、ゆったりとしたテンポで舌と舌を絡め合う。その間にも器用に動き回るキリトの手が、レインの体を揉みほぐしていく。

「んっ……♥」

体同士を密着させたまま続けられる、たっぷりと時間をかけた永いキスの最中。唾液が絡み合う水音と共に、僅かに空いた隙間からレインの切なげな声が漏れた。

それを合図にして、どちらからともなくキスを終えれば、互いの間に唾液の細い橋がかかり、そして見る間にぷつりぷつりと千切れていく。

「――それじゃあ、始めるぞ。レイン。俺も気をつけるけど……無理だとか、イヤだと思ったら、いつでも止めていいからな」

「うん……♥」

こくりと頷いたレインは、キリトに促されるままソファの座面に両膝をつけ、背もたれ部分に両腕を乗せて体を安定させる。ちょうど、体の正面と背もたれの正面部分が向かい合うような体勢だ。

膝関節を開いて太ももを伸ばすようにしながら、レインが尻の位置を上げる。準備の良いメイドの頭を軽く撫でたあと、キリトはその手をレインの臀部へと持って行く。

手触りの良い尻をしばしの間なで回し、レインをたっぷりと焦らす。そうして、彼女の感覚を下半身に集中させたタイミングで、キリトは平手に広げた手を上げ――勢いよく振り下ろした。

「ひゃうっ!!」

キリトの手がレインの尻に叩きつけられ、小気味いい打撃音を上げると同時に、レインの口から悲鳴がこぼれ落ちる。彼女の白い臀部の上には真っ赤な手の痕が刻み込まれ、レインが打擲された事をはっきりと主張していた。

その光景を満足げに見下ろしながら、キリトは今し方レインを打ったばかりの手で、レインの背中をあやすように摩る。

「どうだ、レイン。初めて叩かれた気分は」

「なんだか、不思議……。叩かれた感触はあるし、すごくびっくりしたのに、でも全然痛くなくて……」

「さて、なんでだと思う?」

「……あっ！　もしかして、ペイン・アブゾーバー?」

「大正解だよ、レイン」

フルダイブ型ＶＲＭＭＯにおける身体感覚キャンセル機能の中でも代表的なのが、この『ペイン・アブゾーバー』と呼ばれる痛覚緩和機能だ。その名の通り、フルダイブ中に人体に与えられる痛みを無効化する機能であり、大抵のＶＲＭＭＯはこれが無くては成り立たない。

全身麻酔に近い働きをすることから医療分野でも活用されているこの機能は、形式上『どこまで痛みを再現するか』という段階的な制御システムが組み込まれてはいるが、最低レベルである『一切の痛みを再現しない』という状態から動かされる事は基本的に無い。

キリトのプライベートＶＲ空間においても、それは同様だ。

「すっかり忘れてたよ、ペイン・アブゾーバーがあるってこと。……でも、こういうことしてる時まで痛みがキャンセルされちゃうなんて、なんだかちょっと面白いね」

「確かにな。でも、痛いって感じなくて済む分――」

キリトは不意に手を振り上げ、再び掌をレインのヒップへと振り下ろす。

すぱぁんっ、と甲高く響く打撃音がレインの耳に届くより早く、重く強い一撃の感触が彼女の神経を揺さぶる。

「ひゃひっ!!」

「俺も遠慮しなくて済むし、『叩かれて苛められてる』ってのが鮮明に伝わるだろ？　こんな風にさ！」

「くひぃっ！　まっ、また来たあっ！　ひあんっ♥」

往復ビンタの要領で、キリトは掌をレインの尻へ何度となく叩きつける。

《ＳＡＯ》時代から鍛えた体術スキルを応用したその掌は、最大効率で以てレインの尻肉を嬲り、赤い手型を刻み込んでいく。

こうした手を使った苦痛調教は、一般的に『スパンキング』と呼ばれる。手のひらを使うことで強弱を調整しやすく、道具を使うのと比べて危険性が少ないというメリットがある。現に、キリトも一打一打、強弱と打撃場所を変えながらレインを責め立てていた。

「んっ♥　はあっ、はあんっ♥　キリトくんの手、んぅっ、きもちいい、

かも……♥」
「レインの体も、手触りがよくてすごく気持ちいいよ。おかげで、叩くのに気合いが入る」
「ひあんっ♥　もー、キリトくん、んんっ、ったらぁ♥　はうっ！　ひいうぅぅっ!!」
　キリトは叩く手を時折止めては、レインの頬を撫で、唇を交わし、体に優しく触れる。もとより苦痛を与えるのが目的ではないし、レインはこういったプレイは初めてに近い。今もそこで必死に耐えているリズのように、間断なく責め立てられる事を喜ぶほどの域には達していないだろう。
　嗜虐行為と愛情行為、その二つをゆったりとしたテンポで切り替え、苦痛と快楽を交互に与えながら、キリトはレインの体に被虐の喜びをじっくりと教え込んでいく。その過程が進む度、共に手のひらから打撃音が響き渡り、調教部屋内にリズムが生まれていく。
「ほら、見てみろよレイン。レインのお尻、もうすっかり真っ赤になってるぞ」
　赤い手型で埋め尽くされたレインの尻をスクリーンショットに収めたキリトは、その画像を小型ウィンドウに移し、レインの眼前へと差し出した。
「うっわあ……ほんとに、全部真っ赤になってる……。どうりで、お尻全部がじんじんすると思ったよ……♥」
「初めてでここまで耐えられるヤツ、なかなかいないぞ」
「本当？　そう言ってもらえると……ちょっと嬉しいかも」
　照れ笑うレインの尻を、キリトは手のひらで優しくなで回す。幾度となく叩かれた事で刺激を伝達しやすくなった尻肉への愛撫に、レインはまるで発情期を迎えた猫のように甘く身をくねらせる。
　そんなレインの痴態を記憶に焼き付けつつ、キリトは空いている手でコンソールを操作し、乗馬鞭の形態を変化させる。
「思った以上にレインの成長が早いから、次はこれを使ってみようと思うんだけど……どうかな、レイン」
「これって……？」

「『九尾鞭』っていうらしい。さっきの乗馬鞭と違って、こういう遊びのためだけに造られたものなんだってさ」

「そうなんだ……こんなので叩かれたら、どうなっちゃうんだろ……」

グリップより先の部分に、細く平べったい形状をした短い鞭が複数ついた九尾鞭を見ながら、レインが興味深げに頷く。乗馬鞭ほど威力が集中しない代わりに、広い範囲を一度に叩くことが出来るこの九尾鞭は、調教の定番アイテムの一つだ。

柳の枝のように連なりしなる鞭部分を、レインの背の上に滑らせてからかいながら、キリトはこれから行われる調教を想像させて焦らす。

熱い吐息と共に、まだか、まだかと瞳でねだるレインの興奮が高まり、そしてほんの少しだけ落ち着いた正にその瞬間――キリトは九尾鞭を振り上げ、レインの尻肉目掛けてほぼ垂直角度で振り下ろす。その鋭いモーションが再現するのは、縦切り型ソードスキル『バーチカル』――の、強化版である二連撃ソードスキル『バーチカル・アーク』。

「――っっっっあああああっ!!」

V字を描くソードスキルの軌跡に乗って、九尾の鞭がレインの尻を打つ。初撃の振り下ろしが右の尻肉を穿ち、その衝撃がレインに伝わるか伝わらないかという僅かな間隙を縫って放たれる二撃目の振り上げが、レインの左の尻肉を下方から打った。

「かはっ……はあっ、あ〝ぁっ……！　……っくぅ……!!」

ほんの一呼吸分の間に叩き込まれた二連撃に、さしものレインも余裕を失い、荒い呼吸を繰り返しながらなんとか正気を保とうとする。

つい先ほどまで行われていたスパンキングで刺激に対する防御を弱められたヒップに、容赦なく叩きつけられる九尾鞭の連撃。受け手の気が緩んだ一瞬を狙って的確に振るわれたその連閃は、レインの体を揺さぶるばかりにとどまらず、その心にすら響き、未知なる被虐の快感を以て陵辱する。

こうした鞭による攻撃は、大抵の場合、一閃の速度と威力が正比例する。疾い一撃とは即ち重く強力な一撃なのだ。そして、この手法や思想が通用するのは鞭だけに留まらず、剣の道にも相通ずる。

つまり、《ＳＡＯ》時代からトッププレイヤーの座を駆け抜け続け、アンダーワールドで本格的に剣の腕を磨いたキリトが振るう鞭の速度は、その剣閃同様に速く、重い。

「これ、かなり効くだろ。レイン」

「……うっ、うん……効いたよ……。頭、おかしくなりそう……♥」

震えた声で返答するレインの腰はがくがくと揺れ、背もたれに体ごと抱きつくようにしてどうにか保たれている姿勢は今にも崩れ落ちそうだ。一方、その弱々しい態度とは対照的に、紅潮した頬と共に覗く官能の笑みを見て、嗜虐心を掻き立てられない雄が一体どこにいようか。

「じゃあ、次は連続でいこうか」

そう言うが早いか、キリトは再び九尾鞭を振るう。ひゅっという風切り音と共に、九本の鞭それぞれにソードスキルの光が宿り、そのままレインの背面を直撃する。

「あ〝あぁっぁぁぁっ!!　んんうううっ！　これ、ううううっ、すごぉおいひいぃっ!!」

九本の鞭は扇のように広がりながら、ほとんど同じタイミングで、なおかつそれぞれ僅かなタイムラグを挟みながら広範囲に着弾する。その威力と衝撃は、絞りの効いたショットガンの直撃を受けるにも等しい。

短い鞭がしなることによって生まれる遠心力の働きによって、振り抜きの威力は更に高められ、レインの体を物理的に苛む。

「あひぃぃぃ〝っ！　くうふぅうぅっ!!　いたくないのに、いたい、痛いよぉお！　なんで、なんでえええぇ♥」

「痛いだけなら、止めようか？　レイン」

「はあっ、はあ……やだ、やだあっ！　もっと、もっと、くひぃいっ♥　もっとしてくれなきゃ、やだよぉっ♥」

すぱんっ、すぱんっ、と激しい音を立てる九尾鞭に打たれながら、レインはさらなる打擲を哀願する。

不規則なリズムで与えられる衝撃はレインの体中を揺さぶりながら、奇妙な酩酊感をもたらし、レインが元々秘めていたマゾヒス

ティックな資質を開花させていく。
「なんでぇっ、んひいぃ♥　いやっ、いやあっ♥　なんでえっ、こんなにいぃっ、きもちいいのおっ♥」
鞭で打擲される度、レインの体を駆け巡る痛覚信号。それ自体はペイン・アブゾーバーによってキャンセルされるが、痛覚信号を感知した肉体は痛みを緩和すべく本能的に快楽物質を生成して分泌する。
本来であれば生成された脳内物質は痛みと中和・希釈されるが、今ここにレインを苛む痛みは存在しない。故にレインの中枢神経は、一撃を浴びる度に生じる快楽物質のほぼ１００％を快感として変換する。
そうした大量の情報がレインの脳へ伝達された結果、レインの意識は快楽の奔流の中に溺れ堕ちゆこうとしていた。
「ふむ。やっぱり、レインは素質があるな……。なら、このあたりはどうだっ！」
「ひゃひぃぃんっ♥」
続けざまに叩き込まれる九尾鞭のラッシュ。その一打一打が柔肌に食い込む度、レインは甘やかな悲鳴を上げて身を撓らせる。
たとえばそれは、むっちりとした太もも。
「んんっ、ふうっ♥」
雪原のように白く美しい背中。
「あっ……くうぅうぅうっ♥」
赤い手型が刻まれた尻肉。
「いぅっ――つっぃいいいいっ!!」
レインの体の後ろ側全てを塗りつぶそうとするかのように、次々に九尾鞭が振るわれる。
本来であれば痛みと共に徐々に覚えていくはずの快感、それを一足飛びに覚え込まされていくレインは、官能に嘘び泣きながら無意識にキリトを誘惑する。
「レイン。もうちょっと、脚を広げてくれ」
「う、うん……」
促されるまま、レインは膝と膝の間隔を開ける。

必然的に露わとなる、乙女の秘所。ぷっくりとした媚肉をキリトが指先で割り開けば、既に欲情の滴を溢していた蜜壺の奥から、とろりとろりと愛の蜜が新たに溢れ出してくる。

「こっ、ここも打たれちゃうの……？　ここもキリトくんのおもちゃに、んん、されちゃう、の……？」

「さて、どうしようかな」

わざと答えをはぐらかしながら、キリトは九尾鞭のグリップ底部でレインの媚肉をなぞる。

「えらいな、レインは。軽く打っただけで……もう、こんなにドロドロだ」

「ひゃうう……みないで、キリトくん……♥」

「おいおい、見てるのは俺だけじゃないぞ。リズだって見てるし、実はさっきからカメラドローンで録画もしてる。

だから、あとでたっぷり見てもらおうな、レイン。みんなや……特に、セブンにはじっくりとさ」

レインの羞恥心を高まらせながら、キリトは再び九尾鞭を振るう。

精神的な刺激と肉体的な刺激を同時に与えることを企図したその振る舞いは、確かな効果を持ってレインへ作用した。

「ひぐぅっ！　みな、みないでぇっ!?　いやっ、セブン、みちゃだめええぇっ！　――んにぃ、いぃいぃっ！」

痴態を他人に、そして血の繋がった実の妹の目に晒される未来を想像して怯えるレイン。ただその体を侵す興奮は、それまで以上に熱く激しい物と化している。

「よく言うよ。セブンに見られることを想像して、興奮してるくせにっ！」

「してないっ、してなぃ、いぃいぃっ♥　んんぅ、んっ♥　ひいぃいいんっっ!!」

「ならどうして、ここがこんなに濡れてるんだっ！　自分が変態だって妹に知ってもらいたいんだろ！」

「ちがう、違うのぉおっ！　ふひぃいぃいっ！　ひいいぃいいっっ!!」

鞭の痛みと、妹の冷たい視線という被虐の二重奏を味わうレインに

九尾鞭を叩き込みながら、キリトは一瞬だけ視線をリズの方へと向ける。

一人だけ鞭打たれるレインへの嫉妬。次に待つお仕置きへの期待。我慢する苦痛。我慢させられる快感。放置プレイを極められながら必死に排泄欲求と戦うリズの顔には、それらが渾然一体となって浮かんでいる。

そろそろいい頃合いだろう――そう判断したキリトは、おまけの追撃を何度か叩き込んだあと、九尾鞭を振るう手をおもむろに止めた。

「ふぃぐひぃいっ♥　……はあ、はあっ……キリト、くん？」

「すごいな、レイン。初めてなのにここまでついてこれるなんて、俺が思ってた以上に優秀だよ」

「ふぅっ、ふうぅっ……えへ、そうなの、かな……。

だとしたら、たぶん……キリトくんが気持ちよくしてくれたおかげだよ……♥」

レインの長い髪をかきあげながら、キリトは彼女の頬にそっと口づけを落とす。

荒く乱れていたレインの呼吸が整うまでの間、優しいボディタッチと共にゆったりとした時間を過ごす。これがあくまで、愛情に基づいた行為であることを伝えるために。

もちろん、もうひとりの鍛冶師にも同様に。

「ちゃんと言いつけ通り我慢できてるな。さすがリズだ」

「い、言ったでしょ、これぐらい楽勝だって……」

レインが落ち着くのを確認したあと、キリトはリズの方へ近寄り、ピンク色をした彼女の頭を撫でる。

「もうちょっと、我慢できるか？」

「もっちろん」

強気に微笑むリズの項に、額に、首筋に、頬に、そしてもちろん唇に――彼女に課した苛烈な責めの分、たくさんの口づけを贈りながら、キリトは彼女をじっくりと労る。

「リズが頑張ってくれたから、レインもこっち方面に興味を持ってくれたんだ。誇っていいんだぞ、リズ」

「誇ってどうすんのよ、こんなの……まあでも、褒められるのは……いいかも」

どうにか顔を上げたリズと、姿勢を崩して振り返ったレインの視線がキリトの姿を捉える。主人から与えられるお褒めの言葉は、『飴と鞭』という言葉を引くまでも無く、排出欲求に耐え続け、そして鞭打ちに耐え続けてきた二人の心に甘く染み渡る。

そして同時に、リズとレインは直感的に理解した。労りを顕す優しい左手を以て二人の頭を交互に撫でるキリトの目には、未だ獰猛な嗜虐の光が宿っていることを。

「だからさ。次のオシオキは、今まで使ったことの無いヤツを試してみようと思うんだ。

……たとえば、こいつとかさ」

妖しく誘うキリトの右手の中で、九尾鞭の形状が変化していく。

九本の鞭が拗くれながら寄り集まり、一筋の細長い鞭へと収束していく。竜の鱗めいた独特の装飾パターンを描きながらしゅるしゅると伸びていく鞭は、やがて片手用直剣の刀身の倍を越えない程度の長さまで成長すると、そこでようやく延伸を止めた。

まるで最初から一振りであったかのように継ぎ目もねじれもないその黒い鞭の先端はわずかに膨らんでおり、それが人を効率的に打擲するためのアイテムであることを如実に示していた。

「ま、まあ……あたしたち、一応、今はあんたのメイドなわけだし……ね、レイン？」

「そうだね。ご主人様（キリトくん）がしたいっていうなら……」

優秀な鍛冶師にして極上のメイドである二人は、おずおずと控え目に応じつつも、決定的な意思表示となる言葉だけは口にしない。

だが、答えとしてはそれで十分だった。緊急エスケープ用の合い言葉を使わない時点で、彼女らは自らの運命を決定付けたも同然なのだから。

しなやかな一本鞭のグリップ部を握ったキリトは、そのまま鞭を振り上げ、先端を床へと叩きつける。

大気を裂くような鋭い風切り音を前座に従えて響くのは、素手や乗

馬鞭、九尾鞭とは比べものにならぬほど重く、そして収束された破裂音。

支配者の証たるその音こそが、何よりも雄弁なキリトの答えであり――びくりと震えた体とは対照的に、決してキリトから視線を外さない期待と興奮に蕩けた瞳こそが、自ら奉仕者の地位に身を置いた乙女達の答えだった。

06―3・BLADE ARTS Ⅲ

「――いやはや。なんとも良い眺めだな……こいつは」

娼館『黒夜館』の一角にある、『調教部屋』と称される一室。その部屋の中央に広がる光景を眺めながら、キリトは誰にともなく呟いた。

王者の余裕に満ちたその視線の先に居るのは、生まれたままの姿の上に簡素な拘束を施された二人の乙女の姿。

「くぅ……」

「はあっ、はあっ……」

桜色の髪のレプラコーン・リズベット。

紅い髪のレプラコーン・レイン。

天井から伸びた丈夫な鎖に接続された枷を両手に填められた二人は、キリトに体の正面を向けて直立したまま、両腕を真上に伸ばした状態で拘束されている。

そんな二人を眺め回しながら、キリトはコンソールウィンドウを呼び出し、自らの装備フィギュア画面を開いたまま片手で何らかのコマンドを入力する。その不可解な動作にいち早く気づいたのはリズの方だった。

「？　どうかしたの、キリト？」

「いや、大したことじゃ無いんだけど……せっかくだからさ」

直後、キリトの体を淡い光が包み、装備アイテムを実体化させる。四肢を覆う黒いアンダーアーマースーツと共に装着されるのは、淡いスチールブルーの光沢を放つ金属装甲（フルメタルアーマー）。胸鎧、腰鎧、籠手、脛当てで構成されたそれらの防具一式は、言うなれば上質な鉄の装備セットという所になるだろうか。

無論、これもリズ謹製の一品だ。もっとも、キリトが金属防具をあまり好んでいないせいで、今のところ活躍の機会を与えられぬまま死蔵されている。

おそらくは今後も、ＶＲＭＭＯ内で使用されることは無いだろう――

―よっぽどのことが無ければの話だが。

「なんていうか……こういう装備の方が、なんかそれっぽいだろ？」

そそくさと入力を終えたキリトはコンソールを閉じ、空いた手でそのままリズの下腹部をさすさすとさする。小さな鉄板で覆われた指先はひんやりと冷たく、その感触にリズは「ひゃんっ」と微かな悲鳴を上げて身を捩る。

未だ大量のジュエルメイカーを収めたその腹部は、現実空間ならすさまじい膨らみを見せているのだろうが、仮想空間では（特殊なオプションを使用しない限り）元のスタイルがそのまま維持される。

こうしている間も排出欲求に抗い続けているのであろうリズの体に触れ、少しばかり労ったあと。キリトは二人に見せつけるようにもったいつけながら、長い一本鞭を改めて手に取った。

「うっ、わぁっ……♥」

「ひゃあっ……♥」

横並びの状態で拘束された二人の乙女は、黒くしなやかな鞭を視界に収めた途端に官能の吐息を溢す。その鞭でこれからされることについての期待に目を輝かせながら。

鞭の感触を確かめるように手首を軽くスナップさせながら、キリトは数歩分後ろへと下がってリズとレインから距離を取る。一本鞭は乗馬鞭や九尾鞭と比較して圧倒的なリーチを誇る分、至近距離ではその性能を十全に発揮できない為だ。

「それじゃあ……始めるか。二人とも」

リズから見て僅かに右斜め前方。レインから見て僅かに左斜め前方。二人のちょうど間になる辺りに陣取ったキリトがそう告げれば、リズとレインは揃って首を縦に振る。それは、ともすれば見逃してしまいそうな程に微かな肯定だが、今のキリトがそれに気づかぬ理由などどこにも存在し得なかった。

「……」

軽く呼吸を整え、キリトは右手に握った一本鞭を大きく振りかぶる。右の拳が肩のほぼ後ろまで移動したことで、柳の枝のようにしなり垂れる鞭が音も無くキリトの背面側に陣取る。

一呼吸にも満たない瞬間の後、グリップ部から鞭の先端へと向けて伸びる蒼い煌き。モーションに反応してスタンバイ状態に入った事を示すソードスキルの輝きは、まるで誕生から数十年以上を経ながら、今なお世界に名を轟かす怪獣王が必滅の炎を放つ時その背に輝く眩き燐光の如し。

その暴虐にして絶対たる光が鞭の先端までを覆い尽くした、まさにその瞬間――キリトは右手を振り下ろし、剣技（ソードスキル）を解き放った。

「――ふッッッ!!」

瞬間的に吐き出される気息と共に、前方へと力強く撃ち出される体。

人が前へと進む力。即ち推定６０kgを越える体重が移動する際に発生する莫大な力が産む破壊力は、ただ腕の力のみを活用した場合とは比べ物にならない。

適切な振り抜きによって、キリトの右腕を通して鞭へと伝播する力。そこにはわずかの減衰も無く、むしろ遠心力という名の助勢を得て更に威力を増しながら、二人の乙女の体をほぼ同時に打つ。

右斜め上方から斬り下ろす一撃が、リズを。

左斜め下方から斬り上げる一撃が、レインを。

単発ソードスキル・スラント――その、二連撃。鮮やかなＶ字を描いたその軌跡が刻まれるまでに費やされた間隔は、コンマ数秒にも満たない。

故に、鞭打たれる乙女達がほとんど同時に悲鳴を上げたのも、必然だったのかもしれない。

「「――――あ〝びっ――ぁあああああ〝ああああ〝あ〝あああああっっ〝っ〝っ〝♥♥♥」」

鞭の着撃と同時に麻痺する全身の感覚。本能的なその防御反応すら、体全体を容赦なく痺れさせる鞭の威力によって容易く突破され、神経網は強制的に再覚醒させられる。

体の外部から与えられた強烈すぎる一撃と、体の内部で反響する刺激が複雑に絡み合いながら、リズの、そしてレインの感覚を飽和させ、意識と理性を狂わせていく。

溢れ出す脳内麻薬。シェイクされる内臓感覚が産む不快感と非現実的な恍惚。魂の奥底まで刻み込まれる敗北感。本来であれば痛みという最もシャープな信号によって誤魔化されてしまうそれらの感覚は、ＶＲ空間においてはその狂気的な純粋さを保ち続け、麗しき鍛冶士達を身もだえさせる。

「ひぃぐぅっ……あっ、あ〝っ……♥　はあっ……はあっ……あぅ〝……♥」

「ふぅーっ、ふぅーっ……♥　はひ……ひいっ、ふぅーぅ……♥」

鎖に手足を拘束されたリズとレインは、息も絶え絶えといった様子。さもありなん、これが現実世界なら、当たり所によっては死にかねないレベルの攻撃を食らっているのだ。意識を吹っ飛ばさなかっただけ上等と言えよう。

鞭の一閃によって生まれた赤い刻印が胸元から下腹部まで一直線に奔る体を、びくびくと痙攣させる姿は非常にエロティックであり、キリトのサディスティックな部分を過剰に刺激する。

「いい顔だな、二人とも」

続けざまに叩き込めと叫ぶ暴力的な衝動をぐっと堪えつつ、キリトは手元にコンソールウィンドウを呼び出す。リズとレインに、一本鞭の余韻を味わわせつつ休憩させてやる時間を作りながら、レインの右足首に、リズの左足首に新たな枷を装着させる。

革製の脚輪めいたその拘束に二人が反応するよりも早く、天井から生え伸びた新たな鎖が、獲物に喰らいかかる大蛇の如く二人の足枷に接続される。直後、鎖は先ほどまでの動きを逆再生するかのように収縮し、足枷ごと二人の片足を持ち上げ始めた。

「……んわあっ!?　な、なにしてっ……！」

「き、キリトくん!?　脚、脚がっ……？　ひゃああっ！」

事態を飲み込めぬまま、二人の片足を上方向に引っ張られ、やがてぴんと張った鎖によって固定された。バレエダンサーや新体操の選手がするような、上げた片足を体の横で抱え込むポーズ。それに近い角度で上げられた脚によって、二人はちょうど、歪んだＹ字を体全体で描いているような体勢にされていた。

そんな体勢であるが故に、二人の股座を遮る物は何も無い。興奮にひくつく媚肉も、期待に震える後ろの窄まりも、並んで拘束されている二人の外側方向に向けて丸見えになっており、簡単にキリトの視界に収まってしまう状態だった。

「へえ、二人ともこんなポーズができるとは……。体、意外と柔らかかったんだな……」

「ぶっ、VRだからできるに決まってるでしょうが……。さすがに、現実じゃここまで上がらないわよ、あたし……」

「私は、んんっ……現実でもできるよ、キリトくん。体が柔らかくないと、うまく踊れないし……」

大開脚を伴うY字バランスに似たポーズを取らされた二人の顔に浮かぶのは、先ほど喰らった一撃の余韻と、これから振るわれる一撃への期待に満ちた笑み。体の正面で受けただけであれだけ狂わされた鞭を、もっと敏感で、たったいま無防備に晒された場所で受けてしまったら——どんな事になってしまうのだろうという、マゾヒスティックな期待。

「ん、くぅっ……！」

「さすがにキツそうだな、リズ」

「そ、そんなこと無いわよ……でも、んひゅうっっっ！　……はあ、はあっ……もうちょっと、待っ〝……んんん〟っっ!!」

額から汗を流しながら、リズは必死に己と戦う。今の彼女を苛んでいるのは鞭の痛みではなく、体内で蠢くジュエルメイカーを排出せんとする肉体反応。今までは脚を閉じることでどうにか抵抗を続けていたリズだったが、その抵抗手段は今し方失われてしまった。

それでもリズは括約筋をひくひくと痙攣させながら耐え続ける。その理由は、キリトからまだ『許可』をもらえていないからに他ならない。

「リズっち、頑張って……頑張って……！」

「あっ、ありがと、レイン……ぅぅぅんっ!!」

苦闘する友人を励まそうとしたレインの視線が、ほんの一瞬、キリトから外れる。手練れのゲームプレイヤーであるレインにしてはあ

まりに凡庸なミスではあったが、それを見逃してやるほど今のキリトは甘くなかった。

振り上げた右手を寝かせるように構え直し、キリトは再び鞭を振るう。風切り音が遅れて付いてくる程の鋭さを以て放たれるは、横一閃のソードスキル・ホリゾンタル。

「「――っくぅ〃っあ〃あああぁあああああ〃あ〃っ!!!」」

右から左へ一瞬で駆け抜ける一撃が、リズの内腿を、そして下腹部を打つ。鞭の勢いがこの程度で止まるわけも無く、その鋭さを保ったままレインの下腹部、そして外腿を打つ。

横並びに吊られた二人の体を這うように奔った一撃によって、二人の鍛冶士の喉が揃って悲鳴を奏でた。

「よそ見していいなんて言った覚えは無いぞ。レイン」

「あひっ……ううっ……ごめっ、ごめんなひゃい……♥　ふぅーっ、ふーぅっ……♥」

呂律の回らなくなってきた舌で、レインはどうにか謝罪することに成功する。その開かれたままの股座からは熱い滴がこぼれ落ち、太ももを伝って滑り落ちていく。

キリトの鋭い一閃は、レインの子宮、その直上にあたる位置を正確に捉えていた。故に、肌と薄い脂肪越しに伝わる強烈な刺激は一片の容赦も無くレインの子宮を揺さぶった。

刺激それ自体はもちろん、いずれ子を孕み育てる場所をここで潰されてしまうのでは無いかという恐れに支配されたレインの本能は、脳内麻薬を分泌してレインの繁殖欲求を高めると共に、目の前にいる雄へ媚びさせることで生き延びる道を見いだそうとする。

これはありえない仮定だが、もし鞭を握っているのがキリトでなければ、今頃レインの肉体は『目の前にいる敵を打ちのめして生き延びる道を見いだす』という方向で無意識に動いていただろう。

もちろん、それはリズにとっても同様の話だ。もっとも、今の彼女を突き動かしているのは繁殖欲求ではなく、もっとプリミティブな欲求ではあるのだが。

「ぎっ……キリ、トぉ〃……ふんっ、んんっ〃ぅ〃っ……！」

「ん？　どうした、リズ。なんだか苦しそうだな」
「んぅ、も〝っ、もう、ダメ……むり〝ぃ……！　でちゃ、ぁあっ……でぢゃうぅう……♥」
　はあはあと息を荒くしたリズは、無理矢理上げさせられた脚を下ろそうと力を込めるが、鎖はびくともしない。
　下腹部を打った先ほどの一撃がリズに与えたダメージは、レインが受けたそれより遙かに大きい。その理由は当然、体内に充填されたジュエルメイカーだ。既に固体化とローション化を終えたジュエルメイカーは、鞭による振動を受ける度にランダムに蠕動し、リズの体内で暴れ回る。
「そうか。それで？」
「それでって……なんれよぉ……！」
「俺はまだ『出していい』なんて言ってないぞ。リズ。ちゃんと我慢するんだ」
「だって、だってぇ……！」
「まったく……ご主人様の言いつけが守れないダメなメイドを雇い続ける程、俺は寛容じゃないんだがな……。
　ほら、次のやついくぞ」
　冷酷にそう告げながら、キリトは再び鞭を構える。その様子を見ただけで、リズの口からは声にならない悲鳴が漏れる。
　実際、リズ自身はもちろん、キリトにもわかっているのだ。次の一撃を喰らって耐えきるほどの余裕など、リズには微塵も残っていないことを。ただ一つ幸運な事があるとすれば、リズが限界寸前であることを理解している者がもう一人いたということくらいだ。
「ま、待ってキリトくん！　鞭なら私が、私がリズっちの代わりに受けるから！」
「……へえ。本気か？　レイン」
「本気だよ。苦しんでいるうちの店員を……ううん、友達を見捨てるなんて、私にはできないよ！」
　友を思う誇り高い決意と、それとはまた若干ベクトルの違う期待を宿した両の瞳を爛々と輝かせながらレインは力強く告げる。

「そうか……優しいな、レインは。その優しさに免じて、チャンスをやろうじゃないか。
　俺とゲームをして、レインが勝ったら……その時はリズのオシオキを免除して、二人とも解放してやる」
「ゲームって……どんな？」
「簡単だ。今から、俺がレインを五回打つ。それに耐えきったらレインの勝ちだ」
「なあんだ、確かに結構簡単――」
「ただし」
　コンソールウィンドウを展開したキリトは、そのままレインのアバター情報を呼び出すと、ペインアブゾーバー制御システム――ではなく、その下にある『小水排出感覚再現システム』を起動。更に『貯水量』を、通常の排尿三回分にあたる限界ギリギリの状態まで引き上げる。
「『お漏らし』したら、レインの負けだ」
「おも――んっゅうぅうぅ!?」
　下腹部から突然襲いかかってきた感覚に、レインの口から声にならない声が溢れる。痛覚同様、ＶＲ空間においては基本的に再現されることの無い生理現象――排泄。そのキャンセル機能を、キリトは今一時だけ解除すると同時に、レインの膀胱へ大量の小水をセットしていた。日常生活では既知の、ＶＲ空間では未知の感覚に不意に襲われながらも、レインは脚を繋ぐ鎖をがちゃがちゃと揺らしながらどうにか耐える。
　ＶＲ技術黎明期の時点で、こうした排尿の感覚だけを再現する技術は生まれていたらしい。キリトがこの空間内に実装しているのも、そういった技術から派生したものだ。
　先人達の技と業に想いを馳せつつ、キリトは二人を軸にした円を描くようにしてぐるりと半周し、彼女らの背後側へ陣取る。そうして、改めて鞭を振り上げ、ゲームの開始を告げる一発目をレインの背中へ叩き込んだ。
「んんん〜んっっうぅう〜うぅっ!!」

死角から放たれた鞭打によって背中を強かに打たれ、レインは苦悶の声を上げる。その衝撃に体は捩れ、繋がった鎖ががちゃがちゃと音を立てる。

「レ、レイン……あたしのために、そんな……」

「んっ、くうぅっ……だ、大丈夫だよ、リズっち……。私、このくらいじゃ、負け――んひぃぃぃぃ゛ぅっ!!」

気遣うリズに言葉を返し終えるより早く、二打目がレインの尻を打った。赤々と刻まれたダメージラインが、レインが受けた衝撃の重さを物語る。鎖で手足を繋がれていなければ、今頃部屋の端まで吹っ飛ばされていてもおかしくない程だ。

それだけの打撃を受けて敗北しなかったあたり、レインの根性は本物だった。友人の為という大義もあろう。何よりアイドルの端くれとして、今も録画を続けているカメラドローンの前で無様な姿を晒すわけにはいかない。その矜持（プライド）が、レインを支えていた。

もっとも、そんなプライドすら容易く打ち砕くのが、鞭というものが秘める力なのだが。

「もう二発クリアだ。すごくえらいぞ、レイン」

「えへへ……すごいでしょ……♥」

「ああ、正直驚いたよ。この調子じゃ――」

優しい言葉は、レインの気を緩ませる為の罠。その罠に獲物がかかった瞬間、キリトは最も鋭い一撃を、レインの最も敏感な場所――脚と脚の間に存在する、複数の穴が形作るセクシャルなラインへ叩き込んだ、

「――う゛ぃあああ゛あ゛ああああああああびあ゛あ゛あああ゛っっ゛っ゛っ!!!」

「俺の勝ち目は、無さそうだな」

そう嘯きながら、更にもう一発。間髪を入れず、同じ場所、同じ角度――更に増した威力を乗せて。

「い゛っぎいいひいいいぃいぃいぃいい゛ぃい゛ぃいい゛いい゛い゛いいいいいい!!!!」

すぱぁんっ、という強烈な打撃音が二回、レインの股座から。獣じ

みた叫び声が二回、レインの口から。どちらにせよ普段の彼女が奏でる清冽なメロディとは全く異なる苛烈な音が響く、

守る手段無きままむき出しになった肛門と性器の粘膜、ぷっくりと屹立した陰核。一直線に並んだ女体の弱点を、キリトの鞭は正確に捉えていた。レインにもたらされる衝撃は、これまで浴びたものの比では無い。

背や尻、胴といった比較的丈夫な部位ですら、受ければ相当な負荷のかかる一撃。それを性器に直接喰らったレインは、開きっぱなしになった口からよだれを溢し、びくりびくりと体を痙攣させる。体の中心から脳天に至るまでをまるごと貫かれたかのような激しい衝撃と、脳内を蹂躙する快楽物質の乱舞に蹂躙された体は、ねっとりとした愛液を溢れさせながら支配者の鞭に屈する。

レインの体に、最早余裕と呼べるものが残っていない事は誰の目にも明らかだった。

「り〝っ……りじゅっち〝ぃ……」

「レイン!?　レイン、大丈夫なの!?」

「ごめ、ごめんね……ひゅひぃ、ごっ、ごめぇん……わたし、がんばったけ、ど……」

ぽろぽろと涙をこぼしながら友人に詫びるレインの後方で、キリトは再び鞭を振るう。先ほどの二連撃と比べれば、半分にも満たない威力の鞭が、壊れたおもちゃのように痙攣するレインの尻と背の境目を打つ。

その程度の弱い一撃ですら、今のレインを決壊させるには十分すぎた。

「――あっ」

レインの微かな声と共に、ジュースの入った瓶の蓋を開けたときの『ぷしゅっ』という音が聞こえた気がした。

「だめ……だめえっ！　やだああっ！　でちゃだめえええええっ！」

大きく開かされた股座から溢れ出す、レインの小水。

淡い黄金色をしたその液体は、抵抗を示すように二、三度噴き出したあと、やがて途切れ無く綺麗な放物線を描きながら宙を舞い、その

まま調教部屋の床の上で小川となって流れていく。
「やだ、やだよぉ……！」
レイン本人がいやいやと首を横に振って現実から目を逸らそうとも、一度噴き出した小水は止まらない。たとえその一部始終を、カメラドローンに撮影されているとしてもだ。
「ははっ。よっぽど溜まってたみたいだな。全然止まらないじゃ無いか、お漏らしレイン？」
「違うもんっ、違うもん！　私、お漏らしレインじゃ無いもん……止まって、止まってよぉ……。
こんなの見られたら……アイドル終わっちゃうのに、ひぐうっ……おしっこ、止まらないよぉ……」
羞恥に頬を染めたまま、レインは小水を垂れ流し続ける。ある意味では裸体を見られるのと同じ程度には恥ずかしいその一部始終を、カメラの前に晒しながら。
カメラドローンは一切の遠慮無く、レインの醜態を撮影し続ける。正面から回り込むように移動し、レインの小水を浴びながら股座を接写。尿道口からあふれ出る光景はもちろん、その音すらも記録し続ける。
合成再現された微かなアンモニア臭が部屋の中を満たす頃、小水の勢いはようやく減衰を始め、その放出距離を少しずつ縮め、やがてしたたり落ちるだけに変わる。勢いを失った小水は、滴となってレインの太ももを伝い、そのまま下へと滑り落ちていった。
「あっ……うう……」
全てを晒してしまったことで、軽い放心状態に陥ったレインの体から力が抜ける。鎖に吊り下げられたその姿は、まるで操り手を失った美しいマリオネットのようだ。
実際の所、全ての量が排出されるまでにかかった時間はほんの数分にも満たないほどの短い時間に過ぎない。もっとも、その数分すらも、レインにしてみれば永遠に等しい程の時間に感じられたのだが。
「まずは、こんなもんかな……。おつかれさま、レイン」
ぐったりとしたレインの体を支えながら、キリトは彼女の手足に繋

がれた拘束を解除。汗と小水で汚れた体を柔らかな布で軽く拭いて綺麗にしたあと、そのまま膝裏と背中に腕を回して持ち上げつつ、部屋の片隅に大型のベッドを呼び出して設置する。

「綺麗だったぞ、レイン。上手にお漏らしできたじゃないか」

「ひどいよぅ……キリトくんのいじわるぅ……」

「ほら、カメラに向かって言ってみろよ。『上手にお漏らしできました』って」

「うぅ……お漏らしレインは、じょ、上手におしっこおもらしできました……♥　みんな、みてくれたかな？　いつもよりいっぱいおしっこしちゃったよ……♥」

さすがはアイドルという所だろうか。いわゆるお姫様抱っこの体勢で抱きかかえられたレインは、恥ずかしさで顔を真っ赤に染めながらも、しっかりとカメラ目線で宣言する。頬の横に添えられたためらいがちなピースサインがまた可愛らしい。

精一杯の勤めを果たしたレインを休ませるべく、彼女の体をベッドの上に横たえたあと。キリトは再び鞭を手に取り、もう一人の鍛冶士と正面から向かい合った。

「――お待たせ、リズ。……なんだか今日は待たせてばっかりだな」

「ひっ」

キリトから放たれる静かなプレッシャーに気圧されてか、リズがびくりと身を震わせる。普段は気丈で活発、そして負けん気の強いリズベットが、今は大蛇を目の前にしたモルモットのように怯え竦んでいる。端的に言ってその様は哀れであり、嗜虐者の心を大いに昂ぶらせるものだった。

「さて、これから何をされるかは……わかってるよな？」

「……わかってるわよ。それくらい。ひっ、ひと思いにやったらどう!?　覚悟ならできてるんだからね！」

「いい覚悟だ。なら、その通りに」

必死に虚勢を張るリズに最後の一撃をくれてやるべく、キリトは鞭を構え――ふと、何かに気づいたかのような表情でその構えを解いた。

「……どうしたのよ、キリト」
「いや。よくよく考えたら、リズを打つ必要も無いと思ってさ」
「必要ないって……どうしてよ!?　オシオキなんでしょ!?」
　突然の方針転換に戸惑い、狼狽するリズに向けて、キリトはやれやれとでも言いたげな様子で首を横に振る。
「なんだかんだ言って、レインは五発耐えたからな。お漏らししたのだって、俺が五打目をやったあとだし」
「それは……そうかも、だけど……」
「だろ？　それにほら、嫌がってる女の子を無理矢理どうこうするのって、あんまり好きじゃないんだよ。
　ちょっと待ってろよ、リズ。今、ジュエルメイカーを除去して……自由にしてやるから」
　飄々とした態度で嘯きながら、キリトはコンソールウィンドウを呼び出す。片手でコマンドを入力し、管理者特権でリズのステータス情報へとアクセス。適用されているアイテム情報と内部パラメータを修正すべくキーボードを叩き――。
「……ま、待って！」
　操作を始めようとしていたキリトの指先を止めたのは、誰あろうリズの叫びだった。唇をきゅっと結び、ためらいがちに俯いたリズへと、キリトは視線を向けた。
「ん？　どうしたんだよ、リズ」
「やめ……やめ、ないで……」
「やめないでって……何を？」
「だからその……オシオキとか……」
　咄嗟に止めたはいいものの、やはり実際に口にするには恥ずかしいのだろう。リズの言葉は歯切れが悪く、普段の遠慮の無さはどこにも見受けられない。声もか細く、今にも消え入りそうなほどだ。
　とはいえ、流石のキリトもここまでくればリズが何を求めているかぐらいはわかる。それをわかったうえで焦らしてやるのが、嗜虐者の特権であり務めでもあった。
「うーん……リズが何をしたいのか、よくわからないな……」

「わからないって……あんたねえ……！」
「リズがしたいことを、はっきり言ってくれよ。大きな声で、誰にでもわかるように。
さっきのレインみたいにさ」
レインを引き合いに出された事が功を奏したのか、リズはその顔を上げた。その悔しげな顔は、カメラドローンのレンズがはっきりと捉えている。
頬を真っ赤に染め、宝石のような瞳に大粒の涙を浮かべたリズと見つめ合うことしばし。キリトの気が変わらない事を理解したのか、リズはだいぶ躊躇った後、ようやく唇を動かした。
「……したい、です」
「悪い。よく聞こえなかった。もう一度言ってくれ」
「だからその……思いっきり叩いて欲しい、です」
「うーん……それだけじゃちょっと情報量が足りないな。もっと具体的に言ってくれないか、リズ」
鞭を片手に握ったまま、ここぞとばかりにすっとぼけるキリトを、リズはきっとにらみつける。無論、キリトがその程度の事で動じるはずも無い。悠々とした調子を保ったまま、軽い仕草でリズに続きを促す。
怒りと羞恥に瞳を燃やし、激しい興奮で頬を緩ませ――そして、リズは後戻りのできない言葉を紡いだ。
「ああもう、言う！　言うわよ！　言えばいいんでしょ！
あたしは――あたしは、ケツ穴から産卵して気持ちよくなりたいド変態マゾ鍛冶屋だから、キリトの本気の鞭でおまんこを思いっきりぶっ叩いてほしいですって言ってるのぉっ!!」
調教部屋中に響くほどに大きな声で、誤解しようのない言葉を叫ぶ。
自らの変態性を認めると同時に、主人に屈した事を認める言葉を発し終えた時、リズの顔にはとても晴れやかな笑みが浮かんでいた。必死の思いで何かを為し遂げた者だけが味わえる達成感と、何かを壊してしまった解放感に満ちた、美しい笑みが。

「ちゃんと言えたじゃないか、さすがリズだ。それじゃあ……望み通りにしてやる」

よくしなるウィップ部を扱き上げるように左手で撫でながら、キリトは右手に握った改めて鞭を構え直す。デモンストレーションがてら床に向けて鞭を叩きつければ、叩かれた床材が上げる鈍い音と共に、空気が破裂する鋭い音があたりに響き渡る。

気合十分、予備動作完了。気息の巡りに乱れなく、武具の調子に狂い無し。言外に示された事実と、鞭のグリップ部から先端に向けて伸びる輝きに興奮させられたリズは、ごくりと生唾を飲み込みながら今か今かとその時を待つ。

彼女の期待に満ち満ちた熱い視線を浴びながら、キリトは静かに呼吸を整え――そして、―鞭を振るう。期待以上の鋭さを以て。

「……はッッッ!!」

キリトの裂帛の気合いと共に振るわれた鞭は、過たずリズの股間部を打つ。竜の尾の如きしなやかさを持つウィップ部がリズの肉体にぶつかり、生々しい打擲音を奏でる。

ただ目を閉じてただ聞いているだけならば、それはたった一度の打擲が生み出した、たったの一音にしか聞こえなかっただろう。だが、キリトは、レインは、そしてリズは理解している。

そのたった一音が、実際は四つの音が連なったものであることを――音と音が途切れなく響くほどに速く凄まじい鞭捌きによって、四連撃ソードスキル『ホリゾンタル・スクエア』が一瞬のうちに叩き込まれたのだということを。

「――――――ぁああ゛ああ゛ああああ゛あぁあああぁぁああ゛ああ゛あっぅ゛っっ゛ぅぅあぁあああああっっ!!

お゛っほぅひぃ゛いぃぃ゛いい゛いいぃいいゃぁあゃあああああ!!!!」

一切の守り無く晒されていた敏感な場所に、容赦なく叩き込まれる四連撃によって、リズの口から歓喜に満ちた獣の悲鳴が溢れ出す。同時に、被虐の喜びに濡れる股座からは、とろりとした愛蜜がたっぷりと。

鞭の威力の凄まじさたるや、リズの体を部屋の壁まで吹っ飛ばしかねなかったほど。いや、手足を鎖で繋いでいなければ、確実にそうなっていただろう。

その衝撃をまともに喰らったリズは、性感帯はもちろん全身をくまなく揺さぶられながら、自らが暴力的な愛情行為に溺れるメスである事を理解させられていた。改めて、いつものように。

「あぁ〝っ〟……ふひぃ、ふひいぃ……あぅううっ……あたま、おかひぐ……なりゅう……♥　ひゅひ、ひぃいいんんぃっ♥」

口からよだれを溢し、半ば焦点の合わない瞳で虚空を見つめながら、リズは鞭の威力に酔い痴れる。股座から脳天に一気に駆け上り、そして全身へ行き渡った痛みの情報（データ）。そのデータを打ち消すに足るだけの快楽物質に侵され、自ら鞭打たれる事を望んでしまったという背徳の喜びに満たされるリズ。

当然、これで全てが終わったわけではない。彼女にはまだ、一番大事なご褒美が残っていた。

「キリト……キリトぉっ……♥　あらし、もぉ……」

「ああ、リズ。よく頑張ったな。それじゃあ……『出していい』ぞ」

「いい？　もう〝っ。いいの？　はひぃ、だひゅ、だしゅから、見てて♥　おひりからたくさん宝石産むとこ、みてへえぇぇっ♥」

「当然だろ。リズの晴れ舞台なんだ、ちゃんと見届けてやるよ……っと！」

キリトはもう一度鞭を振るい、リズの下腹部を強かに打つ。

その一撃は、レインを崩落させたものと同様の、リズの我慢を完全に決壊させる破城槌だった。

「くふぃいぃいっ♥　――お〝っ、お、おおぅ――でっ、でぅ、でるっ、でぢゃっああぁあぁぁぁああああああ♥♥」

本能的に縮こまろうとするリズの肛門。その小さな窄まりを内側からみちみちと押し拡げながら――ついに。産卵が始まった。

「あっあっあっあぁああ〝あぁぁああ〝ああ♥　お〝ほっ〝、おふひぃいぃいいぃいいぃいいぃいっっ♥♥」

リズの脚の間をはっきりと撮影する位置に移動したカメラドロー

ンのレンズが捉えたのは、リズの尻穴から排出される金色の球体。無色透明のローションに包まれた、野球ボールサイズの金属球が、リズの穴をこじ開けながら次々に生まれ落ちていく。その様はまさに、産卵といって差し支えない。

もっとも、卵を産む度に悦楽に浸り、蜜壺から愛液を溢れさせながら嬌声を上げるような雌はそうそういないだろうが。

「止ま〝っ、とまん〝にゃい、とまんな〝ひのぉおおおほおおおおっ♥　おっおっおぅ〝っうふう♥♥」

途切れなく生まれ落ちる金色の球体が、調教部屋の床にぶつかり、ごとりごとりと重い音を立てた。

このようにジュエルメイカーによって生成された金属球は、形状・色・サイズこそ基本的に同一だが、中には特殊な機能を持っている球体も存在する。

たとえば、腸内でバイブレーターの如く振動し、通常は味わえない快感を与える振動タイプ。排出過程で突起を生やしたり急に大型化したりと、様々に形状を変化させる可変タイプ。腸壁をこそげるようにらせん状の回転を発生させるスパイラルタイプ。小型の球体を発射し内部で乱反射させるマザータイプ。

なかでも特に負荷が強烈なのが、排出される寸前自らブレーキをかけ、穴の出口を塞ぐようにして詰まるストッパータイプだ。連続した排出の途中でこのタイプが起動するとどうなるかは、リズの様子を見れば一目瞭然だ。

「おんんっ――んんに〝やっ〝!?」

順調に産卵を続けていたリズが、不意に体を大きく震わせ、直後にぐにぐにと身を捩る。額に脂汗を浮かべ、浅い呼吸を繰り返すその様子から、彼女に何かただごとではない事が起きているのが見て取れた。

「な〝っ……なんれ〝ぇ〝っ!?　なんで、ひっかか――ひいいいいっ！　出て、でてよおおおおっ!!

ふーぅっ、ひふうぅうっ!!」

開かれたリズの股間を撮影し続けるドローンカメラのレンズには、

肛門からちょうど半身を覗かせ、そこで静止している金属球の姿がはっきりと映っていた。涙目になりながら必死に《いきむ》リズだが、ストッパータイプの金属球はびくともしない。

一方、こうして出口が詰まってしまったことなど知るよしも無い他の金属球は、外に出ようと圧力をかけ続ける。各種特殊タイプもその機能を止めることはないため、リズは筆舌に尽くしがたい刺激によって体内を蹂躙されていた。

とどのつまり、リズは苦境に陥っているのであり――そういうときにどうにかするのは、大抵の場合キリトの役割であった。

「手伝ってやるよ、リズッ!!」

気勢を上げたキリトが、手にした鞭をリズの下腹部目掛けて再び叩きつける。

内部に浸透した鞭の衝撃は、リズの神経を蹂躙しつつ体内の金属球に伝播。出口方向へ押しつけられていた金属球の勢いを後押しし、ストッパータイプとの間で保たれていたギリギリの均衡を打ち崩す。

ぽんっ、というどこか間抜けな音を立て、ストッパータイプの球体が尻穴から飛び出したのは、打擲から約1．5秒後のことだった。

「ほぉ゛っ゛――んふぃぃ゛いぃ゛いいい゛ぃいぃいいぃ!!

でっでっでれりゅぃぅううぅうぅ♥　いっぎに、ぜんぶでふゃうのぉおぉおおぉおおお♥♥♥　おゅっおおっお゛ぅっひぃいぃいいぃいいいぃいいんんんっっ♥♥♥」

一度抑えが突破されてしまえば、あとはもうどうにもならなかった。

「んひんひんひいひぃいぃいいいいいいい♥♥♥　い゛っ、いぎゅ、けつあにゃでいっぢゃうにょぉぉおおぉおお♥♥　あっああぁっああはあぁぁああ゛ああっぁあああああ♥♥♥」

ねっとりとしたローションをまとった金属球は我先にとリズの尻穴をこじ開け、そのたびにリズはがくがくと腰を震わせながら嬌声を上げる。股座から時折ぷしゃりと吹き出る愛液は、床に落ちた金属球達に降りかかり、ローションの中に混ざり込んでいく。

一球排出する度に深い法悦に導かれながら、リズは愛する者の前で

痴態を晒す被虐行為に溺れ続けた。

――それから、どれくらい時間が経っただろうか。

体力を回復させたレインが半身を起こし、ようやくリズの排出行為が止まる頃には、大量の金属球が調教部屋の上に所狭しと転がっていた。

コンソールウィンドウを開いたキリトは、片付けがてらそれらの金属球をまとめて選択し、とりあえず己のストレージに格納する。メッセージウィンドウに表示された『乙女の宝珠（大型）×１２８　を取得しました』という通知には、流石に苦笑せざるを得なかったが。

「ご苦労様。リズ。過去最高記録だぞ」

「あ……ぅ……いひぃ……♥♥」

「おいおい、大丈夫か……？」

ぱっくりと開きっぱなしになった尻穴と、閉じることを忘れてしまった唇、そして焦点の合わない目で虚空を見つめながら、リズはいつのまにか失神していた。

それを理由にして、さらなるオシオキを与えてやるというのも一つの手だろう。が、今のリズはそこまでの行為は望んでいないだろう。それに、彼女が悦楽に浸っているのだから、それを遮るのは無粋というものだ。

そう判断したキリトは、一本鞭を己のストレージに格納。リズを拘束から解いてやるべく、力の抜けた彼女の体をしっかりと抱き寄せた。

主から課せられたミッションを無事に成し遂げ、幸せな失神の中に意識を手放したリズ。その脱力した体を、キリトはそっとベッドの上へと横たえた。

「……リズっち、もしかしてこのまま自動ログアウトしちゃうんじゃ……？」

「いや、寝落ちタイマーは最大に設定してある。１２時間以内に戻ってくれば大丈夫だよ、レイン」
「そうなんだ。１２時間もあったら、さすがに問題無さそうだね」
先にベッドの上で休息を取っていたレインが、苛烈な責めに耐えた友人を労る。
白いシーツの上に横たわり、肌を晒す乙女が二人。桜色の髪と、紅色の髪。どちらも美しく、どちらも優秀な鍛冶士であり――そしてなにより、どちらもキリトのオンナだ。
装備コンソールを呼び出したキリトが鎧を含めた装備一切を解除すると、レインはしっとりと微笑みながら、微かな仕草で雄を誘う。ちらりちらりとわざとらしく、視線をキリトの下腹部へ送りながら。
その誘惑に応じて彼女の体を抱き寄せながら、キリトはレインの耳元に口を寄せた。
「なあ、レイン。ちょっと思いついたんだけどさ」
「なあに？　キリトくん。また悪だくみ？」
「まあ、そんなとこだ。よかったらさ――」
逸物に添えられたレインの両手が、キャンバスを撫でる筆先のように微かな力で肉棒を扱き上げる。戯れるような細い指先の感触を味わいながら、キリトは彼女の耳元で密やかに囁く。
「――っていうのは、どうかな」
「もう……キリトくんったら、そんな遊び方、どこで覚えてくるの？……面白そうだから、いいけど♥」
娼婦じみたセクシャルな微笑を浮かべたレインは、キリトの唇にそっと己の唇を触れさせる。淡いバードキスの感触を残しながらゆっくりと体を屈める。小さな鼻をすんすんと鳴らし、キリトの体から立ち上る男の匂いを嗅ぎながら、顔の位置がちょうどキリトの肉棒と同じ高さになる辺りまで。
その様子を眺めながら、キリトはドローンのコントロールシステムにアクセス。録画機能を起動させたまま、レインの顔を正面から捉える位置へと移動させた。
「えっと、じゃあ……はーい、ファンのみんなー。見えてる？　見えて

るよね？

いつも応援ありがとうございまーす。今日は、新曲のミュージックビデオの撮影現場を、ナマでサプライズ配信中でーすっ♪」

一瞬でアイドルらしい顔つきになったレインが、カメラドローンに向けて笑顔を振りまく。

無論、どこにも配信などしていない。あくまでそういう設定である。録画はしているが。

カメラの向こうで画面を見つめているはずの、何千何万というファンを意識しながら——レインは目の前に突き出された野太い肉棒へ愛おしげな頬ずりを捧げた。

「どう？　すっごいでしょ、このおちんぽ様。今日のＭＶ撮影で使うんだけど……見てるだけで、頭がぽやーっとしてきちゃう♥

我慢できなくて、さっきの休憩時間中にフェラチオさせてもらっちゃった♥　喉奥までぐりって入ってくるあの感触が、どうしてもクセになっちゃうんだよね……♥

……あっ、もちろん全部ＣＧだからね！　絶対に本物のちんぽじゃないから、誤解しないでね、みんな！」

キリトをＣＧ扱いすることで、レインはどうにかアイドルとしての体裁を保つ。

「私はアイドルなんだから、『早く私のおまんこをコキ穴として使っていただいて、ザーメンどぴゅどぴゅ射精してほしい』なんて考えながら、ぶっといおちんぽ様にほっぺたズリズリしたりしないんだからねっ！」

保ったばかりの体裁を即座に放り投げつつ、レインはもう一度顔面を前後にストロークさせ、端正な顔を肉棒に沿わせる。更には唇を肉棒の先端・鈴口へと触れさせ、たっぷりと時間をかけて口づける。映画のキスシーンを思わせる画角で、カメラドローンはその一部始終を捉えていた。

もし本当にレインのファンがこれを見ていたら、レインのアイドル人生は一発で終わる。万が一にもそうならないために、この空間内の全ての動画には特殊暗号化処理エンコードが数十層ぶち込まれてい

るし、そもそものセキュリティ面はユイ・ストレア・セブンという頼れる面子による最新の防備で固められている。その厚みと信頼性は、セブン曰く『ペンタゴンの２００倍固いわ』との事だ。

そんな安全を保証された空間で、レインはスリリングな行為に勤しむ。

「んん……っ。あっ、もう撮影開始みたい。カメラは付けっぱなしにしておくから……ファンの皆も、楽しんでね♥」

カメラに向けてぱちりとウィンクしてみせたあと、レインはおまけとばかりにもう一度亀頭に口づけた。アイドルの手腕を遺憾なく発揮するその仕草はなんとも小悪魔的だ。

「はーい、皆に特別サービスでーす♥」

上半身をベッドに押しつけるようなうつ伏せに近い体勢で、レインは軽く膝を立てて尻を突き出す。既にダメージエフェクトの消えたレインの尻には傷一つ無く、本来の美しい姿を取り戻していた。

場所を変えたカメラドローンが捉える、レインの女性器とアナル。つい先ほどまで行われていた調教でたっぷりと濡れぼそった肉裂を、キリトが指先で左右に割り開けば、どろりとした愛蜜がベッドシーツの上へと溢れ出す。

「やぁんっ♥　みんなにおまんこの奥の奥まで見られちゃう～♥　大好きなおちんぽ様にばこばこハメられて、いっぱい開発されちゃったエロまんこだってバレちゃうよ～♥」

恥ずかしさに身を捩るフリをしながら、レインはわざとらしく腰をくねらせ、丸みを帯びたヒップを振ってキリトを誘惑。肉棒を突き込むに値する、いつでも孕めるほどに成熟した雌穴であることをアピールしながら、雄の本能に訴えかける。

己の全身を巡る血と熱が、下半身により一層集まることを自覚しながら、キリトは己の逸物の先端を、レインの蜜壺の入り口にあてがう。

「そういえば、レイン。新曲はどんな感じの曲なんだっけ？」

「んーとね……友達の彼氏を好きになっちゃった女の子がね――」

レインの言葉の途中で、キリトは腰を前方へと押し出す。

たっぷりと湯を張った浴槽に人が身を沈めた時のように、太い肉棒

に侵入された蜜壺からレインの愛液が押し出され、溢れ出す。
「――はぁっ、んんぅっ……♥　おっ、きいの……すきぃ、んっ……♥」
「それで、続きは？　レイン」
「う、うんっ……。寂しい夜を、一人ですご、んゆぅっ……過ごすんだよ……♥　友達の彼氏と自分がえっちしてるとこ、想像しながら……♥」
「ほほう。そりゃまたエッチな歌だな。えっちなレインにはぴったりじゃないか」
狭い膣道をみちみちと押し広げながら進んだキリトの肉棒は、根元までを膣内に埋めた所でようやく前進を終えた。
密着する腰と腰。体内に堂々と居座る固く太い雄の象徴と、子宮口を塞ぐようにぴたりと押し当てられた亀頭の感触が、レインの本能的な被支配欲求を刺激する。
覆い被さられるように後ろから貫かれた事で伝わるキリトの体重と、首筋にかかる熱い吐息。今更逃げだそうとしても絶対に逃げ出せない体勢に持ち込まれたというのに、レインの心を占めるのは、愛しい雄と繋がることができたという喜びの感情ただ一つきりだ。
「だからね、キリトくん……ＭＶも、とびっきりえっちなのにしないといけないんだ……♥
協力して、くれる？」
「ああ、もちろんだよ。レイン」
レインの両手に両手を重ねたキリトは、上から握り込むようにして指と指を絡める。恋人つなぎに近い形で互いの手を結びながら、キリトはストロークを開始する。
レインの秘所から溢れる蜜を肉棒にまとわせながら、じりじりと焦らすような速度で腰を引き、そして一気に最奥部まで突き込む。緩急の差をはっきりと付け、レインの性感を昂ぶらせていく。
「あっ――んんっ!!　あっ、いぃっ♥　んっ――んぅぅうんっ♥♥」
「レインってさ。実は後ろからされるの結構好きだろ？」
「うんっ、うんっ♥　すき、すきぃひぃっ♥　あっあっ――んんっぅう

♥　無理っ、矢理ぃ♥　犯さっ、れっ、てるみたいで……ドキドキするよぉぅ♥♥」

腰をじっくりと動かしてレインに可愛らしい鳴き声を上げさせながら、キリトは絡めていた左手を解くと、そのまま彼女の乳房を揉み拉く。後ろからわしづかみにするような少しだけ乱暴な手つきで『力づくで犯されている』という事実を感じさせながらも、力は込めすぎないように優しく弄ぶ。

「あ、あっんんっ♥　ちくっびぃ♥　きゅって、んんっ♥　きゅってするのずるぃ――ああっ♥　んんぅぅぅ♥」

「なるほど。こんな風にしたらずるいのか」

「ひぁああんんっ♥♥　あっあっあっあっ♥　それ、はんそ――くひぃいいいっっ♥♥」

時折小刻みなピストン運動を混ぜ込みながら、キリトはレインの豊かな乳房を弄ぶ。しっとりと吸い付くような白い胸を手のひらで味わい、指の根元で挟み込むようにして薄ピンク色の乳首をくりくりと刺激してやる。

出し入れされる肉棒は独特の光沢を持つ粘液にすっかりコーティングされ、その一突きごとにレインの蜜壺は歓喜にとろけた涙を流してシーツに新たな染みを作る。

「いぃ♥　いいっ♥　あっあぁ　っんんんぅうう♥　おぐっ、おくにっ、きてるよぉ♥　んっんっんっんぅうぅうう♥」

「何がきてるって？　レイン。ちゃんと言ってみろよ」

「ちんぽぉっ♥　キリトくんっ、のぉっ♥　くひぃっ♥　おっきくてぇ、すっごい、おちんぽ様――んんぅうぅうぅ♥　私のっ、おくまで、きてるのぉ♥　あっあぅあああ♥♥」

「よくできました。ご褒美にキスしような、レイン」

杭を打ち込んで固定する時のように、キリトはレインの一番深いところまで肉棒を突き込み、そこで動きを止める。そうして彼女のうなじに軽く口づければ、レインは心得たと言わんばかりの動きで大きく振り返る。

体勢上、必ず低い位置にくるレインの顔を見下ろしながら、キリト

は腰同士を密着させたまま、覆い被さるように彼女の唇と唇を重ねた。

「んぅうっ……♥」

強めに体重をかけてレインの逃げ場を封じながら、キリトは思うままにキスを貪る。

その侵略行為に応じてするりと唇を開き、襲い来る支配者の舌をレインは抵抗せずに受け入れる。雄の象徴を雌の悦びと共に包み込む膣内と同様に。

「んっ、んんっ♥」

絡み合う舌と舌が淫靡なリズムを奏で、時折わずかに開く唇と唇の隙間から熱い吐息が漏れる。吸いつきあう唇がきゅうきゅうと音を立てる中、レインの形のいい胸をたっぷりとこね回して弄ぶ。

反面、レインの中に深々と肉棒を突き込んだ腰の動きは。腕のそれに比べたら緩やかで小さい。下方に力と体重をかけてレインの体を押さえ込み、亀頭を彼女の弱い部分にこすりつけるようにゆったりと動かしながら、誰がレインの主であるかを本能にすり込んでいく。

「――ぷ、ひぁっ……んんぅっ♥　キリトくん、あれ、いつものアレしてほしい……♥」

「ああ、アレか。準備するから、口開けて待ってろ。レイン」

「うんっ」

顔を真上に向け、レインは餌を求めるひな鳥のように大きく口を開けた。血色のいい舌を突き出し、喉奥までが丸見えになるほど思い切り、ためらいなく。

レインが期待と共に目を閉じる中、キリトはもごもごと口を動かして唾液の生成を促進すると、たっぷりと溜め込んだ唾液をレインの口内目掛けて注ぎ込む。

独特の粘りを持つ透明な液体がレインの舌の上を滑り、口内に入り込み、喉奥へ滑り落ちていく。それは言うまでも無く、睦み合う為のキスとは若干意味合いの違う行為。雄による雌の所有を意味するマーキング、あるいは群れにおけるマウンティングに近いその行為を、レインは心底嬉しそうな顔で受け入れる。

「……んんっ……♥　んくっ……おいしぃ……♥　ライブの前に毎回してほしいくらい好き……♪」
「俺以外のレインファンが聞いたら泣くぞ、それ」
「いいもん、聞かせてあげないから。こんな私を見せるのも、聞かせるのも、キリトくんだけだもん」
もう一度口を大きく開けてねだるレインに応え、キリトは先ほど以上に唾液を溜め込み、レインの口に流し込む。
小さな気泡を含んだ半透明の粘液を、レインは一滴も溢すまいという覚悟が透けて見えるほどの熱意と共に受け止めると、そのまま舌を動かして口内にたっぷりとまぶしていく。
歌声を響かせる喉と口。アイドルの商売道具であるその場所すらキリトのものだとアピールし、雄の興奮と独占欲を高めながら。
「さて……レインの綺麗な体、カメラに見せてやらないとな、っと」
「ひゃわあっ」
再びレインの両手を握ったキリトは、自身の体重を後ろに流すようにしながら彼女の体を引き起こす。太い肉棒で貫かれたまま、軽く両脚を拡げた膝立ちの姿勢となったレインの正面に、カメラドローンがそれとなく移動して録画を続ける。
まるで馬の手綱のように、レインの両手を背中側に引いて彼女の上半身を支えながら、キリトは本格的に腰を打ち付け始めた。
「ほら、ちゃんとカメラを見るんだぞ、レイン。えっちなＭＶ撮影するんだろ？」
「うんっ、うっ、うんっ♥　撮る、おっ〟、ひいっ♥　キリトくんの、ぢんぽでぇへぇっ♥　おまんこずぼじゅぼされてるとこ、撮るのぉおおおぉっ♥♥」
繰り返される深いストロークに昂ぶらされ、レインは性感に蕩けた顔を晒す。大勢のファンに見つめられていることなどお構いなしに、カリ首が膣壁を擦りながら引き抜かれる度に身を捩り、そして子宮まで貫かんばかりの勢いで再び挿入されると、淫らで下品な嬌声を迸らせる。
「ひぅっ♥　あ〟っ〟あ〟っ〟あぁぁあああ〟あ〟♥♥　ちんぽっ

♥　キリトくんのちんぽぉっ♥♥♥　すき、すきしゅきひぃいぃいん♥♥」

紅い髪を振り乱し、ぱんぱんと音を立ててぶつかり合う腰の勢いを受けて豊満な胸を揺らしながら、レインは貪欲に官能を求める。

その熱中具合ときたら、戯れにキリトが交合をやめて肉棒を引き抜くフリなどしようものなら――。

「あっ……やだぁっ、やだよぉっ！　抜かないで、ちんぽ抜いちゃやだぁ!!　私のおまんこ好きに使っていいから……ちんぽいっぱいずぼずぼしてよぉ！」

――と、泣き出しかねない程の必死さと共にねだってみせるほど。

軽い冗談のつもりだったが、そうまで言われてはむしろ罪悪感まで湧き上がってくる。申し訳なさを誤魔化しながら、キリトは再び腰を突き入れる。

「あぅぁぅぅっ♥♥　おく、おくぅぅう♥　ぐりゅってされるの、いぃっ、いぃぃひいい♥♥　あっあっああーっ、あ゛ーっ♥♥」

「子宮口（ここ）がいいんだな、レイン？」

「おっ、ひい、はぅうぅう♥　そっ――そこぉっ♥いぃいぃいいぃ♥♥♥　そごぐちぐちされるゅのしゅきいひぃいい゛ぃぃ゛っっ♥♥」

他の女性陣同様、ＶＲ空間で連日性行為に励んだ事で性感帯として開発された子宮口は、固く張り詰めた亀頭が押し当てられる度にレインへ快楽の信号を伝える。指では届かない場所を、玩具とは格の違う雄の怒張で貫かれる度、レインはメスとして生まれてきたことへの悦びを新たにし、愛液を溢れ出させる。

我慢できずに達する度、きゅうきゅうと締め付けてくる健気な肉壺に奉仕されながら、キリトはレインの耳元に囁く。

「レインのアソコは、さっきから精液をほしがってるみたいだけど……ちゃんと外にだしてやるから安心しろよな、レイン」

「んっぅ……うう!?　そ、ぉっ、外!?　やっ、やだぁっ！　そとだしいやぁっ！　中がいいよぉ！」

「いいのか？　メジャーデビュー前に赤ちゃんできちゃうかもしれないぞ？」

「いいもん！　ママドルに、なるからぁ……♥　んんぅうぅ♥　あっはぁんっ♥　キリトくんの赤ちゃん孕んで、お腹、おっきぃ、ボテ腹アイドルになるから……♥　精液全部おまんこにぶちまけてほしいよぉっ！」

　ばちゅばちゅという水音を立てて激しくぶつかり合う肉と肉。その音にも負けぬほどの音量で声を張りながら、レインは一瞬の快楽を求めて自らの未来を売り渡す。その言葉がキリトの本能を興奮させ、レイン自身の興奮も呼び起こす。たった一時、雄の子種汁を得るためならば、どこまで浅ましく振る舞えるという事実と共に。

「ファンが見てる前で、孕まされてもいいんだな！　レイン!?」

「うんっ、うんっ!!　みっ、んん♥　みんなにみられながりゃ、赤ちゃん、作りたいのぉ♥　くひゅ、ふひゅぅううんん♥♥

　キリトくんのつよつよせーしで、完璧に受精させられちゃうとこぉ♥　みんな♥　見せてあげっ、りゅうのぉおおお♥♥♥」

「まったく、ひどいアイドルもいたもんだな！　このちんぽ中毒レインめ！」

「くひぃっ♥　んんぅうぅっ♥♥　いいもん、ちんぽちゅーどくレインで♥♥　あっうぅ、おっ、おんなのこはみんな、ちんぽしゅきらもん♥♥　あっあぁんんあぁぁぅあああ♥♥」

　アイドルとしてのプロ意識が為せる業か、レインはほとんど無意識にカメラ目線を保ったまま受精願望を言葉にする。

　キリトの子を宿して大きく膨れた腹部――男に抱かれ、子種を注がれた証を見せつけるような露出度の高い衣装でステージに立ち、たくさんのファンの前で愛の歌を歌う。そんな光景を想像させられて、興奮しない雄がどこにいようか。

「それじゃあ――お望み通り、孕ませてやるからな！　レイン」

「うんっ、うんっ♥♥　キリトくんのちんぽで、ママドルデビューさせてぇえええぇっ♥♥♥」

　レインの手がすっぽ抜けないように力を込めて握り直し、キリトは今までより一層強く、激しく、腰を打ち付ける。飛び散る愛液の飛沫が互いの体を濡らし、どちゅどちゅと鳴る結合部の音が調教部屋内に

響く。

遠慮も何もない、ただ快楽を得る事だけを目的としたピストン運動。繰り返される肉槍の侵略が、レインの脳内で性的悦楽をスパークさせ、視界を明滅させる。

「あっ♥あっ♥あっ♥　んぃ、くぅ、ひいぃぃぃぃ♥♥　ちんぽ、ちんぽしゅごいひぃぃ♥　おっお〃っお〃ほぅひぃぃぃぃぃんんん♥♥」

子宮を押しつぶされる度に声にならぬ声をあげながら背をしならせ、Gスポットを擦られる度にびくびくと体を震わせる。己の体が、キリトの雄々しい怒張に完全屈服した事を本能的に理解させられながら、レインは与えられる交合の悦びを全身で味わう。

そんなレインの蜜壺は、愛しい男の子種を少しでも多く、少しでも濃い状態で搾り取ろうと、すがりつくような必死さで肉棒にまとわりつきながら締め付ける。

その締め付けを押し返すように、野太い肉棒がより一層太さを増し、ピストン運動のテンポが更に加速する。射精が間近である事を示すその兆候を、レインははっきりと感じ取った。

「あふ、あ――あっ♥　くるっ、くりゅうぅっ♥♥　しゃせーくるっ♥　あっ、んんんんっ♥♥　キリトくんのせーえき、きちゃうぅぅ♥　いい♥　いいよぉっ♥　レインのおまんこに、びゅって、びゅびゅーってしてえぇえええ♥♥♥」

種付けを全身で乞い願うレインの体。その深奥を貫き続けた肉棒は、やがて最後の一押しとばかりに深々と腰を打ち付ける。

そうして亀頭をぎっちりと押しつけ、子宮口に鈴口をぴったりと密着させた状態で――精液を解き放った。

「～～～～～んんんっぅぅぅぅぅっっ♥♥　あ――あっあっあ、あ〃ーっ♥♥　あ〃ぁあああああ♥♥　いっ――――きゅゅぅぅぅぅぅぅっっっ～～～～～♥♥♥」

輸精管を駆け上り一気に噴き出した精液の奔流は、レインの子宮壁に叩きつけられながら、洪水のように子宮内部を満たしていく。

がくがくと全身を痙攣させ、股座からぷしぷしと潮を吹き出すレインの顔はカメラには写っていない。背を大きく仰け反らせ、口を大き

く開けただらしのない顔で法悦を味わうレインの表情を見ることができるのは、彼女を後ろから犯し続けたキリトだけの特権だ。

「あ――っっ♥♥　うんぅうううう♥♥　いっぱ、いっぱいっ♥きへりゅううう♥♥　おながのおぐっ、いっぴゃいになっぢゃうよおおぉお……♥♥」

どくり、どくりと脈動する肉棒から吐き出される精液が、レインの子宮をあっという間に蹂躙。両腕を拘束され、腰を引こうにも引けないレインは、逃げ場も無いままにただひたすら子種を注がれる。

雄の種を受け入れ、雄の血を引く子を宿す――それが雌の至上目的であるかのように、そしてそれをレイン自身に刻み込むかのように、射精後も余裕で硬度を保つキリトの肉棒が子宮口をぎっちりと塞ぐ。

長い長い射精が終わり、身を仰け反らせていたレインの体から力が抜けるまで、白濁した子種を一滴残らず胎内に留め置かせ――キリトはようやく、レインの蜜壺から逸物を引き抜いた。

「うっ、ふうっ……。ちゃんと受精できてるといいな、レイン」

「はひゅ――――うん……。キリトくんの、あかちゃん……えへへ……♥」

なんとも幸せそうな笑顔を浮かべたまま、レインはベッドの上へ崩れ落ちる。

キリトはストレージからクッションピローをオブジェクト化し、レインの頭をその上に寝かせる。すっかり敏感になってしまったレインは、それだけでぴくりと体を震わせた。

白いベッドシーツの上でうつ伏せになった体は、交合の余波で未だ妖しく火照っている。アイドルらしからぬ姿で力なく開かれたレインの股座からは、どろりと濃厚な精子と攪拌されて泡立つ愛液が混ざり合ったモノがようやく逆流を始めたところだった。

06―4・BLADE ARTS Ⅳ

調教部屋での交わりは、未だ続いていた。
余韻に浸る紅髪のアイドルをゆっくりと休ませてやっていると、キリトの背にむにゅりと柔らかな物体が押し当てられる。
えもいわれぬ程に柔らかく、それでいてハリのあるボリューミーで独特な感触が、ちょうど二つ分。それが誰のものかは、振り返るまでも無くわかった。
「――おはよう、リズ」
「おはよ、キリト。人が失神(ね)てる間に、ずいぶんお楽しみだったようで」
いつのまにか意識を取り戻し、キリトの背中に抱きついてきたリズが、軽口と共に体を離す。そのままいそいそとベッドの上を進み、キリトと向かい合う位置に移動した。
少し前に大量のジュエルメイカーを排出したばかりのリズは、全身にしっとりと汗を浮かべ、興奮で上気させた頬を薄桃色に染めている。出るところが出たグラマラスな肢体は、当然ながら一糸まとわぬままだ。
「あたしと遊ぶ分は……ちゃぁーんと残してあるみたいね」
「当然だろ」
「よろしい。……しっかし、いつみてもすっごいわよね、これ」
胡座をかいたような姿勢で座るキリトの下腹部で堂々とその存在を主張する逸物を眺め、リズは口角を上げてにんまりと笑う。レインの蜜壺から引き抜かれた時から状態を変えていない肉棒は、愛液と精液の残滓をまとったまま、調教部屋の天井目掛けてまっすぐに屹立していた。
「キリト、さすがにちょっと疲れたでしょ？　あたしが気持ちよくしてあげるから、楽にしてて」
「いいのか？　それじゃあ、遠慮無く」
見せつけるようにゆっくりと腰を上げたリズは、正面からキリトの

首に両腕を回して抱きついて体を安定させる。そのまま両脚を拡げ、肉棒をまたぐように腰の位置を合わせれば、キリトの手がリズの腰に回り、彼女の動作をそれとなく手伝う。

鞭と排出調教でたっぷりと興奮させられた肉壺の入り口を、固くそびえ立つ肉棒の先端にそっと押し当てて位置を確かめたあと。リズはゆるゆるとした速度で腰を落としながら、雄の象徴を胎内へと受け入れた。

「――んんぅぅぅっ……♥　これ、これぇっ……♥　はぁっ、はっ♥　くぅうんっ♥♥」

愛液と精液という二種類の潤滑油を既にまとっていた太い肉棒は、興奮に火照ったリズの肉壺に容易く入り込む。四方八方から絡みつく膣肉を征服し、リズの愛液によって更にコーティングされる雄の象徴を飲み込みながら、リズはキリトの逸物を堪能するように少しずつ腰を落とす。

そんなリズを支えてやりながら、キリトは組んでいた足を少しだけ広げる。その手に支えられながら腰を落としきったリズの尻が、キリトが作った脚の間にすっぽりと収まった。

雄々しい肉棒を根元まで銜え込み、膣奥でその感触を味わいながら、リズは両脚をキリトの腰へと回す。先に首へ回された両腕と共に、キリトの体へ抱きつくような姿勢。それはさながら、背もたれの付いた座椅子に逆を向いて座っているような状態だ。

「んっ、うぅっ……♥　キリトの、おっきいの……全部挿入(はい)っちゃったわね……♥」

「ああ。リズの膣内、熱くてぐちゅぐちゅで……すぐにでも絞られそうだ」

「えへへ……ちゃんと、我慢しなさいよね……♥　んんっ……♥　今日は、じっくりたのしみたい気分だから……♥」

キリトの肉棒を杭代わりに、二人は互いの体と体を密着させる。滑り落ちた汗が混ざり合い、吐いた息が蕩け合う。どくどくと鳴る心臓の鼓動すらも共有してしまう程の至近距離で見つめ合えば、言葉にならない何かが互いの間で伝わり逢った気がした。

「ふふっ」
「なんだよ、リズ」
「べっつに。なーんでもっ」
くすくすと笑うリズの背にキリトが腕を回せば、リズは慣れた動作で体をすり寄せてくる。実はかなりボリュームのあるバストがキリトの体に押し当てられて柔らかく形を変える中、リズは唇をキリトの耳元へそっと寄せた。
「……あたしね。その……あんたに抱かれてると、安心するのよね」
「安心？」
「ええ。なんていうか……あんたのおっきくて固いのが、あたしの中にいてくれるとね。あたし、キリトのオンナにされちゃったんだ……って思える、から」
唇の端から官能の吐息を溢しながら、リズは腰を少しだけ前後に動かし、自らの弱い部分を逸物で刺激する。ボリュームを抑えられた嬌声は、それでもキリトの耳に届くには十分。股間部から響くねっとりとした水音と共に、リズが交合の愉悦を味わっていることをはっきりと伝えてくる。
「んぁっ……♥　ん……♥　腰、止まんなくなりそ……♥♥」
あぅ……えっと……ほら、あんたの周りって可愛い子がいっぱいいるでしょ？　アスナを筆頭に、よりどりみどりでさ」
「まあ……確かに、それはそうだな」
「そーいう皆様方と比べると、あたしってば普通もいいとこじゃない？　だから、その……時々、ちょっとだけ自信無くしそうになるのよ。あたし、見劣りしてるんじゃないのかなー……って」
無意識にか、抱きつく四肢の力を少しだけ強めながら、リズはぽつりと呟く。
不安げなその体を抱き寄せながら、キリトは彼女の細い首筋に口づけを落とした。
「リズ。俺はみんなを比べるなんて事をするつもりはないけどさ……リズは、すごく可愛い女の子だって思ってる。見劣りなんてしてない。

もちろん、俺以外の誰かに渡すつもりだってないよ」
「キリト……。そーいう嬉しいことは、ちゃんとあたしの目を見て言いなさいよね」
「お、おう……すまん」
「ふふっ。次回から精進しなさいよね」
注意を喚起するかのようにキリトの耳たぶをかぷかぷと甘噛みしたあと、リズは少しだけ体を離す。下半身で繋がったまま、顔と顔が距離を取り戻す中、キリトとリズの視線が交錯した。
互いの瞳の中に映り込む己の顔が、ふっと破顔したのを合図に、二人はどちらからともなく唇を重ねた。
「――ん……♥」
キリトの唇をつんつんと突いたリズの舌は、キリトの舌を招きながら奥へと引っ込む。その誘いに乗ったキリトは、薄く開いたリズの唇の中へ、己の舌を滑り込ませる。
リズのぷるぷるとした唇が男の舌に甘く吸い付きながら出迎えの役目を果たし、口内に隠れていた舌が絡みついて奥へと導く。キリトの舌裏、舌先、舌表面――キリトの舌へ丁寧なマッサージを施しながら、リズの舌は這い回り、なめ回しながら絡みつく。
「んぁ♥　んふっ♥」
舌を絡め合う濃厚なディープキスを続けながら、リズは己の腰をぐにぐにと動かして肉棒を貪る。
上下運動は浅く、動く速度は慌てず、急がず。ゆったりとしたリズムで膣奥に亀頭を圧し当てつつ、円を描くように腰を前後左右に動かしては、Gスポットへキリトの逸物を導き擦り上げる。結合部から溢れ出す愛蜜は、先ほどまでの性交の残滓と混ざり合いながらキリトの肉竿を伝い落ちて陰嚢を濡らした。
「んっんっんぅ♥　んんっ――♥　……ぷはぇあっ……あれ、キリト……？」
たっぷりと時間をかけて絡み合った舌を解き、堪能した口づけをやめたキリトの視界に、寂しげな表情を浮かべたリズの顔が映る。
このままキリトが離れていってしまうのではないか――とでも言

いたげなリズの背に片手を回して彼女の体を支える。離すつもりはないと言外に安心させてやりながら、キリトは彼女の胸元に顔を埋めた。

「今度は、こっちが欲しくなった。リズ」

「こっちって――やぅんっ♥♥」

柔らかく豊満なバストに吸い付かれ。リズが蕩けた声を上げる。もちもちとした柔肌の上に口づけのラインを描きながら、キリトは少しずつ頭の位置を下げる。

そして見えてくる薄桜色の突起――リズの乳房の先端を飾る乳首を、キリトは口へ含んだ。

「んっんぁああっ♥　こっち、ってぇっ♥♥　おっ、おっぱいのこと、ね……ひぅ♥♥

まったく……ああっんんっ♥♥　赤ちゃ、っん、みたいね……♥♥」

『こんな吸い方する赤ん坊、さすがにいないと思うぞ』

「確かに……ひんんんっ♥♥」

乳房に唇で吸い付いたまま、キリトはわざとちゅうちゅうという音を立てつつ、口内に含んだ乳首を舌で舐る。乳輪をなぞるようになめ回し、舌先で先端を突きつつ、空いている方の手をもう片方の乳房へと伸ばす。指の根元で乳首を挟みこみながら、柔らかな丘を掌で優しくこね回してやれば、リズは嬌声を漏らしながらキリトに体を預けるように身をくねらせた。

上方から零れる切なげな声と、下方から溢れる水音のボリュームは増す一方。合成音声での会話も抑えめにしながら、キリトはその官能的な音の響きを拝聴していた。

「あっ♥あっ♥あっ♥あっ♥　んんっ、んんぁぅぅう♥♥　いい、いいいぅっ♥♥

おっきいのぉ♥　キリトのが、んっぁっ♥♥　あたっ、しぃのぉ……ひぁぁんぃいいぃん♥♥」

キリトの体にぎゅっとしがみついたまま、リズは少しでも多くの快感を得ようと腰を上下させる。早く細かいリズムで腰を振って蜜壺の奥を何度も何度も突いたかと思えば、時折ねっとりとした動きを挟

み、膣内全体で肉棒に奉仕する。胸元にかき抱いたキリトの頭、その旋毛や額にキスを捧げ、蕩けた声音を耳元に落とす。

緩急の利いた腰の動きに、鍛造工程で振るわれる槌の動きを想起させられながら、キリトは興奮に固くなった乳首を甘噛む。

「は、っんんっっ♥♥　んっ♥　……もう。そんなに、んん、吸い付いたって……おっぱい、出ないわよ……♥」

『いずれ出るようにしてやるよ。こっちでも、現実でも』

「ふふっ。じゃあ、期待しといてあげるわね……ぁふぅ、んんぅうっ♥♥」

腰を落とし、キリトの肉棒と深々と繋がった所で、リズは不意に動きを止めた。体全体を密着させたまま軽く息を整え、乱れた呼吸を落ち着かせた所で、リズはキリトの耳をかぷかぷと甘く噛んだ。

夜伽の合間、何か伝えたいことがあるときにリズがしてくる悪戯じみたサイン。そのサインに気づいたキリトは、彼女の胸元に埋めていた顔を上げて、リズと視線を合わせた。

「ん？　どうかしたか、リズ？」

「キリト、あのね……あたしも、欲しくなっちゃった……っていうか」

「欲しくなったって……何を？」

「だからその……激しめの、やつ。いつもの、すごいの」

キリトへ頬ずりをするような体勢で耳元に唇を寄せたまま、リズはぽつぽつと言葉を口にする。いつもは勝ち気で大胆な彼女が見せる、恥ずかしげな様子に、キリトの嗜虐心は掻き立てられる。

「もうちょっと具体的に言ってくれないとわからないなあ、リズ」

「な〝っ……!?　あ、あんたねえ……！」

「悪い悪い。冗談」

詫び代わりに唇同士を触れあわせながら、キリトは上体をゆっくりとかがませて、リズの体をベッドの上へと押し倒す。繋がりっぱなしの肉棒をうっかり引き抜かないよう注意しながら、白いベッドシーツの上にリズの背を預けさせた。

リズお気に入りのスタイルへと持ち込みつつ、彼女の腰は少しだけ

上げさせておく。この後の行為をより楽しむために。
「ほら、よく見てろよ。リズ」
結合部をリズの視界にはっきりと捉えさせながら、キリトは腰を上げて肉棒を引き抜く。ぶるんっ、と勢いよく撓りながら解き放たれた肉棒は、三人分の体液が混ざり合った粘液で覆われたまま、獰猛に屹立していた。
目の前の雌に興奮し、征服せんとしている雄の象徴を改めて目の当たりにし、リズはごくりと喉を鳴らす。普段の勝ち気な様子はどこへやら。飼い主に服従する犬のように仰向けになって四肢を広げたリズは、発情と劣情に頬を蕩かせていた。
「今からリズの大好きなこいつで、リズの中をめちゃくちゃにしてやるからな。
……いくぞ」
こくこくと首を縦に振るリズを抱きかかえるような体勢で上から覆い被さったキリトは、固く勃起した逸物の先端を蜜壺にあてがい――そのまま、リズの奥めがけて押し込んだ。
「あっ――～～～～～～くぅぅぅんあああぁぁあああああ♥♥♥」
ほんの一瞬前まで続いていた交わりによって十二分に温められた秘所は、凶悪な肉棒を準備万端に受け入れた。
溢れ出しそうな程の愛蜜をまといながら、ずぷずぷというナマ音を立てて侵し進んだ肉棒が再度リズの最奥部に達するまで、たいした時間はかからなかった。
「……うくぅ、あっ……♥♥　んぅ、んんっ……♥」
「すごいな、もう全部挿入っちまった。リズの膣中、どろどろのぐちゃぐちゃだ」
「や、やだ……言わないでよ、っばかぁ……♥♥」
仰向けになって迎え入れるオンナへ、オトコが覆い被さる、抱き合いながらの正常位。キリトと密着しつつなすがままにされてしまう被征服感、そして何より愛情を強く感じられるこのスタイルを特に愛好する者はかなり多い。たとえばアスナもそうだし、リズもまたその一人だ。

肉感的なリズの体を組み敷いたまま、キリトは彼女の首と頭に腕を回して抱きしめながら、体と体を密着させる。自然とキリトの背へと回ったリズの腕が、自らを貫く男の体を抱きしめ返した。

暖かな抱擁への返礼として、リズの頬や首筋へ口づけを落としたあと、キリトは腰をぐいと引き、彼女のお望み通りのピストン運動を開始した。

「あ――♥　あんっ♥んっ♥あっあっあっあああああぁぁあ♥　んぅ、あふ、んんぅうぅう♥♥

キリトのっ、んくっ♥いいっ♥　いいぃいぃっっ♥♥」

拍動する心臓の鼓動と同じリズムで、キリトは肉棒を引き抜き、そして力強く突き入れる。肉棒が離れる度に名残惜しく絡みつき、突き入れられる度に喜んで迎え入れるリズの蜜壺へ向けて。

男の力と体重によってがっちりと抑え込まれる正常位。一方的に『使われる』ことを余儀なくされるこの体位が、リズの中に先ほどまでとはまた別種の快感を呼び覚ましていく。

そんな風に蕩けたリズの瞳と、キリトは至近距離で見つめ合う。キリトが少しでも体を動かす度に嬌声を上げ、少しでも離すまいと強く抱きしめてくるリズの姿がたまらなく愛おしい。

「すごく綺麗だよ、リズ。これからもずっと……俺の側にいてくれ」

「――ふぇ!?　あっ、ずっ、ずるいわよぅ♥　いっ、いまそういうこと言うの、ずる――んんぅぅんんっ♥♥♥」

有無を言わさずキリトは唇を重ね、キスで以てリズの唇を封じる。腰と逸物以外の場所全てで、可能な限りリズと触れあいながら、手心を加えないハードな抽送を繰り返す。

どこがリズの弱点で、どのように擦り、どういう風に突いてやればよく啼くかは今更知らぬ仲ではない。それについ先ほど、リズ自信の腰使いで改めて教わったばかりだ。

いわゆるキスハメの状態を維持したまま、キリトは腰を巧みに操り、リズの感じやすい場所ばかりを連続で穿っていく。

「んんんぅうぅうんん♥♥♥　んっんっんぅうぅ――――んぅーっ♥

んぅう゛うう゛ううっ♥♥♥」

びくびくと身を痙攣させながら達する度に、塞がれた唇の端からリズのイキ声が溢れる。跳ねる体も、嬌声も抑え込まれながら、固く立派な逸物で雌穴を貫かれるごとに満たされていく、人間としての敗北感と、一匹の雌としての充足感。この雄の精で子を孕むという未来への期待と喜悦と共に、蜜壺は肉棒を締め付けては子種を乞い願う。

リズの本能的な奉仕を感じながら、キリトは口づけを解く。代わりに、彼女の首筋に顔を埋めるようにしながらより一層強く抱き寄せる。腰の動きは彼女が達している間だけ止め、そしてリズを溺れさせる快感の波が収まるのを待ってから激しい前後運動を再開。

「――ぁあっ♥♥んっ♥んぐぅっ♥　だっ、めっ♥だめ、だめぇえっ♥♥　いまぁっ、今イッたばっかりなのにひぃいぃぃ♥♥♥」

リズの抗議の声を無視しつつ、キリトは抽送の速度を一気に加速させる。ギリギリまで引き抜き、深々と突き刺す――堂々たるストロークでリズの弱い場所を遠慮無く打ち、若い情熱をぶつけるように激しく貫く。

「あっ――あっあっあっあっ♥♥　キリト、キリトおっ♥♥♥」

シーツの上に飛び散る汗と愛液。びくびくと震えながら雌の快楽を享受する体。亀頭が子宮を圧す度にあふれ出る悦楽の声。

己の下に組み敷いたリズの総身から発せられる興奮のサインに昂ぶらされたキリトの本能は、繁殖という根源的な欲求に従いながら陰嚢をフル稼働。精巣の内に溜め込まれた濃厚にして活発な精子の大群を、まもなく行われる種付けに向けてスタンバイさせる。

「い、いぃ♥いいっ♥んぃいいい♥　ああっあっぁあっ♥♥♥　き、りとのぉ、ぢんぽぉっ♥　まひゃ、またっおおきくなっへ、るぅうぅう♥♥」

「お、ぐうっ……さすがに、そろそろヤバい……。いっぱい出してやるから……ちゃんと孕めよ、リズ」

「はらむぅっ♥　はっ、あっんんっ♥♥　キリトの、んぁっ、あんっ、あっ、赤ちゃん♥♥　絶対、はりゃんだげるかりゃあぁあ♥♥♥」

前後する腰の速度は最高点に達し、下腹部から駆け上る射精欲求がキリトの脳内を支配する。雄である以上は抗えぬ衝動に突き動かさ

れた体は、目の前の雌に己の遺伝子を植え付ける為、獰猛な程の苛烈さを以て蜜壺を蹂躙する。

射精前の数瞬。愛しき女も、卑しき雌も、等しくただの肉穴として使われる僅かな時間。その最中にありながら、それでもリズの体は歓喜に震え、仰ぎ見る男への愛しさを積み重ねていく。

そして、最後の一突きによって腰と腰が密着し、亀頭がリズの子宮口に圧し当てられた直後――蠢く膣肉に包まれた肉棒から、白濁した精液が迸った。

「あっ――あっ♥あっっ♥♥ぅっあああああああああっ♥♥♥　あああ゛っああんああぁあんぁああっっっ♥♥　――きてっ……りぅうぅぅううう♥♥　きりと、のぉっ゛……せーえきいぃいぃひいいぃいいんんっっ♥♥」

胎内全てを灼き尽くされそうな程に熱く重い、子種汁の奔流。脳裏にスパークする絶頂の感覚。声にならぬ声をあげ、びくびくと肢体を痙攣させながらも、リズの体は精液を一滴たりとも逃すまいと無意識にキリトの体へしがみつく。

彼女の両脚に腰をホールドされたキリトは、肉棒を抜き放つ術を失ったまま、どくどくと湧き出る子種をリズの膣内へ注ぐ。吐精が為される度に体を震わせ、甘い鳴き声を漏らす愛しい女の体を抱きしめ返しながら。

「んあっ♥♥　……あっ、ぅくっ、あふぅぅうっ……♥♥　あ……きり、とぉっ……♥♥」

「大丈夫だぞ、リズ。俺ならここにいるから」

「はひゅ……♥　ひぅっ……うん、居る……♥♥　ちゃんと、いてくれる……♥♥」

膣内射精の熱と感覚に酔い痴れるリズと抱きしめ合ったまま、キリトは彼女の首筋にキスをしながら、射精後の気怠さを静かに味わう。

やがて、リズの四肢から力が抜け、目一杯の力がこもった抱擁がほどけていく。ぐったりとしたリズの髪を軽く撫でたあと、キリトもまた抱擁を解くと、リズに覆い被さる形になっていた体を起こした。

「うおう……っと」

ようやくリズの雌穴から引き抜かれた肉棒は、ぶるんと勢いよくしなってみせたかと思うと、リズの下腹部へ男女の営みの残滓をまき散らす。塞ぐモノが抜けてしまった肉穴から、しばしの時間をおいて逆流し始めた泡立つ白濁液の姿は、まるで降りかかる精液と愛液の混合物が呼び水になったかのようだった。

二つの肉壺を犯し抜き、三人分の体液で汚れきった己の分身。とりあえずタオルか何かで拭こうと、キリトが個人ストレージへとアクセスしようとした、まさにその瞬間だった。鈴を鳴らすように軽やかで、聞き慣れた声が背後から聞こえてきたのは。

「何かお探しですか？　ご主人様」

「……レイン？」

呼び声に振り返ってみれば、いつの間にか回復していたレインの姿があった。

ベッドの上で膝立ちとなったその体にまとうのは、少し前までリズが着ていたメイド服、そのミニスカート部分のみ。上半身はもちろんトップレスの状態であり、実はボリュームのあるバストが露わにされていた。

「店長権限でリズっちから勝手に借りちゃった。どうかな、似合ってる？」

「ああ。こういうレインも……なんていうか、ギャップがあってまた……エロくて可愛いと思う」

「えへへ……♥　恥ずかしいけど、キリトくんにそう言ってもらえてよかった♪」

……ところで、ね。キリトくん。ちょっと相談なんだけど」

粘液にまみれつつも、未だ余裕で天を向く怒張へちらりと視線を向けたあと。レインはスカートの裾を両手で掴むと、そのままゆっくりとたくし上げた。

露わになる無毛の股には、当たり前のように下着が存在しない。緩く広げられた脚の間からは、レインとたっぷり楽しんだ時に注ぎ込んだ白濁汁が、ぼたり、ぼたりと重く粘つきながらベッドシーツ目掛けて落ちていく光景が垣間見えていた。

「キリトくんから注いでもらった大事な大事な精液、ベッドの上にこぼしちゃったの……。

このままじゃ、おまんこの中、空っぽになっちゃうよぅ……ねえねえ、どうしたらいいと思う？」

汗で首筋に張り付く紅い髪。ぺろりと唇を舐める真っ赤な舌先。挑発と期待がふんだんに込められた妖しい眼差し。

先の交尾で体力を使い果たして倒れ伏す友人の姿をキリトの肩越しにちらりと見ながら、レインはこれ幸いとばかりににじりよってくる。

その蠱惑的な雰囲気と均整の取れた肢体は、さながら女豹。なれど、彼女が望むのは狩人の立ち位置ではない。レインが望むのは、黒衣の狩人を焦らし、弄び、たっぷりと興奮させてからその毒牙にかかる、哀れにして美しき獲物の立ち位置。

「そうだな……『新しいのをたっぷり注いでやる』っていうのは、どうかな。レイン？」

「わぁっ♥　それ、ナイスアイデアだよキリトくん♥」

わざとらしい程にアイドルめいた笑みを浮かべながら、レインは後ろ手にコンソールを操作し、『サキュバス・ストレージ』を手動で起動。腹の内を満たしていた精液を残さずゴム型収納容器に入れて、しれっと個人ストレージに収納すると、正面からキリトへ抱きついた。

「ユイちゃんに、新しい弟か妹――作ってあげようね♥」

耳元へ囁かれる甘い誘いに、もとより砕けていたキリトの理性が溶かされていく一方で、肉棒の硬度だけはより固くなっていく。

ふと『このペースでいくと、ユイの弟妹は何人くらいになるんだろうか』などという想像に耽ったのも一瞬。奇しくも先ほどのリズと同様に抱き合うような姿勢で腰を上げたレインの体を支え――キリトは可愛らしいアイドルにもう一度種付けしてやるべく、レインの身をゆっくりと引き下ろした。

その後も『黒夜館』内部では、若さに任せた熱い交わりが続いた。

たとえば――。

「――あっ♥あっ、あああっ♥　いけませんっ、いけません旦那様ぁ♥
奥様に、奥様にしかられてしまいますぅっ♥♥
あっぁうあああぅ♥♥　だっ、旦那様のちんぽに負けた駄メイドとして、奥様に折檻されてしまいますぅうう♥♥」
「口ではそう言っていても、体はこんなに喜んでいるじゃないか、レイン。まったく……主人に色目を使うような淫乱メイドには、やはりお仕置きが必要だな」
「色目だなんて……あぁぁあぁっ♥♥　んっ、んうううううっ♥♥
だめ、でっ、すうううぅっ♥　あっあっ――あぁぁあ～～～～♥♥」
本妻（アスナ）が不在にしている間に、好色な主人に無理矢理手込めにされる哀れな紅髪のメイドであったり。
あるいは――。
「……す、ストリップクラブ『リズベットナイトハウス』……ほ、本日、開店……」
「笑顔が硬いぞ、リズ。もっと客寄せしないと、借金の返済なんて夢のまた夢なの、わかってるか？」
「わ、わかってるわよそれくらい!!
『リズベットナイトハウス』、本日開店で～す！　美人キャストが繰り広げる、開脚へこへこおまんこダンス♥　ぜひ覗いていきませんか～♥♥」
借金のカタに差し押さえられ、ストリップ場兼売春宿に改装された懐かしの店を取り戻すため、必死に働く桜色の髪のストリッパーであったり。
もしくは――。
「いかがですか、ご主人様。当メイドリフレ自慢のオイルマッサージ、よく効くでしょう？　体中の固くなった部分が、じんわり、じんわり、解れて……♥」
「本当は、これ以上の事はＮＧなんですけど……こんなに立派なご主人様のアソコ見てたら……ねえ？」
「うん、うん♥　だからね、ご主人様。サービス料金、こっそり倍額で

払ってくれたら……♥」
「お店には内緒で……いーっぱい気持ちよくしてあげる♥　もちろん、ナ・マ・で♥♥♥」
　金で体を売る淫売リフレガール二人組と、その身柄ごと違法メイドリフレ店から買い上げる客であったり、と。
　趣向と設定にアレンジを加えながら、行為を続けに続け、営みを重ねに重ね――諸々の交わりが一段落する頃には、ベッドはすっかり3人の体液まみれになり、元の白い色を残している部分をかきあつめても、もはや掌ほども残っていなかった。
「――確かに、いい『打ち合わせ』になったかも」
「でしょ？」
　新しく設置したばかりの綺麗なベッド――こういう事が簡単にできるのもＶＲの強みだ――の上で、キリトの両腕を枕代わりに寝転んでいたレイン、そしてリズが、どこかぼんやりとした口調で言葉を交わす。
　三人揃って真っ裸。身に纏うのは薄手のシーツ一枚。それで十分なのは、ここが空調の効いたＶＲ空間の室内であるという事もあるし、褥を共にした余韻の熱がまだ残っているせいもあった。
「キリトくんの手の動き、武器の扱い方、体重の移動や打ち込みのクセ……全部よくわかっちゃった。これなら、ぴったりの剣が作れそうだよ」
「ね。これがアスナやユウキにアリスあたりだったら、直に斬り結んでわかりあうってとこなんでしょうけど……さすがに、アタシじゃあそこまではいけないしね。
　……あ、でもレインならわりといけるんじゃない？」
「いやいや。さすがにキリトくんクラスとなると《多刀流》を使わないと厳しいし……。でも、そうなると斬り結ぶっていう戦い方じゃなくなっちゃうから……」
「あー、そっかそっか。それも確かに」
　うつ伏せになったまま言葉を交わす二人の鍛冶士。『最後にもう一度』と一本鞭をねだって望み通りに打擲されたその豊満な尻には、

赤々としたダメージエフェクトのラインがいくつも刻まれていた。ベッドの上でうつ伏せになって尻を突き出す二人の姿はとてつもなくエロティックで、キリトはやりすぎないように己を抑えるのに苦労した程だ。

そうした行為を経た後――いわゆる事後特有のまったりとした空気は、キリトにとっても心地よい。これで煙草の一本でも吸えばサマになるのかもしれないが、生憎とキリトは非喫煙者であるし、そもそも煙草型のアイテムも実装していない。

なんとはなしの手持ち無沙汰を誤魔化すように、キリトは両手を少しだけ動かし、二人の髪にそっと触れた。

「いい剣を期待してるよ。二人とも」

「まかせときなさい。その代わり……お財布の方はよろしくね。キリト」

「レアな金属素材の方も、どうにかしてくれると嬉しいな。キリトくん」

「お、おう……努力します……。あと、リズ。しばらく、武器のレンタルを頼む……」

「はいはーい。レンタル料は安くしといてあげるから、感謝しなさいよね」

しばらくの間、プレイヤーキラー（PK）狩り稼業に戻るか、あるいはシノンやリーファを経由して、アリシャ・ルーやサクヤに割のいい傭兵業を回してもらおう。なるべくなら、エクスキャリバーを抜かなくてよいレベルのものを。

プライベートＶＲ空間では湯水のように金を作り出せる管理者も、他のＶＲＭＭＯでは一介のプレイヤーに過ぎない。鍛冶士二人にくつくつと笑われていることにも気づかぬまま、キリトは一人金策に頭を悩ませるのだった。

その日。《ＡＬＯ》スプリガン領の一角、『ルカヴィール遺跡群』エ

リアは、かつてない程の熱気に包まれていた。その理由は単純明快。遺跡群の中央に鎮座する、古代ローマのコロッセオを思わせる大闘技場で闘技大会が繰り広げられたためだ。

スプリガン領とウンディーネ領の貿易協定締結を祝し、スプリガン領領主の名の下に開催されたトーナメントには、《ＡＬＯ》中からそれなり以上に実力のあるプレイヤーが種族を問わず多数参加し、スプリガン・ウンディーネの両領主、そして見物に集まった観客達の前で互いの力と技を競った。

折悪しく、あの《絶剣》やユージーン将軍といったスーパーメジャー級プレイヤーのほとんどは不参加だったが、それでも第一戦から決勝戦までのすべての試合で観客達を大いに満足させるだけの熱い戦いが繰り広げられた。

特に決勝戦。相手に押される一方と見えた両手剣使いのサラマンダーが、一瞬の隙を突いて形勢を逆転し、愛刀の刀身より紅蓮に燃える炎の奔流を放ち対戦相手を灼き尽くして大逆転勝利を決めた。その瞬間観客席は興奮の坩堝と化し、惜しみない拍手を送ってその健闘を讃えた。

「そろそろ……出番かな」

勝利を讃えてなお収まらぬ客席の熱狂。それなりの距離を経ているはずなのにしっかりと響く程に大きな喧騒が、薄く開いた控室の扉越しに聞こえてくる。キリトは長椅子から立ち上がると、貸し出された儀礼用装備のベルトを改めて締め直した。

「――あんたとしては、エキシビジョンマッチよりあっちの本戦の方に出たかったんじゃない？　キリト」

「仕方ないだろ、リズ。領主殿直々のご指名なんだからさ」

「ほーんと、有名人サマは大変ですこと。ねえ、黒ずくめ（ブラッキー）先生？」

「勘弁してくれ……」

揶揄たっぷりの笑みと共に上着を差し出すリズに、キリトは深々と溜息を返しながら上着の袖に腕を通した。スプリガンのテーマカラーである黒をベースに、ウンディーネのテーマカラーである青を差し色としたこのロングコートは、このイベントの為にわざわざ用意さ

れた特注品であり、此度の大会において特別選手として選出された事を示す一品でもあった。

大会本戦後に開催されるエキシビジョンマッチ。両種族の発展を祈念した特別試合、そのスプリガン側の代表選手として領主が指名したのが、誰あろうキリトその人だった。

『貴様が実質レネゲイドであることは百も承知だが、書類の上では我がスプリガン領の一員だ。それくらいはわかっているだろう？　ミスター・ブラッキー』

『その呼び方は勘弁してくれ……。で、そんな半端物（ほぼレネゲイド）を代表選手にしていいのかよ、領主サマとしては』

『ああ。貴様の実力は知っている。勝てばそれでよし、負けてもスプリガン本隊の名誉に傷は付かん。これ以上無い配役だ。

本当なら普段から我が領の為に働かせたい所だが、貴様をあまりこき使うなと何故かアリシャとサクヤが五月蠅く言ってきている。

……妙に顔が広いな、貴様』

「は、はは……まあ、色々ありまして……』

『――というわけで、だ。せめてこういう時くらい、同族の為に一肌脱いでみせたらどうだ？』

支配者然としながらも、どこか暗殺者めいた暗い雰囲気を纏うスプリガン領領主――キリトにしてみれば初対面の男の、脅しにも似た要請を受け、代表選手として試合に出ることを決めたのはつい３日前の事だ。

実際、スプリガン領にろくに顔を出していない事への負い目は無くもなかったし、同族（フィリア）の為にも領主に恩を売っておくに越したことは無い。キリトにしてみても悪い話ではなかった。

「ま、なんにせよ……負けたら承知しないわよ、キリト。今回は、この子のデビュー戦でもあるんだから」

そう言ってウィンドウ型ＵＩを呼び出したリズは、自らのストレージに格納していた渾身の逸品――黒鞘に収まった剣をオブジェクト化し、どこか恭しくキリトへ差し出す。

鞘ごと掴み取るようにして剣を受け取ったキリトは、その柄を右手

でしっかと握りこむと、かすかな鞘鳴りの音を響かせながら剣を抜き放った。
「どうよ、あたしの自信作の出来栄えは」
「……」
「ちょっと、なんとか言いなさいよ。キリト」
「悪い、ちょっと見惚れてた。
――すごく、いい剣だ。相変わらず……いや、前以上だな。こいつは」
使い手の姿を映すほどに磨き上げられた漆黒の刀身を眺めながら、キリトはそんな感想を述べる。
鉄の塊をそのまま削り出したかのような無骨さと、職人の心配りを随所から感じる細やかさが渾然一体を成す、漆黒の片手用両刃直剣。流麗、なれど華美ならざる意匠に込められているのは、鍛冶師の誇りと確かな実用性。
あの日、白竜の巣の底で共に見上げた夜の闇を十重二十重に折り重ねて創り上げられたかのような黒い刀身に浮かぶのは、一切の乱れ無き直刃（すぐは）の刃文。柄の幅から刃長に至るまでの全てが、たった一人の使い手の実力を余す所なく引き出す事を目的としてフルチューンされた至高の一振り。その剣をキリトが軽く振り下ろしてみれば、ずしりと重く頼もしい感触が還る。
「この子の名前は、《アイオーン》。日本語で言ったら……『永遠』、『永劫』とかになるのかしら。
魔剣（エリュシデータ）クラスの化物武器にだって負けない出来だし、もちろん――」
「『情報屋の名鑑には載ってない剣』か？」
「そういうこと。今のあたしにできる、最っ高の剣――受け取ってくれる、キリト？」
「ああ。もちろんだ、リズ」
死すらも死ぬるという時の果て・永劫（アイオーン）――その名を冠するに恥じぬだけの斬れ味と耐久性を備えた漆黒の剣をもう一度眺めたあと、キリトはその刀身を鞘へと収め直し、背中のウェポンラック部分にマウントする。

直後、聞き慣れたＳＥと共にカーディナル・システムが装備情報を上書きし、『アイオーン』をキリトの装備として設定しなおした。

「――あーあ、残念。リズっちに先越されちゃった」

背後から聞こえてきた涼やかな声にキリトが振り返れば、そこにはもう一人のレプラコーンことレインの姿があった。

「ふっふーん。年季が違うのよ、年季が」

「むぅ……」

自慢げに胸を張るリズの気配を背中で感じながら、キリトは悔しげに頬を膨らませてむくれるレインの側に歩み寄る。

「最終調整、完了したんだな。レイン」

「なんとかね。キリトくんに合わせたカスタマイズを追求してたらギリギリになっちゃったけど……その分、すごくいいものができたよ！　だから……受け取って、くれる？」

「むしろ、こっちからお願いするよ、レイン。君の剣を、俺に預けてくれないか？」

「うんっ！　もちろんだよ、キリトくん！」

レインは首を縦に振ると、ウィンドウ型ＵＩを呼び出し、自身のストレージから目的のアイテム――黒鞘に収まった一振りの剣をオブジェクト化する。

細い両腕で剣を支えるレプラコーンに頷きを返したあと、キリトは右手で鞘を、左手で柄を握り込み、静かに剣を引き抜いた。

「どう……かな？」

「月次なことしか言えなくて悪いが……綺麗な剣だ。見てるだけで、吸い込まれそうになってくる」

月の光を束ね、星の輝きで織り上げた――そう言われれば納得してしまう程に眩く美しい刀身が、鞘の内よりその姿を顕す。

アイオーン同様の片手用両刃直剣の形を取る、鍔（ガード）と一体となった鋭き刀身。根本から鋒に向かうに連れてわずかに幅を狭くする刺突と斬撃の両立を意図した構造と、刀身そのものが持つ色から醸し出されるどこか優美な印象によって、まるで観賞用の芸術品であるかのような錯覚すら覚えるが、それが武具としての性能を第一に考えて鍛造

された事は一度振るってみるだけで十分に伝わる。
「《シルヴ・ミティオール》――それが、この子の名前。私がキリトくんに初めてあげる、剣の名前だよ」
「シルヴ・ミティオール……どういう意味の言葉なんだ？」
「スラブ語……ざっくり言うと、ロシアに近い地方の古い言葉で『銀の流星』って意味なんだよ」
「『銀の流星』か……。なるほど、確かに」
「でしょ？　でも、もっと武器らしい名前になおしてあげるなら……さしずめ《銀星号》ってところかな？」
天より降り来る星の輝きを『号』――刀剣に与えられる愛称のようなもの――として戴く、銀の騎士剣。振られる度に切り裂かれる空気が奏でる刹那の音は、さながら銀星の光が奏でる歌の如し。
レインより預かったその剣を、キリトが自らの装備として登録すれば、右手に掴んでいた鞘が背中にマウントされる。
同じ装飾を施された黒鞘に収められ、キリトの背の上で交差する二振りの剣。
それはまさに乱麻を断ちし快なる刀。一度その鞘より抜き放たれれば、刀光閃き首を刈り、剣影躍りて屍を増やす。たとえいかなる血戦場であろうと、黒き王の敵、その悉くを討ち果たす為に鍛え上げられた比翼連理にして無双の剣。
「うんうん。やっぱり、キリトはこうでなくっちゃ。ね、レイン」
「そうだね。こうしてると、やっぱりキリトくんらしいって感じがしてくるよ」
見慣れた『二刀流』装備を調えたキリトを正面から見つめながら、リズとレインは満足げに頷く。
かつての愛剣達が共にリズの手によって生み出された兄弟剣だとするならば、此度の『アイオーン』、そして『銀星号』は、さしずめ〝異母兄弟剣〟という所になるだろう。
その二振りの核となったのは、ドラグーンケイブ大峡谷地帯でＰＫクランに襲撃を受ける直前に二人が手に入れたレア素材アイテム。そのレア素材をベースに、複数の高レベル鉱物を惜しみなくつぎ込

み、リズの鍛造で基礎スペックを大幅に上昇させたあと、レインが得意とする特殊効果付与の技を組み合わせるという超高難易度の『鍛冶スイッチ』を経て生み出された二振りの魔剣。

キリトの懐事情への遠慮など最初からかなぐり捨て、ただひたすらに高みを見据え、より良き刃を鍛え上げんとする志の元に鍛造された剣。どちらも甲乙付けがたく、そしてそう簡単にお目にかかれるような代物では無い。

純粋なステータスはともかく、その質の高さと込められた熱量は、キリトが密かに携える守り刀――《ＡＬＯ》最強の剣・レジェンダリーウェポン『エクスキャリバー』にも引けを取らないだろう。

今なお伝説に名を残す騎士の王が携えた一振りに限りなく近しい名を冠する、金色の剣。かつて故国の安寧を守る戦いに生涯を捧げたかの王の側に、同じ円卓を囲んだ英傑達が居たように。今のキリトの周りにも、共に苦難に立ち向かってくれる大勢の仲間がいる。

決して折れる事なき大剣が放つ、眩き黄金の輝き。その輝きをかけがえのない仲間との絆の象徴とするならば、いまキリトが背負う相極の剣は、キリト自身の象徴といえるのかもしれない。

仮想世界の光も闇も併せ呑み、何かを守るために刃を振るうという矛盾を進む。そうしてどうにか踏み越えてきた道の苛烈さを、そしてこれから進み行く道に待つであろう苦難を、背負った二振りの剣はその重さを以ていつも思い出させる。

「今度は折れる前に持ってきなさいよ、キリト。うちの店で完璧に修理してあげるから」

「メンテだって任せてもらっていいんだからね、キリトくん。まあ、さすがにお店は無いけど……野外メンテキットはいっぱいあるし！」

そして、剣は教える。決して切れる事の無い絆によって、いつも支えられているということを。己が孤独などではないということを。幾度となく砕かれ、その身と魂をへし折られようとも――再び立ち上がることができるのだということを。

「リズ、レイン。二人がくれた剣の凄さ、観客全員に思いっきり見せつけてやるよ」

信頼のにじみ出た笑みを浮かべる二人の鍛冶士を、キリトは両腕でまとめて抱きしめる。

黒い剣を握る右腕で、リズを。

白い刃を操る左腕で、レインを。

武具を鍛える炎のように暖かな温もりごと、己の腕の中へと収める。

「バッチリ勝ってきなさい、キリト」

「負けちゃヤだよ、キリトくん」

欲望に満ちたエゴイスティックな抱擁の中、二人はごく自然な所作で身を寄せ、キリトと唇を重ねる。レインは淑やかに。そして、リズベットは情熱的に。

それは、愛する者の勝利を願う優しい接吻（おまじない）。唇と心に触れるその柔らかさが、キリトの静かな闘志の炎に新たな燃料をくべる。

負けられない理由が、また一つ増えた。その重みが、今はとても心地よい。

「じゃあ――いってくる」

「いってらっしゃい、キリトくん」

「あたし達も後で観客席行くわ。応援してるからね」

最後にもう一度、二人の体を強く抱きしめる。そうして、わずかな名残惜しさを感じつつ抱擁を解いたキリトは、二人に背を向けて控え室を出た。

そのまま出場選手用の通路に足を踏み出し、試合会場へと向かうこととしばし。

途中、出場選手用の通路と観客席へ続く通路が繋がったT字路まで来たところで、キリトはそこに見知ったプレイヤーの姿があることに気づいた。

「……ルクス？」

「ひゃいっ!?」

観客席側へ続く通路の壁に隠れるような位置で蹲っていたルクスが、驚愕の声と共に飛び上がる。

ふんわりとした長い髪が大きく揺れ、普段はおっとりとした印象を

与える大きな目には困惑と驚きの色がありありと浮かんでいた。
「やっぱりルクスか。どうしたんだ、こんな所で」
「きっききききキリトさま??!　どっどどどうしてここに!?　いえキリト様がいるのは当然ですよね!?　ですよね！　私はわたわたえっとえっとごあいさつというか連絡というかええっっっと!?」
「うん、驚かせたのは謝るから、一旦落ち着こうな。ルクス。はい、深呼吸深呼吸」
「深呼吸、深呼吸ですねキリト様……すー、はー……すー、はー……」
衣服越しにもそうとわかる大きな胸を揺らしながら、ルクスはどうにかこうにか落ち着きを取り戻す。
キリトやキリトの友人達同様に《ＳＡＯ》サバイバーであるルクスだが、キリトが彼女と知り合ったのは《ＡＬＯ》をプレイし始めてからだ。一時期のルクスが、キリトの姿を真似たようなアバターで活動していたおかげで人違いされた事がきっかけだったが、リズやシリカ、それにリーファはだいぶ以前からルクスと一緒に《ＡＬＯ》をプレイしていたらしい。
そんなルクスは、まるで今し方、短距離走で全力を出したかのように激しく消耗している。その様子に怪訝な思いを抱きはしたが、それ以上にキリトは彼女がここにいる所以の方が気になった。
「それで……こんなところで一体どうしたんだ、ルクス」
「ええと、その……もうすぐ試合開始時間だから、キリト様に一声かけてきて欲しいと、アスナさんにお願いされまして……。
ウンディーネである自分が行くといらぬ面倒が起きそうだから……と」
「それでわざわざ来てくれたのか……ありがとう、ルクス。手間かけさせちゃったな。
それと、『様』付けはしなくていいんだぞ」
「はっ、はい。キリトさま……じゃ、じゃなくてっ。キリトさん」
無意識にやっていたのだろう。ルクスは慌てた様子で口元に両手を当て、こくこくと首を縦に振る。
リズの紹介で彼女と友人になってから気づいたが、ルクスはどこか

キリトを英雄視、もしくは神聖視している節がある。そう思われること自体は不快というほどでは無いが、己の身の丈に合っていない高すぎる評価だと思っているし、『様』付けの敬称と共にルクスの憧れと信頼で満ちたような視線を浴びるのは流石にこそばゆい。

「アスナに伝えておいてくれ、ルクス。『ルクスが来てくれたおかげで、試合に遅刻せずに済みそうだ』って」

「いえ、そんな……では、伝えておきますね。キリトさん」

「ああ、よろしく頼む。じゃあ、いってくるよ。ルクス」

そう言ってキリトはルクスに背を向け、試合会場へと続く廊下を再び歩き出す。

「――あ、あのっ！　キリトさんっ！」

五歩ほど歩いたところで、不意に背中に投げかけられたルクスの声。その声を当然無視するわけも無く、キリトは脚を止めて振り返った。

「どうした？」

「あの、えっと……キリトさん、その……」

「……ルクス？」

「ごっごめんなさい！　なんでもありません！　ごっごご武運、お祈りしておりますっ!!」

どこか慌てた様子でぺこりと一礼したあと、ルクスは観客席に続く廊下を走り去っていった。

彼女の落ち着きのなさと、妙に歯切れの悪い口ぶりは気になったが――少なくとも、応援されていた事だけは間違いないだろう。

あっという間に見えなくなってしまったその背中に向けて勝利を誓ったあと、キリトは試合会場に向けて再び歩き出した。

『――大変長らくお待たせいたしました！　本日の特別試合！　ウンディーネ・スプリガン両領主が選出した特別選手達による、エキシビジョンマッチ！

実況はあてことバレット・ライガーが引き続きお送りさせていただきます!!』

実況席を占拠したトランジスタグラマーな金髪美少女ケットシーがマイクから響かせる声に合わせて、客席のボルテージが一つ上のステージへとシフトする。増しゆく一方の喧騒の中で、少女――ルクスはようやく、自分が観客席に帰ってきている事に気づいた。

いつ、どこをどう通ったのかもはっきりとしない。よほど慌てて席まで戻ってきたのだろうか、心臓の鼓動はバクバクと激しいビートを重ね、収まる気配を一向に見せようともしなかった。

――いや、ルクスにはわかっていた。この心臓の高鳴りが、決して不意の全力疾走によるものだけが原因ではないことを。

(キリト様が……キリト様が……キス、してた……キスしてた！　リズと……レインさんとも……。

あんなに激しく……ぎゅってしながら……！)

薄く開いた控え室の扉越しに見てしまった、その光景――見間違いや勘違いで片付けるには、三人の口づけはあまりに長く、そしてあまりに情熱的だった。優勝者を称える会場の喧騒が、ルクスの鼓動の音を、走り去る足音をかき消してくれていなければ、今頃気づかれていてもおかしくなかっただろう。

『水妖精(ウンディーネ)側の代表選手に続いて、現れたのは――おお、まさか！　この黒ずくめはまさかっ!!

傷の痛みも患わず、謀られてなお嗤うヤツ！　誰が呼んだか二刀流、影の果てより来た男!!

影妖精(スプリガン)族代表選手・キリトの入場だあああああああああああああああああああっ！』

闘技場の中央に広がる、砂地のバトルフィールド。二振りの長剣を背負った漆黒のスプリガンがそこに姿を表すと、戦場を取り囲むように配置された観客席の至る所から歓声が上がる。

「お兄ちゃーん！　頑張ってー！　負けたら晩ご飯のおかず、あたしがもらっちゃうからねー！」

「こうしてみると……意外とサマになってるわね、キリト。馬子にも

衣装ってやつかしら」
「あはは……それはちょっとかわいそうだよ、シノのん……」
ルクスと同じボックス席に配置された長椅子に腰掛けたリーファ、シノン、そしてアスナが思い思いの感想を述べる。その一段下の長椅子では、トーナメント一回戦で華々しく散ったガーネットを挟み、シリカ、そして遅れてやってきたリズとレインがキリトに向けて声援を送っていた。
観客達が送る（ウンディーネ側の代表選手への応援と比較すると、かなりの割合で怨嗟と嫉妬と揶揄が混じった）声援に軽く片手を上げて歓声に応えながら、キリトはそれとなく周囲を見渡す。
何かを探しているようなその視線が一瞬、ルクスを捉えた——気がした。
（……っ!?）
「あっ、お兄ちゃんがアスナさんの方見た。すっごくいい顔してる」
「あら、ほんとね。……こんなに観客がいても、ちゃんとアスナの居場所は把握してるのね」
「も、も～！　リーファちゃんもシノのんも！　私を見たんじゃなくて、みんなを見たに決まってるでしょ！」
「それはどうですかね～？　ねえ、シノンさん」
「ええ。怪しいものね。たぶんアスナしか目に入ってないわよ、あの人」
二人にからかわれ、アスナは頬を真っ赤に染めて抗議するが暖簾に腕押し。せめてもと、味方を求めて彷徨う水色の瞳が、隣に腰掛けるルクスの瞳を捉えた。
「ルクスさんも、キリトくんと目が合ったよね？　キリトくん、私だけじゃなくて、ルクスさんの事も見てたよね？」
「え、えっと……。はい、私もキリト様と……こほん。キリトさんと目が合った気がしたよ。アスナさん」
崩れかけた普段の口調をどうにか立て直し、ルクスは首を縦に振る。
アスナと見つめ合っていたのは、実際には一秒あるかないか程度の

時間だったのだろう。それでも、清らかな水面のように透き通った水妖精の瞳は美しく、ルクスの全てを見透かされてしまいそうな錯覚を覚えるには十分すぎる時間だった。

――いや、もしかしたら本当に、ルクスの何もかもを見透かされてしまったのかもしれない。視線を逸らす寸前、アスナが浮かべた慈愛とも寛容とも取れぬ曖昧な苦笑の理由を、ルクスは見つけられなかったのだから。

「ほーら、ルクスさんもこういってるじゃない！　キリトくんは、ちゃんと皆を見てたんだからね？」

「むう……まあ、ルクスがそう言うなら……」

自慢げな顔つきでアスナがそう言うと、渋々といった様子でリーファが引き下がり、シノンも軽く肩を竦めて追及を止めた。

眼下に広がるバトルフィールドでは、キリトが背中の鞘より二振りの剣を引き抜き、ウンディーネの代表選手と対峙していた。その凛とした佇まいは、まさにルクスが憧れた解放の英雄。今も心より恋い慕う、最強の剣士。

だが、その人の隣には既に愛する人が居る。共に未来を歩むと誓った相手が居る。故に、この想いが叶うことはなく、苦く切ない痛みと共に抱え込んでいく他に無い――そんな風に、思っていた。

ルクスと同じ想いを抱え、ルクスと同じ苦しみを抱く友人が――ルクスの想い人の腕に抱かれながら、熱い口づけを交わす姿を見るまでは。

（私は、どうしたら……私は……どうしたいの……？）

答えの出ない問いだけが、ルクスの胸の中でぐるぐると渦を巻く。会場を沸かす観客達の熱狂も、友人達の応援の声も、今はどこか遠くに聞こえる。

『両者準備が整ったところで……それでは参りましょう！　時間無制限一本勝負！

エキシビジョンマッチ、レディ――ゴオオオオオオオオオッ!!』

高らかに鳴り響くゴングの音と共に羽を広げた二騎の妖精は、瞬く間にトップスピードへ到達し、空中で激しく切り結びながら火花を散

らす。
その光景も、応援の声を上げる友人達の姿すらも、今のルクスにはどこか遠い世界の出来事に思えて仕方が無かった。
惑いに沈む心と裏腹に、高鳴る心臓の鼓動。何かがはっきりと変わってしまった世界で、居場所を見失ってしまったかのような切なさを感じながら――ルクスは何かにすがりつくかのように、黒の剣士の戦いを見つめ続けた。

ルクスはまだ知らない。
この場に居る女子達の多くが――というか、ルクスとガーネット以外の全員が、既にキリトと深い仲であることを。ストレートに言ってしまえば肉体関係にあることを。それがあまりに爛れきったものであることを。
それらの驚くべき事実と共に、とある個人宅のサーバ内に設置されたプライベートＶＲ空間にルクスが辿り着くのは、これよりもう少し後の事になるのだが――それはまた、別のお話。

07．サブクエの多い料理店　（リーファ・フィリア）

――二人の若い淑女と一人の男が、すっかり《ＳＡ・Ｏ》のアバターで、だいぶ山奥の、植物型Ｍｏｂの残骸らしき木の葉がかさかさ言う辺りを歩いていました。

「……本当にこんな山奥にあるのか、フィリア」

「そのはずなんだけど……おっかしいなあ……。確かこの辺りに作っておいたはず……」

「ん？」

「う、ううん！　なんでもない、なんでもないからねキリト！　さーって、お店はどこにあるのかなー？」

一行の先頭をきって歩むのは、夕日に照らされた砂丘のように淡いオレンジ色をした髪のトレジャーハンター。彼女――フィリアは、わざとらしく首を傾げます。動揺を誤魔化すように辺りを見回す彼女の視線の先では、問いかけの主たる黒衣の男――キリトが、同じように怪訝な顔をしていました。

「大丈夫ですよ、フィリアさん。なんかここら辺、道っぽくなってますし。たぶん、誰かしらがしょっちゅう通ってるんですよ」

キリトの半歩後ろを歩く最後の一人、金色の髪をポニーテール状に束ねた少女――リーファが、そういってフィリアを励ます。

リーファの言うとおり、確かに三人の足下は何者かによって踏み固められたような形跡がありました。それは登山道のようでもありましたが、獣道と言ってしまえば納得してしまうような程度のものでもありましたが。

「ありがと、リーファ。

まあ、万が一お店が見つからなかったら、私が腕によりをかけて美味しいモノを御馳走してあげるから安心してよ。キリト」

「期待しとくよ、フィリア。その時は是非、スグもこきつかってやって

くれ」
「りょーかいっ。サポートよろしくね、リーファ」
「はーいっ」
三人の若者がこんな山道を歩いている理由。それは『絶品料理を提供する隠れ家的料理店』がこの山の奥にあるという噂をリーファとフィリアが聞きつけ、キリトを誘ったからというものでした。
整備されているとは言えない山道は快適ではありませんでしたが、かといって過酷という程でもありません。道中、化け猫型モンスターのドロップ品と思しき謎の毛玉が複数個と、軍人めいた衣服や狩猟用ライフルが地面に転がっているという事はありましたが、それ以外は順調なハイキングが続いていました。
「――あっ。二人とも、みてみて！　たぶんあれだよ、噂のお店！」
上り坂の頂上に辿り着いたフィリアが、とある方向を指さします。少し遅れて追いついた二人が指し示された方向に視線を向ければ、そこには確かに立派な西洋造りの一軒家がありました。
丈夫なオーク材を惜しみなく使った、大きな両開きの扉がついた玄関の脇には――
『西洋料理店　山　狼　軒』
RESTAURANT WILDWOLF HOUSE
――という看板が掲げられていました。
看板はリサイクル品なのでしょうか、よくよく見ると『狼』の部分は元々書いてあったものを塗料で塗りつぶし、その上から新たに文字を書き直したような形跡がありました。
「意外と立派な面構えだな……こんな山奥に、よくもまあ」
感心したようにほうほうと頷きながら、キリトは屋敷を眺めます。その合間に、とことこと駆けだしていたリーファとフィリアは扉の前へと辿り着いていました。
「――ねえねえ、フィリアさん。見てくださいよ。扉のここのところ、何か彫ってあるみたいですよ。
えーっと……『どなた様もどうぞお入りください。決してご遠慮なさらず』だそうです」
「ほんとだ。あっ、こっちにも同じようなのがあるよ、リーファ。

どれどれ……『特にお若い方や、太った方――」

一瞬、むっとした顔で頬を膨らませたフィリアは、すぐさま気を取り直すとコンソールウィンドウを呼び出しました。

そのまま、フィリアは手元のキーボードへ何かを入力しているように見えましたが、キリトは持ち前の優しさで気づかないフリをしました。扉に彫り込まれていた文字列の一部があからさまに修正されたような気もしましたが、ついでにそちらも気づかないフリをしました。

「『特にお若い方や、お似合いのカップル、仲の良いご兄妹は大歓迎いたします』だって。私達にぴったりだと思わない？　キリト」

「そ、そうですね……はい……」

引きつった笑みを浮かべている事を自覚しつつ、キリトは頷きました。このタイミングでふざけて首を横に振ろうものなら、どうなるかわかったものではありません。さすがのキリトにもそれくらいはわかりました。

そんなこんなでキリトが入り口へと近づくと、扉はぎいと音を立てながらひとりでに開いていきます。屋敷の内装はシンプルながらも高いレベルで整えられており、床の上には赤いビロードの絨毯が敷かれていました。

部屋の奥の壁には、次の部屋に続いていると思しき扉が一枚。また、入り口から少し奥まったところには、注意書きを記したボードが一枚、堂々と置かれていました。

兄妹に先行して中へ進んでいたフィリアが、ボードに書かれている内容を読み上げます。

「『当店はサブクエストの多い料理店となっております。どうかご容赦ください』……だって、キリト」

「へえ、注文の多――ん？　え？　サブクエスト？　注文じゃなくて？」

「あ、ほら。早速出てきたみたいだよ。」

当惑するキリトの視界左上に、ぴこんという軽いサウンドエフェクトと共に、サブクエストの内容を表示する小型ウィンドウが表示され

ました。ＶＲＭＭＯでは比較的ポピュラーなＵＩ仕様に従ったウィンドウ内には『この先、土足厳禁エリア。靴を装備解除せよ』と書かれていました。

おそらくはこれが、クリアすべきサブクエストなのでしょう。

「なるほど、そういう仕様にしたのか……」

「なにか言った？　お兄ちゃん？」

「い、いや。なんでもないよ、スグ」

妹の笑顔の裏から『圧』を感じた事に気づかないフリをしながら、キリトは靴装備を解除しました。

三人が靴装備を解除すると同時に小型ウィンドウが消え、部屋の奥にあった扉がひとりでに開きました。どうやらサブクエストをクリアすることで、扉のロックが解除される仕組みのようでした。

開いた扉の向こうにも、また部屋が。現在いる部屋と同じテーマで統一された内装と、赤いビロードの絨毯が広がっています。そして、その部屋の奥にもまた、閉ざされたままの扉がありました。

キリト達３人が揃って次の部屋へと進むと、今し方通り過ぎたばかりの扉がばたんと音を立てて閉まりました。どうやら、客を途中で帰らせるつもりはさらさらないようでした。

「なんというひどい店なんだ……」

「キーリートー？　今、なにか言った？」

「いや、なにも」

己へ向けられたフィリアの笑顔の裏に若干の『圧』を感じていると、新たに開いた小型ウィンドウが次なるサブクエストを表示します。その内容は、『女性達から全ての武器を預かれ』という、一風変わったものでした。

リーファとフィリアの方にも似たような指示が出ていたのでしょう。少しの間ウィンドウを見つめていた二人は、ストレージに入れていた武器をそそくさと差し出しました。

「はい、お兄ちゃん。ちゃんと預けたからね」

「悪いけど荷物持ちお願いね、キリト」

「ああ、任せとけ。しかし、武器を預かるだなんて……変わったサブク

エだな」
「そうかな？　ご飯を食べるときに武器を使う必要は無いって考えたら普通じゃないかな。キリト」
「そう言われてみれば……そうかもな」
　リーファとフィリアの武器をキリトがストレージに格納すると、奥へと続く扉が開きました。相変わらず内装は一緒で、キリト達が脚を踏み入れると元来た扉が閉じてしまうのも、新しいサブクエストが表示されるのも全く同じでした。
　そんな中、キリトのウィンドウに表示されたのは『女性達の指示に従え』というものでした。
「へえ、こういうのもあるんだな……。
　どうやら、俺が二人の言うことを聞けばクリアみたいだ。フィリア、そっちは何が出てる？」
「えっとね……私の方は『無事にお店へ案内できたご褒美に、男の人に頭を撫でてもらおう』って書いてあるよ。キリト。
　たぶん、リーファも一緒だよね？」
「はい。あたしもフィリアさんと一緒です。というわけで、お兄ちゃん。なでなでよろしくっ」
　なんとも嬉しそうに笑いながら、リーファとフィリアは距離を詰めてきます。キリトが撫でやすいよう、少しだけ頭を下げながら。
　ちゃっかりとしている二人に苦笑しつつ、キリトは左右の手を使い、フィリアとリーファの頭を優しく撫でてやりました。
「クエストなんだから仕方ないですよね―♪　フィリアさーん♪」
「うんうん。仕方なーい、仕方なーい♪　ほら、キリト。もっと心を込めながら撫でーてー♪」
「へいへい。二人とも、よくできました。えらいえらい」
　次の部屋へ続く扉が開くまでの間、キリトは二人の頭をなで続け、リーファとフィリアはまるで小動物のように手の感触を堪能していました。
　サブクエストのクリア条件はすぐに満たしたはずなのに、扉がなかなか開かなかったように思えましたが、おそらくはキリトの気のせい

でしょう。リーファが「もうちょっとくらい撫でてもらってもいいよね……」と小声で呟きながら、手元のコンソールで何かを操作していたように見えたのはきっと無関係でしょう。

「さて、次のサブクエは……っと」

ようやく開いた扉を抜けて、三人は次の部屋へと足を踏み入れました。この部屋の内装も何もかも、先ほどまでいた部屋とほとんど同じでした。

「キリト。今度は私とリーファが、キリトの言うことをきく番みたい」

「お兄ちゃんの方にはなんて出てる？　『あたし達になでなでしてもらえー』とかだったりして」

「俺の方は……え？」

視界の左上に表示されたもの――『女性達の装備を全て没収し、二人が裸になった事を確認せよ』という文言に、キリトは己の目を疑いました。

明らかに今までのサブクエストとは毛色が違います。

「お兄ちゃん、どうかした？　早く聞かせてよ、クエストの内容」

「私達、キリトの言うことだったらなんでもきくよ？　次の部屋にも進みたいし」

そう言って、リーファとフィリアはにまにまと笑います。どういった偶然かはわかりませんが、二人とも己のストレージウィンドウを開き、所持アイテム画面をキリトに見せていました。おかげで、二人は今装備している衣服以外には何も所持していないことが、キリトにもはっきりとわかってしまいました。

「《クエストなんだから仕方ない》……だったよな。スグ」

「そうだけど？」

特にためらうでもなく、リーファはこくりと首を縦に振りました。

それを合図に、キリトは管理者権限を発動して二人の装備情報に割り込みをかけると、全てのアイテムを己のストレージへ強制格納してしまいました。

装備が解除されるＳＥが鳴り、リーファとフィリアの全身が淡い光に包まれていたのもほんの一刹那の間でした。

「「――きゃあああああっっっ♥♥」」
瞬く間に素っ裸にされてしまった二人は、絹を裂くような悲鳴を上げました。若干嬉しそうに聞こえたのは気のせいでしょう。
全く予期せぬ状況での強制ストリップに対し、リーファとフィリアは両腕で体を隠しながら咄嗟にしゃがみ込みました。とはいえ、グラビアモデル顔負けのスタイルの良さを誇る二人の体が、その程度で隠しきれるはずもありません。
大きくたわわに実ったリーファの爆乳は、北半球部分が丸見えの手ブラ状態になっていましたし、雄を魅惑するフィリアのボリューム豊かなヒップラインは、横からモロ見えになっているも同然でした。
「なっ、何するのキリト！　わ、わたしたち、なんで裸に……キリトに見せるのはイヤじゃないけど……♥」
「お兄ちゃんのえっち！　変態！　好きっ♥　スケベぇっ！　セクハラ魔ぁっ!!」
顔を真っ赤にした二人は、必死にキリトへ抗弁します。目の端に涙を浮かべたまま、少しでも肌を晒すまいと努めるその姿がたまらなくソソります。
守るモノを全て没収されて生まれたままの姿となった二人を見下ろしながら、キリトはふと、ある事に気づきました。サブクエストのクリア条件は満たしたはずなのに、扉が開かないのです。
誰かがコンソールを操作している気配はありません。となると、考えられる要因は一つ。サブクエストをクリアしたつもりで、実際にはクリアできていない――その可能性に思い至ったキリトは改めてサブクエストの内容に目を通し、原因を突き止めました。
「なるほど、そういう事か……。フィリア、悪いけどちょっと立ち上がってくれるか？」
「えっ!?　な、なんで!?」
「どうやら、二人が裸になったことを俺がしっかりと確認しないとクリアできないみたいなんだ。ほら、スグも」
「そんなー……」
渋々といった様子で、二人は立ち上がります。体の正面をキリトに

向けたまま、片方の腕で胸を隠し、もう片方の腕で股を隠すという儚い抵抗を続けていました。それはまるで名画『ビーナスの誕生』を思わせるポーズ。二人の美しさもさることながら、肉感的でありながらメリハリの利いたボディが強調され、たまらないエロスを醸し出していました。

しかし、そう隠されていては扉が開くための条件を満たしません。サブクエストをクリアするため、キリトは心を鬼にしました。

「二人とも。両手を頭の後ろで組んで、そのまま脚も広げてくれ。クエストをクリアするためには必要なことなんだ」

「く、クエストをクリアするためなら……仕方ないよね、リーファ」

「そう、ですよね……クリアするためですもん……」

緩ませた頬を真っ赤に染めながら、二人はほんのひととき視線を交わして頷きあいました。躊躇うような一瞬の間の後、二人はキリトの指示通り、体を隠していた腕をどけて両脚を開きました。

「こ、これでいいんだよね……お兄ちゃん」

恥ずかしい姿を晒しながら、リーファがおずおずと問いかけます。無意識に力が入っていたのでしょうか。腕がどけられた途端、リーファの爆乳はぶるんっと大きく揺れながら露わになりました。しかも、普段から剣道で鍛えられているおかげで体に無駄な肉が付いていない分、張り出したバストは余計に大きく感じられます。

膝を曲げた状態で広げられた脚の間には、ＶＲ空間の特性上、無駄な毛の一本も存在しているはずもありません。そのアンバランスさが、より一層リーファの魅力を増していました。

「もっ、もしこれでクリアできなかったら……怒っちゃうからね、キリト」

必死の強がりとともに、フィリアは両腕を組みました。

隣に規格外がいるせいでそれほど目立ちませんが、フィリアのバストサイズ、そしてスタイルも相当なものです。形の良い胸、くびれた腰、むっちりとした太もも、たっぷりとボリュームのある安産型の尻。

雄を誘惑する事に長けた全身を惜しみなく晒すフィリアは、キリトの視線が向けられる度にとろりとした蠱惑的な笑みを浮かべていま

した。
「ふむ、ふむふむ……確かに、二人ともちゃんと装備全解除できてるみたいだな。
　――そうだ。念のため、証拠のスクショも撮っておくか」
「へっ!?　と、撮るの、キリト!?」
「ああ。あとから『確認不足です』なんて判定されて、クリアできなくなったらフィリアも困るだろ？」
　そう言って、キリトはスクリーンショットを起動します。撮影範囲として設定されたキリトの視界の中では、リーファとフィリアがあられもない姿を晒しています。
「それじゃあ、撮るぞ―。スグもフィリアも、笑って笑って」
「う、うう……ひどいよ、キリト……♥」
「お兄ちゃんのいじわる……♥」
　もとよりわりと笑顔だった二人の姿を見つめながら、キリトはスクリーンショットを撮影します。画像データが記録される度、ぴろん、ぴろんという間の抜けたＳＥが鳴り響き、リーファとフィリアに『己の裸が撮影されてしまった』ことを自覚させます。
「よし、それじゃあ次は……二人とも、後ろを向いて尻をこっちに突き出してくれ。脚の間がよく見えるようにな」
　もはや文句を言っても無駄だと理解したのでしょう。リーファとフィリアは素直に頷くと、中腰のままカメラに背を向け、ぷりんとしたヒップを突き出しました。それだけでも十分にエロティックだというのに、更に二人は自らの両手で尻を掴むと、そのまま左右に割り開くように力を込めました。
「ほ、ほらキリト！　これでよく見えるでしょ、私達の、お、おまんことお尻の穴！」
「クエストのためなんだから……あたしのおまんこもちゃんと見て、記録しちゃっていいからね、お兄ちゃん！」
　興奮半分、やけっぱち半分といった調子で若干うわずった二人の声が響く中、キリトはスクリーンショットを続け、二人の痴態を画像に記録していきます。

尻肉が左右に引っ張られていることで、連動して横に拡がった尻穴は皺の数すら容易に数えられてしまうほど。その下で妖しくひくつきながら晒される蜜壺。ぷっくりと盛り上がった二人の雌穴からは、興奮を示す愛蜜が今にも滴となってこぼれ落ちようとしています。さすがに顔こそ見えませんが、特徴的な金色のポニーテールと淡いオレンジ色の外跳ね髪を見れば、それが誰の裸なのかは簡単にわかってしまうでしょう。

そんなスクリーンショットを１０枚も撮影した頃でしょうか。ようやくクリア条件を満たしたと判定されたのか、次の部屋へと続く扉が開きました。

「よし、もう大丈夫だぞ。お疲れ様、スグ、フィリア」

ようやく許しを得た二人の乙女が、ゆるゆるとした動作で振り返ります。その顔は、熟れた苺の様に真っ赤な色をしていました。

「うう……あたしの恥ずかしいところ、全部撮られちゃった……。こんなの他の人に見られたら、あたし達生きていけない……♥」

「きっと私達、この写真をネタに脅されて……キリトの好きなように使われちゃうんだ……♥」

どうやら、次はそういうプレイを所望されているようでした。個人ストレージの片隅にこっそりと隠してある『女性陣からの要望リスト』に二人の要望を書き加え終えたキリトの両腕に、リーファとフィリアがぎゅっと抱きつきました。

柔らかさと適度な弾力が見事に同居する二人のバストがキリトの腕に押し当てられ、若い女性特有の心地よい香りが嗅覚を刺激します。日頃の鍛錬（主にベッドの上で行われるものを示す）によって鍛えられていなければ、今頃キリトの理性は吹っ飛んでいたでしょう。

「つ、次の部屋にいこうか、スグ。フィリア」

「うん、はやくイこ……お兄ちゃん♥」

「次の部屋では、いったいどんなことさせられちゃうんだろ……♥」

しなだれかかる裸身の美女を片腕に一人ずつ絡めたまま、キリトは次の部屋へ足を踏み入れます。

部屋の中央には、シャワースタンドを脇に従えた大きなビニール

プールが一台、堂々と設置されていました。プールは透明な素材で作られており、中身は空っぽのようでした。

プールの横にある背の高い丸テーブルの上には、蓋のついた小さな壺と四角い菓子箱が一つずつ置かれていました。

「俺のサブクエ、『二人のクエストが終わるまで待て』って書いてあるな。そっちはどうだ、スグ」

「えっとね……あたし達の方は、『壺の中のバスソルトを、体中によくもみこみましょう』って書いてあるよ、お兄ちゃん」

「バスソルト……？　ソルトって……いきなり塩かよ！」

キリトの叫びをよそに、リーファとフィリアは透明なプールの縁をまたいで内部へと入り込みました。プールは大きく、二人が入ってもまだ十分な余裕がありました。

ローズピンク色をしたバスソルトを壺の中から取り出した二人は、シャワーから得た少量のお湯で練ってペースト状にします。バスソルトに含まれていた成分が溶け出したのか、辺りによい香りがふわりと漂う中、プールの底へ座り込んだ二人は己の体にペーストを塗り込み始めました。

「ん～～っ♪　バスソルトって、このつぶつぶ感がたまらないんだよね……♥」

「確かに……これが気持ちいいんですよね……♥　うちだとなかなかできなくて……」

手持ち無沙汰になったキリトがストレージからイスを取り出し、丸テーブルの横に置いて腰掛けている間にも、二人の手は止まることはありませんでした。うなじから足先までの至る所に、丁寧に、丁寧に、薄ピンク色になったバスソルトペーストを塗り込んでいきます。

ビニールプールにさほど高さが無いことに加え、壁が透明になっているおかげで、二人が裸身を彩る様はキリトからもはっきりと見えていました。そんな兄を挑発するように、艶めかしく体をくねらせながらペーストを塗り込むリーファの背後に、フィリアがそっと忍び寄ります。

「――リーファ、隙ありっ！」

「ひゃあっ!?」
　獲物に飛びかかる女豹のようにしなやかな身のこなしで襲いかかったフィリアは、そのまま後ろから腕を回し、リーファの爆乳をむんずと掴みました。もちろん、掌の上にはペーストをたっぷりと載せたままです。
「うわっ、リーファのおっぱい、重っ……」
「ちょ、ちょっとフィリアさ――ぁん、んんっ♥」
「ふふふっ。リーファのおっぱい、すっごく気持ちいいよ。ずーっと揉んでられそう♥」
　リーファの乳房を揉み拉きながら、フィリアはペーストを塗りたくっていきます。その手つきがどこか淫靡なせいか、リーファの口から甘い声が漏れ出し始めました。しかも、反射的に抵抗しようとしたのか、リーファの両脚は開かれたままになっています。そんな光景を至近距離で見せられるキリトは、正に生殺し状態という他にありません。
「あっ、やぁ……んっ♥　フィリアさんの手つき、やらしいですよぉ……♥　はあ、んんっ……」
「そんなことないよー、リーファが敏感すぎるだけだもーん」
「そんなあ……ん、んんぅっ♥やっ、ああっ♥」
「ほんっと可愛いなあ、リーファは。ところで……ねえ、キリト。そっちの箱って何が入ってるの？」
「ん？　こ、これか。フィリア」
　妹の『お兄ちゃんのエッチ』という意思が込められた視線をわざと無視し、キリトはフィリアに言われるがまま、丸テーブルの上にあった箱の蓋を開けました。
　箱の中から出てきたのは、四角く切り揃えられた一口サイズの生チョコレート・計16個。蓋の裏側には手書きの文字で『チョコレート（女の子にのみ効く媚薬入り）』「口移しで食べさせてあげないと女の子に嫌われちゃうよ！』というメッセージが添えられていました。非常に見覚えのある、二人分の筆跡で。
「ほ、ほう……なるほど、こう来たか……。これは確か原作には無かっ

たよな……」
「ねえ、キリト。中身なんだった？　早く教えてよー」
　上げられた箱の蓋が邪魔となって、二人には箱の中身が見えていないようでした。つまりは、箱の裏側に書かれている物も見えていません。この箱に入っている物が媚薬入りのチョコレートであることを知る者は、キリトと、あのメッセージを書き残した二人の他にはいません。
「ああ、フィリア。どうやらチョコレートみたいだ。食べさせてやるから、二人ともこっちにこいよ」
「いいの？　それじゃあ、遠慮無く。ほら、リーファも一緒に行こうね」
「はいっ、フィリアさん」
　体中にバスソルトペーストを塗りたくったまま、フィリアとリーファはビニールプールの縁までやってきます。
「それじゃあ、まずはリーファからな」
「あたしから？　やったぁ！　お兄ちゃん大好き♥」
　期待に目を輝かせるリーファと見つめ合いながら、キリトは箱の中から生チョコを一つつまみ上げると、そのまま己の口の中へと放り込みます。その行動に対し、リーファ、そしてフィリアも特に驚くこともなく、餌を求めるひな鳥のようにビニールプールの縁に手をかけて身を乗り出しました。
　生チョコの表面を口内で蕩かせば、甘みと香りが口いっぱいに拡がります。その状態でキリトは身を屈め、リーファの唇と己の唇を重ねました。
「んぅっ……おにぃ、ひゃぁむ……♥」
　半分溶けた生チョコごと、キリトは舌を差し込みます。その侵入を快く受け入れるリーファの舌は、甘いチョコレートよりもむしろキリトの舌を歓迎しているかのようでした。
　柔らかい生チョコを互いの舌の上で溶かし、押しつぶしながらディープキスは続きます。チョコ色に染まった唾液が、キリトの口からリーファの口へと流れ込み、義妹の喉を滑り落ちていきます。鼻腔

に抜ける甘い香りのせいか、あるいはチョコに含まれている媚薬のせいか、リーファは己の意識がうっとりとした靄に包まれていくのを感じました。

唇同士がようやく離れたのは、チョコが溶けて無くなってからだいぶ経ったあとの事でした。

「ぇふ、んぅっ……お兄ちゃんのキス、甘ぁい……♥　もう一個ちょうだい、お兄ちゃん♥」

「えーっ、リーファばっかりずるい！　キリト、キリト！　私にもチョコ食べさせて！」

「わかったわかった。順番、順番にな」

チョコを一粒ずつつまみながら、キリトは二人と交互にキスを交わします。とろりとろりと崩れていく生チョコを互いの口の中へ行き来させながら、ねっとりと舌を絡めて濃密に愛し合います。

チョコの個数が減っていくのと反比例するかのように、一度のキスにかかる時間は増えていきました。キスをしている方には喜ばしい事ですが、当然、待たされている方にとってはたまったものではありません。

自分の番が回ってくるまでの慰めと、早く次のチョコをもらいたいというアピールを兼ねて、二人がキリトの指をぺろぺろとなめ回し始めたのは必然だったのかもしれません。

「あふ♥　んちゅっ♥　んっ、んぅっ……♥♥」

「やぁん、ひぁ……ん、んんっ♥♥」

触れあう唇と唇の隙間から吐息が溢れ、吸い付かれる指先から唾液の水音が響きます。キスをしている間は夢中で舌を絡め合い、指を舐めている間は舌技のテクニックを必死にアピールしてくる二人が健気でたまりません。

結局、16個のチョコレートが8個ずつ、リーファとフィリアに食べられてしまうまで、口戯の宴は途切れることなく続きました。

「――ぷは、ぁぅ……えへへ。ごちそうさまでした、キリト♥」

「おそまつさまでした、フィリア」

最後の一個を流し込まれたフィリアは、すっかり上気した顔で微笑

みます。高級娼婦めいたその媚笑に引かれ、今すぐ飛びかかってしまいたくなる衝動をどうにか抑え込みながら、キリトはシャワーの蛇口をひねり、二人の体についたペーストをすっかり流してやりました。柔らかなタオルで体を拭けば、得も言われぬ薄香を纏った美少女二人のできあがりです。その内側は、甘くしっとりとしたチョコと恋心で満たされているのですからなおのことたまりません。

バスソルトのスクラブで洗い流された肌は実にすべすべで、いつまでも触っていたくなる心地よさでしたが、次の部屋へ続く扉が開いてしまってはそうもいきません。隙あらばキリトの頬や耳たぶ、首筋に唇を触れさせて、左右から誘惑してくる美少女達に両腕を絡め取られたまま、キリトは次の部屋へと足を踏み入れました。

「……ん？　何も……でてこないな」

不具合か何かでしょうか。キリトの視界左上に表示されたサブクエストのウィンドウには何も書かれていません。訝るキリトを含めた三人が絨毯を踏みしめながら部屋の中央に歩みを進めると、そこには背の高いテーブルがありました。

テーブルの上には香水と思しき小瓶が二つ、ちょこんと置かれています。その小瓶を、リーファとフィリアはそれぞれ手に取りました。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。あたしとフィリアさんがこの香水をかけたら、ここはクリアできるみたいだよ」

「なんだ、簡単じゃないか。それじゃあ早速頼む――」

「でもね……ちょっとだけ問題があってね」

香水瓶を顔の横に持ってきたまま、素っ裸のリーファは意味ありげに微笑みます。妙にもったい付ける彼女の言葉を引き継いだのは、隣に並んだフィリアでした。

「キリト、この香水ね。いろんな生き物のメスが発情したときに出すフェロモンを合成したものなんだって」

「フェロ……モン？」

「そうだよ。メスの生き物が『私はオス様のペニスで受精させてほしがってまーす♥』、『精子をどぴゅどぴゅ～ってぶちまけて欲しいでーす♥』ってアピールする時に出す成分から作った……人間の女の子用

の、発情フェロモン♥」

妖艶な笑みを浮かべた二人は、片手に香水瓶を握ったままキリトに身をすり寄せます。空いた片手で、衣服装備越しにキリトの股間をすりすりとなで回し、耳元に寄せた唇で誘惑の睦言を囁くのです。

「わかる、キリト？　こんな香水……もし一滴でもつけちゃったら、私達『犯してくださる立派なおちんぽ様大募集中でーす♥』って言いながら歩いてるのとおんなじになっちゃうんだよ……♥」

「無理矢理レイプされても文句も言えない……ううん、むしろ、男の人を誘惑したあたし達が悪いんだって言われちゃう♥　『おっきいおっぱいで誘惑してごめんなさい』って言わされながら、謝罪生セックスさせられちゃう♥」

「きゃー、たいへーん♥　じゃあ、せめて優しく犯してもらえるように、いっぱいご奉仕してご機嫌とらなくっちゃ♥　『私はおちんぽ様に逆らえないよわよわおまんこでーす♥』ってアピールしちゃうんだから♥」

「じゃああたしは、男の人がお持ち帰りしたくなるように『太くてかた～いおちんぽ様に種付けしていただけて幸せで～す♥』って媚びっ媚びに感謝しちゃおーっと♥♥」

チョコレートよりも甘く濃密な言の葉を耳から流し込まれ、キリトは思わずごくりと喉を鳴らしました。理性の壁にヒビが入り、挑発的なメス達を組み敷く妄想で思考はいっぱいになっていきます。

そんなキリトの様子を左右から眺めつつ、リーファとフィリアはくすくすと笑います。そうして小瓶の蓋を開け、中の液体をデコルテラインに向けて振りかけた、まさにその瞬間でした。

小瓶の口部分が脆くなっていたのでしょうか。本来は一振りにつき一滴しか出ないはずの中身が、一気に溢れ出してしまいました。あっという間に小瓶は空になり、リーファとフィリアはその全てを全身にひっかぶってしまったのです。

「ひゃあっ……香水、うっかり全部使っちゃった♥　どうしよう、フィリア？」

「どうしましょう、フィリアさん。これじゃあ、いつ誰に犯されてもお

かしくないですよね……♥」

　不思議なことに、香水をまるごと一瓶使ったというのに、これといって強い香りは感じられません。ただし、二人の雌から漂う甘く情熱的な劣情の香気を除けば――ですが。

　こうまで露骨に誘われてなおキリトの理性が保っているのは、単に『交わりを為すにはここは些か不便だ』という優しさと冷徹さが入り交じった計算の結果でした。逆に言えば、この部屋にベッドやクッション、あるいはそれらに類する何かがあれば、キリトは一匹の獣と化していたのでしょう。そうこうしている間に次の部屋へと続く扉が開きました。

「こいつは……一気に変わったな」

　今までの絨毯敷きとは違い、磨き上げられた大理石の床が広がる目の前の光景を眺めながら、キリトは誰にともなく呟きました。

　部屋の中央には、大人数人が寝転べそうな大型のエアーマットが一枚、しっかりと空気を入れて膨らまされた状態で置かれています。そのすぐ近くには、クリスタルガラス製の大きな壺が一つ。壺の中に乳白色をしたクリームがたっぷりと入っていることはすぐにわかりました。決してメタ読みをしたわけではありません。ガラスの透明度が非常に高かったおかげです。

　部屋の奥の壁には、今までの倍はあろうかという大きな両開きの扉がありました。明らかに終着点へと続いているのであろう扉には、銀色の大きな鍵穴が二つと、交差した黒い剣と白い剣の形に切り出された扉飾りが付けられていました。

「ねえ、フィリアさん……このサブクエスト、なんだかおかしくないですか？」

「リーファもそう思う？　実は、私もそう思ってたんだ。

『大変よく出来ました。ミルククリームをたっぷり体に付けて、こわーいオオカミさんにおいしくいただかれちゃいましょう』って……」

　そう言いつつ、二人はエアーマットの上に腰掛けました。細められた目から届くねっとりとした視線が、キリトの体をなめ回すように見

つめています。期待に満ちたその視線のせいで、二人のどこか怯えたような仕草がただの演技であることは簡単にわかってしまいました。

「オオカミさんなんて、どこにもいないよね……？　ね、キリト？」

「来る途中にも見かけなかったし……ね？　お兄ちゃん？」

「――いや、居るぞ。オオカミなら、二人のすぐ近くに」

二人が咄嗟に逃げられないよう、キリトはエアーマットのすぐ側まで近づきました。すると、リーファとフィリアはキリトの両脚に抱きつくようにしながら体を寄せてきました。

劣情に満ち満ちたメスの瞳が見上げ、欲情に満ち満ちたオスの瞳が見下ろし――三人の視線が、わずかの間だけ交錯しました。何かを期待するように二人がキリトの股座へと頬をすり寄せる中、キリトは装備ウィンドウを開き、自身の装備を全て解除しました。

「あぅっ――♥」

「ひゃっ――♥」

窮屈な装備から解放された肉棒が、ぶるんと勢いよくそそり立ちます。その勢いで頬を打擲（ビンタ）されたリーファとフィリアは、思わず甘い悲鳴を上げてしまいました。

そんな二人の後頭部に手を回し、キリトは腕に力を込めて二人の顔を逸物へと押し当てました。柔らかな頬の感触と、ふうふうと熱い吐息が竿を左右から包みこみます。

「二人とも、よくサブクエストをクリアできたな。ご褒美に……これから二人のことをたっぷり抱いてやるよ」

「たべ……あっ、そっかぁ♥　なーんだ。オオカミさんって、お兄ちゃんのことだったんだ……♥」

「今までのサブクエストも全部、キリトに気持ちよく犯（たべら）されるためのものだったんだね……♥　頑張ってクリアして良かった……♥」

すっかりメスの顔になったリーファとフィリアは、子宮から脊髄を駆け上る興奮にゾクゾクと体を震わせながら、屹立した肉棒越しに視線を合わせて笑みを交わします。

二人が期待――いえ、理解した通り、ここは訪れた客に料理を提供する店などではありません。なんということでしょう。ここは、訪れ

た女の子達をキリトの番い（エサ）として提供する店だったのです。
　そんな店だとはつゆ知らず、うっかりと足を踏み入れた上にあらゆるサブクエストをこなし続けてしまった二人の命運は、最早覆しようのない程に定まってしまいました。もとより助けに来てくれる猟犬はいませんし、猟犬如きが来たところで敵うような相手ではないのですから。
「お兄ちゃんのちんぽ、バッキバキ……♥　見てるだけで、早くハメられたい、お兄ちゃんちんぽにばこばこって犯されたいって体がうずいちゃうよぉ♥♥」
「この金玉もずしってしてて、ぱんぱんに張ってる……♥　中に溜まってるザーメン、私達で早く出してあげなきゃ精子さん達が窒息しちゃうよ……♥」
　逸物の左右から頬を押し当てている二人の脚の間から、くちゅくちゅという水音が聞こえてきます。どうやらリーファもフィリアも我慢ができず、股間に手を伸ばしてオナニーを始めてしまったようでした。目の前にある立派な逸物と、その逸物に犯されよがる未来の自分の姿をオカズに、です。
　許可無く肉棒にむしゃぶりつかない程度の自制心はありつつも勝手に自慰を始めてしまうあたり、躾がなっているんだかいないんだかわかりません。可愛い雌犬っぷりに苦笑しつつ、キリトは二人の後頭部をぽんぽんと叩きました。
「こらこら。スグもフィリアも、まだやることが残ってるだろう？」
「あっ……そうだった。急いで準備してくるからちょっとだけ待っててね―、お兄ちゃん」
　渋々といった様子で自慰に耽る手を止め、これまた渋々といった様子でキリトの体から離れて立ち上がった二人は、そのままガラス壺の中身を両手で掬い取りました。
　よく泡立てられたホイップクリーム同様、しっかりと角の立ったクリームをたっぷりと手に取った二人は、自分の体にクリームをまとわせていきます。
　妖精牧場で絞られたミルクを贅沢にブレンドして作られたこのク

リームは、塗ってよし、舐めてよし、ローション代わりにしてよしという万能品です。味に至っては某ウンディーネ様の完全監修済みであり、スコーンか何かに添えて出せばそれだけでデザートが一品できてしまうレベルでした。

「それじゃあ……お兄ちゃん♥」

「失礼しまーす♥」

首から下のほぼ全てにクリームをまとったまま、二人はキリトに抱きつきました。正面側からリーファが、背中側からフィリアが身を寄せ、キリトを前後から挟み込みます。

ミルククリームのなめらかな感触と共に、ボリューム豊かな二人のバストがむにむにと押し当てられるのですからたまりません。

「キリトの背中、おっきいね……。みんなを守ってくれる、強くて優しい背中……私、大好き……♥」

後ろから抱きついたフィリアは、キリトの首筋や頬にキスの雨を降らせます。肌を通して伝わる彼女の熱と、塗り込まれるクリームにも負けないぷるんとした唇の感触がキリトの劣情を昂ぶらせていきます、

一方、正面から抱きついたリーファは、キリトとフレンチキスを幾度か交わした後、その足下にゆっくりと跪きました。

「えへへ……お兄ちゃん♥」

反り返った肉棒の先端と顔前数センチの距離で向かいあいながら、リーファは両脚を大きく開き、いわゆる蹲踞の体勢で器用にバランスを取ります。日頃から剣道で鍛えているおかげか、その姿勢にはブレも乱れも見受けられません。

普段は真剣な面持ちで相手と向かい合う、日本でもトップクラスの実力を誇る美少女剣士。そんな彼女が、餓えた犬のように舌を突き出しながら口を開け、亀頭からこぼれ落ちる先走りの汁を受け止めている光景の淫靡さときたら。

「お兄ちゃんがこんなにおっきくしちゃったちんぽ、あたしのお口の中でいっぱい気持ちよくしたげるね♥」

そう言って、リーファは壺の中に手を入れてミルククリームをたっ

ぷりとすくい上げると、そのクリームを口の中へと入れました。そうして二度、三度と軽く口を動かして口内全体にクリームを行き渡らせると、大きな口を開けて肉棒へむしゃぶりつきました。

「――おおっ……！　これは、新感覚……！」

ねろねろと動くリーファの舌が、もっちりとしたクリームでキリトの肉棒を包み込みます。両手をキリトの腰に回して抱きついたリーファは。上半身ごと顔を前後に動かし、舌と唇で肉棒の先端から根元までをたっぷりと愛撫します。顔が前後に行き来する度、リーファの大きな胸は、ぶるんぶるんと揺れながらキリトの脚へとぶつかりました。

「ふふっ、キリト♥　リーファの顔、すっごくステキだと思わない？　あんなに必死になって吸い付きながら、『お兄ちゃんのかっこいいおちんぽに、お口まんこでご奉仕できて幸せで～すっ♥』って体中で伝えちゃってる……♥」

背中側を占拠するフィリアが、キリトの耳元で囁きながらリーファを援護します。

一方のリーファは合成音声システムをあえて使用せず、キリトの肉槍への口腔性奉仕にひたすら集中していました。真剣な瞳で肉棒を舐めしゃぶる妹の口元から響くのは、唾液とミックスされたクリームが奏でる粘ついた摩擦音と、時折漏れる興奮した吐息の音だけでした。

「体中から発情フェロモン垂れ流して、ぐぽっ、ぐぽって下品な音立ててておちんぽおしゃぶりしながら、大好きなお兄ちゃんのオスチンポに完全服従アピール♥

もうとっくに『お兄ちゃんの精液コキ捨てるついでにいいから、妹まんこに赤ちゃん孕ませてください♥』っておねだりしたくてたまらなくなってるのに……ふふっ、ちんぽキスが気持ちよすぎてやめられなくなっちゃってる♥

まるで……キリトのちんぽとディープキスさせてもらってるときの私みたい……♥」

フィリアの言葉を肯定するかのように、リーファはより一層激しく

顔を前後させます。その動きに合わせて、フィリアもキリトの耳たぶを甘く噛みつつ、背中に体を擦り付けながらリーファの動きを援護します。

すぐにでも射精を促さんとする二人の唇奉仕を受けながら、キリトは片手を伸ばします。そうして、眼下で揺れるリーファのポニーテールをむんずと掴んで動きを止めると、妹の口から肉槍を引き抜きました。

「んぶっ――!?　はっ、はあっ……お、お兄ちゃん？　なっ、えっ……イヤ、だった？　あたし、またなんかやっちゃった？」

「違う違う。そんな慌てた顔しなくても大丈夫だって、スグ」

「じゃ、じゃあなんで……」

「このままスグの口で気持ちよくなるのもいいんだけどさ……まだ、使ってないところがあるだろ？」

付着した唾液とクリームで、白と透明のまだら模様になった逸物が、リーファの眼前に突きつけられます。予期せぬタイミングでくらった『おあずけ』を少しでも早く解除してもらうため、リーファは必死で思考を巡らせ、そしてすぐさま答えに辿り着きました。

「お兄ちゃんったら……あたしのおっぱいで射精したいんなら、最初から言ってくれればいいのに……♥」

膝立ちへと姿勢を変えたリーファは、自慢の爆乳を両手で挟みながら持ち上げ、反り返った肉棒をぎゅっと挟み込みました。たっぷりとまとわりついた唾液とクリームが潤滑油の役割をしっかりと果たし、むにむにとした極上の柔らかさで包み込むバストの感触を伝えてきます。

巨大な白い双丘を貫く、太く固い肉槍。グラドルはだしのリーファの爆乳が相手とあっては、さしもの逸物もそのほとんどが埋まってしまいますが、それでも先端部はきっちりと顔を出し、妹の顔面に狙いを定めています。

「お兄ちゃんのおちんちん、すごく熱い……♥　おっぱい、やけどしちゃいそうだよ……♥♥」

陶然とした声音で囁きながら、リーファは持ち上げたバストをゆっ

くりと動かします。たわわな胸元に挟み込まれた肉棒が、にちり、にちりという水音を上げます。つい先程まで行われていた濃密な口腔奉仕（フェラチオ）によって昂ぶらされている肉棒は、鈴口をひくひくとさせており、今にも射精してしまいそうです。

その雰囲気を敏感に感じ取っているのか、リーファは不規則なリズムでパイズリを続けながら、時折舌を伸ばしては亀頭をちろちろと舐めてやりました。

「うおおっ……うまいぞ、スグ……」

「えへへ、お兄ちゃんに褒められちゃった♥

そろそろ限界でしょ？　いつでも好きなときにイッていいからね、お兄ちゃん♥」

お気に入りの玩具を手に入れた子供のように無邪気な笑みを浮かべながら、リーファは左右の手に力を込めて乳圧を高めます。そうしてバストを動かす速度をわずかに上げつつ、亀頭の真ん前に顔をもっていき、口を大きく開きました。

顔射（マーキング）を促すリーファのポーズに触発されたのか、フィリアはキリトの背から離れると、今度はリーファの背後へと回りました。

「ほーら、キリト。これからたっぷりザーメンパックしてあげる、可愛い可愛いリーファ（いもうと）の顔はここですよ～♥

いっぱいいっぱいお射精して、リーファがお兄ちゃん専用のパイズリ便女なんだって、頭と心にもう一度教え込んじゃえ♥♥」

後ろから顔を覗かせながら、フィリアはリーファの唇を左右に引っ張って口をより大きく開けさせ、顔の位置を固定してしまいました。親友の体をオスへの献上品として差し出しながらくすくすと笑うフィリアの姿はどこか悪女じみていて、それが更にキリトの興奮を煽ります。

その興奮が伝わったのか、リーファのパイズリの勢いが一気に増し――ついに限界を越えた肉槍の先端から、白濁した種汁が勢いよく噴き出しました。

「きゃっ！　ひゃぁっ――♥　んっ……んぶぅうっ!?」

「すご――はぅ、こっちにも……♥　ふぁあっっ♥♥」

大量の精子を含んで粘つく濃厚な精液が鈴口から一気に飛び出し、リーファの顔面を襲います。開かれた口内に飛び込んでいったのは、全体の半分にも満たなかったでしょう。びゅるびゅると放たれた精液は、リーファの頬や眉間、眉、髪の毛といった至る所に飛び散り、彼女の顔をマーキングしていきます。

当然、すぐ側にあったフィリアの顔も無事ですむはずがありません。

「あーあ、リーファも私も、キリトのザーメンで顔中べったべたにされちゃった……♥　せっかくだし、記念撮影しよっか。ほら、ピースピース」

「あむ、んむぅっ……♥　ぴーひゅ……♥♥」

顔面に叩きつけられた精液の勢いと匂いに軽い酩酊状態に陥ったリーファは、言われるがままに両手でピースサインを作ります。そんなリーファ同様、顔に白濁した飛沫をたっぷりと付けたフィリアは、精液酔いする親友に頬を寄せながらピースサインを作ると、そのままスクリーンショットを撮影しました。

かしゃかしゃという効果音が鳴る度、顔射（マーキング）されて悦ぶ二匹のメスの画像がキリトの画像フォルダに追加されていきます。

そのまま何枚かの画像を撮影したあと、フィリアは頬を滑り落ちていく子種汁を指先で絡め取り、丁寧に舐め取りました。

「んぅっ……濃くて、美味し♥　……そうだ、リーファ。なめ合いっこしようか？」

「ふぁーい、ふぃりあひゃん……♥♥」

じゃれ合う子犬のように、二人は互いの顔に舌を這わせ、キリトが出したばかりの精液を丹念に舐め取っていきます。その舌の動きからは、精子一粒たりとも残すまいとする二人の意思が透けて見えてくるほどです。

やがて、顔中を相手の唾液でべたべたにしながら舐め取りを終えた二人は、そのまま流れるように唇を重ねました。お互いの口内に舌を差し入れ、内側に残った精液を残さずこそげ取るためです。

唇と唇を密着させたまま、時折キリトに向けてちらりちらりと視線

を送り、自分たちの愛の深さをアピールすることも忘れません。
「へぷっ……んんっ……♥　全部、飲んじゃった……♥」
「ごちそうさまでした、お兄ちゃん♥」
キスを終えた二人は大きく口を開き、キリトの精液を一滴残らず飲み干した事を証明して見せました。キリトはよくできた犬を褒めるときのように、満足するまで二人の頭をわしゃわしゃと撫でてやりました。
しばらく身を委ねたあと、二人は壺の中からたっぷりとクリームを取り出し、再び全身に纏わせます。白い塊をすっかり塗りたくったあと、リーファはバスマットの上にフィリアを押し倒しました。
「さっきといい、バスソルトの時といい……よくも好き放題やってくれましたね、フィリアさん。
お返しに、あたしとお兄ちゃんが愛し合ってるところ……特等席でたっぷり見せてあげますね」
「きゃー、リーファひっどーい♥」
仰向けに寝転ばされたフィリアの顔の上に、両脚を広げたリーファがうつ伏せの姿勢でまたがります。ちょうど、互いの顔のすぐ前に、互いの性器が露わになる――いわゆる『シックスナイン』の体勢になりました。キリトの位置からすると、リーファの脚の間と、その下にあるフィリアの顔が見える状態になっています。
「キリト、みてみて。リーファのおまんこ、すっごいとろっとろだよ……♥」
フィリアの指先が、リーファの蜜壺の入り口を左右に押し開きます。透明と言うには些か不純な性愛の滴が、真下にあるフィリアの顔目掛けて、ぽたり、ぽたりとこぼれ落ちていきます。キリトに見せつけるように大きく口を開いたフィリアは、落ちてくる滴を舌の上で器用に受け止め、そのまま飲み下していきます。
キリトはゆっくりと腰を突き出し、肉槍の先端を妹の蜜壺の入り口へとあてがう――とみせかけ、フィリアの口へと押し込みました。
「んふ、ぉむっ……♥」
上下逆さになった顔のまま微笑んだフィリアは、喉の奥の奥まで

使って肉棒を受け止めました。太い軸に沿わせた舌をうねうねと動かし、肉棒をなめ回していきます。与えられた口淫の機会を逃すまいと肉棒の根元までを貪欲に咥え込んだせいで、天井を向いた鼻腔にはキリトの陰嚢がほとんど密着しています。

「んふぉっ♥　んぼ、んぶぅっ♥」

軽い呼吸困難に陥りながらも、フィリアは肉棒を離そうとはしません。むしろ、キリトが腰を引こうとするといやいやと首を横に振って拒否反応を示すほどです。陰嚢との隙間から鼻へ僅かに入り込む空気には、染み出た濃い雄臭がたっぷりと含まれています。フィリアは文字通り鼻息荒くしながら、その空気を吸い込んでいました。

「なーにー、お兄ちゃん？　あたしを待たせて、フィリアさんとお楽しみ中？」

「っと、悪い悪い。さっきのクリームが残ってたから、フィリアに綺麗にしてもらってたんだよ」

「そうなんだ。ありがとうございます、フィリアさん。

あたしとお兄ちゃんがきもちよーくセックスできるように、手伝ってくれて♥」

挑発的な台詞と共にリーファが突き出した尻を、キリトは掌で軽くなで回しつつ、フィリアの口から肉棒を引き抜きました。てっきり、このまま射精してもらえるものだと思っていたのでしょう、フィリアは必死に頬をすぼめて肉棒に吸い付きましたが、さすがにどうなるものでもありませんでした。

フィリアの口内を蹂躙し終えた逸物を、キリトは今度こそリーファの穴へとあてがい――そして、まっすぐに押し込みました。

「あっ――♥　あっ、んぅ、んんっ……♥　お兄ちゃんの、くぅっ……♥　きて、るよぉ……♥♥」

「あっ……キリトの、キリトのが……リーファの中に……」

肉棒に奉仕する機会を与えられたリーファが甘く啼き、機会を奪われたフィリアは切なげに鳴きます。

剣道で鍛えられたリーファの下半身も、兄の逞しい逸物が相手では抵抗することすらできません。みちみちと押し広げられる膣穴から

溢れ出す情欲の蜜がフィリアの顔面を汚す中、リーファの蜜壺の奥の奥までを征服したキリトは、腰と腰を密着させたまま一度動きを止めました。

「ふうっ……さて、そこからの眺めはどうだ、フィリア？」

「最高だよ、キリト……♥　リーファのつるつるで可愛い妹おまんこに、キリトのぶっとくて立派なお兄ちゃんちんぽがずぷって入ってるのが、目の前で……♥」

恍惚に蕩けた瞳で、フィリアが真上にある光景を見つめます。リーファにばれないようにこっそりと手を回し、淡いオレンジ色の外跳ね髪を撫でてやれば、フィリアは嬉しそうに微笑みました。

「なるほどな。そっちはどうだ、リーファ？」

「えっとね。お兄ちゃんのおちんぽしゃぶって興奮しちゃったフィリアさんの、生殺しおまんこがひくひくってしてるのが丸見え。あっ、今、指で弄ってる。あたしとお兄ちゃんがセックスしてるとこ見て、興奮してオナニーしちゃってる♥」

キリトが視線を下に向ければ、自慰行為を暴露された恥ずかしさで頬を染めたフィリアと肉棒越しに視線が合います。

フィリアに見せつけることを意識しながら、キリトは止めていた腰を動かし、妹の膣穴へのピストン運動を開始しました。フィリアが見やすいよう、まずはゆったりとしたリズムのロングストロークで肉棒を引き抜き、同じ速度で深く貫きます。

「あっ――んっ、んんぅう～～～♥　おにいっ、ちゃあんっ……♥　んっ……ぅあっ♥　」

普段から鍛えられている賜物、あるいは日頃から抱かれている恩恵でしょうか。リーファの雌穴は、引き抜かれる肉棒を逃すまいとぎちぎちに締め付け、差し込まれる逸物を受け止めんとみちみちと抱きつき、愛しい兄の子種を搾り取ろうとしてきます。

「お兄ちゃん、もっ――んぅうんっ♥　キス、きしゅしたい、よお……♥」

「相変わらず欲しがりだなあ、スグは……ほら、こっち向け」

言われるがまま振り返ったリーファの唇を、キリトは容赦なく奪い

ます。上半身を倒して後ろから覆い被さり、両手でリーファの爆乳を揉み拉きます。

牧場でミルクを絞り出すときのように、根元からじっくりとこね回しつつ、掌は少しずつ先端へ。たっぷりと焦らしてやったあと、キスしながら乳首を強くつまんでやると、リーファは動物のように鳴いて悦ぶことをキリトは過去の経験からよく知っていました。

「んふっ!?　んっ――んぶぅうぅうぅぅ♥♥」

唇を塞がれたまま弱い部分を的確に攻撃されたリーファが、びくびくと体を震わせて悦びます。その間もキリトは腰を止めず、一定のペースでリーファに逸物を叩き込んでいきます。それは性交の本来の目的――射精の為の動きではなく、体の下で喘ぶ雌に、雄の偉大さを教え込む為の動きでした。

杭の如く固く太い肉棒が出入りする度、リーファの蜜壺からは愛液の滴が溢れ出します。その滴のほとんどは、当然真下にあるフィリアの顔にかかるのです。心寄せる男が己の妹を犯す姿を至近距離から見つめさせられ、その飛沫を浴びせかけられながらも、フィリアの顔には陶酔した笑みが浮かんでいました。

「あはっ……キリトのちんぽ、すっごいよぉ……♥　どちゅっ、どちゅっ、って音立てて、リーファのおまんこに躾してる……♥

キリトにだけ発情して、キリトにいわれたらいつでも股開いちゃう、キリトのチンポ専用お手軽まんこにしちゃってるんだ……♥♥

いいなあ、いいなあ……♥♥　私も、キリトのお兄ちゃんちんぽでしつけられたいよぉ……♥♥」

自らの言葉で興奮したフィリアは、股間に回した両手をせわしなく動かしては股座から水音を上げます。その水音は当然、リーファとキリトの耳にも届き、二人の興奮を更に高めていくのです。

「んっ♥　んんっ♥　んぶっ♥　んぶぅぅっ♥　んぐぅ――ん、ぅううぅっ♥♥」

ねっとりと絡み合う舌の合間、重なる唇の間から、リーファのくぐもった喘ぎ声が零れます。

陰茎の動きに合わせて半ば無意識に腰を振り、より深く繋がろうと

しながら貪欲に快楽を求める妹――日本有数の実力を持つ美少女剣士を、肉棒一本で思うままにしながら、キリトは唇を離しました。
「ふぅっ……。ほら、こういう風にされたかったんだよな、スグは」
目の前で揺れる金色のポニーテールを避けながら、キリトは妹のうなじに唇を触れさせます。同時に、片手をリーファの顎の下に回して顔を上げさせると、ストロークの速度を上げました。
奥へ奥へと突き進む杭打ち機のリズムから、馬を調子よく進めるギャロップのリズムへ。それほど激しい動きではありませんが、今までのピストン運動の速度に慣らされたリーファにとっては、それですら十分すぎるほどに過激なのです。
「あ――っ〟♥　あぉっ、あっあっあっ♥んっ、あっ♥　いぃっ♥いひッ♥いぃぃぃいっ♥♥
おにぃっ、い♥ちゃんのぉ♥　おっおぅっ♥　おにいちゃんの、ぢんっ、ぽぉ♥　くひぃぃぃぃ♥♥」
「おいおい。この程度でそんなに鳴いてどうするんだよ、スグ？」
「おあっ♥　んひ♥　だって、だってぇ♥　お兄ぢゃんの、ひんっ、ちんぽぉ♥　あたしのいいとこ、全部、じぇんぶぅ♥あっあっあたるんだも――んぅぅぅうんっっ♥♥♥」
肉穴を震わせながら、リーファは兄の逸物に嬲られる感触に酔い痴れます。先程までの長いストロークは、リーファの弱い部分を確認するためのいわば偵察行動のようなもの。そして、今行われているピストン運動――引き抜きは半ばまでに留め、再突入までの間隔を狭めたこの動きが、本格的にリーファの快楽中枢を刺激しながら理性を砕いていきます。
妹の体に回していた両手を離して体を起こしたキリトは、空いた片手でリーファのポニーテールをむんずと掴んで引っ張り、無理矢理顔を上げさせます。
「こうされるの好きだったよな？　スグ」
「ひぁあああっ♥♥　あっぅう♥　これすき、すきぃ♥　ひっ♥いっいいぃ♥ひいぃん♥」
騎手に操られる雌馬のようにポニーテールを引っ張られながら、

リーファは快楽に嘶きます。上の口から溢れる唾液、下の口から溢れる愛液を親友の体へ垂れ流していることを意識する余裕は、今のリーファには存在していません。

もっともそのフィリアですらも、親友と想い人の（ほぼ）近親相姦セックスをオカズに自分を慰めるのに夢中で、リーファの体液を上から浴びせかけられている事に気づく余裕はありませんでした。

少し早めの前後運動でリーファをたっぷりと鳴かせたあと、キリトは抽送の速度をわざと落とし、再びゆったりとしたストロークを繰り出します。

「スグはこうやって、ぐーっとゆっくり引き抜いてやって……」

「くひぃっ♥　あっ……あっ、あああー♥　んん……っ♥　ぢっ、ぢんぽ、ぞりゅぞりゅってするの、ずる――」

「一気に奥までされるのが好きなんだよな！」

「〜〜〜〜〜〜〜っぅぅうううううぁぁあああああっ――♥　おほっ――ぅうひいぃいいいい♥♥」

敏感になった膣壁を張り出した亀頭でこそげ取るように嬲られてからの、子宮を押しつぶすような強烈な挿入。リーファの弱点を悉く蹂躙する緩急のついた前後運動に、リーファの本能はより一層背を仰け反らせ、股座から愛液をまき散らして応えます。

全国有数の美少女剣士も、ベッドの上では一匹の雌。獣のような喘ぎ声をあげながら、顔を伏す事も許されぬまま肉棒を受け止め続けるリーファを、キリトは容赦なく犯していきます。

リーファの蜜壺もまた、愛しい雄と番うため、一滴でも多くの精液を搾り取ろうと逸物をぎちぎちと締め付けました。

「うお、ぐうぅっ……とりあえず、か……」

「あひっ、んんぅっ♥♥　きゅう、に゛っ、はや――ひいぃいいいんんんっ♥♥」

下腹部から発せられる衝動が、キリトを突き動かしました。雄の本能に命じられるまま両手でリーファの腕を引き、上半身を逸らせた膝立ちの姿勢にさせてから、キリトは腰の動きを一気に加速させます。

「あっあっあっあっ♥♥あ――ッッッ♥♥♥　おふぃっ♥あうっ♥お

ぐ、おくぅっ♥　おに、いちゃっ♥　すき、すきぃひぃいいい♥♥」

こうなってしまっては、最早リーファに抵抗する術はありませんでした。ぱんぱん、ぱんぱんという肉と肉が激しくぶつかりあう音をバックコーラスに従えながら、リーファは喘ぎ声を奏で、部屋中に響かせていきます。

肉棒が突き込まれる度に、ぶるんぶるんと大きく揺れる自らの爆乳。脚の間に寝転んだまま、リーファの痴態をオカズにくちゅくちゅと股座を濡らす親友の姿。うなじにかかる兄の熱い吐息。その全てがリーファを昂ぶらせ、狂わせていくのです。

性交の快楽以外には何も受け付けられなくなった脳髄を、子宮から駆け上る雌の性感が蹂躙します。逞しい男根に女穴を思うままに使われながら、リーファは浅ましいほどに激しく喜悦の声を上げました。

「おふ♥あっ♥ひぃい♥んんんっ♥♥　あっあっあっあっ♥♥　ちんぽぉ♥ちんぽぉぉっ♥♥♥」

「ほら、リーファ。どこに出して欲しいか、ちゃんとおねだりできるよな？」

「はふっ――――おっ♥　にゃっ♥　ながっ♥　なか♥　おっ、おまんぐ、このながにいっ、ひぃっ♥　だして、だしてぇえ♥♥」

「――よく、できました」

自らの思いをちゃんと言葉に出来た妹を褒めてやりながら、キリトはラストスパートをかけました。

乱暴に、しかして丁寧に。スピードホリックな妹が満足するほどに、激しい前後運動をリーファの雌穴に叩き込みます。その動きに、一足先に限界を迎えさせられたリーファの蜜壺が、たっぷりと愛液を溢れさせながら肉襞で縋りつく中――キリトは最後の一突きで、亀頭をリーファの子宮口にぎっちりと密着させました。

「――ぐうっ！」

一際太さを増した肉棒はびくりびくりと震えながら、リーファのリクエスト通りの場所へ濃厚な精液を一気に解き放ちました。

「あっ――♥　おく――っ、ああぐ、あぁ～～～～～～～～～～～～

～♥♥♥

んんん、いっ――ぎゅううぅ♥♥　いっへ、いへぇえ♥♥　おに、ちゃ――あっ♥あっ♥あはあああぁあ〃あ〃あああああ♥♥♥」

両腕をキリトに引かれ、腰と腰を密着させられているリーファにできるのは、勢いよく吐き出される子種汁を子宮で受け止めることだけでした。

過剰なまでの悦楽に瞳は焦点を合わすこともできなくなり、だらしなく開かれっぱなしになった口から舌が伸びてしまいます。精液の奔流が子宮壁を打つ度、リーファは「あっ♥」とか「おっ♥」とかいう意味を成さないよがり声を上げ、歓喜と快楽に体を打ち振るわせるのです。

その二人の足下で、一人の快楽を貪っていたフィリアも、リーファと同時に絶頂を迎えていました。

ミルククリームの甘い香りがほのかに漂っていたこの部屋も、今や雄と雌の性臭で満ちあふれ、そこで何が行われていたのかを無言の内に物語っていました。

「おにぃ、ちゃ……♥♥　あっ♥ぅう♥　あひ……あっ、んうぅ♥♥」

礼節を旨とし、剣の道に邁進する――全国クラスの剣道少女としてのリーファ、もとい、直葉を知らぬ人には想像すらも出来ぬ程に緩みきり、そして幸せに満ちた表情を浮かべた一人のオンナが、そこにはいました。

失い、恋い焦がれ、そして永久に手に入らないのだと一度は諦めた、愛しい兄。奇縁なる運命の下、その兄――キリトに抱かれ、沢山の同志と愛を共有するようになるなど、かつてのリーファには想像すらもできなかったでしょう。

「――うっ、ふう……」

長々と続いた射精が、ようやく終わりました。

キリトはゆっくりと腰を引き、ひくひくと痙攣する蜜壺から逸物を引き抜きました。リーファの膣穴から引き抜かれた肉棒は未だ勃起状態を保っており、ぶるんというしなりと共に、脱力したままの妹の背中に交尾の残滓をまき散らします。

精液と愛液の混合物に汚されたリーファは、未だ夢心地で快楽の余韻に浸っています。ぐったりとしてしまったその体で親友を押しつぶしてしまうことが無いよう、キリトは妹の体をそっと持ち上げ、フィリアの隣へと寝かせてやりました。

乱れてしまったリーファの髪を、キリトは優しく撫でて整えてやります。するとその合間に、先程まで激しい自慰行為を楽しんでいたフィリアが落ち着きを取り戻し、うつ伏せのままキリトを見上げてきました。

「わあっ……いっぱい射精したんだね、キリト……♥」

キリトが肉棒を引き抜いた際に、一緒に溢れ出した精液の一部は、真下にあるフィリアの顔にそのまま降りかかっていました。その重たい滴をぺろりと舐め取り、フィリアは喉を鳴らして飲み干します。

「んんっ……すっごい、濃い……♥　それに、リーファの味もする♥可愛い妹とのきんしんそーかん、そんなに気持ちよかった？」

「ああ、そりゃもう」

「わー。すっごいいい顔してる。妬けちゃうなあ……。

よし、こうなったら……リーファが回復する前にお掃除しちゃうんだから」

背を逸らすように上体を起こし、フィリアは大きく口を開けました。うねうねとした動きで舌が躍る肉色の空洞が、肉棒を妖しく誘います。その誘いに乗ったキリトは、白濁液を纏ったままの逸物を差し込みました。

フィリアがおとなしくしていたのは、肉棒を根元まで咥え込むまでのわずかな間でした。唇がキリトの腰に密着すると、フィリアは太い肉棒に舌を絡ませ、一心不乱にむしゃぶりつきます。

「んふっ……♥　んぶ、んんぅっ……♥　ちゅっ、ぁふぅ、んぢゅぅぅっ♥」

キリトと視線を合わせたまま、顔ごと口を激しく前後させるフィリアの口腔奉仕は、もはやセルフイラマと言ってもいい程に激しいものでした。その動きからは、今度こそ離すまいという固い意志がありありと感じられます。

「ふぃりふぉのふぃんふぉ♥　おいふぃ♥　しゅひ、らひしゅふぃ♥　んぼっ、んもぉぅっ♥」

射精の興奮と熱が未だ残る肉棒を貪欲に、そして愛情深く責め立てる唇と舌の動きは、最早掃除の域を越えています。

それが証拠に、キリトの陰嚢は急速に精子の充填を始め、フィリアの口内に吐精する準備を整えきってしまいました。ここまで来ると、あとは理性だけが最後の砦となるのですが――そんなものはとうの昔に粉微塵に砕かれているのは言わずもがなでした。

「フィ、リア……悪い、このまま……！」

余裕を無くしたキリトの顔を見上げ、娼婦の笑みを浮かべたフィリアは、キリトの腰に腕を回して抱きつきながら肉棒を根元まで咥え込みます。その淫猥なディープスロートが、最後のトリガーとなりました。

キリトはぶるりと身を震わせ、フィリアの喉奥へ向けて遠慮無しに精液を吐き出しました。

「くぉっ……！」

「んっ――んぅっ♥　んんぅうぅぅう♥♥　んっんっんっんっ――んふぅうぅうぅうう♥♥」

胃袋を孕ませるかのような白濁の奔流。口の中に溜めて味わいたいという欲求をぐっと堪えながら、フィリアはごくごくと喉を鳴らして、新鮮な精液を飲み干していきます。広がった輸精管の分、太さを増した肉棒に口内は完全に占拠され、下品に鳴る鼻穴から漏れ出る息は精臭に塗れています。

生娘ならば一瞬でえずき、溢していたであろう大量の精液相手であっても、フィリアは一滴も逃すこと無く胃の腑に収めていきます。その間ずっと、視線はキリトに固定したまま。とろっとろに蕩けた可愛らしい上目遣いが、なおさらキリトの興奮と征服欲を煽りました。

「んっ、んん……んぁ、んくっ……♥　んぷぅ……けふぅっ……♥」

今日三度目の射精がようやく終わりを迎える中、フィリアは唇で肉槍の表面をなぞるようにしながら、ゆっくりと顔を引きました。肉棒を口内から離す直前、亀頭だけを丁寧になめ回し、鈴口に僅かに残っ

た残滓も残さず舐め取ります。
　愛情たっぷりの口淫を味わったキリトの逸物は、フィリアの口の中から引き抜かれても硬度をしっかりと維持しています。反り返る肉棒を間近で見つめながら、フィリアはにっこりと微笑みました。
「えへへ……♥　ごちそうさまでした、キリト♥」
「ごめん、フィリア。なんというか……我慢、できなかった」
「いいよ。私が、さっきおあずけされて切なかったってだけだから。ふふ……お腹の中、キリトのせーえきで重たくなっちゃったよ……♥　たくさん射精してくれて、ありがと♥」
　そう言って、フィリアは自らの下腹部をすりすりと撫でました。もちろん、空っぽになった口を大きく開けて、ちゃんと精子達を飲み干したことをアピールするのも忘れません。
　そんなフィリアの姿にたまらない愛おしさを覚えたキリトが、フィリアに襲いかかろうとした――まさにその直前でした。
　フィリアの隣に身を横たえていたリーファが、ゆっくりと上体を起こしました。
「お、おはよう、スグ……」
「えへへ……おはよ、お兄ちゃん……♥」
　まだ交合の余韻が残っているのでしょう。どこかぼんやりとした瞳のまま、リーファはキリトの肉棒の先端に口づけると、そのまま流れるようにフィリアにキスをします。フィリアの方も特に嫌がるでも無く、リーファの口づけを受け入れると、抱きしめ合ってディープキスを交わしました。
「んぅ――ぷふぁっ……お兄ちゃんの味、する……」
「あはは……まあ、いまキリトにお口で遊んでもらったばっかりだし」
「えー……フィリアさん、ずるーい……」
「たっぷりナカダシしてもらっといて、どの口が言うか～。このこの～」
　おどけた調子のフィリアが、リーファのほっぺたを左右から引っ張ります。
　仲睦まじい二人のじゃれ合いをキリトが眺めていると、部屋の奥に

ある扉が、重たい音を立ててゆっくりと開いていきました。扉の向こうは薄暗がりになっていて細部は見えませんが、少なくとも大きなベッドがあることはわかります。

「――おにーちゃん♥」

「――きーりーとっ♥」

視線を下に向ければ、期待と茶目っ気に溢れた眼差しでこちらを見つめてくる二人と目が合いました。

ストレージから柔らかなタオルをオブジェクト化したキリトは、自分と彼女らの全身についた余分なクリームを拭き取ります。保湿力たっぷりのミルク成分が染みこんだ乙女達の肌はつるつるかつすべすべで、いつまでも触っていたくなる魅力がありましたが、キリトは固く強い意思の力でその誘惑を振り切ると、ストレージから別のアイテムをオブジェクト化しました。

「自分でつけられるか？　二人とも」

チョーカーを思わせる、細い黒革の首輪。それを片手に一つずつ載せ、キリトは二人の眼前に差し出します。

ぺたりと座り込んでいた二人は、しばしの間、首輪と互いの顔の間で視線を行き来させると、やがてそれぞれの手で首輪を受け取り、装備アイテムとしてセットしました。

しゅん、という軽い効果音と共に首輪が消え、直後に二人の首へ装着されます。それぞれの首輪から細い銀色の鎖が生え伸び、キリトの手の中に一本ずつ収まりました。

「それじゃあ……行こうか、二人とも」

「うんっ♥」

「はーいっ♥」

心得た様子の二人は、尻を高く上げた四足歩行の姿勢で、最後の扉へ向けて進み始めました。両脚は下品に広げ、膝は少し曲げたまま。よたよたとした無様な歩き方すらも楽しみながら、キリトを引っ張っていきます。

見せ付けるように掲げられた、二人の雌穴。リーファは白濁した雄汁をぼたぼたと。フィリアは透明な雌汁をぽたぽたと。床へこぼれ

るのも構わぬ様子で、へこへこふりふりと尻を揺らして鎖の持ち手に媚びながら、逃げ場の無い最奥部へ進んでいきます。

そうして、三人が奥の部屋の暗がりの中へ消えると、大きな扉はゆっくりと閉まってしまいます。

最早、訪れる者は誰もありません。最後に残ったのは――扉に鍵がかかる、かちりという微かな音の残響。ただ、それだけでした。

「――そして、二人はやっと安心して狼の巣穴（ベッドルーム）に連れ込まれました。

しかし、さっきいっぺん屈服してしまった二人の雌の本性だけは、お兄ちゃんの部屋で抱かれても、フィリアさんのお部屋で弄ばれても、もうもとのとおりにはなおりませんでした。

めでたし、めでたし」

「……え？」

「めでたし、めでたし！　おしまい！　完！　ハッピーエンド!!」

「いやいやいやいや！　この展開でこのオチだぞ!?　どう考えてもハッピーエンドとは真逆だろ、スグ!?」

西洋料理店・黒狼軒の最奥部。

天蓋付きの大型ベッドに背中を預けたキリトの口から、誰もが抱くであろう疑念が言葉となって噴き出した。

「えー？　あたしは断然ハッピーエンドだと思うよ、お兄ちゃん。

だって、好きな人がずーっと側にいてくれるんだよ？　すっごくめでたしめでたしだと思うんだけど」

「いやでもこれ、一種の拉致監禁なんじゃないのか……？」

「もー、今更そーいうこというのー？　夢が無いなあ、お兄ちゃんは」

首に装備した革製の首輪から伸びる銀色の鎖を弄びながら、リーファは不満げに口をとがらせる。とはいえ、メートル級の爆乳でキリトの片腕を挟み込み、体をぎゅっと密着させたままでいる辺り、本気で機嫌を損ねているわけではないらしい。

兄妹間の価値観の相違に軽くため息をつきつつ、キリトはリーファ

にとらわれていない方の手に持ったもう一本の鎖を、くいくいと軽く引いた。
「――なあ、フィリア。今の話、フィリアはどう思う？」
「んぶ、んぉ……ぷへっ……。あっ……ご、ごめんキリト。えっと……舐めるのに夢中で……」
「お、おう……聞いてなかった、と」
鎖の繋がる先――リーファとお揃いの首輪をつけたフィリアは、キリトの股座に密着させていた顔をゆっくりと上げ、恥ずかしそうな面持ちで首を縦に振った。
相当丹念に味わっていたのだろう。今し方口から離されたばかりの肉棒には、先程までの残滓はもはや一滴たりとも残っておらず、代わりにフィリアの唾液でくまなくコーティングされている。キリトが声をかけなければ、このまましれっと射精まで導くつもりだったのは誰の目にも明らかだった。
「それで……えっと、何の話だっけ？　キリト」
「料理店の奥底に連れ込まれた二人は、果たして幸せなのか――って話だよ。フィリア」
「うーん……少なくとも、私は幸せだと思うよ」
ほんの僅かな、逡巡の後。自らが丁寧にまとわせた唾液を拭き取るように肉棒へ頬を擦り付けながら、フィリアはリーファの派閥に加わった。
「ほら、キリトと出会う前の私って《ホロウ・エリア》にいたじゃない？　味方なんて誰もいなくて、《圏内》みたいに安全な場所なんてどこにもない……いつ殺されてもおかしくない場所に」
「……ああ、そうだったな」
「キリトが来てくれて、私を《管理区》につれてってくれた時からずっと……私が世界一安心できる場所は、キリトのそばなんだよ。
だから、きっとね。もしキリトに誘拐されちゃっても、それはそれですっごく幸せだと思うよ。ね、リーファ？」
水を向けられたリーファもまた、こくこくと首を縦に振る。
「お兄ちゃん、ちょーっと目を離すとすぐに危ないことしたり、危ない

場所に飛びこんでっちゃうんだから……。
　一人か二人、手元に捕まえて世話しておくくらいでちょうどいいんじゃない？」
「人をサイコパスか何かみたいにいってくれるな、妹よ……そんな危ない趣味に走るつもりは無いっての」
「あはは、ごめんごめん。
　……ん？　でも、例の牧場はすっごい気合い入れて運営してるよね？　一人二人とかいうレベルじゃないでしょ、あそこ」
　一瞬『そりゃあ、あれはああいうプレイをする為の場所だからなあ……』という抗弁を、ミルク産出量ランキングぶっちぎりトップをひた走る妹にぶつけてやるべきか否かを迷い、キリトは言葉に詰まる。そのわずかな沈黙を敗北宣言とみなしたのか、フィリアとリーファはけらけらと笑い合った。
「でも、お兄ちゃんってなんだかんだお人好しだしなあ。
　あたし達が『ちょっとおでかけしたいなー』っておねだりしたら、簡単にＯＫ出してくれそう。ね、フィリアさん？」
「確かに。『そうか。晩飯までには帰ってこいよ』とか言いながら自由にしちゃうタイプだよね、キリト」
　悪意無く笑う二人の視線に絆され、キリトは不承不承といった様子で頷く。
　リーファもフィリアも冗談半分で言っているとはいえ、実際、拉致も監禁もキリトの趣味ではない。治療（と実験）の為に拉致され、（ＳＴＬ内に実質）監禁された事こそあるが――いや、そもそもそれ以前に《ＳＡＯ》に長いこと監禁されていた身分なのだ。誰かの自由を力ずくで奪うのも、理不尽に自由を奪われるのも心底ゴメンだった。
　まあ――そういうプレイをしている時は除いて、だが。
「……と、いうわけで。賛成二票、反対一票でお兄ちゃんの負けー！
あたしとフィリアさんの勝ちー♥」
「負けたキリトには、罰としてこれからもずーっと私達といちゃいちゃしてもらいまーす♥」
「か、数の暴力反対……！」

いつでも装備解除できる首輪に繋がった鎖をキリトの両手に握らせたまま、フィリアとリーファは飼い主の体へ改めて抱きつく。

満面の笑みを浮かべる二人の体をしっかりと抱き寄せながら、キリトはせめて二人を侍らすに足るだけの良き飼い主（コイビト）たらんと決意を新たにするのだった。

なお、後にリーファとフィリアから一連のプレイ内容を聞き出して触発された何人かのメンバーが、森林フィールドの中に赤い頭巾をかぶった少女が通っていそうな家を造り始めたり、丘陵フィールドに藁と木材とレンガの集積場を建設し始めたりするのだが――それはまた、別のお話。

08―1．せいおうのおしごと！（アリス・アスナ）

娼館『黒夜館』といえば、知らぬ者とて居ない夜と退廃の象徴だ。
中世の王城を思わせる豪奢な外観と充実した内部設備、そしてなにより、館に属する見目麗しき娼姫達の存在が、その淫猥なる名声を世に轟かせている。
そんな黒夜館の最上階の一角に、とあるＶＩＰゲスト限定の特別寝室が存在している事を知る者は少ない。ましてや、そこに宿泊する者達の高貴なる素性を知る者となれば、もっと。
娼館にはあまりに似つかわしく無い程に立派な金色の鎧をまとい、赤い絨毯が敷かれた最上階の廊下を歩む彼女もまた、それらの事情を把握している数少ない者の一人だった。
「――星王陛下。王妃陛下。『整合騎士』アリス・シンセシス・サーティ、夜警の任にあたるべく参上いたしました」
そう言って、彼女――アリス・シンセシス・サーティは、身の丈の倍はあろうかという巨大な扉の前で立ち止まった。きびきびとした動作で両脚をぴしりと揃え、「気をつけ」の姿勢を取って返答を待つ。
その間も、アリスは周囲に警戒の意識を飛ばすことを欠かさない。もし曲者が飛びかかってこようものなら、腰の鞘に差した『金木犀の剣』を引き抜き、一閃の下になます切りにする用意が出来ている。
そうして待つこと約十秒ほど。厳重なロックが解除され、巨大な扉がひとりでに開いていく。
「失礼いたします」
開いた扉の前でかっちりと一礼した後、アリスは部屋の中へと足を踏み入れた。
円形のドーム型構造をとる特別寝室内にはこれといって灯りは点けられていなかったが、総ガラス張りの天井から降り注ぐ星々の瞬きと、包み込むような月光の輝きに照らされているおかげで活動するに不便は無い。

部屋の全体的な装飾は、ゲストの品格を損ねない程度に抑えられており、華美すぎない上品さを醸し出している。

そんな特別寝室の中央に鎮座するのは、キングサイズより更に二回りは大きいであろう分厚いベッド。四方を薄衣に囲まれたそのベッドは、一見すると天蓋付きのように思われるが、実際は天井部分にのみ覆いが無いことをアリスは既に知っていた。

「夜分にご寝所への立ち入りをお許しいただき、感謝の言葉もございません。

アリス・シンセシス・サーティ。本日の夜警の任を務めるべく、ここに参上いたしました。どうか、お目通りを願いたく」

片膝を寝室の床に付けた姿勢で、アリスはベッドの前へと跪いた。その背後で、今し方入ってきたばかりの扉が勝手に閉まる音が聞こえると同時に、アリスの正面にある薄衣が音も無く開かれた。

「――よう、アリス」

「こんばんは、アリスさん」

星王キリト。王妃ステイシア――その真なる名を、アスナ。

ベッドの上に寝転び、分厚いクッションに背中を預けて上体を起こしている二人に名を呼ばれ、アリスは静かに頭を垂れた。

おそらくは先程まで肌を重ねていたのだろう。キリト、そしてキリトの腕に体を預けて身を寄せるアスナの上半身は、共に何も身につけていない。腰から下はシーツで隠されていたが、その薄布一枚下は上半身と同じ事になっているだろうと想像できないほどアリスは愚鈍ではなかった。

「星王陛下、王妃陛下におかれましては、ご機嫌麗しく。

今宵は、このアリス・シンセシス・サーティが、お二人の警護にあたらさせていただきます」

「よろしく頼むよ、アリス。それじゃあ、早速警護を始めてもらおうかな」

「承知いたしました」

王たるキリトの許しを得て、アリスはすっと立ち上がる。

今のアリスが使用している――という言い方が適切かどうかは微

妙だが――アバターは、アンダーワールドの整合騎士アリス・シンセシス・サーティのビジュアルデータと寸分違わぬものだ。《ＡＬＯ》で使用しているケットシーのものではないのはもちろんのこと、以前に彼女が《ＳＡ：Ｏ》や《ＧＧＯ》に迷い込んできた際に、システム側が自動生成したアカウントコンバート用アバターとも違う。

これらのデータの出所は、誰あろう神代博士その人。『私からの迷惑料代わり』というなんとも殊勝な言葉と共に、博士はアリス本来の身体データを提供してくれていた。それは、キリト達に現実世界での肉体が存在するように、アリスにも本来の肉体に（限りなく近い体へ）戻れるチャンスがあってもよいだろうという、神代博士なりの親心のようなものかもしれない。

とはいえ、アリスの肉体以外にもいくつかのビジュアルデータ――たとえば『金木犀の剣』や装備一式、今のアスナが使っているステイシアのアバターなど――諸々がまとめて送付されてきたのには若干意図を図りかねる部分もあるが、キリトは迷惑料の上乗せと解釈するに留めた。

「まずは、私が悪意持つアサシンならざることをお確かめください。両陛下」

あくまでも騎士として振る舞いながら、アリスは装備アイテムウィンドウを起動し、身に纏っていた装備全てをストレージへ格納した。

愛刀である『金木犀の剣』を手始めに、金色の鎧や籠手、蒼いバトルスカート、更には下着に至るまでの全てが消え去り、必然的にアリスは一糸まとわぬ姿となる。

「……綺麗だね、アリスさん」

「ああ、本当だ」

月光の中に浮かび上がるアリスの裸身を見つめながら、アスナとキリトは惚れ惚れとした様子で呟く。

ほのかな輝きの中でなお、自ら発光するかのように白く眩しい肌と、艶やかで嫋やかな金色の髪。日頃の鍛錬で整えられた見事なプロポーション。日々の鍛錬によって無駄な肉が一切ついていないおかげで、形の良いバストのボリュームや、小ぶりなヒップラインの美し

さがよりはっきりと強調されている。機能美、造形美、自然美――その全てを内包した一種の理想存在。

『極上の美』というものがあるとすれば、少なくともそのうち二つは今この室内にある。黒き王の隣と、その視線の先に。

柔らかな月の光と二人の視線を浴びたまま、アリスはその場でくるりと一回転し、その身に寸鉄帯びていない事を示す。これは、夜警を勤める者の装備が何かの弾みで王や王妃の体を傷つけることや、夜警役に扮した暗殺者が凶器を持ち込むことを防ぐために必要な措置だった。

「それでは、明日の朝まで警護の任を勤めさせていただきます。どうかごゆるりとお休みくださいませ」

優雅に一礼した後、アリスはいそいそとベッドの上へと上る。こうして、夜の間ずっと星王夫妻と閨を共にし、不測の事態に備える――それが、夜警たるアリスの任務だった。

アリスの為に開けられた正面の薄布が無音の内に閉じる。そんな中、キリトの足下方向、ベッドの端にちょこんと腰を下ろしたアリスを見かねて声をかけたのは、星王姫ことアスナだった。

「ふふっ。アリスさん、そんなに端っこの方にいないで、こっちに来たらどう？」

「王妃様……ですが……」

「はーい、『王妃様』禁止。ベッドの上では、私もアリスさんも平等にこの人の『オンナ』で、キリトくんは『旦那様』なんだから。

いつも通り『アスナ』って呼んで。ね？」

「……わかりました、アスナ」

立場の差を慮ってか、どこか遠慮がちに頷いたあと、アリスは四つん這いの姿勢でおずおずとキリトの方へ身を寄せた。

すると、おもむろに体を起こしたアスナが、近づいてくるアリスをぎゅっと抱きしめた。シーツからするりと抜けた体は、アリスが予想した通り、生まれたままのフルヌード。ちゃんとキリトの手が届く距離の内であることを見極めつつ、裸の女二人は絡み合うようにしながら、ベッドシーツの上にぺたりと腰を下ろした。

「ふふっ、見て見て。キリトくん、すっごく羨ましそうな顔しながらこっちみてる」
「確かに、そのようです。そんなにアスナと抱き合いたかったのですか、キリト？　だとしたら、可哀想な事をしてしまいましたね」
「えー？　アリスさんをぎゅーってハグし損ねたのが残念なんだよね？　キリトくん？」
　くすくすという密やかな笑い声を零すアスナと、すっかりいつもの調子を取り戻したアリスは、抱き合いつつねっとりと睦み合う様をキリトに見せ付ける。なんとはなしに始まった王族と騎士プレイだったが、二人ともキリトが思っている以上に楽しんでいるようだった。
　密着させた肌と肌を擦り合わせるように体をくねらせながら、互いの首筋や胸元へ唇を触れさせ合う。啄み合うような口づけはキスマークが残るほど強烈ではないが、回数が増える度に二人の体へ熱を帯びさせていく。
　アリスの裸身が放つ、アスリートめいた健康的な美しさ。アスナの裸身が顕す、モデルめいた芸術的な美しさ。どちらも甲乙付けがたく、そして至上の美の持ち主と言っても過言では無いだけに、そんな二人の絡み合いは否が応にも雄の興奮を駆り立てる。
「まったく、アスナもアリスも……。いつの間にそんなに仲良しになったんだよ、お二人さん」
「うーん……それはほら、『昨日の敵は今日の友』っていう言葉があるじゃない。ね、アリスさん？」
「ええ。どこぞの朴念仁を巡って争い合う必要さえ無ければ、アスナほど頼もしい味方はそういませんから」
　キリトの軽口を揃って受け流したあと、アスナとアリスはおもむろに唇を重ねた。それは、肌に触れたのとは真逆の、深く情熱的なディープキス。唇の端から漏れる唾液の音が、二人の間で行き来する舌の激しさを物語っている。
　その唾液音とは別の水音につられて視線を下へ下へと向けていけば、お互いの股座に向けて伸ばされた片腕の姿が見える。太ももに隠れて見えない手首の先では、アスナの細い指がアリスの蜜壺を、アリ

スの白い指がアスナの雌華を弄くり、くちゅりくちゅりという発情の音を奏でているのだろう。

キリトの脚の間へと伸びた二人のもう片方の腕が、その嫋やかな指を使った優しい手つきで以て、天に向けて屹立するキリトの立派な逸物を白い薄布越しに扱いていなければ、そういう性的嗜好の持ち主と誤解されてもおかしくなかっただろう。

「んっ……♥」

「ふぅ……♥」

やがて、どちらからともなく舌を解き、二人はキスを終えた。唇と唇の間にかかった唾液の橋が崩れ落ちていく様を視界の端に収めながら、アスナはしっとりと微笑んだ。

「実はね、アリスさんが来るまでの間……ずーっとフェラチオさせてもらってたの。

どうだった？　キリトくんのちんぽとの間接キス」

「そうだったのですか……。とてもよかったです。キリトの……ええと……」

「ふふっ。相変わらず恥ずかしがり屋さんだね、アリスさんは。

……そういうギャップが、キリトくんを惹きつけちゃうのかな？」

男性器の直接的な名称を言い淀んでしまったアリスが、頬を赤らめて顔を伏せる。その一方、揶揄するようなアスナの視線に射貫かれたキリトは降参とばかりに両手を上げた。

諦めの早いキリトに苦笑しつつ、アスナは再びアリスの方を向き、なんとか顔を上げたアリスと視線を重ねた。

「アリスさん。せっかくキリトくんもいるんだし、レッスンしてみない？」

「レッスン……つまりは、練習ですか？　アスナ」

「そうそう。こういうお下品な言葉を上手に言えるようになれば、その分もっと上手におねだりできるようになって……もっといっぱい、キリトくんに可愛がってもらえるよ？」

「なるほど……わかりました。鍛錬を重ね、己を鍛えるのは騎士の本分。どうか、私に貴女の技を学ばせてください。アスナ」

「よーしっ、そうこなくっちゃ」
　相変わらずキリトの肉棒に手を添えたまま、吐いた息すらかかってしまいそうな程の短い距離を挟んで、二人はまっすぐに見つめ合う。アリスの股座を弄んでいたアスナの手が向上心逞しい女騎士の頬へ添えられると、アリスもまたもう一方の手をアスナの腰へと回した。指先に付着していた粘液が、二人の肌の上に妖しい光沢を生み出した。
「それじゃあ、レッスン1。私がお手本をやってみせるから、アリスさんはそれを復唱してね」
「わかりました、アスナ」
「じゃあまずは、基本的な所から。
　――『お・ち・ん・ぽ』」
「お……お、ちんっ……ぽ……」
　一音一音をしっかりと区切り、聞き取りやすいようはっきりと響かせるアスナの発音は、子供に言葉を教える母親のように丁寧かつ明瞭。一方、アリスの発音はたどたどしく、たった四音の中にもひっかかりが簡単に聞き取れてしまう。それでもアスナは呆れた顔をすることも無く、慈母めいた笑みを向けながらアリスを見つめていた。
「うんうん、いい感じだよアリスさん。この調子で、もう一回挑戦してみよっか。
　はい、『お・ち・ん・ぽ』」
「お、ち……お、ち、ん、ぽ……」
「その調子！　じゃあ、次は続けて――『おちんぽ』！」
「――おちんぽ！」
　引っかかること無く言うことに成功した喜びと、言っている内容による羞恥に、アリスの頬が真っ赤に染まる。そんなアリスの後頭部に手を回し、金色の髪をよしよしと撫でてやりながら、アスナは上手に発音できたことをたっぷりと褒めた。
「さすがアリスさん！　もうマスターしちゃうなんて、やっぱりセンスがいいわね……。
　この調子でどんどんいくわよ。はい、『ちんぽ』」

「ちんぽ！」
「『おまんこ』」
「おまんこ！」
「『まんこ』」
「まんこ！」
「『けつあな』」
「けつあな！」
「すごいすごい！　とってもいい感じだよ、アリスさん。それじゃあ次は――」
　アスナが教える淫語を、アリスは次々に吸収していく。身体のセクシャルな部位の名前を手始めに、性行為に関するプレイの名称や、自らの淫らさを顕す侮蔑的な言葉の使い方まで――時折、『キリトのちんぽとの間接キス』を交わして互いの唇を湿らせながら、アスナは様々な言葉をアリスへ伝授した。
「――よし、これくらい覚えれば大丈夫かな……アリスさん、とってもよくできました」
「ありがとうございます、アスナ。アスナの教え方もとても上手でしたよ」
「そう？　どうもありがとう。それじゃあ、次は応用編ね」
　飲み込みの早いアリスを褒めそやしつつ、アスナは彼女共々両手を空にすると、アリスをキリトの両脚の間へうつ伏せに倒れ込ませる。アリスの眼前にあるのは、先程まで握っていた、ワンポールテント状に押し上げられたシーツの一部分。その下にある物が何か察せられないほどアリスは愚かではなかったし、その味を知らぬほど初心でもなかった。
　布に包まれた雄柱をじっと見つめつつ、アリスはおとなしく次の指示を待つ。アスナがその腰をぽんぽんと軽く叩けば、アリスは心得た動作で尻を上げ、代わりに上体を伏せた。その様はまるで、獲物に喰らいかかる直前の女豹の如し。
「それじゃあ、アリスさん。今からアリスさんの大好きなモノを見せてあげる。だけど……レッスンが終わるまでは、触るのも舐めるのも

ダメ。ニオイだけで我慢してね」
　アスナはくすくすと笑いながら、アリスの上から覆い被さるようにして体を倒す。じゃれ合う、あるいは疑似交尾（マウンティング）を行う獣のようにアスナとアリスは肌と肌、そして腰と腰を触れあわせる。そして、アスナはシーツをさっと引き、その下に隠れていたモノを月光の下に引きずり出した。
「――はあっ……♥」
　淡い光を貫いてそそり立つ、雄々しく凶暴な逸物。薄布によってどうにか遮られていた精臭と唾液の混合臭気に嗅覚を蹂躙され、アリスは我知らず恍惚の媚声を漏らしていた。
　アスナが残した唾液の痕跡をまとい、天へと向けて堂々と反り返った肉の柱。それを目の前にしてゴクリと喉を鳴らしたのは、果たしてアスナだったか、あるいはアリスだったか。
「レッスン2よ、アリスさん。キリトくんのおちんぽを見ながら、私の言うことを復唱してね。
　今度はちょっと長めにいくから、頑張ってついてきてね」
「はい……わかりました、アスナ」
「じゃあ、早速始めるわね」
　アリスの耳にかかった金色の髪をそっと掻き上げながら、アスナは彼女の耳元に唇を寄せた。
　恍惚に蕩けたアリスの瞳と、情欲に燃えるアスナの瞳が、太い肉の柱越しにキリトと視線を絡ませる。もし、今ここでキリトが無理矢理襲いかかっても二人は拒もうとはしないだろう。いや、むしろ大いに悦んで受け入れてくれるに違いない。それでも、今目の前で二匹の雌が繰り広げる誘惑のショータイムを中断させるのはあまりに惜しいと言わざるを得ない。
　夫より静止の声がかからないことを確認したかったのだろう。アスナはほんの少しだけ間を置いてから、ようやくレッスンを次の段階へと進めた。
「『私は、キリトくんの立派なちんぽが大好きな淫乱女です♥』」
「わっ……私は、キリトの立派なちんぽが大好きな、いっ、淫乱女です

……」

　キリトの耳にどうにか届くか、という程に微かな声で、アスナは己の下に組み敷いた金色の雌の耳元へそっと囁く。その囁きの言の葉がアリスの喉と舌を経由し、若干の躊躇いと多分の興奮を含んだ明瞭なる声音となって響く。

「『キリトくんの勃起おちんぽ様を見ているだけで、おまんこが濡れてしまいます♥』」

「キリトの、勃起おちんぽ様を間近で見ているだけで……おまんこが濡れてしまいます……♥」

「『私のお口まんこも、けつまんこも、おまんこも、全部キリトくん専用の精液便所です♥』」

「私のお口まんこも、けつまんこも、おまんこも……全部、キリト専用の精液便所です♥」

「『おちんちんがイライラしたり、金玉をすっきりさせたくなったら、いつでもどこでも股を開かせていただきます♥』」

「おちんちんがイライラしたり、金玉をすっきりさせたくなったら、いつでもどこでも股を開かせていただきます♥」

「『キリトくんが満足するまでらぶらぶレイプして、安いオナホールみたいに使い捨ててください♥』」

「キリトが満足するまでらぶらぶレイプして、安いオナホールみたいに使い捨ててください♥」

　言葉を紡いだ吐息が肉棒の茎にかかるほどの至近距離で、アスナとアリスは淫らな口上を述べる。

　上気した頬を赤く染め、自己暗示めいた行為に興奮を覚えさせられながら、自らの言葉で自らを堕としていく。ステイシア神の化身として、そして整合騎士として、それはあまりにふさわしからざる行為。だがそれ故に、二人は己の内にある〝雌〟の本質をより深く感じさせられてしまう。

　携えた剣、纏う鎧、捨てられぬ立場、抱えた事情――その何もかもが、閨の内ではただ只管に無為。この場に於いては、ただ愛しい者と肌を重ね、原始的で本能的な快感を貪りながら交わり合う事だけが全

て。
　愛情に裏打ちされた肉欲と、肉欲によって高められる愛情を下半身に感じながら、キリトはそっと両手を伸ばし、可愛らしい二人の雌嫁の頭をそっと撫でた。
「よかったね、アリスさん。『じょうずにおちんぽ媚び媚びできて、えらいえらい』って、キリトくんが褒めてくれてるよ
　レッスン2、よくできました」
「ありがとうございます、アスナ、キリト……。ですが、このような行為で褒められるのは……それこそ褒められたモノでは無い気がしますが……」
「それじゃあ、もうやめる？」
「……いえ、もう少しだけ教えてもらえませんか。アスナ」
　艶めく金色の髪を男の掌に委ねたまま、アリスはしっとりと微笑む。眼前にそびえ立つ雄の象徴をじっと見つめ、放たれる劣情の香りをたっぷりと吸い込んで言の葉へと変えながら。
「不思議です……。猛々しい程に大きく、おぞましさすら覚える程に凶悪な外見をしているのに……これがキリトの一部分だというだけで、目を離せなくなってしまいます……。
　こうしていると、騎士として……いえ、一介の子女としても相応しくない程に淫らではしたない情動が……。キリトの思うさまに我が身を弄ばれ、内に滾る劣情を余すところなくぶつけられたいという欲求が何処かよりふつふつと湧き出でてくるのです……。
　……本当に。私は、どうにかなってしまったのでしょうか……」
　ほんの少しの不安と戸惑いが入り交じったまま紡がれる淫らな睦言が、雄の本能を凶悪な程に駆り立てていることをアリスは知るまい。そのすぐ隣にいるアスナが、何もかも心得たような妖艶な笑みを浮かべているのは、やはり経験の差というものだろう。
「ふふ、確かに。アリスさんの言うとおり、キリトくんのおちんぽを見てると……頭の中、えっちなことでいっぱいになっちゃうよね」
「アスナも、そうなのですか？」
「ええ。私はもちろん、ここにいる女の子達はみんなそうだよ、アリス

さん。

自由で、淫らで、遠慮も我慢も必要ない。清らかな淑女のようにも、乱れた雌豚のようにもなっていい……だって、ここはそういう場所なんだから」

アリスの耳たぶを甘く噛みながら、アスナは小型のウィンドウを呼び出してキリトの肉棒の真横の空間に配置すると、そのまま一つの画像ファイルを表示する。

直後、眼前に映し出されたモノを見て、アリスは驚愕に目を見開いた。

「アスナ……こ、この姿は……」

「驚いた？　キリトくん以外の人にこの画像を見せるのは、これが初めてなんだけど……アリスさんが期待通りの反応をしてくれて嬉しいわ」

素焼きのレンガとモルタルを積み重ねて作ったと思しき素朴な壁。それを背景に従えて写っているのは、淡いミルクティー色をした長い髪の少女――アスナ。ただ、その佇まいは、アリスの知るアスナの性格や気性からは大きくかけ離れていた。

閨に侍る時は別として、普段のアスナは露出の多い衣服を好んでいない事はアリスも知っている。しかし、画像の中に写るアスナの姿はその正反対。

上半身に纏う布地は、首の後ろから胸へとかけて布地がX字に交差するホルターネック型のトップスのみ。それは、バストトップ部分を隠すという役目はおざなりにこなし、むしろ豊かな白い双丘が形作る谷間をより一層強調するという目的を果たす事だけを重視して作られた扇情的な衣だ。

言わずもがな、腰から下の露出具合も上半身に負けてはいない。非常に丈の短いスカートと見間違えてしまうほどに大胆にカットされたホットパンツによって、どうにかこうにか隠された腰回り。見えていないのはそれこそ股座から太ももの付け根を通る細いラインくらいなもので、眩しい両脚はもちろんのこと、普段のアスナなら水着姿であっても秘しているであろう下腹部の縁エリアや、ぷりんとした尻

の割れ目が思い切り露わにされていた。
「綺麗でしょう、ここのタトゥー。これね、私が自分でデザインして……キリトくんに刻んでもらったの」
「アスナが、自分で……」
ホットパンツの直上から、へその下に至るまでの領域に堂々と刻み込まれた黒いタトゥーを指さすアスナの声音はどこまでも甘い。
曲線状にデフォルメされた子宮の図に、二重のハートマークを組み合わせて描かれた大ぶりなメイン絵柄。その左右に刻み込まれた天使の羽の図柄と共に、タトゥーはアスナの下腹部を横断するように刻まれている。更にハートと羽の後ろには、黒いツタに絡め取られた剣の鞘が二つ描かれ、意味深なシンメトリーを形成していた。
「アリスさん、この羽の所。ちょっと小さいんだけど……何か書いてあるの、見える？」
「はい。これは……神聖文字（アルファベット）……ですか？」
「ええ、そう。これを向かって左から一文字ずつ拾っていくとね……『旦那様（キリトくん）専用まんこ穴』っていう意味の文になるの」
くすくすと笑いながら、アスナは羽の各所に隠すように彫り込まれたアルファベットを一文字ずつ指さしていく。
「最初はね、『２４時間３６５日いつでも使用大歓迎なキリトくん専用ザーメン吐き捨て無料便女♥』にしようと思ったんだけど、さすがに長すぎて収まらなかったから……色々削って今の形に落ち着いたの」
次々と放たれる予想外の言葉に、アリスが碧い瞳を白黒とさせる。その合間に、アスナはウィンドウを操作して次の画像を表示させた。
「こっちも見てみて。これ、さっきの『私』を後ろから見たときの画像だよ」
「これはっ……」
映し出された画像に、アリスは思わず息を呑む。
上半身の衣服を脱ぎ捨て、両腕と長い髪を体の前に持ってくることではっきりと見えるようになったアスナの背中。きめの細かい白さと清らかさを誇っていたそこは、背中一面を覆い尽くすように描かれたタトゥーを際立たせるためのキャンバスと化していた。

中央に鎮座するのは、ほとんど裸に近い格好で両脚を揃えて座り込む女神の姿。黒薔薇、蓮、百合の花、そして細い蔦が女神の胸や股座を飾り、全てが晒されることをかろうじて防いでいた。

どこかアミュスフィアに似たアクセサリで両目を覆い隠し、微笑む口元だけを露わにした女神は、体の前で両手を組んで何者かの為に祈りを捧げている。女神の背中から生えた一対の白い翼はアスナの肩甲骨を覆うように大きく描かれており、その片翼の内には両刃の剣を一振りずつ抱いていた。

抜き身の姿を晒す剣の柄には鎖が巻かれ、その鎖が、祈り捧ぐ女神の両手に絡みつきながら、女神と二振りの剣を繋いでいた。

見ようによっては、剣が女神を拘束しているようにも、あるいは女神が剣を縛り付けているようにも見える変わった図柄だ。

「すごいでしょ？　この女神様は、リズにデザインしてもらったの。そして、こっちの下の方にあるのは、私とシノのんの共同考案作だよ」

すす、と指先を動かしたアスナが示す先にあるのは、ホットパンツの少し上に刻まれたタトゥー。尻と腰の境目に配置されたそのタトゥーに描かれているのは、交差する二本の鍵と錠前。尻肉のボリュームを強調するように左右へ広げられたリボン状の図柄には、『私を犯して、旦那様♥』（Fuck me Please, My darling）という意味の英文が白抜き文字ではっきりと描かれていた。

「時々、この姿でね……キリトくんにお尻を揉み拉かれながら、ここでデートしてるんだよ。

『私はちんぽをまんこにハメてもらう事だけ考えて生きてる、キリトくん専用クソビッチです』って、すれ違う人みんなにアピールする妄想をしながら歩くのがすっごく愉しくて……ほんと、クセになっちゃう……♥」

ゾクゾクとするほどに官能的な声音が、アスナがその行為を心底楽しんでいる事をはっきりと示していた。普段なら絶対にしないセクシャルなコーディネートで、多くの人が眉を顰めるような卑猥なタトゥーを見せ付けながら歩むという、下品な行為を。

自らの知るアスナのイメージとはかけ離れたその行為に困惑したアリスは、思わずキリトの方へ視線を向けてしまった。
「ほ、本当に……アスナにこのような格好をさせて……逢瀬を楽しんでいるのですか、キリト？」
「ああ。……といっても、アスナがすぐに俺を物陰に引っ張り込むもんだから、まともにデートできた試しが無いんだけどな。
なあ、アスナ？」
「そうだけど……それは、私のせいじゃなくて、キリトくんに責任があるよ」
「え、なんでだ？」
「だって、あんな風に私のお尻をぐにぐにって揉み拉きながら、『早くヤラせろよ、この精液便女』って視線で命令されちゃったら……きゅんきゅんって子宮が疼いて、我慢できなくなっちゃうんだもん……♥」
わざとらしくしなを作りながら甘えてみせるアスナの指先が、ウィンドウの片隅に偶然触れ、表示モードがスライドショーに切り替わる。そこに映し出されていくのは、アスナの痴態を収めた画像の数々だ。
いつ誰が通るともわからない路地裏で素っ裸になるアスナ。下腹部のタトゥーをアピールするように両脚を大きく広げた蹲踞の姿勢で、キリトの肉棒をしゃぶるアスナ。ねっとりとした口淫奉仕によって吐き出された精液を顔面にぶちまけられ、顔中を白く汚されながらも、恍惚の表情でピースサインを作るアスナ。壁に手をつかされ、バックから遠慮無しのピストン運動を叩き込まれる乱暴な快楽に溺れるアスナ。膣内射精（ナカダシ）された精液を拭き取る事も許されぬまま、射精直後のペニスへ丹念なお掃除フェラを捧げるアスナ。
そのどれもが、現実世界や《ＡＬＯ》等で見せる、清楚にして清廉、そして凛としたアスナの姿とはかけ離れている事にアリスは困惑する。
そのどれもが、愛しい男の閨に傅く時に見せる、淫猥にして好色、そして娼婦じみたアスナの姿としっかり重なる事にアリスは納得する。

「驚きました……。まるで、アスナが、新しいアスナに変わってしまったかのようで……」

「うーん……『新しい自分に変わった』というよりは、『ここでだけ見せられる、新しい一面を見つけた』っていう方が正しいかな。

さすがに、現実世界（リアルワールド）でこういう感じの……痕が残りそうなこととかをしようとは思わないし、実際してないでしょ？」

「……確かに。それもそうですね。

もし、現実世界のアスナがこんな刻印や格好をしていたら……おそらく今頃、キリトが袋叩きにされているでしょうから」

「おいおい、なんでそこで俺にとばっちりがくるんだよ、アリス……」

「当然でしょう。アスナをあそこまで変えてしまう原因など、お前以外に何があるというのですか。問題を根本から排除するのは基本中の基本です」

金木犀の剣でばっさりやられる想像でもしたのかだろうか、キリトは『勘弁してくれ』とでも言いたげな様子で頬を引きつらせる。

そんなキリトにアリスが悪戯猫めいた笑みを向ける光景をすぐ隣で楽しみながら、アスナは再び口を開いた。

「アリスさんだって、《ＡＬＯ》では羽を使って空を飛ぶし、《ＧＧＯ》では銃を使って敵を撃つけど……でも、それでアリスさんがアリスさんじゃなくなるわけではないでしょう？」

アスナの問いかけに、アリスはこくりと首を縦に振る。

「それと一緒よ。

ここで何をして、どんな風に振る舞ったって、私が私であることは変わらない。そして、アリスさんが立派な騎士であることは変わらないんだから、変に遠慮するだけ損よ。

……ね、キリトくん？」

アスナに水を向けられたキリトは、アリスの瞳を見つめながら力強く頷いた。

「教えてくれよ、アリス。アリスがここでしてみたいことや、ほしいものをさ。そういうのを叶えていくのが、最高権限管理者（オレ）の仕事なんだから。

できることなら、ここがなるべく『良い場所』になるようにしていきたいんだ。アリスやアスナ、ユイ、そしてそれにここに来てくれるみんなにとってのさ」

「キリト……」

碧い瞳の視線と、黒い瞳の視線が静かに絡み合う。端から見れば酒池肉林の極致のようなこの空間も、元を辿れば愛娘の為の遊び場にして、キリト自身が腕を磨くための場。そしてこの空間を、皆が心軽く安らげる場としても使えるように整備していくのが、今のキリトの大事な仕事だ。

たとえそれが肉の脳を持つ人間であっても、超高度演算システムに支えられたＡＩであっても、フラクトライトの魂を宿した人間であっても、もしくはそれ以外の何者かであっても――分け隔てなく、暖かで穏やかな日々を過ごせる場として。

「……お前が私を皆を気遣ってくれているのはわかります。

ですが……逸物をこんなに大きく張り詰めさせながら言われては、さすがに説得力に欠けるというものですよ。キリト」

「うっ……し、仕方ないだろ……。状況が状況なんだから……」

細い指先で裏筋に這わせ、つつ、としなやかな手つきでなで回しながら、アリスは最高権限管理者の男を揶揄する。そのままアリスが両腕を前へと伸ばせば、キリトは心得た仕草でその腕を掴み、アリスの体をぐいと引き寄せた。

アスナの体の下から引き抜かれたアリスは、キリトの胸板の上に頭を預けたまま肌と肌を密着させる。とくん、とくん、と鳴るキリトの鼓動の音がアリスの耳に響き、彼が今ここに生きている事を感じさせた。

「――とっくに良い場所となっていますよ、ここは」

ぽつり、と。どこか感慨深げに呟くアリスの背に腕を回し、キリトは彼女の体をそっと抱き寄せる。

「ここにいるのは、私を暖かく迎えてくれる者ばかりです。

奇異なる怪物であるかのように恐れる者も、壊れた機械だと蔑んだ眼差しを向ける者もいません」

「アリス……」
「それに何より、現実世界のように動きに不自由を感じる事もなければ、アルヴヘイムのように熟練度なるものに左右されることもありません。
思う存分、私の剣を振るえます」
どこか冗談めかした明るい口ぶりの中に、キリトは彼女が抱える苦難を感じ取ってしまう。
アンダーワールドと現実世界を繋ぐ希望の架け橋として、様々な立場の人間と会合を重ねる日々。聡いアリスのことだ。出会う相手が表向きには友好的な態度を取っていても、その裏に悪意や敵意が存在すれば、やはりそれとなく察してしまうのだろう。たとえそれが、不自由な鉄の体からフィードバックされる各種情報とカメラセンサー越しにだとしてもだ。
多くの者が愛し、守り抜いたあの世界に大手を振って帰る事が出来るようになる日まで、アリスの戦いは続く。その戦いの合間、この場所で過ごす時間が一時の癒やしとなるのであれば、キリトにとってこんなに嬉しい事はなかった。
「ですが、お前がこの世界をもっと良くしていくというのであれば……この世界に集う者の一人として、もう少しワガママを言ってみることにしましょう」
「おう、どんと来い」
「さしあたっては……金木犀の剣の武装完全支配術を使えるようにしてもらえますか？　近々本気で手合わせがしたいと、リーファに頼まれていますので」
「……あー。この間、スグのやつが『お兄ちゃん、今度エンペラーソード貸して！』って急に言ってきた理由がやっとわかった……」
抜群の斬れ味を誇る大業物である上に破壊不能属性まで帯びた金木犀の剣に、真正面からぶつかって対抗できる剣は限られる。たとえ与えるダメージ量が互角でも、耐久値の差で剣をへし折られて敗北する可能性があまりに大きいからだ。
苛烈なる剣客同士の斬り合いを完遂したければ、レジェンダリー

ウェポンであるエクスキャリバーや、それと同格の剣であるエンペラーソードあたりでなければ難しいと言わざるを得ない。
　都合のいいことに、金木犀の剣を使用可能にする練習がてら、どちらもこの空間で使用するための『写し』を作成済みだった。
　あとは武装完全支配術だが、ザ・シード規格の根幹部分にデフォルトで組み込まれているソードスキルやその発展系であるオリジナルソードスキルとは違って、術や技そのものをそっくりそのまま移植してくる事は難しい。とはいえ、こちらはパーティクル系の制御と当たり判定、ダメージ量を調整すれば限りなく近い物を構築可能だろう――というような具合にざっくりとしたプランを立て、キリトは頷いた。
「わかった。なんとかしてみるよ、アリス。武装完全支配術に関しては、近い感じに再現するって形になると思うから……あとでテストに協力してくれ」
「それぐらいお安いご用です。期待していますよ、キリト。
　……それと、ワガママついでにもうひとつ、お前に聞きたいことがあるのですが……」
「ん？」
「その……お前と褲を共にするときは、いつもお前に可愛がってもらって、腰砕けにされてばかりです。
　今夜は、わ、私がお前の上に跨がり、淫売のように浅ましく腰を振りながら、お、おっ……おちんぽを気持ちよくしてあげたいと思うのですが……いかがでしょうか」
「――是非、頼む」
　習ったばかりの淫語を織り交ぜながらのおずおずとした誘いに、キリトは一も二も無く頷く。若干食い気味のその勢いに目を丸くしつつも、アリスは『承知しました』と返答し、ゆっくりと体を起こした。
「レッスンの続きをお願いできますか？　アスナ」
「よろこんで。レッスン内容は『キリトくんを喜ばせる体の使い方』でいい？」
「ええ。ちょうど、その技を学びたいと思っていたところです」

同様に体を起こしたアスナは、そのままアリスの背後へ回り、恥ずかしげに頬を染めた女騎士の体を後ろから抱きしめた。
「はーい。アリスさん、まずはそのままゆっくり腰を下ろして。キリトくんのおちんちんが、アリスさんのお腹のすぐ前に来るようにね」
「このあたり、ですか……？」
キリトの体を挟み込むように脚を広げたアリスは、ゆっくりと腰を下ろし、そしてほんの少しだけ体を前に出した。そびえる太い肉棒がアリスの下腹部に触れる中、アリスの背後にするりと陣取ったアスナもベッドの上へと座り直す。ちょうど、キリトの肉棒とアスナの体で、アリスを前後から挟み込むような体勢だった。
「そうそう、上手よアリスさん。さあて、次は――」
アリスの背中側から抱きつくようにしながら、アスナは彼女の耳元に唇を寄せ、微かな声で何事かを囁く。その声はキリトには聞き取れないほどに微かではあったが、アスナの顔に浮かぶ魔女めいた妖しい笑みから察するに、同じ雄に身を捧げた雌へ淫靡な振る舞い方を伝授している事は間違いないだろう。
「――どう？　できそう？」
「ええ、アスナ。やってみます。アスナが教えてくれたことを……私自身の、言葉で」
「その意気よ、アリスさん。ここで応援してあげるから、頑張ってね」
そういって、アスナはアリスのうなじに顔を埋めるようにして口づける。それと同時に、アリスは指先でキリトの逸物を捉える。肉竿を下から上へとゆっくりと撫で上げながら、アリスの指はやがて亀頭のてっぺんへ。やがて、一番先っぽ、一番高い所へ辿り着いた指先が、その高さを維持したままアリスの腹部へと触れた。
その仕草は、アスナが教えた『ここまで挿入る』というアピールに他ならない。
「――見えますか、キリト。私は今から、こんなに奥深くまで貫かれてしまうのですよ。
お前の雄々しい逸物……太くて、大きくて、私もアスナも容赦なく

狂わせてしまう魔性のおちんぽの誘惑に負けて……おまんこを自ら差し出してしまうのです……♥

いずれお前の子を孕む為の場所へ、お前のザーメンをたっぷりと叩きつけて、雄のニオイと子種の感触をたっぷりと覚え込ませてくださいと……浅ましく乞い願わされてしまうのですよ……♥」

習ったばかりの卑猥な言葉と共にアリスは僅かに腰を上下させ、柔らかな下腹部をキリトの肉棒に擦り当てる。ＶＲ空間の仕様上、陰毛も何も存在しない恥丘のつるりとした感触でキリトの獣欲を静かに掻き立てながら。

その背後から絡みつくアスナがゆっくりと顔を上げ、淑女とはほど遠い情欲を瞳に宿しながら、アリスの側で妖艶に囁く。

「アリスさん、いいの？　騎乗位って、自分の気持ちいい所へ好きなように当てられちゃうから……淫乱整合騎士さんのおまんこ弱点（ウィークポイント）、女の子攻略組のトップおちんぽ様にぜーんぶバレちゃうよ？」

「そして最終的に、ちんぽで言うことを聞かされるような女に――アスナのような最低（さいこう）の淫蕩妻へ堕とされてしまうのでしょう？　……であれば、なんの問題もありません」

アスナと絡み合い、揶揄し合いながら、アリスはゆっくりと腰を上げる。開いた膝をベッドにつけ、キリトの胸板に両手を当てて支えとしながら、開きっぱなしの股の間を肉棒の先へと持っていく。アスナの愛撫と言葉、そして今までのお預けでたっぷりと興奮させられていた蜜壺から愛液がこぼれ落ち、張り詰めた亀頭の先へ、たちり、たちりと滴っていく。

「どんどん溢れてくるぞ、アリス……」

「未来の夫を想って股穴を濡らす、はしたない女は嫌いですか？　キリト」

「……大好きです」

自分で口にした挑発の言葉によって頬を真っ赤に染めたまま、アリスは満足げに頷く。

そんな彼女の下半身に向けて両手を伸ばしたキリトは、そのままアリスの腰を掴んでしっかりと支える。あくまで支えるだけで、こちら

から無理に引き寄せるような事はしない。逸物は早くアリスの柔肉に包まれたいと逸るが、今はアリスが責めるターンである。それを遮るような事はしたくなかった。

快楽の涙を流す蜜壺の入り口へ固い亀頭をしっかりと宛がい――アリスはゆっくりと腰を落とした。

「――んぅっ、あ、くぅうぁっ……♥」

みちり、みちりと粘着質な水音を奏でながら、アリスの体が肉棒を飲み込んでいく。とうの昔に処女（ハジメテ）の身ではなくなっているとは言え、みっちりと張り出した立派な亀頭を受け入れるのはいつだって容易な事では無い。

腰を掴んでサポートするキリト同様に、アリスの背中をそっと支えながら、アスナは蕩々と囁く。

「とっても上手よ、アリスさん。すこーしずつ、すこーしずつ、体重をかけていって……キリトくんのおっきいの、おまんこでゆっくり包み込んであげて……♥」

「は、いっ……♥　んっ、んんっ、あふぃぅ……♥♥　んんんっ♥」

「その調子、その調子。キリトくんがしっかり支えてくれてるから……焦らなくても大丈夫だよ」

蜜壺を押し拡げられる感触が快楽の信号となってアリスの脳を支配し、女王然とした甘やかな囁きがアリスを導く。その導きに従うように、アリスはゆっくりと腰を下ろし――やがて、屹立する肉の柱を根元まで飲み込んだ。

腰と腰が触れあうのと同時に、キリトの肉剣の切っ先がアリスの肚の最も深い部分をどちゅりと穿った。

「ひゅ――――くひぃいいっ♥♥」

自分自身の体重によって、自分自身の子宮の入り口を押しつぶされる感触。すっかりキリトに開発されきった蜜壺は、亀頭とのハードなキスに酔い痴れる。

目の前で淫らな言葉を捧げ、指先でその大きさを改めて確認してからの挿入。どれだけ逞しい剛直を受け入れているのか、否が応にも理解させられながらの交合に締まりの無い嬌声を上げながら、アリスの

フラクトライトは改めて自覚する。自分はもうどうしようもないほどに――この男のオンナにされてしまったのだと。

「はあっ、はあっ……♥　ん、んぅっ……♥　なんと凶悪なのでしょう、キリト……お前の、おちんぽさま、はぁ……♥

挿入れただけ、で……あっ、ふぅ、ふぅっ……私のナカを拡し広げて、お前の形を覚え込ませてしまいます……♥♥」

「そういうアリスのナカだって、すごいぞ。さっきから、俺のをぎちぎちと締め付けてきて……」

「いっ、言わないで、ください……♥」

キリトの胸の上に掌を置いて支えとしながら、アリスは荒くなった呼吸を整えようと試みる。そうでもしなければ、今すぐにでも腰が抜け、体が倒れ込んでしまいそうだ。

ぴんと張り詰めたアリスの背に指を這わせながら、アスナはアリスにしか聞き取れない程の小さな声で囁く。

「アリスさん、動けそう？　無理そうなら、キリトくんにお願いしてもいいんだよ？」

「ありがとうございます、アスナ……ですが、んっ♥　今日は、私が……キリトを、気持ちよくすると決めたのです……♥」

両腕と膝に力を込め、アリスはどうにか己の腰を持ち上げ、上下に動作させる。亀の歩みのようなそのストロークは、別段キリトを焦らしているわけではなく、単にアリスがこれ以上早く動けないというだけだ。

雄を求めてうねる肉襞が太いカリ首に擦られ、愛液の滴を溢れさせる。その滴でコーティングされた肉竿は、アリスの膣道を征服したことをアピールするかのように、彼女の股の間から悠々と姿を現し――そして、再びアリスの胎内へと消えていく。

「あぅっ♥　あ――んんっ♥　はふ、ふゅうううっ♥♥

キリト、キリトぉ……♥♥　おまっ、えのぉ……♥　あっ、おっきいのが、奥、奥にぃっ♥♥　あっ、あっ――くうううう♥」

アリスが腰を振る度に、肉棒を突き込まれた蜜壺から響く、どちゅっ、どちゅっという重たい水音。その音に昂ぶらぬ雄がどこにい

よう。もっとも、その音を聞ける雄はこの世に一人しかいないのだが。

己の上で健気に腰を振る女を両手で支えるキリトの代わりに、アスナは両手を後ろから回し、アリスの乳房を揉み拉く。掌にしっかりとボリュームを感じ、薄ピンク色の乳首を指先でつまみ、夫の手に代わって苛め弄ぶ。

「はっ♥はあんんっ♥♥　いひ、いまぁ、だ――っめえぇっ♥♥　今、おっぱいダメ、だめぇっ♥♥　アスナぁ♥アスナぁあ♥　あ、んぅうう♥」

「ふふ、おっぱいも敏感なんだね、アリスさん。本当、キリトくんにぴったりの『ちんぽケース』……ううん、『ちんぽ鞘』って言った方がアリスさんっぽいかな？」

「ちっ♥ちんぽ、ざや……♥　あぅ、ぅんんっ♥　わ、私が♥　はひゅっ、くひぃ♥　キリトの、ちんぽ鞘ぁ……♥♥」

「そうそう。アリスさんはキリトくんのちんぽ鞘♥　太くてつよ～い立派なちんぽをおさめて、鎮めてあげるためだけに生まれてきた――綺麗な綺麗なちんぽ鞘だよ♥」

自らの体を『肉棒（ちんぽ）を入れる為の鞘』などと称されれば、大抵の人間は怒るだろう。ただ、この爛れきった巣の中に於いては、それは最大級の賛辞に等しい。

徐々に焦点の合わなくなってきた瞳でなんとかキリトを見つめながら、アリスは淫らに舞い踊る。半ば無意識に上下する腰の動きが、蜜壺の中に迎え入れた肉棒に、アリスの感じる場所（ウィークポイント）を丁寧に教え込んでいく。もはや目をつぶっていても、キリトは容易にアリスを堕としてしまうだろう。

「本当に綺麗だよ、アリス。いつまでだって眺めてたいくらいだ」

「んく♥あっ♥　そう、言われては……ぁあっ♥　がっ、頑張るほかにぃ♥なっいでは♥ありませっ――んかぁああ♥♥」

乱れた金色の髪が幻想的に揺れ、白い肌から玉のような汗が飛ぶ。口の端から零れる唾液が首を伝い落ちていけば、その滴をアスナがぺろりと舐めとり、そのまま首筋に口づける。

雄の象徴たる立派な肉棒に貫かれて鳴く雌と、それを支え煽る雌。二匹の雌が放つ欲情の香気が四方を薄布に包まれた寝台の中に充満し、雄が隠し持つ凶暴な獣性（ほんのう）を昂ぶらせていく。

普段は理性という鎖で縛られ、抑え込まれた内なる獣。数多の雌を喰らい雄々しく成長したその獣が固い鎖を引きちぎらんとする中、先に限界を迎えたのは、淫らに腰を振るアリスの方だった。

「――ぇうっ、だっ、だめぇ♥　まだ……だめ、なの、にぃひいいいいっ♥　あっ♥あっ♥ああ〝っ♥　んっぅうう♥　ひぃ、ひいいいっ♥♥

おっきいの、おっきぃのが――はぅ、ひいぃい♥♥」

「……っと。無理に我慢しなくていいんだぞ、アリス……もうイキそうなんだろ？」

「ですが、ですが……♥　ああっ♥　おまっ――おまえが、まだぁ♥あっ♥ひぃ、ひいいいんっ♥♥」

ここで達してしまったら、こんな風に腰を振ってはいられない。それを本能的に理解しながら、アリスは腰の動きを止められない。愛しい相手を気持ちよくさせたいというのが本能ならば、愛しい相手から得られる快楽を貪りたいというのもまた本能だからだ。

自分の奉仕でキリトをイかせると決意した以上、自分だけが達するわけにはいかない。アリスが頑なに耐えようとする理由はそれだけだ。たとえ、アリス自身がいつ限界を迎えてもおかしくない状態だとしてもだ。

キリトもアスナも、アリスの頑ななまでの真面目さを愛おしく思い――そう思うが故に、アリスをこれ以上我慢させるつもりは無かった。

「アリスさん、いっぱい頑張ったね。とってもえらいよ……♥」

「あ、すな……♥」

「だから、あげるね――キリトくんからの、ご褒美」

長く連れ添った手練れ同士ともなれば、かけ声も、アイコンタクトすらも必要なく、ただ心のみを以て連携を為す。

アスナの囁きが、ほんの一瞬、アリスの意識を『上』へと集中させ、彼女の動きを鈍らせる。上がりきった腰が降りるか降りまいかとい

う絶妙なタイミングで作られた隙は、無言の連携を通してキリトへと受け渡され――キリトはこの時初めて、アリスの腰をぐいと引き寄せ、彼女の弱点を思い切り突き上げた

「あ――――――あ♥あっ♥ぁっ♥――いっ、いきゅ……ううううううううううううううう♥♥♥」

タイミングも何もかも自分で制御していた所に突如襲い来る、キリトの遠慮も何も無い一撃。

許容量をオーバーフローした快楽の信号はアリスの意識を二、三度吹っ飛ばし、そして無理矢理覚醒させる。絶頂という水面に幾度となく叩きつけられ、力尽くで引き上げられるような感覚の錯綜の中、アリスは張り詰めた弓のように背中を伸ばし、びくりびくりと体を震わせる。

責める相手を誘導し、隙を見いだし、強烈なカウンターを見舞う。夫婦共同で行われた女殺しの『パリィ』はアリスの弱点を見事に貫き、必死の守りを一気に崩壊させた。

「――ぴっ♥いっ♥　あっ♥あひゅうっ……♥　……ああっ♥……あふっ♥　だ、めって……だめってぇ……言っ……♥♥」

「悪い悪い、アリス。頑張ってるアリスがあまりにも可愛らしくてさ……我慢できなかった」

「ひどい、人……♥　ほんとうに、おまえは……♥　あっ……♥」

たった一突きで女の悦楽を味わわされたアリスは、悔しさをにじませながらキリトを睨む。もっともその顔はだらしなく緩みきっており、威圧感も何も無かったのだが。

あふれ出る愛の滴がキリトの下腹部へ伝い落ちる。キリトの逸物を深々と咥え込んだ膣肉は、ぐちゅぐちゅに濡れ乱れながら肉棒にまとわりついては精液を乞い願うが、キリトは堪えきる事に成功した。

予想外のタイミングで与えられた快楽に、アリスは碧い瞳を虚ろに蕩けさせ、やがてぐったりと脱力する。鍛錬の時とは趣の異なる荒い息をこぼすアリスの体を、アスナは背後からそっと抱き寄せた。

「おいで、アリスさん。今ので自分から動くの、大変になっちゃったでしょ？　私も同じ女の子だから、わかっちゃうもん。

だから……キリトくんに、可愛がってもらお？」

「っ……♥　はい……♥」

アスナに導かれるようにして、アリスは体を後ろへ倒す。股座から陰茎を引き抜くとき、ほんの少しだけ寂しげな表情をしたのがまた愛おしい。そのままベッドに仰向けに倒れ込んだアリスは、どうにかこうにか両脚を開いた。

「きて、ください……キリト……♥　もう一度、私の中に……♥」

「ああ、アリス」

鎧も何もかも剥ぎ取ってしまったアリスの裸身にどこか華奢な印象を覚えてしまうのは、その体を抱く時の感触を覚えているからだろうか。

アリスが広げた脚の間に体を滑り込ませるようにしながら、キリトは白い肌の上にそっと覆い被さる。ほんの少し前まで自分の上で腰を振り、精を搾り取ろうと健気に頑張っていた可愛らしい恋人を、今度は己の下へ組み敷く。

「……キスしていいか、アリス」

「ええ……お前がしたいというのなら、喜んで……♥」

アリスの瞼が、碧い瞳を覆い隠す。無防備に差し出された唇に、キリトは己の唇を重ねた。

アリスの体を両腕で抱き寄せながら、ぷるんと艶めく彼女の唇を味わう。啄み合うような浅い口づけの雨を降らせ、舌先で突き、引き出したアリスの舌を吸い上げ、代わりに自分の唾液を送り込む。

ディープキスに溺れ、流し込まれる男の唾をこくこくと飲み込みながら、アリスはキリトの体を抱きしめ返す。もう離さないという意思が透けて見えるほどに、強く。

互いの唇を互いの唇で塞いで睦み合う。恋人だけに許された時間を堪能しながら、キリトは肉棒の先端をアリスの蜜壺へと宛てがい――彼女の望むとおり、もう一度深々と貫いた。

「んっ――――んぅうっ!!　んうっ、んうううう♥♥」

塞がれた唇の隙間から、アリスの歓喜の声が漏れる。つい先程達したばかりの肉穴は、たっぷりの熱と汁を以てキリトの逸物を迎え入れ

る。遠慮無しに締め付ける肉襞を力尽くで押しのけながら、キリトは腰を前へ前へと突き出し、やがて己の逸物を根元まで押し込んだ。

ぴくり、ぴくりと小さく震えるアリスの体。太く固い肉の杭で拘束され、子を宿す場所の入り口を愛しい男の亀頭に征服されながらのディープキスに、アリスは己の存在そのものが蕩けていきそうな程に深い快感を覚える。

それから唇と唇が離れるまで、時計の秒針が三度は回っただろうか。その間、キリトは一度たりとも腰を動かさなかったというのに、アリスは既に体の奥底から湧き出る歓びと快楽に溺れかけていた。

「――――ぷは、はあっ……♥　はあっ、はぁっ……♥♥」

垂直に伸びた唾液の細い柱の群れが、あっという間に千切れていく。長いキスから解放された口の中に新鮮な空気がたっぷりと滑り込むのと同時に、アリスは一抹の寂しさを覚えずにいられない。肌を重ね、肉の穴と柱で繋がり合っているというのに、唇一つが離れただけでこの体たらくとは――己の弱さを、アリスは自覚せざるを得ない。

ただ、かつての己なら整合騎士には不要な物として唾棄していたであろうその弱さを、今のアリスはどこか心地よく感じていた。

「……動くぞ、アリス」

「はい……♥」

己の体をキツく抱きしめる男を見上げながら、アリスはこくりと頷く。彼の黒い瞳に映る、金髪碧眼の娘。誇り高き整合騎士でも、アンダーワールドとリアルワールドを結ぶ使者でもなく、ただ一人の女として愛しい男との交わりを求めるごく普通の娘の姿がそこにはあった。

劣情に満ち満ちた眼差しを捧げてくる愛しき女を組み敷いたまま、キリトはゆっくりと腰を引き――そして再び、蜜壺の最奥目掛けて突き込んだ。

「ふぉっ――あ〝っ♥んっ♥　あぁ♥っぁあ♥くひぃいい♥　おっ♥　お〝くぅ〝っ♥　きりとのぉ♥すき、しゅひぃっ♥♥」

最初の騎乗位とキスハメで、慣らしは十分。そう判断できるほどに

濡れぼそった雌穴へ、キリトは容赦の無い連続ピストンを叩き込んでいく。アリスが無意識に組んだ両手が首の後ろに回っているおかげで体を離すことが出来ず、その動きは腰だけのものになってしまうが、今のアリスを狂わせ堕とすにはそれだけできれば余裕だった。

なにせ、どこを責めれば鳴き、どこを擦れば身を震わすか、先程アリス自身が教えてくれている。あとはそれをなぞるようにして、たっぷりと可愛がってやればいいだけのことだ。

「あぁっ♥そこ、そこはぁっ♥♥　はひゅ――だっ、めえぇ♥♥　おほ、ほひぃいっ♥♥

――あっ、んんうううう♥　また、またきちゃ〝う〟♥　まらおっきい〟の、ぎちゃうううううう♥♥」

「そんなとこだろうと……思ったよ、っと！」

一度は引いた絶頂の波が、最初以上の威力を伴ってアリスを襲う。そのタイミングを狙い、キリトは彼女の子宮口少し手前にある敏感な部分を集中的に刺激するように、ぐっと腰を押し込んだ。それが彼女の限界を容易に飛び越える一撃だったのは言うまでも無いだろう。

「あっ――♥あっ♥あっあああぁぁ～～～あ〟ぁあ〟ーっ〟っ♥♥　いひ、やぁ〟、んんいいいいいいっっ♥♥♥」

呂律の回らぬ口から紡がれる、意味を成さない喘ぎ声の群れ。貪欲に収縮する膣肉の感触を味わうかのように、腰をぴったりとくっつけたまま動きを止めたキリトとは対照的に、アリスは男の腕の中でびくびくと身もだえながら股座より愛液をまき散らす。

乱れた髪を指で梳き、耳元で睦言を囁きながら、キリトはじっくりと待つ。絶頂に至って朦朧となったアリスの意識が、こちら側に帰ってくるのを。

「はひゅっ、はひゅっ……♥　きひ……きりとぉ……♥　たひゅ、たすけへ、くださ、い……♥

わたっ、ひぃ♥　あふっ♥　わたし……壊れて、しまいそう……♥

♥　おまえに、こわされてしまい、ます……♥♥」

問。体の下で喘ぐ愛しい雌に、普段の凛々しい姿からは想像も出来ぬ蕩けきった表情で、男を狂わすようなこと言われてしまった際に耐

えきれる雄がいるか。
　答。いるわけがない。
「……ふぇっ、キリ――ひゃあああああっ!!」
　キリトの内なる軛が千切れたことを察することが出来たのは、騎士の直感か、あるいは女の本能か。しかして察せられたところでどうすることもできはしない。
「きゅひ♥あっう♥んひ♥　あっあっあああっ♥♥　おぐっ、おぶっ♥　だめ、れす♥♥だめです、きりっ、キリトぉぉっ♥♥」
　更に激しさを増しながら、アリスの弱点を幾度となく穿つキリトの肉棒。触れあう肉が伝えてくるたっぷりの愛情と狂おしいほどの快楽に灼かれた頭で、アリスは理解する。
　いままでは、味わわれていた。
　これからは、貪られるのだと。
「～～～あぁぁ〝ああ〝っ♥♥　あっああっ♥　あぅっあぉぅっ♥♥　きり、きり〝どぉっ♥♥　だめぇ♥だめで――ひゅっ、ひゅひぃいいいいいい♥♥♥」
　深く繋がったまま繰り返される、射精を目的とした早いピストン運動。裏筋の根元と陰嚢がアリスの蜜壺の縁に触れて、愛液の架け橋を引き連れていく。
　王侯貴族が使うために作られたベッドは、激しい突き込みを受けても軋み音一つ立てはしない。だがそれ故に、アリスは自らが上げる下品な喘ぎ声と、ぶつかり合う肉と肉の音をより正確に聞き取ってしまう。どこまでも浅ましく雄を求めてしまう、雌の本性。自らの内に眠っていたその本性を、無理矢理表に引きずり出してしまう運命の相手と一つになっているのだと自覚させられてしまう。
「お〝　ぅっ♥ひぃっ♥はひぃぃっ♥♥♥　あっあっあっ♥♥――あっ、あ〝　あああぁ～～～っ♥♥　まっ、へえ♥　まっ、まりゃいっへ♥　いってっ、しまいま〝　ぁあっ……♥♥」
「何回でもイッてくれ、アリス。何回でも……アリスの可愛い顔を、見せてくれよ……！」
「～～～～あぁあっ♥　あっ、そこ、だ――めえぇえぇえええ♥♥

あっあぁぁ〃　あぁ〃　ああ〃　ぁあ♥♥♥」

アリスを狂わせる、男の欲望を隠そうとしない激しい抽送。アリスが絶頂を迎える瞬間だけ動きを止め、その波が引き切るのをまたずに動き出す雄の象徴が、アリスの胎内に悦楽を次々に叩き込む。

組み敷かれる雌（オンナ）。組み敷く雄（オトコ）。性別という自分ではどうにもならぬ要素で、文字通り雌雄を決される閨という戦場。その只中で、アリスは無意識の内にキリトの体へ四肢を絡める。

幾度となくアリスを昇り詰めさせてきた肉棒が、陰嚢に滾る精汁を解き放たんとして更にサイズを増す。奇しくもその兆候と同時に、首筋に回した両手同様、細くしなやかな脚をキリトの腰に回してぎゅっと抱きついたその仕草が意味するところはたった一つ。

「――キリト♥はあっ♥キリト♥　わたしの……あぅう♥　なっ、ナカに、いっぱいくださ い♥　お前の、ちんぽで♥あっ♥んんぅうう♥　おまえの、濃くてぇっ、だいすきな精液で……私を――孕ませてくださいぃいっ♥♥♥」

覚えたばかりのおねだりを、アリスは必死に言葉として紡ぐ。それが、最後の呼び水となった。

「……っ！　アリ、ス……！　アリス!!」

愛しい女の名を呼びながら、キリトは最後の一突きをアリスの最も深い場所に叩きつける。限界まで張り詰めた亀頭が、きゅうきゅうと絡みつく肉壺をかき分けて子宮口に密着し――そして、噴き出した精液の奔流が、アリスの子宮へ襲いかかった。

「あ――あっ〃♥♥あ〃あっぁぁあ〃あっぁぁ♥♥♥　あちゅ、ぃひぃい♥♥♥　きへ、おくに来てぇ――あっあっぁぁあぁ〃あああぁ〃あぁあ♥♥♥　おにゃか、に、せーえきぃいひい♥♥♥　あっあ〃ぁっあ〃あぁああ♥♥♥♥」

どぷっ、どぷっ、という輸液音すら聞こえてきそうな程に重い、大量の射精。狭い膣を太い肉棒でこじ開け、小さな子宮口までを征服した者にだけ与えられる生殖の特権。雌の卵を、雄の精で、犯し喰らいて抱き尽くす。

手足の全てでキリトにしがみついたまま、アリスは叩きつけるよう

な射精の感覚に酔う。だらしなく開きっぱなしになった口からは涎が零れ、抱きしめ返された体がびくびくと震える。

正常位という密着度の高い体位。繋がったまま見つめ合い、注ぎ込む。見つめ合ったまま、注ぎ込まれる。ゾクゾクとする程の征服感に包まれながら、オンナの胎内にオトコの遺伝子を流し込む。

やがて、収まりきらなかった精液が膣壁と肉棒の僅かな合間から吹き出して逆流し、ベッドシーツにこぼれ落ちていく頃――キリトはようやく腰を動かし、肉棒をアリスの股穴から引き抜いた。

「……んぁ、ああっ……♥　はあっ、はあ……♥♥　キリト……あふ、う……キリト……♥」

「……おつかれ、アリス。すごく気持ちよかった……それに、すごく可愛らしかった」

頭を撫でつつ労るキリトの声が、朦朧としたアリスの耳には聞こえているのかいないのか。

体を起こしたキリトとは対照的に、どっぷりとした膣内射精に深い絶頂を味わわされたアリスは、四肢をぐったりと伸ばして横たわったままだ。開きっぱなしになった脚の間から精液を溢れ出させる姿はとてもエロティックで、射精したばかりの陰茎に更なる興奮の血を呼び集める。正直、今すぐにでも襲いかかってセカンドレイドを始めたいというのが本音だが――ほとんど初めての騎乗位に挑戦し、ここまで消耗した状態のアリスに覆い被さるのは無理を強いるようで若干気が引ける。

「さて、どうしたもんか……」

腕を組んだキリトが、どうしたものかとわざとらしく思い悩んでみせれば、求める声はすぐ側から聞こえてきた。

「――あら、キリトくん。もしかして『ちんぽ鞘』の代わりを探してたりするのかな？」

美の女神の化身と評しても過言では無い裸身を惜しげも無く晒しながら、一人の乙女がアリスの隣に身を横たえる。

「ああ、アスナ。アリスに休憩時間をあげたくてな。その間、相手をしてくれる子を探してるんだ」

「そうなんだ……それじゃあ……」

半身をベッドに預けたまま、アスナは片足を垂直に上げて膝裏に自らの腕を回した。目の前で行われていた交合の熱に当てられてどろどろに濡れたその場所は、夫以外には秘すべき場所。つまりはキリトが見るにも、あるいは使うにも何の問題の無い場所。

一匹目の雌を喰らったばかりだというのに、もう新たな雌を求める獰猛な雄に微笑みを捧げながら、アスナは誘惑する。

「私とか……どうかな？

深窓のお嬢様から一夜妻、キリトくん専用の最高級アファシスから『使い捨てちんぽケース』まで……よりどりみどりの遊びたい放題だよ？」

どこまでも甘く、なによりも妖しい、愛妻の囁き。薬指にはまった結婚指輪にそっと口づけると、アスナはその左手をキリトへ差しのばす。

キリトがその手を取らない理由など――どこを探しても見つけられるはずがなかった。

08―2．この素晴らしいネトゲの嫁は本当に祝福を!?

「――キーリートーくーんー♥」

もし、性愛と愛欲と夫婦愛を司る女神がいるとしたら、きっとこんな声をしているのだろう。ベッドの上に裸身を横たえ、片足を大きく上げた卑猥な姿勢で誘ってくるアスナの声に、キリトはそんな感慨を抱いていた。

「お待たせ、アスナ」

「もう……待たせすぎだよ、キリトくん」

目の前で別のオンナへの種付けを終えたばかりの男を甘やかになじりながら、アスナは背中をベッドにつけるようにして体を倒し、両脚を左右へ大きく開く。

股と両脚が描く『M』字のライン。その中央で露わになる蕩けきった秘裂。キリトの逸物がアリスの胎内を好き放題蹂躙している間、ずっとお預けを食らっていたアスナの蜜壺は、待ちきれないと言わんばかりにたっぷりと愛液を分泌しながら、薄ピンク色の媚肉をひくつかせていた。

「悪かったよ、アスナ。その分、今からしっかり可愛がってやるからな」

そう囁きながら、キリトはアスナの背中へ寄り添うように体を倒す。片方の腕はアスナの首の下へ。もう片方の腕はアスナの背の裏へ。愛妻の姿勢が崩れないようしっかりと支え――あるいは逃げられないようがっちりと固定し――てやれば、アスナは満足げな笑みを浮かべた。

男の腕の中に絡め取られた、清廉にして淫猥なる女神の体。アンダーワールド中の信仰を集めるステイシア神の体（アバター）で、アスナは愛しい男の体を抱きしめる。

「キリトくん……ねえ、キス、キスしよ……♥」

顔と顔の距離が縮まった絶妙のタイミングで放たれる、アスナのおねだり。頷いたキリトは、体ごと覆い被さったままアスナの唇を奪った。

ぷるぷるとした唇がキリトを出迎えたのも刹那、おずおずと差し出されたアスナの舌先がキリトの唇を突く。可愛らしいノックに応じて唇を開ければ、アスナの舌が貪欲にその隙間へ滑り込み、キリトの舌へ絡みつく。

「ん、ンふぅっ……♥」

助走や雰囲気作りの為のバードキスを必要としない、いきなりのディープキス。待たされた雌と、挑発された雄。内に滾る劣情をぶつけ合うかのように激しく舌を絡めあう。

アスナの舌がくみ上げた唾液は、キリトの口の中でミックスされ、重力に従って再びアスナの口内へと戻る。その混合液を嬉しそうに飲み干しながら、アスナはキスの感触に酔い痴れる。

同様に口づけを愉しみむ一方で、キリトは腰をゆっくりと動かし、屹立した肉槍の先端をアスナの雌華の入り口へと宛がう。つい先程、アリスへの種付けを為したばかりとは思えないほどに固く揺るがない肉棒は、いつでもアスナの膣内を犯せるだけの準備が整っていた。

そんな己の分身を『挿入する』という事を自分の口から宣言するため、キリトが一旦キスを終えようとしたその時だった。

「……っ!?　んっ！　んーんっ……♥　ら～……むぇっ♥♥」

舌と舌の繋がりが解かれることを本能的に察したアスナは、そうはさせまいとキリトの首に両手を回して抵抗しつつ、代わりに自分からキリトの逸物を受け入れるように腰を動かす。みちり、という独特の感触と共に亀頭の上半分がアスナの蜜壺へと沈む。

どうやら、アスナもキスハメがご所望らしい――そう判断したキリトは、舌を貪り合ったまま腰をぐいと進め、アスナの中に逸物を挿入した。先端から根元までを、一気に。

「――んっ！　んっ、んぅっ……んンぅうぅうぅうぅうぅう♥♥」

もう幾度となく繰り返されてきた行為であるというのに、キリトの

肉棒も、アスナの雌穴も、相手に飽きるということを知らない。
すっかりキリトのモノの形を覚え込まされた蜜壺は、無遠慮な挿入に怯えるようなことはせず、むしろきゅうきゅうと健気にまとわりついては愛しい男の挿入を歓迎する。ぎっちりと押し込まれた逸物の質量に負けて淵から溢れ出した愛液が、キリトが密着させた腰に付着し、陰茎の根元にべたりと張り付いた。
「んっ♥んっ♥　ん……んん、んぃぅぅうっ♥♥」
切なげに身動ぎするアスナの体を、キリトは全身でしっかりと押さえ込む。一番深いところでしっかりと繋がったまま動きを止め、互いの体を密着させる。
挿入自体は苛烈に行いつつ、その後はしっかりと時間を取り、アスナの体に己の分身のサイズを改めて記憶させる。無論、アスナも、他の女性達も、挿入直後にいきなり動き始めても何の問題も無い程度には使い込んでいるが、それはそれ、これはこれだ。
若さに任せて激しく貪り合う前の、ゆったりとした交歓。キリトも女性陣も、こうした睦み合いの時間を気に入っていた。
アスナの内に滾る熱が、肉棒を包み込むようにして伝わってくる。その感覚に心地よさを覚えながら、キリトは改めてキスを解く。さすがに満足したのか、今度ばかりはアスナもそれを止めようとはしなかった。
「ぷっ、はぁっ……はあっ……。なあ、アスナ」
「はぁっ、はあ……♥　な、なに、キリトくん……？」
「さっき……というか、挿れた時……ちょっとイッただろ」
抱擁を解きながら、キリトは上体を起こす。見下ろす視線の先では、慌てた様子のアスナが、羞恥で真っ赤に染まった顔を両手で覆い隠す所だった。
「……い、イッてない……から」
「本当か？　その割には、ずいぶん――」
「ほ、本当だよ！　私、挿れられただけで簡単にイクような、えっちな女の子じゃないんだからね！」
「ほう、ほう……」

恥ずかしがるアスナの体に手を這わせたキリトは、彼女の下腹部をそっと撫でる。自分の逸物が深々と突き刺さる場所、その最奥の更に少し奥の辺りを。いずれキリトの精を受けて子を育む場所、その直上に指先を触れさせてやれば、アスナの吐息が俄然荒くなる。まるで今すぐにでも排卵して、いずれやってくるキリトの精子達への捧げ物にしたいと言わんばかりに。

「今日のアスナは素直じゃないな。挿れただけであんなに体をびくびくさせて……しかもここは必死に絡みついてきたってのにさ」

「違うもん、違うもん……♥」

「違わない違わない。アリスみたいに気持ちよくなりたかったって、完全にバレてるんだよ。

だから……いつもみたいに、アスナの感じてる顔を見せてくれよ」

女神の顔を覆い隠す両手の上にキリトが己の両手を重ねれば、アスナはおずおずと両手を動かす。体の左右へ広げるように引かれていった手は、掌と掌を重ねて指先を絡め合う繋ぎ方――所謂「恋人つなぎ」の状態へ。

覆い隠すモノを奪われたアスナの顔は、やはり羞恥と興奮で熟れたリンゴのように真っ赤に染まっており、だらしなく緩んだ口元と共により一層キリトの興奮を煽る。

「やっぱり……すごく綺麗だよ。アスナ」

「やぁん……♥　そ、そんなにまじまじと見られると、恥ずかしいよ……」

「そう言われると、余計に見たくなってくるんだよな……」

「そんなぁ……♥　キリトくんの意地悪……♥」

拗ねたような素振りをしていても、その声と顔が蕩けていては何の意味も無い。それを理解させてやるため、キリトは徐に腰を引いた。

いかにもこれからピストン運動でアスナを快楽の坩堝に叩き落としてやるという雰囲気で肉棒を引き抜き、亀頭とその少し手前までが埋まった状態で腰を止める。

「あっ♥んんっ♥　……あ、あれ？　キリトくん？　どっ、どうかした？」

「アスナ。素直に『アスナは挿れただけでイくえっちな女の子です』って認めたら、続きをしてやる。それができなきゃ……今日はこれで終わりだ」

「そっ、そんなぁ……♥　ここで終わりだなんて、ずるい、ずるいよキリトくん……♥♥」

大好物の焦らしプレイに興奮の度合いを増しながら、アスナはどうにか繋がったままの恋人へ怒ってみせる。こうした場合、いつものアスナなら即座に陥落し、卑猥な言葉をたっぷり増量したおねだり宣言でキリトとの交尾を乞い願うのだが――今日のアスナは、存外に我慢強かった。

一瞬、視線をちらりと横に向けたアスナは、どうにかこうにか真剣な表情を作ってキリトの瞳を見つめ返した。

「い、いいもん！　そんなこと、絶対に言わないんだから！　ここで止めたら辛いのはキリトくんも一緒でしょ！」

「なるほど、そう来たか……」

苦し紛れの抗弁だが、実際アスナの言うとおりである。こんな中途半端な所で止めたくないのはキリトも同じであるし、そもそも本気で止めるつもりもない。これもあくまで、愉しむためのスパイスなのだ。

次の一手を模索し、キリトが視線を横に向ければ――目が、合った。

ようやく回復し、体を起こそうとしていた金色の女騎士と。

視線を向けるだけで『混ざるか？』と問うには十分だったし、『ええ』という彼女の答えを得るにも、碧い瞳を見つめるだけで十分だった。

「――おや。そういうことでしたら、私がキリトの相手を勤めましょう」

塔に繁茂する蔦の様に、眩しいほどに白い裸身がキリトの体へまとわりつく。しっとりと汗に濡れた金色の髪、その幾筋かを肌に張り付かせた少女――アリスは、キリトの首筋に両手を回して抱きつくと、そのままキリトの頬へ口づける。

本来なら親愛の情を示すその行為が、アスナへの挑発であることは疑いようが無かった。

「アスナがどうしても自らの非……いえ、非ではありませんね。自らの淫らさを認められないというのであれば仕方ありません。
キリトの情欲は『ちんぽ鞘』である私が責任を持って鎮めますので、アスナはどうぞご心配なく」
「なっ……そんなぁっ、アリスさんまで……！」
「さ、キリト。男の腕の中に抱かれる歓びすらも素直に言い表せない女など放っておいて、私の体をもっと味わってくださいな。
まさか先の交わり程度で、満足できるような男ではないでしょう？お前は」
言うだけ言ったアリスは、そのままキリトの両頬へ手を当てて顔を横に向かせ、躊躇いなく唇と唇を重ねた。鼻先で軽く触れあったあと、唇同士を啄み合うようなバードキス。舌先で唇をなめ合い、時折くすぐったそうな笑い声も零しながら続けられるキスの最中、キリトは更に腰を引いた。
愛しい男の一部分が己の中から永久に失われようとしている感覚に、アスナの背筋にぞくりとした怖気と被虐的な快感が走る。そしてコンマ数秒の逡巡の後、アスナは決断した。このままアリスの思うままにされるのもそれはそれで愉しいだろうという誘惑を振り切って。
「――ま、待って、キリトくん！　言う、言うから！　本当のこと、ちゃんと言うから!!」
「何を言うって？　アスナ」
「ほ、本当のこと……さっき、恥ずかしくて言えなかったこと、ちゃんというから……。ごめんなさいもするからぁ……♥
だから、おちんちん抜かないで……♥　抜いちゃ、やだよぉ……♥」
「……しょうがないな。これが最後のチャンスだぞ、アスナ」
アスナの必死の叫びに、キリトとアリスはキスの睦み合いを止めて視線を下に向ける。碧と黒の瞳が見つめる先には、涙をうるうると湛えた榛色の瞳があった。
呆れたようなキリトの声音とアリスの鋭い視線が、アスナのマゾヒズムを大いに刺激する。二、三度、深呼吸をして己を落ち着かせたあ

と、アスナは改めて口を開いた。
「わっ、私は……キリトくんの男らしくてカッコいい勃起おちんぽを挿れられただけで、あっさりガチイキしてしまいました……♥
で、でも、キリトくんに一発で子宮屈服させられたのを知られるのが恥ずかしくて……キリトくんおちんぽ様第一主義の雌豚オナホールのくせに、咄嗟にウソをついてしまいました。本当に……本当に、ごめんなさい。
どんなオシオキでも、どんな罰でも受けますから……どうかキリトくんのちんぽを気持ちよくするための穴として、これからも私のお手軽即墜ちまんこを使ってくださいっ♥♥♥」
「……よく、できましたっ！」
必死の懇願、渾身の宣言。自らの言葉そのものに発情するアスナの顔を見下ろしながら、キリトは腰をぐいと前へと進め、抜きかけた肉棒を再びアスナの中へ侵入させた。おねだりへの返答として、きっとこれ以上のものはないだろう。
「ぁっ――――んひぃぃいいいいいっっっ♥」
たっぷり焦らされてからの再挿入に、アスナは歓喜の悲鳴を上げる。あっさりと絶頂したことを隠すことも出来ず、本能的な刺激に身を痙攣させる姿がたまらなく美しい。
最初の挿入同様に締め付けてくる媚肉の感触を味わいながら、キリトはじっくりとしたピストン運動を開始した。
「あっ♥　んんっ♥　あぅっ♥　きゃうぅっ♥
あっ、ああっ……キリトくんの、奥まで、いっぱいいぃっ……♥」
太い肉茎と大きな亀頭で狭い膣道をこじ開け、張り出したカリ首で膣肉をぞりぞりと擦る。アスナが交合の歓びを感じやすくなるように一定のペースを保ちながら、深く長いストロークでピストン運動を繰り返す。
キリトが慣れた調子でアスナを責め立てる隣で、アリスはどこか挑発的に微笑みながら、ゆっくりと体を倒してベッドに横たわると、そのままアスナの耳元に唇を寄せた。
「――――本当に、淫らな女なのですね……アスナは。ちんぽ一つで、キリ

トの意のままにされてしまうとは」

　刃の如き鋭さと、女の肉欲の熱さを備えたアリスの揶揄が、アスナの鼓膜へと侵入し、更なる快楽の深みへと溺れさせていく。被虐的な快楽の深みへと。

「手足の自由を奪われ、浅ましい姿を隠す事もせずに……しかも、あんなはしたない言葉まで使ってキリトを求めるような女だったとは……驚きですよ、アスナ」

「それはっ♥　んっ♥ぁああっ♥　それはぁっ♥だって、だってぇ、キリトくんがぁっ♥♥」

「おや。責任転嫁は感心しませんね、アスナ……とはいえ、キリトのちんぽが女殺しの名物であるのは、私も認めるにやぶさかではありませんが」

　アスナの肌の上を滑るように進んだアリスの指先が、アスナの下腹部――子宮の真上にあたる位置に触れる。さわさわ、さわさわと動く指先によって、アスナはそこの存在をより一層意識させられてしまう。

「雄の体の下に組み敷かれ、太く熱い肉の杭で貫かれる度に……雌の本能がここを疼かせてしまうのでしょう？　キリトの子種が欲しい、キリトの子を孕みたいと、乞い願わずにはいられなくなってしまうのでしょう？」

「そう♥　くひぃ、あっ――あぁああっ♥　そう、そうなのぉ♥♥　キリトくんの赤ちゃん欲しいって、あっ、子宮が、おねだりしちゃうのぉおぉおおっ♥♥」

「ええ、ええ、わかりますとも。私も……同じ体験をして、同じ想いを抱いてしまった同類（メス）なのですから」

　キリトを挑発するように、アリスは脚を開く。露わになった股穴からは、先程たっぷりと送り込んだ精液が白い塊となってどろりと溢れ出していた。雌の一番深い部分を、雄の色に染められてしまった――それを無言の内にアピールするアリスのテクニックは、おそらくはアスナによって仕込まれたものだろう。

「自分自身の存在が溶けてしまいそうなほどの心地よさと、ちんぽに

全てを支配された屈辱感。そしてなにより、キリトと一つに繋がった安心感……。

そうして、こじ開けられた肚の中を満たす、どっぷりと重い精液の感触……それを、お前は今から味わうのですから。身体が期待に打ち震えるのも仕方の無いことです」

「あっ♥ひぃっ♥あっあぁっあ〝っあ〝――っ♥　あぅううっ♥」

「わかるでしょう？　アスナ。キリトの動きが、少しずつ、少しずつ早くなってきているのが。

早くお前の中を己の精で満たして、アスナがキリトの女であることを改めて覚え込ませようとしていると……♥」

「あひぃ♥　わかるっ♥わかるよぉ♥♥　キリトくんのちんぽ、ぱんぱんってきてるもんっ♥♥　あんっあっあぁっ♥　絶対、ぜったいナカダシされちゃうって、わか、りゅっ――――にょおおお〝おぉおおお〝ぉおっ♥♥」

Gスポットを抉るような肉棒の突き込みが、アスナを激しく狂わせる。本日何度目かになる絶頂の中でも、一際大きな絶頂を迎えたアスナの顔が後ろへ大きく仰け反る。そのおかげで、焦点を失いつつある瞳、だらしなく開かれた口と伸びきった舌という清楚さの欠片も無いアクメ顔をキリトに見られることは無かったが、股座からスプリンクラーのように噴き出す愛液までは隠しきれるものではない。

それに何より、隣に寝転ぶアリスからは、好色に染まりきったアスナの相貌がはっきりと見て取れてしまう。

「ふふ……♥　とてもひどくて、とてもイヤらしい顔をしていますよ、アスナ……♥

運命の相手に愛される歓びに満ちた、淫らで美しいオンナの表情（カオ）……♥　どうして、キリトに見せてやらないのです？」

「お〝っ♥はひっ♥　だめ、だっめぇ……♥　こんな、カオ……見せられにゃひぃ……♥♥」

「そうなのですか。では私は諦めましょう……もっとも、キリトはそう思ってはいないようですが」

「……ふぇっ？」

アスナの視線が明後日の方向に向いている間に、キリトは抽送を一旦止め、アスナの手に絡めていた両手を解く。そうして、無防備なアスナの両脚を持ち上げて腰を曲げさせると、そのままアスナの膝裏に両脚を差し込むようにしてがっちりとホールドする。

真上に向けさせられたアスナの蜜壺は、キリトの雄々しい肉柱によって真上から貫かれたまま。そこと両脚だけでもロックは十分に完成しているが、更にキリトは上体を倒し、アスナの上へと覆い被さる。

「アスナ」

己の名を呼ぶ愛しい声と、後頭部にそっと回された右手に導かれ、アスナはようやく顔を前へと向けた。互いの息がかかるほどの至近距離に、キリトの姿を視認すると同時に、アスナは今自分がどういう体勢にさせられているのかを理解する。

いわゆる『種付けプレス』――重力すらも雄の味方につけ、確実に雌を犯し孕ませ己の物とする体位。抵抗しようにも最早どうにもならぬ体位に持ち込まれたアスナは、気づけばキリトの背に両腕を回し、愛しい雄の体にしっかりと抱きついていた。

その無言の敗北宣言、声なき愛情表現が、キリトを突き動かさぬはずもなかった。

「キリ――――とぅふっ♥だっだめえっ♥　いま、いま〝っそんにゃ本気ぴしゅとんされたらぁあぁあぁあっあっっ♥　あ〝――――あ〝ぴぃっ♥ひっひっひぃぃぃぃ〝ぃぃぃぃんんうっ♥♥♥」

真下から真上へ引き抜き、真上から真下へ穿つ。肉竿のサイズに物を言わせるシンプルにして強力なストロークでアスナが喜悦を感じる部分の悉くを擦りながら、張り出した亀頭で子宮口を襲う。

許容量をあっさりオーバーフローさせる快感の渦に抗おうとも、頭も体も既にキリトに抑え込まれている。故に、反射的な身動ぎで快感を分散させることも出来ず、その全てを純度１００％で受け取らざるを得ない。

「ダメダメだめだめえぇえええ♥♥　いぐ、またイっぢゃ――ぁあああぁ〝あぁあ〝あぁあっっっ♥♥」

もはや何度目なのかわからない程の絶頂を迎えたアスナは、キリトの腕の中でアクメ顔を晒す。

あまりに一方的な趨勢とは言え、アスナを責めるのは酷というものだろう。なにせ今のアスナは、『マザーズ・ロザリオ』並、いやそれ以上の速度と威力で放たれる連続攻撃をウィークポイントに容赦なく叩き込まれているようなものなのだ。どうにか意識を保っているだけマシと言えよう。

ぱんぱんと音を立て、激しくぶつかり合う腰と腰。泡立つ本気汁が肉槍にまとわりついてぶちゅぶちゅと下品な音を立て、流れ落ちた滴の一部がひくひくと収縮するアナルに流れ込む。その淫らな音と共に、アリスの囁き声がアスナの耳朶を打った。

「ほら、アスナ。早くおねだりしないと、キリトがどこに射精していいのかわからなくなってしまいますよ？　子宮の奥の奥まで、キリトの濃くて重たい精液でいっぱいにして欲しいのでしょう？」

ほんの少し前、アリスに手ずから仕込んだばかりの、サディスティックでセクシャルな誘惑の言葉。それをすっかり会得したアリスに弄ばれながら、アスナは快感にスパークする脳髄を必死に動かし、キリトを求める言葉を紡ぎ出す。

「はひゅっ♥♥んぃいいっ♥　きりっ♥きりとく♥んんっ♥　わた、わたしのっ♥おまんこっ♥♥　おまんこにぃひぃっ♥　きへっ、きへえぇっ♥♥　いぎっぱなしのおまんこにぃひぃいい♥♥　せーえき、びゅーって♥びゅーびゅーっていっぱいくだしゃひぃいいいいっ♥♥♥」

「ふふっ……よく言えました、アスナ」

まるで剣の腕を上げた弟子を褒めるような、慈愛に満ちた笑みを浮かべたアリスは、そのままキリトの耳元に唇を寄せた。

「アスナがこんなに頑張ったのですから……いっぱい射精してあげるのですよ、キリト。

私の膣内を満たした時と同じように……♥　たっぷりのザーメンで子宮を満たして、そこはお前だけの場所だと理解らせてあげるのです……♥」

「言われなくても、そのつもりだっての……！　全部、アスナの膣内にぶちまけてやる……！」
「ふふ……そう答えてくれると思っていました♥　我が愛しき星王陛下……私の大好きな、大好きなキリトなら……♥♥」
アリスの甘く蕩けた声を耳元で聞きながら、キリトはアスナをより一層強く抱きしめると共に、腰の動きを一気に加速させる。弄ぶためでも、貪るためでも無い、ただただ己の射精の為だけの動き。
その激しさがアスナの雌穴をイキ狂わせ、搾り取ろうと蠢く媚肉がキリトの雄柱を締め付け――そして、その時は訪れた。
「――アスナっ!!」
愛しい女の名を叫び、愛しい女の息を耳元に感じながら。
キリトは最後の一突きを押し込み、アスナを押しつぶすかのように亀頭をぴったりと密着させて、陰嚢の中で煮えたぎる精汁を一気に解き放った。
「き――――っぅううぅううう♥♥♥　いぐ、いぎゅぅっ♥　まりゃいっぢゃうぅううのぉおぉおおぉ♥♥♥　キリトくん゛のせーえ、きっ、いいひいぃい♥♥　奥、おぐぅううっ――あっ♥あーっあぁっあ゛ぁあ゛ぁあー♥　あ゛ーっ♥　あっあっぁあああああぁあああああ♥♥♥♥」
ダムが決壊したかのような勢いで放たれる大量の白濁液が、アスナの子宮を瞬く間に満たしていく。無意識下に行われた阿吽の呼吸によって、子宮口と鈴口は少しのずれも無く密着し、雄の遺伝子情報を雌の胎内へ導き招く。
「おふっ、おひぃい゛っ♥♥　いぎゅっ――いぐっうっいぐいぐのぉおおぉお♥♥♥　あっああっあ――あ゛ーっ♥あ゛っ♥ああ～～～～～っ♥♥♥」
どくん、どくん、と。心臓の拍動を思わせるビートと共に、輸精管を駆け上る何億という精子の群れ。雌のニオイに餓えて奥へ奥へと進む精子達を、アスナは本能的な心地よさと共に全て受け入れる。
剣士としてのプライドも、普段のお嬢様然とした気品も何もかも捨てて、ただ一匹の雌としてキリトの子種を飲み干す。どんな姿を晒し

たとしても、彼が愛してくれると知っているから。
「アスナっ……アスナぁっ……！」
「きりひよくゆんっ……♥♥　あっ♥　ああっ……♥♥　きりと、くんっ……♥♥」
　愛しい相手の名を呼ぶ。組み敷いた雌を、己の伴侶としたオンナの名を呼びながら、迸る熱情のままに精液を叩きつける。
　愛しい相手の名を呼ぶ。抱きしめる雄を、己を番いとしたオトコの名を呼びながら、浴びせられる濃厚な精の奔流に酔う。
　一分の隙も無く密着した肌を通し、言葉では伝えきれない感情を交歓しあう。もう何度と無く繰り返した、原始的でロマンチックな行為。愛し合う者同士だから許される行為に、今宵もまた溺れていく。
「いっぱい射精しましたね、キリト……♥　いっぱい射精してもらいましたね、アスナ……♥」
　繋がりっぱなしのまま快楽を味わう夫婦の横で、騎士が浮かべる笑みは、どこまでも慈愛に満ちていた。
　アスナの膣内を満たしきってもなお続く射精の奔流が、肉棒と蜜壺の間に隙間とも呼べぬ隙間をこじ開け、逆流しながら噴き出し終わった頃――キリトはようやく抱擁を解き、アスナの膣内から逸物を引き抜いた。
「ふぅっ……っと……」
　二度の射精を経てなお、頑強。全く萎えていない雄の象徴は、アスナとキリトの体液をどっぷりと纏いながら、久方ぶりに外気に触れる。蜜壺より抜きききられた直後、反動でぶるんと振れた肉棒から残滓が飛び散り、アスナの下腹部を汚す。
　もっともその飛沫も、抑えを失ってアスナの脚の間から溢れ出した白濁液の量と比べれば、微々たる量、些細な染みでしかなかったが。
「おつかれさまです、キリト」
「アリス……悪いな、アスナの当て馬みたいに使っちゃって」
「ふふ。その程度、気にしなくても良いのですよ」
　交合に汗を浮かべたキリトの肌を撫でるように、アリスがそっと体を寄せる。愛しい相手の汗ともなれば、そのニオイすらも心地よく感

じられるのだから不思議なものだ。
「今日は一番最初に抱いてもらいましたし、それに……あの時アスナが折れなければ、本気でアスナとの行為を中断して、私を抱くつもりだったのでしょう？」
「まあ、それはそうだけど」
「であればよいのです。たとえアスナへのオシオキだとしても……お前が、愛していない女を戯れに抱くような男で無いことは、私も承知していますから」
予想外の賞賛に、キリトは思わず言葉を詰まらせる。隙を晒した首筋に、二、三度と口づけをしたあと、アリスはベッドの上でだらしない姿を晒しながら余韻に浸る同胞の隣へうつ伏せに寝転んだ。
「アスナ。そろそろ落ち着きましたか？」
「なん、とか……」
「では、早速続きと参りましょう。どうやら……キリトはまだまだ満足していないようですから」
まだ余韻引き切らぬままで顔を上げたアスナと、蠱惑的な笑みを浮かべて振り返ったアリスの視線が、猛々しく屹立するキリトの逸物を睨め付ける。
左手側には仰向けの星王妃。右手側にはうつ伏せの整合騎士。隣あった極上の女体は、示し合わせたかのように脚を開き、そこから溢れ出す白濁の証を見せ付ける。
「さあ、キリト。いらしてくださいな♥」
「キリトくん、また……一緒に、しよ♥」
その誘いを断る理由も、理性も——今のキリトが持ち合わせているはずも無かった。
それからの顛末は至極単純である。
男は思うままに貪り、女達は願うままに貪られた。ただそれだけだ。

何時間にも及ぶ欲望の発露の果て、キリトがどうにか理性を取り戻した時には、ベッドの上には全身――脚の間の穴は特に――を白濁に塗れさせた二匹の雌豚が、快楽に負けて堕ちきった無様な姿を晒していた。

「さすがに……やり過ぎた、気がする……」

仮にも王妃、仮にも騎士である二人。力が抜けきった全身を隠すこともできず、蛙のように両脚を広げたままうつ伏せに寝転ぶのが精一杯といった様子の二人。乱れに乱れた後とはいえ、その見た目の美しさと内に秘めた気高さだけは損なわれない二人。

そんな二人――つまりはアスナとアリスの後頭部を左右の手で無造作に掴み、端正な顔をグロテスクな肉棒にこすりつけるようにしてお掃除をさせてやりながら、キリトは誰にともなく呟いた。

「はひゅ……ぶふぇっ……♥　きり……と……くんっ……♥」

「きっ、りとぉ……んぶ……ぇろ、んちゅぅ……♥」

反射的というか、本能的というか。意識はほとんど飛んでいるような状態でも、二人は健気に肉棒へ奉仕する。柔らかな頬をこすりつけ、唇で吸い付き、どうにか伸ばした舌で肉棒にまとわりつく残滓を舐め取る。

もはや無意識の領域にまで雄の象徴への奉仕精神が染みついた二人にとっては、この屈辱的な行為すらもご褒美にしかならない。

よくよく考えてみれば今までに繰り広げてきた行為も、思い返してみればなかなかに屈辱的かつ非道な行為といえるだろう。

たとえば――アスナとアリスを上下に並べ、気まぐれにアリスの方へ挿入してやった時もそう。

「――あっぁあああっ♥♥　キリト、キリトぉっ♥♥　んっ、ぅううっ♥♥　おっ、お前の、固いちんぽぉ♥　わひゅ♥わた、しの奥に、ぐりっ♥ぐりっ♥って、来ていますぅう♥♥　あっ、あぁ♥ああ――んんっんぅうううっ♥♥」

M字に広げられたアリスの脚を掴みながら腰を打ち付けてやる度、金色の鎧を剥ぎ取られた騎士がか弱い鳴き声を上げる。

交合の汗によって肌に張り付いた幾筋かの金色の髪がエロティッ

クな光景を作り出し、キリトを更に興奮させる。その興奮を燃料にして、キリトは腰を前後させてはアリスの胎内を蹂躙し続ける。

「もー、アリスさんばっかりずる～い♥　キリトくん、キリトくん♥旦那様好みに完全調教済みの新妻まんこ、早く味わってよ～……♥」

当然、それを上にいる王妃が見過ごそうはずもなく、脚の間から股座に腕を伸ばしたアスナは、指先を使って秘裂を左右に割り開く。ぼたり、ぼたりと重たく溢れ出すのは、アスナの本気汁と混ざり合った精液の残滓。淫靡な姿を見せ付け、雄の情欲を煽る。

その健気な挑発（アピール）に、キリトは応えた。アリスから逸物を引き抜き、アスナの中へ挿入することで。

「あっ――きた、きたぁ♥うう、んっ♥あっあっ、んううううっ♥　お腹、こじあけられるの……最高ぉ……♥♥」

待ちわびていたアスナの蜜壺に、お目当てのものを押し込む。アリスの愛液に塗れていた肉棒は、たちまちアスナの愛液に再コーティングされていく。

張り出したカリ首が、既に射精された分の精液をかき出しながらアスナの膣道を前後する。溢れ出した残滓を肌に浴びながら、その光景をアリスが恨めしげな目で見つめていた。

「はあっ、はあっ……キリト、ひどいです……。私をこんなに、こんなにまで昂ぶらせておいて……♥

もう少しでお前の子種を注いでもらえると、期た――んむぅっ!?」

潤んだ碧い瞳に母性本能を刺激されたのか、あるいは抗議の手段を奪うつもりだったのか。覆い被さった体勢のまま、アスナはアリスの唇を奪い、そのまま舌を差し込む。

アスナの奇襲に驚きはしたものの、アリスは口付けを拒まなかった。おかげで、唾液を纏った舌と舌がぬめぬめと絡み合いながらの激しいディープキスが続く。

「んっ♥んっ♥　んうぅっ♥んぅうううっ♥♥　んっうううっ♥」

「んはぁっ……ちゅっ、はぅ……♥　ぢゅっ、んっ♥」

肉棒をぶち込まれるアスナの喘ぎ声が、アリスの口の中で響く。アスナの舌へと吸い付き絡むアリスの舌の音が、アスナの口の中で響

く。密着する二人の体によって、互いのバストがぐにゅぐにゅと形を変え、興奮に固くなった乳首達がこすれあっては二人に快感をもたらす。

遠慮無しに睦み合うアスナとアリス。その二人の体へ覆い被さりながら、キリトは雌穴を思うままに愉しむ。アスナの蜜壺をひとしきり堪能したあと、再びアリスの膣内を貫き――何度となく激しい抽送を重ね、そのままたっぷりと膣内射精をきめる。

「――んぅぅぅう♥　んっ♥　むうっ♥　っふう、うふぅっ――んにゅうぅぅぅぅぅぅぅう♥♥♥」

お預けの後のハードなピストン、そして叩き込まれる精液の感触に快楽中枢を灼かれたアリスが再び達する。蕩けた喘ぎ声は、キスをしっぱなしのアスナの口の中へと消えていく。

精液を少しでも搾り取ろうと、イキながらキツく締め付けるアリスの膣内で射精の余韻を愉しんだあと、キリトは肉棒を引き抜き、すぐさまアスナの蜜壺の内へと押し込む。

「アスナ。アリス。……満足するまで、付き合ってもらうからな」

余談だが、発情期の虎は2～3日の間に１００回以上の交尾を行うと言う。

あとからそんな事を連想してしまう程度には、三人の交尾は激しく、そして濃密だった。

たとえば――。

「――こうした奉仕行為は経験が無いのですが……ぱいずりというのは、こういうやり方で良いのでしょうか。アスナ」

「ええ、とっても上手よ。アリスさん。……ふふっ♥　乳首がすれて、なんだか変な感じ……♥」

精液と愛液と唾液に塗れた肉棒を、左右から挟み込むダブルパイズリでたっぷりとズリあげてもらい、そのまま二人の顔面に思いっきりマーキング顔射させてもらったり。顔中に飛び散った精液をなめ合う二人に興奮している事を気づかれ、今度はダブルフェラチオで抜いてもらったり。

「そっ、そんな！　整合騎士たるあなたが、どうして私を裏切ったの！

アリスさんっ!?」

「ごめんなさい……ごめんなさい、アスナ……♥　ですが、私はもう、キリトの『ちんぽ鞘』として生きると決めたのです……♥

アスナの居場所を教えれば、このように――あっ、ああっ♥んうっ♥　あふっ♥　キリトの、こんなにりっぱなちんぽでぇっ♥　好きなだけ犯してやると言われてしまって、はぁっ♥　あっあっあぁんぅっ♥♥」

裏切りの騎士と非業の王妃ごっこをしながら、アリスを背面座位でしっぽりと犯し、肉欲に負けて身内を売ってキリトの『ちんぽ鞘』へと堕ちた事を自覚させてやったり。王妃様の解放か、自分がたっぷり種付けプレスしてもらうかを選択肢として提示し、アリスが即座に後者を選ぶ様を愉しんだり。

「――しょっ、初等練士アスナ。本日より、騎士アリス様、ならびに上級剣士キリト様の共用側付きとして、誠心誠意お仕えさせていただきます！」

「ふむ。なかなかよい挨拶でしたよ、アスナ。それでは……側付きとして、最初に何をすべきかはわかっていますね？」

「はいっ！　キリト様に処女（ハジメテ）を奪っていただき、携帯型肉便器としてお仕えすることを誓わせていただきます！」

側付きとなったアスナを、ただの肉穴扱いしながら力尽くで犯してやったり。かつてキリトの側付きだったアリスが、ハジメテを奪われた時はどう鳴いたかや、何週間にもわたる遠征中、戦場随伴型性処理穴として馬上でひたすら犯してもらった話を自らの口から語らせたり。

それ以外にも、互いの蜜壺から溢れ出す膣内射精の残滓をシックスナインの体勢で舐め合うアスナとアリスの姿を眺めたり。目隠しをして四つん這いにさせ、ちんぽがどこにあるかを音とニオイだけで探させ、先に見つけたアスナをたっぷり可愛がってやったり。一方が犯されている姿をオカズに、もう一方にオナニーをさせたり。落ちぶれた貴族娘二人を犯す権利や、孕ませる権利を端金で買い取って弄んだり。耳元で睦言を囁きながら、ただ只管に抱いて愛し合ったり。

手を変え品を変えながら続いた閨での饗艶。キリトがとりあえず満足するまでの間、アスナとアリスがどれだけ絶頂を迎えたのか数えていたわけでは無いが、ベッドシーツの上にまき散らされた染みの数と、糸の切れた操り人形のようにぐったりとした二人の姿を見れば、それが相当な回数であることは察しがつく。

キリト自身を省みても、二人の顔や口に少なくとも3発ずつ、アリスの手で1回、アスナの髪で1回、膣内には最低10発ずつ注いだことはどうにか覚えている。それ以上は面倒なので数えていない。

管理者権限で『サキュバス・ストレージ』システムに介入し、今回回収される予定の数をカウントすれば正確な回数はわかるだろうが——面倒かつ無粋もいいところなのでやめておいた。

「……おっと。そろそろ離すぞ、アスナ」

「ふぁーい……♥」

「アリスもな」

「はひぃ……♥」

髪を掴んでいた手をキリトが離し、乱れた髪型を軽く整えてやったあとになっても、二人はお掃除を止めようとはしなかった。むしろ徐々にペースを上げていく、顔と舌を使った奉仕のダブルアタックが、キリトの逸物に新たな興奮の血を滾らせていく。

「ふふ……おっふぃくなっへるよ♥　キリトくゆん……♥」

「まっらく……♥　しょうのないおとこでひゅね、おまえは……♥♥」

美女という概念をそのまま具現化したような顔（かんばせ）と長く伸ばした舌で、野太く雄々しい肉棒を左右から挟み込みながら、アスナとアリスの艶めく声音がキリトを誘う。

——どうやら、この宴をそろそろ終わらせようなどと考えている者は、まだ誰一人としていないようだった。

「——アスナ。お前に聞きたいことがあります」

静かな薄闇の中に月と星の光が降り注ぐ、豪勢な寝室。右腕にアリ

スを、左腕にアスナを抱き、二人の乳房を左右の掌で揉みつつ事後の心地よい気怠さを味わう。そんなキリトの耳に届いたのは、アリスの若干緩んだ声だった。

声の主たるアリスは、薄いシーツ一枚のみを被っただけの姿。キリトに裸身を預けるように体を密着させたまま、碧い瞳へ真剣な光を湛えている。

「なあに？　アリスさん」

問いかけを受けたアスナもまた、アリス同様に素っ裸にシーツ一枚の状態でキリトに抱きしめられつつ、反対側から事の成り行きを興味深げに見守っている。

全身にまとっていた性交の証左をすっかり拭き取り、身綺麗に整えた二人の姿は、柔らかな光の中にあってはまるで教会に飾られる宗教画のように美しかった。ほんの少し前まで男の腕の中で淫らで下品な嬌声を響かせ、売女の方がよほど高貴に思える声音と仕草で子種を乞い願っていたのだと、一体誰に信じられようか。

「お前は私に、たくさんの淫らな言葉やその使い方を教えてくれました……。ですが、お前の気性や身の上からすると、そういった言葉を多く使いこなすような者には到底思えません……。

いったい、いつ、どのようにして……あのような言葉達を覚えたのですか？」

「『あのような言葉達』って、いったいどれのことかしら？　アリスさん」

「ですから、その……お、おちんぽ、ですとか……お、まん……こ、ですとか……」

言葉尻の音量を小さくしながら、アリスはどうにか問いかける。肌を重ねている間はともかく、こうして落ち着いてしまうとやはり恥ずかしさの方が勝るらしい。

その様子を見てひとしきりくすくすと笑ったあと、アスナはおもむろに返答した。

「覚えるようになったのは、《ＳＡＯ》がクリアされて、現実に帰れるようになって……ちょっとしたあとあたりからかな。自分で色々調

べたりしたの」
「じ、自分で……ですか!?」
「ええ、そう。
アリスさん、私がキリトくんと現実世界（リアルワールド）でもセックスしてる事は……当然知ってるわよね？」
念のため、というニュアンスが多分に含まれたアスナの確認に、アリスはこくりと首を縦に振って答える。
キリトもアスナも若さに溢れたカップルであるため、キリトの両親も、アスナの両親も、二人が既に肉体関係にあることはそれとなく察している。それを急に止めてしまったら逆に怪しまれるという事情もあり、《ＳＷＯＲＤ協定》参加者の中でアスナのみが、現実世界でキリトとハラスメント防止コードに触れまくる行為に及ぶ事を容認されていた。
そもそも最初にキリトの恋人となったのはアスナであり、そのアスナが少しだけ自分の居場所を譲ったからこそ今の人間関係が成立しているのだ。それを考えれば、正妻様が少しばかり優遇されている事に文句を言う権利は誰にも無かった。
「キリトくんはね、仮想世界でも、現実世界でも……私のことをお姫様みたいにすっごく大事にしてくれるの。
デートしてるときも、セックスしている時も……いつだって自分より、私のことを優先して考えてくれて……。こっちでは当たり前にしてることだって、『アスナに何かあったら大変だから』って我慢しちゃうくらいに。
そうだよね、キリトくん？」
「そりゃあ、大切な人を大事にするのは当たり前だろ？　アスナ。
それに……いや、あれを『我慢』の範疇に入れてはいけないんじゃないか……？　結局ヤることはヤってるんだからさ……」
なんとも言えない曖昧な顔で頷くキリトの横で、抱き寄せられたままのアスナはほわほわと笑う。
現実世界でのセックスは、仮想世界のそれと比べると非常にハイリスクだ。だからこそキリトは、仮想世界で交わる時よりも遙かに気を

使うよう心がけている。何かの間違いがあった時に、より過大な負荷がかかるのは自分ではなくアスナなのだから当然だ。

アスナの体調に少しでも不安があるときには抱かないし、抱くときは必ず避妊具をつけている。コンドームを使わずに行為に及んだのは、アスナの現実世界でのバージンを奪った時だけ。流出リスクや痕が残ること等を考えれば、ハメ撮り、顔射、露出、緊縛、スパンキング、ピアッシングにタトゥーやドラッグ（そもそもプラシーボだが）その他諸々の過激なプレイは以ての外だ。

「キリトくんのそういう優しいところ、私、大好き。でもその分……キリトくんに我慢させちゃってるのがすっごく申し訳なくって……。

それでね、アリスさん。私、ある日思いついたのよ」

「何をですか、アスナ」

「現実世界だとできないことがあるのは仕方ない。ならその分、現実世界でもできることで、キリトくんにいーっぱいお返しすればいいんだ――って」

「……なるほど。それでアスナは、淫らな言葉の使い方を身につけ、実践したのですね」

「ええ、その通り。ちょっと恥ずかしかったけど、キリトくんにも相談して……『こういうのなら、私もキリトくんも楽しいんじゃないのかな』っていうのを一緒に探してもらったのよ。

えっちな言葉もそうだけど……他にも色々、実践しちゃったなあ……♥」

「色々……!?　……い、いったい、どんなことを……!?」

思わずゴクリと生唾を飲みながら、アリスが問いかける。

興奮する騎士の様子を横目に、ちらりと動いたアスナの視線がキリトの瞳を見つめる。夫婦の間にだけ伝わる『言っちゃっていい？』という無言のアイコンタクトに、キリトもまた『アスナが言いたいなら』と返す。ほんの数秒間見つめ合うだけで、意思の疎通は完了した。

「最初に覚えたのは、《裸土下座》。キリトくんとキスしながら、一枚一枚着ている物を脱がせてもらって……フルヌードになったら、土下座するの。

キリトくんのお部屋の床に額をぴたーっとくっつけて、『バッキバキの旦那様チンポで種付けしてください♥　私のおまんこをキリトくんの精子ちゃんたちの遊び場にしてください♥』って言いながら土下座するのがもう楽しくて楽しくて……。

えっちする前におねだり土下座して、えっちした後にありがとう土下座してたんだけど……最近は《裸踊り》を混ぜることも多いかな」

「裸踊り……とは？」

「言葉の通りよ。裸のまま頭の後ろで手を組んで、脚はお下品ながに股に広げて……セックスしてるみたいに腰をかくかく、へこっへこってさせて踊るの。すっごくエロティックに、無様に、みじめに見えるようにね……♥♥

『アスナのつるつるおまんこは、弱点だらけの雑魚雑魚まんこでーす♥　キリトくんおちんぽの一突きで即負けして、オナホ嫁入りしちゃいましたー♥　今日はゴム付きお遊びセックスのお相手をさせていただけるそうなので、精一杯おまんこご奉仕したいと想いまーす♥♥』っていう感じで、変態さんみたいなこと言いながら……ね♥」

とろとろに蕩けた恍惚の声音と共に、アスナの口から次々に繰り出されるアスナ自身の痴態。その内容に、アリスは目を丸くし――同時に、下腹部に疼きを覚える。否定しようのない興奮と、未だ自分が体験したことのない行為をキリトとアスナが楽しんでいる事への軽い嫉妬を含んだ疼きを。

もし、自分がキリトに同じ事を求められたら。いや、『アスナと同じ事をさせてほしい』と願い出たら、キリトはどんな顔をするだろうか――そんな想像をしてしまう。

「他にも色々……官能小説を音読したり、海外のハードなポルノ動画を見ながら同じように犯してもらったり……キリトくんのベッドの中でずーっと繋がりっぱなしになって、たっぷりニオイ付けさせてもらったこともあったなあ……。

そうそう。キリトくん、いっぱいゴム使っちゃうから……その使用済みコンドームを繋げて作ったスカートでファッションショーしたのも楽しかった……♥♥

またさせてね、キリトくん……♥」

陶然とした表情で語り終えたアスナは、そのままキリトの胸板へ頬を寄せ、浅い口づけを繰り返し繰り返し与える。

番う男がどうしたら興奮してくれるのかをそれとなく察し、的確に掴む――そんな天性のセンスが、アスナには備わっていた。キリトの奥底に潜む『ちょいS』とでもいうべき緩い嗜虐嗜好を引き出し、楽しむ度量の深さも。

「……私が思っていた以上に、とても奥深いものなのですね。男女の仲というものは……」

大切に守りながら、辱める。心の深いところで繋がったまま、欲望のままに振る舞う。そして、お互いの好みを理解し、過度に危険な行為にならないように注意しながら、愛と信頼を育む。

真っ直ぐに捻れ、美しく爛れたような絆の深め方を二人の間に見た気がして、アリスは感嘆のため息をついた。

そうしてしばしの間、アスナの唇がキリトの肌の上で奏でる愛欲の音を聞いたあと。アリスはゆっくりと顔を上げ、碧い瞳でキリトの顔を見つめた。

「キリト」

「ん？　どうした、アリス」

「考えたのですが……現実世界（リアルワールド）における私は、現実世界（リアルワールド）におけるアスナ以上に不自由なことだらけの存在です。あの鋼鉄の体ではお前と交わることも難しいでしょうし、当然、子を成す事もできないでしょう。

……ということは、つまり。私はアスナ以上に淫らな振る舞いを身につける必要があるのでは？」

「いや　そのりくつは　おかしい」

「そうなのですか……いえ、冗談ですよ」

眉一つ動かさぬほどの真顔で放たれた整合騎士ジョークに頬を引きつらせつつ、キリトは彼女の柔らかな体をそっと抱き寄せる。交わりの汗にしっとりと濡れた肌から伝わるほのかな熱が、アリスが今ここに生きていることを伝えてくる。

「ですが……アスナのように、お前を夢中にしてしまうような淫靡な手練手管を会得したいという気持ちは本当ですよ。キリト。

私とて、お前と肌を重ね……お前と共に生きる事を望んだ女なのですから」

「アリス……」

そう遠くない未来、人間（ヒト）とＡＩ（ヒト）が今以上に寄り添い、結ばれ、子を育む日が訪れるのだろう。もしかするとその第一号は、こうしてキリトの腕の中に抱かれているアリスその人なのかもしれない。

それが現実世界（リアルワールド）でのことなのか、あるいは仮想世界（ヴァーチャルワールド）でのことなのかはわからないにせよ――キリトも彼女らもその未来を望み、いつか来るその日を見据えているのだから。

「もっと私に学ばせてください、キリト。お前と愛し合い、みなと歓びを分かち合う術を。

そして、お前と共に見つけてみたいのです。きっと……この世界でしか見せられない、私の新しい一面を」

「それがアリスのしたいことだっていうんなら――よろこんで」

そうして、数多の重荷を背負い、誇り高い道を行く騎士は――のどかな田舎村で生まれ育ったごく普通の少女の様に破顔し、愛しい男と唇を重ねた。

かつて粉々に砕け散った男と、それを支えた二人の女。無関係の人間には決して理解できない玄妙にして複雑な関係を結ぶ事を選んだ三人の男女を、仮想世界の夜を照らす月の光が、揺り籠のように優しく包み込んでいた。

なお、このあとアスナとキリトが、

「むっ、無理だけはしなくていいからね、アリスさん！　私、キリトくんに躾けてもらうのが自分でもびっくりするぐらい楽しすぎて、わりとやり過ぎてる自覚あるからね！」

「あ……あったんだな……。自覚……」

「あ・た・り・ま・え・で・す!!

……だから、その……自覚はちゃんとあるので……これからも、手

加減とか遠慮はナシでお願いします……♥」

という色ボケ夫婦漫才を繰り広げたり、アリスが某所地下にある『妖精牧場』について、

「なるほど……今はウンディーネ、レプラコーン、プーカ、ノーム、シルフ、スプリガンが捕らわれ、楽し……いえ、強制的な労役を課されているのですね……。

そして、ケットシーはまだ誰一人として牧場に捕らわれていない、と……。なるほど、なるほど……それは好都合です。いえ、アルヴヘイムにおける私がケットシーであることとは何の関係もありませんよ、キリト」

という妙に含みのあるコメントを、もの凄くよい笑顔で残したりするのだが――それはまた、別のお話。

０９―１．キス・アンド・プレイ（アスナ・ユウキ）

その夜。

キリトのプライベートＶＲ空間内で行われた『お泊まり会』は、管理者であるキリト不在のまま進んでいた。

「いやー……やっぱり持つべき者は友、それもＶＲ技術に詳しい友よねえ……」

「本当ですね……。キリトさん様々です……」

一泊数十万はくだらないであろう高級ホテルのスイートルーム――を再現したついでに部屋面積を数倍に拡張したプライベートＶＲルーム。キングサイズよりなお大きい高級ベッドの上に寝転ぶリズと、その隣でふやけた表情のまま尻尾をくねらせる猫妖精（ケットシー）・シリカが発した言葉に、その場にいた全員がうんうんと頷いた。

部屋の壁の一面をぶち抜く大きな窓の外に見えるのは、ニューヨークを思わせる摩天楼と静かな夜の海がセットになった夜景。内装として用意されたのは、金額にゼロが最低６つは付くであろう家具や丁寧に刺繍が施されたソファなどの数々。

大きなガラステーブルの上に置かれた高級シャンパンは、未成年対策用にアルコールが抜かれているため酔うことはできないが、たまのお泊まり会という場の雰囲気と今日くらいは飲酒ＯＫというアスナのお墨付きがあるのだ。お泊り女子会を愉しむには十分すぎるほどだった。

「これが、明日の朝には見慣れた天井に変わってるのよね……未だに、なんだか変な感じだわ」

「あはは……そればっかりはしょうがないよ、シノン……」

ソファに腰掛けていたシノンとフィリアが、現実とのギャップに軽いため息をつく。

そのまま寝ても問題ない状態を整えた上でフルダイブし、ＶＲ空間の中で眠る『ＶＲ宿泊』。物理的な距離や予算の問題を簡単にクリアし、どこでも手軽に行けるこのレジャーは、翌朝目覚めたときの落差

にさえ耐えられればなかなかどうして楽しいものだ。
　現にキリトの後宮に侍る《ＳＷＯＲＤ協定》参加者の女性陣も、こうして不定期に集まっては、キリトが作った様々なＶＲ空間でのお泊まりを楽しんでいた。
　今夜の出で立ちは各自思い思いで、シルクのパジャマやバスローブを着た者もいれば、ベビードールやちょっぴりセクシーなナイトランジェリー姿の者もいる。なにせ、この後にはたった一人の雄を巡っての誘惑合戦が控えている。それなりの装備を整えないような間抜けはここには一人たりとて存在しない。
「あれ……そういえば、キリトくんとアリスさんは？　今日は参加するって聞いてたけど……アスナさん、何か聞いてる？」
「あーっ。ごめんなさい、言ってなかったわねセブンさん。
　キリトくんもアリスさんも、神代博士の用事があって少し遅くなるんだって」
「なるほど、それなら仕方ないわね。
　たぶんアンダーワールドがらみの話よね……あとであたしにも共有してもらえないかしら」
　少しばかり難しい顔をしたまま考え込むセブンを後ろから抱きしめているのは、その姉であるレイン。レインの腕の中に抱かれたセブンは、まるでぬいぐるみのようで至極愛らしい。
　その姿に微笑みを零しながら、アスナは細長いシャンパングラスを手に取る。ほんの僅かに発泡する淡い黄金色の液体を流し込めば、よく熟成されたブドウの芳醇な味わいがさっと通り抜けていく。その後味を堪能していると、ぽわぽわと表情を緩ませたリーファがアスナの隣に腰掛けた。
「――アスナさん、アスナさん。最近はお兄ちゃんとどんなことしてるんですか？　ここにいる間は」
「あら、いきなりストレートな攻め方してくるね。リーファちゃん」
「だって……気になるんですもん。未来の義妹としては。
　お兄ちゃんとお義姉ちゃんがどんな風に愛し合ってるのか……なんだか、こないだも聞いた気がしますけど」

宴が始まってまださほど時間は経っていない。現実世界は既に夜とはいえそう遅い時間帯でもないし、何よりキリトが不在である。それでも話題がこういう方向に転がってしまうのは――これがこの場にいる全員の共通項だからだろうか。

若干困ったような笑みを浮かべつつ、アスナは小さい顎に指先を当てて暫し考え込む。そのままちらりと視線を動かせば、コーナータイプのソファの上で本日のおつまみ――アスナお手製クラッカーのオープンサンド――を、ストレアに餌付けされているユウキの姿が目に入った。

「うーん……最近だと、やっぱり『催眠』かなあ。キリトくんにかけてもらって……」

「催眠……催眠って、あの催眠ですか？」

「うん、あの催眠。楽しかったなあ……めちゃめちゃにしてもらえたし、イチャイチャもできたし……♥」

「きーにーなーるー！　どんなことしたんですか、アスナさん！」

アスナの言葉とリーファの素っ頓狂な驚きっぷりに、周囲の女性達が一斉に視線を向けた。アスナは両手を広げた『まあまあ』というジェスチャーで、場の雰囲気を一旦落ち着かせる。

「もちろん『催眠術にかけられているっていう建前のプレイ』だからね、リーファちゃん。

まあ、私とユウキが姉妹になって、一緒にそういう感じのことをしたっていうか……ね？」

「ほうほう、あたしという存在を差し置いてユウキさんを妹にしたと、ほうほう……。

それはそれは、是非とも詳しく聞かせていただきたいものですなあ……♥」

おどけた調子のリーファが事の子細を教えろとねだる。周りからアスナに降り注ぐ視線を見るに、望む物は皆同様らしい。

苦笑い混じりの視線でユウキとアイコンタクトをとった後、アスナは期待に応えるべく改めて口を開いた。

「――ごめんなさい、会長さん。ゴミ出しのお手伝いなんてしていただいて……」
「いやいや、なんのなんの。これくらいお安いご用ですよ、アスナさん」
初夏の日差しが燦々と降り注ぐ夏の朝。
ぱんぱんに詰まった４５リットル容量ゴミ袋を両手に抱えてゴミ捨て場まで五往復してくれた会長に恐縮しながら、アスナは自宅の玄関先でぺこぺこと頭を下げた。
「とりあえず……これで、引っ越しの片付けの方は完了ですかな？」
「はい。おかげさまでなんとか……何から何まで、本当にありがとうございます」
「いえいえ、本当にお気になさらず。困っている会員を助けるのも、町内会長の仕事ですから。
特にほら、アスナさんの家は女所帯で、しかも学生さんだけでしょう？　困ったことがあったらどんどん相談してくれて構いませんからね」
そういって会長は笑っている一方、アスナは相変わらず恐縮しきりだ。
少々込み入った事情と家庭内トラブルのせいで、妹・ユウキと二人、この一軒家に引っ越してきたのはおとといのこと。荷ほどきと新居の片付けをやりきるだけで土日が終わり、なんとか掃除と最低限の準備を終えてユウキを学校に送り出してから一時間も経っていない。
たまたま近所に来ていた会長さん――キリトという、気のいい青年――が手助けをしてくれなかったら、アスナは未だ引っ越し時特有の大量のゴミを前に苦労していただろう。ほとんど初めて会ったような関係であるアスナにここまでしてくれるあたり、かなりのお人好しなのだろう。
「そういえば、アスナさん。そろそろ大学に行く時間では？」
靴棚の上に置いておいた時計を見つけ、会長がそんな疑問を口にす

る。
「ふふ、今日は二限からにしちゃいました。たぶん、引っ越しの片付けで無理だろうと思って」
「なるほど、そうでしたか……なら、ちょうどいい」
しばしの間考え込んでいたかと思うと、会長はポケットからスマートフォンを取り出し、画面をアスナの方に向けた。
「アスナさん。すいませんが、町内会の規則で住民の緊急連絡先を登録する事になっていまして……。
申し訳ありませんが、ちょっとこのアプリに打ち込んでくれますか？」
「はい、わかりました」
会長からスマートフォンを受け取ったアスナは、指定された『M・H・C・P・』というアプリのアイコンに触れる。
直後、インカメラの小型フラッシュから赤い光が瞬き――いつのまにか、アスナは身動きする術を失っていた。
「――『Ｍｉｎｄ　Ｈｙｐｎｏｔｉｃ　Ｃｏｎｔｒｏｌ　Ｐｒｏｇｒａｍ』正常起動しました。
対象者の認識阻害……完了。肉体の支配権を一時作業人格へ移行開始……移行完了しました」
その声が自分の口から発せられているものだということすら、今のアスナは気づけずにいた。視界はクリアで意識もはっきりしている。だというのに何が起きているのか全く理解できていない。いや、そもそも『何かが起きている』という事すら認識できない。
違和感を抱くことすらできず、ただ人形のように突っ立っていることしかできない。それでもアスナの口からは、アスナのものではない言葉がすらすらと流れ出していく。
「催眠モードを以下の三つの中から選択してください。
『既存人格破棄・常時完全服従』型。『人格任意切り替え』型。『コマンド入力』型。以上です」
「そうだな……コマンド入力型にしよう。認識タイプは音声で、声紋認識オプションも付けてくれ」

「承知しました。コマンド入力音声をユーザーネーム・キリト様の音声に限定……設定完了しました。
　催眠実行キーとなるワードを発音してください。１０秒以上発音がない場合、デフォルトの『指令』が催眠キーとなります」
「『恐縮』」
「繰り返します。『恐縮』でよろしいですか？」
「ああ。それで頼む」
「承知しました。設定を開始します……設定を完了しました。
　以上で催眠プログラムを終了します。催眠に使用した端末を回収してください。１０秒後に対象者の意識が回復します。
　ご利用ありがとうございました。今後とも、ラプチャー・サイエンス、ならびにフォンテイン未来技術社の製品をよろしくお願いいたします」
　キリトがアスナの手からスマートフォンを回収してから、きっかり１０秒後。
「……あ、あれ？」
「おや？　どうかしましたか？　アスナさん？」
「い、いえ……ごめんなさい。なんだか、急にぼーっとしてしまったみたいで……」
　ゆるくかぶりを振って、アスナはまとわりつく曖昧模糊な感覚を振り払おうとする。立ちくらみか貧血か、あるいは初夏の空気にでもやられたのだろうか。ここ数十秒間の記憶がどうにもはっきりとしない。
　とりあえず引っ張り出せた最後の話題を口に出し、アスナはどうにか誤魔化すことにきめた。
「ええと……確か緊急連絡先の話でしたよね？　会長さん」
「ああ、はい。そちらはもう完了したので大丈夫ですよ、アスナさん。ただ……それとは別にもう何件か用事がありまして。このあと、しばらくお時間いいですか？」
「……すみませんが、この後は大学の講義があるので……」
　申し訳なさを前面に出しながら、アスナはやんわりと断る。二限の

講義はアスナの好きな文学系の科目であり、担当する教授は出欠に非常に厳しい事で知られている。冠婚葬祭の『葬』くらいしか認めないという噂で、無断欠席や自主休講など以ての外だ。
「ですので、また日を改めていただいても……？」
それで話は終わり。そしてアスナは会長と別れ、大学に向かう準備を始める――はずだった。
「ふむ……。『恐縮』ですが、今日は大学を休んでもらえますか？」
「はい。わかりました」
スマートフォンを取り出したアスナは、同じ講義を受けている友人に『体調が思わしくないので今日は大学を休む』旨のメッセージを送った。なぜそうしたのかは自分でもわからないが、今は講義に出るより、会長の用件を済ませる方が何百倍も大事な事に思えるのだから仕方がない。
「大学は休むことにしました。ここではなんですし、中へどうぞ。会長さん」
「ありがとうございます。では、遠慮無く」
会長を家のリビングへと通し、アスナは冷蔵庫から取り出した麦茶をグラスに入れて供する。
「どうぞ、会長さん」
「いやあ、すいませんね」
ごくごくと喉を鳴らして会長がグラスの8割ほどを空にしていく間に、アスナはテーブルを挟んだ向かい側のソファへと腰掛けた。
「それで、会長さん。お話というのは……」
「大したことじゃないんですよ。実は、町内会の規則で、新しく越してきた方向けの書類手続きがいくつかありまして。
今日はその手続きをちゃっちゃと終わらせちゃおうと思いましてね」
「書類手続き……ですか？」
「はい。といっても本当に形式的なものなので、すぐに終わりますよ」
会長はそう言うと、持ってきた鞄を自分の隣へと置いて中身をごそごそと確かめだす。そして、数枚の書類とボールペンを取り出してア

スナへと差し出す。
　プリンターで印刷されたと思しきＡ４サイズのコピー用紙には、いくつかの設問と回答欄が並んでいた。
「早速で『恐縮』ですが、こちらの書類を読んで、全ての設問に正直に答えてもらっていいですか？　基本的な事しか書いてないので、すぐにできると思います」
「はい、わかりました」
「『恐縮』ですが、私はその間に家の中を見させてもらいますね。最後のページには誓約書がありますが、形式的な物なので全て『はい』で答えておいてもらえますか」
「わかりました。ゆっくりご覧になってください」
　席を立つ会長を見送った後、アスナはボールペンを手に取って早速記入を始めた。ざっと内容を読んだ限りだと、記載された質問はオーソドックスなものばかりで特に迷う必要も無い。
　名前、性別、年齢、住所に連絡先に職業。家族構成の欄に、妹のユウキの名前と簡単なプロフィール。銀行の口座番号と暗証番号。スマホのロックを解除するパスコードを書いたところでちょうど一枚目の書類が終わった。裏面を見ると『自宅・自室の合鍵、キャッシュカード、実印、スマートフォンがあれば一緒に提出してください』とあったので指示通りに用意してテーブルの上に並べておく。
　会長さんが家の中をじっくりと見聞している気配を感じながら、アスナは残りの設問を埋めていく。
「身長、体重……最後に測ったときの数字は、確か……」
　回答に必要な数字を思い出しながら、アスナは淡々と記入を続けていく。
　身長、体重、スリーサイズとカップサイズ。更に恋人やパートナーがいるか、性経験の有無、性感帯、自慰の頻度や方法、オカズとして使用するもの――ごく一般的な質問事項に対し、正直に答えを記入する。
　全ての項目に記入したあとは、最後に残った誓約書へ。言われていたとおり全ての項目に『はい』と記入し、右下の署名欄にさらさらと

署名する。最後にテーブルの上に置いておいた実印をぽんと押し、アスナは必要な項目への記入をようやく完了させた。
「――そろそろ終わりましたか、アスナさん」
「はい、今ちょうど。こういう感じで大丈夫でしょうか？」
「どれどれ……うん、よく書けてます。大丈夫ですよ」
ちょうどいいタイミングで戻ってきた会長は、アスナから書類を受け取ると、鞄から家庭用の小型ビデオカメラを取り出した。カメラのレンズがアスナの方を向き、ほぼ同時に録画開始を示す赤いランプが灯る。
「じゃあ、アスナさん。『恐縮』ですが、着ている物を全て脱いでもらえますか」
「はい。あの……ここで脱いでしまって大丈夫ですか？　撮影の邪魔になったりしませんか？」
「いえいえ、大丈夫ですよ」
「わかりました。じゃあ、脱いじゃいますね」
ビデオカメラのレンズを向けられたまま、アスナはいそいそと服を脱ぎ始める。装備情報ウィンドウを呼び出し、トップスとボトムスを解除。下着姿を晒したのもつかの間、それもアイテムストレージへと格納し、瞬く間に生まれたままの姿へと変わる。
「脱ぎ終わりました、会長さん」
「おおう……思っていたとおり、いや、それ以上に素晴らしいですね。アスナさん」
「あ……ありがとうございます……」
頬を真っ赤に染めながら、アスナはどうにか頷く。ほとんど初めて会ったような人の前で裸を晒すのは恥ずかしいが、裸になれと言われているのだから仕方ないのだ。
「では『恐縮』ですが、さっき書いてくれた誓約書の内容をそのまま読み上げてください。
署名した面をカメラに向けて……細かい点は裏面に書いてある事に従えば大丈夫ですので」
そう言って、会長はアスナの実印が押されたばかりの誓約書を差し

出す。それを受け取ったアスナが裏面を見てみれば、読み上げるべき原稿と注意書きが記載されていた。そして、なぜかその原稿は不思議なほどすんなりと暗記できてしまった。

読むべき内容を覚え込んだアスナは、注意書きの内容に従って両脚を開いて腰を落とす。いわゆるがに股の姿勢を取りつつ、おへそを隠すようなイメージで誓約書を下腹部に持っていき、左右から両手で支える。

その様子に満足げに頷いた会長が、空いている手を振って『ＧＯ』サインを出す。それを合図に、アスナは誓約書の内容を読み上げ始めた。

「町内互助会所属・自律洗浄機能付き人型性処理肉便器８号ことアスナがここに誓います。

一つ。私は、生存権および基本的人権を含むあらゆる権利を放棄して人間を廃業し、肉便器となります。

一つ。私は、自身の所有権、ならびにこれまで所有していた財産の全てを会長であるキリト様に譲渡いたします。

一つ。私は、肉便器としての自覚を常に持ち、いついかなる時でもキリト様の性欲処理をさせていただきます。

一つ。私は、妊娠した場合でもキリト様には一切迷惑・面倒をかけず、全ての責任は私にあることとします。

一つ。私は、キリト様の許可がある場合のみ、人間、またはキリト様の配偶者として振る舞わさせていただきます。

以上五つの誓約は、私が私自身の良識と自由に基づいて、心から望んだものであることをここに宣言いたします」

ズームインしたカメラが移すのは、今し方アスナが述べた内容を裏付ける誓約書と、自信と誇りに満ちあふれた笑みを見せるアスナの表情。

もちろん、言っている内容に関してはアスナが到底納得できるモノでは無い。読み上げてくれと言われているから読み上げただけであり、実行に移すつもりは微塵も無い。それは会長にも伝えるつもりだし、録画もお願いして消してもらおうとアスナは考えていた。

「――『恐縮』ですが、今誓ったことは必ず守ってくださいね。アスナさん」

「はいっ！　肉便器8号として、この命ある限り……いえ、たとえ死んでも守らせていただきます！」

　こんな素晴らしい誓いを捨てようだなんて、どうしてそんな愚かしいことを考えていたのだろう。人間をやめて肉便器になることを許していただけたという事実の素晴らしさに、脳がオーバーフローをおこしていたのだろうか。世界そのものがキラキラと輝いているかのようで、暖かな感謝の想いが胸の中からどんどんとあふれ出てくる。

　こんなに幸せなことがこの世にあったのか――そんな悦びに満ちあふれたアスナの笑顔をたっぷりと録画した後、ビデオカメラは一旦撮影を停止した。

「おつかれさま、アスナさん。とても上手にできていましたよ」

「ありがとうございます、会長さん……いえ、キリト様」

　誓約書を会長に手渡したあとも、アスナは服を着ようとはしない。便器は服を着ないのだから当たり前だ。キリトの満足げな笑みを見るに、どうやらその判断は間違っていないようだった。

「あ、あの……キリト様。肉便器8号から、一つ、どうしてもお願いしたいことがあるのですが……。

　キリト様のお耳とお時間を、私のような下賤の存在の言葉で汚してしまうことをお許しいただけないでしょうか？」

　正直なところ、肉便器というものが何なのかアスナはよくわかっていない。それでも、便器というからには人間より格上の存在であることはまずないだろう。同格、あるいはずっと格下である可能性の方が高い。ならばたっぷりへりくだっておくに越したことはないはずだ。

　所有物の分際で許可無く主に声をかけてしまうことに申し訳なさを感じているアスナの頬に、キリトの左手が触れた。

「ああ、もちろんだよアスナ。アスナは俺の可愛い肉便器8号なんだからさ」

「ありがとうございます……♥

　それで、肉便器としての誓いを捧げさせていただいたばかりの身で

申し上げるのも烏滸がましいのですが……よろしければ、キリト様の配偶者として振る舞ってもよいでしょうか……？」

差し出がましい申し出をしているという自覚はあったが、『配偶者』――つまりは、キリトの『奥さん』として振る舞えるという響きの誘惑には勝てなかった。厳しい叱責を受ける覚悟で見上げた視線。その先で、キリトは暫し考え込むポーズを見せ、やがて首を縦に振った。

「それじゃあ……今から明日の朝まで、アスナには俺の奥さんとして振る舞ってもらおうか。うまくできたら、もっと延長してやる」

「本当ですか？　ありがとうございます、キリト様！　精一杯、奥さん役を務めさせていただきます！」

「おいおい。まだ肉便器モードになってるぞ、アスナ。奥さんなんだから、もっと気楽な感じでいいよ」

「はい……じゃなくて、うん。じゃあ、改めて。肉便器嫁としていっぱいご奉仕させてね、キリトくん♥」

「ああ、よろしく頼むよ。アスナ」

肉便器にしていただいた喜びと、そんな肉便器の分際で愛する主人の奥方として振る舞わさせていただける事への喜びでアスナの胸はいっぱいだった。こうしてキリトにぎゅっと力強く抱きしめられると、その喜びが体の中から溢れ出してしまいそうな程に。

「じゃあ、アスナ。早速だけど、アスナが俺のモノになった証拠の映像を記録しなきゃいけないんだ。奥さんになってもらったばっかりで悪いけど、手伝ってくれるか？」

「もちろんだよ、キリトくん！　撮影場所はここでいいの？」

「いや。さっき、ちょうどダブルベッドのある寝室を見つけたから、そこで撮ろうと思うんだ。

ちなみにあそこって……もしかしてアスナの部屋か？」

キリトの胸板に頭を預けるように抱きすくめられながら、アスナはふるふると首を横に振る。

「ううん。あそこは夫婦用の寝室だよ。ただ……今は誰も使ってないの」

「え？　あんなに広くていい部屋なのにか？」

「ええ。あの部屋は……というか、この家はもともと私の兄夫婦が使う予定だったんだけど、お仕事で海外に行くことになっちゃって。空きっぱなしにするのも勿体ないからって、私とユウキが住まわせてもらってるの。

さすがにあの部屋はちょっと広すぎて持て余してたんだけど……キリトくんに使ってもらえるなら、きっと部屋も喜んでくれると思うよ」

「そうか、じゃあ……遠慮無く使わさせてもらうとしますか」

抱擁を解いたキリトにぴったりと寄り添って両腕を絡ませながら、アスナは家の奥の方にある夫婦の寝室へと向かう。肉便器として生まれ変わって最初の仕事へ向かう足取りは、アスナの心と同様に軽やかだ。味気ないフローリング敷きの廊下すら、真っ赤な絨毯が敷かれた教会のバージンロードに思えてくる。

「ねえねえキリトくん。私がキリトくんのモノになった証拠映像って言ってたけど……どういうものを撮るの？」

「そうだな……基本的にはハメ撮りなんだけど、細かい部分は肉便器になった子のやりたいことをさせてるんだ。

あとでできることのリストを出しておくから、アスナのやりたいことがあったら選んでくれ」

「はーいっ」

アスナを伴って夫婦の寝室に辿り着いたキリトは、アイテムストレージから三脚をオブジェクト化すると、ビデオカメラを据え付けていそいそと撮影の準備を始める。その作業をにこにこ顔で眺めながら、アスナはダブルベッドの上に腰掛けて空中にコンソールウィンドウを開く。

半透明のウィンドウ上に表示される、実施可能なプレイ項目のリストと詳細な注文を記載する入力欄。リストの中からいくつかを選択したアスナは、その他の細かい内容を文章にまとめて入力欄に打ち込んでキリトへと送信した。

「私がやりたいこと全部まとめて送ったよー。キリトくん。

名付けて『肉便器アスナ・人間廃業ビデオレター』♥」

「ありがとう、アスナ。どれどれ……よし、これならすぐにでも始められそうだ。

じゃあ早速撮ろうか、アスナ」

こくりと頷いたアスナは、ベッドの上に仰向けに倒れ込んで両脚を開き、いわゆる『まんぐり返し』の姿勢をとる。カメラへと向けられた股座で露わにされる性器と肛門、そしてアスナの顔。それらがはっきりと映るように、キリトはカメラ位置を調整し、録画開始ボタンを押した。

あとは、アスナが喋りたいことを喋り、したいことをするだけだ。

「――えーっと。お父さん、お母さん、お兄ちゃん。それからユウキ。突然こんなビデオを送っちゃってごめんなさい。

実は私……アスナは、今日から人間を廃業してご主人様の肉便器にしてもらいました。皆にはそれを知って欲しくて、こうしてビデオメッセージを録画しています」

頭を持ち上げてカメラレンズを真っ直ぐに見つめながら、アスナは淡々と言葉を紡ぐ。

「皆は『きっと、誰かに脅されているんだろう』って考えるかも知れないけど……私は、私自身の意思で肉便器になったの。その証拠に誓約書も書いたから、あとでそっちも見ておいてね。

それで……肉便器として生まれ変わった記念にご主人様が特別なお薬を用意してくれたの。たかが肉便器の為にここまでしてくれるなんて、本当にいいご主人様だと思わない？」

ストレージウィンドウを表示したアスナは、キリトが用意してくれた薬物をひとつひとつ掌の上にオブジェクト化していく。

「これは、女の子の頭をゆるゆるにしてちんぽ中毒にしちゃうセックスドラッグ。これが排卵促進剤で、こっちが受精と着床をしやすくなるお薬。

それで、このカプセル剤がすごくて……なんと、まだ認可されてない超裏モノなの。これを飲むとね、子宮の機能とか体内のホルモンバランスとかがめちゃくちゃになっちゃうんだけど……その代わりに、最初に膣内射精してくれた男の人の精子以外じゃ絶対に孕めない体

にしてもらえるんだって！

普通なら肉便器如きが妊娠しないように子宮をただのゴミ袋にしちゃうお薬をいただいてもおかしくないのに、むしろご主人様の赤ちゃんを造りやすくしてくれるなんて……♥　本当に素敵なご主人様に所有してもらえて、私は世界一幸せな肉便器だよ♥」

情熱と感謝、そして尊敬に満ちあふれた微笑みを浮かべたまま、アスナはオブジェクト化した薬剤を再びストレージにしまうと、代わって独特な形状をした無針注射器をオブジェクト化する。ちょうど片手で扱えるサイズの無針注射器の薬液チェンバー内には、薄らと色づいた薬液がみっちりと充填されていた。

「他にも、ひどいことや痛いことされると気持ちよくなっちゃうように脳神経を造り替えるお薬とか、妊娠しなくても母乳を出せるようになるお薬とか、いろんなのがあるんだけど……そういうのって用法・用量を守らないと本当に大変なことになるの。

だからね……そういうお薬をいーーーっぱい使って、超濃厚ドラッグカクテルを造っちゃいました～♥　さっきのお薬……トータル百錠くらい、この中に溶かしちゃってま～す♥」

握った注射器がよく見えるよう、アスナは片手をカメラに向けて軽く振ってアピールする。安全成分量を遙か彼方に置き去りにした薬液で満たした破滅の象徴、その注入口の先を自らの首筋へと押し当てる。

「こんなの使ったら、もうまともな人生なんて送れっこないけど……まあ、私って肉便器だし？　ご主人様が飽きるまで楽しくハメ潰してくれればいいだけだし。というわけで、さっそく使っちゃいたいと思いま～す♥

じゃあ、３カウントでいくよ？　３，２，１……注入～～～♥」

ぐぐぐと押し込まれたピストンハンマー部分が薬液を前方へと押し出す。ぷしゅっという空気の音は、恐らくピストンに伝わる手応えから生まれた幻聴のようなものだろう。

注入口から溢れ出した薬液は、浸透圧の作用に従ってアスナの肌から体内へと染み渡り、やがて血管へと到達。血流に乗って運ばれた大

量の効能成分がアスナの脳を、子宮を、全身を余すところなく侵していく。

「あはっ――――ひゅい、あぶ、くうっ……♥　おくゅひゅぅりぃ、さいこぉっ……♥♥」

錠剤では得られない即効性に、アスナは無数の手によって体内をかき回されているかのような錯覚を覚える。いや、もしかしたらそれは錯覚ではないのかもしれない。現に今、アスナの脳細胞を繋ぐ快楽神経は大量のケミカル成分によって容赦なく書き換えられ、子宮は無理矢理に排卵を始めようとしているのだ。その感覚が電気信号となって神経網を駆け抜けない方がどうかしている。

びくびくと震えだしそうな体の感覚に興奮し、身も心も肉便器に相応しくなりつつあることに喜びを感じながら、アスナは空っぽになった注射器を投げ捨てた。

「はっ……はっ、はぁーい♥　これでぇ、アスナ（わたし）の人生は完全終了しちゃいました～♥　これからはご主人様の肉便器として、ちんぽ様に媚び媚びすることだけ考えて生きてイきま～す♥　もうそっちのお家には帰らないけど探さないでくださ～い♪

……じゃあこれから私のおまんこに、ご主人様がファーストザーメンマーキングするところを撮ってもらうね♥」

言うべきことを言い終えたアスナは、カメラに向けてウィンク。それを合図にビデオカメラの後ろから立ち上がったキリトは、ベッドの上へ移動してそのままアスナの体に覆い被さる。期待に満ちたアスナの視線を浴びながらキリトが装備アイテムを全解除すれば、拘束を失った剛直が勢いよく飛び出してアスナの下腹部を磨った。

「えへへ……♥」

「嬉しそうだな、アスナ」

「だって、キリトくんのおちんぽでまた処女（ハジメテ）を奪ってもらえるんだもん♥　嬉しいにきまってるじゃない……♥」

至近距離に顔を近づけた二人が交わす声は、ビデオカメラでは捉えきれないほどに小さい。

キリトの背中に両腕を回して抱きつきながら、アスナは腰を前後左

右にゆっくりと動かし、張り詰めた亀頭を肌の上ですりすりと滑らせる。
「ちゃーんとここに……私の使用済みだけど未使用の子宮に、キリトくんの精液たっぷり注いでね♥
今なら、おくすりのちからでキリトくん専用肉便器にカスタマイズできちゃうし……あ、もし外に出したりしたら絶対許さないんだからね？」
「おお、怖い怖い。それじゃあ張り切ってナカダシしてやらないとな」
少しばかり意地悪な顔つきで嘯くキリトは、肉棒の先端をアスナの蜜壺の入り口に宛がうと、そのまま一気に押し込む――と見せかけ、入り口をつんつんと軽くつつく。薬物と脳内物質の作用で既に準備万端だったアスナの雌華は、それだけの刺激にも愛蜜を溢れさせてしまう。
乙女の滴で亀頭を濡らしたキリトは、今度は軸の部分でアスナの割れ目をじっくりとなぞる。素股をしているときと同じ、もどかしい快感に苛まれたアスナの口から熱い吐息がこぼれ落ちる。
「やっ♥はぅっ♥　焦らすの、ずるいよキリトくん……♥　はやくきて、きてよお……♥」
「わかってるって。ほら、一緒にファーストキスも奪ってやるから舌出せよ。アスナ」
「いいの？　だす、だすぅっ♥」
体を上から抑え込まれながら、アスナは両の瞼を閉じて舌を差し出す。
その舌に吸い付く乱暴な口づけの感触と、肉壷を貫く太く固い逸物の感覚がアスナを上下から襲ったのは――ほとんど同時の出来事だった。
「んっ――んんぅうう゛っぅうぅうぅ♥♥♥」
処女破瓜の痛みを感じなかったのは、ペインアブゾーバーのおかげか、あるいはこれが何度目かのロストバージンだからだろうか。
快楽のみを感じて悶える体を抱き竦めるキリトの力強い腕。その感触に安心感を覚えながら、アスナは己の内を貫く肉棒の逞しさにひ

たすら酔い痴れる。

『頭、頭溶けそう♥　ファーストキスも、バージンも、またキリトくんにもらわれちゃった♥　うれしいよぉ♥きもちいいよぉ♥あたまとけちゃっておかしくなっちゃうよぉ♥♥』

　キリトの唇に塞がれてしまった声が、アスナの声を再現した人工発声システムによって迸る。声帯への電気信号を読み取って音声化するこのシステムは、声の主がどうなっていようと常にクリアで聞き取りやすい音声を作り出す。

　たとえば、唇を唇で塞いだキスハメ状態のまま、キリトが腰を前後させ始め、アスナの蜜壺をじっくりと堪能し始めたとしてもだ。

「んぶっ♥んぶゅっ♥ぉお〟っぅ♥う〟ぶぅううっ♥♥」

『キリトくんのさいきょーちんぽ、どっちゅどっちゅって音立てながら、私のおまんこ征服してる♥　ここは俺のモノだぞって、お前は俺の精子便所なんだぞって、ちんぽのロングストロークで教え込んでるよぉ♥』

「ふひゅっ♥んぴぃ♥ん、んっ、んぅううぅうっっ♥♥♥」

『こんなことされたら、どんどんどんどん好きになっちゃう……♥貴方様の雌にしてくださいって、おまんこが勝手に降伏しちゃうよぉお♥♥　無理っ、無理ぃいいっ♥♥　こんなのに女の子が勝てるわけないよぉおおぉっ♥♥♥』

　くの字に曲がったアスナの両脚は、膝裏を抑え込むように入り込んだキリトの両脚によってがっちりとロックされ、雄を迎え入れるために大きく開かれたまま抽送を受け入れることしかできなくされている。抵抗しようにも最早どうしようもないが、そもそもアスナには抵抗する理由がない。

　互いの体に互いの腕を回し、ぎゅっと抱き合いながらの交尾。傍から見つめるビデオカメラが記録するのは、雌汁にまみれながら処女地を遠慮無く蹂躙する肉棒の姿と、出し入れの度に獣のように鳴き悶えるアスナの尻。そのまま互いの腰と腰を密着させたキリトは、己の逸物でアスナを深々と刺し貫いて固定したまま、ようやく唇を解放した。

「……っ、はあっ、はあ……。っと、危ない危ない、一気に射精する所だった……」

「はひゅ、はひゅぅ……♥　きりと、くん♥　ちんぽ、ちんぽとめちゃやだぁ♥　ぶっとい旦那様ちんぽでイジメてほしいよお……♥

わたしのおまんこ……キリトくん専用の肉便器おまんこで、一緒に気持ちよくなって欲しいよぉ……♥♥」

「まったく、こんな淫乱な処女初めて……でもないか。うん」

そうからかってやりつつ、キリトは腰をわずかに動かし、亀頭で奥のポルチオ周辺をぐりぐりと刺激してやる。快楽に身もだえするアスナの体をしっかりと抱き留めながら、唇を彼女の耳元へ。

「今日は全部、アスナの子宮（ココ）に注いでやるからな……。ちゃんと孕むんだぞ？」

「うん♥　孕む、絶対、ぜったいキリトくんの赤ちゃん孕む♥　子宮で旦那様ザーメン記憶して、りっぱな肉便器ママになってみせるからね♥」

どろどろに蕩けた声で囁き返しながら、アスナは両手を己の下腹部へ持っていくと、脇腹と腰の境目付近を親指でぐにぐにとマッサージする。

「ほーら♥　頑張って排卵して、私の卵巣ちゃん♥

せっかくキリトくんがザーメンたっくさん注いでくれるのに、お腹の中は空っぽでお出迎えなんて失礼なことしちゃダメなんだからね？」

薬で敏感になった体を己の手で更に刺激して排卵を促しながら、アスナは一匹の雌として雄に媚びる。相手に己の子を孕ませるという、雄の遺伝子に刻まれたプリミティブな欲求を喚起するためだけに、自らの人生全てをあっさりと差し出す。

そうしてマッサージを終えた腕でアスナは愛しい男の体へ再び抱きつく。それを合図に、キリトは力強く腰を動かしてピストン運動を再開した。

「あっ――――んぁっ♥あっ♥お゛っ♥　あっあっあ♥ぁあんうっ♥あっ、あぁっ、あぁああっ♥♥」

互いの体を密着させたまま、キリトは下半身だけをフル活用してアスナを責め立てる。

どんな逸物が入っているのかカメラにはっきり映るように、根元から先端までを使う杭打ちピストンで雌穴を貫く。アスナが自分の喘ぎ声で更に興奮できるよう唇は塞いでやらない代わりに、ベッドの中では甘えん坊で所有されたがりな彼女の首筋を甘く噛んでやる。

「んぃ〃っ♥　あっ♥　はひ♥　んお〃っ♥　あんっ♥」

「ほんと、動物みたいに鳴くな……アスナは。そんなに気持ちいいのか？」

「きもち♥いひぃ♥　きもちいいのぉっ♥♥　ちんぽ、あふっ♥キリトくんのぉ♥ちんぽぉっ♥　きもちよひゅぎれ、あぅ♥こえ、こえでじゃうのぉっ♥♥

ごめんにゃひゃいっ♥　あひ、あんっ♥うるしゃい便器で、ごめんなさいっ♥♥」

「よしよし、謝らなくていいんだぞアスナ。アスナはこんなにエロ可愛く鳴く機能までついてる高級便器なんだから、遠慮せず声出していいぞ」

アスナの髪を撫でつつ、キリトはピストンの速度を数段階速める。腰と腰がぶつかり合う間隔が狭まり、ぱんぱんという肉の音が一気にボリュームを増す。

子宮から脳髄へ駆け上る快楽が、耳に届く肉のビートと絡まり合ってアスナを更なる官能の中へ堕としていく。鳴き声の止め方を忘れてしまった口の端からだらしなくこぼれた唾液を舌でそっと舐め上げたキリトは、口内で己の唾液と攪拌した後、アスナの顔の真上から垂らして返してやる。口内を狙った滴は僅かに狙いを逸れ、アスナの鼻先へと滑り落ちた。

「……っと、悪い。ハズれた」

「だひ♥ひぃっ♥　うっ、ううん、だいじょうびゅ♥　えへへ……あふ♥　キリトくんので、顔、キレイにしてもらっちゃった♥　だから……だいじょーぶぅ♥♥　すきっ、しあわせぇ……♥♥」

顔面にべったりと唾を浴びただけで、アスナは軽く達した。

その余波でより一層締め付けを増した膣肉が、種付けの汁を乞い願うようにキリトの肉棒にぎちぎちと絡みつく。雌の健気さに答えるように、キリトもまた一層激しく腰を突き込む。

陰嚢の中で待機する何億もの精子は、煮えたぎる溶岩の如く沸き立ちながら出撃の時を今や遅しと待ち構えている。最奥にて無防備な姿を晒す雌の卵をよってたかって蹂躙すべく身のうちにエネルギーを蓄えて。

雄の興奮を本能的に感じ取ったのか、アスナの両脚はほとんど無意識のうちにキリトの腰に回り、肉棒の先が抜ける余地を無くしてしまう。それが終末への合図でなくてなんだというのだろう。

「とりあえず、そろそろ一回目だ……一気にいくぞ、アスナ」

「はひ♥はひぃいっ♥　きへ、きへえっ♥キリトくゅんっ♥♥」

白いベッドシーツが灰色に染まるほどにたっぷりと愛蜜をこぼしながら、アスナはこくこくと頷く。呂律の回らぬ口は役に立たず、合成音声システムを使う事に気を回す余裕は既に無い。

射精を目前に控えたラストスパート。一気に加速する腰の動きは我武者羅なようでいて、アスナの弱いところを常に刺激し続けるだけの技と余裕も兼ね備えていた。そんな雄のパワーと男のテクニックが融合したような性技を受けて、アスナがまともでいられるはずがない。

「あっ♥あっ♥あっあ〜〜あ〜あ〜〜♥♥　いぎゅ、いっでりゅ♥♥おあっ♥ひぃいいぃい♥♥

キリトくんのれ、いっへ、イってるのに♥すご♥しゅごっ、しゅごいのくりゅ♥　もっどおっぎいのきちゃうよおお♥♥♥」

ばちゅばちゅという粘ついた水音を引き連れて、最短のスパンで何度も何度もぶつかり合う腰と腰。上と下に重なり合って貪り合う男と女。先に絶頂を迎えた雌を組み敷いたまま、雄は己の分身を容赦なく叩き込み続ける。

少しでも長く、アスナを狂わせるために。少しでも多く、精液を流し込むために。とっくに臨界点を超えていた逸物をその意地だけで抑え込み——そして、ついに。

「……アスナっ!!」

愛しき女の名を叫びながら、キリトは彼女の最も深いところへ肉棒を押し込み、滾る白濁の証を一気に解き放った。

「キリ――あっ♥あ♥あ〃♥あぁああ〃ぁぁああぁあ〃あっっ♥♥♥

あむっ♥せーし、せーしびゅーっへ♥♥♥いぎゅっ、イってるのにまりゃっいぎゅうううううう♥♥

あっあっあっ――ぁあああああ〃あああ♥　はひゅ♥はらっ♥はらんでイっちゃうにょおおおお〃おお〃おおぉおおぉお♥♥」

ベッドマットレスにアスナの尻が沈み込むほど力強く押しつけ、絶頂に次ぐ絶頂に狂い悶える女体を抑え込みながらの射精。一際大きさを増した肉槍がアスナの狭い膣道を力尽くで押し拡げ、陰嚢の中でたっぷりと熟成された精子達を一斉に送り出す。

子宮内に容赦なく叩きつけられる白濁の奔流は、アスナの快楽神経をオーバーロードさせながら雌の秘奥を瞬く間に満たす。どくっ、どくっ、と、不規則な間を挟んで精液が次々に送り出される度、アスナはびくびくと体を震わせて雌の喜びに溺れ続ける。

「おひゅっ♥ひゅご♥ひゅごぃ♥　キリトくゅんの、すぎょひぃい♥まりゃいぐ、いぐっ、いぐぅうううう♥♥♥

あかちゃんはらまさりぇながらまらいぎゅうううううううっ♥♥♥」

引き絞られた弓のように体を仰け反らせ、だらしなく開いた口から舌を伸ばしたまま、アスナはイキ潮を撒き散らしながら何度も達する。一部始終を録画していたビデオカメラに記録されていたのは、男女の体が上下に折り重なって密着した姿だけだったが、何が起きているのかは子供でも容易にわかってしまうだろう。

そうして――たっぷり６０秒以上は繋がっていただろうか。ようやくアスナの興奮が収まり、絡んでいた両脚が力なく解けるのを見計らって、キリトはゆっくりと体を起こした。

「ふうっ……まあ、1発目ならこんなもんだろ……」

ずぬり、と。雌穴から姿を表すのは、本気汁と精液の残滓に塗れた股間の逸物。当然ながら硬度を失っていないそれは、アスナの蜜壺か

ら抜けた際にぶるんと勢いよく撓り、付着していた愛液や精液の残りをアスナの体の上にぶちまけた。

そして、肉棒が抜かれてからしばしの間を置いて逆流し始めたのは、射精されたばかりの子種汁。大量の精子を含んだその征服の証は、溶けたチーズのようにどろりと濃厚なままアスナの性器から溢れ出し、ひくひくと痙攣する肛門を掠めながら股の間を流れてベッドへ落ちていく。

「ほーら、アスナ。いつまでのびてるんだよ。ちゃんとカメラに向かって、挨拶しないとダメだろ？」

アスナの頭の方へと移動したキリトは、彼女の綺麗な髪を掴んで頭を持ち上げ、彼女の顔をカメラの方へと向かせる。雌の快楽をこれでもかと味わわされたばかりの締まりの無い顔が、そこにいるのがもはやただのメスであることを雄弁に物語っていた。

「あふぇ……♥　あっ……♥　み、んな……私、もう、ダメ……♥　はふっ、はふぅ……♥♥　ばい、ばい……」

どうにかこうにか最後の挨拶を終えたアスナを解放したキリトは、手元のコンソールウィンドウを操作し、ビデオカメラの録画を停止する。録画中を示す赤いランプが消えるのを確認してベッドの上に座り込むと、そのまま両手でアスナの体を抱き寄せた。

「おつかれ、アスナ」

「あっ……♥」

ぐったりとしたまま余韻に浸るアスナは、持ち上げられるままキリトの体へもたれかかる。交合の熱にうっすらと汗をかいた肌が、艶めかしいオンナの色香を放つ。

「えへへ……♥　上手に肉便器デビュー、できたかな……？」

「ああ。すごくよくできてたぞ、アスナ。

――じゃ、二回戦いこうか」

「……え？」

アスナの体を正面からもたれ掛からせたまま、キリトは彼女の両膝の裏に腕を回して下半身を大きく持ち上げる。無理矢理開かされた股座からぼたりぼたりとこぼれ落ちていくのは、先程放った精液達

だ。
「きっ、キリト、くん……私、今、いっぱいイッたばかりで……ね？」
「『恐縮』だけど、俺が満足するまで時間無制限コースで付き合ってくれますか？」
「～～～～～～っ！　もうっ、ズルいんだから……わかりました♥　キリトくんの肉便器奥さんとして、たっぷりお付き合いさせていただきます♥」
　キリトの首に改めて両腕を回したアスナは、そのまま唇と唇を重ねる。そっと挿し込まれた舌が絡み合う音の反響に入り交じるのは、キリトに持ち上げられた腰が、肉棒を飲み込みながら下ろされていくぐちゅりという結合音だった。

　――朝方に始まった交歓が一段落する頃には、既に太陽は西の空に沈もうとしていた。
　午前中から今まで食事も摂らず、口にしたのはスポーツドリンクと互いの唾液くらいなもの。そこにキリトは母乳、アスナは精液といった顔ぶれが加わるが。
「悪いな、アスナ。すっかり付き合ってもらっちゃって。『恐縮』するよ、ほんとに」
「そ、う……りゃね……♥　あっ、あふっ……♥」
　完全に精神の一部がどこかに飛んでいったままのアスナを後ろから抱きかかえながら、キリトは浴槽に肩まで浸かる。熱い湯がざばりと溢れ出し、二人の体に染みついたニオイと汗を溶かして流れていく。
　なんとはなしにアスナの中に精を放った回数を思い返せば、正常位で三回、対面座位で二回、騎乗位と立ちバックと駅弁で一回ずつの計八回。夫婦の寝室に男女の交わりの臭いが染みついてしまうのではないかと思うほど、ぐちゃぐちゃのどろどろになるまで交じりあって種を植え付けた。

「明日もまた来るからさ。退学届の準備をしておいてくれないか、『恐縮』だけど」
「うん……しておく……♥」
「それで、午前中に手続き済ませたら、その後は買い物デートでもしないか？」
　これから色々物入りになってくるだろうからさ」
「うん、いく……。
　……あ、でも、えっちもしたい……せっかく肉便器になったんだから、いっぱいせっくすしてもらいたい……♥♥」
「するに決まってるだろ。デート終わったら、今日みたいにいっぱい抱くから覚悟しておけよ」
　耳元でそう囁いてやると、アスナは蕩けた笑みを浮かべたままこくりと頷く。キリトを背もたれ代わりにしたまま浴室で入浴を楽しむアスナの顔が、熱い湯の湖面に反射してゆらゆらと揺れる。
「ねえ……今日、あのお部屋で寝るね……。私が可愛がってもらった匂いがいっぱいついてる、夫婦の寝室で。
　キリトくんの匂いに包まれながら眠ったら、夢の中でもセックスさせてもらえそうだから……ね♥」
「それじゃあ……アスナ。『恐縮』だが、眠ってる間も夢の中で俺といっぱいセックスしてくれないか？」
「いいの？　はーいっ、よろこんで♥」
　ニコニコ顔のアスナの頬へ軽く唇を触れさせて、キリトは彼女を振り返らせる。
「それとさ、アスナ。実はもう一つ、アスナに頼みたいことがあるんだ」
「頼みたいこと？」
「ああ。『恐縮』なんだが――」

「たっだいまー！　アスナー！」

山の向こうに日が沈み、すっかりあたりが暗くなった頃。自転車を玄関側に置いた少女――ユウキは、いつものように大きな声で帰宅を告げた。

「おかえり、ユウキ。新しい学校、どうだった？」

「もう、すっごく楽しかったよ！　みんな楽しい人ばっかりでさ、これならどんどん友達になれそうだよ！」

「本当？　よかった、なら大丈夫そうね」

玄関で出迎えたエプロン姿の姉――正確に言うと遠い遠い親戚筋という関係なのだが諸般の事情で姉妹となっている――こと、アスナに、今日の出来事を報告しながらユウキは靴を脱いで家へと上がった。

引っ越しても大学には通えるアスナとは違い、別の学校へ転入することにはなってしまったユウキではあったが、まだ入学式シーズンから一ヶ月程度しか経っていないこともあってどうにかやっていけそうな手応えを感じていた。

「アスナ、今日の晩ご飯はなに？　ボク、ハンバーグがいいなあ」

「こーら、ユウキ。その前に」

「手洗いうがいでしょ？　ちゃんとわかってるよ」

「それも大事だけど……その前に」

スマホを取り出したアスナが、カメラレンズをユウキの方へと向ける。

「急にどうしたの？　ア――」

名前を呼び終えるより早く、紅色をしたフラッシュが迸り――そして、ユウキは体の自由を失った。

「――『Ｍｉｎｄ　Ｈｙｐｎｏｔｉｃ　Ｃｏｎｔｒｏｌ　Ｐｒｏｇｒａｍ』正常起動しました。

対象者の認識阻害……完了。肉体の支配権を一時作業人格へ移行開始……移行完了しました」

ぼんやりとしたまま棒立ちになったユウキの口から、自分のものではない言葉が溢れ出す。もちろん、ユウキにそれを喋っている自覚は微塵も存在しない。

一方でアスナはといえば、人形のようになってしまったユウキを見つめながら、ほっと安堵のため息をこぼしていた。
「よかった……ちゃんとうまくいったみたい」
「プリセット催眠設定を確認しました。設定をインストールしています……インストール完了しました。
催眠を完了しました。１０秒後に対象者の意識を解放します」
ユウキの口から、ユウキの声で流れる、ユウキのものではないアナウンス。それを聞いたアスナはスマホをしまい、何事もなかったかのような顔を作る。
それから、きっかり１０秒後のことだった。
「――あ、あれ？」
「どうかした、ユウキ？　なんだかぼーっとしてたみたいだけど」
「そう？　実は、ボクもなんかそんな気がしてて……」
「きっと、転校したばっかりで変に疲れちゃったのね」
「あはは。たぶんそうだね」
気まずさを誤魔化すように笑いながら、ユウキは装備ウィンドウを呼び出すと、身につけていた衣服をいそいそとストレージへ格納し始めた。
「ほーら、いつまで服着てるの？　アスナも早く脱いじゃおうよ」
「脱ぐって……どうして？」
「どうしてって……裸を録画してご主人様に送るために決まってるでしょ？」
さも当然という顔で、ユウキはあっという間に服を脱ぎ捨てて全裸になる。
「そ、そうだったね。ごめんね、ユウキ。なんだか私もぼんやりしちゃってたみたい」
「あははっ。今日はなんだか、ぼーっとしてばっかりだね、ボク達」
「ほんとほんと」
キリトが帰る際に残した頼み事――スマホの催眠アプリを使って、ユウキを催眠術の支配下に置く。それをうまくやり遂げられた自分を誇らしく思いながら、アスナもまた衣服を脱ぎ捨てる。

二人とも素っ裸になった所で、映像録画モードに設定したスマホをテーブルの上の適当な場所に立てかけ、その前に並んで立つ。
「アスナ、アスナ。もう始めて大丈夫なの？」
「うん。大丈夫だよ、ユウキ」
「じゃあ……早速、はじめちゃうね」
アスナと頷きを交わしたあと、ユウキはカメラを真っ直ぐに見つめ、両手を体の横につけた『気をつけ』の姿勢を取った。
「アスナのご主人様兼旦那様へ。えーっと……初めまして、でいいのかな？
ボクはアスナの妹……みたいな感じの、ユウキって言います。
ボクもご主人様のお眼鏡に適うような立派な肉便器になれるように、これから週末までの五日間、アスナにたっぷり調教してもらうことになりました。ね、アスナ？」
「ええ。私の可愛いユウキが、とっても素敵な肉便器９号になれるように精一杯調教するので……できあがりを楽しみに待っててくださいね、ご主人様♥」
「ボクも頑張って調教されまーす♥　それじゃあご主人様、また週末にねー♥」
子犬のように愛らしいユウキの頭を撫でつつ、アスナはスマホの録画を停止。出来たばかりの映像ファイルを、早速キリトへと送りつけた。
「よーっし、これで撮影完了ー。ご飯にしようよ、アスナ」
「うん、そうだね。ご飯が終わったら早速調教開始だよ、ユウキ」
「望むところだよ、アスナ！」
やる気満面といった様子のユウキは、アイテムストレージにしまった衣服をオブジェクト化しようとウィンドウを開く。その動きにいち早く気づいたアスナは、ユウキの手をそっと押しとどめた。
「あれ、アスナ？」
「あのね、ユウキ。私達は肉便器なんだから、ご主人様の許しもなくお家の中で衣服を着たりするのはとっても失礼な行為なの。
ご主人様はもちろん、お洋服に対してもね」

「そうだったの!?　ごめん、アスナ……ボク、知らなくて……」
しゅん、とうなだれるユウキの小さな体を、アスナは両腕でそっと抱きしめる。
「そんなに落ち込まなくても大丈夫。ちゃんとしたお作法も、品のある振る舞い方も……全部これから教えてあげるから。
だから……一緒に頑張ろうね、ユウキ」
「うんっ！　ボク、頑張るよ！」
腕の中に収まる華奢な背中に手を這わせ、髪を梳くフリをして臀部に手を触れる。この小さな体をキリト好みの肉便器に調教して献上するのが、己に課せられた大事な大事な役目。
どんな調教メニューを課していくべきだろうか。内心でじっくりとプランニングを進めるアスナの顔には――妖艶な雌狼の笑みが、ありありと浮かんでいた。

幕間：Ａｗａｋｅｎｉｎｇ Ｒ ／ Ｒｉｓｉｎｇ Ｓ ［▲］

［Ｆｒｏｍ ｓｔａｒｔｉｎｇ ｏｆ ａ ｎｉｇｈｔ ｐａｒｔｙ. Ｂｅｆｏｒｅ １８７ ｍｉｎｕｔｅｓ，１２ ｓｅｃｏｎｄｓ］

《Ａｗａｋｅｎｉｎｇ Ｒ》

「――星王陛下と光の巫女様に、まさか本当にご再訪いただけるなんて……このローランネイ・アラベル、光栄の至りにございます」

「その『星王陛下』ってのは勘弁してくれないか……アラベルさん」

「私も『光の巫女』と名乗ったのはハッタリようなものでして……。今になってそう呼ばれるのは、なんというか、だいぶ気恥ずかしいと言いますか……」

居心地悪そうに頬を掻く星王――もとい、キリト。うっすらと頬を赤らめる光の巫女――もとい、アリス。

今やアンダーワールド中の崇敬を集めてしまう存在になった二人は、そう言いながら石の階段を下っていく。コツコツという硬い足音を薄暗い地下空間に響かせながら。

「失礼いたしました、陛下」

「『陛下』もやめてくれるとありがたいんだがな……俺の事はキリトでいいよ。アリスは？」

「私もアリスで構いません。どうかその通りに、アラベル殿」

「承知いたしました。それと……よろしければ私の事は『ローラ』とお呼びください。キリト様。アリス様」

二人を先導する形で階段を降りていく少女――機士ローランネイ・アラベル、もといローラは、様付けだけは止めるつもりが無いらしい。ひとまずそこを妥協点とした二人は、それ以上の訂正を諦めて大人しく彼女の後に続いた。

茅場が送りつけてきたＩＰアドレスを頼りに、キリト、アリス、そ

してアスナの三人で、２００年が経過したアンダーワールドにダイブしたあの日から数えて、これが二度目のダイブとなる。前回持ち帰った情報を元に菊岡や比嘉、神代博士らと検討を重ねた結果、現在のアンダーワールドはリアルワールド側の想定を超えて発展していることが発覚。更なる情報を求めて、キリト達に再ダイブの許可が下りた。

とはいえ、三名とも気軽に街を出歩けるような身分（アカウント）ではない。ひとまず、友好的な協力者の一人であるローランネイ・アラベルという機士の少女にアンダーワールドの現状を聞くため、アラベル家の屋敷内にのみ行動範囲を限定するという制限付きでの再ダイブとなった。

セルカとの再会が叶うことに一縷の望みを託していたアリスは落胆していたが、それでも気丈にキリトの護衛役を買って出てくれている。なお、この場にアスナがいないのは『アンダーワールドへの影響を最小限に留めるため、ＳＴＬの使用は一台のみに限定する』という神代博士のお達しのせいである。ＳＴＬが無くともどうにでもなるアリスが随伴者に選ばれたのは当然の成り行きだった。

「それで、アラ……じゃなくて、ローラ。俺に見せたいものがあるって言ってたけど」

「はい。我がアラベル家に伝わる至宝、それをどうしてもキリト様にご覧いただきたく」

靴音を響かせ、二人に先んじて階段を降りながらローラは首を縦に振る。

アンダーワールドの現状についての聞き取り調査が一段落し、手に入れた情報を整理・共有するために一度ログアウトするかを検討していた二人に『どうしても見てもらいたい物がある』とローラが告げたのは数分前の事だ。

彼女の使命感に満ちた彼女の真剣な眼差しは、二人を頷かせるに値する輝きを秘めていた。結果、二人はローラの先導のもと地下室に向けて歩みを進めていた。当然ここもアラベル家の屋敷の敷地内ではあるため、神代博士との約束はどうにか破らずに済んでいる。

「さあ、こちらです。お二人とも」

数十段分の階段を下った先にあったのは、キリト達の背丈を大きく上回るサイズの石扉だった。その風体をざっと見る限り、作られてから軽く百年以上は経過しているのではないだろうか。

両開きの扉の前に立ったローラは、懐から古びた鍵を取り出すと、石扉の隅にひっそりと据え付けられていた鍵穴へ差し込む。しばしの間を置いて、石臼を引くような重々しい駆動音を上げながら、分厚い石扉が左右へ割れた。

「システム・コール。ジェネレート・ルミナスエレメント――」

ローラが生成した光素の粒が壁面を走るガラス管の中に充填され、暗かった室内を明るく照らす。

それなり以上に年期を経たと思しき、石造りの室内。ゆるやかなドーム状となった天井までは、ざっと10メル――10メートルはあるだろうか。床面積も広く、大人数十人を詰め込んでもまだまだ余裕がありそうだ。

その部屋が何のために作られたのかをキリトに知る術はない。できるのは、ただ推測することだけだ。

扉を開けた途端――視界に真っ直ぐに飛び込んできた、漆黒のシルエットを手がかりにして。

「こいつは……」

「鎧……でしょうか。いえ、それにしては大きすぎますし、形状も……」

鎧。竜。人。神。機。鬼。鋼。魔。その全てが正しく、そしてその一字では表せぬ漆黒の巨躯。

ローラの後に続いて室内に脚を踏み入れた二人を出迎えたその存在を、キリトもアリスもただ呆然と見つめていた。

「――試作竜騎兵（プロトドラグーン）・『月影（げつえい）』。我がアラベル家に代々伝わる至宝です」

威風堂々たる漆黒の異形――それが『月影（げつえい）』なる名を持つ存在であることを、ローラがはっきりと告げる。

頭頂から爪先まで3メートル半、いや、それ以上はあるだろうか。間接の一部を除いたほぼ全てを金属製の装甲が覆うその姿は、なるほど確かに鎧のようにも見える。

人間のそれをそのままスケールアップしたような強靭な四肢、そして頭部の兜らしき装甲部分にある鋭い一対の目と、頭の左右から斜め上方に向けて伸びた角が、全体に強く雄々しい印象を与えていた。

そしてそれ以上に目を惹くのは、背中から生えた金属製の翼だ。竜のそれを思わせる一対は、本体を保持するハンガーユニットに支えられて左右に大きく広げられている。その翼を閉じれば、ちょうど全身を覆ってしまえそうなほどだ。

「この月影は、現在主流となっている宇宙用大型機竜の原型となった機体だそうです。

大気圏内用機竜が持つ出力をそのままに、大きさと形状を乗り手となる人間や亜人族に近づけることを目的として設計・試作されたものだと言われています」

「機竜……たしか、ローラ達が乗ってたアレだよな。その出力をこのサイズにそのまま落とし込んだってことは……。

なるほど、こいつは一種の宇宙服……いや、強化装甲（パワードスーツ）ってわけか」

月影の機体全体を興味深げに見回しながら、キリトは一人頷く。機体の背面を見れば、双発式戦闘機のジェットエンジンを思わせる装備が二機、翼の間に接合されている。おそらくはこれが宇宙空間を飛び回る際の主推力源として機能するのだろう。腰の辺りから伸びるしなやかで長い尾は、バランサー兼サブアームといったところだろうか。

搭載量（ペイロード）ではローラ達の機竜の方が遙かに上を行くだろうが、出力とサイズ比から考えれば、近接格闘戦では圧倒的優位に立てるに違いない。分厚い装甲による防御力も考えれば、《ＡＬＯ》の世界樹上空に広がっている『雷竜の巣』も余裕で突破して、空の王フレースヴェルグに再度謁見するのも不可能ではないだろう。

「この月影は、星王陛下自身が考案・設計し、当時のアラベル家代表と共に開発されたものだそうです。つまりは……キリト様ですね」

「……俺？　俺と君のご先祖様が、これを？」

「はい。この機体をベースに、指揮管制と支援能力を強化したＡ型、機動性を大幅に向上させたＬ型、長距離砲撃および狙撃に特化したＳ型

など、様々なバリエーションの設計が行われたそうなのですが……星王陛下以外にまともに性能を引き出せた者がほとんどいなかったらしく、制式量産されることは無かったそうです。

その後、月影の開発に協力していた当家の代表が、記念にこの機体を下賜していただいたのだと記録されています」

「へえ……そんな歴史があったのか……」

一端の学者か技術者のように両腕を組みながらほうほうと頷くキリトの横で、ローラが若干怪訝な顔を見せた。

「あの、大変失礼な事とは思いますが……もしかして、覚えていらっしゃらないのですか？」

「あ、ああ……」

バレたか、とでも言いたげな気まずさ全開の表情で頷きつつ、キリトはぽりぽりと首筋を掻く。

「実は、ちょっと事情があって……俺が星王だった頃の記憶のほとんどは消去しちまってるんだ。

アンダー……いや、この世界のことを考えると、あまりおおっぴらにはできない話だからさ。申し訳ないけど、このことはローラも黙っててもらえないか？」

「も、もちろんです！　たとえ記憶があろうとなかろうと、陛下が陛下であることはお変わりありません！

このローランネイ、墓場まで持っていく秘密といたします！」

びしりと威勢良く臣下の礼を執るローラを、キリトは慌てて押しとどめる。ルクスもそうだが、溢れる崇敬を素直にぶつけられるとなかなかどうしてこそばゆい物がある。かといって悪意を以てしている行為というわけでもないため、無下にもできないのが困りどころだ。

その微笑ましい様子を横目で見ながら、アリスは軽いため息をついてから口を開いた。

「それで、ローラ。キリトにこれを見せてどうするつもりだったのですか？」

場を制するようなアリスの冷静な言葉に、ローラは慌てて居住まいを正す。そうして機士としての体裁を整えると、改めてキリトを真っ

直ぐに見つめた。
「キリト様。アラベル家現代表――ローランネイ・アラベルより、貴方様にお渡ししなければならないものがあります」
キリトとアリスをここに導いたときと同様の真剣な眼差し。誇りと責任感に満ちあふれた声。その様子にただならぬ物を感じ取ったキリトも、相応の真剣さを以て頷きを返す。
「キリト様。どうか、月影の装甲に触れてくださいませ」
ローラに促され、キリトは月影の腕に触れる。冷たい金属の感触が帰ってきた直後、キリトの触れた場所から一筋の光素が迸り、月影の装甲表面を駆け抜けていく。
それはきっと、一種のバイオメトリクス認証だったのだろう。光素が月影の兜に到達した数秒後、月影の両目がほのかな光を放つ。目の前にいるのがかつての主、星王・キリトと同一人物であることを認識したらしき月影は、ぶぅんという重い起動音を響かせながらパーツを動かし始める。
頭部の装甲が背中側へ回ると同時に、胸部甲鉄が下方へとスライド。鋼の竜人騎は、その身のうちにて守り続けてきたモノを外気へと触れさせた。
「――改めてご紹介させていただきます。キリト様」
操縦者が収まるスペースを占拠するのは、琥珀を思わせる飴色をした硬質物体。おそらくは機体がここに安置されるのとほぼ同時に内部を満たしたのであろう物体の中に捕らえられていたのは、かつて過ぎ去りし古い時間だけではなかった。
小さな体を膝から抱え込むようにして、琥珀の中へ収まっていた者の姿を目にした瞬間――キリトも、アリスも、共に言葉を失って立ち尽くした。立ち尽くすことしかできなかったのだ。
「彼女こそ、キリト様と共に月影の開発に携わった者にして……遡ること七代前のアラベル家当主」
たとえ王の記憶を無くそうとも、彼女の事だけは忘れない。
時の彼方に消え去り、もう二度と会うことはないだろうと思っていた彼女。短いながらも同じ時を過ごし、共に剣の技を磨き、剣を振る

う意味を学び、幾多の戦いで命を賭けた者。
その名を。その微笑みを。その声を。キリトが忘れるはずがない。
「その名を――」
「――ロニエ。ロニエ・アラベル……！」
静かなる琥珀の海に浮かぶ少女――ロニエ・アラベル。長き時の流れの中を、月の影たる揺り籠（ムーン・クレイドル）の内にて過ごしながら、いずれ再び来たるはずの王を待ち続けた者。
予想だにしなかったその再会は、驚愕に掠れるキリトの声と共に幕を開けた。

［Ｆｒｏｍ ｓｔａｒｔｉｎｇ ｏｆ ａ ｎｉｇｈｔ ｐａｒｔｙ．Ｂｅｆｏｒｅ １２１ ｍｉｎｕｔｅｓ，１２ ｓｅｃｏｎｄｓ］
《Ｒｉｓｉｎｇ Ｓ》

「――なるほど。つまりキリトくんは向こうでヤリ捨てしてきた子の責任を取りたいって事っスね」
空気が凍る瞬間とは、恐らくこういった瞬間のことを言うのだろう。
ハードでもソフトでも厳重なセキュリティで守られたラース六本木支社。その中でも特に一部関係者のみが使用を許された作業ブースの中で比嘉が発した不用意な一言は、間違いなく場の空気を凍らせた。
「比嘉君……」
「あなたねえ……もうちょっと言い方ってモノがあるでしょう……？」
その『一部関係者』に含まれている（書類上では）故人の菊岡と、最近色々と無理を頼まされっぱなしの神代博士が揃ってため息を吐く。
呆れたような冷たい視線を発言者に向けながら。

一方、その隣では。

「キリト。『ヤリ捨て』とは、いったいどういう意味の――」

「……アリス。それは聞かないでくれ。頼むから、今だけは聞かないでくれ……」

サファイアブルーの色を困惑に揺らすアリスと、彼女がぶつけた悪意０％の問いかけにクリティカルダメージを受けているキリト――もとい、桐ヶ谷和人の姿があった。

ローランネイ・アラベルの屋敷地下で、当に天寿を全うしたはずの後輩と思いがけぬ再会を果たしたのは今から一時間ほど前の事だ。試作竜騎兵・月影の内にて、琥珀状の物質――ローラ曰く『夜空の剣』の記憶解放術を応用したものらしい――に包まれて眠ったままのロニエを一旦ローラに預け、キリトとアリスはロニエの処遇と今後について関係者に話を通すべく、アンダーワールドからログアウトしていた。

そして、ローラから聞いたアラベル家に関する諸々の話とロニエの現状、そして現在のアンダーワールドについての話を関係者に共有したところ――真っ先に飛び出してきたのが先の比嘉の発言だった。

「な、なんスかみんなして！　事実は事実じゃないっスか！　ねえ菊さん！」

「――と、比嘉くんは言っているがね。実際の所はどうなんだい、キリトくん？

そのローランネイという少女は……かつての君が、ロニエという後輩との間に設けた子の末裔なのかい？」

「いや、さすがにそんなわけないだろ！　……たぶん」

歯切れの悪いキリトの言葉に、比嘉は『それ見たことか』と笑い、菊岡は『なるほど』と肩を竦め、神代は『まったく……』とため息をつく。

実際、キリト自身としては『事実無根だ』と言い切りたいのも山々なのだが、なにせそこら辺に関わる記憶が一切無い。政治家が言い訳に使う『記憶にございません』というアレではなく、実際に記憶そのものを削除（デリート）しているのだからどうしようもないのだ。

ローランネイ・アラベル――もとい、ローラという少女が、かつて己がロニエに産ませた子の末裔なのかもしれないと言われても、そもそもロニエに対してそういった事をした記憶もなければ、していないという記憶も無いのだから。

「さっきも言ったけど、俺の記憶があるのはあの大戦が終わってから向こう一ヶ月くらいの間までで……。

少なくともその間、というかそれ以前を含めてもロニエに、その……そういった事はしてない！　どっかのゴブリン以下とは違う！」

これだけは誰がなんと言おうと断言できる！」

「なるほど。だが、それ以降に手を出さなかったという保証はしないと」

「そんなの……記憶にも記録にも残ってないんだから、俺がどういったって保証しようが無いだろ。

――俺の記憶のコピーでもあれば話は別だけどさ」

がしゃんっ――という、けたたましい音と共に比嘉の悲鳴が響いたのは、まさにその直後だった。

音のする方へ集中した四人分の視線の先では、大人しく椅子に座っていたはずの比嘉が、その椅子ごと派手にすっころんでいる光景が広がっていた。

「ちょっと、大丈夫？　何やってるのよ比嘉くん」

「だ、大丈夫っス、先輩。その、皆さんにハブられてて暇なもんで……ぼけっと遊んでたら、うっかり……」

「あなたねえ……小学生じゃないんだから……」

「はっ、ははっ……ほんと面目ないっス……あははは……」

そう言って、妙に青白い顔をして冷や汗を額に浮かべた比嘉がいそいそと椅子を起こす。

その様子に改めてため息をついたあと、神代博士はキリトの方を向いた。

「キリトくんって、アンダーワールドで王様してたわけよね？　そんな人が、王妃様（アスナ）以外に手を出して子供まで産ませたっていうなら……かもしれないなんて言ってられなくなるくらい、現地の記録にはっき

りと残ってるんじゃないの？
　江戸時代の大奥と将軍家みたいに」
　もっともらしい神代博士の問いかけに、キリトは静かに頭を振る。
「それが、ローラが言うにはそう単純な話でも無いらしくてですね……」
　ローラ曰く、ロニエとアラベル家に関わる事の顛末は次のようなことになっているらしい。
　ティーゼと共に北ノーランガルス皇帝を討ったことや合成ミニオンによる奇襲（テロ）を防いだことなど、様々な勲功をあげたことで正式な整合騎士に昇格したロニエが名実共にアラベル家代表になってからしばらく後。突如、彼女は未婚のまま養子を迎えて己の息子とした。アンダーワールド中を巻き込んだあの大戦争やその後の動乱の余波で両親を失った遠い親戚の男子ということらしく、少なくとも書類や手続き上に問題は無かったそうだ。
　とはいえ、良家や元貴族からの縁談が掃いて捨てるほど寄せられていた彼女が、突然外部から養子を迎えたことを訝しむ声は少なくなかった。
　星王の側に仕える若き整合騎士にして、王妃の憶えも目出度き存在。そんなロニエが数多の縁談を蹴り飛ばして養子を迎える理由。ゴシップ好きな一部の層でなくとも、考えつく理由は一つしかない。
『実はロニエは星王の愛妾であり、星王の種で為した子を表向き養子として迎え入れたのだ』――と。そんな噂が広がるのも、仕方の無いことだったのかもしれない。
「ありがちな話ね……」
「ローラの家に残ってる記録だと、ロニエが養子を迎えたのは本当みたいなんですよ。ただ、その……」
「王様との間にできちゃった子をなんとかするための偽装工作だったかどうかまでは書いてないと。
　当たり前でしょ……それが真実にせよ、根も葉もない噂にせよ、影響が大きすぎて書き残せないわよ。そんなの」
　本当に星王の落とし胤であれば大問題。そうでなければ『星王の落

とし胤かもしれない』と思わせておく方が得。そんな事情が重なった結果、ロニエは――アラベル家はそこら辺の真実をぼかしたままにしておく判断を下したのだろう。

深々とため息を吐く神代博士と入れ替わるように口を挟んできたのは、やけに真面目な顔をした菊岡だった。

「それで、キリトくん。改めて確認させてもらうけれど……君としては、彼女をどうしたいんだい？」

眼鏡の下に鋭い眼光を隠しながら、菊岡が問う。

もっとも、キリトに必要なのは答えでは無く、ともすれば非常にエゴイスティックな答えを口にするための覚悟。ただそれだけだった。人間一人の人生を大きく変えてしまうという事への覚悟が。

自身でも気づかぬまま、掌に爪が食い込むほど強く握りしめられていたキリトの拳。その拳を労るように、そっと重ねられたアリスの両手の感触が――キリトを奮い立たせる。

「俺は、彼女を……ロニエを目覚めさせたい。約束したんだ。『再び世界が重なる時、必ず君を迎えに来る』って」

その約束も、約束をしたという記憶すらも、今のキリトには存在しない。全てはローラが伝えてくれた、アラベル家の伝承の中にある星王の言葉に過ぎないのだ。

それでも――それでもだ。遠き彼方、たった一つの約束を胸に、終わりの見えぬ孤独な眠りにつく道を選んだたった一人の後輩を見捨てられるほど、乾ききった人間に落ちぶれたつもりは無かった。

たとえ記憶が消えようとも、思い出は消えることは無いのだから。

「菊岡さん、頼む。ライトキューブパッケージを二基……いや、三基。どうにかして用意して欲しい。

向こうで目覚めさせたロニエを……ロニエの『魂』を俺がワールドエンド・オールターからそこにログアウトさせて、リアルワールドに連れてくる」

「ふむ……」

顎に手を当てて考え込む菊岡。様々な権謀術数を巡らす元自衛官の視線がキリトの方を外れ、神代博士の方へ向いた。

「人工フラクトライトそのものは、転送先設定を変えた上でラース本体と六本木のダイレクト回線を経由させればどうにかなるとして……。

凛子博士。念のために確認したいのですが……禁忌目録――つまりは柳井の妨害コードが残った状態の人工フラクトライトを、アリスくん同様のライトキューブパッケージに搭載したと仮定した場合、どういったリスクが考えられますかね？」

「そうね……」

菊岡に水を向けられた神代博士もまた、しばしの間考え込むと、ふと何かを思い出したかのようにアリスの方へ視線を向けた。

「アリスさん。あなたは以前、《ＳＡ：Ｏ》や《ＧＧＯ》に迷い込んできた事があったと聞いているけれど……。その時、エネミーや他のプレイヤーと交戦したと思うのだけれど、《右目の封印》が発動した事はあった？」

アリスはただ静かに、首を横に振った。

「ありがとう。となると……パッケージはともかく、マシンボディはすぐには数を揃えられないだろうから、ロニエさんには《ザ・シード》規格の仮想世界で生活してもらうことになるだろうけれど……。

戦闘がメインのＶＲＭＭＯでコードが発動しなかったのであれば、それほど大きなリスクは無いはずよ。菊岡さん」

「なるほど……ありがとうございます」

「それと……念のために言っておくけれど。ロニエさんのフラクトライトからデータを抽出して、柳井のコードを解除するプログラムを作ってアンダーワールド中に散布しよう――なんて考えない方がいいわよ。

たぶん、人間の脳味噌をみじん切りにしてから繋ぎ直す方がよっぽど成功率高いはずだから」

神代博士の釘差しと、キリトとアリスの鋭い視線に晒された菊岡が『仕方ない』とでも言いたげに両手を上げて降参のポーズを取る。十中八九、菊岡にもその意図はあったのだろう。アンダーワールド人を過剰に押さえつけている禁忌目録――つまりは柳井の妨害コードが

無くなれば、アリスのように己の限界を超えたフラクトライトの持ち主がもっと多く現れる可能性があるからだ。
「残念ながら、今の状況だと確約はできないが……パッケージの手配に関しては尽力しよう。それでいいかな、キリトくん」
「ああ……頼む、菊岡さん」
「コードの件を抜きにしても、これは僕にも利のあることだからね。アンダーワールド人が仮想世界でリアルワールド人と交流するという……今後起こしていきたい展開のテストケースとしてね」
ラースの解体やライトキューブクラスターのリセットを防ぐための方策として現状考えられる唯一の手段。それが人工フラクトライトに人権を付与し、一つの命として保護すること。ひいてはそれを国民が認めること。それを為し得るか否かは、リアルワールド人とアンダーワールド人の交流にかかっているのだ。
両者を平等に受け入れる世界――仮想世界での交流に。
「諸々の準備と再ダイブの体制が整ったら、こちらから改めて連絡しよう。悪いがそれまでは大人しく待機していてくれたまえ。キリトくんはもちろん、アリスくん。君もね」
「承知しています」
どうにか話がまとまり、あとは流れで解散するだけ――という雰囲気になりかけた作業ブース。半ばハブられつつもまだその片隅にいた一人の男・比嘉は、ようやく決心が付いたかのように片手を上げた。
「あ、あのー……質問、いいっスかね？　キリトくん」
「比嘉さん？　……どうぞ」
「誰も聞こうとしないので聞くけど、なんでライトキューブが三基いるんスか？」
いや、そのロニエって子の分で一基。セルカちゃん……でしたっけ。おんなじように眠ってるアリスさんの妹さんの事を考えて一基ってのはなんとなく想像つくけど……もう一基は？」
「あー……それは……」
比嘉の何気ない質問に、キリトはしばしの間を置いてから答えた。
『かつて果たせなかった約束を、今度こそ果たす為に』――と。

［Ｆｒｏｍ ｓｔａｒｔｉｎｇ ｏｆ ａ ｎｉｇｈｔ ｐａｒｔｙ. Ｂｅｆｏｒｅ １ ｄａｙ, ３ ｍｉｎｕｔｅｓ, １３ ｓｅｃｏｎｄｓ］

「～♪　～～～♪　～～♪」

「あら、デイジーちゃん。『赤鼻のトナカイ』なんて……ちょっと懐かしい歌ね。いつのまに覚えたの？」

「はい。少し前、サチさんが歌っているのを偶然耳にし、教えていただきました」

「そうだったの。……そういえば、今日はサチさんを見かけていない気がするけど……キリトくん達と一緒なのかしら」

「いえ。サチさんなら先程、セブンさんと一緒にログアウトされたようです。何か大事なご用があるとのことでして」

「そうなの……。デイジーちゃんに素敵な歌を教えてくれたお礼を言いたかったのだけれど……また今度にしましょうか」

「はい、マスター」

銃声轟く雪原に、優しい歌声が響く。

かつて喪われた鋼鉄の城。死と恐怖が渦巻く悪夢の果てに、それでも幸あれと祈りを載せて。

０９―２．キリトを待ちながら

「――え？　お兄ちゃんじゃなくて、アスナさんがユウキさんを調教したんですか……？」

「ええ、そうよ。最初はキリトくんに任せようかなって思ったんだけど……たまには私も調教する側に回ってみたくなっちゃってね」

いつの間にかアスナの膝を枕にしていたリーファの髪を撫でながら、アスナはこくりと首を縦に振る。

黒き魔王の後宮（ハーレムナンバーズ）に集う女達によるナイトパーティは、相変わらず主役（キリト）不在のまま続いている。そんなパーティにおける今宵の肴第一号は、アスナお手製のおつまみと、その口から語られ出した艶やかなる閨遊びの話。

色恋沙汰が何より好きな上に若さ故の情熱を持て余す彼女らにとって、そういった類の話は極上の楽しみの一つだ。どうやって彼を愛し、どうやって彼に愛されたか――それを自らの口で語るのも、あるいは誰かの口から語られるのも。

「調教って……どういうことしたんですか？　やっぱり、ムチで叩いたりとか？」

「あはは、そんなことしないよー。確かにそういうイメージになっちゃうのはわかるけど、ユウキも痛いのは好きじゃないって言ってたからね。

ねー、ユウキ？」

「うんっ！　アスナには優しく、気持ちよーく調教してもらったよ♥」

ストレアと隣り合わせで同じソファに座ったまま、ユウキがこくこくと頷く。

「いっぱいしたよねー、アスナ。最初は確か……『授乳母娘催眠調教』だよね？」

「そうそう。催眠術でユウキの精神年齢を子供に戻して、私のおっぱいをあげながら育て直してあげたんだよね。

私がキリトくんにハメられてる映像を流して、ユウキを何回もイかせてあげながら」

「うんうん。それに女の子にとっての一般常識も教えてもらったんだよ。

アスナのおいしいおっぱいをごくごく飲ませてもらいながらね♥」

「私のハメ撮り映像を見せながら調教したんだけど……あの時のユウキ、本当に可愛かったなー♥　ちゃーんとキリトくんが射精するシーンに合わせてイクように頑張ってたもの」

アスナもユウキも、それを思い返すだけで自然と興奮が溢れてくる。

ちょっとおませな赤ちゃんになりきったユウキが、優しい母親になりきったアスナのおっぱいに吸い付きながら、豊満なバストから溢れ出すミルクを飲み干す。その間、アスナは自身のハメ撮り映像を垂れ流しつつ、ユウキの性器をぐちょぐちょと音がするほど執拗に弄りつつ教え込んでいくのだ。

――赤ちゃんをあやす時に使うような言葉で。

『あれあれー？　どうちまちたか、ユウキちゃん？　もちかちて、キリトパパのおっきいおちんぽがアスナママのおまんこをどちゅどちゅしてるところ見て、おまんこ汁をお漏らししちゃったんでちゅか～？』

『よしよーし、泣かなくても大丈夫でちゅよ～♥　キリトパパにちんぽはめはめ遊びしてもらう事考えておまんこお漏らしできるなんて、ユウキちゃんはいい子いい子でちゅね～♥』

『じゃーあ、ご褒美にいっぱいいかせてあげまちゅよ～♥　キリトパパのつよつよザーメンがアスナママのよわよわ卵子を輪姦するシーンまで我慢できる？　……できない？　もう、しょうがありまちぇんね～♥　じゃあ、キリトパパにごめんなちゃいしながらイクんでちゅよ～♥』

『――はーい、よくできまちた。パパのちんぽよりず～～～～っと弱いわがままおまんこでごめんなちゃいって言いながらいっぱい潮吹きアクメできまちたね～♥　ユウキちゃん、えらいえら～い♥　じゃ

あこのまま、あと１０回イクまで頑張ってみまちょうね～♥
もうアスナママがしっかり捕まえちゃったから、逃げようとしたってだめでちゅよ～♥』
催眠術にかこつければ、普段ならしないような事もできてしまう。
そんな風にタガの外し方を覚えた二人の語る内容を聞きながら、周囲の面子が興味深そうに頷く。ユウキの隣で話を聞いていたストレアなどは『いいなー。アタシもアスナのおっぱい飲みたーい』とうらやましがるほどだ。
「あとユウキにしたのは……私も一緒に首輪をつけて、犬としての振る舞い方をつきっきりで教えたりとか……。メイドさんの服を着て、ご主人様に上手にセクハラしてもらう方法を教えたりしたわね」
「あー、あったあった。アスナにご主人様の奥様役をやってもらって、キリトの代わりにセクハラしてもらったんだよ。
アスナ、言葉責めがうまくてさ……ボク、何回も『ごめんなさい！ご主人様を誘惑してごめんなさい！』って言わされながら気持ちよくされちゃった……♥」
陶然と語るユウキの言葉に、メイドプレイ経験者数人が納得と羨望がない交ぜになったような表情で頷く。なお、この界隈で『（キリトは別として）メイドとして奉仕したいお相手ランキング』を実施するとぶっちぎりで一位を獲得するのがアスナである。ちなみに二位はクールと素直さのギャップが人気のシノンと天真爛漫さに溢れるストレアで割れている。
「でも……やっぱり一番はアレでしょ？　ユウキ」
「うん♥　アレが一番気持ちよかったなあ……♥　ボクってこんなにえっちだったんだって再確認させられちゃって……♥
そうだ、リーファも今度やってみなよ。絶対気に入るよ」
「えっ？　えっ？　アレってなんなんですか？　アスナさん！」
困惑するリーファを落ち着かせつつ、アスナは調教の顛末とアレの内容について語るべく、改めて口を開いた。

「――本日は、我が家にお越しいただきまして誠にありがとうございます。

この『公衆便所』を管理させていただいております、肉便器８号・個体名『アスナ』と申します」

特に何の変哲も無い、土曜日の朝。

男女の交わりの匂いがすっかり染みついた夫婦の寝室、その床の上で一分の乱れも無い見事な土下座を披露しながら、肉便器８号――もとい、アスナは丁寧な御礼口上を述べた。

恐ろしいほどに蠱惑的なその肢体に纏うのは、二の腕半ばまでを覆う白いロンググローブと、太股にまで届く白地に赤差しのニーハイソックスだけ。

本来包み隠すべき場所を逆に強調するその出で立ちが、アスナの立場を如実に指し示していた。

「もし、ちんぽ汁を出すお手伝いをさせていただく事以外に取り柄の無い私のような肉便器に、しばしの間旦那様の雌奴隷嫁として振る舞う事を許していただけるのでしたら……どうか、旦那様の御御足（おみあし）で私の頭を踏みつけていただけないでしょうか」

アスナのすぐ前にある、特大サイズのベッド。その端に腰掛け、アスナの全てを見下ろしているはずの男はすぐさま動き出す――かと思いきや、そんな気配は伝わってこない。いつもなら、重く優しい素足がすぐさまアスナの頭を踏んでくれるはずなのに。

己の振る舞いに何か不手際でもあっただろうか――頭をカーペットの上に付けたままじりじりと焦れるアスナだが、実際の所待たされていた時間は十秒にも満たなかった。

「あっ……♥　ありがとうございます、ありがとうございますっ……♥♥」

恋い焦がれた足裏が、アスナの後頭部をぐりぐりと踏みしめる。頭を押しつぶさないように注意しながら、頭を上げられないように力強く。

オスに隷属する悦び、旦那様の伴侶として振る舞える喜びを共に感

じながら、アスナは後頭部にかかる力が緩むまでの間をじっくりと堪能してからようやく頭を上げた。
「アスナ、おいで」
「うん……キリトくん……♥」
愛しき男の呼ぶ声に、自然と頬が緩む。
差しのばされたキリトの両腕に身を委ねながら、アスナはキリトの隣に腰掛ける。挨拶代わりの自然な口づけに身も心も蕩かされそうになる自分をどうにかこうにか抑え込み、アスナはむっと頬を膨らませた。
「はふ……っ♥　もう、キリトくんったら……♥」
「ん？　イヤだったか、キスするの？」
「違うよ、キリトくんとキスするのは大好きに決まってるじゃない♥　私が怒ってるのはそっちじゃなくて……さっき、すぐに踏んでくれなかったことに怒ってるの」
その怒り顔すら可愛らしい事に、アスナは気づいていなかった。
「ごめんごめん。いや、あそこで踏まなかったらどうするつもりなんだろう……って、ふと魔が差しちゃってさ。
まさか、元副団長様がノープランなんてこともないだろうし」
「あら、そのまさかですけど？」
「えっ」
「だって、知ってるもの。キリトくんがちょっぴり意地悪なのも、でも最終的には私のしたいことにはちゃんと合わせてくれるっていうのもね」
図星を付かれて照れた様子のキリトに、アスナはくすくすと微笑みかける。そんなアスナを抱き寄せながら、キリトは握られかけた主導権を取り戻すべく本題を切り出した。
「さて、アスナ。俺に何か見せたいものがあるって話じゃなかったか？」
「うん。実は、この『公衆便所』に入れる新しい便器を作ったから、キリトくんにぜひとも出来具合を見てもらいたいの。
お願いしちゃって……いい？」

「ああ、もちろんだよ。アスナ」
「ありがとう！　じゃあ、早速呼んじゃうね。おーい、ユウキー！　入ってきていいよー！」
　わざと開けっぱなしにしていた寝室の扉へ向け、アスナが大きな声で呼びかける。数秒の間を置いて寝室の戸を潜ったのは、どこか無邪気さと幼さを感じさせる小柄な少女だった。
　濡れ羽色の長い髪と紅色の瞳。アスナ同様にロンググローブとニーソックス――紺色ベースの色違い――だけを身につけ、熟しきらない肢体を晒して雄を誘惑する彼女は、キリト達のすぐ側までやってくると、そのままキリトの脚の間へと跪いて丁寧に正座をした。
「えーっと、はじめまして……ってことにしとこうかな？
　ポータブルオナホ型肉便器９号・個体名『ユウキ』って言います。よろしくね、キリト」
　そういって、ユウキは額が床に付くほど深々と礼をする。その所作は隅々まで丁寧で、アスナの指導がしっかり行き渡っていることを感じさせる。そのまま十秒ほど頭を下げ続けたあと、ユウキは膝をついたままゆっくりと顔を上げてキリトを見つめた。
「ボクね、この５日間アスナにいっぱい調教してもらって、一人前の肉便器にしてもらったんだ。
　ただ……一つ、問題があって」
「問題？　どんなのだ、ユウキ？」
「ボク、アスナとはいっぱい肉便器になる練習したけど、まだ一度も男の人に使ってもらったことが無いんだ。だから、ちゃんと肉便器になれてるか自信が無くて。
　ねえ、キリト。もしよかったら……ボクがちゃんと肉便器としてふさわしくなれてるか、テストしてくれないかな？」
「よし、わかった。ユウキの調教の成果、俺がしっかり確かめてやる」
「ほんと!?　やったあ、ありがとうキリト！」
　紅色の瞳をわくわくと躍らせて嬉しさを表すユウキ。そんなユウキの頭を軽く撫でながらキリトは自らの装備アイテムを解除していく。

「じゃあ、さっそく試させてもらうか。
ユウキもアスナも自由に振る舞ってくれていいからな。何か問題があったら、その都度指摘するから」
「「はーいっ」」
仲良く返事の声を重ねた二人の側で、キリトは全ての装備を解除して裸になる。
既に固さを得ていた逸物がぶるんと勢いを付けて飛び出し、ユウキの眼前へと突き出された。
「……っ♥」
突如目の前に現れた男の象徴。野太いその柱を前にしたユウキは、びくりと体を震わせてそのまま硬直してしまう。すんすんと微かに鼻を鳴らして、立ち上る雄の匂いをたっぷりと嗅ぎながら。
しばしの沈黙の後、ユウキが我を失っていることに気づいたアスナが先輩肉便器らしく助け船を出した。
「ほーら、ユウキ。目の前にご主人様のおちんぽを出してもらったら、何をしなきゃいけないんだっけ？」
「あっ、そうだった！　ごめん、あんまりすっごいおちんぽだったから、頭の中セックスのことでいっぱいになっちゃってた……。
えっと……キリト、こんなに立派に勃起したおちんぽをボクに見せてくれてありがとう♥　それでね、よかったらなんだけど、ボクの穴で精液すっきりさせていかない？　今日のおすすめは……この穴♥」
赤い舌を大きく伸ばし、眼前数センチの距離にある亀頭に今にも飛びかかりそうな顔をしながら、ユウキは教わった口上をしっかりと述べる。使う者の許可を得てから奉仕させていただくという肉便器の大原則をきっちり守れるあたり、アスナの調教はしっかりと行き届いているようだった。
「ねえ、ダメ？　ダメ？　もちろん、口がイヤなら別の穴でもいいんだよ？　挿れるのがイヤなら、オカズにしてくれるだけでもいいからさ？」
「わかった、わかったって。それじゃあ、オススメを使わせてもらおうかな。ユウキ」

「オッケー！　それじゃ、早速……いただきまーす♥」

小さな口を大きく開け、ユウキは奉仕すべき肉棒へとむしゃぶりつく。もちろん即尺である。

「んっふ……♥　おう……んくちゅっ……♥」

唇を亀頭表面に滑らせるようにしながら、太い逸物を口内へ。先端から半ばまでを納めると、頬を窄めて口全体で吸い付きながら舌を絡めていく。口に納めていないもう半分部分は、細い指で作った輪っかで囲み、しゅこしゅこと上下に前後に扱いて奉仕することも忘れない。

呼吸器の片方を差し出した結果、必然的に荒くなる鼻息の音に混ざり合いながら響く唾液の水音がキリトの聴覚を楽しませる。

「ふぉーお？　ふぃりふぉ？　ふぉく、じょうふにれきれる？」

「ああ。すごく上手にできてるぞ、ユウキ……」

「んは、ちゅっ……♥　ほんふぉ？　ふれふぃ♥　ふゃあ、もっひょがんばふゅ……♥」

肉棒を口いっぱいに頬張りながら、ユウキは嬉しそうに笑う。己を支配する者の顔を紅の瞳で見上げながら、一生懸命に舌を絡ませ、ちゅうちゅうと音を立てて唇で舐りまわす。根元に近い部分に回した指で徐々に射精欲を煽りながら、先端をふやかすように唾液をまとわせていく。

「んぼ、っは……♥　んっ、ぢゅうっ……♥」

たとえ一瞬でも唇を離したくないという意思が伝わってくる程に深い情愛の篭もったフェラチオ。そんな光景を見せられて、黙っていられるはずもない者ならキリトのすぐ隣にいた。

「え、えっと……キリトくん。私も……キリトくんのおちんぽにお口でご奉仕しちゃダメ……かな？」

「だってさ。どうする、ユウキ？」

アスナの必死の懇願とキリトの意地悪な問いかけが、口腔奉仕に夢中のユウキに投げかけられる。そうして暫しの間、無言のまま肉棒をしゃぶり続けていたユウキは、唇を亀頭に張り付かせたまま、するするとキリトの右手側方向に体の位置を移す。

反り返る肉棒と右脚の間にユウキが入り込めば、必然的に左脚側の空白が目立つ。今更その隙を見逃せるほど《閃光》様は初心な乙女ではなかった。

「ありがとう、ユウキ……。一緒にキリトくんを気持ちよくしてあげようね♥」

キリトの脚の間にぺたりと座り込んだアスナは、迷うことなく肉棒に唇を触れさせ、いそいそと奉仕を開始する。

亀頭の先から肉棒の根元まで、左側半分に吸い付くようなキスの雨を降らせ続けながら、顔をキリトの股座深くまで移動させる。同じように待ち構えていたユウキ共々、キリトの陰嚢へ吸い付きながら、ずっしりと重たい金玉を一つずつ口に含んではあめ玉を転がすように優しく舐めしゃぶる。

「んへぇ……♥」

「れぇっ……♥」

陰嚢の皮を唾液塗れにするほど丹念な口腔マッサージで精子の増産を促したあとは、太い肉柱への集中ご奉仕。左からアスナが、右からユウキが唇と舌を這わせたまま顔を上下させ、じゅぱじゅぱと激しい唾液音を響かせながら逸物を挟み込む。それはまるで、キリトの肉棒を挟んで行われる雌同士の接吻。

「んじゅっ、ぢゅうっ……ぁふ♥　ちゅっ、ちゅうう♥」

「じゅるっ♥　んっ、んっ♥　むふ♥　ぢゅうううう♥」

上目遣いでキリトを見つめる二人の視線が互いに交わることは無い。それでも自然に息を合わせられるあたりはさすがというほかに無い。

一人が下方にスライドすれば、もう一人は上方へ。そうかと思えばまったく同じタイミングで顔を上下させ、二人分の唇と舌で作った淫靡なリングで扱き上げる。時折、亀頭と肉槍の境目で動きを止め、カリ首の裏をほじくるように舌を這わせては先端より溢れ出す我慢汁を浅ましく啜る。

そうして、二人の顔がキリトの股座根元に密着したところで、キリトは彼女らの後頭部にそっと手を置く。それを合図に、二人はようや

く顔を動かすのをやめた。もちろん、唇は肉棒に触れたままであるし、口内の舌で肉の軸をなめ回し続けてはいるのだが。

「……っと。せっかくだし、二人の姿を録画しておこうか。ユウキ。アスナ。『恐縮』だけど、協力してくれるかな？」

肉棒を両サイドから咥え込んだまま、二人はごく小さな所作で首を縦に振った。それを待ち受けていたかのように起動したカメラドローンが、肉棒にむしゃぶりつく二人の姿を上方から撮影し始める。録画開始を示す赤いランプが灯ったのを確認すると、二人は肉棒との口づけを続けたままピースサインを作ってみせた。

「よし、これでＯＫっと……。二人とも、もう好きに動いていいぞ」

キリトがそう告げると、アスナとユウキはぴったり同じ動作で肉柱を根元から先端へ一気に舐め上げる。左右から包み込む舌の感触で、奉仕がおろそかになっていた部分に再び唾液のコーティングを施し終えると、今度は代わる代わる先端部を口に含む。

「んっ♥んっ♥　ひゅはっ♥　きりひょのふぃんぽ、とっへもおいふぃ……♥」

「ちゅうっ♥　んぅ……♥　きりふぉふんのふぃんぽにごふぉうふぃれきふぇ、しあわふぇ……♥♥」

ユウキが亀頭を咥え込めば、アスナは太い軸をぐちゅぐちゅとなめ回す。アスナが亀頭にむしゃぶりつけば、ユウキが陰嚢をべろべろとなめ回す。

息の合った連係プレイで奉仕する様をカメラにたっぷりと見せ付けたあとで、ユウキは久方ぶりに肉棒から唇を離す。そうして、雄大な逸物に頬ずりするように顔をべったりと密着させたまま、目線だけをカメラレンズへ真っ直ぐに向けた。

「えっと、この映像を見てるってことは、たぶんキリトか他の女の子の誰かだよね？　こんにちは……それともこんばんは？

みんなは今、何してるのかな？　見ての通り、ボクはアスナと一緒にキリトのおちんぽにご奉仕真っ最中で～す♥」

カメラで撮影されていることを露骨に意識したムーブを見せながら、ユウキはキリトの興奮を煽る。一方のアスナは、カメラに撮影さ

れていることなど歯牙にもかけぬまま一心不乱に肉棒への奉仕を重ねる。

肉便器としての振る舞い方を理解し、男の喜ばせ方を心得た二人が作り出す意図的なギャップが更なる官能を呼び起こしていく。

「ボクね、今日のおちんぽハメに備えて、昨日は一日中オナニーしてたんだけど……アスナったらひどいんだよ？　ボクに『キリトのちんぽをハメてもらうまでは何をしても絶対にイけない』っていう催眠かけてさ……。

おかげで、昨日からずっと体が疼いてしょうがないんだよー♥　頭の中なんて、キリトの……こんなに太くておっきいご主人様ちんぽで容赦なくばこばこしてもらう事でいっぱいになっちゃった♥」

肉棒一本挟んだ向こう側で親友が奏でる口淫の音を間近に聞きながら、ユウキは更に頬をすり寄せ、指の代わりに使いながら擦り上げる。

「それでさ、キリト……実はそろそろ射精したいんでしょ？　おちんちん、さっきからずーっとびくっびくってして、早くザーメンぶちまけたいよーっていってるよ？」

「そりゃあ……二人に散々、扱き上げてもらったからな……」

「でしょ？　そういう時は……近くにいる女の子が、自分の顔をザーメンティッシュ代わりに差し出してあげるのがマナーだってアスナが言ってたよ♥」

射精欲求をぎりぎりまで高めた絶妙なタイミング。示し合わせたかのような一糸乱れぬ動作で、二人は顔を肉棒の真ん前へと持っていき、その少し下に両手の掌を揃えて向ける。これから吐き出される精を一滴残らず受け止めるという、これ以上ない意思表示。

「「せーの……『ご主人様の特濃ザーメンで、わたし（ボク）たち肉便器にマーキングしてください♥』」」

「なっ……！　こ、このっ……!!」

互いの頬が触れるほどに顔を近づけ、両の瞼を閉じたのとは逆に口を大きく開けた二人による声を揃えたおねだり。そんな風に媚びへつらわれては、到底我慢できるはずもない。

既に限界ギリギリまで高められていた肉棒を握ったキリトは、己の手を乱暴にスライドさせて一気に限界を越え――肉便器と称するにはあまりにも美しすぎる二人の顔目掛けて白濁液を迸らせた。

「わぁっ♥　あつ、あつぃいんっ♥　重たいざーめん、びゅーびゅー当たってるよぉっ……♥」

「ひゃあぁあっ♥　キリトくっ、んぐっ♥　顔中、せいえきでいっぱい……♥　しあわへぇ……♥」

事前の口腔奉仕でたっぷりと熟成された精液が一気に噴き出し、ユウキとアスナの顔面を陵辱する。

たっぷりの精子達を含んでどろどろと粘つく太い白糸の束が、アスナの長い睫毛にべっとりとひっつき、ユウキの鼻筋にへばりつく。前髪から顎の下まで白濁汁に容赦なくマーキングされ、こぼれ落ちそうな残滓を両手で受け止めるその姿こそが二人は誰のものかを雄弁に物語る。

「キリト、っんく♥　ひゅごい……溜めすぎ……♥　これじゃあボク、精液の匂いで酔っちゃうよ……♥」

「はふっ♥　んゃあ♥　顔中、ザーメンでべっとべと……♥　こんなの、目開けられないよ……♥」

遠慮無しにぶちまけられた精液の量の多さよ。まるでザーメンで顔面パックをしているかのような状態にまで汚され尽くしているというのに、催眠にかけられた二人は嫌がる素振り一つ見せはしない。一滴でも多く顔で受け止め、一滴でも多く口の中で味わわんとするその様からは必死さすら感じられるほどだ。

もちろん、その光景もばっちりカメラに抑えられている。二人ともその事をよく心得ており、雄の子種汁に染め上げられた顔面がしっかりと録画されるよう、射精から少しの間は顔を斜め上に向け続けていた。

「んっ……♥　ユウキ……♥」

「アスナぁ……♥」

頬を寄せあっていた二人は、そのまま正面から向き合うように体勢を変えると、互いの顔を占拠する精液をべろべろとなめ合い始める。

口元から始まり、頬、鼻筋、瞼、前髪。両の瞼を閉じたまま、舌先の感触と匂いだけで精液の在処を探しあてるその姿は、犬のじゃれ合いにもよく似ていて、そしてはるかに下品で淫らだ。

「アスナ……ボクの精液、盗っちゃだめだよ？　せっかくキリトがボクですっきりするために射精してくれたんだから」

「ユウキこそ、私のザーメン盗っちゃだめよ？　キリトくんが私をマーキングしてくれた大事な証拠なんだからね」

「えー？　ちょっとくらいダメ？　アスナ、ボクが学校行ってる間はずーっとキリトとえっちしてたんだし、その時にいっぱい射精してもらったでしょ？」

「ダーメーでーすっ。それはそれ、これはこれよ」

軽口を交わし合いつつ、二人は精液を舐め取り合う。顔に付いた分はもちろん、こぼれ落ちて首筋や手に流れていった分も一滴残さず丁寧な舌捌きで拭い取った後、そのまま唇を重ねる。

「んぐっ……♥　喉の奥で、絡むぅ……♥」

「どろどろザーメン、おいしぃ……♥」

互いの口内に溜めていた精液を攪拌し合うディープキスでぐちょぐちょと音を立てながら、少しずつ、少しずつ、貴重な食材を味わう時のように嚥下していく。

そうしてキリトが射精した精液を全て飲み干した後。二人はようやく接吻を解き、改めてキリトの方を向いた。

「えへへ♥　ごちそうさまでした、キリト♥

キリトは満足……あ、うん。やっぱりまだ全然満足してないみたいだね」

「キリトくんったら、ついさっき射精したばっかりなのにこんなにおちんぽ大きくしちゃって……♥　もう、しょうがないんだから……♥」

「うんうん、しょうがない。しょうがない♥　ボク達、キリトの肉便器だもんね♥」

相変わらず眼前で屹立する肉棒とその主に微笑みかけたあと、二人はベッドの上へと移動する。先に腰を下ろしたアスナに背中をもた

れかからせながら、ユウキは両脚を左右に大きく広げ、すっかり濡れぼそった股座を露わにする。

昨日からずっと弄ばれ、そして一度も達していないという雌穴からだくだくと溢れ出す発情の汁。雄に使われる準備が整っている事をより強調するつもりなのか、アスナの両手がユウキの膝裏に回り、小柄な後輩肉便器の体から脚を閉じる自由を奪った。

「ほら見て、キリト。ボクの……どろっどろに濡れて、キリトのおちんぽ様にハメハメしてもらたいよ～って泣いちゃってるおまんこ……♥　アスナにいっぱい調教と催眠してもらって、キリト好みに躾けてもらったんだよ……♥」

秘裂の左右に指先を添えたユウキは、キリトの目の前で割れ目を押し開く。一本筋のようにも見えたその場所が、貪欲に雄を求める雌華の本性を露わにし、痛いほどに固くなった陰核を見せ付けながらひくひくと蠢く。

催眠調教の過程で『女の子はちんぽ様に気持ちよく使っていただくための存在』、『男の子にハメ潰していただけるのは、女の子にとって最高の幸せ』、『一生お仕えさせていただけるちんぽ様を見つけるのが、女の子の生きる意味』という一般常識を改めて教え込まれた体。起きている間は『アスナの肉便器ご奉仕セックスをオカズにオナニー』しながら奉仕の術を学び、眠っている間は『アスナと二人がかりでキリトに決闘（デュエル）を挑んだ挙げ句完膚なきまでに叩きのめされ、裸土下座で謝罪して性処理奴隷として飼っていただく夢を見続ける』ことで隷属する喜びを学び続けてきた心。

その相乗効果によって生まれた発情の熱に瞳を爛々と輝かせ、はあはあと荒くなる吐息と共に、ユウキは己の全てを差し出す。

「そうか……えらいな、ユウキ。ちゃんと俺好みに調教されてくれて、すごく嬉しいよ」

「えへへ……♥　よかった、キリトが喜んでくれて……♥」

「もちろん、アスナもえらいぞ。初めての催眠調教で、ユウキをここまで仕込めるなんてなかなかできることじゃない」

「そ、そう？　だとしたらそれは、頑張って調教されてくれたユウキの

おかげだよ。
　だからね、キリトくん。今日はユウキのこと……いっぱい可愛がってあげてね？」
「当然」
　ユウキの蜜壺の入り口に亀頭が当たるよう、体の位置を調整しながらキリトは頷く。
　紅色の瞳を今か今かと期待に燃やすユウキの耳元に唇を寄せ、アスナはそっと囁く。
「ユウキ。せっかくだから、追加でもっといっぱい催眠してあげるね」
「ほんと!?　どんな、どんな？　はやくかけてよ、アスナ」
「それじゃあ、これからユウキは……『ちんぽでおまんこの奥を突かれるごとに、キリトくんのことが好きになる』し、『キリトくんより先にイクたびに、キリトくんに服従したりいじめられるのが大好きになる』。
　そして『私もユウキも、キリトくんにおまんこで媚びを売るのが何よりの生きがい』で『セックスで膣内射精（なかだし）してもらうのは最高の愛情表現』……よし。こんな所かな」
「わあ……♥　こんなにいっぱい……ありがとう、アスナ……♥」
　新たに課せられた催眠が、ユウキの体と心をガチガチに拘束する。最早どう足掻いても待ち受ける未来が一つしかなくなったところで、ユウキはとろりとした雌の笑みを浮かべてキリトを招く。
「きて……キリト……」
「ああ。いくぞ、ユウキ」
　その招きに応じ、キリトは腰を前へと推し進め――固く勃起した己の分身を、ユウキの中へ一気に埋めた。
「いっ、いぐ　きなり　っ、ひぃ――あっ、んんんぅうう♥　あ　っぅぁあっぅうぅっっ♥♥」
　狭く、それでいて蜜に満ちた雌の膣道をグロテスクな雄の象徴が容赦なくこじ開ける。とはいえ既に幾度となくキリトを受け入れてきたユウキの穴は、すぐさまキリトの逸物の形を思い出してすんなりと最奥まで迎え入れる。膣肉全体が密着するようにみちみちと逸物を

包み込み、子種を欲しがり続ける子宮口が亀頭と接吻を交わした。
「かひゅ♥　はっ、はあっ……♥　はにゅ、ひゅーっ……♥　キリト、容赦なさすぎだよぉ……♥♥」
　絶頂を禁じられた自慰行為と飲精でたっぷりと焦らされ、昂ぶらされきった小柄な肉体は、野太い肉棒の一突きであっさりと陥落し初イキを晒す。
　一気に締まりを無くして荒い呼吸を繰り返す親友の顔を覗き込みながら、アスナはくすくすと笑う。
「もう、ユウキったら。ご主人様がイク前に自分だけイッちゃうなんて。私達、キリトくんに気持ちよくなってもらうためのおまんこ奴隷なのに、自分が先に気持ちよくなっちゃってどうするのよ。
　ねえ、キリトくん？」
「……いや、アスナがそれを言うか……？」
「えー？　ひどいよキリトくん。確かに、私のキリトくんちんぽ耐性の無さはユウキ以上だけど……」
　憮然とした表情で頬を膨らませるアスナをからかいつつ、キリトはユウキに密着させる形で止めていた腰を何の前触れも無く後ろへ動かす。
「はぅんっ――♥　やっ――やだぁっ♥　急に、んひぃいいっ♥」
　突然の事に驚くユウキを気にもとめず、キリトは引き抜きかけた肉棒を再び最奥へと突き込む。小さく狭い蜜壺を大きく掻き回すように腰を前後させ、無遠慮に肉棒を抜き差しする。ばちゅっ、ばちゅっ、という重たい水音が二人の腰の間から響く中、ユウキの嬌声が更に華を添える。
「あっ♥あ〝っ♥あっ♥　やだ、やだあぁっ♥　おっ♥おぶっおぅ〝♥　キリ――ひぃい♥ぎり、っどぉ♥　おぐっ、おく、やぁ――あっあああああっあああ♥♥」
　まるで『勝手に使うから勝手にイケ』とでも言わんばかりの乱暴なピストン運動にユウキは悶え狂う。その間も当然作用し続ける催眠が、肉棒の一突きごとにユウキの精神を書き換え、絶頂の波が襲う度にユウキの心を上書きする。

脳神経そのものを快楽で灼かれるかのような快感の嵐。キリトとアスナの二人がかりで体の自由を奪われているユウキは、ただひたすらその快楽に溺れるほかにない。

雑な出し入れですらここまで感じてしまうユウキに興奮を覚えたのか、キリトはユウキの体をより近くへ無理矢理引き寄せると、ベッドと己の体の間で挟み込むようにして押し倒し、更にハードなピストン運動を開始した。

「――あ〝ひぃ♥い〝っ♥いひぃいぃい♥　おっおっおほぉ〝♥ぅ〝っっ♥♥　ぎりどの、しゅごい♥♥　おく、おぐのふかいとこじぇんぶごりゆごりゆされるぅ♥♥　ぱんぱん、ぱんぱんするのだめ〝ぇ〝っ♥だめ〝だよぉおほおほおおっ♥♥

こわれりゅ♥いぎすぎれ、ごわれりゅ〝ぅぅぅうぅっ♥　キリトのさいきょーちんぽでボクこわされぢゃうぉよぉおおっ♥♥」

座位に近い体勢から、より深く繋がる正常位へ変えられて犯されるユウキ。口の端からは唾液を、蜜壺からは雌汁を溢れ出させては一方的な快楽蹂躙に酔い狂う。膝裏を拘束していたアスナの両手はいつの間にか外されているが、今のユウキはそんなことにも気づかない。キリトに屈服するように、男の腰に両脚を絡みつかせて交合を乞い願ってしまっていることにも。

二匹の獣が如く激しい交尾に耽る二人を見下ろしながら、アスナはなんともおかしそうに笑う。

「キリトくんお得意の密着正常位ハードピストン……ふふっ。これ、すっっっごく気持ちいいのよね……♥

体中ぎゅーっとしてもらいながら、杭みたいにぶっといおちんぽで奥の奥までこじ開けられちゃう……♥『私は今、この人の雌にされてるんだ』って子宮（からだ）と本能（こころ）で理解させられながら、キリトくんちんぽ中毒にされちゃう♥♥」

体と体、肌と肌の全てを一つにするかのように強く抱きしめられたまま繰り返される激しく重い抽送。アスナはもちろん、多くの女性がそこから生まれる快楽に溺れ、浅ましく淫らな姿を晒してきた。

平均より少し小柄な体格のおかげで、全身まるごと包み込まれてい

るかのような感覚に浸りながら、ユウキはただひたすら獣のように喘ぎ続けては股座から愛液をぷしぷしと噴き出して達する。

「いぐ♥ん〝っ♥いっ――いぐぅっ♥　あひぃっ、い、いぃいいっっ♥　いひぃっ♥ちんぽ、おちんぽぉ、きりとぢんぽすきぃいいっ♥♥」

「も―、またキリトくんより先にイッてる。ユウキのマゾおまんこ、キリトくんのご主人様ちんぽにすっかり負け癖つけられちゃったね」

「んひい♥　ボク、ま〝っ♥負けちゃう♥　ふひ、ふぃひっ♥　ボク、キリトに負けるの好きになっちゃったよぉっ♥　あっあっ――ひいいいいっ♥」

「ふふっ。ぶっといでかちんぽ様にマゾマゾおまんこ躾けて貰えて嬉しいね―、ユウキ♥」

組み敷かれ乱れるユウキの髪をさらさらと撫でてやりながら、アスナは彼女の耳元に愛の言葉を注ぎ込む。

キリトもまた、アスナの触れる部位の反対側側頭部に手を添えつつ、ユウキを遠慮無く犯し続ける。二回目の射精に向けた準備は既に整っている。それを伝えるのは、言葉では無く腰の動き。言葉はただ、彼女の唇を奪うことを宣言するために使う。

「ユウキ。舌」

求めるモノは互いに同じだったが故に、意思の疎通は二言で足りた。

喘ぎ声の隙間、蕩ける顔のままでユウキが懸命に差し伸ばす舌を吸い上げ、艶めく唇と共に食む。絡み合う舌を伝って流れ落ちる唾液をユウキが反射的に飲み込み、代わりに色気の混じる吐息を僅かな隙間から零れ落とす。

「んんぅうっ――ぅううんん♥♥　んぢゅ、んふっ♥　ん、んん〝ぅ♥♥　んっんっんむっ――んぅうううう♥♥」

胴も、手足も、そして唇すらも使って抑え込まれるユウキの体。さしもの絶剣も、体格差と筋力差に物を言わされ、更に催眠術で意識まで狂わされては最早どうしようもない。

子宮ごと押しつぶすかのように乱暴なピストン運動でユウキを貪りながら、キリトは嬲るようなディープキスをようやく解き、彼女の

耳元に告げる。
「ユウキ、どこに射精してほしい？」
「にゃっ、なか……♥　おぶぅ♥んっうん、うんっ♥　あっんあぁっ♥
あひ、な、なかだし♥なかだししてほしい♥　キリトのせーえき、ボクの、んぴぃっ♥あぁっ♥　ボクの、おまんこにじぇんぶだしてえええっ♥♥」
「っと。まったく、ナカダシって言った途端にぎゅってしがみついてきて……お望み通り、たっぷり中に出してやるぞ！」
もはや限界を越えた高速ピストンがユウキの蜜壺を嬲る。精液を吐き出すための動き。尊厳も権利も無視し、相手をただのモノとして扱いながら、肉棒の興奮を鎮める為だけに使い潰すハードピストン。
雄の思うままに使われ尽くされる姿を、獣以下の無様な痴態を親友に見下ろされるユウキ。その膣内を襲う最後の一突きが、亀頭と子宮口をぎっちりと密着させ――そして、白濁した精液を一気に解き放った。
「ああぁ――あぁぁぁあぁああ♥♥　あひ、いっ――ぐぅ♥いきゅっ♥いっぎゅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ♥♥♥
あっあぁーー♥あ～～～っ♥♥♥　おひぃっ♥　ざーめん、ざーめえんいぃっぱい♥♥　おまんこにびゅーびゅーってきへりゅうぅぅうぅぅ♥♥　いくぅ、いっ――イぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっっ♥♥」
太い肉棒がこじ開けた道を輸精管を通して駆け上った精液が、ユウキの子宮に殺到する。重たい精液の塊に子宮壁を殴りつけられるかのような勢いで行われる大量射精に、ユウキは全身をがくがくと震わせて、薄い背中を弓のようにしならせて幾度となく絶頂に達する。
雄に組み敷かれながらの交尾。刺激された雌の本能は狂おしいほどの快感に叩き込まれながらも膣肉を蠢かせ、肉棒にまとわりついては一滴でも多くの精液を搾り取ろうと必死に絡みつく。
「あぁっ♥あぁっ♥　いぃひいぃぃ♥♥　あっ……あぁ～～～っ♥
ちん、ぽぉ……♥　ボク、キリトの、ちんぽにぃ……はひ♥　ま、負け、ちゃったぁ……♥」

朦朧と呟くユウキの股座には、キリトの肉棒が深々と突き刺さったまま。

避妊など一切考えない気軽な膣内射精の後味を、雄はじっくりと堪能しながらぐりぐりと腰を動かし、雌の子宮を揺さぶって受精を促す。その僅かな刺激で、ユウキは更に甘イキを重ねる。

一方、腰と背中に回されていた雌の四肢からは徐々に力が抜けていき、やがてベッドの上にぐったりと投げ出される。

玉のような汗を浮かべてユウキの身体を緩く押さえつけたまま、拘束を解かれたキリトは腰だけをそっと引いた。

「よっ……と。ふう……射精した射精した……」

「あっ……♥」

性交の残滓をたっぷりとまといながら引き抜かれる肉棒。暫しの時間をおいて、ひくつく蜜壺の入り口から溢れ出してくるのは、どっぷりと流し込まれたばかりの新鮮な精液。その感触にすら微かに痙攣するユウキの下腹部に、未だ堅さを失わない肉棒を置いて休憩しながら、キリトは彼女の乱れた髪をそっと撫でた。

「気持ちよかったぞ、ユウキ……。これでユウキも、立派な肉便器だ」

「はあっ……はあっ……♥　えへへ……♥　ありがと、キリト……♥」

「今日は一日中、付き合ってもらうからな」

「もちろん、オッケー……♥」

子犬のように甘えながら、ユウキは舌を差し伸ばす。

それが深く濃密な口づけをねだる雌からのサインであることは明白だった。覆い被さる雄にも、それを側で見つめるもう一匹の雌にも。

『――んっ！　いひぃっ♥　こぉっ、こんなの、卑怯よ！　さっ♥催眠術でぇ♥女の子を操ってへぇ♥　あひぃ♥こぉっ――んなにぃ、おっきなちんぽでぇ♥　あっ♥ひぃん♥　れ、レイプするなんて……ふーっ♥ふーぅっ♥　じぇ、絶対、絶対許さないんだから!!　おほっ

♥　ひぃんぅううぅっ♥♥』

「ねーねー、キリト。キリトの性欲処理に使ってもらってるのに、なんでアスナはあんなに嫌がってるの？」

　空気の全てが交尾の残臭に支配された夫婦の寝室。シーツがぐちゃぐちゃに乱れた夫婦用大型ベッドの上に寝転がったまま、ユウキがそんな疑問を口にする。

　三発分の精液を胎内で受け止め、一旦休憩中の彼女の視線の先にあるのは、空中に浮かんだ半透明のモニター。そこで上映されているのは、淡いミルクティ色をした長い髪の女性――アスナが、その美しい髪を振り乱しながら、男の肉棒に跨がって自らの腰を激しく上下させている映像だった。

「ああ。実はこの間、アスナの意識だけ催眠解除してみたんだ。もちろん、体は肉便器モードのままでさ」

「あー、なるほどー。だからあんなに気持ちよさそうなのに、言葉だけはキツイ感じなんだ」

　キリトに腕枕されたまま、ユウキは催眠術の主の答えに納得して頷く。

　映像の中のアスナは、漏れ出る喘ぎ声の合間にキリトを糾弾しながら、エグい腰振り騎乗位で肉棒に奉仕し続ける。両手をキリトと恋人繋ぎで結び、精液を搾り取ろうと腰を上下させるその様を見て、合意の無い性行為（レイプ）だとわかるものがどれだけいるだろうか。

『そんなに嫌なら、無理しなくていいんだぞ。俺はアスナがどうしてもセックスしたがってるから、ちんぽを貸してやってるだけなんだし』

『そんな、そんなわけな――あひぃいいぃ♥おふぅ♥　おっ、おっきぃの♥おっきぃのぐりぐりするのきもちぃひぃい♥♥　なんで、なんで腰が止められないのぉお♥　あっやあっあ――あ～っ♥～♥あ゛～～～♥♥』

『ほら、またイッてるじゃないか』

　映像の中のアスナが絶頂に達し、映像の中のキリトに倒れ込む。ぐったりと脱力したままびくりびくりと不規則に震える体が、アスナ

が感じさせられている官能の深さを言葉以上に雄弁に物語っている。
淑女が晒すあまりにも淫らなその姿は、ユウキの興味を引くには十分なパラメータを備えていた。
「ねえ、アスナ。意識だけ催眠解除されて犯されるのって気持ちよかった？」
紅色の瞳が放つ興味深げな視線が、モニターからその少し下――キリトの股座深くに顔を埋め、肉棒を丁寧に舐めしゃぶっているアスナに向けられる。
白いノースリーブと紅色のプリーツスカート――ネットで購入した『どこかのＭＭＯで副団長をしていそうな可憐な女剣士』のコスプレ衣装を身にまとい、土下座おねだりで許してもらったお掃除フェラのついでに精液を一発分恵んでもらった事への御礼フェラを続けていたアスナは、肉棒に張り付いていた口を強い意志の力でどうにか離してからようやく顔を上げた。
「んくっ――うん、とっても気持ちよかったよ……♥　頭の中がぐちゃぐちゃになってるのに、体は『ちゃんとちんぽ様にご奉仕しなくちゃ！』って頑張ろうとするから……本当、ゾクゾクしちゃった♥」
「わあ……なんだか面白そう、それ……♥」
「でしょう？　あっ、ちょうどそろそろキリトくんがイクところだよ」
唾液でクリアコーティングを施した肉棒にいつでも再奉仕できる体勢のまま、アスナは陶然と語る。画面の中では、キリトの胸板の上に倒れ込んだままのアスナが、キリトの両手に尻を掴まれたまま必死に腰を振り続けている光景が繰り広げられていた。
『そろそろヤバい……。アスナ、このまま膣内に射精してやるからな……』
『へひぃ……!?　な、なかっ……いやっ♥　いやいやいやあっ♥　なかだしなんて嫌ぁ♥　こんな催眠レイプで♥　あっあっ♥　いぐっ♥　いぎながら赤ちゃん孕みたくなひぃいいっ♥　たすけっ♥　おひぃいっ♥　たすけへぇえっ♥♥』
『――射精るっ！』
必死の懇願も虚しく、尻を掴んでいた手がアスナの腰を真下に押し

込み肉棒を膣内奥深くへ押し込む。亀頭と子宮は完全に密着し、卵子の逃げ場が無くなったのとほぼ同じタイミングで――映像の中のキリトは容赦なく射精した。

『あ――――――イっ――――ぎゅぅ♥イぎゅぅうううううう♥♥　あひぃ♥いぐっいぐっ♥　レイプざーめんでいっぢゃうぅうう♥♥　あっあっ♥あひぃいんぃいい♥　おきゅっ♥奥に♥精子だしちゃだめぇえぇえええっっ♥　あひっあひぃい♥いやあ〃っ♥受精いやぁあぁぁあぁあっっ♥♥』

大量に吐き出された精液を子宮に直撃させられた映像の中のアスナは、もはや淑女とは呼べぬ品の無い喘ぎ声を上げる。精液の奔流に狂わされるアスナの甘ったるい嬌声は、キリトが唇を無理矢理奪うまで響き続けた。

「あーあ。私、キリトくんに犯されちゃった。ほら見て、あんなに気持ちよさそうな顔しながら受精アクメしてるよ」

その映像が流れるウィンドウのすぐ下に佇み、アスナは男を自然と誘う娼婦めいた笑みを浮かべる。そんなアスナに惹かれたのか、あるいは映像の中で膣内射精を叩き込まれてイキ悶えるアスナの姿に触発されたのか。なんとはなしにもう一度アスナの意識だけを催眠解除しようと思い立ったキリトは、視線を彼女の方へ向けた。

「アスナ。『恐縮』だが、意識だけ催眠解除状態に戻ってくれないか？」

「……あれ？」

「え？　どうした、アスナ？」

「どうしよう、キリトくん……催眠解除、うまくできてないみたい。キリトくんのこと嫌いになるはずなのに……好きで好きでしょうがないよ……♥」

困ったような照れ笑いを浮かべたまま、アスナは相変わらず張り詰めたままの亀頭を指先で優しく弄くる。

「そ、そんな……!?　まさか、俺の催眠術が効かなくなったとでもいうのか……？　いや、解除ができないってことは逆に効き過ぎてるのか……？」

「うーん……どうなんだろうね。

これはあくまで私の予想なんだけど……『キリトくんに無理矢理犯されたい気分になったら、自然と解除される』んじゃない？」

「お、おう……。なるほど……そういうシステムときたか」

アスナの言わんとするところを理解したキリトは、『それならば』とユウキに視線を向ける。

「……あー。そういえばボク、さっきアスナに『キリトのちんぽでおまんこの奥を突かれる度にキリトの事を大好きになっちゃう』って催眠かけられてたんだった。

キリト、ボクのおまんこをいっぱいごりごりしてくれて、すっごく好きになっちゃったから……そう簡単には催眠解除できないんじゃないかな？」

「そういえばそうだった……そいつは確かに、解除できなさそうだな」

悪戯っぽく笑うユウキに調子を合わせつつ、キリトは彼女共々上体を起こすと、アイテムストレージからスマートフォンをオブジェクト化し、催眠アプリを起動する。オプションの設定項目を開けば、ユウキが横から画面を覗き込む。

「こうなったら、別の催眠を試してみるか……。今の二人にうまくかかりそうな催眠は……」

「ねえねえ、キリトキリト。せっかくだからさ、色々試してみようよ？」

くりくりとした紅色の瞳が、物欲しげな光を宿しながらキリトを見つめる。視界の端で、ミルクティ色の髪の持ち主がこくこくと頷くのが見えた。

若干誘導されたような気がしないでも無いが、どの催眠術がうまくかかるのか調査する必要があるのも確かだ。可愛い肉便器達からのご注進を受け入れたキリトは、家の各地に舞台を移しながら、様々な催眠設定を試してみる事にした。

たとえば、お風呂場では――。

「――いかがですか、キリト様。『いちゃらぶ風俗・結城家』の王様コース限定・スペシャルマッサージサービスは。

どうぞ、ここをご自宅のお風呂だと思って……遠慮せず寛いでくだ

さいませ」

広々としたバスルームのど真ん中に置かれたバスマットの上。素っ裸にたっぷりのローションだけをまとったアスナが、キリトの耳元に睦言を囁きながら、男の背中にぎゅっと抱きつく。温かくねっとりとしたローションと、アスナの極上のバストが作り出す感触が実に心地よい。

そのちょうど反対側では、キリトの膝の間に腰を落としたユウキが、肉棒を深々と挿入された状態で正面から抱きついている。当然、こちらも全身ローションまみれだ。

「当店の王様コースは、期間無制限、ＮＧ一切無し、追加オプション無料の超特別コースだよ……♥　キリトのしたいこと、なんでもしていいからね……♥」

いわゆる対面座位の体勢で繋がったまま、ユウキも甘やかな言葉を囁く。アスナもそうだが、長い髪を入浴用のアップスタイルへまとめているおかげで露出しているうなじがまたセクシーだ。

こうして風俗嬢めいたサービスに励む二人だが、別段、キリトがこうしろと強制したわけでは無い。ただ、『自宅の風呂場は風俗店として解放し、訪れた男性客をもてなすのが普通』という常識に従っているだけだ。

「私とユウキの全身マッサージで、じっくり気持ちよくしてさしあげますね。キリト様はどうぞ、お好きなタイミングでユウキの膣内にお射精してくださいませ♥」

「キリトは動かなくていいよ。ボクのおまんこご奉仕で、おちんぽ様をじっくり気持ちよくしてあげるから♥」

前門のユウキ、後門のアスナ。デビューしたばかりの風俗嬢二人が、たった一人の客を挟み込みながら全身でもてなす。

たっぷりとしたバストを惜しげも無く使い、耳元や首筋に甘い吐息を流しながらアスナが奉仕する一方、ユウキは腰をゆったりと前後左右に動かし、蜜壺全体を押し当てるようにしながら肉棒をマッサージし続ける。射精を急かさず、その時が来たら自然と吐き出せるように心を尽くした優しいリズムで。

「んっ……♥　はあっ……♥　たまには、んんっ♥　のんびりするのも、いいでしょ……？」

「ああ。ユウキとなら……悪くないな」

「だよねだよね。もちろん、いつもみたいに激しくするのも……ボクは大好きだけどさ♥」

甘やかな声を漏らすユウキに全てを委ねながら、時折口づけを交わし、ゆったりと抱き合っては睦み合う。ポリネシアンセックスというには些か動きがありすぎ、若さに任せたセックスというには穏やかな交合。

じゅぷじゅぷと音を立てて溢れる愛蜜に塗れたキリトの肉棒は徐々に興奮の度合いを高められていき、やがて阻止限界点へと到達する。

「あぅ♥　ひゃんっ……♥　あっ。そろそろでちゃいそうなんだね……♥　んっ、んっ♥　いい、いいよ……♥　ボクも、もう……だからこのまま、一緒にイこ？」

一際太くなった肉棒の感触を膣内で感じ取ったユウキは、自らの秘所を少しばかり強く押し当てる。その僅かな動作で本能は限界を越え――ユウキの胎内に、濃密な精液を思い切り吐き出した。

「あっ――あっ♥あっ♥　ん――くゅうううっ♥　あう、はふ♥　キリトの、はぅ♥ちんぽ♥ちんぽぉ♥　はっはっ♥はーっ♥はーっ……♥　奥に、どくっ♥どくっ♥てきてる……♥　いっしょにイッてくれて……いっぱい射精してくれて、うれしい……♥♥」

――という具合にまったりと射精させられながら、風俗嬢二人の催眠奉仕をじっくり堪能したりもした。

他にも、ダイニングキッチンでは裸エプロン姿の新妻アスナが『キッチンに男性がいるときは、その方の妻となるのが常識』などと言うものだから、新婚さんごっこをしながらお遊び無責任子作りをしたり。リビングルームでアスナのハメ撮り映像を垂れ流していたら『ザーメン排泄専用人型オナホール・ユウキ』が偶然通りかかったので、これ幸いとばかりにオナニーの道具として使って精液をコキ捨てたり。アスナとユウキが普段使っている私室で、休憩がてら二人のレ

ズストリップショーを鑑賞したり。
　更に、家の一番奥にある畳敷きの和室は――。
「あれ？　知らないのキリトくん。ここはね、『女の子のおまんこを使った最新トレーニングを体験してもらう為の部屋』なんだよ？　ね、ユウキ」
「そうそう。『杭みたいにぶっといおちんぽ様を雌穴に入れながら、腰を使った運動で身体を鍛えてもらうための部屋』」
「もちろん、『万が一、おちんぽ様がおまんこの中で射精しちゃってもそれはしょうがないこと』だし」
「『気に入った女の子は人生まるごと持ち帰ってお家でトレーニングをしてもいい』っていうのも、常識だよ？　キリト」
　畳の上に敷かれた布団に並び、美しい背中を見せながら尻を突き出した姿勢のままでアスナとユウキは頷きを交わす。そんな彼女らがそう言うならば、そうしない理由は特にない。
　寝転ぶユウキの身体に手をかけたキリトは、彼女の脚を力尽くで広げさせると、そのまま肉棒を膣奥まで一気に叩き込む。
「んぉ〝っ♥――おひぃ〝いいっ♥」
「いやあ、助かったよユウキ。ちょうどじっくりトレーニングがしたかった所だったんだ……！」
「いひぃ♥いぃいぃっ♥♥　おっ♥おちっんぽ♥おちんぽぉ♥　ふひっ♥びゅひぃ♥♥　はひ♥いっぱい、いっぱい使って♥うんっどう♥してね♥　キリトぉっ♥」
　可愛らしい尻たぶに腰をぶつけるように前後させながら、いわゆるバックの体勢でユウキを犯す。上体を布団に押し当てられた小さな女の子（トレーニングマシン）が鳴こうが喚こうが一切構うことなく肉棒をぶち込み、肉棒へ愛おしげに絡みつく膣肉の感触を愉しむ。
　当然、同じ姿勢で隣に寝転びながら『私も使えるんですけど』という視線を投げかけるアスナもしっかりと使う。
「アスナは、こっちな」
　理想的なカーブを描くヒップラインに掌を滑らせて丹念にこねくり回したあと、キリトは尻肉の合間に指先を滑らせ、二本の指を蜜壺

の中へと差し込む。今までの交尾でたっぷりと火照らされたアスナの秘所は、男の太い指二本をすんなりと受け入れた。アスナの感じる部位を的確に刺激する指先が、アスナの股座からくちゅくちゅという興奮の音を奏でさせる。

いつものように次に使う穴の具合を整えながら、キリトはまず今使っている穴を犯し楽しむ。

「ほら、ユウキも合わせて。いっちに、いっちに」

「いっひ♥にひぃ♥　い――ひぃいっ♥にひぃいい♥　あっああっぅ♥あっあ゛っあ――あひぃいぃぃ♥♥」

「そうそう、その調子。

ユウキもアスナもトレーニング器具として最高だな……こりゃあ、どっちも持ち帰り確定だ」

「あぴぃっ♥　あっ♥あっあっ♥　もち、かえられちゃう……♥　キリトの、はひ♥おうちで♥　ボクたちずーっと使われちゃうぅっ……♥　一生♥キリトのちんぽ穴ぁ♥あひ♥しあわっ、しあわしぇぇええっ♥」

逃げ場の無い場所に連れ込まれて過ごす爛れた日々を妄想し、ユウキが喜悦に満ちた笑みを浮かべる。そんなユウキを絶え間なく犯しながら、キリトは片腕でユウキを抱きかかえるようにしてバストをまさぐりつつ、もう片方の手でアスナの蜜壺を弄くる。ただ精液を放つためだけに肉棒を激しく前後させていると、指だけでは我慢できなくなったアスナが強引に抱きついてキリトと唇を重ねた。

絡み合う舌に攪拌される唾液が、蜜壺の水音にも負けず劣らずの卑猥なメロディを奏でる中。キリトは更に力強く腰を動かし――ユウキの胎内へ無遠慮な膣内射精をきめた。

「――お゛♥おほ♥　いぐ、いぐいきゅいっ――いぎゅゅぅう゛うぅ゛ぅうぃいぅうう♥♥　あっあっ♥あ゛♥あ゛あぁああ～～～～♥♥

……あっ……あぅ、はあっ、はあっ……♥♥　あっ、奥、いっぱいだよぉ……♥」

相変わらずの量の精液をどくどくと流し込まれたユウキが絶頂の

啼き声を上げて、くたりと脱力して布団の上に倒れ込む。そのすぐ隣でアスナもまた甘く達した事を、絡み合う舌の震えが教えてくれた。

交合の余韻にひくひくと震えるユウキの中から、ずぬり、と引き抜かれる肉棒。ユウキの発情エキスと出したばかりの精液に塗れた逸物をたっぷりと濡れぼそったアスナの膣内に挿入したキリトは、寝バックの体勢でアスナを犯し始めた。

「キリト、くん……♥　そんにゃ、あっ♥ああんっ♥」

「運動の後にはクールダウンが必要だろ、アスナ？」

――というような具合で、二人をモノ扱いしながら満足するまで抱き続けたり。

かくして、家中至る所で繰り返される交尾の痕跡を以て、ここが誰の縄張りであるかを示すマーキングは、雌達があげる卑猥な鳴き声と共に日が暮れていくまで延々と続いた。

「――二人とも。そろそろ始めるけど、準備は大丈夫か？」

あたりがすっかり夜の帳に支配された深夜。つい１０分前にオブジェクト化したばかりのカスタムハイエースの運転席から、キリトは後部座席に向けて声をかける。

「うん。いつでも大丈夫だよ、キリトくん」

「ボクもだいじょーぶ。……だけどこれ、どこに向かってるの？」

フルフラットモードになった後部座席に素っ裸で寝転ぶ二人――アスナとユウキが、キリトの問いかけに肯定の意を示す。ほんの数分前までシックスナインの状態になり、互いの膣内に注がれた行為の残滓を貪るように舐め取っていたせいで、二人の白い肌はすっかり上気しきっていた。

「いいところだよ、ユウキ。今の二人にぴったりの場所だ」

「本当？　じゃあ、楽しみにしておくね」

「ああ、期待しててくれ。じゃあ……こっちも準備を始めるとするか」

駐車場の片隅にハイエースを停めたキリトは、運転席と助手席の隙

間に体を通すようにして後部座席へと移動する。
　途端に、左右から突き刺さる期待の篭もった視線。交わりを望む榛色と紅色の瞳達に首を横に振って返答しながら、キリトは自分のアイテムストレージを開いた。
「アスナ。ユウキ。ハメ穴トイレのポーズ」
「「はーいっ♥」」
　主人の命を受けた二人の肉便器は仰向けに寝転んで姿勢を整えると、両の膝裏に手を回し、上半身に添えるような形で両脚を引き寄せる。足裏は天井を向き、両脚がちょうど上半身を挟み込むような形で開かれているため、股の間を覆い隠すものは何一つ無い。
　自らの四肢の自由を自ら封じ、性器・肛門・口の三穴を差し出すこの姿勢を、アスナ達は『ハメ穴トイレのポーズ』と呼んでいた。正常位に近く、それでいて『男性に穴と体を品定めされ、一方的に使われる』ことを強く意識させられる姿勢を取らされ、二人は自然と昂ぶりを増す。
「二人とも、今日は肉便器のお仕事をよく頑張ってくれたからな。俺からのご褒美だ」
　そう言って、キリトはストレージから小さな箱を二つオブジェクト化する。ビロード地で包まれた、掌に乗るサイズの小箱の中に納められていたのは、三つの小さなピアス。銀色の金属環に連なる小さな銀の輪の先に飾られたハート型の小粒ルビーが、なんとも鮮やかに輝いている。
「キリトくん、これって……ピアスだよね？」
「ああ、アスナ。ノンホールピアスっていう、ピアス穴を開けなくても使えるタイプのピアスなんだ」
　キリトは小箱から取り出した計六つのピアスを、アスナとユウキの腹に三つずつ置くと、装備情報ウィンドウを開いて二人に見せる。女性を模したピクトグラムの三カ所――胸の先と股座に灯る赤い光と『装備可能位置：乳首、陰核』というアイテム上方が、ピアスを装備可能な身体の部位を示している。
　思わずごくりと息を飲む二人は、自分たちがどれだけ興奮した表情

をしているのかまだ気づいていなかった。『肉便器の証』というアイテム名を見て、期待に胸を躍らせていることにも。
「さて、アスナ」
「はいっ」
「ユウキ」
「うんっ」
「二人とも……『恐縮』だけど、自分でこのピアスを付けてくれるかな？」
二人の眼前に差し出される『肉便器の証を装備しますか？』という選択ウィンドウ。ほんの一瞬だけ視線を交わして頷きあったあと、アスナとユウキは脚を支える両手の代わりに舌を突き出して『はい』のボタンを押した。
腹の上に置かれていたピアスが淡い光を放って消え、そして二人の敏感な場所――乳首とクリトリスを左右から挟み込むようにして装着される。
「「――はへぇ――ひいいぃぃんん♥♥」」
舌を突き出したまま、二人は揃って嬌声を上げる。日中の交尾の熱が未だ残る体、その敏感な部位を遠慮無く抓まれてしまって我慢できるはずもない。身動ぎする二人に連動して動く銀の輪が微かに音を立て、先端のハート型ルビーが車内灯の光を反射する。車内に充満していた雌の匂いが、一層色濃くなったような気がした。
「これを付けてる間は、どこで何をしてても二人は俺の肉便器だからな」
「えー、そんなこと言われたら……ボク、外したくなくなっちゃうよ……♥」
「うん……♥　私も、もう一生付けっぱなしでもいいかも……♥」
蕩ける笑みを浮かべた二人の『ハメ穴ポーズ』を解除させつつ、キリトは後部座席のスライドドアを開ける。飛び込んできた夜風は適度に涼しく、夜ながら外で遊ぶにはうってつけの気温だった。
「それじゃあ、可愛い肉便器のお嬢様方。ちょっとそこまでお散歩に参りましょうか」

「お散歩？　もちろんいいけど……そうだ。キリトくん、せっかくだから首輪つけていい？」
「あっ、ボクもボクも！　アスナとお揃いの首輪付けてお散歩したい！」
「そう言うと思って、ちゃんと用意してあるよ」
　キリトのアイテムストレージからオブジェクト化された茶色い革の首輪を、アスナも、そしてユウキも喜んで首にはめる。気道が絞まらない程度の強さで金具を止め終えると、大きな南京錠が音を立てて金具にはまる。それは物理的にもシステム的にも、自分の意思では首輪を解除できなくなった事を意味している。
　我が身の自由を奪う錠前。その冷たい感触に指を絡ませながら、アスナは愛おしげに微笑む。
「よし、これで準備は完了だな。それじゃあ行こうか、ユウキ。アスナ」
「「はーいっ♥」」
　全裸にピアス三つ、鎖と錠前付きの革の首輪と靴。肉便器らしい装備で身を固めたアスナとユウキは、特に躊躇う事も無く車内から駐車場の片隅に降り立つと、両腕を大きく上げて体を伸ばす。日中の暑さが薄れたおかげで夜風はひんやりとしており、雌二匹の火照った素肌にとってはとても心地よく感じられた。
「二人とも。向こうに公園があるから、まずはそこまで行こうか」
「うん♥」
「れっつごー♥」
　それぞれの首輪から伸びる鎖を握ったキリトを先導するように前に立ち、アスナとユウキは連れだって夜の屋外を歩く。一歩進む度に、首に掛かった錠前が微かに音を立て、ノンホールピアスが陰部を刺激する。調教されている――ただ歩いているだけでその事実を強く認識させられ、二人の胸に喜びがわき上がる。
「えへへ。お揃いだね、アスナ」
「うんっ。ユウキと一緒に肉便器になれて、本当によかったよ……♥」
「ボクも同感だよ……♥　ボク達をもらってくれたキリトにはいっぱ

い感謝しなくちゃだね♥」
「その通りだよ、ユウキ。これからいっぱいおまんこ使ってもらえるように、二人で頑張ろうね」
夜の闇を照らす月の光の下。身も心も堕ちた二匹のメスは、互いの体を強く抱きしめあいながら主人に見せ付けるようにねっとりとした口づけを交わす。その様はまるで月光の中で遊ぶ妖精達のように美しく、そしてエロティックだ。
じっくりと絡み合う舌の動きによって混ざり合う唾液。その粘着質な音に交じり、錠前とピアスの金属質名音が響く。雌蜜の滴が太股まで伝うほどに股穴を濡らした頃、二人はようやく口づけを終えた。
「はふ、はあっ……待たせちゃってごめんね、キリトくん」
「いいよ、アスナ。おかげでいいものも見られたしな」
「ありがとう。でももし、おちんぽが我慢できなくて苦しくなっちゃったら……その時はいつでも私を使ってね♥」
劣情を隠せない榛色の瞳をキリトに向けながら、アスナが愛しい夫を誘っていると、その隣にいるユウキが何かに気づいたようにはっと顔を上げた。
「……今更だけどさ、キリト」
「うん？　どうした、ユウキ」
「ボクもアスナも……お散歩なのに、普通に歩いてていいのかな？　ほんとの犬みたいに四つん這いになって歩かなきゃいけなかったんじゃ……お尻に尻尾も挿れてさ」
頭の上に乗せた両手で犬耳を象ったユウキは、尻尾があるかのように尻をふりふりと左右に振ってみせる。子犬めいたその仕草は実に可愛らしく、キリトの理性は危うくぶち切れる寸前まで追い詰められた。
「うーん……確かに、それはそれで凄く魅力的なんだよな……」
鎖を握っていない方の手で、突き出されたユウキの尻を無遠慮に撫で回しながらキリトは暫し思い悩む。ここで調教プランを変更するのもまた一興だが――せっかく用意したフィールドなのだ。最初くらいは本来の想定通りに使ってやるべきだろうという考えの方が

勝った。
「いや、今日はやっぱりこのままでいこう。そっちのお散歩はまた今度しような、ユウキ」
「オッケー。わかったよ、キリト。また今度ね」
　ユウキの尻たぶを一揉みしてから、三人は再び歩き出す。駐車場を背に道路を渡り、草と砂地が広がる公園の中へ。時間帯が遅いせいか、あるいは大した遊具も無いせいか、公園の中は閑散としており人っ子一人いない。とはいえ周囲にはマンションが立ち並んでいるため、誰かと出くわしたり目撃される可能性はゼロではなかった。
「ふふっ♥」
「ん？　どうかしたか、アスナ」
「ううん、大したことじゃないよキリトくん。
　ただね。ユウキと一緒に、こうして飼って貰えるのがすっごく幸せだなーって思っただけ」
　バストトップを飾るピアスの片方にそっと触れながらアスナが優しい微笑みを浮かべれば、ユウキもその言葉に同意して首を縦に振る。
「ボク達の事、途中で捨てたりなんかしちゃダメだよ？　飼い主として、飼った以上は責任を以て面倒を見るように」
「おう。もちろんそのつもりだよ、ユウキ」
「えへへっ。それならよーし」
　満面の笑みを浮かべるユウキを先頭にして、三人は連れだって公園の中を進む。やがて、ちょうど真ん中あたりまできたところで、キリトは不意に立ち止まった。
「ここらへんなら……うん、ギリギリ大丈夫そうだな」
　目的地までの距離を目算で測ったキリトは、システム制御用のコンソールウィンドウを開いて『小水排出感覚再現システム』を選択。更に『貯水量』を通常の排尿三回分にあたる限界ギリギリの状態まで引き上げて設定。
　準備が整ったところで、おもむろにアスナとユウキの二人を対象に設定したキリトは、再現システムを起動させた。

「「――っっっっ!?!?」」

立ち止まったキリトを怪訝な顔で見つめていたのも束の間、突然襲いかかってきた強烈な尿意に二人は目を白黒とさせる。咄嗟に両脚を閉じて内股になり、膀胱から今にも溢れ出そうとしている液体をどうにかこうにか抑え込む事に成功したのはさすが《閃光》と《絶剣》というところだろうか。

「きっ――キリトくんっ!?」

「どうかしたか、アスナ。なんだか苦しそうだけど」

「わ、わかってるくせに……！　わかってるくせにぃ……！」

顔を真っ赤に染めたアスナは、もじもじと両脚をすり合わせてどうにかこうにか尿意に抗う。ほぼ同じような状況に追い込まれてだらだらと冷や汗を流していたユウキは、救いを求めるようにわたわたと辺りを見回し――そして、目的の建物を見つけた。

風雨に晒されて色落ちした男女の区別を示すマークが描かれた四角い建物――即ち、公衆トイレを。

「き、キリト！　ボク、あっちの方に行きたいなーって……ダメ？　ダメかな？　ダメじゃないよね!?」

「もちろんいいよ、ユウキ。アスナもそれでいいか？」

「もちろん！　賛成！　大賛成!!　さっそく行きましょう！」

首輪にかかった鎖をぐいぐいと引っ張りながら、二人は必死になって公衆トイレへと向かうが、鎖の持ち主であるキリトが夜の散歩をゆっくりと楽しむペースでのんびり歩いているせいで、トイレとの距離はもどかしいほどに埋まらない。そんな不利な状況の中、下腹部から脊髄を駆け上ってやってくる凍えるように冷たい尿意と戦いながら、二人は己の尊厳を守るために歩み続ける。

永遠にも思えた時間が過ぎた頃。ようやく公衆トイレの前に辿り着いた二人は、女子のマークがついた側の入り口に飛び込み――。

「『恐縮』だが、男子トイレを使ってくれないか？　肉便器が女子トイレを使うなんて、普通の女性達に失礼だろ？」

ひゅっ、と。小さく息を呑む音が二人の口から聞こえた。それでも、催眠の力は絶対である。

自らの意思に反して、力尽くで、無理矢理男子トイレへと進まされた二人を、キリトは二台並んだ男性用小便器の前に立たせる。下が床につくロングタイプ小便器は、掃除されているとはいえ若干汚れ残りや黄ばみを感じる微妙な白さで二人を出迎えた。

これから何をさせられるのかを改めて理解したアスナは、怒りよりも先に興奮と喜びが来てしまったような表情で振り返ってキリトを見つめた。

「ここで……すれば、いいの？」

「さすがアスナ、その通り。でもその前に……せっかくユウキが肉便器デビューしたんだ。同じ便器の先輩にご挨拶させてあげないとな。アスナ。『恐縮』だけど、ユウキにやり方を教えてあげてくれるか？前にやった通りでいいからさ」

「……っ！　え、ええ……まかせて♥」

こくりと頷いたアスナは、ユウキの耳元にひそひそと囁き大急ぎで『挨拶』の作法を伝える。内容を共有した二人は、二台の小便器の前に並んで立つと、両脚を左右に大きく広げて腰を落としつつ両腕を頭の後ろで組んだ。ハート型のルビーがついたピアスがぶらぶらと揺れ、無様さと惨めさを強調していた。

二、三度、小さく呼吸してタイミングを整えたあと、二人は声を揃えて『挨拶』をし始める。

「「お便器の先輩方、お初にお目にかかります！　いつも殿方のおちんぽ様から出る黄色いおしっこを受け止めてくださり、誠にありがとうございます！

この度、私達は人間であることを放棄し、殿方のおちんぽ様に隷属奉仕する最底辺肉便器として生まれ変わりました！

これからはいつでもどこでも性欲処理を行うちんぽ第一主義便女として、白いおしっこをたっぷり出していただけるよう日々邁進していきますので、どうか先輩方も応援していただけると幸いです！

よろしくお願いいたします！」」

アスナはすらすらと、ユウキは所々怪しい部分はありつつもアスナの台詞に便乗する形でどうにかこうにか挨拶を完了する。　キリト

に誓うのとも、キリトの逸物に誓うのでもなく、どこにでもあるただの便器に向かっての隷属の言葉。自らの存在が薄汚れた小便器以下に貶められてしまった事を――そして、それに否定しようが無いほど興奮している事を理解させられてしまう。自分自身の言葉で自分自身を陵辱しているような下卑た感覚がユウキの脳内を迸り、未知なる快感を既知の興奮として刻み込んでいく。

一度味わってしまっては、もう戻れない。そう感じているのが己一人では無いことは、隣に佇む最高に惨めで美しい親友の顔を見ればすぐにわかってしまった。

「アスナ、ユウキ。よくできました。それじゃ……」

期待に満ちた眼差しで振り返る紅と榛色の瞳がキリトを見つめる。その期待に、キリトはしっかりと応えた。

「『恐縮』だが、ここで思いっきり立ち小便をしてくれるか？」

「「はーいっ♥」」

全ては催眠術のせい。本来すべきではない場所であることも、本来見せるべきではない生理現象でもあることはわかっている。それでも止められないのは、全て催眠術にかけられているせいなのだ。

その理屈が二人の理性の壁を崩し、膀胱を封じていた筋肉を緩ませる。その瞬間、たっぷりと溜め込まれていた小水は、抑えを失った膀胱から我先に流れ出し、尿道を通って体外に排出され始めた。

黄金の放物線を描いて流れ出した小水は、夜の空気との温度差でうっすらと湯気を放ちながらそれぞれの小便器へと飛び込んでいき、壁部分に当たりながら下まで流れ落ちていく。

「出し過ぎだよ、ユウキ……♥」

「そういうアスナだって……♥」

しゃーしゃーと音を立てて股座から噴き出す小水を見ながら、二人は微笑み合う。

この場所なら、ここに集う人と一緒なら、どこまでも堕ちていける。もしもこの先に行くべきではない場所が待っていたら、愛する人が引き戻してくれる。

首輪に繋がる鎖の感触にそんな信頼と安心を覚えながら、二人は膀

脱がすっからかんになるまで小水を放ち続けた。

「――と、まあ。だいたいこんな感じね」

「ほ、ほえー……」

豪華なホテルの一室を再現するついでに強化改造したＶＲルーム。未来の義妹に乞い願われたアスナがアレ――つまりは屋外露出肉便器宣言プレイなどの体験談を語り終える頃になっても、リーファは相変わらずアスナの膝を枕として占拠していた。

一方、思い思いの場所に陣取ったいつもの後宮系女子達（ハーレムナンバーズ）はといえば、メモまで取りながら真剣に聞き入っていた者、じゃれあったりからかい半分に話を聞いていた者、そもそもまったく聞いていないフリをして聞き耳を立てている者など様々だ。

「ねーねー、アスナ。キリトにもらったそのピアス、今日も着けてるの？」

「さて、どうかしらね―、ストレア。答えはキリトくんが来てからのお楽しみ♥　ねー、ユウキ」

「うんっ♥」

ストレアの問いかけに蠱惑的に笑いながら答えるアスナとユウキに半ば唖然としつつ、リーファも内心に抱えていた疑問をここぞとばかりに口にする。

「前から薄々思ってたんですけど……。アスナさんって……もしかしてＮＧなプレイとか無い人なんですか？」

「うーん……そういうわけでもないよ、リーファちゃん。あんまり特殊なのとかはしたいと思わないし……」

「えっ!?　今のは!?　今の催眠肉便器露出プレイとかその他諸々はかなり特殊な方だと思うんですけど!?」

驚きのあまりボリュームの上がるリーファの声に、リズ、セブン、フィリアといった面子がこくこくと首を縦に振って同意を示す。

「リーファちゃん。それから今頷いた子。そのうちキリトくん同伴で

襲いにいくから覚悟しておきなさいね？　めちゃめちゃにしてあげるから」
「ひっ」
「まあ、それはさておき……私だってちゃんとＮＧなプレイはあるのよ」
「たとえば？」
「私がキリトくん以外の男の人とお付き合いしてる設定でのプレイとか、私がキリトくんに捨てられる設定のプレイとか」
「あー……それは納得……。むしろアスナさんよりお兄ちゃんの方が嫌がりそうですね……」
　言わんとすることを理解した様子のリーファのポニーテールをアスナがさらさらと撫でていると、ベッドの上で寝転ぶリズの姿が目に入った。その顔色は、髪がピンク色であることを差し引いても妙に青い。
「リズ、どうかした？」
「い、いやー……今の聞いてたら、もしかしたらこの間のアレとかソレとか、アスナ的にはすっごくイヤだったのかなって……」
「アレとかソレって？」
「えっ？　ほら、したじゃない。
《ＳＡＯ》でもしアスナじゃなくてあたしがキリトと結婚してたら……っていうのとか。アスナと結婚したキリトが、あたしとこっそり不倫してる……とか」
「あー、思い出した。あれね。別にイヤじゃ無かったよ。……というか、むしろ新鮮ですごく楽しかったから安心して。
　そもそも私捨てられてないし、なによりイヤだったらちゃんとその場で断ってます」
「で、ですよねー。まあ、それならいいんだけど……」
　ほっとした表情を見せたリズとアスナが『またやっていい？』『もちろん』『次はアスナがキリトと不倫してみる？』『ナイスアイデア。採用』とアイコンタクトで会話する。親友同士だからこそできる熟練の技である。

そうこうしていると、相変わらず膝の上に寝転んだリーファがアスナの二の腕をつんつんと突いた。
「あの……アスナさん。今度、あたしとも姉妹プレイしてくれません？　ユウキさんとの話を聞いてたら、あたしもお兄ちゃんと……お姉ちゃんに、いっぱい可愛がってもらいたくなってきちゃったので……」
「もちろん♥　……って、言いたいところだけど」
パーティ用に用意した前菜を載せた皿が空になっている事を確認したアスナは、リーファに向けて視線を落とすと、そのままぱちりとウィンクした。
「――『恐縮』だけど、新しいお料理を作るのを手伝ってくれる？　そしたら今度、リーファちゃんが満足するまで姉妹プレイしてあげる」
「わー、なんだろう。なぜだか絶対に逆らえない気がする……。もしかしてこれも催眠術……？」
適当にノリを合わせつつ体を起こしたリーファが、空になった皿を持ってキッチンルームに向かう。その後を追って、アスナもベッドルームから一旦退出した。
背中に『催眠といえば、うちのセブンも負けてないよ。ねー、魔法少女セブンちゃん？』、『ちょっとお姉ちゃん、あれは催眠じゃ無くて洗脳……って何言わせるのよ、もう！』という微笑ましい声を聞きながら。
もちろん、この後もまだまだナイトパーティは続くのだが――それはまた、別のお話。

１０―１．騎士団長犯し（アリス・アスナ他）

整合――いや、聖光(せいこう)騎士団といえば、強者が集う少数精鋭集団として知られた存在だ。構成人数はたったの４名、しかも全員が女性でありながら、人数が１００倍は違う他の騎士団をあっさりと凌駕する戦果を挙げてきた。

そんな聖光騎士団が新たな団員――しかも初めての男性騎士を迎え入れると発表された時、どれだけ世間を賑わせたかは想像に難くないだろう。

「――先程も言いましたが、お前はあくまで我が団の『共有備品』です。女性騎士達との立場の違いを理解しておくように。

わかりましたね、キリト」

「了解致しました、アリス騎士団長殿」

まだ日もだいぶ高い場所にある昼過ぎ。

聖光騎士団初の男性騎士――というのは建前で、実際の所は騎士団共有備品兼雑用係であるキリトは、案内されたばかりの騎士団宿舎の廊下でさっそく団長に睨まれていた。

「『備品が女性団員に敬語を使ってはいけない。名前を呼ぶときは呼び捨てが基本』。これは先程教えたばかりのはずですが？」

「あ、ああ……悪い。これから気をつけるよ、アリスだん……アリス」

「全く……最初からこの調子では、これから先が思いやられますね」

大きく特徴的な猫耳、尻尾穴から伸びるくるりとしなやかな猫尻尾、そして丹念に編み上げられた三つ編み。その全てに金色をまとう聖光騎士団団長・アリスは、碧い瞳でキリトを真っ直ぐに見つめながら深々とため息をついた。

戦場に在りては豪奢な金色の鎧をまとい、金色の剣を振るって味方を勝利に導く事で世に知られた彼女だが、さすがに宿舎内まで完全武装というはずもない。体型に合わせたシンプルな白いワンピースという出で立ちが、アリス本来の美しさをはっきりと際立たせていた。

「ではこれより、宿舎内を案内します。その後は他の団員との顔合わせです」
「りょーかい。よろしく頼むよ、アリス」
「ええ。参りましょう」
そう言って歩き出すアリスの隣に並び、キリトは彼女の腰に左腕を回してぐいと抱き寄せる。体と体の距離が縮まる中、キリトは左手の掌をアリスの尻に這わせ、そのままむにむにと優しく揉みしだき始めた。
「おや、ちゃんと覚えていたのですね。もう三歩歩むまでに触ってこなければ、もう一度お説教をするところでした」
「お、おう……。思ってたよりギリギリだった……」
「これでも甘くしているのですよ？　今日は着任初日なのですから、特別に甘々です」
雷が落ちる寸前で『女性団員を伴ってどこかに移動する時は、必ず相手のどこかに触れている事。可能ならば、性的な辱めを伴う部位であること』というルールを思い出して危機を脱したキリト共々、アリスは廊下を進んでいく。
少人数用の食堂、屋内と屋外にそれぞれ設けられた訓練場、武器や食料を保管しておく備品室などを簡単に説明しながら通り過ぎて廊下の突き当たりへ。廊下の左右には高級無垢材で作られた扉が二つずつ、正面の突き当たり部分には黒く塗装された木の扉が一つ。
突き当たり正面の扉には『仮眠室』というプレートが掛かっており、左右の扉にはそれぞれ『騎士剣』、『細剣』、『曲刀』、『大弓』を象った金属製のレリーフが飾られていた。
「ここは、私を含めた団員達の寝室兼私室用の区画です。特別な用件が無い場合は立ち入らないように」
「わかった、気をつける。……あれ。ところで、俺の部屋は？」
「ありません」
「無い!?」
驚愕するキリトに一切動じず、アリスはコンソールウィンドウを操作し、己のストレージから一本の鍵を取り出してキリトに手渡す。

「それは、この区画のマスターキーです。睡眠を取りたい場合は、その鍵を使って誰かの部屋を使いなさい」
「誰かの部屋と言われましても……」
「大丈夫です。誰もお前を叩き出したりはしません。
　言ったでしょう？　お前はこの騎士団の共有備品。『女性団員の抱き枕になる』というのも、お前の大事な仕事なのですから」
「そ、そうか……。ちなみに、仮眠室を使う場合はどうなるんだ？」
「その場合は、団員全員が仮眠室に集まることになるでしょう。抱き枕を取り合って、決闘の一つや二つ始めても不思議では無いでしょうね」
　さらりと恐ろしいことを言うアリスと共に、別の区画へ移動する。暫し歩いたところで見えてくるのは、赤く染まった布の上に白文字で『女』の一字が書かれた暖簾が垂れ下がった開口部だった。
「さ、参りましょうキリト。皆が待っていますよ」
「えーと、アリス……ここ、女湯だと思うんだが……」
「生憎ですが、ここには女湯しかありません。そもそも、今更遠慮するような身でも無いでしょうに。さ、行きますよ」
　アリスに半ば無理矢理誘導されたキリトは大人しく女湯の暖簾を潜る。入り口からは直接見えないような位置に配置された脱衣所に脚を進めれば、壁一面に並んだ棚と脱いだ衣服を入れる籠、椅子や鏡といったごくありふれた設備が出迎えた。
　棚には既に三人分の衣服を預かった籠が納められている。なんとはなしに視線を向ければ、籠の端から下着――それも相当セクシャルなデザインのブラジャーやショーツがはみ出している。それも一つではなく、三つ全てから。まるで、この後に訪れる誰かに見せ付けるかのような作為性を感じずにはいられないが、それでもキリトの喉を興奮で鳴らさせるには十分すぎた。
「……キリト。何をぼんやりとしているのですか」
「あ、ああ。すまない、アリス」
「まったく……さ、脱がせてくださいな。キスも忘れてはいけませんよ」

女性騎士の服を脱がせるのも備品の務め。キリトはその務めを果たすべく、脱衣籠が並ぶ棚の前でアリスを正面から抱きしめながら、まずは彼女と唇を重ねた。

「ん……」

ほんの一瞬触れあわせては離す浅いキスを、五月雨のように繰り返す。互いの身体を抱きしめあいながら甘い感触に酔っていると、我慢の効かなくなったアリスがキリトの頭をぐいと引き寄せ、深く長いキスへと移行させる。導かれるままに舌の先をアリスの唇の中に差し込んでやれば、アリスはこの機を逃すまいと必死に吸い付き、舌を絡めて奥へ奥へと誘う。

「んふ、はぅ……♥　んっ、んんっ……♥」

ほんの僅かな隙間から漏れ出るアリスの吐息に昂らされながら、キリトは装備アイテムウィンドウを開き、アリスの装備アイテムを解除していく。まず最初に白いワンピースが消え、脱衣籠の中に再びオブジェクト化される。

露わになる、布面積を極力減らしたセクシーな白い下着。カップ部の布を無くし、斜めに走る細い帯状の布でどうにかバストトップを隠しただけのブラと、地肌が透けて見えるデザインのレースと紐だけで構成されたTバック姿のアリスは、誰がどう見ても扇情的だった。

布越しから直に触れるようになった生尻の感触を掌で楽しみながら、キリトは彼女の下着も脱がしていく。

「……っ。わざわざこんなエロ下着を用意してくれたのか、アリス」

「はあっ……♥　え、ええ……『男を喜ばせる下着や衣服を身につける』というのは、団の決まりですから。似合っているのか、少し不安でしたが……」

「よく似合ってるし、それにめちゃくちゃうれしいよ、アリス。

……脱がすのが勿体ないくらいだ」

「そう言ってもらえるのは嬉しいですが、ちゃんと脱がせてくださいな。でないと、いつまでたってもキリトとお風呂に入れません」

しっとりと甘えてくるアリスと再び唇を重ねながら、キリトは彼女の身体を守る最後の布地を剥いでいく。装備解除を示す効果音と共

に消失したアリスの下着は、衣服同様に脱衣籠の中へ再度オブジェクト化された。

男の腕の中で完全に露わになるアリスの裸身。無駄な肉はなく、かといって固い筋肉質でもない均整の取れたプロポーション。重ねた唇から雄の興奮を感じ取って上気する白い肌は、この上なく魅惑的だった。

「……はふっ♥」

あっさりと生まれたままの姿に剥かれた金色の雌猫は、名残惜しげに口づけを解くと、そのままキリトに頭を預けるようにしてしなだれかかる。

「ねえ、キリト。キリトも早く脱いで。私ばっかり裸なんて……なんだかずるいわ」

すっかり甘えん坊スイッチが入ったアリスの甘ったるいおねだりボイスが、キリトの鼓膜を撫でる。男の脚と脚の間を撫でる、細く白い指先の感触と共に。

キリトと肌を重ね、多くの女性と閨を共にする間柄になったアリスだが、こうして騎士然とした態度や口調を崩すのはキリトと二人きりの時だけだった。曰く『別に、皆に対して気を張っているというわけではないの。でも、今更……恥ずかしいじゃない……』との事らしい。

片手でアリスの身体を抱きしめつつ、キリトはもう片方の手で装備情報ウィンドウを操作し、着ていた物を全て解除する。不思議なことに、こちらは脱衣籠には入らずそのままキリトのストレージへと格納された。途端、抑えを失った雄の象徴――すっかり臨戦態勢になった雄々しい逸物が飛び出し、アリスの手に触れた。

「ふふっ……♥　もうこんなに固く、熱くなって……♥　私の裸なんて、もう飽きるほど見ているでしょうに」

「たくさん見てるのは否定しないけど……飽きるなんてあるわけないだろ。こんなに綺麗で、エロい女の子の身体。何回見たって興奮するって」

「そう言って貰えるなら、脱いだ甲斐もあるわね……♥」

キリトの返答に頬を緩ませながら、アリスは掌と指で包み込むよう

にして太い肉棒を握る。強すぎも弱すぎもしない絶妙な力加減が、閨を共にした夜の多さを思い起こさせる。

そうして身体をぴったりとくっつけたまま、アリスは握った手を前後させる。あくまで優しく、ゆったりとしたペースで、肉棒の根元から亀頭のすぐ手前までの軸領域をしこ、しこ、とストロークさせる。

「ねえ、キリト。新しい決まりを追加することにしたわ」

「い、今か!?」

「ええ。『お風呂に入る時は、必ず女性団員を伴うこと』。

そして『もしおちんぽが勃起してしまった時は、決して我慢せず、一番近くにいる女性団員を使ってすっきりさせること』……わかった？

破ったら怖いわよ？」

「……わ、わかったよ。アリス。必ず守るから」

キリトが頷くと、アリスもまた満足げな笑みを浮かべて頷く。相変わらず続く焦らすような速度の手コキが、キリトの興奮をじりじりと高め、鈴口から我慢汁を溢れださせていく。

「それにしても、節操の無いおちんちんね……♥　お風呂に入るだけなのに、こんなに大きくしちゃって……♥

まあ、貴方が眠っていた半年間もそうだったから、驚きはしないけれど」

「えっ!?　そ、そうなのか!?」

「ええ、そうよ。半年間ずっと、貴方の身体を清める度に……こんな風におちんちんを固くするものだから、すごく苦労したのよ♥」

衝撃の一言にびくりと身を震わせるキリトを、アリスは決して逃がさない。脱衣籠棚と己で挟み撃ちにする体勢を構築したのはそのためだ。

時折、キリトの唇や首筋、鎖骨や胸板の上へのキスを混ぜ込みながら、アリスは蕩々と語る。もちろんその間も優しい手コキで、野太い肉棒を甘く苛め続ける。

「最初はね、布でキレイにしようとしたのだけれどなかなかうまくいかなくて……それで、恥を忍んでルーリッド村の奥様方に聞いてみたの。

『殿方の大きなモノを綺麗にするにはどうしたらよいのですか』って。そうしたら『口と舌で舐めとればいい』って答えが返ってきて……今思えばきっと、からかわれたか、枕を共にしたあとの『お掃除』と勘違いされたのでしょうけれど。

――でもね」

「……信じたのか、それ」

「ええ。信じたし、言うとおりにしたわ……♥　あのときの私、あなたに夢中で……とても必死だったもの。

だから、初めての口づけをキリトのおちんぽに捧げても……何の後悔も無かったのよ？」

耳元に囁かれる妖しい言の葉。くらくらするほどに濃密な雌の匂い。持てる全てを使ってキリトを楽しませながら、アリスは肉棒を弄ぶ手を前後させ続ける。

「あの時の事は、今でもはっきり覚えているわ。頭がおかしくなりそうなくらいに濃縮された据えた汗と精の匂い。舌に感じる苦み。ちょっとだけくすぐったそうにしたあなたと――私の口の中に、たっぷりぶちまけてくれた精液の味」

「なっ!?　そこまでしてたのかよ、俺!?」

「ええ。きっと、ずーっと溜まってたんでしょうね……♥　あんなに濃くて、どろどろで……窒息するかと思ったのよ？

セルカにバレないように全部飲み干すの、本当に大変だったんだから」

碧い瞳が向ける詰るような視線が、キリトをたじろがせる。そうしてしばしの間キリトを困らせたあと、アリスは堪えきれなくなったのか、ぷっと噴き出して破顔する。

「冗談よ、冗談。いくらなんでもそんなことまでするはずがないでしょう？」

「お、おう……だよな、そうだよな……。あー、びっくりした……」

安堵のため息をつくキリトの側でくすくすとひとしきり笑ったあと、アリスは再びキリトの耳元に唇を近づける。

「ねえ、キリト。あなた、すごくほっとしたような顔してるけど……私

があなたのおちんぽをしゃぶって清めていたって言ったら、おちんぽがもっと固くなったの……気づいてる？

……興奮、したんでしょう？　私が、あなたの貯まりに貯まったちんぽ汁を、ごくごく、ごくごくと飲み干す姿を想像して」

「それは……はい。正直に言って、めちゃくちゃ興奮しました……」

素直に白旗を上げたキリトへのご褒美代わりに、アリスは頬へ軽く口づける。逸物をしゅこしゅこと扱く手の動きを徐々に加速させながら、キリトの耳元に囁くのは、ありえたかもしれない淫らな清めの日課。

「毎日、毎日……あなたのちんぽの先から金玉の裏まで、丹念に丹念に舐めしゃぶるの……♥　下品な音を立てて、おちんぽ美味しい、ちんぽ汁飲みたいって心の中でおねだりしながら……♥

その内、私が何をしているのかを知ったセルカも……一緒になってあなたのちんぽに奉仕し始めるのでしょうね♥

まだ口づけの味も知らない清らかな唇を、醜悪で雄々しいあなたのおちんぽに捧げて、丁寧に丁寧に舐め回して……♥　姉妹揃って、あなたのザーメンの虜にされてしまうのよ……♥」

気高き女騎士と見習いシスター。俗世の汚れとは無縁な美人姉妹が男の足下に跪き、肉棒を左右から挟み込むようにして口淫に耽る。そんな姿を想像させられてしまっては、下半身に血が滾るのも仕方の無いこと。しかも、アリスの意地悪で愛情の篭もった手コキまでされている状態とあっては、他にどうしようもない。

焦らすような速度だったはずが、いつのまにか射精を促すための激しさを獲得していたアリスの手が、キリトを限界寸前まで導く。

「アリス、俺、もうっ……！」

「射精したい？　ふふ、おちんちんもはちきれそう……♥　でも、もうちょっとだけ我慢してね。キリト。

あなたの想像通りのこと――してあげるから♥」

ストロークの速度を一気に落として射精を封じたアリスは、男の肌を滑り落ちるかのように姿勢を低くし、そのままキリトの足下へ跪

く。美しさと気高さを兼ね備えた貌を、グロテスクな肉棒のすぐ前に差し出しながら。

鈴口から流れる我慢汁と、今にも飛び出さんとととしている雄汁の香りをたっぷりと吸い込みながら微笑むアリス。慈愛深き聖母のようでも、淫らな淫売のようでもあるその姿に更に興奮させられるキリトを碧い瞳で見上げたまま、アリスは唇を少しだけ前に出した。

「……ん、ちゅぅぅっ……♥」

亀頭に捧げられる淫らなキス。我慢汁を垂れ流す鈴口を唇で覆ったアリスは、そのまま少しずつ口を開いて肉棒を飲み込んでいく。一度咥え込んだらもう離さない、誰にも渡さない——キリトの腰に回された両腕からは、そんな意思の硬さを感じさせる。

何か言いたげな碧い瞳は、しばしの間逡巡したあと、合成音声システムの存在を思い出す。

『根元まで全部包んであげる……だから、私の中にいっぱいちょうだいね？』

「くおおっ……！　あ、アリス……！」

端正な顔を下品に窄め、アリスはぐぽぐぽと音を立てながら肉棒にむしゃぶりつく。先端から根元まで、根元から先端まで——逸物とディープキスをしているかのように、見えない口内で丹念に舌を絡め、唾液を擦り付けていく。

もとより射精寸前まで高められていた肉棒を容赦なく襲う、アリスの熱の篭もった口淫奉仕。宝石のように美しい碧の瞳でキリトを見上げたまま前後されるアリスの顔、その激しさはもはやフェラチオというよりもセルフイラマチオとでも言う方がよっぽど実態に即していた。

「アリスっ！　で、射精る、でるっ！」

『ええ、だしてっ！　キリトの精液、いっぱいだして！』

「——ぐうぅっ!!」

射精の直前、一際太くなる肉棒を、アリスは根元まで深々と咥え込む。こじ開けられた喉奥が押し入ってくる肉柱の先端を受け入れ、広がった食道が待ち構える中——キリトはぶるりと身を震わせ、溜め込

まれた精液を射精した。
「んぶうっ!?　んっ！　んぶぉおおっ♥♥」
　口内射精というよりもむしろ、胃袋へ直接注ぎ込むかのような深い位置での容赦の無い射精。びくりびくりと蠕動し、排水ポンプの様に精液を送り出す肉棒を深々と咥え込んだまま、アリスは必死になって濃厚な白濁液を嚥下し続ける。細い食道を埋め尽くしたザーメンは、受精させられない憤りを晴らすかのような苛烈さでアリスの胃袋へ突撃していく。
「んぐ♥んぅぐうぅっ♥　……おぶ♥んぶぅ♥　んっ、んぐっ……♥んっ〃♥んぅ〃ぐぶっ〃ぅ〃ぅ〃♥♥」
　独特の風味と共に気道を封じられ、腹の中を内側から染め上げられていくかのような錯覚を覚え込まされるアリス。キリトの腰に絡めた腕から力を抜くことも、肉棒を口から離すことも忘れたまま、アリスはただただ射精を受け止め続ける。
　やがて、どうにか鼻に抜ける僅かな呼気にすら精液の強烈な臭いで満たされた頃――どくどく、どくどくと無遠慮に注がれ続けた精液の勢いが、ゆっくりと鎮まっていく。
「んぉ〃っ……♥　ん――っっぅ……♥」
　最後の一射が飲み込まれ、アリスの喉を滑り落ちていく。喉肌に擦り付けられる濃密な感触に浸ったあと、アリスはゆっくりと貌を後ろに引く。じゅるじゅると言う吸着音を響かせながら、唇で肉竿の表面をこそげるようにして残滓を舐めとりつつ、太い柱の根元から半ばまでを露出させる。
『本当に凄い量……お腹の中から妊娠させられてしまいそうね……♥　孕んであげられないのが勿体ないくらい……♥
　ふふっ♥　残ってる分も全部ちょうだい、キリト♥　遠慮なんてしないでね』
　半分から先を口に含んでべろべろと舐め回しつつ、アリスは露出したもう半分を指で上下に扱く。射精直後の敏感な亀頭や鈴口を過度に刺激しないよう優しく気遣いつつ、輸精管に残った僅かな精汁も絞り出させていく。

「おっ、ふ……誰に教わったんだよ、そんなやり方……」
『さて、一体誰かしら。アスナ？　ロニエ？　案外……セルカだったりするかもしれないわよ？』
　からかいと共に全ての残滓を飲み込んだアリスは、ゆったりとした動きで顔を離し、最後に指で作ったリングで軸を撫で上げる。まとわりついていた唾液が擦り落とされ、アリスの指に集められる。
「けふぅっ……♥　たっぷりザーメン、ごちそうさまでした……キリト♥」
　指先に付着した己の唾液を丁寧に舐め取ったアリスは、跪いたまま大きく口を開け、喉奥までの全てをキリトの視線に晒す。愛する男の放ったものを、一滴残らず飲み干したことを示す健気なアピールは、恐らく残り汁を搾り取る技を教えたのと同じ者から伝授されたのだろう。
「射精したばかりなのに、まだまだ元気ね……♥　こんなに固くして……もう一度お掃除してもらいたいのかしら？」
　挑発するような笑みを浮かべたアリスは、未だ血に滾る亀頭の先端に優しく口づける。ちゅっ、という軽いキスの感触に、キリトが二度目のフェラチオ奉仕を命じようかと迷った矢先だった。
「――あーっ！　やっぱり二人でシてる！」
　浴室内へと続く扉が開くがらりという音が聞こえると共に、飛び込んでくる素っ頓狂な声。声のする方に視線を向ければ、アリスに似た金色の髪を頭の上で結い上げた少女――リーファの姿があった。
　一応、胸元をタオルで覆い隠してはいるものの、もとより規格外のサイズの持ち主であることと、濡れたタオルが肌に張り付いてしまっているおかげで目隠しの役割は果たせていなかった。
「もー、遅いと思ったら……抜け駆けはズルいですよ。アリスさん」
「おや、抜け駆けとは心外ですね。私はただ、キリトのちんぽがあまりに汚れていたので、入浴前に綺麗にしてやっていただけです」
「アリスさんの口で？」
「ええ、口で」
　すっくと立ち上がると同時にいつもの騎士モードに戻ったアリス

が、悪びれもせずにそう告げる。その堂々たる様子に若干気圧されつつも、リーファは爆乳を揺らしながら近づいてくると、そのままアリスへと抱きつく。

「じゃああたしは、お兄ちゃんのちんぽをキレイにしたアリスさんのお口をキレイにしてあげます！」

「ええ、構いませんよ」

アリスがそう言うか早いか、リーファの唇が可憐な女騎士の唇に重なる。押しつけられる二人のバストがぐにゅりと形を変える中、侵入したリーファの舌がアリスの口内をくまなく舐め尽くす。兄の肉棒が残した僅かな痕跡すらも見逃すまいとする執念が為せる業だったが、それに見合うだけの収穫は得られそうになかった。

結局、一分ほど続いたディープキスはリーファに何ももたらさず、本当にアリスの口の中を綺麗にするだけで終わった。

「……むぅ」

「ふふ。キレイにしてくれてありがとうございます、リーファ」

「どーいたしまして」

若干憮然とした様子のリーファは、そのままキリトの右腕に抱きついてぐいぐいと引っ張る。

「ほら行くよ、お兄ちゃん。皆待ってるんだから」

「わ、わかったって。スグ」

二の腕をリーファにパイズリされているような状態になったまま、キリトは有無を言わさず連行される。一歩後ろからついてくるアリス共々扉を抜ければ、そこにはどこかオリエンタルな雰囲気を醸し出す大型スパが広がっていた。

磨かれた大理石で構成された室内、その中央に鎮座するのは円形の大型風呂。そこから溢れた湯は、細い水路を通って四方に存在するバラエティ豊かな小型風呂へと流れ込む仕組みになっていた。

湯気が抜けるように四方に広いスリットを設けた天井のおかげで室内の見通しは非常にいい上、肌に触れる空気も心地よい。壁の一面はそのまま外の日光浴スペースと繋がっており、燦々と降り注ぐ太陽の光を存分に浴びる事ができた。

「アスナさーん。シノンさーん。お兄ちゃんとアリスさん、つれてきましたー！」

リーファのよく通る声が、スパ内に響く。それに気づいた蒼い髪の少女が、下から泡が吹き出るバブルバスから上がる。それに少し遅れて立ち上がった薄緑色の猫耳少女が、キリトをじっと睨め付ける。

「着任初日から団長を好きにするなんていい度胸ね、雑用係さん。副団長サマもそう思うでしょ？」

「同感、同感。さっすがキリトくんだね。おちんちんもあんなに大きくしちゃって」

「誰に鎮めさせるつもりなのかしらね、ほんと」

そう言って、ウンディーネの少女・アスナはくすくすと笑う。ケットシーのシノン、そしてシルフのリーファ共々聖光騎士団を構成する騎士達は、中央の大型風呂を回るように移動すると、そのまま底の浅い寝湯へと場所を移す。腰を下ろせば下半身が湯に浸かる程度に浅い浴槽の中で静かに手招くアスナに導かれ、キリトもまた寝湯へと脚を踏み入れた。

直後、背後から飛ぶ鋭い声。

「団長命令です。総員、キリトを確保しなさい」

「「了解！」」

ぴしりと返事をした三人の動きはまさに電光石火。正面から飛びついたリーファ、更に右腕にアスナが、左腕にシノンが絡みついてお得意の二刀流を封じる。トドメとばかりに背後から抱きついたアリスが、キリトの身体をそっと己の方へと寄りかからせる。

気づけばキリトは、前後左右を極上の女体に絡みつかれたまま完全に動きを封じ込められていた。四方から密着する柔肌の感触。浅い湯の中で味わう肌の温もり。これを天国と言わずしてなんというのか。

「ああ……もうこのまま死んでも良い……」

「いけませんよ、キリト。貴方はこの団の雑用係なのですから、私の許しなく死ぬことは許しません。

リーファ、迂闊に妄言を吐いた罰として、キリトの発言権を奪いな

さい」
「了解しました、アリスさん」
　団長からの命令を受諾したリーファは、その豊満なバストにキリトの顔を押し当て、口を開かせる機会を奪う。当然、これもまた極上の感触、至上の味わいである。呆けた顔で湯に浸かるキリトを団員と共に拘束しつつ、アリスはキリトの身体をそっと後ろへ倒す。低くなる頭を受け止めるのは、アリスの太股。
　いわゆる『膝枕』の体勢でキリトの身体を湯に浸けたまま、アリスは上から言の葉の慈雨を降らせる。
「さて……我が聖光騎士団に最初にして最後の男性騎士が加わったわけですが……事前に言ったとおり、扱いは雑用係です。
　皆もキリトとの立場の違いを覚えておくように」
　キリトの髪をさらさらと撫でながら、アリスは周りに集う聖光騎士達に告げる。今キリトの右腕を柔らかな胸で挟み込みながら寝転ぶアスナも、左腕を枕にしたまま寝転び身を寄せるシノンも、豊満すぎるバストにキリトの顔を埋めて発言を封じているリーファも、全員が三柱の女神の加護と力を受けた地上最強クラスの存在。しかも団長であるアリスは、その三神の代行者なのだ。
　その気になればキリトの命など軽々と刈り取れてしまうだろう――その気になれば、だが。
「立場の違い、かあ……もちろん弁えてるよね、シノのん？」
「ええ、もちろんよ。副団長サマ」
　意味ありげな含み笑いを浮かべた二人は、キリトの顔越しに視線を交わす。
「私達、聖光騎士団の女の子は……一人残らず、キリトくんのおちんぽをすっきりさせてあげるためのおまんこ便器♥」
「地上最強の騎士なんて言っておいて、ちんぽには絶対に勝てない天然オナホ集団……♥　キリトの顔を見るだけで、セックスすることしか頭に無くなっちゃうお手軽ハメ穴ガールズ♥」
　キリトの耳元に甘やかな笑い声をくすくすと零しながら、アスナとシノンが左右から囁く。雄が上、雌が下という立場の違いを、聖光騎

士団待望の新人にしっかりと理解させるために。
　蠱惑的な笑みを浮かべながら自らの言葉で自らを貶め、己の存在をただ一人の男に捧げんとする二人にアリスもまた加勢する。
「大方、雑用係の身分を甘んじて受け入れた振りをして、私達の隙をついて一人ずつ己が物にした挙げ句、最終的には聖光騎士団そのものを己の手中に納める腹づもりだったのでしょうが……ふふふ、残念でしたね。お前の作戦など、最初からお見通しです」
「こういう時のキリトくんって、結構単純だもんね……。お風呂に入ってきた瞬間に、『この人、私達を犯して自分の女にする気なんだ』ってすぐにわかっちゃったよ♥　こっそり食事に媚薬を盛る手間が省けてよかったけど……♥」
　アリスの言葉にアスナが頷けば、シノンもそれに同調する。
「覚悟しておくのよ、キリト。あなたは騎士団の雑用係なんだから、これからは私達聖光騎士団以外の女の子とはセックス禁止よ。
　もちろん私達は自由に使って良いし、あんたが抱きたい女の子がいたら適当な理由付けて捕まえてきてあげるけど……♥」
「お前の姿を一目見た瞬間から、私達聖光騎士は全てお前のもの。無料で使い潰せる最底辺の売春婦も同じ。恨むのでしたら己が今までにしてきた数々の行為と、その雄々しく立派なおちんぽを恨みなさい♥」
　欲望を猛り狂わせる甘い声をキリトの心に流し込みながら、アリスは淫靡に微笑む。異論や反論を挟もうにも、今のキリトはリーファの胸に囚われ、発言する機会を奪われている。そこまで計算した上での完璧な拘束。
　こうなってしまった以上、キリトに状況を打開できる余地など残っているはずもなかった。

　かくして、キリトは誇りある聖光騎士団の誉れも高き雑用係に任命された。２４時間３６５日年中無休、一日三食昼寝とおやつとフリー

セックス付きという過酷な環境で行われるその仕事の種類は多岐に渡る。

たとえば、騎士団の結束を高めるため相棒たる生物・馬――その馬に感謝する儀式『神馬交』でオス馬役を務めるのもその一つだ。

「――ふふっ♥　キリトくんのおっきくて立派な『馬並みちんぽ』……こんなので交尾してもらえるんだ……♥　いいなあ……♥」

「顔が蕩けちゃってますよー、アスナさん。ダメですからね、儀式の前に味見しようとか考えちゃ」

「わかってるよ――。儀式が終わるまでは、ちゃーんと我慢するから」

スパから続く半屋外スペース。小さな滝とそこから続く小川をイメージした流水プールや、壁と天井を蔦で覆った四阿（あずまや）が設えられた小庭園。その一角に置かれた日光浴用のロングビーチチェアに座ったまま、キリトは二人の美少女からの奉仕を享受していた。グロテスクな肉柱に端正な顔を擦り付けているのは、アスナとリーファの二人。

騎士の誇りも人間としての尊厳も捨てて素直な肉欲に従う乙女達の仕事は、儀式の準備が終わるまでの間、オス馬――つまりはキリトをもてなすことだった。

「いつもいっぱい働いてくれてありがとう、オス馬さん♥　今日は思いっきり種付けして、日頃の憂さを晴らしちゃってね♥」

「お兄ちゃんの為に用意したメス４匹、全部使っちゃって良いからね♥」

血管が浮き出た太い肉棒に、アスナとリーファは左右から口づける。片目でキリトを見つめたまま、二度、三度と続けざまに。片手で己の股座を弄り、くちゅくちゅという水音をわざと響かせながら、四度、五度と飽きもせず。

射精を促すためでは無く、ただ只管に『私は貴方様の女（モノ）です』、『おちんぽ様に使っていただく為の穴です』と媚びる為の行為。

雄の支配欲を刺激する二人の奉仕に、キリトは陰嚢が煮えたぎる様な興奮を覚えていると、儀式の準備を進めるために場を離れていたシノンが歩いてくる。

「準備終わったわよ、キリト。いつでも始められるわ」

それだけ報告するとシノンは流れるような動作でキリトの正面に跪き、亀頭にそっと口づける。女神めいた相貌の三人が、素肌の全てを晒した姿のまま三方向から肉棒に唇を捧げる。情欲に燃えたそれぞれの瞳が放つ視線で、自分の魅力をアピールし、交尾に相応しい雌であることをアピールする。

上体を起こしたキリトが三人の頭を順繰りに撫でると、ようやくキスの嵐は収まった。

「キリト、来て。こっちよ」

すっと立ち上がったシノンが、儀式の場所まで一行を先導する。ふりふりと揺れるケットシーの尻尾に誘導されながら、キリトは彼女の後に続く。両隣にいるアスナとリーファの身体に腕を回し、大きく実ったたわわな胸を揉み拉きながら。

敏感な箇所に触れられて発情の吐息を漏らすアスナとリーファを従え、シノンの魅惑的な尻を眺めながら歩くこと暫し。屋外スペースをほぼ横断する形で辿り着いたのは、グリーンカーテンで天井と壁を作った四阿だった。もともとあった椅子とテーブルは撤去され、代わりに床一面に分厚い毛皮が数枚重ねて敷かれている。

そして、その毛皮絨毯の上には――拘束され、目隠しを巻いた金髪の女が一人。

「――シノン？　シノンなのですか？」

近づいてくる気配を察知し、目隠しをされた女――聖光騎士団団長・アリスが不安げな声を上げる。両の瞳は黒い目隠し布で覆われ、革製の腕輪を浸けた両手首は、天井の梁から伸びた強靱なワイヤーによってＶ字を描くように拘束されている。そんな状態で無防備な背中と尻をキリト達の側へ向けているとあっては、そうなるのも仕方の無い事だが。

「ええ、そうよ団長サマ。御神馬様――あなたがこれから交尾していただく相手をお連れしたわ」

交尾という単語にびくりと身を震わせるアリスの耳元に囁きながら、シノンはくすくすと笑う。

日頃から騎士の脚となって働く馬達に感謝の意を示す儀式である

『神馬交』は、オス馬の依り代となった男性騎士が、同じ団の女性騎士を犯すという形で行われる。なお、この儀式が終わるまでの間、男性騎士はなるべく言葉を発さずに一匹の馬として牝を犯すのがよいとされている。

アリスの正面に回ったシノンは、指先でアリスの頬をつつ、と撫でる。

「私もさっき初めて会ったのだけれど……すごく素敵な種馬さんよ。毛並みは黒くて、体つきはしっかりしてて……何より、おちんぽがとても立派に反り返りながら勃起していて……♥　はあ……♥　儀式じゃ無かったら、私が交尾のお相手に立候補してる所だったのに……♥」

「そ、そんなに……そんなにすごいのですか……」

「ええ。アスナもリーファも、そして私も……我慢しきれなくて、思わずおちんぽキスさせていただいてるくらいにすっごいの……♥　きっと、アリスも虜にされちゃうわよ♥

あんなの見せられたら、交尾おねだりしたくてたまらなくなっちゃうもの♥　……あ、でも目隠ししてるから見えないのよね」

「うう……♥　意地悪ですね、シノン……♥」

同じケットシー同士、やはりどこか相通ずる所があるのだろう。なんとも楽しげに語るシノンの言葉に、アリスは思わずゴクリと息を飲む。

交尾相手を求めてゆらゆらと揺れる金色の尻尾と、もじもじと切なげにすりあわされる太股がキリトを挑発する。理性を千切れ飛ばすような光景にキリトが身を乗り出しかけた瞬間、左右に控えていたアスナとリーファがそっとキリトを押しとどめる。

「はいはい、どうどう。どうどう。もうちょっとだけ待って、キリトくん♥　アリスさんだって、いっぱい焦らしてあげた方が気持ちよくなれるよ？」

「アリスさんに早く種付けしたいのはわかるけど……まだ儀式の途中だよ？　ちゃんと手順通り進めなきゃ」

「金玉さんの中でいっぱい精子作って、私達のおっぱい揉み揉みしな

がら我慢我慢♥」

「おちんぽに溜まったイライラザーメンは、ぜーんぶアリスさんのおまんこに叩きつけていいからねー♥♥　だからもうちょっとだけこらえてね、お兄ちゃん♥♥」

　暴れ馬を飼い慣らす牧場主のように優しい声音で、二人はどうにかキリトの衝動を落ち着かせる。ここで焦らさせた分、あとで自分たちもたっぷりオシオキしてもらえるだろうと目論みながら。

　その光景を横目で見ながら、シノンはアリスを促して神馬交の儀式手順を進めていく。

「今日、あなたに種付けしてくれる種馬さんの名前はね……『キリト』っていうの。素敵な名前でしょう?」

「はい……♥　キリト……キリトと言うのですね……♥♥　ああ、とても、とても素敵な名前です……♥　キリト……口にするだけで、頭の中が蕩けていくかのよう……♥」

　餓えた動物のようにはあはあと舌を突き出し、恋する娘のように頬を緩ませながら、アリスは何度も交尾相手の名を呼ぶ。

「よかった、気に入ってくれて。それじゃあ、名前もわかった所で……あなたがこれからキリトと何をするのか、自分の口から言ってごらんなさい。あなたがしたいことを全部、包み隠さずにね……♥」

「はい、シノン……♥」

　シノンに促されるまま、アリスは両脚を広げてつま先立ちになると、股の間がよく見えるような体勢を維持しつつ尻を後ろにぐいと突き出す。そうして二、三度、軽く呼吸を整えたアリスは、覚悟を決めて口を開いた。

「私……聖光騎士団団長こと、アリス・シンセシス・サーティは……♥　これより、キリトのぶっとくて素敵なおちんぽ様におまんこをぐっちょぐちょに犯していただきます♥　己の全てはもちろん、守るべき配下の騎士達も何もかも全て、おちんぽ様を挿れていただく為の代価として差し出させていただきます♥♥

　種馬様のギトギト特濃ザーメンで、発情しっぱなしの子宮をたっぷりと満たしていただき、可愛い赤ちゃんを孕まさせていただきます♥

♥　おまんこはおちんぽに絶対に勝てない事を、身体の隅々まで教えていただきます♥♥♥」

「ふぅん。聖光騎士団の団長さんともあろう方が、お馬さんのちんぽとセックスしちゃうのね？」

「はい♥　はいっ♥　団員達の見ている前で……ぶひ、ぶひっと浅ましく鳴きながら、キリトの種馬ちんぽ様と本気の種付けセックスをさせていただきます♥♥　じゃないと、じゃないと……おまんこ切なくて、狂ってしまいそうなのです♥♥」

尻文字を描く芸を披露しているかのように無様で下品なへこへこ腰振りを添えて、アリスは只管にキリトを求める。その腰の一振り事に、股の間から溢れた雌汁が飛び散り、辺りに小さなシミを作っていく。

騎士としての誇りも、人間としての尊厳もかなぐり捨てた渾身のおねだり。あの気高いアリスにそこまでされて、保てる自制心がどこにあろうか。

今にも跳びださんとするキリトの興奮を感じ取ったアスナは、キリトの耳元にそっと囁く。

「――さ。行ってらっしゃい、キリトくん♥　アリスさん、いっぱい可愛がってあげてね♥」

最後の一押しを受けたキリトは、アスナとリーファの乳房から手を離しアリスのもとへと向かう。妖艶に微笑むシノンと視線を合わせたのも束の間、拘束されたままのアリスの身体の上に覆い被さる。実際の馬の交尾を模し、両腕はアリスの肩へ。猛る肉棒はアリスの股座と下腹部をなぞるようにしながら、太股の間に差し込む。

「……っ!!　キリト、来てくれたのですね……♥　よかった……♥　お前の交尾相手として相応しくないのかと、不安になってしまう所でした……♥

ああ……おちんぽもこんなに大きくして……♥♥　いっぱい我慢してくれたのですね……♥　んふっ♥　だ、大丈夫ですよ♥　すぐにすっきりさせてあげますから……♥♥」

身体にかかる重みと下腹部に触れる逸物の大きさに、アリスは歓喜

の声を漏らす。首筋にかかるふうふうと荒い鼻息すらも、今のアリスを喜ばせるアクセントにすぎない。

その姿をじっくりと眺めながら、アスナ、リーファ、シノンは、二匹の獣の周囲に陣取る。その姿はアリスに見えていなくとも、彼女らが滑稽な見世物を見に来た観客であり、自分は彼女らを楽しませる見世物でしかないことは自ずと察せられた。であれば、すべきことは一つしかない。

下腹部から湧き上がる興奮に自然と緩む口元をどうにか引き締めながら、アリスは声を上げた。

「……ほっ♥誇り高き聖光騎士団の騎士達よ！　これより、聖光騎士団を代表し、団長たるアリス・シンセシス・サーティとオス馬キリトによる獣姦交尾――『神馬交』を披露いたします♥

私がオス馬様の極太ちんぽ様に蹂躙され、見事に馬の仔を孕むところを、しかと見届――けえひぃいぃ〃いいいっ〃♥♥」

見世物披露口上の最中だったアリスを襲ったのは、我慢できなくなったキリトの挿入。シノンが施した事前準備と儀式の興奮にたっぷり濡れぼそったアリスの雌穴は、女体を気遣わない乱暴な挿入すらもしっかりと受け止め、一気に最奥部まで膣道を明け渡す。

子宮口手前、最も敏感になる部分を襲う立派な亀頭。弱点への強烈な一撃に、アリスはびくびくと身体を震わせ、背中を思い切り仰け反らせる。

「おぉっ♥　あひ♥　はひゅ♥　いぎっ、いぎなりぃ……♥♥　おっ、おく、奥までいっぎにひぃ……♥♥　こんにゃの♥はんしょく、反則ですぅ……♥」

「うっわ、アリスさんのおまんこ、すっごぉい……♥　お兄……じゃなくて、お馬さんのでかちんぽ、全部入っちゃった……♥」

「普通はさ、あんなの入らないよね……。しかもとっても気持ちよさそうな顔しながら、お馬さんとの本気交尾楽しんでる……♥」

「変態。淫乱。あんな人が私達の団長だと思うと恥ずかしくて外も歩けないわ」

痴態を晒すアリスを取り囲みながら、アスナ達は思い思いの言葉で

彼女の羞恥心を嬲る。目隠しをしていない三人はもちろん、アリス自身もまぐわっている相手がオス馬ではない事を知っているが、これはそういう儀式なのだ。

騎士団の代表・象徴であるアリスは、オス馬の逞しい肉棒でハメ貫かれ、愛液を垂れ流しながらメスの悦びに浸っている――それが、この場での紛れもない事実だった。

「あれ、アスナさん。お馬さん、急に動かなくなっちゃいましたけど……何かあったんですかね？」

「ふふ。あれはね、アリスさんのおまんこに自慢の最強おちんぽの形を覚え込ませてる最中なのよ。ああやっておちんぽを入れっぱなしにして、キリトくんのおちんぽ専用のサイズに変えることで『このおまんこはキリトくんのちんぽ専用スペース』『私はこのおちんぽ様で孕ませていただくための肉袋です』って、アリスさんの身体に直接教えてあげてるの」

「へ～、そういう意味があるんですね！　勉強になります」

「覚えておくといいわよ。黒くて素敵なお馬さんとセックスするとき、きっと役に立つから。

……ま、お馬さんとセックスしたがるような変態なんて、アリスさんくらいしかいないと思うけど」

アスナとリーファが少し遠巻きに見守りつつアリスを揶揄する一方、シノンは二人の側に近づく。

「本当にすごいわね……アリスのおまんこ、こんなに拡がって……♥　キリトもすごく気持ちよさそうね……♥」

身を屈めて、密着した二人の腰回りや結合部をしげしげと興味深げに眺めた後、シノンはキリトの隣にぴたりと寄り添うとそのままキリトの肌の上へ次々にキスを重ねていく。腰から腹、胸、首筋、頬へとライトなキスのラインを描きながら、最後は唇へ。舌を挿し込みあいながら、くちゅくちゅと音を響かせてディープなキスを交わす。

シノンと絡み合う舌の感触を愉しみながら、キリトは止めていた腰をやおらに動かし、アリスの蜜壺を責め立て始めた。

「――はぎゅっ〃♥　おっ〃♥　きり〃、キリトぉっ〃♥　あっあ

〝ぁっあッ♥♥　くひぃっ♥　キリトの、はあっ♥はあっ♥　キリトの馬ちんぽぉ♥♥　すき、すきぃ〟いいっ♥」

獣めいた無造作な抽送。それが何よりもアリスを狂わせる。太い肉竿によって拡張されたアリスの膣内を、しっかりと張り出したカリ首がぞりぞりと容赦なく擦り上げ、1ストロークごとに快楽物質を大量生成させる。

腰と腰が触れあう度、ばっちゅ、ばっちゅと響く劣情の水音。毛皮絨毯の上にしとしととこぼれ落ちる愛液の滴。獣の欲望を露わにしたキリトを健気に受け止めながら、アリスもまた一匹の牝へと堕ちていく。

「あっ♥んぅう♥あっあっ♥あひぃいぃ〟っ♥　キリトの、おっきい、おちんぽぉ……♥　はあっ、はあっ……きゅひぃ♥　そんなに、激しく♥んっ♥んぃいっ♥　どちゅ、どちゅってされてしまってはぁ♥私、わたし♥きもちよく、なって♥あなたに、おぼっ♥おぼれて、しまいまひゅぅうっ♥♥　おぅっおっおひぃいい♥♥」

そんな事を言われて興奮しない方がどうかしている。

自然とオスを昂らせる鳴き声を上げながら悶えるアリスを、キリトは容赦なく肉棒で貫く。愛する者にする行為とは思えない、獣の交尾。それが最高の愛情表現であることを知っているシノンは、すぐ真横で見守りながら、ただくすくすと媚笑を零す。

「よかったわね、アリス。キリト、あなたのおまんこがとっても気持ちいいって。絶対に孕ませてやるって鼻息荒くしてるわよ♥」

「おぅっ♥いひぃ♥　ほんっりょっ♥んほ♥本当、ですか♥　うれしい、うれしいです♥　キリトのおちんぽ♥きもちよぐでぎでっ♥あっあっうぁ〟っあひ♥ぅっ、うれしいっ、ですぅっ♥」

「ふふ。さすが、団長さんは偉いわね。じゃあ、そんな団長さんに……私からご褒美をあげるわ」

キリトの肌の上を滑らせるようにボディタッチをしながら、シノンは片手をゆっくりと下ろす。その手が向かう先は、アリスの背中と尻のちょうど境目。性交の快楽に酔い、肉棒で突かれる度にひくひくと反応する金色の尻尾。

「アリスはケットシーになって日が浅いから知らないかもしれないけど……ケットシーにはね、他の種族にない『弱点』があるの。その代表が――ここ」

アリスの尻尾、その根元をシノンの手が徐に掴む。握手程度の力しか込めていないようだったが、それでもその効果は絶大だった。

「――!?っんっ〃ぅ――んひぃ〃いいいいぃ〃んんんっっ♥♥♥」

びくびくと身体を震わせながら、アリスが一気に達する。淫らにイキ潮を撒き散らしながらぎゅうぎゅうと締め付けを強める膣肉の感触に、キリトはアリスの最奥までをみっちりと肉棒で埋めたまま、思わず腰の動きを止めてしまった。

「これ、効くでしょ？　特にね、誰かさんのぶっといおちんぽをぶっこまれてる時に、尻尾の根元の所をさわさわってされると――」

「――ぁあぁぁあああああ〃あ〃っ♥　あ〃っ♥あ～～～っ♥あーっ♥あっ♥あ〃～～っ……♥」

「こうやって、すっごく簡単に気持ちよくなっちゃうのよ♥　これが……ケットシーの女の子に共通の弱点♥」

アリスの尻尾を弄ぶシノンの瞳が、意味ありげな視線と共にキリトを見つめる。アリスの身体を使い、キリトにケットシー共通の弱点を教えたシノン自身もまたケットシーである。それが後の自分に何をもたらすか――シノンが想像していないはずも、そして期待していないはずも無い。

絶頂に酔うアリスの意識がどうにか戻ってくるまでの合間に、悪戯に誘う蒼いメス猫が再びキリトと唇を重ねる。そのキスと共に時計の秒針が半周ほどした頃、周囲で見守っていたアスナが不意に片手を上げた。

「はーい、シノのんに質問でーす」

「……んっ♥　はい、なにかしら。副団長サマ」

「もし、黒くて強くて絶倫なお馬さんのぶっといおちんぽでばこばこされてる最中のケットシーの尻尾を、根元からしこしこしてあげたり、お口で舐めてあげたりしたら……いったいどうなっちゃうんでしょうか？」

「いい質問ね。その答えは……ちょうどここにいるお馬さんとケットシーの女の子を使って、実際に確かめてみましょう」

実に良い笑顔を――たとえば、爆弾を片手に誰かに抱きついて引き分け同時優勝を狙う時のような――浮かべたシノンがそう言った途端、どうにか意識を正常ラインまで回復させたアリスがびくりと震える。

「だ、ダメです！　それはダメです、シノン！　キリトのおちんぽで乱暴に犯されながら、敏感な尻尾をいじめられるだなんて……♥　そんなことをされては、私、わたし……♥」

「そういうの、せめて顔くらい取り繕ってから言ったらどう？　あなた今、思いっきり笑顔になってるわよ」

「――っ!?」

シノンの言葉が冷酷な一矢となってアリスを射貫いた瞬間、キリトは何の前触れも無く肉棒を引き抜き――そして、激しい抽送を再開した。

「――んんん〜おひぃぃ〜いっ♥　おぉっ♥おぉっ♥おぉぶぅっ♥きりっ――ひぃっ♥　キリト、だめ♥だっ♥だめぇぇっ♥　いまぁっ、今、いまちんぽだめぇぇえっ♥♥♥」

アリスの肩にかけた両手――いや、前脚で華奢な女騎士を抑え込み、太いペニスを奥の奥まで叩き込む。己が誰の牝なのかを理解らせられる蜜壺は、敷かれた毛皮の上に愛液の滴をぼたぼたと撒き散らしながら、自身のフラクトライトに交尾の快楽信号を垂れ流し続ける。

種付けを目的とした本気のピストンが、アリスの蜜壺を蹂躙する。それですら狂いそうな快感の奔流を生み出すというのに、シノンがアリスの無防備な尻尾を握って容赦なく上下させる。

「ほら、アリス。すりすり、しこしこってされると……気持ちいいでしょ？」

「きもちぃいひ♥いぃぃっ♥♥　あぐっ♥いひぃ♥　おっおっおっ♥♥　きもちひ――いいいいっっっ♥　あっアっあッアッ♥――あ〜〜〜〜っ♥ぁぁあっ♥」

「ほら、このあたりもトントンってしてあげる。精子出してもらうま

えに、ちゃんと妊娠する準備しておくのよ?」
「ふひゅっ♥ぴゅひぃ♥　しまひゅ、します♥　きりとの、あかちゃんはりゃむじゅんび♥♥　おほお〝ぅっおぅ♥♥　せっ、精液もらう準備しますかりゃあぁあああ♥♥
きて、きてぇえっっ♥♥　んぉほお〝ぅっ♥　キリトの――せーえき、ぜんぶ、ぜんぶなかにひぃぃっ♥♥」
尻尾を弄ばれ、付け根をマッサージされて発情を促される。もはやセックスと交尾と種付けとまぐわい以外には何も考えられなくなったアリスは、肉棒の容赦ないピストンに狂い悶える。
彼女の鳴き声と共に繰り返し繰り返し絶頂する牝の膣肉は、一刻も早く、一滴でも多くの精液を搾り取ろうとキリトの肉棒に絡みつく。既にアリスの膣内でたっぷりと奉仕された肉棒は、激しい抽送の刺激と共に一気に臨界点を超えた。
「――ッ!!」
アリスの膣奥へ叩き込まれる、最後の一突き。本物の馬のようにぶるりと身を震わせたキリトは、肉棒をきっちりと押し込んだまま、煮えたぎる精液を一気に射精した。
「――――ぁあっあっあ〝ぁああ♥♥　イ――ぐっぅぅぅう♥♥いぐ♥いぐぐぃぐぃいいひぃぃぎゅぅぅぅぅ♥♥♥　あっあああ～～ぁああっ♥♥♥　せーえ、きひぃっ♥いっぱい♥いっぱいぃぃひいぃぃ♥♥」
アリスを侵す、絶頂に次ぐ絶頂。前をキリトの両腕（まえあし）に、後ろをキリトの肉棒に抑え込まれたアリスは、背中を海老反りに仰け反らせながらぶしゃぶしゃと潮を噴いてイキ狂う。
黒い目隠しに遮られた碧い瞳がどれだけ蕩けてしまっているのか、それを知る術はない。視界を遮られたアリスの脳裏に結ばれている光景が、黒の剣士に覆い被さられて膣内射精されている己の姿なのか、あるいは逞しき黒毛馬にのし掛かられ種付けされている女騎士の姿なのかを知る術も。
分かるのは、アリスがびくびくと痙攣するほどに深く激しい牝の快楽に溺れていることと、その口元は唾液を垂れ流すほどに緩んでし

まっていることだけだった。
「お〝♥おひゅう♥♥　――あ〝♥あひ、あ〝ぅう〝う〝ひぃいぃ〝っ♥　まだ、でっ、でて……♥　あっあぁ〝っ〝あぴぃ、あっあぁあっ♥♥」
「よかったわね、アリス……キリトのザーメン、たっぷり流し込んでもらえて……♥」
腰と腰をぴったりと密着させて繋がったまま、アリスの蜜壺へどくどくと流し込まれるキリトの精液。その全てを受け止める子宮と、受精しやすいように栓の役割を果たすペニスを共に労るように、シノンはアリスの下腹部を撫でる。
《ＡＬＯ》に存在する全ての妖精種族の中でも最も獣に近い妖精であるケットシー。人の理性と獣の本能を擁する彼女らだからこそ、己が番うべき雄が誰なのかを他のどの種族よりも鋭敏に察する事ができる。
「あっ……♥あっ♥……～～～んうっ……♥♥　キリ、ト……はぁっ……♥　すき……だいすきです……♥」
牝の深奥部を満たす熱い液体の感触に、牡の愛情を強く感じる。視界を埋め尽くす〝彼〟の色と共に、己が誰の牝であるかを改めて理解させられる悦びを、アリスはただ幸福の内に享受していた。
「――種付け、ご苦労様。キリト」
アリスの子宮を容赦なく陵辱する大量射精を終えたキリトの耳元に、シノンがそっと囁く。それを合図に、キリトは繋がりっぱなしになっていた逸物をようやく引き抜いた。カリ首が膣道をなぞる刺激にぴくぴくと反応するアリスの中から愛液の糸端を引き連れて露わにになるのは、攪拌された本気汁をまとったオスの象徴。未だ欲望に滾るその肉柱の先端には、放ったばかりの精の残滓がべったりと付着していた。
オスに屈服した事を示すかのようにぱっくりと開かれたままに

なったアリスの股穴と、まだまだ種付けできると主張する逸物を一瞥したあと、シノンはアスナに声をかける。
「アスナ、キリトのお世話をお願い。アリスは私とリーファで綺麗にしておくから」
「オッケー、シノのん。リーファちゃん、シノのんのお手伝いよろしくね」
「はいっ」
元気よく頷いたリーファが、アリスの腕にはまった拘束を弛めていく。その横でシノンはアリスの股の間に顔を埋め、アリスの性器から逆流して流れ出そうとしていた精液を啜り始めた。精液は一滴たりとも無駄にしないというのも、この騎士団の規則らしい。
一方、シノンと入れ替わるようにキリトの隣にきたアスナは、そのままキリトの腕を取って四阿を離れる。夫婦揃って向かった先は、最初にいたビーチチェアがある場所だった。
「儀式はもう少し続くけど……女の子には色々と準備が必要なの。だからその間、キリトくんはちょっと休憩。
……あ、もうお馬さんモード解除して、普通に喋っていいからね」
ビーチチェアにキリトを腰掛けさせると、アスナは慣れた動作でキリトの両脚の間に座り込む。その眼前には、性交の痕跡をまとったまま屹立する肉棒。キリトの両膝に掌を当てて身体を起こしたアスナは、己の口元を亀頭のすぐ上に持ってきた。
ちらちらと投げかけられるウンディーネ妻の視線が、他の女の膣を征服したばかりの夫のペニスを舐める許可を求めてくる。それを理解しながら、キリトはちょっとばかり焦らす方を選んだ。
「それで、アスナ。……この後はどうすればいいんだっけ」
「今、シノのんとリーファちゃんがアリスさんの全身を舐めて綺麗にしてるんだけど……それが終わったら、もう一度アリスさんとセックスしてもらう事になるかな。お馬さんじゃなくて、今度は人間のキリトくんとして」
「人間としてか……」
「うん。お馬さんとのセックスを頑張ったアリスさんに、いちゃい

ちゃえっちでご褒美をあげるの。それで、儀式は完了」
「なるほどな……ありがとう、おかげでよくわかったよ。アスナ」
「どういたしまして。
……ところで、その……そろそろ、いい？　種付け頑張ってくれたおちんちん、綺麗にしてあげないと可哀想だよ？　ほら、ちょうどよくここにキリトくん専用のおちんぽ洗浄器もあるよ？」
フェラチオ経験の豊富さをアピールするように、アスナは口を開けて舌を伸ばす。肉棒から立ち上る濃密な性臭を嗅ぎながら、喉奥まで丸見えになるほどに大きく開かれる口を晒して、アスナは必死に懇願する。
焦らすのも、焦らされるのも、流石にそろそろ限界だった。
「よし、じゃあ……キレイにしてくれるか、ちんぽ洗浄機さん？」
「うんっ♥　私にまかせて♥」
キリトの膝に手をついて身体を支えたまま、アスナは肉棒への奉仕を開始する。開いた口を真っ直ぐ前に進め、張り出した亀頭を口内へ。そのまま頬を窄めて吸い付きながら、少しずつ、少しずつ、キリトの脚の間奥深くを目指して進んでいく。
「おぶっ……おうごふっ……♥」
唇が肉棒にぴったりと張り付いたままでも、音が漏れ聞こえてしまうほどに丹念な舌奉仕。アスナの鼻息が荒くなるのは口呼吸を封じられているからというだけでないことは、興奮を湛えながらキリトを見つめる彼女の瞳を見ればすぐに分かった。
ゆっくりとした所作でキリトの股座に顔を埋めたアスナは、静かに目を閉じるとそこで動きを止める。頭部全体を動かさなくなった代わりとばかりに、口内に隠れた舌をぐにぐにと動かし、肉棒に付着した痕跡を舐めとる方に集中する。
アリスの愛液も、キリトの精液も、1マイクロリットルであろうと無駄にはさせないという固い決意の下に。
『――ねえ、キリトくん。あとでみんなと一緒に、キリトくんのおちんぽに誓いのキスしてもいい？
ほら、騎士って仕える相手に誓いを立てたりするじゃない。いつも

結婚式ごっこする時みたいに、キリトくんのちんぽに誓うのも楽しそうだなーって』

合成音声システム越しの声であっても、アスナが心底楽しんでいる事は伝わってくる。深窓の令嬢たるアスナが斯様に淫蕩、そして純真であることを知る者はそういない。男なら一人、女なら十人という所だろうか。

「それは……なるほど、いいアイデアだなアスナ。じゃあ、あとでそれっぽい感じの部屋を用意しておくよ」

『ほんと？　やったぁ♥　みんなにはあとで私から話しておくから楽しみにしててね♥』

副団長として今後の予定を立て、同時に肉棒を清め終えたアスナはゆっくりと顔を後ろに引く。頬を窄め、唇をちゅうちゅうと肉棒に吸い付かせたまま少しずつ動く様は、どこか滑稽でそして過剰な程にエロティックだ。

流石の貫禄というべきか、アスナの口内から抜け出て露わになった部位には、性交の残滓どころか唾液の滴すらも残っていない。フェラチオ奉仕の名残を感じさせるのは、しっとりと水分を含んだ表面の感触だけだった。

『はーい、キリトくんのおペニス洗浄完了しました～♥　じゃあ最後は……お掃除の後もちゃんとお射精できるかチェックさせてもらうね♥』

亀頭の先端から少し下、ちょうど鈴口の周囲のみに唇を貼り付けたまま、アスナは少しだけ顔を上方に向ける。相変わらず両手はキリトの膝に乗せたまま、敏感な亀頭を舌先でちろちろと弄くり回す。

喉奥ディープスロート大好きお嬢様であるアスナが、こうして先端だけを刺激する時。それは、『私をキリトくんのオナティッシュにしてください♥』という、無言のおねだりモードに突入した事を意味していた。

だから、使う。ごく無造作に。

「……」

目を細め、嬉しそうに待ち構えるアスナの眼前で竿を扱く。

興奮材料（オカズ）は――今回は、ヌーディストビーチで戯れるシリカ、ストレア、フィリアの映像。手の速度は速く、遠慮無く。ただ抜いて欲望を解消するためだけに、雑に。うっかり手を滑らせてアスナの顔面に手をぶつけない事だけは気を配りつつ、昂ぶるに任せて手を前後させ――。

「……っ！」

愛しい男とキスをする時と同様、唇を交わすことそのものを悦ぶアスナの中へぶちまける。天上の女神すらも恥じ入るような美しい乙女の可憐な唇を、オスの象徴へと口づけさせたばかりかあまつさえ精液を吐き捨てる穴として使う――その背徳感が、どうしようもなく男を猛らせる。

陰嚢から解き放たれた白濁液が肉棒の中を伝い、アスナの口内へ次々に飛び込んでいく。可憐な口の天井へと迸る生々しい精液を、アスナは笑顔のままで受け止める。普段は喉奥で受け止め、そのまま流し込んでしまう精液を、このときばかりは口の中へと留め続ける。

『……射精（で）たね♥　すっごく、い～っぱい……♥』

やがて、激しい射精の奔流が終わりを迎え、飛沫の勢いが弱まった頃。溜め込んだ精液がキリトの亀頭に触れないよう器用に舌を動かしつつ、アスナは僅かに残った種汁の滴を肉棒の先から吸い上げる。射精一回分の精液を、きっちり口の中に納めた所で、ようやく唇を肉棒から離す。

にちゃり、くちゃりと。わざと下品に音を立てながら、もったりと粘つく濃厚な精液を口の中で咀嚼し、攪拌。自分の唾液と混ぜ合わせたところで、キリトからよく見えるように大きく口を開く。

『すごいよ♥　ほら、こんなに……♥』

それはまるで白く濁ったプール、あるいは濁り酒をどっぷりと注いだ杯。その中で悠々と泳ぐ紅い舌という色の取り合わせは、あの鋼鉄の城にいた《閃光》を思い起こさせる。射精直後の男に特有の妙に冷静になる瞬間のせいでキリトが感慨に耽る中、アスナはゆっくりと口を閉じ――そして、喉を鳴らした。

ごくり、ごくり、ごくり。四度に分けてどうにか飲み込

まれた種汁が、アスナの体内へと取り込まれていく。決して受精できない代わりにアスナの血肉となる権利を得た種汁達を全て飲み干し、アスナは再び口を開けた。

「――けふぅっ……♥　どろっどろで美味しい濃縮ちんぽ汁、ごちそうさまでした……♥」

胃の底から昇る精液臭い吐息が亀頭の表面を撫で、身体の奥底までキリトに浸食された事を示す。ちゃんとオナティッシュの役目を果たせたご褒美に水色の髪をさらさらと撫でてやれば、アスナはゆったりと身を預けてきた。

未だ屹立した逸物を下腹部に当てたまま、アスナは夫の体に抱きつく。互いの温もりを求めあうゆったりとした夫婦の時間。それは、リーファが儀式の準備を終えた画像――毛皮の上に横たわって開脚するアリス・シノン・リーファの裸身――付きメッセージを送ってくるまで、ただじっくりと続いた。

10―2．限りなく透明に遠いブラック

【1】アスナとアリスが風呂で軽くイチャつく話（※本番無し）

――湯船に浸かり、背もたれに体を預けながら星空を見上げる。全身の力を抜いて、ほっと溜息を一つ。こぼれ落ちた吐息は、薄い湯気に混じって消えていった。

少し前の自分なら、こんな事をしていられるほど生活に余裕は無かった。もっと前の自分なら、そもそもこんな時間を過ごそうなどとは思わなかっただろう。

ならば、もっともっともっともっと前の自分――この体の本来の持ち主であれば、どうしていただろうか。

今はもう遠き彼方へ去ってしまった、幼くも聡明な彼女なら。

「――隣、いいかしら。アリスさん」

名を呼ぶ声に振り返れば、蒼い髪のウンディーネ――アスナの姿があった。風呂場という事もあって、当然ながら何も身につけていない。同じ女でも思わず意識してしまう程に理想的な肢体を晒したまま、ハンドタオル一枚だけを胸元にあててアリスの答えを待っていた。

「ええ、どうぞ。アスナ」

「ありがとう。それじゃあ、お邪魔します」

楚々とした所作で浴槽へ身を沈めたアスナは、そのままアリスの隣に腰を下ろした。聖光騎士団員専用浴室、その中央に位置する大型風呂の中には幅広のビーチチェアが一台沈められている。ちょうど良い角度で傾いた背もたれに、アスナはアリス同様に背中を預けた。

「ん～～～～っ……！　やっぱり、広いお風呂は最高ね……。星もあんなに綺麗だし……キリトくんに屋根を取ってもらってよかったわ」

「ええ、本当に……」

肩と肩が触れあう距離で並んで座ったまま、アスナとアリスは揃って夜空を見上げる。視線の先に輝くのは、瞬くことのない無数の星々。少し前まで存在したスリット付きの屋根は、既にキリトによって撤去されている。どこか得意げな顔のまま、指を『パチン』と弾いた次の瞬間にはもう跡形も無く。

最近、やることが最高司祭猊下（アドミニストレータ）じみてきていないか――と、アリスが内心思ったのは秘密だ。

「しかし、よいのですか、アスナ。キリトをほったらかしにして」

「ええ。あっちにはリーファちゃんとシノのんがいるし。私はちょっと休憩」

ほんの一瞬、アスナの視線が屋外の日光浴スペースへと向けられた。おそらくは今もそこで、キリトはシノンとリーファの体を思うままに貪っているのだろう。アリス自身も少し前までその中に参加していたのだが――騎士団の団長という立場のせいか、皆より重点的に責め立てられて完全にへばってしまったため、こうして湯の中で体を休めていた。

脱力し、ゆったりと夜空を見上げるアリス。湯の中に浸かったままのアリスの手に、アスナの手がそっと重なる。密かな絡み合いに興じる。白魚のように細く美しい指先達。その感触に心動かされてしまったのか、アリスはついアスナの肩に頭をもたれかからせていた。

「……少し、こうしていてもいいですか。アスナ」

「ええ。もちろんよ、アリスさん」

キリトがアスナに、あるいはアリスにするときのように、アスナは甘えて身を委ねるアリスの体をそっと抱き寄せる。温かな湯に肩まで浸かったまま肌と肌を触れあわせていると、なんとも形容しがたい感情が湧き上がってくるのをアリスは感じた。

友情と言うには色に溢れすぎ、同性愛というには純粋性が薄い。同じ男を愛する者への信頼や共感、そして同じ男を愛する機会を与えてくれた事への感謝――そんな感情の混合物から生まれた、名前も無い程に曖昧な情動に突き動かされるまま、アリスはそっと唇を差し出

す。

「……うん。……いいよ♥」

くすりと微笑むアスナの唇と、アリスの唇が静かに重なり合う。浴室の中に木霊しないほどに微かな音を生み出しながら、ゆったりとしたリズムで唇が触れあう。時折、悪戯めいて差しのばした舌で唇を舐めあい、舌先でつんつんと突き合う。

官能的で、ほんの少しだけ背徳的なレズビアンキス。キリトに散々愛された昂りの余韻に、改めて火を付けられてしまいそうになりながら、二人は甘く温かな口づけを交わす。

「ん……♥」

「ひゃっ……♥　ぁん……♥」

アスナの体にしなだれかかったまま、アリスはキスする場所を移動させていく。艶々とした頬へ、甘く。ほっそりとした首筋に、幾度となく。彫像のように美しい鎖骨（デコルテ）へ、しっとりと。胸元に残されたキスマーク――キリトが残した痕跡（マーキング）の上に己の唇をそっと重ねて、愛する男と間接キスを交わす。

「アリスさん、もう一度……」

「ええ、アスナ……」

求められるまま、アリスはもう一度アスナの唇とキスを交わす。挿し伸ばされるアリスの舌を、アスナの唇は優しく受け入れた。アスナの口の中で二人の舌が絡み合い、ぬちゃぬちゃと淫猥な音を奏でる。

ディープキスに溺れる唇の端から品無く零れた唾液が、頬を掠めて流れ落ち、湯の中へ溶けていく。それを気にかける余裕もない程に激しく互いの口内を舐りあい、舌と舌を幾度となく絡ませる。互いの肌の上に手を這わせ、互いの存在を確かめながら。

「んっ……♥　はっ、はあ……♥」

「んんっ♥　ん、うぅ……♥　ぷは、はあっ、はあっ……♥」

キスの応酬がようやく終わり、二人はやっと唇を離した。

本当に、少し前なら考えもしなかっただろう。人界を守る整合騎士――アドミニストレータが天界より遣わした一振りの剣が如き己が、生涯をかけて愛し守るべき男を得て彼の閨に侍り、そして同じ男を愛

する女と唇を交わす日が来るなどとは。
「ふふっ……♥　今日のアリスさんは、なんだか甘えん坊ね」
「……そうですね。確かに、アスナの言う通りかも知れません」
慈母の眼差しを向けるアスナに正面から抱きしめられながら、アリスはそっと彼女の胸元に抱かれる。年はほとんど変わらないはずなのに時折こうして甘えさせられてしまうのは、やはり彼女が母親であるからか、あるいは単に経験の差によるものか。
背中を抱く嫋やかな手の感触に心まで抱かれているような気分になりながら、アリスはぽつり、ぽつりと言葉を紡ぐ。
「少しだけ、考えていました。セルカやイーディス……かつての私を知る者達が今の私を見たら、一体どのように思うのかを。
彼女らが知る私と今の私は……大きく違ってしまっているでしょうから」
少しだけ重くなるアリスの声音（トーン）を受け止めながら、アスナはしっとりと微笑む。
「そうだね……。今のアリスさんの姿を見たら、セルカちゃんもイーディスさんもきっと凄く驚くわよね」
「ええ……きっと」
「ちょっとどぎまぎして、驚いて……でも、ちゃんと受け入れてくれるんじゃないかしら。
確かに変わった所はあるけれど、アリスさんがアリス・シンセシス・サーティであることは何も変わっていないって」
アリスを姉と慕っていた修道女と、アリスを妹のように猫かわいがりしていた十番目の整合騎士の姿を思い浮かべながら、アスナはきっぱりと告げる。
アリスは焦がれるほどの色恋を知り、悶える程の肉欲を味わうようになりはした――そうなりはしたが、ただそれだけだ。
アリス・シンセシス・サーティが立派な騎士であり、アンダーワールドに生きる全ての人を守ろうと戦い続けていることは、今も何一つ変わっていない。
たとえ彼女が妖精の羽を得て空を舞う姿を見たとしても、銃火器を

手に荒野を駆けている姿を見たとしても、セルカやイーディスといった旧知の面々が、アリスの本質を見間違うことはないだろう。

もちろん、浅ましい鳴き声を響かせながら閨で痴態を晒す姿を見たとしても――そんな機会があるかどうかは別として――同様に。

「そうだといいのですが……」

「きっとそうよ。創世神ステイシア様が保証してあげるわ」

「ふふ。それはまた、なんとも心強いお墨付きですね」

やっと笑顔を見せたアリスを抱き寄せながら、アスナは彼女の頬にそっと口づける。

「でもね……アリスさんの変化っぷりなんて、私に比べたら可愛いものよ」

「そうなのですか？」

「ええ。私なんて――キリトくんにいっぱいいっぱい変えてもらったもの」

「……ほほう？」

キリトの名前を遣った露骨すぎる程に露骨な挑発。それが出た途端、アリスは片方の眉をぴくりと動かして反応する。

時々、お互いに対してマウントを取りたくなってしまうのはアスナとアリスの間だけで共通する悪いクセだ。どこぞの二刀流系朴念仁を巡って火花を散らしまくった過去が影響しているのだろうし、単純に『真正面から張り合える相手とやり合うのが楽しい』という理由もかなり大きい。

そして、今宵もまた新たな戦いの幕が切って落とされた。

「教えてもらいましょうか、アスナ。あなたのような才女が、キリトにどう変えられてしまったのか」

「ええ、良いわよ。ちなみに、どっちが聞きたい？

デスゲームに囚われて自暴自棄になってた女の子が素敵な男の子の優しさに触れて生きる喜びを思い出す話と、素敵な旦那様を射止めた新妻が毎晩毎晩行われる夫婦の営みの中で女の悦びを教え込まれてどんどん淫らに開花していく話があるんだけど」

「……両方、聞かせてもらいましょう」

熱い湯の中で体と体を密着させ、不敵な笑みを浮かべた二人の女剣士が見えない火花をバチバチと散らす。

結局、生涯のライバルとでも呼ぶべき二人のマウント合戦は、セックス疲れでぐったりとしたリーファとシノンを両脇に抱えたキリトが浴室内に戻ってくるまで続くことになった。

【2】シノンと朝から子作りする話

――雑用係の朝は早い、というわけではない。

窓から差し込む太陽の光と小鳥の鳴き声、それに『いつまで寝ているの？』と詰る誰かしらの声と共に目を覚ます。

「朝の調子で、その日一日の調子も変わってきますから……ある意味、一番大事な時間かもしれないですね」

そんな感じでそれっぽく語るのは、誉れも高き聖光騎士団に所属する初の男性騎士・キリト。この道、十数時間の大ベテランだ。

雑用係であるキリトには、寝室や私室が与えられていない。そんな彼が昨晩の寝床としたのは、同じ騎士団に所属するシノンの部屋。彼女の抱き枕になるという非常に重要な仕事をこなし、そのまま同じベッドの中で眠りについた。

男女二人分の温もりを宿した布団をそっと捲れば、空色の猫耳と尻尾が目を惹く少女――シノンの姿がある。昨晩寝室に入るなり素っ裸に剥かれて散々弄ばれたあと、そのまま眠りについたため、当然ながら何も身につけていなかった。

「ふぁ……おはよう、シノン」

「おはよ、ねぼすけさん。とっても可愛い寝顔してたわよ？」

男女の交わりが残した性臭、そして寝汗が放つ体臭。その二つがみっちりと充填された布団の中で一晩を過ごし、更にはキリトが目覚めるまでの間、朝立ちした肉棒に肌を撫でられながら過ごしたシノンは、すっかり発情期のメス猫のように蕩けた表情をしていた。

シノンの体をそっと抱き寄せたキリトは、そのまま彼女の体を己の下へ。細い体に片腕を回し、吸血鬼のように首筋に吸い付いてキスマークを残しながら、もう片方の手で布団を引き上げる。

頭の上まで布団をすっぽりと被ってしまえば、そこはもう濃密な雄と雌の匂いに満ち満ちた空間。

「……なあに？　キリト。昨日あんなにシたのに……もうしたいの？」

「ああ。シノンの裸見てたら……抱きたくなった」

寝覚めのままに屹立した肉棒をちらりと見たシノンが、妖しい声音でキリトを誘う。男性の肉棒が覚醒時に勃起状態になるのは一種の生理現象でもあるのだが、今回の場合は単に『シノンに欲情したから』という理由の方が強かった。

「もう、朝っぱらからとか……変態」

口ではそういいつつも、シノンの行動は実に素直だった。肌と肌を密着させたまま、シノンは両脚を左右に広げてキリトに組み敷かれる。牝の発情を促す繭に全身を包まれたまま、シノンは下からキリトの首に腕を回し、そっと唇を突き出してキスをねだる。

求められるがままに重なる二人の唇。布団の繭の中で音をくぐもらせながら、ちゅぷ、ちゅぷと音を立てて舌と舌が絡み合う。深く濃密で、しかし激しくはないディープキス。シャワーも浴びていないせいでどこかベタつく肌の感触すらも楽しみながら、二人はじっくりとキスを交わす。

「んっ……♥　はぁ、っ……♥　んんっ♥」

空いた片手を使い、シノンの胸を愛撫する。柔らかなバスト全体を掌を使って優しくマッサージし、小さな突起を指で挟み弄くる。あまり力を入れないように注意しながら、優しく、甘く、丁寧に。これから己の逸物を受け入れる女の体を、丁寧に整えていく。

腹の上に触れていた肉棒が、収まるべき場所を求めて下に移動する。その些細な感触ですら、敏感なシノンを喘がせるには十分だった。唇の端から漏れる鳴き声を聞きながら、キリトは腰の位置を微妙にずらして肉棒をシノンの脚と脚の間へと滑り込ませる。

「んぁ、んうぅっ……♥　やっあっ♥　そうやって焦らすの、ずるいわ……♥」

軸の部分を擦らせてシノンの陰核を刺激してやれば、漏れ出す声に更なる色が混じる。繭の中を満たす雌の香りはより一層濃さを増し、溢れ出す愛液が肉棒に絡みつく。

頃合いだろう――そう判断したキリトは、舌を引き抜くようにしてキスを終えると、シノンの瞳を真っ直ぐに見下ろした。

「――挿入れるぞ、シノン」

「ええ……♥　きて、キリト……♥」

蜜壺の入り口に亀頭を宛がうキリトを、シノンは蕩けた眼差しで受け入れて頷く。

甘くねっとりとしたディープキスの余韻と愛撫のせいで昂るシノンの体。その一番敏感な場所に狙いを定めたキリトは、腰をゆっくりと突き出すようにして逸物を押し込んだ。

「はっ♥　ああっ♥　……くぅうんっ♥♥　おっき……♥　あっ♥」

両脚を広げて迎え入れるシノンの中に、己の分身を埋めていく。

急ぐ必要は無い。シノンの体を抱きしめ、昨晩も散々貪った雌穴をゆっくりと押し開いていく。あまり体重をかけすぎないよう気を遣いながら、腰と腰が触れあうまで押し進める。

「――あっ♥んんっっ♥　んあぁっ♥」

「ぐ……ふう。よし、ちゃーんと全部入ったぞ、シノン」

逸物の根元までをシノンの膣内に収めたキリトは、シノンの頭をそっと抱き寄せる。お互いに興奮こそしているが、餓えている訳ではない。深く繋がったまま動かないようにし、まずはじっくりと互いを味わう。肉棒に浮き出た血管が作る僅かな凹凸の形状すらも逃さぬように、シノンの膣壁は必死になって締め付けてくる。その健気さがまた愛おしい。

下半身とは対照的に、軽く触れあうだけのキスを幾度か繰り返してやれば、シノンが蕩けそうな笑みを浮かべる。

「……んっ、あっ♥うぅうっ♥　はあっ、はあっ……♥　キリトのちんぽ、やっぱり、すごい……♥

奥まで、ぐぐーって拡げられてる感じがして……自分でするのとは全然違う感じがするの……♥」

「シノンの中も、相当だぞ……めちゃくちゃ絡みついてきて、気持ちよすぎる……」

口づけの合間合間に言葉を交わし、再び口づけに溺れる。厚い布団と濃密な匂いに包まれた、二人だけの繭の中で。互いの背中に腕を回し、上半身をぴったりと密着させながらの甘い交尾を楽しみながら、キリトはようやく腰を引く。

亀頭の淵がシノンの秘部にぎりぎり引っ掛かるラインまで引き、再び奥へ。膣全体の慣らし具合を確かめながら、ゆったりとしたテンポのストロークで肉棒を抜き差しする。

「あっ♥　あぁ♥あんっ♥　んぅっ♥　それ、だめっ♥あっ♥　こっ、声、でちゃう……♥」

「俺はもっと聞きたいんだけどな。シノンの可愛い声」

「んぅ♥あぁっ♥　いや、いやぁっ♥♥　だって、恥ずかし……ぃっ♥♥　あっ♥んううっ♥」

緩いペースを維持して腰を振りながら、抱きしめあう腕の中でシノンをしっとりと啼かせる。完全に覚醒した体はもっと苛烈に責め立てて種を植え付けろと叫ぶが、それを理性の力で抑え込む。普段はクールなシノンが、こんなにも甘く可愛らしい一面を見せてくれているのだ。それを堪能しない手は無いだろう。

再び腰と腰を密着させたキリトは、シノンの奥にある弱い部分を狙い、亀頭をぐりぐりと動かしながら押し当てる。

「――あっあぁっ♥アアっ♥ぁああ♥♥　それ、ずる――イィイぃいっ♥

んあっ♥んぃい♥　あっあっ♥　こし、ああっ♥　腰、とける、とけちゃうっ♥♥　あっやっダメだめこれすぐイっ――あぁあああぁあああっ♥♥」

弱い部分を的確に刺激されたシノンが、甘やかな喘ぎ声を奏でながらびくりびくりと身悶えする。

結合部から溢れ出した愛蜜は、幾筋もの滴となってベッドシーツに

染みこみ、昨晩の残滓達と混ざり合っていく。
　快感に溺れるスレンダーな肢体が布団の中からすっぽ抜けて行かないよう、キリトは両腕でしっかりとシノンを抱き留めて己の腕の中に納める。
「あっんっ♥　ううぅ♥　キリっ、ト……はうっ♥　ね、ねえっ、キリトぉっ♥　あっ♥やあっ♥　ふああっ♥」
「ん？　どうした、シノン」
「ちょ、止ま――ひゃあんっ♥　あっあああっ♥ああん♥　ねえ、ひゃあっ♥♥」
　何か言いたげなシノンの様子に気づき、キリトは腰を動かす速度を少しずつ弛め、やがて動きそのものを止めた。
　それでどうにか余裕を取り戻したシノンは、太い杭でつなぎ止めるかのように深々と肉棒を差し込まれたまま、ゆっくりと呼吸を整える。熱の篭もる布団の中での性行為によってシノンの額に浮かんだ汗をキリトが拭ってやれば、シノンはどうにか人心地ついたような様子で微笑んだ。
「はあっ、ふうっ……ありがと、キリト……」
「ああ。……もしかして、なにか嫌だったか？　シノン」
「大丈夫、そんなことじゃないから……。はあっ、はあ……。ちょっと、その……キリトにお願いしたいことがあって。
　あのままだと、気持ちよすぎてちゃんと喋れないし……」
「お願い？」
　思わず怪訝な顔をしたキリトの表情が、こくりと頷いたシノンの瞳に映り込む。
「その、今日なんだけどね……私、危ない日なの」
「……危ない日っていうと、いわゆるその……」
「そう、危険日。キリトの赤ちゃん、すっごくできやすい日」
　性交の熱に肌を上気させたシノンが、恥じらいと共に告げる内容。生理周期の中で訪れる、妊娠可能性が大きく上がる日取り。シノンの場合、それが今日なのだという。
　目の前にいる女に自分の子を孕ませる――本能に刻み込まれた衝

動が、既に固く張り詰めたキリトの海綿体に更なる血を滾らせる。
「も、もちろん現実（リアル）での話だし、ＶＲ空間ではそういうの関係ないってわかってるけど……。
　せっかくだし……私にキリトの赤ちゃんを孕ませるつもりで、たくさん膣内射精してくれたら嬉しいかな――って、やっ♥　やあっ♥　急に、どうしってぇっ――だめっダメぇっ♥ふぁあああんん♥♥」
「どうしてもこうしてもあるかよ！」
　クールな猫耳スナイパーが放つ、超超至近距離からの危険日膣内射精子作りおねだり。それで興奮せずにいられると思う方がどうかしている。
　まとわりつく本気汁を従えながら引き抜かれた肉棒を、再びシノンの膣内へ。逃げ出せないようにしっかりと覆い被さり、更に布団の繭で声と匂いも閉じ込めたまま、キリトは強烈なピストン運動を再開する。
「これ♥これっ、こんなの、レイプぅっ♥　キリトに、あっあああっ♥レイプされてっるぅう♥♥
　あっあああっあっあぁあっ♥♥　ぢんっ、ちんぽぉ♥キリトのちんぽ、すごひぃっ♥　だっめえ♥奥、おくのところずんずんするのだめえっ♥♥」
「ああ、そうだぞシノン。危険日の朝っぱらからナカダシおねだりするような淫乱シノンは、俺にレイプされて孕まされるんだ！」
「あっあっあぁああ♥♥　いいっ♥いやぁっ♥あっあああ♥　そんな、そんなのいやあっ♥♥
　助けっ♥たひゅけてえ、キリトお♥　キリトの♥はぎゅっ♥　キリトのレイプザーメンで赤ちゃん孕ま〟されぢゃうぅうううっっ♥♥」
　遠慮無しに肉棒を前後させるキリトの腰にシノンの両脚が絡み、肉棒が蜜壺から外れないようにロックする。その健気な仕草に応えるように、キリトもまたより一層力強くシノンの体を抱きしめる。
　厚い布団の中、互いの存在だけを感じながら、二人はただ只管に交尾に耽る。
「寝てる間に溜まった濃いヤツ、シノンの中にたっぷり注いでやるか

らな……！」

「あひ♥おっ♥あっあ♥あん♥　だめえ、だめよぉっ♥♥　そんなの、絶対、絶対孕んじゃうぅう♥♥　キリトの特濃せーし――あっあんっ♥あん♥♥　絶対、私の♥卵子♥りっ、輪姦されて♥　受精させられちゃうぅうっ♥♥」

「そうだ……せっかくだし、腹が大きくなったら《ＧＧＯ》にログインしてお披露目しに行こうか。

　皆の前で腹ボテ姿見せ付けたら、きっと噂になるぞ。氷の狙撃手が、いったい誰にどうやって孕まされたのか……ってさ」

「いや♥いやあっ♥　ああっ♥んんぅう♥　みんなのまえれへぇっ♥おっきいお腹見られちゃうぅ♥♥

　キリトのほぉ♥　キリトのぶっといおちんぽに負けてぇっ♥妊っ娠っさへられちゃったぁ、ボテ腹スナイパーって言われちゃうのぉおぅうううっ♥♥♥」

　セックスをしたという何よりの証拠――大きく突き出た臨月腹を皆に見られ、下卑た視線を向けられる。そんな己の姿を想像させられながら、シノンは再び絶頂に達する。噴き出した愛液がシーツを更に湿らせ、布団の中の空気が雌の匂いでより一層濃さを増す。

　シノンの両脚同様、肉棒を離すまいと絡みつく膣肉が、激しく前後する腰の動きに合わせて肉棒を扱き上げる。待ち構える肚の内に導かれるように、陰嚢の中に充填された精子達が発射の時を待ち構える。

「おっ♥お゛っ♥おぅっおほぉっ♥　ちんぽ♥ちんぽどちゅどちゅ早くなってるぅ♥　ああっ♥ひぃいんっ♥♥

　はやいの♥早くてつよいのだめぇえっ♥♥　しきゅっ♥子宮、よろこんじゃうぅ♥　せーしくださいっておねだりしちゃうから、だめえぇえぇっ♥♥」

「ぐうっ……このまま射精すぞ、シノン！　でる、シノンの膣内に全部でるっ!!」

　種付けのためにラストスパートをかけるハードなピストン運動に、シノンは淫らに狂い悶える。普段のクールな態度を剥がされ、一匹の

雌の姿を露わにしたシノンの体を抱きしめたまま、キリトは欲望の赴くままに腰を振り――そして、最後の一突きを叩きつける。

直後、溜め込まれた精液が一気に解き放たれ、シノンの胎内へ殺到した。

「〜〜〜〜〜〜〜んん゛ぅふぅぁあああああっ♥あぁああアぁアアっ♥♥　イぐっ、イ゛っ――くぅうぅうううううぅ♥♥

あつっ、あっ♥あついのいっぱいぃい♥　い゛っいっぐぅ♥イっくぅううぅうぅううう♥♥　あ゛っあっあぁああ〜〜〜〜っっっ♥♥」

子宮内壁を殴りつけるかのような勢いで叩きつけられる精液の奔流が、シノンの快楽中枢が焼けそうな程の快楽を刻み込む。

太く拡がった輸精管を通った精液が、どくどく、どくどくと流し込まれる度に、絶頂へと上り詰めさせられるシノンの細い体がびくん、びくんと震えて反応する。両脚はキリトの腰をがっちりとホールドする形で動きを止め、ベッドシーツの上に投げ出された尻尾はぴんと屹立したまま。

子宮から駆け上る快感によって仰け反る背中を抱きしめたまま、キリトは吐き出される精液をシノンの膣内に流し込み続ける。

「うぉっ……どんだけ精液欲しいんだよ、シノン……。そんなに締め付けられたら、止められなくなるって……」

「あひぃっ♥ちがっ、ちがうのぉ♥♥　体がぁっ、体が、かってにひぃ……♥　あぅ♥はひぃ♥　まだでて――るうぅぅっ♥♥　あっあっお゛ぉぉ♥あ゛ぉっ、あ゛〜〜〜っ……♥」

雌が子を為す為の場所を埋め尽くす、雄の不遜なる精液。交尾の喜悦をこれでもかと教え込まれながら、シノンは何度も何度も絶頂に沈み、その度に蠕動する膣壁が精液を絞り出す。

「――んぅ、ああっ……♥　はあっ、はあぁっ……♥　あふ、ふうぅっ……♥」

やがて、長々と続いた射精が終わりを迎え、番う二匹の獣となっていた二人もようやく人心地をつく。

「シノン……もう少し、このままでいていいか……？」

「ええ……♥　ちょうど、私も……はあっ、はあ……そう言おうと、思ってたから……♥」

膣内射精をし終えてもなお固い肉棒を膣奥深くまで埋めたまま、二人はどちらからともなくキスを交わした。性交を終えた相手を優しく労り、ゆったりとしたリズムで唇を触れさせ合いながら愛情を感じあう。

シノンの胎内へ注ぎ込まれた精液は、キリトの肉棒が栓となっているおかげで逆流することも無いまま、一滴残らずシノンの子宮に収まったままだ。シノンを受精させるため、卵子に向かって突撃しているのであろうキリトの精子達を慈しむように、シノンは下腹部にそっと手を当てた。

「ふふっ……♥　お腹の中、すっごく重たいわ……♥　どれだけたっぷり出してくれちゃったのよ、まったく……♥」

「そりゃあ、あんなに可愛くおねだりされちゃったからな……孕ませたくもなるし、量も出るって」

「もう……♥　子供の名前、ちゃんと考えておいてよね？」

「名前か……そうだな。俺のプレイヤーネームと、シノンの本名から少しずつもらって……『桐乃』っていうのはどうだ？」

「悪くないけど……いえ、やっぱり却下。それじゃあ『桐ヶ谷桐乃』になっちゃうじゃない。名字と被っちゃうわ」

「……確かに。それはなんかいまいちだな」

くすくすと微笑むシノンの髪をそっと撫でる、キリトの手。優しい手の運びにセックスとは趣の異なる喜びを感じながら、シノンはキリトの耳元にそっと唇を寄せた。

「ねえ――愛してるわ、キリト」

「……俺もだ。愛してるよ、シノン。

なあ、シノン……もう何年かして、俺がちゃんと責任を取れるようになったら、その時は――」

「ええ。産んであげるわよ、あなたの子供。ユイちゃんの弟か、妹。

だからその時は、現実世界でも私のこと……いいえ、私やみんなの事、たくさん愛してよね？」

「約束するよ。シノン」
柔らかで薄暗い繭の中、誓いにも似たキスを交わす。
そう遠くない未来、ここことは少しだけ違う場所で同じ行為に励むのだろうという予感と共に。

なお、このあと布団の中でもう一発ヤッたり、さすがに汗をかきすぎたシノンを抱えて風呂場へ行ったら朝風呂を堪能していたアスナと鉢合わせしたのでもう何発かヤッたりした。

【3】アリスとアスナが捕虜になる話

――騎士とは、ある意味では歩く大金である。
高価な装備は売り飛ばせばいい金になるし、身柄と引き換えにすれば国や領地から大金が降ってくる。負け戦からどうにか落ち延びた騎士を捉え、金をふんだくろうとする輩だって決して少なくないのだ。
故に、騎士は『敵の捕虜になった際の心得』を学ぶ必要があった。整合騎士であるアリスはもちろん、血盟騎士団副団長であるアスナも。
「――だいたいこんな感じかしら。どう？　できそう？　アリスさん」
「そうですね。完璧に……とは言い難いですが、どうにか形にすることはできそうです。アスナ」
聖光騎士団宿舎の中庭に立てられた、ワンポール式の天幕。ダークエルフの戦士・キズメルの世話になった時を思い起こさせるシンプルな天幕の中でアスナが頷けば、アリスもまた頷きを返した。
今日のアリスは、以前同様に猫耳と猫尻尾を生やした《ＡＬＯ》仕様のアバター。一方、栗色の髪をしたアスナが身にまとっているのは、白い制服にブレストプレート、そして紅のプリーツスカートという見慣れた組み合わせ。それはもちろん、かつて彼女が『血盟騎士団』

の副団長を務めていた際に使用していた装備一式だ。
　それらの出所は、以前ユイが旧《ＳＡＯ》サーバーからサルベージしてきた《ＳＡＯ》時代の装備データ。それをオーグマーのキャッシュデータからキリトがコピーし、この空間内で使えるように再設定したものだ。
「ふふ、そう思えるなら大丈夫ね。もしわからないことがあったら、なんでも私に聞いてね」
「ありがとうございます、アスナ。必ずこの『捕虜訓練』を成功させて、二人で無事に脱出しましょう」
「ええ！　一緒に、キリトくんを出し抜いちゃおうね！」
　厚い毛皮を数枚重ねて床材とした天幕の中に座ったまま、アスナとアリスは決意を固める。
　騎士団における訓練の一つ・『捕虜訓練』。敵の捕虜となった場合を想定し、そこでどうやって生き延び、またどうやって敵陣から脱出するかをシミュレートする重要な訓練メニューだ。
　本来は捕虜役が一人、捕虜役を捕らえた敵兵役が一人という1対1で行う訓練なのだが、アリスにとってはこれが初めての『捕虜訓練』となるため、既に数回経験済みであるアスナがサポートに入っていた。
「ちなみに、アスナはこれまでの訓練で脱出できたことはあるのですか？」
「実はね……自力では一回も脱出できてないの。だから、今回こそは脱出してやろうって結構燃えてるのよ。私」
　訓練の開始時刻まで残り5分を切った所で、二人はいそいそと準備を始める。身につけていた武器と鎧は、天幕の隅にある武具掛けへ。これらの武具類は没収され、戦利品として飾られているという建前になっている。
「それにしても、アスナ。どうして天幕内で訓練をするのですか？　虜囚ならば、もっと警戒が厳重な場所……たとえば、牢獄などに繋がれている方が自然のように思えます」
「あはは……確かに、それはその通りなんだけど……。ここの牢獄の床材って、石で出来てるでしょ？　座ったり寝そべったりすると、固

いし冷たいしで……あんまり楽しくなかったのよ……」
「……ああ。なるほど」
経験者が語る体験談に納得顔で頷きながら、アリスは天幕の中央部を支える太い木の柱の前へと陣取る。
「ここで着ている物を全て脱ぎ……脱いだ物は床に置けば良いのでしたか」
「そうそう。『私達は何も隠し持つつもりはありません』って一目でわかるようにして、相手を油断させるの。
下着類は一番上に置いておくのも忘れずにね」
「わかりました、アスナ」
装備アイテムウィンドウを操作し、身につけていた物を全て装備解除した二人は、自動でストレージに入った己の衣服を再度オブジェクト化。丁寧に折りたたんで積み重ねると、今度は下着をオブジェクト化し、衣服類の上へ丁寧に置いた。
アリスの下着は、白色のシンプルなブラとショーツ。機能的ながら、控えめにあしらわれたレースが着用者の清楚さを際立たせる一品だ。
それと対照的なのが、黒色に染められたアスナの下着。ブラのカップ部、そしてショーツのクロッチ部分に大きなスリットが入ったオープンタイプの下着は機能性に欠けるが、着用者の淫靡さをより強烈にアピールする働きを持つ。
「……なかなかすごい下着ですね、アスナ……。でも、良いのですか？
私達はキリトに戦場で敗北して囚われ、そのままここに連れてこられたという建前になっているはずですが……」
「ふふっ♥　大丈夫大丈夫。これもちゃーんと計算の内だから。
さっ、そろそろ時間よアリスさん。キリトくんをお出迎えする準備をしなきゃ」
アスナの意図を掴みきれずきょとんとするアリスを横目に、アスナは積み重ねた衣服の隣に正座する。それに倣い、アリスも少し遅れて正座した。
空中に浮かんだシステムウィンドウ内の時計が、訓練開始時刻まで

残り１０秒を表示したタイミングでアスナはウィンドウを閉じる。それを合図に、二人は膝をついたまま上体を前へと倒した。指先を揃えた両手で体を支えながら、床を構成する毛皮絨毯に額をぴったりとくっつける。それは一分の隙も乱れも無い、実に上品な土下座の姿勢だった。

「これで大丈夫でしょうか、アスナ……」

「うんうん、上手上手。さすがアリスさんね」

横目で互いの姿を確かめ、二人は小声で言葉を交わす。裸土下座――捕虜が主人を出迎えるときの基本姿勢をしっかりとキープしたまま、待つこと数秒。

天幕の入り口が開かれる衣擦れの音が聞こえる。すっ、と小さく空気を吸い込んだ二人は、天幕の口が閉じる音が聞こえたのを合図にして声を発する。

「「お帰りなさいませ」」

頭を下げたまま、瀟洒なメイドのように主を出迎える。だが、それに応える声は無い。代わりに聞こえてきたのは、天幕内の家具ストレージから何かがオブジェクト化され、二人の前にそっと置かれる音。おそらくは木製の椅子であろうそれに誰かが腰掛けたのか、ぎぃという微かな音が二人の斜め前上方から聞こえた直後。

栗色のハーフアップと、金色の三つ編みに整えられた二人の後頭部を――無粋な素足が、ぐいと力強く踏みつけた。

「始めていいぞ、二人とも」

許可の形を取った命令が、捕虜訓練の始まりを告げる。後頭部を踏みつけられるという屈辱的な状況の中、先に口を開いたのはアスナの方だ。

「――捕虜番号００９６４。血盟騎士団副団長・アスナより、『国際騎士道条約に基づく女性捕虜の扱いに関する協定書』に従った虜囚の扱いについて説明させていただきます」

意外かもしれないが、捕虜、特に女性の捕虜の扱いに関しては国際的な協定が定められている。この取り決めに背くことは一種の戦争犯罪であり、内部で重い処分が下される事は珍しくない。

あとで『知らなかった』『聞いていなかった』と言わせないためにも、この協定内容を理解し、自らを捕らえた相手に向かって早い段階で説明しておくのは重要なテクニックの一つだ。

故に、アスナは口にする。己が口にすべきことを、全て。

「私、血盟騎士団副団長・アスナは、自らの存在意義が殿方のちんぽをすっきりさせるオナホールであることを忘れ、女の分際で戦場に立った挙げ句、キリトくんに刃を向けるという愚行を犯しました。

それでもキリトくんは、人間の振りをした浅はかな雌豚をたったの一合で完膚なきまでに打ち負かし、圧倒的な力の差を体と心に深く刻みつけてくださいました。そればかりか、衆人環視の中での土下座謝罪と無様豚真似命乞いを受け入れていただき、こうして生きたまま虜囚としてお仕えさせていただける機会を与えていただけたことには感謝のしようもございません。

これからは心を入れ替え、ちんぽコキ穴としての本分を全うすることだけを考えて生きて参ります。どうぞこの淫乱便所まんこをお好みに躾け、飽きるまでご随意に使い潰していただけますよう、重ね重ねお願い申し上げます」

『国際騎士道条約に基づく女性捕虜の扱いに関する協定書』にしっかりと則った、アスナの口上。自らがどのように敗北して虜囚となり、どのような扱いを受けるべきかを淀みなく説明したアスナは、頭を下げたまま待ち続ける。

やがて、１０秒ほどが経過した頃。アスナの頭を踏みしめていた重みが消えたのを合図に、アスナはゆっくりと頭を上げる。もちろん、一気に顔を上げるような無作法をするアスナではない。少しずつ上体を起こし、徐々に高くなる視界の中――己の眼前へ静かに差し出されている左足を見つけたアスナは、そこで動きを止めた。

「失礼いたします」

差し出された左足の裏とかかとを両手で包み込むようにして支えたアスナは、その足の甲へ口づけを捧げる。たっぷり１０秒以上、長いキスと共に忠誠を捧げてから唇を離すと、今度はそこへ顔を寄せて頬ずりをし始めた。

キリトの足をマッサージするかのように擦り付けられるアスナの端正な顔。その光景と柔らかな感触を愉しみながら、キリトはもう一人の捕虜の方に視線を向けた。

「……さすがアスナ。捕虜になるのも五回目となると、何をしたらいいのかよくわかってるじゃないか。

さて……アリス。アリスもできそうか？」

「ええ。これくらい、やってみせますとも」

土下座で頭を踏みしめられたままのアリスは、二、三度深呼吸をして息を整える。見事に奴隷口上を披露し終え、キリトの寵愛を恣にしているアスナには負けていられない――その固い意志を、己の言葉と変えて。

「――捕虜番号００９６３。私、整合騎士・アリス・シンセシス・サーティは、家畜にも劣る性処理肉便器の分際でありながら、自らの力を過信して戦場に立った挙げ句、キリトに戦いを挑むという過ちを犯しました。

手加減されているとも知らずに剣を交えた果てに完膚なきまでの敗北を与えられたばかりか、死の恐怖に怯えて公衆の面前でひたすらに助命を乞い、挙げ句の果てに小便を漏らすという失態を演じた私をこうして幕舎の中へ迎え入れていただけたことには、深い感謝の念を禁じ得ません。

これより先はキリトの僕として、飼い犬として、奴隷として……そして何より、おちんぽ様の情欲を発散する精液排泄器として生きていく事をここに誓います。どうか、私が再び道を踏み外すことの無いように、キリトの立派な逸物で昼夜を問わず躾けてくださいますよう、アスナ共々懇願いたします」

アスナの添削を受けて考えた奴隷口上をしっかりと延べ終えたアリス。その頭にかかっていた重みが、すっと外れていく。先のアスナに倣ってゆっくりと頭を上げたアリスは、眼前に差し出されたキリトの右足の甲へと口づける。

己の誇りを投げ捨てる屈辱的な行為であるはずなのに、それがどうにも楽しくて堪らない。アリスのその感情は、ふりふりと揺れる金色

の猫尻尾にも漏れ伝わっていた。
「アリス、えらいぞ。初めての捕虜訓練なのに……立派に挨拶できてるよ」
「ふふ……ありがとうございます、キリト……。アスナと一緒に、何を言うべきか考えたのです。ねえ、アスナ？」
「ええ。二人で一緒になって、『私達はどれだけ惨めな存在で、どうやってキリトくんに負けて、これからどうなっていくのか』を考えたのよね……♥
　私は『ぶひっ♥ぶひっ♥　閃光のアスナ改め、クソ雑魚メス豚まんこのアスナぶひっ♥』ってひっどい事言わされながら降伏して、やっと命だけは助けてもらって……♥」
「私も、命だけは助けてもらおうとキリトの足に額を擦り付けて懇願していたら……ふふっ♥　恐怖のあまり失禁してしまったのでしたね♥
　多くの兵士に囲まれ……なにより、キリトの冷たい視線に見下ろされながら無様におもらししてしまうだなんて……♥　本当に最低の体験です♥」
　男の足への口づけ――絶対的な服従を誓うキスを、アスナとアリスは微笑みを浮かべて楽しむ。うっすらと残る消毒薬（アルコール）の匂いに、事前に足の汚れを落としてくれていた気遣いへの感謝と、綺麗にするチャンスを逃した事への若干の不満を感じながら、二人はキリトの足に舌と唇を這い回らせる。
　足の甲にキスの雨を降らせ、指の間には舌を差し込んで丹念に。くすぐったそうなキリトの顔を見上げながら、足裏と踵を舐め回す。キリトの虜囚となった今、何も言われなくてもこれくらいの奉仕（サービス）をするのは当然だった。
　二人の丹念な足舐めを享受しながら視線を巡らせたキリトは、ふと、とあるモノを捉える。
「……うん？　こいつは……おいおい、こんなの穿いて戦場に出てたのか？　アスナ」
　黒い薄布を指先でつまみ上げたキリトは、それをアスナの眼前に垂

らして左右にゆらゆらと揺らす。大きな穴が開いたその下着は、つい先程までアスナが着用していた穴開きランジェリーに他ならない。
「うん……♥　穿いてました……♥」
「まったく、何を考えてるんだ。皆が真面目に戦ってるのに、一人だけこんなエロ下着つけてくるなんて」
「だって……キリトくんと戦うことを考えたら、これが一番いい装備にしか思えなかったんだもん……♥
　ほ、ほら！　もしかしたら、その場ですぐにキリトくんのおちんちんハメ穴としてのお仕事をさせていただくことになるかもしれないでしょ？　そういう事態に備えて、こういう装備を選んだの！」
　必死に言い繕うアスナの頭を撫でてやりながら、キリトはなるべく冷ややかな視線でアスナを見下ろす。
「ほう、ほう……。つまり、アスナは最初から俺にレイプされることしか考えてなかったって事でいいんだな？」
「それはっ……！」
「違うのか？」
「……違い……ません。私は、キリトくんにレイプされたくて、それしか頭になくて……セックスしたがってますって一発でわかっちゃうすっごくエッチな下着を穿いて、戦場に立っていました……♥
♥
　だから、キリトくんの捕虜に……ちんぽハメる以外に使い道の無い存在にしてもらえたのが、嬉しくてしょうがないの……♥♥」
　自ら用意した小道具を活用しながら、アスナはキリトの足に甘え、絡みつく。誇りも尊厳も捨て去り、愛する者に傅く一匹の牝へと堕ちる——普段から自然と己を律しているアスナにとって、それは至上の堕落にして極上の喜びに他ならない。己の痴態を、同類の牝に見られることも含めて。
「どうしようもないな、本当に……」
　アスナの下着を投げ捨てたキリトは、わざとらしい呆れ顔で溜息を吐く。それを浴びたアスナの満足げな顔を見下ろしつつ、キリトは個人用ストレージを操作し、黒革で出来た細い首輪をオブジェクト化。

左右の手に一つずつ握ったそれを二人の眼前に差し出してやれば、アスナは心底嬉しそうな笑顔を見つめ、反対にアリスは怪訝な顔をする。
「キリト、これは……よもや、ただの首輪だったりはしないのでしょう？」
「当たり。こいつは『反逆封じの首輪』って言うんだ。
これを着けられたプレイヤーは、首輪の元々の持ち主に攻撃できなくなる……いや、攻撃はできるけど無効化される、って言った方が正しいか」
「……ということは、つまり……。
もし、キリトが私達にその首輪をつけようものなら……私達はキリトの寝首を掻く手段を失うというわけですね？」
「そういうことだ。理解が早くて助かるよ、アリス。それで……どうする？」
念を押すように問いかけるキリトに、アリスは言葉を返さない。ただ、その白く細い喉を差し出すように顎を少しだけ上に傾ける彼女の仕草が、何よりも雄弁な返答になっていた。
そっと瞼を閉じ、キリトのアクションを待つアリス。その隣にいるアスナも、いつの間にかアリスと同様に目を閉じて己の首元を差し出していた。
「アリス、アスナ……二人とも、よくできました」
そう声をかけたあと、キリトは人差し指を器用に使い、アスナとアリスの装備情報ウィンドウを呼び出す。装備部位として首元をタップし、『反逆封じの首輪』を装備アイテムとして選択する。直後、聞き慣れた効果音と共にキリトの手の中から首輪が消え、二人の女騎士の首周りに再度オブジェクト化された。金属で出来た留め金部分は飾りも兼ねた拘束鍵が仕込まれており、解錠用の鍵を持たないアリス達が勝手に首輪を外せない仕組みになっていた。
肌に触れる、丁寧に仕上げられた革独特の感触。ゆっくりと瞼を上げた二人の捕虜は、首元にそっと手を触れたままキリトを見つめ返した。

「よし……これで二人とも、正式に俺の捕虜になったぞ。これからは捕虜とした使っていくから、ちゃんと俺の隙をついて脱出するんだぞ」

「ええ。わかっていますとも、キリト。こんな首輪一つで私達を支配できたと思っているなら、それは大間違いであることを……この身を以て教えてあげましょう」

「覚悟しておいてね、キリトくん。私達、あっという間に脱出してみせるから！」

いずれ出し抜く予定の主に向けて不適に微笑みかけながら、二人はもう一度キリトの足の甲へ口づける。脱出を果たすまでは、キリトこそが主であり、自分たちはただの虜囚。キリトの匙加減一つでいかようにもできてしまう奴隷も同然――そんな事実を改めて理解させるために。

――そうして、二人は本格的に捕虜としての生活をスタートさせた。

それから、だいたい数十分後。

「ほら、どうしたアリス！　俺を出し抜いて、ここから逃げ出すんだろ!?」

「お〝ほっ♥　んひぃいっ♥　むり、無理ひぃいっ♥　キリトの〝お♥ぎりっとのお〝、お〝っ♥　ちんぽから逃げりゅなんれ、無理ひいぃいイぃいいっ♥♥

あっあっ♥　そこだめ、そこっ弱いところ♥ダメ、ダメですっ♥♥はぁっ、ひぃん、ダメだめダメぇっ♥おっ、おまんこ、いっ、いっぐっいぐっイ――くうぅうううっ♥♥」

天幕の中心にある柱を挟み、入り口からちょうど反対側にある簡易ベッド。なめした獣の毛皮を何枚も積み重ねて作ったシンプルながら豪勢な寝床の上で、第三十番目の整合騎士たるアリス・シンセシス・サーティは5度目の絶頂を迎えていた。

ベッドの上に仰向けで寝転がるキリトの上を、上下に跳ねさせられるアリスの体。両腕はキリトにしっかりと掴まれ、絶頂にびくびくと

震える体の正面が天井を向く変形騎乗位。開かれた股の間には、キリトの太い逸物がずっぷりと突き刺さり、愛液を止めどなく溢れさせるアリスの秘所を我が物顔で蹂躙していた。

絶頂と共に噴き出した潮の滴が、天幕の床の上でぐったりと寝転んだままのアスナの顔に当たる。アリスが抱かれるより先に、自らの淫乱さを論われながら責め立てられ続けていたアスナが、こうして一時リタイア状態となったのは少し前のことだ。膣内射精された精液がアスナの雌穴から逆流する光景こそ見えていても、アスナ自身が回復する兆しは未だ見えない。そのため、アリスは完全に孤立無援の状況に陥っていた。

「あ〝ひぃ〝っ……♥　あっ、イヤぁっ……抜いちゃ……」

「大丈夫大丈夫、すぐ挿れ直してやるから。ほら、寝かすぞ」

「はあっ……♥　はい……おねがい、します……♥」

絶頂の余韻に浸るアリスの胎内から肉棒を引き抜くと、行為の終わりを予感した少女がイヤイヤと首を横に振る。そうではないことを教えて安心させてやりつつ、キリトはアリスの体を支えながらベッドの上へ仰向けに寝かせてやる。

ハードな騎乗位の最中に三つ編みが解けてしまったせいで、少しクセがついたままベッドの上に拡がるアリスの金髪。肌の上を流れる汗の滴と、キリトの腕に開かされた両脚の間で垂れ流される愛液が艶めかしい。

「はあっ、はあ……♥♥」

「……見過ぎだろ、アリス」

「……っ！　だ、だって……仕方ないではありませんか！　……お前の、その……おちんぽ、が……立派すぎて、どうしても目が離せないのですから……」

はあ、はあと荒く呼吸を繰り返しながら、アリスは視線だけで乞い願う。碧い瞳が見つめる先で猛々しくそそり立つ剛直で、肚の中を満たして欲しいと。

情欲に満ちた彼女の視線に苦笑いしつつ、再び挿入するためにアリスの上へ覆い被さろうとしたキリトだったが、ふとその動きを止めて

徐にシステムコンソールを開く。そのままメニューリストをタップして選択するのは、タトゥーのデザインパターンを集めたリスト。主にリズがデザインした様々な図柄を眺めながらリストをスライドさせ、目的のデザインパターン群を見つけた所で手を止める。

「キリト……？」

「アリスが俺の所有物（モノ）だってわかるように、証（シルシ）をつけておかないとな。だろ、アリス？」

「……ええ、そうですね。私が貴方のモノだとわかる証を……ここに刻んでください。キリト」

両腕をゆるゆると動かしたアリスは、そのまま己の下腹部――子宮の真上にあたる位置をそっと指さす。そこが何のための場所かわからないほどアリスは愚かではない。わかっているからこそ、差し出すのだ。女としての全て、雌としての全てを。

微笑むアリスに頷きを返した後、キリトはデザインパターン群の中から一つを選択する。中央に空洞の入ったハートマークをあしらい、その周囲に細い線で大きなハートを描く淫靡な模様。左右に伸びたラインパターンを含めて全体的に見ると、子宮を思わせる形状に整えられたそのタトゥーは、いわゆる『淫紋』――刻まれた者が淫らな雌であることを端的に示す証だった。

黒色の線が形作る淫紋を選択したキリトは、表示位置をアリスの下腹部に設定し、タトゥーをセットする決定ボタンを押した。

「んんっ……！　あ、ああっ……♥」

小型の電動マッサージ器を当てられたような振動の後、アリスの肌の上に紋章がセットされる。シミ一つ無い、雪のように白く清らかな肌の上に顕れた黒い紋章。

気高き騎士の下腹部にあってはならないその存在を見下ろしながら、キリトは満足げに笑う。無自覚的な獣の獰猛さがにじみ出ているキリトの笑みを見つめ、アリスもまた微笑む。オスにマーキングされた事を悦ぶ、ただ一匹のメスとして。

「よし、これでＯＫ……っと。アリス、記念にスクショを撮るからピースしてくれ」

「こうでしょうか？」

慣れない要請に戸惑いつつも、アリスは下腹部に添えていた両手でピースサインを作り、淫紋の左右にそっと沿える。スクリーンショット撮影を示す効果音が何度も鳴り、形の良いバスト、両脚の間から見える女性器と共に、淫紋を宿したアリスの姿を余すところなく記録していった。

もし、この画像がどこかにばらまかれれば、騎士としてのアリス――いや、アリス・シンセシス・サーティの人生そのものが終わりを告げるだろう。それがわかっているからこそ、子宮の奥がきゅんきゅんと疼くのを止められない。

「ふふ……こんな紋様を刻まれ、記録まで残されてしまうなんて……♥　もう、お前の所有物として生きるほかないではありませんか……♥」

「そうやって俺を油断させて、うまく脱出するつもりなんだろ？」

「ええ、そうです♥　油断させて、脱出して……改めて、お前のものになりにきます♥

ですから……今はたっぷり油断しにきてください、キリト♥　そして私がそう簡単に逃げ出さないよう、たっぷり躾けてくださいな♥」

アリスは両脚をゆったりと広げ、両腕を差し伸ばす。再びの結合を望む碧い瞳と見つめ合ったままキリトがその上に覆い被されば、アリスは抱きしめるようにして受け入れる。

体と体を触れあわせながら、キリトは亀頭を蜜壺の入り口に宛てがい、そのままゆっくりと内部へ押し込んだ。

「んっ♥くうぅっ……♥　もっと、もっと奥までぇっ……♥♥」

「ああ、奥まで全部いれてやるよ……！」

既にたっぷりと濡れぼそった雌穴は、太い肉棒を悠々と咥え込む。溢れ出す雌蜜に導かれ、そのまま最奥まで辿り着いた肉棒の先が、アリスの子宮口をノックし、雌の本能を呼び起こさせる。淫紋を刻んだ下腹部を内側から刺激するように、キリトは大胆に腰を動かしアリスを貪り始めた。

「――あっ――あぁああっ♥　あっ♥んっ、んうっ♥はひぃいいっ♥

いいっ、いいですぅっ♥　キリトの、おぉっ、おぢんぽぉ♥」
「ほら、もっと捕虜（メスブタ）らしく鳴いていいんだぞ、アリスっ！」
「あっあっあっあああっ♥♥　あぁっあああぁひぃいっ♥♥　おちんぽ、おぢんぽぉおぉっ♥♥　いひぃ、いぃいいぃぃっ♥♥」
　力強いピストン運動を叩き込まれ、アリスは快感に喘び啼く。反射的にキリトを求める両腕に抱きつかれたまま、キリトは自由になっている己の手を使い、アリスのバストを責め立てる。
　掌全体で包み込むように握ったあと、ミルクを搾るときのように根元から先端へマッサージ。そうして敏感になった乳首をつまみ上げてやれば、アリスは更に官能的な声を上げる。
「あぅ♥いいっ♥　いひ、いいぃぃいっ♥　キリト、キリトおっ♥♥ちんぽすき、すきぃいいぃっ♥♥　あっあぁっあっあああぁぁ♥♥はぁひいっ、んぅっ♥　こんなに、こんなにきもちいいの♥ずるいっ♥卑怯、卑怯ですぅ♥」
　アスナの影響でマゾヒズムに目覚めつつあるアリスに強めの刺激を与えてやりつつ、キリトは彼女の膣内にある弱い場所――Gスポットなどとも呼ばれる領域を肉棒で的確に穿つ。淫紋刻印による休憩を挟んだとはいえ、既に今日何度も達して敏感になっている肉体が、弱点を狙った連続攻撃に耐えきれる道理も無い。
「だめ、ダメぇえっ――♥　おぉっ♥ひいいんっ♥　おっぱい、おっぱいちぎれてしまっ――ひいいいんんっ♥♥　ま、まぁだいくっ♥いぃっ、イぐぅうっ♥　またイッて、しまいますぅうう♥♥」
「イけ、そのままイけよっ、アリス！　おっぱい虐められてイく変態女騎士になっちまえ！」
「はひぃいっ♥　イっ♥イク♥イキますうっ♥♥　おっぱい、いじめらぁれへ、イっ♥イっ――くううぅぅぅぅう♥♥」
「俺も――射精るっ!!」
　収縮する膣肉が、肉棒をぎゅうぎゅうと締め上げる。その刺激によって限界を迎えた逸物を、最後の意地で奥へ奥へと叩き込む。びくっ、びくっと震える体を上から抑え込みながら、絶頂する女体の最奥、子宮の入り口へ己の分身を押し当て――精液を叩き込む。

「～～～～～あぁあああぁ〃あ〃あぁあああっ♥♥　いぐ、いぐいぐイグイ〃つぐううぅ〃ううぅ〃うぅ♥♥♥
せーえきぃ♥せーえきどくどくくるううううう♥♥　おほっおおおほっひぃいぃ♥♥　おまっ〃、おまんこいっぐうううううううう♥♥
あっあっあああひぃいいいぃ♥♥　きり、キリトのぉっ♥いっぱい、いっぱひいいっぃいいいいっっ♥♥♥」
キリトの陰嚢から次々に排出される精液が、アリスの子宮を瞬く間に満たしていく。硬い亀頭で入り口を封じたまま、どくどくと続けざまに精子を充填し、卵子の逃げ場を奪いつくすかのような大量射精。繁殖行為を体現したような膣内射精が、アリスの絶頂に更なる絶頂を重ねていく。
雌の幸せを何度も何度も叩き込まれ、己がキリトの虜囚（メスブタ）であることを理解させられながら震えるアリスの体に両腕を回し、キリトは彼女の体をしっかりと抱きしめる。二振りの剣を操る程に力強い腕の感触に包まれながら、アリスは安心感を覚えると同時に、射精が完了するまでは絶対に逃げることはできないのだと本能的に直感してしまう。
そうして、キリトはオスであり、自分はメスであると改めて理解し――その幸福に浸る。
「……うっ。ふう……」
「あひ♥　あ〃っ♥　あは……はひぃっ……♥」
たっぷりと時間をかけた射精が終わり、膣内への精液流入が落ち着く。蕩け顔のアリスとたっぷりとキスを交わしたあと、キリトは腰を後ろに引いてアリスの中から肉棒を引き抜く。白く泡立つ本気汁の残滓をまとい、それ以上に白く濁った精液を付着させた肉棒は、相変わらず固く反り返ったままで姿を表した。
肉棒とは対照的にぐったりと脱力したアリスの体を労りつつ、乱れてしまった彼女の髪を軽く整えるキリトの背後に、そっと忍び寄る気配が一つ。
「お疲れ様、キリトくん」

「アスナ……」
　ようやく回復したアスナは、交尾の余韻に上気した肌を隠すことも無く、ベッドの上へ身を寄せてキリトとキスを交わす。軽く触れあうだけの甘やかなキスで夫婦の愛を確かめ合ったあと、アスナの視線は少し前の自分同様に脱力したもう一匹の雌の方へと落ちた。
「いっぱい射精してもらえてよかったねー、アリスさん♥　わあっ、こんな綺麗なタトゥーまで入れてもらっちゃって……♥　いいなあ、あとで私もお揃いの入れてもらおっと♥」
　捕虜の移動時基本姿勢である四つん這いの姿勢でベッドの上を移動し、アリスの側に近づいたアスナは、そこでキリトに向かってぱちりとウィンク。含みのあることをキリトに伝えたあと、アリスの体に手を回し、その体勢をそっと変えさせる。
「アス……ナ……？」
「私達、キリトくんの捕虜になったんでしょ？　だから、それっぽいことしたいなーって♥」
「ひゃっ、な、何をっ……!?」
　未だアリスの体に力が入らないのをいいことに、アスナはアリスの両膝裏に手を入れて持ち上げる。そのまま膝小僧がアリスの視界から見えるほど深く折り曲げられ、所謂『種付けプレス』をされるときと同じポーズを取らされたアリスの尻の上に、アスナは遠慮無く腰を下ろした。
　重力に従ってアスナの蜜壺から流れ落ちる精液。アリスの蜜壺に収まりきらず逆流を始めた精液。同じ雄が放った精液が、二匹の雌の間で再び出会う。
　そうしてアリスのふくらはぎを両手で掴み、体を起こせないように固定したまま、アスナは腰を前後させ、互いの女性器をずりずりと擦り合わせ始めた。
「イッたばっかりのおまんことクリトリス……いっぱいぐちゅぐちゅになって、レズイキしちゃえー♥」
「あっ♥いやっ、いやぁあっ♥　いま、いま敏感になってて……あっやらッ♥だめだめえっ♥　い、イっちゃ――ああぁっぁあ♥♥」

「んうっ♥　あっ、これ、いい……♥　クリが、あんっ♥　すれて、気持ちいい……♥　あっ、アリスさんのイキ顔、すっごく可愛い……♥」

股の間でザーメンをミックスさせながら、二匹の雌奴隷は互いの性器を擦り合わせる。キリトの眼前に惜しげも無く披露される、縦に並んだアナルとヴァギナが二輪ずつ。上に乗ったアスナは、時折キリトの方へ振り返る余裕も見せながらなんとも楽しげに腰を振り、下にされたアリスは一方的に責められ続け、軽い追加アクメを繰り返させられる。

十度ほど腰を前後させ、愛液と精液をしっかり混ぜ終えた所で、アスナはようやく動きを止めて振り返った。

「キリトくん、カメラの準備してくれる？　今から私とアリスさんで、キリトくんに勝って逃げ出すぞ～って決意表明するから」

「そういうと思って、さっきからずっと録画してるよ。アスナ」

「さっすがキリトくん！　それじゃ……聞いててね。私とアリスさんの決意表明♥」

ゆっくりと腰を上げたアスナは、股の間がよく見えるように両脚を開いて立ち上がる。足の位置が絶妙なおかげで、アリスもまた両脚を閉じられない。そのまま上体を深々と倒したアスナは、更に片手で尻肉を引っ張り女性器と肛門の姿を露わにする。逆さまになったアスナの顔と、どうにか顔を上げたアリスの顔が隣り合い、胸も穴も全てさらけ出したポーズのまま一つのカメラに写り込む。

精液と愛液の混合物が溶けたチーズのようにこぼれ落ちる中――アスナは挑発的にぺろりと唇を舐めてから口を開いた。

「私達、キリトくんの捕虜にしてもらって……こんなにたっぷり膣内射精されちゃいました～♥

キリトくんのぶっとい最強おちんぽとのセックスバトルは全然勝ち目が見えないけど……これからもキリトくんといっぱいセックスして、おまんこ奴隷として躾けてもらいたいと思いまーすっ♥

……あっ、そのうち隙を見つけて脱出もしまーす！」

逆さまになっていても分かるほど発情した顔と、脱出するつもりの欠片も無い声音でアスナが決意表明を口にすれば、アリスもまた口を

開く。先程スクリーンショットに納めたようなピースサインで自らの股穴を左右に開き、膣内から逆流する精液をよりはっきりと見せ付けながら。

「私も、アスナも……すっかりキリトのちんぽを挿れるための穴として生きるつもりでいますが、なんとかこの誘惑を振り切って、捕虜の身から脱出したいと思います。

もちろん、脱出するための手段が見つかるまでは……精液を気持ちよく吐き出していただくという、おまんこ穴の最大にして唯一の義務に従って、おちんぽ様に無様に敗北しながらアクメをキメ続けたいと思います……♥

おまんこの弱い所も、おちんぽ様に従いたくてたまらない雌豚であることも何もかも全て知られてしまっている私達ですが、キリトの肉奴隷に堕ちてしまう事の無いよう……精一杯、おまんこ奉仕を頑張って参ります♥♥」

くすくすと微笑むアリスとアスナの顔が、しっかりとカメラに納められる。既に身も心も堕ちきっていることを知らず――否、知らないフリをすることを許されている喜びを全身に感じながら、二匹の雌豚はキリトに、そしてカメラに向かって微笑みかけ続けるのだった。

11．夜は長いし語れよ乙女（色々）

第一次聞き取り調査実施時記録
年月：２０ＸＸ年Ｘ月
対象：《ＳＷＯＲＤ協定》参加者
人数：５名

調査記録１
ユーザーＩＤ：Ｓ―０００００１
ユーザーネーム：アスナ
ログインアバター：《ＳＡ：Ｏ》仕様
ユーザー権限：通常権限

――このカメラに向かって答えればいいのね？　うん、わかりました。

じゃあさっそく……え？　装備全解除？　下着も？　もー……えっちなんだから。一体誰に似たのかしら。……キリトくん？　それじゃあ、しょうがないか。

……はい、全部脱いだわよ。正真正銘のフルヌード。これでいいのよね？

じゃあ、今度こそ始めちゃいましょ。裸でぼーっと突っ立ってるのも恥ずかしいし。

――キリトくんとの出会い？

私が初めてキリトくんと出会ったのは、《ＳＡＯ》第一層攻略会議。お互い、パーティを組み損ねた余り者同士になっちゃって……それで、キリトくんに『一緒にパーティを組まないか』って誘ってもらったの。それが初めて。

それで……それでね。パーティを組んだ後『もっと色々と話さ

ないか？』って、キリトくんに誘われて……連れ込まれちゃったの。いわゆる、その……宿屋（ラブホ）に。

しょ、しょうがないじゃない！　だってあの時の私、ほとんど自暴自棄になりかけてたし……それに、顔を見た瞬間……ううん、声を聞いた瞬間に『あ、この人が私の旦那様になる人なんだ』って、悟っちゃったっていうか……つまり、キリトくんに一目惚れしちゃったの！

それから結局……三日三晩ずーっと部屋から出なかったわね。

私は初めてだったのに、キリトくんはなんだか女の子の扱いにすっごく慣れてて……それに、その……お、おちんちん、も、すっごくおっきくて……♥

私、それまでおちんぽは見たことなかったけど、絶対これすごいやつだってわかっちゃうくらいのサイズだったから……。女の直感……っていうのかな。このおちんぽでオンナにされるために、私はここにいるんだ……って、すぐにわかっちゃった。

初めてでも痛くなかったのは、ペイン・アブゾーバーと……キリトくんが優しく準備してくれたおかげかな。

その後は一日かけて、キリトくんのサイズにゆっくり慣らしてもらいながら……ずっとベッドの上で繋がりっぱなし。ぶっといちんぽが、ぐぽっぐぽって恥ずかしい音立てて自分の中から出たり入ったりするあの感じを、ゆっくりゆっくり教え込まれちゃった……♥

まだ誰も使ったことのない狭くてきつ～い女の子の穴を、男の子のおっきいモノで優しくこじ開けて……キリトくん専用の形になるようにじっくりフィットさせていくんだよ……♥　はあっ……♥　力とおちんぽに物を言わせたハードなセックスも好きだけど……こういうゆったり調教えっちもたまらないのよね……♥　ふふふっ……とっても気持ちよかったなあ……♥

そんな感じで、ずーっとちんぽハメたりしゃぶってたりしてたかな。回復ポーションも口移しで呑ませあったりして。起きてる間はもちろん、寝てる間も基本的には繋がりっぱなし。

だからね、三日目の終わりぐらいになると、もう私がキリトくんの

上に跨がって腰を振ってた。絶対に《ＳＡＯ》をクリアして、リアルで赤ちゃん作ろうねーっておねだりしながら、おまんこにおちんぽハメまくっちゃった♥

――最近？

最近かぁ……もちろん色々してるけど、最近一番ハマったのは……ビッチアスナモードでキリトくんを逆ナンするやつ、かな。

実は私ね、背中とかお腹とか、体の色んなところにタトゥー入れてるアバターを持ってるんだけど……それでログインして、キリトくんのことナンパしにいくの。肌の色も日焼けした感じに調整して、布地がほとんど無いようなマイクロビキニだけ装備して。

うん、いかにも『ビッチでーす♥　男漁りしてまーす♥』って感じでしょ？　それでビーチに行って……一人寂しく釣りしてるキリトくんに声をかけるの。『お兄さん、お一人ですか？　私、友達に置いてきぼりくらっちゃって……よかったら私と遊びません？』って。

あとは……うん、想像通り♥　そう簡単には人が来ないような場所……たとえば、おっきな車の中とか、キリトくんのプライベートビーチとかに連れ込まれて、絶倫おちんちん様がスッキリするまでズコバコはめられちゃうの♥　ザーメンをどぴゅどぴゅ～って吐き出して、金玉を軽くするためだけの一方的な性処理セックス♥

もちろん、避妊（ゴム）なんて一切無し。でっかいちんぽとセックスしたくて逆ナンしてくるような淫乱痴女は、無責任種付けでヤリ捨てられるにきまってるじゃない。もし赤ちゃんできちゃっても、それはキリトくんのつよ～い精子のせいじゃなくて、ザーメンを子宮に注いで卵子溺れさせてくださ～いっておねだりしちゃった私のせいだもん♥

でもね……そこはさすがキリトくんなのよね。遊び慣れた女のフリして、実はおまんこにキリトくんのおちんぽをぶち込んでもらう度に『おぉっ♥　おぉひぃいぃっ♥♥』って動物みたいな鳴き声上げちゃうよわよわオナホ女でも……ちゃーんとお持ち帰りしてくれるの。

例えて言うなら……肉食動物が狩った獲物をその場でちょっと『味

見』したあと、『巣』に持ち帰って隅々まで残さず食べつくす……みたいな感じかな。

うん、そう。キリトくんの『巣』。誰も絶対に邪魔できない、オス様が支配する縄張り。連れ込まれたみんなが安心して交尾の事だけに集中できる場所。

ヤるためだけに作ったような大きくてふわふわのベッドの上で、捕まえてきた私に腰振らせて、おちんちんのお世話をさせながら……キリトくん、まずは私のストレージを漁るの。もちろん、私も抵抗しようとはするわよ？　でも、大人しく差し出さなかったらちんぽお預け、なんて言われたら……ね♥

だから、個人情報がいっぱい詰まったスマホをたまたまロックし忘れたまま入れちゃってたりすると大変なのよ？　私のこと、隅から隅までぜーんぶ把握された上に、おちんちんにキスしながら生ハメおねだりしてる動画とかまで撮られて……♥　完全に『ムラムラした時に呼び出せる無料ハメ穴』にされちゃうの♥

キリトくんに『呼んだらすぐに来いよ。じゃなきゃこの動画、ネットにばらまいてやるから』って脅されながら、お返事の代わりに金玉に吸い付くとね……♥　もうそれだけで、おまんこがぐしょぐしょになっちゃって……イキそうになっちゃうんだよ♥

はあっ……♥　身も心も、好きな人にどこまでも堕とされて……おちんぽで言うこと聞かされちゃうオンナにされちゃうのって、最っ高に幸せで気持ちよくてやめられないのよね……♥

私をこんな風にしてくれちゃったんだから、ちゃーんと責任取ってよ―？　キリトくん？

――キリトくんに言いたいこと？

そうね……あ、思い出した。キリトくん、アンダーワールドに初めてログインした時に使ったアバターのデータをもらったって聞いたわよ。神代博士から。

ねえ、キリトくん。前に《ＡＬＯ》の不具合で私のアバターが小さい頃の姿になっちゃった時のデータ、あるじゃない？　あれをしっか

りキープしておいた上に、ここで一緒にたっぷりと動作テストしたの……忘れたとは言わせないわよ？　それなのに、自分の時だけちゃっかり隠しておくのは、ちょっとズルいと思うんだけどなー……？

ま。そろそろ終わりみたいだし、この件に関しては後でゆっくり話し合おうね、キリトくん？

ふふっ、なかなか楽しい時間だったわ。それじゃあ、次の人を呼んでくるわね。次は……アリスさん？　ええ、わかったわ。

調査記録２
ユーザーＩＤ：Ｓ―０００７
ユーザーネーム：アリス・シンセシス・サーティ
ログインアバター：オリジナル（※アンダーワールド仕様）
ユーザー権限：通常権限

――ええ、大方のことは理解しています。待っている間、アスナの様子を見ていましたから。ここではまず、裸になればよいのですよね？　……これで良いでしょうか。

それでは始めましょう。後ろがつかえていることですし。

――キリトと初めて出会ったのは……。あれは私が１４歳を迎え、騎士見習い……つまり、側付きとなる資格を得た日の事でした。

……おや、どうしたのです？　そんな怪訝な顔をして。私の言っていることに何か気になる点でも？　……無いようでしたら、続けさせてもらいますね。

騎士を目指す女性にとって、側付きとして先達に仕えるのは当然のこと。そして、私が仕えるべき相手として選ばれたのが……ええ、そう。一足先に騎士の身分を得ていたキリトでした。

ええ、今でもよく覚えていますよ。キリトの部屋を初めて訪れ、『奉身（ほうしん）の誓い』を交わした日のことは。

『奉身の誓い』とは、女性が側付きとなる際、その相手に我が身の全てを捧げて誠心誠意お仕えすることを誓う儀式です。

まず始めに、身を捧げるべき相手……仁王立ちするキリトの前に跪くのです。そうして、私もキリトも裸に。すると目の前には……ふふっ、何があるかわかるでしょう？　ええ、そう。天を衝くように雄々しく反り返った肉棒……固く勃起した、キリトのぶっといおちんぽです♥

すぐにでもむしゃぶりつきたくなる気持ちを抑えながら、キリトの腰に両腕を回して、顔はおちんぽの先っぽの目の前へ。吐く息が張り詰めた亀頭の表面に当たってしまうほどの近くへ、です。そうして立ち上る濃密な雄の香りをたっぷり吸い込んだら……キリトの瞳を見上げながら、誓いの言葉を捧げるのです。

『――私、アリス・シンセシス・サーティは、キリトを補佐する側付きとして、そしてキリトのちんぽが自由にハメ倒せる無料雌穴として、この身の全てを捧げる事を誓います。

いついかなる時、いかなる場所であっても、キリトが望む時はすぐに精液処理の務めを果たさせていただきます』

――と。

そうして、誓いを捧げたばかりの唇で、側付きとして最初のご奉仕をさせていただくのです。

唇と亀頭の先端を触れあわせて、初めての口づけをキリトのちんぽ様に捧げ……そのままキリトの肉棒を根元まで飲み込んでいくのです。

キリトのちんぽは、本当に太くて固い上に、そして大きいので、根元まで咥え込むのは大変なのですが……これも側付きの大事な努め。頭に一番近い奉仕穴で、これから一生を捧げるちんぽの全てを覚え込みながら、そのまま根元まで深く、深く……♥♥

そうしてどうにかこうにか全てを喉と口の中に収め、熱いちんぽとディープキスを交わしたまま……キリトに見下ろされた時に感じる、ぞくぞくとするほどの歓喜……♥

呼吸の度に体へ染みこんでいくちんぽ臭と、私の髪を撫でるキリト

の手の感触に、脳髄までも犯されているかのような悦びを覚えずにはいられないのです……♥

気づけば、あの感覚に浸りたくなる度、私はキリトの足元に跪くようになってしまいました……♥　ふふ。もう何度、誓いを捧げたことやら。

――ええ、最近の話でしたね。

正直な所、面白みに欠けるとは思いますが……ええ、あまり変わったことはしていませんので。ですが、強いて言うなら……時々、例の『捕虜訓練』をしているくらいでしょうか。ええ、アスナも一緒に。

残念ながらまだ脱出には成功できておらず、虜囚に身をやつしたまま機を窺っているのが現状です。一刻も早く脱出して、訓練を完了させたいのですけれど……これがなかなかどうして難しいのです。

脱出の糸口は未だ見いだせていないおかげで、キリトを油断させるために身につけた捕虜としての振る舞いには、すっかり磨きがかかってしまいました。

キリトの天幕内で何もまとわぬ……いえ、首輪以外は何も着けない姿になり、アスナと共に並んで土下座。雌の分際であることも忘れて思い上がっていた自分達がどれほど惨めで無様な存在であるかを大きな声で宣言し、そんな私達を手元に置いてくれたキリトへの感謝の言葉を述べながら、足の甲へ幾度もキスをします。

一般的に、女性捕虜の一日はそうして始まる事が多いものですから……私もアスナも訓練開始時には毎回同じ事をしています。

もちろんその場でキリトに使ってもらう事もありますが……最近は『お散歩』に出かける事の方が多いでしょうか。首輪に繋げた鎖をキリトに握ってもらい、裸のまま外を歩きます。もちろん、人間のような直立歩行ではなく、両手と両脚を使った四つん這いの姿勢です。

しかも、上半身は低めに、下半身は高くした姿勢で尻を突き出し、両脚を左右に開いた状態で歩くのです。秘所を……その、つまりは……お、おまんことケツ穴を……思い切り衆目に晒す体勢を維持したまま、辺りをぐるりと一周します。

キリトの陣地がどのような構造・配置になっているのかを確認する良い機会なのですが……どうしても途中でそのことを失念してしまうのです。

……その、あまりに愉しいもので。

ですから……理性無き獣のように引き回され、ぼたぼたと雌汁を垂れ流す哀れな姿を衆目に晒すような行為が……です……♥

も、もちろん、本当にキリト以外の殿方に肌を晒したいというわけではありませんよ!!　ですが、その……ここはそういう場所……でしょう？　よいではないですか……少しくらい、大胆になってしまっても。

お散歩の終着点は、その日によって変わります。最近は……畜舎である事が多いでしょうか。ええ、畜舎。騎士団で活用する動物を飼う為の建物です。

畜舎に到着すると、私もアスナも布の目隠しを巻かれて視界を塞がれ……そのまま畜舎の中へ無造作に放り込まれます。オスとメスと交尾の空気が充満した畜舎の中は、オス達の荒い鼻息の音と、メス達が上げるケダモノの如き喘ぎ声でいっぱいです。その淫らな音を耳に聞きながら、私達はちんぽの臭いだけを頼りにして、必死に『夫』――私達捕虜用の番いとして宛がわれた、雄々しく愛しい獣を探すのです。

私とアスナの夫は、馬。

畜舎にいる間は目隠しをしているため、どのような姿をしているのかは皆目見当も付かないのですが……聞いたところによると、なめらかな黒い毛並みをしているのだとか

そして、名前は『キリト』と言います。……素敵な名前でしょう？

夫の世話をするのも、私達捕虜の大事な務めなのです。

そんな私達の『夫』はとても意地が悪く、片方のメスと交尾している間は、もう一匹のメスには構ってもくれないのです。ですから、畜舎につくといつも競争になります。先にキリトの下に辿り着き、いち早くおちんぽにキスをした方が最初に交尾する権利を得る――そんな取り決めを作ったものですから。

必死に鼻を鳴らし、むせかえる性臭の中からキリトのちんぽの臭いだけを嗅ぎ分け、四つん這いのまま導かれるようにして進むのです。そんな私達の姿に、周囲から嘲笑を浴びせられることもありますが……夫と交わる快楽に比べたら、大したことではありません。

そうして、いち早くちんぽキスに成功した勝者へのご褒美は、夫の逞しい体に組み敷かれながらの種付け交尾……♥　視界を塞がれ、抵抗する術を奪われながら、馬並みちんぽにおまんこを征服してもらうのです……♥　普通の夫婦がする愛の営みのような優しさや労りなどどこにもない、捕虜とオス馬の一方的な交尾だというのに……どうしてああも気持ちよくなってしまうのでしょう……♥♥

競争に負けたメスが自らの指でおまんこを慰めている横で、夫の金玉にぎゅっと押し込められていた精液達を体の一番深いところで受け取る快感と言ったら……はぁっ……♥♥　いつものことながら、身悶えせずにはいられません……♥

畜舎での交尾が終わる頃には、私もアスナももうへとへとで……おまんこから精液を垂れ流したまま、ぐったりとして前後不覚に陥っていることもよくあります。いつのまにかキリトの天幕に運び込まれ、無意識のうちにキリトのちんぽをしゃぶっていることもしょっちゅうで……ふふ。

こんなザマでは、いつ脱出できるのかわかったものではありませんね。ちゃんと脱出できるまで、キリトには訓練につきあってもらわなくては。

――キリトに言いたいこと、でしたね。

正直な所、これといって特にはないのです……が、今さっき聞きたいことが一つできてしまいました。ええ、アスナと同じです。キリト、自分だけアバターを隠匿しているのは少々ズルいというものですよ？

……え？　隠匿しているのではなく、調整が間に合っていないだけ？　であれば、早く調整してくださいな。待っていますよ、キリト。

こんなところでしょうか。では、次の者を呼んで参ります。次は

……シノンですね。承知しました。

調査記録３
ユーザーＩＤ：Ｓ―００００５
ユーザーネーム：シノン
ログインアバター：《ＧＧＯ》仕様
ユーザー権限：通常権限

――あら、次は私なのね。
ねえ、ちなみにこれ……どういう順番で呼ばれてるの？　……ふぅん、秘密なんだ。ま、いいけど。
じゃあ、ちゃっちゃと始めちゃいましょ。ちゃんと裸になってきたし、文句ないでしょ？

――私がキリトと初めて出会ったのは……《ＧＧＯ》の中。ちょうど、第三回『ＢｏＢ』が開催される少し前のあたりよ。
私ね……最初はキリトのこと、私と同じ女性プレイヤーだと思ってたの。なんでって、それは……キリトのあのアバターを見て、女の子に見間違えない方が驚くわよ。……ううん、そっちじゃなくてもう一個の……そうそう、それ。髪が長くて、キリトが普段使わない方。
だから、『オフ会しませんか？』って誘われた時も……全然警戒しなかったのよね。
待ち合わせ場所に、バイクに跨がったリアルのあいつが現れた時……私、夢でも見てるのかと思ったわ。まさかキリトが男の人だなんて全然思ってなくて……本当、《ＧＧＯ》の中で、うっかりキリトと同じ部屋で着替えたりしなくてよかったわ。ね？　キリト？
まあ、会っちゃったものはしょうがないし……その日は普通にデートしたわよ。もちろん、キリトのおごりで。女の子のフリして人のこと騙してたバツにしては、安い物でしょ？　まあ、そんな感じでね。

その日は暗くなるまであいつのバイクの後ろに乗って、都内の色んな所を巡って……アパートの前まで送ってもらって、お別れ。

正直、無理矢理家に上がってくつもりなんじゃないかってちょっと警戒してたけど……可愛い彼女さんに躾けられてるおかげかしら。私がアパートの中に入るのを見届けたら、すんなり帰って行っちゃったわ。

最初のオフ会がきっかけで、リアルでもちょくちょく会うようになって……キリト経由で、友達も紹介してもらって……。あいつの周りに可愛い女の子がやたらといる事も知って。

それで……何回目かのデートのあと、いつもと同じようにキリトにアパートの前まで送ってもらったんだけど……うちに付く少し前で、急に雨が降り出してね。私もびしょ濡れになっちゃったんだけど……キリトのやつ、私をアパートに送り届けたら、そのまま大雨の中をバイクで帰ろうとしたの。さすがにそれは見てられないでしょ？

だからその……部屋に、上げたの。私を送ってきたせいで風邪引かれたら、後味悪いじゃない？　それだけ……それだけのつもりだったんだけど……ええ、気づいたら『早く体温めないと風邪引くわよ。ほら、仕方ないから一緒にお風呂入りましょ』って誘ってて。

……ええ。後はそのまま。なし崩し。

アスナは三日三晩、だっけ。じゃあ私は一週間ぶっ通し……は、さすがにリアリティに欠けるわね。じゃあ、一晩中ってことで。

ええ、一晩中。信じられる？　朝日が昇るまでず～～～っと、私のこと休ませてくれなかったのよ……この鬼畜は。シングルベッドの上に力尽くで押しつけられながら……本当、何回膣内（ナカ）に射精されたのか、わかったもんじゃないわ。

そりゃあ、誘った私も悪かったけど……でも、あんな可愛い顔の下に、あんな凶悪なモノをぶら下げてるなんて……そっちの方がよっぽど反則よ、反則。おまけに、意外と力も強くて……抵抗しようとしても押し返せなかったし。

まあ、その……ご近所さんに喘ぎ声が聞こえないように、ほとんどずっとキスしたままハメてくれたのは……気持ちよかったし、ちょっ

と嬉しかったけど。でも……まあ、普通にバレてるわよね。

キリトの……あんなにおっきいのが奥に突き刺さる度、私は堪えようがないくらい激しく鳴かされて……その声だって全部が全部抑えられたわけじゃないし。ベッドがぎしぎし言う音なんて、別の場所でヤッてる時以外はずっと鳴りっぱなしだったわけだし。

絶対気づかれたわよね。『あ、●●●号室のあの女の子。男連れ込んでセックスしてるんだ』って。誰かさんが、「キリトのおっきいちんぽでイキます」ってちゃんと宣言してからイクように調教してくれちゃったおかげで……確実に。

――ええ。最近の話よね。

最近は……そうね。アダムとイヴじゃないけど……無人島風に作られたリゾートエリアでエッチすることが多いかしら。ほら、ビーチエリアの沖合に島があるでしょ？　あそこでね。

海外のドキュメンタリーか何かで、男女二人が裸のまま無人島で生活するっていう番組があるじゃない？　ああいう感じ。木の枝と葉っぱで組んだ粗末な小屋の中で、動物みたいにひたすら求め合うのよ。

キリトと一緒に狩りにでかけて、その日の食料を手に入れて……泉で汚れた体を清めたら、小屋に戻ってひたすら肌を重ねる生活……♥

他に娯楽も何もない無人島だもの。本能の赴くままに激しくセックスして……食べ物とちんぽの事以外は何も考えない生活を送るの……♥　とっても下品で即物的だけど、これが結構楽しいのよね……。

アパートにいる時みたいに声を抑える必要もないから、本当、動物みたいに激しく喘いじゃって……♥　ええ、まさに交尾ね、あれは。

暗くなってきたら篝火を焚いて……打ち寄せる波の音に包まれたまま、夜空に瞬く星を眺めるの。ええ、もちろん腰から下で繋がったままね。昼間にしてた貪り合うような交尾じゃなくて……ぎゅっと抱き合ったまま、肌と肌を触れあわせるようなゆったりとしたセックス。

唇がふやけるくらい長くキスしながら、時々思い出したようにイッたり、イかされたり……そうして疲れて眠くなったら、繋がったまま眠るのよ。

最近は、新しい女の子が漂着してくることが増えてね。もうアダムとイヴというより、未開のジャングルの奥地に暮らすなんとか族って感じに近いかしら。

朝から晩まで誰かしらがキリトに犯されながら喘ぎ声を響かせてるし……ええ、もちろん私も。汗にまみれた体で、お尻を突き出しながらキリトを誘ってるわ。言葉にはしないけど……『早く私を孕ませて♥』って、視線と動きでおねだりしながらオスを誘うの。

そのうち、どこかから取材が来るんじゃ無いかしら。一夫多妻制・性交至上主義の原始部族の姿を追う、みたいなノリで。それはそれで面白そうだけど。

――キリトに言いたいこと？　ええ、もちろんあるわよ。

キリト、この間実装してくれたヘカートⅡなんだけど……なんというか、照準精度が《ＧＧＯ》にあるオリジナルと比べて違和感があるのよね。今度時間がある時でいいから、調整に付き合ってくれない？

システム的な事はあなたがいないとどうにもならないし。

よろしくね、キリト。

それじゃ、次の人に声をかけてくるわ。次は……リーファ？　ええ、了解よ。

調査記録４

ユーザーＩＤ：Ｓ―０００４

ユーザーネーム：リーファ

ログインアバター：《ＡＬＯ》仕様

ユーザー権限：通常権限

――お待たせしましたー。今日は聞き取り調査、よろしくお願いしまーす。

ところで、これってあたしが4番目……で合ってる？　ん、だよねだよね。どういう順で呼ばれてるんだろ……？　強い順……ならユウキさんがあたしより先だろうし、歳の順でも背の順でもなさそうだし……お兄ちゃんと出会った順ならあたしが一番になるはずだし……。

ねーねー、お兄ちゃーん！　そろそろ、答え教えてくれても良くなーい!?　……え、お兄ちゃんも知らされてないの!?　えー……そうなると本当におてあげかも……。

まっ、いいや。とりあえず始めよっか。

――あたしがキリトくん……つまりは、お兄ちゃんと出会ったのは……正直、ちゃんと覚えてないんですよね。物心ついた時にはお兄ちゃんはお兄ちゃんで、あたしはお兄ちゃんの妹。

そんな感じなので、他の皆さんみたいに面白エピソードを盛れな……お兄ちゃんとのドラマチックな出会いとかが無いのがちょっと残念なんですけど、まあ仕方ないですよね。兄妹なんですから。

ええ、あたしとお兄ちゃんは兄妹なんですから仕方ありませんよねー。ふふん。

それで……それから何年かあとの事だったなー。お兄ちゃんとあたしが実は血の繋がらない……わけではないけど、とにかくダイレクトな兄妹じゃないってことがわかったのは。

あたしは……あたしは、その時にはもうお兄ちゃんのことが大好きで……はい、兄としてではなく、男の人として。だから……その、ちょっとだけ嬉しかったんです。お付き合いしても問題の無い間柄だって分かったから。

でも、お兄ちゃんはやっぱりショックだったみたいで……一緒に続けてた剣道も、それをきっかけにして辞めてしまって。なんだかお兄ちゃんに置いていかれたみたいで、すごく寂しかったのを覚えています。

それからうまく関係を修復できないまま何年かが経って……お兄ちゃんが高校生になる少し前あたりだったかな。いきなり、『彼女ができたんだ』って言って、うちにすっごく綺麗な女の人を連れてきたんです。

はい。アスナさんっていいます。

そりゃもうショックでしたけど、それはそれとしてアスナさんは全身からいいとこのお嬢様オーラがあふれ出てるような美人さんで……どうやってお兄ちゃんと知り合って、彼女になったのかが全然想像できなくて。本当、お兄ちゃんに弱みでも握られてるんじゃないか、って勝手に心配したりもしました。

だって、あまりに釣り合いが取れてないんですもん。月とすっぽんというか、猫に小判というか……。

それで……お兄ちゃんとアスナさんのセックスを覗いちゃったのは、アスナさんが家に遊びにくるようになってから、ちょうど一週間後の事でした。

その日は部活がある予定だったんですけど、顧問の先生が体調を崩してしまったせいで切り上げになっちゃって。早めに家に帰ってきたら、二階から妙に……色っぽい声が聞こえてきて。階段を上がる時点で、なんとなく想像はしちゃってたんですけど……案の定というかなんというか、お兄ちゃんの部屋の扉、ちょっと開いてて。

本当はしちゃいけないことだとはわかってたんですけど、好奇心と……嫉妬心に負けて、扉の隙間から中を覗きました。

その時の光景は……今でも忘れられません。

お兄ちゃんのベッドの上で、お兄ちゃんの上に裸のまま跨がって、腰を振るアスナさんの姿は、すごく衝撃的で……それに、すっっごくえっちぃ感じでした。騎乗位……って言うんでしょうか。アスナさんが体を上下させる度に、髪の毛とおっぱいが揺れて……それに、二人の間で見え隠れするお兄ちゃんのおちんちんは、一緒にお風呂に入ってた頃に見たものとは全然違ってて……。お兄ちゃんが下から突き上げると、アスナさんの肌から汗が飛び散って……部屋の中の、男女の匂いが扉の方にも漂ってきて……。

結局、最後まで……お兄ちゃんがアスナさんの中に膣内射精（なかだし）して、アスナさんが痙攣しながらイクまで……目が離せませんでした。お兄ちゃん、アスナさんが絶対に逃げられないように腰をがっちり掴んだまま、びゅくっ、びゅく～って感じで激しく射精してて……♥　あれが大人のセックスなんだ……って、思ったら、ドキドキが止まらなかったです……♥

それで、お兄ちゃんはぐったりしたアスナさんを抱きかかえて、キスしながらベッドに押し倒して……そのまま、二回戦を始めちゃって……♥　はい、ずぼっ、ずぼっ、って音立てながら、じっくりとおちんぽを突き込んでました……♥　お兄ちゃんの形に拡げられたアスナさんのおまんこ、かき混ぜられて溢れる精液の塊が……扉の隙間から覗いてるあたしにも丸見えになってました♥

はい。アスナさんの顔は見えませんでしたけど、『お〝っ〟♥♥いひぃ〝っ♥』って感じで鳴いてる声ははっきりと聞こえてきて……ちんぽをぶち込まれる度に、お兄ちゃんのオンナにされちゃってるのがはっきりとわかりました。

あたしは二人にバレないように自分の部屋に戻って、その……オナニー、しました……♥　お兄ちゃんとアスナさんのセックスを、オカズにして……♥　壁一枚向こうでセックスしてる二人の姿を想像しながら自分のおまんこを弄ると、気持ちよすぎて、何回も何回もイッちゃったんです……♥

お兄ちゃんのぶっとくて立派なちんぽ……♥　あんなのでおまんこ抉られたら、どんなに気持ちいいんだろう……こんな指なんかとは比べ物にならないくらい、激しくイかされちゃうんだろうな……って想像しながら、ぐちゅぐちゅってオナっちゃいました……♥

それから……アスナさんが遊びに来る度、あたしは自分の部屋で寝たフリをして……二人のセックスが始まったら、そっとお兄ちゃんの部屋を覗くようになりました。二人ともセックス始めちゃうと周りが見えなくなっちゃうみたいで……そもそも扉がちゃんと閉まってなかったりしますし、あたしがこっそり開けても全然気づかなかったんですよ。

……そうだと、思ってたんですけど……。やっぱり、アスナさんの方が一枚上手でした。

アスナさんがうちに遊びに来るようになって……三ヶ月くらいした頃かな。「うちにお泊まりしに来ない？」って、アスナさんに誘われたんです、あたし。もちろん、すぐにオッケーしました。あ、当然お兄ちゃんは家でお留守番。

それで一緒にお風呂に入ってる時、アスナさんに背中から抱きしめられて……そして、言われたんです。『私とキリトくんのセックスを覗いてたことを大好きなお兄ちゃんにバラされるのと、私の奴隷（ペット）になるの……どっちがいい？』って。不思議ですよね……お湯に浸かってるのに、身体の奥の方がきゅって冷えました。

結局……あたしは、アスナさんの奴隷（ペット）になる方を選びました。お兄ちゃんとアスナさんがえっちしてる所を覗いてた、なんてお兄ちゃんにバレて嫌われるよりはいいかな……と思って。

はい、今も躾けていただいてます。お兄ちゃんは……たぶん気づいてないと思います。あたしがアスナさんに躾けていただいてるのも、二人のセックスを覗かせていただきながら、扉の向こうでおまんこ弄ってオナニーさせていただいているのにも。

――それで、最近になって知ったんですけど……アスナさん、あたし以外にも奴隷（ペット）を飼ってるんです。ユウキさん、シノンさん、シリカさんっていって……皆さん、可愛い方ばっかりなんです。

もちろん、この三匹はもう躾も人権放棄手続きも終わっていて、お兄ちゃんへ献上済だってアスナさんが言ってました。

ああ、はい。アスナさんが奴隷（ペット）を飼ってるのは、単に自分が愉しむためっていうのもありますけど……一番の目的は、お兄ちゃんにプレゼントするためなんだそうです。

……セックスフレンド？　いえいえ、そんな浅い関係じゃないですよ。あたしも他の皆さんも、そしてもちろんアスナさんも、お兄ちゃんのちんぽに奉仕する雌奴隷ですから。

あたしも他の皆さんに負けないように、しっかりアスナさんに躾け

てもらってます。言われたこともちゃんと守ってますよ？

たとえば……『自分の部屋にいるときは、なるべく裸でいること』とか。『一日最低三回はオナニーでイクこと』とか。なので、部屋に居る時は基本的に素っ裸になっておまんこいじりしてます。

もしお兄ちゃんに見られたら、自分が調教されてる事を告白して、今すぐお兄ちゃんの性奴隷として飼ってくださいっておねだりしていいって言われてるんですけど……お兄ちゃん、なかなかあたしの部屋に来てくれないんですよね。

あたしの躾も、もうすぐ終わるらしいので……そうしたら、お兄ちゃんのちんぽ奴隷としてデビューすることになります。一日でも早く、お兄ちゃん最寄りのザーメン吐き捨て穴になれるように、これからも頑張って調教されていきたいです！

――お兄ちゃんに言いたいこと……というか、謝らないといけないことがあるんだけど……。

あ、あのね、お兄ちゃん。可愛い妹の言うことだから……怒らないで聞いて欲しいんだけどね？

うちの冷蔵庫の二段目に、プリンが二つ入ってたじゃない？　あれ、たぶんお兄ちゃんが、あたし用と自分用に一個ずつ買ってきてくれたものだと思うんだけど……その、一個食べたら美味しすぎて……ごめんなさい！　我慢できずに、もう一個も食べちゃいました！

い、いやー、あのプリン、甘さとほろ苦さのバランスが絶妙で……本当、気づいたら手が勝手にもう一個の方に伸びてて……。ごめん、本っ当～にごめんね、お兄ちゃん。お詫びと、あと自分用に同じ物買ってくるから……あのプリン、どこで買ったのか教えてくれない？

……え？　売り物じゃ無い？

……手作り？　アスナさんの手作り!?

あ、あは……あははは……ごめんなさい。

いっ、いっけない！　あたし、最後の人を呼んでこなくちゃ！

フィリアさん、フィリアさーん!!

調査記録５
ユーザーＩＤ：Ｓ―０００００６
ユーザーネーム：フィリア
ログインアバター：《ＳＡ：Ｏ》仕様
ユーザー権限：通常権限

――あはは……あんまりリーファのこと怒らないであげてね、キリト……。悪気があったわけじゃないんだろうし……。

それじゃあ、気を取り直してっと。始めよっか、聞き取り調査。今日は私で終わりなんだっけ？　……うん、わかった。

それにしても、アスナ、アリス、シノン、リーファ、そして私……本当、どういう順番なんだろう。適当に決めたわけじゃ無いんだよね、ストレア？　……あ、やっぱり何かしらのルールはあるんだ。

気になるなあ……。

――私がキリトと初めて出会ったのは、《ＳＡＯ》の中。……うん、《ＧＧＯ》でキリトに拾われたアファシスっていうのも面白そうだったけど、やっぱりこっちにしちゃった。

それで……『ホロウ・エリア』っていう所に迷い込んできたキリトの事を、プレイヤーキラーだと思って攻撃しちゃったのが……ファーストコンタクト。あの時は本当にごめんね、キリト。

それで、キリトと一緒にホロウ・エリアを探索して……『管理区』っていう場所を見つけたの。あのときは嬉しかったなー……。

ホロウ・エリアには、いわゆる安全地帯がどこにもなかったから、いつも周囲を警戒しておく必要があって……気の休まる暇なんてどこにも無かったんだ。キリトが管理区を見つけてくれたおかげで、やっとまともに休める場所を見つけられたんだよ……。

それから色々な事があったけど、キリトやみんなの協力のおかげでどうにかホロウ・エリアを脱出することができて……本来の《ＳＡＯ》

に戻ってこれたの。
もちろん、デスゲームの中であることは変わらないんだけど……それでも、すごく嬉しかった。みんなとも気軽に会えるようになったし、ふかふかのベッドで眠れるようにもなったしね。
……うん。キリトとはじめてえっちしたのは……その少しあと。助けてくれたお礼……っていうわけじゃないけど、気持ちが抑えられなくて。シノンやリーファ……途中から《ＳＡＯ》にログインした二人と一緒に、キリトが泊まってた宿屋におしかけたんだ。
４Ｐ……ううん、途中からアスナとストレアも混ざったから、６Ｐかな。
皆でキリトに絡みつきながら、代わる代わる挿れてもらって……♥
アスナ以外は初めてだったから色々大変だったけど……最後にはみんな、キリトの精子を中にいっぱいもらって……身も心もとろとろになってたよ♥
身体の中も外も、ザーメンでべっとべとにされて……部屋の中には、セックスのあとの匂いが充満してて……♥　ふふっ。
それから《ＳＡＯ》がクリアされるまでは、なんだかんだ理由をつけてヤりまくってた。
リズとシリカもあとから加わって……フロアボスを倒す度に、女の子みんなで、宿屋にあるキリトの部屋に押しかけて朝まで乱交パーティしたり、フィールドで温泉を見つけたら混浴しにいったり。大人のおもちゃみたいなアイテムの使い心地を試してみたり。
そうそう、迷宮区を探索してたら『部屋の内装を一時的に変更できるアイテム』が手に入ったこともあったっけ。そのアイテムで、キリトの部屋を『管理区』みたいにしてえっちしたんだー。
皆が見てる前で、キリトにぎゅーって抱きしめてもらいながら一つに繋がって……♥　キリトのおっきいので貫かれて、イク、イクぅって喘いでるところを間近で見られるのはすっごく恥ずかしかったけど……人の温もりっていうのかな、そういうのをいっぱい感じちゃった……♥
もちろん、《ＳＡＯ》がクリアされてからもみんなとえっちしてる

よ。ほら、私って一人暮らしじゃない？　放課後、みんなで集まって、ラブホ代わりに使って乱パするにはちょうどいいんだよね。

まあ、さすがに《ＳＡＯ》の宿屋ほど広くはないから、女の子がみんな裸になって整列して、床に三つ指ついてキリトをお出迎えとかはできないけど……。そういうのはこっちでできるもんね。

うん。休みの日は朝一で集合して、まずはリアルの私の部屋で普通にえっちするでしょ。そうして体が疲れてきたら、休憩代わりにこっちにログインして……リアルじゃできないような変態えっち♥　帰還者学校の制服着たまま、おしっこお漏らししたり……みんなで精液風呂に入ってあらいっこしたり……♥

リーファと一緒にお尻を並べて、女王様モードのアスナにムチや蝋燭でイジメてもらったりとかするのも楽しいんだよね♥　アスナ、調教されるのも上手なんだけど、調教するのも上手だし。ほんと、尊敬しちゃうなあ。

――最近、最近かぁ……。

そうだなあ。最近は、神社で遊ぶことが多いかも。ほら、前に皆で神田明神のお祭りに行ったじゃない？　あの時に着せてもらった巫女さんの衣装……白衣（しろぎぬ）に緋袴（ひばかま）、だっけ。あれ、こっちでも着られたらいいな～って思って色々調べてたら、ユウキが前にプレイしてたＶＲＭＭＯにあるってわかってね。ちょっとだけアカウントコンバートして、ゲットしてきちゃった！

たまたま、私が狙ってる服を装備してた巫女さんと知り合って……え、その人から剥いだ？　ちーがーうーよー！

その巫女さん、すっごくいい人で、私が巫女服一式を手に入れる手伝いをしてくれたの！　うん、ユウキみたいな長くて黒い髪が綺麗で……私もちょっと髪伸ばそうかなって思っちゃったくらい。

そうやって手に入れた巫女服を、こっちで使えるようにキリトに調整してもらったのを着ながら……えっちするのに、最近ハマってます……♥

シチュエーションは……無理矢理系が多いかな。『先祖代々受け継

いできた神社を守るため、悪徳地主キリトに身体を捧げる巫女』って感じで。もちろん『おめでたい子作り神事で肌を重ねる巫女とキリト』っていう風にイチャイチャするのも好きだけど……優しいキリトに、力尽くで犯されるのも楽しくて……♥

板張りの本堂の真ん中にお布団を敷いて……燭台の灯りに照らされながら、いっぱい抱いてもらうの。

うん。私が絶対に逃げられないように、上から身体を抑えつけるような体位で……神様に捧げるための清い身体を、キリトのちんぽケースに変えてもらうの♥

耳元で『たすけて、助けてキリトぉ♥』、『私のおまんこ、キリトの精子たくさん欲しがっちゃってる♥』、『神様に捧げる綺麗な体だったはずなのに♥　キリトのちんぽがつよすぎて、巫女さんなのにキリトの赤ちゃん受精させられちゃうよぉ♥』って囁いてあげるとね……♥

キリト、お腹の中がどろ～っと重たくなっちゃうくらい……い～～っぱい射精してくれるんだよ……♥

ふふっ。それで、淫乱巫女さんへの種付けが完了するとね。キリト、神社の裏手にある温泉に私を運んでくれるんだ。意外と優しいでしょ？

もちろん、大事な精液をお漏らししないようにおちんぽは挿れたまま。駅弁……っていうんだっけ？　抱っこしてもらうみたいな体位で、温泉まで連れてってもらうの♥

ぬるめのお湯に浸かりながら身体を休めるはずが……気分が盛り上がっちゃって、その場で続きを始めちゃうことも結構あるよ。しょうがないよね、だってキリトだもん。

――キリトに言いたいこと……あ、ちょうどいい機会だし、お願いしたいことがあるんだよね。

キリト。この間、私のプライベートルームの一つをちょっと改造してみたんだけど……設定が悪かったのかな、なんか部屋の中に入れなくなっちゃったんだよね。暇な時でいいから、ちょっと調べてみてくれない？

……え、ど、どんな部屋って言われても……ふつーの部屋だよ。普通の。

ただ、ちょっと……その、え……えっちなことしないと出られない部屋にしようとしただけで……。あはは……あはははは……。まあ、動作テストする時は責任をもって手伝うから、いつでも声かけてね。キリト。

じゃあ、これでおしまいかな。……うん、オッケー。

それじゃあ最後は……ストレアの番かな？　……あ、それはまた今度なんだ。オッケー。インタビュアーのお仕事お疲れ様、ストレア。じゃあ、一緒にキリトのところ行こっか。

「――こういうのって普通、俺がいない所でやるものなんじゃないか……？」

「えー？　それだと、キリトの反応を観察できなくてつまんないもん。みんなもそう思うよね？」

聴取記録が行われていた場所から徒歩で十秒もかからない場所。記録用カメラのちょうど真後ろにあたる位置に置かれた大型ベッドの上に陣取った5名の女性達が、一斉に首を縦に振る。

その様子を超至近距離で眺めながら、唯一の男性――キリトは、引き攣った笑みを浮かべずにはいられなかった。

「それにね、キリト。キリトが居てくれた方が、みんなのストレスケアには効果的なんだよ」

「……目の前でエピソードを捏造されまくる俺の反応が面白いから、か？」

「うん、大正解！」

こくこくと頷きながら、ストレアはベッドの縁にちょこんと腰掛け、身につけていた衣服類を全てストレージに格納した。生まれたままの姿になったことで晒される、雪のように白い肌とグラマラスな肢体。普段は咎められるストレアの脱衣癖だが、誰も彼もが裸であるこ

の場においてはむしろ自然な所作と言えた。
なんともいえない顔で溜息をつくキリトの頭を、ストレアとアスナの手が優しく撫でて慰める。
「まあ、これで皆のストレスが減るなら協力するのも吝かじゃないけどさ……頼むから、本当のカウンセリングの時に口を滑らせないでくれよ」
心配するキリトの言葉に微笑を浮かべたまま、アスナ、そしてフィリアが頷く。
この聞き取り調査――という名の、『あることないこと好きなように喋りまくってストレス解消プログラム』の発案者は、誰あろうストレアだった。
もともとこのプログラムは、帰還者学校に通う《ＳＡＯ》サバイバーに発生するストレス――定期的に行われるカウンセリングの際、仕方のないことだとはいえよく知らないカウンセラーに《ＳＡＯ》時代の経験を根掘り葉掘り聞かれること――を緩和するために計画されたものだった。
それを《ＳＷＯＲＤ協定》参加女子達に持ちかけてみたところ、全員が全員「面白そうだから自分もやってみたい」とノリの良さを見せ――結局、全員に実施する流れとなった。流石に人数が多いため、何回かにわけることになったが。
「みなさん、意外とノリノリでしたね……シノンさんとか、さくっと終わらせちゃうものだと思ってました」
「そりゃあ……トップバッターにあそこまで濃いのぶつけられちゃったらね……。
まあ、『キリトとはまだ関係を持ってないけどアスナには調教されてる』なんて変化球を投げ込んでくるリーファには負けるけど」
揶揄しあうシノンとリーファが跨がって占拠しているのは、ベッドの上に寝っ転がったキリトの右脚と左脚。ついでにいえば、キリトの右腕にはアリスが、左腕にはフィリアが腕と身体を絡めるようにして抱きついており、更に頭はアスナの柔らかな太股を枕にしている状態だった。

これ以上ないほどの天国であることは疑いようはないが、どこにも逃げ場が無いという意味では一種の地獄だった。
「フィリア。よければ今度、私にも巫女の衣服を貸してもらえないでしょうか」
「もちろんいいよ！　あっ、そうだ。せっかくだし、私も捕虜訓練に混ぜてくれない？」
「ええ、構いませんよ。私やアスナと同じように捕虜になりますか？　もしくは……キリトの腹心として、私達を調教してみるというのはいかがでしょう？」
「そういうのもアリ!?　うーん……どっちも捨てがたいなあ……」
思い悩むフィリアの顔を見ながら、アリスが頬を緩ませる。
聞き取り調査の中で語られるキリト関連のエピソードは、その大半がウソやでたらめで構成されている。出会った初日にアスナをラブホに連れ込んだ事も無いし、シノンの部屋に上がって送り狼のような事をした覚えもない。
とはいえ巫女服を纏ったフィリアを散々犯したのも事実だし、アリス達と捕虜訓練を続けているのも事実なのだからどうしようもない。楽しみに取っておいたアスナお手製プリンを知らぬ間に食べ尽くされたのも恐らく事実だろう。
虚実入り交じるからかいを通して彼女らの精神バランスを保つ事が目的の聞き取り調査とは言え、己の悪行三昧を暴露されている事にはむずがゆさを覚えずにはいられない。プリンの件にはどうにか目を瞑るとして、そんなことを考えながらキリトが視線を上げれば、見下ろす榛色の瞳と目があう。実に豊かな肌色の南半球越しに。
「ねえ、キリトくん。私ね、さっきからずーっと気になってることがあるんだけど……」
「もしかして、インタビューの順番の件か？」
「うん、そう。ストレアが言うには、キリトくんならわかるらしいんだけど……どう？　わかった？」
「……実を言うと、なんとなく予想はついてるんだ」
「ほんと!?」

瞳を輝かせるアスナに曖昧な頷きを返しつつ、キリトは視線をストレアの方に向けた。
「なあ、ストレア……何個か確認させてもらっていいか」
「もっちろん、いいよ！」
「この順番って……もしかしてアスナがぶっちぎりの一番だったりするか？　だいたい一年ちょっとくらいのリードをつけて」
「うん！　うんうん！」
頷くストレアの様子に、キリトは己の予想が当たりつつあることを理解する。あまり自慢できた話ではないのだが。
「ってことは……もしかしてだけど。フィリアの次はシリカで、その次はリズ……それで、セブンとレインは同時か？」
「シリカとリズは正解！　セブンとレインは同時でもよかったけど……そこは、お姉ちゃんの方を先にするべきかなーって思って、レインを先にしてるよ。
じゃあじゃあ、ユウキとあたし、どっちが最後かは分かる？」
「最後は……ストレアだろ。その一個前がユウキ」
「大正解、大正解！　すっごい、キリト!!　なんでわかったの!?」
ぱちぱちと両手を叩いて興奮するストレアに見下ろされながら、キリトは深々と溜息をつく。確かにこれは当事者であるキリトにしか分からない。アスナですらわからないはずだ。逆に言うと、なぜストレアが把握しているのかが全く以て分からない。
「それは俺の台詞だよ、ストレア……。
お前、なんでこの順番が分かるんだよ……さすがに、これに関しては、俺は誰にも言ってないはずだぞ……」
「うん。キリトに聞いたわけじゃないよ。でも、ここに残ってるログと動画ファイルのデータ、あとはみんなの普段の発言を組み合わせれば……そこから簡単な推論モデルを構築して対応できちゃった♪」
「ははは……なんというかすごいな、ストレアは……。俺の予想以上だよ、本当に……」
「ふふんっ♪　でしょでしょー！　もっと褒めていいよ、キリト」
乾いた笑いを漏らすキリトの側で、ストレアが堂々と胸を張る。た

ゆん、と豊かに揺れる白い丘の映像が網膜に焼き付く中、周囲の女性陣から注がれる好奇の視線に耐えかねて、キリトは両の瞼を閉じて黙秘を貫く事を決めた。

まあ、言えるわけがないし、（超高度な演算能力をＭＨＣＰを除けば）キリト以外にわかるはずもないだろう。

まさかこの聞き取り調査の順が――『キリトと肉体関係を結ぶのが早かった順』になっているということなど。

なお、これより約３００秒後。

リーファとシノンによる射精寸止めパイズリダブルフェラ責めと、アリスとフィリアによるディープキス＆ぐちょぐちょ耳舐めによって忍耐力が大きく揺らいだところに、アスナの『夫婦の間で隠し事はしてほしくない、な……』というあまりにもわかりやすい泣き落としと手作りプリンのお代わりに加えて新作の抹茶ティラミスを付けるという多重攻撃を喰らって完全陥落したキリトは、全てをあらいざらい告白する事になるのだが――それはまた、別のお話。

12. ターンKターン（セブン・レイン）

その日。

ごく平凡な一日の幕開けと共にキリトの下へやってきたのは、非凡な美少女天才研究者だった。

「ねえ、キリトくん。いいニュースと微妙なニュースがあるんだけど……どっちから聞きたい？」

いつものように自前のＶＲ空間にログインし、作業部屋の一つとしている書斎へ。マホガニー製の書斎机の前に座り、これまたいつものようにＶＲＭＭＯや仮想世界関連技術に関するニュースを眺めていた矢先のことだ。

つい先日実装された位置情報マーカーシステムを頼りに、とことことやってきた小柄な副権限管理者――セブンが、唐突にそんな事を述べたのは。

「いいニュースと……微妙なニュース？　悪いニュースじゃ無いのはありがたいけど……なんだか違和感がすごいな」

「しょうがないじゃない。実際、悪いニュースっていうわけじゃないんだもの。それで、どっちから聞く？」

「そうだな……」

セブンへの答えを考えつつ、キリトは徐に椅子から立ち上がるとそのまま書斎中央にあるソファへと移動する。大きな書斎机の上に顔を出すべく必死に爪先を伸ばして背伸びをするセブンの大変さを慮ってのことだったが、口にするとそれはそれで拗ねられそうなため、キリトはそっと胸中に押し止める。

ガラステーブルを中央に挟む形でセットになった二脚のソファ。その一つにキリトが腰を下ろすと、セブンは反対側――ではなく、キリトの隣へと腰を下ろした。

「じゃあ、いいニュースから聞かせてくれよ。セブン」

「ふふん。いいニュースっていうのはね……サチさんのプレイヤーデータをライトキューブへ移植する計画、ようやく実現の目途が立ったの！」

「本当か!?」

「ええ、本当よ」

思わず声のボリュームが大きくなるキリトに、セブンは満面の笑みで頷く。

サチ。

かつて《ＳＡＯ》内に存在した小規模ギルド『月夜の黒猫団』に所属していた少女。一時期、キリトと寝食を共にし――そして、キリトが目の前で見殺しにした少女。

トラップに引っ掛かり、大量のＭｏｂエネミーに囲まれた『月夜の黒猫団』が――サチが、ＨＰを全損し死亡する様を、キリトは目の前ではっきりと見た。彼女らが命を散らすまさにその場に居合わせながら、キリトはどうすることもできなかった。己の怠慢と甘えが招いた死は、消えることのない傷となってキリトの一番深いところに刻まれている。

後に、解放された《ＳＡＯ》７５層以上の領域に存在した『ホロウ・エリア』にて、彼女の虚像（ホロウ）と出会ったキリトは、彼女と共に過去の痛みに立ち向かった。

デスゲームから抜け出した後、平和な《ＡＬＯ》内にてアスナを悩ませる『離脱現象』を解決する方法を探す中で、遺された彼女の想いを知った。

そして、《ＧＧＯ》に新たに導入された雪原フィールドと新クエストの攻略を進める中で――サチ自身と、再会した。

今、サチの全て――記憶と意識の集合体は、《ＧＧＯ》内のメインサーバ内にプレイヤーデータとして保管されている。

そしてキリトとセブンは、このプレイヤーデータを《ＧＧＯ》のメインサーバからもっと安定した環境――即ち、ライトキューブ・パッケージ内に移植するという計画を進めていた。

その理由は、主にリスク管理である。

現在サチがいる《ＧＧＯ》は、あくまで営利企業の下で運営されているＶＲＭＭＯ。今日明日の話ではないとはいえ、仮にサービスが終了する日が訪れればサチは行く宛を失ってしまう。また、チートで不正作成されたアイテムを知らずに使用してしまうなど、何かの巻き添えでプレイヤーアカウントがＢＡＮされてしまえば目も当てられない。

そしてこれはあくまで仮定の話だが、《ザ・シード》内のまだ解明されていない領域に同規格全てに影響するような重大なバグや何らかの隠し機能――たとえばあらゆる《ザ・シード》規格ＶＲＭＭＯが一つに融合してしまうとか――が仕込まれていた場合、ユイやストレア、プレミア達のように外部に退避領域（セーフゾーン）を持たないサチが無事に済むとは考えにくい。

《ザ・シード》規格が持つプレイヤーアカウントコンバート機能。それを利用し、独立性の高い規格であるライトキューブ・パッケージへサチの記憶と意識を移植するというこの計画は、そういった各種リスクへの対応を見越してのものだった。

「菊岡さんに用意してもらったパッケージがあるでしょ？　それを調べさせてもらった結果、移植は概ね問題なく実現できそうなの。

パッケージがもともと、人間のフラクトライトをコピーして格納できる規格になっていたのと……重村教授が残してくれた研究データのおかげでね」

「教授の……そうか……」

セブンの言葉に、キリトは静かに頷く。

かつて《オーディナル・スケール》の裏で陰謀を画策していた重村教授が、その後ラースに招かれ、様々な研究に携わっていたとキリトが知ったのはごく最近のことだ。サチの意識データをライトキューブ・パッケージに移植する今回の計画も、彼が《オーディナル・スケール》の開発過程とラース滞在中に残した、人間の意識と記憶の構成や相互作用に関する膨大な研究データが存在しなければ成り立たなかっただろう。

「もちろん、多少の調整は必要だけれど……今のところ大きな問題は

見つかってないわ。この調子なら大丈夫そうよ」
「そうか……よかった、本当によかった……。セブン、俺に手伝えることがあったら、遠慮無く言ってくれよ」
「ええ。もちろんそのつもりよ。
　今まで通り、技術的な事で都度都度手伝ってもらうだろうし、あたしの代理としてラースに行ってもらうこともあると思うけど……一番お願いしたいのは、やっぱりサチさんのメンタルケアかしら」
「……メンタルケアか……なんだか難しそうだな。ユイに頭を下げて教えてもらった方がいいかな……」
　八割ほど本気で考え込み始めたキリトの横顔がよほど面白かったのか、セブンはくすくすと笑う。
「大丈夫よ。別に、ユイちゃんやストレアちゃんみたいな事をしてって言ってるわけじゃないから。
　いつものキリトくんみたいに、サチさんの話をちゃんと聞いて、言葉をかけてあげる……。そうやって、サチさんがリラックスできるようにしてあげて欲しいの」
「いつも通りか……。まあ、それでサチのためになるなら……やってみるよ。セブン」
「よろしくね。こればっかりは、さすがのあたしでもどうにもならないもの」
　セブンの真剣な眼差しに見つめられながら、キリトはしっかりと頷きを返す。
　移植計画の初期段階からサチには話を通して了承を得ている。リスクの無い手段を徹底しているとはいえ、それで彼女の不安が全て払拭されるわけではないだろう。かつて《ＳＡＯ》で共に眠ったあの時のように、己の存在がサチの精神的安定に繋がるのであれば、キリトは手間を惜しむつもりはなかった。
「それでね、キリトくん。もう一つの……微妙なニュースの方なんだけど」
「微妙……あ、それもあったな……。完全に忘れてた」
「やっぱり。絶対忘れてると思ったわ」

サチの件ですっかり頭から吹っ飛んでいた、もう一つのニュース。その存在をようやく思い出したキリトの横に座ったまま、セブンは空中にコンソールウィンドウを呼び出した。
「ちょっと、これを見て欲しいんだけど……」
「これって……俺がアンダーワールドに初めてログインした時のアバター、だよな？」
「そうそう」
ウィンドウの中に映し出される、シンプルなシャツとズボンをまとった少年の姿。３Ｄモデルのデフォルトポーズ――両腕が地面と水平になるように伸ばした姿勢を取ったまま、駒のようにくるくると回るそのアバターは、かつてキリトが使用した少年型のアバターだった。
年の頃は１０歳より少し幼いという所だろうか。キリトが己の出生の秘密を知った時期に近い――というとなんだか不穏な気配が漂うが、ともかくそれくらいの時分より更に前の己ならば、概ねこんな姿をしているのだろう。
「これがどうかしたのか？　セブン」
「それがね……。この子……というか、このアバター。あたしがキリトくんから預かってたじゃない？
調整ついでに、ニーモニック・ビジュアライザー対応のデータを弄らせてもらう目的で」
「そうだった。悪いな、これくらいしかなくて……」
「いいのよ。色々と興味深いデータだったし。でも……次はぜひ実地で体験させてもらいたいわね」
かつて神代博士から譲り受けたアンダーワールドがらみのデータ。最新技術によって構成される仮想空間に対応したそのデータがセブンの興味を惹かないわけもない。
是非サンプルをとねだられたキリトは、悩んだ末に自分の幼い頃の姿を模したアバターとその関連データをセブンに預けていた。セブンの腕を信用していないわけではないが、万が一アバターデータが全損するような事が起きたとしても、それが自分のアバターならそこま

で大きな問題にはならないからだ。
「それでね、キリトくん。実は……このアバター、ちょっと問題があって……」
「問題？」
「ええ。大方の調整は終わって、こっちでも普通に使えるようにはなったんだけど……一カ所だけ、なんだか妙な事になってるの。いえ、もしかしたらあたしの認識が間違っていて、本当はこれが正常なデータという可能性もあるんだけど……」
「……？？？」
セブンが言わんとすることが今ひとつ理解できず、キリトは怪訝な表情を浮かべる。若干特異な出自を持つアバターとはいえ、あの天才研究者・セブンを悩ませるような要素などどこかにあっただろうか。
「まあ、実際に見てもらった方が早いわよね」
ウィンドウを操作したセブンは、少年型アバターの回転を止めて正面を向かせると、徐に少年型アバターの衣服を装備解除した。
「その、これ……なんだけど……」
「!?」
そこに映し出された物を――というかモノを理解した瞬間、キリトの口から溢れたのは言葉にならぬ驚愕の声だった。
生まれたままの姿になった、かつての自分。今の己と比較するとだいぶ低くなった身長と頭身は、アバターが模した年齢を考えればごく一般的な部類に入るだろう。
しかし、ただ一つ、ただ一カ所だけ。明らかに『普通』とか『正常』の範疇を逸脱している箇所が――アバターの中心より少し下に、堂々と存在していた。
だらりと垂れ下がったそれは、さながら象の鼻のように太く、長く。軸の部分を薄肌色の皮に包まれながら、大きく張り出した先端部分のみが露出したそれは、時に男性自身の象徴とも、分身とも、あるいは本体ともされる部位。
即ち――男性器（ペニス）だった。
「――なっ……なんじゃこりゃあ……!!」

思わずうめき声を上げるキリトだが、無論、その存在そのものが問題というわけではない。それはキリトが生まれた時から股の間に生えているものであるし、着脱が自在にできるようなものでもない。むしろ無い方が緊急事態だ。

問題は、そのサイズである。

１０歳未満の小学生男子という言葉から導かれる想定サイズを遙かに上回るのはもちろんのこと、その大きさは既に成人男性のそれに匹敵――いや、それすらも余裕で上回る。

とどのつまりは、今現在のキリトのそれと全く同じサイズのモノが、幼い頃のキリトに準拠したと思われる少年型アバターに生えているのだ。

「えっとね……キリトくん……。あたしの方でも、エラーや設定ミスが無いかパラメータとかを色々確認してみたんだけど……これがデフォルトというか、正常なデータみたいで……。

もしかしてなんだけど……。キリトくんって、その……小さい頃から、これくらい大きかったの？」

「いやいやいやいや」

赤らんだ頬と共にもじもじとしながら問うセブンに、キリトは首をぶんぶんと勢いよく横に振って返答する。

男性なら生涯の内に一度はするという、自分の分身に定規やらなんやらを当ててサイズを測るという行為。《ＳＡＯ》に囚われるだいぶ前、そんな愚かな行為に奔った際の記憶と照らし合わせても、これはいくらなんでも大きすぎる。

少なくとも、今と同じサイズではなかったことだけは確かだ。

「そ、そうよね……ということは、やっぱり何かの不具合なのかしら……」

「十中八九そうだと思うぞ。考えられるとしたら……データコンバート時の変換ミスとかじゃないか？」

「うーん……でも、そんな単純な不具合には思えないのよね……。

……待って、もしかして心意システムがアバターに直接影響したの……？　でも、記憶を封じられた状態でログインした際にも作用する

ものなのかしら……？」

よほど真剣に考え込んでいるのだろう。無意識のうちにキリトの体に寄りかかりながら、セブンは己の考えを口に出しつつ思考に耽る。その軽い体重を預かりながら、アバターの構造やパラメータをチェックすべくキリトもコンソールウィンドウを立ち上げる。

すると、それとほとんど同じタイミングでメッセージシステムのアイコンに光が灯り、メッセージの到着を告げた。受信フォルダを開いてみれば、差出人名の欄にはセブンの姉・レインの名前が記載されていた。

おそらくキリトとセブンの位置情報ビーコンがほとんど同じ場所にあることで、何らかの技術的な話をしていると推察したのだろう。『遊びに行っていい？　もちろん、邪魔じゃなかったらでいいからね！』という文面からは、遠慮しがちな彼女の性格が伝わってくる。

「――だ、そうだけど。いいよな、セブン」

「もちろん！　……あっ、そうだ！　お姉ちゃんが来てくれるなら……」

きょとんとするキリトを置いてけぼりにしたまま、セブンはキーボードを表示すると何かを高速でタイプし始める。

「これでよし……っと。それじゃ行きましょ、キリトくん」

「へ？　行くって、どこへ……」

「せっかく新しいアバターができたんだもの。動作テストしてみたいじゃない？　ここよりもっと相応しい場所があるから、そこまで行きましょう。

大丈夫、お姉ちゃんにはもう連絡してあるから！」

「お、おう……」

すっくと立ち上がったセブンの勢いにわずかに圧されたのをきっかけに、気づけばキリトは場の主導権を失っていた。

今のキリトにできることと言えば、無邪気な笑みを浮かべたセブンにぐいぐいと腕を引かれるまま、彼女の望む場所へとついて行くことだけだった。

「――なるほどね。事情はよーくわかったわ、セブン」
「あー、お姉ちゃん！　あたしのいうこと、信じてないでしょ！」
「まさか。可愛い妹の言うことだもん、ちゃんと信じてるよ」
どこの小学校にも存在する、ごくありふれた保健室。普段は体調不良者を寝かせるために使われるベッドの端に仲良く並んで腰掛けるのは、幼い姿の少年と実の妹。
保健室の主たる紅の髪の保険医――レインは、わくわくを隠しきれない妹の隣でどこか戸惑いを隠しきれない表情を浮かべる少年に優しく微笑みかけた。
「心配しなくていいからね、キリトくん。
急に体がちっちゃくなった上に、みんなに関する記憶は残ってるけどそれ以外の記憶は無いし性格は子供の頃に戻っちゃったっていう不思議な状態になってても……キリトくんが元に戻るまでは、わたしとセブンできっちり面倒見てあげるから」
「いや、あのなレイン。確かにアバターは小さくなったけど、記憶とかはいつもどお――へぶっ！」
声がわりを迎える前の少年の喉から発せられようとした事情説明は、レインが少年を――つまりはキリトを思い切り抱きしめたことで封じられ、彼女の胸の谷間に消えていく。
白衣に袖を通し、黒いタイトスカートをはいたレインの姿は、女教師と保険医をちょうどミックスしたような印象を与える。このまま教壇に立っていてもおかしくないだろう――肌色をした胸の谷間を大胆に晒すトップスさえ着ていなければ。胸元にかき抱いたキリトの顔を、その意外と着痩せするバストの合間にぎゅっと押し当てていなければ。
視覚、嗅覚、触覚。キリトの五感の内、三つまでをバストによって支配したまま、レインは幼い少年の頭を優しく撫でる。
「無理して大人ぶらなくても大丈夫だよ、キリトくん。今のキリトくんはわたしやセブンより年下の、小さくて可愛い男の子なんだから

……もっと素直に甘えていいんだよ。
　ね、セブン？」
「そうそう。お姉ちゃんの言う通り。こんな時なんだもの。もっと肩の力を抜いてリラックスすべきよ、キリトくんは」
「というわけで……まずは、わたしのことを『レインおねえちゃん』って呼ぶ所から始めてみよっか」
「あっ、それナイスアイデア！　じゃあ、あたしの事は……普段は呼び捨てだし、『セブンちゃん』って呼んでみて？」
　この姉妹、明らかにわかってやっている。
　ふわふわと柔らかな感触と、前と隣から振り来る甘やかな声音がキリトから抵抗の意思を奪う。まあ、もとより抵抗するつもりはさほど無かったから全く問題はない。
　レインの胸元に埋まったまま顔だけをどうにか上へと向ければ、期待に満ちた姉妹の視線が降り注ぐ。普段はメイドだのアイドルだの魔法少女だの性奴隷だのと、様々なシチュエーションでもてなしてもらっている立場である。若干の気恥ずかしさはあるとはいえ、彼女らが望む事であれば応えてやるのが男の義務だろう。
「じゃ、じゃあ……レイン、おねえちゃん」
「……ッ!!　はっ、はーいっ♥　レインおねえちゃんですよー♥」
「セブン、ちゃん……」
「!!　ふふふっ、よろしくね。キリトくん♥」
　体が小さくなったせいで普段より声がハイトーンになったキリトに、普段とは違う呼ばれ方をしただけで、セブンとレインは揃って目を輝かせる。
「ど、どうしよセブン。これヤバいよ。わたし、なんだか変な方向に目覚めちゃうかも……」
「あたしも……。これ、クセになっちゃう気がする……」
「レインおねえちゃん、どうかしたの？」
「どっ、どうもしてないよ！　大丈夫、大丈夫だから安心してね、キリトくん！」
　表情を綻ばさずにはいられないといった様子で、姉妹はにやにやと

笑う。そうして暫しの間、キリトの体の感触を堪能していたレインは、若干の名残惜しさを窺わせながら抱擁を解くと、そのまますっと立ち上がった。
「さーって、と。せっかく保健室にいるんだし……ちっちゃくなっちゃったキリトくんには、男の子の体について色々勉強してもらわないとね。
セブン、手伝ってくれる？」
「もっちろん！　あたしはなにをすればいいの？　お姉ちゃん」
「そうだね……。男の子の体と女の子の体の違いについて勉強しやすいように、まずはお洋服を脱いで、すっぽんぽんになっちゃおっか」
「はーいっ！」
元気よく返事をしたセブンは、ベッドの上へ上がると同時に装備全解除ボタンを押し、一瞬で生まれたままの姿に変わる。隠す物を失った、年相応に小柄な体。肉付きの薄い胸もさることながら、より目を惹くのは毛の一本すら生えていない無防備な恥丘。陰毛が無いのはＶＲアバターの通常仕様とは言え、セブンの実年齢と体型、そしてぴったりと閉じた割れ目が合わさると一気に危険な香りが増してくる。
姉の言うとおり裸になったセブンは、ベッドの上にぺたりと腰を下ろした。
「よくできました、セブン」
「お姉ちゃん、お姉ちゃん。あたしだけ裸なんて、なんだか恥ずかしいわ……」
「ふふ、大丈夫。すぐにお姉ちゃん達もおんなじ格好になるから、ちょっとだけ待っててね。
それじゃ、キリトくん。キリトくんは一人でお洋服ぬぎぬぎできる？」
キリトがこくりと頷くと、レインは満面の笑みと共にキリトの頭を撫でる。その仕草は完全に年下の子供を甘やかす姉か、もしくは母親のそれだった。
「キリトくん、えらーい！　もう一人でお着替えできるなんて、お姉

ちゃん驚いちゃった。
　じゃあ、わたしもお洋服脱いじゃうね」
　そう言って、レインもまた装備全解除ボタンを押す。妹に負けず劣らずの堂々たる脱ぎっぷりによって露わになるレインの裸。アピールするようにその場でくるりと回ってみせれば、普段はあまり意識されにくいがかなりボリューム感のあるバストと、形良く膨らんだヒップラインの様子がよくわかる。セブンの裸体とは違った意味で、男の肉欲を容赦なく刺激する危険な肢体がそこにあった。
　思わず視線を釘付けにされてしまったキリトに微笑みながら、レインはベッドの上へと上がると、キリトの背後へと腰掛ける。
「はーい、キリトくんつかまえちゃいましたー♥」
　ベッドの上に座り直させたキリトの体を背後から抱きしめながら、レインは耳元に甘く。少し前までキリトの顔面を覆っていた柔らかなバストの感触は、今はキリトの後頭部へ。両脚は胡座をかくような状態にし、キリトの下半身をそっと包み込む。
　緩く拘束したキリトを挟み、裸身を晒す妹と向かい合う体勢になったレインは、白魚のように細く美しい指先でキリトの股間部をそっと撫でた。
「……あっ。キリトくんのおちんちん、もう固くなってる……♥　わたしとセブンの裸で興奮してくれたんだね……♥
　知ってる？　おちんちんが大きくなることを、大人の言葉で『勃起（ぼっき）』っていうんだよ」
　衣服越しに勃起の感触を愉しむかのように、レインは指先を前後させ、そして掌を擦り付ける。触れているとわかるギリギリの、ほかな力加減が肉棒に更なる血と興奮を集めていく。
「おちんちん、かた～く勃起してくれてありがとう。キリトくん。お姉ちゃん達、とっても嬉しいよ」
「お、おちんちん勃起すると嬉しいの？　レインおねえちゃん」
「うん♥　女の子はね、自分たちのカラダでおちんちんおっきくしてもらえると、すっごく嬉しくなっちゃうんだよ……♥
　それじゃ……キリトくんがおっきく勃起してくれたおちんちん、お

姉ちゃん達に見せてくれる？」
　誘われるままに頷いたキリトは、装備情報ウィンドウを呼び出す。背後からレインに抱き竦められ、すぐ正面からはセブンが興味津々という表情で見つめる中、キリトは装備全解除ボタンを押す。
　ここ数分で二度も聞いたＳＥと共に、キリトの体を覆っていた装備が光の粒子となって消え去り――ほんの僅かなタイムラグを挟み、怒張した少年の逸物が、拘束から解き放たれた勢いのままレインの掌の中へ解き放たれた。
「ひゃっ♥」
　びたんっ、という音が聞こえてきそうなほどの勢いでぶつかる肉棒。その熱く太い感触と勢いに驚きの声を上げつつも、レインは少年の分身を掌で優しく受け止めた。
　少年の身にはあまりに大きすぎる肉棒にそっと手を添えたまま、レインは蕩けるような声音で囁く。
「わあっ……♥　すごいね、キリトくん……♥　体はセブンとおんなじくらいなのに、おちんちんはもうすっかり大人になっちゃってる……♥
　勃起おちんちん、とってもかっこいいよ♥　お姉ちゃん達におちんちんを見せてくれて本当にありがとう、キリトくん♥
　ほら、セブンもお礼お礼」
「うんっ。キリトくん、あたしとお姉ちゃんの体に興奮してくれてありがとう♥　キリトくんのおちんちん、とっても素敵よ♥」
　姉妹二人の淫靡な声と視線が、キリトを前後から挟撃する。完全に弄ばれる側となったキリトの背後から腕を回したレイン、肉棒に触れた掌を実にゆったりとした速度で上下させる。
　肉棒のサイズ自体は普段味わっているものと同一とはいえ、それに付随するキリト本体――ある意味では肉棒が本体とも言えなくはないが――のサイズが小さくなっているため、相対的に普段より大きく見える。周囲にある物の大きさが異なるだけで、同じ棒であっても違う長さに見えるという、有名な目の錯覚と同じ作用である。
「キリトくんはまだ知らないだろうけど……もうちょっと大人になっ

たら、キリトくんはこのおっきくてかっこいいおちんちんで、たくさんの女の子をやっつけちゃうんだよ♥」
「えっ、おれ、やっつけちゃうの……？」
「そうだよ。キリトくんは優しいから、女の子にひどいことするのはイヤかも知れないけど……でも、大丈夫。
女の子はね、おちんちんにいっぱいいじめられて、やっつけられちゃうのが大好きな生き物なんだよ♥　セブンも、わたしも、他の女の子も、キリトくんのつよくてかっこいいおちんちんにやっつけられたくてたまらないの♥
だから、未来でキリトくんのおちんちんを待ってるみんなのために……今のうちにおちんちんの使い方や、女の子のやっつけかたをいっぱい勉強しておかなきゃね♥」
こくりと頷くキリトに頷き返したレインは、ストレージから大きめのクッションを何個かオブジェクト化すると、それを妹の背中側に積んで背もたれ代わりにした。
「これでよし、と。それじゃあ……レイン先生による保健体育の授業の、はじまりはじまり～。
今日はよろしくね、助手のセブン」
「ええ、まかせといて。お姉ちゃん」
ベッドの上に積み上げられたクッションにもたれ掛かりながら、セブンは力強く頷く。
「それでは早速、セブンに質問です。セブン、男の子と女の子の一番の違いはなんだと思う？」
「うーん……男の子のお股にはおちんちんがあるけど、女の子には無い……ってところかしら」
「うんうん、さすがセブン。大正解だよ。じゃあ、女の子のお股には何があるのかわかるかなー？」
「ええ。おまんこっていう穴があるわ」
クッションを背もたれ代わりに寄りかかったセブンは、自らの両脚を持ち上げるようにして膝裏に両腕を回し、股座をキリトの真正面に晒す。一本の筋のようにぴったりと閉じた雌穴の入り口。その縁に

指先を添え、セブンは自らの秘裂を左右に割り開く。分泌され始めた粘液による光沢をまとう、薄ピンク色をした肉の華。それを躊躇いなく露わにするセブンの姿は、危険なほどに淫靡だった。

「よくできました、セブン。もうちょっとだけそのままでいてね。

キリトくん、見える？　あれが『おまんこ』。女の子のお股についてる穴で……おちんちんを気持ちよくしてあげて、白いおしっこをたくさんびゅーびゅーしてもらうための場所なんだよ。

キリトくんは、おちんちんから白いおしっこだしたことある？」

「えっと……白いのはない、とおもう……」

「本当？　じゃあ、ちょうどよかった。白いおしっこのことについても説明してあげるね」

実の妹に秘所を晒させたまま、レインは肉棒の軸に触れていた手をするすると下方向に動かし、陰嚢にそっと触れた。

「白いおしっこ……大人の言葉で『精子』とか『ザーメン』って言うんだけどね。それを、キリトくんのこの部分……金玉さんが作ってるんだよ」

精子の製造元・陰嚢――俗に金玉とも呼ばれる部位を、レインは優しく、あくまで優しく揉みほぐす。うっかり力を込めすぎないように気をつけながら、丁寧に丁寧にマッサージを重ねて精子の増産を促していく。空いた軸にはもう一方の手を添え、ゆったりと前後させることも忘れない。

「それじゃ、キリトくん。おちんちんがおっきくなることを、大人の言葉でなんて言うか覚えてる？」

「ぼっき」

「正解～。それでね、おちんちんが勃起するのは、キリトくんの体が『精子を出したいよ～』っていってるのとおんなじなの。

じゃあ次は、セブン。もし、セブンの目の前におちんちんをおっきくしちゃった男の子がいたら……セブンはどうしたらいいと思う？」

「え、ええっと……どうしたらいいの？　お姉ちゃん」

「あー、セブンにはちょっと難しかったかー。正解はね、『自分の体を使って精子を出すお手伝いをする』んだよ」

秘所を押っ広げにしたまま、セブンは『そうだったんだ……』という納得顔で幾度も頷く。キリトへの性教育ついでに、女性として最低限の知識を妹に教えてやるべく、レインは講義を続ける。

「おちんちんから精子を出してもらうことを、大人の言葉で『射精』と言います。男の子が勃起しちゃったら、気持ちよく射精できるように女の子がお手伝いするのが当たり前のことなんだよ。

これ、大事なことだからちゃんと覚えておいてね。セブン」

「うん！　ちゃんと覚えておくわ、お姉ちゃん」

「その意気その意気。ちなみに、射精のお手伝いが上手な女の子の事を、大人の言葉で『肉便器』って言うんだよ。これも覚えておいてね、セブン」

「……？　ねえねえお姉ちゃん。便器ってつまり……おトイレのことよね？　どうして射精のお手伝いが上手になると、おトイレって呼ばれてしまうの？」

「おっ、さっすがセブン。いいところに気づいたね―。教えてあげるから、おちんちんに顔近づけて」

レインに言われたのを切欠に姿勢を戻したセブンは、小さな上体を薄い胸ごと倒すようにして肉棒の先端へ顔を近づける。くりくりとした瞳から放たれる好奇心に満ちた視線が、キリトの亀頭へと降り注いだ。

レインの丹念なマッサージと背後にある柔らかな膨らみの感触によって興奮せられ続けた亀頭からは、透明な液体――いわゆる我慢汁が、興奮する雌達を焦らすようにじりじりと溢れ出していた。

「セブン。おちんちんの先っぽの所に、ちっちゃい穴があるんだけど……わかる？」

「これのこと？　お姉ちゃん」

「うん、そうそう。男の人はね、射精する時にも、おしっこをする時にもこの穴を使うんだって。つまり、おトイレも女の子も、おちんちんの同じ穴から出るものを処理するための存在だから――」

「そっか。だから、肉便器なのね……すごく勉強になったわ」

肉棒の先端部分にある小さな穴――鈴口を見下ろしながら、セブン

はふんふんと頷く。天才でありながらその才覚を驕ることもせず、未知の事柄を積極的に理解しようとする妹に、レインはそっと頷きを返した。

「それじゃあ、肉便器の意味も分かったところで……一緒に女の子のお仕事、始めよっか。セブン」

「うん、お姉ちゃん！　一緒にね」

最強の姉妹たる二人ともなれば、ほんの一時視線を重ねただけで互いの意図を察する事ができる。

レインが肉棒と陰嚢へのマッサージを続ける中、セブンはすっと口を閉じるとそのまま口の中で舌をもごもごと動かす。大ぶりのラピスラズリを彷彿とさせる鮮やかな瞳でキリトを見つめるその顔は、今のキリト同様に幼さをたっぷりと残しているが――それ故に、端々から溢れ出す妖艶さが際立つ。

その顔にキリトが見惚れている事に気づいたのか、セブンは微かに微笑むと、まるで婚姻の誓いを立てる花嫁のようにしずしずとした動作で、可憐な唇をキリトの肉棒へと捧げた。

「ふふっ……♥」

唇にべったりと張り付く我慢汁。ほんの少しだけ舌を出し、その欲望溢れる液体を舐め取りながら、セブンは亀頭とのキスを続ける。特に、鈴口周りへ集中的に。そうして視線だけは姉に抱えられた少年へ向け、亀頭に唇を這わせるように静かに口を開け、亀頭先端からカリ首のまでの部位を口内に納めた。

セブンをペニスの包皮代わりにしているかのような光景に、キリトの興奮が更に高まる。

「セブンのお口、ちっちゃくて可愛いでしょ？　キリトくんのおっきくてかっこいい大人おちんちん、さすがに入りきらないから……これで許してあげてね」

キリトを抱きかかえ、両手で陰茎を弄びながらレインは囁く。その最中も、亀頭部をまるごと咥えたセブンは、キリトに見えない口内で舌を這わせ続けていく。口の中で唾液達が跳ねるぴちゃぴちゃという音が漏れ聞こえるほどに激しく、容赦なく。

その音の中に時折混ざる、唾液よりも更に粘ついた音。その音を、レインはしっかりと聞き取っていた。

「キリトくんのおててはわたしの太股の上。わたしのおててはキリトくんのおちんちんの周り。それじゃあ……セブンのおててはどこにあると思う？

正解は……セブンのおまた。ちっちゃくてせまーいおまんこを、キリトくんのおっきなおちんちんのお便所にしてもらえるように……今、オナニーしてるんだよ♥」

囁きと共に、前後する手に込められた力が強くなる。陰嚢を揉み拉く手の優しさはそのままに、興奮する肉棒へ奉仕するその手は、先端部を覆うセブンの唇と時折触れあいながら、射精までのカウントダウンを進めていく。

「んふぅ……♥　ふうっ、ふーっ……♥♥」

「キリトくん、聞こえる？　セブンの荒～い鼻息の音。これがね、キリトくんにご奉仕できて幸せになっちゃってる、肉便器の音だよ♥」

「んっ♥　ふっ、ふうっ♥　んぶっ♥　っふぅうっ♥♥」

「セブンの舌、気持ちいいでしょ。キリトくんのおちんちん、さっきからずっとびくびくしちゃってる♥

この調子だと……そろそろぴゅっぴゅしちゃうかな？　いいよ♥　うちの可愛い精液おトイレに、白いおしっこ出してすっきりしちゃおうね♥

遠慮なんてしなくていいんだからね。おちんちんはごしゅじんさまで、おまんこはおちんちんさまのどれい♥　女の子は男の子に使われて、おちんちんさまのおトイレにしていただくのが一番の幸せなんだから♥」

陰嚢を揉む手を移動させたレインは、左右の手の指を重ねて大きな環を作ると、肉棒を扱き上げていく。同時に、セブンもより一層激しく舌を動かし、亀頭部分を丹念に舐め回す。

セブンの口から溢れた唾液がレインの指に触れ、ぬちょぬちょと粘ついた音を立てながら肉棒に塗り込まれていく。セブンの股座から響く水音、そして鼻息も、射精の気配を感じ取ってボリュームを増し

ていく。
　姉妹のハイレベルな連携技によって責め立てられたキリトの肉棒。その根元に溜まる名状しがたい感覚が限界を越える寸前、キリトは声を上げた。
「レインおねえちゃん、もう、もうっ……！」
「射精ちゃいそう？　じゃーあ、おねえちゃんの声に合わせて、かっこよ～くお射精しようね♥　セブンのおくちのなか、キリトくんの精液でいっぱいにしちゃおう♥」
　キリトの悲鳴にも似た声にゾクゾクとした昂ぶりを感じながら、レインは肉棒を扱く手の速度を一気に上げた。細く白い指が、少年の野太い肉棒を這い回り、溜め込まれた雄汁を吐き出させようとのたうち回る。
「いくよ～？　3，2、1……せーえき、発射～♥♥」
　カウントダウンに合わせて阻止限界点を超えさせられた快感が、放精の命令を肉棒へと送り込み――キリトは、滾る白濁液をセブンの口の中へぶちまけた。
「んんんっ!??　ぶっ♥　んぶうっ♥♥　ぬっ――んんぅ　うぅぅうっ♥♥」
　輸精管を駆け上った精液は、鈴口をほじくるように舐め回していたセブンの舌を押しのける勢いで解き放たれ、狭い口内を容赦なく蹂躙していく。
「んっ〃ん〃っぅう♥　んくっ、んぐぅっ♥　んっんぅうぶうんぅううっ♥♥」
　真っ先に飛び出した第一陣が喉奥に飛び込んでいき、続いて第二陣、第三陣――次々に流れ込んでくる精液を、セブンは必死になって受け止め、ごくりごくりと喉を鳴らして嚥下していく。可憐な歌声を響かせる喉に、醜悪な雄の欲望の塊が絡みつく。鼻へ抜ける呼気すら濃密な精臭に支配され、舌は精液独特の味を脳へ容赦なく伝える。
　次々に溢れ出す精液を零すまいと無意識のうちに頬を膨らませたセブンが、まるでリスか何かのように精液を溜め込む姿を見下ろしながら、レインは年上の余裕を以てただ微笑んだ。

「すご～い♥　キリトくんのおちんちん、どくどくっ、どくどくってしながら、いっぱい精液出してるね～♥　女の子をザーメントイレにしちゃう大人のお射精……すっごくかっこよくて、おねえちゃんドキドキしちゃった♥

セブンもえらいえらい♥　精液、こぼさないように頑張ってるね♥　さすが、おねえちゃんの自慢の妹だよ♥」

射精が終わるまでの間、飲精が終わるまでの間――レインは年下二人に優しく声をかけていく。より気持ちよく雄の役割を果たし、より気持ちよく雌の仕事を果たせるように。

肉棒の軸を掴んでいたレインの指に伝わる、射精の感触。太い肉の管を通り抜けて雌の穴へと注がれる精液の拍動がおさまり、キリトが一回目の射精を終えたのを感じ取ると、レインはそっと両手を離した。

「お射精お疲れさま、キリトくん。おねえちゃんのおててとセブンのおくちで、いっぱい気持ちよくなってくれて嬉しかったよ……♥

本当はもっともっと射精したいよね？　でも……おねえちゃんね、セブンがちゃんとおちんぽトイレのお仕事できたか確かめてあげたいの。だから、ちょっとだけ我慢できる？」

幼子を宥め賺すようなレインの声に頷いたキリトは、両手を伸ばしてセブンの顔を抑え、口内から肉棒の先端を引き抜く。セブンの唾液をたっぷりとまとった亀頭部分が、久しぶりに外気に触れた。

レインが静かに抱擁を解いたのを合図に、キリトは彼女の脚の中から脱すると、未だ固い肉棒をぶるんと揺らしながら少しずれた位置へと座り直した。

「ありがとう、キリトくん。それじゃあ、セブン。お口あーんして？

……うわー、たくさんだしてもらったねー♥　全部ごっくんしちゃいたいだろうけど、お姉ちゃんトイレにもちょっと分けてね」

餌を求めるひな鳥のように大きく口を開け、口内に溜まった大量の精液を見せ付けるセブン。その頬に手をあてたレインは、徐にセブンと唇を重ねると、己の舌を妹の口内へと侵入させた。

歌姫姉妹二人の舌が、重く濃厚な精液を絡め取りながら淫猥なコー

ラスを響かせる。互いの唾液を白濁液の中に混ぜ込みながら、子種汁を一滴たりとも残すまいという執念深さで口内を貪り合う。

セブンが飲みきれなかった精液を仲良く半分ずつ、こくこくと喉を鳴らして胃の腑に沈めていく。結局、姉妹のディープキスは、精の味が唾液の味に上書きされきってしまうまで続いた。

「「ごちそうさまでした、キリトくん♥♥」」

声を揃えてそう言うと、レインとセブンは口を大きく開けてキリトに口内を見せる。殿方の精液を残さずいただいた――それをアピールする姉妹の口の中には、精液の痕跡は一切残っていなかった。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん。キリトくんのおちんちん、まだおっきいままよ」

「ほんとだ。じゃあ次は、おまんこの穴を使ってもらおうね。セブンのおまんこもドロッドロで準備万端みたいだし。

ほら、おいでセブン」

仰向けに寝転んだレインの上に、セブンが覆い被さるように倒れ込む。姉妹二人の腰と股の位置がちょうど同じあたりにくるような位置に体を調整したおかげで、セブンはレインの胸元に顔を埋める格好になった。

まるで最初から一本の線であったかのように、ぴったりと重なるレインとセブンの縦筋。小さな妹の体に腕を回したレインは、自分の両脚を開く傍らセブンの太股の付け根を両手で掴み、左右にそっと押し広げた。

「さ、キリトくん。次はこっちの穴ですっきりしちゃお？　セブンのおまんこ、キリトくんのおちんちんがほしいよ～って、さっきからずーっと泣きっぱなしだもん。ね、セブン？」

肉棒をしゃぶりながら自慰行為に耽り、雄を迎え入れる準備を整えたセブン――その存在そのものによって昂ぶらされる本能が、キリトに生唾を飲み込ませる。

見ただけでもはっきりとわかる小さな雌穴。姉のそれとは違い、未だ性交には適さないサイズのそれを晒しながら、セブンは己の内より溢れる興奮の証を示して雄を誘う。

「うん、うん……♥　キリトくん……きて……♥　キリトくんので、またいっぱい気持ちよくなりたいの……♥」

レインの手によって開かれたセブンの雌華から愛液が溢れ出し、真下にあるレインの股座に落ちる。この世にいる数多の雄の中でも、たった一人だけが見ることを許された淫靡にして贅沢な光景。

可憐な歌姫姉妹に誘われるまま、その妹の方へ狙いを定めたキリトは、愛蜜を流して誘惑する蜜壺の入り口に逸物の先端を宛がうと――狭い入り口をこじ開けるようにしながら、セブンの中へ突き込んだ。

「――――あっ――くひぃいいいいぃ♥　あっ、ああっ♥♥　あにゃあぁあああ♥　おっぎ――いひぃいいぃ♥」

普段より小柄になった体をフルに使い、普段通りのサイズの逸物を、セブンの狭小な膣内にじりじりとぶち込んでいく。それだけでセブンは甘い悲鳴を上げ、強姦される生娘のように身を捩るが、キリトとレインにサンドイッチされているせいでその体はどこにも逃げ出せない。

セブンの実年齢とだいぶ小柄な体格、そしてキリトの逸物のサイズから考えれば、半分も入れば御の字。他の女性達のように、男性器の全てを受け入れて楽しむことはまず不可能だろう。

だが、それはあくまで現実世界（リアル）であればの話。仮想空間内であれば、年相応の幼さを色濃く残すセブンの体でも全く問題なくセックスできる。できてしまうと言う方が正しいか。

「裂け――はひ♥　裂ける〝っ♥　さけっ――ぢゃうぅう〝ぅうう♥　キリ、トくん〝っ♥　あひ、ぃいい〝ぃいい♥♥」

無論、セブンの脳髄は現実では味わえない過剰なまでの肉の悦びを、ダイレクトに叩き込まれる事になるのだが。

「ほーら、セブン。あんまりじたばたしない。キリトくんがおちんちん挿れにくいでしょ？」

「だって、だってぇえっ♥　あっ♥　おふ♥　んくうううっ♥　お〝っ、奥っ〝、おぐまでぇへえええっ♥」

「うんうん。キリトくんのおっきなおちんちん、セブンの奥の奥までいれてもらえてよかったねー♥

現実だと、もう2，3年くらいしたらできるようになるかな……今のうちに、キリトくんのおちんぽサイズ憶えちゃおうねー♥」

セブンの両脚から手を離したレインは、挿入に悶え噎ぶ妹の頭を空いた手でそっと撫でる。

いつもどおり仲睦まじい姉妹の光景を、いつもよりだいぶ低い位置から見下ろしながら、キリトはセブンの尻と己の腰が密着するまで深々と挿入を進める。ただでさえ狭い膣道は太く重い肉棒に占拠され、居場所を失った愛液は結合部からだくだくと流れ落ちていった。

結局、ＶＲ空間という特性を活かしたキリトが肉棒の全てをセブンの中に埋めるまでの間、セブンはびくりびくりと何度となく痙攣させられていた。

「はーい、キリトくんよくできましたー♥　おちんちん、ちゃんとぜんぶ入れられたねー♥

セブンもえらいえらーい♥　キリトくんの大人おちんちん、先っちょから根元までおまんこでぎゅーぎゅーできてるじゃない♥」

「お〝ひぃっ♥　はひ♥　えらひぃ？　あたひ、えらい……？」

「うんうん、えらいえらい♥　お姉ちゃんのおっぱいべたべたにしちゃうくらいにたっくさんよだれ出して、いっぱい気持ちよくしてもらいながらちんぽケースになれてえらいよー、セブン」

頭にぽんぽんと触れながら、レインは肉棒を受け止めきったセブンをねぎらう。毎度のことだが、この時点で既にセブンの呼吸は乱れており、宝石めいた美しい瞳は半ば虚ろ。事態を正確に認識しているのかすらも若干怪しく思えるレベルだ。

どこか断末魔の悲鳴じみたひゅうひゅうという息を繰り返しながらも、その一方で膣肉はキリトの逸物をギチギチと強く締め付ける。セブンの中に慣れていなければ、すぐさま暴発させられていてもおかしくないだろう。

「ぜんぶはいったよ、セブンちゃん……」

「はひゅ♥　えっ、ええっ♥　わかる、わ♥　キリトくんの、あたしのなかに……はっ♥はひゅーっ♥はひゅうぅ♥　おなか、つぶれちゃいそう……♥」

「セブンちゃん、おれ、もうガマンできない。うごいていい？」
「っ!?　ええ、もちろん♥　キリトくんの、んふぅ♥　好きなようにいっぱい動――んくひぃいいいいっ♥」
　セブンの言葉が終わるのを待たずに、キリトは腰を引く。セブンの分泌液をまといながら引き抜かれていく肉竿の太軸。本来であれば亀頭のみが穴の中に残る程度に引き抜きたい所だが、体が小さくなっている影響だろうか。普段なら問題なくできる動作ですら若干の不自由を感じさせられてしまう。
　コンマ数秒ほどの思考の末、キリトは引き抜いた肉棒を――再び突き込まれるまではもう少し猶予があるだろうと思い込んでいるに違いないセブンの中へ容赦なくぶち込んだ。
「――ひゃひぃうっ!?　なん、でぇっ……♥」
　突然の再挿入に困惑するセブンを余所に、セブンの体そのものは与えられる快楽を存分に享受する。雄を挑発するかのように、一層強く締め付ける膣肉の感触に触発され、キリトは己の欲望を満たすために腰を振る。
「あっ♥あぁっ♥　やぁあっ♥ひぃいっ♥　キリト、くんっ♥　キリ〝トくぅんっ♥　こわっ、れりゅ♥こわれ〝ちゃうぅう♥」
　想定外の事情でいつもより間隔の狭くなったピストン運動が、セブンの蜜壺を激しく襲う。
　普段セブンと肌を重ねる時は、挿入後にもっと時間を使い、ゆったりと体を慣らすのが暗黙の了解になっている。そこからキリトが上になり、セブンが逃げ出せないように体重をかけながら強姦めいたセックスに耽ったり、後ろからセブンの細い首に片腕を回し、彼女の首を緩く絞め（るフリをし）ながら犯すといった本格的なプレイに移る事がほとんどだ。
　だが、今のキリトは一部分を除いてセブンとほぼ同サイズの体格となっている。体重差や体格差を活かせない代わりに、幼さを言い訳にした遠慮の無さでただ只管にセブンを責め立てる。その目論見は、どうやら成功したようだった。
「あっ――あぁあっ♥　だめ、だめぇえっ♥　はひ♥お〝ふ♥お

ひぃぃ♥　あ〝っ♥あぁあああ♥　とめ――ひぃ♥ひぃぃんっ♥」
「セブンちゃん、とめてほしい？」
「だぁ――めえええっ♥　あっ、んっ♥　んぅううっ♥　とめちゃ、いやぁっ♥　もっろ、はひ♥　もっとぉおおおっ♥♥」
肉棒が膣奥を打つ度に、長い髪を振り乱して快感の悲鳴を上げながら、セブンは抽送を懇願する。天才技術者としてのセブンでも、姉に甘える妹としてのセブンでも、アイドルのセブンでもない、ただ一匹の雌としての姿を晒しながら交尾に溺れていく。
太い逸物に愛液をたっぷりとまとわりつかせながら悶えるセブンの体を、レインはしっかりと抱き留める。小さな妹と、小さくなったキリトが交尾に集中できるように。
「セブン。おちんちん気持ちいい？」
「んひ♥　きっ、きもちい♥　気持ちいひぃっ♥♥　キリトくんのおちんちん、あむぅっ♥　あっ♥　きもちいいよおぉっ♥♥」
「――だってさ。さすがキリトくん。女の子を啼かせちゃう天才だね～♥」
セブンの本気の鳴き声と、レインの甘い誘惑の声。結合部から響くぬちゃぬちゃとした水音と、ぶつかり合う体が奏でる肉の音。様々な交合の音と、まだ年端もいかぬ少女をその姉と協力して犯しているという事実がキリトを否応なしに昂ぶらせる。
「……セブンっ！」
下腹部から伝わる、射精の兆候。早くこの雌に精を注がせろと叫ぶ雄の本能が、キリトを突き動かす。
思わず普段の調子で名前を呼んでいる事にも気付かぬまま、キリトは力尽くでセブンを振り返らせる。そのまま互いの小さな体をぎゅっと密着させ、半ば無理矢理に唇を重ねた。
「――んむっ!?　んっ♥　んぅ〝っ、んっ、んぅううう♥♥」
肉棒と同様、唇をこじ開けるようにして乱暴に入り込んでくるキリトの舌。その感触に驚いたのも束の間、セブンは反射的に舌を受け入れると、そのまま己の舌を絡めて奥へ奥へと誘う。
「んぢゅ♥　むぅ♥　んっん♥　んひゅぅ♥　ひぁ♥　んっううう♥

♥」

獣の交尾じみた後背位（バック）スタイルで犯し、犯されながら、唇と唇を重ねて互いを甘く求め合う。二つが一つに溶け合うような官能の中、キリトは更に腰の動きを早める。

肉のぶつかる、ぱんぱんという音。途切れを知らぬ音の連なりとテンポの早さによって、キリトが限界を迎えたことを悟ったレインが、羨望と慈愛が入り交じる微笑みと共に二人を見つめる中、キリトは最後のワンストロークを、セブンの中に深々と突き込む。

唇と唇、腰と腰が隙間無く密着。セブンの小さな子宮口が限界まで広がり、ぴったりと押し当てられた亀頭に吸い付く。セブンの薄い尻肉が潰れるほどの勢いで体を押し当てたキリトは、子種を迎え入れる準備を整えきっていた子宮目掛けて――精液を一気に解き放った。

「――んふッ♥♥　ふぅ――ん゛っんぅう゛ぅぅううぅうっっ♥♥　ん――んひぃぃい♥　んっんっぅうん゛ぅうう゛うう゛ううぅうぅぅううぅっっっ♥♥♥」

一層太さを増した肉棒がポンプのようにドクドクと脈動しながら、セブンの中へ精液を送り込む。

重たく濃密な精液によって子宮の内を満たされ、雌として蹂躙される感触に悶えながら、セブンは幾度となく達する。その官能の声すらキリトの口づけによって封じられ、意味を成さぬ音となって彼の口内に消えていく。

本来はありえないサイズの肉棒が精液を送り出す度に、キリトの体がびくりと震える。全身を使って射精するキリトにのし掛かられたセブンは、男と女の差をこれでもかと味わわされながら、好き放題に種付けされる感触に酔い痴れていた。

「んお゛ぅっ♥♥　ぷひゅっ♥♥　……んっ――んぅう♥　ぶひゅ、くゅひぃいんん♥♥♥」

大人サイズの――セブンがもっと成長してから受け入れるべきサイズの逸物を受け入れた膣内は、既に限界いっぱいまでこじ開けられている。注がれた精液が逆流する余裕などあろうはずもない。故に、白濁液は一滴残らずセブンの子宮に留まり、幼い秘所を蹂躙した。

がくっ、がくっ、と痙攣しながら、強制的な絶頂に叩き込まれるセブン。上からはキリトに密着され、下からはレインによって支えられているため、どこにも逃げ場は無い。

見開かれた目は過剰なまでの官能によって蕩かされ、完全に焦点を失っている。ディープキスをやめようとしない唇の端からは、泡だった唾液がどろどろと溢れ出し、レインの胸元へと伝い落ちていった。

「二人ともおつかれさまー。気持ちよくセックスできてえらいね～♥　おちんちんの使い方も、おまんこの使われ方もとっても上手だったよ～♥」

無事に交尾を為した子供達をレインが褒めそやす。その甘ったるい声を合図に、キリトは肉棒を抜いてやるべく腰を引く。普段なら体も唇も密着させたまま事後の余韻に浸る所だが、今の体のサイズではそれも叶わない。

無意識の内にもへばりつくセブンの舌に後ろ髪を引かれつつ、キリトはディープキスを解くと、肉棒を引き抜きつつ体ごとセブンから離れた。

「ふうぅっ……っと」

「あひゅっ♥　あっ……あ〝っ……♥　んあっふあぁあ、あっ♥　んくぅ――あぁあ～っ……♥」

何度見ても少年の肉体にはそぐわないサイズの肉棒がセブンの膣内から引き抜かれるのと同時に、溜め込まれていた精液が一気に逆流する。交合の余韻に沈むセブンの体が、その感触に再び官能を呼び起こされてびくびくと震える。

肉棒の直径ぴったりに拡げられ、ぽっかりと開きっぱなしになってしまった雌穴。精液と愛液が入り交じったどろどろの液体が次々に溢れ出していく様は、あまりにも扇情的に雄の支配欲を満たしていった。

「いつもながら……大丈夫か、セブン」

「んうぅっ♥　らい、じょーぶ……♥　はへっ……んんぅうっ……♥　だいひょーぶ……♥」

どうにかこうにか返事をするセブンを休ませるべく、キリトはコン

ソールウィンドウを操作して今いるベッドを複製すると、隣にそのままオブジェクト化した。
「セブン、お疲れ様。あとはお姉ちゃんが頑張るから、セブンはちょっと休んでてね」
股座から精液を溢れ出させながら頷く妹の体を、レインが隣のベッドへそっと横たえる。本来ならキリトがすべき事なのだろうが、今の体のサイズと腕の長さでセブンを抱え上げるのは若干無理がある。抱っこして運ぶには股間の逸物が邪魔だ。
「悪いな、レイン」
「いいのいいの。そーれーよーりー……いつもの感じに戻っちゃってるよ。キリトくん」
「あっ……ごほん、ごほん。えーっと……ありがとう、レインおねえちゃん」
「ふふふっ。はーい、どういたしまして♥」
こういう時間においては、場のノリが何よりも優先される。とりあえず子供じみたムーブを取り繕い直すことに成功したキリトの前で、レインは体をゆっくりと起こした。
レインの下腹部には白濁した雄の汁がたっぷりと付着しているが、それはあくまでセブンに注がれた分が逆流しただけのもの。目の前で妹の交尾を見せ付けられながら、彼女自身は未だその快楽にありつけずにいた。
「あれあれ～？　キリトくんのおちんちん、まだまだ元気いっぱいみたいだね～？」
「うん。でも、セブンちゃんはやすんじゃってるし……」
「心配しなくても大丈夫。新しいおちんちん用トイレの作り方、お姉ちゃんが教えてあげる♥」
キリトの耳元に唇を寄せ、レインは囁く。情欲に満ちた雌の笑みを浮かべながら。
「――って、言えばいいんだよ。それじゃあ、早速練習してみよっか。キリトくん」
伝えるべき事を伝え終えたレインは、キリトから体を離し、ベッド

の上にゆったりと座り込んだまま彼の言葉を待つ。
　こくりと頷いたキリトは、レインの目を正面から真っ直ぐに見つめる。堅さを全く失っていない剛直を、彼女の眼前に堂々と晒しながら、彼女が望む言葉を紡ぐ。
「レインおねえちゃん」
「はーい♥　どうしたの、キリトくん？　そんなにおちんちんおっきくしちゃって♥」
「――なんだか、ちんぽハメたくなっちゃった。レインおねえちゃんのおまんこ、おれのハメ穴トイレにしていい？
　レインおねえちゃんのいもうとみたいにさ」
　教わったとおりの言葉が、少年の喉から声となって溢れ出す。
　年上の女を、幼い肉欲を解消するための道具としか思っていない少年の言葉を浴び、レインはゾクリとした官能と共に微かに身を震わせる。
　目を細めて媚笑うレインに更なる興奮を掻き立てられながら、キリトはベッドの上で立ち上がると、未だ勃起のおさまらない肉棒をレインの頬へビタリと勢いよく押し当てた。セブンとの性交の残滓が飛沫となって、レインの髪や肌に付着する。
「いいでしょ？　レインおねえちゃん」
「うん……♥　もちろんだよ、キリトくん……♥　おねえちゃんは、キリトくんに使ってもらうためにあるおトイレなんだからね♥♥」
　肉棒に頬をすり寄せ、キリトの精液とセブンの愛液を肌に塗り込みながら――レインは己自身の肉欲に従い、肉棒へそっと口づけを捧げた。
「――レインおねえちゃん！　レインおねえちゃんっ！」
「おぉっ♥　あひぃいぃっ♥♥　やらぁっ♥あっあっ♥それっ♥それだめぇ♥♥　そこ、そこぐりゅってするのダメへえぇぇっ♥♥」
　すっかり男女の性交の臭いで満たされてしまった、保健室。二台並

んだベッドの片方から響くのは、粘つく液体をかき分けながら肉と肉がぶつかりあう、ばちゅばちゅという激しい音。

その音の源――レインは、ベッドの上に横倒しにされたまま、与えられる大人の快楽に悶え続けていた。

アイドルらしいスタイル管理によって作られた、ほっそりとしつつも適度に肉の付いたレインの脚。真上に持ち上げられたその片方には、レインより頭二つほど小さな少年がしがみつき、猿のように激しく腰を振っていた。

「あっ♥あ〝ぁっ♥　んん――ううぅっ♥　おっおぅっ♥おふっ♥ひぃいっ♥

きりとくん、なんで、なんでわたひのほぉっ♥　弱いとこ、全部、はひゅ♥　しっ、知ってるのぉおお♥♥　ずるい、ずるいぃい♥♥」

キリトと呼ばれたその少年が腰を振る度、深々と突き刺さった太い肉棒が前後し、レインの蜜壺から粘ついた発情の滴が溢れ出す。張り出したカリ首によって擦られ、愛液を掻き出される度、レインの体は更なる潤滑液を分泌し、もっと犯してほしいと雄に媚び続ける。

妹と同い年――いや、もしかしたら妹より幼い少年に一方的に嬲られる。その事実が、雌である限り雄には絶対に勝てない事をレインに強制理解させ、更なる興奮を呼び起こす。

「きょうは、あたらしいトイレが二つもできちゃった。これから、ハメたくなったら呼んであげるから、すぐにきてね。レインおねえちゃん」

「んぁっ♥　んん♥　うんっ♥うんっ♥　あぁあっおおっ♥♥　いく、じぇっちゃ♥ぜったいいく♥　おねえちゃん、ちんぽといれになりに♥ぜったい行くかりゃああっ♥」

「そうだ。そのときはもちろん、セブンちゃんもつれてきてね」

「うんっうんっ♥　つれてくぅ♥はひぃいっ♥　つれてくぅううっ♥」

男であるというだけで、肉棒があるというだけで――ただそれだけの理由で年上の女性を好き放題にモノ扱いしながら、キリトは好き勝手に腰を振ってレインの雌穴を陵辱し、堪能する。

片腕でレインの足にしがみつき、股を閉じられないように拘束しながらの性行為。気まぐれに空いている手でレインの尻肉をぶっ叩いてやれば、レインは官能の声を上げてびくびくと体を震わせる。

いつもよりだいぶ小さな、それこそ紅葉のような赤い腫れ痕を刻まれた尻を見下ろしながら抽送を続けるキリト。レインを散々啼かせるその下腹部にやがて迫る、射精間近を告げる独特の感覚。

「そろそろ……でるっ！　でちゃうよ、レインおねえちゃんっ！」

「～～～っぅうっ♥　だしてぇっ♥だしてええっ♥♥　キリトくんの、せーし♥　ぜんぶっ♥あぁっ♥　ぜんぶだしてえええぇえっ♥♥」

「でるっ！　でるっ、でるぅっ!!」

臨界点を一気に超える連続ストロークをレインの膣内に容赦なく叩き込む。種付けの予感に震えるレインの膣肉が激しく出し入れされる肉竿に絡みつき、キリトはもちろんレイン自身にも更なる官能を齎す。

レインの脚にしっかりとしがみついたキリトは、最後のワンストロークを深々と突き込むと――猛る欲望のままに、陰嚢から駆け上る精液をレインの子宮目掛けて解き放った。

「いひぃっ――イっ、いっ〝っぐぅうぅうぅうっ♥♥　あっあぁ〝あっ〝あ～～っ♥♥♥　どくっどくってぇ♥♥　せーえき、せーえ〝ぎいっぱひだされていくのぉおおぉおっ♥♥♥　あっあぁあああ～～～～ぁあああ♥♥♥」

三発目の射精であることを忘れそうになるほどに大量かつ濃密な子種汁が、今か今かと待ちかねていたレインの子宮を襲う。一滴でも多く搾り取ろうと絡みつく膣肉に奉仕された肉棒は、輸精管を膨らませては次々に精液を送り込んでいく。

同じ男に姉妹揃って陵辱され、たっぷりと膣内射精される肉の喜悦に、レインはびくびくと体を震わせて感じ入る。美しい背中を弓のように反らし、交合の勢いで乱れた髪を整える余裕も無いまま、口から唾液と喘ぎ声を漏らし続ける。

「――あ〝おっ〝♥♥　きり〝とくんのぉ♥ちん、ぽおっ……♥♥

あふっ♥♥　はーっ♥はうっ♥は～～～ぁっ……♥　すき、すきぃ……♥」

快楽に蕩ける声が、レインの喉から勝手に溢れ出していく。

射精の余韻、交合の余韻にたっぷりと浸りきったキリトが肉棒を引き抜き、抱えていたレインの足を降ろした後になっても、レインの意識は未だ微睡みにも似た法悦の中でぼんやりとしたままだった。

ぐったりと横たわるレイン。その視線が、隣で横たわり身を休める妹の瞳とぶつかった。

「えへへ……お姉ちゃん……♥」

「セブン……♥」

互いを見つめ合う姉妹の顔には、ただ柔らかな微笑みだけが浮かんでいた。

――なお、この一連のプレイ模様は言うまでも無く録画されていた。脱力した姉妹を介抱するために一旦ログアウトしたキリトがいつものアバターで再ログインする頃には、映像はセブンの手によってサーバー内の『共有映像フォルダ』にアップロードされていた。

「動作テストは全く問題なし……ってことでいいわよね？　キリトくん」

「……首を横に振りたいところだけど、問題点がどこにも見当たらない……一切問題なしだ、セブン」

「ふふん♪　そうこなくっちゃ♪」

自慢げな笑みを浮かべたセブンが、レインとハイタッチを交わす。

姉妹の仲睦まじい姿をすぐ近くで見ながら、キリトは前々からこのアバターに興味を持っていた一部の面子――主にアスナとアリス――に、テストが完了したことを告げるメッセージを送りつけるのだった。

世界で三番目に大きい島と言われる南国の島・ボルネオ島。その一

角に存在する世界有数のリゾート地・コタキナバル地域（エリア）は、成田から飛行機で約5時間の距離にある南国・マレーシアに属している。

白く美しいビーチと、海底まで透けて見える透明度の高い海。豊かな自然と温かな気候風土が観光客を出迎えるコタキナバル一帯には、小さな無人島が複数存在している。

それらの無人島は、島の一つ一つがプライベートリゾートとして富裕層向けに販売されている。芸能プロダクション《スターバーストプロモーション》社長兼現役アイドル・アスナが所有しているのも、そんなコタキナバル付近にあるリゾート型無人島の一つだった。

「ん……♥　あっ、んんっ……♥」

「ふふっ……アスナちゃん、可愛い♥　ザーメンたっぷりのディープキス、気持ちいいでしょ？」

「あふっ……♥　ええ……とっても気持ちいいわ、レインさん……♥」

プールサイドに置かれた、寝そべることのできるデッキチェア。柔らかな布面に体重を預けながら、生まれたままの姿でデッキチェアの上で睦み合い、ねっとりと絡まり合うのは三匹の雌。

社長――栗色をした長い髪を乱れさせたアスナに覆い被さるように唇を貪るのは、同社に所属するアイドル・レイン。同じ雄の遺伝子を宿した精液を、互いの口の端から泡（あぶく）となって溢れさせる様は艶めかしく淫靡という他にない。

未だ精液を溢れさせる股座をだらしなく拡げたまま、左右に開かれたアスナの両脚。その片方の太股に股座を押し当て、逆流する精子を塗りたくるようにゆったりと腰を前後させながら、レインはアスナと唇を重ねる。雌の匂いと雄の臭いが漂うプールサイドで繰り広げられているのは、お互いの浅ましさを確認する疑似交尾。

「あっ、キスマーク見つけちゃった♥　わたしもつけちゃおっと……♥」

レインの柔らかな唇の感触が、アスナの口元から首筋へと滑り落ちていく。その感触をきっかけに、アスナはもう一匹の雌――姉同様に太股に脚を絡ませながら、アスナの乳首に吸い付き、赤子のように母乳を吸う少女の頭を撫でた。

「美味しい？　セブンちゃん」

くりくりとした大きな瞳でアスナを見つめ返したセブンは、小さく首を縦に振って答える。口に含んだ乳頭は離さず、ちゅうちゅうと音を立てて母乳を吸い上げながら。

セブンが持つ危険な幼さと懸命に乳を舐める愛撫にも似た感触が、アスナの母性本能と性欲を同時に刺激する。慈母の――というには些か色気を含みすぎた眼差しでセブンを見つめれば、レインもまたセブンの頭を撫でた。

「よかったねー、セブン。アスナちゃんのおっぱい、いっぱいごくごくしておっきくなるんだよー♥」

「お腹いっぱいになったら、一緒におひるねしよっか？　私とレインさんで、セブンちゃんのベッドになってあげるから。

あ、それとも……おひるねより、キリトくんと一緒におまんこあそびの方がしたいかな？」

アスナの問いかけに、セブンは腰をかくっかくっと前後させる事で答える。股穴から溢れた精子達がアスナの太股の上にこぼれ落ち、白い流体となって滑り落ちていく。

セックスを模した動きをしつつもおっぱいを求め続けるセブンの甘えた様子に、アスナとレインはくすくすと笑わずにはいられなかった。

「そっかそっかー。じゃあ、キリトくんが戻ってきたら一緒に『ぶっといおちんぽさま、わたしといっしょにおまんこあそびしてください♥』っておねだりしなきゃね♥」

「おねえちゃんたちと一緒に、お尻をふりふり～ってふりながら『おまんこにせーしいっぱいごくごくさせてー♥』ってしようねー、セブン♥」

アスナ共々猫なで声でセブンを甘やかしながら、レインは妹の頭を撫でていた手をそっと動かしていく。つつ、と細い指先を滑らせながら背中を伝い、ぷりんとした小さな尻を撫で、そのまま股の間へ。アスナの太股へと伝い落ちていた精液をたっぷりと絡め取ると、それをそのまま己の口へと運んだ。

どろりと濃厚な精子の塊を、それがさも当然の事であるかような顔で咀嚼し――ごくりと飲み干す。
「キリトくんの精子、美味しい？　レインさん」
「うん♥　妹のおまんこにびゅーびゅー射精されて、絶対に受精させてやろうって頑張ってくれた精子ちゃん達だと思うと、余計に♥」
「ふふっ♥　その言い方、なんだか変態さんみたいだよ。レインさん」
「えー？　キリトくんのちんぽハメてもらうために裸で土下座しちゃう人にだけは言われたくありませーん」
「私だって、自分の妹に鞭打たれて喜んじゃう人にだけは言われたくありませーん」
茶飲み話をしているかのような気軽さと朗らかな笑顔で、アスナとレインは互いを貶め合う。そうしてどちらからともなく唇を重ね、お互いの口の中で精液を行き来させ合う。
途中でアスナの蜜壺とレインの雌穴からこぼれ落ちた精液達も追加し、ぐちゅぐちゅと音がなるほど激しく攪拌したあと――唾液混じりの白濁液を、仲良く半分ずつ飲み干した。
すっかり空になった口の中をお互いに見せ合い、淫靡な微笑みを交わすアスナとレイン。その様子を間近で見つめていたセブンは、徐にアスナのバストから唇を離した。
「――ねえねえ、アスナちゃん」
喉を伝い落ちるどろりとした感触が、アスナの喉から過ぎ去っていく中。
体を少しだけ起こしたセブンは辺りをきょろきょろと見回す。近くに肉食動物がいないか確かめる草食動物めいたセブンの仕草に、彼女が誰を探しているのかを気づかないアスナではない。
「大丈夫。キリトくんならまだ来ないよ。ユウキとシリカちゃん、ベッドシーンの指導してもらうって言ってたし」
そう言って、アスナはプールサイドから繋がる豪勢なゲストハウスの方へちらりと視線を向ける。あの中では今頃、事務所所属アイドル・ユウキとシリカが、キリトにたっぷりと貪られているはずだ。
ＶＲ空間特有の室内防音機能が働いているおかげでゲストハウス

内から音は聞こえてこないが、もし窓の一つでも開いていれば聞こえてくるのだろう。ベッドシーン指導と称してキリトにハメ倒される、小柄な雌二匹の歓喜に満ちた鳴き声が。男慣れしたロリ娼婦という役に扮し、過激な下着一枚だけを身につけてマフィアの幹部の雄マラに媚びるシーンの練習は――そうそう簡単には終わらないだろう。

「それじゃ……アスナちゃん。この間言ってた仮ＩＤの件なんだけど、ちゃんと用意したわよ。もちろんキリトくんには内緒で」

「本当？　ありがとう、セブンさん」

「どういたしまして。この四人で合ってるわよね？　念のため、一応確認してもらえるかしら」

セブンが空中に展開したウィンドウに映し出される、四人分の仮ＩＤ。この仮想空間へログインするためのチケットに記されているのは、いずれもキリトをよく知る少女達の名前だった。

キリトの側に付き従った者。キリトを信奉する者。キリトの過去の痛みと傷を知る者。そして――おそらくはどこぞの領主にでも頼まれて、キリトの身辺を探っている者。

いずれこの空間にログインする事になるであろう少女達のための仮ＩＤを、セブンはしっかりと用意していた。

そんなアスナとセブンの横では、興味深げな表情をしたレインがウィンドウをしげしげと眺めていた。

「へー……この子達が新しく《協定》に加わる子なの？　アスナちゃん」

「うーん……加わる可能性が高いって私が思ってる子……っていう方が正しいかな」

「なるほど。でも、もしこの子達全員が加わったら……私達全員で１５人かあ。なんだか凄いことになっちゃったね」

「ほんとほんと。これにキリトくん入れたら１６人でしょ？　……８人レイドパーティが二つも組めるわね」

「うわあ……この面子でレイドパーティ組んで、しかも元《ＫｏＢ》の副団長様が指揮してくれるんでしょ……。

どんなダンジョンボスが相手でも一発でクリアできる気がするよ」

いつぞやの《エクスキャリバー》獲得クエストのように、息の合ったソードスキルの連携によって斬り刻まれるレイドボス――そんな物騒な光景を想像しながら三人の乙女達が笑いを堪えきれずにいると、不意にアスナのメッセージシステムに新着メールの通知が入る。

仮ＩＤを表示していたウィンドウをセブンが閉じる一方で、アスナがメッセージフォルダを開いてみれば、そこには『撮影終了♥』と題された一通のメールが届いていた。差出人のアドレスはユウキのものだ。本文には何も書かれておらず、画像ファイルが一枚添付されているのみ。若干怪訝な顔をしつつ、アスナはメールに添付されていた画像を表示した。

「へぇ……♥」

「うわぁ……♥」

「わお」

アスナは陶然と。レインは羨望を。セブンは驚愕を。大写しになった画像を見て、三人はそれぞれ違った反応と共に声を漏らす。

さもありなん。そこに表示されているのは、穢し尽くされたシリカとユウキの哀れな姿なのだから。

仰向けに寝転んだまま両脚を抱え込むようにして股を開く、いわゆる『まんぐりがえし』のポーズを取ったユウキとシリカ。両脚の間から覗く顔に年相応とは言えない程に妖艶な雌の媚笑を浮かべ、カメラに向けて股の間を惜しげも無く晒している。

シリカ達自身の指によって左右に開かれた秘所から当然のように溢れ出しているのは、どっぷりと濃密な精液。それが伝い落ちる先にある尻穴からは、ピンポン球より一回り大きなサイズの連結アナルパールが数個、その姿を覗かせている。生憎、ザーメンによって結合部は見えないが、パールの数から推測するにその大半は未だ二人の内に留まっているのだろう。

膣内に注がれたものと同じ精液をたっぷりと溜め込んだ、使用済みコンドーム。その一つを口に咥えたままカメラに向かってウィンクするユウキが斜めに被っているのは、おそらく撮影に使用した濃紫色のＴバック。黒く艶やかな髪の上では、口の開いた使用済みゴムから

溢れ出した精液や、直接ぶっかけられたと思しきザーメンが卑猥なコントラストを作り出している。

ユウキとは反対に口を大きく開けたシリカは、舌を思い切り伸ばし、表面に刻まれたタトゥーを見せ付けている。黒薔薇を模したその刻印が意味するのは、ちんぽ汁を恵んでもらうためならなんでもする精液中毒者（ザーメンジャンキー）。そしてトレードマークのツインテールを結ぶのは、ゴムはゴムでも避妊用ゴムの方だ。精液で重たく膨らんだコンドームを頭の左右に結びつけている姿は、ロリビッチと呼んでも差し支えないだろう。

散々辱められた仲間の姿に――誰かが、ごくりと喉を鳴らす。それだけで、次に何をすべきかは決まってしまった。

「……じゃあ……行こっか」

アスナの言葉に静かに頷いた姉妹は、アスナの上から体を起こして立ち上がり、そのまま連れだってゲストハウスへと向かう。

隅から隅まで、一匹の雄が支配する縄張りであるこの世界で、今日もまた互いを味わい、ひたすらに貪られるために。

ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：ＩＤ管理処理　開始

ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：副管理者権限による申請に基づき、下記の仮ＩＤを作成します

ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：［　Ｓ―０００１２：ロニエ　］

ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：［　Ｓ―０００１３：ルクス　］

ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：［　Ｓ―０００１４：サチ　　］

ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：［　Ｓ―０００１５：アルゴ　］

ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：仮ＩＤ対応ユーザーログイン時、仮ＩＤを正式ＩＤに更新する処理が自動で実行されます

ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：仮ＩＤを無効化する場合は、副管理者以上の権限を持つユーザーに問い合わせてください

ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：なお、この件に関するパパへの直接的な問い

合わせは推奨されません
ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：どうしてもという場合は、事前に有識者（ママ、アリスさん、セブンさん等）へ相談することをお勧めします
ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：この処理に関するログを《Ｓｙｓｔｅｍ Ｌｏｇ》フォルダから《パパは見ちゃダメです》フォルダに移動します
ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：移動完了しました
ＳｙｓｔｅｍＬｏｇ：ＩＤ管理処理　終了

13―1．月光のカルネヴァーレ（ロニエ・アスナ他）

双発型熱量圧縮式ジェットエンジン、安定稼働中。
腰部および脚部サポートスラスター、異常無し。
鋼素――もとい、ナノメタル製大型ウィング、シールドモードで機体前面に展開。メインカメラおよびサブカメラによる視界確保に支障なし。マルチツールテール、オートバランサーモードで稼働中。
センサーシステム異常なし。到達高度および上昇速度を確認。問題なし。
雲海突入。事前想定時刻より2．8秒の遅れだが許容範囲内。雲海圏突破まで、3、2、1――突破。
『――お待たせいたしました、お嬢様方。ようこそ、限界高度空域へ』
まん丸の月と星の光に照らされて、夜の中に浮かぶ一面の雲海。そんなコントラストの効いた白い海原を堂々とぶち抜いた鋼鉄の異形から響くのは、どこかおどけた男の声。
夜の闇を凝縮したかのような黒金の翼を広げれば、鋭い角を王冠のように掲げた竜の如き頭部と、翼と同じ色で統一された鋼の肉体が露わになる。背中に据え付けられた二基のジェットエンジンと脚部のスラスターを噴かし、雲海の少し上で高度を安定させる異形。その太い両腕が握っているのは、巨大な籠――気球の下についているようなサイズの――だった。
「やっと到着ですか。……思っていたより時間がかかりましたね。キリト」
『仕方ないだろ、アリス。速度より安全重視で飛んでるんだから、これくらいかかるって』
「私としてはもっと早くても良かったのですが……。リーファ以上に早く飛べるのでしょう？　この鋼素の竜は」
『それはそうだけど、頼むからうちのスピード狂を基準にしないでくれ……。雨縁（アマヨリ）の速度が懐かしいのはわかるけどさ……』
籠の上部に張られていた防護カバーの下からもぞもぞと這い出てくるなり、金髪の女騎士――アリスは、鋼鉄の竜に向かって愚痴る。

むむむ、と眉根を寄せて難しい顔をするアリスに若干エフェクトがかかった声で応じるのは、誰あろうキリト。このプライベートＶＲ空間の管理者にして、翼持つ鋼の竜――アンダーワールド製パワードスーツ・『月影（げつえい）』の仕手（パイロット）だった。

外部カメラで捉えたアリスの顔を見つつ、ヘルメットとフェイスガードが一体となった頭部装甲越しにキリトが苦笑いしていると、アリスに遅れて他の乗客達もカバーの中から這い出してくる。

「ふうっ……。なかなか心地よいフライトだったわよ、キリトくん」

『そりゃどうも、アスナ』

「帰りも安全運転でよろしくね？　わかってる？　安全運転だからね？」

『わかってる、わかってるって。そんなに言わなくても、安全最優先で動かすから大丈夫だって』

「どうかなあ……なんとなくだけど、キリトくんには前科がある気がするのよね……。私のフラクトライトがそう叫んでるというか……」

創世神ステイシア――の、アバターでログインしているアスナに、キリトは頷きを返す。といってもキリトの頭は月影の頭部装甲にすっぽりと覆われているため、そのモーションははっきりと見えはしなかっただろうが。

そして、アスナとアリスが出てきた籠の中――防護カバーの下でもぞもぞと動く最後の乗客の姿を、『月影』のメインカメラが捉える。

『大丈夫か、ロニエ』

「ん――はっ、はい！　大丈夫です、キリト先輩！」

『一応、防寒システムは作動させてるつもりだけど……もし寒かったり、息苦しくなったらすぐに教えてくれ』

「はいっ！　わかりました、先輩」

やっとのことで姿を現したのは、キリトの可愛らしい後輩――ロニエ・アラベル。左右に一房ずつ束ねたごく細いお下げと背中まで伸びた後ろ髪がよく似合っている彼女は、乱れた髪を手ぐしで軽く整えてからこくこくと頷いた。

ロニエ。

そう、ロニエ・アラベル。
かつてセントリアの修剣士学院でキリトの側付きを勤めていた、健気な後輩。
２００年という永き時を鋼の竜の内にて越え、今ここに至った彼女の姿は、今のキリトやアスナ、そしてアリスが知っているロニエの姿より若干大人びていた。といっても、ローランネイが語っていた『養子を迎えた』あたりの年齢にはとても見えず、せいぜい１年そこらの時間が経過した辺りだろう。
ロニエ自身の記憶として残っているのも、アンダーワールド全土を巻き込んだ戦いが終わってざっくり一年ほどが経過したあたりまでらしい。彼女の口から、ロニエとティーゼが反旗を翻したノーランガルス皇帝を討ったという話を聞かされたキリト達はもれなく驚かされた。
もっとも、ローランネイの口から『テロを未然に防いだり、養子を迎えたりしてましたよ。ちなみに私はその子孫です。よろしくお願いしますね、ひいひい……とにかく、おばあさま』という話を聞かされたロニエも口をあんぐりと開けて驚いていた。養子を取っていた事に驚いたのか、１０代でおばあさま呼ばわりされたことに驚いたのかは判断がつかなかったが。
そんなロニエの容姿がそれほど変わっていないのも、彼女の記憶の多くが封じられているのも――おそらくは星王となったキリトの所業だろうというのがキリト自身の見解だった。おそらくはシンセサイズの秘儀に近い何かを施した上で『月影』と共に眠りにつかせたのだろう。その当時の記憶を持たないキリトには、たとえかつての己がした事であっても、残された状況証拠より類推する他になかった。
なお、ロニエを含まない女性陣の見解は――
『キリトくんが迎えに来てくれた時に、自分だけずっと年上になっていたらイヤだもんね……』
『星王陛下がそこまで汲み取って、おばあさまをいい感じに調整してくれたんでしょうか。どう思われます？　アリス様』
『いえ、おそらくは星王妃……当時のアスナの差し金でしょうね。キ

リトがそこまで気を回せるか……正直に言って怪しいものです』
——という方向で一致していたが、それをキリトに伝えようとする者は誰一人としていなかった。
とにもかくにも、アンダーワールドにあるアラベル家の地下でアリスとアスナ、そしてローラ立ち会いの下、キリトによって解凍されたロニエは、体調の回復と経過観察を兼ねてアラベル家に数日滞在。その後、キリト達と共にワールドエンド・オールターに向かい、無事にログアウトに成功していた。
彼女のフラクトライトは現在、ラース支社のセキュリティルーム内に1ダースあるライトキューブ・パッケージ——菊岡曰く『数が多いと逆に怪しまれないんだよ。こういった物品なら特にね』——の一つに納められ、そこから他のＶＲ空間内にアクセスできるようになっていた。キリトのプライベートＶＲ空間もその一つである。
そんな経緯で彼女がログアウトに成功してから、今日でちょうど一週間になる。
そろそろ《ＡＬＯ》あたりのアカウントを用意すべきだろう——そんな事を考えながら『月影』をコントロールするキリトの視界には、アスナとアリスに左右を挟まれたまま月を見上げるロニエの姿が映っていた。
「わあっ……。なんて、きれい……」
籠から上半身を乗り出しながら、ロニエは夜の美しさに感嘆の声を漏らす。
『月は無慈悲な夜の女王』とは、誰かの形容だったか、あるいは何かのタイトルだったか。どちらにせよ、切れ間無き雲海を従えて仮想世界の夜を煌々と照らすその白い輝きは、女王の名に相応しいものだった。
現在の『月影』は、セントラル・カセドラルの頂上や《終わりの壁》を余裕で見下ろせる高度に在る。こんな高さから月を見る機会など、アンダーワールド出身であるロニエにはあるはずがなかった。
「こんなに近くでお月様を見るなんて初めてです……。なんだか、本当に手が届いてしまいそう……」

『よし、それじゃあこのまま月まで飛ぶか――って言えれば格好がついたんだけどな。今の俺じゃ、この高さが限界なんだよな……。

――いや、待てよ。高度はどうにもならないけど、月面を再現することならできるんじゃないか？

適当なルームにフィールドをつくって、重力パラメータを制御して……でもそれだけだと物理演算と動作へのフィードバックがちょっと怖いか……？』

「……せんぱい？　あの……キリト先輩？　せんぱーい？」

『……うぉっ、ご、ごめんロニエ。ロニエと話してると、どうも止まらなくなっちゃうんだよな……』

口から思いついたばかりのアイデアが溢れ出すキリトに置いてきぼりにされて、所在なさげな様子ではにかむロニエと、なんともきまずそうなキリトの声。そんなキリトとロニエの姿を横から眺めながら、アスナとアリスはくすくすと笑う。

一週間ほど前、ロニエを連れてくるついでに回収した『月影』の第五次テスト飛行。そのついでに、たまたま居合わせた面子によって企画された雲上お月見会は、至極まったりとした雰囲気と共に続いている。

キリトとセブンによるモジュールとマテリアルの置換作業や、過去三度の墜落を経て出力とバランスを調整された『月影』も、限界高度まで約１０メートルという高高度にあっても安定した飛行を実現していた。

「ねえねえ、キリトくん」

『ん？　どうした、アスナ？』

リラックスした微笑みと共に満月を鑑賞していたアスナが、不意にキリトの方へ視線を向ける。

「――『月が、綺麗ですね』」

『だろ？　結構苦労したんだぜ。デフォルトで入ってる背景オブジェクトは、近づくとやたらとぼやける仕様でさ……』

「そうじゃなくて……もー、相変わらずなんだから」

『えっ？　ええ？』

どこか不満げな表情を見せるアスナの様子にキリトは戸惑う。己の対応に、何か不適当なものがあったのだろうか――と。そうして、月が綺麗、月が綺麗、と脳内で反芻すること暫し。

やっとのことで思い至るのは、そのフレーズについて回る有名な逸話。

『……あっ！』

「やっとわかった？」

『あっ、はい……わかりました。やっと』

「よろしい。じゃあ、今度はキリトくんから……ね？」

煌々と輝く満月の光に照らされた頬をうっすらと紅く染めながら、アスナはキリトの言葉をねだる。

ごくごく当たり前な言葉の裏に含まれた意図と期待にすぐさま気付けなかった事への申し訳なさを感じながら、キリトは改めて口を開く。

『アスナ』

「はい」

『――月が、綺麗ですね』

照れ交じりの視線の先でぱっと華やぐのは、月光よりも眩いアスナの笑顔。

「うん……すごく、綺麗。キリトくんと一緒に見てるからだね、きっと」

とある有名な文豪が迂遠に、そして奥ゆかしく訳したというその言葉の源流は、実にストレートな愛の言葉。最初から気づくことが出来ていればもっとサマになっていただろうが、こうしてギリギリの所でリカバーできただけよしとしよう。

暫しの間目を閉じ、キリトの言葉と声を堪能するアスナ。互いの位置関係も相まって、その姿はまるでキスを求めているかのようだった。とはいえ、パワードスーツを装甲していてはそれも叶わない。

頭部のみ装甲解除する機能を付け忘れていた事をキリトがひっそりと後悔している横で――二人の世界からはじき出されたもう二人がもぞもぞと蠢く。

「あ、あの、アリスさま。キリト先輩とアスナさまは、いったい何の話を……」
「おそらくですが……リアルワールドの人間にしか分からない符牒で会話をしているのでしょう。
覚えておきなさい、ロニエ。あの二人は時々こういうことをします」
「はい、アリスさま。勉強になります。いいなあ、アスナさま……」
「あとで意味を問いただすことにしましょう。……主に、キリトの方に」
ひそひそと囁きを交わす二人の横で、アスナは若干気まずげな微笑みを浮かべる。アンダーワールドとリアルワールド――というか日本は、使っている言語こそ同じだが文化や風土は大きく異なる。アンダーワールドにいない文豪の逸話を持ち出したところで、ロニエ達がピンと来ないのは当然のことだった。
カメラ越しに突き刺さる、アリスの『それで、さっきのあれはどういう意味だったのですか?』とでも問いたげな剣呑な視線。微妙な表情をしている己の顔をアリスの視線から守ってくれた頭部装甲の存在に、キリトは改めて感謝した。
『さて、お客様方。そろそろ戻ろうか。オートパイロットのテストもしたいしな』
「オートパイロット……とは、なんなのですか。キリト」
『簡単に言うとだな、アリス。俺の代わりに月影(こいつ)を勝手に操縦してくれる仕組み……ってところかな。
目的地は……とりあえず、一番近い発着パッドでいいか』
話題逸らしがてら、キリトはオートパイロットシステムを起動する。
『月影』の回収後、キリトはＶＲ空間内の各所にメンテナンスベースを兼ねた発着用パッドを数カ所設置している。ＳＦ映画に出てくるような、機体が着陸するとハンガーが迫り上がってくるタイプのアレである。
当初はガレージの地下を起点に床と天井をぶち抜く垂直射出式リ

ニアカタパルトを実装していたが、テスト飛行中にふらっとガレージを訪れたシノンが落下しかけるという事故が起きて以来、この方式に変更された。

キリトがオートパイロットに操縦権限を預ければ、システムが最寄りの発着パッドを検索して目的地を設定。そのまま『月影』は、乗客に負荷をかけない程度の速度と姿勢を維持したままで高度を落としていく。

高度が下がる時に感じる、鳩尾の辺りが冷えるようなふんわりとした浮遊感。《ＡＬＯ》で慣れっこのキリトとアスナ、そして飛龍に乗り慣れたアリスにとっては当たり前の感覚に対し、きゃあきゃあと声を上げてはしゃぐロニエの様子がまた愛らしい。

「先輩！　下を見てください！　あんなに建物がいっぱいです！」

籠から身を乗り出しながら、ロニエは下方に広がる光景に興奮する。女性陣に望まれるがままキリトが次々に建物やら風景やら設備やらを違法建築し続けた空間である。最近ここに足を踏み入れたばかりのロニエには何もかもが珍しくて仕方が無いのだろう。

建築中の水族館が完成したら、真っ先に連れて行ってやろう――そんな事を考えるキリトの側で、ロニエは無邪気な様子で建物の一つを指さす。

「先輩、先輩！　あちらの、地面が薄茶色をした所にある丸い建物はなんなのでしょう？」

『ああ、あれは闘技場（コロシアム）だな。それで、周りにあるのは砂漠フィールド。よく、アリスやユウキ達がデュエル……お互いの実力を測るための場所として使ってるよ。もちろん、俺もな』

「なるほど……手合わせをするための場所なのですね」

言えない。

まさか『全身に卑猥な文言を落書きしたアリスや、目隠しと首輪付けて猿ぐつわを噛ませたユウキを観客（群衆モデルを使ったプリレンダムービー）の前に引きずり出して公開陵辱するプレイ』に使った場所だとは。

「先輩！　あちらの、なんだかちょっとくたびれたような建物は……」

『あれは……アパ……集合住宅だな。あの建物一つに部屋が何個も集まってて、一つの建物の中で色々な家族が暮らせるようになっているんだ』

「そうなのですか……。なんだか、修剣学院の寮を思い出しますね」

言えるわけがない。

まさか『強制売春アパート　狙われた女子大生・アスナ』とか『強制売春アパートＰａｒｔ２　裏切りの親友・リズベット』みたいなプレイに使った場所だとは。

そこら辺の事情を把握しているアスナとアリスは、ロニエの服の裾を左右からそっと抑えながら、ただただ微妙な苦笑いを浮かべるに留めた。少なくとも、キリトはウソを言っているわけではないのだから。

「あっ、先輩先輩！」

『ん？』

「『月影』の行き先、この黒い建物みたいです！　あれはどういった建物なのですか？」

『黒い建物？　……ああ、あれか。

あれは……え、あれは――あああああああああっ!!???』

外部カメラが捉えた映像を見て素っ頓狂な声を上げるキリトに釣られ、アスナとアリスも籠から身を乗り出す。四人の視線と『月影』が揃って向かう先、それは夜の闇よりなお黒く暗い尖塔を生やした王城の如き建物――『黒夜館』の名で知られた、今最も接近する必要のない場所だった。

とどのつまりは、娼館。あるいはラブホテルである。

いや、今やこの空間にある建物のほとんどが実質的なラブホテルであるとはいえ、『結果的にそうなった』ものと『最初からそういう目的で作った』ものでは若干毛色が異なる。もちろん、『黒夜館』は後者である。

そんな『黒夜館』の屋上にも、『月影』用の着陸パッドが一つ増設されていた。なかなか格好良さそう――などという理由で、なんとなく着陸パッドを増設したことをキリトは今更になって後悔するが時既

に遅し。
「……先輩？」
『あ、ああ……えっと、あれはな、ロニエ……』
純粋な後輩への答えに窮しながら、キリトはオートパイロットを解除して別の場所へ着陸しようと試みる――が、どうにも解除されない。もう一度解除コマンドを送信してみる。まあ当然というか、解除されない。おそらくは新しく組み込んだシステム故の不具合だろう。新規実装したシステムには時たまこういう事象が発生する。
突き刺さる視線が痛い。アリスの『何を考えているのですか？』という視線が、アスナの『どういうつもり？』という視線が痛い。首を小さく横に振って『違うんだ、これは』と弁解しながらオートパイロットを解除しようと何度も試みるキリトだったが、結局それは徒労に終わった。
事前の目標設定に忠実に作動したオートパイロットシステムは、最寄りの着陸地点――『黒夜館』の屋上に据え付けられた着陸パッドの直上に到達すると、スラスターを軽く噴かしてゆっくりと降下。そのまま静かに着陸してみせると、乗客の乗った籠を着陸パッドの上に降ろした。
「……オートパイロットシステムは、まだまだ改良が必要みたいだな……」
「ええ、そのようですね」
一足早く籠の縁を飛び越えて降りてきたアリスが、パワードスーツの上部装甲を解除して降りてきたキリトにちくりと小言を刺す。呆れたような視線に苦笑いを返しながら、キリトは籠の中に腕を伸ばすと、アスナ、そしてロニエを抱え上げて籠から降ろした。
「あっ……ありがとうございます、先輩」
「どういたしまして、ロニエ。どうだった？　初めてのフライトは」
「ちょっと緊張しましたけど……でも、とっても楽しかったです！」
「そうか、ロニエが気に入ってくれたみたいでよかったよ。よし、それじゃあ、今日はこの辺で……」
「先輩。それで……ここは一体どういう建物なのでしょうか？」

なんとなく雰囲気で誤魔化してやり過ごそうとしたキリトの計画を水泡に帰す、ロニエのストレートな質問。
「あ、ああ……。ロニエ、ここはな……その……」
「……もしかして、ですけど。
先輩と、アスナさまやアリスさま達が……その、えっと……おっ、『大人の時間』を過ごすための場所……だったりするのでしょうか」
答えに窮するキリトを真正面から貫く、後輩の眼差しと問いかけ。
どうにか助け船を出そうとタイミングを見計らっていたアスナとアリスも、予想外の事態に戸惑って動けずにいた。
そうとは気づかぬうちに状況の支配者となったロニエは、自らが口にした内容と三方から送られる戸惑いの視線に頬を真っ赤に染めていた。
「そ、その……私、たまたま見てしまったんです」
「見たって……何をだ？」
「先輩とアスナさま達が……している映像を、です。
そ、その、ここでできることを自分なりに調べていたら、たまたま『共有映像フォルダ』という所に辿り着いてしまって、手が滑って、それで……！　わざとではないんです！　わざとではないんですけど……目が離せなくて……」
「わかった、大丈夫。ちゃんとわかったから落ち着け、ロニエ。ロニエは何も悪くない。これは何から何まで俺が悪い」
わたわたと慌てふためく後輩を、キリトはどうにかこうにか宥め賺す。
件の『共有映像フォルダ』――とどのつまりは『今までここで撮りためてきたハメ撮り映像コレクションを納めたフォルダ』には、外部から参照や保存が行われないよう何重ものセキュリティがかけられている。ただ、それはあくまで外部からの話であって、管理者であるキリトはもちろん、正規のログイン権限を持つアスナ達は自由に閲覧可能だ。
そしてそれは、一週間ほど前にログイン権限を得たロニエも例外ではない。

あのフォルダには、キリトと関係を結んだ女性――アスナを筆頭に計11名分の痴態がぎっしりと納められている。よしんば映像そのものを再生しなくても、ずらりと並んだサムネイル画像とタイトルを見ただけで、ここで何が行われているかは察するに余りあるだろう。

「ロニエ。今まで黙っていて、本当にごめん。もし、まだ間に合うなら……改めて説明させてくれないか。俺とみんなの関係について」

「……はい。聞かせてください、先輩」

事情を説明しようとしたアスナを視線で押し止め、キリトは己を取り巻く今の状況をロニエに語り聞かせる。

アンダーワールドでの200年を経てリアルワールドに帰還したこと。その時の記憶のほとんどを失っていること。《SWORD》協定の立ち上げと、協定に参加した愛する者達のこと。世間的には認められ難い関係を結んだこと。そして、いずれはきちんと責任を取るつもりでいること。

話すべきだった事を話し、伝えるべきだった事を伝える。

「――正直、最初はみんなの勢いに押し切られた所もちょっとあった。でも、今は違う。俺は俺の意思で、俺が望んで皆と関係を結んでる。だから、何が起きても全ての責任は俺にあるし、何も起きないようにするのが俺の務めだ。

……こんな所かな」

「……」

頬でも張り倒され、詰られるだろうか。そうなっても仕方の無いことだろう。そう覚悟しながらの説明が終わっても、ロニエはしばらく俯いたままだった。胸元でぎゅっと握りしめられた彼女の両手は、微かに震えている。どう声をかけて気遣ったらいいか迷うキリトが、その答えを見つけ出すより早く、ロニエは顔を上げた。

固く強い決意を秘めたその眼差しを――アスナの方に向けて。

「――アスナさま！　私……私にも、アスナさまの《協定》に参加する資格はあるのでしょうか!?」

「んー……そうねぇ……」

ロニエの突拍子もない発言と、必死さの滲み出た声音にキリトが思

わずぎょっとする。
　その一方でアスナとアリスはといえば――まるでそうなることを最初から予期していたかのように悠々とした態度で、ロニエの言葉を受け止めていた。
「ロニエさんなら……正直な所、何の問題も無いのよね。ね、アリスさん？」
「確かにそれは私も同感ですが……よいのですか、アスナ。キリトの相手をこれ以上増やしてしまって」
「あら。今だって私を含めて１１人もいるのよ、キリトくんのお相手。それが１２人になった所で大して変わらないわよ。
　それに……キリトくんに会いたいっていう気持ちだけで、１００年以上も頑張って待ってた子を無下にできないじゃない？」
「……ええ、そうですね」
　アスナの言葉に、アリスは小さく頷く。何もできず、ただ待つ身の辛さを知るが故に。己との再会を願い、未だ眠り続ける妹の存在があるが故に。
「というわけで、ロニエさん」
「は、はい！」
「他の皆にはあとで私から話しておくけど……とりあえずはようこそ、《ＳＷＯＲＤ協定》へ。
　これからキリトくんとどうなっていくかは、ロニエさん次第よ。頑張ってね」
「は、はい！　頑張ります！　ありがとうございます、アスナさま！　アリスさま！　私……頑張ります！」
　深々と頭を下げるロニエの初々しさに、アスナ達の顔から思わず笑みが零れる。そうして、再び顔を上げたロニエは、改めてキリトを真っ直ぐに見つめ――たかと思ったのも束の間、恥ずかしさを堪えきれず視線を下へと逸らした。
「せ、先輩……」
「お、おう。どうした、ロニエ」
「もしかして、私……今、ものすごく恥ずかしい事を口走ってしまった

のではないでしょうか……？」
「……まあ、そうなるな。うん」
うつむき加減のロニエの頬が真っ赤に染まる。《協定》への参加表明、つまりは『私はあなたを愛しています』という愛の告白とほとんど同じことを、想い人の目の前で盛大にしてしまった事を改めて理解したロニエは、頭から湯気が噴き出しそうな程に強い羞恥を味わっていた。
後輩がここまで頑張ったのだ。それに応えられないようであれば、先輩の名が廃るというもの。すっ、と小さく息を吸い、キリトは気合いを入れ直した。
「ロニエ」
彼女の名を呼びつつ両手を伸ばしたキリトは、縮こまってしまった後輩の体を包み込むようにして優しく抱き寄せる。ほとんど密着したような距離の中、まだ顔を上げられないでいるロニエは、若干の躊躇いと共に身体をキリトの腕の中へと預けた。
「まったく、俺はダメな先輩だな……。こんな風になるまで、ロニエの想いに気づいてやれなくて……」
「そんなっ……そんなことありませんっ。私が……私が勇気を出せなかっただけなんです……」
「でも、今は頑張ってくれただろ？　だから今度は、俺の番だ。ロニエ」
もう一度、彼女の名を呼ぶ。おずおずと顔を上げた彼女の瞳の中に、丸い月とキリトの顔が映り込む。
己の顔はともかく、その月は――とても、綺麗だった。
「長い間……ずっと待たせ続けて本当にごめん、ロニエ。
もし、ロニエさえよければ……これからも、俺の側に居てくれないか。この先の人生、ずっと」
「……そんなの、そんなの当たり前じゃないですか。
私は……ロニエ・アラベルはこれからもずっと、先輩の側にいます。だって私、キリト先輩の《傍付き》ですから」
修剣学院で共に学んでいたあの頃より、少しだけ伸びた髪と、少し

だけ大人びた笑顔。そして、２００年の時を経てもなお少しも変わらない想いと共に、ロニエは答える。

彼女の小さな顎に、キリトはそっと手を当てる。自然とその意図を察したロニエは、先輩、と微かに呟くと、そっと両の瞼を閉じる。信頼と期待、そして恥じらいと共に差し出される傍付きの唇に、キリトは静かに唇を重ねた。

「んっ……」

ロニエの口の端から微かに漏れた官能の吐息が、理性の軛に罅を入れる。いつもの貪るような激しさを封印しながら、キリトはあくまで優しく、丁寧に、ロニエのファーストキスを奪う。

初めてのキスにどこか戸惑いながらも、ロニエは唇と唇の逢瀬の感触を受け入れていく。まだ息継ぎがうまく出来ないのはご愛敬というところだろうか。ゆったりと続いたキスが終わり、二人の唇の間に再び距離が生まれると、ロニエはふっと息を吐いた。

恥ずかしそうに微笑むロニエと視線を交わしたまま、キリトは空いた片手で彼女の焦げ茶色の髪をそっと撫でる。

「……先程のような行為を、天界……いえ、こちらの世界では『キス』と言うのですよね。先輩」

「そうだよ、ロニエ。……あれ？　俺、『キス』なんて神聖語、教えたことあるっけ……？」

途端、ロニエの後ろに控える女性二人の目つきが、すうっと鋭くなる。キリトに突き刺さる『後輩にそんなことまで教えていたの？』という意が込められた視線。その気配を背中で察したのかどうかはわからないが、とにかくロニエはふるふると首を横に振ってキリトのセクハラ疑惑を払拭した。

「い、いえ、違うんです！　先輩に直接教わったわけではなくて……ここにあった映像で、勉強したんです！」

アスナさま達がたくさん『キスして』とか『キスしたい』と仰っていて！　そうしたらいつも先輩が唇を……なので……」

「なるほど……うん。さすが勉強熱心だな、俺の後輩は」

媒体に問題があったとはいえ、知識を身につけようとした姿勢は認

められるべきだろう。焦げ茶色をした少し長い後ろ髪を撫でて、ロニエの努力を褒めてやると、ロニエはキリトの体にそっと抱きつく。

状況に慣れてきた今、キリトは押し当てられる実に豊満な膨らみの感触にようやく気づいた。アンダーワールドにいた頃は全くと言っていいほど意識していなかった、後輩の肢体。それが今になって、某双子整合騎士を彷彿とさせる奇襲具合でキリトの精神に至近距離から抉り込んでくる。

下半身に集まる血と欲望。その叫びと本能に従うのは、理性という名の鎖によって己を抑え込むよりよほど簡単だ。だが、そんな事をしてしまってはただの獣も同然――。

「……せっ、先輩」

「ん!?　あ、ああ。ロニエ」

「べ、勉強熱心なのは、良いことです……よね？」

「へ？　そりゃあ……いいことだと思うぞ」

どこか引っかかりを感じる声と共に繰り出されるロニエの問いに、キリトは首を縦に振る。その答えにどこかほっと安堵した表情を見せたあと、ロニエは何度か深呼吸をして己を落ち着かせる。

それはまるで、何か重大な決意を――自らの人生を左右する大きな決断をするかのように。

「で、でも、やっぱり一人で学ぶだけでは限界があると思うんです！　だからこそ、修剣学院にも傍付きという制度ができたのだと思いますし！」

「まあ、確かにそれはそうだな。一人で学ぶより、誰かに教えてもらう方が効率的だろうし……」

「ですよね、ですよね！

で、ですから、その……その……わっ、私にも、アスナさま達のように……夜伽の術を教えていただけないでしょうか!?　キリト先輩！」

――そういえば、今夜は満月だ。

青白く輝く月より降る光は狂気を孕み、時に人畜無害な青年を恐ろしい人狼に変えてしまうという。

そんな月の光に、きっとロニエもあてられたのだろう。
これ以上無いほどの羞恥に震える後輩をぎゅっと抱き締めながら、キリトは自らの本能を縛る理性という名の銀鎖がぶちぶちと千切れていく幻聴をどこか遠くに聞いた気がした。

「――ロニエさんって、ものすご～～～く大胆な女の子だったのね……」
「へっ!?　い、いえっ、そんなことは――」
「はいはい、動かない動かない。まだ髪の毛の支度（セット）が終わってないんだから。
せっかくロニエさんが勇気を出したんだもの。一番綺麗な姿にしてあげないとね」
上半身が余裕でまるごと映るほどに大きな鏡がついた鏡台の前に座らされたロニエ。その柔らかな髪に気遣いの窺える手つきで櫛を通しながら、アスナは咄嗟に首を横に振ろうとしたロニエを押し止めた。
娼館『黒夜館』の中に何カ所か設けられた、プレイ用ではないバスルーム。丁寧なシャワーで清めた柔肌を、濃紺色をしたお揃いのバスローブだけで包んだアスナとロニエの二人がいるのは、そこに併設されたパウダールームだった。
「気持ちいい？　ロニエさん」
「はい、アスナさま」
「ふふっ。『さま』なんて付けなくても、ただの『アスナ』でいいのよ？　アンダーワールドならともかく……ここでは私もロニエさんも、ただの女の子なんだし」
「そ、それはさすがに畏れおおすぎます！　アスナさまを呼び捨てだなんて、そんな……」
「そう？　私は別に気にしないよ？」
「私が気にしてしまいます……。ですので、どうか『アスナさま』のま

までお願いします……」

恐縮の余り身を縮こまらせるロニエを宥め賺しつつ、アスナは彼女の髪を優しく整える。その様子は妹の身支度を調えてやる姉のようで至極微笑ましい。まあ、ある意味ではロニエはこれからアスナの妹になるようなものなのだから、微笑ましいのも当然と言えば当然かもしれないが。

「でも、ロニエさんには本当に驚かされたわ。キリトくんへの猛アタックっぷりもそうだけど……まあ、キリトくんはかなり鈍いからあれくらいでちょうどいいんだけど。

……本当にいいの？　せっかくのはじめての夜なのに……私達が同席しちゃって」

鏡に映ったロニエが、アスナの問いかけに微かな首肯を返す。

遡ること少し前、屋上の着陸パッドで繰り広げられたロニエの告白劇と爆弾発言のあと。二人きりの時間を過ごさせてやろうと気を回し、そっとログアウトしようとしたアスナとアリスを押し止めたのは、まさかのロニエその人だった。

とはいえ「一緒にしませんか？」などという直接的な言葉を口にすることができるはずもなく、ロニエは赤面したまま口を噤んでしまう。結局、さすがに空気を読んだキリトが、後輩の意を汲んでアスナとアリスを誘い――今に至る。

「わ、私一人では、先輩にご満足いただける自信が無くて……。それに、アスナさま達にご一緒していただけた方が、先輩も嬉しいかなと……」

「そうなんだ……こんなに先輩想いの後輩を持って、キリトくんは本当に幸せ者ね」

慣れた手つきでロニエの髪を梳かし終えたアスナは、櫛をストレージに格納すると、ロニエの身体を背後からそっと抱きしめる。首筋に回る両腕、バストローブ越しに触れあう身体を通して、ロニエの鼓動の高鳴りが伝わってくる。

「ロニエさん、緊張してる？　……って、緊張してるに決まってるよね」

「はい……。少し、ですけれど……」
「大丈夫だよ。こういうときのキリトくん、うんっと優しくしてくれるし……私とアリスさんもお手伝いしてあげるから」
待ち受ける未知の体験に身を強張らせるロニエの耳元に唇を寄せながら、アスナは先達としての言葉を囁く。
キリトと初めて褥を共にする直前の女性に相談を受けたり、経験者としてアドバイスを求められたりするのはこれが最初の事ではない。まあ、さすがにその場に居合わせるのはこれが初めてではあるが。
自らの心臓の音をロニエに聞かせるように、アスナは彼女の身体を抱き寄せる。
「リラックス――ええと、つまり、身体の力を抜いて自然の成り行きに任せる……ってくらいで大丈夫よ。
『キリトくんをたくさん気持ちよくしてあげたい』って考えるのは、もう少し慣れてからでもいいんだから」
「そうなのですか？」
「ええ。修剣学院のカリキュ……授業内容は知らないけど、最初からいきなり何もかも詰め込もうとはしないでしょ？
それと一緒。少しずつ学んで、少しずつ覚えていけばいいの。キリトくんや私達と一緒に、ね？」
「少しずつ……少しずつですね。ありがとうございます、アスナさま」
決意を固めるかのように、ロニエはこくこくと頷く。教え甲斐のある生徒を持ったような気分で、アスナは鏡越しにロニエを見つめた。
「それじゃあ、最後に確認。もし、どうしても嫌な事だったり、これ以上続けたくないなって思ったら……」
「『転移結晶』でしたよね、アスナさま」
「うん、その通り。それを言えば、キリトくんは絶対に止まってくれるから。覚えておいてね」
「はいっ！」
抱きつく両腕を通し、ほんの少しだが緊張が解けたような感触が伝わってくる。鏡に映るロニエと視線を合わせて微笑みを交わしたあと、アスナは抱擁を解いた。

微かな開閉音と共に、背後にあるパウダールームの扉が開いたのはちょうどそんなタイミングだった。
「――お待たせしました、ロニエ、アスナ。こちらは準備完了です」
「ありがとう、アリスさん。それで、どの部屋にしたの？」
「突き当たりの大部屋にしました。あの、大きな窓がある部屋です」
「あのお部屋かー。なかなかいいチョイスね」
白いバスローブに身を包んだ金髪の女騎士――アリスが、「でしょう？」とでも言うかの如き自信を滲ませながら頷く。
アスナとロニエより一足早くシャワーを終えていたアリスは、諸々の準備を整えるためにキリトと行動を共にしていた。普段であればそれは『一足先にキリトに抱かれにいく』というのと同義ではあったが、キリトもアリスも流石に空気を読んだらしい。眩い金色の髪に乱れは無く、バスローブから覗く白い肌にも唇の痕がついていたりはしなかった。
「それと……ロニエ。キリトからこれを預かってきました」
コンソールウィンドウを操作したアリスが、ロニエのアイテムストレージに何かを転送する。
まだ慣れないユーザーインターフェイスに触れる指先に若干のぎこちなさを残しながらも、『ステイシアの窓』を開く時と同じ要領でアイテムストレージを開いたロニエは、そこに表示されたアイテム情報に目を見開いた。
「これ……修剣学院の制服……！」
「あの鋼素製の竜――月影の中に、データとして保存されていたそうです。
まったく、キリトときたら……今の今まで渡すのを忘れていただなんて、相変わらず妙なところで抜けていますね」
「あの、アリスさま。これ、着てもよろしいでしょうか」
「ふふ。何を当たり前のことを。それはもともと、お前のものです」
立ち上がったロニエは、微笑むアリスに小さく一礼したあと、制服を装備アイテムとして選択する。ロニエの全身をぱっと包んだ淡い光が消え去る頃、そこには懐かしい制服に袖を通し終えたロニエの姿

があった。
　黒に近い濃いめの灰色を基調とし、首元にネクタイを結んだ華美さとは無縁の制服。少し大人びたロニエがそれを着用しているというだけで、空気がふんわりと華やぐ。
「へ、変なところはないでしょうか、アリスさま……」
「とてもよく似合っていますよ、ロニエ。アスナもそう思うでしょう？」
「ええ。とっても綺麗よ、ロニエさん」
「えへへ……ありがとうございます。アリスさま、アスナさま」
　スカートの裾を緩く翻しながら、ロニエは姿見の前でくるりと回り、己の出で立ちを確かめる。その可愛らしい仕草を眺めながら、アスナは小さい顎に指先を当てて何事かを考え込む。
「やっぱり制服って良いわよね……。そうだ、アリスさん。せっかくだし、今日は私達も制服にしましょうか」
「おや、気が合いますね。ちょうど、私も同じ事を言おうと思っていた所でした。アスナ」
　頷きあった二人は、ストレージから制服を選択して装備する。ただしこちらは修剣学院の制服ではなく、帰還者学校のものだ。深い濃紺色をベースに白いラインを入れたシンプルな制服は、アスナにとっては普段から着慣れたものであり、アリスにとってもここで時折袖を通しているものだった。
「よーしっ、それじゃあ……そろそろ行きましょうか、ロニエさん」
「は……はいっ！」
　制服に着替えて身支度を整えた三人は、パウダールームを出てそのままキリトが待つ部屋へと向かう。黒夜館の廊下に響くのは、敷かれた絨毯を踏みしめる三人分の微かな足音。先導するアリスに半歩ほど遅れてロニエ、アスナが続く。
　ふと、アスナは思う。ロニエは今、どんな思いで歩みを進めているのだろう――と。
　愛する男に抱かれるために、交合の為に作られた部屋へと向かう。一歩進む度に縮む距離は、ロストバージンへのカウントダウン。部屋

で待っているのが心から恋い慕う者だとはいえ、不安や緊張を抱かないはずも無い。それと同じだけの期待と共に。

そうこうしている間に、三人は目的の部屋の前に辿り着いていた。コンコンと扉をノックしたアリスは、そのまま静かに後ろへと下がった。

「さ、ロニエ」

「はい……」

アリスに促され、ロニエは扉の前に立つ。緊張に震えそうになる両手を胸元でぎゅっと握りしめ待っていた時間は、十秒にも満たなかっただろう。

ドアノブが回る小さな音と共に、扉が内側へと開かれた。

「――っと。お待たせ、ロニエ」

「せっ――先輩……！」

余りにも見慣れた、裾の長いジャケットを思わせる黒い上着――修剣学院時代の制服を着て出迎えるキリトの姿に、ロニエは思わず声を詰まらせる。

一方のキリトも、制服姿のロニエを見て納得したように頷いた。

「着てくれたのか、それ。すごく久しぶりに見た気がするけど……やっぱり似合ってるな、ロニエ」

「先輩こそ……その制服、わざわざ用意してくれたんですか？」

「ああ。ほら、見慣れた格好の方が、ロニエも安心できるかと思ってさ。

まあ、立ち話もなんだし……入れよ、ロニエ」

「はいっ。失礼します、キリト先輩」

未だに修剣学院時代のクセが抜けきっていない真面目な後輩を部屋へ招き入れながら、キリトはアスナ、アリスと視線を交わす。榛と蒼の瞳が『こっちはいいから、ちゃんとロニエ（さん）を構ってあげなさい』と視線で告げる。気を遣わせている事を視線で詫びつつ、キリトは二人を部屋に入れてから静かに扉を閉じた。

廊下を照らしていた照明の光が今宵の闇から閉め出され、部屋の隅に置かれた間接照明の淡い光が、ソファなどの調度品が置かれた室内

をほんのりと照らす。
　クッションがいくつも積まれたキングサイズの大きなベッド、その足元方向にある壁には、壁の根元から天井まで届く大きなガラス窓が据え付けられていた。
「……」
　大きなガラス窓から覗く、白く丸い月。そこから降り注ぐ月光が、窓の前に立って夜景を眺めるロニエをスポットライトの如く照らす。その側にキリトがそっと歩を進めれば、ロニエは照れ笑いを浮かべたままキリトの方を向いた。
「ロニエ」
「はい、キリト先輩……」
　可愛い後輩の名を呼びながらそっと抱き寄せれば、ロニエはその体をキリトの腕の中へと委ねてきた。そうして暫しの間、互いの瞳を見つめ合いながら微笑みを交わし、優しく唇を重ねる。微かに触れあうだけの軽やかなキス。くすぐったい感触に笑い声を零すロニエを抱きしめたまま、甘やかなキスを繰り返す。
「なんだか……あの頃に戻ったみたいだな、ロニエ」
「そうですね……。もう一度先輩の傍付きになれるなんて、夢みたいです……♥　先輩、私のキリト先輩……♥」
　あの頃と同じ服で、あの頃より伸びたロニエの髪の先を弄びながら、あの頃とは違う関係を築く。それがどうにも面映ゆく、そして心地よい。
　そうして、十数度も唇の逢瀬を続けた頃だろうか。ロニエの視線が、ちらちらとベッドの方へと向けられる。キリトの視線もまた、同じように。
「先輩……あ、あの……。あれ、していただけませんか……？」
「あれ？」
「えっと、膝と背中で抱えて運んでいただく……なんというんでしょう」
「……なるほど、わかったぞ。ロニエが言ってるのはたぶん『お姫様抱っこ』だな。よし、任せろ」

可愛い後輩からのおねだりを拒む理由がどこにあるというのか。
キリトはすっと姿勢を低くすると、両腕の中にロニエを座らせるようにしながら彼女の体を預かる。リクエスト通り、片腕でロニエの両膝を、もう片方の腕で背中を支える。ロニエの両腕がキリトの首に回った事を確認したキリトは「いくぞ」と声をかけて合図すると、ロニエの体を持ち上げた。
ロニエの両脚が床を離れ、体がふわりと宙に浮く。浮遊感と共に感じる、愛する男に抱かれ支えられているという実感。そのふわふわとした感覚に身を委ねながら、ロニエは思わず顔をほころばせていた。
「お、重たかったら申し訳ありません……先輩」
「いやいや。全っ然重くないからな、ロニエ」
十歩にも満たない、ベッドまでの僅かな距離。その距離を惜しむようなゆったりとした速度で歩きながら、キリトは両腕の中に納めたお姫様を運ぶ。月光を背に受け、薄闇のヴェールをまとった部屋の内側へと。
白いベッドシーツが敷かれ、クッションがたっぷりと積まれた大型のベッド。寝ることはもちろん、それ以外の行為にも十分に応えられるよう作られたベッドの上には、アスナとアリスという二人の乙女が寄り添いながら座っていた。
「よっ、っと……ちょっとばかり揺れますよ、お姫様」
「は、はいっ」
ロニエを抱えたまま、キリトは膝立ちになってベッドの上へと上がる。そのままシーツの上を進み、ベッドの中央——ちょうど、アスナとアリスがいる少し手前に腰を下ろしてロニエを座らせ、己はその真後ろに陣取った。ちょうど、両脚の間にロニエを座らせるような体勢だ。
はにかみながら体重を預けてくる彼女を後ろから抱きしめれば、ロニエはキリトの方へ振り返り、可憐な唇をそっと差し出してキスをねだる。もちろん、応えないはずがない。
「ん……♥」
少しだけキスに慣れ、甘い声を漏らし始めるようになったロニエと

唇を重ねながら、キリトは舌先で彼女の唇を軽くつつく。その意図を察したロニエは、おずおずと唇を開いてキリトの舌を迎え入れた。初めてロニエの口内に入る、他人の舌。未知の感触に怯えを見せつつも、決してキリトの舌を拒もうとはしない健気な後輩を導くように、キリトは舌と舌を絡ませあう。

「んっ……♥　ぁふ……♥」

攪拌された唾液の立てる水音が、ロニエの聴覚を刺激する。後輩の唇の端から零れる甘やかな声が、キリトの耳を楽しませる。

柔らかな体を抱きしめるキリトの手には、いつのまにかロニエの手が重なっていた。開いた指を絡ませあい、互いの手をぎゅっと握りしめあいながら続くディープキス。キスの感触に酔ったロニエが身動ぎする度、制服の布地が擦れ合って微かな音を立てた。

たっぷりと、ゆっくりと時間を使い、ロニエの口の中で睦み合ったあと。ようやく離れた唇の間では、取り残された唾液が小さな橋を作り、すぐさま千切れ落ちていった。

「脱がすぞ、ロニエ」

「はい、先輩……♥」

興奮と期待、そしてほんの僅かな不安を瞳に滲ませたまま、ロニエは頷く。その体を抱き寄せたまま、キリトはコンソールウィンドウを展開し彼女の装備情報に介入すると、制服の上下を装備解除した。

ほのかな光がロニエの全身を包み、聞き慣れた装備解除ＳＥと共に消えていく。キリトの腕の中で露わになる白い下着。レースとフリルをふんだんに使用したそれは、普段使いとして用いるモノではなく、明らかに人の目を――これから己を抱く男の目を、強く意識したもの。

清冽に、そして扇情的に引き立てる起伏豊かな体に、キリトがごくりと喉を鳴らす。

「――見て見て、キリトくんの目。もうすっかり興奮しちゃってる……♥」

「ええ、本当に……。まるで、獲物に喰らいかかる寸前の獣のよう……見ているこちらまで興奮してしまいます♥」

劣情を抱くキリトとその腕の中に収まったロニエを眺めながら、二匹の雌――アスナとアリスが微笑む。色を含んだ視線でロニエの肢体を眺め、ねっとりとした視線で肌を撫でる。

直接触れる事のない愛撫に、ロニエは頬をかあっと赤らめつつキリトを見上げる。もう一度その唇とキスを交わしたあと、キリトは彼女の体を守る最後の布を剥がすボタンを押した。

「っ……！」

ロニエが微かに息を飲む音は、装備解除時のＳＥにかき消された。ストレージに格納される下着の残光が消えた後、そこに残ったのは生まれたままの姿にされたロニエ、ただそれだけだった。

発色の良い健康的な肌。日頃の鍛錬によってバランスを保たれた肉感的な肢体。雄を誘惑するに足る程に成熟し、そしてほんの少しの幼さを残したロニエの体は、大人と子供の狭間だけにある魅力でキリトを昂らせる。

デコルテラインから視線を下に移せば、ボリューム感に溢れたバストにどうしても視線を惹きつけられる。こうして目の当たりにしてしまうと、アンダーワールドにいた間、片手では手に余るロニエの発育の良さによく気づかずにいられたものだと思わずにはいられない。

しっかりとくびれた腰。むちむちとして美味しそうな太股。そして毛の一本も存在しない、未開発の股座。未だ汚れを知らぬ彼女の肢体、キリトに捧げるために育ててきたと言っても過言では無いスタイルの全てが、熱く滾るオスの血を下半身に集めていく。これがロニエにとって初めての交わりでなければ、ガマンできずに襲いかかっていた所だ。

「せ、先輩……？」

「あ、ああ。悪い、ロニエ。ちょっと理性が吹っ飛びそうになってた……。ロニエが、すごく魅力的で……」

「そっ、それは……ちょっとうれしいかも、です……♥」

コンソールウィンドウを操作し終えたキリトの片手が再びロニエの体に触れれば、ロニエはその手に己の手をそっと重ねる。ロニエの言葉一つ、仕草一つがキリトの理性に大きなヒビを刻んでいく。

事の推移をじっくりと眺めていたアスナとアリスが、ベッドの上でするりと身を滑らせるようにロニエの左右へ陣取ったのは、まさにそんなタイミングだった。
「もう、二人だけでイチャイチャしちゃって……ずるいんだから」
「そうですよ。私達がいることもお忘れなく、ロニエ」
「アスナさま、アリスさま……。も、申し訳ありません。私ばっかり、キリト先輩を独り占めして……」
素っ裸のままで慌てて謝罪の言葉を述べるロニエに、二人はそろって首を横に振った。
「ごめんなさい、違うの。今日はロニエさんが主役なんだから、むしろキリトくんを独占するくらいでちょうどいいんだからね？」
「そうですよ、ロニエ。お前が遠慮などする必要などどこにもありません。
ただ……同じ男を愛する者同士として、私達はお前ともなかよくしたいのです。ロニエ」
そう言いつつ、アスナもアリスもコンソールウィンドウを開き、装備全解除ボタンを押す。惜しげも無く露わになる、二人の肢体。キリトの眼下に広がるのは、甲乙付けがたい極上の乙女達による三者三様のヌード・ショウ。
ロニエの体がキリトに拘束されているのをいいことに、アスナとアリスは左右からロニエの腕をとり、そのまま己の腕を絡ませた。
「無理にとはいいません、ロニエ。でも、少しでも興味があるのなら――」
「私達とも睦み合い（イチャイチャ）してみない？　ロニエさん」
肌が触れあうほどの至近距離まで密着したまま、ロニエの両耳に注がれる甘い声音。未だ男を知らぬ生娘には抗いようも無いほどの色気に晒され、ロニエは思わず息を零す。
ロニエの首筋にアスナが軽い口付けを落とし、太股を指先で優しくなぞる。大事な場所や敏感な部位にはあえて触れず、あくまで軽いスキンシップに留めながら、これから竿姉妹となる娘を誘惑する。
一方のアリスは、ロニエの小さな顎に手をあてて己の方を向かせる

と、蒼い双眸で彼女を真っ直ぐに見つめた。
「良いですか？　ロニエ」
「は……はい、アリスさま……♥」
「ふふ……♥　それでは、いただいてしまいますね」
熱に浮かされたような表情と共に差し出されるロニエの唇に、アリスは躊躇いなく己の唇を重ねた。絡み合う舌と混ざり合う唾液の音がキリトの耳に届くように、激しく、そして濃密に、初心な後輩騎士の唇を貪る。
超至近距離で繰り広げられる紊乱な光景にキリトが視線を釘付けにされていると見るや、アスナは両手の掌をキリトの頬へ当てると、半ば強制的に己の方を向かせた。
「キリトくんのお相手は、私……じゃ、ダメ？」
「ダメなわけがあるか……！」
榛色の瞳を潤ませ、アスナは誘う。後輩の体を腕の中に納めたまま、キリトは愛妻の柔らかな唇を奪った。劣情をぶつけ合うような容赦の無いディープキスに、アスナは吐息を荒くし身体を震わせながら応える。
アリスとロニエ、キリトとアスナ。二組の口付けが響かせる音が、お互いの聴覚を刺激し更なる興奮を呼び起こす。そうしてたっぷりとキスを堪能したあとは、さも当然のように相手を変えて別の唇とキスを続ける。アリスはキリトと、アスナはロニエと。そしてまた相手を変え、キリトはロニエと、アスナはアリスと。お互いの存在に酔ってしまいそうな程に濃密で淫靡なディープキス・スワッピング。
欲望に塗れたキスのせいで溢れた唾液が口の周りをべたべたにする頃には、三匹の雌はすっかりできあがり、唯一の雄は完全にヤる気を滾らせていた。
「せんぱっ、せんぷぁい……♥♥」
「ロニエっ……！」
完全に蕩けた声音を垂れ流しながら、キリトとのキスに溺れるロニエ。キリトがその身体を後ろから抱きしめ支える中、アリスとアスナは左右からロニエの脚に触れ、そっとその両脚を開かせる。

露わになる、ロニエの秘所。背面にいるキリトからは、ロニエの大きな胸の死角となって直接見ることのできない場所。すっと通った一本筋の合間からこぼれる幾筋からの愛蜜、そして小さな肛門を目にすることができたのは、ロニエと同じ雄に傅く二匹の雌だけだった。

「とても綺麗ですよ、ロニエ……♥　ふふっ、もうこんなに……♥」

ロニエの脚の間に滑り込んだアリスの細い指先が、ロニエの秘裂を左右に押し開く。露わになるのは、粘液の光沢をまとった薄ピンク色の媚肉。キスの興奮をたっぷりと与えられた、文字通りの処女地。

愛液がまとわりつく指先を、わざとロニエの目の高さまで持ち上げてから舐めとったアリスは、己の唾液をたっぷり絡ませてから再びロニエの秘所へと伸ばした。

「これだけ溢れていては、もう準備をする必要はないかもしれませんが……まあ、相手が相手ですからね」

「ひゃうっ♥」

つぷり、という感触を伴いながら、アリスの指先がロニエの中へ入り込む。あくまで手つきは優しく、静かに。ロニエの秘めた性感を目覚めさせ、少しずつ高めていくために、浅い部分を重点的に擦る。

「はっ、あっ♥　あ、アリスさまっ……♥　んっんっ♥」

「感じやすいのですね、ロニエは。少し指を入れただけで……どんどんと溢れてくるではありませんか」

「ひあっ♥　やあっ♥　んんんっっ♥♥」

「大丈夫ですよ、ロニエ。これはあくまで、お前がキリトを心地よく迎え入れるための準備にすぎません。

お前の純潔も、他人から与えられる初めての絶頂も……ちゃんと全て、キリトに捧げさせてあげますから」

粘度の高い涙をとろとろと流すロニエの雌穴を、アリスの指先が優しく弄ぶ。奥に進もうという意思も、乱れさせるための激しさも無い、アリスの言葉通りの柔らかな愛撫。その穏当な刺激にも、ロニエは脚をぴくぴくと震わせてしまう。

ロニエがうっかり脚を閉じないよう、その片脚に絡められるアスナの脚。肌と肌を触れあわせながら、アスナはロニエの頬や首筋へ幾度

も口付け、耳たぶを甘く噛む。そうして弄んだあと、そっと彼女の耳元に唇を寄せた。

「私達がキリトくんと交わってる映像（ところ）、たくさん見たんでしょう？　どんな風に愛されたい？　優しく？　乱暴に？　奴隷みたいにキリトくんに隷従したり、それとも甘やかしてみたい？」

問いかけと共にロニエが見た映像の記憶を呼び起こしながら、アスナはロニエの柔肌を愛撫する。下腹部――子宮の真上にあたる部位をそっと撫で上げながら、指先を豊満な双丘へ。雄を誘惑するバストに触れ、ピンク色をした乳首をくりくりと弄くり回す。その度に可愛らしい声と共に身もだえするロニエが愛らしくてたまらない。

「んっ♥　ぜっ、全部っ♥　んん……♥　ぜんぶ、してみたいです……♥　先輩と、キリト先輩となら……全部したいです……♥」

「ふふっ、全部かー。じゃあ、これからいーっぱいキリトくんと交わ……セックスしないとね♥」

「はいっ。します♥　んゅっ♥　キリト先輩といっぱい……せっ、セックス、します……♥」

呑み込みの早いロニエの可愛らしさに、アスナは思わずその唇を奪っていた。キリトに至近距離で見せ付けるような、甘く濃密なディープキス。アリスとアスナによる全身愛撫に悶えるロニエに舌を絡ませながら、アスナは自らが培ったキスのテクニックを伝授していく。まだ初心で、されるがままなロニエの舌に、直接。

初めての交わりを迎えるロニエの不安を快感で塗り潰すように責め立て、身のうちの熱を高めていく。それはさながらＶＲＭＭＯで新たにクランに加わった新人プレイヤーを育成する時のように、あるいは群れに加わった若い狼に狩りの仕方を教える時のように。先達の技を以て、ロニエの雌としての資質を開花させていく。

「「ぷはぁっ……」」

舌と舌の交わりを終わらせて唇を引き離せば、吐息の音が揃って漏れた。はあはあと、熱の篭もった呼吸を繰り返すロニエは、すっかり劣情に支配された立派な雌の顔をしていた。

その眼前に差し出される、アリスの二本の指。ロニエの蜜壺を整え

たおかげでたっぷりと愛液に塗れた指を、ロニエはそっと口に含んみ、自らが流した液体を舐めとっていく。ちゅぱちゅぱと音を立てながらロニエがアリスの指をしゃぶる中、アスナとアリスはそっと見つめ合い、そして頷きを交わした。

準備はもう、整ったのだと。

「さ、ロニエさん。こっちにどうぞ」

キリトと向かい合う位置はそのままに、間に少しだけ距離をとったアスナがロニエを手招く。自らの身体を抱きしめるキリトの腕が緩んだのをきっかけに、ロニエはその招きに応じ、その後にクッションの一つを手にしたアリスが続く。

ちらりとキリトを一瞥した後、アリスはベッドの上にクッションを置き、それを枕代わりにしてロニエを寝かせる。ロニエの頭は窓の方へ、脚はキリトの方へ。そうして、アスナ共々ロニエの膝裏に手を回し、両脚をそっと開かせた。

「さ、キリトに見せてあげましょう。あなたの最も恥ずかしい場所を」

「ひゃわっ……♥」

キリトの真っ直ぐ正面に晒されるロニエの女陰。雌二匹の丹念な愛撫によって蕩かされたその場所は、未だ穢れを知らぬまま、ただ発情の涙を流して雄を待ちわびていた。そのままアスナとアリスは身体を倒し、ロニエの左右へと寝転ぶ。手の代わりに脚を絡みつかせ、ロニエの閉脚をそっと阻止しながら。

一方、ベッドの上で膝立ちになったキリトは、待ち受ける女達の方へ向けて距離を詰めつつ、ようやく思い出したかのように己の装備を全解除した。修剣学院時代の黒服が光となってストレージに消え、その下に隠されていた凶暴な一物がぶるんと勢いを付けて目を覚ます。

キリトの視線がロニエの秘所に注がれたように、待ち受ける雌達の視線がそれに注がれぬはずもない。

「あっ……♥　あれが、先輩の……♥」

「すごいでしょう？　キリトくんの。あんなに大きくて、お腹につきそうなくらいの仁王立ちっぷりで……♥　見てるだけで頭の中まで犯されちゃいそう♥」

「いつ見ても逞しいものですね……♥」

映像画面越しに見るのと、こうして目の当たりにするのとでは……同じものでも迫力が違うでしょう？　ロニエ」

「はいっ……♥　とってもすごいです……先輩の、お、おっ……」

これから己の純潔を散らす凶器――それに視線を釘付けにされながら、決定的な言葉を口にできないロニエ。かつては己にもそんな時分があったなあと思い返しながら、アスナとアリスは彼女が言うべき言葉を音にして紡ぐ。

「「おちんぽ」」

「っ……♥　先輩の、おちんぽ……♥　キリト先輩の、おっきくて立派なおちんぽ……♥♥」

左右から包み込むようにして注がれるアスナとアリスの声が、ロニエの耳にダイレクトに届き、雌として更なる成長を促す。太股に押し当てられる先達達の性器――既に肉の快楽を知り、そしてその快楽を教え込んでくれた猛々しい肉棒を目にして興奮の蜜を垂れ流す淫猥な華が水音を響かせる。

はっはっ、と仔犬じみた興奮の吐息を漏らすロニエの側まで近づき、キリトは彼女の瞳を真っ直ぐに見下ろした。

「ロニエ、挿れるぞ」

「はい、キリト先輩……♥」

左右を固めるアスナとアリスごとロニエを抱きしめるように広げた腕を、ベッドの上でついて支えとしながら、キリトはロニエの身体の上へ覆い被さった。そうして少しだけ姿勢を整えれば、張り詰めた亀頭の先がロニエの蜜壺の入り口に触れ、溢れ出す蜜が先端を濡らした。

その感触にロニエが微かな嬌声を漏らす一方、音も無く動いたアスナとアリスの両手が、ロニエの腰に触れて密かに支える。

据え膳食わぬはなんとやら、である。アスナとアリスが腕を奮って供した据え膳（ロニエ）を喰らうため――キリトは、腰をゆっくりと前へと突き出した。

「あっ……♥♥」

ロニエの蜜壺を、キリトの太い肉棒が少しずつこじ開けていく。男の体を受け入れた事のない場所を、男の象徴で穢しながら。

愛液でコーティングされた亀頭がロニエの膣内を押し広げ、太い肉軸が進むための道を作る。そうして一度広げられたロニエの媚肉は、すぐさまキリトの肉棒へぎゅっと密着し、あらゆる方向から逸物を包み込みながらキリトの形を記憶していく。

「はっ、はあっ……♥」

「大丈夫か、ロニエ。ペイン・アブゾーバーが効いてるから、痛みはないと思うんだけど……」

「んっ……は、はい。大丈夫です、先輩……♥　だから、このまま……♥」

「ああ、わかった。このままゆっくり入れていくから……な」

ロニエに無駄な負荷をかけないように気を遣いながら、キリトは少しずつ、少しずつ、己の分身をロニエの中に埋めていく。

「あっ……くうっ……♥」

ずぷり、ずぷりと、肉棒が進む度、ロニエは小さく鳴きながら全身で反応する。

ペイン・アブゾーバーの作用は破瓜の痛みすら軽減させてしまうが、それが初めての交わりに臨む彼女を気遣わなくてよいという理由にはならない。

瞳を潤ませるロニエと視線を交わし、物欲しげに突き出される唇とキスを重ねる。そのまま頬へ、耳へ、首へ、肩へ――軽いキスの雨を降らせて慈しむ。キリトに愛されるくすぐったさにロニエが微笑む横では、アスナとアリスが彼女の髪や身体を愛撫していく。

やがて、亀頭の先に感じる僅かな抵抗。一度失えば二度と戻らない純潔の証。

「せん、ぱい……♥」

感触的にか、あるいは本能的にか。そこにキリトの分身が辿り着いたことを理解したロニエの唇が、声を出さずに動く。

『きて』という無言の願いに頷きを返したキリトは、腰にしっかりと力を込めて前に出し、そのまま逸物を深々と突き込んだ。

「――くあ、ぅっ……！」

痛み無き破瓜の感触に、ロニエが微かな悲鳴を漏らす。一般的な俗称のように膜が張っているわけでは無い、そんな小さな場所。そこを刺し貫いたキリトの亀頭は、そのままロニエの膣内を擦り上げるようにして進み、やがて彼女の最も奥へと辿り着く。

子宮口をぐっ、と押し上げながら密着する亀頭。互いの腰と腰がぴったりとくっつき合い、僅かに見える結合部からは押し出された愛液が、じくり、じくりと溢れ出す。

片手で己の身体を支えたまま、キリトはもう一方の手でロニエの頬に触れた。

「全部入ったぞ、ロニエ。えらいぞ……よく頑張ったな」

「はい、先輩……♥　んっ……♥　なんだか、不思議な感じです……♥」

「痛くはないと思うけど……変な感じはしないか？」

「大丈夫ですよ……♥　先輩が、私の中にいてくれるのが……ちゃんとわかります♥　あったかくて、おっきくて……♥」

ロニエの両腕がゆるゆると動き、キリトの首に回る。その腕に引き寄せられるようにしながら、キリトは彼女と幾度目かになるキスを交わす。左右で寝転ぶ二人が嫉妬しそうなほど情熱的に、発情しそうな程に水音を立てて、ディープキスで舌と舌を絡めまくる。

キリトの舌による口内陵辱じみたキスにすら、ロニエは喜びと興奮を覚えずにはいられなかった。

「んじゅっ、じゅうっ……♥♥　むふっ、ふぅ♥んっ、んぶぅっ……♥♥」

重なる身体から少しだけ力を抜くが、ロニエに預ける体重は少しだけ。彼女に無用な負荷をかけず、それでいて密着する事で安心感を覚えられるラインでバランスを保つ技には、多くの乙女達の肉体を貪ってきた経験が無意識に活かされていた。

「――『どうしてキリト先輩は、私の中におちんぽを挿れたまま動かそうとしないんだろう』……って考えてるでしょ？　ロニエさん」

上と下で繋がる二人を特等席で鑑賞しながら、アスナがロニエの疑

問を代弁する。もちろん、ディープキスに溺れ、合成音声システムにもまだ慣れていないロニエがそれに返答できるはずも無い。結局、その疑問に答えたのは、二人を挟んでアスナのちょうど反対側に寝転ぶアリスだった。

「待っているのですよ、キリトは。お前のおまんこが、キリトのおちんぽの形に慣れるのを。

　初めてキリトを受け入れて、そして今後キリト以外を受け入れる事の無い場所に……キリトの形を、しっかりと刻み込んでいる最中なのです」

「ロニエさんがキリトくんの身体をぎゅ～ってしてるように、おまんこがおちんぽにぎゅ～って絡みついて、精一杯ご奉仕してる感触を愉しみながら……じっくりと待ってるんだよ♥」

　実際、二人の言うことは当たっていた。怪我も無ければ出血も無い、妊娠する事も無いというＶＲ空間内でのセックス。とはいえ、それでも相手のことを気遣うのは当然だ。それがほんの少し前に純潔を失ったばかりの少女であるなら、なおさら。

　左右から響く雌達の声を聞きながら、二人は意識が蕩け落ちそうなキスにどちらからともなく区切りを付けた。唇を離すタイミングは一緒。それだけでも、互いの繋がりが深まった事を感じずにはいられない。

「――はっ、はあっ……♥　先輩……せんぱい……♥」

「悪い、さすがに限界……。そろそろ動くぞ、ロニエ」

　こくん、と頷くロニエの鼻先に軽く口づけ、キリトは上体を起こした。いわゆる正常位、非常にオーソドックスな体位で繋がったまま、ロニエの腰を両手で掴み固定する。そうしてロニエの逃げ場を完全に奪ってから――腰を動かす。

「んぅっ♥　あっ……あぅっ、ううっ♥」

　あくまで焦らず、ゆっくりと。他の娘達であれば焦らしプレイになってしまいそうな速度で、ロニエの膣内から肉棒を引き抜く。もちろん全てでは無く、亀頭だけは蜜壺の中に挿れたままで。そうしてロニエの反応を見極めながら、再び内部へと挿入していく。

ゆっくりと引き抜き、ゆったりと挿入する。ロニエの性感を開発すると同時に、蜜壺をキリトの逸物にぴったり合うサイズに調教するための前後運動。

「あっ♥んっ♥　んんぅうっ♥　せんぱっ、いのぉっ♥　はっ、はあっ、ふうっ♥♥」

肉棒が出し入れされる度に、ロニエが甘い声を上げる。その嬌声についつい興奮させられ、腰を振る速度はわずかずつ速くなっていく。小さく跳ねそうになる彼女の腰を下から支えながら、キリトはロニエの秘所で肉棒を扱く。

「キリトくんのおちんぽでおまんこどちゅどちゅされるの、とっても気持ちいいでしょう？　ロニエさんをオンナにしてくれた、キリトくんのぶっといご主人様おちんぽ……♥」

「肉棒の一突きごとに、お前の身体は覚えていくのです。お前を抱き、孕ます権利があるのはこのちんぽだけだと。ロニエ・アラベルのおまんこは、キリトのおちんぽに奉仕する為の場所なのだと……♥」

先達としての知識をロニエに教え込みながら、二人はロニエの豊満なバストを揉み拉き、乳首をくりくりと愛撫する。健気で敏感なロニエの身体は、その度に膣内を収縮させては肉棒に容赦なく絡みつく。

完全に慣らしの終わった肉壷に誘われるまま、キリトは一旦ピストンを止めると、ロニエの両脚をロニエ自身に抱え込ませるようにして持ち上げ、そのまま己の身体を前に倒してロニエに密着させる。

それはいわゆる、『種付けプレス』の体位。射精から絶対逃げられない事を雌に教え込む為の体位。

「せんぱ――あぁアッ♥　ああっ♥　んんぅうっ♥　これ、これなにぃっ♥♥　あひっ♥♥　ああぁぁっ♥　急に、激し――あっあぁあっあっあああああっ♥♥♥」

「あらあら。ロニエさんのおまんこが気持ちよすぎて、キリトくんがすっかり種付けモードに入っちゃった」

「こうなってしまっては、もうどうしようもありません。諦めて――キリトに射精される感触を愉しみなさい、ロニエ。これから幾度となく味わうことになるのですから」

もはや二人の声を聞いていられるだけの余裕は、ロニエのどこにも残っていなかった。前後運動に近かった正常位の挿入から、上下に貫く種付けプレスへ。キリトの身体が上にあることで、必然的に抑え込まれる格好になったロニエの蜜壺は、最初にたっぷりと時間をかけて逸物の形を覚え込ませておいたおかげで、強姦めいた激しいストロークすらも愉しめるようになっていた。

「あっ♥あおっ♥んむうぅ♥♥　せんぷやい、せんぱいひぃっ♥♥」

「ロニエ、ロニエっ！　ごめん、もう、止まらない……!!」

「いいです♥　先輩だったら♥おっ♥おふ♥　すきですかりゃ♥あぁあっ♥♥　あっおっ♥♥　奥のっ、奥のほうっ♥♥　ぐりぐりってされるのすごい♥すごぃいぃ♥♥」

ばこばこと重く激しく容赦の無い音を立てながら、キリトは肉棒を叩きつける。その度に、組み敷かれたロニエは雌の嬌声を響かせながら更に雄の劣情を煽る。その杭打ちによって結合部から溢れさせられた愛液の滴が、次々にシーツに触れて灰色に変わっていく。

艶めかし喘ぎ身もだえするロニエを腕の中に収めたまま、キリトは彼女を激しく侵し続ける。そしてその行為も、そろそろキリト自身の臨界点を超えようとしていた。

「ぐうぅうっ！　――ロニエ、ロニエっ！　このまま射精（だ）すぞっ!!」

「せんぱい、せんぱいっ！　はいっ♥はいっ♥　このままきてぇっ、くだしゃいぃいいっっ♥♥」

ぱんぱんと激しい音を上げながら繰り返されていた杭打ちピストン。その最後の一突きが、こじ開けられた膣道の再奥に突き込まれた。未だ穢れを知らぬ子宮、その入り口に亀頭がぴったりと密着した瞬間――射精が始まった。

「ひぁっ――あっ♥ああっ♥　あっ、あつ、あついぃいっ♥♥　せん――せんぱ、ぃぃいっ♥　あっああっああああぁぁああ♥♥　おく、いっぱい♥いっぱいどくどくってぇええっ♥♥　んぁっ、ぁっ、ひぃいぃいいいっっ♥♥」

ドクドクと脈動する太い肉棒がロニエの膣道をこじ開け、陰嚢で熟成された濃厚な精子が輸精管を一気に駆け上る。放出された先は、も

ちろんロニエの子宮。子宮口の周囲を完全に塞いだ亀頭は、小さい子宮口から子宮内部にめがけてありったけの精子を送り出す。

白濁液が子宮内壁に叩きつけられる度、ロニエの本能は快感の叫びを上げてロニエを刺激する。知識としては知りながら、実体験としては初めてであるロニエに襲い来る未知の快感。その快感に反応した膣肉が、一層肉棒を締め付け、更なる射精を促していく。

やがて、ロニエの股座からぷしゃりと噴き出す液体。それは、ロニエにとって生まれて初めての潮吹きだった。

「あああっ♥　これが、こんなの……♥♥　だっ、め、だめにひ――だめになっちゃいますぅ……♥♥　あっ、やだぁっ♥♥　すき、すきぃっ♥♥」

全身をびくんびくんと痙攣させながら、ロニエは膣内射精の快感に酔いしれる。口の端から零れ流れた唾液を拭く事にすら思い至らないほどの快楽に酔い、雌の笑みを浮かべて快感に溺れる。所謂種付けプレスの体位でキリトに抑え込まれていなければ、今頃腰を浮かせ、背中を弓のようにしならせながら絶頂を迎えていることだったろう。

いつものことながら、注がれる精液はどっぷりと重い。ここがキリトのＶＲ空間でなければ、一発で受精させられていてもおかしくないと思わせるほどの濃度と量だ。

たっぷりと時間をかけた射精を終え、キリトが肉棒を引き抜く頃になっても、ロニエの緩みきった――それでいて好色な蕩け顔はまだそのままだった。

「はひ……せん、ぱい……♥♥」

「ふう……。たくさん出たよ、ロニエ。ありがとうな」

「はぁ、はぁ……♥　どういたしまして……♥　あっ、なかから、あふれて……くうっ♥♥」

ロニエの蜜壺からキリトが肉棒を引き抜いた途端、射精したばかりの精液が一気に逆流し溢れ出す。股座から生殖の残滓を垂れ流すロニエの姿はもちろん、左右を固めるアリスとアスナの裸体があまりにも眩しい。

元々萎えてなどいない剛直が露わになれば、アスナもアリスも――

そして未だ快楽の中で夢見心地なロニエですらも、肉棒に視線が釘付けになった。

「キリトくん……♥」

「キリト……♥」

「キリト先輩……♥」

窓越しに未だ届く満月の光が、部屋の薄闇をわずかに照らす。

夜はまだ――明けるはずもない。

13―2．月下に捧ぐ

交合のためだけに作られた黒き城。そこで始まった淫靡な宴は、場所と相手を変えながらも未だ終わること無く続いていた。

「――とってもよく似合ってるわ、ロニエさん」

「ありがとうございます、アスナさま。アスナさまも……とても、お綺麗です」

片や、女王の慈愛と共に。片や、臣下の敬愛と共に。二人の女――アスナとロニエは、互いの姿を素直に褒め合う。少し前にロニエが純潔を喪った部屋から数部屋分離れた所にある一室で、二人は次の行為（プレイ）に向けた準備を進めていた。

二人とも全裸ではないとはいえ、その出で立ちは大きく異なる。

ロニエが革製の首輪一つきりしか身につけていないのに対し、アスナはいわゆる『女王様』のコスチュームに身を包んでいる。

アスナの二の腕半ばから指先まで、そして太股半ばから爪先までを覆うロンググローブ／タイツは、共に艶々（てかてか）とした光沢を放つエナメル製。同様の素材で作られたボンデージスーツは、股座や尻をギリギリまで露出した大胆なカットラインと胸元をイヤらしく強調するハーフカップデザイン。それでも、身体を隠すことを許されているその様は、ほとんど裸であるロニエの立場の差をこれ以上無いほどに明確に表していた。

「あとは、これをつけて……これも一応出して、と。蝋燭は……さすがにまだ早いかな」

ぶつぶつと呟きながらアスナがコンソールウィンドウを操作すると、彼女の手の中に黒い乗馬鞭がオブジェクト化される。同時に、その首元にロニエと同じデザインの首輪が填まった。

煌めく宝石を飾ったネックレス等ならまだしも、女王たるアスナの首元を絞めるには些か不自然な存在である首輪の登場にロニエが思わず怪訝な顔をしていると、その視線に気づいたアスナがくすくすと微笑む。

「あ、首輪？　私もロニエさんとおんなじ、キリトくんの女だもの。これはその証だから……女王様もつけるのは当然じゃない」
「キリト先輩の、メス……♥　私も、アスナさまも……♥」
「そう、キリトくんの為のメス。キリトくんのおちんぽ様にお仕えして、気持ちよく射精してもらうためのおまんこ穴♥
だから同じメスとして、安心して私に身を任せて……調教を楽しんでくれると嬉しいな」
調教という行為に於いて最も重要なファクターとなるのが、『奴隷』側から『支配者』側への信頼だ。今回の場合、奴隷側たるロニエが、支配者側たるアスナへ元々抱いている信頼だけで調教を進めるには事足りる。とはいえロニエは性行為の経験も浅く、ＳＭ調教はこれが初めてだ。普通に進めるだけでは、過剰な緊張に苛まれてしまうかもしれない。
アスナ自らが首輪をつけ、女王様としての尊厳を損ねてでもキリトの支配下にあることをアピールするのは、キリトの存在を意識させることでロニエに安心感を齎し、彼女に心の余裕を持たせるためだ。まあ、単に己が首輪を付けたかった――というのも大いにあるが。
熱に浮かされたようなロニエをそっと抱き寄せながら、アスナはその耳元で妖艶に囁く。エナメル質に包まれた掌がロニエの尻肉の上を這い回り、乗馬鞭の平べったい穂先が、適度にむっちりとしたロニエの太股を撫でた。
「ひゃうっ……」
人の肌よりわずかに冷たい穂先の感触にか、あるいは打擲される事に怯えてか、ロニエが微かに身を震わせる。
「ふふっ。大丈夫よ、ロニエさん。いきなり乗馬鞭で叩いたりなんてしないから。
ロニエさん、こういうのを楽しめるほどまだ慣れてないでしょうし……それに、まだキリトくんに叩いてもらったことはないでしょう？」
「はい、まだ……」
「だったら、初めての打擲調教は……ちゃんとキリトくんにしてもら

わなきゃ。ね？」

「はい……♥　ありがとうございます、アスナさま……♥」

上半分が露出したアスナの胸元に、ロニエはそっと頭を寄せる。尻を揉んでいた手をそっと動かし、彼女の焦げ茶色の髪をそっと撫でるアスナの顔は、その衣装からは想像できないほどに優しかった。

ロニエを抱き寄せたまま、エナメル質の感触とアスナ自身の身体や香りに慣らさせること暫し。コンソールウィンドウに表示された時計を確認したあと、アスナは彼女の頭にぽんぽんと軽く触れた。

「さて、と……そろそろいい頃合いね。始めるわよ、ロニエさん。最初に何をすべきかはさっき教えたつもりだけど……ちゃんと覚えてるかしら？」

こくりと頷いたロニエは、まずはアスナの豊かな谷間に顔を埋めるようにして柔肌の上に口づける。キスマークがつかないギリギリの強さで幾度も幾度も唇を触れさせ、自らをこれから調教（しつけ）てくださる相手――女王様への忠義と愛を示す。

そうしてキスを繰り返しながら、ロニエは自らの身体を少しずつ下げていく。ボンデージスーツに隠されたアスナの臍、下腹部、そして股座。スーツとタイツの間から姿を覗かせる太股の柔肌。そしてエナメルタイツ越しに膝へ、脛へとキスを続け、最後はアスナの足の甲へ長々と口づける。

ほとんど裸、ほとんど土下座のような体勢で身を屈めてアスナの脚に吸い付くロニエの姿は、まさに雌奴隷というに相応しかった。

「よくできました♥　これから、私みたいな――キリトくん好みの変態さんに躾けてあげるから……一緒に頑張ろうね、ロニエさん」

「ぷふぁっ、ふぁい……♥　よろしくお願いいたします、アスナさま……♥」

エナメル質に包まれた脚を舐め続けるロニエを見下ろしながら、アスナはくすりと微笑む。

後宮に属する雌による、別の雌の調教。それ自体は最早珍しいことでは無い。奴隷も主人もその日その時の気分によって決まる緩やかな相互調教は、後宮女性陣の中で複雑な紋様を描きながら今も続いて

いる。

アスナ自身、ユウキやシリカといった比較的素直な子はもちろん、シノンやリズといった跳ねっ返りの強い女、更には《ホロウ・エリア》で出会ったばかりの頃の自分を演じるフィリアという変わり種まで幅広く相手取り、様々な調教方法を用いてマゾヒズムの悦楽を叩き込んできた。調教行為自体も楽しいし、何より『手ずから調教して雌として開花させた友人達を、自らの夫に捧げる変態淫蕩妻』という立ち位置に浸れるのが心地よくて堪らない。

故に、件（くだん）の『共有映像フォルダ』にもそういった動画が割と大量に格納されており――ロニエが目にし、興味を持ってしまったのもある意味では必然かもしれなかった。

「さーて、最初は……やっぱりこれよね」

アスナは家具用ストレージから大きな姿見をオブジェクト化。爪先から頭まで全部が映る縦長の鏡が、それを支える脚と共に部屋の床へと設置された。

少しだけ鏡の角度を調整したあと、アスナはキスを中断させる合図として、ロニエの頬へ乗馬鞭の穂先をそっと触れさせた。ゆっくりと立ち上がるロニエを身体ごと鏡の方に向けたあと、アスナは背後からそっと抱きつく。

「本当、素敵な体をしているわよね。ロニエさん……♥　おっぱいもずっしり重くて……男の子が夢中になっちゃいそう♥」

「ひぁ、んんっ……♥」

片方の手でロニエの豊かな胸を持ち上げながら、アスナはロニエをからかう。男を知り、女として一段階上のステージに昇ったロニエの女体が味わう興奮は、彼女の口から甘い吐息となって溢れていく。ロニエの顔に発情の色がにじみ出たのを見計らい、アスナは彼女の視線を改めて前に向けさせた。

「さて、ロニエさん。最初の調教だけど……今から私がいうことを繰り返してほしいの。できる？」

「は、はいっ。やってみます」

「その意気その意気。それじゃあ、早速始めるわね」

鏡の中に映り込む、若干不安げな表情を浮かべたロニエの顔。その顔に寄り添うように耳元に唇を寄せ、鏡の中に二人分の顔と体を映しながら、アスナはそっと囁き始める。

「『私の名前は、ロニエ・アラベルです』」

「私の名前は、ロニエ・アラベルです」

「『私は、キリトくんのことが大好きな、キリトくんの傍付きです』」

「私は、キリトく……キリト先輩のことが大好きな、キリト先輩の傍付きです」

アスナにつられて『くん』を付けかける寸前でどうにか修正に成功したロニエの頭を撫でながら、アスナは彼女を褒める。言われた言葉をただ繰り返すだけでも十分よいが、己自身の言葉として咀嚼できればなおよいというのが、この調教の本質だ。

「『私はキリトくんの、固くてぶっとくて男らしくて、私のハジメテを奪ってくれたおちんぽが大好きです』」

「私は、キリト先輩の……固くて、ぶっとくて男らしくて、私のハジメテを奪ってくれたおちんぽが……大好きです！」

「『私はとっても淫乱な女の子なので、いつもキリトくんとセックスすることばかり考えています』」

「わっ、私はとっても淫乱な女の子なので、いつもキリト先輩とセックスすることばかり考えています」

「『これからもキリトくん専用の性処理傍付きとして、おまんこでいっぱいご奉仕させていただきます』」

「これからも、キリト先輩専用……♥

キリト先輩専用の性処理傍付きとして、おまんこでいっぱいご奉仕させていただきます！」

アスナが囁く卑猥な言葉を、ロニエは素直に口にする。鏡に映る乙女二人の顔は、どこまでも淫靡で美しい。

どこか仔犬めいたロニエの素直さに嗜虐心をそそられながら、アスナは裸身の彼女を抱きしめ、頬へちゅっと軽く口づけた。

「よくできました……♥　とっても上手だったわよ、ロニエさん♥

この調子で、もう少し難しいことに挑戦してみましょうか？」

「はい、アスナさま。私、頑張ります」
「ふふ。それじゃあ次は……ちょっとだけ姿勢を変えてみましょうか」
ロニエを優しく、しかし反抗を許さぬ強制性を保ちながら、アスナは彼女のポーズを変えさせる。両手は頭の後ろで組ませ、両脚は左右に開かせたまま、膝を軽く曲げさせる。首輪以外に何も身につけず、胸も股座も隠す手段を失ったロニエの姿が鏡にはっきりと映り込んだ。
「はっ、恥ずかしいです……アスナさま……」
「そう？　その割には……ロニエさんの身体は、とっても喜んでるみたいだけど」
ロニエの肌の上を滑るように進んだアスナの指先が、無防備になったロニエの秘所をそっと開く。エナメルに包まれた指先に、情欲を示す女の蜜がとろりと絡みついた。そうして暫しの間ロニエの秘所を弄んだあと、アスナはその指先をロニエの口元へ持っていく。
「ん……♥」
差し出された二本の指先を、ロニエはそっと口に含んで丁寧に舐めしゃぶる。糸を引く雌汁に唾液を混ぜ込み、舌をエナメル質の上へ滑らせながら、こくこくと嚥下していく。
鞭を握ったアスナの片手が、ロニエの下腹部にそっと触れる。子宮の真上、雌が雌である証のすぐ傍に触れながら、その存在を意識させる。
「そう、上手上手。ちゃんと覚えるのよ、自分のおまんこの味を。キリトくんのおちんぽ専用の性処理穴にしてもらったことと一緒に……ね♥」
「ふぁい、あふゅなひゃま……♥」
「それと、これから私やキリトくんが『奴隷のポーズ』って言ったら、いつでもどこでもこの姿勢（ポーズ）を取るのよ」
「わふぁりまふぃた……♥」
「ふふっ、いい子ね。それじゃあ……次の調教（レッスン）に進みましょう。奴隷のポーズ、崩しちゃダメよ？」

ロニエの唾液を纏った指先を引き抜きながら、アスナは彼女の側から離れる。鏡映しの世界からアスナがフェードアウトし、取り残されたロニエは唇の端と股の間から粘つく滴を零しながら、哀れみすら覚えるほどに卑猥なポーズを取らされ続けていた。

鏡に映る己自身を直視する恥ずかしさに若干身動ぎしながらも、ロニエは奴隷のポーズを維持し続ける。そんな彼女の斜め後ろに立ったアスナは、静かに両腕を組んだ。

「それじゃあ、ロニエさん。私がさっきあなたに言わせたこと、覚えてる？」

淫らで、下品で、普通の人が聞いたら眉を顰めそうな台詞……それをね、今度はロニエさんに考えてもらいたいの」

「わ、私ですか……？」

「そう。ロニエさんが考えた言葉を、鏡に映ったロニエさん自身に語りかけるの。

自分がどういう存在で、キリトくんとどういう関係になりたいのか……どうなるべきなのかをしっかりとね」

「私の、存在……キリト先輩と……♥」

「ええ、そう。私達の動画を見て、いっぱい勉強したんでしょう？　その成果、いまここで見せて」

ごくり、と息を呑んだロニエは、女王様の言葉に頷きを返す。

磨き上げられた曇り一つ無い鏡に映る、ほぼ裸の己の姿。自分自身とは思えないほどに興奮に染まった己の顔。背中に感じる、女王様の視線。下手なことを言えば容赦なくお仕置きされてしまうだろう。それになにより、女王様より更に上のご主人様（センパイ）のお顔に泥を塗ることにもなる。そんなことは決して許されない。

心臓はどくどくと早鐘を打つ中、鏡像の己と視線を重ねたロニエは、すっと小さく息を吸ってから口を開いた。

「――私の名前は、ロニエ・アラベル！　敬愛するキリト先輩の傍付き……つまりは、性欲処理穴係を勤めさせていただいております！

こ、これはまではキリト先輩の事を想いながら毎晩自分を慰めるばかりしか能の無い、ダメな後輩でしたが……この度キリト先輩の、

雄々しく猛々しいおちんぽ様に処女を捧げさせていただき、晴れて正式なおちんぽご奉仕穴となることができました！

私は暇さえあればおまんこ弄りをしている、いっ、淫乱雌豚です！

先輩のご寝所に忍び込んで、先輩の残り香を嗅ぎながら何度も何度もイきまくりました！　キリト先輩とアスナさまに躾けていただき、私の身体を玩具にしていただけることが嬉しくてたまりません！

これからもキリト先輩のおちんぽ様がおっきくなった時は、すぐに私を使っていただけるように、もっとお手軽で変態な傍付き肉便器になれるように頑張ります!!」

はあ、はあ、と荒い呼吸を重ねながら――ロニエは自らが言うべきことを言い終えた。

己自身と見つめ合いながら、己自身を貶め、尊厳をすりつぶす。アスナやアリス、他の女達がそうした行為に耽る映像は幾度も見たが、見るのと実際にやってみるのとでは何もかもが違う。

あくまでこれは『遊び（プレイ）』――だというのに、言葉を口にする度、本当に愛する人の性欲を処理するための穴になることを望んでしまいそうになる。ドクドクと高鳴る心臓が、ロニエ自身が抱いてしまった興奮を誤魔化しようもないほどはっきりと示していた。

「よくできました、ロニエさん。ちゃんと勉強できてて……えらいえらい」

背後から近づいてきたアスナは、ロニエの後ろ髪を軽く引いて顔を真上に向かせると、徐に彼女の唇を奪う。真上からするりと滑り込んでくるアスナの舌に少し遅れて、たっぷりと溜め込まれたのであろう唾液がロニエの口内に流れ込んでくる。

『奴隷のポーズ』を取らされたロニエに、それに抗う術はなく――いや、そもそも女王様の行為に従者たる己が逆らう理由がどこにあろうか。注ぎ込まれる唾液を、ロニエは素直に嚥下していく。細い喉が幾度も微かに鳴ったあと、アスナはようやくディープキスを解いた。

「あっ、アスナさま……おいしかったです……♥」

「ふふっ、ありがとう。それじゃあ、次は……そうね。ロニエさん、『目隠し』されるのは嫌いかしら？」

「ええと……大丈夫だと思います」
「よかった。それじゃあ、次の調教（レッスン）は……」
　個人ストレージにアクセスしたアスナは、黒いアイマスクをオブジェクト化する。アイマスクといってもパッドにゴム紐がついているような安っぽい物では無く、眼帯部分は革製で、細いベルト二本を後頭部に巻いて固定するＳＭプレイ用のものだ。
　ロニエに再び前を向かせ、アスナは彼女の頭にアイマスクを装着していく。瞼に触れる部分は柔らかな素材が使われたそのマスクを付ければ、ロニエの視界全てが闇に閉ざされた。視覚を封じられたことに若干の不安を覚えるロニエの頬に、アスナの指先がそっと触れた。
「さて、ロニエさん。次は私も大好きな『おさんぽ』をしようと思うの。
　今から私があなたの首輪に鎖をつけて引っ張るから、その方向に歩いてくれる？　もちろん、『奴隷のポーズ』のまま、腰振りもつけてね」
「つまり……キリト先輩に躾けていただいている時のアスナさまのようにすればよいのですね？」
「ええ、大正解。そこまでわかってるなら、もっとレベルを上げて……つまりは、少し難しい事をしましょうか」
　アスナの手がコンソールウィンドウに伸び、ロニエの首輪のオプション機能を使用。勉強熱心な傍付きの首輪から伸びた銀色の細いの鎖が、アスナの手の中に収まる。その鎖を二、三度軽く引っ張って具合を確かめたアスナは、続けてロニエの目隠しのオプション機能を使用した。
　相変わらず真っ暗で何も見えないロニエの耳元で、何らかのシステムが起動したことを知らせる効果音が微かに鳴った直後――突然、聞こえるはずの無い音の群れがロニエの鼓膜に届く。
「――ッ!?」
　それはまるで、華やかに彩られた貴族屋敷の大広間。楽団が奏でる気品ある音楽の中、優雅に談笑する紳士淑女の声に、柔らかな絨毯を踏みしめる靴音と高級なドレスの衣擦れの音が微かに混じる。
　何が起きているのか理解できないロニエが、反射的に身体を隠そうとした刹那、アスナが鎖を引いてロニエの行動を言外に戒めた。

「あっ、アスナさま！　これはいったい……」
「驚いた？　周りにたくさん人が居るみたいでしょ？　もちろん、ここにいるのは私とロニエさんだけだから、心配しなくてもいいわよ」
「そうなのですか……？」
「ええ。キリトくん専用のとっても綺麗でエロティックな身体を、わざわざ他の人に見せたりしないわ。
　これはあくまで、バイノーラル……ええと、つまり……本物のように再現した環境音や人の話し声を流しているだけなの。
　だけどこうしてると……まるで、ロニエさんの変態で淫乱な姿をたくさんの人に見られているようでしょう？」
　アスナの言葉に、ロニエはこくこくと頷く。
　周りにはアスナ以外誰もおらず、あくまで音声を流しているだけ――そう言われても、視覚から入ってくる情報が皆無に等しいおかげで、ロニエは己が本当に社交会の会場に連れ出されたかのような感覚を拭いきれないでいた。それどころか、好奇と憐憫が入り交じった視線が肌を突き刺し、くすくすという密やかな嘲笑の音が鼓膜を打つような錯覚まで覚えてしまう。
　ロニエとて、下級とはいえ貴族の端くれである。家格が上の貴族の家で開かれるパーティに参加した事もある。それ故に、耳に聞こえる音はより一層の現実味（リアリティ）を以てロニエの心を嬲る。
「それじゃあ、ロニエさん。『おさんぽ』、始めましょうか」
「は……はい。アスナさま……♥」
　くい、くいと引かれる鎖に従い、ロニエは歩を進める。両脚を左右に開いた姿勢のまま、へこっ、へこっと腰を前後させ、己の無様さをアスナに――そして、周りにいるはずの観客達にアピールする。一歩、また一歩と歩く度、雌穴の奥からじくじくと溢れ出した蜜が滴となってあたりに飛び散る。
『ほら見て、アラベル家のご令嬢。なんて惨めな姿なのかしら』
『ひどいものですな。とてもではないですが同じ貴族……否、同じ人間とすらも思えません』
『聞きましたか。あの淫売、セントリアの見世物小屋で犬とまぐわう

様を披露しているのだとか』

『まあ、本当ですの？　今度見に行ってみましょうか』

『まったく、あのような恥知らずを処断するどころか、手元で大事に飼育されるだなんて……星王妃陛下も変わったご趣味をお持ちですこと』

自然言語処理を活用した合成音声システム――ロニエは存在自体を知らない――によって作り出された侮蔑の言葉が、ロニエの耳にぎりぎり届く程度のボリュームで響く。その一言一言がロニエの心を乱し、同時に痺れるような快感を奔らせていく。

庶民の娯楽に飽きた貴族にとっても、変態ガニマタ姿勢で散歩するロニエの姿はよい出し物だろう。よく育った胸を揺らし、獣のように興奮の吐息を繰り返す様はとても滑稽であり、まともな人間のすることではない。それがわかっているが故に、ロニエの破滅願望にも似た情欲は更に煽られていく。

「アスナさま、アスナさま……♥　私、今、とても興奮しています……♥」

「ええ、よくわかるわ。ほら、周りの皆様にもっと見てもらいなさい。ロニエさんが、どうしようもない雌豚だって♥」

「はいっ♥　ぶひっ♥　ぶひぃっ♥　私、ロニエ・アラベルは、キリト先輩のおちんぽでたっぷり躾けていただいて……おちんぽにお仕えするめしゅぶたにしていただきましたぁっ♥♥

見てぇ、もっと見てえっっ！」

一歩ごとに己の尊厳を踏み砕きながら、ロニエは散歩を続ける。尻を高く突き出し、ふりふりと前後左右に振って己の惨めさをアピールする。隠そうともしなくなった嘲笑の声が届く度、ゾクゾクとするほどの快感が背筋を駆け抜ける。

もちろん、もしこれが本当に多くの人が集められた社交界の会場で行われていたら、ロニエはすぐさま逃げ出していただろう。もしここにアスナが居らず、ロニエ一人での散歩だったとしたら、こうまで乱れることはできなかっただろう。

あくまで再現しただけという安心感と、実際にロニエを見つめなが

ら導いてくれるアスナの存在が、ロニエの雌の部分を開花させる大きな一助となっていた。

「素敵よ、ロニエさん……♥」

淫らな振る舞いを繰り返す、最も新しい後宮の一員を鎖で引き回しながら、アスナは陶然と微笑む。

ロニエが感じている被虐と堕落の悦び――ジェットコースターやホラー映画のように、安全を約束された環境で楽しむ危険と堕落。この仮想空間そのものが雌が何の心配も無く堕ちるための場所なのだから、それを活用しないのも、淫らで甘美な快楽に溺れないのもあまりにもったいない。

故にアスナは、ロニエがこれまで一度も感じたこと無い快感を教えてやるべく、使い慣れたシステムをそっと起動した。

「――――っっっ!?」

システムが起動した直後、ロニエは劇的な反応を見せた。ロニエはまるで電撃にでも打たれたかのようにびくりと身を震わせ、思わず足を止める。そうしてぷるぷると身体を震わせ、何かに必死に抗おうとしているようだった。

「あらあら、どうかした？　ロニエさん。足が止まっているようだけど？」

「あぅ、あっ、申し訳ありませんっ！　アスナさまっ！　わ、わたし、なんだか……くうっ……！　へんな感じに……。

お腹の下の方が、きゅうっとして……なんだか、はあっ、はぁっ……!!」

「大丈夫、大丈夫。怖がらなくてもいいのよ」

鎖をそっとたぐり寄せてロニエの側に近づいたアスナは、もう片方の手に握っていた鞭の穂先をロニエの下腹部にそっと当てる。舞い落ちる羽毛のように微かな接触、その儚い感触にすら、ロニエはびくりと身体を震わせて反応する。快楽に浸る獣から、怯える小動物に変わってしまったようなロニエの様子にくすくすと笑みを零しながら、アスナは彼女の耳元にそっと囁く。

「ロニエさん。あなたが今感じているのはね、『尿意』というものなの」

「にょう、い……？」
「ええ。私みたいに現実世界（リアルワールド）の人は日常的に感じているけれど、アンダーワールド産まれの人は一生縁の無い感覚。それをね、ロニエさんは感じているの。
　今まで見た映像の中に、私や他の女の子が、おまんこのある辺りから黄色い液体を噴き出している場面があったでしょう？」
「はひっ……。ありました……」
「あれは、『おしっこ』。尿意を我慢しきれなくなったり、我慢するのをやめたりするとあれが一気に出てきちゃうのよ」
　誰が設定したのかは知らないが、アンダーワールドには排泄の仕組みが存在しない。ごく一部の例外を除けば、アンダーワールド外からログインしてくる者もいないため、アンダーワールドの住民は排泄という行為や概念そのものを知らずに一生を終える。
　故に、こうして排尿感覚を再現するシステムの餌食にでもなろうものなら――その身体は、未知の感覚によって一気に支配されてしまう。今頃、月光の射し込む部屋でキリトとしっぽり楽しんでいるのであろう、金髪の女騎士がそうだったように。
「アスナさま、アスナさまぁっ！」
「はいはい、焦らない焦らない。はじめてのおしっこ我慢、大変だよねー。
　早くおしっこをお漏らしして、すっきりしたい？」
「はいっ、したいです！　お漏らししたいですうっ！」
　幼子をあやすようなアスナの声音に、ロニエは首をぶんぶんと縦に振って応える。
　その必死さに、ついつい放尿の許可を与えてしまいそうになる自分の甘さをアスナはどうにか抑え込む。調教において大事なのは飴と鞭のバランスであり、今は鞭をくれてやるべきタイミングであるからだ。
「ふふ、わかったわ。でもその前に、ロニエさんに一つ確認したいのだけど……」
「なっ……なんでしょうか」

「私は修剣学院の規則はよく知らないのだけど……。
もし『傍付き』が、お仕えする上級修剣士サマの許可無くおしっこをお漏らししたとしても……それは処罰の対象にはならないのよね？」

ロニエがぴくりと身を震わせたのは、決して股座から登り来る感触のせいだけではあるまい。

アスナの言葉に含まれた、誰の目にも見えない鞭。すっとぼけても許されるその鞭を――ロニエは、あえて受けた。

「……いいえ。それは……それは、くうっ……とても重い罪になってしまいます……♥」

「そうなの？　じゃあ、キリトくんの許可を取る必要がある……ということでいいのかしら？」

「はい……♥　ですので、アスナさま。私に、上級修剣士――キリト先輩に、おねだりする機会をくださいませんでしょうか。

この、未知の感触……はうっ……♥　生まれて初めてのおしっこを……キリト先輩の許可のもとでお漏らしする事を許していただきたいのです……♥」

目隠しの下で、ロニエの双眸が妖しい光を宿す。アンダーワールドには概念すら存在しない行為、それをたかだか上級修剣士が認知し、咎めることなどできるはずもない。それを分かった上でアスナが繰り出した鞭を、ロニエは喜んで受けた。

自らの痴態を晒す歓びに、すっかり目覚めてしまった一匹の雌。その首輪に繋がる鎖をアスナはそっと引いた。

「いいでしょう。それじゃあ、キリトくんのお部屋まで案内してあげるから……そこまで一緒におさんぽしましょうか」

「はいっ！」

元気よく返事をするロニエ。その声音（トーン）は、もしロニエに犬のような尻尾が生えていたら千切れんばかりに振っていただろうと確信してしまう程だ。

奴隷のポーズと品の無い腰振りをしっかりと維持しながら歩くロニエを連れながら、アスナは調教に使用していた一室の扉を開け、そ

のまま廊下を進む。歩く速度を抑えめにする理由は、目隠しをしているロニエへの気遣いでもあるし、キリトに許可を得る前に限界を迎えてしまうかもしれないと、ロニエをたっぷり焦らせるためでもある。

「はっ、はあっ……♥　うう……まだ、まだ着きませんか？　アスナさま？」

「焦らない、焦らない。もうちょっとだから頑張りましょ。

そうだ。せっかくだから……ティーゼさんに見られてる事を想像しながら歩きましょうか」

思わぬ所で親友の名前を出されたロニエは、反射的に身を竦ませる。その反応を見下ろしながら、アスナはまるで獲物をいたぶる女豹かのようにサディスティックな笑みを浮かべながら、ロニエの尻たぶに鞭の穂先を滑らせる。もちろん叩くようなことはせず、しっとりと優しく、撫でるように。

「ティーゼさんが見てたら、どんな顔するのかしらね……。騎士見習いが……ううん、普通の女の子が絶対にしちゃいけない事ばっかりしてるロニエさんの姿を見たら」

「へひゅっ……！　いや、いやぁ……。見ないで、見ないでティーゼ……♥」

「でも、ティーゼさんは優しくて聡明だから、ロニエさんが望んでしていることじゃないってちゃんとわかってくれるわよね。

これはあくまで、キリトくんっていうとっても意地悪な先輩に無理矢理させられているんだって。

――でも、それじゃキリトくんは後輩を虐めるひどい人だって、悪い評判が立っちゃうわね」

「……っ!?」

「そうしたら修剣学院にもいられなくなっちゃうかも……うーん、いったいどうしたらいいのかしら？」

目隠しの裏側に親友の姿を描かせながら、アスナはロニエを嬲る。鞭の痛みではなく、言葉による誘導で以てロニエ自身に考えさせる。貶められるべき雌として、己が何をどうすればいいのかと。調教の興奮と尿意で限界ギリギリの中でも、ロニエならその答えを導き出せる

と信じたが故の問いかけ――そんなアスナの期待に、ロニエはしっかりと応えた。

「ちっ、違うの、ティーゼ……。これは……私がこうしているのは、キリト先輩に命令されているからじゃないの……」

「『そんな……。じゃ、じゃあどうして……？』――って、聞き返すでしょうね。ティーゼさんなら」

ほんの少しだけティーゼの声音に寄せたアスナの囁きに、ロニエはこくこくと首を縦に振る。

「これはね……私が、したくてしている事なの♥　裸でおさんぽするのも、キリト先輩のおちんぽに誓いを捧げるのも、全部私がしたくてやってるのっ！　傍付きとして、先輩のおちんぽのご機嫌次第でいつでもおまんこご奉仕できる雌奴隷に調教してくださいってお願いして、変態として振る舞う事を許していただいたの！」

「『ウソ、ウソよそんなの……』」

「ウソじゃないよ……♥　だって、大好きな先輩に自分の全部を捧げちゃうの……とっても気持ちいいんだもん……♥

こんなの知っちゃったら、もう戻れないよ……♥♥」

「『変態……ロニエの、変態……！』」

「うん、うんっ♥　私、変態なんだもん……♥」

堕ちていく悦びが溶け込みきった声音で、ロニエは愛を語る。愛する人の名誉を守るために自らを貶める――そんな大義名分を盾にして、己の本性を晒していく。

もちろん、こんな行為を人前で実際にしようものなら、どうやってもまともな生活を送ることは難しくなってしまう。ただ、この空間にはそんなリスクは一切存在しない。故に、そこに付随する快感だけを味わうことができる。

雌としての振る舞い方、楽しみ方をすっかり身につけたロニエに満足げに微笑みながら、アスナは目的地へと続く厚い扉をそっと開けた。

「……はうっ……!?」

数時間前、ロニエが純潔を散らした部屋。その扉を開けた途端に溢

れ出すのは、むわりとした男女の匂い。汗と、精と、愛液と――様々な体液が入り交じって作り出す『巣』の香り。

無関係の雄雌には忌避感を覚えさせる一方、交尾を求めるオスとメスは発情させる特別な香りをたっぷりと吸い込みんだあと、アスナはロニエが装備していた首輪と鎖を解除した。

「アスナさま……？」

「よくできました。

さ、いってらっしゃいロニエさん。鼻を使って、あなたの先輩のところまで辿り着いて……ちゃーんと、おしっこする許可をもらってきなさい」

アスナが背中を軽く押して促してやれば、ロニエは暫し戸惑ったあと、鼻をすんすんと鳴らしてニオイを嗅ぎ取ろうとする。目隠しによって視界を奪われている以上、頼れるのは嗅覚のみ。

とはいえ――正直なところ、ロニエが目的のニオイを嗅ぎ取るのは不可能だろうとアスナは踏んでいた。

アスナとロニエが別室で準備と調教を進めていた間、この部屋ではキリトとアリスの交尾が続けられていたのだ。部屋の中はオスとメスのニオイで隅々まで満たされているし、一番の手がかりになりそうな肉棒のニオイ――汗と精が混ざったような男性器独特の芳醇な香りのもとは、ベッドの上でうつ伏せのままぐったりとしているアリスのお掃除フェラによって、アスナ達が入室してくる前に清められている。

アスナやアリスのようなベテランならともかく、後宮に入ったばかりのロニエにはさすがに荷が勝ちすぎる。強烈な尿意に襲われているならなおさらだ。

「先輩……先輩、どちらですか……？　ふぅっ、んんっ……♥」

腐葉土の中からトリュフを探す豚のように鼻を必死に使いながら、ロニエは部屋の中をよたよたと彷徨う。声に混じる不安の色は時間が経つほどにその濃度を増していき、胸元でぎゅっと握りしめられた両手の仕草は彼女の怯えをはっきりと表す。

そろそろ頃合いだろう――そう判断したアスナは、ベッドの縁に腰

掛けたキリトへそっと目配せを送る。内心でアスナと同じ判断を下していたらしいキリトは、裸のまま愛妻に頷きを返してからゆっくりと立ち上がった。

「ロニエ」

「――っ!?　キリト先輩……♥」

待ちわびたキリトの声に、ロニエは敏感に反応する。

「ロニエ。ほら、俺はこっちだぞ」

「はいっ！　ロニエ・アラベル、ただいまそちらに参ります、キリト先輩！」

やっと見つけた明確な手がかりであるキリトの声を頼りに、ロニエはいそいそと歩みを進める。ほんの一瞬前の不安そうな足取りはどこへやら、嬉しさを隠しきれない挙措で確実に距離を詰める。とはいえ尿意の感触が邪魔をするのか、時折身体を震わせて本能的な欲求に必死で抗う。

行為後の疲労でぐったりとしたアリス――雌穴から精液を逆流させたままベッドの上に寝転ぶ彼女の世話をアスナに任せ、キリトは両腕を広げる。そうして、その腕が届く範囲へ過たず辿り着いたロニエを、キリトはしっかりと抱きしめる。

同時に、ロニエの装備アイテム情報にアクセスし、目隠しを強制的にストレージへ格納した。

「おかえり、ロニエ」

「はいっ。ただいま戻りました、キリト先輩」

「アスナにたっぷり調教してもらったみたいだな。楽しめたか？　ロニエ」

「はい……♥　いっぱい恥ずかしいことをさせてもらえて、とっても楽しかったです♥

それで……その、早速なんですけど……♥」

上目遣いと共に言外のおねだりを繰り出してきたロニエに、キリトは頷きを返す。

「傍付き錬士、ロニエ・アラベル。命令だ。股を大きく広げて腰を落とせ」

「はいっ♥」

命令されるがまま、ロニエは言われたとおりの姿勢を取る。視線の先に映るのは、ベッドの上に身体を横たえたままこちらを見つめるアスナとアリスの姿。蠱惑的な視線にドキリとさせられたのも束の間、その視界が突然塞がれる。

もう一度目隠しをつけられたのか――思わず瞼を閉じたロニエだったが、すぐさまそうではないことに気づく。瞼と鼻筋に当たる、熱く固い肉の感触。くらくらとするほどに強烈なオスの香り。びたりと押し当てられた先輩の肉棒で視界を遮られたことを理解してもロニエに戸惑いは無く、むしろそれはとても自然で喜ばしいことに思えてしょうがなかった。

「ロニエ。現時刻を以て、排尿の許可を与える。溜まっているもの、全部出して良いぞ」

「――っ!!　ありがとうございます、先輩……♥」

待ちに待った許しの言葉と、頭を撫でる優しい手の感触。すう、はあ、すう、はあ、と呼吸を繰り返す度、鼻と口から肺へ循環されていく肉棒の香り。その全てから生み出される多幸感が、ロニエのフラクトライトの輝きとなって迸る。下腹部からじんじんと伝わってくる排尿欲求すらも愛おしい。

「キリト先輩専属傍付き錬士、ロニエ・アラベル！　ただいまより……おしっこをお漏らしさせていただきます!!」

もう後戻りのできない宣言を口にし、ロニエは張り詰めていた下腹部の力を抜いた。

「――あっ……♥　はひゃあっ……♥♥　なにこれぇっ……!」

生まれて初めての放尿。リアルワールドの人間が成長過程で身につける、トイレ以外の場所での排泄への既視感を全く知らずに育ったロニエは、括約筋を一度弛めてしまえばもう抵抗することはできなかった。

しゃーしゃーと勢いよく放たれる黄金色の小水。かすかなアンモニア臭を伴いながら溢れ出したロニエの尿は、寝室の絨毯の上へ黒い痕跡を広げながら染みこんでいく。

「あっ、ふにゃあんっ♥　奥から、お腹の奥からあっ♥♥
先輩、キリト先輩！　ごめんなひゃい、とまっ、止まらないんですっ！　いっぱいでちゃうんですぅっ♥」
「そうかそうか。いっぱい出せて偉いぞ―、ロニエ」
性交の快感とはまた異なる未知の快楽。現実世界の人間が幼子の頃に慣れる快感を、成熟した身体で味わうという禁忌。
誇りや清らかさ、矜持に理性――人間として大事にすべき要素を、股の間から噴き出す液体と共に排出してしまっているような感覚にロニエは怯え、そしてそれ以上に確かで濃密な快感に支配される。
顔に触れる逞しい男根の感触と、後頭部をそっと撫でる優しい手の感触。愛する人の巣の中にいる間は、たとえ肉欲に支配されたただの雌豚と化してしまってもよいのだと本能的に理解させられる。
「これ、これ好きっ♥　好きになりました♥　あっ、やああっ♥　もっと、もっと出したいぃっ♥♥」
アスナやアリス、そして映像で見た多くの先達達の様に、一介の雌となる悦びを全身で感じながら――ロニエの身体は、最後の一滴を膀胱から絞り出した。
「はあっ……♥　はあぅうっ……♥」
生まれて初めての尿意、生まれて初めての放尿。その感覚に酔ってしまったかのように、ロニエの身体から力が抜ける。危うく崩れ落ちそうになった彼女の身体を、キリトはすんでの所で抱き上げた。
「おっと、大丈夫か。ロニエ」
「はい……ありがとうございます、先輩」
「それにしても……たくさん出したな。どうだった、初めてのお漏らしは」
キリトに抱えられたまま、ロニエは視線を下に向ける。絨毯の上に染み込んだ、黒い流れの筋。長々と刻まれたその痕跡が、己から溢れ出した小水なのだと思うと気恥ずかしくてたまらない。
「え、えっと……ドキドキしました。それに、すごく気持ちよかったです……♥」
「気に入ってくれたみたいでよかったよ。またさせてやるからな」

「はいっ♥　よろしくおねがいします、先輩♥」
　頬を染めるロニエと軽い口づけを繰り返しながら、キリトは彼女を抱えたままベッドへと運ぶ。
「よく頑張ったな、ロニエ。それで、頑張った直後に悪いんだけどさ……」
「わかっていますよ、先輩……♥　さあ、こちらにどうぞ♥」
　ベッドの上に降ろされて四つん這いになったロニエは、突き出した尻をふりふりと揺らしながらベッドの中央部に向かって進む。交尾を誘う雌の獣のように、雄を迎え入れる準備が整っていること示しながら向かう先は、事後の余韻に浸るアリスの隣。
　力なく広げられた両脚の間から濃厚な精液を逆流させたまま、ぼんやりと視線を虚空に彷徨わせているアリス。そんなアリスの頭を膝枕で支えているのは、女王として振る舞う必要が無くして素っ裸となったアスナだった。
「どうぞ、ロニエさん」
　ぐったりとしたアリスの髪を撫でていたアスナは、近づいてくるロニエに気づくと、近くにあったクッションの山から一つを取り出してロニエに差し出す。
　アスナに「ありがとうございます」と礼を言ったあと、ロニエはクッションに顔を押し当てるようにして上半身を低くし、尻を突き出した。どろどろと愛液を垂れ流す秘所を無防備に晒し、『どうぞ犯してくださいませ』とでも言わんばかりの姿勢を取ったロニエは、顔だけをキリトの方へと向けた。
「そ、傍付き錬士、ロニエ・アラベル……♥　おまんこご奉仕の準備、整いました♥
　どうか、キリト先輩の逞しいおちんぽ専用ザーメントイレとして、ご使用いただけないでしょうか……♥」
　これまで得た知識を総動員した、ロニエの精一杯の誘惑。羞恥心が快楽を得るためのスパイスであることを理解し、立派な雌となったロニエの期待と興奮に応えられない雄がどこにいようか。
　両手でロニエの尻をがっちりと掴んだキリトは、そのまま左右に少

しだけ割り広げる。ひくつく肛門を見下ろしながら、キリトは後輩の蜜壺に肉棒の先端を宛がう。ぐじゅりと溢れた雌の滴が、亀頭を出迎えるようにまとわりついた。

「いくぞ、ロニエ……！」

「はい、先輩♥」

ほんの少しだけ体重を乗せながら、腰を前へと突き出す。同じ夜に純潔を奪われたばかりの雌穴は、太い逸物にこじ開けられることを悦びながら、ぢくぢくと蜜を滴らせる。勿体つけるようにゆっくりと腰を進めたキリトは、じっくりと時間をかけて肉棒を根元までさし込む。

びくびくと身体を震わせて挿入の快楽を味わっていたロニエは、子宮口に亀頭が押し当てられた瞬間、びくんっ、と一段大きく身体を震わせた。

「――ぁあああっ♥♥　はっ、はっ、はあっ♥♥　せんぱい、先輩のおちんぽぉ……♥」

身体の中心を肉杭よって貫かれ、みっちりと埋め尽くされ、ロニエの瞳の光が蕩ける。正常位より密着度は低い分、一方的に犯されている事を強烈に理解させられる体位。メスはオスに勝てない、雌は雄に奉仕するもの――歪んだ本能的認識を叩き込まれることに、ロニエは悦楽を感じずにはいられない。

雌として一皮むけたとはいえ、初めての性交を経験してからそう時間の経っていない後輩を気遣い、キリトは肉棒を深々と埋めたまま暫し待つ。しっかりとボリュームのある尻肉をむにむにと揉みながら手元に視線を向ければ、肉の合間から控えめに顔を出す薄肉色の窄まりが目に入る。

「ほほう……どれどれ」

「せん――ぴゃいいいっ!?」

悪戯心を起こしたキリトが親指の腹をロニエの肛門に当てた途端、ロニエは過剰なほどに反応する。

「せっ、せんぱひ……♥　ひあっ、だめ♥　ぐりぐりって、ひゃめえぇっ♥」

「そういう割にはめちゃくちゃ嬉しそうじゃないか。その内、こっちの穴でも遊べるようにしてやるからな……ロニエ」
「はぅ……♥　先輩が、お望みなら……♥♥　あっ、うう♥」
アンダーワールドもそうだが、大抵のＶＲＭＭＯには排泄という行為や概念が存在しない。だが、同じ人間である以上――肛門は存在する。そして排泄に使われる事が無い以上、その穴はまさに肛門性戯（アナルプレイ）の為だけに存在していると言っても過言では無い。純粋性で言えば、リアルワールド出身の人間など足元にも及ばないだろう。
新たなる未知の快楽の扉に手をかけてしまったロニエを可愛がりつつ、キリトはゆっくりと腰を引く。最初の一突きでたっぷりと愛液をまとった肉槍の軸が露わになった所で――ぐいっ、と奥まで突き込む。
「――あひぃいいっ♥　あっ♥　ああぅうっ♥　ふおっ♥」
肉棒の快感をしっかりと教え込む、焦りとは無縁の前進／後進。太く長い雄の象徴で、狭く小さい雌の穴をじっくりとこじ開け、己専用の穴として造り替えていく。
健気な程にキツく締め付けるロニエの膣肉を堪能しつつ、少しだけかける体重を強める。逃がすつもりはないという意思を伝え、逃げられない事を口ニエに理解させる。
「せんぱぁいっ♥　ああっ♥　先輩っ、せん――いひいぅっ♥　だめ、へんになる、おかしくなっひゃぁううっ♥♥」
開きっぱなしになったロニエの口からだらだらと零れた涎が、クッションの上に落ちて染みこんでいく。肩甲骨の辺りに焦げ茶色の髪が流れ、浮いた汗によって幾筋かが肌に張り付く。
慣らしと性感開発を兼ねるスローピストンで、ロニエの膣内全体を刺激しながら存分に啼かせる。見ようによっては少しだけサディスティックな性交をキリトが楽しんでいると、ようやく回復したアリスがむくりと身を起こした。
「おや……また新しい雌を躾けているのですね、キリト……♥　私の身体で散々楽しんでおいて……本当に、酷い人」
からかうような微笑みを浮かべたアリスは、両腕をキリトの首に回

して抱きつき、そのまま彼の唇を奪う。遠慮無しに舌を送り込むディープキスでキリトの口内を侵略し、ぐちょぐちょと音を響かせながら舌と唾液を絡めあう。

女を犯しながら別の女と交わる――多頭飼い（ハーレム）の醍醐味を、雄にたっぷりと味わわせるためのキス。

「――はぁっ……♥」

嘘せ返るような雌の香気と共に唇を離し、アリスは妖艶に微笑む。それは、普通の男であれば一目見ただけで射精してしまいかねない程に危険な、サキュバスじみた魔性の笑み。

雌としての振る舞い方に精通した金髪の女騎士によって、キリトの劣情は激しく滾らされる。

「悪い、ロニエ……ちょっと激しくする」

「……っ♥♥」

待ちに待った言葉に満面の笑みを浮かべながら、ロニエはクッションに頬ずりするようにこくこくと頷く。

それを見て取った直後、キリトは腰をぐいと前に出し、ロニエの膣内最奥部まで逸物を深々と挿入し直す。

「ひあっ♥　んにゃあぁっ♥」

お預け状態を喰らい続けた事でじりじりと絡みつくロニエの蜜壺を刺激しつつ、キリトはそこで腰の動きを一端止めた。そのまま太く固い逸物を杭のように使ってロニエを固定しつつ、彼女の背中へ寝そべるようにして上体を倒す。更に右手をロニエの右手に絡ませながらベッドへ押しつけ、左腕はクッションとの隙間をこじ開けるようにして彼女の首へと回す。

そのまま両脚と膝の位置を整えるキリトの姿を見下ろすのは、ベッドの上に寄り添って座り直したアスナとアリスの二人。

「あーあ♥　ロニエさん、完っ璧に抑え込まれちゃった♥」

「ああなってしまったが最後、キリトが射精するまで絶対に逃げられません……♥

少々屈辱的ではありますが、なぜか……いえ、屈辱的だからこそとても心地良いのでしょうね♥」

すっかり犯される体勢になったロニエの見下ろしながら、アリスとアスナはくすくすと笑う。互いの秘所に指を伸ばし、くちゅくちゅと音が立つ程に弄り合いながら。

その光景を見上げる余裕すら今のロニエには与えられない。全身をベッドに押しつけられ、腕を絡められ、逃げ場の全てを奪われたロニエを――肉の杭が穿つ。激しく。強烈に。

「――あ――ぁああ〝あ〝あっ♥♥　せん〝っ♥ぱやい〝っ♥せんびゃいぅっ♥♥　あふぁッ♥あっ♥あぁっ♥やあぁっ♥♥」

年頃に豊満な尻肉が柔らかく歪むほど、深く激しい抽送。アスナの調教と、キリトの慣らしによって準備を整えられていたロニエの蜜壺は、それを歓喜の蜜涙と共に受け入れる。子宮から脊髄に伝わり、脳へと駆け上る快楽。その痺れるような感覚に、閨での経験が薄いロニエは耐えきれるはずもない。

「あっ♥あ〝おっ〝♥　はひぃっ♥　しゅき♥せんぴゃはいっ♥しゅき〝いいっ♥」

反射的に身じろぎしようとする身体を完全に抑え込まれてしまう以上、ロニエに為す術は無い。彼女にできることは、淫らな鳴き声を上げながら犯され、メスはオスの為にあるのだという事を本能に刻みこまれることだけだ。

もしそれが望まぬ相手であれば、たとえ肉体で敵わなくとも精神で耐えきる事ができたかもしれない。だが、ロニエを容赦なく犯すのは、ロニエが心から望んだ相手（せんぱい）。

故にカラダは屈服し、ココロは歓迎する。後宮を形作る雌の一匹として、ただ真っ直ぐに堕ちてゆく事を。

「お〝っ♥あ〝っ♥♥あっ♥ぁああっ♥　ぢんぽ、おっぎぃのぉ♥ぐりゅぐりゅ♥きもぢぃ♥きもちぃひぃいっ♥♥」

膣内全体を掻き回し子宮口を揺さぶるような強烈な突き込み。その一撃一撃が突き刺さるごとに、意図せず息を吐かされたロニエの喉から品の無い鳴き声が漏れる。その声がキリトを興奮させ、熱を昂ぶらせ――その熱がまたロニエを狂わせる。

ピストン運動によって飛び散った愛液がシーツの上に次々と染み

こんでいく様は、まるでロニエが失禁しているかのよう。開きっぱなしになった口から唾液を溢れ出させる姿を見て、彼女が一端の騎士であると信じられるものがどこにいよう。

「せんぱひ♥　せんぱいぅ♥♥　あたま゛、とけっ、どげひゃいまひゅ♥♥　あっ♥ああ゛ぁあ゛っ♥」

「くぉっ……ロニエ、そろそろ……」

最後の瞬間に向けて、キリトのピストン運動が更に速度を増す。

みぢみぢという締め付けの音が聞こえてきそうな程にキツく、キリトの肉棒へまとわりつくロニエの膣肉。その締め付けすら押し返すように一層太さを増した肉棒によって嬲られながら、ロニエは恥も外聞も憚らず獣のように喘ぐ。キリトの腕の中で犯され、抱かれ、愛されながら喘ぎ鳴く。

「せんぱいっ♥　せんぱいっ♥　いぐ、いっ――♥」

「ロニエ、でる、出すぞっ!!」

そして、最後の一突きがロニエの最も深い部分を打つ。身体ごと押し潰す勢いで密着したまま――キリトは、膣奥へ精液を放った。

「――ぁああぁああ゛ああ゛っっ゛っ♥♥　せんぱ――ひぃいいいぃっ♥♥　いっ゛ぐ、い゛ぃ――きゅうぅうう゛うぅ゛♥♥♥♥　あっああああっ♥♥ああ゛ぁあぉおぉおああぁああっっ♥♥」

陰嚢から一気に駆け上った精液が、ロニエの子宮口をしっかりとロックした鈴口から勢いよく放たれる。マグマのように熱くどろどろとしたオスの子種汁がロニエの子宮内壁を容赦なく叩き、制圧していく。

口の端より溢れ出す唾液は、まるで注ぎ込まれる精液によって体内から押し出されたかのよう。うまく呼吸を整えられず、表情から一切の締まりを無くし、ロニエはただただ愛される悦びに浸る。

「あお゛っ゛♥お゛♥あっあぁあああ♥♥　はひっ♥いぐっ♥♥　いっへる゛ぅぅうう♥♥♥」

どくん、どくんと蠢く輸精管から精液が流し込まれる度、ロニエの身体もわずかに遅れて蠕動する。その身動ぎすらも、キリトの身体によって抑え込まれる。

内側を侵略され、外側を制圧される。オスの熱い吐息を肌に浴び、滾る精液で子宮を満たされる快感がロニエの理性を焼き尽くす。

巣の支配者たる雄の腕の中で味わう、二度目の膣内射精。金玉の中身が根こそぎ吐き出されたのかと思うほど、たっぷりと流し込まれたその射精は、ロニエにとっては永遠に続く錯覚すら与えるほどだった。

「うっ……ふうぅ……」

射精一回分の精液を送り出しきった肉棒がようやく落ち着きを取り戻すのと同時に、キリトも深々と息を吐く。そして、ロニエの首に回していた腕を抜くようにして彼女の頭をクッションへと寝かせた。

「はひゅ、はひゅうっ……♥♥　せんぱぃ……♥♥」

「ロニエ。すごくよかったぞ……」

ほとんど夢見心地な後輩の頭を撫でつつ、キリトは抜いた腕で己の体重を支える。射精を終えた肉棒は挿れたまま、互いの肌を触れあわせたまま、じっとりとした事後の時間を過ごす。このまま二回戦に雪崩れ込んでもいいのでは――などというキリトの考えを見透かしたかのように、サファイアの如く蒼い瞳がキリトを覗き込んだ。

「ダメですよ、キリト。ロニエは私達と違って経験が浅いのですから。休ませてあげないと、壊れてしまいます」

「お、おう……そうだな、アリス。俺もそうだと思ってたよ」

「……まあ、そういう事にしておいてあげましょう」

あまり納得していない様子のアリスを余所に、キリトはロニエの頬に軽く口付け、乱れた髪の毛を手で軽く整えてやる。体重はほとんどかけず、肌だけを触れあわせたまま、ゆっくりと時間をかけてロニエを落ち着かせる。

ようやくロニエの呼吸が落ち着いてきた所で腰を引き、挿れっぱなしになっていた肉棒をロニエの穴から抜いた。

「――あっ、ああっ……♥♥」

自らの内側を占めていた極太の存在感が失せていく事を感じ、そして少し遅れて逆流を始める重たい白濁液塊の感触に刺激され、ロニエの喉から甘ったるい声が漏れる。

頭も身体も心地よい疲労感に満たされて寝転ぶロニエの視界に映るのは、先程ロニエを調教していた女王様（アスナ）の姿。ベッドの上に仰向けとなり、自らの両腕で膝裏を抱えるようにして秘所を晒すその様には、女王の威厳は欠片も見受けられない。

そんなアスナを見下ろすキリトの姿は対照的だ。堂々と仁王立ちし、精汁の残滓とロニエの愛液に塗れた肉棒をアリスに舐めしゃぶらせるその姿は、雄の逞しさを何よりも雄弁に物語る。

「せんぱい……♥」

うらやましい。雌殺しの肉棒にご奉仕できるアリスが、これから存分に犯されるアスナがうらやましい。そんな思いが言葉となってキリトを呼ぶ。

アリスの後頭部を掴んで肉棒を根元まで飲み込ませたまま、キリトは視線をロニエの方に向けた。

「ゆっくり休めよ、ロニエ。回復したら、また一緒に楽しもう」

「はい……♥　いっぱい、いっぱいしたいです……♥」

ずぬり、と。アリスの口から引き抜かれる猛々しい肉棒。

身体を休め終えたら、あちらの方に混ぜてもらいたい。先輩の身体に抱きついて、キスをしたまま繋がりたい。もう一度おしっこをお漏らしする許可をいただいて、あの感触を味わってもみたい。

脳裏にあふれるたくさんの期待と妄想にロニエが浸っていると、キリトはコンソールウィンドウを操作し、何かのシステムを起動させる。それにいち早く気づいたのは、キリトを上目遣いで見つめながら肉棒に頬ずりとキスを繰り返していたアリスだった。

「おや……それを使うということは、また私におもらしさせたいのですか？　キリト」

「残念。それもそれで魅力的だけど……今回はロニエへのご褒美なんだ」

そう言いながら、キリトはシステム起動のボタンを押す。直後、ロニエの下腹部に急発生する排尿欲求。普段なら反射的な抑えが効くが、性交の余韻で脱力状態になっているロニエに、それを制御する術は存在していなかった。

「あっ……♥」

脚の間からとめどなく溢れ出す、生温かい液体の感触。汗と愛液で灰色に染まったベッドシーツが、小水の黄色で上書きされながら丸いシミを描いていく。

金玉に吸い付くアリスを優しく引き剥がし、今か今かと待ち受ける愛妻の上へと覆い被さるキリトの姿を見つめながら、ロニエは全身に行き渡るまろやかな気怠さと開放感に身を委ねた。

大窓から月光がゆるく射し込む寝室。新しく生成し直したベッドの上に横たわったまま、キリトは事後の気怠さに身を預けていた。

左右に伸ばした腕に感じるのは、柔らかな髪の感触と心地よい重み。

「んん……」

「……」

ややもすれば聞き逃してしまいそうな程に微かな寝息と共に眠る、アスナとアリス。キリトの腕枕に頭を預けたまま、無防備に微睡む二人の美女。

娼婦のように乱れ、肉欲に悶えたあととは思えないほど安らかな寝顔を眺められるのは、男の――キリトの特権である。両腕を封じられているおかげで身動きが取れないという問題など、この温もりに比べたら些末極まる。

そしてもちろん、キリトの側に侍る温もりは二つきりではない。仰向けに寝転ぶ閨の王へ抱きつくようにして、キリトの身体へ覆い被さる彼女もいるのだから。

「先輩……。ふふっ、キリト先輩……♥」

「どうかしたか、ロニエ」

「いえ、呼んでみただけです……♥　ご迷惑でしたでしょうか？」

「まさか。じゃあせっかくだし、俺も呼んでみようかな……な、ロニエ」

「はい、先輩♥」
　左右で眠る二人の乙女達を起こさぬよう本当に小さな声で囁きかけながら、ロニエはとても嬉しそうに微笑む。男の胸板の上で、むにゆりと潰れるふくよかな双丘の感触は、まさに極上の一言。
　肌を重ねた後の、なんとも言えぬまったりとした時間。アスナとアリスが文字通り目を瞑ってくれているおかげで作られた二人だけの秘密の時間を、遠慮無くゆったりと堪能する。そんな贅沢を味わいながらキリトが何の気なしに視線を動かせば、ふと、窓の向こうに大きな満月の姿が見えた。
「……？　どうかしましたか？　先輩」
「ああ。ほら、あっちに月が見えるなと思ってさ」
「お月様ですか？　……あっ、本当ですね」
　少しだけ身を起こしたロニエが、振り返って窓の方を見る。時間の経過によって傾きを増した月の位置は低く、壁の一部を成す大窓からでもはっきりと姿を見ることができた。さすがに『月影』で雲海の上に出て見た時よりは小さいが、それでもその怜悧な美しさには一片の曇りもない。
　暫しの間、その輝きに見とれていたロニエだったが、何かを思いついたかのような微かな身動ぎと共に、再びキリトの方を向いた。
「せ、先輩」
「ん？」
「――『月が、きれいですね』」
　柔らかな月の光が作り出す淡い逆光。その中ですらはっきりとわかるほどに頬を赤らめながら、ロニエは言葉を紡いだ。
　覚えたばかりの――想い人への愛を囁く、迂遠で詩的な言い回しを。
「ええと……使い方、あってますでしょうか……？」
「ああ、あってるよ。ロニエ。……綺麗だ。今日は月が綺麗だよ、本当に」
「それなら……よかったです。先輩」
　その言い回しに『あなたを愛しています』という意味が含まれてい

ることを、ロニエは知るまい。それでも、たとえアンダーワールドに件の文豪がいなくとも――愛する人のすぐ側で見る月が美しくないはずがない。

それはきっと現実世界であっても、あるいは仮想世界であっても変わらない一つの真理なのだろう。

「キリト先輩……」

ほっとした様子のロニエが、キリトの身体にそっと身を寄せる。その柔らかで確かな重みを、キリトはしっかりと受け止める。

きっとこれからも、幾度となくロニエと共に月を見上げるのだろう。二人を隔てる時間と世界の壁は、もうどこにも存在しないのだから。

素肌のまま寄り添いあう恋人達の身体を、そっと包み込む夜の女王の輝き。それはまるで薄絹のように淡く、そして『無慈悲』と呼ぶにはいささか優しすぎていた。

なお、それから数日後。

問題があった『月影』のオートパイロットシステムの再調整に取りかかったキリトだったが、何度試してもシステム停止不可バグが再現されないばかりか、そもそも『黒夜館』にあった発着パッドはオートパイロットシステム起動時の位置から計算すると最寄りの発着パッドですらなかった事を知ってしまい――

「……まさか『ロニエのために空気を読んだ』なんていうんじゃないだろうな、月影（おまえ）……」

――という返答が戻るはずもない問いかけを、鋼鉄の鎧竜（プロトドラグーン）に投げかけてしまうのだが――それはまた、別のお話。

幕間・　背負う過去　／　繋がる未来　［▲］

【背負う過去】

――関東某所。

あまり人気（ひとけ）の無い町外れの一角に、その霊園はあった。あたりを吹き抜ける涼やかな風が、霊園の周囲に生える木々の葉を揺らし、さやさやと微かな音を鳴らす。

今時珍しいガソリンエンジンの音を響かせたバイクが、霊園の片隅にある駐車場に入り込んできたのは、昼を少し回ったあとの事だった。

アスファルトを敷き、白線で区切られた駐車場には、生憎とバイク専用の駐輪スペースは無かった。十台くらいは停められそうな駐車場に、先客は車一台のみ。それほど増えることはないだろうという目算の元、バイクの乗り手（ライダー）は隅の駐車スペースまで移動すると、そこに愛車を停めた。

「ふうっ……」

被っていたフルフェイス・ヘルメットを脱ぎ、キリト――もとい、桐ヶ谷和人は小さく息を吐く。押しつぶされていた髪を手ぐしでざっくりと梳かしたあと、跨がっていたシートから降りてヘルメットをケースへ放り込んだ和人は、代わりにオーグマーを装着した。そのまま電源を入れれば、聞き慣れた案内音声がオーグマーの起動を告げた。

「お待たせ。着いたよ、サチ」

『――ここ、なの？』

「ああ。菊岡の言ってたことが間違ってなければだけど……まあ、たぶん大丈夫だぜ」

『じゃあ、ここにあるんだね。私の……お墓』

オーグマーが投影する映像の中に浮かび上がる、セミロングの黒い

髪の女性――サチは、そんな事を微かに呟いた。

墓参りがしたい。自分の身体が眠っているはずの場所に、行きたい。

サチがそんな事を言い出したのは、二週間ほど前のことだった。

何がサチを突き動かしたのか、それをキリトは知らない。それでもキリトは、そこら辺の情報を握っていそうな相手――菊岡に借りを一つ作る覚悟でコンタクトを取り、サチとのパイプを繋いだ。その後、彼女が菊岡と何をどう話したのかは聞いていないが、ともかくサチは己の墓がある場所の情報を受け取った。

もちろん、アリスのように現実世界（リアルワールド）で活動するための肉体（マシンボディ）を持たないサチが、単独でその場所に向かうことはできない。彼女を彼女自身が望む場所へと連れて行くための足代わりとして白羽の矢が立ったのが、誰あろうキリト――もとい、和人だった。

『せっかくのお休みなのに、ごめんね。キリト』

「いいさ、これくらい。お安いご用だ」

『ありがとう。そうだ。戻ったら、アスナさんにもお礼しないとね。キリトを貸してくれたお礼』

サチの言葉に、和人も頷きを返す。

アスナ――もとい、明日奈には、サチと二人で少し遠出するという事しか話していない。本当なら墓参りに行くことも伝えようと思っていたのだが、『いいわよ。何か特別な事情があるんでしょ？　キリトくんの顔にそう書いてあるわ』と看破されてそれきりだ。

大した事情も聞かず、キリトとサチを信頼して快く送り出してくれたアスナには頭が上がらない。

『静かだね、ここ』

「……ああ」

隣に並んで歩くサチの言葉に、和人は小声で返答する。多くの死者が眠る霊園は、風に揺れる木々の枝葉の音と、墓石の間の道を歩く和人の足音だけが響いている。騒ぐ者のいない独特の静謐さが、和人の全身を包んでいた。

この墓地の中に、《ＳＡＯ》で命を落とした者も混ざっているのだろうか。ついつい雰囲気に流された和人が、うつむき加減に視線を落としながらそんなことを考えていると、前方から足音が聞こえてきた。

視線を上げれば、そこには連れだって歩く若い男女の姿があった。

黒い髪を長く伸ばした女性の方は、見た目から察するに和人とそれほど年齢は変わらないだろう。端的に言って『美人』。一瞬視線が掠めただけでも整った顔立ちをしていることがわかる。

一方、その連れと見られる男性は明らかに和人より年上だった。しかしその雰囲気は、どことなく人間離れしたものを感じさせる。『狐が人間に化けているのだ』――とでも言われたら信じてしまいそうなほどの妙な存在感を持っていた。

すれ違う寸前、互いに小さく会釈をして通り過ぎる。

やがて、去って行く二人の足音が聞こえなくなったのと時を同じくして――和人は、一つの墓の前で足を止めた。

「ここだよ、サチ」

『ここが……私の……』

一般的なものより若干幅広かつ背が低い墓石。表面に『静偲』という祈りの言葉が刻まれた墓石とそれを乗せた台座は、どちらも濃灰色をした石から作り出されていた。

ここが、サチの肉体が眠る墓所。火葬されたサチの骨を収めた骨壺が、この下に納められているはずだった。

『なんだか……不思議だね。自分のお墓を、自分で見るなんて。……幽霊って、もしかしてこんな気分なのかな』

冷たく固い石で作られた祭壇の前にかがみ込み、サチは興味深そうに己の墓所を見つめていた。

《ＳＡＯ》でＨＰを全損したサチは、そのきっかり１０秒後、ナーヴギアが発する電磁パルスによって脳を灼かれて死亡した。その死は医学的に検証され、確認され、その肉体は葬儀の後、法的手続きに則り火葬された。

それは仕方の無いことだ。まさか誰も――サチ自身すらも――サチの記憶と思念がザ・シード連結体（ネクサス）の中に記録され、二年の時を経て

アスナに《離脱現象》を齎したばかりか、最終的に自我と存在を確立するなどと予想できはしなかったのだから。

いや、仮にそれを予想できたとしても、ナーヴギアによって完膚なきまでに破壊された脳髄を外科的に回復させる手立てなどどこにもない。あの日、和人が――キリトが《月夜の黒猫団》を守れなかった時点で、こうなることは決まっていたのだ。

『でも、来られてよかった。なんだかすっきりした。なんていうのかな……吹っ切れた気がするよ』

「――！　サチっ……！」

『そんな顔しないで、キリト。大丈夫、私は……私は、どこにもいかないから』

拡張された現実の視界に映るサチ。その姿が、そのまま空気の中に溶けてしまいそうに思えて、和人は思わず手を伸ばす。こんなに近くにいるのに、互いに触れる事すらできない。それでもサチは、和人の差し出した手に己の両手をそっと重ねた。

見つめ合う視線が、二人の間で自然と重なる。しんしんと降り積もる雪のような、微かにして透明なサチの声が和人の耳に届いた。

『私ね、確かめたかったの。

私の身体はなくなってしまったけど……それでも、私はちゃんとここにいるんだって。キリトの側にいていいんだって』

「そうか……。だから、わざわざここに……」

『うん。本当は少し怖かったんだけど……キリトが一緒に来てくれるって思ったら、勇気が出せたんだ。

ありがとう、キリト。私のワガママに付き合ってくれて』

そう言って、サチは共に眠ったあの日のように微笑む。

「いいさ、これくらい。サチのワガママなら、いくらでも付き合ってやるよ」

『やっぱり優しいね、キリトは』

現在、《ＧＧＯ》内から無事に回収されたサチのプレイヤーデータは、ラース原宿支社内に存在するライトキューブ・パッケージの一つに納められている。肉体はとうに無くなっても、彼女の意識や記憶の

全て――『魂』は、今もそこにある。彼女は、今もちゃんと生きているのだ。その事実だけは、たとえ相手が誰であっても否定させるつもりはなかった。

『――そろそろ、いこっか』

「ああ。だけど、その前に……」

最後に一度だけ、墓の前で手を合わせる。そこに眠るサチの身体に祈りを捧げたあと、二人はようやくその場を後にした。

駐車場に戻ってきてみれば、停まっていた車の姿は既に無く、広い駐車スペースにはバイク一台だけがぽつんと取り残されていた。

『……ね、ねえ、キリト』

「どうかしたか、サチ」

バイクの側でヘルメットを取り出そうとした矢先、聞こえてきたサチの声に、和人は手を止めた。オーグマー越しの視界の中に映るサチは、両手をぎゅっと重ね合わせながら恥ずかしそうに俯いていた。

『ワガママ、もう一つだけ……いい？』

「当然。できれば、俺のできることの範疇で頼む」

『あのね……名前、教えて欲しいの。キリトの、現実の名前』

「え？　いきなり何かと思ったけど、そんなことか」

『そんなことじゃないよ！　私にとっては、とっても大事なことだもん』

身に染みついたＶＲＭＭＯプレイヤーの常識――自分のリアル情報を明かさず、相手のリアル情報を聞こうとしない――のせいで、サチに己の事を紹介するのをすっかり忘れていた。苦笑しつつ、軽く居住まいを正した和人は、正面からサチを見つめた。

「それじゃあ、改めまして。俺のリアルネームは、桐ヶ谷和人。よろしくな、サチ」

『きりがや、かずと……桐ヶ谷和人……。そっか、だからキリトって……』

胸元に当てた両手を握りしめたまま、サチは和人の名を繰り返し呼ぶ。その名前を、己の記憶の中にしっかりと刻み込むように。

「なんというか……安直で悪かったな」

『そんなこと思ってないよ。キリトも、和人も、どっちも素敵な名前だよ。

それじゃあ……次は、私の番だね』

ゆっくりと歩みを進めたサチを、和人は両腕を開いて招き入れる。

現実の腕では、拡張現実にいる彼女に触れることはできない。それでも彼女の身体に腕を回し、その小さな身体を抱きしめる。

サチは静かに微笑み、和人の胸にこてんと頭を倒した。

『私の……私の名前はね――』

木々の間を、少しだけ強い風が吹き抜けた。

彼女が発した微かな声は、彼の耳だけに届いて――風の中を舞う粉雪のように、そっと消えていった。

【繋がる未来】

衛星写真を拡大しなくても見えてくる。人里離れた森（焼け痕多数）の奥に、ポツンと建つ一軒家。

いったいどんな人が、どんな理由で暮らしているのだろうか。

まあ、『どんな人』――と言われても、一言で言うのは難しいだろう。何せ住民の数は既に二桁。男が三人、女が十人以上。ペットが四匹（フェザーリドラ、ナガハシオオアガマ、セルリヤミヒョウ、トゲバリホラアナグマ）。大家族ホームドラマが撮れそうなレベルの大所帯である。

一方、『どんな理由』の方は単純である。落ちてきたのだ、空から。色々というには色々すぎる紆余曲折の末に。

そんなポツンと一軒家の周囲では、夜を徹した大規模な建築工事が続けられていた。目的はただ一つ、『ポツンと一軒家』状態から脱却し、襲撃者の戦闘意欲を削ぐ為の緊急駆け込み工事である。

壁や建物が増えることで攻め難く守り易い構造になるのはもちろん、襲撃者側に建築物を破壊する事への忌避感が生まれるかも知れな

い。それを期待しての建築作業だった。
「んー……。うぅぅうん……？」
「どうしたんだよ、クライン。うなり声なんか上げて。ミーシャの物真似でも練習してるのか？」
「そうそう、これがなかなか難しくて――って、んなわけあるか！」
絶賛工事中の我が家の南方に流れる川。そこに投網をぶん投げ、食料となる魚を捕まえた何往復目の帰り。
背負った投網の中にたっぷりと魚を詰め込んだ男――クラインの叫びが森の中に木霊する。その隣で同じように魚の入った投網を担いだままキリトが怪訝な顔をすれば、クラインも同様になんとも言えぬ顔をしてみせた。
「なあ、キリの字よう。お前、なんか妙だとは思わねえのかよ？」
「いや、妙に思うことだらけだぞ。《ユナイタル・リング》そのものにしても、襲ってきた連中にしてもそうだし……」
「ちげぇよ。そういう事情が根深そうな方じゃなくてだな……アスナちゃんだよ、アスナちゃん」
「――アスナが？」
「おう、いきなりそんなマジな顔になるなっての。別にそこまで重い話じゃねえからよ。ほんっとおめーさんはよぉ……」
無意識に表情に力が入っていたキリトを、クラインが『どうどう』となだめる。
リアルの時刻ではそろそろ０時半を回る頃。２３時すぎまでかかって襲撃者（レイダー）との戦いを一段落させたあと、『今夜中に町の原型を作って次の襲撃への備えを固める』というキリトの宣言にノッた全員は、手分けして緊急工事を進めていた。
キリトとクラインの仕事は、住民やペットたちの食料となる魚を川から獲ってくるというものだった。もちろん、漁に使う投網はアスナのお手製である。スキルの熟練度上昇も兼ね、網を投げては引き、投げては引きの繰り返しで魚を集めるだけのお仕事である。
びちびちと跳ねる新鮮な魚を収めた網をストレージいっぱいに詰め込み、クラインは再び口を開いた。

「なんつーか、アスナちゃん……いや、アスナちゃんだけじゃねえな。なんか女の子達、皆……手慣れてる気がしねぇか？」
「手慣れてる……って、何にだよ？」
「この作業に決まってんだろ。工事というか、町造りというか……。アスナちゃんを筆頭に、皆作業がテキパキしてるっていうかよ。俺らが横で口を挟むタイミング、全然無かったじゃねえか」
「まあ……言われてみれば、確かに」
クラインの言うことに、キリトは首を縦に振る。
町の原型を作ろうと言い出したのはキリトだし、現在の石壁の更に外側に新たな壁を設けた真円四分割構造にしようと提案したのもキリトである。
ただ、そこから先は女性陣の独壇場だった。
用途別のエリア分割に始まり、必要な素材量の計算と工事着手順、工事を円滑に進めるための道具の作成順から作業班の人員割り当て、更には今後のログハウス増築を見越した部屋割り案の作成まで――アスナを議長とした打ち合わせは実に恙なく終わり、そのままマンパワーに物を言わせた作業タイムに突入していた。
キリトとクラインは食料と水の確保。つまりは魚獲りと川からの水汲み。
エギル、リーファ、シリカ、それにトゲバリホラアナグマのミーシャを加えた三人と一匹は木材や石材といった重量物の確保および運搬。
集められた資材の類は、リズベットとレインが自慢の腕を大いに振るってどんどんと加工を進めていき、それを使ってストレア、サチ、セブン、そしてユイが建築を進めていく。面子が面子なのでなんとも賑やかな工事が繰り広げられているが、建築作業や配置に関してはアスナの完全統括が入っている。ちょっと目を離した隙に巨大な石像が建立されていた――なんてことも起きないだろう。
アリス、イーディス、シノンはパッテル族の有志を伴って周辺の簡易調査やマッピング。同時に襲撃者がブービートラップなどを残していないかを確認し、拠点周囲の安全をより確固にしていく。
フィリア、ロニエ、ルクスも食料確保担当だが、狙う獲物は果実や

野菜、穀物といった類の植物系食料。これは新拠点内での生活を狩猟から農耕にシフトさせるための重要な作業だ。護衛と嗅覚による探索支援も期待して、セルリヤミヒョウのクロも随伴している。

今この場にいる面子をフル活用した人海戦術は予想以上の効率を発揮し、凄まじい勢いで各種工程を進行させていた。この調子なら、リアル時間が丑三つ時を迎える前に全ての作業を完了させ、眠りにつくことができるかもしれない。

アルゴにユウキや《スリーピング・ナイツ》の面々、プレミアとティア、クレハやツェリスカ達もいればさらに作業は効率的だっただろうが、生憎それぞれ《ＡＬＯ》、《ＳＡ：Ｏ》、《ＧＧＯ》から強制コンバートされたプレイヤー達が送られる初期拠点周辺にいると先日連絡があった。合流するにしても、それはもう少し先の事になるだろう。

もしここに、今は亡き友が――二百年の時の中、人としての一生を全うする事を選んだあいつがいたら。心のどこかでそう思わずにはいられない。

この切なさとは、きっと一生付き合っていくことになるのだろう。なんとなく湿っぽくなってしまった胸の内を誤魔化すように、キリトはわざと明るい声を出した。

「まあ、クラインの言うこともわかるけどな……お前、アスナが誰だか忘れてないか？　あの《閃光》の副団長サマだぜ？」

「へっ。ドヤ顔で言うんじゃねえよ、ったく。

それをさっ引いたってよ……なんちゅうか、むちゃくちゃ手際がいいんだよな。まるで、前にもやったことがあるみたいによ。なあキリの字。お前さん、なんか心当たりあったりするんじゃねえのか」

「心当たりって、そんなもんあるわけ――」

ない、と言おうとしたキリトの口がフリーズする。脳裏にばっちり思い当たってしまうのは、少し前――《ユナイタル・リング》への強制コンバートが発生する前、キリトのプライベートＶＲ空間内で行われた大規模区画整理の事だ。

キリトが思いつくまま、あるいは女性陣にねだられるまま違法建築を繰り返してきたことによって、さすがに雑然としてしまった空間内

を整えるべく行われたスクラップ&ビルド&移築。3日に分けて行われた大規模区画整理は、最初こそ誰もが戸惑ったり手間取ったりの連続で、初日は遅々として進まなかった。

キリトには今でもはっきりと思い出せる。区画整理初日の夜、VR空間の3Dフィールドマップを見ながら行われた区画整理会議の様子が。

『――ここにこのサイズの闘技場を建てると、露天風呂からの眺望が全部塞がれちゃうのよね……』

『そっかー。じゃあ、こっちに移動するっていうのはどう?』

『あ、そこはダメ。私のシューティングレンジに端が被ってるわ』

『ねえねえ。この間作った私のトラップダンジョン、こっちに移動していい?』

『それは……あっ、ダメですよ、フィリアさん。地下で妖精牧場の壁をぶち抜いちゃってます。こっちにしませんか?』

『そっちはダーメー! アタシの地下実験場(おもちゃばこ)が潰れちゃうー!』

『ふむ……この際ですから、剣道場も拡張してしまいましょうか』

『じゃあついでに、お姉ちゃんのメイドカフェと、ライブステージも大きくしちゃおうかしら』

昔から『女三人集まれば姦しい』とはよく言うが、此度の区画整理に参加した女性の数はその約5倍である。当然、姦しさも5倍――いや、余裕でそれ以上だった。キリトの書斎兼作業スペースに集まった女性達が、ああでもないこうでもないと言いながら議論と調整を重ねていく。

一応最高権限管理者として何度か口を挟もうとしたキリトだったが、その挑戦は全て無駄に終わった。

『キリト様、お茶でもいかがですか』

『……ありがとう。もらうよ、ルクス』

『先輩。お茶請けのケーキをお持ちしました』

「悪いな、ロニエ……」

完全に蚊帳の外に置かれたキリトを哀れに思ったのか、ルクスとロニエの二人が紅茶とケーキを供してくれる。二人が着ているメイド

服は、レインの店から借りてきたのだろう。ロングスカートがふんわりと広がったデザインのメイド服がとてもよく似合っている。

甘さ控えめのマロンクリームケーキをフォークでカットし、一口。今日のケーキは、サチの作と聞いている。栗の風味が舌の上でとろけて溢れ出すケーキは、キリトが期待していた以上に美味い。茶葉の味と香りがしっかりと染み出た紅茶との相性は極上だ。

『……ところで、二人はあっちに混ざらなくていいのか？』

『キリト様のお気遣いは嬉しいのですが、私はこのＶＲ空間に来て日が浅い方ですから。皆にお任せしようかなと』

『私もルクスさんと同意見です。それに……こういう時でもないと、先輩を独占できませんから』

ほんのりと頬を赤らめる二人にもう一度礼を言い、キリトは紅茶に口を付けた。

そうこうしている間にも、会議は相変わらずの姦しさで続いていた。だが、そこはさすがに《閃光》さまの面目躍如。しばらく議論を重ねる間に配置のコツや調整の感覚を掴むと、キリトが想像する十倍の速度で区画整理を進めていった。習得したテクニックを、アスナが他の女性陣に対し惜しげもなく伝授していったのも効果的だった。

かくして、キリトのプライベートＶＲ空間は、見事に整理され美観を取り戻した。キリトとしては某アルゲードのようにもう少し雑然としている方が好みなのだが、提案する隙すら見つけられなかった。

一度団結した女性陣に勝てる者はいない。たとえそれが後宮の主たるキリトであってもだ。

そう。キリトのハーレムとは、傍から見ればキリトが頂上に立っているようで、実際の所は女性達の承認と信頼によって成り立つ超女権社会なのである。

もっとも、女性陣からの好意を盾に傍若無人な振る舞いに耽る――なんてつもりのないキリトにとっては、それくらいでちょうどいいというのが実情だったりもする。

とはいえ、それでキリトの希望が無下にされたかと言われればそれは違う。現にキリト好みの雑多で猥雑な雰囲気を保ったエリアも、

『《ＧＧＯ》を模したスペースを作る』という建前でいくつか残された。悪徳と退廃の象徴たる『黒夜城』もそのままだし、昼寝に適した草原は眺めの良い場所に用意されている。

まあ、とにもかくにも。

「――ないぞ、そんなの」

「本当かー？」

「本当だっての」

「……怪しい。ぜってー、怪しい……」

剣呑な目つきをしたひげ面のサラマンダーの視線がキリトを訝る。逃れるように視線を逸らしつつ拠点までの道を歩むキリトだが、クラインの疑念はまだ晴れないようだった。

とはいえ――話せるわけがないだろう。クラインはよき兄貴分ではあるが、それでも話すわけにはいかない。まさかキリトがここにいる女性陣のほとんど、そしてここにいない女性数名とも関係を持っているなどと。

女性達の体面の問題もあるし――なにより、万が一にでもクラインがその事実を知ればあまりの衝撃と絶望に切腹しかねない。あるいは錯乱してキリトに斬りかかってくる可能性だってゼロではない。そんな理由で《ユナイタル・リング》のプレイヤー数を減らすのはゴメンだった。

キリトがもう少し大人になって、きっちり全員の面倒を見られるようになるまでは秘しておくしかないのだ。

「怪しい……やっぱりどう考えても怪しすぎる。おいキリの字、まさかおめえ……」

「な、なんだよクライン」

妙に鋭さを増したクラインの瞳。そこから放たれる視線に、さしものキリトもたじろがざるを得ない。

まさか、ついに感づかれたか――。

「――俺に隠れて、アスナちゃん達と新しいＶＲＭＭＯ始めてやがったな!?　クラフト要素のあるやつ!!」

全く以て杞憂も杞憂。

腐れ縁のサラマンダーが何一つ感づいていない事に、キリトは内心で胸をなで下ろした。

「あのなあ、そんなわけないだろ……。

だいたい《ＡＬＯ》と《ＳＡ：Ｏ》と《ＧＧＯ》の掛け持ちしてたのに、それ以上増やしてる余裕がどこにあったっていうんだよ」

「む……言われてみればそいつも確かに一理あるな……」

ウソは言っていない。クラインに隠れて女子チームと新しいＶＲＭＭＯを始めたりはしていない。

クラインに隠れて――言い出すタイミングを逃したともいうが――プライベートＶＲ空間を作った挙げ句、見目麗しき乙女達といちゃいちゃしたり同衾したり肌を重ねたり枕を共にしたり褥に招き入れたり三千世界の烏を殺して朝寝をしたり夜明けのコーヒーを一緒に飲んだりしているだけである。断じて、やましいことしかしていない。

まあ、いずれはクラインにも事情を明かすべき時が来るのだろう。だが、少なくともそれは今ではなかった。

「となると……やっぱりすげえんだな、アスナちゃん……」

「そうだぞ。だからもっと心の底から感謝して崇め奉るように」

「だからなんでおめーが自慢げな顔しやがるんだって――のっ!!」

ばしんっ、という鋭く重い音と共に、クラインの痛烈な平手打ちがキリトの背中を強かに打った。

「いってえっ!!」

夜の森の中にキリトの悲痛な叫びが木霊し、クラインの何らかのスキルの熟練度が上がった。

かくして、彼らはまた新たなる仮想世界で、新たなる戦いに身を投じる事になるのだが――それはまた別の、そしてずっと先のお話。

14―1．週末のハーレム（全員　／　ロニエ・ルクス）

――たまに、そういう日が訪れる。

たまたま《ＡＬＯ》や《ＧＧＯ》、《ＳＡ：Ｏ》などのＶＲＭＭＯで大したイベントが行われていない日。たまたま、詩乃のバイトも休みで、木綿季の検査の予定もなく、虹架のアイドル活動のオフ日であり、（時差はあるが）七色の研究スケジュールも一段落し、アリスの外交行脚の予定も途切れる日。

つまりはいつもの面子のほとんどに大した用事もなく、なんとなく暇を持て余しそうだなとなる日。

そんな日が、たまに訪れる。

そういう日になると、明日奈は友人の家に泊まりに行く。

事前にきっちりと予定を立て、家族の了承を得ての外泊。当然だが和人の家ではない。二人が深い関係であることは両家共に承知しているが、それはそれ、これはこれである。

宿泊先は、気の置けない仲である篠崎里香や、一人暮らしをしている竹宮琴音、あるいは朝田詩乃のアパートであることが多い。最近は柏坂ひよりの部屋にも泊まるようになった。

野郎と一つ屋根の下ならいざ知らず、女性同士のお泊まり会であれば、明日奈の両親も流石にとやかく言う理由はないからだ。

そういう日が訪れると、アリスは自室に引きこもる。

六本木にあるラース支社。その最もセキュリティが厳重な区画に設けられたアリスの私室に入り、マシンボディに充電端子を刺しっぱなしにしたまま部屋から出てこなくなる。ロニエやサチ、イーディスといったライトキューブユーザーも、マシンボディこそないが概ね似たような調子になる。

色々と事情を抱えた女同士、積もる話もあるのだろう――という優

しさ半分、認識の甘さ半分のラーススタッフ達の気遣いによって、彼女らの休日は邪魔されることなく保たれる。そこら辺の事情に薄々感づいているのは神代博士くらいなものだ。

そういう日の朝、他の女性陣もだいたい似たような状態になる。

一人暮らしの者は自室のベッドを整え、そうでないものは家族に色々と話をつけて、なるべく長い時間ログインしていられるように状況を整える。

最近発売されたアミュスフィア用顔面保護パッド――長時間ダイブしていても顔に跡が残らないようにしてくれる優れもの――を付けるのも忘れない。

そういう日に限って、クラインは暇になる。

普段は仕事で忙しい分、こういうときにクエストの攻略を進めようと知り合いに声をかけまくる――が。

アスナも、リズも、シリカも、リーファも、シノンも、フィリアも、アリスも、レインも、セブンも、ユウキも、ストレアも、ロニエも、ルクスも、サチも、アルゴも、イーディスも、皆一様に『ごめんなさい、クラインさん。今日は用事があるの』、『先約があります』、『今日はちょっと気分じゃないのよね』、『取材があるんダ』などと理由を付けてクラインを袖にする。

クレハとツェリスカは《ＧＧＯ》へログインするなり例のアイツと共にフィールドに出かけてしまうため、声をかける間すらもなかった。

仕方なしに馴染みの野郎共に声をかけるが、片方には「嫁に家族サービス」と言われて断られ、もう片方には「嫁（アスナ）とデート」と言われて断られる。これだから嫁のいる奴は信用できない。

結局、孤独なサラマンダーは――ヨツンヘイムの空の下、優しき女神の足跡を追いかけながら追跡スキルを伸ばしていくのだった。

まあ、とにもかくにも。そういう日はたまに訪れるのだ。

だらだらと快楽に溺れ、欲望を満たすための日が。

長い年月をかけて砕けた珊瑚の欠片によって作られた、純白の砂浜。透明度の高い南国の海から打ち寄せる、心地よい波の音。吹き抜ける涼やかな潮風が、からりとした暑さを程よく宥め賺してくれる――そんなこの場所は、日本から遠く離れた某国の高級リゾート。

風光明媚な地形と美しいオーシャンビューを活かし、観光業に特化したそのリゾート地帯。その一角にはいくつもの小島が点在しており、一つ一つの島がプライベートリゾートとして富裕層向けに販売されている。

そんな島の一つを目指して進む、一台の大型クルーザー。本土とプライベートアイランドを結ぶ唯一の交通手段であるその船には、三人の男女が乗り合わせていた。

「――キリト様。お飲み物をお持ちしました」

「ああ。ありがとう、ルクス」

クルーザー中央に設けられたメイン船室。室内のソファに腰掛けたキリトに礼を言われ、若干恐縮した様子を見せながら、ルクスは銀盆に乗せていたトロピカル・ドリンクのグラスをテーブルへと置く。

「チャイナ・ブルー、トロピカル風ノンアルコールカスタムです。どうぞ」

円筒形の細長いグラスを満たすのは、ダイスカットされた氷と、炭酸の泡をしゅわしゅわと弾けさせる青い液体。グラスの端に飾り付けられたフルーツは、ルクスが手ずからカットしたものだ。

ふわふわとした白銀色の長い髪を揺らしながら、ルクスはグラスにストローを差し込む。そんな彼女は、《ＡＬＯ》で着用していた白いビキニタイプの水着の上に、男物のグレイカラーのパーカーを羽織っていた。

キリトの方もまた、上はハワイの土産物屋で売られていそうなアロハシャツを羽織り、下はトランクスタイプの水着をはいているというルクスと概ね似たような出で立ちだった。

「他にご用がありましたら、なんなりとお申し付けください。キリト

様」
「そうか？　じゃあ……そうだな。隣に座ってくれないか、ルクス」
「へぁ!?　え、ええと……では、失礼します……」
レインの薫陶の賜物か、あるいはロニエと無意識に切磋琢磨しているせいか、最近妙にメイドっぽい振る舞いが板についてきたルクスをからかいつつ、キリトは彼女を隣へと招いた。
遠慮がちに腰掛けるルクスの横で、キリトはドリンクに口を付けた。ストローを通って舌の上を駆け抜けていく、爽やかなトロピカル・ドリンクの味。弾ける炭酸の感触も相まって、キリトは一気に半分も飲み干してしまった。
「それにしても……おお、さすがルクスだ。美味しいよ、これ」
「本当ですか!?　ありがとうございます、キリト様」
お手製ドリンクの味にキリトが素直な感想を述べてやれば、ルクスはぱっと頬を綻ばせる。
寄り添うルクスが向けてくる笑顔と、憧れにも似た尊敬の念。キリト自身としては自分をそれほど大した人間ではないと思っているが、ルクスのそれを敢えて止める程の理由も無かった。
「あ、あの……キリト様……」
「なんだ、ルクス」
「私も、その……一口いただいてもいいでしょうか？」
「ん？　ああ、もちろん」
おずおずと問いかけるルクスに、ストローが突き刺さったままのグラスを差し出す。それをルクスはすぐに受け取る――かと思いきや、その視線はグラスとキリトの間を交互に彷徨う。明らかな逡巡を見せる彼女の様子にキリトもまた戸惑うが、グラスの中の青色を見てなんとなくその理由を察した。
「……なあ、ルクス。俺の勘違いだったら謝るけど、一口って……」
「その……勘違いではないと思います……」
「そ、そうか……じゃあ、ちょっと失礼して……」
頬を真っ赤に染めて俯くルクスの横で、キリトはストローに口を付けてドリンクを吸い上げる。そうして弾ける炭酸を含んだ液体を口

の中に留めたまま、ルクスの顎に片手を当て、半ば強制的に顔を己の方へ向けさせる。まるで祈りを捧げる聖女のように両の瞼を閉じたルクスを引き寄せ、そのまま唇を重ねた。

「ひゃふっ……♥」

舌先を滑り込ませて道を作り、体温でほんの少しヌルくなってしまったトロピカル・ドリンクをルクスの口内に流し込む。柔らかな体をパーカーごと抱きしめているおかげで、嚥下の感触が微かに伝わってくる。

いつの頃からか後宮（ハーレム）内で流行り始めた、飲み物の口移し。その元凶がシノンであることはほぼ間違いない。本人は否定しているが、ハーレムセックスが一段落する度に水分補給という建前でキリトと飲み物の飲ませ合いを繰り広げた挙げ句、それを周囲の女性達に見せ付けまくっている時点でどんな言い訳も立つはずがない。

無論、断らないキリトが悪いと言われればそれはその通りなのだが。

「んぅ……♥　キリトひゃまぁ……♥」

キリトの口の中にあった液体が全てルクスの口の中へと流し込まれ、喉を伝って体内に流れ込んでいく。それでも、キリトは彼女を離さない。互いの口の中に舌を這わせ合い、わずかに残った甘く爽やかな後味すらも唾液の味で塗り潰していく。

ぐにぐにと絡み合う舌。ぴちゃぴちゃと混ざり合う唾液。どろりと重く、甘ったるく、中毒性のある男女の秘め事。ぎりぎりまでお互いを引き留めて――それからやっと、唇を離す。

「はぁっ……♥　はあっ、はあっ……♥」

「美味しかったか、ルクス？」

「は、はいっ……♥　とっても、とっても美味しかったです……♥」

表情をとろとろに蕩かしたルクスは、キリトの意地悪な問いかけに素直に頷いた。

船室内を満たす、ルクスの濃密な雌の香り（フェロモン）。体臭云々という話ではない。この雄になら喰われてもいい、今すぐ襲われてもよい――そうした許しの念が滲み出る、独特の雰囲気。あとは彼女の体をソファ

に押し倒すなり、耳元で一言囁くなりすれば、ルクスは喜んで体を差し出してしまうだろうという確信が、キリトにはあった。

「……キリト、様……♥」

ぎゅっと抱きしめ返してきたルクスの囁きが、もともとほとんど無かった理性の軛に易々と鏃を入れる。彼女を抱きしめる腕に力が入る。視線は無意識のうちに、彼女の背後に柔らかなクッションがあることを確認していた。

ルクスの背に片腕を回したキリトは、熱量を持った欲望に突き動かされるまま彼女の体を押し倒し――。

「おいおいキー坊。もうおっぱじめる気とは、さすがのオネーサンも呆れちゃうネェ」

「……いつから見てたんだ、アルゴ」

「『――キリト様。お飲み物をお持ちしました』あたりからだナ」

「ほとんど最初からじゃないかよ!!」

若干斜度のついたルクスの体を引き起こしつつ、キリトは抗議の声を上げる。船室と外部デッキを繋ぐ扉の陰に身を潜めて、こちらをこっそりと覗いていた小柄な影――《鼠》のアルゴに向けて。

《ＡＬＯ》仕様の猫妖精族（ケット・シー）アバターでログイン中の彼女は、ニヤニヤとした小ずるい笑みを浮かべたままキリトの抗議を軽くいなす。

「全く……そんな所から覗いてたなら、もっと早く声をかけてくれてもいいだろ……」

「いやぁ、ルクスがあんまりにも楽しそうで声をかけられなかったんだヨ。な、ルクス？」

「あうぅ……」

興奮１に羞恥心９という割合で、ルクスは熟れたトマト並に顔を真っ赤に染める。思わず俯いてしまった彼女の背中をぽんぽんと叩いてあやしてやりつつ、キリトは改めてアルゴの方を向いた。

「それで、どうかしたのか。アルゴ」

「いや何、そろそろ島に着きそうだから声をかけに来てやったんだヨ」

「え？　もうそんな時間だったか……」

キリトはコンソールウィンドウを起動し、船室正面の壁に据え付け

られたモニターの電源を入れる。クルーザー船首にあるカメラの映像を呼び出せば、そこには目的地である島と、クルーザーを泊めるためのマリーナの姿が映し出されていた。

マリーナの桟橋の上には、修剣学院の制服に身を包んだ少女――ロニエが既に待機しており、向かってくるクルーザーにぱたぱたと手を振っていた。

「なあキー坊。この島って、サチとストレアとリズが作ったんだっけカ？」

「ああ、そう聞いてる」

「なるほどナ。これは探検のしがいがありそうダ」

いわゆるそういう日に使われるフィールドは、女性陣の立候補による持ち回り制で製作されている。通常、『部屋』というユニット単位で各人に提供されているマシンパワーリソース。こういったフィールドは、そのリソースを複数ユニット使って作られる特殊環境（シチュエーション）だ。今回のように複数名による合作であることもあれば、誰か一人によって製作されることもある。

「ところであの島、名前は『キリトアイランド』でいいんだったよナ？キー坊」

「その名前なら最高管理者権限を以て却下させてもらった」

「エー。横暴ダー。職権濫用ダー」

「えーじゃない。横暴じゃない！　職権濫用でもない！」

まさに間一髪。最高管理者権限を使わなければ本当にキリトアイランドという名前になるところだった。悪ノリ全開で提案したリズと、特に止めようとしなかった他の面子のおかげで。

「じゃあ、今の名前はなんていうんダ？」

「えーっと……『ティルナノーグ島』って言ってたかな」

「ほうほう、ティルナノーグ島ネエ……。こりゃあアーちゃんの発案カ……？　いや、シノンって可能性もあるナ」

島の名前を聞いた途端、アルゴは納得したような顔で頷く。キリトにしてみればあまり聞き慣れない単語――何かのアイテムのフレーバーテキストで似たようなものを見た覚えはあるが、どういう由来を

持つものなのかは全く知らない。
　そうこうしている合間にクルーザーは速度を落とし、やがてマリーナへと停泊した。
「じゃーナ、キー坊。オレっちは一足先にキリトアイランド探検してくるから、また後デ！」
「だからキリトアイランドじゃ無いって言ってるだろ！」
　システム制御されたタラップが降りるのを待たず、アルゴはクルーザーの外へと飛び出していった。叫ぶキリトの声を完全無視した小さな背中が数秒遅れて正面モニターに映り、そのままロニエとすれ違って桟橋を駆け抜けていく。
　まさに《鼠》の如き速度で走り去るアルゴ。いつものようにその背中へ会釈したロニエは、そのままクルーザーの方へと向かってくる。やがて彼女の姿がカメラから消え、その数秒後にはタラップを踏みしめる微かな音が聞こえてきた。
「――失礼します。おはようございます、先輩」
「おはよう、ロニエ。悪いな、いつも出迎え役させちゃって」
「いえ、これは私がしたくてしていることですから。ルクスさんも、おはようございます」
「お、おはようございます。ロニエさん」
　焦げ茶色の髪を揺らしながら船内へと入ってきたロニエは、キリトの隣で熱っぽい表情を浮かべるルクスに動じることは無い。
　キリトに対する敬意という点では群を抜いている二人は、キリトの知らぬ所でいつの間にか仲良くなっていたようで、よく一緒にお茶をしている所を誰かしらが見かけていた。
「ほら、ロニエもこっちに来いよ」
「ありがとうございます、先輩。それでは……お隣、失礼します」
　キリトの招きに応じ、ロニエはソファに腰を下ろす。キリトからしてみれば、右手側にルクス、左手側にロニエというサンドイッチ状態になる。控えめに寄り添う二人の腰に腕を回したキリトは、そのまま彼女たちをそっと抱き寄せた。
「先輩……♥」

「キリト様……♥」

安堵と興奮が入り交じった笑みを浮かべたまま、されるがままに従う二人。その姿に一時落ち着いた熱情を再び呼び覚まされたキリトは、その赴くままにロニエの唇を奪った。

遠慮も何も無い、のっけからトップスピードなディープキス。侵略するキリトの舌を快く受け入れたロニエの口内で、唾液がぬちゃぬちゃと音を立てて混ざり合う。漏れる吐息が互いの肌にかかり、それが更なる興奮を呼ぶ。そうして健気な傍付きの舌と口をたっぷり堪能したあとは、間髪を入れずにルクスとキスを交わす。交互にディープキスを重ね、交互に女達を酔わせていく。

キスに一区切りが着く頃には、二人の口内の至る所にキリトの痕跡がたっぷりと残されていた。

「――はあっ、はあっ……♥　先輩……体、溶けちゃうかと思いました……♥」

本日一回目のキスによって熱に浮かされたまま、ロニエは『ステイシアの窓』――もとい、コンソールウィンドウを表示する。キリトに抱きついたルクスが、その豊満な体を擦り付けるようにしながらキリトの首や鎖骨、胸に唇で触れたり、仔犬のようにぺろぺろと舐め回す様を横目で見ながら。

「そ、それでは先輩。改めまして……本日はキリ――失礼しました。ティルナノーグ島にご来島いただき、誠にありがとうございます。島での過ごし方について、私から簡単に説明させていただきますね」

「ああ。若干気になる所はあったけど……ともかくよろしく頼む、ロニエ」

空中に浮かんだコンソールウィンドウ上に、島を真上から撮影した地図が映る。この地図によると、現在キリト達がいるマリーナは島の北端に位置しているらしい。島の中央には大型建築物の白い屋根が堂々と鎮座しており、そこから東西南北に道が続いていた。

手元にオブジェクト化したメモと地図を交互に見つつ、ロニエは説明に取りかかった。

「中央にありますのが、主要……メイン会場となるゲストハウスです。皆様で快適に過ごすための設備をたっぷりと揃えたのはもちろん、大型プールや広いお風呂、防音室や撮影スタジオなども用意されています。

ビーチもすぐ近くにあるので、お部屋からそのまま海に行くこともできますよ」

「おっ、そりゃいいな。あとで一緒に泳ぎに行こうか、ロニエ」

「はいっ。喜んでお供させていただきます」

まだ慣れない英語――というか神聖語（カタカナ）を手元のメモを頼りに攻略しつつ、ロニエは島の説明を続けていく。そうして東西南北に分かれた島の全体を一周する形で一通りの説明を終えたあと、ロニエはウィンドウの表示を切り替えた。

「今回、先輩以外にこの島に滞在する方の一覧です。島内はリゾートハウス内の休憩エリアを除いた全地点がフリーセックス・フリーレイプになっていますので、先輩の好きな時に好きな女性を抱いてくださって構いません」

ウィンドウ上部に『滞在申請者一覧』と表示された画面にびっしりと並べられているのは、この島を訪れる女性――つまりは後宮に属する者達16名分の写真と直筆署名がセットになった書類だ。

中でも一番に目を惹くのは写真スペースだろう。書類面積の半分近くを占めるその場所には、裸かそれに近い格好をした女性陣が、思い思いのポーズをとった写真が表示されている。

「キリト様、キリト様。今回、みんな新しい方式の書類に変えてみたんです」

「どれがお好みですか、先輩？」

促す二人を両腕に抱えたまま、キリトは画面をじっくりと見つめる。

やはりというべきか、最初に目が行くのはアスナの写真だ。産まれたままの姿でベッドの上に仰向けになった彼女は、両脚を大きく開き、更に己の左手で秘所を左右に拡げていた。

一方、口元に添えられた右手は太くて固くて大きな何かを握る時の

ように緩く拡げられており、握った何かの先端が来そうな位置には、ドスケベな笑みと共に唇を差し出すアスナの顔があった。

ストレートド直球な求愛ポーズに、どうしたって興奮させられてしまう。

もちろん、正妻様がこう来るとあっては、他の女性陣も負けていない。

口の端からザーメンを零したまま、おかわりのザーメンが並々と注がれた大ジョッキを手にして微笑むアリス。差分表示アイコンがあることに気づいて写真をタップしてみれば、ジョッキを傾けてどろどろした中身を飲む姿、そしてあっというまにジョッキを空にした彼女の写真が追加で表示された。

一滴残らず飲み干したことをアピールするように大きく開かれた口からは、精液臭に塗れたげっぷの音すら聞こえてきそうだ。

他にも、レインは都会の街中で素っ裸になり、周囲を取り囲むカメラに撮影されながらＩ字バランスポーズを披露。

シノンは《ＧＧＯ》風の裏路地でガニ股になって自慰行為に耽りつつ、『Ｆｕｃｋ　Ｆｒｅｅ』、『Ｐｌｅａｓｅ　Ｒａｐｅ　Ｍｅ♥』と油性ペンで書かれた左右の太股を見せ付ける。

アスナに後ろから抱きかかえられ、カメラに向けて両脚を思いっきり開かされたストレアの写真には、『はやくパパ（キリト）の赤ちゃんほし～い♥』という禁断の手書きメッセージが添えられている。

こうした過激さを競い合う姿ももちろん良いが、裸婦画に描かれる聖女のように自然な裸体を晒すサチや、裸で水遊びに興じるユウキの可愛らしさ、岩風呂に浸かったリズの色気に満ちた肢体、ライブ前に更衣室で着替えている所を盗撮したかのようなセブンの姿などもまた一味違った魅力を持って男を興奮させる。

見ているだけで射精してしまいそうになる程にエロティックな写真の数々。その下には、島に入る人間用の署名欄が付随していた。

署名欄に添えられた文言は――

『私は、この島内で行われるあらゆる性行為を拒否しません。

性欲処理用無料奉仕便女名：　』

――というもの。性奴隷として振る舞う意志確認も兼ねたその署名欄には、当然のように全員が署名していた。

もちろん、こんなものに署名してしまったが最後、どんな扱いを受けようと誰も文句を言うことができない。更にそこから下にある捺印欄は、もはや完全なるダメ押しだ。

捺印エリアは計四つ。真っ赤なインクで刻まれる拇印と、唇を使ったキスマーク。そして更に、女性器と肛門に直接押し当てて取った印影まで。卑猥に盛り上がった媚肉の形と、アナル皺の一本一本まではっきりと写し取られてしまえば、もうどんな言い訳も効かない。

卑しき雌奴隷としての確固たる身分を表す16人分の書類。そこに記された全てを捧げられた主人――キリトは、思わずごくりと喉を鳴らしていた。

「ふふっ、先輩……眼がギラギラしてますよ♥　そんなにじーっと見られたら……恥ずかしいです♥」

「私も、ロニエさんも、もちろんここにある方達も……みんな、キリト様のものですからね♥　好きに召し上がってくださいませ♥」

甘ったるい声と熱っぽい吐息を以て、ロニエとルクスが左右からキリトを煽る。そんな二人の痴態を描いた書類も、もちろん画面に表示されている。

脱ぎ捨てられた修剣学院制服と下着が散らばるベッドの上で正座し、三つ指をついて微笑む裸のロニエ。見ようによってはどこか品のある姿勢だが、口に咥えた使用済みコンドームと、左右一筋ずつの髪束に結わえられた使用済みコンドームがその品格を台無しにしている。もちろん、どのコンドームの先端にも白濁した精液がどっぷりと溜め込まれていた。

ぷっくりと可愛らしい彼女の右頬に描かれた二重丸は、女性器を簡略化した卑猥な落書き。左の太股に描かれた、男性を戯画化した青色のアイコンは当然『男子トイレ』を意味し、隣に描かれた『↓』のマークが指し示す先にある彼女の秘所が、精液を排泄するための便所であることを示す。下腹部に刻まれたハートマークと子宮をダブルモチーフとする淫猥な刻印は、もはやお馴染みの光景だ。

その肌に描かれた全てが、ロニエを貶めていく。一廉の少女剣士ではなく、オスの為に都合良く股を開くメス便器として。

素っ裸のロニエと比べると、ルクスの写真はまだ布面積が多かった。彼女の二の腕半ばから先を覆うロンググローブと、太股半ばから下を包むタイツ。ラテックス製と思われるその衣装は、写真の中でなお淫らに輝きを反射する。彼女が身につけているのはそれだけだ。

肘で曲げた両腕を左右に拡げ、正面にあるカメラに向けて豊満な肢体を晒しながら、綺麗なM字開脚を披露するルクス。その姿勢は、よく躾けられた犬に『ちんちん』と命じた時の姿を思い起こさせる。

そして実際、ルクスはメス犬だった。可愛らしい犬耳こそついていないが、タグが付いた黒革の首輪を口に咥えて差し出し、己の首に嵌めて支配してくれる主人を待ちわびる程に良く出来たメス犬。

アナルパールに繋がったふわふわとした犬の尻尾や、躾の際に使われるしなやかな乗馬鞭、ザーメン入りコンドームをいくつも乗せた食餌用の丸皿などの調教道具を足元に用意している辺りに、主人崇敬型被虐嗜好者（マゾヒスト）としての彼女の期待の高さが窺える。

熱を帯びたキリトの視線が、女性達の書類全てに眼を通す。

それをを確認したあと、ロニエはウインドウを閉じてキリトの前に立つ。その動きに連動して、ルクスもまたロニエの隣へ立った。

「先輩。『システムチェック』の準備、整いました。いつものように、よろしくお願いいたします」

「島に入ってから何かあっては雰囲気台無しですよね？

ですから各種動作の実験台として、どうぞ私達をお使いくださいませ。キリト様」

まるで『午後のお茶でもいかがですか』と誘う時のような気軽さと期待に満ちた二人の笑み。その顔を交互に見つめながら、キリトはコンソールウィンドウを開くと、最高管理者権限を使って二人の装備情報に強制介入。『装備全解除』ボタンを躊躇わずに押す。

聞き慣れたＳＥと共に二人分の装備が光の粒子となって、消える。

「「あっ……♥」」

かすかな声が二人の口から漏れる。露わになる起伏豊かな裸体は、

守ってやりたくなると同時に思うまま貪ってしまいたくなる。
　出るべき所はしっかりと出て、引っ込むべき所はすっと引っ込んでいるメスの裸体に燃えさかる欲望。矛盾する感情を抱えながら、キリトは彼女らに下すべき命令を口にする。
「奴隷のポーズ」
　命令されるが否や、二人はそれに従ってポーズを取る。両手を頭の後ろで組み、腰を落として両脚を左右に大きく開く。隠すべき場所を全て曝け出した、卑猥で惨めで滑稽なポーズ。
　自身の誇りを全て放棄し、相手へ隷従することを言外に示すそのポーズを取らされているのだ。二人はさぞかし悔しそうな顔をしているのだろう――と思いきや、実際そこにあったのは、羞恥心によって一層の興奮を煽られて喜ぶ雌犬の笑みだ。
「自己紹介」
「はいっ！　キリト先輩専属傍付き兼性処理用肉便器、ロニエ・アラベル！　いつでもご利用いただけます！」
「同じく、キリト様専用奴隷メイド兼チンポケース&ザーメンホール、ルクス！　全身全霊でご奉仕させていただきます！」
　キリトが一言命じるだけで、二人は大きな声で己を曝け出し、自らの存在を人間未満の性処理道具へと貶めていく。言うまでも無く奴隷のポーズは維持したままで、だ。
「よしよし、操作システムも命令も問題ないみたいだな。だろ、ロニエ？」
「はい。こんな格好、普通なら恥ずかしくてとてもできませんが……先輩の命令ですから、仕方ありませんよね」
「ああ、その通りだ。ちゃんと命令を聞けて偉いぞ、ロニエ。さすが俺の自慢の傍付きだ」
「ありがとうございます、先輩」
「ルクスもちゃんと言いつけを守れてるな」
「はいっ。キリト様にたっぷり躾けていただいたおかげです」
　あくまで『傍付きとして主であるキリトの命令に従っている』という体を崩さないようにしながら続けられる卑猥なる遊び。それは、自

らをキリトの配下（ペット）という身分に置いているルクスも同様だ。
　言いつけをしっかりと守った二人をしっかりと褒めてから、キリトはゆっくりとソファから立ち上がる。
「先輩、お足元失礼します」
「私も失礼しますね、キリト様」
　キリトが立ち上がるのとは反対に自然と跪いた二人は、そのままキリトの両脚へとぎゅっと抱きつき、体を密着させる。良く育った張りのあるバストをキリトの太股に押し当てる様は、まるで太股にパイズリ奉仕をしているかのようだ。
　何かをアピールするかのように腰をへこっへこっと揺らした後、二人は顔をキリトの股座へと押し当てる。水着を下から押し上げる、太く固い肉の柱の感触。柔らかな頬でその感触を愉しんだあと、ロニエは布越しに口付けを捧げ、ルクスはすんすんと鼻を鳴らして匂いを嗅ぎ込む。
「んぁ……♥　先輩、先輩……♥」
「すう、はあ……布越しなのに、なんて芳しい……♥」
　布一枚越しに肉棒に接し、発情期のメスの顔丸出しで興奮する二人を見下ろしながら、キリトは己の装備情報ウィンドウを表示し、『装備全解除』ボタンを押す。
　アロハシャツと水着が光の粒子となってストレージに格納されるや否や、抑圧から解放された肉棒が反動で勢いよく振り下ろされ、二人の顔面を打擲する。もちろん、ロニエもルクスもそれを期待して、自らの顔面を肉棒を受け止めるためのクッションとして差し出しているのだが。
「はあっ、はあっ♥　先輩、先輩のおちんぽ♥　何度見ても立派で、逞しくて……惚れ惚れしてしまいます……♥　私、キリト先輩にこの身を捧げるために産まれてきたんだって、何度でも理解させられちゃいます……♥
　ああ……こんなにおちんぽ様の傍付きでありながら、修剣学院にいる間ただの一度も性処理奉仕を申し出なかった愚かな私を許してくださる先輩、優しくて大好きです……♥♥」

「んふぅっ……だめ、だめですキリト様……♥　匂い嗅いでるだけで意識飛んじゃいそうです……♥　こんなにかっこよいおちんちんと、精子溜め込んでパンパンの金玉見せられて、キリト様に惚れ直さないメスブタなんてどこにもいません♥

　早く現実世界の身体の処女も奪っていただきたい……リアルの子宮も人生も、全てキリト様の所有物にしていただきたいです……♥♥」

　頬を擦り、唇を捧げ、香りを吸い込む。本心１００％の言葉が口から出れば、それはそのまま雄に媚びる雌の鳴き声に変わる。後宮（ハーレム）の一員となって日が浅い方の二人ではあるが、先輩達が積み上げてきた女の振る舞い方を貪欲に吸収し、学習していることはこうした仕草を見れば誰の目にも明らかだった。

　勃起した肉棒から顔を離さず、左右から挟み込み続ける二匹の雌達を見下ろしながら、キリトは左右の手で彼女らの頭を撫でた。

「ロニエ、ルクス。二人とも協力してくれてありがとう。おかげでシステムに異常が無いことがよくわかったよ」

「こちらこそ、キリト様のお役に立てて光栄です……♥」

「せっかくだし、二人にお礼をしたいんだけど、何がいいかな？」

「それは……」

　肉棒越しに見つめ合ったロニエとルクスは、お互いが同じご褒美を望んでいる事を理解する。言葉も無く、ただ瞳を見つめるだけで十分だった。

「せっ、先輩さえよろしければ……先輩の勃起したおちんぽ様専用おトイレとしての役目を果たさせていただきたいです……♥

　新鮮な作りたて精子で皆様に種付けできるよう、先輩が溜め込まれた熟成精子は、私のおまんこで責任を以てお預かりいたしますので……♥」

「私も……キリト様のぶっといオスチンポ様で、はしたない雌犬の発情おまんこを躾けていただきたいです……♥」

　キリトの逸物に愛おしげなキスを捧げながら、二人は望みを口にする。言い回しに多少の差違はあれど、二人が望んでいるのは同じ事。

それに応えない理由がどこにあるというのか。
　肯定の返事をする変わりに、二人の頭を撫でる手に力を込めて顔をより一層強く肉棒へ押し当ててやる。ふぅふぅ、はぁはぁと荒い呼吸を繰り返し、雄の性臭に塗れた空気を肺の奥底までを満たしたロニエとルクスは、興奮に満ちた瞳でキリトを見上げた。
「よし、じゃあ……ロニエ・アラベル初等錬士。肉便器訓練を実施する。準備しろ」
「はいっ♥　訓練、了解いたしました！」
　キリトの命を受けたロニエは、肉棒へ別れのキスを三度捧げたあとでようやくキリトの身体から離れた。ソファに手を付いて尻を突き出す彼女の姿を横目に見たあと、キリトは残るもう一匹の方へ視線を向けた。
「ルクス。ちょっとだけ『お預け』だ。我慢できるか？」
「はい、キリト様♥　ペットに『お預け』を覚えさせるのは大事ですからね。頑張って我慢してみます。
　ですが、その……よろしければですが……」
「俺とロニエがセックスしてる間、オナニーすることを許可する」
「――っ!?　あ、ありがとうございます……♥」
　言わんとしていたことを先取りされたルクスが、頬を真っ赤に染める。そうして、伸ばした舌を使って肉棒を舐め上げたあと、ルクスもどうにかキリトの身体を離れてソファへと移動する。背もたれに手を付いて尻を差し出すロニエの隣で、ソファへと深く腰掛けて両脚を開く。片手は豊満な胸へ、もう片方の手は既に濡れぼそった秘所へと這わせ、自慰行為の準備を整える。
「ロニエさん、キリト様のおちんぽのお世話、よろしくお願いいたします♥」
「任せてください、ルクスさん。私が使われ終わったら、その後は先輩をお任せしますね♥」
　唇と舌に残った肉棒の気配を共有するかのように、二人は唇を重ねる。そうして、同じ雄に囲われ、堕とされきった雌であることを確認する為の口付けが終わったあと、ロニエは視線を背後へと向けた。

「お待たせしました、先輩。肉便器訓練の準備、整いました♥」
「よし。ではロニエ初等錬士、この訓練は何を目的にした訓練なのかはわかるか？」
「はいっ。キリト先輩の猛々しきおちんぽ様にご奉仕させていただく事を通して、初等錬士ロニエ・アラベルはキリト先輩の為の雌穴である事を改めて理解するための訓練です！」
「その通り。さすがロニエだ、よくわかってるな」
褒められた事に気をよくしたロニエは、ふりっ、ふりっ、と尻を左右に揺らしてキリトを誘う。生殖本能に刻まれたアピールが繰り返される度に、よく育ったバストが揺れ、たぷんたぷんと柔らかくぶつかり合う。露わになった雌華からは既に蜜が溢れ出し、キリトが触らずとも犯される準備を整えきっていた。
「おいおい、ロニエ。そんなに動かれたら使いづらいだろ？」
「もっ、申し訳ありませんっ！　肉便器の分際で先輩のおちんぽ様に使っていただけるのが嬉しくて、つい身体が勝手に動いてしまいました……♥
ですので……言いつけも守れない不出来な傍付きにお仕置きをお願いできますでしょうか、先輩……♥」
「……とかいって、本当はお仕置きして欲しくてわざとやってたんじゃないのか？　ルクスもそう思うだろ？」
「はい、キリト様。立場が一緒なら、私も同じ事をしていましたから。ね、ロニエさん？」
「そんな、私は――」
ロニエがルクスへの返答に意識を向けた瞬間を見逃さず、キリトは開いた右手を振り上げると、そのままロニエの尻に向けて勢いよく叩きつける。
「――きひイィっ♥♥」
スナップの利いた張り手の一撃がロニエの尻肉を強かに打つと同時に、肉と肌を打った時独特の破裂音を響かせる。
ペイン・アブゾーバーによって痛みは軽減されるものの、ビリビリとした独特の感触に加え、敬愛する先輩に打擲された精神的興奮がロ

ニエの心を嬲り、フラクトライトにマゾヒスティックな喜びを与えていく。

「あっ、はあっ……♥　あ……ありがとうございました、先輩……♥」

お尻を叩いていただいたらお礼を述べる。傍付きとして当たり前の事を当たり前にこなしたロニエを褒めつつ、キリトは彼女の腰を両手でがっしりと掴み、肉棒の先端を入り口へ押し当てた。

「行くぞ、ロニエ」

「はい、先輩……♥」

充血した亀頭が媚肉を押し開き、ロニエから湧き出る愛液をぐじゅりと溢れさせる。たっぷりと潤滑液を纏わせたあと、キリトは腰を前に進め――野太い逸物を、ロニエの中に押し込んだ。

「あっ――♥♥　ああっ♥　んぅ――んんぅうっっ♥♥　先輩、せんぱいっ♥♥」

快楽に身を震わせて鳴く後輩の身体をしっかりと支えながら、キリトはずぶずぶと肉棒を押し進める。張り出した亀頭はその役目を果たしながら狭い膣道を押し広げ、太い肉槍が侵入する為の道を作る。

既に処女の身ではない上、キリトとのセックスでたっぷりと肉棒の味を覚え込まされたロニエが感じるのは、愛しい雄に身を貫かれる極上の快楽のみ。ロニエ同様に健気な蜜壺は、やっと訪れた交尾相手を離すまいと膣肉全体を収縮させて肉棒に絡みつく。

長く太い逸物の挿入を続けるキリトと、それを受け入れるロニエ。やがて二人の腰と尻が触れあえば、膣内を我が物顔で突き進む肉棒の先端が、ロニエの最奥部にある子宮口を圧する。幸せだけを感じながら、愛すべき先輩に身体の全てを制圧されたロニエは、快楽と共に身を震わせた。

「せんっ、ぱい……♥　はあっ、はあっ……♥　先輩……大好きです♥　おっきいおちんぽで、私のおまんこいっぱいにしてくれて……私を優しく犯してくださる先輩が、大好きですっ♥」

「当たり前だろ？　なんたって、ロニエは俺のたった一人の傍付きなんだから。それに……俺だって、ロニエの事が大好きだからな」

「そんな風に言っていただけるなんて、嬉しいです……♥　んっ、ん

んっ♥　あぁっ♥」

睦言を交わしつつ、キリトはロニエの腕を両手で掴み、そのまま後ろへと持ってこさせる。キリトの腕によって身体を力尽くで引き起こされたロニエは、ソファにしなだれかかるような体勢から、上半身を弓なりに反らした姿勢に移行させられてしまう。そうして腕の自由を奪われ、いわゆる『立ちバック』の体位を取られてしまえば、ロニエに最早為す術はない。

「あっ……♥」

一回1センで使われる最下級娼婦。むくつけき兵士達の慰み者になる戦場捕虜。ただの精子捨て場。肉便器。

今の己はそういったものと同じ肉穴であることをロニエが理解し、ゾクゾクとした背徳的な快感を得たまさにその瞬間。キリトはその一瞬を逃さず肉棒を引き抜き、再び最奥部まで叩きつける。そうしてまた引き抜き、叩きつける。

「――ぁあああっ♥　あっ♥　ひぃいぃいいっ♥　あっ♥あぅっ♥あぁ〜あっ♥　あふっ♥んんぅううっ♥♥」

どっちゅ、どっちゅと重たい音を立てて繰り返されるピストン運動。愛液に塗れ、てらてらと光る肉棒の姿が露わになる度、亀頭に膣壁を磨られたロニエが鳴き、雄々しく長い逸物が膣内深くに消える度、ロニエは子宮を殴りつけられる快楽に溺れて口をぱくぱくとさせる。

完全にキリトにペースを握られた男性優位のセックス。ロニエにとっては、それは最早当たり前の事であり何物にも代えがたい至上の喜び。敬愛する先輩に己の身を捧げ、その肉棒を気持ちよくするための道具として使っていただけるだけでも恐悦至極だというのに、自分まで気持ちよくなれてしまうのだ。溺れずにいられるはずがない。

「あっ♥おっ♥　ひぅっ♥ひぃいっ♥　せんぱっ♥先輩のぉ〜っ♥おっ♥おちんぽっ、私の気持ちいいとこ全部、ぜんぶぐりぐりってしてまひゅっ♥　あっあっあぁあっ♥あぁぁあああっ♥♥」

「ロニエは本当に感度がいいからな。ヤればヤるだけ、どんどんエロくなってくし……弱点もこんなにわかりやすいし、なっ！」

「――――ぁあああぁあっ♥　そこ――――はあぁあんんっ♥　んひゅふ♥ひぃぃいっっ♥♥ぁあああぁあああぁっっっ♥♥♥」

子宮口手前にある感じやすい領域を正確に穿つ肉棒の一撃にロニエはあっさりと陥落し、そのままびくびくと身を震わせながら絶頂へと達する。蜜壺から溢れた愛液が床に落ち、飛沫がソファの布を汚す。

絶頂と同時に精液を乞い願ってきゅうきゅうと締め付ける膣肉が落ち着いたタイミングを見計らって、キリトは一旦止めていた抽送を再開する。射精欲求に伴う激しさを備えた前後運動とは違う、女をよがらせて堕とすための余裕ある動き。『お前は俺の女だ』と、身体に直接叩き込むための動き。

既に快楽に堕ちた身を、とうの昔に恋に堕ちた心を、改めて堕とし直される至上の幸せが、極上の快楽を伴ってロニエの全神経を駆け巡る。

「あ〝っ♥ひぃうぅうっ♥　あっあっああ♥あああぁあ〜〜〜♥♥」

気持ちよさに抵抗できず、締まりを失った口の端からこぼれ落ちた唾液が、隣でくちゅくちゅとした水音を立てながら自慰行為に耽るルクスの身体に降りかかる。その意趣返しというワケでもないだろうが、ルクスは片手で股間を弄りながら身体を起こすと、ばこっばこっと鳴る程に力強い抽送によって犯され続けるロニエの耳元に、そっと唇を寄せた。

「ふふ……♥　いけませんよ、ロニエさん。キリト様のおちんぽ様にイかせていただく時は、ちゃんとお礼申し上げないと……♥　私達、キリト様専用ご奉仕まんこの常識じゃないですか♥」

「はひぃ、ひいっ♥♥　あっぎゅ♥あぅ♥はあぁあああっ♥♥」

「ああ、なるほど。キリト様のおちんぽ様が気持ちよすぎて、まともに喋れないのですね。それでは仕方ありません。お礼の言葉は私が代わりに言ってあげますね」

フラクトライトの隅から隅まで余すところなく、セックスの快楽に支配されたロニエの意識。その意識をほんの少しだけ耳元に向けるべく、ルクスは彼女の耳たぶを甘噛みし、舌先でつんつんと突く。

そうしてロニエを刺激し、興味深そうに見つめるキリトと視線を絡ませた後、ルクスは改めて口を開いた。

「我らが心より敬愛するキリト様♥　そしてキリト様の雄々しく、猛々しく、野太くて立派なメス殺しデカチンポ様♥

本日は私のおまんこ穴を性処理お便所として使ってくださり、本当にありがとうございます♥　そして、チンポコキ穴の分際でキリト様より先にアクメ決めてしまうよわよわおまんこで本当に申し訳ありません♥

謝罪の代わりといってはなんですが、子宮も卵子もキリト様にお捧げいたしますので……どうぞ、金玉にたっぷり溜め込んだ特濃ザーメンをどぷどぷ射精（マーキング）してすっきりするための生オナホとしてご利用くださいませ♥」

敬意と好意と情欲をどろどろに溶かし込んだ、蜜のように甘く重たい愛の言葉はロニエの耳へ。

メイプルシロップカラーの瞳から放たれる、珍しく挑発的な様相を漂わせた視線はキリトの眼へ。

ロニエの願望を代弁しつつ自らの希望を紡ぐ言葉と、雄を崇敬しつつ誘う視線がキリトの本能に火を付ける。

「ひっぐ――あ〝っ♥あぁあぁあぁっ♥♥　せんっ、ぱひぃ♥せんぱいっ♥　あっ♥ああっ♥はげひ、はげししゅぎで――すぅうっ♥♥

あお〝っ♥お〝ほ♥　ごわ♥ごわ〝れりゅ♥　はぉっ♥んんぅうううっ♥♥」

絶頂を迎えたばかりのロニエを襲う、キリトの本気ピストン。ロニエの快感を刺激し開発する為に余裕を持たせていた今までの抽送とはギアが数段異なる動き。逸物の立派さに物を言わせたどこまでも自分本位なセックスは、ロニエの身体を暴力的なまでの快楽で支配する。

突かれる度に雌汁を噴き、引き抜かれる度に身を捩りながら、交合の快楽に悶えるロニエ。興奮と共に脈動する膣肉はキリトの肉棒をぎちぎちと締め上げ、陰嚢の中に蓄えられた大量の精子達を呼ぶ。早

くおいで、ここはあなた達の為の場所だよ――と。
その声なき声に応え、キリトは抽送速度を更に上げる。誰の目にもはっきりとわかるほど容赦の無い、膣内への射精だけを目的にした激しい前後運動。
後戻りできるラインをとっくに踏み越えたキリトは、最後に自らを抑えながらロニエの耳元へ囁く。
「ぐっ……このまま射精(だ)すぞ、ロニエっ！」
「はひ――んぅうううっ♥　せっん、ぱい♥せんぱぁいひぃいぃいっ♥♥」
快楽信号に灼かれる意識の中でも、ロニエは愛する先輩の声にどうにか反応する。その頑張りへのご褒美とばかりに、キリトは最も重く深い最後の一突きをロニエの膣奥深くへ叩き込む。
そして、亀頭が子宮口をがっちりとロックした刹那――大量の精液が、一気に解き放たれた。
「――――ぁああ゛ぁああ゛あぁあァァあああっっっ♥♥　イぎゅっ♥いっ――い゛ぎゅゅぅうう゛うぅうぅうぅうう♥♥♥
あっあぅっ♥あっあぁ゛あァァァぁああっ♥♥　どくどくしゅきぃ♥♥しゅきぃっ♥♥　イっ――あっああぁあぁあぁあああっっっ♥♥♥」
精子が渋滞を起こすほどにたっぷりと熟成された精液が、太い輸精管を一気に駆け上る。射精直前に一際大きく膨らんだ肉棒の働きによって易々とロニエの膣道を突破した精子は、子宮口にぴったりと張り付いた鈴口から飛び出し、ロニエの子宮内部を己の物として染め上げていく。
「お゛ぅっ♥ぴひぃっ♥　あ゛～～っ♥♥　あっあぁっあああああぁぁぁ～～～♥♥♥」
どくどくっ、どくどくっと送り込まれる精液がロニエの子宮内壁へと叩きつけられる度、ロニエは品性の欠片も無い喘ぎ声を上げながら、繰り返し繰り返し絶頂へと叩き込まれる。悦楽に痙攣する膣壁は、一滴でも多くの精液を、一匹でも多くの精子を奥へ誘わんと精液を吸い上げる。

びくびくと震え、弓なりにぴんと反り返りながら全身で快楽に溺れるロニエ。その身体はキリトの両腕によって後ろからしっかりと掴まれている上、ロニエの尻肉とそこに突いた平手打ちの跡が歪むほど密着した腰、そして深々と突き刺さった肉棒によって支えられ、種付け射精から逃げ出すこともできないままただただ興奮と快楽に満たされていく。

「はあ……キリト様……♥　なんて素敵で格好いいお射精なんでしょう……♥　ロニエさんを完璧に抑え込んで、ちんぽコキ穴だってわからせながらの種付け……♥♥　本当に、惚れ惚れとしてしまいます♥♥」

陶然とした視線を向けながら、ルクスがキリトを褒めそやす。媚びる言葉はお世辞にも似て、しかしルクスの場合何から何まで本音である。雄をもてなすテクニックとしての言葉ともまた異なる、純粋な憧れと思慕の念がキリトの陰嚢を刺激し、更に精子を増産させる。

ルクスの吐息と視線を浴び、何度も何度も登り詰めてはぷしゃぷしゃと愛液をまき散らすロニエの身体をしっかりと抱き寄せながら、キリトは射精が終わるまでの時間を愉しむ。

そうして、最後の一滴までロニエの膣内へと注ぎ込んだあと――キリトは肉棒を挿れっぱなしにしたまま腕の力を弛め、すっかり脱力してしまったロニエの身体をソファへと寝かせた。

「――はあっ、はぁあっ……♥　あ〝っ♥　ぅう〝……♥　しゃぇん、ぴゃひ……♥♥」

「ロニエ……」

ソファの背もたれ部分に倒れ込むように崩れ落ちたロニエは、余韻というには濃すぎる悦楽を引きずったまま、どうにかキリトの方へと振り返る。その横顔に覆い被さるようにしながら、キリトは彼女と唇を重ねた。

「んんっ……♥」

肉便器訓練を立派にやり遂げた後輩の髪を撫で、優しく甘いキスを交わしてねぎらう。ぐったりとした彼女をソファの上で休ませながら、キリトは挿入から今までずっと挿れっぱなしになっていた肉棒を

ゆっくりと引き抜く。

敏感になっている膣壁をカリ首が擦る度、ロニエはびくり、びくりと震えては快感を味わう。至福の種付けの後の、甘く心地よい一時の別離から生まれる喘ぎ声は、キリトの口の中だけに響いて消えていく。

そうして、肉棒はロニエの膣内から全て引き抜かれた。

まるでキリトのサイズに合わせて誂えられたペニスケースのように、肉棒の形に沿ってぽっかりと開きっぱなしになったロニエの女性器。性交の快感にぴくぴくと痙攣するその穴の奥から溢れ出すのは、どっぷりと濃厚な白濁汁。その残滓は、吊り橋を支えるワイヤーのように垂れ下がりながら、逸物の先端と繋がっていた。

体の底までオスに征服された証を垂れ流しながら、ロニエはただ恍惚の笑みを浮かべていた。

「――ふうっ……」

一回目の種付けを終えた肉棒をロニエの中から引き抜いて、しばらく。キリトはようやくキスを終えて身体を起こした。精液と愛液に塗れた逸物は射精一回程度で萎えるはずもなく、その勃起姿を堂々と見せ付けていた。

そんな光景を、うっとりとした視線で見つめる従属心に満ち満ちた雌豚――否、雌犬が一匹。

「はあっ……♥　たった今お射精を終えたばかりだというのに、あんなにも誇らしく勃起されているなんて……♥

そんな最高のセックスアピールで女の子をドキドキさせるなんてズルいです、犯罪ですキリト様……♥　まあ、私は女の子以下の、ただキリト様に気持ちよくなっていただくだけのおちんぽペットですからいいのですけど……♥♥」

心の底から湧いてくる敬愛の感情に、過剰な程の自己卑下のテクニックを織り交ぜたルクスの言葉。雄に犯された証を股穴から垂れ流すロニエの横で、比較するように無防備に晒されたルクスの肢体。例の入島申請書に貼り付けられていた写真のように、両脚を左右に大きく広げ、たっぷり濡れぼそった秘所をキリトの視線へと捧げる。

それはさながら、捕食者に自ら身を捧げる獲物。その露骨なまでの挑発に乗らぬ必要がどこにあろう。

「よしよーし、ルクス。ちゃんと『おあずけ』できたな。えらいぞ〜」

しっかりと言いつけを守ったルクスの頭を撫でてやれば、ルクスは「わんっ♥」と嬉しそうに一鳴きする。これに犬耳のついたカチューシャでもつけていれば完璧な雌犬だ。

「それにしても随分待たせちゃったな……何回も一人でイったんじゃないか？」

「い、いえ……実は、一回も……」

「え？　そうなのか？」

「はい……。その……できるなら、キリト様のおちんぽ様で気持ちよくなりたくて……ずっと、ぎりぎりの所で我慢していました……♥

いっぱいイきそうになりましたけど……いっぱい、我慢しました♥

ですから……い、いっぱい可愛がっていただけると嬉しいです……♥♥」

恥ずかしそうな表情で、ルクスは両手を伸ばして抱擁をねだる。そのリクエストに応えるべく、キリトは彼女の上にそっと覆い被さる。ソファと己の身体を使ってルクスの身体を挟み込むようにしながら、ルクスと口付けを交わす。

「んぁっ……♥　きりとひゃま……♥♥」

待ちかねていたルクスの唇は、差し込まれたキリトの舌を快く受け入れる。口内で舌を動かし、奥へ深くへ誘う。両腕もまた、舌に負けじとキリトを引き寄せる。

ルクスの情熱と体温を感じながら、キリトはどろどろに涙を流す彼女の蜜壺、その入り口へ亀頭を押し当て——そして、一気に押し込んだ。

「ん——んん゛ぅっ!?　ん♥ん゛っ♥んぅうう゛っ♥♥　んん゛ぅうぅん゛うぅぅうぅうううぅ♥♥♥」

たった一度の挿入。それだけで、ルクスはあまりにも簡単に達した。

無理もない。何度も何度も自ら達しそうになり、その度に自らに

よって抑え込まれてきたルクスの身体。そこを愛する男の巨根によって、容赦なく最奥部まで一気に貫かれたのだ。一発で完全屈服した体が、絶頂をその証に差し出すのはむしろ当然のことと言えた。

身体はキリトの体によって抑え込まれ、激しく乱れる声はディープキスによってキリトの口の中へと消えていく。

挿入されるだけであっさりと達したルクスの体は、雄への絶対的にして幸福な敗北感を、そして充実感に似た服従心を全身に刻み込みながら、ほとんど無意識にキリトの体へと抱きつく。

「んぅうぅっ♥♥♥　んぅうっ、ん♥　んむぅうぅっ♥♥」

両腕をキリトの背に、両脚をキリトの腰に回して密着するルクス。その健気な四肢と、胸板の上で押しつぶされる豊満なバストの感触を愉しみながら、キリトはルクスを襲う絶頂の波が引くのをじっくりと待つ。もちろんその間もキスを続け、口の中ではたっぷりと睦み合いながらだ。

「んぅ♥ふぅっ♥　んっ、んんぅっ……♥♥」

痙攣するルクスの体が徐々に落ち着きを取り戻し、反射的にキツく締め付けてきた秘肉の感触がねっとりとまとわりつくものに変わっていく。それを感じ取ったキリトは、肉棒を挿れたまま唇をゆっくりと離す。ちょうど、ロニエにしたのと正反対の動きだ。

するりと引き抜かれるキリトの舌。名残惜しげに追従したルクスの舌と別れを告げれば、ルクスは切なげな吐息を漏らした。

「はひゅっ――♥　はーっ、はーっ……♥　きりと、さま……♥♥　もっ……申し訳ありません……♥　勝手に、少し……イッてしまいました……♥」

「『少し』――には、思えなかったけどな？」

「も、もう……意地悪ですよ、キリト様……♥」

からかわれて照れるルクスと、鼻先をすり合わせるような軽いキスを交わす。そうして、柔らかな彼女の肢体を抱きしめながら、耳元で『動くぞ』と囁けば、ルクスは小さく首を縦に振る。

それを合図に、キリトはゆっくりと腰を引き、そして再び肉棒を中へと突き込んだ。

「あっ♥　ああっ♥　きりと、様ぁっ♥♥　んっ、んぁぅうっ♥♥」

既に一度達した事で敏感になってしまったルクスの体は、シンプルかつゆったりとしたピストン運動で簡単に嬲られてしまう。敬愛するキリトの雄々しく立派な逸物によって奥まで突かれる度に、ルクスの媚肉はびくりと震え、引き抜かれる度にぬちょぬちょと絡みつく。

キリトがその気になれば、いつでもペースを上げてルクスを乱れ狂わせられる。失神させてしまうことも簡単だろう。キリト自身の快楽を求めるのであれば、むしろそうした方が気持ちいいはずだ。

それでもキリトがそうしないのは、ルクスとの逢瀬を長く楽しみ、そして楽しませたいからに違いない。そうできる程度に経験値を積んだキリトに、そうわかる程度にルクスも経験値を積まされているのだ。

全身を駆け巡る肉体的な快感はもちろんだが、それ以上に温かいモノでルクスの心の奥が満たされていく。

「キリト様、キリト様……♥　すき、すきです♥　キリト様のこと、だいすきです……♥」

気持ちは自然と音になり、音が自然と睦言になる。それを囁く唇は、再びキリトの唇によって塞がれる。セックスの快感で蕩けてしまいそうな意識の中、ルクスはキリトの舌を懸命に迎え入れ、己の舌を絡ませる。注ぎ込まれる唾液は、無意識のうちに嚥下する。

ソファの背もたれとキリトの体に挟まれた狭い空間の中でルクスが達し、体をひくつかせる度、キリトはピストン運動の速度を落としては、ルクスの全身に悦楽を刻み込むようにぎゅっと抱きしめてくれる。

見ようによっては、経験値の違いに裏打ちされた一方的に弄ばれるセックス。だがルクスにとってそれは、心の底から愛する憧れの相手に抱きしめられ、その腕の中で雌としての喜びを味わいを何度も何度も味わうという至上の快感に他ならない。

「ん――んぅうぅっ♥♥　ぷふぁ――あっ♥ああっ♥　だめ、だめっ♥♥　ま〝っ、またいく♥イッちゃいまひゅうっ♥♥」

「好きなだけイッていいぞ。ルクスがドスケベなのは……ちゃんとわ

かってるからな」

「ひゃ♥ん、ああっ♥♥　ちがっ、わたひ♥　ちが――んうううっ♥♥」

唇同士の繋がりが解けてしまえば、ルクスの口からは溢れ出るのは止め処の無い嬌声。

小さじ一杯分程度残った理性が、自分はドスケベなどではないと反論したがるが、完全に蕩けきってしまった体は再びあっさりと絶頂し、逆に自らの淫らさを証明する結果に終わる。

ルクスが達する度、キリトは前後する動きのペースをスローに落とす、あるいは完全に止める。そうして恍惚と共に麻痺していたルクスの意識と感覚が戻ってきたと見るや、再び前後運動を再開してルクスを幾度も乱れさせる。

容赦なく繰り返される絶頂、恍惚、回復、官能のロンドによってルクスの体は開発され続け、キリト専用の雌穴としてカスタマイズされていく。

「あっあっあぁぁあっ♥♥　きりとしゃま♥きりとひゃまああ♥♥あっ――うう〃っ♥♥　あっあ～～♥あ〃っ～～♥～♥♥」

体が昇り詰める度、心は堕ちていく。

元々、ルクスがキリトに対して抱いていた憧憬（あこがれ）。体を重ねた今もその心は変わらないどころか、むしろオスへ屈従する喜びを増幅するためのスパイスとなってルクスを乱れさせる。

ピストン運動の速度は徐々に早まっていき、それに比例してルクスの絶頂・恍惚・覚醒の感覚も短くなっていく。仰け反る体をソファの背もたれに抑え込まれ、ロニエとはまた異なった形で自由を奪われることにすら、ルクスは最早快感しか感じられない。

「ぐっ……ルクス、そろそろ……」

一層早くなる腰の動き。耳元に囁かれるキリトの声。

一突き――いや、もはやカリ首が肉襞を擦る度にイキまくる快楽の坩堝の中へ叩き込まれながら、それでもルクスは理解し、受け入れる。

このままキリトの思うがままに使われ、たっぷりと膣内射精していただけるのだと。

ほとんど崩壊した意識でそれを理解したルクスの体は、無意識のうちにキリトにしがみついてその体をロックする。持ち前の崇敬心・奉仕意識によって雄を受け入れる態勢を整えたルクスに応えるかのように、キリトは最後に一際強く腰を押し込む。

「――射精（で）るっ！」

ルクスの子宮を押しつぶさんばかりの勢いで侵略した肉棒、その先端が子宮口を完璧に抑え込む。その衝撃と快感にルクスは身を捩り、蜜壺は戦慄くようにして肉棒を一際強く締め付ける。

その刺激が、最後の一線を崩壊させ――直後、解き放たれた大量の精液がルクスの子宮を襲った。

「～～～～～～～ああぁああぁぁっああっぁあっあああぁ゛あ゛あ゛ぁああぁ♥♥♥♥

あっぁああっ♥ああ♥ぁぁああっ♥あ゛～～～゛～っ♥♥　きり、ひぃぅぅっ♥きりとひゃまぁあっ♥　いき、いきまひゅぅうういぐぅううううっ♥♥」

一回目の射精と何ら遜色の無い濃度と質量を持った大量の子種汁が、ルクスの子宮の中へ、どくどく、どくどくと容赦なく叩き込まれていく。ルクスの雌穴から吹き出た潮が、密着するキリトの下腹部にぶつかって辺りを濡らす。

正面から抱擁されながらの堂々とした膣内射精。全身あまねくキリトに包まれているかのような感覚を味わいながら、ルクスは壊れた玩具のように何度も何度も達し、蕩けた悲鳴を上げ続ける。

「ああ゛あっ♥あっ♥ああ゛あ～～っあっあ～゛っあ゛～～～っ♥♥

いっぱい、いっぱいぃ……♥♥」

二度目の射精が完了するまでの間、ルクスはキリトの腕の中に抱きしめられながら、全身に奔る喜びを甘受する。

肉棒は痙攣する膣肉に導かれ、陰嚢の中でじっくりとスタンバイさせていた精液を次々に流し込む。それは一滴残らずルクスの子宮へと注ぎ込まれ、彼女の内側をキリトのモノとしてマーキングしていく。

「あっ……♥ああ゛っ……♥　はあ、はああっ……♥　はひゅうっ♥

ふう、ふう……♥♥」
「お疲れ、ルクス」
やがて、ぴん、と張り詰めていたルクスの四肢から力が抜け始める頃。ようやく二度目の射精を終えきったキリトは、乱れたルクスの髪を優しく撫でてやりながら彼女をねぎらう。
「キリトさま……♥　ふぅ、ふう……♥　わたし、上手にご奉仕、できてたでしょうか……？」
「ああ。いっぱい気持ちよくしてくれてありがとうな、ルクス」
「そう言っていただけると……光栄、です……♥」
ハードなセックスに腰砕けにされ、全身に玉のような汗を浮かべながら、ルクスはほわほわとしたいつもの微笑みを浮かべた。
ねぎらいついでにもう一度彼女とキスを交わしたあと、キリトはゆっくりと腰を引き、ルクスの蜜壺から逸物を引き抜いた。
「あぅ……♥」
慎重に引き抜かれたとはいえ、未だ敏感な膣壁を亀頭に磨られ、ルクスが微かに嬌声を上げる。
力の入らないルクスは、ひっくり返ったカエルのように両脚を広げっぱなしにしたまま、ソファの上にぐったりと身を投げ出している。太く固い抑えを失った股の間からは、どっぷりと重たい精液が逆流を始め、どろり、どろりとソファの座面の上へ流れ出していった。
「――綺麗にさせていただいてもよろしいでしょうか、先輩」
キリトとルクスが交わっている間に休息を得てどうにか回復したロニエが、キリトの足元に跪き、腰へとすり寄る。見上げる視線の先にあるのは、雌二匹分の愛液と射精二回文の濃密な精液に塗れたまま、誇らしいまでに立派な勃起を見せるキリトの肉棒。そして、愛する先輩の双眸だ。
「頼むよ、ロニエ」
「はいっ♥」
元気よく頷いたロニエは、大きく口を広げて舌を突き出すと、そのままキリトの肉棒へ舌を這わせる。感度の高い亀頭に無駄な刺激を与えないよう注意しながら、舌の表面を使って行為の残滓を丁寧に舐

めとる。
　先っぽの方を綺麗にしたあと、ロニエはキリトの腰に腕を回し、腕の力で自分の体を引き寄せるようにして肉竿を口の中に収めていく。
「んぶ、ふぅっ……♥」
　ロニエによって繰り出される、アスナ直伝のディープスロート。
　キリトの逸物に対抗すべく、口内から喉奥までの全てを差し出す極上の奉仕行為を披露しながら、ロニエはゆっくりと顔を前へ前へ、肉棒を深くへ深くへと進め、やがてその根元に顔を密着させた。
「んっ♥」
　キリトの下腹部、肉棒の根元とキスを交わすかのように唇を触れさせたまま、ロニエは口内の舌をねっとりと動かし、肉棒に付着していた雄と雌の体液を丁寧に舐めとっていく。
　懸命なその奉仕の感触を愉しみながら、キリトはコンソールウィンドウを起動すると、女子二人と己を運ぶ為の『足』を呼び出すのだった。

「――そろそろ、かな」
　プライベートリゾートアイランド・ティルナノーグ島。
　その中央に位置し、島面積の多くを占めるゲストハウスの中。
　床の大半が柔らかなクッション状の素材で作られた『ヤリ部屋（メインルーム）』に仰向けに寝転びながら、蒼色の髪のウンディーネ――アスナは、誰にともなくぽつりと呟く。
「そうだね。そろそろかも」
　アスナの呟きに応じたのは、黒い髪をセミロングに整えた少女――サチ。
　太股を枕代わりに差し出し、アスナの頭を預かっていた彼女は、寝転ぶアスナを見下ろしながらその蒼い髪を優しく撫でる。
　アスナも、サチも、共に布きれ一枚身につけていない全裸姿。二人ともヌーディストというわけではないが、ここは裸でいることが許さ

れる場所であり、そして裸でいることが一番自然であるからそうしている。

右目の下に泣きぼくろのあるサチの顔を見上げ、小さく頷きあったアスナは、今度は視線を己の下腹部方向へと向ける。

「ストレア、ユウキ。そろそろキリトくんが来る頃だから、おっぱいは一旦終わりにしよっか」

アスナの優しい声に促されて顔を上げるのは、ストレア、そして、ユウキ。もちろんこの二人も、アスナやサチ同様に何も身につけていない。

二人の口元から零れるのは、アスナの乳首から吸い上げた母乳の滴。アスナを母役とし、自分たちを娘役とした母娘プレイ――今の今まで続けられていた倒錯的な遊びの証左。

ユウキより少し早く体を起こしたストレアは、猫のように全身を伸ばしたあと、改めてアスナを見つめた。

「ママ、おっぱいごちそうさまでした。アスナママのおっぱい、すっごく美味しかったよ♥」

「どういたしまして、ストレア。ユウキも楽しんでくれた？」

「もちろんだよっ、アスナ」

「ふふっ。そうだ、二人とも。あとでちゃんとキリトくんにもお礼を言ってね。

『アスナママのおっぱい、貸してくれてありがとうございます』って。もちろん、おちんぽハメてもらうのも忘れずにね」

「「はーいっ♥」」

元気よく返事をする娘達に合わせ、サチに膝枕されていたアスナもまた体を起こす。そうして、ストレアと、そしてユウキと唇を重ねる。母娘プレイの余韻を残した背徳的なキスは、どちらもミルクの味をまとっていた。

キスを終えたユウキとストレアが、次はどこで何をしようかと無邪気に相談を始める。その姿を横目で見つつ立ち上がったアスナは、そのままエントランスへと向かう。その後を付いてくるサチも、アスナ自身も、もちろん裸のままでだ。

途中、エステルームの前を通りかかれば、ちょうどそこから出てきたリズと鉢合わせた。彼女もまた、アスナ達同様にフルヌードを晒していた。

「――あれ、アスナにサチじゃない。二人でおでかけ？」

「ううん。そろそろキリトくんが来る頃だから出迎えに行こうと思って。ね、サチさん」

「うん。リズも一緒に来ない？」

「え、もうそんな時間かー。じゃあ、あたしも一緒にお邪魔させてもらおうかしら。

ちょうどこっちの撮影も終わったところだしね」

「「撮影？」」

リズの『撮影』という言葉に興味を引かれた二人は、エステルーム内を覗き込む。

施術しやすいように高さを保った二台のエステベッド。その上で、裸のままぐったりとした様子でうつ伏せに倒れ込んでいるのは、フィリアとレインの二人。その体はぴくぴくと小刻みに痙攣しており、力なく開かれた瞳はどこにも焦点が合っていない。

股の辺りに敷かれたタオルには薄灰色の液染みがたっぷりとついており、二人がリズに何をされて何を噴き出したのかを言外に示していた。

彼女らが裸になって施術を受けるまでの全て、そして行われた施術の一部始終は、部屋の至る所に仕込まれた隠しカメラによってばっちりと録画されているに違いない。そしてその映像は『盗撮！　流出！　某大人気現役アイドル・レ●ン＆専属マネージャー・フィ●ア、媚薬レズエステで潮吹き絶頂！』のようなタイトルを付けられて動画保存ストレージに置かれるのだ。

そんな二人の側に置かれ、今もしゅうしゅうとミストを噴き出し続ける加湿器に、アスナは視線を向けた。

「――ふうん。今日は媚薬ミストで女の子を陥れたの？　悪徳エステティシャンのリズベットさん？」

「大正解。さっすが、この間あたしにオイルマッサージされて海老反

りイキしてた常連様は、目の付け所が違うわね～」
お互いを揶揄し合いながら、アスナとリズはくすくすと笑う。最近、ＡＶ監督めいた才能を発揮し始めたリズは、自身を含めた後宮内のメンバーを女優として起用し、様々なＡＶを撮影していた。
アスナもよく主演女優として起用されており、たとえば今メインルームにある大型スクリーン上で垂れ流されている『夜這い村に引っ越した美人姉妹　～美しき肢体は村中に晒される～』はアスナとリーファのダブル主演作である。
他にも『海外ヤリモク逆ナンヌーディストビーチ　デカチン探してハメてもらうまで帰れません！』や、『退魔剣姫アスナ　人間卒業公開人格排泄ショー＆人格ゼリー精液漬け・隷属婚姻洗脳の罠』などもリズの監督作品の一つである。
「次は大量精飲モノにチャレンジしてみようと思うんだけど……アスナは、まあ確定として」
「ちょっとリズ。なんで私が確定なのかしら？」
「またまたー、出る気まんまんのクセに。で、サチもよかったらどう？」
「うーん、そうだね……実は、ちょっと興味あるんだよね」
「ほんと？　じゃあ、次の主演女優はこれで決まりね」
サチも交えて次の作品の構想について話し合いながら歩いている内、三人はエントランスへ辿り着いていた。
強化クリアガラスで作られた自動ドアの向こうに視線を向ければ、ちょうどマリーナからやってきた黒い大型ベンツが入り口へと乗り付けてくる。
自動運転システムに制御されたベンツは扉の前で停車し、後部座席の扉を自動で開ける。裸の女二人に手を引かれて降りてくるのは、トランクスタイプの海パンだけを一応身につけた男が一人。
「――楽しくなりそうだね、アスナ」
サチがぽつりともらした声に、アスナは『そうだね』と返答し、頷く。
ここは十六人の雌（オンナ）と、一人の雄（オトコ）が気ままに交わる為に作られた

快楽の園（ティルナノーグ）。誰の邪魔も入ることのない、交尾の為に作られた縄張り。
開いた自動ドアの向こう側から流れ込んでくる夏の風の香りと、そこに入り交じる交合の残滓の匂い。
毎度の事ながら、出迎える女性陣の裸身に若干驚いた顔をする夫の様子に頬を綻ばせながら、アスナは期待に胸を躍らせるのだった。

１４―２．（リズベット・サチ・アスナ）

『――お゛っぉおぉ゛ぉおほおおっ♥♥　いぐっいぐイグイグぅうう゛ぅう゛ぅううっっっ♥♥♥』

部屋に響く、ケダモノが如き雌の鳴き声。それは『生』の声ではなく、壁の一面を使った大型モニターで再生されている映像から響く嬌声だ。

映っているのは、どアップになった男女の結合部。両脚を大きく開いた状態で下に組み敷かれた女の股座に、野太い男性器がどすどすと打ち込まれている。固く張り詰めた太いペニスが、さながらパイルバンカーのように振り下ろされる度、女は快楽に支配された喘ぎ声を響かせては雌穴から蜜をまき散らす。

『お゛っほぉ゛♥いひいい゛っ゛♥　ぢんぽすご♥すごぃぃいっ♥♥　これ゛、ごれむりぃ♥　イぐぅっ♥イグっ♥またイっ――いぐうぅうううぅうぅうう♥♥』

画面の大半が男女の股と腰で占められているため、そこに映っているのが誰なのかを映像だけで判別するのは極めて難しい。そのあまりに品の無い喘ぎ声を聞いたとしても、誰なのかを判別するのは難しいだろう。

陵辱めいた、あまりに一方的なセックス。巨根に蹂躙されて嫌悪を示すどころか、喜々として股を開いて雄を迎え入れ、性交の喜びに噎ぶ画面の中の女が――かつては《閃光》の二つ名を戴き《ＫｏＢ》の副団長を勤めた才女であるなどと、誰に分かるはずもない。

よしんばわかる者がいるとすれば、それは彼女と閨を共にし、その身体をよがり狂わせた事のある者だけだ。

たとえば――今その元副団長様が裸体を擦り寄せている男のように。

「この撮影の時ね、すっごく嬉しかったんだよ……♥　キリトくんが、アドリブで私をお持ち帰りしてくれて……♥」

自らの下半身を大映しにした映像を横目で見ながら、アスナは甘や

かに囁く。映像の中で自らを犯し、今こうしてその映像を眺めているキリトの耳元へと。

アスナとキリト、そしてこの部屋――プライベートリゾートアイランド『ティルナノーグ島』の中央に位置するゲストハウスのメインルーム――にいる全員が、例外なく裸体を晒している。性交の宴が始まってそう時間は経っていないというのに、部屋は既に男と女の淫臭で満たされていた。

床のほとんどが柔らかいクッション素材で構成され、どこでも快適にセックスできるヤリ部屋――そこで今まさに上映されているのは、アスナ主演のＡＶ『海外ヤリモク逆ナンヌーディストビーチ　デカチン探してハメてもらうまで帰れません！』の一場面だ。

「ほら。最初の予定だと、ビーチの側の岩陰で、声抑えてこっそりえっちして終わりだったじゃない？

なのにキリトくんったら『近くに部屋を取ってある。このまま一晩付き合わないか？』っていきなり誘ってくるんだもん……♥

あんなにおっきなおちんぽを目の前に見せ付けられて……『ヌーディストビーチで裸晒して男漁りしてるようなクソビッチなんて、これでひぃひぃ言わせてハメ堕としてやる』って視線で宣言されて……♥　私が『はい』以外にお返事できると思う？」

なんとも嬉しそうな声音で、アスナは撮影時を振り返る。

タイトル通り、海外のヌーディストビーチを舞台にアスナが逆ナンを敢行し、自らセックス相手を探すという企画型ＡＶ。アスナ自身の肉体を餌にした逆ナンはあっさりと成功し、見つけたデカチンの持ち主とアスナはビーチ側の岩陰で生ハメセックスに及んだ。

口元を手で塞がれたまま、立ちバックの体勢でのハードファックと、当然のような膣内射精。ほとんどレイプと変わらないその性交によって簡単に腰砕けにされたアスナは、監督の許可も得ないままお持ち帰りのお誘いに乗った。その結果どうなったかは、画面に映っている映像を見れば簡単に分かってしまう。

「キリトくんのお部屋……♥　誰一人邪魔できないし、誰も助けに来てくれない……気に入った雌を捕まえて好き放題種付けするための

『巣（ねぐら）』……♥

もちろんお外での開放的なセックスも好きだけど、キリトくんのお部屋に連れ込まれて『私、この人の雌にしてもらったんだ。あったかくて安心できる巣のなかで、思いっきり交尾できるんだ』って感じながらセックスするの……大好き♥　すっごく、大好き♥

キリトくんのぶっといちんぽでおまんこずこばこされて、『イぐうっ♥』とか、『おぉ〜ほぉ〜っ♥』とか……普通の女の子が絶対出しちゃいけない鳴き声上げながらイかされまくるの……♥　これ以上無いくらいに幸せで気持ちいいんだよ♥」

耳元に囁かれる、アスナの甘やかな声。普段の清楚にして清冽な雰囲気を残したその口から再現される、性交の喜び以外は何も含まれていない下品な喘ぎ声。

耳の穴に時折差し込まれるアスナの舌が奏でる、くちょくちょとした独特の音とこそばゆい感触。それを楽しみながら、キリトは目の前にある大型オナホールに肉棒を突っ込んで腰を振り、なんとも贅沢な自慰行為に耽っていた。

女性の腰から下を模したと思しきその大型オナホールは、立てた膝を支えにして尻を突き出し、後背位に近い状態で肉棒の前後運動を受け止め続けている。断面が見えて雰囲気が損なわれることがないようにするためか、腰から上の部分にはシーツが被せられている。時折、その下からどこかくぐもった、それでいて好色な声が聞こえるような気がするが――オナホールは喘がないのだから、おそらく気のせいだろう。

もっとも、『自分の監督作品をオカズにしてもらいながら、自分をオナホールとして使ってもらう』という変わった趣味の持ち主がいれば話は別だが。

「――私もね、アスナとおんなじだよ。キリト」

大型オナホールを掴んで腰を振るキリトに、アスナのちょうど反対側から囁く黒髪の少女。

降り積もる雪のように淑やかで、透明感をまといながらそれでいてはっきりと耳に残る――サチの声。

アスナ同様、裸身のままキリトの身体にぴったりと身を寄せた彼女は、愛情と熱情がたっぷりと篭もった吐息をキリトの耳に吹きかけながら――囁く。

「キリトにベッドに運んでもらって、キリトの腕にぎゅってしてもらうとね……とっても安心できるの。怖いことなんて何も無い、ここが世界一安全で、安心できる場所なんだ……って」

優しく囁きかけながら、サチは耳たぶに吸い付き、舌先で耳穴を弄ぶ。肌に擦れる舌と唾液で水音をくちゅくちゅと響かせ、キリトを更に興奮させてから、更に睦言を紡ぐ。

「もちろん、えっちしてる時もそうだよ。

キリトのすごくおっきなおちんちん……私が想像してたよりずっと立派な、大人のおちんぽを挿れてもらいながら……♥　キリトにぎゅ～って抱きしめられると、それだけで頭の中が幸せでぽわぽわしちゃうんだ……♥」

サチの静かな、そして甘い囁きは鼓膜を通して電気信号へと変わり、キリトの意識をくらくらと酔わせる。

そうしていると、いつの間にかアスナの声は聞こえなくなっていた。隣にいるアスナの囁き声ではなく、画面の中で痴態を晒しているアスナの淫らな鳴き声の方が。

「あっ、出た出た♥　キリトくんお得意の必殺技……キ・ス・ハ・メ♥　私がおちんぽずこばこされながらキスされると、簡単に乱れちゃうの知っててああいう事してくるんだから……キリトくん、ほんとズルいよ♥　好き♥　おちんぽハメて女の子堕としちゃう最強ヤリチン♥　だーい好き♥」

唇を唇で塞がれた事で声を上げられなくなった画面の中の自分に代わり、アスナは囁きを流し込む。

画面から流れてくる、くぐもった吐息の音と、肉と肉が激しくぶつかり合う音。その音の中に、隣にいるアスナの淫らな声が溶けて入り交じる。

「キリトくんにキスしてもらいながら、キリトくんのぶっといおちんぽでおまんこをキリトくん好みの形に変えられて……♥　ぎゅっ、

ぎゅ～～～って、全身ぎっちりホールドされながらの幸せ密着交尾……♥　女の子の支配されたい願望を刺激しまくる、強くてかっこいい男の子のセックス♥

キリトくんのおちんちんがおまんこの深いところをごりゆごりゆする度に、『キリトくん好き♥　大好き♥　愛してます♥　キリトくんの赤ちゃんたくさん産ませてください♥♥』って伝えたくてたまらなくなるのに……本気の生ハメセックスで堕とされるの気持ちよすぎて、『イぐっ♥イぐうぅ♥』とか『お〟ほっ♥あひぃいっ♥』ってしか言えなくなっちゃう……♥♥

だから……いつもキスハメで頭溶けちゃって、キリトくんおちんぽ様に媚びっ媚びの子宮でイってばっかりの画面上（あっち）の私の代わりに、こっちの私が伝えてあげるね……♥」

囁きの合間合間に織り込まれる、舌と唇を使った愛撫がキリトの耳を弄ぶ。アスナの側からだけではなく、サチの側からも。

その刺激に興奮させられ、キリトはオナホールの挿入口からローションがたらたらと溢れ出している事にも構わず腰を振り、ぐにゅぐにゅと締め付ける内側へと肉棒を突き込み続ける。

キリトの視線は自らが雌を征服する様を記録した映像へ。キリトの肉棒は全自動洗浄機能付き高級オナホールへ。夫のために極上の自慰行為環境を用意しながら、アスナは更なる環境向上を目指すべく、しなやかな指先をキリトの身体に這わせ、キリトの耳に愛を囁く。

「キリトくん、大好き♥　私、アスナはキリトくんの事を世界中の誰よりも愛しています♥　強くて、優しくて、弱い所を隠そうと頑張って、ちょっぴり意地悪で……そんなキリトくんの全部が、大好きだよ♥

これからもずっとず～っと、アスナはキリトくんの側にいます♥　キリトくんの隣にいさせてください♥♥

もちろん……キリトくんのおちんちんも大好き♥　キリトくんとセックスするのも、精液をどぷどぷ～っ♥って、子宮の一番深いところに射精してもらうのも大好き♥♥　私の子宮はキリトくんと、キリトくんの赤ちゃん専用の場所だから……いつでも好きな時に使っていいんだからね♥♥

おっきくて太くて固〜いキリトくんおちんぽ……♥　自分本位のヤリ捨てセックスでも簡単に女の子を堕とせちゃうチートおちんぽなのに……キリトくん、セックスする時はちゃんと相手の子を気持ちよくさせてあげようって気遣ってくれてるでしょ？　現実世界でセックスするときだって、ちゃんとゴム付けてくれるし、しかもゴムハメなのに何回も何回もイかせてくれるし……♥

メスの頭の中が真っ白にぶっとんじゃうくらい気持ちいい交尾してくれる私の旦那様に、そういう優しさまで備わってるの……ズルい♥♥　女の子として好きにならないワケないじゃない♥♥　キリトくん、好き♥好き♥♥大好き♥♥」

アスナの心の赴くままに流し込まれる、夫への愛の言葉。愛情に昂ぶらされる肉欲、肉欲に裏打ちされた愛情。その二つが分かちがたく絡み合い、その二つが互いをより高く、より濃密な領域に高めていく。

そんなアスナに刺激されてか、あるいは彼女の意図を汲み取ってか——キリトを挟んでちょうど反対側にいるサチも、キリトの耳元で愛の言葉を紡ぐ。

「キリト……♥　私も、私もね、キリトのこと大好きだよ♥　《ＳＡＯ》で出会った頃から……《ＧＧＯ》でもう一度会えた時も、ずっとずっとキリトの事が大好き♥

私のせいで、キリトにはたくさん辛い思いをさせちゃったよね……。でもね、これからはいっぱい、いっぱい……楽しくて幸せな思い出を増やしていこうね。私はもう絶対、キリトの側からいなくなったりしないから……。

だからね、これからもいっぱい……いっぱい、えっちしよう？　私のことを思いっきりぎゅーって捕まえて、サチは俺が孕ませるんだ〜って主張しまくりのおっきなおちんぽで、ぱんぱん、ばこばこっておまんこ犯しまくって……♥♥　私の体に、気持ちよすぎるセックスの味をたくさん、たくさん刻み込んじゃおう……♥　私、キリトにだったら何をされてもいいもん……♥♥」

しっとりとしたサチの声と共に流れ込む、愛の言葉。その言葉を紡ぐ合間合間に、サチはちゅぱちゅぱと音を立てて耳たぶを舐めしゃぶ

る。

左右の耳から流れ込む生殖欲求を過剰刺激しまくる全肯定ボイス。脳味噌を直接興奮させる水音。耳たぶも耳穴も舐め回す舌の感触。全身を包み込むかのように密着する女体。

アスナとサチによる息の合った連係プレイが、キリトの下腹部に滾る血を沸騰せんばかりに興奮させる。オナホールへと突き込む腰の動きも力も更に強まったせいで、シーツの下で何かがびくびくと震える。

「あっ、ほら見て、キリトくん。あっちの私、またイっちゃうよ♥」

その光景からキリトの眼を逸らさせるためか、あるいは単に自らの痴態を見せ付けたいがためか——アスナはキリトの視線を画面上へと誘導する。

画面の中のキリトがアスナの腰を抑え込むようにぐっと体を押しつけて動きを止めた直後、アスナの両脚がびくっ、びくっと痙攣し、丸見えになっている尻穴がきゅっと絞まる。キリトの唇によって抑え込まれた声にならない声は、ボリュームを一段増しつつもキリトの口の中だけに響いて消えていく。

やがて——ひとしきり達したアスナの両脚から力が抜ける。アスナがぐったりとしたそのタイミングを逃さず、画面の中のキリトは再び腰を動かし、力強い抽送と共に肉棒を叩き込む。

「ふふっ……♥　思いっきりイって真っ白になった頭がようやく帰ってきた所で……キリトくんったら本気のおちんぽハメ再開するんだもん♥　おかげで何回も何回もガチイキさせられて……すっかりおまんこにイキ癖と負け癖つけられちゃった♥

おちんぽに負けるの気持ちいい♥　おちんぽに支配されるの気持ちいい♥　おちんぽでイくイくイくぅう～～～っ♥……って、体も心も完全に覚えこまされちゃった……♥

どう？　キリトくん。大好きなあなたのお嫁さんを、旦那様おちんぽに絶対服従しちゃうお手軽アクメおまんこに調教しちゃった気分は？」

性交の快楽に酔う画面の向こうの自分を揶揄するアスナの囁きに

よって満たされる、雄の支配欲求。昂ぶる生殖本能。
そこに追撃をかけるのが、サチの囁きだ。
「やっぱりすごいよ、キリトのおちんぽ……♥　一緒に交尾してる時は、気持ちいいって事だけしか考えられなくなっちゃうもん……♥
私もアスナも、それに他のみんなも……キリトに出会うまで、えっちなことはもちろん、誰かとお付き合いしたことも無かったんだよ？
なのに今じゃすっかり、みーんなキリトのおちんぽに支配されちゃった♥♥
せっくす未経験の処女おまんこ、キリト好みに開発されて……子宮の奥の奥までキリト専用に染め上げられちゃった♥♥」
左右から注ぎ込まれるアスナとサチの甘やかなる睦言。どんな高級バイノーラルヘッドホンでも敵わない、ダイレクトな誘惑の声。
身も心も捧げ物として差し出す言の葉に、意識はくらくらと酩酊させられ、同時に激しく昂ぶらされる。そんな極上の体験を味わっていると、画面の中の肉棒の動きが一層激しくなった。
「あっ……見て、キリトくん♥　今度は、あっちのキリトくんがイっちゃいそう♥　固〜く勃起した旦那様おちんぽで、受精したがりのマゾ妻おまんこを、ごりゆごりゆっ♥どちゅどちゅっ♥って、らぶらぶハードピストンでいじめまくってあげてる♥♥」
「わあっ……すごぉい……♥　射精する時のおちんちん、こんなに激しく動いてるんだね……♥　いつもは気持ちよすぎて見てる余裕なんてなかったけど……改めて見ると、すごくかっこいいよぉ……♥♥
こんな風に力いっぱい愛してくれてるんだね……♥　こんな頑張ってる所見せられちゃったら……どうしよう、どんどんキリトのことが好きになっちゃうよ……♥♥」
「がんばれ〜♥　キリトくんのデカぶとおちんぽ〜♥　やっちゃえ〜♥　キリトくんの精液たっぷりずっしり金玉〜♥　全面降伏済みの雌嫁おまんこにずぽずぽピストン叩きつけて、精子がみっちみちに詰まった特濃精液で卵子溺れさせちゃえ〜♥」
「ここで見ててあげるよ、キリト♥　キリトの、柱みたいに太いおちんぽがアスナのおまんこをこじ開けて、一番深〜いところでザーメン

びゅ～びゅ～しちゃうところ……♥　オナホお嫁さんの性処理まんこに重たい種汁叩きつけて、ユイちゃんの弟か妹を作っちゃうところ……♥♥」

「受精したい♥　孕まされたい♥♥　キリトくんの精子で、私のお腹をおっきくしてもらいたいよぉ……♥♥♥　『私は旦那様とナカダシセックスしました』って、誰が見てもはっきりわかっちゃう体にされたいよぉ……♥♥♥」

「ねえ、キリトはどっちがいい？　キリトに似て優しくてかっこいい男の子？　それとも、私に似てパパが大好きな女の子？　私はね――両方、欲しいな♥」

快楽と羨望と妊娠願望と情欲に蕩ける二人の声。膣内射精（たねつけ）、妊娠、孕ませ――生物が持つ繁殖欲求を刺激し、キリトの遺伝子を腹の内に宿し育てる事を望む女達の声。

そんな声で誘惑されて耐えきれるものがどこにいるだろうか。いや、いない。

アスナとサチによって齎された興奮と画面の中の己に引きずられ、キリトは肉棒の抽送速度を一気に早める。もともと、オナホールとは思えないほど強烈にして柔軟な肉穴の締め付けによってかなりの所まで昂ぶらされていた体の奥から、激しい射精欲求が湧き上がってくる。

その気配を、二人の雌嫁は敏感に察知した。

「――ふふっ♥　キリトくん、種付けする準備ができたんだね♥」

「それじゃあ……あっちのキリトと一緒に、最高に気持ちよーくお射精できるタイミング……私達が教えてあげる♥

キリトはオナホールをずぽずぽすることだけに集中してね♥」

「もちろん、途中でお射精しちゃっても大丈夫だからね？　それじゃあ、いくよ……♥」

オナホールの腰部分をがっちりとグリップし、射精に向けて半ば乱暴に抽送を続けるキリト。その体に左右から寄り添いながら――二人はカウントダウンを始める。

「「さーんっ♥」」

前後間隔が極めて短いピストン運動によって肉と肉が激しくぶつかり合い、ぱんぱんと音を立てる。

「「にーっ♥♥」」

オナホールが断続的に潮を噴き、マットをびちゃびちゃに濡らす。執拗なまでに絡みつく媚肉を振り払うように、亀頭が抜ける寸前まで腰を引く。

「「いーちっ♥♥♥」」

二人の身体がぎゅっと密着する。引いた腰を思い切り突き出す。

「「ぜろーっ♥♥♥♥♥♥♥」」

最後の一突きを叩き込み、肉棒を雌壷の中に深々と沈める。左右から挟み込む雌二人のように絡みつく膣肉が肉棒を絞り上げる中、亀頭は子宮口をしっかりと抑え込み——そして、白濁液を解き放つ。

画面の中のキリトも、画面の外のキリトも全く同じタイミングで達すれば——画面の中で唇を塞がれたアスナが、くぐもった喘ぎ声を上げてびくびくと身体を震わせる。

『——ん゛ぅう゛う゛っ゛ぅうぅうう゛う゛う♥♥　んぉ゛っ♥んぶふぅううぅう゛ううぅううう゛ぅぅぅ♥♥♥』

「ひぁ——あああぁあ゛ぁあっ♥♥　あ゛っあ゛ぁあああああっっっ♥♥♥　あ゛ぉっ♥あ゛ぉっ♥♥お゛ほおぉお゛おおおっ♥♥♥」

両脚をキリトの腰にがっしりと絡ませてホールドしながら鳴き、繰り返し繰り返し淫らに達するアスナ。それに重なるのは、シーツの下から聞こえるオナホールの喘ぎ声。まるで今まで枕に顔を押しつけて必死に我慢していたものが、ついに耐えかねて溢れ出してしまったかのような絶頂の声。

その声に合わせるように、左右に控えるアスナとサチもまた、鳴く。味わう度にメスの喘ぎ声として出力されてしまう感覚を、人の言葉に乗せて。

「あはあっ……♥　あっちのキリトくんも、こっちのキリトくんも……いっぱいお射精してくれてありがとう♥　好き♥　大好き♥　私のことハメ潰してくれてありがとう♥♥♥

赤ちゃんの素がたっぷり詰まったキリトくんのどっぷり重々せー

えき、びゅーびゅーしてもらうの、とっても気持ちいいんだよぉ……♥　一滴残らずおまんこで受け止めて、お嫁さん子宮の中で卵子レイプ遊びさせてあげるから……金玉さんに溜まってる精子ちゃん達、遠慮無く私の中に吐き出して……♥♥

　イきまくってきゅうきゅう痙攣しちゃうおまんこ肉を、精液の通り道を作るためにぐーっと太くなったおちんぽ様に押し返されて、雌は雄に絶対勝てないって事を教え込まれながらイクの気持ちいい♥

イク度に私は旦那様ちんぽの所有物だって、孕ませフリーな子作り便女だって覚え込まされちゃうの気持ちいいよぉおっ♥♥」

「どぷどぷっ♥どくどくっ♥……って、おまんこぜーんぶ征服して、子宮にぐぐーっておちんぽ押し当てながらのたっぷりお射精……♥

とってもかっこいいよ、キリト……♥　大好きだよ♥♥　何度だって惚れ直しちゃう♥♥

　クリームみたいに重たくて濃厚な精液で、女の子の一番深くて大事なところをマーキングしてくれるの嬉しい……♥　私も、同じ女の子だからわかるもん♥　大好きな男の子が自分の身体で興奮してくれて……♥　種付けしたい、俺の子供を孕ませてやりたい、俺のちんぽでハメ倒して俺のメスにしてやりたい……って心が伝わってくるくらい激しく、ぶびゅ～っ、どぴゅぅ～～～っ……て、たっぷり膣内射精してくれるの、最高に幸せだもん♥♥♥」

　過去の己にしがみついて種付けを乞い願うアスナの結合部を見ながら、そして今のアスナとサチに左右から愛の言葉を注がれながら、キリトは全自動洗浄＆ローション分泌機能付きマゾ型雌穴（オナホ）に一切遠慮無しに精液を解き放つ。

　極上の自慰行為に耽りながら、陰嚢と肉棒の赴くまま、湧き上がり続ける精液をどくどく、どくどくと放つ。本日何度目かの射精が続く間――そして、長々と続いた射精が一段落し、キリトが射精の余韻に浸る間も、アスナとサチはキリトに寄り添い、耳元で愛の言葉を囁き続ける。

　そうしている間に、画面の中のキリトはゆっくりと腰を引き、アスナの膣内から肉棒を引き抜いた。

『――はひゅ……♥　はあっ、はあぁっ……♥』

肉棒の形にぱっくりと口を開けた雌華と、少し時間を置いて逆流する精液と愛液の混合物。絶頂の余韻にがくがくと痙攣するアスナの身体。

そしてキリトが移動した事と、カメラの画角が変わったことで見えるのは、だらしなく開けっぱなしになった口から舌をぐったりと突き出し、快楽に蕩けるアスナの顔だった。

「うっわあ……♥　アスナの顔、すっごいね……♥　普段とは全然違う、キリトのおちんぽに完落ちしちゃった顔してる♥♥」

「キリトくんがいけないんだよ？　君の凶悪なおちんちん様で、私の弱いとこイジメまくってくれる上に、私がしてほしいことはなんでもしてくれるんだから……♥

ほら見て。今だって、髪の毛掴んで私の顔持ち上げて、種付けしてくれた旦那様ちんぽにお掃除フェラさせてる♥　カエルみたいに脚広げてぐったりしてるお嫁さんに、力尽くでおちんぽおしゃぶりさせてくれるなんて……やっぱりズルい♥♥」

「いいなあ……♥　私も、もうちょっと髪の毛伸ばそうかな……？

そしたら、キリトにアレしてもらえそうだし……」

絶頂を幾度となく味わわされた末に脱力したアスナが、ほとんど無意識に肉棒へしゃぶりつく姿を見ながら、アスナとサチは口々に感想を述べる。やがて、映像の中のアスナがうまく力の入らない両手でピースサインを作ったまま、お掃除フェラを続けるところを映したまま画面はゆっくりと暗転し上映を終えた。

コンソールウィンドウを呼び出したアスナは、次に再生するタイトルを『実録・きりとくん（●歳）のなつやすみ　～夜這いしてきた近所のお姉さん達によってたかって甘やかされながら優しく童貞を奪われた所から始まる生ハメ交尾しまくりのフリーセックスサマーデイズ～』に設定。

そのまま身体を滑らせるようにキリトの胸板の上へ顔を寄せたアスナは、射精を終えたばかりの夫を見上げた。

「キリトくん♥　元気な赤ちゃんの素たっぷりの種付けお射精、お疲

れ様♥

キリトくんのことだから、おちんちんさんでもっともっとオナホ遊びしたいと思ってるだろうけど……今日、ここに来てからず～～～っとヤリっぱなしでしょ？」

そう問われれば、アスナを見つめ返していたキリトの視線がちらりと別の方向を向く。具体的に言うと、股座から白濁液を溢れさせたまま部屋の床（マットレス）の上にぐったりと横たわるロニエとルクスの方へと。

キリトの案内役としてウェルカムセックスのサービスを提供した二人は、このゲストハウスに着いたあと、『キリトをちゃんと案内できたご褒美』と称したキリトとアスナ達による徹底的な快楽責めに合い、完全なるグロッキー状態に陥っていた。

まあ、これはいつものことなので自然回復するまで放置していればいいのだが。

「いくらキリトくんのおちんぽが、アンダーワールドで私と百年以上交尾しまくったおかげでレベルアップした、女の子をたくさん飼い慣らせちゃう超絶倫ハーレム王様おちんぽだからって……今日はまだ長いんだし、時々休憩入れなきゃダメよ。

もちろん、オナホまんこイジメを頑張ってくれたおちんちんは、おちんぽケア係さんが優しくマッサージしてあげるから……すっきりしたら、おちんぽゆっくり抜いてね♥」

アスナの言うおちんぽケア係――つまりサチは、アスナがキリトの視線を奪っている間に移動し、四つん這いになって下からキリトを見上げている。そうして舌先を伸ばし、唇をぺろりと一舐め。ぷるんとしたリップを塗らし、受け入れ体勢を整える。

甲斐甲斐しい雌嫁二人を見下ろしたまま、キリトは両手に力を込め、肉棒からオナホを外した。

「――おぅっ……♥♥」

膣口をぱっくりと開きっぱなしにされたオナホから鳴き声が漏れた。それから少し遅れて、どっぷりと泡だった本気汁交じりの白濁液も。

膣内射精の時点でほとんど脱力していた大型オナホールは、キリト

の両腕に支えられながら、そのまま床の上へと崩れ落ちてうつ伏せに倒れ込んだ。

その横で待機していたサチが、さっそくおちんぽケアという名のお掃除フェラに取りかかる。雄汁と雌汁に穢れた肉棒を、まるで少しでも空気に触れさせるのが惜しいとでも言うかのように躊躇いなく口と喉で包み込み、じゅぽっ、じゅぽっと音を立てながら舐め回していく。

献身的な口淫の光景を眺めながら、キリトはサチの黒髪を撫でて奉仕に報いる。嬉しそうに微笑みながら掃除と肉棒へのマッサージを続けるサチの横で、アスナは大型オナホールの上半身部分に被さっていたシーツをそっと退けた。

「キリトくん、キリトくん。ほら見て、リズだよリズ。涎だらだら垂らしながら、はひゅ、はひゅって呻いてる……♥　まるで、ちんぽハメられた後の私みたい……♥

すごいね、キリトくん♥　ＡＶ見ながら勃起おちんちんでシコシコぱこぱこオナニーしてるだけで、女の子を簡単にイかせちゃったんだ……♥」

使用済み大型オナホール――もとい、親友のリズベットをダシに使いながら、アスナはキリトをたっぷり褒めそやす。ダシに使われたリズもリズで、だらしないイキ顔を晒しながら幸せに浸っていた。

セックスそのものの快感は当然として、自分が手がけた品を存分に使ってもらう喜び――鍛冶師であれば剣、ＡＶ監督であれば撮影したＡＶと、作品や使われ方こそ大きく異なれど、それを愛用してもらえると言う何物にも代えがたい喜びがリズの意識を恍惚と歓喜で満たしていた。

ぐったりとしたリズの横顔と、焦点の合っていない瞳をキリトが見つめていると、肉棒に舌を這わせていたサチがようやくフェラチオを終えて顔を離した。

「――ぷはぁっ……。おちんぽのお掃除とマッサージ、終わったよ。アスナ」

「ありがとう、サチさん。大変だったでしょ？　キリトくんのおちん

ちん、固いし、太いし、長いしで……」
「本当だよ……。おちんちんって、一回射精したらふにゃって柔らかくなるのが普通だって雑誌に書いてあったのに……キリトのおちんちん、ずっとずっと勃起したままなんだもん。
ザーメンが残らないように、おちんちん全体をお口でお掃除するの……すっっっごく大変なんだから」
そう嘯きながら体を起こしたサチへ、アスナがぎゅっと抱きつく。そして、そのままおもむろに唇を重ねた。
「んふ……♥」
「うんぅっ……♥♥」
キリトの目の前で繰り広げられる、濃密なディープキスショー。舌と唾液が絡み合うぬちゃぬちゃとした音をわざと漏らしながら、二人は互いの口内に舌を行き来させてじゃれあう。サチの口の中に残った精液の残滓をこそげとるようにして貪り合いながら、時折、横目でちらりちらりとキリトの様子を窺う。
淫靡な口付けの光景と挑発的な視線に、キリトがついに我慢できなくなる——まさにその寸前。絡まり合う舌を解いた二人は、ねっとりと熱を帯びた両の瞳でキリトを見つめた。
「……ふふっ♥　どうしたの、キリトくん？　私とサチさんがキスしてる所見て、我慢しきれなくなっちゃった？　そのぶっとい旦那様おちんぽで、完全合意レイプしたくなっちゃった？」
「もーっ。休憩しようねって言ってるのに、そんな風にばっきばきに勃起したかっこいいおちんぽ丸出しにしてるなんて……女の子が交尾したくなっちゃったらどうするつもり？」
「しょうがないなあ、キリトくんは……♥　我慢のきかない旦那様絶倫おちんぽは、私達でしっかり管理して、しっかり休憩させてあげないと。ね、サチさん？」
「そうだね、アスナ。それじゃあ、早速……♥」
有無を言わさぬ勢いで場の主導権を握ったアスナは、マットの上に座ったキリトの背後に回りこむと、そのまま夫の体を抱きしめる。その動きに合わせ、サチはキリトに正面から抱きつく。

前後から密着する女体の感触。肌から立ち上る、若い女性特有の得も言われぬ香り。ぎゅっと押し当てられるバストの柔らかさ。アスナとサチによる前後密着サンドイッチが、キリトの自由を完全に奪う。

「逃がさないよ、キリトくん♥　サチさん、そのままキリトくんのわがままおちんぽも捕まえちゃって♥」

「うんっ♥　覚悟してね、キリト？」

キリトの首に両腕を回したサチは、勃起した肉棒に跨がるような体勢で腰を上げる。さすがに意図を察したキリトは、彼女の腰を両手で持ち、そっと姿勢と位置を整える。

天を向くように屹立した肉棒の先端、固く張り詰めた亀頭をサチの蜜壺の入り口へとそっと宛がう。くちゅり、という水音を鳴らしながら、サチは恥ずかしそうに微笑み――そして、ゆっくりと腰を下ろした。

「――んんうっ♥　あっ、ああっ……♥　キリトの、はいってきてる……♥♥」

キリトの両手に体を支えられながら、サチは少しずつ、少しずつ体の位置を下げていく。優しく迎え入れる膣肉を押し広げながら、キリトの肉棒はサチの中へ、奥へと沈み込んでいく。

じっくりと時間をかけ、サチの身体を慣らしながらの挿入。サチの唇から零れる切なげな喘ぎ声の欠片と、アスナの淫らな囁きを聞きながら、キリトはサチを下から支えると同時にその身体を引き込み――そして、サチの中に己の分身を根元まで埋め込んだ。

「あああっ♥　ん、んうううっ♥♥　ふう、ふうっ……♥♥」

子宮口を亀頭に圧迫される感触に喜ぶサチの膣肉が、侵入してきたキリトの肉棒を全方向から締め付ける。それはまるで、キリトに正面から抱きつき、甘い声を漏らす今のサチ自身の合わせ鏡。

全身で愛情を伝えてくるようなサチの抱擁に合わせ、サチをしっかりと抱きしめ返しながら、キリトは彼女の耳元にそっと囁く。

「サチ」

「うん……♥♥　キリト……♥♥」

そっと目を閉じたサチが、艶やかな唇を差し出す。更なる繋がりを求めるサチに応え、キリトは彼女と唇を重ねる。触れあうだけの甘い口付けは、貪りあうための激しいディープキスへと一瞬で変わる。

求められるがままサチの口内へと入り込んだキリトの舌と、迎え入れるサチの舌が貪欲に絡み合う。混ざり合う唾液は粘ついた水音を立て、舌と舌での睦み合いはさながら軟体生物の交尾のようだ。

正面のサチを肉棒でしっかりと抑えつつ、唇と舌での逢瀬を重ねるキリト。その背後では、アスナがキリトの首筋に舌を這わせ、うなじにキスを捧げて弄び、そして耳元に唇を寄せる。

「おっきいおちんぽで、サチさんのおまんこ支配して……♥　ぐちゅぐちゅでらぶらぶなベロチューでサチさんのお口も征服して……♥　上も下も、ぜ～んぶキリトくんのものって教え込んじゃうすっごいキスハメ……♥♥

知ってる？　女の子って頭と子宮でモノを考えるんだよ？　なのにキリトくんったら、そのどっちもダイレクトに刺激しちゃうんだから……♥　『私はこのオス様のつがいです。このオス様と交尾して、オス様の遺伝子宿して孕ませていただくための存在です』って、メスの本能（カラダ）ではっきり覚えさせられちゃうじゃない……♥♥

オナニーしてる時も、休憩してる時も女の子堕としちゃうなんて、ほんとにズルいちんぽなんだから♥♥」

どこまでもオスを持ち上げるアスナの囁きを聞きながら、サチとディープキスに溺れ、柔らかな蜜壺に肉棒を包み込まれる。それを贅沢と言わずしてなんと言おう。

時折、腰をゆったりとくねらせて奉仕するサチの健気さと絡みつく舌の感触を味わいながら、そして背後から降りかかるアスナの吐息を感じながら、キリトは美女二人に密着される時間を楽しむ。そうして、サチに求められるがまま彼女の口内全体を自分の唾液で塗りつぶし、しっかりとマーキングを施したあと、キリトはゆっくりと舌を引き抜いて濃密な口付けに一区切りを付けた。

「――ぷひゃっ……♥　はあっ、はあっ……。きりと、キリトぉ……♥♥」

快感と興奮に蕩けたサチの瞳と至近距離で見つめ合い、甘く砕けた声を間近で聞く。快感に突き動かされるまま、サチはぐりゅっ、ぐりゅっ、と腰を回しては膣内に収めた肉棒の感触を堪能する。ぎゅうぎゅうとまとわりつく膣襞を固い肉棒で押し返され、カリ首に身体の内側をぞりぞりと嬲られる感覚を覚え込んでいく。

「あっ♥　んうっ♥　はあっ、あっ、あぁあっ♥♥　キリトぉっ♥　キリトの、ちんぽ……♥　きもちいい、きもちいいよぉっ♥♥」

控え目ながら時折大胆な彼女の動きに合わせ、その細い身体を下から思い切り突き上げてサチを貪りたくなる衝動に駆られるキリトだったが――その衝動を実行に移す寸前で、ぐっと堪える。

建前上、キリト自身は休憩中である。行為の主導権を握っているのはサチであり、そしてサチもまた主導権を握ることを楽しんでいるように見える。であれば、その楽しみを遮るのは無粋というものだ。

気持ちいい所へ肉棒を上手に導く方法を実践方式で学ぶサチのため。キリトは彼女の腰をそっと支えて主導権を握らせ続ける。

「――優しいね、キリトくん♥　君のそういう所、大好きだよ♥」

背後から抱きつくアスナは、当然のようにキリトの意図を何から何まで察していた。そんなアスナの声と、背中にぎゅっと押し当てられる柔らかな胸の感触に更なる興奮が掻き立てられる。

「んあっ♥ああっ♥　はあっ、はぁんっ♥♥　キリト、すき、すきぃっ♥　あっあああっ――んううううううっ♥♥」

抑えたようなサチの嬌声が響いた直後、びくん、びくんと身体を震わせたサチは、キリトの身体に寄りかかるようにして腰の動きを止めた。キリトの肩に頭を預け、すがるように抱きついたまま、サチははあはあと荒い呼吸を繰り返す。

その切なげな様子と、きゅうきゅうと締め付けてくる膣内の感触を味わえば、彼女が達してしまい動けなくなってしまったのは簡単に分かる。力の抜けかけたサチの身体を支えながら、キリトは片手を彼女の腰から背中へとずらし、更に安定性を高める。何のためにと問われれば、それは『サチを逃がさないため』に他ならない。

「キリトくん……やっちゃえ♥」

煽るアスナの声が、スイッチを押す。
サチの身体をがっしりと抑え込んだまま、キリトは抑え込んでいた欲望に突き動かされるまま彼女の身体を下から突き上げた。
「キりっ――!?　ああっ♥あ〝ぁあっ♥あっあああああああ～～～～♥♥♥」
敏感になっている身体を容赦なく責め立てられ、サチは為す術もなく喘ぎ声を上げる。
意外とむっちりとした尻肉を揉み拉きながら、キリトはまるで吸血鬼かのように彼女の首筋に吸い付いて痕跡を残す。サチの腰の動きによってたっぷりと興奮させられていた肉棒は、灼けた鉄杭の如き固さと威力と熱を持ってサチの膣内を繰り返し繰り返し陵辱。サチの蜜壺から官能の滴を次々に溢れ出させていく。
「はっ、はあっ♥はあんっ♥♥　だめ、だめえっ♥　きりと、だめ、だめえぇえっ♥♥　いっ、くうっ♥また、またいっちゃうからぁっ……♥♥」
「ダメじゃないよ、キリトくん♥　いっぱいバコバコして……気持ちよ～く、種付けしちゃおっ♥」
サチが啼き、アスナが煽る。男のブレーキを破壊するにはそれで十分すぎる。
臨界点を超えたピストン運動を何度も何度も叩き込み、我が物顔でサチを犯す。射精直前の理性が飛びかけた頭では、サチの腰がキリトの動きに合わせてより多くの快感を貪ろうとしていることにも気付けない。尤も、サチ自身も自らがそんな淫らな振る舞いをしている事すら自覚できていない。
ただ純粋に愛し合うことしか考えられなくなった頭で、キリトは最後の一突きをサチの膣奥深くへと叩き込み――休憩時間を挟んでたっぷり作られた精子を解き放った。
「あっ♥――あああっ♥やっ、ああっ♥あああああっ♥♥　おく、あつっ♥♥あついの、いっぱ――♥♥　あっあっあああぁぁあぁあああああぁっぁ～～～～♥♥♥」
重力に逆らって駆け上る精液がサチの子宮へと次々に飛び込んで

いく。サチ自身の体重とキリトの力によって肉棒と蜜壺、亀頭と子宮口はがっちりと繋がり、何の支障も無く精子達を運んでいく。

繁殖欲に満ちた熱い粘液を受け取ったサチは、がくがくと身を震わせ、身悶えしながら快感の渦の中へ。天にも昇る心地で味わう、メスとして堕とされる喜び。一度味わってしまえば、もはやそこから逃げ出す術はない。

「あぁあっ♥あっ、ああっ……♥　キ、リト……♥♥　すご、いっ……♥♥　いっぱい、いっぱいだよぉっ……♥♥　ああ、んぁあっ……♥♥」

甘く温かいサチの声を聞きながら、キリトは陰嚢の赴くままに精液を流し込んでいく。どくどく、どくどくと遠慮無く、容赦なく。その度にサチは悶え、啼き、達し、女として愛される喜びを教え込まれていく。

安心と快楽、興奮と安らぎを溢れるほどに与えられたサチの顔は、穏やかで締まりの無い幸せに満ちた表情をしていた。そしてそれは、たっぷりと続いた射精が終わり、キリトが肉棒を引き抜いた後になっても変わらなかった。

「――ふうっ……」

頭の天辺から脚の指先まで力を失い、ぐったりとした事後の余韻の中に堕ちたサチ。その身体を柔らかなマットの上にそっと横たえたあと、キリトは静かに溜息をついた。若く健康な青年であっても、射精した直後はさすがに気怠さが襲ってくる。それは人間という生物に備えられた初期仕様なのだから仕方ない。

二発連続、いや、最初に抱いたルクスとロニエの分も考えれば余裕でそれ以上射精しているのだから体力も気力も削れるというものだ。

削れるというものなのだが。

「――ね。私のことも、いっぱいめちゃくちゃにして……。キリトくん♥」

愛する妻であり、天が二物どころか十物は与えたであろう美しきウンディーネが、両脚を無防備に広げて寝転んだまま淫靡な微笑みと共に誘っているのだ。応えない夫がどこにいよう。応えられない雄が

どこにいよう。
　別の子宮を征服（マーキング）した痕跡を肉棒にたっぷりと残したまま、キリトがいつものように覆い被されば、すっかり甘えん坊のおねだりモードに入ったアスナは、両腕を伸ばして喜んで迎え入れた。
　オナホ遊びとも、休憩とも違う、夫婦のゆったりとしたセックスを楽しむために。

「――おぅっ♥　おうっ♥　ひいいっ♥♥　そこ、しょこぐりゆってされひゃら♥♥　またいぐ♥イくっ♥イぐイぐイぐぅううううっっ♥♥」
　部屋に響く、ケダモノが如き雌の鳴き声。まさに今、リアルタイムで喘がされている『生』の声が、どこか遠くに吹っ飛んでいたリズの意識を覚醒に導く。
　聞き慣れた親友の喘ぎ声を目覚まし代わりにして、リズはいつの間にか閉じていた瞼を上げた。
「――やあ、おはよう。リズ」
「……どこのおっぱいおばけかと思ったら……おはよ、ルクス」
　視界に飛び込んでくる豊かな下乳。その向こうにどうにか見えるのは、ふわふわとした白い髪と《ＡＬＯ》でもリアルでも見慣れたルクスの顔。
　シルフ族には巨乳しかいないのだろうかと疑いたくなるそのバストにぶつからないよう注意しつつ、リズはゆっくりと上体を起こし、そしてようやく気づく。今し方まで、自分はルクスに膝枕されていたのだと。
「ありがとねー、ルクス。枕貸してくれて」
「どういたしまして、リズ。気に入ったなら、またいつでも貸すよ」
「……っていうか。喋り方、いつもの感じに戻ってない？」
「ああ。やっぱり、仮想世界にいる時はこっちの方がしっくり来るんだよ。

……まあ、キリト様のお側にいる時は、さすがに『素』が出てしまうのだけれど……」

そう言って、ルクスは恥ずかしそうにはにかむ。その彼女が向ける視線の先では、ベッドの上に抑え込まれたアスナが、キリトの逸物を叩き込まれて喘ぎ声を上げていた。互いの体を密着させながらの激しい正常位でありながら、それでいてどこか手慣れた雰囲気を醸し出しているあたりに、夫婦の絆を感じさせられてしまう。

ぐぽぐぽという音が聞こえてきそうな程激しくハメられるアスナを見ながら、ルクスが恍惚の溜息を漏らす。

「はあっ……♥　キリト様、なんてたくましい……♥♥　本当に素敵です……♥♥」

「おいおいルクスさんや。一瞬で素が出てるわよ……。で、あたしがへばってる間に、あいつは何回シたわけ？」

「アスナさんに二回。途中で回復したサチさんとロニエさんに一回ずつ」

「わーお……相変わらず、底なし……」

呆れるリズを他所に、ルクスはぽわぽわと熱を帯びた視線でキリトを見つめる。

夫婦交尾を楽しむキリトとアスナの隣には、先程までのリズ同様、性交の余韻に溺れてぐったりとするサチが寝転んでいる。そして更にその隣には、射精後のお掃除の機会に備えてロニエがそっと待機していた。

リズの視線に気づいて小さく会釈するロニエに、リズもまたぱたぱたと手を振って挨拶を返した。

「健気ねー、傍付きって……。あんたもほんとはあっちに混ざりたいんじゃないの？」

「うーん……確かに、その気持ちは無くもないけど……。

私はロニエさんと一緒に、キリト様には朝一番にたっぷり愛していただいたからね……♥」

そう言って、ルクスは己の下腹部をそっと撫でた。彼女がすっかりオンナとして目覚めてしまった事は、その愛おしげな仕草一つをとっ

てもはっきりと分かってしまう。
　キリトを迎える船内でロニエとルクスがどんなセックスをしていたのか、それをリズは聞いていない。もっとも、ゲストハウスに入館してきた二人の裸体から立ち上る濃密なオスの香りを嗅げばそれが甘っちょろいものでなかった事くらいは想像できる。
　共にキリトを出迎えたアスナとサチを含めた三人で入り口に跪き、肉棒にお出迎えのチンポキスをした時に感じた、メスの淫臭を嗅げばなおさらだ。
「そういうリズこそ、混ざりたいんじゃないのかい？」
　ルクスの問いかけに、リズはそっと首を横に振った。
「あんな幸せそうなセックスしてるご夫婦の間に割り込むのはちょっと……ねえ？」
「そうかい、それも一理あるね。
　……ん？　でも、そう言いつつアスナさんに隠れてキリト様と不倫してるんだろう？」
「ええ、してるわよ」
　悪びれもせずにそう言ったあと、リズとルクスは揃ってくすくすと笑う。不倫、といってももちろん正妻様公認の不倫プレイの話である。それにアスナもアスナで、『リズと結婚したキリト』と陰でラブホ密会しては生ハメ不倫セックスプレイをしているのだからお互い様である。
　二人がそんな話をしているとは露知らず、アスナは激しい喘ぎ声を上げながらセックスの快感に溺れていた。結合部からはぷしゃぷしゃと雌汁が溢れ出し、ずこずこと突き込まれる肉棒を歓待する。
　全身をよがらせて快感に溺れるアスナを見つめながら、リズはぽつりと呟いた。
「……ま、なんていうかね。アスナもアスナで、キリト以上に色々抱え込んじゃう所があるっていうか、頑張り過ぎちゃう所があるから……。
　こういうとき、こういう場所でくらい、頭の中空っぽになるくらいいっぱい気持ちよくなってストレス発散させてあげなきゃ。ね？」

「ふふっ。アスナさん想いなんだね、リズは」
「とーぜん。なんたってあたし、アスナの大親友だもの」
ピストン運動の速度を速めて一気にラストスパートをかけ始めたキリトによって、容赦なく喘がされ悶えさせられるアスナの姿を見つめながら、リズは堂々と言ってのける。
普段の耳聡いアスナならその言葉に何かを返答しただろうが、セックス中ともなるとそうもいかない。今のアスナに出来るのは、キリトの腰に両脚をがっしりと絡めて、無意識に膣内射精（なかだし）おねだりをすることくらいだ。
「あぉっ♥ひゃひぃいっ♥♥　キリトくんっ♥キリトくぅん゛っ゛♥♥　あっ、ああっ♥♥あひ、ひぅうぅぅっ♥♥」
「アスナ、アスナっ！　このまま、射精（だ）すぞっ！」
「うんっ♥きて、きへえっ♥♥　いっぱひ、らひへええぇぇっっっ♥♥♥」
呂律の回らなくなったアスナをぎゅっと抱きしめたまま、キリトは本能の赴くままに腰を振り、肉棒を蜜壺に叩き込む。最早理性が飛んでいるアスナは、カリ首が膣壁をこそげる度に獣の如く鳴き、その淫らな鳴き声がキリトを更に興奮させる。
そして、アスナに導かれるように――キリトは最後の一突きを膣奥に深々と突き刺し、陰嚢に溜め込まれた白濁液を一気に吐き出した。
「――――ぁああ゛ぁあああぁああ゛ああ゛ああっっっ♥♥♥　イっ――い゛ぐぅううぅううぅうぅう♥♥♥♥　あぉ゛ぉおっ♥♥　はひゅぅっ♥♥♥　あっあっあ゛ぁぁあ゛ああ♥♥♥　おほっ♥いぐ♥いっ――ぁぁああぁああ゛ああ゛ああ♥♥♥」
最奥へと勢いよく叩きつけられる精液の奔流に、アスナはびくびくと身体を震わせ、反射的に腰を浮かせながら深く重い絶頂に達する。幾度も、幾度も。快楽によってホワイトアウトする意識は、更なる快感によって強制的に引き戻され、壊れてしまいそうなほど激しい悦楽の中に溺れる。
「お゛ほぉおおっ♥ほっ♥ひぃいいいぃ♥♥　いぐ、イッでりゅ♥♥

とぶ♥あっ♥とんじゃっ――うぅうう♥♥　あっあぅあっぁあああああああっっ♥♥♥」

結合部からぷしゃぷしゃと愛液を噴き出し悶えるアスナの身体。その身体をキリトは上からしっかりと抱きしめて抑え込む。オスに征服されることに喜びを感じるアスナが、その喜びに安心して浸れるように。

子宮口に鈴口をぴったりと当て、精液をどばどばと流し込む肉棒には、アスナの膣肉がきゅうきゅうと必死にまとわりつき、一滴でも多くの精液を搾り取ろうと蠢く。その動きと感触が肉棒を昂ぶらせ、陰嚢の精液を次々に送り出させていく。

「あっ♥あっ〃～～ぁ〃あ〃～～っ♥♥　おあっ♥あおっ♥　あっあっやああ――んむっ!?」

締まりのない顔で交尾の喜びに鳴くアスナの唇を、キリトは己の唇で塞いだ。そのまま舌をするりと差し込み、くったりとしてしまった彼女の舌を舐る。たったそれだけの事で、アスナはあっさりと更に達した。

両脚をキリトの腰に回してがっしりとホールドするアスナ。両腕でアスナの身体を抱きしめてしっかりとホールドするキリト。互いに互いを密着させ、繋がれる場所全てで繋がりながら愛情を循環増幅させる濃密な夫婦交尾。

その繋がりは、じっくりと続いた射精がようやく一段落する頃になっても解けることはない。アスナが確実に受精できるよう、杭のように固く太い逸物が子宮にしっかりと蓋をする。

「ん――っ……♥　ふっ、んうう……♥♥」

やがて、精根尽き果てたアスナの身体から徐々に力が抜けていく。絡めた両脚が力なく開き、夫の背に回っていた両腕がマットの上にぱたりと落ちる。すっかり脱力させられた身体に残るのは、性交の余韻によってぴくり、ぴくりと震える微かな痙攣反応だけだ。

絡めた舌と挿れた肉棒を使ってアスナを上下から抑え込んだまま、キリトはアスナの髪をそっと撫でる。性交の激しさに乱れた髪を手ぐしで軽く整え、余韻をたっぷりと共有したあと、キリトはようやく

キスを解いて上体を起こした。もちろん、下半身では繋がったままで。

「――お疲れ様でした。先輩」

交尾が一段落したタイミングを見計らい、傍らで待機していたロニエが身体を起こしてキリトの側へと近づく。

「先輩。このままアスナさまと続けて交わられますか？　であれば……僭越ながら、お手伝いをさせていただければと思うのですが」

控え目に申し出ながら、ロニエは様々な調教道具が格納されたストレージウィンドウを開く。

アイマスク、アナルパール、首輪に口枷（ギャグ）ボールや手錠などの拘束具、真っ赤な低温蝋燭、毛羽を除いて整えられた縄、スパンキング用のパドル、様々な形状や長さを持つムチ、小指サイズからキリトの逸物そっくりのものまで色々な太さと大きさを取りそろえたディルド。

更には『ジュエル・メイカー』の薬液を収めた大型浣腸器や、記名・押印欄が空白になっている奴隷宣言書、キスマークを付けるための派手な色のリップ、赤ちゃん用の哺乳瓶、電動マッサージ器にマタタビといった変わり種まで。

最上部に『「転移結晶」と言われたら絶対にプレイを止めること』という注意書きが書かれたそのストレージは、ロニエ、そしてアスナを含めた何人かの女性達が使う共有ストレージである。使用目的はもちろん、より淫らで卑猥なオンナとしての魅力を高めるべく、お互いにお互いを調教しあうためである。

「いかがいたしましょうか、先輩？」

「そうだな……」

ぐったりとしたアスナを見下ろしながら、キリトは暫し思案する。こうしてアスナの雌穴に肉棒を突っ込んだまま、ロニエにアスナの尻穴を責めさせ、アスナお気に入りのディルドを使った二穴プレイで徹底的にイかせまくり、《閃光》様を完全に壊してしまうのも悪くないだろう。三度の交わりで蕩けたアスナ自身も、壊されたがっているように感じる。

しかし――それをするには、まだ少し早い。リゾートでの休日は始まったばかりだというのに、いきなり再起不能にされるのも勿体ないというものだ。

「いや、今はやめておこう。一緒にアスナをイジメたおすのは、もうちょっと後でしような。ロニエ」

「はい。わかりました、先輩。それでは……代わりに、お掃除の方をさせていただいてもよろしいでしょうか？　たくさんお射精していただいた先輩のおちんぽ様に、感謝を込めて」

「ああ。よろしく頼むよ、ロニエ」

こくりと頷くロニエの頭を撫でながら、キリトは腰を引き、アスナの膣内に埋めていた肉棒をずるりと引き抜く。膣口は抑えを失い、肉棒の形にぱっくりと広げられたまま、泡立ち逆流する精液をどろどろと垂れ流す。元々感度が良い上、絶頂の余韻で更に敏感になっていたアスナの身体は、肉棒が引き抜かれる感触で再び軽く達した。

精液と愛液をたっぷりと纏って穢れたオスの象徴。その先をロニエの方へと向ければ、ロニエは蕩けるように、そして淫らに微笑んで身を屈めた。

「では……先輩のおっきなおちんちん、私のお口でキレイにさせていただきますね……♥♥」

顔にかかる焦げ茶色の髪を掻き上げながら、ロニエは肉棒へ口づけを捧げる。充血して張り詰めた亀頭に、ぷるぷるとした乙女の唇が触れる様はたまらなく淫靡であり、そして背徳的ですらある。

舌の表面を亀頭の下側に這わせ、精液をたっぷり放出したばかりの鈴口周りを丁寧に舐め取りながら、肉棒に付いた残滓を清めていくロニエ。そんなロニエの頭を撫で、いつものようにその奉仕に報いていたキリトは、背後からいそいそと近づいてくる二人分の物音に気づく。

「よう、リズ。それにルクスも。どうしたんだ、二人揃って」

「んー……まあ、そろそろ割り込みかけてもいい頃合いかな、って」

「割り込み？」

「こっちの話よ。あんたは気にしなくていーの」

リズベットはそれだけ言うと、べーっ、と大きく舌を伸ばす。そうして、露わになった濃いピンク色の艶めかしい肉の塊の上に、ラムネ菓子によく似た形状の白い錠剤を数個載せた。

それは、このリゾート地とその近辺でのみ流通しているレイプドラッグ。男が服用すれば精力剤に、女が服用すれば理性を蕩かし判断力を失わせた上で感度を上げる媚薬になるという非常に危険な薬物である。断じて、そういう建前のラムネ菓子などではない。

一日一錠が安全ライン、それ以上摂取するとオーバードーズを引き起こす危険薬物を数錠まとめて口の中へと放り込んだリズは、そのままキリトに抱きついて唇を重ねた。

「――んっ……♥♥　んーうっ♥♥」

唇同士の触れ合いは、一瞬でディープキスへと変わる。一つの空間となった互いの口内で舌がぐねぐねと行き来し、溶け始めた薬剤の甘さが脳の感覚を狂わせていく。

片手でリズの腰を引き寄せ、クスリが溶けきるまで逃げられないように拘束する。頭の中が髪の毛と同じ色に染まりきったリズは、むしろ喜んでキリトに身を委ねた。

もう片方の手でロニエの頭を撫でていると、肉棒に伝わる感触が一つ、更にもう一つと増える。溺れるようなキスの合間を見計らって視線を眼下に向ければ、亀頭を舐め回すロニエの左右で、そっと這い寄ってきていたルクス、どうにか回復したサチが肉棒の太い軸とキスをし、そして舌を這わせていた。

『先輩……♥♥』

『キリト……♥♥』

『キリト様……♥♥』

愛する男の耳にだけ届けば良いとばかりに最低音量に絞られた合成音声システムが作り出す三人の声は、どこかテレパシーじみた雰囲気を伴ってキリトの鼓膜へ響く。

見上げる六つの瞳の中には、情欲の炎がちろちろと燻っており、この口腔奉仕をただの掃除だけで終わらせるつもりの無いことを示していた。

まあ、彼女らがそうしたいのであれば、キリトにそれを止める理由は特にない。『好きにしたまえ』という返事の代わりに、三人娘の頭を順繰りに撫でてやれば、彼女達はなんとも嬉しそうに微笑み、丁寧でゆったりとしたお掃除から精液で顔面をマーキングしてもらうための積極的なフェラチオへと段階を移行させた。

唇を使った様々な形の交わりが行われている横では、大型モニターで上映されているＡＶがいつの間にか新しいタイトル――『新妻・アスナの供述調書　～夫によるＤＶを疑われた事で晒される清楚美人妻の変態性癖と公開再現ショー～』――に切り替わっていた。

『――なるほど。では、宴会場で裸踊りを披露したのも、公園の男子トイレで裸になって放尿する姿を生配信したのも……旦那さんに強制されたわけでは無く、全てアスナさん自身の意志によるものという事でよろしいんですね？』

『は、はい……。その通りです、フィリアさん』

『わかりました。では、こちらの供述調書にサインをいただけますか？

【私、アスナは、沢山の人の前で裸を晒してガニマタで腰を振りながら「おまんこも♪　ケツ穴も♪　ぶっといちんぽでハメハメされるの、だ～いっ好き～♪」と歌う変態カラオケダンスショーを披露しましたが、これは私が救いようのないドＭで露出狂の変態であるためであり、全て私自身の意志によるものです】という所に』

『っ……！　わかり……ました……』

そのＡＶを撮影・監督した女は淫らなキスに酔い痴れ、主演した女は激しいセックスに乱され倒れ伏している。その二人を共に抱いた男は、既に抱いた三人の女達の舌と唇によって丹念な奉仕を受け続ける。

交わり合うオスとメス達の為だけの空間で始まった宴は、まだまだ終わる気配すら見せそうになかった。

１４―３．（ロニエ・アリス・イーディス）

青い空。白い雲。照りつける太陽と、静かに打ち寄せる波。
細かく砕けた珊瑚の欠片が作り出す白い砂浜と、水平線上まで遮るモノなく続く遠浅の海。
プライベートリゾートアイランド『ティルナノーグ島』のビーチは、自然の贅沢さを味わうビーチレジャーには最適のスポット。そこを堪能しない手はないと、多くの女性達がそれぞれのやり方で仮想の夏を楽しんでいた。
「いくら球戯とはいえ、私とイーディス殿に勝負を挑むとは……いい度胸をしていますね、二人とも」
「ほんとほんと。ストレアとフィリアには悪いけど、手は抜いてあげないよ～」
「ふっふーん♪　アタシ達を甘く見ると痛い目見るんだから！　ねっ、フィリア！」
「うんっ！　いくら整合騎士コンビだからって、簡単に勝てると思ったら大間違いなんだから！」
ご丁寧にスポーツウェアタイプの水着に着替え、だいぶ真剣な面持ちでビーチバレー対決に励む者達。
「リーファちゃん、もっと右にいかなきゃダメよ！　右！」
「違うよリーファ！　もっと左だよ、ひーだーりー！」
「セブンとユウキちゃんに惑わされちゃだめ！　真っ直ぐ、そのまま真っ直ぐでいいんだよリーファちゃん！」
「え、えぇ～～～!?　セブンさんもレインさんもユウキさんも……一体、誰を信じたらいいんですかぁ!?」
スイカ以上に大きな胸を揺らしながら変則スイカ割りに挑む者と、右往左往する様子を見ながらくすくすと笑う者達。
「シリカ、行くゾ！　このままシノンを挟み撃ちダ！」
「了解です、アルゴさん！　さあ……いよいよ年貢の納め時ですよ、シノンさん！　キリトさんの仇、取らせてもらいます！」

「上等じゃない。二人とも、まとめて返り討ちにしてあげる！」
かなりゴツい水鉄砲を手に、波打ち際を駆け回りながら熾烈なバトルを繰り広げる者達。
色とりどりの水着に身を包んだ極上の美少女達が楽しそうに戯れながら、それぞれのやり方で夏を謳歌する様。それはどんな高級絵画や風光明媚な風景よりも価値のある最高の光景である。
そんな光景が繰り広げられるビーチの、少し奥まった場所。緑が広がるキャンプサイトとの境目辺りには、休憩所が設けられている。特大サイズのキャンプシートを敷き、その上にこれまた特大サイズのタープを張って屋根としたシンプルな休憩所。
キャンプサイト側を除いた三方に壁が無い構造により風通しが非常に良く、タープが作る日陰の涼しさが夏の暑さを浴びた肌に心地よい。ゆったりと寝転がれるようなサイズの大型ビーチチェアが設置されているおかげで、過ごしやすさは抜群である。
この島の所有者であり、この縄張り（シマ）の支配者――キリトがいるのも、そんな休憩所の中だった。
「みんな元気だな……」
「本当ですね……」
丸めたビーチマットを枕にして寝転ぶキリトの隣で、ロニエが頷く。
別段、キリトもロニエも最初からこうしていたわけではない。
ゲストハウスでのハーレム乱交を楽しみ、しばし休憩を挟んだあと。キリトはロニエを連れてビーチへと降り、約束通り一緒に水遊びを楽しんだ。もちろん裸ではなく、水着を着用した上でだ。波打ち際で水をかけあい、一緒にゆったりと泳ぎ、水中で抱き合いながらキスをし――ロニエと一緒に、たっぷりと海を楽しんだ。
ついでにいえば、スイカ割りでものの見事に目標を外してリーファに爆笑され、シノンの『ヘカートⅡ（ウォーターガン仕様）』で顔面を水浸しにされ、フィリアとストレアのタッグとビーチバレー対決をして惜しいところで負けたりもした。
そうしてなんとなく休憩所に移動し、なんとなく寄り添って寝転

び、ビーチで遊ぶ女性陣の姿をなんとなく眺めていた。
「せ、先輩……♥」
期待に瞳を潤ませたロニエが、キリトの瞳を覗き込む。その期待に応えるべく、キリトは彼女の体をそっと抱き寄せて唇を重ねた。
戯れにするような軽いキスではない。これからセックスすることを予定調和としてしまうような、重く、長い時間をかけて行うキス。入り交じる唾液、絡まり合う水音。ロニエの尻を水着越しに揉み拉き、これから種付けすることを言外に教えてやれば、ロニエは嬉しげな吐息を零す。
空いている手でコンソールウィンドウを呼び出し、ロニエの水着をストレージに格納しようとした所で――足音が近づいてくる事に気付き、キリトは手を止める。同じく気付いたのか、ロニエも名残惜しげにキスを止めて顔を上げた。
「――お邪魔しますね、キリト、ロニエ」
「ごっめんねー。良いところだったのに邪魔しちゃって」
「……よう。アリス、イーディス」
日差しを避けてタープの陰へ腰を下ろしたのは、アリスとイーディスの整合騎士二人組。
スポーティな水着に身を包んだ二人は、どうやらストレア達から勝利をもぎ取ったらしくなかなかに上機嫌だ。ビーチマットの脇に置いておいたクーラーボックスから取り出したドリンクで、激闘に火照った肌を冷ましている。
「ちょっとだけお預けだな、ロニエ」
「はい、先輩♥」
ロニエの耳元に囁いたあと、キリトは体を起こして座り直す。ロニエもまた、キリトの隣に寄り添った。
「――そういえば、知っていますか。ロニエ」
「なんでしょうか、アリスさま？」
いつものようにキリトの側へと侍るロニエ。その何の変哲も無い様子に横から口を挟んだのは、誰あろうアリスだった。柔らかい微笑を浮かべつつボトルを置いたアリスは、きょとんとするロニエの瞳を

真っ直ぐに見つめた。
「アスナから聞いていませんか、ロニエ。
　このビーチでは、キリトの周囲5メル……5メートル以内で水着や衣服を着用しないのが一般的な作法なのです」
「えっ……そっ、そうなのですか!?」
「ええ。アスナ曰く、『キリトの周囲は即ハメフリーのヌーディストビーチ』なのだそうですから」
「えっ!?　ええっ!?　本当なのですか、先輩!?」
　アリスの口から突然出てきた衝撃発言。それに目を丸くしたロニエが、慌てた顔でキリトの方を見る。
　当然、そんな作法（マナー）を定めた覚えは無い。溜息と共にキリトが首を横に振って否定しようとすると――それより早く横から伸びてきたイーディスの両腕が、キリトの首にしなやかに巻き付いてその動きを阻害する。
「あー。今、違うって言おうとしたでしょ？　キリト。でもいいのかなー？」
「いいのかなって……何がだよ」
「だって、もしキリトが否定したら、アスナかアリスがウソをついたってことになっちゃうじゃない。
　いいのかなー……あの二人をウソつきにしちゃって……。いいわけないわよねー？」
　スポーティな水着の布越しでもわかる柔らかな膨らみ。耳元にかかるイーディスの吐息と小悪魔めいた甘い囁き。ほんのりと漂う汗の香り。魅惑的なその全てが、理性という名の防御を貫く影の刃となって、キリトに容赦なく襲いかかる。
　もちろん、キリトがそんな隙を晒した瞬間を、もう一人の整合騎士が逃すはずもない。イーディスとは反対側から忍び寄り、そっと抱きついたアリスが、キリトの耳元に唇を寄せて囁く。
「キリト……お前は、私がウソをついていると言うのですね……。
　……どうしてでしょう。お前にウソつきだと謗られるのは……とても、とても悲しく思えてしょうがないのです……」

心の底から悲しみに沈んでいる――そう思わされてしまいそうな程に真に迫ったアリスの声。もし、場所がこんなセックスリゾートでなければ――そしてイーディスとアリスの手がキリトの下腹部を弄っていなければ――キリトはあっさりと騙されていただろう。

「キーリートー……♥」

「キリト……♥♥」

整合騎士達の細い指先が、海パンを下から突き上げる硬い肉の柱を布の上から嬲る。

優しい指使いで、かりかり、すりすり。

妖しい指使いで、かりかり、すりすり。

甘く焦らしつつ、かりかり、すりすり。

息の合った連携で指先を操り、キリトの体と心を誘い弄ぶ。

「くうっ……！　こんな見え透いた手に、負けるか……！」

残った理性を総動員し、キリトは必死に耐える。

攻め手は苛烈だが、そう簡単に屈するわけにはいかない。もしここでキリトが首を縦に振れば、話を持ちかけてきたアリスとそれにノッたイーディスはともかく、ロニエまで巻き込んでしまう。健気な後輩に、ありもしないマナーを破った罪を被せることなど誰にできようか。

そうして、なけなしの根性で誘惑に抗うキリトの正面に――しれっと、ロニエが陣取る。

「ロニエ……？」

「せ、先輩……そういう作法なのであれば、仕方ないと思います……♥」

興奮と羞恥に頬を赤らめたロニエは、もじもじとしながら自らの装備ウィンドウを表示し、『装備全解除』のボタンが表示されたウィンドウを見せる。それが、キリトの自制心を破壊する最後の一撃となった。

キリトの雰囲気が捕食者のモノへと変わる。その変化を肌で感じ取ったアリスは、我知らず淫靡に微笑みながら――キリトの耳元にもう一度、囁く。

「では……確認しておきましょう、キリト。このビーチでは、お前の側にいる間……何も身につけないのが作法なのでしたよね？」
「ああ、その通りだ。アリス」
　誘惑の三重奏の前に屈したキリトは、アリスの問いかけに頷く。それはもう力強く、完全に開き直った顔で。
　事実上の敗北宣言に気をよくしたアリスは、キリトの耳に「ありがとうございます」と囁きかけたあと、イーディスとロニエの顔を順繰りに見つめた。
「――というわけです。こうした場合、どうすればよいか分かりますか？　ロニエ」
「はいっ。まずは、これ以上無作法を重ねないよう、一刻も早く裸になるべきだと思います！」
「とても素晴らしい回答です、ロニエ。ほとんど正解と言ってもいいのですが……一つだけ」
「……？」
「『裸になる』のではなく、『裸にしていただく』のです。私達が、キリトの意志一つで自由にできるメスでしかない事を……キリト自身にわかってもらうために」
　堂々と言ってのけながら、アリスは自らの装備ウィンドウを表示し、そのままキリトへ差し出す。横から見ていたロニエとイーディスも、アリスに倣って装備ウィンドウを差し出した。あとは、キリトが画面上部に表示された『装備全解除』ボタンを押してしまえば、彼女らの命運は一瞬で決する。
　ゴクリと喉を鳴らし、ボタンに向けて指を伸ばすキリトに、アリス達は囁きかける。
「さあ、キリト。お前の手で、私達を裸に剥いてしまいなさい……♥」
「先輩……♥　私なら、大丈夫ですから……♥」
「きゃー♥　キリトに素っ裸にされちゃう～♥」
　アリスは妖艶に。ロニエは健気に。イーディスは姦しく。三者三様のやり方で捧げられる甘く媚びた声。露骨なまでの誘惑に抗う理由を失ったキリトは、三人分の『装備全解除』ボタンを押す。直後、彼

女らの体を覆っていた布地が光の粒となって消え、三人分の裸身が露わになる。

タープが作る日陰の下にあっても眩しく感じるほどに美しい白い肌。ロニエを筆頭に、しっかりとボリュームのあるバスト。くびれた腰から芸術的なラインを描くヒップ。恥ずかしさを残しつつ微笑みながら、三人は『どうぞご自由に襲ってください』と言わんばかりのヌードを見せ付ける。

ごくり、と。思わず生唾を飲み込むキリトに、アリスがそっと囁く。

「ありがとうございます、キリト。おかげで、無作法を重ねずに済みました……♥　このお礼は、あとでたっぷりと……♥」

耳たぶを唇で挟み、舌先で愛撫。自らの存在をキリトにたっぷりとアピールしたあと、キリトを挟んで反対側にいるイーディスに視線を向ける。意味ありげなその視線に、イーディスは小さく頷きを返した。

「ねえ、アリス。あたし、ヌーディストビーチっていう所に関しては詳しくないのだけれど……きっと、他にも守るべき作法があったりするのよね。

よかったら、今後のために教えてくれない？」

「わかりました。それでは……キリト、あちらに」

イーディスに調子を合わせつつ、アリスはキリトを誘導してビーチチェアへと座らせる。言われるがままにキリトが腰を下ろせば、さも当然といった顔をしたロニエがキリトの脚の間に滑り込み、ビーチマットの上にぺたりと座る。窮屈にならないようにキリトが脚を開けば、今度はその脚の上にアリスとイーディスが跨がる。

右脚にイーディス。左脚にアリス。彼女らを載せた太股に感じる、熱と湿り気を帯びた柔らかな感触。二の腕に感じるバストの柔らかさ。複数の女を侍らせる興奮と優越感が、下腹部に更なる血を滾らせる。

ビーチチェアの背もたれにキリトを押し倒すようにアリス達が身を寄せてくる一方、ロニエはその顔をキリトの股座に擦り付けていた。

「それでは、イーディス殿。作法――こちらの世界の言葉で『マナー』というそうなのですが、こうしたビーチにおいて最も大事なマナーとは、何だと思われますか？」

「うーん……なんだろ。全然わかんないなあ」

すっとぼけた顔で答えながら、イーディスは指先でキリトの乳首をくりくりと弄くる。反対側からはアリスも同様に。

ほんのりとサディスティックな雰囲気を醸し出す二人の責めに対し、キリトは反撃とばかりに両腕を伸ばし、彼女らの尻たぶを揉み拉く。むっちりとしたヒップに指先が沈み込む度、整合騎士達の口から熱を帯びた吐息が漏れ、キリトの肌に浴びせられていく。

「よいですか、イーディス殿。……それは、殿方のおちんぽが勃起していたら、女性がお世話させていただくことなのです」

「へー……ぶっといおちんぽ、おっきくなってたらお世話してあげないといけないのね……♥」

「はい。もし、雄々しく勃起した立派なおちんぽをそのまま丸出しにしていたら、ビーチ中の女性が種付けしていただきたくてたまらなくなってしまいますから……♥」

ビーチの風紀を守るためにも、『このおちんぽ様は奉仕役がいます』とわかるようにしなければいけません」

「確かに。そんなの見せられたら、みんな我慢できなくなっちゃうものね……♥」

会話の皮を被った、甘く蕩けるような囁き。男を興奮させる吐息と言の葉を、左右からキリトの耳へと注ぎ込む。そうして忍耐強いキリトを弄びながら、アリスとイーディスは視線をキリトの下腹部へと向ける。水着を下から押し上げる太く固い何かへ、水着の布越しにれろれろと舌を這わせるロニエと一瞬だけ目があったが――ロニエは特に気にするでも無くナニカを舐め上げ、頬を擦り付け続けた。

いつも通り先輩第一主義なロニエの様子に苦笑しつつ、アリスはキリトの首筋にそっと口付け、仔犬のように舐め上げる。

「――ねえねえ、アリス。もし、キリトが水着を脱いだ時、おちんちんがとっても立派に勃起してたら……その時、キリトはどうしたらいい

の？」

「簡単です、イーディス殿。おちんぽが勃起する原因になった女達を捕まえて、こう言ってやればよいのです。

『お前達の裸を見たせいで興奮したのだから、責任を取って、俺が満足するまでちんぽに奉仕しろ』と。

……いえ、そもそも命じる必要もないでしょう。あんなに雄々しいおちんぽを目の当たりにして、そのままにしておける女などここには誰一人としていないのですから」

「そっか。確かに、キリトのおちんぽがおっきくなっちゃったのは、元はと言えばあたしたちが原因だものね……♥　その責任は、ちゃーんととってあげなくちゃいけないよね♥」

「その通りです。ですから、キリト……お前は何も案ずることはありません……♥」

「おっきくなったおちんぽ、あたし達に思いっきり見せ付けちゃって……ね♥」

左右の耳に流し込まれる淫らな囁きが、キリトを誘う。

僅かに残った理性を石臼でごりごりと削られているような感覚を抱きながら、キリトはイーディスの尻を撫でていた右手をどうにか離して装備情報ウィンドウを呼び出すと、『装備全解除』ボタンを押した。

「――ひぁっ♥♥」

海パンが光の粒子となってストレージに格納された直後、抑えを失った肉棒がぶるんと飛び出す。その勢いのまま頬を打擲され、ロニエがなんとも嬉しげな悲鳴を上げた。そうして自らの顔を肉棒を受け止めるためのクッションとして差し出し、その役目を果たしたロニエは、ゆっくりと体を起こして肉棒と正対する。反り返った亀頭の先が、ちょうど己の鼻先に来るような高さへと。

「すぅっ……はぁっ……♥♥　先輩の、たくましいおちんぽ……♥　今日もとってもおっきく勃起していただいて、本当にありがとうございます♥♥」

キリト、そしてアリスとイーディスが見守る中、ロニエはお礼の言

葉と共に肉棒から立ち上る香りを胸いっぱいに吸い込む。独特のオスの匂いの中に、犯されたメス達の香りが入り交じるそれは、多数のメスを飼い慣らすオスだけが持つ特別な香気である。

情欲と羞恥を宿した瞳でキリトを真っ直ぐに見上げながら、ロニエは暑さに喘ぐ犬のように大きく口を開けて舌を突き出す。舌の表面と亀頭の間にある距離は1センチにも満たない。キリトの許しがあれば、すぐにでも口淫奉仕を始められる態勢だ。

『キリト先輩♥　携帯型肉便器・ロニエ・アラベル、先輩のぶっといおちんぽ様にご奉仕する準備、整いました♥

早速ですが、水着の下で大変窮屈な思いをされていたであろう先輩のおちんぽ様を、私のお口まんこで労ってもよろしいでしょうか?』

「ああ、よろしく頼むよ。ロニエ」

『はいっ!』

突き出した舌をしまう時間も惜しかったのだろう。合成音声システムを使って許可を得たロニエは、すぐさま顔を前へと進める。そうして、ぐにぐにと弾力ある舌の表面を亀頭の下側――鈴口のある辺りに密着させた。まるで書類に判子を押すかのように、暫しの間そのまま亀頭と舌の表面を密着させたあと、れる、れる、と少しずつ舌を動かし始める。

包皮に守られていない亀頭全体を丁寧に、丁寧に舐め回し、水着をはいていた間にどこかが痛んでいないかを確かめる。この行為には、肉棒の味を舌全体で堪能すると同時に、唾液によるコーティングを施して亀頭に潤いを与えていく目的も含まれていた。

『先輩のおちんぽの先っぽ、とっても硬くて元気いっぱい……♥　それに、布越しじゃないからとっても美味しいです……♥

このまま少しずつ、根元まで咥えていきますので、お射精したくなったらいつでもご自由に吐き捨ててください♥』

亀頭全体をたっぷりと舐め回したあと、ロニエはゆっくりと肉棒を飲み込んでいく。上目遣いでキリトを見つめたまま、少しずつ、少しずつ顔を前へと進めていく。そうして顔を傾け、柔らかい頬の内側を亀頭に触れさせる。硬い肉棒によって内側から押し上げられたほっ

ぺたを、ロニエは愛おしそうに指先でつつく。
　健気なアピールにキリトが更なる興奮を覚えていると、負けじとばかりにアリスとイーディスが身を寄せてくる。
「おや、いつの間にかロニエにおちんぽを取られてしまいました」
「さすが傍付き、抜け目ないなあ……じゃあ、あたし達はこっちで。お先にね、アリス」
　にっ、と笑ったイーディスが徐にキリトの唇を奪う。唇が触れあうだけの甘い口付けが、舌を絡め合う濃密な戯れへと変わるまでさほど時間は必要なかった。
「んんっ……♥　んふっ……♥」
　幾許かの気恥ずかしさを残しつつ絡みつくイーディスの舌。リードしようと積極的に攻めかかってくる彼女の舌に合わせ、口と舌を委ねる。時々、反撃がてら舌の裏側を舐め上げてやれば、イーディスはそれもまた一興とばかりに甘い吐息を漏らす。
　手合わせを通して互いの実力を量る時のように、舌と舌でお互いを確かめ合う。イーディスにペースを握らせ、彼女を味わいながら時々反撃を織り込む。互いの口内に唾液を行き来させ、飲ませ合い、舌を擦り付け合いながら。
　そうしてひとしきり舌を交えた後、どちらからともなくキスを解けば——お預けを喰らっていた最後の一人の、切なげに揺れる青い瞳と目が合った。
「キリト……♥」
　雨に濡れた捨て犬のような顔をするアリスをそっと抱き寄せ、唇を重ねる。甘く吸い付いてくるアリスの唇の間に、するりと舌を滑り込ませながら。
　キスをしている時のアリスは、意外と甘えたがりだ。本人にどこまでその自覚があるかはわからないが——キリトの舌が口の中に入り込んでくれれば、喜んで舌を委ね絡ませてくるのが何よりの証拠だ。彼女の尻肉を掴み、引き寄せ、肌と肌とを触れあわせたまま、たっぷりと堪能する。
「ひぁ……♥♥　ん、んん……♥♥」

イーディスとキリトの唾液が入り混じった液体を、アリスに一方的に流し込む。それを甘んじて受け入れる対価として、アリスはキリトの唇を独り占めし続ける。絡ます舌は、ねっとりと。

キスをし続けるキリトの代わりに、アリスが喉を鳴らして唾液を飲み干す様を見届けるのはイーディスの役目。男の胸板に舌を這わせ、乳首をくりくりと甘噛みしながら責める。肌にいくつものキスマークを残し、ここは私の領域だと主張せんばかりの激しさで。

更にその下では、ロニエがキリトの肉棒にむしゃぶりつきながら、アスナ直伝の口腔奉仕を披露していた。キリトの腰に口づけるように肉棒を根元まで飲み込み、自らが分泌した唾液と、イーディスが上から垂らした唾液をミックスさせ、肉棒の表面に塗りつけるように舐る。肉棒が半分ほど口内に残る程度まで顔を引く際には、裏筋に舌を添え、丁寧に丁寧に舐めしゃぶる。

『キリト……♥　あなたの吐息、とっても熱いです……♥♥』

「ふふっ……♥　キリト、気持ちいいって顔してるわよ♥　隠そうとしてもだーめ♥」

『おちんちん、とっても興奮してます♥♥　いっぱい気持ちよくなってください、先輩……♥』

三者三様、口を用いた責め。あるいは奉仕。ただひたすらオスに気持ちよく射精させるためだけの行為。

口の中で交わりあう唾液の音。肌に吸い付く唇の音。肉棒を舐めしゃぶる舌の音。その音全てにメス達の熱情が篭もった淫らな感触が伴い、キリトの射精欲求を容赦なく掻き立てる。

その兆候に、キリト自身よりもロニエの方が早く気付いたのは、傍付きの為せる業とでもいうべきだろうか。

『あっ♥　先輩のおちんぽ、びくびくしてきました♥♥　このままお射精――』

『ごめんなさい、ロニエ。それは少しだけ待ってもらえますか？』

合成音声で作られたロニエの言葉を、合成音声で作られたアリスの声が止める。数秒ほど逡巡したロニエだったが、キリトから指示が無いことを確認すると、アリスの指示通り顔を上下させるのをやめる。

もちろん肉棒から口を離すような無作法はせず、むしろキリトの脚の間に顔を突っ込み、喉奥までも使って先端から根元までの全てを口に含んだ状態で――だ。

奉仕精神に満ちあふれた傍付きにキリトの肉棒を預けたまま、アリスはキリトの舌を口の中からそっと送り出し、長く続いたディープキスに区切りをつけた。

「――はあっ……♥　ごめんなさい、キリト。もう少しで射精という所で……」

「いや、それはまあ……大丈夫だけど。でも、できればあんまり長く我慢しない方向にしてもらえると……」

「大丈夫です。ただ……ロニエがあまりにもおちんぽを美味しそうにしゃぶりつくすものですから、私もお前のおちんぽにご挨拶させていただきたくなってしまいました。

イーディス殿も、ご一緒にいかがですか？」

「さんせ～いっ♥　ほんのちょっとだけ待っててね―、キリト♥」

待たせる詫び代わりとばかりにキリトの両頬へ左右からキスをしたあと、アリスとイーディスはキリトの太股に乗せていた腰を上げる。自慰行為の様にたっぷりと擦り付けられていた股座からは、ねっとりとした雌の蜜が溢れ出しており、キリトの太股の上にたっぷりとその痕跡を残していた。

「アリス、興奮しすぎー♥　キリトの脚の所、どろっどろじゃない♥」

「そういうイーディス殿も、随分激しく腰を振っておねだりしていたようですが……♥」

発情の証を揶揄し合いながら、二人の整合騎士は揃って四つん這いの姿勢を取る。顔の高さはロニエと同じ。ちょうど、肉棒が目の前にくる辺り。向かって右側にイーディス、左側にアリス。ロニエを左右から挟み込むようにして、整合騎士達の顔が並ぶ。

『さ、お二人とも。キリト先輩のおちんぽ様にご挨拶を。せっかく、お射精を我慢していただいているのですから』

気を利かせたロニエが、ゆっくりと顔を後ろに引いて肉棒の姿を露わにする。ぬらぬらとした唾液をたっぷりと纏った肉棒は、久方ぶり

にロニエの口から外れ、その全てを外の空気に触れさせた。
雄々しく反り返った太い柱。エグい程に張り出したカリ首。数多の雌の膣を蹂躙し、蜜を染みこませた肉棒だけが持つ独特の風格に圧倒され、居並ぶ雌達は官能の吐息を漏らした。
ロニエを中心として肉棒の前に並んだ三人は、吐いた息が亀頭にかかるほどの至近距離に顔を近づけ、たっぷりと匂いを吸い込む。そうして一人ずつ亀頭の先に唇を触れさせ、恋人とするような甘いキスを捧げた。
「はあっ……♥　本当に、お前のおちんぽはいつ見ても逞しくて立派です……♥」
「こんなので犯されたら……そりゃあ、誰だってちんぽ狂いになっちゃうわよね……♥」
「先輩のおちんぽ様……♥　とっても、とっても大好きです……♥♥」
しっかりと挨拶を終えたアリス達は、自らがなすべき事にとりかかる。
ロニエは唇を再び亀頭に押し当て、鈴口とキスを交わし、カリ首全体に舌を這わす。
イーディスは鼻先を肉棒と脚の間に突っ込み、独特の匂いをたっぷりと嗅ぎながら陰嚢をしゃぶりつくす。
アリスは舌の表面を肉棒の側面にべったりと押し当て、肉棒を舌全体で味わうように、あるいは唾液をすり込むように幾度も幾度も往復させる。
先端から根元、陰嚢まで。ありとあらゆる場所を舌が這い回り、口付けが犯す。漏れ出る吐息が皮を撫で、床に垂れるほどたっぷりとまぶされた唾液が肉棒を染めていく。
一度お預けを喰らって落ち着いたキリトの射精欲求は、三人の息の合った連係プレイという名のトリプルフェラによって瞬く間に限界へと押し上げられる。
「ぐうっ……！　みんな、そろそろ……！」
「わかっています、キリト。では……最後は、こちらに」
肉棒が限界ラインを超え、精液を吐き出すまでのわずかなタイムラ

グ。その時間を活用し、三人は肉棒から口を離し、亀頭の前に自らの顔を差し出す。瞼を閉じ、口を大きく開き、顎の下に揃えた両手を添えて。

そして、三人が精液を受け止める準備を整えきったまさにその瞬間。臨界点を迎えたキリトの肉棒は、精液を一気に吐き出した。

「せんぱ――あっ♥　ひああっ♥　せーえき、いっぱい♥♥　あつっ、あついでひゅ、先輩っ♥♥」

真っ先に精液を浴びせかけられたのは、真正面にいたロニエの顔。びゅるびゅると勢いよく噴き出す精液がロニエの顔中を汚し、髪に張り付き、口の中へと飛び込んでいく。精液の余りの勢いに驚きこそすれども、ロニエは決していやがることはなく、むしろ積極的に精液の奔流を浴びる。

もちろん、吐き出された精液がロニエ一人の顔だけで満足するはずも無い。噴き出した大量の白濁液が、ロニエの左右に控えるアリスとイーディスの顔を汚していく。悍ましいほどに熱い雄のエキスが、可憐なる女騎士達の顔を征服（マーキング）する。

「ああっ……♥　キリトの精液が、こんなにも……♥♥」

「あっあっ♥♥　んぶっ、口の中に、んんぐっ♥♥」

餌を求めるひな鳥のように口を開けた三匹の雌の顔面へ、キリトの精液がたっぷりと降り注ぐ。白濁液の奔流によって、顔面をびたり、びたりと叩かれる度、アリス達は興奮と喜びに身を震わせる。

三人の顔面へ、自慰行為の際に使い捨てるティッシュの様に無造作に精液をぶちまけ続けたあと、ようやく射精が一段落した。瞼を閉じた彼女らがそれを理解したのは、顔や髪を叩く精液の感触が途絶えたが故だった。

「まったく……どれだけ射精したのー、キリト♥　顔が重たくてしょうがないじゃない♥♥」

「お前は……いえ、お前のおちんぽは、本当に手加減というモノを知りませんね……♥」

「あはぁっ……♥♥　先輩のせーえきの匂いでいっぱいです……♥♥

たくさんお射精してくださってありがとうございます、先輩♥♥」

精液の感触と匂いに半ばトリップしながら、三人は顔を覆う精液の処理に取りかかる。もちろん、布で拭って捨てるなどという無作法をするはずもない。

瞼を閉じたまま、まずは差し出していた掌に零れた分を舐めとったあと、肌の感触を頼りにして顔にかかった精液をかき集める。一通り集まったら、それを口に運び――舌の上で転がしながら味と匂いを堪能する。にちゃり、にちゃりと粘着質な音を奏でながら唾液と混ざり合い、三人の口内を穢す精液。口内全体に行き渡らせたその痕跡を、今度は舌を使ってかき集め――そして、ゴクリと喉を鳴らして飲み干す。

「「――はあっ……♥」」

重なる、三人分の熱い吐息。

鼻へ抜ける残り香を堪能したあと、三人は互いの顔を舐め合い、手では掬い取りきれなかった残滓を貪欲に回収し始めた。その光景は、まるで目の開く前の仔犬達がじゃれあっているかのように微笑ましく、そしてとても淫靡だ。

最後に、お掃除フェラならぬお掃除ディープキスで互いの口内を舐め取り合う。それぞれが口に納めた分は全て飲み干しているというのに、丹念に丹念に舌を這い回らせ、精子一滴、精虫一匹残さぬほどに舐め取り合いを行う。

精液を出していただいた雌として守るべき礼儀作法を全て完璧にこなした三人が、閉じていた瞼をゆっくりと上げれば――目の前にあるのは、射精したばかりとは思えないほど硬く屹立した肉の柱だった。

「……エグいなあ、ほんと……♥」

射精一回程度では全く満足していない肉棒を前に、イーディスが呆れたような声を漏らす。

「やはりこうなりましたか……。それで、誰から使いますか？　キリト」

肉棒の至近距離に顔を近づけたアリスが、上目遣いでキリトに問いかける。本来ならば非常に悩ましい所なのだが、キリトの答えは既に

決まっていた。
「ロニエ、おいで」
「わ、私ですか!?　そんな、いいのでしょうか……。アリスさまやイーディスさまを差し置いて……」
「ああ。ロニエには我慢させちゃったからな。だったら、最初にロニエを可愛がってやるのが筋ってもんだろ」
　キリトがそう言うと、アリスとイーディスも揃って頷く。
「元々割り込んだのは私達です。変に気を回さずともよいのですよ、ロニエ」
「そうそう。それに……せっかくだし見てみたいな～。ロニエみたいな立派な傍付きが、どうやってキリトのおちんぽにご奉仕するのか♥」
「アリスさま、イーディスさま……わかりました。そういうことでしたら、傍付きのご奉仕交尾、たっぷりと披露させていただきます♥」
　アリスとイーディスの後押しを受け、ロニエは立ち上がる。そうして、ビーチチェアに腰掛けたキリトに正面から抱きつきつつ、両脚を左右に大きく広げてキリトを跨ぐ。
　背中に回ったキリトの両腕がロニエの体を抱きしめ返せば、豊かに育った彼女の胸にキリトの顔が埋まる。交尾の準備を整えた所で、ロニエは後ろを振り返ってアリス達の方へ視線を向けた。
「そっ、それでは！　ただいまより、キリト先輩専用おちんぽコキ穴による、ご奉仕交尾を披露させていただきます♥♥」
　キリト先輩の優先度最高おちんぽ様に、傍付きおまんこを捧げさせていただく様をどうぞご笑覧くださいませ♥♥」
　餌を待ちきれない犬のように、はっはっと熱い呼吸を繰り返しながら、ロニエは自らをキリトの為の肉穴へと貶めていく。そうして、アリスとイーディス――敬愛する整合騎士達の視線が突き刺さる中、ロニエはゆっくりと尻を突き上げて位置を調整し、屹立する肉棒の先に雌穴を差し出す。
　そうしてほんの少し、ほんの少しだけ腰を落とせば、充血した亀頭が雌穴の入り口に触れる。お口奉仕でたっぷりと興奮させられてい

たロニエの雌穴は、発情の証をたっぷりと溢れさせては亀頭へと垂れ流していく。いつでも挿入できるように準備し終えた所で、ロニエは視線をキリトの方へと向け直した。

「先輩♥先輩っ♥　ロニエ・アラベル、おちんぽご奉仕の準備、全て整いました♥　よろしければ、いつものように合図をいただけますでしょうか♥」

　ロニエの胸に顔を埋めたまま、キリトは頷く。そうして、彼女の背中に回していた両手を尻の方向へと滑らせていく。掌がロニエの柔らかい尻肉をしっかりと掴んだ事を確認したあと、キリトは両手を真上に持ち上げ――真下にあるロニエの尻へ、勢いよく叩きつけた。

「――はひゅぃいいいっっ!!　あっ……ありがとう、ございます……♥♥

　それでは……おちんぽ様へのおまんこ奉仕、始めさせていただきますね……♥♥」

　ばちぃんっ、という激しい音と共に、ロニエの尻に刻み込まれる赤い痕。それ即ち、肉棒に奉仕していいという合図。

　左右の尻たぶの上に一つずつ、大きな紅葉を思わせる手型を描かれたロニエは、その痛みと快感にひくひくと身悶えしながら感謝の意を示すと、腰をゆっくりと下ろし始めた。

「はぁんっ♥　あっ、やああっ……♥　先輩の、おっきいの……はいってきてます……♥♥　あっ、ひぁんんっ♥♥」

　屹立したキリトの肉棒は、ロニエの奥から溢れ出す雌の蜜を浴びながら、ゆっくりと、ゆっくりと、ロニエの膣内へ入り込んでいく。すっかりセックスとキリトの逸物のサイズに慣らされきったロニエの秘所は、形ばかりの抵抗すら見せることはない。膣肉を押し広げる硬く太い肉棒を、全方位からみちみちと包み込むようにして出迎え、女としての全てを差し出していく。

「苦しくないか、ロニエ」

「大丈夫です、先輩。むしろ、あっううっ♥♥　とっても気持ちよすぎて……♥」

「よし。なら、そろそろ大丈夫そうだな」

何かを思いついたキリトは、ロニエの尻肉に乗せていた己の両手に、僅かだが力を込めた。力の向く先は、下。ようやく肉棒の半分ほどを膣内に収めたロニエの腰が向かう方向だ。

「せっ、先輩……？」

「このまま一気に奥まで挿れるぞ、ロニエ」

「へっ……？　だっ、ダメです♥　そんなの絶対ダメです♥　先輩のおちんぽ♥　おっきくてぶっといおちんぽ様♥　今、いま奥まで一気に挿れられっ――――――たり〝や〟ぁぁあああぁぁあああっっ♥♥♥」

制止する言葉とは裏腹に、期待と興奮が溢れ出す雌の笑みを浮かべていた事に気付いていなかったのであろう後輩の尻肉を掴み、キリトは彼女の膣奥深くまでを一気に貫いた。

かき分けられた愛液が結合部から溢れ出すと同時に、ロニエの体はピンと張った弓のように仰け反り、びくん、びくんと痙攣した後に脱力する。子宮を殴りつけられるような暴力的なまでの快感に、ロニエの視界の中でちかちかと光が瞬く。

「お〝っ♥　あ〝ぁっ♥　はひあっ、はぁっ……♥♥」

全身をヒクつかせ、ロニエは荒い呼吸を繰り返す。キリトの手と肉棒が支えていなければ、その体はビーチチェアの上からすぐにでも崩れ落ちていただろう。

「どうしたのです、ロニエ？　傍付きとして、キリトのちんぽコキ穴として、キリトが満足するまで奉仕するのがお前の役目なのでしょう？」

「そーだよー、ロニエ。いくらキリトのおちんぽが立派だからって、一撃でへばってないで……頑張れ頑張れー♥」

脇で二人の交尾を見守っていたアリスとイーディスの声援を背に受け、ロニエは傍付きとしての自覚を取り戻す。己の主たるキリトが満足していないというのに、自分だけが一方的に達してどうするのかと。

キリトの体にぎゅっと抱きつき、ロニエはどうにか呼吸を整える。

「はあっ……♥　申し訳ありません、先輩……♥　わっ、私一人……

先輩のおちんぽ様に、おまんこをどちゅってされて、気持ちよくなっちゃいました……♥」

「謝ることなんて何も無いぞ、ロニエ。まだ動けそうか？」

「はい。頑張って……みます♥♥」

快楽に震える膝と足にどうにか力を込め、ロニエはゆっくりと尻を持ち上げる。

「あっ、うっ♥　ひぅううっ♥♥　あぁっ♥　んんぅうっ♥♥」

ずろり、ずろりと。ロニエの愛液をまとわりつかせた肉棒が、少しずつその姿を露わにする。引き抜きの速度がゆったりとしている分、膣襞をかき分けるカリ首の感触がより一層はっきりと伝わり、ロニエの快楽中枢を刺激していく。

そのカリ首が、ロニエの蜜壺の入り口手前に引っ掛かるまで腰を上げた所で――腰を落とす。

「――ひゅっ――ぁあああぁあああっ♥♥」

硬い肉棒によって再び膣内を満たされたロニエが歓喜の悲鳴を上げる。普段のセックスに比べると非常にゆっくりとした上下運動だが、別段キリトを焦らしているわけでは無い。単に気持ちよすぎてこれ以上早く腰を振れない、振ろうモノならロニエ自身が壊れてしまうというだけだ。

それでも、ロニエは己の役目を果たすべく、一心不乱に腰を上下させる。

「ぁあっ♥お〝っ♥はぁっ♥　くひゅ――んうううっ♥♥　奥っ、奥でっ♥ぐりゅっぐりゅってされっ♥ひあぁあっ♥♥」

肉棒に膣壁を磨られる感触をたっぷりと味わいながら腰を上げ、子宮口まで征服される快感に酔い痴れながら腰を下ろす。

ロニエが腰を振る度に結合部から響く、ばっちゅ、ばっちゅ、という重たい音。どろどろに発情した雌穴を、太く逞しい雄柱に貫かれる音。ロニエにその音を楽しむだけの余裕は無いが、鼓膜に届いたその響きは彼女の興奮を無意識に高めていく。

「せんぱいっ♥せんっ♥ぱぃっ♥♥　あっ♥　あぁあああああっ♥」

「そうそう、その調子。前よりずっと上手になってるぞ、ロニエ」

「本当でひゅか♥　ありが――ぁはぁぁあっ♥♥」

まだまだ拙いところはあれど、精一杯に腰を振って奉仕するロニエを褒めつつ、キリトは彼女の尻を掴んでいた片手を移動させる。柔らかな尻肉から、しなる背を滑らせて首筋へ。ロニエをそっと抱き寄せ、腰振りを安定させられるように上体を支える。

同時に、尻の上に残したもう片方の手に少しだけ力を込め、ペースメイクの手助けをする。

「あっ♥ぁぁあっ♥♥　お〝っ〟♥　はひぃいっ♥　んっんっんうううっ♥♥　お〝っ♥お〝っ〟♥はぉ〝ぅうっ♥♥」

全体の安定感が増したことで少しだけ余裕ができたのか、ロニエの腰振りの速度が増す。結合部から溢れた愛液の滴は、飛沫となって飛び散りビーチマットの上にぱたぱたと堕ちていく。

キリトが抱き寄せたことで、互いの口は互いの耳元へと近づいていた。故にロニエの上げる甘く切ない鳴き声はキリトの耳によりはっきりと聞こえ、キリトが零す熱い吐息はロニエの耳にダイレクトに吹き付ける。

「せんぱい♥ごめっ♥ごめんにゃ、しゃひいっ♥♥　私、わらひ、またっイっちゃいます♥♥　ごほーし♥してる♥のにっ♥　おまんこ、ひとりで勝手にぃっ♥♥」

「二人じゃないぞ、ロニエ。ロニエのナカが気持ちよすぎて、実は俺もそろそろ……このまま一緒にイくぞ、ロニエ」

「はいっ♥はいっ♥　先輩♥♥　せんぱいと一緒にイ〝ぎましゅうっ♥♥」

ぱんっぱんっという肉と肉のぶつかる音が、切れ目無く、そして激しく奏でられる。ガニマタに開いた脚を支えにロニエが激しく腰を振れば、丸い両尻の中に出入りする肉棒の姿が見え隠れする。

互いの顔が見えないほど近くまで上半身を密着させ、下半身は一本の柱を軸にして別離と再会を繰り返す。甘い涙を流す蜜壺、きゅっと絞まる尻穴。全てを曝け出しながらロニエは腰を振り、キリトに奉仕しながら自身の快楽を貪る。

そして――その時は訪れる。

「せんぱいっ♥♥　せんぱいぃっ♥♥♥」
「ロニエっ……！」
　互いの限界を、互いが同時に悟る。
　刹那、キリトは今まで止めていた腰を動かし、ロニエの膣内を思い切り突き上げる。同時に、両手に力を込めてロニエの体をがっしりと抑え込み――一切の逃げ場を失ったロニエの子宮めがけ、精液を解き放った。
「ぴひゃ――あ゛っ♥♥あぁああ゛っ♥ぁあああっああぁああ゛ああ゛あ～～～～～～♥♥♥
イ゛っ♥いぐ♥イっ――きゅふぅうぅうううぅううっっっ♥♥♥♥　お゛っぉおおっ♥♥ぁああ゛ぁ゛ああ～～～♥♥」
　Gスポットを強烈に殴りつけられるような快感が、ロニエのマゾヒズム嗜好を呼び覚まし、狂わす。愛液をぷしゃぷしゃと噴き出しながら、繰り返す絶頂に痙攣する膣肉が肉棒を締め付け、精液を止めどなく吐き出させ続けていく。
　ロニエの蜜壺によって導かれたどろりと重たい精液は、子宮口から女の一番深い所へと飛びこみ、内部を雄のモノにせんと容赦なく蹂躙していく。
「お゛っひぃ♥♥　あぁあっ♥あああ～～～ぁぁあっ♥♥　しぇんぱいっ♥♥しぇんぱいちんぽぉでイきゅう♥いぐ♥ぁあっ♥あああああぁああっっ♥♥」
　どくっ、どくっと流し込まれる精液によって子宮内壁を叩かれる度、ロニエは全身を痙攣させながら受精アクメに達する。抑え込まれた体にも、肉棒を突き込まれた膣内にも一切逃げ場は無い。無様な程に舌を突き出し、先輩の耳元に喘ぎ声を漏らす。
　自らは雌であり、傍付き。キリトは雄であり、主人。ならばキリトに全てを捧げるのは当然のことであり、セックスの快感まで与えていただけるのは望外の喜びである――精液が吐き出される度、ロニエの脳内に歪んだ価値観が刻まれ、更に強化されていく。
　そうしてロニエの意識が幸せの中に浸りきり、呂律すら回りきらなくなった頃。ようやくキリトの射精も終わりを迎えた。

「ふうっ……。よく頑張ったな、ロニエ」
「はへぇっ……♥♥」
キリトの言うことが伝わっているのかいないのか、それすらも判別できないほどにとろけたロニエ。そんなロニエの腰に手を添えたキリトは、脱力した彼女の体をそっと持ち上げるようにして、肉棒を引き抜いた。
ロニエの愛液で濡れた肉棒。ロニエが噴き出した愛液で濡れた下腹部。少しの時間を置いて、そこへロニエの膣内から逆流した白濁液がどろりと流れ出す。生暖かく、重く、粘ついたその液体は、ロニエの子宮を満たし、その役目を終えて溢れ出していく。
「お疲れ様、ロニエ」
伸びきった舌を押し込むようにしながら、キリトはロニエとキスを交わす。事後の喜びを分かち合う甘い口付け、その感触だけで、ロニエは声も出せぬまま軽く達した。
絶頂の余韻とセックスによる体力の消耗との合わせ技で動けなくなったロニエの体を持ち上げたキリトは、ビーチチェアの背もたれを倒すと、そこにロニエを寝かせて休ませた。
自身の体力にもまだまだ余裕がある。さてどうしたものかと、わざとらしく視線を巡らせれば、ビーチマットの上に座って抱き合い、濃密な口付けに溺れる整合騎士二人の姿が目に入る。
「ん……♥♥」
「はふ……♥♥」
イーディスとアリス。先程までのキリトとロニエのように、互いの体を抱きしめあいながら、二人はお互いの唇を激しく貪っていた。
それは、唇の端から甘い喘ぎ声と唾液が零れる激しいディープキス。その濃密さは、ゆっくりと瞼を上げた二人がキリトの方に視線を向けながら唇を離しても、唾液の橋が幾筋も置き去りにされてしまうほどだ。
深奥の地にひっそりと咲く、繊細にして可憐な二輪草。粗野なる男の手はおろか、視線ですら触れてはならぬような神聖さがそこには確かにあるのだ——が。

「さ、キリト。こちらへ。まだまだ満足できていないのでしょう？」
「まずは綺麗にしてあげる。ちゃーんとスッキリするのは、その後で……ね♥」
二人の視線が手招く。妖艶な声が誘う。二匹の雌達が、雄の本能を導く。
キスを終えた二人が作り出した、唇と唇の隙間。太く、硬く、雄々しい何かを挟み、それに付着した何かを舐めとって、擦り付けて、舌も唇も這わせて綺麗に磨き上げるにはちょうど良い隙間へと。
「……そうだな」
キリトは当然のような顔をして、アリスとイーディスが作った隙間に肉棒を置く。
アリスとイーディスも当然のような顔をして、キリトが置いた肉棒――未だ硬く張り詰め、ロニエの愛液とキリト自身の精液に塗れた逸物を丁寧に舐め回し始めた。
涼しい海風が流れる日陰の下。仁王立ちで見下ろしながら、キリトは二人の頭を撫でる。最早反射的な行為になりつつあるが、女性陣にはこれはこれで立派な褒賞らしい。
そんなキリトの耳に聞こえるのは、アリスとイーディスの舌と唇が、肉棒を左右から挟み込んではぺろぺろと舐めしゃぶる音――そして、こっそりと互いの蜜壺に手を伸ばした二人が、この後の行為に備えてお互いの秘所を弄くり合う、ひどく粘ついた発情の水音だった。

１４―４．（アリス・イーディス）

青い空。白い雲。水平線の向こうまで続く、広く穏やかな海。

そんなリゾートの光景を一望する休憩所――敷かれた大型のビーチマットと、天井代わりに張られたタープの間の空間を、海風が静かに通り抜けていく。

そんな穏やかな日陰の下では、二人の整合騎士による『手入れ』がちょうど終わりを迎えようとしていた。

「――ん、ぷふぁっ……♥」

「もう、こんなとこまで残ってる……♥」

唾液のコーティングを受けて輝く肉棒を前にして、アリス、そしてイーディスが官能の吐息を漏らす。キリトの手に頭を撫でられながら二人が丹念に舐めとっていたのは、肉棒に付着したロニエとの性交の残滓。ビーチチェアの上でぐったりと倒れ伏しているロニエの代わりに、二人は各々の舌と唇を使い、次の性交の為に肉棒を清めていた。

戦に赴く前の騎士が、武具を丁寧に手入れするように。アリスとイーディスは丹念な舌使いで、キリトの肉棒を隅から隅まで舐め清めていく。

睦み合う女性二人の間に肉棒を突っ込み、左右から奉仕させている光景は非常にエロティックであり、そしてどこか、不可侵の聖域を土足で踏み荒らしているかのような背徳感も伴っていた。

「んっ……ふふっ……♥」

見下ろすキリトの視線と、見上げるアリスの視線が絡まりあう。碧い瞳の女騎士は、カリ首の裏側に舌先を這わせ、隠れた残滓を丁寧にこそげ取ると、そのまま口内に納めては飲み込んでいく。

肉棒を挟んだ反対側では、イーディスが肉棒の軸に幾度も幾度も繰り返し口付け、キスの雨を降らせていく。それと同時にキリトの陰嚢を指で包み込み、ぐにぐにと優しく弄びながらマッサージを施す。

気の向くまま、舌と唇の赴くまま、二人は肉棒に奉仕し続ける。それにようやく一区切りが付く頃には、付着していた精液も愛液も全

て、一滴残らず二人の胃の腑の中へと消え去っていた。
「さあ、綺麗になりましたよ。キリト」
「キリトのちんぽ、ほんとおっきすぎよね……♥　掃除するの、すっごく大変なんだから」
「アリス、イーディス。キレイにしてくれてありがとう」
「「どういたしまして♥」」
　隅から隅まで、先から根元まで。性交の痕跡一つ残っていない肉棒に、二人はふっと息を吹きかけ、更には名残惜しげに亀頭とキスを交わしてようやく掃除を終える。
　尽力してくれたアリス達の頭をもう一度撫でたあと、キリトはアリスとイーディスの唇の間から肉棒を引き抜く。
　間を遮るモノがいなくなった途端、二人の整合騎士は再び唇を重ね、情熱的に舌を絡め合い始めた。にちゃにちゃと唾液の音を響かせ、互いの口内を貪るアリスとイーディス。そうして、しばしの間唇を重ねたあと――イーディスが、アリスを静かに押し倒した。
「ふふっ……可愛いなあ、アリス♥　このまま食べちゃいたいくらい♥」
「そ、そうですか……。面と向かって言われると、さすがに恥ずかしいです……♥」
　顔を真っ赤にして恥ずかしがるアリスの上に覆い被さりながら、イーディスは彼女の頬に、唇に、鼻先に、軽やかなキスを重ねる。同時に腰をぐりぐりと動かし、上下に並んだ雌華を淫靡に擦り合わせる。つるりとした二人の股座がこすれあい、陰核がぐにぐにとぶつかりあう。その刺激によって溢れ出した雌の蜜が混ざり合い、ねっとりとした糸を引く。
　あまりに淫らな光景に、思わずキリトは息を呑む。その音に気付いてか、あるいは二人の背後に回ったキリトの気配に気付いてか、イーディスは腰を上げてアリスとの間に隙間を作る。そのまま横顔だけをキリトへと向けながら、唇をアリスの耳元に寄せた。
「ほら見て、アリス……♥　キリトのおちんぽ、あんなに立派に勃起してる……♥　目もぎらっぎらで、すっかり獰猛なオスになっちゃって

る♥」

「ふふっ♥　ええ、確かにそのようです。きっと、イーディス殿の大人の色香が余りに魅惑的だからでしょうね♥」

「そうかなー？　あたしは、アリスが可愛すぎるせいだと思うなあ……♥」

挑発的な声と眼差しが、キリトの性的欲求を強く昂ぶらせる。

アリスとイーディスの股座が作り出した淫靡な隙間には、二人が股と股をすり合わせて染み出させた雌蜜がたっぷりと付着しており、雄の肉棒を言外に誘う。二人の背後に陣取ったキリトが、その隙間に肉棒を差し込んだのを合図に、イーディスはゆっくりと腰を落とした。

「んっ……♥　あはっ……キリトのちんぽ、かったぁい……♥」

柔らかな雌華二輪が、硬い肉棒を上下から挟み込む。お掃除フェラチオによって丹念に舐め清められた肉棒に、新たな愛液が塗り込まれていく。

「あふっ……♥　こんなに興奮しちゃって、キリトはどっちから食べたいのかな～？」

「どっちも魅力的すぎて……迷うんだよなぁ……」

いずれどちらも喰う事には変わりない。いずれどちらも喰われる事には変わりない。それを分かっていながら、男は焦らし、女達は焦らされる快楽を味わう。

イーディスの丸く柔らかい美尻に両手を置いたキリトは、下方にほんの少しだけ力を込めて二人を抑え込むと、ゆっくりと腰を前後させた。興奮する秘所に挟まれた肉棒は、実にゆったりとした速度でアリスとイーディスの間を行き来し、その感触と存在感を以て更なる興奮を与えていく。

「そういうやり方は、んんっ♥　いっ♥いじわるですよ、キリト♥」

「ひあっ♥　んううっ♥　だめ、変な声、でちゃうっ……♥」

より一層激しく雄の興奮を誘う、二人の甘く熱い鳴き声。二人の間に肉棒を挟み込んだまま、キリトは楽器を奏でる演奏家のように二人を鳴かせ、その音を楽しむ。時折、上体ごと覆い被さって二人の唇をまとめて奪い、鳴き声を封じながら舌を絡ませ合う。

蜜を溢れさせながら肉棒を挟み込む二人の秘所の感触は言うまでも無く極上であり、このままここで果ててしまってもおかしくない。アリスも、イーディスも、それに関しては同様だろう。

その甘美な選択肢をどうにか振り切り、キリトは二人の隙間から肉棒を引き抜くと、イーディスの腰に腕を回して彼女の体を軽く引き起こし、両膝をマットの上につかせるような体勢で尻を突き出させた。それはまるで、四足歩行する獣たるイーディスがアリスを犯そうとしているかのようだったが——実際、これから犯されるのはイーディスの方だった。

「きて、キリト……♥　あたしの事、キリトのぶっといちんぽでいっぱい鳴かせて……♥」

アリスのすぐ隣に寄せられたイーディスの横顔が、発情を隠そうともしない淫らな笑みを覗かせる。それを合図に、イーディスの、そしてアリスの両手がイーディスの尻へと伸び、尻肉を左右に引いて思い切り開かせる。

もとより隠す物など無かった股座は、四本の手によって尻肉を割り開かれた事で全てを露わにする。アリスの肌に愛液が滴り落ちる程に期待に溢れた秘所の姿はもちろん、その上にある肛門も皺の数すら数えられる程に、はっきりと。二匹の雌、四本の手によって作り出されるその光景は、まさに極上の据え膳だった。

「行くぞ、イーディス」

「……♥♥」

イーディスが静かに頷いたのを合図に、キリトは肉棒の先端をイーディスの秘所へと宛がう。それと同時に、アリスの両脚がイーディスの膝裏をそっと挟み、彼女の体をロックする。

拘束されたイーディスの横顔に浮かぶ、期待と挑発を入り交じらせた大人の笑み。その微笑みを見つめながら、キリトは己の腰をぐいと前に押し出した。

「——あぁああっ♥♥　あっ、くうぅうっ♥♥」

狭い女陰を押し広げながら、太い男根が突き進んでいく。みちりみちりとこじ開けられた雌穴の縁からは押し出された愛液が溢れ出し、

その刺激が尻穴をきゅっと絞まらせる。そうして肉棒が全て押し込まれてしまえば、イーディスに最早為す術は無かった。

「くぁっ、はあっ……♥　はひ、ひいっ……♥♥」

「落ち着けって、イーディス。深呼吸深呼吸」

「そっ、そんなことぉ……っ♥♥　いったってえ……♥♥　おっ♥おなかの、なか、いっぱいなんだもん……♥♥」

膣道を占拠され、子宮を押し上げられる快楽に、イーディスの口から抑えきれない喘ぎ声が漏れる。体の内側から襲い来る圧迫感が呼吸の自由を阻害するが、決して苦しいものではない。むしろ女としての充足感に満たされ、もっとどっぷりと浸っていたくなるほどだ。

一方、二人に組み敷かれる格好になったアリスは、キリトの肉棒がイーディスの中にしっかりと納まったのを感じ取ると、イーディスの尻を掴んでいた両手をそっと離す。そうして自由になった手で、イーディスの頭を抱く。背中を抱く。その動きに呼応して、イーディスもまたアリスを抱き返す。

同じ整合騎士に横顔だけを向けさせたまま、キリトを見上げるその顔は、さながら獲物を狩ってきた猫のように挑発的で、自慢気であり、そしてゾクゾクする程に蠱惑的だ。

「キリト……イーディス殿の吐息、すごく熱いですよ……♥　よほど、お前のちんぽを気に入ってしまったようですね♥」

サファイアカラーの瞳に真っ直ぐ見つめられながらそう煽られては、たまったものではない。昂ぶる衝動のままイーディスの腰を掴んで固定すると、キリトは己の腰を前後させてイーディスの秘所を蹂躙しはじめた。

イーディスにとって、本日最初の交尾。キリトは焦ることなく、じっくり、ゆっくりと肉棒を前後させ、彼女の膣内に己の形を思い出させていく。

「――ぁあっぁあっ♥　あっ♥　あ〝っ〝♥♥　はうっ♥ふうぅうっ♥♥　おっきひ、おっぎいのぉ♥♥」

亀頭が蜜壺から抜けるぎりぎりまで腰を引けば、張り出したカリ首が膣壁全体を容赦なく擦り上げ、イーディスの愛液をたっぷりと掻き

出す。しかし、膣内には掻き出された以上に分泌された雌汁が溢れ、次の瞬間に突き込まれる肉棒をしっかりと受け止める。

よく鍛えられているが故に、みちみちとよく締まる膣内。強いて言うなら、その感触はアリスのそれとよく似ていた。肉棒を排除せんばかりに激しく挑みかかってくるように見せかけて、実際は征服される喜びと快楽を求めて肉棒を包み込むように奉仕するあたりが、特に。

「おぉっ♥おぉおおっ♥♥　あひ♥　だめ、だめえっ♥♥　アリスに、聞かれぇ、ちゃうぅぅっ♥♥　こえ、でてるの♥聞かれちゃうぅぅっ♥♥」

「聞かせてやれよ、イーディス。アリスもその方がきっと喜ぶ……ぞっ」

「そっ♥そんにゃあっ♥♥　いっ――ひやあぁぁぁあああっ♥♥」

ずんっ、っと一際深く突き込んでやれば、イーディスの体は小さく跳ね、そして簡単に絶頂へと導かれる。

いつもは凛として、それでいてどこか大人の余裕を漂わせているイーディスだが、キリトに犯されている今の姿に普段の面影は無い。野太い肉棒が前後する度に喘ぎ声を響かせ、尻を揉み拉かれれば喜びに噎ぶ。覆い被さったキリトに無理矢理唇を奪われれば自ら舌を絡め、キリトが蹂躙しやすいように無意識に腰の位置を調整する。

堕ちた雌としての振る舞いをすっかり身につけた彼女の姿を、キリトとはまた違った位置で見つめながら、アリスはただ静かに微笑む。

「そう。その調子ですよ、イーディス殿。私に聞かせてください、あなたの鳴き声を、もっと……♥」

「んぉっ♥　くひぃっ♥　やっ、やだっ♥やだぁあっ♥　そんなの♥きかない、でえっ♥♥」

「ダメです。キリトのおちんぽを独り占めしているというのに、こんなに可愛らしい声まで我慢しようだなんて……許せません。

キリト、私の代わりにイーディス殿へお仕置きをお願いできますか？」

アリスが笑う。彼女にしては珍しい、悪い笑みで。

「整合騎士様の仰せのままに」

アリス以上に悪い笑みを浮かべたキリトは、イーディスの雌穴深くにまで肉棒を突き込む。それだけで良い鳴き声を上げるイーディスの尻を掴み、じっくりと揉みほぐす。

そうしてたっぷりと予告した後、右手を開き、思い切り振りかぶり――叩きつける。

「――くひいいいいっ♥♥」

更に、左手も同様に振り上げ――もう一発。

「は――ひいいうううううっ♥♥」

子宮を揺らし、膣内の肉棒にすら振動が伝わるほどに強烈な二連スパンキング。ぷりんとしたイーディスの尻に左右から刻まれる真っ赤な手型。手加減の無い衝撃、アリスの前で辱められる羞恥、そして何より尻を叩かれることに喜びを感じてしまった驚きに包まれながら、イーディスは身を震わせながら達した。

ぷしゃり、ぷしゃりと噴き出す潮がアリスの下半身を汚し、痙攣しながらみちみちと締め付ける膣肉がキリトの肉棒を包み込む。スパンキングの手前で腰を止めていなければ、キリトも一緒に精を吐き出してしまっていた事だろう。

「おっおおおっ♥お〝っ♥♥　あっ、あ〝～っ♥あ〝ぁあ〝～～～～♥♥

あっ♥アリスぅっ♥　あ〝っ♥はああっぁあ〝あっ♥　きりっ、キリトの♥ちんぽぉっ♥♥　おっ、お〝っぎぐで♥きもちぃひぃのぉおおっ♥♥」

「ええ、ええ♥　わかりますよ、イーディス殿。キリトの、名工の造る大剣の様に立派で堂々としたおちんぽ……♥　そんな凶悪なもので犯されるのが、どれだけ気持ちよいことなのか……♥♥」

アリスの言葉がイーディスを嬲り、アリスの視線がキリトを昂ぶらせる。

イーディスの吐息がアリスを撫で、イーディスの鳴き声がキリトを悦ばせる。

その二人をまとめて組み敷く贅沢さを味わいながら、キリトはようやく絶頂から帰ってきたばかりのイーディスの腰を掴み、蜜壺の蹂躙

を再開する。
「まっ、まっへ――ぇぇえぇぇ〜えっ♥♥　あ〜っ♥あぁっ♥　おく、奥ぅ〜っ♥　とんとんっ♥ぞりぞりっ♥するのお♥　だめ、だめ〜ええええぇっ♥♥
　いま〜っ♥　イッてるぅ♥　イ〜ってるんらかりゃあぁあああっ♥♥」
「ダメって言うわりには、イーディスの中はすごいことになってるけどな……わかってないだろ？」
　今までのスローピストンから抽送速度を数段上げたキリトは、緩急をつけずに一定のテンポを保ちながらイーディスを休み無く責め立てる。
　イーディスは勘も良く、反応速度にも優れている。一定の間隔で前後する肉棒の動きもすぐさま把握してしまう程に。そうするとどうなるか。
　キリトが腰を後ろに引き、カリ高の肉棒によって膣壁をぞりぞりと擦られる快感に襲われる間、イーディスの無意識は次に来る快楽――極太の肉棒によって膣内を埋められる瞬間がやってくる事を理解し、期待してしまう。
　キリトが腰を前に出し、雄々しい逸物によって膣肉を力尽くでこじ開けられる快感に満たされる間、イーディスの無意識は次に来る快楽――張り出したカリ首で膣壁を擦られる瞬間がやってくる事を理解し、期待してしまう。
　そして、イーディスを期待通りに嬲るその快楽は、いつだってイーディスの期待以上の威力を持っていた。
「お〜おっ♥ひいいいっ♥　ぢんぽ、きりとのちんぽおっ♥　あぁあっ♥あっ♥っくぁっ♥あぁあああ〜〜っ♥♥
　やだっ♥　やだぁ♥　またいぐ、またイグのやらぁぁあああっ♥♥
ありひゅ、たしゅ、たしゅけ――あぁあああぁあああああっ♥♥」
「ふふっ。そう言いながらまたイッてしまっているではありませんか。無駄な我慢は体に毒ですよ、イーディス殿」
　度重なる絶頂に震えるイーディスの体を抱き留め、キリトが犯しや

すいように差し出したまま、アリスは妖艶に笑う。声を出さずに動いたその口元が『お・し・お・き』という形を作ったのを見て取ったキリトは、右手を再び振り上げ、達している最中のイーディスの尻に強烈な平手打ちを見舞った。

「――――っぁああ〝ぁあああ～～～～っっ♥♥」

ばちぃいいんっ、という小気味よい音の中に、イーディスの声にならない声が混じる。がくがくと体を震わせながら、噴き出す愛液の音が混じる。

キリトに意図が伝わった事にか、あるいは友人を絶頂に導けた事に満足げな笑みを浮かべながら、アリスはそっと頷く。彼女に頷きを返したあと、キリトは再びイーディスの腰をしっかりと掴み、抽送の速度を更に上げた。

「お〝っ♥おお〝っ♥っおおおお〝おおおっ♥♥　はやっ♥はやいの〝、だめぇっ♥♥　とんじゃう、とんじゃうかりゃあぁああっ♥♥」

「……悪い、イーディス。気持ちよすぎてそろそろ無理だ……！　このまま出すからなっ！」

「あっ♥ひゃうっ♥ぁあああああっ♥♥」

イーディスの下品な鳴き声を聞き、きゅうきゅうといじましく締め付けるイーディスの秘所を思うままに堪能しながら、キリトは激しく腰を振って肉棒を前後させる。誰が見てもわかる射精の兆候に、アリスは微笑み、イーディスはただ愛液を撒き散らしながら鳴き悶える。

そして、陰嚢から昇り来る本能的な衝動がキリトを襲う。理性の限界点を超えたその衝動に突き動かされるまま、キリトはイーディスの尻の形が歪むほど深々と肉棒を突き込み、彼女の子宮を肉棒の先でしっかりと抑え込むと――溜め込まれた精液を一気に解き放った。

「――あっ――あぁあ〝ああ〝あぁあ〝ぁあああ〝ああっ♥♥♥イっぐ♥いきゅ♥イっ――あっあああっぁあああぁああ～～～～♥♥♥

おぐっ♥奥っ♥おっおお〝おおおっ♥♥　おなかの、なかっ、やけちゃ――ぁあっあぁ〝あああ〝あっあああぁああっ♥♥♥」

絶頂に絶頂を重ねるイーディスの膣肉に絞り上げられた大量の精

液が、勢いよくイーディスの子宮に飛び込んでいく。射精の為に一際大きさを増した肉棒がイーディスの膣内を更に拡張したことで、膨らんだ輸精管は何の障害もないまま、陰嚢から吐き出された新鮮にして濃厚な精液を、どくどく、どくどくと送り込み続ける。

「あ〝っ♥あ〝ぁ――ぁあぁぁあっ♥♥」

可憐にして怜悧なる十番目の整合騎士の姿はどこへやら。雄に征服される喜びに屈し、雄に屈服する悦びに溺れながら、イーディスは大量の潮を噴き出すと共に、びくびくと全身を痙攣させる。

もちろん、その間もキリトの肉棒はその太さと固さと大きさを以てイーディスの膣内を悠々と制圧し、精液をたっぷりと流し込み続けていた。

「あっ――あぁぁあっ♥♥　ひっ――いいいいっ♥♥　あっあああ――おっ♥おかひく、なりゅ♥♥　やら、やらぁっ♥♥」

「イーディス殿、とても気持ちよさそう……♥　よかったですね、キリトに交尾してもらえて♥」

「あっ♥ありしゅ♥♥　だめ、やだ、またいく♥♥　いっちゃ、い――ひいいぃうっっ♥♥」

「ふふっ。キリトの逞しいおちんぽと濃厚な精液を相手にしているのですから、達してしまうのは恥ずかしいことではありませんよ。イーディス殿」

騎士としては先輩であり、雌としては後輩であるイーディスを抱き留めながら、アリスは優しく囁く。両手をそっとイーディスの体に回すのは、彼女を支えるためでもあり、同時にキリトの射精中にうっかり肉棒が膣内から外れてしまうことを防ぐためでもあった。いや、どちらかといえば主目的は後者の方だろう。

肉棒を入れっぱなしにしたまま容赦の無い射精を続けるキリトの顔を見つめ、イーディスの甘い鳴き声を聞きながら、アリスは自らの番が訪れる予感にそっと胸を踊らせていた。

「――んっ……」

微睡みにも似た虚脱感と、下腹部に残る重たく心地よい温かさ。

前後不覚に陥っていた私――ロニエ・アラベルがようやく意識を取り戻した時、真っ先に視界に飛び込んできたのは休憩所を形作る大きな日陰布（ターブ）。

私が視線を少し横に向けたのと、イーディスさまへの種付けお射精を終えたキリト先輩が、マーキング済みの雌奴隷まんこからおちんぽ様を引き抜いたのは、ほとんど同時の出来事でした。

「ふぅっ……」

「はひゅっ……♥　あっ――はあっ……♥♥」

まだまだたくさん精子を溜め込んでいるであろう立派な金玉を揺らしながら、キリト先輩はイーディスさまのおまんこからおちんぽを引き抜きます。少し離れたこの場所からでも逞しさがわかる先輩のおちんぽは、先っぽから根元までの全てに白濁した液体をまとったまま雄々しく勃起されていました。

一方のイーディスさまはといえば、先輩に種付けしていただいた余韻が残る体を、未だびくんびくんと痙攣させていました。イーディスさまの下に寝転んだアリスさまが支えていなければ、きっとその体はあっさりと崩れ落ちていたでしょう。

「おつかれさまでした、イーディス殿。キリトにとても気持ちよくしてもらえたようですね」

「はへっ♥　あっ、ありひゅ……♥　はふ、ひゅうっ……♥♥」

しまりのない幸せな雌の顔を晒したまま、イーディスさまがだらりと突き出した舌を、アリスさまのキスが無理矢理口の中に押し込みました。絡まり合う唾液と舌が奏でる音は、ビーチチェアの上からこっそり覗いている私の耳にも聞こえてくるほどに激しいもので――イーディスさまはそれだけで幾度か達してしまったようでした。

イーディスさまのおまんこから溢れ出した濃厚な精液が、アリスさまのおまんこの上にぼたり、ぼたりと垂れ落ちていきます。一度のお射精であれだけ大量に注がれて、先輩の雌として堕ちない者はいません。

そんなアリスさまとイーディスさまの睦み合いを、キリト先輩はいつものように優しく見守られていました。セックスの汚れ――汚れというのは若干語弊があるのですが――が付着したままのおちんぽ様が、そのままになっているにも関わらずです。

キリト先輩の傍付きとして、メスとして、いつものようにおちんぽ様をお綺麗にしてあげたい――そんな念が伝わったのか、キリト先輩の視線が不意に私の方を向きました。

「おっ。起きたのか、ロニエ」

「おはようございます、先輩」

なんとか立ち上がろうとしましたが、腰から下にうまく力が入りません。原因はすぐに思い当たりました。今日は大半の時間を先輩と一緒に過ごし、そしてそのほとんどをセックスに費やしたせいだと。

クルーザーにお出迎えに赴いた際、そしてゲストハウスに向かうまでの車内で、先輩のおっきな金玉の中に溜まった精液を入れ替える為に、キリト先輩専用おちんぽ便所としてご奉仕便女仲間であるルクスさん共々使っていただいた熟成ザーメン吐き捨てウェルカムセックス。

ゲストハウスについてからは、先輩を上手にもてなせたことをアスナさま達に褒めていただきながら全身余すところなく弄ばれ、弄られ、弄くられ。映像の中で浅ましく振る舞うアスナさまと同じだけ、淫らに潮吹きしながら何度も何度も絶頂させられ。

失神から目覚めた後、アスナさまとのセックスを楽しまれた先輩のおちんぽ様を、ルクスさんやサチさんと一緒に綺麗にした後、三人並んでお尻を突き出して『誰が一番キリト先輩に相応しいおちんぽおトイレになれるか』という競争に勤しみ。アスナさまの指導の下、ちんぽに目が無いメスブタとしての振る舞い方を学んだり。裸で土下座をして、先輩に頭を踏んでいただく所を撮影していただいたり。

その上、ビーチに来てからまたキリト先輩に抱いていただいたのですから――下半身が言うことを聞かなくなるのも当然だったのかも知れません。

「……大丈夫か？　ロニエ」

「だっ、大丈夫です！　ちょっとだけ、うまく立てないだけで……すぐに治ると思いますから！」
「よし、わかった。どうやら大丈夫じゃなさそうだな」
先輩は苦笑しながら私の側までやってくると、動けないでいる私をそっと抱き上げてくれました。力強い腕の感触に、頬がかあっと赤くなるのを感じます。
ぽやぽやとした意識のまま、私が『先輩のおちんぽ様をお掃除させていただきたいです』とか細い声でお願いすると、先輩は頷き、私をアリスさまの隣へと下ろしてくれました。
「本当、無理だけはしなくていいからな、ロニエ」
「はい。ありがとうございます、先輩」
ぺたりと座り込んだ私を見下ろす先輩の視線は、相変わらずとても優しいものでした。眼前に突き出されたおちんぽ様の凶悪さも相変わらずでしたが。
「それでは……アリスさまとのセックスに備えて、おちんぽ様をお掃除させていただきますね。先輩♥」
先輩が頷いたのを合図に、私は早速お掃除に取りかかりました。これからアリスさまのおまんこを征服する予定の猛々しいおちんぽ様には、イーディスさまのおまんこが溢れさせた愛液と、イーディスさまの子宮にどっぷり射精された精液の残りがべったりと付着していました。
大地の恵みを吸って育った大木の様に太く、固く、存在感のある、先輩のおちんぽ様。そんなおちんぽ様を迎えるべく、私は口を大きく開きました。
「ん～～っ……ぁ……♥」
たっぷりと溜め込んだ唾液を舌にまとわせ、その舌の裏を下唇にくっつけるようにして伸ばします。そうして、舌の表面をおちんぽ様の先っぽ――たくさんのおまんこを貫いてきた、立派な亀頭に優しく押し当てます。
私に口戯（フェラチオ）の技を教えてくださったアスナさま曰く、この場所はおまんこを一番に犯し、子宮口を支配し、張り出したカリ首で膣壁をご

りごりと抉っては女の子を気持ちよくしてくださる大事な場所であり――そして、とても敏感なのだそうです。

ですから私は、先輩のおちんぽ様が不快な想いをされないよう、伸ばした舌をクッションとして差し出して亀頭を受け止めました。

舌の表面に広がるのは、独特の味わい。アスナさまが御馳走してくださるお料理やお菓子とは対極にある味ですが、不快ではありません。むしろ、もっともっと、いつまでも舐めしゃぶって味わっていたくなるほどです。鼻の中を抜けていく香りも強烈で、それだけでセックスの快感を思い出して達してしまいそうになります。

「んぁ……♥　はふっ……♥」

舌を引き込むのと同時に、顔を少しだけ前に出します。亀頭の前面を舌の表面で保護したまま、亀頭をまるごと咥え込むように唇をそっと閉じ、カリ首の裏側までをそっと包み込みます。

舌は動かさないように注意しつつ、顔をほんの少しだけ前後させる事で唇を動かすことで、亀頭とその周囲に残っていた汚れを私の口の中の柔らかい場所に擦り付けていきます。この時、立ち上るおちんぽ様の香りの芳しさといったら。そしてなにより、私を見下ろす先輩の――優しさと労りの中に、ほんの少しだけ嗜虐的（サディスティック）で支配欲の入り交じった視線といったら。

「うっ……上手だぞ、ロニエ。このペースで上達されたら……そのうち、ロニエに絞り取られそうだ」

先輩の大きな右手が、私の頭を撫でてくださいました。傍付きという、先輩の身の回りをお世話させていただける身分であることをこんなにも誇らしいと思う瞬間はありません。

お礼の言葉の代わりに、私はくぽくぽと音を立てて先輩のおちんぽ様をしゃぶりあげます。歯を当てないように注意しつつ、亀頭を優しく舐め上げ、丁寧に唾液を纏わせていきます。

「んふ……♥♥」

先輩のなでなでを感じながら、私も先輩の固い亀頭を、なでなで、れろれろ。舌の表面を擦り付けるようにしながら、隅から隅までしっかりと舐め上げ、付着していたモノを全て私の唾液で塗り換えていきま

す。

先っぽを綺麗にし終えたら、今度は軸の方のお清めに取りかかります。先輩の大変立派なおちんぽ様に失礼が無いよう、口を目一杯広げたまま、顔をゆっくりと前へ進めていきます。

「ぁっ……♥　んぶぅ……♥♥」

上下の唇でおちんぽ様の形にぴったり沿った輪っかを作り、吸い付きながら少しずつ前へ、根元へ。亀頭は舌の上を滑っていただくように導きながら、口の奥、そして喉の奥へ。

アスナさまに手ずから教えていただいたお掃除の方法を忠実に守りながら、肉の柱にこびりついた雌汁と雄液を唇でこそげ取るようにしてキレイにしていきます。

以前は半分咥えるだけで精一杯だったり、喉奥に触れただけで咳き込んでしまったりもしたのですが――キリト先輩はもちろん、アスナさまをはじめとした皆さんに辛抱強く修練をつけていただいた結果。

今ではほら、このように。

「ん～～～っ……んんっ♥♥」

根元までしっかり飲み込んで、先輩のおちんぽ様の付け根と、情熱的なキスを交わす事もできるようになりました。

「苦しくないか？　ロニエ」

「おんっ♥　んぶっ♥」

キリト先輩の優しい言葉と労りに満ちた視線。頭を撫でてくださる手の感触。そして、私の口の全てを征服してくださった凶悪なおちんぽ様の熱さ、美味しさ、固さ、太さ、大きさ。気道を通って鼻に抜けていく濃密な雄の香り。

その全てに、頭がどうにかなってしまいそうな程の幸せを感じながら、私は必死に舌を動かします。口の中はほとんどが先輩のおちんぽ様に占拠されているため、満足に動かすことはできないのですが、舌を常に肉棒に這わせるようにしながらどうにかこうにか舐め回し続けます。

「んぶふぅっ♥　ううっ……♥」

舐める場所が偏らないように、何度か口を前後に移動させながらお

ちんぽ様を綺麗にし続けます。いつか、アスナさまのような舌使いを身につけて、先輩のおちんぽを根元まで咥えたまま全体を綺麗にできるようになりたい――そう願いながら、ゆっくりと顔を引き、そして押し込みます。

そうして満遍なく舌を這わせ、精液も愛液も全て唾液に溶かして舐めきったら最後の仕上げです。

「ん――はぁっ……♥」

名残惜しさを我慢して、先輩のおちんぽ様から口を離します。一瞬だけ視線を巡らせ、反り立つおちんぽ様が私の唾液塗れになっていることを目で確認。先程までの交尾の痕跡がどこにも残っていないことを確認したら、今度は余分な唾液を取り除きます。

まずは、軸の側面にほっぺたを擦り付けるようにして、左右から丁寧に拭き取っていきます。ほっぺたを擦り付けにくい軸の上面は、姿勢を少し変え、伸ばした舌の先っぽを使ってこそげ取るように。

軸の下側――裏筋も同様ですが、金玉の側まで来たら『いつも濃厚な精子をたくさんたくさん造ってくださり、本当にありがとうございます』という感謝の念を込めながら、袋の部分にちゅうちゅうと吸い付きます。玉袋の左右にある金玉を一つ一つ口に含んで優しく揉み、中央の筋も舌の表面で舐め上げていきます。

「――んっ♥♥」

そして、最後。

固く充血した亀頭全体を舌の表面で拭き取ったあと、お掃除完了の合図とお掃除させていただけたお礼を兼ねて、先っぽに甘い甘いキスを捧げれば――汚れ一つなく完璧に綺麗になった、最高にかっこよくて誇らしい先輩おちんぽ様のできあがりです。

「先輩！　傍付き錬士兼精液便所ロニエ・アラベル！　キリト先輩のおちんぽお掃除任務、完了いたしました！」

「よし。よくできたな、ロニエ。指導役として俺も鼻が高いよ」

「ありがとうございます、先輩！　これからも必要な時はいつでもお申し付けください！」

艶めくほどに美しいおちんぽ様と、そしてそれ以上に素敵な自慢の

先輩を見上げていると、誇らしい気持ちで胸が一杯になります。
そして、私が先輩の準備が整えるのを待っていてくださったかのように、アリスさまはイーディスさまとの口付けを解いて隣に横たえます。そうして、ご自身はゆっくりと体を起こしました。
「ロニエ。キリトのおちんぽお掃除、ご苦労様でした。こんなに甲斐甲斐しく世話をしてくれる傍付きを持てて、キリトも果報者ですね」
「い、いえ、そんな……キリト先輩の傍付きとして、すべきことをしたまでです」
「そうですか。では……これは、私からの感謝の証です」
アリスさまは私をそっと抱き寄せると、そのまま私と唇を重ねました。するりと滑り込んできたアリスさまの舌が私の口内を優しく這い回り、丁寧に舐めとっていきます。先輩とするキスとはまた一味違う、女性とのキス。その甘美で優しく、しっとりとした感触を楽しんだあと、アリスさまは唇を離しました。
「ふふっ……♥　では、ロニエ。あなたが綺麗に仕上げてくれたキリトのおちんぽと、今から交尾を行います。
そこでしっかりと見届けてくれますか？」
「はいっ！　お任せください、アリスさま！」
私がそう返事をすると、アリスさまはにっこりと微笑み、そして再び先輩の方へ顔を向けました。
「キリト……♥　はやく、はやく来てください……♥　さっきからずっとお預けされてばかりで、せつないのです……♥」
「我慢ばっかりさせて悪かったな、アリス。今からちゃんと気持ちよくしてやるから、それで勘弁してくれ」
「まったく、しょうがないですね……♥」
先輩はアリスさまを正面から抱き寄せ、徐に唇を奪います。
それは先程、私とアリスさまがしていたようなゆったりとしたキスではなく、お二人の唇の間から唾液の音が間断なく聞こえる激しいキス。メスの体と心に『今からこのオス様に全てを捧げて犯していただきます』と理解させるためのキスは、横で見ているだけで子宮がきゅんきゅんと疼きます。

「んっ、んぁっ……♥♥」

おまんこから精液を垂れ流しながらぐったりとするイーディスさま。おちんぽお掃除のおかげですっかり発情してしまった私。そんな二人の間に、アリスさまはキスをしたまま押し倒されていきます。もう、すっかりキリト先輩にされるがままです。

アリスさまの上に覆い被さるようにして体を倒したキリト先輩は、アリスさまの髪を優しく撫でながらゆったりとキスを楽しんでいるようです。

先輩にぎゅっとされて、頭をなでなでされながら重ねる濃密な口付け――頭の中がとろとろに蕩けてしまうほどに気持ちよく、『大好き』という気持ちがどんどん強くなってしまうのですからどうしようもありません。

「んーっ♥んっ♥　んぅうんっ♥♥」

先輩に甘えながら、アリスさまは先輩の背中に両手を回して抱きつきます。先輩を迎え入れるために両脚を開けば、先輩はその間に上手く身を置き、雄々しく勃起したおちんぽ様をアリスさまの下腹部に、でんっ、と乗せました。これは『今からお前の雌穴に、このでっかいちんぽをぶち込んでやるからな』というオス様の征服宣言。それだけで、私達メスは先輩というオス様のちんぽコキ穴として、自分自身を差し出したくてたまらなくなってしまうのです。

そうして、おちんぽ様を挿入する事をアリスさまの体に直接予告した先輩は、裏筋を擦り付けるようにゆっくりと腰を引いて狙いを定めます。先程私がキレイにしたばかりの亀頭が狙うのは、溢れ出すほどに蜜に満ちたアリスさまのおまんこ。

「んっ♥　んぅうっ♥♥」

アリスさまったら、自分から腰を擦り付けておちんぽ様を迎えにいっちゃってます。先輩のキスですっかり頭溶けちゃって、おちんぽ様に媚びっ媚びで可愛くおねだりしてるの、私にバレてないとでも思ってるんでしょうか。

もちろん先輩はお優しいので、女の子が『ぶっといオスチンポ様でおまんこぐりぐりどちゅどちゅしてください♥』っておねだりすれ

ば、ちゃんと応えてくれます。
おちんぽ様の先っぽをおまんこの入り口に宛がった先輩は、アリスさまのおまんこを征服してやるべく、ゆっくりと腰を前に突き出しました。
「んっ……♥　んんっ♥♥　んぅううぅううっっ♥♥」
キス。頭なでなで。抱擁。女の子が大好きな行為を全部してあげながら、先輩はアリスさまをおちんぽ様で貫いていきます。アリスさまのおまんこは、先輩のおちんぽ様の形にぴったり合うように押し広げられながら、たっぷりと蜜を溢れさせておちんぽ様を歓迎しています。
おちんぽ様が少しずつ前に進む度、ぴくぴく、びくびくと悦びに震えるアリスさまの体。その体を上から優しく抑え込みながら、先輩は腰を押し進めていき――やがて、どちゅんっ、と力強くアリスさまの一番奥までおちんぽ様を突き刺しました。
「――んんっうううぅううっ♥♥」
先輩の体の下で、アリスさまの体がびくんっと跳ねました。あののけぞり具合から見るに、どうやらおちんぽ様を挿れられただけであっさりとイッてしまったようです。
先輩はといえば、特に驚くような素振りも見せずにアリスさまを抱き留めています。まあ、アリスさまに限らず、先輩のおちんぽ様に簡単に屈してしまう敏感な――正確に言えば、簡単に屈するくらい開発していただいた女性はたくさんいるのですから当然でしょう。もちろん、私もその一人です。
やがて、軽くぼんやりとしていたアリスさまの意識が戻ってきたのを見計らったのか、先輩は長々と続けていたキスを終えて唇を離しました。
「ふうっ……。待たせて本当に悪かったな、アリス……」
「はひゅ、はあっ、はあっ……♥　本当です、キリトお……♥」
アリスさまをぎゅっと抱きしめたまま、キリト先輩は餌を啄む鳥のように甘く軽やかなキスを何度か繰り返しました。
ぶっといおちんぽ様を杭のように突き刺され、先輩に上からのし掛

かられて身動きを封じられたアリスさまのお顔は、私の位置からではは っきりと見えませんが、とても幸せそうであることだけはわかりました。先輩の背中を両手で抱きしめ、荒い息を繰り返して快感に耐えている様子もそうですが――何よりアリスさまも私と同じ、キリト先輩のメスなのですから。

「動くぞ、アリス」

「ええ……♥　お前の、したいようにしてください……♥」

微かに頷いたアリスさまの鼻先に、先輩はからかうようなキスを落としました。そうして、ゆっくりと腰を引きます。アリスさまの必死に絡みついてくるおまんこから、亀頭だけを残して堂々と引き抜かれたおちんぽ様は、私が綺麗にしたことも忘れてすっかりアリスさまの雌汁塗れになっています。

そうして、先輩はそのぶっとくて大きなおちんぽ様を、アリスさまの雌穴目掛け、ずんっと力強く挿入しました。

「――ぁあああっ♥♥　あっ♥ひぁあっ♥♥　おっ、く、奥まで、一気にぃ……♥♥」

ずんっ、ずんっと力強いピストン運動で、先輩はアリスさまのおまんこをおちんぽ様で弄びます。もちろんその間も体を押さえ込み、頭を撫でてやりながらです。

「あ〝っ♥お〝っ♥♥　すごい、すごひですっ♥　お前の、ちんぽぉっ♥♥　うぅっ♥♥　はあんっ♥♥」

おちんぽ様がぶち込まれる度、アリスさまは普段の凛々しさからは想像もできない蕩けた声を上げて身を捩ります。それも仕方の無いことでしょう。

しかも今は、先輩に抱きしめられ、頭を撫でられているのです。おまんこから駆け上がってくる気持ちよさと、キスの気持ちよさ、なでなでされる気持ちよさ――それら全部が頭の中で混ざり合い、先輩への『好き』、『大好き』、『愛しています』、『赤ちゃん欲しいです』、『孕ませてください』という気持ちと共に乱反射し続けるのです。

そんな合わせ技で責め立てられて、キリト先輩に――愛する方に抗える女の子がどこにいると言うのでしょう。

「ぁっ♥ああっ♥ぁあああっ♥♥　だめ、だめえっ♥♥　そこ、されたら♥　ま、またイっ――♥♥」

キリト先輩とセックスをさせていただく際、先輩が一回お射精されるまでの間に、女性側は最低三回、多い時には何十回と絶頂させられます。もちろん、これはあくまでおちんぽ様をおまんこに入れている間の回数であり、それ以外の行為も含めればその回数は更に増えます。

そしてそれは、今のアリスさまのように愛情を以て交わっている時はもちろん、私やアスナさま、ルクスさんがよくしている、先輩の性欲処理道具――こちらの世界の言葉で『オナホ』あるいは『公衆便所』として振る舞っている時も同様です。

「お゛っ♥ひいっ♥　キリト、だっ――めぇっ♥だめええ♥♥　こんなの、おかひく♥なっへ――あっあっぁぁあああああっ♥♥」

その理由はいくつか存在すると考えられます。

先輩のおちんぽ様がとても大きく、男らしくて素敵なオスチンポ様であることもその一つでしょう。私達の体が先輩とのセックスや女の子同士の『閨遊び』を通して、先輩専用の穴としてすっかり開発されてしまった事もそうでしょうし、ここがどれだけ痴態を晒してもよい安心できる空間であることも無関係ではないでしょう。

それに何より、先輩は女の子一人一人の好みに合わせてくれますから。弱いところ、好きな責められ方を把握されて徹底的に気持ちよくされてしまっては、たとえアリスさまやイーディスさまであっても逆らいようがありません。

「――あああぁああっ♥♥　ひうぅうっ♥　はあっ、はああんっ♥♥　キリト、きりとぉっ♥♥　あっ――んんぅうううっ♥♥」

そんな事を考えている間に、アリスさまは何度かイッてしまったようでした。先輩はおちんぽ様を深々と突き込んだまま、腰の動きを止めてアリスさまをじっくりと味わいます。

アリスさまが達する直前、先輩はアリスさまの耳元に小さな声で何かを囁いていたようですが、アリスさまの喘ぎ声にかき消されて私の耳には届きませんでした。囁いた場所も、私の反対側――イーディス

さまに近い方の耳でしたので、唇の形も読み取れません。
「あ〝っ、ああっ♥♥　あひ♥あ〝ぅあ〝ぁあ〝～っ♥♥　はふ、はひゅう♥♥
あっ……はあっ♥はあっ……♥　き……りとぉ……♥♥　そんなに、そんなに気持ちよくされては、私、わた――ひぃいいんっ♥♥」
絶頂の中に溺れていたアリスさまの意識が戻ってくると、再び腰を前後させてアリスさまを容赦なく責め立てます。血管が浮き出た太いおちんぽ様によって、お腹の中をごりごり、ぐしぐしと擦り続けられ、更には子宮の近くにある弱いところを間断なく責め立てられ続けるアリスさまがうらやましくてたまりません。
先輩の下で喘ぎ悶え、ぴくぴくと身を震わせるアリスさま。先輩のおちんぽ様が出入りする場所の真下にあるビーチマットは、アリスさまが噴き出した愛液だらけの有様です。
そうして、ひたすらにアリスさまを責め立て、何度目かになる絶頂に浸らせたあと。先輩はおちんぽ様を杭のように深々と突き刺してアリスさまを固定すると、再び耳元に唇を寄せました。
「――」
その声は本当に微かなものでしたので、私には聞き取れませんでした。
ですが、それはきっと『そろそろ膣内に射精してやるから、子宮開けて卵子ごとレイプされて孕まされる準備をしておけ』というような内容であった事は想像に難くありません。だって、ちらりと見えた先輩の横顔は――私の雌穴にお射精していただく時のお顔とよく似ていましたから。
そうして、先輩は再び腰を動かし始めました。ただし、今までよりずっと速い速度で。
「あっああっああっ♥ああんっ♥♥　キリトっ♥あ〝あっ♥　んぅんっ♥　キリトぉおっ♥♥　すき、しゅきぃ♥　あぁああ〝っ♥♥」
おまんこを抉る重たさと破壊力はそのままに、前後する速さを一気に増した、どちゅどちゅというピストン運動。アリスさまをたっぷりと気持ちよくさせるために今まで加えていた手加減を全て取り除き、

目の前にいるメスを射精するためのちんぽコキ穴として使い潰す本気交尾。

何度もイカされまくったアリスさまの体が、先輩のおちんぽ様による激しい連続攻撃に耐えきれるはずもありません。アリスさまは両手で先輩にぎゅーっと抱きついて、品の無い喘ぎ声を上げながら、先輩のおちんぽ様に完全降伏していることを全身で示していました。

もちろん先輩は大変お優しい方なので、アリスさまの降伏をすぐさま受け入れてくださいました。

「ぁあ〃っ♥♥　お〃ぅっ♥ひぃいっ♥♥　きりっ、まっへ♥♥　やら、イグ♥イぐぅ♥♥　だめ、だめ〃ぇッ♥♥　きちゃう〃っ♥♥おっぎぃ〃のきちゃ――」

ぶっといおちんぽで子宮口をがっちりと抑え込んで。

幸せな完全敗北をきめた子宮に、濃くて重たい精液をどぷっどぷっと思いっきり射精する――先輩なりの、愛情たっぷりの勝利宣言を添えて。

「――あっ♥ああ〃ぁあああぁあああっ♥♥　いいい〃いっぐぅうっ♥♥　あぢゅい〃っ、あ〃づゅい〃のいっぱはあ――あぁあああぁあああああっ♥♥　あっあああっ♥♥　あぁ〃っぁあ〃っあああああ〃～～っ♥♥」

金玉をぐぐっと押しつけ、ただでさえ立派なおちんぽ様を更に大きくしながら、先輩はアリスさまの子宮に精液をどくどくっ、どくどくっと解き放っていきます。その様は正に、オス様がメスに種付けをするという交尾の基本中の基本。横で見ているだけで、自分がキリト先輩の子種を注いでいただいた時のことを思い出してしまい、許しも無いのに発情してしまいます。

あらゆる逃げ場を失ったアリスさまは、先輩の下でびくんっと体を跳ねさせながら、何度も何度も繰り返す絶頂を味わわされ、その度におまんこからぷしゃぷしゃと愛液を噴き出していました。

「い――ぐぅぅぅッ♥♥　ふあ♥ひあああぁっ♥♥　とけちゃ、とけちゃうぅう♥♥　おっ、おちんっ、ぽぉおっ♥♥　あっあああぁあっあああ～～～～っ♥♥」

ぴんっと張ったアリスさまの両脚を力尽くで開かせたまま、先輩のお射精はまだまだ続きます。子宮の中に精液を思いっきり叩きつけられる感触。それがどれだけ気持ちよい事か、私もよく知っています。お射精の間、先輩の両腕にぎゅ～っと抱きしめられて『お前は俺のモノだ』、『絶対に離さないから安心して気持ちよくなれ』と体に直接教えてくださる悦びも。

メスを孕ませ、己の物にする事に特化した最高優先度の神器クラスおちんぽ様を前にしては、アリスさまに為す術など何もありません。唯一許されるのは、媚び媚びおまんこで、きゅっきゅっとおちんぽ様を抱きしめて、熱い子種を気持ちよ～くお射精していただく――メスとして一番大事なお仕事を果たすこと。それだけです。

「あっあああっ♥♥　やっ♥　あっはああ♥♥　ひぁんっ――んむっ♥♥」

突然喘ぎ声が聞こえなくなったと思ったら、先輩の唇がアリスさまの唇を塞いでいました。お射精中にキスハメなんてされたら、私達がどれだけ喜んでしまうか知っているというのに。アスナさまのお言葉を借りれば『こういうところがズルい人なのよね』と言わざるを得ません。

そうしてキリト先輩は、アリスさまをあらゆる手段で抑え込んだまましばらく同じ体勢を維持していました。お二人のキスが終わりを迎えたのは、先輩のお射精が完了し、アリスさまの子宮に精液を注ぎ込み終えて少しした後の事でした。

「――ふうっ……」

ゆっくりと上体を起こした先輩が、静かに息を吐きました。殿方にとって、お射精は強い疲労を伴う大変な行為です。それにも関わらず、たっぷりと膣内射精をしていただけたのですから、種付けしていただいたメスはオス様に感謝の言葉を述べるなり、ねぎらいの言葉をかけるなりすべきです。それも可能な限り平伏し、オス様に征服していただいた事がわかるように。

ですが、それをすべき当事者であるアリスさまはといえば――先輩のおちんぽ様をおまんこに突き刺していただいたまま、すっかり脱力

しきっていました。
「あっ……♥　あひ……♥　きり、と……♥♥」
「お疲れ、アリス。もうちょっとじっくり気持ちよくしてやりたかったんだけど……アリスが気持ちよすぎて、止まれなかった」
先輩は優しく微笑み、アリスさまの乱れた髪を手で整えています。
アリスさまはお礼の言葉を述べるどころか、逆に先輩に労われる始末。これ以上の無作法をはたらかせては、アリスさまの名誉にも関わります。きっと。たぶん。
ようやく動くようになった下半身にムチを入れ、私は先輩のお側へと近づきました。
「先輩。アリスさまへの種付けお射精、お疲れ様でした！」
「ロニエ。悪いな、ほとんど構ってやれなくて……体はもう大丈夫か？」
「はいっ。ばっちりです！」
本当はすぐにでもアリスさまに、あるいは次のメスに続けて種付けしたいでしょうに、それを抑えて私を気遣ってくださる先輩の優しさに胸を打たれます。
先輩の体にすり寄った私は、先程までアリスさまの胸を押しつぶしていた先輩の胸板に頬を擦り付け、唇を触れさせました。そうして、改めて『お掃除』のお許しを得ようとした直前――アリスさまの横に倒れていたイーディスさまが、むくりと体を起こしました。
「んーっ……あたしもばっちりだよー、キリト」
「おわっ、イーディスか……」
「驚いた？　ゆっくり見物させてもらったわ、キリトのセックス♥
それにしても、キリトはやっぱりすごいのね。アリスのこと、あんな風に乱れさせちゃうなんて……」
そう言いつつ、イーディスさまは先輩の胸板に顔を近づけ、ぐりぐりと擦り付けるようにして甘えてみせました。そうして、私の方をちらりと一瞥したあと、今度は先輩の乳首を舌や唇を使って弄び始めます。
イーディスさまに負けじと、私も先輩の乳首責めに加担します。そ

の様子に、イーディスさまはなんとも可笑しそうに表情を崩すと、片方の掌をアリスさまの下腹部にそっと当てました。

「……ね。まだ、できる？」

イーディスさまがそう問うと、アリスさまの体が、ぴくんと小さく痙攣します。先輩はゆっくりと腰を引き、アリスさまの中に入れっぱなしだった肉棒を引き抜きました。

愛液と精液をまとった、つい先程、アリスさまの子宮を満杯にするほど過酷なお射精を終えたばかりだというのに、それを一切感じさせないほど雄々しく逞しく勃起された、凶悪なほどに素敵なおちんぽ様。

露わになったその誉れ高きお姿が、イーディスさまの問いかけに対する何よりの回答でした。

「ふふっ……最っ高……♥」

イーディスさまは獰猛な獣のように微笑むと、アリスさまの隣に仰向けに寝転び、両脚を左右に広げます。先程までのアリスさまと同じように。

そして――気付けば私の体は勝手に動いており、イーディスさまの上に覆い被さり、先輩に向けてお尻を突き出していました。

私も、イーディスさまも、姿勢こそ違えど意味するところは一つしかありません。オス様に、おちんぽ様にメスとしての存在価値全てを差し出す行為――『ハメ乞い』。先輩のちんぽコキ穴になることを心から望んでいる事の証明。

「先輩……♥　きて、ください……♥♥」

「一緒に楽しみましょう♥　キリト……♥♥」

ごくりと、先輩が生唾を飲み込む音が聞こえた気がした直後――先輩は私達二匹を諸共に味わうべく、行動を開始したのでした。

青い空。白い雲。水平線の向こうまで続く、広く穏やかな海。そして――。

「――ぁああっ♥あっあ゛っああぁああ♥♥　ぁあああ゛ぁあぁ゛ああ～～～～～っ♥♥」
「ふふっ♥　あーあ、簡単にイッちゃったわね～、ロニエ～♥　おちんぽ突っ込まれてから三分も経ってないのに」
「へひゅっ♥　イっ、イッてましぇんっ♥　先輩の、おっ、おちんぽしゃまれぇっ♥♥　いってまふぇんかりゃあっ♥♥」
「そんなだらしない顔しながら言われても説得力無いわよー。ほら、キリト。次はあたしの番♥」
風に乗ってビーチの端から聞こえてくる女達の喘ぎ声。こういった海辺にはごくありふれた、何の変哲もない光景。
「おー、やってるやってル。相変わらず元気だねェ、キー坊」
砂浜の適当な場所に置いたビーチチェアの上に寝転びながら、アルゴは交尾に勤しむ男女の姿を遠巻きに見つめていた。
何のことは無い、日光浴のついでである。向こうで交わっている男女三人とその隣でぐったりとしている女一人は素っ裸だが、こちらにいるアルゴ――そして、もう二人はしっかりと水着を着用していた。
「――というわけで、ご協力いただけませんか!?　シノンさん！」
「そうね……悪くない話ね」
水鉄砲対決の勝者の特権――敗者であるシリカのマッサージを受けながら、シノンは静かに頷く。そうしてその視線を、隣に寝転ぶ情報屋へと向けた。
「それで、アルゴはどうする？　シリカの提案……乗る？」
「そうだナ……確かに、この三人でってのも面白そうダ。オレっちも乗ってやるヨ」
にっ、と笑ったアルゴは、手元にコンソールウィンドウを呼び出すと、アバター設定を変更。今まで使用していた《ＧＧＯ》仕様のアバターが光に包まれた数秒後、ビーチチェアの上に猫耳と尻尾の生えた《ＡＬＯ》仕様のアルゴが寝転がっていた。
同様に、シリカとシノンも自らのアバターを《ＡＬＯ》仕様のそれに変更する。砂浜に姿を現す、水着姿の牝猫――三匹の美しきケット・シー。

「オレっち達の分もちゃーんと残しとけヨ、キー坊……♥」

整合騎士の股座に肉棒を乱暴に突っ込み、玩具か何かのように楽々と鳴かせまくるキリトの姿を遠巻きに見つめながら、《鼠》のアルゴは秘かにほくそ笑むのだった。

14―5.（シリカ・シノン）

日本を遠く離れた南の某国、その片隅に位置するプライベートリゾート・『ティルナノーグ島』。

自由にして悠久、無欠の楽園に思われたその島にも、たった一つだけ問題が存在している。

島内に無断侵入してきた外来種の定着――獣と妖精の中間種族・『ケットシー』による土地の不法占拠である。

メスしか存在しない単一性種族であるケットシーは、複数匹のメスが『プライド』と呼ばれる群れを形成して生活を営む。そうして適当な土地を見つけては、現地に巣を作り、気に入ったオスを連れ込んでは朝から晩まで交代交代で交わり続けて繁殖を行う。猫めいた耳と尻尾から見てもわかるように、まさに動物的本能に支配された原始的種族である。

外見の可愛らしさに騙されてケットシー達の巣作りを放置していると、あっという間に周辺地域がケットシーの縄張りとして支配されてしまう。そうなってしまえば、元の住民は土地を放棄して逃げ出す他に無いのだ。

「……だから、んんっ♥　♥　そうなるまえに、ちゃんと……あっ♥　対処しないといけないんです……♥」

「へえ、そうか。それで、対処ってどうしたらいいんだっけ？　シリカ」

島の中央にあるゲストハウスから、少し足を伸ばした所にある小川のほとり。木で出来た床の上に鳥の羽をあつめて作った布を敷き、大きなバナナの葉を重ねて屋根とした、壁の無い四阿（あずまや）の中。

胡座をかいた足の中に、小柄なケットシー――もとい、シリカを抱きしめたまま、キリトはそう嘯く。別段、この島を支配や管理しているというわけでもないが、この問題には己自身が対応に当たるべきだという直感めいた確信がキリトにはあった。

「そ、そんなの……教えられるわけないです♥　あたしだって、ケットシーなんですもん♥

たとえキリトさんが相手でも、大事な仲間を売るなんて絶対にしません！」

はあはあと吐息を上気させたシリカは、キリトの体にぎゅっと抱きつく。キリト共々裸のまま、互いの匂いを肌に染みこませるように。

屹立した逸物に股の間を沿わせながら、シリカの腰をゆっくりと前後に揺らせば、小さな雌穴から溢れた愛液が肉棒の上側に塗りたくられる。雄の鉄杭にクリトリスが触れる度にシリカは堪えたような鳴き声を漏らし、それが却ってサディズム的な欲求を煽る。

片手でシリカの尻肉を鷲掴みにし、もう片方の手でシリカの薄い胸とその先端にある突起をくりくりと弄ってやりながら、キリトはわざとらしい困り顔を作った。

「そいつは困ったな……。対処法がわからないと、手の打ちようが無いぞ」

「えへへ……さすがのキリトさんも、お手上げみた――んむうっ♥」

胸を弄っていた手をシリカの後頭部へと回したキリトは、そのまま彼女の頭を引き寄せて唇を重ねる。その口付けを喜んで受け入れたシリカは、唇を薄く開いて入り口を作り、キリトの舌を招き入れる。

その隙間をこじ開けるようにして入り込んだキリトの舌が、シリカの口内を我が物顔で陵辱する。シリカの舌とぐねぐねと絡み合い、舐め回し、歯茎の裏を舐り、混ざり合う唾液の音をぴちゃぴちゃと響かせていく。五感に秀でたケットシーの神経系に、キスの味と感触を叩き込んでいく。

そして、同時に。

「――んうっ!?　んふみゅうぅうっ!?」

ゆらゆらと揺れるシリカの尻尾、その根元をキリトの掌がそっと掴む。いつぞやのシノンの反応を見てもわかるとおり、ケットシーの尻尾は非常に敏感である。少しの刺激でも鋭敏に伝えてしまうため、大事に扱わねばならない。

たとえば今キリトがしているように、尻尾を掴んだ手を上下させて、まるで男性の自慰行為のようにずりずりと扱きあげたりするなど――絶対にしてはいけないのだ。

「んんぅううっ♥♥　んっ、んううっ♥♥　んぁふあっ♥♥　んんぅううぅうっ♥♥」

尻尾から届く暴力的なまでの快感に、シリカはびくびくと身を震わせる。逃げだそうにも頭をキリトに抑えられているし、舌はキリトの舌によって抑え込まれ、腰は肉棒に股座を擦り付けるのが精一杯で力など全く入らない。

ごつごつとした男の手が、シリカのしなやかな尻尾を容赦なく嬲る。その度にシリカの体は快感を教え込まれ、痙攣する体に伴ってツインテールが上下に揺れる。

「んふぅうっ♥♥　んっぅうっ♥んっ♥♥ん〝っ♥　むうっ♥ふうぅう♥♥」

――実際の所、シリカの尻尾が扱かれた回数は、ほんの十ストロークにも満たない。

しかしそんな僅かな上下運動ですら、シリカの小さな体から抵抗する力を奪って快感で満たすには十分すぎた。それが証拠に、ぐったりとしたシリカの口内からキリトの舌が去り、唇が離れる頃になっても、シリカは逃げ出す様子を見せなかった。

「はあっ……はあっ……♥♥　っひぃう……はっ、はあっ……♥♥」

「さて、と……。対処法、教えてくれるよな？　シリカ」

「はふ、ふう……それ、はぁっ……♥　それだけは、教えられません――ひぁあ〝あぁあぁ〝あぁっ♥♥

お〝っ♥おひえましゅ♥　おしえましゅからあっ♥　しっぽぉ〝♥しっぽズリズリするのだめ〝♥♥とめ、てぇへえええっ♥♥」

シリカの最後の抵抗も、三度の上下運動であっさりと打ち崩される。

もはや完全に力の入らなくなった体をキリトの両腕の中に包み込まれたまま、シリカはどうにかこうにか顔を上げてキリトを見つめた。

「け、ケットシーの群れ（プライド）への一番簡単な対処方は……ぶっといオスチンポ様でレイプして、躾をしてあげることなんです……♥」

「へえ……そんな事でいいのか」

「はいっ♥　あたしたちケットシーは、キリトさんのおちんぽ様みたいな立派でかっこいいオスチンポ様に犯されると、体が勝手に屈服しちゃうんです♥　本能が『このオス様こそが私のご主人様』だって認識して、オス様を崇めて飼われたがるメス猫に堕ちちゃうんです♥♥

そうして群れ（プライド）の中の一匹でもそうなってしまうと……他のケットシーも、みんなおちんぽ様に逆らえないおまんこメスになっちゃうんです♥♥　自分の体も縄張りも、全部ご主人様に捧げて可愛がってもらうためのモノなんだって……認識を永遠に書き換えられちゃうんです♥♥」

快楽に完全敗北したシリカは、頬を紅潮させてキリトにすり寄ると、胸板を啄むような浅い口付けを繰り返す。すんすんと鼻を鳴らしてオスの汗と肌の香りをたっぷりと吸い込むその様は、まるで自らの体内にオスの存在をマーキングしているかのようだ。

大きな猫耳が生えた頭を撫でてやれば、シリカはくすぐったそうに笑う。まだ上手く力の入らない腰を上下に動かし、尻肉を反り返った肉棒に磨り当てながら。

「――なるほど、よくわかったよ。シリカ」

もう何度か、ご褒美とばかりにシリカの頭を撫でてやったあと、キリトは彼女の体をそっと押し倒す。鳥の羽を折り重ねて作った柔らかな敷物の上に寝かされたシリカは、「ひゃんっ♥」と嬉しそうな悲鳴を上げ、キリトにされるがままだ。

小柄なシリカの上から覆い被さったキリトは、頭を抱え込むように彼女を抱き寄せながら、自らの両脚をシリカの膝裏に当てて無理矢理――というには抵抗が皆無に等しすぎたが――股を開かせる。そうして、たっぷりと濡れぼそった雌華に狙いを定めるように腰を引けば、勃起した野太い肉棒の姿が露わになる。

今まさに自らを貫かんとしているオスの逸物。その姿を視界にはっきりと捉え、シリカは思わず生唾を飲み込んだ。

「あはあっ……♥　キリトさんのおちんちん、あんなにおっきくなってる……♥　あたし、今からあれでレイプされちゃうんだ……♥♥

キリトさんにぎゅ～って抱きしめてもらいながら、いっぱい、いっぱ

い、おちんちんでお腹の中をごりごりされちゃうんだぁ……♥」

一点に釘付けになったシリカの瞳が見つめるのは、肉棒か、それとも少し先の未来か。どちらにせよ待ち受けるモノはさほど変わらない。

ほんの少しだけ腰を前に進めたキリトは、肉棒の先を彼女の蜜壺の入り口へと押し当てる。たったそれだけの刺激でも、メスの蜜はだくだくと溢れ出し、オスの侵入を今か今かと待ちわびる。

微かに身を捩ったシリカは、自らの下腹部方向を見つめていた瞳を上げ、真上から覆い被さるキリトと視線を絡ませた。

「まっ、負けません……♥　あたしがおちんぽにレイプされて、屈服しちゃったら……シノンさんやアルゴさんも、キリトさんのメスにされちゃうんだから……♥♥

いくらキリトさんのおちんぽがすっごくつよい極太オスチンポ様でも……あたしは、絶対に、負け――にゃっ〃ひぃいいいいいいいいいいっっっ♥♥」

どちゅんっ、という音が聞こえてきそうなほど容赦の無い挿入。びくんっ、と跳ね上がり反り返るシリカの体。

キリトの逸物のサイズにぴったりハマるように拡張されきった雌穴目掛けて突き込まれた肉棒は、一切の手加減無くシリカを貫く。止めどなく溢れ出す愛液を潤滑油に、張り出たカリ首が膣道を突き進み、子宮口までの全てを征服する。

「あ〃っ……♥　はひゅ、ひゅうっ……♥♥」

たったワンストロークで、シリカの肉体は屈服した。いや、とうの昔に屈服していたことを力尽くで思い出させられたという方が正しいだろう。それを否定したくとも、力なく開きっぱなしになった口では言葉を発せられず、吹っ飛びかけている意識では思考をまとめられるはずもない。

挿入の快感にのけぞり、びくびくと震えるシリカの小さな体を抱きしめたまま、キリトは彼女の体に少しだけ体重をかける。シリカを押しつぶさないように気を使いつつ、同時に彼女がどこにも逃げ出せないことを理解できるように、しっかりと。

そうして、互いの体を密着させたまま、ゆっくりと腰だけを引く。
「――ぁあぁ〜あっ♥♥　や、ああっ♥　ぁあああっ♥あ〜〜っ♥♥　あっ♥ぁあああっ♥♥
おにゃかっ♥お腹のなかぁ♥　ぞりゅぞりゅしゃれてりゅうぅぅう〜〜っ♥♥♥」
愛蜜に塗れた肉棒をずろりずろりと引き抜けば、奔る快感に意識を揺さぶられたシリカが鳴き声を上げる。そうして、カリ首だけが彼女の膣内に残る程度に腰を引いた所で、腰をぐいと前に押し出し、再び深々と刺し貫く。
子宮から駆け上る圧倒的な快感がシリカの脳髄を灼く。身悶えする小さな体は、キリトの体と両腕にがっしりと抑え込まれて逃げ場を失う。
「あ〜っひぃいっ♥　ひいいんっ♥　ごめんなさいっ♥ごめんにゃしゃいっ♥♥
メスのくせに♥ケットシーのくせにぃっ♥　あぁっ♥　おっ♥おちんぽしゃまに勝てると思いあがっちゃってぇ♥　ごめんにゃしゃいいひいっ♥♥」
「よしよーし、ちゃんと反省できてえらいぞ。シリカ」
「お〜ぅっ♥ああっ♥　ほめっ、られちゃったぁ♥♥　気持ち、いいっ♥　おっ、お〜おっ♥
おちんぽっ、おちんぽしゃまに負けるのっ♥きもちぃいひいいいいっ♥♥」
シリカの頭を撫でてやりながら、キリトは重い抽送を繰り返し、シリカの体に快楽を刻み込んでいく。
一般的な妖精種族の場合、セックスで上下関係が決まることはまずない。だが動物性の強い種族であるケットシーにおけるセックス――いや、交尾は、群れの中での上下関係をはっきりと決める役割を果たす。
もちろん、オスが上、メスが下であることは言うまでも無いだろう。この図式はいかなる状況であっても崩されることは無い。たとえ精通し立ての幼子が相手であろうと、一度交尾してしまえばその時点で

ケットシー達は喜んで傅くのだ。
　生まれつきオスに敗北することが定められ、オスに支配されることを無意識下で望み、オスに飼育されることで安寧を得る。それがケットシーという、理性ある妖精のフリをした獣の真実なのだ。
「やっ♥　ひあぁあっ♥♥　あ――んむっ……♥」
　シリカの膣内に肉棒を深々と突き刺した状態で腰を止めたキリトは、そのまま彼女と唇を重ねる。
　上から一方的に唾液を流し込まれる支配的なディープキスの快感に、シリカはただひたすらに酔いしれる。尻穴がひくひくと震え、尻尾の先がたしたしと敷物を叩く。
　快楽漬けにされる程に濃密な交尾の最中に訪れた、ゆったりとした時間。オスに一方的にペースを握られていることにすら、シリカは喜びを感じてしまう。
「んふ……♥　ふぁ……♥」
　繋がりっぱなしのまま、舌を絡め合う事暫し。シリカの口内に痕跡をたっぷりと残したまま、二人の唇が離れる。
　ごくりと喉を鳴らし、シリカはその痕跡を飲み干す。
「えへへ……あ、あの、キリトさん……♥　今日もいっぱい、おちんぽに負けさせてくれて……ありがとうございました♥」
「どういたしまして、シリカ。せっかくだし、このまま思いっきり中に出してやりたいんだけど、いいかな？」
「はいっ、もちろんです！　一瞬でもオス様に勝てると思った生意気なケットシーなんて、キリトさんの濃厚おちんぽミルクでたっぷりマーキングして、完全にやっつけちゃいましょう♥」
　他人事のように言ってのけ、シリカはくすくすと笑う。年相応の幼さと、年相応とは思えない淫靡さを備えた微笑み。
　そんな彼女ともう一度キスを交わしたあと、キリトは彼女の小さな体を一層強く抱きしめる。
　体全体で圧するようにしながら、顔をシリカの耳元に持っていく。お互いの顔が見えなくなるほどに密着し、拘束し、シリカの荒い吐息をすぐ側で聞きながら――ゼロにしていた抽送の速度を、一気に上げ

た。

「あっ――あぁあっぁあ〃あっ♥♥　おっ♥おぉ〃っ♥　ひぃいっ♥　はげしっ♥激しすぎ♥ますぅうっ♥」

「これくらいの方が好きだろ、シリカ」

「はひぃっ♥　すき♥すきです♥　おっぉお〃おっ♥　だいすきっ♥ですぅっうぅうう♥♥♥」

肉と肉が激しくぶつかりあい、ばちゅばちゅという粘ついた音を響かせる。カリ首によって掻き出された愛液が飛び散り、ぷしぷしと噴き出した潮がキリトの体を汚す。

周囲の森に響き渡るような鳴き声を上げながら、シリカは犯される快楽にひたすら溺れ続ける。形だけでも抵抗することを忘れた四肢でキリトの体に抱きつき、膣内を蹂躙される喜びに浸る。

「はひ♥お〃っ♥　ぁあっ♥あっぁあ〃ぁあっ♥　ちんぽっ♥おちんぽっ♥♥　あお〃っ♥♥　すき、すきぃひぃいっ♥♥」

突かれる度に鳴き、抜かれる毎に鳴く。キリトの動きによって完全に支配されたシリカのその様は、まるで肉棒によって演奏される上等な楽器の様だ。

遠慮の無いハードピストンでシリカを散々に狂わせ、悶えさせながら、キリトは更に速度を一段階上げる。

「お〃♥お〃おっ♥　あっ♥やだ♥やだぁぁあ〃♥♥　だめっ、だめだめだめぇぇえええっ♥♥　こわれりゅ♥お〃っ♥ごわれりゅうっ♥♥♥　こんにゃにされたらぁ♥♥こわ〃れちゃいまひゅうぅうぅぅうううう♥♥」

シリカの悲鳴にも構う余裕は最早無い。なにせ、キリトの肉棒は、射精に向けての阻止限界点をとっくに超えてしまったのだから。

そして、激しい前後運動の、最後の一突き。シリカの狭い膣道を支配し、小さい子宮口に鈴口をぎっちりと押し当てた瞬間――キリトは、溜まった精液を一気にぶちまけた。

「――――あぁあああああぁぁっ♥♥　いぃっ♥いぐっ♥いきゅうぅうぅう〃うぅう〜〜〜〜♥♥♥

やっ♥あぁぁあっ♥♥　おくっ♥奥すご――いひいいいいいいいいい

い♥♥♥　あっあっあっあぁぁぁぁあああぁぁあ～～～～～～っ♥♥♥」

びくびくと痙攣する小さな体を完全にホールドした上での大量射精。外側を体で抑え込み、内側を肉棒で抑え込み、一切の逃げ場を封じたまま放たれた精液は、狭い子宮口を一気に通り抜けてシリカの子宮に叩きつけられる。

キリトを抱擁する両腕とは対照的に、無理矢理に開かされたままのシリカの両脚は、爪先を天に向けた状態でびくん、びくんと震える。シリカの股座をほとんど真上から押しつぶすように深々と挿入された肉棒は、射精のために一層太さを増しながら、排水ポンプのように次々と精液を吐き出していく。

「っっあっ♥ぁあっ♥あぁぁあっ♥　あっ♥あ〝～～～♥♥あっあ〝～～～～っ♥♥♥　まらいく♥♥いきゅ♥♥いきゅううううっっ♥♥」

唇の端からは唾液を零し、股の間からは潮を噴き出し、シリカは何度も何度も絶頂に達する。四阿の周囲に広がる森に響き渡るその鳴き声が、シリカという一匹のメスケットシーがオスに屈服した事を証明する。

縄張りの支配権をシリカより譲り受けながら、キリトは気の向くまま、体の求めるままに射精を続ける。その間も腰を密着させ続け、一滴残らずシリカの子宮に注ぎ込んでいく。

そうして、長々と続いた射精がようやく終わりを迎えた頃。固いままの肉棒を栓の代わりにシリカの膣内にハメたまま、キリトはゆっくりと上体を起こした。

「――ふうっ……。ちょっとやり過ぎた……大丈夫か、シリカ？」

「――あひ……♥♥　あっ……あひゅ……♥♥」

大丈夫といえば大丈夫だが、どう見ても大丈夫ではない。

快感に意識を吹っ飛ばされ、焦点の定まらない瞳で虚空を見つめ、口からは舌と声にならない声をまろび出させ、時折ぴくっぴくっと体を震わせては余韻に溺れるシリカの様子は――だいたいそんな感じだった。

己がやった事の結果に苦笑しつつ、キリトは彼女の乱れた髪を手で整え、頬に軽い口付けを落とす。そんな風に後戯を楽しんでいると、どこかから木々の枝が揺れ合うような物音が聞こえた。

「――っ!?」

物音のした方に視線だけを向ければ――そこにいたのは、シリカ同様に大きな猫耳を生やした少女が二人。

「そ、そんナ……!!　まさか、うちのシリカがこんなに簡単にヤられるなんテ……!!　いったいどんな手を使ったんダ……？」

「……さすがに白々しすぎない？　それ」

仰々しい演技で驚いてみせるケットシーの少女・アルゴ。それを冷ややかな視線で見つめているのも、同じくケットシーの少女・シノン。

どこかで水浴びでもしてきたか、あるいは今から一泳ぎしにいくつもりなのだろう。布を結んで作れるようなセパレートタイプの水着を着た二人は、キリトがシリカの膣内から肉棒を抜く間も無いほどにそそくさと近づいてくると、そのまま四阿へ上がった。

「よう、シノ――んうっ!?」

するりとキリトの隣へとやってきたシノンは、文字通り有無を言わさずキリトの唇を塞ぐ。ぷるぷるとした己の唇で。そのまま舌を差し込み、キリトの口内へと一気に攻め込む。

「わー……シノンって、時々大胆になるよナ……」

驚き半分、呆れ半分といった様子のアルゴが見つめる中、キリトはシノンと情熱的な口付けを交わす。弓のように細くしなやかな体を片腕で抱き寄せ、ぬちゃりぬちゃりと唾液の音を響かせながら舌を絡め合う。

口付けの中に入り交じる吐息の熱さが、シノンの興奮を伝えてくる。おそらくはアルゴと一緒にどこかに隠れて、シリカの交尾をのぞき見していたのだろう。彼女の腰を抱き寄せたまま、キリトは指先だけを動かし、シノンの水着をストレージの中へ強制格納する。

「――ふふっ……♥　ん……♥」

装備を剥がされ、生まれたままの姿に剥かれる時の感触。それを楽

しみながら、シノンは舌を絡め続ける。発情した体をキリトにしなだれかからせ、肌を擦り付ける姿は猫のようであり、そして先程までのシリカの様子とよく似ていた。

なお、こうした熱烈な求愛行動は、ケットシーの群れがオスに支配された際によく見られる。いち早くオスに体を差し出すことで、己も同じ群れの一員である事をアピールしつつ、オスが群れを見限り去ってしまう事を防ぐ為の本能的戦術と言われている。

アルゴの視線を感じながら、シノンとキスを楽しむこと暫く。ようやく満足したのか、シノンはゆっくりと舌を戻し、口付けを解いた

「んぁ……♥♥　……ふふ♥　キリト、驚いた？」

「十分に驚いたよ、シノン……。それにしても、今日はなんだかいつもより積極的だな……」

「私だって、たまにはそういう気分になるのよ。

それにほら、ケットシーっていうのは『そういうもの』らしいから……ね？」

楽しむためにでっち上げたケットシーの種族特性を当てこすりつつ、シノンは指先をキリトの口元にそっと触れさせる。そうして、キスの合間にこぼれた唾液を掬い取ると、そのままぺろりと舐めとった。その仕草も、艶めかしい舌も、何もかもが淫靡で愛おしい。

「ほら、キレイにしてあげるからそっちに座って。いつまでも中に入れっぱなしじゃ、シリカが感じ過ぎちゃって休憩もできないわよ」

悪戯っぽく微笑むシノンに促されるまま、キリトはゆっくりと腰を引く。シリカの中に納められ続けていた肉棒は勃起状態を維持し――いや、むしろディープキスによってより一層興奮させられいきり立っている。

栓となる肉棒を失ったシリカの膣内からは、固まったクリームのように濃厚な精液がどぷりと逆流しだす。子宮口を押さえ込んでいた亀頭に付着した精液の残滓と、肉棒を包み込む愛液の量の多さに、脇で見ていたアルゴが感嘆の声を漏らす。

その声にならない声を聞きながら、キリトは床に座り直した。

「いつみても……本当、女の子っぽい顔に似合わず凶悪よね。あなた

の」
「褒め言葉として受け取っておくよ」
「そうしておいて。まあ、最近は顔の方もこっちに似合った感じになってきた気がするけど」
胡座をかいて座るキリトの正面に陣取りながら、シノンが軽口を叩く。
四つん這いになって上半身を低くし、尻を突き上げた女豹のポーズ。挑発的な光を宿した瞳、美しい背中とヒップラインを見せ付けながらゆらりゆらりと揺れる尻尾は、まさに獲物を襲わんとするハンターを彷彿とさせる。
一歩、また一歩と焦らすように近づいてきたシノンは、鼻先を亀頭のすぐ側に近づけ、ゆっくりと息を吸い込む。
「……ふふっ♥　すっごく濃い……♥♥　メスを征服して、孕め、孕めって好き放題種付けしたオスのちんぽの匂い……♥♥」
上質なワインを味わう時のように、鼻腔を通り抜ける香りを堪能する。鼻から深く息を吸い込むことで、体の内側全てにキリトの匂いを染みつかせるように。
そうして暫しの間肉棒の香りを嗅いだあと、シノンは本来の目的を果たすべく、肉棒の先端にそっと口づけた。
「ん……♥」
唇がほんの一瞬触れるだけの軽いキス。それですら、濃密な精液の残滓が貪欲にシノンの唇にまとわりつく。唇に付着した、製造者に似て好色な精子達を、シノンの舌がぺろりと舐めとった。
「……美味し♥」
エロティックな笑みと声音が、キリトを挑発する。その淫靡な微笑みを湛えたまま、シノンは大きく口を開いて肉棒を先端から咥え込む。口内から喉奥までを思い切り開いたまま、キリトの股座に顔を埋めるようにして肉棒を飲み込んでいく。
口内の様子を見ることはできないが、精子を求めるシノンの舌が肉棒の表面を丹念に這い回っている事は感触で理解できた。
「んっふ……♥♥」

熱い吐息を漏らしながら、シノンはゆっくりと片目を閉じてウィンク。そのままずぶずぶと顔を前へと進ませて肉棒を元まで飲み込むと、今度は逆回しの動きで顔を引く。痕跡一つ残さない丹念な後始末――に見せかけた、次の一発を搾り取るための動き。頬を窄めて顔を前後させる度に肉棒を刺激し、『私の口の中に射精しろ』と強く促し続ける。

片手を彼女の頭に触れさせ、尖った大きな猫耳にそっと触れる。普段そんな事をしようものなら、烈火の如き怒りと共に火矢の嵐が飛んでくるのだが――こうして睦み合っている時だけは例外だ。

「――それにしても、さっきのは凄かったナ。シリカもあれじゃあ形無しダ」

「よう、アルゴ」

するりと近づいてきたアルゴを片手で抱き寄せたキリトは、そのまま彼女と唇を重ねる。差し込んだ舌先は大した抵抗もなくアルゴの口内へと導かれ、待ち構えていた彼女の舌と絡み合う。

アルゴの舌が奏でる、ぬちょぬちょとしたディープキスの音。シノンの口が響かす、ぐぽぐぽとしたディープスロートの音。二匹の牝猫達の口を思うままに使うその姿は、まさに群れの王。

「んんっ……ぷふぁっ……♥　こんなキスされたら、オネーサンおかしくなっちまうヨ……♥」

唇を一度離す頃には、アルゴの瞳は熱に浮かされきっている。とろん、とした恍惚の表情に興奮させられたキリトは、何度も何度も続けざまにアルゴの唇を奪い、舌を絡めては唾液を流し込んでいく。

ほとんど無意識に動いたキリトの手がコンソールウィンドウを操作し、アルゴの水着を装備解除させるが、キリトもアルゴもそれには気付かないほどキスに夢中になっていた。

「はっ、ぷはあっ……へへっ、キー坊……♥　そんなにオネーサンが欲しいのカ……？」

「ああ、欲しい。アルゴのことが欲しい」

「……そ、そこまでドストレートに言われると流石に照れるナ……」

羞恥心とキスの熱によって頬を真っ赤に染めたアルゴは、キリトに

ぎゅっと抱きつくと胸板の上に頬を寄せた。見下ろすキリトの視界に映るのは、乳首に舌先を這わせてちろちろと弄ぶアルゴと、肉棒の根元から先端までを行き来しながら激しいディープスロートを繰り返すシノンの姿。二人による奉仕を堪能しながら、キリトはアルゴの尻とシノンの頭をそれぞれの手で撫で回す。

「そうだキー坊。オネーサンのことを欲しがってくれたお返しに……いいこと教えてやるヨ」

「いいこと？」

「ああ。キー坊がまだ知らない、ケットシーの種族特性についてダ♥」

胸板から鎖骨、首筋から頬を舐め上げながら移動したアルゴの唇がキリトの耳元へと辿り着く。その唇が紡ぐのは、ケットシーだけが持つ淫らな本性。

曰く、『ケットシーはファーストキスを捧げたオスの事が好きで好きでたまらなくなる一方、他のオスは一切愛せなくなる』。

曰く、『ケットシーがちんぽを咥えるのは求婚のサイン』。

曰く、『オスに身体を触れられたケットシーは、体が勝手に排卵して子作り準備を始めてしまう』。

曰く、『ケットシーにとって、群れのオスに体を求められることはこれ以上ない栄誉』。

曰く、『ケットシーの子宮は、最初に膣内射精してくれたオスのちんぽと精子の匂いを完璧に覚え、生涯忘れることは無い。それはオスに一生を支配されるのと同じ』。

「ケットシーってのは律儀な種族だからナ。最初に膣内射精（マーキング）してくれたオスの精子でしか孕めなくなるし、万が一他のオスのちんぽを入れられても絶対に気持ちよくなれないんダ♥

どうダ？　オネーサン達、手元に置いて飼い慣らして、ペットにするにはぴったりだと思わないカ？」

「確かに……。それにしても、どれもこれも知らない話ばっかりだな……」

「ふふんっ、そうだろそうだロ？　なんてったって、オイラが苦労して集めてきた情報ばっかりだからナ♥」

アルゴは情報屋である。それも、相当に信頼性の高い情報を取り扱うタイプの情報屋である。彼女が提供する情報に誤りが含まれていることはほとんど無いし、ましてや意図的にウソを混ぜることはありえない。

つまり、どんな内容であろうと――アルゴの語る情報は全て真実なのだ。

「あーあ、シリカも気の毒にナ……♥　キー坊の、どろっとぶっ濃くて重たい精液で子宮を完ッ璧にマーキングされちまっテ……♥　もう、キー坊とキー坊のケットシー殺しのでかちんぽに一生を支配されちまったようなもんじゃないカ……♥♥

シノンもシノンで、あんなに夢中になってキー坊のちんぽしゃぶってやがるシ……♥」

ぐったりとしたまま股穴から精液を逆流させるシリカの姿を横目にアルゴは揶揄を重ねる。

オスに媚びる言葉に、そしてシノンの口と舌を使った巧みな奉仕によって、射精欲求が一気に高まる。もはや理性では抑え込めないほどに。

「ほらイケ、イケ♥♥　我慢しなくていいぞキー坊♥　シノンの口の中に思いっきりマーキングする所、オネーサンがここでしっかり見ててやル♥♥

シノンの口まんこ使い倒して、喉から胃袋までぜ～んぶザーメン漬けにしちまエ♥♥」

アルゴが耳元で煽るのに合わせ、シノンの動きが一層激しくなる。言葉を紡ぐより肉棒を舐め回す方を優先する口の代わりに、キリトを見上げる空色の瞳が射精を乞い願う。我慢の限界だった。

「――シノン、そろそろ……射精るっ！」

抑えが決壊する瞬間、シノンは顔をキリトの股座へと密着させるようにして肉棒を根元まで深々と咥え込む。思わず力が込もってしまったキリトの手がシノンの頭を押さえ込み、シノンの密着度合いを更に上げて逃げ場を奪う。

そして、次の瞬間。我慢の限界を越えた射精が、シノンの喉奥を

襲った。

「――んんんっっっ!??!　んっ♥♥　んぶぅっ♥♥　お〝ぶうふっ♥♥　ん〝ぅぅん〝ぅぅぅぅっ♥♥」

シノンの食道をぐぐぐっ、っとこじ開けた肉棒がポンプのように膨張と収縮を繰り返し、溜まっていた精液を一気に送り込む。自らキリトの脚の間に顔を埋め、更には手で頭を押さえ込まれたシノンに、それから逃れる術はない。

シノンは必死になって喉を広げ、送り込まれるどろどろとした白濁液を嚥下し続ける。胃袋目掛けて殺到する精子達が通り抜ける度、鼻に抜ける吐息は強烈な精臭を伴い、シノンの嗅覚をイジメたおす。

「んぶっ♥おっぶぅぅっ♥♥　んぐ、ぐぅっ……♥♥」

ともすれば溢れ出しそうになる精液を、シノンは頬袋に餌を溜め込むリスのように口内を全て使って受け止め続ける。ねっとりと絡みつく濃さを誇るオスの体液を少しずつ飲み込み、己の一部として吸収していく。『吐き出す』、『零す』、『溢れさせる』という選択肢はもとより存在しない。何故なら、彼女もまたケットシーのメスなのだから。

「ふーっ♥ふぅーっ♥　んっ、んぶぅ♥　んっぐ……♥　ふうっ♥ふひぅっ♥♥」

肉棒によって口を塞がれている以上、シノンが呼吸に使えるのは鼻腔のみ。息を吸えば肉棒と陰嚢から立ち上るオスの香りに酩酊させられ、息を吐けば胃袋から駆け上る精液の臭いに陶酔させられる。他種族より秀でた五感を持つケットシーであるが故に、暴力的なまでのオスの精力にねじ伏せられる快感をより一層強烈に感じ取ってしまう。

キリトがようやく射精を終える頃、シノンの頭と意識は、くらくらとする程の悦びにすっかり支配されていた。

「――ふうっ……」

シノンの頭を抑えていた手の力を弛めつつ、キリトはシノンの口の中からゆっくりと肉棒を引き抜く。太い軸をずるずると引き抜きつつ、ほとんど無意識に亀頭だけを残して動きを止めれば、シノンもまた無意識に亀頭に吸い付いて残った僅かな精液を吸い取り、舐めと

る。

最終的に露わになった肉棒に残っているのは、激しい前後運動で泡だったシノンの唾液だけだった。

「さて……うん、偉いぞシノン。全部しっかり飲めてるじゃないか」

「あたりまえでしょ……♥」

今まで何回飲み干してきたと思っているのか――そんな満足げな笑みを浮かべるシノンの顔に手を添え、キリトは彼女の口を開かせる。健康的な色をした舌が蠢く口内には、上下に並んだ歯を除けば白い物は何一つとして無かった。

しっかり処理してくれた礼代わりに彼女とキスをしようと、キリトはシノンの体をそっと抱き寄せる。そして、唇を近づけ――。

「ダメ」

唇にぴたりと押し当てられたシノンの人差し指が、唇同士が重なる寸前でキリトを押し止める。きょとんとするキリトを見上げ、シノンはくすくすと笑いながら指先を離す。

「キリトの気持ちは嬉しいけど……まだ、口の中をきれいにしてないもの。そんな状態じゃキスしたくないわ」

「俺は別に気にしないけど……」

「わ・た・し・が・気・に・す・る・の。

あんただって、リアルでアスナとキスする前は自分の口の状態を気にするでしょ？　匂わないかとか」

「……まあ、それは気にする」

「それと一緒。『いつだかシノンとキスした時、精液の味が残ってたな』……なんて思われるなんて死んでもゴメンなのよ。わかった？」

「よ、よくわかりました、シノン様……」

「よろしい。というわけで……いいかしら、アルゴ」

「しょーがないナ」

手招かれたアルゴがシノンと唇を重ね、飲精後のアフターケアという名のディープキスを開始する。シノンはアルゴの口内に擦り付けるように、アルゴはシノンの口内をこそげ取るように、舌を絡め合う牝猫は精液の残滓を求めて舐り合う。時折、キリトの方に向ける挑発

的な視線がまたイヤらしい。
　そんな二人の姿に否応なしに興奮させられながら、キリトはシノンの後ろ側へと移動する。視界に映るのは、ぴん、と伸びたシノンの尻尾。美しい丸みを帯びたヒップ。フェラチオで興奮したのか、既にたっぷりと蜜を溢れさせる縦筋。その全てを露わにするように、シノンは膝を立てて尻を突き出していた。
「――ふはあっ……♥」
　アルゴとのキスを終えたシノンが、上体を少し捻ってキリトの方に顔を向ける。その美貌に浮かぶのは、交尾欲求に満たされた蠱惑的なメスの笑み。その笑みを見ているだけで、力尽くで蹂躙して犯し尽くしてやりたくなるのは、きっとシノンの内なる希望が滲み出ているからなのだろう。
　背後から覆い被さったキリトは、まずは先程のリベンジとばかりにシノンの唇を奪う。さしものシノンも、今度は一切抵抗しない。アルゴの『おーおー、早速二人の世界に入りやがっテ』という揶揄も気にせず、ただひたすらキスに溺れて互いの舌と舌を絡めあい、求め合う。
「んっ♥ぁあっ♥　はふ♥」
　右手でシノンの頭を抑え、左手はシノンの左手に上から重ねて指を絡める。そうしてシノンの体を上からしっかりと抑え込んだキリトは、彼女の唇を塞いだまま逸物をシノンの蜜壺へと宛てがい――そのまま、ぐっ、と押し込んだ。
「――んんぅっ♥♥　んぅううっ♥　ふぅうっ♥♥」
　重なる唇の合間から漏れるシノンの喘ぎ声をＢＧＭに、肉棒は奥へ奥へと突き進む。みちみちと締め付ける膣肉は肉棒の存在にすっかり慣れきっており、愛液をたっぷりと垂れ流しながらオスの柱に貫かれていく。少しだけ体重をかけながら、キリトはじっくりと挿入を続け、そしてシノンの一番奥を押しつぶすようにして己の分身を根元まで埋めた。
「んっうぅ♥ううっ♥きゅふううっ♥♥」
　経産婦でもないというのに、まだ１０代という若さですっかり開発されきった子宮口（ポルチオ）を責められたシノンの体がびくんと跳ねるが、キリ

トの体は微塵も揺るがない。シリカの時同様、牝猫の膣内に肉棒を深々と埋め、杭のように固定して上下関係を叩き込む。

繰り返して言うと、ケットシーにとっての交尾（セックス）とはただの繁殖行為ではなく、群れの中での上下関係を決める行為でもある。無論、群れ全体は既に雄（キリト）の支配下にあるが、群れを構成するメス一匹一匹に対して肉棒には抗えないことを教え込んでやるのも重要な通過儀礼（イニシエーション）なのだ。

「う〝んっ♥ふゅぅうんっ♥」

ずんっ、ずんっ、と力強く子宮を押し上げてやる度にシノンは甘い鳴き声を漏らす。肉棒を通じて伝えられる支配宣言に雌穴はあっさりと屈服し、シノンの脳髄にまで快楽を響かせ悶えさせる。

根元まで埋めた肉棒を突き刺してシノンの体をしっかりと固定したキリトは、シノンとの口付けをそっと終えた。

「――っ、はあっ。はあっ……♥　キリトお……♥」

唾液の橋がぷつぷつと千切れていく中、シノンは蕩けきった瞳でキリトを見上げる。普段の少しクールな、それでいて余裕と茶目っ気のある彼女からは想像もできない、甘く爛れて快楽に満ち満ちた視線が艶めかしい。

シノンの頭に生えた猫耳を指先で弄びながら、キリトは彼女の耳元――顔の横、本来の耳があるあたり――に、そっと囁く。

「これで、シノンは俺の物だ……。この先何があっても、誰にも渡さないし手放してもやらないからな。覚悟しろよ？」

「……バカね。今更言われなくても、私はとっくにあんたのものよ……♥」

肉棒による言外の支配宣言に加えた、キリト自身の声による支配宣言。そんな悦びを与えられて、耐えられるケットシーがどこにいようか。

種族特性に――否、自分自身の欲求に抗えなかったシノンは、恍惚の笑みを浮かべて頷く。

「だから、ちゃんと理解させてほしいの……♥　私の体は、キリトのおちんぽに支配されて、キリトの赤ちゃんを孕む為のモノだって……♥

♥」

「よし、任せろ。シノンが俺のモノだってこと、シノンの体にしっかり叩き込んでやる」

快楽に酔い、甘えを含んだ声で紡がれるシノンの願い。普段はなかなかこうした姿を見せてくれないシノンに、キリトははっきりと頷く。そして、止めていた腰をゆっくりと動かし――力強い抽送を開始した。

「あっ――あぁああっ～～～♥♥　あっ♥　おぉ♥　ひうぅうぅっ♥♥」

ずぱん、ずぱん、と。尻を打擲するかの如きピストン運動によって膣内を蹂躙されたシノンが快楽に喘び泣く。森中に響き渡るその声が、ここが全てキリトという一匹の雄に捧げられた縄張りであることを主張する。

それは同時に、シノンという一匹の雌がキリトへの捧げ物であることも示していた。

「あぅ♥ぁあああっ♥♥　やっ、やぁああっ♥♥　おっき、おっきぃいのぉ♥♥　キリト、キリトおっ♥♥

やっ♥ああっ♥♥ああぁあっ♥♥　そこ、ばっかり♥♥はああっ♥♥　するのっ、ずる――いぃひいいっ♥」

「なるほど、『そこ』ってのは……このあたりだな！」

「～～～～～あぁあああああっ♥♥　あっあ――やああぁ　ぁあああっ♥♥」

一際敏感な膣奥に固く張り出した亀頭をぐいと押し込まれた瞬間、シノンは甲高い喘ぎ声と共に潮を噴いた。

キリトはシノンの身体をそっと組み敷いたまま、彼女を襲う快楽の波が引くのを待ち、そして再びシノンの性感帯を責め立て続けていく。恋人達がするセックスのように優しく、甘く。動物達がする交尾のように激しく、容赦なく。

淫水灼けした太い肉棒を、引き抜き、押し込む。その度にシノンの雌穴は肉棒に本気汁を纏わせながらびくびくと震え、交尾の悦びを教え込まれていく。普段は獲物をはっきりと捉えるその双眸も、今は焦

点が合っているかどうかすら怪しい。
「はひゅっ♥はあっ♥はあっ……♥」
「シノン……また激しくするぞ」
「へ、まッ――ぁあっ♥　やあぁあああ〝っ♥♥」
片手でシノンの猫耳をくにくにと弄り回しながら、キリトは腰を叩きつけるように使い、肉棒でシノンの蜜壺を責め立て続ける。もう片方の手をシノンの指に絡めているため愛撫などはしてやれないが、その分を補うように膣内をごりごりと擦り上げ続ける。
「あっぐぅ――あ〝っ♥あっぁあああ♥あっ♥あ〝～～っ♥♥　い、イッたばっかり♥なの♥にぃっ♥♥　いや、いやあっ♥♥　またイっ、い〝――」
「好きなだけイけ、シノン。何回でも何回でもイかせてやるから……なっ！」
「――ひぁああっ♥♥あ〝っ♥あぁあああ〝っ♥　あ〝っ〝ん〝ぉおっ――あっああ〝ぁあああ〝っ♥♥」
絶頂寸前のシノンにタイミングを合わせて、強烈な突き込みを見舞う。それが最後の引き金となって、シノンは強烈な絶頂の中に叩き込まれる。口の端から零れた唾液、抑え込まれた身体から染み出す汗、ぷしゃぷしゃと噴き出す潮が床の敷物を濡らし、数多の染みを造っていく。
むくつけき《ＧＧＯ》プレイヤーなら誰もが見惚れるシノンの尻を押し潰し、ヘカートⅡのトリガーを引く指先と指を絡め合いながら、氷の狙撃手を蕩かし啼かせて悶えさせる。一度や二度ではなく、何度も、何度も。
背後からアルゴの『えげつナ……』という声が聞こえた気がするが、今更そのような事を気にする理由もない。
「～～～♥♥　く――ううっ♥♥　あっあっあああ～～～♥♥　キリト、キリトおっ♥　だめ、これ、こわ〝れ〝る♥　変に、へんにぃ〝っな――ぁあああ～～～ぁっ♥♥」
激しく責め立て、シノンを登り詰めさせる。シノンが登り詰めたら、その間は少しペースを落とす。シノンの意識と感覚が降りてきた

ら、再び激しく責め立てる。この繰り返しに緩急を織り交ぜながら、シノンをよがり狂わせ続ける。普段は冷静で、どこか余裕があって、それでいてからかうと可愛らしい反応を返してくれるシノンを、圧倒的な快楽で塗りつぶし続ける。

終わりがくるとすればそれは、陰嚢の奥で滾る精液達が臨界点に近づいたサインを、キリトの脳髄が受け取った時だけだ。

「んぐぁあぐっ♥♥　んおぐっ♥♥　やっ♥♥あぁぁあああっ♥♥」

「そろそろ出すぞ、シノンっ……!!」

「だ、す――あっんぅっ♥ああぐっ♥　だめ、いま、だめえっ♥♥　今は、やっ♥あぁあああああっ♥♥　だ――めぇっ♥　やあぁあっ、だめだからぁあああっ♥♥」

屈服した子宮が子種を待ちわびる。征服された膣肉が肉棒に奉仕する。

キリトの膣内射精宣言に抵抗するのは、絶頂と回復の波状攻撃で理性が砕けかけたシノンの精神が発する言葉――抵抗虚しくオスの遺伝子で膣奥にマーキングされるという敗北の悦びを味わう為の、そしてメスの抵抗を物ともせず子宮に己の遺伝子を植え付ける勝利の喜びを味わわさせる為の、最高のスパイス。

それが証拠に、シノンの細い脚は膝裏を使って下からキリトの太股を挟む。拒むのではなく、もっと強く、しっかりと抑えつけて欲しいと乞い願う。

その無言のおねだりに導かれ、キリトは最後の一突きを――シノンの奥深くにずっぷりと押し込み、そして今か今かと待ちわびていた精液達を一気に解き放った。

「――あっあああぐぁあっぁあぁああ～～～～～～～♥♥♥　やっ――ふひゅっ♥♥いや♥♥やっ♥いやあぁあああっ♥♥　おっくっ♥おぐぅ♥　やら、いっぱい、なっちゃ――ぁあぐぁあぐぁあ～～～あっ♥♥」

狙い定めて貫くのはスナイパーの専売特許。とはいえ、射精寸前のギリギリの状況下で子宮口に鈴口を押し当てて精液を漏らさず流し込む道筋をつけるのはキリトの得意分野である。

受精目的で降りてきたシノンの子宮に押し当てつつ痛みは与えない――ペインアブソーバーがあるとはいえ――ギリギリのラインを保ちながら、大量の精液を容赦なく吐き出していく。

「あ〝お〝っおぉおおおっ♥♥　あっあ〝あぁああ～～～ぁああ〝あぁあっ♥♥♥　いっぐ♥　イ〝かひゃれ〝――やっあああぁああ♥♥」

シノンの膣肉は支配者にへりくだり、あらゆる手段を使って媚びながら奉仕する。脈動する太い肉の柱が精液をより気持ちよく送り出せるように膣肉で締め付け、メスの身体を征服した証の代わりにたっぷりと淫水を纏わせる。

噴き出した潮で自らの股座を濡らし、空色の瞳が茫洋とした性交の快楽に溶けていく。口がだらしなく開き、舌を伸ばすその姿――氷の狙撃手という異名からはほど遠いその姿を見られるのは、彼女と閨を共にする権利を持つ者だけだ。

「あ〝ぁ――あ〝は……♥　はぁ、はあっ……♥♥　んんっ、ふう……ふう……♥」

シノンの甘い吐息と声を堪能し、シノンの淫らな振る舞いを楽しみ、彼女の身体を組み敷く特権を愉しみながら、キリトは射精を続ける。この島に来てから何度目の射精になるか最早覚えてすらいないが、放たれる精液の量も濃さも一切衰えていない。

今し方シノンの膣内にて行った射精も、現実なら一発でシノンを孕ませている程の量であることは間違いない。シノンもそれを本能的に理解しているだろう。

「――んんっ♥♥」

ヒクつくシノンの身体を上から抑え込みながら、キリトは改めて彼女と唇を重ねた。

激しく求め合うのではなく、ただゆっくりと、愛情を確かめ合うように優しく舌を絡ませる。もちろんその間も、肉棒はシノンの膣内に挿れっぱなし。獣たちの交尾のように、受精確率を上げるために蓋をしながら、形を、臭いを、感触を――オスの全てを刻み込んでいく。

最初に膣内射精してくれたオスの事を決して忘れず、愛し続けると

いうケットシーの特性は、まるで誰かがそう誂えたかのようにシノンと――そして、シノンの愛する男の閨に侍る数多の女達の特性とよく似ていた。

（……さすがにヤバい気がしてきたナ）

眼前で行われている種付け交尾の様相を横から眺めながら、《鼠》のアルゴは秘かに危機感を抱いていた。

（これ。もしかしなくてもキー坊をオレっち一人で相手するのカ……？）

危機感の原因。それはもちろん、目の前でシノンの膣内にたっぷりと精液を吐き出している《黒の剣士》である。

相変わらずそこで伸びているシリカや、たった今戦闘不能にされたシノンと同じ後宮仲間（ハーレムメンバー）となって、アルゴは日が浅い。キリトとの出会いはその二人よりよほど早い――というか、リーファの次くらいには早いのだが、色々ありすぎて男女の関係になるのは遅かった。

そこで問題になってくるのが経験値の差だ。

（潰されル……オネーサン、間違いなくハメ潰されル……）

キリトは絶倫である。

アルゴを含めて今や16人いる女性陣全員と一日中交わって、全員腰砕けにする程度には絶倫である。リアルワールドでの行為であれば、全員最低3回は孕まされているだろう。アーちゃん――もとい、アスナは10回くらい孕んでいる気がするが。

そのアスナ曰く、『アンダーワールドから帰ってきてからますますパワーアップしてるのよね、キリトくん』という事らしい。

もちろん、身体が本格的な成長期に入って身長が伸びて体格がよくなった事とか、アリスのマシンボディを抱え上げられる力を付ける為にリアルの肉体を鍛えている事も関係しているだろうが、主要因はそれらではないだろう。

（やっぱり一回死の淵を見たからなのカ……？　それとも、アンダー

ワールドで鍛錬しまくったからなのカ……？）

昔、アルゴは何かの書物で読んだことがある。生物は死を予感すると、自らの遺伝子を残すために精力や繁殖欲を大きく上昇させると。

少し前、キリトは毒物を盛られて死にかけ、その快復と脳の治癒の為に《ＳＴＬ》なる機械を用いてアンダーワールドへとダイブさせられていた。そうして約2年の歳月をかけて一端の剣士になったとアルゴは聞いている。それらの経験が相互作用し、キリトの肉体に何らかのフィードバックを与えているのではないか――それが、医者ならざるアルゴにできる精一杯の分析である。

まあ、『思春期ど真ん中の時期にナーヴギアなんていう機械をつけられ脳神経をダイレクトに刺激されまくる環境下で嫁さんとセックスしまくったから』というのも有力な説だ。『《ＳＴＬ》なんていう更にとんでもない装置に繋がれてアンダーワールドにいる間、あっちでもヤりまくってたんじゃないか？』という疑惑もあるが。

（牽制役（ストッパー）が必要ダ……。いざって言う時にキー坊を適度にコントロールしてくれそうな誰かガ……）

ここに来てからキリトが射精したのは3回。ウォーミングアップのようなものである。

シリカとシノンの援護は期待できない。そんな状態でこんな人目につかない場所でキリトに貪られては、アルゴがどうなるかは火を見るより明らかだ。

ようやくシノンの膣内から引き抜かれた肉棒も、相変わらず立派に勃起している。見ているだけで『あっ、孕まされる』とメスの本能が直感する程に雄々しく、逞しく。本当ならシノンと2人で相手をする予定だったのだが、シノンが先行してしまったおかげでこの有様である。

（せめて場所を変えないとナ……。やっぱりあそこなら人数も多いし……感謝するヨ、キー坊。ファストトラベル機能を作っておいてくれテ）

過去に類を見ない速度でウィンドウを呼び出したアルゴは、指先をファストトラベルを実行するボタンのすぐ側に置く。あとはこれを

押せばいいだけだ。
「――なあキー坊。場所、変えないカ？」
幸せそうな顔で脱力するシノンとシリカの頭をそっと撫でていたキリトが、アルゴの方を向く。
「場所？　ああ、いいぜ。どこにしようか、アルゴ」
「ふふーン。実はもう決めてあるんダ」
シノンのした事を真似て四つん這いになって歩き、アルゴはキリトの側に近づくと、そのままキリトが組んだ胡座の上に座った。
「あっちで、オネーサン達と楽しいことしようナ♥」
「あっちがどっちなのかは知らないけど……まず『オネーサン達』じゃなくて、アルゴとじっくりな」
「……いいの カ？　じゃあ、そういうことデ……♥」
存在感のありすぎる固い肉棒の感触を下腹部に感じながら、アルゴはそっとキリトに口づける。少しだけ腹が立つ程にキス慣れしたキリトのテクニックを感じ、抱きしめられる背中の温かさを感じながら、アルゴはファストトラベル実行ボタンにそっと指先を触れさせるのだった。

14―6．（アルゴ）

プライベートリゾートアイランド・ティルナノーグ島。

島自体が一つの縄張りであるその島は、中央部にゲストハウスという名の『巣』を備えている。

『巣』とはすなわち、オスとメスが交尾を行うための場所。それを象徴するように、ゲストハウスの中央にあるリビングルームは床一面に柔らかい素材が敷かれ、どこで交尾に及んでも支障が無いように作られている。また、壁の一面をまるごと使った大型スクリーンには、常時誰かしらの痴態を収めた映像――今は『対魔剣ユウキ　裏切りと恥辱に穢された肢体は雌奴隷に堕ちる』――が垂れ流されていた。

罪は無いけど厄介者――そんな外来種として群れの仲間を美味しくいただかれ、そして自らも捕獲されてしまったケットシー・アルゴがファストトラベル先として選んだのも、この部屋の中だった。

（――あっ……これやばいナ……♥　ぎゅってされて、キスされてると……頭がどんどんバカになってくみたいダ……♥♥）

淫臭に満ち満ちたリビングルームの片隅に無造作に置かれた大型のソファ。そこにどっかりと腰を下ろしたキリトに背中から抱き竦められたまま、アルゴは長い長いディープキスに溺れていた。

キリトの片手によって顎を上げさせられ、逃げる事も許されないまま舌と唾液を絡ませる。年上の意地を以て興奮を隠そうと試みるも、ふーっ、ふーっ、という荒い鼻息が零れてしまってはそれも叶わない。

加えて、キリトはもう片方の手でアルゴの股座に指を突っ込み、小さな秘所をくちゅくちゅと弄くり回す。そこから溢れ出した愛液が、自身の下半身に滴り落ちていくのも気にせずに。

シリカとシノン――今は同じリビングで休んでいる――の交尾を見ていただけですっかりセックスの準備を整えてしまった蜜壺を、敢えてたっぷりとこねくり回す。

「んっんんッ♥　んぶっ♥♥　ふぅっ、ふーぅっ♥♥」

（なんで、こんナ……♥　自分でする時とは全然違ウ……♥♥　指、太くて……腰の奥がふわふわして変になるゥ……♥）

嬲られている。ゆったりと優しく、それでいてアルゴに間断なく快楽を与え続ける指の動きに、その事実を理解させられる。

仮にキリトが今すぐ極太の肉棒を押し込んでも、濡れそぼったアルゴの秘所はそれを容易に受け入れられるだろう。それでもキリトは本能的な交尾欲求を抑え、舌と手でアルゴを弄び続けていた。

それはさながら、獲物を生きたまま巣へと持ち帰った肉食獣が、逃げ場の無い穴蔵の中で獲物に儚い抵抗を試みさせて遊ぶように。

じっくり、ゆったりと。アルゴの内側にある弱い部分を指で擦り上げて昂ぶらせる。

（あっ……やっ、ヤバイ♥　これ、くるっ、くるぅ来るぅっ♥　ちんぽお預けされて、指ぃ、だけでっ……イっ、イかされ――）

自らの脚の間から響く、くちゅくちゅという発情の音。絡まり合う舌の間から聞こえる唾液の音。そして周りを取り囲むメス達のうらやましそうな視線を肌に感じる。快感から逃げようとしてか、アルゴが腰を浮かせる。その瞬間を待っていたかのように、キリトは彼女の秘所、その入り口付近を指できゅっと擦り上げた。

「――んんぅうぅうっ♥♥　んぶ♥んぐぅ♥　んむぅうぅうぅうっ♥♥♥」

発情しきった状態で敏感な部位を一気に刺激されたアルゴは、ぷしっと潮を撒き散らしながら達した。

浮き上がる腰ごと背中を反らしつつも、顔から上だけはキリトにしっかりと抑え込まれてディープキスを継続する。達したメスの鳴き声は言葉になることなく、ただキリトの口の中に響いていく。

やがて、びくびくと体を震わせていたアルゴが落ち着いたタイミングを見計らい、キリトは彼女の蜜壺から指を引き抜く。それと同時に、舌を解いて長いディープキスに一区切りを付けた。

「……はぁ、はあっ……♥♥　はひゅ、ひぅっ……♥」

口の自由を取り戻したアルゴは、肩を上下させて荒い呼吸を繰り返す。

絶頂から返ってきたばかりの敏感な体は、下で支えるキリトが僅かに手を動かしただけでぴくぴくと反応してしまい、口の端から小さな

喘ぎ声を漏らさせる。
　まるでアルゴ自身に生えているかのように、アルゴの脚の間から立派な姿を覗かせる肉棒。それを使うまでもなく、公衆（ハーレム）の面前であっさりとイかされた事に羞恥心と敗北感を掻き立てられる。
「ほら、アルゴ。見ろよ、こんなにドロドロだ」
「……っ♥♥」
　アルゴの眼前に差し出されるキリトの二本の指。それは今し方までアルゴの膣内を弄っていたもの。染み出た愛液と噴き出した潮――自らの発情の証をたっぷりとまとった指を見せ付けられ、アルゴの頬が一層赤く染まる。
　そうして暫しの間アルゴの反応を愉しんだあと、キリトはその指先を下げてアルゴの口元へと持っていく。当然のような顔でアルゴはその指先を舐めしゃぶり、愛液の代わりに唾液塗れにしてやった。
「んっ、ぷぁっ……♥　綺麗にしてやったからナ、キー坊……♥」
「よし、よくできました」
　幼子を褒めるような声音でふざけつつ、キリトはアルゴの口から指を引き抜くと、その手でアルゴの胸を軽く揉み拉く。どこか無造作なその手つきに『この女はオレのモノだ』と囁かれているようで、それがより一層アルゴの興奮を掻き立てる。その興奮のままにキスをねだれば、キリトはアルゴをしっかりと抱き寄せ、濃密な口付けを以て応える。
「ぁむ……♥　ふぅっ……♥」
　舌と舌を絡め合い、互いの唇を吸う。言葉にすればそれだけの単純な行為でありながら、アルゴはそこから抜け出せない。更にキスの最中に体を愛撫され、再び蜜壺をくちゅくちゅと奏でられ、より一層深い悦楽の中へと沈んでいく。
「んっんうっ♥♥　んんっ♥♥　ふやぁんっ♥♥」
（やばい、やばすぎル……♥　こんなの体に覚え込まされたら、キスだけでイく癖つけられちまウ……♥♥）
　先程味わった一気に登り詰めるモノとは異なるタイプの快感。体の奥深くから興奮を汲み出され、それを維持され続けるような甘イキ

の連続。ぴくり、ぴくりと震える体を抱かれながら、融け合うようなキスと共にその感覚を覚え込まされていく。

まるで媚薬ポーションで満たした風呂の中につけ込まれているかのように、アルゴは性感を高められていく。小さな体は反応を抑えきれず、肉棒を求めて腰をかくかくと前後させる。その光景は、壁面スクリーンにて上映されているユウキの痴態――キリトの肉棒にむしゃぶりつきながら腰を無様に揺らして必死の種付け（セックス アピール）おねだり――と奇妙なシンクロを見せ、それが更なる羞恥と興奮を呼び起こす。

キリトが再びキスを解いて彼女の唇を自由にしたのは、アルゴが腰を振っておねだりし始めてから暫しの時間が経過した後の事だった。

「はあっ♥　はあっ♥　はぁっ……♥♥」

「こんな所か……。そろそろいいかな」

衆目の面前でアルゴを散々辱めたあと、キリトはいわゆるお姫様抱っこの体勢でアルゴを抱え上げつつソファから立ち上がる。勃起した肉棒を隠すことも無いまま歩む先にあるのは、周りの雌達がこれ見よがしに用意したスペース。

枕代わりにするには手頃なクッションが置かれたその場所へ仰向けに寝かせられたアルゴ。クッションに頭を支えられて仰ぎ見る視線の先にあるのは、血管をびきびきと浮きだたせながら堂々と屹立した、太い肉棒。

（や、やっぱり無理ダ……♥　あんなでっかいモノ、オイラのナカに入るわけないッテ……♥♥

指だけであんなに気持ちよかったのにあんなの入れられたラ……♥　奥までごりごり入れられちまったラ……♥♥）

アルゴとて、キリトとセックスするのは初めてではない。後宮入りしたのは遅い方だが、それでも既に何度もシている。だというのに、改めて目の当たりにするその逸物の大きさに、アルゴは戦慄を禁じ得ない。

とはいえカラダは正直なもので、両手は脱力したまま無抵抗の意志を示し、両脚は左右に大きく開かれたまま、蜜を垂れ流す秘所を丸出しにして雄を待ちわびる。完全合意でレイプ待ちの体勢だ。

「さて、と」
キリトがアルゴの近くに腰を下ろせば、周りを囲む女達が愛欲の篭もった視線を向けてくる。
ルクスとシックスナインに耽るリズ。サチを指先で弄ぶアスナ。ようやく回復しつつあるシリカとシノン。そしてイーディスと共にロニエを腰砕けにするアリス。そんな彼女達が向ける『あとでね』という意志の篭もった熱い視線。
キリトが手を伸ばしてもぎりぎり届かない距離にいる女性達に『あとでな』と視線で返答しつつ、キリトはアルゴを可愛がってやるべく、まずは彼女の下腹部に己の逸物を乗せた。
「ひっ……♥♥」
己の下腹部から伝わる、熱く、そして重量感のある肉の感触。あの逸物でどんな風に乱れさせられてきたか――それを思い出してしまった子宮の奥深くから湧き出る期待が、アルゴに興奮と劣情を呼び起こさせる。
（嘘だロ……ちんぽ、キー坊のでっかいちんぽ……♥　どんっ♥……て乗せられただけで欲しくなっちまってル……♥
アレでめちゃくちゃにされたら絶対気持ちいいって、カラダが勝手に思い出しちまってル……♥♥）
ゴクリと生唾を飲み込んでしまったのは、困惑のためか、あるいは期待と興奮によるものか。
猫のような見た目で、犬のように息を荒くするアルゴを見下ろしながら、キリトは片手で彼女の細い脚を掴み、もう片方の手で彼女の腰を引き寄せる。そうしてオーソドックスな正常位の体勢を取り、ゆっくりと腰を引く。
肉棒の先端で狙いを定めるのは、もちろんアルゴの秘所。蜜を垂れ流しながら今か今かと待ちわびるその花弁に、張り出した亀頭をそっと押し当てる。
「じゃあ……いくぞ、アルゴ」
「あ、ああ……えっと、その、キー坊……。優しくしてくれよナ……？」
「ああ、わかった。なるべく優しくするからな」

（……あっ♥　これ、優しくしてもらえないやつダ……♥）

見上げるキリトの顔に浮かぶ表情に、アルゴは己の行く末を悟る。己の顔に浮かんだ発情と期待の表情には気付かないまま。

そして、アルゴが悟ったとおりの優しさで――キリトは腰をぐいと前に進め、太く雄々しい肉棒でアルゴの狭い膣内を容赦なく押し広げながら、そのまま最奥部まで一気に貫いた。

「ひあ――ふにゃあぁ〜ぁあ〜あぁあっっっ♥♥♥」

アルゴの発した鳴き声が、上映中のＡＶよりも更に大きな声で響く。視界はスパークしたかのように瞬き、細い腰はびくりと震えて浮き上がり小さな背中をしならせる。大質量をぶち込まれた雌穴の縁から愛液が溢れ出し、床へしたたり落ちて染みへと変わっていく。

「おおっ……アルゴのナカ、ぎっちぎちに締め付けてくる……！」

「はひゅ♥　はっ、恥ずかしいこと言うナァッ♥♥　はっ、はあっ♥♥」

一度絶頂すら迎えさせられるほどにじっくりと準備されたアルゴの体は、乱暴な挿入に対してもただひたすらに快楽だけを感じてしまう。その事をわかっていて力尽くで押し込んできたキリトの強引さが憎たらしいし、押し込んだら押し込んだで腰の動きを止めて、下腹部や脚を愛撫しながら今度は肉棒にじっくりと慣れさせる為の時間を作る気遣いもまた憎たらしい。

（ほっ、本当に全部入っちまっタ……♥　キー坊の、あんなにでっかいちんぽ……♥　オイラの中に全部入って……♥♥

広げられて、キー棒のちんぽにぴったりの穴になるようにされてくのがわかル……♥♥）

たとえ天井に鏡が無くても、自分がどれだけ蕩けた顔をしているのかは簡単に想像がつく。それを見られるのが恥ずかしくなり、アルゴは咄嗟に両腕で自分の顔を覆う。キリトの両手は己の下半身にあるため、こうすれば締まりと余裕を失った己の顔を見られることもない――その状況判断は、《鼠》のアルゴにしては甘いと言わざるを得なかった。

「――あら、隠しちゃうの？　アルゴ」

「ダメですよー、アルゴさーん。せっかくキリトさんとセックスしてるんですから、感じてる可愛い顔も全部見てもらわないと」
「……!?　シリカっ!?　シノンっ!?」
アルゴの両腕を掴んで引っ張り、無理矢理に顔を露わにしたのは同じ牝猫――今やすっかりキリトの側に与したシリカだ。その隣には、なんとも楽しげな笑みを浮かべたシノンの姿もある。
シリカに両腕を掴まれて頭の上で拘束されてしまっては抵抗のしようも無い。観念したアルゴは腕の力を抜いて、隠していた顔を露わにする。
数十秒ぶりに開けた視界に映るのは、相変わらずのキリトの姿と――その背後からキリトを抱きしめる、美しい金色の体毛を持つ牝猫の姿。
「アリスまでいるのかヨ……」
「ええ。私もあなた方と同じケットシーですから」
いつの間にか《ＡＬＯ》仕様のアバターで再ログインしていたアリスは、キリトの背中に体を密着させて抱きついたまま、男の首筋に軽い口付けを落とす。高潔なる猫耳騎士の顔に、発情した猫耳娼婦の笑みを浮かべて。
「ここで、シリカやシノン共々しっかりと見届けさせてもらいます。キリトの逞しいおちんぽがアルゴを散々に啼かせたあと、しっかりとマーキングして雄の務めを果たすところを……♥」
『マーキング』という言葉を教えたのはアスナだろう――そんな事を考えられるほどにアルゴが落ち着くのを狙い澄ましたようなタイミングで、キリトが徐に腰を引いた。
「――んひぃいいっ♥♥　きっ、坊っ♥　急に、なんデ……♥」
「いや、アルゴも大丈夫そうだったからさ。このままどんどんいくぞ」
「ま、待て――ぁぁあああっ♥♥　あっ♥おぉっ♥」
張り出したカリ首でアルゴの雌蜜をくみ上げるように腰を引いたあと、キリトはその腰を再び前に出し、肉棒をアルゴの膣奥深くへと突き入れる。
ごりごりと引き抜き、ずんっと突き上げる――ゆったりと力強いピ

ストン運動は、キリトにしてみれば互いの性感を徐々に高めていく為の準備運動のようなモノ。しかし、それを体の内側で受け止めるアルゴにとってみれば――。

「あぁあっ♥♥　あっ♥　やっ♥まぁっ、ま〝ってへェ〝♥♥」

（こんなっ♥こんなのおかしくなるウッ♥♥

キー坊のでかちんぽぉっ♥♥　内臓まるごと引っ張り出すみたいに思いっきりずりっ♥ずりっ♥ってして、どっちゅ♥どっちゅ♥って子宮にちんぽキスしまくってきやがルゥッ♥♥）

――まあ、当然ながら『準備運動』程度で済むはずも無い。

口を開きっぱなしにしたまま喘ぎ声を漏らす締まりの無い顔は、キリトはもちろんシノンやシリカ、アリス達にもしっかり見られており、それが余計にアルゴの羞恥心と興奮を加速させていく。

元から大して残っていなかったアルゴの余裕をひとしきり削った所で、キリトは腰の動かし方を変えた。押し広げて慣れさせる為の前後運動を止め、弱点を亀頭でぐりぐりと擦り上げていく動きへ。腰と腰の密着状態を維持したまま、アルゴの最奥部付近にある敏感なスポットをひたすらに責め立てていく。

「お〝――おお〝おおお〝っ♥♥　きひ、きぃーぼう〝っ♥♥　ぁあっあっあぁああ♥♥」

「アルゴ、これされるの好きだったよな？」

「ひぃ♥　すきっ♥　いや、ちがっ♥♥　すきっ、すきじゃにゃいっ♥♥　すきじゃ、なひィイイイッ♥♥♥」

幼子のようにイヤイヤと首を振って、アルゴは必死に否定する。その言葉が嘘であることは、一際甲高くなった彼女の喘ぎ声を聞けば自ずと分かる。それでもアルゴが抵抗するのは、相手に弱点を知られまいとする情報屋の本能のようなモノだろう。まあ、とっくに知られているので無駄な抵抗ではあるのだが。

背中を引き攣らせて快感に抗うアルゴを見下ろしながら、シノンは床に体を伏せるような姿勢を取ると、そのままアルゴの下腹部に顔を近づけた。

「アルゴったら、素直じゃないんだから……」

「えっ？　シノンさんがそれ言います？」
「……何か言った？　シリカ」
「いーいーえー。何も言ってませんよー」
「そう。それにしても……ふふっ……キリトのちんぽ、今はこの辺りまで届いてるのかしら」
　妖艶な笑みを浮かべたシノンがキリトを見上げながら、アルゴの下腹部――亀頭の先が届いているであろう辺りの上に口づける。そのまま二度、三度と。くすぐったい感触を肌に与え、子宮を外部から意識させる悪戯でアルゴを更に刺激する。
　擬似的なポルチオマッサージによって内と外から責め立てられるアルゴの鳴き声を聞きながら、シノンは口付けを重ねていく。
「んっ、んぅっ……♥　アルゴの声、もっと聞かせて……♥」
　蠱惑的な猫耳娘（シノン）の視線が、キリトの耳と首筋を丹念に舐め回していた猫耳娘（アリス）の視線と偶然にぶつかる。
「シノン。大変言いにくいのですが……」
「……？　何かしら、アリス？」
「もう少し上の方に口づけるべきではありませんか？　キリトのちんぽは――とても立派で、雌を簡単に平伏させてしまうほどに逞しいのですから」
　視線こそシノンに向けながら、言葉はキリトの耳へ。オスを褒めそやし昂ぶらせるための燃料を、キリトの鼓膜にそっと流し込んでいく。
「――確かに、それもそうね。いつものあの大きさからすると……この辺りかしら」
　素直に頷いたシノンは、アルゴの下腹部を舌で舐め上げながら位置を移動する。唾液の痕を残しながら辿り着いた先は、小さく隠れたアルゴの臍。アルゴの腹に顔を埋めるようにしながら、シノンはその窄まりに舌を差し込んでぐりぐりと舐め回し始めた。
　日常生活ではほとんど刺激しない部位に与えられる未知の感触と、身体の内側から昇り来る既知の快楽に翻弄されてアルゴは身もだえする。その様子がシノンとキリトの嗜虐心に火を付け、更に責めを加

速させていく。
「んひぁあっ♥　しのっ、シノンっ♥♥　そんにゃ♥あひぃっ♥　そんにゃとこっ、なめるナァッ♥♥」
（な、なんだこレ……♥♥　おへそをくりくりってされると、くすぐったくて、キー坊のちんぽでごりごりされるのと頭の中で混ざり合ってク……♥♥
やばい、やばイィッ♥♥　こんなの、またイかされ――だめ、だめぇえぇえっ♥♥）
連続で絶頂を迎えさせられる事に思わず抗うアルゴ。その儚い抵抗をあざ笑うように、キリトの肉棒がアルゴの膣奥を擦り上げた。
「やら〝ぁ〟っ♥　ちんぽ♥ぎもちぃいの♥やだぁっ♥♥　いっ、イッ――きゅぅう〝うぅぅ♥♥　あっ♥はぁあぁぁあああっ♥♥」
臨界点を超えたアルゴは、背中を弓のようにしならせながら絶頂へと至った。電撃でも浴びせられたかのように身体は痙攣し、視界はちかちかと明滅する。意識と理性はぼやけ、ただ快感だけが脳内を満たしていく。
びくびくと震えて強張る四肢はシリカとキリトによって抑え込まれており、最早形ばかりの抵抗すらも叶わない。
「はひゅっ♥　ふひゅーっ……♥♥　ひぃっ、ひいっ……♥」
汗が溢れ、荒い息が零れていく。やがてその四肢からゆっくりと力が抜けていき、同時にシノンがアルゴの身体から、そしてアリスがキリトの背中から離れる。
交尾におけるオスの最も大事な仕事――射精。それを恙なく終えさせる為に。
「じゃ、あとはよろしくね。キリト」
シノンに促されるまま、キリトはアルゴの両脚を抱え込ませるようにして押し上げ、同時に腰を前に進めながら上体を倒す。いわゆる『まんぐり返し』の姿勢になったアルゴの両脚を自らの脚で抑え込み、上から体重をかけて尻肉を押し潰す。
雌から一切の逃げ場を奪うその体位は『種付けプレス』などの俗称で知られているものであり、雌猫達に立場の差を分からせてやるには

うってつけな体位の一つでもあった。
「アルゴ」
「きー、ぼ――んむぅっ♥♥」
アルゴが何かを言うより早く、キリトは彼女の唇を奪う。
身体全体が密着する超至近距離で交わされる、ねっとりと重たく濃密なディープキス。アルゴの膣内を肉棒で埋め、その存在感を身体にたっぷりと意識させながら舌と舌を絡ませ合う。重力の働きに従ってアルゴへ一方的に流し込まれる唾液は、この後に待ち受ける膣内射精の予告のようで、それが更にアルゴを興奮させる。
（あっ、ああ……もう、ダメだこれ……♥　オネーサン、だめにされちまったみたいダ……♥♥　身体も心もキー坊のでかちんぽに完璧に躾けられて、子宮も媚びまくりでおねだりしちまってル……♥
ぶっ濃い精液びゅーびゅー射精して、オイラにキー坊の赤ちゃん孕ませてほしくてしょうがなくなっちまってル……♥♥
恥ずかしいから我慢してたケド、もうすっかりバレちまってるよナ……♥♥　まあ、しょうがないよナ……♥　キー坊のせっくす、めちゃくちゃ気持ちいいんだからしょうがないよナ……♥♥）
思考が快楽に押し流され、理性が溶けていく。
二人の結合部に顔を近づけたアリスとシノンが、キリトの金玉を交互に舐め回してダメ押しの精子増産を促している事にも、いつのまにかシリカの拘束から解放されていた己の両手がキリトと指を絡め合っていることにも気付けない。
長いディープキスは、アルゴの五感の全てにもはやどうやっても洗い流しようのない程にオスの痕跡が染みつくまで続く。そうして、ほんの少しだけ離れた空間を挟んで、アルゴはキリトと視線を交わす。
「キー坊……♥」
「アルゴ」
名前を呼ばれるだけで達しそうになる。自分がもう堕ちていることを、頭の片隅で理解させられる。
「おっ、思いっきり……してくレ……♥　オネーサン、どうなってもいいかラ……♥♥　壊れるくらい、いっぱイ……♥♥」

「……よし、わかった」

耳元に囁かれるオスの低い声に、メスの身体が興奮を覚える。凪いだ静かな湖面に投げ入れられた石がさざなみを起こすように、それはアルゴの全身に伝わり、染み渡っていく。寄り添いながら見下ろす三匹のケットシー達の視線も最早気にならない。

絡み合う指を解いたキリトが、アルゴの身体をしっかりと抱きしめる。アルゴもそれに応え、キリトの背中を抱きしめ返す。

そして、キリトは――アルゴの望み通り、激しい抽送を始めた。

「あっ、キー――う〃　おおおおおっ♥♥　お〃っ♥♥　ひぃいっ♥♥　あ〃っ♥♥あぁっ♥あ〃　ぁああ～～♥♥♥」

引き抜き、押し込む。その最初のワンストロークで、アルゴはあっさりと達する。

体格差のあるオスに上から抑え込まれながらの絶頂。全身がきゅんきゅんと昂ぶり、意識は一瞬彼方へと飛んでいき――そして、容赦の無いピストン運動から生み出される快感によって強制的に引き戻される。

「お〃っ♥お〃っおお〃おおおっ♥♥　ひゅひぃっ♥♥　あっあ〃ぁ♥ああ〃ぁああぁ～～♥♥」

打ち寄せる波のように繰り返し、されどより早いテンポで繰り返される意識の明滅。絶頂に痙攣する膣肉を体重のかかった上下運動で貫かれ、極太の肉棒で押し返される。

速く、激しく、重い抽送から、射精する為に己のカラダを使われる喜びを教えられる。張り出したカリ首によって肉襞を擦り上げながらキリトが腰を引く度、アルゴはほんの少しだけ寂しさを覚え、そして次の瞬間にやってくる挿入によって文字通り身も心も満たされる。

（――いひぃいぃ〃いっ♥♥　イッグ♥♥イグ♥♥またイグぅうううう♥♥　とぶぅっ♥　あっ、あたまんなか、とけて♥とんじゃうううぅうう♥♥）

どすっ、どすっと力強く肉棒が突き込まれる度に、アルゴの思考は千切れていく。理性はとっくの昔に砕け、身体は快感に満たされる。

そんな状態のアルゴでは、キリトが抽送速度をより一層速め、射精

に向けて臨界点を突破しかけていることにも気付けない。
「出すぞ……！」
「――っ♥♥♥」
それでも、強制的に気付かされる。絞り出すように囁かれる三文字の言葉が、アルゴの脳裏に届く。
その瞬間、キリトは彼女の子宮を押し潰さんばかりの勢いで肉棒を押し込み――限界まで抑え込んでいた精液を、アルゴの最奥部めがけて一気に解き放った。
「――んおお〜おお〜おおお〜お〜っっっ♥♥♥　イぐいっぐイっ――ぐうぅうううぅウウウッッッ♥♥
あっぐっ♥♥ぅううううっ♥♥　ぁあああぁぁあああっっ♥あひぃいいっ♥♥あっ、あぁぁぁあああアアアアアッ♥♥♥」
子宮内壁を殴りつけるような勢いで叩きつけられる大量の精液。身体の内側をオスの体液で満たされ、己が誰のモノなのかを直接刻み込まれていくマーキングの快楽。
絶頂に溺れる身体を手折られそうな程にキツく抱きしめられながら、アルゴはびくびくと全身を震わせ、白く濁った本気汁を噴き出していく。きゅうきゅうと締まって精液を絞りだそうとする膣肉に応え、膨らんだ肉棒はどくどくっ、どくどくっと精液を吐き出していく。
「んにゃあ〜っ♥にゃああ〜ぁあぁ〜っっ♥♥　ぁああっ♥♥あっあっあああ〜ぁぁぁ〜〜〜〜〜♥♥♥」
アリスとシノンによる玉舐めによってたっぷりと作り出された精液は、猫のように鳴くアルゴの膣奥へ。
腰と腰を密着させ、メスの身体をしっかりと抱き竦めながら、思うままに射精する。オスの腕にがっちりと抱きしめられながら、我が物顔で種付けされる。それが気持ちよくないはずがない。
（――――――♥♥♥♥♥）
アルゴの千切れた思考が真っ白に塗りつぶされ、視界が明滅する。
「あ〜っ♥」だの「お〜♥♥」だの喘いでいる己の存在すらどこか遠くに感じる。
アルゴが何度も達し、腰に力が入らなくなった後――ようやくキリ

トの射精が終わる。種付けを労るようにいじましく包み込む膣穴に、相変わらず固くなったままの肉棒を埋めて確実な受精を促す。実際の猫同士の交尾は数秒程度で終わるそうなのだが、それとは真逆の、アルゴを慈しむ所作。

（あっ……♥♥　ああっ……しあわせぇ……♥♥）

結局、キリトの肉棒が膣内から引き抜かれるのを待たず、アルゴは蕩けるような微笑みと共にその意識を手放し――。

「――んふにゅあ〜ぁあ〜あっ♥♥」

膣奥を『ずんっ』と突き上げる強烈な一撃によって、無理矢理引き戻される。それが、射精を経ても固さを失っていないキリトの逸物によるものだと気付いたのは、絶頂に狂っていた思考が多少なりとも落ち着きを取り戻したあとの事だった。

「はへっ♥はへぇっ♥♥　きっ、きーぼお……？」

「じゃ、次いこうか。アルゴ」

「……つ……ぎ……？　それって――へひゅっ♥♥」

ぼやけた頭で言葉の意味を理解するより早く、キリトの肉棒がアルゴの膣内から引き抜かれる。アルゴをあまり刺激しないように気遣ってくれていたような気はしたが、張り出したカリ首は容赦なくアルゴの膣壁を擦る。今のアルゴを軽く達させるにはそれでも十分すぎる程に強烈だった。

「ちょっと動かすぞ、アルゴ」

まだ上手く力の入らない身体をキリトに抱え上げられ、そのままひっくり返される。床の上でうつ伏せにされたアルゴの姿は、さながら潰れたカエル。無様と言ってもいいその姿勢から、腰を掴まれて尻だけを突き上げさせられる。

「きーぼー、まっ、待ってテ……♥　おねーひゃん、今、もう、もうっ……♥」

「壊れるくらいしてくれって言ったのはそっちだろ？　じゃ、もう一度行くぞ」

びくりと身体が震えたのは、迂闊なことを口走ってしまった己の愚かさを痛感したが故か。あるいはぱっくりと開きっぱなしになって

いた膣口に、再びあの大きなモノの先端が宛がわれたことに気付いてしまったが故か。

それがどちらなのかを理解するより早く――キリトは腰を前に突き出し、アルゴの蜜壺を貫いた。

「あ――ひいいいいいぃっ♥♥」

一度目のソレに比べると、遙かに乱暴で気遣いに欠けた挿入。しかし、一度目の交尾を経た事で溢れるほどに濡れた蜜壺にはそれくらいの刺激がちょうどよい。現に、アルゴの脳内には快感の電気信号がスパークし、危うく意識を飛ばされかねない程だった。

「ほら、ぼんやりするなよアルゴ。動くからな」

いや、いっそ失神でもしてしまった方が楽だったのかもしれない。キリトの有無を言わさぬピストン運動がアルゴの子宮口を突き、その意識を無理矢理覚醒させながら快楽を叩き込んでいく。

先程の膣内射精で『この子宮（メス）は貴方様専用でございます。どうぞご自由に使い尽くし、遊び半分で孕ませてくださいませ♥』と完全降伏し、オスに傅く喜びを理解させられてしまったアルゴの子宮がそれに抗えるはずもない。そして抗う必要も無い相手である。故に身体は何のフィルターも通さず、極上の快楽をダイレクトに脳髄へ送り込んでいく。

「ひっ♥ひぃいっ♥♥　ぢっ♥ぢんぽ♥すごひぃっ♥♥　あがぁっ♥♥　いっぎひいいっ♥♥」

（これ、こんなの無理っ♥♥　こわされる♥　ハメ穴として使い潰されて♥一生キー坊の生オナホとして飼い慣らされちまゥウウ♥♥

あんなに、あんなにいっぱいしゃせーしたばっかりなのに♥　全然萎えない最強オス様ちんぽ♥♥　極太キー坊ちんぽ様専用オナホマンコにされて人生終わっちまウゥウウ♥♥）

腰と腰がぶつかる度、ばちゅんっ、ばちゅんっという粘ついた音が響く。結合部から溢れ出す白い液体は、先程キリトが放った白濁液がアルゴの本気汁と混ざり合ったモノ。元は他のオスの精子を掻き出すために進化した部位であるというカリ首は、例え同じオスが放った精液であろうと容赦なく掻き出し、床の上へと落としていく。

ぼたり、ぼたりと堕ちていくその残滓にいち早く気付いたのは、もっとも小柄な牝猫であるシリカだった。
「キリトさん、キリトさん。ちょっといいですか？」
「ん？　どうした、シリカ」
「アルゴさんのおまんこ、せっかくキリトさんが射精してくださった精液をさっきからボタボタぼたぼた零しちゃってるんです。勿体ない……。
あたし、下に入って受け止めますから……少しだけ、おちんぽ様でずこずこするのを我慢してもらってもいいでしょうか？」
「そういう事か……わかった。よろしく頼むよ、シリカ」
「はいっ♥」
アルゴの首に片手を回したキリトが、そっとアルゴの上体を引き起こす。そこへ、親愛の情を示す飼い犬のように仰向けになったシリカが潜り込み、位置を適度に調整する。蜜壺の縁がちょうど口元へ、大きな陰嚢が鼻先をぎりぎり掠めるちょうど良い位置へと。
「ん～～、キリトさんの金玉、本当に濃くていい匂いがします……♥　よしっ♥　零れザーメン受け止め準備、できましたっ♥♥　種付け後のお掃除もあたしにお任せくださいっ♥♥」
そう宣言したシリカは、キリトの陰嚢に熱いキスを捧げ、そして舌先でアルゴのクリトリスをつんと突いてイジめる。敏感な部位を予告なく刺激されたことでまたあっさりと達したアルゴの上体からそっと手を離したキリトは、その手を下に回してシリカの頭を優しく撫でて彼女を労う。
そうして、改めてアルゴの腰を両手でしっかりと掴むと、容赦の無い抽送を再開する。膣口から掻き出された精液は床に落ちることはなく、シリカの口に、そして顔に降り注ぎ、牝猫を改めてマーキングし直していく。
激しく鳴かされるアルゴの下で、溢れる精液を顔に浴び、舐め取り、タイミングを見計らってアルゴのクリトリスを舌で突いて更に乱れさせる――シリカがそうしているのを、他の二匹が黙って見ているはずもない。

「――ねえ、アリス。少し相談があるんだけど」
「なんでしょうか、シノン」
右からアリス、左からシノン。キリトを挟み込むように左右に陣取ったケットシー二匹が、怪しい目配せと共に言葉を交わす。
「さっきシリカが言ってたでしょ？　せっかく注いでもらった精液をアルゴが零してるって。
ケットシーのメスとして……それは許されない行為だと思わない？」
「確かに……。キリトが頑張って射精してくれた精液を僅かでも零してしまうなど、信じられない振る舞いです。
アルゴには罰を受けてもらう必要がありそうですね」
「同感。さすが、アリスは話が早くて助かるわ」
アルゴの鳴き声にかき消されないぎりぎりの声量で会話を終えた二人は、共有ストレージからローションのボトルをオブジェクト化すると、それぞれの手にたっぷりと纏わせる。同時に、唇はキリトの耳元へ。全ての準備を整えた二人の手が、ぴんっと伸びたアルゴの尻尾へと伸びる。
アリスの右手は、根元へ。シノンの左手が、先っぽへ。指で『C』の形を作るように掌を広げ、アルゴの尻尾にぎりぎり触れない位置で止め――キリトの肉棒が奥を突くタイミングに合わせ、ぎゅっと握りしめた。
「――ん〝、ほぉおぉおおぉお〝、おおぉおおぉおおおぉ〝、お〝、おおおぉ〝っっっ♥♥♥」
ケットシーの尻尾とは、言うまでもなく敏感な部位である。不意に掴まれればシノンですら悲鳴を上げる。
そんな場所を、セックス中に、幾度となく絶頂を迎えさせられたあとの身体で、太い肉棒でポルチオを責められ、クリトリスに舌を這わされたまま、ローションまみれの手で二カ所同時に握りしめられたらどうなるか。
結果は火を見るより明らかで、単純。
アルゴは獣のような――いや、獣の方がよほどマシであろう品の無

い喘ぎ声を叫び、大量の潮をシリカの顔にぶちまけながら絶頂へと達した。

「お゛ぉぉっ♥お゛っ゛っ♥♥　ひいぃいっ♥♥　ひぎゅっ♥♥イっぐぅうう゛ぅう゛う゛ぅう♥」

「くうっ……アルゴ、こっちも……!!」

全身を激しく痙攣させながら達するアルゴに遅れること少し、みちみちと締め付ける膣肉をまといながら腰を振り続けていたキリトも限界を迎える。そのまま精液を吐き出そうとする本能を根性でねじ伏せ、アルゴの腰をぐっと引き寄せながら、最も深いところに己の種汁を全て解き放つ。

「あひあ゛っあぁああ゛あぁああ――――♥♥♥♥♥」

どくんっ、どくんっ、と吐き出されていく大量の精液がアルゴの子宮を灼く。小柄な身体で受け止めるには過剰すぎるほどの快感はアルゴの許容範囲をオーバーフローし、脳神経が灼き千切れたのではないかと思うほどの悦楽に襲われ、溺れる。完全に反射行動に支配された身体は突き出した舌を戻す方法も、蕩けきった顔を取り繕う方法すらも忘れ、意識は完全にブラックアウトして彼方へと飛んでいく。

もはやまともな言葉も、声すらも出せなくなったアルゴの代わりに、シノンとアリスがそっと囁く。

「お射精お疲れ様……♥　本当にたっぷり、射精したのね……ここで見てるだけで、アルゴの子宮がぱんぱんになってるのがわかっちゃうわ……♥♥」

「ケットシーの群れをまるごと自分のモノにした気分はいかがですか、キリト……♥　まだまだ種付けし足りないというのであれば、いくらでも付き合ってあげましょう……♥

それとも、その辺りで物欲しげな顔をしているメス達を何人か狩ってきましょうか？　皆、お前のちんぽに種付けされたくてたまらないようですから……♥♥」

射精が終わるまでの間、耳元にダイレクトに注ぎ込まれる甘い囁き。その下では、シリカの玉舐めによる快適吐精サポート。複数のメスを手元に置いて侍らす、群れの長にのみ許された特権をたっぷりと

堪能しながら、キリトはアルゴの膣内にどぷどぷと射精し続けた。

「――うわー……アルゴ、失神しちゃったみたいだけど……大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ、イーディスさん。よくあることですから」

淫臭と喘ぎ声、水音だけが溢れるリビングルームの片隅。心配げな顔をするイーディスの問いかけに、アスナは特に迷うことなく即答してみせた。

実際、よくあることなのだ。アスナ自身も気持ちよすぎて失神したことは幾度となくあるし、親友のリズもＳＭプレイで少々過激に責められて意識を途切れさせたりする。もちろん、アミュスフィアやライトキューブ対応設備経由でログインしている以上、そうなった所で何の問題も無い。システム上は『睡眠』と同じ扱いになるため、強制ログアウトされることもない。

「そうなんだ……。まあ、アスナちゃんがそう言うんだったら大丈夫ね……」

表情を緩ませたイーディスが、床に寝転ぶアスナの上に覆い被さる。そのままイーディスはアスナを抱き寄せ、自然に唇を重ねた。

「んぅ……♥」

「ふふっ……♥」

舌を滑り込ませ、唾液を練り混み合う、恋人同士がするような甘く重いキス。キリトのケットシー征服セックスをオカズに、さっきまで互いにイカせあっていた裸身を擦り付けあいながら発情を分かち合う。

「んっ、あっ……♥　ふうっ……♥　アスナちゃん、このあとはユウキちゃんとかストレアちゃん達と一緒に遊ぶ予定なんだっけ？」

「はい……♥　イーディスさんも、混ざり、ますか……？」

「うーん……それも悪くないけど、こっちでアリスやロニエちゃんと遊ぶのも捨てがたいのよね……。どうしようかしら……」

わざとらしいしかめ面を作りながら悩んで見せたかと思うと、イーディスはすぐさま破顔してくすくすと微笑む。そうして振り返った視線の先では、アリスがちょいちょいとイーディスを手招いていた。アリスのすぐ側では、シノンに狩られたと思しきサチがキリトに組み敷かれ、逞しい肉棒によってずぼずぼと犯されながら喘ぎ声を上げていた。

「呼ばれてますよ、イーディスさん」

「あら、ほんとね。アリスからの呼び出しなんて……一体何の用かしら」

「さあて、なんでしょう」

何が起きるのかを分からない二人ではないが、それでも互いにすっとぼけてみせる。秘密と欲望、情欲を共有するおかしさに微笑み合ってから、イーディスはゆっくりと立ち上がった。そうして、アスナの真正面でぴしりと『気を付け』の姿勢を取った。

「それでは――整合騎士イーディス・シンセシス・テン。ただいまより、星王陛下の最高優先度おちんぽ様警護用肉穴としての任務を果たして参ります！」

「よろしくお願いするわね。イーディス・シンセシス・テン。あなたが見事におちんぽ様に敗北して、無様なアクメ姿を晒せる事を祈っているわ♥」

互いに調子を合わせ、微笑みを交わす。そうして最後にもう一度口付けを交わした後、イーディスはアリスの方へと歩いて行った。

アリスがその身体を抱き寄せ、先程のアスナとのそれにも負けないほど濃密な口付けを以て出迎える。十番目の整合騎士が、三十一番目の騎士に狩られる様は、傍から見てもとても淫靡なもので――遠からずキリトに蹂躙され尽くすのだろうと確信するには十分だった。

14―7．閑話休題

とある南国の、とある小島をまるごと使って作られたプライベートリゾート。その中心部に堂々と鎮座するのが、三階建てのゲストハウスだ。

一階はビーチや各種青姦スポットへのアクセス面が考えられた、プール付のヤリ部屋。

二階は全員が集まって夜通し乱交する為に作られたヤリ部屋。ただしこちらは夕食後まで立ち入り禁止という制約付。

そして地下一階は、仮想空間を照らすお天道様の下では堂々としづらいような、少しばかりアブノーマルなプレイをするためのヤリ部屋。

そんな地下空間の一角に用意された大浴場の中では、当然のように痴態が繰り広げられていた。

「――んっ、ぁあっ……♥　やぁっ、やだよぉっ、アスナぁ……♥」

「ふふっ……。『やだ』じゃなくて、『もっとして』でしょ？　ユウキ」

浴槽の底から静かに噴き出すナノバブルによって白く染まった湯の中で、淫らに絡み合う二つの女体。

大型バスタブに背中を寄りかからせたウンディーネの少女・アスナの指先が撫で回すのは、アスナより少しだけ小柄なインプの少女・ユウキの肢体。ユウキの身体を背中から抱きしめたアスナは、片手でユウキの乳首を弄び、もう片方の手で秘所を弄くり回してはユウキに淫らな悲鳴を上げさせ続ける。

その巧みな手さばきとそこから生み出される切なげな声は、まるでプロのバイオリニストがアンティーク・バイオリンを奏でているかのようだ。

「すっごい……♥　ユウキの膣内、さっきからきゅんきゅんしっぱなしだよ？」

「やっ、やだよっ♥　んぁっ♥　そんなこと言わない、でぇっ……♥」

「私は何も言ってないよ？　ユウキのおまんこが勝手に言ってるんだ

もん。
『女の子の指でこしょこしょされるだけじゃ物足りないよ～♥
もっともっとぶっとくてかた～い男の子おちんぽで、おまんこバコバコハメハメして欲しいよ～♥♥』……って♥」
「言ってない、ひぁっ♥　言ってないよおっ♥♥」
思わず顔を真っ赤にしたユウキが、恥ずかしげに身を捩らせながら両手で顔を隠す。その光景を微笑ましげに見つめながら、アスナは彼女の膣内に入れた二本の指をゆったりと前後させつつ、指の腹で内側をなぞり上げる。
元々敏感な体質に加えて様々な調教を施されたことで、娼婦もかくやという程に開発されてしまったユウキの身体は、その僅かな刺激にもびくりと震えて反応してしまう。その反応が、アスナの嗜虐心をたまらない程に煽り立てる。
「なるほどね……。つまりユウキは、おちんぽをいれてほしくない。つまりはキリトくんとセックスしたくないんだね」
「えっ……ち、ちが――」
「残念だなあ……せっかくこの後の『奴隷婚式』で、キリトくんと一緒にユウキの『二穴責めバージン』を奪ってあげようと思ってたのに」
その囁きへの返答は、息を呑むかすかな音。それを肯定、そして期待と受け取ったアスナは、アスナが指を挿れやすいように少しだけ開かれていたユウキの脚の間に自らの両膝をゆっくりと滑り込ませ、自らの脚を使って左右に大きく開かせた。
アスナによって下から支えられると共に湯の浮力も利用して浮かされ、秘所を曝け出させられたユウキ。そんなユウキ共々股を開きながら、アスナはユウキの蜜壺を指で弄び続ける。
「ほら。今までの『奴隷婚式』って、私の体とか人生とかをキリトくんに捧げる代わりに、ちんぽコキ穴としてご奉仕する権利をもらうのが定番だったじゃない？」
「うっ、うんっ……♥　アスナ、もう１０回は奴隷婚してるもんね……んんっ♥ぁうっ♥」
「うんうん♥　だからね、今日はいつもと少し趣向を変えてみようと

思って……ね♥」

そう囁きながら、アスナは指を前後させる速度をほんの少しだけ上げ、ユウキに送り込む快楽の量を増やす。夫が手を付けた女達と睦み合ってきたその指先は、アクセルとブレーキを同時に踏んだような焦らし具合を保ったまま、ユウキを徐々に絶頂へと近づけていく。

「奴隷婚式の余興として、大事で大好きな私の親友をね……旦那様の極太ちんぽと、旦那様のちんぽそっくりに作ったディルドで二穴責めしちゃおうかなーって♥

よくあるじゃない。『夫婦の初めての共同作業』っていうやつ♥ユウキもせっかくアナルセックスできるようになったんだし、ちょうどいいじゃない？」

「でっでも……♥　そっ、そんなことされたら……ボク……♥♥」

「もちろん、ぶっ壊れちゃうよ。

だって一本ずつだって気持ちいいのに、それを同時にいれられちゃうんだよ？　キリトくんのでかチンポでおまんこごりごりされて、私のディルド……というか、ペニバンかな。それでお尻の穴を虐められまくるんだから。

頭の中真っ白になって、あへあへ～って顔で舌を伸ばしっぱなしにして、『ちんぽイぐっ♥　イぐぅうっ♥♥』って下品に鳴きながら何回も何回もアクメしまくるの――楽しみでしょ？」

アスナの言葉が届く度、ユウキの呼吸が浅く、速く、そして熱くなっていく。無意識に動く彼女の腰は、自らが感じる場所にアスナの指先を導くように秘所をすりつけている。

完全に被調教モードに入った親友の頬に口づけようと顔を近づけると、それを感じ取ってかユウキもアスナの方を向く。視線が絡み合って数秒後、二人は自然と唇を重ね、舌を絡めていた。

ねちねちと音がするまで互いの口内で唾液を混ぜ合わせ、舌と舌で睦み合う。暫しの間キスを愉しんだあと、ユウキは唇を離してアスナを見つめた。

「ねえ、アスナ。アスナは……二穴責めって、されたことあるの？」

「うん。あるよ」

「誰に？」

ユウキの顔に覗く、ほんの僅かな嫉妬心。親友のハジメテを奪う男はともかく、奪う女は己であろうというユウキ自身も気付いていないだろう自負心。その心の揺れに、アスナはユウキとの深い友情を感じた。

「もちろん、キリトくんにだよ。といっても、お尻にディルドを挿れっぱなしにしたままセックスしただけだから……ユウキのいう二穴責めとはちょっとだけ違うかも」

「……気持ちよかった？」

「うん♥　と～～～っても、気持ちよかったよ……♥　お腹の一番深いところを、キリトくんのおちんぽがごりごり～っ、ぐりぐり～って、ダブルで責め立ててくれるんだもん……♥♥

……でも、もし誰かがディルドを動かして、キリトくんみたいにピストンしてくれたらもっともっと気持ちよかっただろうな～……♥♥」

含みのある声音でアスナが囁いた瞬間、ユウキの紅い瞳に妖しい輝きが灯る。好敵手を見つけた時のような、あるいはアスナお手製のお菓子をつまみ食いする寸前のような笑顔と共に。

「じゃあ……アスナもほんとの意味では、二穴責めバージンってことになるんだよね？」

「……確かに。そうなるかもしれないね」

「じゃあさ、じゃあさ！　ボクと交換、しない!?」

「交換？　何と何を？」

「ボクの二穴責めバージン、アスナとキリトにあげる！　ううん、もらってほしい！

だからその代わり、ボク……ボクに、アスナの初めての二穴責め、させて！」

望む答えを親友の口から引き出したアスナは、返答までの時間を少しだけ溜めて、焦らす。答えはユウキが問いかけるより以前に決まっていたが、それでもたっぷりと時間を使い――そして、改めて口を開いた。

「――いいよ。
私のはじめて、ユウキにあげる。だからユウキのはじめては、私がもらうね」
「うんっ！　約束だよっ、アスナ！」
朗らかに笑うユウキに頷き返しつつ、アスナは親友の膣内に挿れたままにしていた指をそっと引き抜き――。
「それじゃ……イっちゃえ♥」
油断していたユウキのクリトリスを、指先でぴんっと弾いた。
「ひぁ――あっ、ああっ♥やぁあっぁあああああっ♥♥」
アスナの指で丁寧に膣内をほぐされ、じわじわと性感を高められていたユウキに襲いかかるクリトリスへの容赦無い一撃。予想だにしていなかった悪戯に、ユウキは身体をびくん、びくんと引き攣らせながら、一気に絶頂を迎えた。
弓なりに反り返るユウキの背中をそっと支え、浴場内に響くユウキの嬌声を聞きながら、アスナはユウキの意識が絶頂の段階から降りてくるのをゆったりと待つ。
「――はっ♥　はあっ、はあっ……♥」
「気持ちよかった？　ユウキ」
やがて、張り詰めていたユウキの身体から力が抜ける。まだ少し荒い息のまま体重を預けてくるユウキの身体を、アスナは背後からそっと抱きしめる。同時に、彼女の股を開かせるために使っていた両脚の位置を変え、今度はユウキの下半身を外側から包み込むようにして絡ませる。
「もう……♥　いきなりアレはずるいよ、アスナ……♥♥」
「ごめんごめん。ユウキが可愛くって、イカせてあげたくなっちゃって……♥」
「まったく、しょうがないなあ……♥」
他愛も無い事を話しながら、温かい湯の中で互いの肌に指を滑らせ、唇を交わしあう。淫らな言の葉で互いを褒めそやし、女同士の密やかな睦み合いに興じていると、大浴場と脱衣場を隔てる扉が開く音が響く。

ユウキを抱いたまま、アスナが扉の方に視線を向けると、そこにいたのは紅い長髪が特徴的なレプラコーンの少女。同じタイミングで向こうもアスナ達の存在に気付いたらしく、その顔に僅かばかりの驚きを浮かべた。

「アスナちゃんにユウキちゃん。二人とも、ここにいたんだ」

「こんにちわ、レインさん。レインさんもお風呂？」

「うん。キリトくんの所に戻る前にちょっとね。……あれ、もしかして私、お邪魔だった？」

「全然。むしろ、ご一緒してもらえると嬉しいくらいよ」

「よかったー……。そういう事なら、よろこんで」

紅髪の少女――レインは、ほんの少し恥ずかしそうにはにかんだあと、アスナ達が入っているバスタブへ入る。

風呂場にいる以上当然といえば当然だが、レインもアスナ達同様生まれたままの姿。温泉特集番組にでるゲストのようにバスタオルを体に巻くような事もせず、アイドルとしてのレインを知っているファンなら血涙を流して喜びそうな裸体を惜しげも無く晒しながら、レインはアスナの隣に腰を下ろした。

「ん～～～っ……撮影明けのお風呂、最高～……」

細かな泡が立ち上る湯の中に肩まで浸かり、レインが大きく伸びをする。その一般的な動きですらどこか独特な高級感を伴っているのは、レインが持つアイドルとしてのオーラの影響だろうか。

「レインさんは今日もＰＶ撮影？」

「今日はドキュメンタリーとかリアリティショー……っていうのかな。そういう感じの撮影。セブンと一緒にね」

「へー、どんなの撮ったの？」

「んーとね、『Ｈｕｎｔ　Ｍｅ，　Ｐｌｅａｓｅ♥』っていう海外の番組で……私とセブンのどっちが先にナンパされるか、ってテーマで勝負したんだよ」

「それで……結果は？」

アスナの問いかけにレインは小さく頷くと、ホログラフィックウィンドウを空中に展開し、そこに一枚の画像を表示させた。

「これが、その結果」
その画像に映っているのは、レインとセブン――仲睦まじいアイドル姉妹の姿。秘所だけをギリギリで隠す程度の布面積しかない色違いのマイクロビキニに身を包み、笑顔で寄り添う二人の顔の間には、その可憐さとは真逆の物体が堂々と鎮座している。
餌を探す象の鼻のようにだらりと垂れ下がった、太い肉の柱。雌達の淫水によってすっかり灼けたそれは、アイドルの近くにあってはいけないもの――即ち、男性の陰茎に他ならなかった。
半勃起したグロテスクな肉棒に、レインとセブンは両側から頬を擦り付けている。その仕草にも、浮かべた笑顔にも、肉棒を嫌がっている素振りは微塵も無く、むしろオスのモノとして自らを再定義されることを心の底から歓迎しているようにしか見えなかった。
「予定だと、プールサイドでセブンと一緒にオナニーしながらナンパ待ちする予定だったんだけどね。
その途中で上の階(リビング)覗いたら、キリトくんと目があっちゃって……しかもちょうど、そこにいた子達はみんなハメ終わっちゃった所で……」
「ふーん……それで、ナンパされちゃったんだ？」
「ナンパっていうか、捕獲(テイム)された感じ。おちんぽと写真撮らせて欲しいって言ったのも、私達だし。
おかげで撮影中断しちゃったよ～……♥」
秘密の関係を共有する友人と猥談に耽るという、禁じられた喜びと楽しさに浸りながら、レインは画面を見つめた。
「……やっぱり、小顔効果でるよね……。……キリトくんの、おっきいから……」
「確かに……」
元々、レインの容姿はアイドルとして申し分ない程に整っている。それでも、いや、だからこそ、顔のすぐ側に大型でグロテスクな物体が堂々と存在していると強烈な小顔効果を発揮するのだ。もちろん、それはセブンも例外ではない。
「ねーねー、レイン」

「……？　どうかしたの、ユウキちゃん？」
「そういえば、セブンは？」
アスナとレインの会話を横で静かに聞いていたユウキが、セブンの不在に気付いて声を上げる。
「セブンなら、キリトくんに預けてきちゃった。だから、まだキリトくんと一緒だと思うよ」
「キリトに？」
「そうそう。このあと、この階でリーファちゃん達のショーがあるでしょ？　その会場になる部屋まで、キリトくんを案内してもらおうと思って。
セブンってそういうお仕事、すっごく得意だからね」
「……？　セブンがすごい研究者なのは知ってるけど、そんなに地理とかに強かったっけ……？」
怪訝な顔をするユウキに対し、レインは静かに首を横に振る。
「ほら、セブンって私達の中だと一番小さいじゃない？　だから、一番適任なんだよ――キリトくんが持ち運ぶにはね」
「持ち運び……って、もしかして」
「ふふっ。やっとわかったみたいだね、ユウキちゃん♥」
ようやく得心がいった様子のユウキに、レインは両腕を差し伸ばし、その身体を抱き寄せる。アスナに抱かれていた時とは逆に、正面から向かい合う形で抱きしめられ、ユウキとレインの距離が一気に縮まる。
レインの抱擁を受け入れたユウキは、平泳ぎをする時のように両脚を広げつつ、自らの両腕をレインの首に回す。それは、今この場にいないセブンがキリトにどんな事をされたかを理解した証でもあった。
「――そう、正解。セブンもね、キリトくんにぎゅーって抱っこしてもらいながら……キリトくんのぶっとい勃起ちんぽ様を挿れてもらったまま道案内したの♥
こうすれば、道案内しながら移動中におちんぽ様のお世話もできて一石二鳥♥　あ、セブンも気持ちよくなれるから一石三鳥だね♥」
セブンの小柄な身体をまるごと抱え上げ、自由を完全に奪った状態

で貫く。『駅弁』とも称される特殊な体位。正常位や後背位以上に何もできない姿勢のまま、ただひたすらにオスの交尾道具として使用されたいメスの為の体位。

もちろん、レインもアスナもユウキも駅弁セックスを経験済みである。であるが故に理解している。あの体位は体格差があればあるほど気持ちよい体位であり、最も小柄なセブンがどれだけ興奮と快楽を刻み込まれているのかも。

「キリトくんが一歩進む度に、下からずんっ、ずんって突き上げられて……♥　リビングから会場の部屋に着くまで、セブンったら何回も潮吹きしちゃって、廊下のあちこちをびしょびしょにしちゃったんだ♥」

「あー……廊下にあった染みって、セブンのだったんだ……♥　助けてあげなくてよかったのー？　レイン？」

「もちろん助けてあげたよ？　お部屋についたあと、『セブン、最近忙しくて色々溜まってるみたいだから、失神するまでハメ潰してあげてね』ってキリトくんにお願いしたんだから。

キリトくん、『任せろ』って言って、ちんぽ挿れたままセブンを部屋の壁に押しつけて……その後は見てないけど、きっといつも通りだよ♥」

セブンは現在海外に在住し、更には研究者として第一線で活躍している。そのため『時差』と『仕事の状況』という面倒な事情を二つも抱えており、他のメンバーと予定が合わない事も少なくない。こうして皆で集まれる休日は貴重な機会なのだ。

そんなセブンにただでさえ身動き取れない体位を取らせ、力の差と体格差によって支配し、更には部屋の壁まで使って抑え込む。もはや完全に精液を吐き出すための穴扱いされてしまったセブンの末路を想い、ユウキは溜息を吐いた。もちろんそれは憐憫や悲嘆ではなく、恍惚と羨望だけが入り交じったメスの熱い溜息だったが。

「――お風呂から上がったら、皆で楽しいことしようね……♥」

レインの、とろけるような甘い囁きに魅せられたユウキが、彼女と唇を重ねる。それを隣で見ていたアスナも巻き込み、女三人の絡み合

いは湯の中で長々と続いた。

湯上がりの肌を綺麗に拭き終えたアスナ、ユウキ、レインは、連れ立って脱衣所を出た。どうせすぐに脱がされるのだから、という理由で、皆が皆素っ裸のままで廊下に出る。

そのまま揃って向かう先は、同じ地下階の一角に用意されたステージ付の部屋だ。案内板代わりになるのは、廊下に敷かれた絨毯の上に残る灰色の染み――つまりは、セブンが漏らした体液の痕。それを頼りに進んだ三人は、迷うことも無く目的の部屋へと辿り着いた。

扉を開けてまず目に入るのが、演目を披露するためのステージ。奥側は部屋の壁と一体化し、左右の袖から裏へアクセスできるようになっているそのステージは、中央部が大きく前へとせり出した半円形の大型サイズ。ただ、ステージの上にはマイクの一本も無ければ書き割りの背景も無く、当然ながら演者の姿も無かった。

そんなステージの正面に用意されているのが、たった一つの客席だ。

いや、正確に言うなら『席』ではなく、キングサイズのベッドだ。この部屋を訪れて演目を鑑賞する人間の数と、その後に――あるいは鑑賞中に――行われることを考えれば、椅子などよりもベッドの方がよほど都合が良いのは言うまでもない。

客席（ベッド）の上には、裸で寝転ぶ先客が三人。

股の間から白濁液を溢れさせたまま、ぐったりとした様子でうつ伏せに突っ伏しているのはセブン。レインが言っていた通りにすっかりハメ潰されてしまったらしく、意識すらまともに無いのかアスナ達に反応することもできない。

そんなセブンの頭を片手で撫でているのが、彼女をハメ潰した張本人である。彼はアスナ達に気付いているようだったが、上体を起こすことも叶わず、もう片方の腕を上げて手を振るに留めざるを得なかった。

なにせ、彼の上体はセブンの枕代わりになっている。加えて、最後の一人――オレンジ色の髪をした少女・フィリアが肉棒を舐め回しているからだ。

フィリアもアスナ達の存在に気付いてはいるようだったが、『そんな事よりちんぽを舐める事の方が大事に決まってるでしょ』とでも言わんばかりの態度で、肉棒への奉仕を止めようとしない。セブンの頭を避けるため、斜めにずれたシックスナインのような体勢を取りつつ、フィリアはゆったりとした速度で顔を上下させていた。

「キリトくん、お待たせ」

「キリト、ほんとにセブンのことハメ潰しちゃったんだ……♥」

いつもながらの光景に苦笑するアスナと、それに続いたユウキは、キリトの左右の脚を跨ぐようにして寝転びながら彼の股座に顔を近づけた。太股にパイズリしながら二人が位置を整え終えると、フィリアはようやく肉棒から口を離した。

「――ぷぱっ……♥♥　あっ……やっと来たんだ、みんな……♥」

フィリアの唾液によるコーティングと、柔らかな頬と舌によって丹念に舐めしゃぶり尽くされた肉棒は、ほんのりと熱気を帯びながらアスナ達の前に屹立している。雌の体液が染みついた雄の象徴、それ自体はいつもと変わらぬ光景だが、今日はそこに違う『色』が存在している。

派手で強烈、そして濃いドメスティック・ピンク。それは、フィリアの唇に塗られた口紅（ルージュ）から移った色彩（いろ）だった。

「いいでしょ、これ……。海外だとこういうの、『Ｓｌｕｔ，ｓ　Ｓｔａｍｐ』っていうんだって」

「スタンプ？」

「うん♥　おちんぽとか金玉とか、あとは男の人の下半身とかにつけてあげるのが流行ってるんだって♥

『このでかチンポは、セックス好きの淫乱女（スラット）を何匹も飼いならして好きにハメまくってる激つよチンポです♥』ってわかりやすくするためのスタンプ♥」

裏筋方向に顔を寄せたアスナ達と勃起した肉棒越しに会話しながが

ら、フィリアはどこぞから仕入れてきた知識を披露する。そうしてどこか自慢げに微笑むと、キリトの下腹部に唇を押し当て、新たなキスマークを一つ増やした。アスナ達が来る前から何度も何度もマーキングをしたのだろう、同様のキスマークはキリトの下腹部をはじめとして、腰や太股にも及んでいる。

また、肉棒の軸には同じ色をしたリング状の痕跡が残っていた。おそらくはキスではなく、フェラチオでペニスを咥え込んだ際、思い切り吸い付いた事でできた痕跡だろう。亀頭の先を起点としたその痕跡――フェラチオリングは、軸から根元に至るまでの間に計四つ確認できており、フィリアが肉棒のどこに重点的な口腔奉仕を行ったかが一目で分かるようになっていた。

「ね、ねえ、アスナ……ボク達もさ……♥」

「そうだね、ユウキ……♥　私達もつけていいかな、フィリア？」

「そういうと思ってたよ。はい、どうぞ」

そう言って、フィリアは一本のルージュをアスナへと差し出す。キスマークやフェラチオリングと同じ色をしたそのルージュを受け取ったアスナが、自らの唇、そして隣でうずうずとしているユウキの唇に塗っていく。

「アスナ達はするみたいだけど、レインはどうす――って……うわー……」

二人のメイクが終わるのを待つ間、レインの動向を確かめようとしたフィリアが見たのは、キリトに覆い被さりながらディープキスを交わすレインの姿だった。ベッドスペースに余裕があるのをいいことに、レインはセブンを挟み込むようにして後ろから抱きしめながら、その頭の上でキリトと舌を絡ませていた。

強かな女友達のテクニックに負けてはいられないと、フィリアはアスナ達から返却されたルージュを改めて自らの唇に塗り直す。そうして、ストレージからスマホをオブジェクト化した。

「それじゃ、アスナもユウキも準備いい？」

「はーいっ♥」

「オッケーだよっ♥」

スマホのカメラを自撮りモードに設定し、三人の顔が良く写るように位置を整える。もちろん、肉棒もちゃんと映えるように意識して。

そして――。

「それじゃあ……せーのっ♥」

フィリアの声を合図に、三人は息を合わせて口付けを捧げた。

アスナとユウキは、キリトの脚の間に顔を埋めるようにしながら左右の陰嚢に。フィリアは先端にできたフェラチオリングの間に。

シャッター音を模した効果音がスマホから数回響き、醜悪な肉の柱を愛おしむ三人のキス顔を撮影していく。

「んーっ……♥」「はぁっ……♥」「……んぁっ……♥♥」

キスマークがしっかりと残るまで、たっぷりと時間をかけて唇を押しつけたら、キスする場所を変える。端正な顔ごと唇を軸に押し当てるアスナを、亀頭のすぐ下に口づけるユウキを、下腹部と肉棒の境目にある根元にキスするフィリアを、カメラレンズが余すところなく記録していく。そしてもちろん、ルージュの痕それ自体が記録であることは言うまでも無い。

生殖に適したメスを数多く従えることがオスとしてのヒエラルキーを上げるなら、自らを飼いならすオスが生殖に優れていることを記録し、他のメス達にアピールし続けることは、孕まされるメスとしてのヒエラルキーを上げる。違うオスと番うメス同士の間で交わされれば、それはただの下品なマウント合戦に過ぎないが――同じオスに飼われるメス達の間で交わされれば、淫猥ながらもそこにはどこか気品を伴う。さながら、サロンで貴婦人達が繰り広げるような、上品な色香を飾った密談となるのだ。

「んっ、んっ……♥　キリトくんのちんぽの臭い、最高……♥♥」

「あっ、ここ空いてる……キスしちゃえ♥」

「アスナもユウキもちんぽキス好きすぎでしょ……♥　ほーら、次撮るよー♥」

一般的に頬へのキスは『親愛』を、手へのキスは『敬愛』を、足へのキスは『忠誠』を意味すると言われている。ならば、肉棒やその周辺へのキスは何を意味するのだろうか。

少なくともアスナ達にとって、その行為には『情欲』、『屈服』、『隷属』、『性愛』、『奉仕』、『興奮』、『崇敬』、『友誼』、『歓喜』――それら全てを混ぜ合わせ、精液と同じくらいドロドロになるまで濃縮したような意味が含まれていた。

「んぷっ……♥　はーい、二人ともぴーすっ♥」

「「ぴーひゅっ♥♥」」

肉棒にむしゃぶりついたまま、アスナとユウキが片手でピースサインを作って顔の側に掲げる。同じポーズをとったフィリアは、己の顔共々その光景をスマホのカメラで撮影していく。喜び勇んで肉の柱を舐め回すメスブタの笑顔を記録したら、今度は広げた掌で目を隠し、淫靡な娼婦の如く振る舞う姿を撮影する。

そうして、雄の下腹部に吸い付く雌達の音と、スマホのシャッターの音はその後も延々と響き続けた。

レインとのディープキスに一区切りを付けたキリトが、セブンをレインの膝枕へと預けて上体を起こす頃には、キリトの下腹部はすっかり唾液とルージュの痕まみれにされ尽くしていた。

「おいおい……。さすがにちょっとやりすぎじゃないかね、君たち……」

いつの間にか三人の配置は、アスナを中央に、左脚の上にユウキ、右脚の上にフィリアという状態に変わっていた。そして未だに肉棒から唇を離そうとしない三人を見下ろしながら、キリトは苦笑する。

その意見に反旗を翻したのは、やっとこさ肉棒から唇を離したアスナだった。

「――キリトくんが手を付けた女の子の数から考えると、これくらいでちょうどいいと思う人ー」

「「はーいっ」」

その場にいたセブン以外の女性全員がアスナに同意する。

「……はい……そうですね……」

女性陣からの圧力と、これまで己が手を出してきた女性の数としてきた行状の数々を思い出させられたキリトも、遅ればせながら同意する。いや、同意せざるを得なかった。

そんなキリトの様子に、女性陣がくすくすと笑い声を零していると、今まで部屋を照らしていた天井の照明がゆっくりと薄暗くなっていく。それと同時に天井の隅で起動した二台のスポットライトが、円形の光を左右から重ねてステージ中央部を照らし出した。

「――そろそろ始まるみたいだよ。リーファちゃんとストレアちゃんの、スペシャルショータイムがね」

セブンを膝枕したレインが、キリトの耳元にそっと囁く。

雄を楽しませるためにリーファとストレアが考えて創り上げたショーが、今まさにその幕を上げようとしていた。

14―8・（リーファ）

とある島。とある地下。スポットライトの光だけが照らし出す、ステージの中央。

黒く染めた革とエナメル素材で作られたボンデージスーツに、スポットライトの光を艶めかせながら、薄紫色の髪の少女が一礼する。

「――本日は、スペシャルプログラム『人間廃業ショー』をご覧くださり、誠にありがとうございます。

本日のショーの司会進行を務めます、ストレアです」

ストレア――どこかバニーガールめいた形状をした彼女のボンデージは、豊満なバストを下から盛り上げ、更にその大きさを際立たせている。ばっくりと開いた背中側は交差する黒紐で編み上げられ、白い肌とのコントラストを演出しつつ緊縛されているような錯覚も生み出す。そして、二の腕半ばから指先までを覆うロンググローブと太股半ばから爪先までを包むロングタイツが、スーツとの間に危険な絶対領域を生み出していた。

ゆっくりと顔を上げたストレアは、正面に用意された客席（ベッド）に向けて、いつもと同じ朗らかな笑みを向けると、片手でステージの袖を指し示した。

「それでは早速、本日のゲストに登場していただきましょー。張り切ってどうぞー！」

ストレアが示す先に、もう一台のスポットライトが光を当てる。ステージと袖を切り分ける幕の内側から出てきたのは、金色の髪をポニーテールに束ねたシルフ族の少女――リーファ。

いつもと同じシルフィレザーをまとった彼女は、ライトの光を浴びながらステージ中央に歩み出てくる。一歩下がったストレアが場所を空けた所で、リーファはステージ中央に立ち、先程のストレア同様に一礼してみせた。

「改めまして……こんにちは、リーファです。

今日は、あたしの『人間廃業ショー』を見に来てくれて、ありがとうございます」

半円形のステージ――客席がある正面以外を取り囲むように十数台の撮影・中継用ドローンが浮かび上がり、リーファの姿をレンズに捉える。

ショーの準備が整ったことを確認し、ストレアがリーファの横へと進み出た。

「それじゃあリーファ。まずは、リーファがどうして人間やめちゃおうと思ったのか……教えてくれる？」

「はい。まあ、ありきたりな話なんだけど、少し前にあたしの好きな人……ぶっちゃけた話、お兄ちゃん。そのお兄ちゃんに、少し前に彼女さんができたんです。

それでこの間、その彼女さんに『自分がちんぽ奉仕できない時に、代わりにお相手してくれるお手軽まんこ穴が欲しいんだけど、良さそうな子がいたら紹介して欲しい』って相談されちゃって」

「なるほどー。それで、リーファが立候補したんだ」

「はい。他にも何人か候補はいたんですけど、同じ家に住んでるあたしなら、お兄ちゃんが抜きたくなったら即セックスできるので最適だと思って。

それで、せっかくならちゃんとした生体ラブドールに生まれ変わろうと思って、人間廃業ショーに応募しちゃいました」

リーファの志望動機を聞いて、ストレアは満足そうに頷く。

「さっすがリーファ、お兄ちゃん想いの素敵な決意表明、ありがとう。それじゃあ早速だけど……リーファがどんな風になりたいか選んでもらえるかな？」

空中に一枚のコンソールウィンドウを表示したストレアは、それをリーファへと手渡す。

それと同時に、ステージの背景に仕込まれていた大型モニターが起動し、リーファへ渡されたウィンドウと同じ画面を表示する。そこに映し出されたのは、何十個もの入力項目が設定されたリストだった。

人間廃業後の肉体の所有権をどうするかという項目に始まり、身体・精神改良の有無など、多種多様な設定が可能になっている。

「へー、色々あるんですね……。えーっと、とりあえず

【肉体所有権保持者（オーナー）】は『お兄ちゃん』に固定して……色々あって目移りしちゃうなあ」

「焦らないで、ゆっくり選んでいいよ。リーファが自分をどういう風にしたいのか、みんなそれを見るのが好きなんだから」

「ありがとう、ストレア。じゃあ、これと、これと……」

時にはチェックボックスにチェックを入れ、時には詳細なテキストを入力しながら、リーファは自分の末路を決定していく。

【味覚変化・精液嗜好化】でザーメンを至上の味わいと感じるように舌を改造し、【男尊女卑思考（最大レベル）】、【男根崇拝】、【隷属思考】、【被虐趣味】、【被飼育趣味】、【奉仕主義】で所有者に仕えやすい人格を構成していく。

一瞬、【爆乳化】項目を選択しかけた所で『これ以上大きくなったら生活できなさそう……』とでも思ったのか、それを選択する代わりに【母乳体質】を選択し、更に『分泌量』を指定するオプションで『最大』を選ぶ。これで乳牛（ホルスタイン）並の母乳を絞れるようになる。

「へー、【ふたなり化】なんてあるんだ……。これ選んだら、おちんちん生えちゃうんだよね……？」

「うん、そうそう。おちんちんのサイズとか射精量も選べるよ。ちなみに一番人気は『最小サイズ』で『濃度極薄・最小量』」

「そうなの？　こういうのって、大きくてすごい方が人気みたいなイメージあったからちょっと意外」

「基本的に『オーナーさんのでかちんぽと比べられて嗤われたい。もし自分がオスだったとしても絶対に勝てないことを理解させられたい』っていう子向けのオプションだからね。小さい方が人気あるんだよ」

「そんな風に使うんだ……奥深いなあ……。まあ、あたしは遠慮しとこ」

自らの知らない領域に素直に感嘆しつつ、リーファは新たに【露出趣味】を選択する。人前で裸になることを喜ぶ性癖だ。

そして更に項目を選択しようとした所で、不意に指を止めた。

「ねえ、ストレア。この【人格排泄】と【捏造記憶による人格再構成】っ

て、両方選んだらどうなるの？」
「えーっと、ちょっと待ってね。この場合だと……。
まず、今のリーファの人格と記憶をコピーした『サブ人格』を作って、そっちに捏造記憶を入れて調整するの。
人格排泄で引っ張りだされるのは今のリーファの人格だけだから、綺麗にまっさらになったリーファの意識にサブ人格が上書きされて、より完璧な性処理人形になれるって感じかな」
「うわっ……それ、面白そう！　せっかくだしやってみようっと」
指先を動かし、リーファは【人格排泄】と【捏造記憶による人格再構成】を選択する。
更に【人格排泄】のオプションとして、『排泄タイプ：アナルパール内封入』、『記憶・感覚・人格維持』、『一方的感覚共有（本体→人格）』『排泄後人格の再加工（オナホール）』を指定。
もう一方の【捏造記憶による人格再構成】のオプションは、追加したい記憶を詳細に記述できるらしい。スクリーンキーボードを呼び出したリーファは、新たな己に刻み込むべき記憶をキーボードで打ち込んでいく。
「えーっと……『初めてお兄ちゃんとセックスしたのは8歳の時』、『お風呂はいつもお兄ちゃんと一緒』、『趣味はＡＶ見ながらオナニーしたり、お兄ちゃんとセックスすること』、『１０歳の頃からヌード写真集やＤＶＤをいっぱい発売』……」
己の過去を恥辱と性欲とセックスで彩り、そして濃すぎるほどに濃い白濁色に塗りつぶしていく。
己を使うオス専用のセックス・ドールであり、幼い頃から男の欲望に満ちた視線を受け続けてきたメスとしての半生を書き上げたリーファは、最後の仕上げとして何個かの項目に追加でチェックを入れてウィンドウを閉じた。
「――よーっし、これくらいで十分かな。できたよ、ストレア」
「ありがとう。どれどれ……うん、項目の抜け漏れも無し。完璧だよ！
それじゃあ、次は――裸になってくれる？　リーファ。

リーファの人間時代の最後のヌード、みんなにしっかり見てもらわないとね」

ストレアが『裸』と口にした瞬間、ステージの周囲に浮かんでいたドローンが改めてリーファの方を向いた。カメラレンズの近くについたサブランプは『録画中』あるいは『生中継中』を示す赤いランプが煌々と光っていた。

正面の特等席でリーファの姿を眺めるグループを含め、不特定多数の視線に晒されてることを思い出しながら——リーファは『装備全解除』ボタンを押した。

「んっ……♥」

甘やかな吐息と共に、シルフィレザーが光の粒子へと代わりながらストレージに格納されていく。その他の装備も同様だ。

故に、最後に残されるのは、まっさらなリーファの裸体ただ一つ。

若さという特権。日頃の鍛錬。そして遺伝子の奇跡が創り上げた、起伏豊かなグラマラスボディ。素顔も秘所も全て曝け出したまま、リーファは無数の視線の前に立つ。

「ほーらリーファ、回って回って。みんなにもっとよく見てもらわないと」

「う、うんっ」

ストレアに促されるまま、リーファはその場でくるりと回ってみせる。ブロンドヘアが靡き、カメラから死角になっていた背中とヒップがレンズに記録されていく。

「どう？　リーファ。世界中にいるたっくさんの人に自分の裸を見られてる気分は？」

「めちゃくちゃ恥ずかしいに決まってるでしょ……。

……まあ、でも。これが人生最後って考えると……悪くない、かも」

「そうこなくっちゃ。えっと、あとは……リーファ、ちょっとシステムの調整をしたいから、脚を開いて腰を落としてくれる？」

「オッケー。こんな感じかな……？

い、いぇーい、リーファでーす……♥　あたし、今から自分をただの肉便器オナホにしちゃいまーっす……♥」

ステージ正面を向いたまま、リーファは言われるがままにポーズを取る。露わになった秘所と肛門を狙い、一台の小型ドローンがリーファの下側へと潜り込む。秘すべき穴が全て、余すところなく映像に納められ、リアルタイムに世界中に送信されていく。もちろん、その存在に気付かないリーファではない。

そっと手を下腹部に伸ばしたリーファは、両手で股穴の媚肉を左右に割り開き、ピンク色をした肉襞をカメラに晒す。続けて尻肉を掴み、アヌスがよく見えるように引っ張る。自分の顔と名前と裸、そして隠すべき秘所の全てをインターネットに垂れ流し、不特定多数の視線を浴びる——その快感に酔い、恍惚の溜息を漏らす。愉しんでいる証拠に、こっそりとピースサインを添えて。

ストレアがシステムの調整を終えたのは、それから十数秒ほどしてからのことだった。同時にリーファの脚の間に潜り込んでいたドローンがするりと移動し、ステージの周囲へと戻っていく。

「よーし、準備かんりょー！　じゃあ早速、リーファの改造をはじめちゃおう！

リーファ、両手をばんざーいって感じで上に伸ばしてくれる？」

「はいはーい」

ストレアの指示に従い、リーファが両手を上に伸ばす。

それを合図に、リーファの周囲に四カ所の穴が開いたかと思うと、そこから四本のロボットアームが飛び出してくる。最初の二本が、百合の花のつぼみのように膨らんだ先端部を開き、リーファの両肘から先を包み込む。そしてしっかりと固定すると、リーファの身体を５０センチほど上に引っ張り上げた。

「えっ、ちょっ、ストレア!?」

「だいじょうぶだいじょうぶ。リーファはそのままリラックスしてくれてるだけでいいから」

「そ、そういう事なら……」

突然の事にリーファが驚いている間に、下方から潜り込んだもう二本のロボットアームがリーファの両膝から下を包み込んで拘束。

完全に自由を奪われたリーファは、両腕と両脚をＸ字に広げたポー

ズで素っ裸の身体を晒したまま空中に固定されていた。隠れているのは、アームの先端部によって包まれている両肘・両膝から先の部分だけだ。

身動き取れないリーファの姿を見ながら、ストレアは満足げに頷いた。

「よしよし。これで、改造中にリーファがどれだけ動いても大丈夫！　安心して気持ちよくなっていいからね、リーファ」

「そっ、そうなんだ……ありがとう……。あのさ、ちなみになんだけど……この後どうなるかって教えてもらえる？」

「あれ、説明してなかったっけ？

このあと、リーファに肉体改造用特製アタッチメントと、精神改造用のヘッドセットを付けるでしょ。そしたら、調教用ドラッグカクテルに全身しっかり漬け込んで、内側と外側から完璧なファックドールに改造しちゃうの！」

「へ？　それは聞いてな――」

リーファが問い直すより早く、ステージの天井部から音も無く降りてきた透明な管が、ロボットアームごとリーファを内側に格納する。リーファの身体が浮いている部分の直下にある床が変形し、その管を受け止めると、太いロックボルトを自動で締めてしっかりと密閉する。管の上部にある機械製の蓋も同様の動きを見せ、リーファの逃げ場を完全に奪った。

『ちょっと、ストレア！　ストレ――』

「消音（ミュート）システム起動」

四肢の自由を奪われ、更に管の内側に閉じ込められたリーファが何か叫んでいたが、ストレアが音声コマンドを実行した途端に何も聞こえなくなる。

そんなリーファの様子は気にも留めず、ストレアは正面にある客席（ベッド）に向けて改めて一礼。そして、コンソールウィンドウを呼び出し、機器の操作を始めた。

「膣内再調整用ディルドタイプアタッチメント起動。

腸内開発用ボールタイプアタッチメント起動」

ストレアがソフトキーボードを叩くと、筒の底部から新たなアームが二本持ち上がる。アーム部の形状は今までのモノと同様だが、先端部の形状はそれぞれ異なっている。

少し先に持ち上がった『膣内再調整用』と思しきアタッチメントの先端部には、『ディルドタイプ』というだけあって明らかに男性器を模したとしか思えないシリコン製の物体がついている。色は、黒。その形状は汎用品とは一線を画す生々しさを携えており、明らかに特定の誰かの男性器が完全に勃起した際の角度、太さ、長さを再現していた。

「こちらの膣内用のアタッチメントは、オーナー様のおちんぽ様を模した特製の逸品です。形状に関してはオーナー様の奥様の全面監修を受けております。

もちろん単なるディルドではなく、アームとアタッチメントを介して、リーファの子宮に特殊な薬品を充填する機能を持っています」

自社のプレゼンを行うスタートアップ企業の広報担当のような口調で、ストレアはアームの機能を解説していく。これでビジネススーツでも着ていたらどこかの企業から送り込まれたプレゼンターにしか見えないが、生憎彼女が着ているのはスーツはスーツでもボンデージスーツだ。

リーファの雌穴、その数センチ手前にスタンバイしているディルドを片手で指し示しながら、ストレアはプレゼンを続ける。

「膣内に埋め込んだまま薬品を流し込むことで、内部形状をオーナー様のおちんぽ様にぴったりフィットするよう改良する事ができます。これにより、オーナー様とのセックスではこれまで以上の強烈な多幸感を得ることが可能になります。

また、薬品は特殊なナノ遺伝子フィルターを子宮内に構成する効果も持っており、これによりオーナー様の精子でのみ受精・妊娠が可能な肉体に変化することになります。そのため、オーナー様以外の男性には一切の性的魅力を感じなくなります。まあ、女の子は子宮でモノを考える生き物ですから……仕方ないですよね。

当然、これらの変化は不可逆です。つまりオーナー様に捨てられた時点で、メスオナホとしての存在価値を全て失い、モノとして完全終

了するという事になります」

ベッドの上で複数名の女に傅かれ、絡みつかれながら、ストレアとリーファのショーを見物している『オーナー様』。そのオーナー様と、ついでにカメラ越しに見ている観客達に語りかけながら、ストレアはもう一方のアームを操作する。

遅れて起動した『腸内開発用』の先端部には、ゴルフボール大の透明な球体が十数個、一繋ぎになって真っ直ぐ伸びている。その緊張具合はコントロールできるらしく、今まで斜めの直線を描いていたかと思えば、次の瞬間には先端から緩い放物線を描いて垂れ下がり始めた。

「こちらのボールタイプアタッチメントは、膣内用アタッチメント同様、特殊な薬剤を体内に流し込む機能を持っています。

注入される薬剤には特殊な弛緩剤が含まれており、本来であれば数ヶ月かかるアナル開発を超短時間で可能にします。また排泄機能を排尿に一本化する効能もあるため、最終的に肛門をアナルセックス専用の器官として作り替えます。

ボールタイプアタッチメント自体にも収縮・膨張・振動・形状変化などの機能が備わっているため、リーファのアナルを徹底的かつ機械的に陵辱し、開発し尽くします」

ステージ背景の大型モニターに、腸内開発用アタッチメントと人体を模した簡易な３Ｄモデルが映る。アタッチメントはそのまま人体の３Ｄモデル内に差し込まれ、先端部から薬剤を流し込む――その様子が映像として表示され、ストレアによって解説されていく。

「現在のリーファを構成する人格――仮に『メイン人格』としますが、こちらのメイン人格は人間として成長する過程で様々なノイズによる干渉を受けているため、ファックドール用の人格としては不適当であり、無価値です。

そのため、先程の薬剤に加えもう一つ、人格排泄を促進する効能を持つ薬品も注入します。

この薬品によってメイン人格を分離・形質変換後、アタッチメント内部に設けられた空洞内に格納して体外に強制排出します。

その後メイン人格をコピーし、調整を施したサブ人格に切り替えることで――完璧な性処理便器として生まれ変わらせます」

モニターに映った人体の３Ｄモデル内部から抽出された、人格をイメージしていると思しき何らかの物体が球体内に集められて、そして引き抜かれる。それは言うまでもなく、リーファに待ち受ける末路に他ならない。

「器官開発用と人格排泄用。こちらの二種類の薬品を1リットルずつ、計2リットルをリーファに注入します」

無慈悲にそう告げつつ、ストレアはストレージから薬品の入ったカートリッジを一本ずつオブジェクト化する。同時に、ボールタイプアタッチメントに繋がったロボットアーム部分が変形し、カートリッジを差し込む為の開口部（スロット）を二つ開ける。

リーファが納まる管の中にオブジェクト化された二本のカートリッジは、アーム部にできた二つの開口部（スロット）にがっちりと接続された。

不幸なことに、その光景はリーファの視界にも入っている。

今から自らの体内に流し込まれる薬品の量に恐れを成したのか、リーファは唯一自由になる首をぶんぶんと横に振って拒否の意志を示す。開閉する唇の形から察するに『そんな量、入るわけないって！』とでも叫んでいるようだが、その声は誰にも届かない。

まあ、仮に届いたところで止めてくれる者もいないのだが。

「さらに」

ストレアがさらりと付け加えた一言に、リーファがびくりと反応する。その表情に浮かんでいるのは、明らかな怯えの色だ。

「オーナー様の奥様より、最高級調教用媚薬・濃縮原液2リットルのカートリッジをご提供いただきました。

本来なら２０００倍に薄めて使用するものですが……今回は贅沢に、原液をそのまま使用したいと思います」

先程オブジェクト化された薬品のカートリッジに比べて、倍は大きいサイズのカートリッジがオブジェクト化され、ロボットアームが新たに用意した開口部に接続される。

「また、オーナー様と奥様の共通のご友人の方々からも、同じ品をご提

供いただきました」
　その言葉の意味を理解した途端、リーファの体が再び震えた。
「リーファの親友であるトレジャーハンター様から、２リットル」
　大型のカートリッジがオブジェクト化される。
「奥様の親友である無敵の剣士様から2リットル」
　ずっしりとしたカートリッジがオブジェクト化される。
「オーナー様の愛妾であるアイドル姉妹様達から1リットルずつ、合わせて2リットルご提供いただきました」
　ハーフサイズのカートリッジと、ハーフサイズのカートリッジが、仲良く揃ってオブジェクト化される。
　淡々と、機械的に、無慈悲に、容赦なく――オブジェクト化された４つのカートリッジが、次々に新たな開口部に接続されていく。
　最終的に、ロボットアームには1リットルタイプのカートリッジが４つ、２リットルタイプのカートリッジが3つ接続された。
「薬品も含めた注入予定量の合計は、これでちょうど１０リットルですね。
　さすがに量が量ですので、一時的にお腹が大きく膨れてしまいますが……最終的に薬品は全て体内に吸収されるため、体型は元に戻ります。オーナー様の所有物となるモノの商品価値を下げるようなことはありませんので、どうぞご安心ください」
　準備を整えたロボットアームが持ち上がる。その様は、さながら鎌首を擡げた毒蛇の如し。
　その光景を見つめながらリーファはぱくぱくと口を開閉させるが、最早そこから声は出ていないのだろう。自らを待ち受ける恥辱と陵辱に恐怖するその姿は、まさに蛇に睨まれたカエルだ。
「それでは、消音（ミュート）システム、停止。アタッチメント先端ユニットの形状を、薬液注入モードに設定。
　対象ロックオン」
　複数連なったボール状アタッチメント、その先端にある一つの形状が円錐形に変化する。機械特有のスムーズな挙動で持ち上がったロボットアームが、その先端部をリーファのアナルにそっと押し当て

る。
『ひぅっ!?　うそ、やだ、やだあっ!!』
「ふふっ。リーファ、お尻の穴を締めて抵抗しても無駄だよ？　この子、そのくらいは簡単に突破しちゃうから。
　それじゃあ……突撃～っ♥」
『ひぐ――!!』
　先端が小さく、底面は広く。狭い隙間に潜り込み、そこを押し広げて後続への道を開く事に適した円錐形が、リーファの懸命な抵抗を物ともせずアナルへと押し込まれる。
『あっ――くぅううぅうっ!!』
「もう何個か入れるよ―。しっかり固定しとかないといけないからね」
『待って、まっ――』
「ごめんねリーファ。それは無理」
　先頭がこじ開けた道を通り、球体が後に続いてリーファの肛門へ押し込まれていく。二個、三個、四個――痙攣するリーファの身体にある程度の数が入ったところで、ストレアはロボットアームの前進を止めた。
　もちろん、それはリーファの懇願に心打たれたからではなく、単に次のフェイズを実行する為に他ならない。
「これくらい入れれば外れる心配も無いかなー……それじゃあ、薬液注入ルートの固定と貫通を確認」
『やだっ、うそ！　やだあっ!!』
「薬液カートリッジ全解放。圧力設定・最大レベルに設定。注入開始から全量注入完了まではオートモードに切り替え設定完了」
『なにこれ、中で動いてる!?』
「チャンバー内に薬液充填」
『――っ!?』
　かしゅん、という微かな音と共に、接続されたカートリッジ内から薬液が解放され、ロボットアーム内の導水管へと流れ込んでいく。複数の薬液達が混ざり合いながら辿り着く先は、リーファの尻に突き刺

さったまま停止している、アーム先端ユニット内部。
一繋がりになった透明な球体の内部にダークブルー色をした混合液が完全充填されるまで、ほんの数秒しかかからなかった。
完全に準備が整ったことを確認したストレアは満足そうに頷くと、コンソールウィンドウを操作した。
「アタッチメント先端ユニットの形状を、注入モードに変更。
――全量、注入開始」
リーファの中に最初に入った円錐形のアタッチメントが、誰にも見えないリーファの体内でその形を変え、アタッチメントの先端に穴を開ける。
邪魔なストッパーを失い、進むべき出口を得た大量の薬液は、圧力に押し出されるまま勢いよくリーファの腸内へ流れ込み始めた。
『ひやっ！　なにこれ、つめた――――――――ひぃ〃っぎぃいいぃ〃いぃいぃ〃いぃいいいいっ!!!』
拘束されたリーファの身体が、びくんっ、と大きく跳ねる。
その反応の大きさは、アタッチメントを肛門に挿入された時の比では無い。背中を弓なりに反らし、むき出しになった股座をがくがくと揺らすその様は憐憫を覚えるほど滑稽だ。
『に〃　やぁ〃　ぁあぁぁあ〃っ!!　ひいっぐ♥　ひ――っっっぃいいぃ〃いぃ〃いいいっ♥♥
おなか、や〃　けぇ〃っ、やげるっ――――――ううぅぅぅぅぅ!!』
直腸粘膜から吸収された媚薬の薬効成分がリーファの肉体と神経を容赦なく苛む。口の端からぼたぼたと唾液を零しながら、リーファは圧倒的な快感に悶え続ける。
またそれと同時進行で、リーファの腹部がどんどん膨らんでいく。勢いよく注入される大量の薬液が、その圧倒的な質量によってリーファの肉体を内側から押し広げていく。水道の蛇口に繋がれた水風船のように下腹部が大きく膨らみ、引っ込んでいた臍が圧力に負けて突き出る。人並み以上に大きなバストが、膨らんだ下腹部に乗って押し上げられる。
『ひゅぎひぃっ!!　ひぃ〃　ぃ〃っ〃!!　とめ〃っ、とめてへぇっ!!

い〟っ、いっぱい！　もう〟いっぱいだかりゃあ〟ぁああっ!!』
「リーファったら遠慮しちゃって。お薬はまだまだあるから大丈夫だよ。
　そうそう、残ってるボールも全部入れちゃうねー」
『む〟り〟っ！　むりぃ――いい〟ひいいいいいいっ♥♥』
　くすくすと笑いながらストレアがコンソールウィンドウを操作すると、薬液注入の為に静止していたロボットアームが再び動き出し、アタッチメント部を押し込み始める。
『おひっ♥おひりぃ〟っ♥♥　お〟っ、お〟ぉおっ♥♥　だめっ♥やだぁあっ♥♥　はいって、こにゃい〟でぇっ♥♥』
　アタッチメント部を構成する球体が、ずんっ、ずんっ、と一つ一つ力強く押し込まれる度、リーファはまともに意味を成さない喘ぎ声を吐きながら身体を震わせる。そしてもちろん、その間も薬液の注入は続いている。
　四肢をがっちりと拘束され、尻穴に異物と液体を突っ込まれながら、リーファは大きくなったお腹ごと必死に身体を揺らす。しかしその動きは拘束から脱出する為のものではなく――。
『お〟っ♥　おぅ〟っ♥　これ〟、これなんで、なんでえっ！
　ふーっ、ふーぅうっ!?♥♥　きもぢいぃ、きもちいいのにぃいっ!!
に〟ゃんでえぇえっ!??!』
　粘着質な雌汁をだらだらと垂れ流しながらも一切弄ってもらえない雌穴から昇り来る、どうしようもない疼きを鎮めるための動きであることは誰の目にも明らかだった。
「リーファ。すごいでしょ、このおクスリ。頭の中がぐっちゃぐちゃで、神経がぜーんぶ焼き切れてぶっ壊れちゃいそうになるのに……おクスリの効果だけだと絶対にイケないように調整されてるの。
　ほらほらがんばってー。もーちょっとで念願のおちんぽ（ディルド）に届くよー」
『ふっ♥ふううっ♥♥　はやく、はや〟く届いてぇえええっ♥♥』
　今や臨月の妊婦並みに膨らんだ腹を揺らし、たった数センチ先、しかし絶対に届かない彼方にあるディルドを求めてリーファは必死に

身体を揺らす。股穴から溢れた愛液が、管の底や側面に飛び散って滴へと変わる。

そんな哀れな姿に思わずくすくすと笑みを零しながら、ストレアは告げる。

「そんなにイキたいの？　本当はこのまま一週間くらい放置して、じっくりじっくりオクスリを染み渡らせてからイかせないと……リーファが完全にぶっ壊れちゃうんだけど……」

『ストレア、すとれ〝あ〝っ!!　はやく、はや〝くぅううう!!』

「ま、いっか。どうせ新しい人格と入れ替えちゃうんだもんね。それじゃあ――」

ストレアがコンソールウィンドウを操作すると、ディルドタイプのアタッチメントをつけたロボットアームが動き、リーファの膣穴目掛けて狙いを定める。ディルドの先端が掠っただけでも――いや、吐息を吹きかけられただけでも絶頂しそうな程に興奮し、愛液をだらだらと垂れ流すリーファの穴。

そこに太いディルドを突っ込みやすくするため、両脚を拘束するアームが動き、リーファの股を更に開かせる。

「――バイバイ、リーファ♥」

薄ピンク色をした媚肉が露わになった瞬間――ロボットアームが動き、黒光りするディルドを根元まで一気に押し込んだ。

『い〝っ――――』

太いディルドが雌穴を貫き、子宮口を押し上げる。

待ちに待った強烈な挿入。それを受け止めたリーファの身体は、びくんっ、と一際大きく跳ね――。

『――イ〝っ、うぐう〝ううう〝うううぅぅぅ♥♥♥　あ〝ぅぅぅうううっっっ♥♥　あ〝っ♥いっぐ、い〝っ――っぎゅうぅぅぅぅうううっ♥♥♥♥♥』

全身の筋肉をぴんと張り詰めさせたまま、リーファは念願の絶頂を迎えた。

高濃度の媚薬によって昂らされきっていた雌穴からは大量のイキ潮が噴き出し、リーファを囲む透明な壁にびちゃびちゃとぶつかって

いく。

たった一突きで陥落したリーファに、ストレアは更に容赦の無い責めを加えるべくコンソールを操作し、アナルパールの振動機能を起動させた。

『ふぴ――いいぃ〜いいぃ〜いいぃ〜いいぃ〜いいぃ♥♥♥　イグっうううっ♥♥　いぐ、ごわれりゅうううう♥♥　おなかのなゕか、ぐちゃぐちょになってイぐいぐイぐううううううううっ♥♥』

絶頂の中に重ねられる絶頂。幾度も痙攣を繰り返す肉体。リーファの瞳孔は散大し、開きっぱなしになった口からは舌が出しっぱなしになり、唾液をぼたぼたと零し続ける。

『おっ♥おゔぉおおっ♥♥　いっぐ♥♥　イっ――つぎゅっうううゔぅうううゔっ♥♥』

透明な管の中で痴態を晒すリーファ。その様子に当てられてか、観客席にいた女達も達する。ある者は男の足に口付けながら。ある者は射精していただいた精液で口の中をいっぱいにしたまま。ある者は乳房を乱暴に揉み拉かれながら。

興奮し、発情し、絶頂した女特有の気配で満たされた部屋の中でストレアは微笑み――ディルドが接続されたロボットアームに命令を下し、ずんっ、という力強いストロークでリーファの膣奥をもう一度突いた。

『――んゔ、おゔっほおゔ、おおぉおおおぉおおおぉおおおおおおおおっっっ♥♥♥』

絶頂の高みに登り詰めさせられていたリーファの意識が、ほんの少しだけ戻ってくることができそうになったまさにその刹那。ストレアの悪戯によって子宮口を抉られ、リーファは再び獣のような喘ぎ声を上げて高みに登り詰めさせられた。

『おゔ、っぉっおゔ、ぅっうううううゔ、ううっ♥♥』

全身の痙攣や潮吹きは言うに及ばず。機械と薬品が与える無慈悲で無遠慮な快感に揺さぶられるリーファの意識は、嵐の中に漂う小舟が如し。口から零れる言葉は最早意味を持たず、ただ只管に快楽だけ

を表した鳴き声になる。
　そうして何度も身体をヒクつかせたあと、ついにリーファはぐったりと脱力した。
『お〝っ――おお〝っ……♥♥　くひぃっ……♥♥』
　だらりと突き出された舌は戻らず、一切の力を失った肉体は拘束によって吊り下げられたまま、時折痙攣する以外にはなんの反応も示さない。まるで操り手を失った操り人形のように、ただただ空中にその身を投げ出していた。
　リーファが抵抗する力も術も全て失った事を確認し、ストレアは頷く。
「よしっ。そろそろいいかなー」
　ストレアがコンソールウィンドウを操作すると、リーファを閉じ込める管の天井部分から新たなアームが伸び、リーファの顔にゴーグルのような物体を装着する。細いケーブルが繋がったそのゴーグルは、ＶＲという言葉にまだ『フルダイブ』という枕詞が付かなかった時代に登場したＶＲデバイスを思わせる。
「リーファの意識が真っ白になって、精神のタガが緩んだところで……この洗脳・記憶改竄デバイスを使って頭の中を徹底的に書き換えて、生まれながらの肉便器に作り替えちゃいます。
　まあ、本当ならサブ人格の方だけ改造すればいいんだけど……せっかくだしメイン人格の方も徹底的にぶっ壊しちゃってもいいよね。
　ついでに洗脳中はオクスリ入りザーメンジュースに全身漬け込んじゃって……っと」
　ストレアはコンソールを操作し、リーファの記憶改竄を開始する。脳内を直接書き換えるそのやり方は、手法の凶悪さと相反して静かに進んでいく。リーファの脳内で何が起きているかはリーファ以外にはわからず、自らの意識の根幹を成す部分を弄くられる苦しみを――あるいは悦びを――口にするには、今のリーファは消耗しすぎていた。
　そして、管の底から湧き上がり出すのは、どろどろに濁りきった大量の精液。言うまでもなく、リーファのオーナーとなる男の精液を複

製して作られたものだ。
　何億何兆という精子が獲物を求めて蠢くその白濁液は、ぼこり、ぼこりと泡を吹き出しながら、リーファの四肢を拘束するアームごと彼女の身体を飲み込んでいく。白く美しい肌に、輝くような金色の髪に、そして体中の穴という穴を通って体内の全てに至るまで――オスの精液でしっかりとマーキングし、所有物であることを全身の細胞全てに理解させていく。
　オーナーの所有物であると刻み込んでやる、ストレアなりのサービスである。
「おっと、危ない危ない。リーファが溺れちゃわないように……っと」
　天井部分から伸びる、新たなアーム。先端部のアタッチメントは、リーファの鼻と口を覆う形状をしており、どこか人工呼吸器のマスクを思わせる。
　実際のそれと決定的に違うのは、口元に繋がるのであろう位置に、リーファがまさに今この瞬間、女性器に咥え込んでいるモノと全く同じ長さと太さと色をした突起物――黒光りするディルドが生えているという点だけだ。
「はーいリーファ。リーファの大好きなおちんぽだよー♥　お口開けてー」
「……お゛っ゛……はへっ……♥♥」
「あははっ。これだけアヘ顔してるなら、そのままいれても大丈夫だね」
　ディルドの先端が近づいた直後にリーファの口が緩んだのは、快楽によって脱力したためか、条件反射によるものか。どちらにせよ、あるいはそのどちらでなくても構わない程に開きっぱなしになった口の中へ、ストレアはディルドをそっと挿し込む。
　舌は異物を排除するどころか、むしろディルドに傅くように裏筋部分にひれ伏し、喉奥へ素通りさせる。そして、リーファの口と喉は、初めから性交に使うために作られたのではないかと思えるほどの容易さで、ディルドを深々と咥え込んだ。
　マスクがリーファの鼻と口周辺を覆い、空気を送り込み始める。も

ちろんその空気もただの空気ではなく、オーナーの肉棒・陰嚢の香りに精液臭をミックスし、濃縮した匂いをたっぷり含ませてある。肺の奥底まで主人のものとしてマーキングするためだ。

「これでよーしっ！

それじゃあ、リーファ。洗脳が終わったらまた会おうねー♥」

胸が精液の海の中に沈み、鎖骨が沈み、首が沈み、顔が沈み、頭が沈み――そして、リーファの全てが精液の中に沈む。事前に見ていなければ、管の中にリーファがいることなど誰にもわからないだろう。

底から蓋の部分までの全てが、一分の隙も無く白い濁りに覆われきった管の隣に立ち、ストレアはカメラドローンの一台に向き直った。

「――それでは、皆様。

リーファがファックドール、肉便器、オナホ、あるいはそれらに類するちんぽご奉仕用の道具に生まれ変わるまで、しばしの間お待ちください。

なお、ライブ中継をご覧の皆様には特殊な偏光フィルターを通して内部のリーファの映像をご覧いただけるサービスもご用意しております。また、リーファの洗脳・記憶改竄に使用しているセックス映像もＡＶとしてご覧いただけますので、よろしければそちらをご覧になってお待ちください」

ストレアはカメラに向かって丁寧に一礼し、そのままステージを降りる。

動く物の無くなったステージの上に残ったのは、白い胴を抱えて中央に屹立する柱と、時折ごぼりと音を立てて泡を揺らす濃厚な精液の音だけだった。

脳髄の内側に刻み込まれていく、体験したことのない新しい記憶。

ねじ曲げられていく常識と価値判断。

そう感じた次の瞬間には、大切な過去の思い出として、あるいは守

るべき社会通念として認識してしまう精神（こころ）。

まだ十数年しか生きていないというのに、叩き込まれる情報の総量は優にその数倍以上。それを理解できていても、違和感の欠片すら抱けない。

白濁液の中に浸かる彼女が抱くのは、ただただ純粋な喜びだけ。ただただ純粋な幸せだけ。

――自らが書き換えられていく。その感覚は、意外なほど心地よい。

（――――あはっ……♥♥）

ごぼり、と響く気泡の音を聞きながら、リーファは一人微笑む。

視界は何らかの機器によって塞がれ、四肢もまた拘束具のようなもので固定されているらしく自由に動かせない。

普通なら不安に泣き叫んでいてもおかしくない。リーファがそうせずに済んだのは、口と喉を貫く太い物体――慣れ親しんだ形と太さを持つ――のおかげ。そして全身はもちろん、喉を通って胃の奥底までを満たす、濃厚な精液の味と重さと温かさのおかげだ。

（あー……いい匂い……♥♥　お兄ちゃんちんぽしゃぶりながらお兄ちゃんちんぽハメてもらえるなんて、幸せすぎでしょ……♥♥

あたしだけこんないい思いしてていいのかな……？）

自由に動く舌と口を使って、リーファはディルドにしゃぶりつく。何もしなくても精液は不定期に流し込まれるし、本物の肉棒ではないが、それでも兄のそれを模して作られているのだから礼を尽くすのは当然である。

ただ一つ解せないことがあるとすれば、今感じている快楽や味などの感覚全てが、まるで絹の薄布一枚で作ったフィルターを通して与えられているかのようにどこかぼんやりとしていることだけだ。

（うーん……なんなんだろ、これ。なーんか変な感じ……。

あーでも、またイっちゃうなあ、これ……。お兄ちゃんちんぽの偽物（おもちゃ）、強すぎでしょ……。ケツ穴に入ってるボールみたいなのも容赦ないし……）

振動と伸縮を繰り返すアナルパールと、不定期に動いては膣内を穿

つディルドによって与えられる絶頂に溺れる肉体。

それら全ての感覚を、リーファの意識はどこか客観的に眺めている。ほんの一歩か二歩、離れたような場所で。

（あー、ダメだねこれ。あたしの身体、イクの我慢しようとしてるけど……無理っぽい。

そもそも女の子はちんぽに勝てない生き物なんだってのに、なにしてるんだか……。

ほーら、イーけっ、イーけっ。とっととイけ。ほらイけ、イっちゃえ。

『全身ザーメン漬けにしていただいてありがとうございます。マゾブタリーファ、全力でイキます』って敗北宣言しながら潮ぶちまけちゃえ、あたし）

自分で自分を煽った直後、リーファの身体がびくり、びくりと二度跳ねる。背中を弓なりに反らせながら噴き出した雌汁と、絶頂に至った雌の鳴き声は、濃密なザーメンの中に溶けて混ざり合っていく。

（うっわ、ほんとにイってる……ちんぽに弱すぎでしょ、あたし……。この雑魚ちょろマンコ、何回イってんのよほんと……。

それとも、お兄ちゃんのちんぽが強すぎるのかな？）

脳内に溢れ出した快楽物質が神経を飽和させ、抵抗力と理性を弱めた直後――洗脳装置から送り込まれた電気信号が、再びリーファの精神と記憶を掻き回していく。

（きたきた……♥　はやく、はやくこわして♥　もっといっぱい……あたしのこと、ぐちゃぐちゃにして♥♥）

既に刻み込まれた記憶のフラッシュバックと、新たに叩き込まれる記憶の奔流。主観的な体験と客観的な映像が区別できないほどに混ざり合い、渾然一体の情報濁流と化し、リーファの全てを犯しながら再構築していく。

たとえばそれは、ファーストキスの記憶。

近所に住んでいるアスナおねえちゃん、お友達のフィリアちゃんと一緒に、お兄ちゃんのぶっといおちんぽにキスをした大事な大事な思い出。大きなおちんぽにファーストキスを捧げる――世界中の女の

子に共通する憧れ、それを叶えた日の事は今でもはっきり覚えている。

もちろん、初めてセックスしたのもその時だ。お兄ちゃんのちんぽは腕よりも大きくて、全部挿入れられる子は誰もいなかった。一番深くまで挿入できたアスナおねえちゃんですら、半分入れるのがやっと。

けど――それでも皆で必死に頑張って、最後は揃ってマーキング顔面射精してもらえた。次の日は三人揃って学校をお休みしたのもいい思い出だ。

たとえばそれは、初めてのアルバイトの記憶。

バイト先は、アスナさん――いや、アスナお姉様に紹介してもらった。交通費・制服支給で高時給、ボーナス付きの――高級ストリップクラブでのショーガールのアルバイト。

バイト先を探していたシノンさんと一緒に――そして、時々はアスナお姉様も一緒に――紳士淑女の皆様方の前で己を晒し、裸を晒し、恥を晒し続けた。

最初の演目は、いつも名物のポールダンス。冷たいポールに絡みつきながら、娼婦ご用達のセクシーな下着や紐と変わらないマイクロビキニで身体をくねらせる。お客様が集まってきたら、お待ちかねのストリップタイム。もちろん、脱いだ衣装はキスマークを添えて、チップを一番弾んでくれたお客様にプレゼント。

その後の演目はその日次第。ザーメンジョッキ早飲み対決や、ペニスバンドや両頭ディルドを使ったレズセックスショー。ガニ股公開放尿ショーの披露や、お客様の方にケツを突き出して性器を思いっきり晒す撮影タイム。はしたない言葉をたっぷり歌詞に入れた変態ソングを熱唱したり、私達女の子（メスブタ）は男性様にまんこ穴を捧げるために生まれてきたのだと変態スピーチで高らかに宣言したり。

そうしてバイトが終わったあとは決まってお兄ちゃんに迎えにきてもらい、そのままシノンさんのお家で仲良くセックスする。いつのまにかそれがみんなのルーティーンになっていった。

たとえばそれは、《ＡＬＯ》の記憶。

選んだ種族はシルフ。最も速く空を飛べる種族であり、先の大戦でスプリガン・ウンディーネ連合軍に敗北し、奴隷として支配されている種族だ。

キャラメイクを終えてログインしてみれば、スタート地点はどこかの暗い地下室に用意された牢屋の中。もちろん初期アイテムは『奴隷の首輪』一つきりで、ほとんど素っ裸と同じ。牢屋の中には同じシルフ族の奴隷・ルクスがいて、奴隷としての振るまい方は全てルクスが教えてくれた。だからお兄ちゃんが地下室に様子を見に来てくれた時も、礼儀正しく裸土下座の体勢でお出迎えすることができたし、忠誠を誓う奴隷口上を噛まずに言い切ることもできた。

その後も、お兄ちゃんがスプリガン領をうろつく時はいつも同伴させてもらった。もちろんルクスも一緒だし、もちろん素っ裸のまま。街で他のスプリガン男性に出会った時は自分たちがどれだけ愚かでちんぽの事しか頭にない雌豚であるかを強調しながら自己紹介し、人前でもどこでも発情した時はまんこを弄くり、浅ましくお兄ちゃんのちんぽをおねだりした。

よく躾けられた淫乱な雌奴隷を従え、コレクションする。それがスプリガン男性にとってのステイタスになる事を知っていたから。

たとえばそれは、剣道の記憶。

『女の剣道は土下座に始まり土下座に終わる』という格言からも分かるとおり、女性の剣道とは『主と定めた殿方に、いかに美しく、華麗に、そして自然に敗北するか』を追求する武道である。

もちろん、リーファにとって敗北すべき相手は兄である。残念なことに兄は剣道を辞めてしまったが、自宅に道場があるおかげで兄と試合をする機会は確保できている。

特に最近では、兄の後輩であり同じく剣の道を志すロニエという友人ができたおかげで、自然と試合をする頻度も増えた。

時に二人がかりで兄に挑んで敗北し、壁尻肉便器として自らを差し出して命乞いをする。時に相手を裏切り、兄への供物として捧げ、オスが強姦を楽しむ手伝いをする。時にその場にいない女達をどうやって陥れ、オナホールにするかを企みながら、兄の肉棒を舐めしゃ

ぶって奉仕する。
メスとしての礼節を学びながら、己を磨いていく。その日々が楽しくないはずがない。
たとえばそれは、たとえばそれは、たとえばそれは――。
絶頂の度に壊され、犯され、作り直され、それが更なる絶頂を呼ぶ。
洗脳工程は最早数え切れないほどの回数繰り返され、リーファを徹底的に作り替えていく。
幾度も、幾度も、幾度も。繰り返し、繰り返し、繰り返し。
新しく、穢れなき、そして完璧な――肉便器（リーファ）を創り上げるという崇高な目標を叶えるために。

14ー9.（ユウキ・リーファ・アスナ）

ユウキは激怒した。必ず、かの邪知暴虐のキリトを除かねばならぬと決意した。

ユウキには政治が分からぬ。ユウキはＶＲＭＭＯプレイヤーである。剣を振るい、スリーピング・ナイツと遊んで暮らしてきた。

けれども親友の危機に対しては、人一倍に敏感であった。

（この向こうにアスナが……）

固く閉じられた扉の前に立ち、ユウキは内心で独りごちる。

とある南国リゾートの海上に浮かぶ小島。そこは暴虐の王たるキリトのためのセックスアイランド。そんな危険な島に、親友であるアスナが囚われ、その身を思うままに弄ばれている――。

信頼できる筋からその情報を手に入れたユウキは、アスナを救出すべく、その島に潜入する事に成功していた。

怪しまれることを避けるため、島へ入る際には正規の滞在者と同様の手順を踏んだ。自身のヌードを撮影し、レイプも含めたあらゆる性的行為を一切拒否しない人権放棄・奴隷宣言書を作成し、提出してある。

それがどういうことか。仮に今のユウキがこの島にいる誰かしらによって強姦されたとしよう。その場合でも、相手に一切の非は無い。むしろ相手の性欲を煽ったユウキの方にこそ重大な非があると見做されるのだ。

（待っててね、アスナ。ボクが絶対に助け出してあげるから！）

多大なリスクと決意と共に、ユウキは扉に手をかける。

島の中央にあるゲストハウス、その地下にあるプレイルームの一つに、アスナは囚われているらしい。館内に入る際のチェックをすり抜けるため、現在のユウキはナイフ一つ装備していない丸腰。更に言うなら衣服の一つも身につけていない素っ裸である。

一応、ストレージの奥深くに武器を隠して持ち込むことには成功したが、それはあくまで最後の切り札である。今すぐオブジェクト化す

るわけにはいかない。
　文字通り、生まれたままの姿で――ユウキは扉に手をかけ、静かに押し開けた。
（――――っ♥♥）
　扉を開けた途端、流れ出す濃密な香り。狭い隙間を抜けて溢れ出す、汗と精液と愛液と様々な体液の香りと興奮を含んだ熱気が、ユウキの肌をダイレクトに撫でた。
　一瞬で腰を抜かしそうになった己を必死に鼓舞しながら、ユウキは室内へと脚を踏み入れる。
（アスナ、一体どこに……）
　不自然にならないよう意識しながら、ユウキは室内を見渡す。
　真っ先に目に付くのは、室内中央部にせり出すように作られた半円形のステージ。その中央部に居座るのは、人間一人をまるごと飲み込めそうな巨大なガラス管。天井部分が開いたガラス管は、7割ほどが白濁した液体――おそらくは精液によって満たされていた。
　また、ガラス管の前方部分には、大人用サイズの透明なビニールプールが置かれている。ガラス管同様、精液がどっぷりと注ぎ込まれたプール内では、ストレアとフィリアが、リーファの身体に白濁液を塗り込むようにしながら、その身を淫らに絡ませあっていた。
（アスナは……いないか。それにしてもリーファのお腹、すっご……♥）
　白濁液まみれのプールの中で弄ばれるリーファ。その腹部は、臨月の妊婦のように膨らんでいる。それも、一人や二人ではなく、最低でも五つ子は孕んでいそうな程の大きさに。
　ストレアの掌で精子を塗り込まれ、フィリアの舌で舐め取られ、甘く溶けた声を上げながらリーファは乱れる。その様子を横目に見ながら、ユウキはステージ正面の客席――キングサイズの大型ベッドに向ける。
（――――みつけた）
　白いシーツの上で絡み合う男女の中に、ユウキは親友の姿を捉える。

ぐったりとした様子のセブンの横。上半身にレインが覆い被さった状態で、ベッドの上に仰向けに寝転ぶキリト。

そのキリトの股間に顔を埋め、鼻先を股座に押しつける程に深々と肉棒を咥え込み、しゃぶり続けているアスナを。

片手をキリトの脚に添えて自らを固定しつつ、もう片方の手で自身の性器を弄くり回し、ぐちょぐちょと水音を響かせながら本気の自慰行為に耽っているアスナの姿を。

（よし、早くアスナを助け――）

「あれ、ユウキ？　どうしたの、そんな所で」

「っ!?　す、ストレア!?」

思わず、素っ頓狂な声が出た。アスナに気を取られて周囲の警戒を怠ったことが災いした。プールの縁から上体を乗り出したストレアが、怪訝な顔でユウキを見つめていることに気付けなかった。

ユウキの動揺に、ストレアは更に疑念を深めたらしい。薄紫色の前髪に付着していた精液を指先でつまみ、ぺろりと舐め取ったあとで、ストレアは改めてユウキに視線を向ける。

「ユウキ。なんだか変。さっきから、いろんな所をじろじろ見てたような……。ベッドの方にも行こうとしないし……」

「そっ、そっ、それはね……」

（まずいまずいまずい！　なんとか誤魔化さないと……。ううん、いっそもうここで勝負に……!!）

ストレアに捕まって荷物検査などされようものなら一巻の終わり。そうなる前に武器をオブジェクト化してしまおうか――ユウキがそう考えた直後だった。

「――あっ、わかった！　ユウキ、これが欲しかったんだよね？」

何かに得心した様子のストレアが、ぽんっ、と両手を叩く。そしてコンソールウィンドウを呼び出すと、自身のストレージから何かをオブジェクト化した。

「お待たせしましたー！　特盛りザーメンジョッキ・リーファの体液と調教薬物たっぷりミックスだよっ！」

光の粒と共に物体の形を得たそれを、ストレアが差し出す。大人の

男性ならともかく、ユウキでは片手で持つことが難しい程に大きなガラスのジョッキに、溢れんばかりの精液を注ぎ込んだモノを。

「えっと、ストレア……」

「あれ？　ユウキ、これが欲しかったんじゃないの？　ほら、アタシ達が邪魔で取りに行けないのかなって思ったんだけど……違った？」

ジョッキを両手で支えたまま、ストレアが顎である方向を指す。その先にあるのは、大量の精液を溜め込んだままステージ中央に鎮座するガラス管だ。

その口ぶりからするに、ガラス管の中にはリーファが漬けられていて、そしてその白濁液のごく一部がこのジョッキの中に入っているのだろう。

もちろん、全く以てユウキの目的とするものではない。ただ、このストレアの勘違いを利用できないほど、ユウキは愚かではなかった。

「――そっ、その通り！　さっすがストレア、お見通しだねー！　ボク、これが欲しかったんだよ～」

「やっぱり！　ごめんね、ユウキの邪魔しちゃって……」

「ううん、気にしないでよストレア。元はと言えばボクがちゃんと言わなかったのが悪いんだからさ」

そう言って、ユウキはストレアからジョッキを受け取る。

（ひっ……♥　なにこれ、おっもぉ……♥）

ずしりと感じる手応えは、決してジョッキそのものの重さだけが理由ではない。

向こう側が一切透けて見えない程に濃い精液と、その中で蠢く大量の精子達の存在。それが重さとなって、ユウキの手を支配している。

（ニオイもきっつう……♥　嗅いでるだけで妊娠しそう……お腹の奥がきゅんってなってる……♥

ボクの親友にちんぽ咥えさせて好き放題してるヤリチンの精子なのに……♥　これで孕まされたい、ボクの子宮で赤ちゃん育てたいって身体が叫んでるみたいだ……♥♥）

すう、はあ、すう、はあ、と呼吸を重ね、鼻腔から吸い込んだ精臭を肺に通し、循環させた後に吐き出す。人間の生命活動を維持する上

で最も大切なシステムに、雄の匂いをしっかりと染みこませていく。
部屋に満ちている匂いの大半、その大元を直に浴びているのだ。その威力は、入室時に感じたのとは比べ物にならない程に強烈だ。
ギリギリの所で理性を留めたユウキは、改めてジョッキを持ち直す。
「それじゃあ、ストレア。さっそくだけど……いただきます♥」
この島に潜入する前、島内で怪しまれることがないよう、ユウキは各種のお作法について学習している。その中には、ザーメンジョッキを供された時の作法も含まれていた。
たとえば、ジョッキを供されたらあまり長い時間放置してはいけない。匂いを嗅いでトリップしたり、重さをしっかりと感じる程度なら良いが、それ以上に時間をかけるのは無作法だ。
そうした作法に従い、ユウキは両脚を左右に開いて腰を落とす。これは雌の基本姿勢の一つであり、自らの高さを下げることで雄より格下であることをアピールする狙いがある。雄の体液である精液が大量に注ぎ込まれたジョッキを手に、雄にへりくだる姿勢をしっかりキープしたユウキは、ジョッキの縁に唇をそっと押し当て――その中身を口の中に流し込む。
（――――っっっ♥♥）
唇の間から口内に流れ込む、独特の臭気を伴った生温かい液体。何十億もの精子達と、リーファの身体を冒した非合法薬品、そしてリーファ自身の体液が入り交じった液体。支配したいという雄の欲求と、支配されたいという雌の欲求と、その両者を繋ぐ化学物質の塊。
その純粋にして不純の塊を、ユウキはまずたっぷりと口に含む。フェラやイラマで軽い酸欠状態になっている時や、喉奥深くに射精されている時とは異なり、実にクリアな状態で精液を味わう。
（お゛っ♥　や、やっばい♥　オス様の特濃精子、ボクの口の中レイプしてる……♥　お精子様達、ごめんなさい、妊娠できない穴でごめんなさいっ♥　お詫びにボクの口と胃袋、全部マーキングしていいですからぁ♥）
頬袋に餌を溜めるハムスターのように精液を貯め込み、舌だけでは

なく口全体で精液を味わう。口内から溢れ出す直前で、一口、また一口と、喉奥へと嚥下していく。

ごくり、ごくり、と。自分の内側から聞こえる嚥下の音が、ユウキの興奮を煽る。

ザーメンジョッキに口を付けた場合、最後まで離さず一気に飲み干すのが一般的なマナーである。飲み進めるペースは個人の自由であり、ユウキのそれは一般的なペースからすると実にゆっくりとしたものだ。

（あ〜ー……ちんぽ汁うっまぁ……♥　リーファ、こんなのにずっと漬かってたの？　……ずるい、ずるいよ……♥　ボクも漬けてもらおうかな……あ、でもそしたらアスナのこと助けられない……？

……っと、いけないいけない。ザーメン飲んでる間は、ちゃんとおちんぽ様に感謝しないと……♥　いっぱいお射精してくださってありがとうございました♥　特濃精液は、ボクがしっかりごっくんさせていただきます♥♥）

ユウキのように時間をかけて飲む場合、肉棒あるいは男性そのものへ感謝しながら飲むのが一般的なマナーとされている。守らなかった所で外から分かるものではない――というのは素人の考え。実際、そういった思考の有無は所作の端々や表情にしっかりと表れるらしい。

特に、ユウキの前にいるのはストレアである。妙にカンの鋭い所のある彼女相手に手抜きは許されない。

（やっば……♥　ザーメン重たすぎて、下半身きゅんきゅんしてきた……♥　交尾したい、こーびさせろってうるさい……♥♥　よかった、目の前にちんぽなくてよかった……♥　あったら絶対種付けおねだりしちゃってるよお……♥♥）

かくっ、かくっ、と腰を揺らし、発情と交尾アピールをしながら、ユウキは精液を飲み続ける。性器から雌汁が溢れ出し、床のカーペットの上に落ちていく。

ごくり、ごくり、と喉を慣らし、胃の腑へ流し込まれる白濁液。その重さと匂いにユウキの内臓が即座に降伏したのはもちろん、その中

に混ざり込んだ薬物は、既にユウキの体内への浸透と浸食を開始しているだろう。

（負ける♥　ザーメンにっ、負けるうっ♥　ただでさえちんぽに絶対勝てなくて、生きてるだけで敗北宣言してる雑魚まんこなのに……このままじゃちんぽ汁様にも負けちゃうよおっ♥♥

そしたら本当に、今度こそ本当に、ちんぽに媚び媚びしてオス様に征服していただくだけの便女になっちゃう……♥♥　そしたら……あれ？　もしかしてそれって、すっごく幸せ？

なら……いっか……♥♥）

自らの内側を染め上げながら、ユウキは嚥下を続ける。ごくり、ごくりと喉が鳴る度に、身も心もオス様への献上物として捧げられるメス便器であるという再認識が進む。

そうして、頭の天辺から爪先までの全てに、負け犬性癖とマゾメスブタとしての礼節が行き渡った頃――ユウキはようやく、全ての精液を飲み干した。

「おぅっ……ぐ、うぇっぷ……♥　はあ、はあっ……♥」

唇をグラスから離した途端、胃の腑から昇ってきた精臭まみれの空気が、ユウキの喉を逆流して溢れ出す。気道から抜けたガスが鼻腔を襲い、強烈なニオイに意識がトリップしそうになる。

「ふひゅっ……♥　ヤク入り特濃ざーめん、ごひそうさまでした……♥」

ジョッキに張り付いた残滓も丁寧に舐め取り、すすり上げ、一滴残らず飲み干す。空になったグラスを掲げると同時に、自身の口も大きく開いて中に残っていないことを示す。実際、のどちんこまではっきり見えるほど開かれたユウキの口内には、臭い以外の残滓は何一つ残っていない。

ぴかぴかに舐め取られたグラスを受け取ったストレアの表情からするに、ユウキへの疑念はすっかり無くなったようだ。

「じゃ、じゃあボク……」

「ザーメン御馳走になったお礼をしにいくんでしょ？　アタシはリーファの準備にもうちょっと時間かかるから、そっちはよろしくね」

「オッケー！　まかせといて！」
　ストレアはうんうんと頷くと、そのままビニールプールの中に身体を沈め、リーファを弄ぶ仕事に戻っていく。
　どうにかこうにか誤魔化すことに成功したユウキは、ほっと胸をなで下ろすと、ステージ正面にあるベッドへ向かう。
（さっきみたいな事があったらマズい……。怪しまれないようにしないと！）
　相変わらず、ベッドの上では三人の男女による睦み合いが続いている。キリトの上半身にレインが覆い被さり、唇を貪り合うような激しいキスを繰り返しているおかげで、先程の光景を見られていなかったのは幸運だと言える。うつぶせのままキリトの股間部に顔を埋めているアスナに関してもそれは同様だ。
　そっとベッドの上に乗ったユウキは、四つん這いの姿勢でシーツの上を進み、アスナの隣へと辿り着いた。
（アスナ……）
　相手はユウキの親友である。声に出す必要は無い。視線と気配さえあれば、ユウキが側に来たことくらい簡単に気付く。
　事実、アスナは閉じていた瞼をぱちりと開け、片目でユウキの方を見た。そうして、別れを惜しむかのように鼻先をキリトの股間部にぐりぐりと押し当てたあと、肉棒を咥え込んだままゆっくりと顔を上げた。
（っ!?）
　ユウキの目の前で少しずつその姿を顕す、オスの象徴。さながら大黒柱の様に太く、長く、雄々しい一物。アスナの口内から喉奥までの領域全てをオナホール代わりとして使うことを許されたモノ。
　アスナが少しずつ顔を引き上げる毎に、唾液をまとってらてらと輝く太い軸と、派手な色のカラーリップによって至る所につけられたキスマークの残滓やフェラチオで強く吸い付いた際に作られたリングの痕跡が姿を現す。
　戦闘機のパイロットが敵機を堕とした時、機体の機首部分にキルマークを描くことがある。陰茎（チンポ）や陰嚢（キンタマ）に残されたカラーリップの痕

は、これと同じ類のものだ。唯一の違いは、前者は堕とした方が描くのに対し、後者は堕とされた方が喜々として擦り付けるという事だけだ。

（あー……ボクがつけたやつ、結構落ちちゃってる……。どんだけ激しくフェラしたの、アスナ……）

言うまでもなく、ユウキの目的はアスナの救出である。しかし先程のストレアの例をみてもわかるように、迂闊な振る舞いをすれば潜入に気付かれる恐れがある。そうならないためには、あくまで自然に振る舞い続ける必要がある。

この島を訪れた肉便器（オンナ）の目の前に肉棒がある。なら、身体を使って奉仕するのが当然である。

亀頭をしゃぶり回し、愛おしさが溢れ出た口付けを施すアスナ。そのアスナの唾液をまとった雄々しい肉竿。自分の顔よりも大きいそれに、ユウキはそっと顔を近づける。

先程までアスナの口と喉でたっぷりと温められていた肉竿。乱れたカラーリップの痕跡で飾られ、アスナの唾液をまとう肉竿に、ユウキはアスナ同様に親愛と敬愛の情を込めた口付けを施す。

（はあっ……♥　相変わらずすっごく強そうなおちんぽ様……♥　ボクのちょろまんこじゃ、絶対に勝てないよぉ……♥）

侵入を拒もうとする雌穴の抵抗をあざ笑い、余裕でこじ開けるほどの硬さ。

雌穴を己の一物ぴったりに押し広げ、その穴が誰のためのものかを本能にしっかりと教え込むほどの太さ。

深い所に隠れた子宮を絶対に逃がさず、亀頭を子宮口にぎっちりと押し当て、ぐつぐつと煮えたぎった精液を直接叩きつけるほどの長さ。

交尾（セックス）で雌を堕とし、自らの所有物へと変え、心と体を共に服従させる――それを容易に果たしてしまう程のスペックを誇る肉棒へ、ユウキの唇が幾度も触れる。

（こんな強そうなちんぽから、アスナを助け出すにはどうしたらいいんだろ……？　金玉もまだ全然元気で、精子いっぱい作りまくってる

みたいだし……。

あっ……さっきはぶっ濃い精液、ごちそうさまでした♥　これは、ボクからのお礼です♥♥）

ぷぱっ、ぷぱっ、と下品な音を立てながら、ユウキは陰嚢に繰り返し吸い付く。ジョッキで飲んだザーメンの礼と、便女らしい振る舞いを兼ねて。そのまま金玉袋と竿の境目――オスの臭いが最も濃い部位の一つに舌を這わせ、グルーミングをする猫のように舐め上げを繰り返していると、肉棒を挟んだちょうど反対側にアスナの顔が降りてきた。

自然と呼吸を合わせ、左右それぞれの境目に舌を這わせる。そのまま陰嚢に唾液を擦り込み、竿に左右から吸い付き、しばらく奉仕を続ける。そうして肉棒に失礼の無いように丁寧な奉仕を重ねたあとで、二人はようやく唇を竿から離した。

「――あれ、ユウキ。もしかして……助けにきてくれたの？」

柔らかな頬を肉棒にぺったりと押しあてたまま、アスナが囁く。離している最中でもオスに媚びることを忘れない姿勢は、ユウキも見習うべき模範的なものだ。

アスナを真似て、ユウキもまた肉棒に頬ずりしながら口を開く。

「うんっ。アスナがこのヤリチンに好き放題されてるって聞いて、助けに来たんだよ！」

……でも……」

思わず、口ごもってしまう。

まさか親友を目の前にして『このデカチンポ様に勝つ方法が思いつきません。あなたを助けることはできません』と言うわけにもいかないではないか。

肉棒に頬ずりと口付けを繰り返し、チン媚びしながら思い悩んでいるユウキを見ながら、アスナはくすくすと微笑む。答えを待つ彼女の期待を裏切るわけにはいかない。肉棒の匂いを脳髄奥深くまで充満させながら必死で頭を巡らせていると、アスナがおもむろに口を開いた。

「――ねえ、ユウキ。それなら、こういう作戦はどうかな？」

アスナから伝えられた作戦。それは至極単純。

（ボクが囮になって時間を稼いで……その隙にアスナを逃がす。アスナが無事に逃げたら、キリトの隙を見計らってボクが逃げる……完璧な作戦だよ、アスナ！）

シンプルであるが故に有効な作戦。それを成功させる為には、キリトの気を惹き、時間を稼ぐ必要がある。もちろん、その手段もアスナが考案済だった。

作戦を成功に導くため、ユウキはそっとベッドを降りる。そのままベッドの端とステージの間にできた空間に立ったかと思うと、今度は四つん這いの姿勢を取った。

（あとは……お尻をベッドの方に向けて突き出して……♥）

床に頭頂部を押しつける程に上体を深く倒す。広げた両脚は伸ばし、尻を突き上げる。隠すべき穴を全て曝け出すその姿は、繁殖期を迎えてオスを誘惑するメスの野生動物を思わせるが――ここまで浅ましい姿を晒せる動物はそれこそ人間くらいなものだろう。

準備を整えたユウキは、目の前にシステムウィンドウを表示し、キリトに向けて『デュエル申請』メッセージを送信した。ピロン、という軽い効果音が響き、申請が正常に送信された事を教える。

（これでキリトが承認すれば……キリトと本気の勝負ができる……♥）

指先が自然と己の蜜壺へと伸びる。承認を待つ間、アスナが言っていたことが脳裏にリフレインする。

『――レインったらね、さっきまでスゴかったんだよ』

『キリトくんの上に跨がって、「ぶっといオスちんぽで妹のことレイプしてくださってありがとうございます♥　生意気ロリ妹まんこにちんぽの味をたっぷり教え込んでいただいた御礼に、枕営業大好き姉まんこでご奉仕させていただきます♥♥」って言いながら、ばっこんばっこん腰振っちゃって……♥♥』

『雑魚まんこですって全身でアピールしながら、メス汁撒き散らしながら何回も何回も勝手にイッて……♥』

（……そんなに、いっぱい……♥　ズルいよ、レイン……）

『最後は、キリトくんに腰掴まれて……そう♥　勃起ちんぽに子宮押し上げられながらの、な・か・だ・し♥♥』

『ぶびゅうううっ♥♥　びゅっ♥びゅっ♥びゅうううううっっ♥♥　……って、た～～～～っぷり♥種付けお射精していただきながら本気イキ痙攣アクメ♥♥♥』

『お射精完了してからも、アイドルまんこをおちんぽで蓋して……♥　濃厚精子の味をメス穴全体に覚えさせてあげてたの♥♥』

（ズルい、ズルいっ！　自分だけキリトのちんぽにまんこ差し出して、なかだしまでしてもらうなんてズルいよっ!!

ボクなんて、オナニーするのだって我慢してたのに!!）

このリゾート全域がフリーレイプエリア。どこで誰が性行為を行ってもいい。現にこの地下室に潜入する直前に通り抜けた一階のリビングルームでは、メス同士が互いの身体を弄んだり、ランダム上映中のＡＶをオカズに公開オナニーをしたりと、淫らに乱れた光景が繰り広げられていた。

ユウキがその中に混ざらなかったのは、偏に親友を助けるという崇高な使命を果たすためだ。だというのに、レインは自らの妹を犯した相手にあっさりと身体を差し出し、そして当の親友に至っては――。

『――レインのおまんこをレイプしたあとのキリトくんのおちんぽ……すっっっごく美味しかった……♥♥

マゾメスの本気汁と、ぶっ濃い精液でどろっどろになってて……♥

かっこいい種付けご苦労様でした、オス様お射精ありがとうございました……って労りながらお口でキレイにしてあげちゃった……♥

おちんぽしゃぶりながらまんこ弄ってオナニーするの、ちんぽで飼い慣らされてるメスって感じがして……もう、最っ高……♥♥』

――などと、恍惚の笑みを浮かべながら宣う始末。羨ましいにも程がある。その羨ましさを燃料に指を動かす。蜜壺がぐちゅぐちゅと音を立て、絨毯の上に雌蜜をこぼしまくる。

どうにも止められないその指を、ユウキがようやく止めることができたのは、意中の男がベッドから立ち上がる姿が視界に入ったからだった。

「キリトぉ……♥」

「お待たせ、ユウキ」

アスナに丁寧に掃除させた肉棒を雄々しく勃起させたまま近づいてきたキリトは、挨拶代わりにユウキの腰を両手で掴む。交尾の予感に突き動かされ、ユウキは自らの指で性器を開いてみせる。

キリトは両手にぐっと力を込めると、ユウキの腰をちょうどよい高さまで引き込む。そして、ユウキの尻たぶの間を滑らせるようにしながら、彼女の腰の上に乗せる。

「いきなりデュエル申請が届いたから驚いたぞ、ユウキ。それで……ルールはどれにする？

初撃決着だとすぐ終わっちまうし、半減決着か、それとも完全――」

「しゃ、射精決着！　ボク、射精決着がいい!!」

キリトの言葉を遮る勢いで、ユウキが叫ぶ。

射精決着。

それは、男女のセックスを用いたデュエルを行う時にだけ適用される特別ルール。

ルールは非常に単純。射精すれば男の勝ち。射精させられなければ女の負け。ただそれだけである。

今回のパターンに当てはめると、キリトが射精すればキリトの勝ち。逆に、キリトが射精しなければユウキの負けとなる。

男には勝利条件のみが、女には敗北条件のみが設定されるこのルール。それを女の方から持ち出すということは、事実上の敗北宣言にほかならない。

「射精決着か……よし、そのルールで行こう」

「いいの!?　やったあ！」

自分から肉棒を迎え入れたがるユウキの腰を片手で抑えながら、キリトはコンソールウィンドウを操作し、デュエル申請を承認する。相互承認の下、システムはすぐさまデュエルを正式なものと認め、ルー

ルを『射精決着』と定める。
デュエルに挑む対戦者としてウィンドウ上に表示される、キリトとユウキの名。直後、キリトの名前の下に『勝利時報酬』というメッセージが表示された。
「ルール呑んでくれたお礼だよっ♥」
『全自動洗浄機能付きオナホール・ユウキ（以下オナホ1号）』、『全自動洗浄機能付きオナホール・アスナ（以下オナホ2号）』。『オナホ1号・オナホ2号の全卵子独占使用権』、『オナホ1号・オナホ2号の人格含む肉体および精神の自由改造権』。
射精決着ルールを受け入れてくれた礼としては少なすぎるくらいだが、今のユウキに差し出せるのはこれくらいしかない。
「キリト、これくらいしか用意できないんだけど……ダメかな？」
「いや、十分すぎるくらいだぞユウキ。……いや、『オナホ1号』」
オナホ1号。敗北を前提としたその呼び名に、ユウキの子宮が疼く。とっとと醜態を晒し、今か今かと待ちわびている肉棒に媚びへつらい、子種を恵んでもらえとユウキを急かす。
「ちょっ、ちょっと、いくらなんでも気が早いよキリト。そういう事は、しっかり射精してボクに勝ってから言ってよね？」
「おっと、そうだった」
キリトがゆっくりと腰を引き、肉棒の先をユウキの雌穴の入り口にそっと押し当てる。
まずは初撃。それをどういなし、セックスのペースを握るかがこのデュエルの勝敗を分ける。ユウキは両手を床につけ、己の身体を支える準備を整えた。
「よし、それじゃあ行くぞ。ユウキ」
「うんっ♥　それじゃあ……デュエル・スタ――」
ユウキが最後の一文字を言い終える、まさにその直前。
キリトは両手に力を込め、ユウキの腰を己の方へと引き寄せながら、勃起した肉棒を一気にユウキの膣内へと挿入した。
「ぁとっ〝――」
どちゅんっ♥　という音すら鳴るほどに激しく、力強い一撃。

カリ首で膣壁をごりごりと抉りながら進んだ肉棒は、即座に白旗を掲げたユウキの蜜壺を簡単に蹂躙し、繁殖を求めて降りてきていた子宮口を、亀頭でいとも簡単に突き上げた。

「――お〝――おおおおお〝おお〝おおっ♥♥」

視界に白い閃光が走る。思考が吹っ飛び、意識が千切れる。蜜壺がうねり、身体が痙攣する。口から舌が飛び出し、唾液が絨毯の上に滴り落ちる。

乱暴と言ってもいいほど単純な挿入。その一撃で、ユウキは簡単にアクメを決めさせられた。

（――こんにゃっ、こんな簡単にイかされた……♥　イかされちゃった……♥♥

ちんぽ、ぶっとくてつよくてかっこいいちんぽすごいぃ……♥　ボクのちょろ雑魚まんこ、初撃決着モードだったらもう終わってた……♥♥）

胸の内に沁みる敗北感は、甘美にして心地よいもの。

自分の股の間を覗き込む形になった視界に映るのは、ずっしりと重たそうなキリトの陰嚢。上下がひっくり返った視界の中で、キリトはゆっくりと腰を引いて抽送を始めた。

「あっ♥　んんぅ……っ♥　奥うごりゅっ♥ごりゅっ♥ってされるの〝お♥　おかひく、なるぅぅっ♥♥」

「デュエルを挑まれた以上、本気で相手してやらないといけないよな……。弱いところ全部いじめてやるから、好きなだけイっていいぞ。ユウキ」

「ひぁああっ♥♥　ま〝っ、待っへぇ〝っ♥　おっきい、おっきい〝ちんぽでいじめにゃいっ、でへぇっっ♥」

両手でユウキの細い腰をがっちりとホールドしたまま、キリトは無慈悲に抽送を続ける。最初の乱暴な挿入とは全く違う、余裕と気遣いに溢れた前後運動。

どちゅんっ、どちゅんっ、と重たい音を立てて、キリトの肉棒がユウキを貫く。そのワンストロークが為される度に、カリ首で掻き出された愛液が蜜壺から溢れ落ちていく。

（これ、すき♥　ぶっといオスちんぽでおまんこの奥ごりごりされるの好きぃ♥　絶対種付けする、膣内射精してやるって脅されてるみたいで好きぃっ♥♥　子宮に響くくらい奥までずんずんされて――♥♥　ヤバい、また深いの来る♥　頭もお腹の奥もジンジンふわふわしてきて――♥）

「ほら、ユウキ。イく時はなんて言うんだっけ？」

「んおぉっ♥　あぁっぐ♥　あっ♥　いっ♥　イぐ♥　イくぅうっ♥♥　ぶっといちぐぅんぐぅぽで、まんこおがざれぐぅてぇ♥　イ――っぐぅうぐぅうぅうう♥♥♥」

Gスポットを亀頭で責められただけであっさりと絶頂へと導かれる最中、ユウキは己の股座から潮が噴き出す光景を目の当たりにした。

深いアクメを味わわされてがくがくと震える下半身は、文字通り杭の様に太いチンポで刺し貫かれているおかげでどうにか体勢を崩さずに済んでいる。しかし、ユウキ自身の力だけで支えている上半身はそうもいかない。

「はへぇぐっ♥　はあぐっ♥　はあーっ……♥♥　ぢんぽ、つよすぎて、トんじゃうぐぅ……♥」

「おいおい、こんな調子で大丈夫かよ……？」

問いかけに答える事もできないユウキは、腕に力を込める事もできない。上体が沈み、頬がべったりと床に付き、アヘ顔ではみ出てしまった舌が絨毯を舐める。

すっかり体勢を崩したユウキの身体。その細い身体にキリトの両腕が回り、ユウキを力尽くで引き起こした。

「――あぐひぃぐっ♥♥　まって、今、ちからっ♥はいんにゃい――んむうっ♥」

がくつく身体を腕ずくで支えられ、無理矢理立たされるだけで悲鳴が零れる。そんな余裕の無さに構うことなく、キリトはユウキの首に右腕を回し、頬を掌で押さえつけて横を向かせると、そのまま無造作に唇を奪う。

空いた左腕はユウキを抱きしめているように見えて、その実、彼女

の身体をしっかりとロックしていた。二の腕とユウキの体で彼女自身の左腕を挟み、掌でユウキの右手を掴む。そうしてユウキの体を確実に抑え込んでから――腰を斜め上へ、容赦なく突き上げる。

「んむぅっ♥むぅっ♥んぶぅっ♥♥♥　んぅっ♥んぇぇっ♥♥」

（やばっ♥　こっ、この体位やばい♥♥　いつもの正常位とか、種付けセックスの体位とは全然違うのに♥　『絶対に逃げられない』、『絶対に勝てない』ってわからせちゃう体位なんだぁ♥♥）

当然のように侵入してきたキリトの舌と己の舌を絡め合い、深い深いキスで繋がったまま、ユウキは支配的なセックスに酔い痴れる。肉棒の一突き毎に結合部から愛液が溢れ出し、絨毯の上で新たな染みを作る。

本来ならそのパワーピストンによってユウキの体勢が崩れてもおかしくないが、下腹部を斜めに抑え込むキリトの左腕がそれを許さない。

（おまんこの奥っ♥子宮っ♥♥　早く精子欲しいって降りてきてるボクの赤ちゃん部屋♥♥　中からぶっといちんぽでごんっ♥ごんっ♥って突き上げられてるし♥　外からキリトの腕で抑え込まれてる♥♥

メスだから負ける、オスに負けさせてもらえるって頭も身体も完璧に理解しちゃってる♥♥　だめっ♥またイク♥♥　敗北アクメ癖つけられながら無様イキするううっ♥♥）

ぷしっ♥ぷしぃいっ♥――と、ユウキがまた潮を噴く。

お得意の素早さも反応速度も封じられてしまった今、男と比べれば細く、薄く、小さく、そして弱い存在でしかないことを、肉体と精神の両方に刻み込まされながら、ユウキが絶頂に達する。その嬌声はキスによって封じられ、くぐもったものになってしまったが、ステージやベッドの上でこの痴態を見物している観客（メス）達には簡単に気付かれてしまっていた。

そして、彼女らの視線がユウキに集まるのを待っていたかのようなタイミングで、ピストンの速度が一気に上がった。

「んぐっ♥♥　んんぐっ!?」

（これ、これわかるっ♥　お射精前の本気ピストンだっ♥♥　種付けくるっ♥　メスに敗北刻み込むやつ♥♥　かっこいい勝利宣言お射精くるぅうううううっ♥♥♥）

ユウキの小さなヒップが歪むほど激しく、強く。射精のために更に膨張した肉棒は、斜め下からユウキの膣を突き上げる。

ユウキが爪先立ちにさせられてしまうほどに重たい最後の一突きで、ユウキの子宮口に亀頭をびったりと密着させた瞬間――溜まりに溜まった精液が、ユウキの最奥目掛けて一気に解き放たれた。

「――んぐぅうううっ♥♥　んぐっ♥♥　んぶっうぅっ♥♥　んぐゆんぐゆぅっうううっ♥♥♥」

（イぐっ――――ぐうううううう♥♥♥　イぐ♥　いっくぅ♥♥　せーえきに子宮どぷどぷにされて♥完全勝利宣言されながりゃイっぐうううううぅう♥♥♥）

輸精管を駆け上る精液は、重力に逆らっていることを忘れたかのような激しさでユウキの子宮へと叩きつけられる。

キスによって封じられたユウキは、満足に喘ぎ声を上げることもできないまま、子宮にオスの遺伝子を叩き込まれる快感と、メスとして本能的に持っている敗北感に酔わされていく。

「んぐぅうっうぐっ♥♥　んぉぐ♥んぅうぐっ♥♥　んぶっうぅうっ♥♥♥♥」

どぷっ、どぷっ――という音が聞こえてきそうな程に重く熱い射精によって、ユウキの子宮はあっという間に満たされる。それでも身体は正直なもので、ユウキの膣はぷしゃぷしゃとイキ潮を撒き散らしながら、同時にキリトの肉竿を締め付けて更に精液をねだり続ける。

（本気の♥　たねっ、種付けっ♥射精ぃいひいぃ♥♥　どくどくお射精してるのにぐ♥♥　ちんぽびくびくさせて、もっともっとざーめん送り出してきてる♥♥

こんなの、無理♥♥　しぬ♥イキじぬぅぐっ♥♥　ボクの雑魚まんこ♥負け癖つけられまくったよわよわまんこ♥♥　敗北するのって気持ちいいんだぞってわからされながらイッっぐうぅうう♥♥♥）

びくびくと身体を痙攣させ、深い絶頂と共に精液を受け止め続ける

ユウキ。そんなユウキの視界と思考は快感にスパークし、支離滅裂な言葉を脳内に紡ぎ続ける。

全身の隅から隅まで染み渡る、オスへの敗北嗜好と服従心。敗者だけが知っている心地よさに溺れ、塞がれた唇の端から唾液をだらだらと溢れさせるユウキには、抵抗する力はもちろん、自力で立つ力すらも残っていなかった。

「んぐっ♥んぅううっ♥♥　……んぁっ♥♥　んーっ〃♥んっんっんぅう〃ぅう〃うぅ♥♥♥」

力の抜けた身体をキリトの両腕、そして膣奥まで突き立った肉棒に支えられながら、ユウキは何度もアクメを繰り返す。痙攣する膣肉に促され、肉棒から汲み上げ続けられた精液は、ついにユウキの股の間から溢れ出して絨毯の上に落ちていく。

そうして、長々と続いた射精がようやく一区切りを迎えた頃。キリトはユウキとのキスを解き、その唇を自由にした。

「――はひゅっ♥　はぁっ、はあっ♥♥」

久々に味わう新鮮な空気が、火照りと甘い痺れが残る全身をほんの少し落ち着かせる。

セックスの興奮に酔ったままの頭で視線を前に向ければ、『ＹＯＵＬＯＳＥ』の文字が表示されたウィンドウがポップアップした。

（……っ♥　あ、あーあ……♥　ボク、ちんぽに負けちゃった……♥）

目の前の二語。脱力しきった身体を支えてくれているキリトの両腕。膣内に突き刺さったままの太い肉棒の感触。子宮内を重たく満たす精液の熱さ。それら全てに敗北の心地よさを教え込まされる。

ふと、半透明のメッセージウィンドウの向こうにアスナの姿が見えた。とっくに逃げ出しているはずの親友は、ボンデージスーツに着替えたストレアに首輪を嵌められてどこかへ連行されていく。大方、オナニーでもしていて逃げ遅れたのだろう。

キリトに抱えられ。ささりっぱなしの肉棒にせっつかれるようにベッドへと運ばれる途中、ステージ側へと引っ張られていくアスナとすれ違うが、お互いに助けを求めるようなことはしない。

敗北オナホに堕ちたユウキにアスナを助ける力はないという事を、

互いに理解しているのだから。

「――おぉっ♥おおぉおっ♥　いっ――ぐぅぅぅうっ♥♥　また、またイぎゅっ♥♥　イぎゅうぅぅうっ♥♥♥」

人型マゾメスオナホール1号・敗北嗜好強制刻印済タイプことユウキが、ベッドの上で何度目かになるアクメをキメる。オナホを最も効率よく使用する体位の一つである種付けプレスで、ばっこんばっこんと激しく肉棒を出し入れされているのだから仕方の無いことではある。

精液と愛液が攪拌されてできた泡立つ液体が、カリ首によって掻き出され結合部から溢れる。それをしているのはもちろん、オナホの所有者であり使用者であるキリトである。

もちろん、射精決着デュエルはキリトの勝利で決着している。今行われているのは、オナホールを使った純粋な性処理だ。

「おぉひぃぃっ♥♥　おっ、奥ぅっ♥♥　ぐりっ♥ぐりっ♥ってされるぅのぉ♥♥　こわれ、こわれぇりゅうぅうぅぅ♥♥」

「……っ！　そろそろ、射精するぞ……」

オナホールが分も弁えず『さっきからイキッぱなしなのに射精されたらおかしくなってしまう』という内容の悲鳴を上げたが、そんな事は性欲処理という大事に比べれば何の意味も無い。

激しく絡みついてくる膣肉に、ばこばこと容赦ないピストン運動を叩きつける。キングサイズのベッドがオナホよりは上品な悲鳴を上げる中、キリトは射精欲求に従い、激しく腰を上下させる。

そしてその最後の一撃で、ユウキの尻肉が歪むほど深々と、力強く、己の下半身を振り下ろし、ユウキの子宮口へがっちりと亀頭を密着させ――金玉に溜まった精液を思うままに吐き出した。

「おぉほぉぁおぉおおぉおっ♥♥♥　おぉっ♥――はひぇいいいぃいぃぃぃ♥♥　いぐイグいぐイっぐぅうぅぅうぅ♥♥♥

あっあぁぁぁッ♥♥　あっ、あぁぁぅあぁ～～～♥♥　あぁぁっあぁぁっあ

〜〜〜〜♥♥♥♥♥」

びゅるるるるっ、どびゅ、どびゅるるるる――と、何の遠慮も容赦も無い射精。前に射精した自らの精液を押し出し、新しいものと入れ替えようとするかのような大量射精。

大事な大事な子宮に我が物顔で精液をぶち込まれながら、ユウキは強烈なアクメの中に叩き込まれる。背中は弓なりにしなって浮き、顔は仰け反ってあらぬ方を向く。口から覗くのは快楽のあまり伸びきった舌。視界の中では白い閃光がバチバチとスパークし、雌穴はびちゃびちゃとイキ潮を撒き散らしまくる。

本能的なものか、あるいはオナホとしての使命感が働いたのか、ユウキの四肢はキリトの身体をしっかりと抱きしめていた。長々と続いた射精が終わるまで、ずっと。

「お〝っ……♥　ぉあ〝っ、あひぃ……♥　ふひゅ、ふひゃへぇぁ……♥♥」

がくがくっ、ぴくぴくっ――と、ユウキは全身を痙攣させる。その膣内でキリトの肉棒が射精一回分の精液をようやく吐き出し終えると、頑張り続けていた四肢から力が抜けた。

「――ふうっ……」

一仕事を終えた男の溜息と共に、キリトがゆっくりと腰を引く。快楽にヒクつくユウキの膣内から、太く長いペニスがずるずると引き出され、ずぽんっという音をあげてそのまま抜けた。

肉棒の軸にはこれまで出した精液とユウキの体液がべったりと付着しているばかりか、亀頭の先には今出したばかりの精液がザーメンブリッジを形成していた。

「我ながら出した、出した……」

びくり、びくりとランダムに痙攣するユウキの身体を見下ろしながら、キリトが誰にともなく独りごちる。

見下ろされるユウキの方といえば、股の間から白旗代わりの白濁液をどぷどぷと逆流させたまま、四肢をだらりと投げ出してひっくり返っている。

手近な所でレズプレイに耽っていたレインとセブンを呼びつける。

睦み合っていた姉妹は我先に肉棒へとむしゃぶりつくと、様々な体液で汚れた肉棒をきれいに清めだした。そのダブルフェラ奉仕を受けていると、ステージの方で新たな動きがあった。

「――レディース・エンド・ジェントルメーン！　大変長らくお待たせいたしましたー！」

「ただいまより、雌穴家畜二匹による人格廃棄式を執り行いたいと思いまーす！」

いつの間にか照明が消えたステージの上で声を張り上げているのは、ストレアとフィリアの二人だった。

お揃いのボンテージスーツ――バニーガールのそれと同じ構造を持つハイレグタイプのボディ部と、二の腕の上まで覆うロンググローブ、ニーソックスで構成された改造ボンテージに身を包み、手には乗馬用の細いムチを携えている。

「それでは早速、雌豚さん達に登場していただきましょう♪」

「二匹とも出ておいで～♥」

微かな駆動音と共にステージの一部がせり上がる。

「エントリーナンバー1番～♥　デカ乳雌牛家畜・リーファ～♥」

「んぐぅもっ♥♥　んもぉおおおぉおおおぉおおおっ♥♥」

フィリアの紹介と共に、一匹目の家畜――リーファにスポットライトが当たり、その姿を映し出す。

美しいブロンドヘアをポニーテールにまとめた彼女は、当然だが素っ裸。M字開脚の状態で腰を落とし、その肢体を惜しげもなく晒している。身につけているのは、口に嵌められたギャグボールと黒い革製の首輪、そしてケツ穴にはめ込まれたアナルプラグだけ。

ただでさえ前から大きかったバストは一回りサイズアップしており、乳首からは母乳がだらだらと溢れ出し、汗と混じって肌を滑り落ちていく。しかし、それよりも目を惹くのは、大きく突き出たボテ腹だろう。赤ん坊の4～5人は孕んでいそうな程に大きく膨れている。ただ、その腹の中に詰まっているのは大量のアナルパールである。

「エントリーナンバー2番～♥　淫乱雌豚家畜・アスナママ～♥」

「――ぶひぃっ♥♥　んぶぴぃっ♥♥」

ストレアの、ユイの声音に寄せた紹介と共に、二匹目の家畜――アスナにスポットライトが当たる。
蒼い髪のウンディーネは、当然だがリーファ同様の全裸。リーファとお揃いの首輪とアナルプラグのみをつけ、同じM字開脚ポーズを取っている。ボテ腹なのもリーファと一緒だが、そのサイズはリーファのボテ腹より二回りは大きい。片手を床につけることで、どうにかバランスを取っている状態だ。
無様なアスナの姿を見下ろしながら、ストレアはくすくすと笑い、アスナの頬に乗馬鞭の穂先を押し当てた。
「ねえ、アスナママ～？　隣にいるリーファは、どうしてあんな姿になってるんだったっけ～？」
「ぶひっ♥　そ、それは……キリトくんのおちんぽがイラついた時にさくっと抜けるメスマンコ穴になってほしくて、私が調教と改造を依頼したからです♥　ぶひっ♥」
「正解～♥　それじゃあ、アスナママがこうなっちゃってるのはどうして？」
「それは……」
ストレアの問いかけに、アスナは一呼吸置いてから答える。
「……それは、これから要らなくなった人格排泄してメス家畜に完堕ちするリーファちゃん見てたらうらやましくなっちゃって、私もリーファちゃんと同じように淫乱マンコペットになりたかったからでーすっ♥♥
だから、お腹の中にい～～～～っぱい、人格排泄ゼリーを作るエキスを入れちゃいました～～～～♥♥」
「あれ？　さっきは『親友（ユウキ）がオナホ堕ちしてまで助けてくれたのに、自分はオナニーに夢中になって逃げ出せなかった責任を取るため』って言ってなかった？」
「ごめん、ストレア。あれ、嘘。そもそもユウキは最初からキリトくんのオナホとしてプレゼントするつもりだったし」
「なーんだ、そうだったんだ」
親友を二重に裏切りながら微笑むアスナの横で、我慢しきれなく

なったリーファがふうふうと荒い息を上げる。
そろそろ頃合いだろう――フィリアとストレアは、アイコンタクトでその意志を共有した。
「それじゃあ……人生、終わらせちゃおっか。アスナママ」
「リーファも終わらせちゃおうね～。ほら、きりきり歩く。ちゃんと四足歩行でね」
「んも〝ぉ〝っ♥」「ぶひぶひっ♥♥」
ボンテージ姿の二人に促され、アスナとリーファは移動を始める。通常の四つん這いではボテ腹が突っかかってしまうため、膝を伸ばして尻を突き上げる姿勢を取りながら、必死にステージを降りる。
ベッドの端に腰掛けて待つキリトを目指して、二匹のメスはよたよたと歩みを進める。
「ほらリーファ。もっと雌牛らしくケツ振って歩く！」
「アスナママも、もっと雌豚らしく媚びた笑顔見せなきゃダメでしょ！」
時々、理不尽な理由で乗馬鞭が振り下ろされ、アスナとリーファの尻や背中に叩きつけられる。鋭い音と共に、白い肌に紅い筋が幾筋も描かれていく。その度にアスナとリーファは鳴き声を上げ、身を震わせ、時折アクメをキメて己の惨めさを示していく。
「ぶひっ♥ぶひぃいいっ♥♥」
「も〝っもぉおっ♥♥　んも、ん〝も〝おぉおお♥♥」
辺りに鳴き声と体液を撒き散らし、本物の豚や牛よりも惨めで淫らな様を披露しながら、ようやっとアスナとリーファは目的地であるベッドへと辿り着いた。
荒い息を整える二人の前にあるのは、力強く反り返って勃起したキリトの肉棒。
紅くなった尻を突き上げたままふりふりと揺らし、ほとんど無意識に交尾アピールをするアスナとリーファを見下ろしながら、キリトはコンソールウィンドウを呼び出してリーファの口からボールギャグを外してやる。
それとほとんど同時に、ストレアがアスナの、フィリアがリーファ

の髪を掴むと、その顔を肉棒に無理矢理押し当てた。
「――ん〝おお〝っ♥♥♥」
太い肉茎に鼻腔を押しつけられ、独特の匂いを直に味わった二人は、あっさりと脳イキをキメて身体を震わせた。先程までのセックスの残り香に、レインとセブンの唾液の香りが入り交じって醸成された極上の香気は、雌家畜達をあっさりと狂わせるだけの威力を持っていた。
キリトの股の間に顔を埋めて瞳を快楽に蕩かせた二匹に、ストレアとフィリアが揃って促す。
――人生を終わらせる前の、最後の挨拶をしろ、と。
「おっ♥お兄ちゃん♥お兄ちゃん♥♥　あっ、あたし♥♥　終わっちゃうから♥♥　いらないもの全部捨てて、おまんことおっぱいで奉仕するちんぽこき家畜穴に生まれ変わるからね♥♥　お兄ちゃんのちんぽに媚び媚びしながら終わっちゃうところ、特等席で見てて♥♥♥」
「私も、私も見てくれないとやだよぉ♥　キリトくんのでかぶとメス殺しチンポに顔擦り付けて、最後の記憶をちんぽでい～～～っぱいにしながら、古いアスナとお別れするんだからぁっ♥♥　世界で一番無様なアヘ顔晒しながら、人格排泄オナホ堕ちする所、思いっきり楽しんでね♥　ねっ♥♥　約束だからねっ♥♥♥」
蕩けきった二人の声に頷きを返し、キリトは二人の頭に手を置き、髪を掴んで肉棒に力強く押し当てる。
二人を固定する役目をキリトに引き継いだフィリアとストレアは、アスナ達の頭から手を離すと、突き出された尻の隣に立つ。
「それでは、アスナの完全終了と――」
アスナの隣にはストレアが。
「リーファの人間卒業ショーまで――」
リーファの隣にはフィリアが。
「「3」」
揃って並び立ち、キリトの方を向く。
「「2」」

ロンググローブに包まれた掌を、突き上げられた尻の上で這わせ。

「「1」」

細い指先を、それぞれのアナルプラグに繋がるグリップへと引っかけ、固定し、そっと力を込め――。

「「ぜろーっ♥♥♥」」

すぽんっ――と、勢いよく引き抜いた。

「――ん゛ぉおおぉ゛ぉおぉおお゛ぉお゛おお゛ぉおぉおぉおお゛ぉおぉぉ゛お゛お゛お゛♥♥♥♥」

「――ぁああ゛あぁ゛あああ♥♥　ほお゛っ゛♥　お゛っお゛っお゛っお゛っお゛ほぉおお゛お゛お゛お゛っっっ♥♥♥」

全身を痙攣させ、白目を剥いて舌がまろびでるほどに強烈なアヘ顔を晒しながら、リーファとアスナが叫ぶ。

抑えを失ったリーファの肛門から次々に放出されるのは、アクリル製の大型アナルパール。数珠繋ぎになった透明な球体の中心部には、黄金色をしたゼリー状物体――リーファの記憶、人格、理性、精神その他を詰めたものが一つ一つ納められ、体外に排出されていく。

同様に、アスナの肛門から排出されるのは、薄青色をした巨大なゼリーそのもの。ゼリーといってもそれほど柔らかくはない上、太さはリーファの巨大アナルパールと遜色ない。それが、カットされる前のところてんのように一繋がりになったまま、アスナのアナルからどんどん吐き出されていく。もちろん、その中にはアスナの記憶、人格、理性、精神その他が溶かし込まれているのは言うまでも無いだろう。

「お゛っほ゛♥♥お゛ぉおぉおっ♥♥　けつあにゃっ♥げつ穴壊れる゛ぅ゛っ♥♥　お゛っおお゛っ♥♥　やら、だっめ゛ぇ゛♥♥　あたしの゛っ♥　あたしがでちゃう゛ぅぅっ♥♥　でちゃいけにゃ゛いやつがでちゃうのぉお゛おぉ゛おぉ゛おおおっ♥♥」

「ふひゅうぅぅう゛っ♥　はひゅ゛っ♥♥　ひい゛ぃいぃ゛ぃっっ♥♥　きえっ、きえ゛ぢゃう♥♥　わたしのぜんぶぅ♥♥　ケツ穴からでてきえ゛ちゃう゛ぅぅう゛う♥♥　あたま゛の゛中がからっぽにな゛ってぇえ♥♥　ふるいじんかく♥けされて♥こわ゛され゛るぅうっ♥♥」

放出されるアナルパールも、排出されるゼリーも止まるところを知らない。アスナとリーファの痴態を他所に、腹に詰め込まれていた分は次々に吐き出され、その度に二人は幸せの中で壊されていく。

「お〝ほっ♥　おひぃいぃ〝っ♥♥　やだぁあっ♥♥　でない〝でぇっ♥♥　でないでぇえっ♥♥　あたしの身体な〝のにぃひい〝っっ♥♥　そとにださないでぇえ〝えっっ♥♥」

「いひいいぃ〝いい〝っ♥♥　ちぎれる、ちぎれりゅうぅ〝うう♥♥　だいじなモノぉっ♥♥　ぜんぶ、ちぎれ〝て――♥♥♥」

「――イっっぐううう〝うぅぅうう〝うぅう〝うぅぅうぅぅう♥♥♥」

ぬぽんっ――という音と共に、最後のアナルパールが排出され、ゼリーの端が吐き出される。それと同時に、アスナとリーファ――いや、アスナとリーファだった肉体は、この日何度目かになる潮吹きアクメに達し、体中をびくびくと痙攣させた。

人格の全てを失った肉体は、意味の無い喘ぎ声を垂れ流すだけの存在と化して、キリトが手を離すと同時に完全に脱力して崩れ落ちた。

土下座するかのように膝を曲げて尻を突き出し、ぽっかりと開きっぱなしになったアナルと、ひくつく雌穴を晒す姿は、雌豚という名称すら相応しくない程に惨めで無様なものだった。

14－10．（アスナ・ユウキ・他）

とある南国の海上。そこにぽつんと浮かぶ小島。
少数の人間が快適に過ごすために整備されたリゾート・アイランド。

夏の長い日差しを貪り、鮮やかな昼を謳歌していたその島にも、ようやく夜が訪れた。水平線の向こうに沈んだ太陽と入れ替わるように、煌々と輝く月と満天の星々が夜空を彩る静かな夜が訪れた。

昼の間は島のあちこちに散らばり、思うままにセックスを楽しんでいた滞在客達だったが、今は全員が島の中心にあるゲストハウスの二階に集まっていた。

これから行われる、少し変わった式典に参列するために。

「――んうっ……♥　んちゅ、ふうっ……♥」

それは、傍から見ればかなり奇妙な光景だった。

ゲストハウスの2階部分をほぼ全てぶち抜いて作られた広い部屋。一面に紅く分厚いカーペットが敷かれ、多人数セックス以外に何に使うのかというほどに大きなベッドが鎮座するその部屋の中央では、式典の開始を待つ新郎――キリトが仁王立ちしていた。

新婦の入場を待つ新郎であれば、タキシードで身を飾るのが常識だ。しかし今のキリトはその身に何一つ身につけていない真っ裸の状態。しかもこれから新婦と愛を誓うはずの新郎の身体には、新郎と同じように素っ裸の姿を晒した女性が5人、べたべたとまとわりついていた。

「もう、キリト……♥　イーディス殿ばかりではなく、私ともキスしてください……♥」

キリトの左腕側に陣取り、その蠱惑的な肢体を絡みつかせていたアリス・シンセシス・サーティは、そう囁くが早いか反対側にいるイーディス・シンセシス・テンから力尽くでキリトの唇を奪って口付けを重ねた。うっすらと空いたアリスの唇の隙間から、本体と別の生物で

あるかのように動くキリトの舌がするりと滑り込み、舌と舌の睦み合いを始める。

「あーあ、アリスに取られちゃった……。いいもん、あたしはこっちで遊ぶから」

後輩の整合騎士に半ば強引にキスを中断させられたイーディスは、頬を不満げに膨らませたあと、気を取り直してキリトの耳たぶに唇を寄せ、柔らかな唇でそっと挟む。吐息をそっと浴びせ、無防備な耳穴を舌で舐めしゃぶり、時折アリスからキスの権利を奪い返してはその度に激しく睦み合う。

キリトの両腕に後ろから抱えられ、形の良いバストを無造作に揉み拉かれながら、アリスとイーディスはキスの合間合間に蕩けた吐息を零す。その足元では、三匹のメス猫ケットシー達による奉仕が続けられていた。

「んぁっ……♥♥　ぇろっ、んぉ〃っ……♥♥」

「ふーっ♥んふーっ♥♥　んぶ、ぶぷぅっ……♥♥」

「んっんっ♥♥　んぁ〃、んーん〃っ……♥♥」

硬く勃起した逸物の竿をシノンが咥え込む。ずっしりと重たい右の金玉はシリカが舐め回し、左の金玉にはアルゴがむしゃぶりつく。

今やすっかり淫水焼けした長太チンポに残っていたキスマークやフェラチオリングの痕跡は、夕食前に浴びたシャワーによって綺麗に洗い流されている。陰嚢の中に残っていた精子も、先程まで行われていたセックス――現在、ベッドの上で潰れたカエルのような姿のまま失神しているストレアのまんこを使った自慰に等しい行為によってすっかり吐き出されきっている。もちろん、そのオナニーに身体を張って付き合ったストレアはと言えば――。

「――……お〃っ♥♥　ぁひぇ……♥♥♥」

部屋の面積に負けない程の特大サイズのベッドの上に突っ伏し、何度も何度も繰り返し射精された分の精液を、股の間からどぷどぷと逆流させたまま失神している。

今回のセックスバカンスの舞台となった『島』を作る為、立案者達のサポートを積極的に行ってきたご褒美を存分にもらった結果がこ

れである。

もちろん、その時のセックスで肉棒に残った痕跡はシノン達三匹によって跡形も無く舐め尽くされ、既に彼女らの胃の腑へと飲み込まれている。そうして掃除を終えたシノン達が行っているのは、唾液の塗り込みだ。

掃除に取りかかる少し前、シノン達三匹は己の舌の裏側の根元部分に薄い板状の薬剤を貼り付けている。それは、妖精達の中でも最も獣に近いケットシー族の唾液に反応し効果を発揮する強力な薬剤である。

その薬剤をオスの陰茎に塗り込めば、そこらの精力剤など相手にならないほどの強壮作用を齎す。金玉に擦り込めば精巣に作用して新鮮な精液を大量に増産させる。濃度や量が増強されていることは言わずもがな、顕微鏡で確認すれば精虫のサイズ自体が数回り大型化しており、確実にメスの卵子へ食らいつけるようになっていることがわかるだろう。

それと同時に、この薬剤はメスにとって強烈な媚薬として作用する。その威力は凄まじく、薬剤を直接摂取する必要がないほどに強い。

たとえば、薬剤を塗り込まれた肉棒に顔を近づけるだけで、チンポ臭と絡み合った薬効成分がメスの粘膜に直接作用して抗いがたい多幸感を齎す。その過程で脳が思考と判断基準を子宮に明け渡し、脊髄はメスが持つ本能的な敗北欲求と服従心を全身に行き渡らせ、子宮は勝手に排卵を始めてオス様との繁殖準備を整える。

言うまでもなく、セックスすれば子宮に直接作用する。その威力は言うまでもないだろう。

さて、そんな強烈な媚薬を口に直接含み、唾液と共に成分を飲み下しながら、チンポを直接しゃぶっている三匹は無事でいられるだろうか。もちろん、無事ではない。

お掃除フェラの最初の一舐めで、竿に残っていた精液を口に含んだ瞬間――シノンも、シリカも、アルゴも、メスの動物に相応しい鳴き声を上げながら潮を噴き出して絶頂している。

『あー、んっ……♥♥　お〝っふぉ〝おおお〝っ――――――♥♥♥』

『イッ――ぐひゅう〝っ♥　イ〝くぅっ♥　イ……っぐううううぅぅぅぅぅうッ♥♥♥』

『おっお〝おおおぉほおぉおおおっ♥♥　いぎゅっいぎゅいぎゅいぎゅうううっ♥♥♥』

その次の一舐めでも、壊れたおもちゃのようにあっさりと達し、全身をびくびくと痙攣させる。その次も。その次も。その次も。その次も。

そうして幾度も幾度もイキまくりながらどうにかこうにかお掃除フェラを終える頃には、紅いカーペットの上には彼女たちがまき散らした淫汁の染みが広がっていた。

咥えて、ただでさえ強烈な薬効成分が入った唾液を塗り込む間も、三匹は止めどないセルフ手マンによって自らをイジメ倒し、競うような勢いで絶頂回数を重ねていた。そうして自らの体液でチンポを育てると同時に、育てたチンポを使われるまでもなくあっさりとオスに敗北する雑魚メスであると自らを教育する。そして、その光景を見ながらオナニーしている周囲のメス達に痴態を見せ付け、チンポに奉仕できる優越感を味わいながら――また、イく。

やがて、アルゴが倒れ、シリカが失神し、最後まで竿への薬液刷り込みを行っていたシノンが限界を迎えて絨毯の上に突っ伏す。半開きになった彼女らの眼は虚ろで、意識があるのかどうかも定かではない。

しっかりと唾液が塗り込まれた肉棒は、それ自体が光を放っているかのようにてらてらと妖しく輝く。

今も精子増産を続けている金玉から押し出されるように、亀頭の先から溢れた我慢汁が、ぼたり、ぼたりと重たい滴になって、倒れ伏したシノンの横顔に零れ落ちていく。

「……？　あ、もう準備できたみたいね」

三匹のケットシー達による奉仕が終わったことに気付いたイーディスが、キリトの肉棒に手を伸ばす。上に向かって反り返った肉棒

の裏筋に沿って、人差し指の腹を当てながらそっと撫で上げ、最後に我慢汁の一滴を受ける。その指を自分の鼻の下へと持ってきたイーディスは、立ち上る香りを躊躇いなく嗅ぐ。

「――っ♥　♥　やっぱい……♥　♥　効くわ、これ……♥　♥」

子宮から立ち上る疼きが、整合騎士の誇りを一瞬で粉微塵に砕き、イーディスをただのメスに貶める。そうして、指についたままの我慢汁を舌でこそげ取るように舐め取り、薬物の効能を更に強く高める。

「アリス。……アーリースー？　ねえ、アリスってば」

「……？」

イーディスにしつこく名前を呼ばれたアリスが――キリトとのキスをしっかりと堪能したあとで――キスに一区切りをつけ、イーディスの方を見る。イーディスは何も言わず、床に突っ伏したままのケットシー達を指さした。

「……ああ、なるほど。終わったのですね」

「そういうこと。というわけで……」

イーディスとアリスは片足を上げ、倒れたケットシー達の頭をぐりぐりと踏み付ける。

土下座するように差し出した頭部を、騎士達の足裏というご褒美によって虐められた三匹のマゾブタケットシー達が、揃って身体を痙攣させながら絶頂を迎える。

「おちんぽの準備、お疲れ様でした。あとでキリトから直接ご褒美をもらえるでしょうから……」

「それまでおまんこ濡らしながら待ってなさいね～。マゾ猫ちゃんたち♥

じゃあみんな、後片付けよろしく～♥」

見下ろすアリスとイーディスの足元で、普段の調教と薬物のオーバードーズによって、三匹は惨めなほどあっさりとイキ散らかす。役目を終えた三匹は、ベッドの上に控えていた他のメス達によって引きずられていった。

キリトの前が、ちょうど空いた。そのタイミングを見計らい、部屋の片隅に作られたミニバーカウンターのスツールから立ち上がった

のは、一糸まとわぬ姿を晒した――リズベットだった。
「……♥」
むっちりとした、男好きのする身体。リズベットの肢体を簡潔に表現するならその一言に尽きる。その裸身を晒したまま、リズはばっきばきに勃起したチンポの正面に立つと、ごく自然な所作で跪き、正座。そのままの流れで、額がカーペットにひっつくほど深々と土下座する。
「……♥♥」
たっぷりと時間をかけて、この場にいる全てのメス達の代表となってチンポへの敬意を示し、オスへの従属を示す。そうして自分が満足するまで土下座を続けたあと、ようやくリズベットは顔を上げる。
眼前には、雄々しく突き出されている肉棒。普通なら親愛のキスをする所だが、この後の儀式に備えてケットシー達が整えたチンポを自らの唇で穢すのは烏滸がましいと感じたのだろう。鼻先を近づけてたっぷりと匂いを吸い込んだあと、落ちてくる我慢汁の滴を舌を伸ばして受け止め、ごくりと飲み込む。
「んっ……ふぅっ……♥♥」
擦り込まれた薬効に加え、十匹以上のメスを好き放題に抱いてきたチンポが持つ独特の臭気にあてられ、リズの子宮が震える。今すぐハメ乞いおねだりしながらオナニーしたいという欲求と必死に戦いながら、リズはどうにか立ち上がると、キリト達の斜め前にあたる位置に移動して正面の花道を開けた。
そうして、咳払いを一つして喉の調子を整えると、厳かな調子で切り出す。
「――ご来場の皆々様。本日は我が親友であるアスナの奴隷婚式兼ペニバン童貞卒業式、兼、ユウキの二穴初貫通式、兼、メス奴隷代表敗北調印式にご来場いただきまして……誠にありがとうございます」
結婚式場で働くプロの様に粛々と、リズが式典を進める。彼女の視線が、部屋の入り口を覆い隠すように垂らされた白いレースカーテンを刺し、そうしていきり立った肉棒を見る。
「特にキリトにおかれましては、今回の式典への参加にご快諾いただ

けたばかりか、進行に必要不可欠であるディルド作成用のチンポ型取りに快くご協力いただきまして、誠にありがとうございました。

本日は『メス二匹のお披露目』、『メス達を代表して、逞しきおちんぽ様への雌奴隷誓約』、『口まんこ改造で人生終了ショー』などの演目をご用意させていただいておりますが……もし、おちんぽ様がムラついて我慢の限界を越えた時は、演目など無視してそこら辺にいるお好みのメスをオ射精の道具としてお使いくださいませ♥」

「へえ、いいのか？　せっかくリズ達が作ったショーなのに」

「もちろんです。このショーは、あくまでオス様・おちんぽ様に媚びて、媚びて、媚びて……たっぷり満足していただくためのものですから♥」

普段の勝ち気さはどこへやら。上客にへつらう店主のように振る舞いながら、リズが甘い声音で蕩々と口上を述べる。その言葉に反応し、アリスとイーディスはより一層身を寄せ。動けるメス達がもぞもぞと身動ぎしてアピールする。

「それでは早速ですが……新婦お二人のご入場です。皆様、どうぞたっぷり視姦しながらお出迎えください」

太股の間に雌汁を垂れ流しながら、リズが厳かな声音で告げる。それを合図に、隣室との間に引かれていた白いベールがさっと引かれた。

そこに佇んでいるのは、アスナ・ユウキという二人の花嫁――いや、より正確に言えば『花嫁のように振る舞っている痴女』二名だ。なにせ、彼女らは花嫁の象徴であり純潔を証明する純白の衣装など身にまとっていないのだから。

アスナとユウキが身につけているものといえば、花嫁を思わせる丁寧な刺繍が施された、黒の極薄ニーハイソックスと極薄ロンググローブ。そして、同じ黒色・同じ薄さのウェディングベール。ソックスもグローブも、彼女のみずみずしい肌が透けて見えるほどに薄い。しかもベールは普通の花嫁用とは異なり、メス達の頭頂から後頭部にかけてを覆うばかりで、本来は秘すべき彼女らの顔は丸見えになっている。

そんな彼女らの衣装の中で、唯一肌が透けて見えないのは、首にしっかりと嵌められた黒革の首輪だけだ。ご丁寧に、留め金の部分には小さな南京錠でがっちりとロックがかけられている状態だ。

臍と股間の間にある下腹部に刻まれているのは、すっかりお馴染みになった性奴隷のタトゥー。ハートマークをベースに、子宮を模した図画と《ＡＬＯ》で使用されているルーン文字を組み合わせて作られたこの模様は、特定の男性の精子しか受精しないように子宮と卵子を改造する作用を持つ魔法陣としての機能を持つ。

一般的な白いドレスが表すのが『貴男の色に染まります』という未来形なら、アスナとユウキが纏う黒い衣装達が示すのは『貴男の色に染まりきりました』という過去形。それは敗北宣言であり、それは服従の誓いであり、そして愛の言葉である。

自らの立場と有り様を全身で表しながら、アスナとユウキは並んで進む。そうして、キリト達の前までやってきた所で二人は足を止めた。

そのまま、二人は両脚を左右に大きく開きながら膝を曲げ、いわゆる蹲踞の姿勢で横に並んだ。

「ご存じだとは思いますが……一応、あたしの方からこの二匹を紹介させていただきます。

本日、あたし達の代表として改めて雌奴隷としての誓いを立てさせていただく……メスブタのアスナとユウキです」

リズは司会を続けながら、蹲踞の姿勢を崩さないアスナとユウキの背後へと回る。そうして、片手をアスナの頭に置く。

「こちらのアスナですが、雌奴隷化モデルケースとして基本的な改造を施しております。

特殊薬物を使用した肛門アナルセックス専用器官化、並びに既存人格および記憶のゼリー排泄による消去。空っぽになった頭には、本人の……いえ、排泄される前のアスナの強い希望により、男根崇拝・男尊女卑を基本的価値観とした新人格と修正済の記憶をぶち込んであります」

アスナの頭上に複数のウィンドウが開き、リズ曰く『ぶち込んだ』修

正済の記憶を映像として再生する。
　オナニー用に用意した黒光りする大きな玉付きディルドに裸土下座で敬意を示し、真っ赤なルージュを塗った唇でキスマークを付けるアスナ。
　財布からお札を差し出し、セックスしていただく代金としてキリトに支払い、貢ぎマゾ化していくアスナ。
　男物の使用済みトランクスに顔を埋め、ふうふうと荒い息を吐きながらオナニーに耽るアスナ。
　素っ裸で公園の男子公衆トイレに入り、男子小便器にまたがって小水を漏らしながら、更にキリトの小便をダイレクトにぶっかけてもらうアスナ。
　金持ちばかりが集まる上流階級の社交パーティに、下着も着けられないほど露出の激しいカクテルドレスで参加し、いかに自分が夫のチンポに負けやすいマゾメスブタ妻であるかを上品かつ下品に蕩々と語るアスナ。
　その他無数の映像がアスナの記憶となって『ぶち込まれ』た事で、アスナの人格そのものが強い影響を受けていた。仮に今この瞬間にアスナの記憶が全てなくなったとしても、誰のチンポにどう奉仕すべきかだけは一瞬で再理解できてしまうほどに。
「現在のアスナは、『旦那様はこの世で最も素晴らしい存在であり、そんな御方のオチンポ様にご奉仕する生オナホールとして生きられることはこの上ない喜びである』、『旦那様のオナホコレクションを増やし、いつでも好きな時に好きなオナホまんこを使えるようにするのが妻の役目』、『旦那様の最強遺伝子を雑魚まんこの奥で受け止め、お精子様にマゾ卵子差し出して受精レイプしていただき、沢山の赤ちゃんを産むのが妻の義務』という信念を強固に持った極上のメス妻として生まれ変わりました♥
　本当なら、ちんぽを突っ込まれただけで即イキするような雑魚まんこに改造する予定だったのですが……こちらは、キリトのでかぶっといおちんぽ様におまんこをばこばこ耕されまくったおかげで、既に達成済みでした。代わりのサービスとして、魔力入りの淫紋技術を使っ

て、キリトの精子以外では受精も着床もできなくなるようにしてあります」

アスナの改造状況を一通り語った所で、リズは新たなウィンドウを開いた。そこに映っているのは、１メートルに満たない長さの筒だ。ガラスかアクリルのような透明な素材で作られているらしく、内部には白く濁った液体が充填されているのが分かる。更によく眼をこらせば、その液体の中で上下に動く機械的なパーツと小さな何かの器具の姿が見て取れた。

「なおゼリー排泄されたアスナの旧人格については、本来は廃棄処分予定でしたが、研究材料としての活用価値があることがわかりましたため廃棄予定を撤回しております。

もちろんこの旧人格オナホにはかつてのアスナの記憶・意識が残存しており、また感触を感じる機能も残っています。よって、アスナ本人の口腔・性器・肛門を再現したトリプルタイプのオナホールとして加工・成形後、特濃媚薬を混合した精液内に密封し、自動ディルドマシーンによって三穴全てに対し２４時間３６５日欠かさず刺激を与え続けています。

これにより洗脳調教過程の効率化・簡略化を進められないか、研究を進めている段階です。なお、現在秒間１２０回を超える強制絶頂により旧アスナの人格は毎秒廃人化しておりますが、廃人化のたびにコピーしたバックアップデータから強制修復を行っておりますのでご安心ください」

アスナの解説を終えたリズは、今度はユウキの頭に手を置いた。

「こちらのユウキは、アスナとはまた違ったアプローチで雌奴隷改造を行っています。

特殊薬物を使用した肛門アナルセックス専用器官化は同様ですが、既存の人格はそのまま残してあります。その代わりとして、特殊なシミュレーションシステムを利用し、オス様（キリト）に完膚なきまでに敗北する疑似体験を本人主観時間で約２０万時間……ぶっ通しで『体験』させています。

これにより、肉体面・精神面の両方にマゾヒズム性癖を植え付ける

と同時に、オス様へ敗北することやオス様に命令していただくことに強烈な喜びを感じるよう、嗜好の矯正を行いました」

リズがそう語ると、今度はユウキの頭上に複数のウィンドウが開く。そこで再生される映像は、ユウキがシミュレーションの中で味わい続けた敗北の記録。

数ある映像の中で最も多いのは、力尽くでレイプされるユウキの姿だ。

剣も装備も破壊され、必死で抵抗するも男の力に叶うはずもなく、泣きながら強姦されるユウキ。

必死に『イヤだ』、『ヤメて』、『ナカだけは出さないで』、『赤ちゃんできちゃう』と叫んだ所で聞き届けられるはずもなく、ぶっといオスチンポによって肉体を征服され、どっぷりと膣奥に射精されるユウキ。

そのまま幾度となく陵辱され、完全に心をへし折られた結果――終始オスに媚びた笑みを浮かべ、ポータブル肉便器として生き延びる道を選んでしまったユウキ。

剣も誇りも捨てた証拠として、自らの愛剣を地面に投げ捨て、ガニ股で小便をぶっかける姿を公開するユウキ。

娼婦でも着ないほどに露出度が高い胸も性器も丸出しの布きれ（ドレス）で身体を飾り、自らを負かしたオスにいつでも身体を使ってもらえるよう、そばにべったりと貼り付いて離れないほどに堕ちたユウキ。

――もちろん、これはユウキが『体験』させられた敗北の、ほんの一例に過ぎない。

「また、キリトが視界にいる間は思考リソースのうち２５％、またキリトの男らしく誇らしいオスチンポ様が視界にある間は更に２５％を加えたトータル５０％を使用し、自身が惨めに敗北しレイプされる様を脳内シミュレーションし続けるよう、強制暗示も掛けています。

仮に何らかの間違いでユウキが反抗したとしても、思考の４分の１から半分はチンポに支配されているため、戦闘能力は大幅に減損する仕組みになっております。そのため、安全に排除・捕獲が可能となっています。

あとは……こちらも既に雑魚まんこ化済でしたので、アスナ同様に淫紋（タトゥー）技術を使って子宮と卵子にロックをかけています」

リズが雌奴隷達の出来映えを誇らしげに語るのに合わせて、アスナとユウキのウィンドウに新たな映像が流れ出す。内容が共通しているのを見るに、おそらく二人が共有する記憶として『ぶち込まれ』、『体験』させられたものだろう。

玉座めいた椅子に座るキリトの前で二人揃って裸土下座し、頭をぐりぐりと踏み付けられている二人。

口に出すことも憚られる卑猥な言葉を体中に落書きされ、素っ裸の状態で公衆の面前へと引き出された挙げ句、犬のように四つん這いの姿勢を強制されてヘコヘコと腰を振りながらパレードさせられる二人。

肛門に巨大なシリンジを突き刺され、大量の薬剤を注入された挙げ句、極太のアナルゼリーを公開大量排泄させられる二人。

自分がいかにセックスしか能の無い肉便器であるかを、あるいはオス様によってどのようにレイプしていただいたかを、公衆の面前で仔細にプレゼンさせられる二人。

そんな映像が次々に映し出されたあと、ウィンドウが二人の頭に吸い込まれるように消えた。

「以上、新婦様方のご紹介をさせていただきました。

――では続きまして。ただいま紹介しましたメス代表二匹による、オス様およびオチンポ様への敗北宣言です」

リズが両手でアスナとユウキの後頭部をぽんぽんと叩く。それを合図に、二人は四つん這いの姿勢で前へと進み、キリトの足元へと擦り寄る。

堂々と屹立する肉棒と、両サイドに二匹の女騎士達を侍らせて堂々と待つキリトを一度見上げたあと、アスナとユウキは揃って三つ指をついて深々と土下座。そのままキリトの足の甲に口付けする。言うまでもなく、土下座も、足へのキスも、キリトというオスへの敬意を示す行為である。

真っ赤な口紅でしっかりとキスマークをつけたあと、アスナとユウ

キはほんの少しだけ顔を上げる。そうして舌を突き出し、キスマークのほんの少し上に舌先を当て、ゆっくりと舐め上げていく。

足首、脛、膝、太股と、まるで蛞蝓が這った後のような痕跡を残しながら、アスナとユウキがキリトの身体を舐め上げていく。そうして腰まで辿り着いた二人は、脚と肉棒・陰嚢の隙間に鼻先を突っ込んだ。

「「――……っ♥♥　すうっ……♥　はあっ……♥♥」」

蒸れた汗の香りと薬効成分が入り交じる、濃厚なちんぽ臭の発生源で深呼吸を繰り返す。肺の中の空気が、ちんぽの匂いが染みついた空気とすっかり入れ替わってしまうまで。血中にオスの痕跡がしっかりと取り込まれ、体内はマーキングされていく。

暫しの間を置いて、ユウキとアスナはその柔らかな頬を肉棒に押し当て、左右から挟み込んだままゆっくりと顔を後ろに引く。

ここにいるメス共が奉仕しているのは、自分達の顔より長く、互いの頬肉がふれあえないほどに立派なチンポなのだ――その事実を言外にアピールする。

我慢しきれなくなったのだろう。ユウキが自分の股座に指を突っ込んでぐちゅぐちゅとオナニーしながら、肉棒にキスを繰り返す。ちゅっ、ちゅっ、という音と共にキスマークを量産する親友と肉棒を挟んだ向かい側で、媚笑を浮かべたアスナが、持ち主であるキリトを見上げた。

「ふふぁあっ……♥♥　ユウキったらすっかり頭のネジがぶっ飛んじゃって、またオナニーしちゃってる♥　しょうがないよね、キリトくんのでかぶと旦那様ちんぽ、今日はいつにも増していい匂いなんだもん♥♥」

「だろう？　今夜はアスナとユウキの大事なイベントがあるからな。ストレアや皆に手伝ってもらって、いつもより丁寧に仕上げてもらったんだ」

「もう、キリトくんったら……♥　いっぱい気を使ってくれて、ありがとう。それじゃあ……特等席でたっぷり聞かせてあげるね♥

親友も、義妹も、友達も……おちんぽ様に差し出しちゃった淫乱アスナの、チン媚び敗北宣言♥♥♥」

チンポキスを続ける親友の頭に片腕を回し、後ろからぎゅっと押しつけながらアスナは微笑む。そうして、もう一度深く息を吸い込んだ。

「――『チン媚び敗北宣言』。宣言者、メス共代表・アスナ。

我々マゾメスオナホまんこ――以下『メス共』は、最強でかぶとちんぽ持ちご主人様であるキリトくん――以下『オス様』への敗北を宣言すると共に、以下の誓約を捧げます♥」

宣言と共に、アスナが唇を肉棒に押しつける。まるで契約書に押される印鑑のように、キスマークが残るまでしっかりと口づけてから、ようやく唇を離す。

そうして――。

「ひとーつ♥

私達メス共は、ありとあらゆる面でオス様に劣った下級存在です♥

生まれた瞬間からオス様に敗北し、隷属し、支配される事を宿命づけられた低級雑魚です♥♥

つまりメス共とは、でかぶっと～～～っくて、おっとこらし～～～い、メス殺し最強おちんぽ様に媚びて、媚びて、媚びまくることだけが存在意義のまんこ穴で～すっ♥♥

そんな当たり前の事実を無視して、今日までオス様と同じ人間のフリし続けてきて本っ当～～～～に申し訳ございませんでした～～～♥♥

これからは頭と心を入れ替えて、しっかり子宮でモノ考えながら、オス様崇拝・男根至上主義を掲げて参りますので、どうかこれまでのご無礼をお許しくださ～～い♥♥」

再び、口付けを施す。先程のキスマークに被らないように、少しだけ場所をずらして。

「ひとーつ♥

オス様に都合良く使っていただけるように、私達メスは、基本的人権ならびに各種権利を放棄することを誓いま～す♥　また、今まで保有していた財産、ならびに今後取得する収入・資産の全てをオス様に献上させていただきます♥

私達メスにとって、オス様のお財布として使っていただけることは、オス様のおちんぽにご奉仕させていただく事の次に名誉なことですので、どうぞ遠慮無くまんこ付きＡＴＭとしてご利用ください♥」

また一つ、キスマークが増える。その度に、誓いが増えていく。

「ひとーつ♥

私達メスは、オス様に無責任種付けセックスを楽しんでいただけるよう、一切の避妊措置を行わない事を誓いま～す♥　コンドームも、ピルも、その他諸々も一切使いませんので、オス様は気持ちよ～～～～く生セックスをお楽しみください♥♥

また、私達の雑魚マゾ卵子がオス様のつよ～～～いお精子様によってレイプされてしまったら、その時はメス共が責任をもって、オス様の優秀遺伝子を子宮ですくすく育てさせていただきます♥

も・ち・ろ・ん、オス様には一切ご迷惑おかけしませんので、どうぞぶっといちんぽでメスまんこじ開けて、お遊び感覚で遺伝子まぜまぜして、可愛い赤ちゃんたくさん産ませてくださ～～～い♥♥」

また一つ、キスマークが増える。

「ひとーつ♥

私達メスは、自分で自分のことをチンポに負けやすいマゾメスに調教し、お互いにお互いのことをチンポ最優先主義男根崇拝まんこ穴として相応しくなれるよう調教し続ける事を誓います♥♥

また、オス様のチンポケースになる資格がありそうな新しいメスを見つけたら、ありとあらゆる手段を講じて追い込んで、チンポぶっこんだら即堕ちできるようになるまで調教しまくって、オス様にプレゼントさせていただきま～す♥」

また一つ。

「ひとーつ♥

私達メスは、オス様の命令に絶対服従するオナホペットであり、いついかなる状況でもおちんぽ様のイライラを解消する性処理便所であることをここに宣言しま～～～～～す♥♥」

最後に、また一つ。

反対側のユウキ共々、肉棒に唇をべったりと押しつけて、アスナはしっかりとキスマークを描く。シノン達の口と舌で綺麗になっていたキリトのチンポは、今やアスナとユウキのルージュによって多数の模様を描かれきっている。

アスナとユウキはその肉棒からようやく唇を離したかと思うと、両腕を頭の後ろに回して蹲踞しながら服従のポーズを取る。そして、肉棒を飲み込む時のように大きく口を開くと、薄ピンク色の舌をべろりと伸ばした。

「イーディス殿、ユウキの方をお願いします。私はアスナの方を」

「はいはーい」

キリトの側に侍るアリスとイーディスが腕を伸ばし、アスナとユウキの舌先を指で掴んでぴんっと引っ張る。

二人が自分の意思では舌を引っ込められなくなった所で、リズがそっと進み出る。彼女が両手で恭しく捧げ持つのは、紅いビロード地とクッションが引かれた桐の箱。その中に置かれているのは、掌に納まる程度の長さの黒い円柱が二本。太さは、五百円玉の直径とほとんど同じくらいだろう。

「こちらは、あたしと……そっちで妹のケツ穴イジメしてるレインで丹精込めて創り上げた『魔術奴隷印』です。

この奴隷印を、そこでよだれとマン汁垂れ流しながらお預け食らってるメス二匹の舌に押印していただくと、調印式の完遂となります」

「へぇ……どれどれ」

捧げられた二本の印鑑を両手で一本ずつ持ち、キリトはしげしげと眺める。黒檀を思わせる光沢を持つ印鑑の印面を見てみれば、デザインは共通している。

大枠となるのは、広い印面の縁ぎりぎりまでを使った二重同心円。

外側の円周内部には、小さなハートマークが三つ、逆三角形の頂点となりうる位置に配置されている。それぞれのハートマーク同士の間には『ＡＬＯ』で使用されるルーン文字の一節が描かれ、計三節の呪文が構成されている。また、内側の円周内部には五芒星に上下逆の五芒星を重ね合わせた十角の星の紋様が描かれていた。

「……で、どうみてもまともなハンコには見えないんだけど。何か仕込んでるだろ、リズ？」
「大せいか～い♥　これには面白い機能を仕込んであって……♥
舌の上にぎゅ～～～っと押し当てると、なんと、お口の中で感じた刺激が、おまんこへの刺激として変換されちゃうの♥」
リズはべ～っと自らの舌を突き出し、人差し指の先を舌の表面にぐりぐりと押し当てる。
「ほら、お口って色んな場面で使うじゃない？
フェラチオやイラマされる時とかキスはもちろんだけど……物を食べたり、水を飲んだり、喋ったりとか。そもそも何もしてない時だって何かを感じる場所。その感触がぜ～～～んぶ、おまんこへの愛撫に変換されて、脳味噌へ届けられちゃうのよ♥　おまけに、舌への刺激はクリトリスへの刺激に変換されるように設定済♥
さて……そんなやっば～いハンコ、押されちゃったら――」
リズは唾液に濡れた指先を自らの下腹部へと滑らせると、下品に開かれた股の間に突っ込む。
「――四六時中おまんこどろどろに濡らして、セックスした～い♥
ちんぽはめた～い♥って発情しっぱなしの即ハメ便器の出来上がり～♥♥
まともな生活なんて送れないし、人間廃業確定～♥　オス様のちんぽのイライラを解消するための穴になっちゃいま～す♥♥」
腰をへこへこと前後させつつ、リズは二本の指で作った輪っかを口元で前後させる。下品にもほどがあるジェスチャーで示すのは、ハンコを押されたメス達の末路だ。
「……あ、ちなみに。このハンコを押した時点で、キリトはさっきのアスナの奴隷宣言を受け入れて支配契約を結んだってことになるから……それだけ注意してね♥」
「なるほど、ロクなもんじゃないってことはよくわかったよ。それじゃ……」
両手にハンコを握ったまま、キリトは眼下の二匹を見下ろす。視線を通して『逃げるなら今のうちだぞ？』と、最後の温情をかけてやっ

たが――。

「はやひゅっ♥　はやひゅうっ♥　わたひのじんふぇい、おわらふぇふぇえっ♥♥」

「ぼひゅもぉっ♥　おちたひっ♥　くちまんこ、ほんもにょのくちまんこにしていいかりゃあっ♥♥」

――返ってきた答えは単純。堕ちたメス達にとって、オス様の即ハメオナホとしての利用価値を上げることに比べれば、人間としてのまともな生活など無価値に等しいというものだった。

キリトは両手に一つずつ持ったハンコを軽く持ち直す。そうして、餌を待つ犬のようにだらだらと涎を垂らしているアスナとユウキの舌めがけて振り下ろす。

狙いは過たず、印面は真っ直ぐに。二人の舌の中心に、契約のハンコがしっかりと押しつけられた。

「お――――お〰おお〰おほお〰おおおおお〰お〰おお〰うううう〰おおぉお〰お〰おぉおおっ♥♥♥」

奴隷印の効き目は即座に表れた。ユウキとアスナ、二人の身体が、びくんっと大きく仰け反る。

散々お預けされていたことで超敏感になっていたクリトリス――そこに強制同期させられた舌は、舌の上に押しつけられたハンコの感触を喰らい、アリスとイーディスの指に挟まれる感触を強烈な快感信号へと変換して二人の脳味噌に伝える。

「いぎゅっ♥いっぎゅうううう♥♥　お〰っおおお〰おっ♥　おぉひぃいぃ〰いい♥♥」

「も〰っ♥♥　も〰ぉぃ〰っでりゅうう♥　イ〰っでりゅがりゃあああ〰あぁぁぁっ♥♥」

潮を噴き、小便まで垂れ流しながら乱れる二匹のメス。チンポを間近に据えられ、ずっとお預けをくらった状態でクリトリスを直に虐められてしまえば、どんなメスであろうとも堪えきれるわけがない。度重なる性行為でマゾ性向を育てられてきた二人ならなおさらだ。

そんな二匹の痴態を見下ろしながらも、キリトも、アリスも、イーディスも、力を弛めようとはしない。

「へー……思ったより即効性あるんだな、これ」
「そろそろ離してあげてもよいのではありませんか？　キリト。このままでは、アスナが壊れてしまいますよ」
「そういうアリスだって、アスナの舌を挟みっぱなしのように見えるんだけどな」
「仕方ないでしょう。私が指を離したら、せっかくの印がずれて刻まれてしまうかもしれないでしょう。ねえ、イーディス殿」
「そうそう。だからアスナもユウキもあたし達に感謝してよねー……って、あーあ」
二匹を見下ろしたイーディスが深々と溜息をつく。
「ダメね、これ。完璧に伸びちゃってる」
ほんの一分にも満たない時間の内に、ユウキとアスナは完全に失神していた。もはや身体には一切力が入っておらず、アリスとイーディスが舌を引っ張っているおかげでどうにか姿勢を保っているような状態だ。
二人が様々な穴から噴き出した様々な体液は既に絨毯では吸い取りきれない量らしく、足元に小さな水たまりを作るほど。舌からアリスとイーディスが手を離した途端、アスナとユウキの身体はその水たまりの中へと崩れ落ちた。
「――びゃひぃっ♥♥　んひぃ〟っ♥♥♥♥♥」
「――はひゅっ♥♥　はひゅぅ〟っ……♥♥♥♥♥」
口からはみ出すほどにだらりと伸びきった舌の上に見えるのは、奴隷印によって黒々と刻まれた魔法陣。オスに敗北し隷従するというメスの本懐を果たした証だ。
二人の全身は相変わらず不定期に痙攣を繰り返しており、奴隷婚式の続行は疎か、立ち上がったり座る事すらできないだろう。
そんな光景を見て、『はあ～～～っ』と一際大きな溜息をついたのは、進行役を務めていたリズだ。
「さすがにこのまま続けるのは無理ね……。ま、どうせこのあとアスナはお色直しの予定だったからいいけど……。
どうする、キリト。そこのクソ雑魚まんこ達が目覚めるまで、何人

かハメて遊ぶ？」
「そうだなあ……それも魅力的だけど……。今夜の一発目は、ユウキのために取っておきたいんだ」
「おっけー。それじゃあ――」
こほん、こほんと軽く咳払いをして、リズは司会らしい振る舞いを取り戻す。
「――いささか急ではありますが、ここで新婦アスナはお色直しの時間とさせていただきます。
新郎様。大変申し訳ありませんが、そこで伸びてるもう一匹の方を運んでいただけますか？　意識を取り戻したら、いかように弄んでいただいて構いませんので」
「よし、まかせろ」
床に伸びていたユウキを、キリトが両腕で抱え上げてお姫様だっこの体勢を取る。たったそれだけの刺激で、ユウキは雌穴から雌汁を噴き出し追い甘イキをしてみせた。
「それでは、アスナのお色直しが終わるまでの間……ご参列の皆様と新郎様のご歓談の時間とさせていただきます。
どうぞ皆様お誘い合わせの上、先程のアスナとユウキに負けないくらいにチン媚びアピールに励んでくださいませ♥♥」
両隣に女騎士達を侍らせたキリトが、抱えていたユウキを女達が待つベッドへ寝かせ、自身も同じベッドに腰掛ける。
リズが司会進行役らしく深々と頭を下げ、もう一度頭を上げる。その頃にはもうベッドの上にいたメス達がキリトに群がっているばかりか、先行者利益を享受したアリスとイーディスがいち早くキリトの足元に跪き、チンポへのキスマークを増やし始めていた。
「さて……行きましょうか。アスナ」
意識をふっとばしたまま弛緩しているアスナの足首を掴んだリズが、そのままアスナを引きずって行こうとする――と、アスナの体がふんわりと宙に浮かんだ。
「……？」
きょとんとするリズがよく目を凝らせば、ほんのりと黒色を混ぜた

靄のような、あるいは空気の塊のような半透明の何かが、アスナの体を包み込むようにして下から支えていた。

こんな芸当ができる人間は数人しかいない。その犯人を探してベッドの方を見れば、絡み合うメスたちの間を縫って上に伸びた犯人と思しき男の腕が、リズに向かってひらひらと手を振っているのが見えた。

「なんだかんだ気が利くじゃない。さーんきゅ」

リズがお返し代わりに投げキッスを送るのとほぼ同タイミングで、犯人の腕にイーディスが絡みつき、その裸身で以てメスたちの群れの中へと沈めていく。

その光景に苦笑しつつ、リズはすっかり軽くなったアスナを引きずり、花嫁用の控室へと運んでいった。

14―11．（アスナ・ユウキ・他）2

花嫁の控え室兼、お色直し用の更衣室。

舌に奴隷の刻印を押され、押し寄せる悦楽の嵐を受けて無様に失神したアスナがこの部屋で目を覚ましたのは、今から10分ほど前のことだ。

この部屋までアスナを運んでくれた親友は、『キリト達の様子見てくるから、お色直しの衣装選んどいてねー』と言って少し前に部屋を出て行ったばかり。

控え室に一人取り残されたアスナは、部屋に置かれた大きな姿見の前に立つと、おもむろに舌を伸ばした。

（わあ……キレイに押されてる……♥）

舌のど真ん中にしっかりと押された、黒々とした紋様。下腹部に刻まれたモノとは異なるデザインでありながら同じ意味を持つ、オスに服従した新たな証。その証が消えないことを確かめる、指先で軽く触れてみると――。

「――んんぅううっ♥」

自然と甘い声が溢れ、下腹部がびくびくと震える。

普通に舌をなぞられるだけでは、決して得られないレベルの快楽。口も喉も幾多のフェラチオ／イラマチオ経験によって性感帯になっているとはいえ、それ以上に強烈でダイレクトな快感。

「はあっ、はあっ……♥」

息をするだけでも快感に苛まれる。その事実が被虐性癖を刺激し、更なる快楽を呼ぶ。刻印によって性器と同じ反応を返すようになった口が、生きているだけでアスナを責め立てる。

（おめでとう、アスナ（わたし）。これでもう、一生キリトくんに所有してもらってチンポ世話係として使ってもらうしかなくなっちゃったね♥♥

分かってると思うけど、キリトくんのこと大事にしなきゃだめだよ～？　こんな淫乱ド変態マゾを飼って面倒見てくれる人なんて、キリトくんぐらいしかいないんだから♥♥♥）

鏡に映った己を言祝ぐ。
そのまま両手を後ろに回し、腰を落として股を開く。お馴染みの奴隷のポーズをすれば、鏡に映ったアスナも同じポーズを取る。
その姿勢のまま、スクリーンショット機能を使って己の淫らな姿を何枚か撮影していると、控え室の扉をコンコンとノックする音が聞こえた。
「アスナー、準備できたー？　入るわよー」
「ちょっと待って、もうすぐだから」
扉越しに聞こえるリズの声に返答しながら、アスナはコンソールウィンドウを開いて首輪以外の装備を全て外した。
ほとんど全裸に等しい状態になった後、まずは髪型を整える。うなじに回った首輪の後ろ側がはっきりと見える程度に、長い髪をアップスタイルでまとめて動きやすさを確保。
衣装のベースとして選択するのは、SMプレイの時に使用するボンテージ・スーツ。テカテカと艶めくブラック・エナメル地のロンググローブとオーバーニーで四肢を覆い、黒く染めた本革で作られたサディスティックな女王様コスチュームで胴体を包む。
SMプレイをする、あるいはこの後に控えているイベントを考えるとぴったりの格好ではあるが――今のアスナには、どこかしっくりこなかった。
（うーん……やっぱり、フルヌードの方がいい気がしてきた）
姿見の前で改めて自分の姿を確認した後、アスナは衣装全てを装備解除した。これから付けるもの価値を考えれば、何かを着けるのはむしろノイズになる。
「準備できたよー、リズ」
「はいはーい。それじゃ、入るわね」
扉を開けて入ってきたリズは、調印式の司会を務めていた時と同じく素っ裸の状態。その手には、札束を詰めて運ぶ時に使いそうなサイズのジュラルミンケースを携えていた。
「あらあら。せっかくのお色直しなのに、素っ裸のままでいいのかしら、花嫁さん？」

「全裸でうろついてる人に言われたくありませ～ん。
　それにほら、『チンポに勝てないマゾメスで～す♥♥』って宣言したばっかりで、あんまり女王様っぽい格好するのも合わないかなって」
「確かに。それもそうね」
「でしょでしょ。……あ、そうそうリズ。キリトくん、待たせちゃって退屈してなかった？」
　アスナの心配に、リズは首を横に振って答えた。
「みんなでもてなしてるし大丈夫よ。何より、キリトだってアスナの好きなだけ時間を使って、納得行くまで準備させてあげたいって思ってるに決まってるじゃない」
「そうだね……キリトくん、優しいもんね」
「そうそう。と、いうわけで……時間はたっぷりあるんだし、しっかりと準備しましょ」
　リズは控え室に置かれていたテーブルと椅子のセットを見つけると、ジュラルミンケースをテーブルの上に置き、片方の椅子へと腰掛ける。それに倣ってアスナがもう片方の椅子に座ると、リズはジュラルミンケースをくるりと回転させ、キャリーハンドル部分をアスナの方へと向けた。
「それでは、こちらが新婦（アスナ）様ご注文の品……『1／1スケール　旦那（キリト）様チンポ再現型ペニスバンド・限定カラー／ミッドナイトブラックバージョン』でございます♥」
　一瞬で商売人の顔に戻ったリズが雌狐の媚笑を浮かべ、ジュラルミンケースのロックを解除して蓋を開ける。
　その中から納められたモノに、アスナは思わず息を呑む。
（――すっごぉい……♥　本物そっくりにおっきぃ……♥♥　完璧すぎ……♥♥　交尾したくて子宮が疼くのわかるぅ……♥♥）
　紅い緩衝材（クッション）を布団代わりに、堂々と身を横たえる黒いイチモツ。
　大きく膨らんだ亀頭。ごりっと張り出したカリ首。ごつごつとした大木のようにしっかりと太く長い軸と浮き出た血管。これは正に、オスの象徴であるペニスを象ったセックスの為の道具。
　本物であれば根元にはずっしりと重たい金玉がぶら下がっている

ところだが、その代わりにこちらはＹ字状の保持具が接続されている。Ｙ字の上部分から一本ずつ、下部分からは二本の紐（バンド）が伸びており、これを腰に巻くことで安定性を確保する仕組みになっていた。

「――どうかしら。ご注文通り、アスナが普段オナニーに使用しているモノ（ディルド）に忠実なサイズ・形状で製作させていただきました。しかも、いつものより更に本物に近くなるよう、精度も高めたんだから」

「完璧よ、リズ……♥♥　すごい……♥♥　今すぐオチンポ様に土下座して、杭打ち騎乗位オナニーしたいくらい……♥♥♥」

「あーら、いいの？　ユウキの二穴バージンを奪ってケツ穴ぶっ壊すためのものだから、未使用新品の童貞ペニバンに仕立ててくれって言ったの、アスナでしょ？」

「だって……♥♥」

黒いペニバンを両手で恭しく捧げ持ち、アスナはその逸物をしげしげと眺める。金玉が付属していないとはいえ、ずっしりとした重量感は本物のペニスとそっくり。それが証拠に、アスナの腰は無意識に前後し始め、椅子の座面には愛液をべっちゃりと付着させながらセックスの準備を整え始めている。

そんなアスナの様子を眺めながら、リズは説明を続ける。

「素材はハードシリコン。長さや太さはもちろん、硬さ、重さ、反りの角度なんかもオリジナルに忠実に作ってあるわよ～♥　ただ、このタイプは金玉のところがない分、本物より少し軽くなってるから注意してね。

あと、ご注文通りの『液体発射』機能も付けておいたわ。デフォルトは精液だけど、おしっことか、アナルゼリー薬液なんかの色んな液体もオプションで選べるようにしてあるから、好きなのを選んで出してね。

射精のタイミングは任意でもできるし、実際のキリト（キリト）みたいに一定時間、一定の速度以上でバコバコすることでも射精可能よ。

あとこの子、リアルタイムでオリジナルのチンポの情報を受け取れるから……ペニスの動きをキリトと完全同期させることもできるわよ」

「何から何までありがとう、リズ。でも、動きの同期って……？」
　小首を傾げるアスナに、リズは笑って答える。
「簡単よ。たとえば……あたしがキリトとセックスしてる時に、アスナがそのペニバンのディルドを自分のおまんこに挿れてオナニーしたり、誰かとそのペニバンでレズセックスしてるとするじゃない？」
「うんうん」
「そういう時、ペニバンの同期モードを選択してて、キリトのチンポとディルドのどっちもが誰かしらの『穴』に入ってると……キリトのチンポの動きに合わせて、ペニバン自体が前後したり、ディルド部分が伸縮してキリトの動きを再現してくれるのよ」
「……つまり。キリトくんと遠隔セックスできるってこと？」
「そういうこと♥　ほーんと、ＶＲさまさまね～♥♥
　ま。それ以外にも色々面白い機能を仕込んであるから、じっくり楽しんでね♥」
　自分とキリトがセックスしている横で、このペニバンを突っ込まれた誰かが狂い悶える。あるいは、キリトが誰かとセックスしている横で、このディルドを股座に突っ込まれてイキ狂う自分。そんな光景を想像し、アスナの劣情は更に燃え上がる。
　普段なら椅子に座ったまま脚を開くことなどないというのに、いつの間にか両脚は左右に開かれ、座面に愛液をじわじわと染み出させていた。
「リズ、ありがとう。理想通り……ううん、それ以上の仕上がりだよ」
「お気に召していただけたようで何より。それで、製作代金の方だけど……最初に決めた通りでいいのよね」
「もちろん。念のため確認するね」
　アスナは恭しい手つきでディルドを元のケース内へと戻す。そうしてアイテムストレージを開き、リズとの間に交わした契約書をオブジェクト化。代金に関する部分を読み上げる。
「えーっと、『メスブタオナホまんこ・アスナ（以下、甲）はヤリマンザーメン便女・リズベット（以下、乙）に対し、キリト（以下、オス様）のチンポを模した自慰行為または同性間性交等に用いる大型肉棒

模造器具の製作を依頼するにあたり、製作代金の代替として乙の指示の下、後述の各種行為・労役等を提供するものとする。』」

簡単に言えば、アスナはペニスバンドの製作代金を払う代わりに、リズの指示に従って働くという内容になる。

「『一つ。乙がプロデュースする性的興奮喚起を目的とした映像作品への甲の出演。いかなる内容であっても甲に拒否権はなく、収益は全て乙のものとする。また出演本数は乙が決定し、随時変更可能とする。』」

簡単に言えば、リズがプロデュースするＡＶにアスナが出演するという契約。

出演する作品に関しては、別紙で書類が用意されていた。たとえば『※撮影検討中作品・仮タイトル』としては、『《閃光》のアスナ、人生完全終了　～公開全裸アナルゼリー排泄ショーでリアル情報全力大公開ＳＰ～』や、『ママ、わたし（アタシ）たちの童貞（ハジメテ）もらって！　～愛娘達のペニバンで二穴陵辱されてイキ狂うド変態ママ・ア●ナちゃん～』や、『デカチンペニバンでレズナンパチャレンジ　ｉｎ　ヤリモクヌーディストビーチ！　～うちのダンナのちんぽ、これと同じサイズなんですけどよかったら３Ｐしてみません？～』など、ぱっと見ただけでわかる程に過激なタイトルが何本も並んでいる。

またそれ以外にも撮影企画案として、『ＳＭショップやアダルトグッズショップを回ってデートしながら、縄・ムチ・蝋燭・バイブなど、使って欲しいグッズを購入したあと、それをスタジオで実際に使う』、『公園の公衆トイレの男子便所で露出し、放尿やオナニー、腰へコダンスする姿を生配信』、『１●歳の頃の身体（アバター）でレイプしてもらう』、『セラピーという体（てい）で、自分のセックス遍歴を詳らかに語ったり、エアセックスや嘘喘ぎでその時の状況を再現する』等の企画案が多数記載されていた。

「『一つ。甲が大型肉棒模造器具を実際に使用して自慰を行う姿を録画し、宣伝材料として乙へ提供。映像は無修正で全世界に公開されるものとする。また、撮影は甲および乙およびオス様以外の別の人間に依頼すること。』」

簡単に言えば、アスナがこのペニバンもといディルドを使ってオナニーする映像をこの件とは関係ない第三者に撮影してもらい、それを製品ＣＭとして世界中にばらまくという契約。

更に補足として『撮影の際はカメラマンからオナニーする許可をいただいてからやること。また、イク時も同じように許可を求めること。許可を得る前にイッたり、我慢するために手を抜いたら撮影はやり直し』と、手書きのメッセージが添えられていた。

『一つ。乙の性欲またはストレス解消、または新製品の開発等を目的とした各種嗜虐的行為に対する、甲の拒否権の永久喪失。ただし、オス様のチンポへの奉仕またはそれに類する行為の実施中、または直近にその予定がある場合はチンポへの奉仕を最優先し、また乙もチンポ穴としての責務を最優先するものとする。』

簡単に言えば、リズが何らかの理由でアスナを使う場合、アスナはそれを拒めないという契約。内容は至極当然のものであるし、チンポへの奉仕を最優先とする但し書きもある以上、アスナに拒む理由はない。

今回のディルド以外にもリズは様々なアダルトグッズを製作している。そのテスターとして、あるいはオナニー代わりのレズセックス要員としても役立てるのだからなおさら断る理由はない。

『一つ。甲は乙または甲以外のメスマンコがオス様と性交を行っている映像を視聴しながら定期的に自慰行為を実施すること。またその際、甲は自慰行為実施前に己を可能な限り卑下し、自己尊厳を破壊しながら自身の被虐性および変態性を強調すること。また実施後にはオス様および乙への感謝の言葉を述べながら土下座すること。』

簡単に言えば、リズや他の女性達がキリトとセックスしている映像をオカズに、アスナは定期的にマゾオナニーしなければならないという契約。

普段から日常的にしていることであるためわざわざ契約書に記載するまでもないが、それはそれ、これはこれというものだ。

『一つ。乙が甲に対し自慰行為または甲の被虐的性質に即した命令を下した場合、甲は状況・場所・時間を問わず速やかに裸になり、自

身の局部を強調した姿勢を取り、乙の命令に速やかに従うこと。』」

簡単に言えば、リズに命令されたら、アスナはいつでもどこでも素っ裸になって下品なポーズを取るという契約。

これもよっぽどの事情――たとえばキリトとセックスしている時など――がない限り、頼まれれば拒まない。リズ以外の場合も同様だ。それでも、書類に記載しておくこと自体に意味がある。

「……これで全部だけど、本当にこれでいいの？　こんなに素敵なチンポを作ってくれたのに、これじゃ安すぎない？」

「全～然。アスナみたいな最高の美少女を好き放題できるんだもの。むしろ、ＡＶの売り上げだけで大もうけできちゃうレベルだわ」

にんまりと笑うリズに、アスナは契約書を手渡す。一連の契約事項がつらつらと記された書面の下部には、アスナとリズの顔写真付き署名欄が設けられている。このリゾートアイランドに入島する際に作成した入島届け同様、それぞれの署名に加えて、唇、女性器、肛門に朱肉を当てて作られた印影が押下済だ。

リズは契約書を自らのストレージ――アスナの手の届かない領域――にしまい込むと、おもむろに席を立った。

「さーってと。アスナがちゃんと契約を守れるか、一応試しておきましょうか。

――アスナ、起立」

「はいっ！」

「鏡の前に行って、ガニマタでおまんこおっぴろげにしたまま待機」

「はいっ！」

リズの命令に従い、アスナは椅子から立ち上がって姿見の前へと移動。そのまま鏡に向かって両脚を大きく広げ、膝を曲げたガニマタの姿勢を取る。

鏡に反射して映るアスナの性器は、言うまでもなくどろどろのぐちょぐちょに濡れており、肉棒を乱暴に突っ込むだけで簡単に絶頂させられるとはっきりわかってしまうほどだ。

「淫乱マゾ便器・アスナ、おまんこ全開ガニマタポーズ完了しました！

変態まんこにご命令いただき、誠にありがとうございます！」

「よくできましたー♥　お礼の言葉まで言えるなんて偉いわね～♥
さってと。本当ならここでオナニーでもしてもらうとこだけど……せっかくペニバン持って来たんだし着けてあげるわ。アスナ」
「いいの？　それじゃ、よろしくお願いしちゃおうかな」
リズに促され、アスナは席を立って再び姿見の前へ。自撮り（スクショ）をしていた時のように、腰を軽く落として両脚を広げ、両腕を頭の後ろで組む。
リズは片手にペニバンを携えたまま、アスナの背後からそっと抱きつくと、ペニバンの根元をアスナの下腹部に当てた。
「いい、アスナ。よく見ててね？」
ペニバンの根元にある、逆三角形状の接合部。その上部側にある二つの頂点に一本ずつ接合されているバンドが伸び、アスナの細い腰をくるりと一回りした後、尻の少し上側で一つに結びつく。同様に、下部側にある一つの頂点の先から逆Y字に伸びた二本のバンドは、アスナの太股の内側に貼り付きながら背後方向に伸びていき、尻肉の上を通りながら最終的に先に伸びていたバンドと同じ所で結合された。
「これでよしっと。安定してる？　変にぶらぶらしてたり、苦しい所とかはない？」
「うん。大丈夫だよ、リズ」
「思いっきり腰振れそう？」
「うんうん。これで思う存分、ユウキのケツ穴ぶっ壊せそうだよ♥」
「よしよし♥　いやー、苦労した甲斐あったわ～。アスナが『ペニバン着けたままでもおまんこでセックスできるようにしてほしい』ってリクエストするもんだからさ～」
リズの言うとおり、アスナの下腹部から股の間を抜ける二本のバンドは、アスナの性器や肛門に被らないよう留意されていた。
無茶を聞いてくれた親友に感謝しつつ、アスナは改めて鏡を見る。臍の上まで達する程に雄々しく、猛々しく、そして黒々としたペニスを生やしたアスナが、そこにいた。
「はあっ……♥♥　素敵すぎ……♥♥　オスチンポ様、かっこよすぎだよ……♥」

口からは感嘆の吐息が零れ、股の間からは興奮の愛液が垂れる。思わず右手をペニスに伸ばしたが、親指と人差し指で作ったリング程度ではオリジナルのちんぽ同様にぶっとい肉軸を納めきれず、結局『C』の字を作ってペニスに宛がう。

「――本番の前に、少しだけ練習しておきましょ。アスナ」

後ろから左手を伸ばしたリズが、左手の親指と人差し指で逆『C』の字を作ると、アスナの『C』の字の前に重ねてペニスへと宛がう。二人分の指で互い違いになったリングを作り、太いペニスバンドをその中に通す形になった。

その指リングの場所を固定したまま、アスナはゆっくりと腰を前後に動かす。

「ふっ……♥　ふっ……♥」

「そうそう、上手上手♥　普段、自分がハメられてる時を思い出しながら腰振って～♥」

シリコン製のペニスが二人分の指リングと擦れ合い、きゅっきゅっと微かな音を立てる。これからこのペニスを突っ込む穴の事を考えながら、アスナは腰を振る速度を速める。

ふと、視界の右上の方を見れば、ＨＰバーを思わせるゲージが一本表示されている。アスナの腰振りに合わせて少しずつ溜まっていくそれは、自動射精までに必要な刺激を表していると見て間違いないだろう。

（キリトくんのちんぽ、おっも……♥　ほんと、メスまんこぶち抜いて、自分のＤＮＡ遺すために特化した遺伝子ばらまきオスちんぽっ♥　こんな重たくておっきなのをぶら下げてるオス様の回りに、可愛くて種付けしやすいチョロ雑魚まんこがいっぱいいてよかったぁ♥　こんな極上最強ちんぽ、私の卵子だけで独り占めするなんてもったいなさすぎるもん♥♥）

控え室の床に愛液をびちゃびちゃと撒き散らしながら、盛りの付いた犬か猿のように腰を振る親友を後ろから抱きしめたまま、リズは耳元で囁く。

「一生懸命腰振ってるアスナ、可愛い～♥　ほーら、頑張れ、頑張れ～

♥

……あ、なんだったら……。アスナのペニバン童貞、今ここであたしがこっそり食べちゃおっかな～♥」

「だっ、だ～め～♥　食べないでぇっ♥　誘惑しないでぇっ♥♥」

「え～？　どうして？　古い付き合いの親友をアヘアヘ言わせながらぶらぶらレズエッチしたくない？

それとも……あんたの旦那とこっそりお泊まり温泉旅行に行って、本妻様より先にガキ孕もうとしてる泥棒雌狐を、旦那チンポで強姦して立場わからせてやる方がいい？」

「～～～っ♥♥　したいっ♥　したいよぉっ♥　リズともペニバンセックスしていっぱい鳴かせたいよおっ♥

でも……でも、私のペニバン童貞はっ♥　ユウキにあげるって約束したのっ♥　だからダメ、ダメなんだからぁっ♥♥」

耳元で囁かれる甘やかな誘惑と、リズのデカケツをひっつかんで己の腰を叩きつける妄想にアスナは必死で抗う。

かくかくと腰を振るアスナの滑稽な姿に嗜虐心を刺激されながら、リズはくすくすと笑う。

「ふ～っ♥　ふ～～っ♥」

「も～、チンポつけただけでそんなサカっちゃって……♥

しょうがないわね……。親友の可愛い顔に免じて、今回だけは許してあげる。それじゃあ、腰振りヤメっ！　姿勢戻しっ！」

「っ!!」

リズの命令にアスナのマゾ雌の本性と体が勝手に反応する。二つの『C』がペニバンの根元に接する程に腰を前へと突き出した姿勢で動きを止めると、アスナはペニバンに添えていた片手を後頭部で組み直した。

動きが止まったことで視界の右上にある射精ゲージの蓄積が停止し、ゆっくりと空になっていく。

「よくできました～。ほら、鏡に向かって、盛ってごめんなさいってちゃんと謝りなさい」

「はいっ♥　ちんぽ様に使っていただく以外に何の取り柄もないマゾ

ブタ便女の分際で、オス様のでっけーオチンポ様をつけただけでサカって腰振り止められなくなってごめんなさい♥♥」
「よしよし。それじゃせっかくだから記念写真撮りましょ。あと動画も」
スマホを取り出したリズは、実に間抜けな姿勢で動きを止めたアスナの姿を写真に収め、更に『今からこの旦那さまのチンポ象ったデカチンペニバンを親友のケツ穴に突っ込んで童貞卒業しま～す♥♥』とアスナに宣言させる一部始終を動画に納めたあと、ようやく満足げに頷いた。
「よーし。それじゃあ、みんなの所に行きましょうか。チンポ大好きド変態マゾのアスナちゃん♥」
リズの甘い囁きに、アスナはこくこくと首を縦に振った。
アスナはペニスバンドを装着したまま控え室を出る。
そのまま横でエスコートするリズに尻を揉まれながら、キリト達が待つ寝室へと歩みを進めていく。
一歩、また一歩と歩く度、大ぶりなハードシリコン製のペニスがぶるんと揺れ、再現された重量がアスナの下半身に伝わってくる。ほんの少し前、敗北宣言をするためにユウキと共に歩いた時とは全く違う感触。メスには絶対にない、オスだけが持つ器官を生やした感触。
「さ、アスナ。どうぞ」
主寝室と廊下を区切る薄手のベールをリズがそっとたくし上げる。その招きに応じて、アスナは主寝室へと脚を踏み入れた。
（――――っっっ♥♥♥）
ベールの向こうから漂う香りに、心臓が高鳴る。疑似チンポを装着しているにも拘わらず、子宮が疼く。
部屋に入った途端、むわりと漂う濃密な体液の香り。男女の汗と、唾液の香り。女達が噴き出し、溢れさせた愛液の香り。特に、まだまともに動けないでいるシノン・シリカ・アルゴの三人の香りが濃い。

そしてその三匹同様、ベッドの上でまだ動けないストレアの股間から溢れ出した使用済みの古い精液の香り。

その芳醇にして濃厚な匂いの中心がどこであるかは、すぐにわかった。

部屋の大部分を占拠する多人数セックス用の大型ベッド。その上に仰向けになり、大の字になって無造作に寝転ぶ男――キリトが匂いの中心地と見て間違いないだろう。ただし、アスナの位置からはキリトの顔も、姿も、体も、見ることはできなかった。なにせキリトの全身には、ある種の芸術、または前衛舞踏のように裸の女達が多数まとわりつき、絡みつき、その姿形のほとんどを隠してしまっているからだ。

そんな風に絡みつくメス達の中でも、最もいい扱いを受けているのはロニエ・アラベルだろう。

「――んぶぅっ♥　ふーっ♥♥　ふんっ〃ぶぉ♥♥　～～～んぶっ♥♥」

キリトの脚の間にうつ伏せになり、口と喉をペニスケースとして差し出し、屹立した肉棒を根元までぎっちりと飲み込み、包み込んでいる。

通常のフェラチオであればそのまま顔を上下させて奉仕する所だが、現在のロニエは後頭部を二人がかりで抑え込まれておりそれは叶わない。鼻先がペニスの根元に埋まるほど強く抑え込まれ、呼吸すら満足にできないだろうというのに、ロニエはそこから逃げ出す素振りを見せていない。むしろ、時折生まれる僅かな隙間からオス臭に満ちた空気を貪欲に取り込みながら、自分の股間をぐちゅぐちゅと指で掻き回して自慰行為とキスマーク付けに没頭している。

そんなロニエがチンポから逃げ出せないように左右から抑え込んでいるリーファ、そして、ルクスの二人も、状況としてはロニエと大差なかった。

キリトの左右の脚の上に寝転び、キリトの太股に押しつけてパイズリするシルフ族特有の豊満な胸からは、揃って母乳が溢れ出し、脚とベッドシーツをびちゃびちゃに濡らしている。それと同時に、ロニエ

を抑えつけていない方の手を自分の股座に伸ばして自慰行為にも耽る。時折、キリトの太股と陰部の合間に鼻先を突っ込んでは、強烈なオスの匂いを存分に吸い込んでトリップする様子、完全に調教されきったメスブタのそれだ。

下半身だけでも相当なものだが、上半身に集っているメスは更に多い。

なかでも最も目立つのは、キリトの胴体の上でうつ伏せになっているセブンだろう。メス達の中では最も小柄な体格をアドバンテージに変え、キリトの上に覆い被さったまま、他のメス達より有利な立ち位置でディープキス争奪戦に参加している。

更に、右腕にはイーディス、左腕にはアリス。おそらく先程までのエスコートからそのまま移行したのであろう体勢で、キリトの腕に抱きついている。この二人がセブンほどキスの争奪戦への参加熱量が高くないのは、キリトの指で手ずから雌壷を弄られているからだろう。

彼女らが繰り返すはしたない嬌声と、股座の下にあるシーツに作られたシミの大きさと濃さが、何度イこうが容赦なく手マンされ続けていた事を物語っている。

そんな騎士二人に代わって、セブンとキス争奪を繰り広げているのが姉のレインと、そしてフィリアの二人だ。

開ききった時計の針のようにキリトとは反対方向に寝転びながら、頭だけを突っ込むような体勢で積極的に唇を重ねている。おかげで、キリトの顔の周りは唾液まみれであるし、頬や唇の周辺には多数のキスマークがつけられている有様だ。

言うまでもなく、二人の指先はそれぞれの股間に伸びており、ぐちゅぐちゅと粘ついた水音を奏でていた。

（あれ、ユウキは……？　――あ、いた♥）

ユウキの姿はロニエの下にあった。キリトのチンポにむしゃぶりつくロニエにばかり気を取られてしまい気付けなかっただけで。

肉棒を口内に留めるロニエに覆い被さられる形で、ユウキはキリトの股に顔を突っ込んで倒れ伏していた。おそらく、陰嚢を舐めしゃ

ぶって精子を増産させる役目を負っているのだろう。ただ、あの位置では強烈なオスの陰部の匂いからも、回りを占めるメス達の発情臭からも逃げられない。

アスナがお色直しをしている間中、そんな状況に置かれ続けていたのだとしたら――まともでいられるはずはないだろう。

（ああ……♥　これ、ヤバイやつだ……♥♥　ユウキも、みんなも……どんどんメスに堕ちてくヤツ……♥♥）

オスに身を差し出し、奉仕しながらの自慰行為。あるいはオスの身体に縋りつきながらの指戯。それは繁殖目的という言い訳が立つセックス本番とは異なり純粋な快楽の追求であるが故に、セックスとは異なる方向でメス達に影響を与える。

『このオスは自分を気持ちよくしてくれる』、『このオスの側でなら、安心して気持ちよくなってよい』という認識が意識に擦り込まれ、オスの感触が身体に擦り込まれる。その刷り込みが幾度も幾度も繰り返されることで、メス達はどのオスが自らの支配者（ツガイ）であるかという理解を強めていくのだ。

「それじゃ……ちょっと主役を呼んでくるわね」

そういうとリズはベッドの側に立つと、キリト達に向けて何事かを伝えた。それを合図に、キリトの身体にまとわりついていたメス達が二人を除いて離れていく。

「キリ――」

『キリトくん、おはよう』と声をかけようとして、アスナは思わず口ごもる。その目に映るのはキリトの肉体。まとわりついていたメス達が一旦離れたことで、腕や胴、肩や鎖骨や首筋、脚などの至る所に付けられた無数のキスマークが露わになる。

そして、わざわざもったいつけるような素振りを見せながら、ゆっくりと顔を上げるロニエの姿だった。

「んぶぅぅぅっ……♥♥」

品のなさ過ぎる摩擦音をアスナにまで届かせながら、ロニエはゆっくりと顔を上げてペニスから口を離す。

相変わらず堂々と勃起したペニスは、ロニエの口と喉でたっぷりと

温められ、彼女の唾液でてらてらとコーティングされている。あえて言うまでもないが、ペニス本体はもちろん金玉にいたるまで、メス達が残した無数のキスマークにまみれている。そこにはアスナとユウキが誓約を捧げた際のキスマークに加え、何人ものメスが何度も何度も繰り返しキスを捧げたらしく、ほとんど斑に近い状態で陰部が彩られていた。

ペニスの根元には、へばりつくようにしてぎりぎりまで吸い付いていたロニエによるルージュリングがはっきり残っており、ロニエがチンポケースとしての任務をしっかりとはたした証拠をまざまざと示している。

それと同じ形をしたモノが付いているとはいぇ――否、ついているからこそ、アスナは本能的に理解する。同じ形であっても、その『格』には天と地ほどの開きがあることを。

（キリトくんのチンポ、やっぱりすごいよぉ……♥♥　私の未使用どーてーペニスじゃ絶対に勝てない、ううん、比べるのもおこがましいくらいのメス殺しヤリチンチンポ様♥♥

そ、そうだっ♥　土下座、土下座して謝らなきゃ♥　マゾメスのくせに、格下のくせに、同じ形のちんぽを視界に入れてしまって申し訳ありませんでしたって土下座で謝って、頭を踏んでもらったり、頭の上からおしっこぶっかけてもらったりしなきゃ♥♥

……あれ、でもそしたらペニバンまで土下座させることになっちゃう……？　そんなのダメ！　キリトくんのおちんぽと同じ形のものを土下座させるなんて絶対にダメ！　えっと、だったら……）

ロニエが脇に避けたことで彼女の下にいたユウキの姿が露わになったが、今のアスナにはそれはどうでもよい。アスナがお色直しをしていた間、女性器と感覚をリンク済の口で金玉を舐めしゃぶり続けてイキ続けていたであろうこともどうでもよい。

自分が腰に下げているモノと形が同じでありながら、経験値もレベルも圧倒的に上である本物に敬意を示すべく、アスナは少しばかり悩む。

そして出した結論は、膝立ちだった。

（マゾメスのマゾアピールに付き合わせちゃってごめんね、キリトくんのおちんぽ様♥　全部終わったら、アヘイキするまで謝罪土下座フェラを捧げますので、許してください♥♥）

両膝を立てた姿勢のまま、アスナは両脚を左右に大きく開き、空いた両手を後頭部に回して無防備の構えを取る。必然、下腹部で屹立する黒いシリコンペニスが強調される。

アスナが他の――まだ意識のある――メス達が見ている前で、立派なペニスバンドと対比するにはあまりにも無様な己の姿を晒していると、キリトがベッドから降りてそのままアスナの前までやってきた。

「お色直し、終わったみたいだな。……ほとんど裸みたいだけど」

「うん。だって、こんな立派なモノを付けさせていただいてるんだから、それだけでほとんど十分でしょう？」

無防備なアスナを見下ろしながら、キリトが苦笑する。その表情だけで達しそうになる自分を抑え込みつつ、アスナは絨毯の上に膝を滑らせながら、前方へ少しずつ躙り寄っていく。目標はもちろん、目の前で屹立する本物の肉棒だ。

舌の上に押された刻印がよく見えるよう、口を開きっぱなしにして舌を思い切り伸ばしながら進み続け、ようやく肉棒が射程距離に入る。あとはチンキスからの金玉キス、裏筋顔載せズリからずっぽりディープスロートのチン媚びお口奉仕フルコースを始められる――と、アスナが考えた瞬間だった。

「待て」

オスからの命令に対する服従が染みついている肉体は、理性が言葉の意味を把握するより早く反応した。目に見えない首輪に動きを抑え込まれ、あともう少しという所でお預けをくらったアスナはもじもじと身を捩る。

「また気絶されても困るだろ？」

「そうだけど……ダメ？」

「ダメ」

ぴしゃりと言い放ったキリトの背中から、黒色の微粒子を含んだ空

気の塊を繋げたような細長い何かが鎌首をもたげる。星のない夜空の砕片を溶かし込んだようなその細長い塊、あるいは太い縄のようなものは、するするとベッドの方へと伸びていく。

「キリトくん、それって……？」

「おなじみ「心意の腕（かいな）」……を参考にして作った疑似腕（マジックアーム）みたいなもの」

「そうなんだ……。色がついてるのはキリトくんの趣味？」

「だったらまだ楽だったんですけどもね……。

いや、最初はオリジナルに倣って透明にしてたんだけどさ……心意でコントロールしてるわけじゃないから、透明だと思った以上に操作しづらいんだよこれが」

『アスナもこいつで運んだんだぜ』と言い添えつつ、キリトはマジックアームを動かし、ベッドからユウキの体を絡め取る。

「これをこうして……っと」

天井からするりと伸びた黒い疑似腕がユウキの二の腕から先を包み込み、そのまま吊り上げる。同時に床から伸びた黒い疑似腕がユウキの太股半ばから下をしっかりと包み込み下から支えて浮かせる。そして、四本の疑似腕が左右に動き、ユウキの両手両脚を左右に開かせる。

結果、ユウキは空中に――前後から挟み込んで何かをするには実にちょうどいい高さに、×字を描く形で固定された。四肢の半ばから先は疑似腕に飲み込まれており、ユウキが身じろぎできないよう固定されている。

そんな扱いを受けて、普通なら声の一つも出してしかるべきだろうが、完全にトリップしきっているユウキにそれは不可能というものだ。

（ユウキ……）

これからハメ潰す親友の姿を視界に収める。

ぐったりと脱力しきった体。両の瞳は一切の焦点が合わず、開きっぱなしになった口からは刻印が刻まれた舌が伸びきっており、溢れる唾液を滴り落としている。下腹部の淫紋を目立たせたまま、前の穴からは愛液をぼたぼたと垂れ流し、これからアスナのペニバン童貞を捧

げるケツ穴は不規則にヒクついている。
　ユウキがこうも大人しいのは、アスナが来るまでの間、チンポの超至近距離という特等席に陣取ったまま金玉に奉仕し続けていたからだろう。これから行われる二穴貫通式の主役様に濃いお精子様を沢山作っていただくという大義名分を良いことに、口まんこを使い尽くし、普通では味わえない快楽に溺れ続けていたために違いない。
　本来なら、こうまでお膳立てしていただいた事に感謝を述べると共に、アスナのようにチン媚び口上を捧げるべきだ。オス様への礼を失するのならば、たとえそれが親友であったとしても――罰を受けるべきだろう。
「キリトくん、キリトくん。ちょっと提案したいんだけど……」
「？」
「これ、ユウキに使ってもいい？」
　そう問いかけつつ、アスナはストレージから一つのアイテムをオブジェクト化する。真っ赤な絨毯の上に置かれたのは、プレイに使用する大型の注射器（シリンジ）。アスナの腕ほどの太さと長さを持つシリンジの中には、ハワイアンブルー色をしたローションが充填されていた。
　色もさることながら、それが普通のローションと異なるのは、中身が半固体のシャーベット状になるまで冷やされているという点だ。例えるなら、ファミレスのドリンクバーコーナーにあるフローズンドリンクと同じ状態だ。フローズンローションを納めた筒の部分に霜が付着し、先端の注入口から漏れ出た冷気が周りの空気を白く霞ませる。そんな状態のシリンジを持ちながら、アスナは微笑みを浮かべた。
「……ダメ？」
「なるほど……いいと思うぞ」
　無慈悲に笑い返すキリトに頷きつつ、アスナはシリンジを抱えて立ち上がりユウキのもとへと向かう。
　先程までベッドの上にたむろしていたメス達がショーの再開に気付き、キリトとアスナ、ユウキを取り囲むように思い思いの位置に陣取る。ある者は空いているソファーに。ある者はバーカウンターの

スツールに。ある者は空いたベッドの上にそのまま。もちろん、動けない何人かは相変わらずで。

周囲の視線を浴びながら、アスナはユウキの背後に立つ。正面方向、少し離れたところで眺めているキリトと視線を交わした後、アスナはシリンジを持ち上げて両手で支えた。

両手が塞がったアスナを手伝うため、床から新たに伸びた疑似腕がユウキの尻肉を掴み、左右に割り開く。そうして露わになったアナルに、シリンジの注入口をぐっと押し込む。

「……うっ……」

アナルの入り口から伝わる異物感と、粘膜に触れる筒の冷たさがグロッキー状態のユウキを僅かばかり覚醒させ、かすかな声を上げさせる。それを特に気にすることなく――アスナはシリンジの尾部を押し込み、キンキンに冷え切った中身を容赦なくユウキの尻穴へとぶち込んだ。

「へっ――っっっぎぃぃぃぃぃぃぃぃ!??!?　ぢべっ〴〵、ぢべだぃ〴〵ぃぃ〴〵ぃ〴〵ぃぃぃ〴〵ぃぃっ!??!??　んぎっ、ひぃ!???!?　ぃぃぃ〴〵ぃ〴〵ぃぃぃぃぃ!!!」

括約筋の抵抗をあっさりと突破した大量のフローズンローションが、ユウキの腸内へ止めどなく送り込まれ、内臓を逆流していく。体内の熱が一気に奪われ、全身が冷えていく。

フローズン特有のざらりとした刺激が腸のひだを擦り、粘性によって張り付き、冷感を伴っていたぶる。その攻撃を一気に味わわされたユウキは、背中を半月状にしならせながら悶える。ただ、その四肢を固定する黒い疑似腕はユウキの反射行動程度ではびくともしない。

強制的に冷やされた身体を暖めたくても、自分で自分を抱きしめることすら許されない。ユウキにできることといえば、どうにか動く胴体の筋肉を使って身体を前後に揺らすことぐらいだが、その程度でどうにかなるようなものではない。

すっかり空になったシリンジをぽいっと投げ捨て、アスナは痙攣する親友を背後から抱きしめ、耳元にそっと囁く。

「おはよう、ユウキ。わっ、ひんやりしてて気持ちいい～♥」

「あぎぃっ！　ひぃぃっ！　あしゅっ、あしゅなぁっ!!　たひゅげでえぇっ!!　おぉにぃやぁかぁっ！　じぬぅっ！　じにゅうぅぅっ!!」

「大丈夫、大丈夫。ユウキのケツ穴に入れたローションは、ペニバン（この）に充填してあるお薬と反応すると常温に戻るようにしてあるから。

――まあ、それまではユウキがどんなに頑張っても出せないし、ローションも冷たくてざらざらしたシャーベット状のままなんだけどね」

アスナの言うとおり、ユウキのアナルからシリンジが抜けた後でもローションは一滴もこぼれていない。

体内の冷たさと必死に戦うユウキを抱きしめたまま、アスナは更にもう一つ、ストレージからアイテムをオブジェクト化する。細長い円筒形をしたそれは、いわゆる無針注射器だった。

中に透明な液体が入ったそれを、アスナは親友の目の前で軽く振ってみせる。

「こっちは、おまんこ用のお薬♥　ケットシーの子達から抽出した雑魚まんこ雌フェロモンと、濃縮した山芋の成分を元に作られてるんだけど……これを打たれると、おまんこの内側がかゆくてかゆくてたまらなくなっちゃうんだって。

もちろん、ぶっと～～～いおちんぽでおまんこをゴリゴリ抉ってもらえれば痒みは和らぐし、子宮にぶっ濃い精液をどくどく～っ♥って注いでもらえば完全に治るんだけど……ユウキのおまんこレイプしてやってもいいよっていう優しい人、この辺りにいるのかな～？」

「まぁっ――まぁっへえぇっ！　待ぁっぐぇっ！」

懇願を無視しつつ、アスナは無針注射器の口をユウキの下腹部――淫紋の真上にぴったりと押し当て、尾部をぐっと押し込む。ぷしゅっ、という微かな音が聞こえたのを皮切りに、注射器内部の液体がユウキの肌へと浸透。薬効成分は毛細血管から血流に乗って、獲物である子宮へと襲いかかり――。

「ま――――っっぎぃぃぃぃぃぃぃっっっ!!!

がゆっ!!　かゆぅぃぃっっっ!!　がゆぅぃぃぃぃぃぃっ

!!! があ゛っひいい゛いいぃい゛ぃぃい゛っっっ!!!」

ユウキの身体が、跳ねる。強制供給された冷感と痒みを解消したいのだろうが、四肢をがっちり拘束されている以上それも不可能。雌穴に自分の指を突っ込んで慰めることも、太股をすり合わせて凌ぐことも許されず、僅かに身体を前後させる事で己を保とうとしている。

その必死さはあまりに滑稽であり、同時に、オスにもメスにもサディスティックな情欲を抱かせる。

「がぁっ！ がい゛でぇ゛っ!! がゆ゛い゛っ！ かぎゅぃい゛ひぃい゛い゛っっっ！ お゛っお゛っおまん゛ごぉっ゛！ おがっ、おがじくなる゛ぅう゛ぅう゛ぅう゛うっ!!!」

「だいじょうぶだよ、ユウキ。今からい～っぽい、きもちよくしてあげるから♥」

囁きながら、アスナは改めてユウキの真後ろに立つと、ペニスバンドの先をユウキの肛門にそっと宛がう。

観客に徹していたキリトがユウキの真正面へとやってきて、ペニスの先をユウキの性器にそっと宛がう。

「準備はいいか、アスナ」

「もちろんだよ、キリトくん」

もう済ませた誓いのキスの代わりに舌を出し、そこに刻まれた隷属の印を見せる。

キリトが両腕を伸ばし、間にいるユウキごとアスナを抱き寄せる。ケダモノのように身悶えし、声を上げ続けるユウキを挟んで、ごくありふれた一組の夫婦が見つめ合う。

「――それではー、新郎新婦による何百度目かの共同作業でーす」

ギャラリーに加わっているリズの冷やかしを浴びつつ、二人は何を示し合わせるでもなく自然と呼吸を一体化させ――それぞれの下腹部に屹立するペニスを全く同じタイミングで突き上げ、ユウキの両穴奥深くへと一気に押し込んだ。

「ひあ゛――――あ゛ぁぁ゛あ゛あ゛ぁ゛ああああ゛あぁ゛ぁああっっっ♥♥♥ あ゛ぉお゛おぉ゛っ♥♥ イっ――ぐぅうううっ♥ イぐっイぎゅ――う゛ぅうぅううぅぅうっっっ♥♥♥ あ゛っ

あ〝っ〝あ〝ひぃいぃいぃ〝いぃ〝っ♥♥♥」

どちゅんっ♥　と、肉穴に叩きつける音が響いた刹那。たった一突きで、ユウキは壊れたおもちゃのように身体を震わせながら、何度も何度も深い絶頂へと達した。

がくがくと震える身体。イキ潮をまき散らすメス穴。痒みと冷感がこじ開けた神経経路を駆け上る快楽のオーバードーズ。耐えきれず後方へと仰け反ったユウキの顔は、それはもう幸せな有様。アスナとお揃いの刻印がはっきり見えるほど舌は伸びきっており、瞳はほとんど白目を剥いている。

そんな親友の顔を間近で眺めながら、アスナは恍惚の笑みを浮かべていた。

「ユウキ……キレイだよ……♥　私のペニバン童貞、もらってくれてありがとう♥♥」

根元まで深々と突き込んだペニスバンドから伝わる、ユウキのアナルの感触。もちろん、今のところペニスバンド自体に感触を伝える仕組みはない。それでもその感触がわかるのは、そのフィードバックが剣を振るっている時に柄から伝わるそれに近いためだ。

異物を排除しようとしてはみるものの、ペニスの硬さと太さにあっさりと敗北した結果、接待する役目しか果たせていない腸壁の抵抗の感触。液体と固体の両方の性質を併せ持つことで、潤滑油としての役割を果たしつつ、細かな粒子でアナルを内側から蹂躙するフローズンローションの感触。そして、肉の壁一枚を隔てた向こう側で、ユウキのまんこに我が物顔で居座るオリジナルペニスの感触。アスナはそれら全てを、ペニスバンドを固定するパーツを通して把握できていた。

こんなことができるのも、リズが作ったペニスバンドの精度が良いからに他ならない。いいものを作ってくれた親友に心の中で感謝しつつ、アスナはもう一人の親友のアナルを徹底的にイジメたおすべく腰を振る。

「ほらユウキ、わかるでしょっ!?　ぶっといちんぽが、ユウキのケツ穴抉って！　お尻の中にじゃりじゃりのローション擦り込んでるの！」

「お〝ひぃ〝っ♥♥　ん〝ひぃい〝い〝っっ〝っ♥♥♥　おじりっ、お〝ひり〝っ♥　おかひぐなり〝ゆう〝ううっっ♥♥　お〝っお〝っお〝ほぉおおお〝おぉ〝っっ♥♥」

アスナが腰を引く度に、ペニスバンドにまとわりついた青いローションが露わになり、突き上げと共に再びユウキの腸内に消えていく。

「お〝っ♥お〝っ♥お〝っ♥お〝っ――ひい〝いい〝っっ♥♥」

「ユウキのケツ穴のひだひだにペニバンごりごりこすりつけるの気持ちいいよお～♥

ユウキも気持ちいいでしょ？　お腹の中で、ぶっといチンポ二本に両側からどちゅどちゅされるの気持ちいいもんね？」

「あぎぃっっ♥♥　ぎぼっ〝♥ぎぼぢい〝い〝っっっ♥♥　ぎも〝じい〝い〝がりゃあ〝っっ♥♥　ゆるひれ〝っ、ゆるじでえぇぇぇっ♥♥」

「だーめ。金玉舐めながらオナニーしまくるような子は、ペニバン見ただけで敗北マゾ媚びできるようになるまでは許してあげません」

仰け反ったままアヘ顔を晒し、唾液と鼻水と涙を垂らし続けるユウキの顔を眺めながら、アスナは腰を振り続ける。

キリトもまた、アスナが腰を振るペースに合わせて身体を動かし、アスナがユウキの直腸深くまで貫くのと全く同じタイミングで、ユウキの子宮を容赦なく突き上げていく。当然、下の口からは愛液が飛び散り、不定期な間隔を空けてイキ潮がまき散らされる。

足元はもはやびちゃびちゃで、ユウキの体内にある水分全てが噴き出しているかのようだ。そして、ユウキがそんな状況に陥っても、アスナは一切容赦しない。

「ほーら、お尻の奥のとこ、ぐりぐり～～～っ♥　おまんこで中イキしてる時に子宮を裏から叩かれるの気持ちいいね～♥」

ペニバンを奥まで突き込めば、キリトが動きを合わせてくれるため、結果的に強烈なポルチオ責めになる。それをわかっているが故に、実行する。

「あははっ♥　ユウキのマゾ乳首、つねられるの大好きみたいだね。

隠したって無駄だよ？　だって、乳首をぎゅって虐めたら、ケツ穴がぎゅ～～～って締まって出し入れしにくくなったもん。へーんたい♥」

　ユウキの細い身体を支える必要がないため自由になった両手を使い、ユウキの乳首を容赦なくいたぶる。愛撫とは呼べない、鋭い痛みを伴うその行為によってユウキを絶頂させ、マゾヒストであることを証明する。

「ぶっといちんぽでおまんこバコバコしてもらえてよかったね～♥　かゆいのなくなって、気持ちいいのばっかりになったでしょ？

　その気持ちよさと一緒に……ユウキは私とおんなじで、ちんぽ様には絶対逆らえないクソ雑魚まんこなんだって頭に刻み込め♥　キリトくんのチンポ見たらすぐオナホまんこ差し出せ♥　性処理便女♥　最強雑魚まんこ剣士♥　マゾ奴隷ですって宣言してチン媚びしながら深イキしろ♥♥♥」

　過剰供給される快楽でオーバードーズしているユウキの脳味噌に向けて、マゾ堕ちしろと命令を囁く。もともと洗脳調教済の意識と無意識に、何重にも渡って被虐嗜好・隷属嗜好のヴェールを重ね掛けしていく。

　そうしてユウキを嬲り続け、何度も何度も絶頂の中へと叩き込み続けていると――視界の右上の方にある、射精タイミングを示すゲージが、かなりの量まで溜まっているのが見えた。

（あっ……♥　そろそろ、なんだ……♥　それじゃあ……♥）

　一瞬のアイコンタクトで、キリトと意思疎通を図ったアスナは、抽送速度を一気に上げた。正確に言うなら、射精のために速度を上げたキリトに合わせるために、自身の速度を上げた。

「お〝あ〝っ♥♥　あ〝っ♥あ〝っひ♥ひぃい〝いぃ〝い♥♥♥」

「わかるよね、ユウキ♥　キリトくん、ユウキのまんこに思いっきり種付けしてやりたいんだって♥　特濃ザーメンでユウキの雑魚マゾ卵子輪姦してくれるんだって♥♥♥」

「お〝っお〝っおお〝ぉ〝っおっほお〝おぉおぉ〝っ♥♥　いぃ〝ひいぃ〝いっっ〝っっ♥♥　ぎぼぢぃ〝っ♥♥　ぎぼじぃいいっ♥♥♥

いぐっぐ、まりやっ、まぐだイぐっ、イぐぅうううっ♥♥♥」
「あーっ♥　ユウキ、子宮口どちゅどちゅされてまた潮吹きしてる♥　いっぱいイけてえらいね～♥　私達ももうすぐイくから、一緒に気持ちよくなろうねっ♥♥
イクよっ！　イクよっユウキぃっ!!」
膣と直腸。前と後ろ。その両方から、その境目にある薄い肉の壁をこそげ取るような激しさで只管に腰を前後させ、太く長いペニスを叩きつける。
何十回目の絶頂を迎え、愛液を撒き散らし続けるユウキ。そのユウキを前後から貪り、貫き、犯す二人は、限界点となる最後の一突きでユウキの穴の奥深くへペニスを押し込む。
「っ……！」
前と後ろから限界の吐息が溢れた刹那。ユウキの身体が潰れてしまうのではないかと思えるほど強く抱きしめあい、二人はペニス／ペニスバンドから、大量の精液／薬液を一気に解き放った。
「――イぐ――――っんぐぎゅううぅぐうぅうぐうぅうぐうぅうぅぐうぅうぅぐうぅうぅ

全てが暴力的な快感の奔流となって、ユウキの神経中枢を殴りつける。

「おぉーっ、おぉっおぉっおぉっほぉおぉぉおおおっ♥♥　おぉ――ひいいっ♥♥　っぎぃいいいいいいっ♥♥♥

おっ、ぐうっ――おぉっ、おひりぃいいぃいいいいっっ♥♥」

そこに加わる、アナルからの悦楽。アスナが深々と突き込んだペニスバンドは、オリジナル同様に大量の薬液を吐き出し、ユウキの腸内に流し込んでいく。

先に注入されていたフローズンローションに薬液が触れた瞬間、連鎖的な化学反応が発生。ローションの温度を常温に戻すと同時に、氷の粒達を一気に溶かしていく。しかも、解氷の瞬間、粒は内側から弾けるように仕込まれている。例えるなら、ただの水が突然ジェットバスに変わったようなものだ。

「んぐぅっ――ぎぃいいぃいいいいっっっ♥♥　あぐぴいっ、あぐぎぃいいっ♥♥♥　おぉっおぉっおぉっおぉおおおおおおっ♥♥」

弾ける空気の珠に腹の内側を容赦なく殴りつけられ、子宮内部を重く熱い精液に灼かれる。納まりきらなくなった空気がアナルとペニスバンドの間にわずかな隙間をこじ開けながら外へ漏れ出ていく。

あらゆる感覚がユウキを苛み、同時に喜ばせ、無様な程にエロティックな悲鳴を上げさせ続ける。その刺激が雌穴を痙攣させ、ペニスから／ペニスバンドから更なる射精を促す。

――そうして、長々と続いた射精がようやく終わる頃。

「――――あぐっ……♥♥　へひゅっ……♥♥」

そこには、ありとあらゆる力を失い、穴という穴から体液を垂れ流したまま失神しているユウキの姿があり、いつものようにメスの子宮に精液を詰め込み終えたキリトの姿があり、そして、親友のケツ穴で童貞を卒業したばかりのアスナの姿があった。

「――――――――あぐはあっ……♥♥　はひゅーっ、はひゅーっ……♥♥♥」

視界に映るのは、白目を剥いて失神した親友の顔。余りの快楽に脳

味噌をショートさせ、ひゅーっ、ひゅーっと浅い息を繰り返すだけの生オナホとした親友の姿に、本来オスしか味わえない征服欲の充足を感じる。

「アスナ。動けるか？」

忘我の中で名前を呼ばれて、アスナはようやく現実感を取り戻す。

「キリトくん……♥」

「動けるか？　ユウキは俺が支えておくから、そっちは一旦抜こうか」

「う、うん……」

（擬似的な）射精に慣れていないアスナとは違ってしっかりとしているキリトに頷きを返し、アスナはゆっくりと腰を引いた。

ぐぽっ――という重く粘ついた音を立てながら、ユウキのアナルからペニスバンドを引き抜かれる。途端、栓となるペニスを失った尻穴から、内側に残っていた大量のローションが一気に噴き出していく。

「――――――っっっ」

構造強度の限界を越えて決壊したダムの様に吐き出される青い液体に連動し、ユウキの身体がびくびくと痙攣する。喉から溢れたのは、声というよりも意味のない音。

そうして、残っていたローションがユウキの体内から吐き出されきったあと。キリトはいつものようにペニスを引き抜いた。

「ふうっ……」

大量のキスマーク、ユウキの雌汁、自分が放った精液の残滓に彩られた肉棒が姿を現す。肛門同様に栓を失ったユウキの雌穴から、射精されたばかりの精液が溢れ出てくる。ただ、完全液状化したローションと違い、多量の精子を含んだ精液はどっしりと重く、ぼたり、ぼたりと糸を引きながら塊になって落ちてくる。

そのままキリトは疑似腕を動かし、ユウキの身体を絨毯の上へと置いた。

口からは涎を、雌穴からは白濁した精液と愛液を、肛門からは青いローションを垂れ流しながら、仰向けに倒れたユウキ。白目をむいたまま、びくん、びくんと不規則に身体を痙攣させる姿はまさに無様の極み。そんな状態にある親友をアスナが見下ろしていると、不意にキ

リトが口を開いた。
「童貞卒業おつかれ、アスナ。それじゃあ、仕上げといこうか」
「仕上げって――っ!?」
キリトがコンソールウィンドウを操作してアスナの放尿システムに割り込んだ瞬間、強烈な放尿衝動がアスナを襲う。膀胱は一瞬で限界を訴え、今すぐトイレに駆け込めと叫び出す。
「最後はちゃんとマーキングしてやらないとな。だろ?」
マーキングの意味が分からないほど、アスナは無知でも初心でもない。犬のように電柱や看板などにマーキングした事もあるし、逆に自分の顔や身体に直接マーキングしてもらったことも一度や二度ではない。
(でも、だからって……こんな状態のユウキに……!)
ほんの僅かに残った理性と親友への気遣いが、ギリギリの所でアスナを押し止める。いっそこれが命令なら喜々として従ってしまえるのだが、キリトの口調も様子もあくまで優しい。
「無理だったらしなくていいぞ。ただし――そうなったら今日はハメてやらないけどな」
「っ!?」
人としての理性。親友への気遣い。脳味噌がひねり出したまともで正常な理屈達を、子宮から昇るメスの衝動が粉微塵に打ち砕く。そもそも、雄々しくいきり立つチンポと何かを比較しようとすること自体がおこがましい。
アスナはユウキの身体をまたぐ形で両脚を広げて少し前へと進み、狙いを付けやすいように腰を軽く落とした。
「――ごめんね、ユウキ。こうしないと、キリトくんのチンポにおまんこご奉仕させてもらえないの。
ユウキには本当に悪いんだけど……私ね、ユウキよりチンポの方が大事なの♥」
腰を軽く前へ突き出し、堪えていた尿意を解放する。
直後、アスナの股座から黄金色の小水が噴き出す。綺麗な放物線を描いて飛ぶ小水は、ユウキの顔面に勢いよく降りかかる。人形のよう

に整いつつどこか幼さの残るユウキの顔の上でアスナの小便が弾け、周囲に飛び散っていく。伸びっぱなしの舌の上の刻印、上気した肌、濡れ羽色の長髪が、容赦なくマーキングされていく。

そうして顔を穢しきった後で軽く腰を引き、今度はユウキの身体にマーキングを施していく。ギャラリーが撮影しているであろう事を考え、両手を顔の横でピースしてポーズを取りながら、膀胱の中身を一滴残らず排出していく。

やがて、何十枚目かのスクリーンショットが撮影されたあと。アスナの膀胱はようやくすっからかんになった。足元に転がっている穢されきった親友を一瞥もせず、アスナは礼の言葉を述べる。

「――この度は、ユウキのケツ穴でペニバン童貞卒業させていただいたばかりか、こうしてマーキングまでさせていただき、誠にありがとうございました。

いっぱい、いっぱい頑張ったので……ご褒美として、キリトくんのぶっとい本物おちんぽ様を、私の雑魚マゾおまんこでご奉仕させてください……♥」

精液の白、ローションの青、小水の黄色にまみれてぐちゃぐちゃになったユウキの身体をまたいだ姿勢とダブルピースのポーズを崩さないまま、アスナはペロリと舌を伸ばして自らの刻印を見せ、服従の意を表す。

チンポの為なら親友を差し出し、穢すこともいとわない最低のまんこ豚に堕ちていく喜びに、アスナの全身が震えた。

「おっ〝♥　……お〝っ――くうぅう〝っっ♥♥　いっぐ、イ〝ぐぅうぅうぅうっ♥♥」

立ちバックの体勢で後ろからポルチオを責められ、アスナが悶絶する。親友の尊厳を踏みにじって得たチンポによって、交尾欲求に引っ張られて降りてきた子宮を容赦なく突き上げられたアスナは、水妖精（ウンディーネ）の名に恥じない見事な潮を吹く。

その飛び散った潮がかかる先には、アスナがチンポの為に売って穢したユウキの肢体がある。倒れた親友を見下ろして興奮のスパイスにする余裕があったのは最初の一突きをぶち込まれるまでで、チンポに夢中にさせられた今のアスナにはそんな余裕はもう残っていない。

（キリトくんのチンポ気持ちいいっ、ぶっといデカチンで虐められるの気持ちいいっ♥♥♥　お腹なでなでされながら、子宮、ごんっ♥ごんっ♥ってゆっくり殴られるの気持ちいいっ♥♥）

淫紋がある下腹部を掌で撫で擦られながらの、スローペースな突き上げピストン。丁寧にアスナを気持ちよくさせつつ、同時にアスナのマゾ性癖を伸ばしていく優しいセックス。キリトのもう片方の手は、時にアスナの口に指を突っ込んで刻印の力で腰砕けにさせ、時にアスナの胸を揉みしだいて絶頂させ、そうして時にアスナの両腕ごと身体を抱きしめて愛情を擦り込んでいく。

そうして、アスナの一番奥まで肉棒をぶちこみ、しっかりとホールドした状態で、キリトはアスナの耳元に囁く。

「そろそろいいかな……。アスナ、実はもう一人、アスナに犯してもらいたいヤツがいるんだ」

「もう、一人……？」

「ああ。準備もできてるみたいだし、ハメたまま一緒に行こうか」

両腕で持ち上げ、ペニスで突き上げながら、倒れ伏すユウキを避けてキリトは進む。進む度にペニスバンドを揺らし、何度も喘ぎ声を上げさせられながら、アスナはベッドの前へと連れてこられた。

ベッドの上にはリズとフィリアがぺたりと座っており、その間に上からシーツを被せられた何かが置かれている。盛り上がり具合や大きさから見るに、ちょうど人間一人分くらいだろう。

キリトが合図を送ると、リズとフィリアがシーツをめくって脇にどけた。

「キリトくん、これって……」

「可愛いだろ？　ラブドールの《アスナ》って言うんだ」

白いクッションを枕に、全裸のまま仰向けに寝そべっている淡いミルクティ色の髪の少女。それはアスナ本人を元にしたラブドール。

形の良い胸、下腹部の淫紋、整った全身のスタイルはまさにアスナの生き写し。あえてそうしたのであろう、水晶めいた瞳の鈍い輝きと、シリコンを思わせる独特の肌の質感がなければ、アスナ本人が寝ていると勘違いされるかもしれない。

「もちろん、こっちも」

キリトがそういうと、ラブドールの左右に控えていたリズとフィリアがラブドールの脚を左右に開かせる。ちょうどアスナが正常位でチンポ待ちをしている時と同様、がばりとM字に開かれた股の間に見えるのは、きゅっと窄まった小さなアナルと、一本の筋にしか見えないほどにぴっちりと閉じた未経験の雌穴だった。

「見ての通りこいつはアスナをモデルにしてるけど、『穴』はまだ誰も使ってないんだ。せっかくだから、『はじめて』はアスナ自身にやってもらおうと思ってさ」

「私が、このこのはじめてを……？」

「ああ。それに……」

アスナの耳元に口を近づけ、キリトは勿体つけながら囁く。

「このラブドールは、身体の内側の感覚をアスナと共有するように作ってあるんだ。

自分で自分の処女を奪う感覚……味わってみたくないか？」

「……っ♥♥」

無意識に生唾を飲み込んだアスナの喉がゴクリと音を鳴らす。

夫のチンポを模した造り物のチンポを、自分のマンコを模した造り物のマンコにぶち込む。ロストバージンする感覚をマンコで味わいながら、させる感触をペニスバンド越しに感じる。それはきっととても気持ちよく、とても無様で滑稽で、そして甘美なものになるだろう。

その倒錯した性的遊戯に、アスナはクラクラする程の興奮と劣情を覚えてしまう。

「……良いの？　この《アスナ》っていうおんなのこ、すっごくチンポに弱そうな雑魚メス顔してるよ……？

キリトくんのおっきい極上チンポでハメ殺して、いつでも呼び出してパコれるオナホコレクションに加えてあげなくていいの？」

「いいよ。俺にはもう、アスナっていう可愛いオナホ嫁がいるからさ。アスナがアスナを犯すところ、こうして繋がったまま見届けてやるよ」

アスナの首筋に優しい口付けが触れ、下腹部を男の掌が撫でる。自らの所有者であるオス様にチンポを突っ込まれながらの愛撫に、アスナはあっさり達しそうになる。

「もう……♥　じゃあ、一緒にこの子（わたし）の事、犯しちゃおう♥」

キリトに、そしてキリトの肉棒に押し上げられるようにして、アスナはベッドの上へと登ると、そのまま四つん這いの姿勢で進み、ラブドール《アスナ》の上へと覆い被さった。

精巧に作られた《アスナ》の顔は、正にアスナ本人の鏡映し。無表情な顔に埋め込まれた瞬きしない瞳に、好色と興奮を浮かべたアスナの顔が映り込む。

「はじめまして、《アスナ》さん♥　私、アスナっていうの」

本当の人間を相手にする時のように優しく微笑み、言葉をかける。もちろん、ラブドールの《アスナ》がそれに応えることはない。

「私の下についてるコレ、見える？　おっきいでしょー？　これね、今私のおまんこに入ってるチンポと全く同じ大きさのペニスバンドなの。

今からこれで、あなたの未使用新品おまんこをレイプしてあげる♥　でも、まずは……」

アスナは片手を伸ばし、ラブドールの顎を軽く引いて唇の間を開かせる。口内は丁寧に作り込まれており、並んだ白い歯と薄ピンク色の舌がある。違いがあるとすれば、ラブドールの舌には刻印がないということだけだ。

その隙間に舌をねじ込むようにしながら、アスナはラブドールの《アスナ》とキスを交わした。

（……っっ♥♥　これ、ほんとにっ、感覚が伝わってくる……♥♥　自分で自分とキスしちゃってる♥♥）

舌に刻まれた刻印のおかげで、舌への刺激はクリトリスへの刺激に変換される。キスをしているのも自分、されているのも自分という奇

妙な感覚と、クリトリスへの刺激、膣内を埋めるチンポの感触に、アスナは腰をカクつかせながらまた達する。

力が抜けそうな腰をキリトに支えてもらいながら、アスナは絶頂の波が静まるのを待ってゆっくりと顔を起こした。

「……ふふっ♥　《アスナ》さんのファーストキス、もらっちゃった……♥　それじゃあ、次は……」

アスナは尻を突き上げる姿勢を取ってペニスバンドの位置を調整しつつ、《アスナ》の首に腕を回して抱きつく。無表情な《アスナ》の耳元に口を近づけ、これから自分が上げるであろう喘ぎ声が無表情な彼女の耳によく聞こえるように。

アスナの疑似チンポと、《アスナ》の疑似マンコの位置が上手く重なるように調整するのはキリトのチンポの役目だ。アスナのマンコに深々と突き刺したまま、些細な身動ぎでアスナのペニスバンドの位置をアスナに伝え、移動すべき場所を設定する。

そして、黒色に染まったハードシリコンの亀頭が、肌色のソフトシリコンで作られた一本筋にぴたりと押し当てられた。

「それじゃあ……いくよ♥」

アスナの言葉を合図に、キリトが体重を軽く前にかける。アスナはそれに抵抗しないため、その力に押されてアスナの腰が前に出る。そうして押し当てられた黒い亀頭が、狭い一本筋を少しずつ押し開けていく。

「んっ……♥♥　んひゅうっっ♥♥　あっ、やあぁんっ♥♥」

（――これっ♥　思ってた以上にっ、ゾクゾクくるぅっ♥　長くてぶっとい旦那さまチンポ、おまんこの奥までギチギチに突っ込まれてるのに♥♥　同じチンポにマンコの入り口こじ開けられてるのがわかるっ♥　わかっちゃううっ♥♥）

元々アスナが感じている喜悦に、《アスナ》の感覚がフィードバックされる。普通のセックスでは絶対に味わえない快楽と感覚の二重奏。

「ふっ♥ふうっ♥♥　はひっ♥　ちっ、ちんぽ♥　おっきなちんぽきてるぅ♥♥　すごい、すごいいっ♥♥

はーっ、はーっ♥♥　処女まんこ、抵抗、するなあっ♥♥　おとな

しくぶちぬかれてっ♥　オナホまんこになってえっ♥♥」
（ちんぽ慣れしてないおまんこ、こんなにきつくて、挿れにくいんだ……♥　でも、抵抗したって無駄なのに♥♥　オス様のちんぽ突っ込まれたら、メスなんて終わるの確定なんだから、諦めてまんこ差し出せっ♥♥）
　ペニスバンド越しに伝わる抵抗感と、自分の身体を通して伝わってくる感触。極太巨根とのセックスによって開発された極上の名器で、処女喪失の感覚を再演するという矛盾した状況が興奮と快楽を産み、脳髄がばちばちと弾ける。
　そうしてペニスバンドが半分ほどラブドールの中に埋まった所で、キリトはおもむろに動きを止めた。そうして一呼吸置き、アスナと《アスナ》の身体がずれないようにがっちりと固定すると――ぐっと力強く腰を押し込み、処女膜を容赦なく貫き、そのまま子宮口へとペニスバンドを到達させた。
「――んお〜っほお〜ぉおほお〜おっ♥♥♥」
　処女膜を貫かれる感覚に、弱点のポルチオを殴りつけられる感覚、同一のペニスが、同一の場所に、同時に突き刺さるというリアルでは絶対に味わえない感覚に襲われ、アスナは再び絶頂した。開発されきった処女の身で、潮を噴きながらイッた。
　そうしてアスナは《アスナ》に深々とペニスを突き刺し、腰と腰を密着させたまま動けなくなる。その耳元にキリトが囁く。
「アスナは……動けなさそうだな」
「へひゅ、へひゅっ……♥」
「了解。じゃあ、代わりに動いてやるから、そのままでいろよ。ペニバン抜けたらそこで終わりだからな〜」
　キリトはコンソールウィンドウを操作し、ペニスバンドを『交互追従モード』に設定。そうして準備を整えると腰を大きく引いた。亀頭だけがアスナの中に埋まり、愛液に塗れた肉軸が露わになる。
（ちっ、チンポ抜けちゃう♥♥　……あれ、あれっ？　チンポ抜けてるのに、チンポ入ってる♥♥　ポルチオぐりぐり〜っていじめてくれてる……♥♥　そっか、《アスナ》と感覚共有してるか――）

アスナがその事実に気付いたのを見計らったかのように、キリトが腰を思い切り叩きつけ、露出していたペニスをもう一度アスナの中へと深々と突き刺した。

そしてそれと全く同じタイミングで、《アスナ》の膣内に埋まっていたペニスバンドの軸部分が一気に後退し、亀頭部分で膣内を擦り上げる。

「りゃ――あ゛――っ゛ひあ゛ぁあぁおぉ゛おおお゛あ゛っっ♥♥あ゛っあ゛っあ゛ぁあ゛っあああ゛ぁぁ゛あぁ〜〜〜っっっ♥♥♥」

大量の快楽信号が脳髄を襲い、アスナの視界がバチバチと白く弾ける。

肉棒を突き込まれながら、引き抜かれる。子宮口を叩かれながら、カリ首で膣口を広げられる。《アスナ》の処女を喪失させた時と同様、リアルでは同時に味わうことのできない矛盾した快楽に、アスナは簡単に潮を噴かされ、絶頂へと登り詰めさせられる。

「あ゛っ♥♥あ゛っひい゛ぃいっ♥♥　お゛っお゛おぉぉっおお゛ほおぉお゛お゛ｎぉおおっ♥♥♥

いっぐイぐいぐいぎゅうぅうぅうぅ゛うう゛ぅうう゛っっっ♥♥」

ユウキが味わった二穴責めとも異なる未体験の快楽に、アスナの身体が痙攣する。しかしその前にはラブドールの《アスナ》が、後ろにはキリトの身体があるためどこにも逃げ場は無い。

（おほっ♥　おかしく、おかしくなる゛っ♥♥　ちんぽ入ってきてるのに抜けてっ♥♥　奥の方ごりごりされてるのに、入り口もぐりぐりされてるっ♥♥　おまんこ、全部っ♥　全箇所っ♥　ずっと、ず〜〜〜っとちんぽにいじめられてる゛ぅっ♥♥♥

だめ、やだ、またイく、イっぢゃうううううッ♥♥♥）

普段のセックスですら簡単に、そして何度もイかされているアスナが、二重になった肉棒抽送に耐えられるはずもない。キリトは別に普段通りに腰を動かしているだけなのに、アスナはひたすらに絶頂し、獣のような声を上げながらイキ潮を撒き散らし、ベッドシーツと《アスナ》を濡らしていく。

そうして、先のユウキのように幾度も幾度も絶頂の中に叩き込ま

れ、もはや前後不覚に陥った頃、

キリトは射精に向けて、腰を振る速度を一気に加速させた。ピストンの間隔が狭まった事で、《アスナ》の中を犯すペニスバンドの伸縮速度も加速する。当然。そのフィードバックを受け取るのはアスナ本人だ。

「お゛っお゛っお゛っお゛っお゛ほおぉおっっ♥♥　じにゅううっ♥♥　いぎじにゅう゛ぅう゛うう♥♥　たひゅげっ、たひゅげでええええっ♥♥♥」

（くるっ、くるうっ♥♥　お射精くるっ♥　たねつけほんきしゃせーされちゃううううっ♥♥♥）

アスナの懇願を無視し、キリトは最後の一突きを叩き込み――貯め込んだ精液を、アスナの中に吐き出した。そして、数秒遅れて、ペニスバンドも同様に《アスナ》の中へ射精した。

「イ゛――――っっっぎゅ゛ぅううう゛ううう゛ぅうぅ゛うぅううぅっ♥♥

いぐいぐいぐいっぐぅう゛うぅう゛ぅうう♥♥　お゛っお゛ほおぉおおおおぉおっ♥♥♥　ぢんぽいぐっ♥♥　いぐっ、イっぐうぅうぅうぅう♥♥♥♥　あ゛っあ゛あぁああやああぁあああっっ♥♥♥」

どくっ、どくっ、どくっ、どくっ――と。ペニス下部で太く広がった輸精管を通し、大量の精虫を含んだ精液がアスナの子宮へ叩きつけられていく。ぎっちりと押し当てられた亀頭は子宮口を逃がさず、オスの遺伝子情報をメスの肉体へ叩き込んでいく。

その、ただでさえアスナを狂わす快楽が、二重になって襲いかかってくるのだ。雑魚マゾメスのアスナが、それに耐えきれるはずもない。

「――――あ゛っ、あ゛、あ゛ひぁああ゛～～～～～～っっ♥♥♥　いぐイっぐいっぎゅうぅぅうぅぅうぅうぅっっ♥♥♥

お゛っ゛お゛っ゛お゛っ゛お゛っ゛お゛ひいぃいい゛ぃい゛いっ♥♥」

絶頂。痙攣。潮吹き。失神。快楽による強制覚醒。絶頂。痙攣。

潮吹き。失神。尻を叩かれて強制覚醒。
衆人環視の中、暴力的なまでの快楽のループを幾度も、幾度も味わわされる。
無表情な《アスナ》の真横で、セックス中にしか見せないマゾメスのアヘ顔を晒しながら、アスナはついに失神から帰ってこれなくなるまでの間、二重のペニスによる長く重たい射精の快楽にいつまでも、いつまでも溺れ続けていた。

14―12．（レイン・セブン・ストレア・フィリア・全員）

端的に言えば、そこには退廃的な光景があった。

「――そっ〝、そろそろ限界なんじゃないかしら？　あ〝っ、アリスぅ……？」

括約筋に全力を込めながら、イーディスが言う。

「イーディスどにょ、こそぉ……。がっ、我慢しなくて、よいのですよ……！」

体中を小刻みに震わせながら、アリスが言う。

「お二人とも頑張っていてすごいです！　じゃあ、もう一本ずつ追加しちゃいますね！」

「――っ!?」

ロニエの敬意半分・悪意半分の言葉にアリスとイーディスが揃って身を震わせる。

遡ること数分前。大量の精液を詰め込んだシリンジをそれぞれのアナルに突き刺され、中身を一滴残らずぶち込まれた二人は、整合騎士のプライドを懸けて『どちらがより長く逆流せずに我慢できるか』を競っていた。

上体をうつ伏せにし、両膝を伸ばして尻を上に突き出した姿勢のまま、横並びになって必死に耐えるアリスとイーディス。既にパンパンに貯め込まれた精液を排出したいという本能の叫びに、羞恥心とプライドを燃料にしながら耐える二人。

その二人の努力を踏みにじるように、ロニエは大きなシリンジの先を整合騎士達のアナルに突き込むと、中に詰まった白濁色の液体を整合騎士達の腸内へと容赦なく押し込んでいく。もちろん普段のロニエならばそんな事はできないだろうが、今の彼女には先輩から大義名分を与えられていた。であれば、何も遠慮することはない。

「ま〝っ、待ちな〝さいっ、ロニ〝エっ！　これ以上は――っぎぃいぃ

いいぃっ♥♥♥」

「そうっ、そうよっ〝！　あ〟っ、アリスの言うとおり！　これ以上はむ――ィイイ〝イ〝ひぃいぃいっっ♥♥」

ただでさえ限界だった所に更に追加の薬剤をぶち込まれ、アリスとイーディスは悲鳴を上げて悶絶する。それでも姿勢を崩さないのは、騎士のプライドか、あるいは姿勢を崩したら括約筋の力が抜けて決壊してしまうためか。おそらく後者だろう。

そんな光景の横では、リーファが未来の義姉（アスナ）を模したラブドールを犯していた。

そのラブドールは、先ほどアスナが自身を犯す時に使われた物と同じ物であるが、その姿形は幾分幼い。

それもそのはず、先ほどまでラブドールのベースとして使われていたのは現在のアスナのアバター。今、リーファに犯されているのは、《ＳＡＯ》に囚われた当初のアスナ――まだ中学生（プログレッシブ）だった頃のアスナを模したアバターであるからだ。

「アスナさんってガキの頃からほんとスケベな身体してますよね……♥　この身体でお兄ちゃんを誘惑したんだ……。

なんかズルいって思いません？　リズさん」

「リーファがそれを言うのはどうかと思うけど……ま、同感ね」

寝バックの体位を取らされたアスナのラブドールに上からのしかかり、兄の逸物を模したペニスバンドを突き込んで犯すリーファ。ただでさえでかいリーファのバストが、アスナを模したラブドールに押し当てられてぐにゅりと潰れる。その倒錯的な光景を、リズは横からゆったりと鑑賞していた。

「ね、リーファ知ってる？　アスナね、《ＳＡＯ》の低階層を攻略してる頃、キリトと混浴したんですって」

「混浴ですか？　しかも低階層って事は……お兄ちゃんと結婚するずっと前って事ですよね？」

「そうそう。しかも、そこで初めてキリトのチンポを見て……キリトのチンポに一目惚れしちゃったんだって♥」

「お兄ちゃんのチンポに？」

「そう、チンポに♥」
「うっわ、最低～♥♥　お兄ちゃんに一目惚れするより先に、お兄ちゃんのチンポに一目惚れしちゃうなんて……デカチンでまんこハメ潰してもらうことしか考えてないんですね、アスナさ～ん♥」
　右腕をラブドールの首に回しつつ、リーファはラブドールの頬に挑発的に口づける。キスされた側であるラブドールは、これまでの淡い微笑みを湛えたラブドール然とした表情から、散々セックスに明け暮れた後の、恍惚と脱力がミックスされた表情へとフェイスパターンが変更されており、それがより一層興奮を掻き立てる。
「しかもよリーファ。そのあと、アスナったらキリトと同じ天幕になったのを良いことに、そのまま朝までぶっ通しでヤりまくってたんだって～♥
　『同じ天幕に寝る男女は身体を重ねるのが普通』って、ダークエルフ達にウソまでついて」
「え～っ？　初めてセックスしたのはお兄ちゃんからプロポーズされる直前って言ってませんでしたっけ、アスナさん？」
　リーファはラブドールの耳元に囁きかけつつ、ペニスバンドの根元をラブドールの尻に密着させ、先端を内部奥深くまでぐりぐりと押し当てる。
「あんなの、体面を保つ為の嘘に決まってんでしょ～。うちの店なんて、無料ラブホ代わりに何回使われたんだか……。
　そのうえ、アスナったらあたしの事を『タダでヤれるオナホ3号だよ』ってキリトに差し出したんだから」
「うっわ、えっぐう。……あれ、リズさんが3号って事は、1号と2号がいるってことですよね？」
「2号はあっちで気絶してるシリカで……1号はもちろん、ご本人（このこ）に決まってるでしょ～？」
　ラブドール（アスナ）の額に、リズがデコピンをかます。
　リーファは黒塗りのディルドをより一層容赦なく前後させながら、ラブドール（アスナ）の頬を指で挟むようにして掴む。撮影しているリズの方へ顔を向けさせると、アスナの声色を真似て『ちんぽの事しか考えて

ない、最低まんこでごめんなさ〜い♥』と喋り、アスナの無様な姿を記録させた。

リーファによる、ラブドール陵辱ショー。

近くのバーカウンターでグラスを傾けていたレインとフィリアもまた、その観客だった。

「リズっちはああ言ってるけど。実際の所はどうなんだろうね？」

「……案外、全部本当だったりするんじゃない？　あの様子からして」

くすくすと笑いながらカクテルを嗜む二人の視線の先にあるのは、絨毯の上に転がされたアスナとユウキの痴態だ。

「んぉ゛っ゛♥♥　お゛ほっ♥♥　ほおぉぉお゛おお゛お゛っっ♥♥」

「ふぎゅう゛ぅう゛うっ♥♥　ひぎゅっ♥　ひっぎゅううぅう゛う゛ぅぅう゛ううっ♥♥♥」

潰れたカエルのような仰向け正常位で床に転がされたアスナと、その上に覆い被さったユウキが揃って嬌声を上げる。調教用のベルトでお互いの手首と足首を繋がれ、お揃いの目隠しを巻かれて視界を奪われた二人が、開きっぱなしになった口から同じ刻印を刻まれた舌を突き出す。

今リーファが犯しているラブドールは、その感触をアスナの身体にダイレクトに伝えるようになっている。そしてユウキの膣穴に根元まで突き刺さったバイブは、リーファが使っているペニスバンドと同じ形状――とどのつまりキリトのそれと同じ太さ・長さをしており、ペニスバンドの動きを自動で再現するようになっている。

つまり、あのペニスバンドであのラブドールを犯せば、アスナとユウキを同時にレイプしていることになる。

「い゛っ、いくっ、イクイクイッ゛――イ゛っぐぅう゛う゛ぅううっっ♥♥」

「あっあ゛あ゛ぁああっっ♥♥　あ゛ひぃぃい゛い゛ぃい゛い゛いぃっっっっ♥♥♥」

床に転がされてからこの方、誰かしらのおもちゃにされ続けてきたアスナとユウキが揃って絶頂する。アスナは背を仰け反らせ、ユウキ

は背中を丸めるようにして、揃ってびちゃびちゃと潮を噴く様はいい見世物となっていた。

目隠しをされた二人は、周囲の視線に気付くこともないままがくがくと身体を痙攣させ絶頂する。暫しの後、彼女らの潮吹きと痙攣がようやく落ち着いた頃。

その見世物に、一組の男女が乱入した。

「――ほら、ストレア。こっちだ」

「ここ……？」

男の方は誰であるか今更言うまでもないだろう。そのキリトに導かれるまま、既にへろへろといった様子のストレアがアスナ達に近づいていく。そしてこちらも今更言うまでもないことだが、どちらも全裸である。

まあ、女性陣の視線のほとんどは、ストレアの瑞々しさと豊満さが入り交じった禁忌的な肢体よりも、既に何人ものメスを犯したというのに一向に萎える気配を見せないキリトのペニスに集中していたが。

席を外していた主役（チンポ）が戻ってきたことで、観客達の雌が餓えた獣のそれに、あるいは自ら生け贄となって神に身を捧げる乙女のそれに変わる。

その視線の嵐の真ん中で、ストレアはユウキの背中の上に自身の上体を載せる。まだ力の入りきらないストレアが、どうにかこうにか自身の尻を持ち上げようと脚に力を入れる。その様はまるで生まれたての子鹿のようだ。

その後ろで、キリトはコンソールウィンドウを開きコマンドを入力。ユウキに挿入されたバイブの動きが、自身のペニスに同期するように設定変更。同時に、ストレアの感覚をアスナのラブドールに優先同期されるように設定変更。

「……あれ？　お兄ちゃん、もしかしてなんかしたでしょ!?」

「悪いな、スグ。散々アスナとユウキで遊んだんだし、そろそろいいだろ？」

「むー……」

リーファからの抗議の声をなだめすかしていると、ストレアがよう

やく態勢を整えた。
「準備、できたよ……♥　きて……♥♥」
　どうにかこうにか尻を突き上げ、ストレアは脚を広げる。この酒池肉林の宴が始まった直後、他の娘達に先んじてたっぷりと抱かれた時に残された精液が溢れ出し、股の下にいるユウキの頬にべちゃりと落ちたかと思うと、ゆっくりと滑り落ちてアスナの顔へと辿り着く。
　穢される二人をそのままに、ストレアの細い腰をがっしりと両手で掴んだキリトは、屹立したペニスをストレアの蜜壺に容赦なく突き入れた。
「「――お〝っぉお〝おっ♥♥♥♥」」
　肉棒を直接突き入れられたストレアが。その感覚をラブドール経由で受け取ったアスナが。バイブの同期運動を受けたユウキが。三匹の雌が、揃って啼いた。
　一番上にいるストレアの膣から溢れ出した愛液が、ユウキの横顔にかかり、アスナの口に飛び散る。下にいる二人が目隠しをされていなければ、ずっしりとした重さと共に揺れる陰嚢が見えていただろう。
「……ふむふむ。ぶっつけ本番のわりにはうまくいったな」
　ストレアの膣奥に亀頭をぐりぐりと押し込みながらキリトは呟く。返ってくる三人分の反応を楽しみながら、キリトは腰を動かす。
「おっ♥　んっ♥♥　んぎぃっ♥♥　きり〝と、のぉ〝っ♥♥　ちんぽ、ちんぽしゅごひぃ〝い〝っ♥♥」
「んひいっ♥♥　ひい〝いっ♥　じにゅっ♥♥　いぎじにゅううっ♥♥」
「～～～～～っ♥♥♥♥♥　お〝っおっお〝おお〝おお〝っっ♥♥♥　やっ、やだ、や〝っら〝ぁ♥♥♥　もうイグのや〝――あぁあぁあぁっ♥♥♥」
　どちゅっ、どちゅっ、と。重く鋭いピストンでストレアの蜜壺を責める。一定のリズムではなく、時折タイミングをずらしながら、ストレアの弱いところを徹底的に責めたてる動き。自分の気持ちよさより、相手を快楽に沈める事を優先した、セックス慣れした男のセックス。

「おっお〝っ――んひい〝いい〝いいっ♥♥　きりっ、きり〝とぉ〝っ♥♥　ちんぽ、ちん〝ぽすぎい〝いい〝いいっ♥♥♥」

愛液を溢れ出させ、前に膣内射精された精液の残滓を掻き出され、その全てを下にいるユウキとアスナの顔にぶちまけながら、ストレアが身もだえする。仮にもユイの妹ではあるストレアだが、そのスタイル、その肉付きは大人のそれだ。むっちりとした尻肉は、キリトが腰をぶつける度にぐにゅりと潰れてオスを煽る。

そのストレアが感じている快感を、アスナはラブドール経由で受け取っている。一方、その優先権を奪われたリーファは頬を膨らませてむくれている。

「もー、お兄ちゃんばっかりずーるーいー。あたしもアスナさんいじめたいのにー」

「はいはい、お兄ちゃんにおもちゃ取られたからってむくれないの」

「リズさん……」

「あんたの相手はあたしがしてあげるから。それ使ってたっぷり気持ちよくしてちょうだい？

……自分で作ったモノの威力、自分で確かめてもみたいし」

「リズさーん♥」

ラブドールの隣に寝転んだリズが、両脚を大きく広げてあられもない姿を晒す。リーファはアスナのラブドールからペニスバンドを引き抜くと、リズの上に喜々として覆い被さった。

「覚悟してくださいね、リズさん♥　……あ、そうだ。お兄ちゃん、どっちが先に相手をイかせられるかで勝負しようよ！」

「いいけど……こっちのストレアはもうイきそうだぞ？」

「えっ、ウソ、もう!?　ちょっと待って、イかせるの禁止!!　さ、こっちもいきますよ、リズさん！」

「り、リーファ！　あんたもうちょっと雰囲気ってものを――んあああっ♥♥」

有無を言わさぬ様子のリーファは、ペニスバンドをリズの雌穴へと押し込む。モノがモノとはいえ、挿れ慣れているサイズであることに変わりはない。リズのヴァギナは左右にぐ～っと押し広げられなが

ら、黒色のシリコン製肉棒をみちみちと飲み込んでいく。
リズを絶頂させようと必死な妹の様子にキリトは苦笑を禁じ得なかった。
「リーファはああ言ってるけど、我慢できそうか？　ストレア」
「むり、むり〜いいっ♥♥　あたひ、もうっ♥♥　もう〜っ、いぐ、いっぢゃう〜ぅっ♥♥
いぐいぐいぐイ〜っ――っぐぅうぅ〜う〜ぅうぅうぅうッ♥♥♥」
我慢させる間もなく、ストレアは絶頂した。体をびくんっと跳ねさせ、反射的に尻を突き上げながら。股間から勢いよく噴き出した潮が、真下にいるアスナとユウキの顔に直撃する。
壊れた蛇口のように垂れ流される雌汁がユウキの頬を叩き、アスナの口内に流れ込む。尤も、マゾメス二匹にとってはそれはご褒美でしかなく、アスナはごぼごぼと音を立てて溺れながら甘イキし、ユウキも下品なオホ声を上げてそれに続く。
「あーあ――、まったく……ママ（アスナ）の顔にお漏らしするなんて、ダメじゃないか。ストレア」
「お〜ほっ〜♥　ほおっ♥♥　はぁ〜っ、はあっ♥♥」
「こりゃ聞こえてないな……ちゃんと起きろ、っての！」
キリトは両腕を左右に広げて大きく振りかぶると、広げた掌をストレアの尻に思い切り叩きつけた。
「ぎっ――ひぃい〜いぃ〜いいい〜いっ〜っっっっ♥♥♥」
部屋中に響くほどの巧打音。ストレアの尻が潰れ、歪み、真っ赤な手の痕が両の尻たぶにはっきりと残ってしまう程に容赦のない威力。
尻肉からジンジンと伝わる痛みが、ストレアの意識を強制的に再起動させる。絶頂の恍惚から揺り戻しを喰らったストレアの髪を、キリトの右手が掴んで抑えつける。
「ほーら、ストレア。ちゃんとママに『ごめんなさい』しないと」
「お〜っ♥　ごべっ♥♥　ごべんなざい〜っ♥♥　ままの〜っ♥　お顔にひぃっ♥♥　お〜もら〜ししちゃってごめ〜んなさいひいぃっっ♥♥

おぎっ♥ひぃいぐっ♥♥　またいっぐ♥いっぎゅぅぅうううぅうぅぅう♥♥♥」

謝罪した直後であるのにガクガクと体を痙攣させながら絶頂するストレア。股の下にいるママに謝罪しながらイキ潮をぶっかける愛娘に、キリトはお仕置きの『お尻ペンペン』を叩き込む。ストレアの尻が、キリトの手形で真っ赤に色づくまでさほど時間はかからない。

母親譲りの雑魚マンコ&マゾ子宮の持ち主であるストレアは、父親のチンポとビンタによる躾を受け、半ば白目を剥きながら絶頂を繰り返す。無論、その下にいる母親にして旦那チンポへの永久隷属誓約多重宣誓済の雌奴隷(アスナ)も、マゾメス義母娘の間に挟まれてイキ狂う、チンポを見せられれば条件反射即時無条件降伏する程度の最強少女剣士(ユウキ)も、イキっぷりではストレアに負けていない。

極上のメス三匹が、キリトの肉棒によって同時に喘がされ、悶えさせられ、性欲に狂わされる。そんな、最上のオスだけに許された特権を行使しているオスは、更に数回、ストレアに潮吹きをキメさせたあと、ラストスパートに向けて腰の動きを早めた。

肉と肉のぶつかる音、その間隔が狭まるのに比例して、まとめて組み敷かれた三匹の喘ぎ声のボリュームが上がる。同時に、種付け射精の気配を察した周囲の雌達は、羨ましさの篭もった甘美な溜息を漏らす。

「……いいなぁ……♥♥」「キリトさまぁ……♥」「はあっ、はあっ……♥♥」

射精の兆候。これまで散々抱かれ続けてきたメス達は、ただそれだけで一気に発情の度合いを増した。

目の前で繰り広げられるハードセックスを生オカズにして、サチが、ルクスが、フィリアが、自分の股座に指を突っ込んでオナニーに耽る。フェラ奉仕と薬漬けによる快楽失神からようやく帰って来つつあったシリカが、アルゴが、シノンが、セックスの雰囲気に当てられて甘イキをキメる。我慢しきれなくなったレインがセブンを抱きかかえ、肉欲のままに姉妹でレズセックスを始める。

そんな、メス達の喘ぎ声と興奮の視線に包まれる中。

キリトは両手でストレアの腰をがっちりと掴みなおし、一切の逃げる隙を奪う。射精だけを目的とした乱暴なピストンで既に弱らされきっていたストレアは、その最後通告に抗えるはずもない。

そして、最後の一突きをストレアの膣奥に深々と突き刺すと同時に――キリトは貯め込んだ精液を一気に解き放った。

「ん゛ぉお゛――――ぉ゛ほぉ゛ぉおぉおおぉお゛おお゛おっ♥♥♥イ゛――っぎひぃイい゛ぃイィ゛いい゛いっ♥♥♥♥」

「あっあ゛ぁっぁああ゛ぁっああ゛ぁああ゛ぁっっっ♥♥♥♥　イぐイ゛ぐいぐぅぅぅう゛ぅぅう゛ぅう゛ううっっっ♥♥♥♥」

「イ゛っ――――――っぐうぅう゛ぅう゛うぅう゛うぅうぅうう゛ぅううぅうっっっ♥♥♥　いぎひぃいぃ゛いい゛いぃっ♥♥　お゛ひぃいぃいっ♥♥お゛ぉっお゛おっお゛ひぃ゛ぃいぃい゛ぃい゛ぃぃい♥♥♥」

大量に製造され、濃縮されて重さを増した特濃白濁精液がストレアの子宮に叩き込まれる。肉棒による暴力じみた快感を与えられて緩みきっていた子宮口は、そこにみっちりと密着した亀頭から送り出される子種汁を一切拒むことなく子宮へと素通しする。洪水じみた精液の奔流が子宮内壁を殴りつける程の勢いで満たしていく。その感覚と快感、そして何よりオスに征服されるメスだけが味わえる本能的な喜悦を浴びたストレアの脳髄は灼かれ、視界は幾度も白く明滅する。

「イ゛っひぃいぃい゛ぃ゛いぃ゛いっっ♥♥♥　イっへ、イっでる゛のにひぃい゛ぃいっ♥♥♥♥　やら゛ぁ゛っ♥♥♥　いぐいっぐいっぐぅぅぅうううぅうううう♥♥♥♥」

「お゛っお゛っお゛っお゛っお゛っお゛ぉおぉおぉおおっ♥♥♥おっぎひぃいぃ゛い゛いぃ゛い゛いっ♥♥♥」

「――あ゛っひぃいぃ゛いぃい゛いぃ゛い゛ぃっっっ♥♥♥　いぎゅいぎゅっいぎゅうぅぅぅ゛うぅぅ゛ぅうっっっ♥♥」

どくっ、どくっ、という強く重たい射精に、ストレアの体は幾度となく絶頂へと叩き込まれ、強制的にイキ潮を吹かされる。

その感覚をダイレクトに受け渡されるアスナは、義娘の体液を浴び

ながら同じようにイキ潮を噴き出す。腰はガクガクと痙攣しており、上に二人が乗っていなければ、その体は海老反りになって空っぽのまま一方的にイかされる秘部が露わになっていただろう。

その二人の間に挟まれ、一切身動きのとれないまま絶頂するユウキは更に悲惨だ。体を動かすことはできず、暴力的な快感を逃がす術がない。股座に突き刺さったバイブはオリジナル同様に深々と突き刺さっており、開発されきったユウキの子宮口をイジメたおし、新たな敗北を体に刻み込ませていた。

メス三匹の嬌声が部屋中に響く中、射精は長々と続いた。

ストレアの子宮は早々に満杯となり、肉棒と膣壁の間のごく僅かな隙間をこじ開けるようにして染み出し、逆流してきた精液が、外へと溢れ出す。それを受け止めるのはもちろん、ユウキとアスナの顔だ。

喘ぎ声と同期するような動きで、精液を一滴でも多く搾り取ろうと絡みつくストレアの肉穴。キリトがそこから肉棒を抜く頃には、組み敷いた三匹はまともな声も出せなくなっていた。

「――おぉっ……あぁひ……♥♥」「ぴひぃっ……♥♥」「へひゅーっ……♥　へひゅうぅ……♥♥」

「――ふうっ……」

数拍の時間を置いて、抑えを失ったストレアの雌穴から、先ほどまでとは比べ物にならない程の量の精液が逆流する。どっぷりと重たく濃い白濁液は、重力に従ってユウキの頬へと落ち、そのままアスナの顔へと滑り落ちる。

一匹のオスによる、メス三匹へのマーキング。優秀なオスであることを言外に証明する確固たる証拠。

絶頂のあまりに痙攣を繰り返すことだけしかできなくなったメス三匹を捨て置き、キリトはセックスの残滓に塗れた肉棒を、リズとリーファの顔の間に無言で差し込む。

「あっ♥　んむっ……♥」

「んぶっ……♥」

ペニバンレズセックスショーの最中であった二人だが、チンポが最優先であることは変わらない。上側にいるリーファが肉棒を咥え込

みながら、まとわりついた精液と愛液を丹念に舐め取る。同時に、下側にいるリズが左右の陰嚢を交互に口に含み、更なる精子の増産を促す。

自身の精液とストレアの愛液の代わりに唾液でべちょべちょになったペニスを引き抜き、リーファとリズの顔に擦り付けてタオル代わりに拭き取りつつ、キリトは部屋の中を見渡した。

「さて……」

床に積み重なっているアスナ、ユウキ、ストレア。その三人の痴態にあてられて、すっかり発情しきったメス達の視線の集中砲火がキリトに突き刺さる。

期待と欲望に満ちた視線に、キリトは応え始めた。

そこから、秩序も理性もない乱交が始まった。

「――おぉっ♥　おぉねぇぇぢゃんぅっ♥♥　たしゅっ、たしゅけでぇぇっ♥♥　おぉっ♥おぉおっ♥おぉほぉおぉおぉおおっ♥♥」

背後から抱え上げられ、そのまま肉棒を突き込まれたセブンが喘ぐ。ただでさえ持ち上げるのに適した小柄な体。その膝裏から回ったキリトの腕は、そのままセブンの腕を掴んでガッシリと拘束している。

垂直に近い角度で反り返った肉棒は、セブンの狭い膣を力尽くで押し広げる程に深々と突き刺さっており、キリトがセブンの体を上下させるたびに愛液を噴水のように溢れ出させる。まだ1●歳の小さな蜜壺に、凶悪な逸物が挿入されている――その事実だけでも背徳的であるというのに、実の姉たるレインがその光景を間近で眺め、妹の痴態をオカズに自慰行為に耽っているのだから背徳的だ。

「あは……♥　キリトくんのぶっといチンポが妹のマンコにぶっささってるの、最高……♥♥」

「おぉっぎいの♥　おぉぐっ、おぐにぐりゅうぅぅうぅぅぅぅ♥♥いぎっ♥いぎひぃいいいいいっ♥♥」

「七色～♥　チンポでぶっ壊してもらえてよかったね～♥　天才の頭脳、チンポ漬けにされて頭の中真っピンクにされちゃえ～♥♥」

血を分けた実の妹。それが、力尽くで犯されている様はレインにとって最高のオカズだ。立ったまま股を広げ、指を股座に突っ込んでぐちゅぐちゅと音を立てながらオナニーするその姿は、とてもではないが未来のトップアイドルとは思えない。

チンポに媚びながらはやし立てるレインに見せ付けるようにセブンを犯し続けたキリトは、最後の一突きをセブンの膣奥へと突き込み、容赦のない射精を叩き込む。

「ま〝っ、ま〝って♥まっ――――へえええ〝ええ〝ええ〝ええええっ♥♥　お〝っお〝っおおおおおおお〝おお〝おおおおおおっっっ♥♥♥」

容赦も遠慮もない大量射精。セブン自身の体重も使った絶対脱出不可の密着ロック状態で、濃厚な精液がセブンの子宮に流し込まれていく。普段は新たな技術を探求する事に使われる天才の脳に動物じみた絶頂の感覚を刻み込み、普段は多くのファンを魅了する歌声を奏でる喉から獣じみた嬌声を叫ばせる。

しばらくの間射精するに任せ、精液の勢いがようやく収まった頃。キリトはセブンの体をもう一度持ち上げ、勃起したままの怒張をセブンから引き抜くと、彼女の体をベッドに置く。

ひっくり返ったカエルの様な体勢で痙攣するセブンを気遣わないのは、キリトも、そしてレインも同様だ。

「キーリトくん♥　次は、私達と遊ぼうよ♥」

「あんなの見せられたら我慢できないよ～♥　サチもそう思うでしょ？」

「うん……♥　ちょっと恥ずかしいけど……しよ、キリト？」

四つん這いになって尻を突き上げ、オスへの屈服をポーズで示したレインが、そのままセブンの上へと覆い被さる。更に、妹に代わってマンコを差し出すレインを挟み、右にフィリアが、左でサチが同じポーズを取る。

差し出された三人分の生オナホール。その所有者であるキリトは、

指で、疑似心意の蝕腕で、そして肉棒で――三つのメス穴を思うがままに貪る。

「あぁっ♥はぁんっ♥♥　おっ、おぉっぎぃいっ♥♥　なっ、なにゃいぃろぉっ♥♥　見て、みへぇぇっ♥」

「ふーっ♥おふっ♥♥　ふうぅぅうっ♥♥　おまんこのおくぅぅ♥どちゅっ♥どちゅっ♥ってされるの、すき、すきぃいぃっ♥」

「んぅっ、んんぅうぅっ♥♥　やぁっ、やぁああっ♥♥　これ、こっ、声、でちゃうよぉおっ♥♥」

気の向くまま、本能の赴くままに雌穴を選び、代わる代わるペニスを突き込む。お預けを喰らった雌穴には指を入れて啼かせ、あるいは疑似蝕腕で掴んだバイブをさし込んでイジメたおす。

ストレア達が奏でていた喘ぎ声に代わる、新たな嬌声の三重奏。白かったベッドシーツは瞬く間にサチ達の愛液が染みこみ、灰色へと変わっていく。処女ならばいざ知らず、既にたっぷりとセックスの経験値を積まされた三人である。先ほどまでのセックスにあてられ、自慰行為を抑えられなかった体は、待ちに待った肉棒による蹂躙を喰らってあっさりと絶頂を繰り返す。

イく度に痙攣し、膣内射精を乞い願ってうねる三人の雌肉。そのチンポに媚びきったリクエストに、もちろんキリトはしっかりと応える。

まずは、真っ先に誘惑してきたレイン。その体に後ろから覆い被さり、その下にいるセブンごと抱きしめて姉妹の体を密着させた状態で、子宮の奥深く目掛けて精液をぶちまける。

「はひ――あっ♥ああぁっはぁああっぁぁああぁ　ああ♥♥♥　イっぐ、い――ぐぅうううぅうぅぅ♥♥♥」

どくっ、どくっ、と。妹の膣内に射精した時とも負けず劣らずの勢いで叩きつけられる精液がレインの子宮も満たす。灼けるように熱いその感覚に悶えるレインの下で、何かを感じ取ったのかセブンも体を震わせる。

射精が終わるまでの長い間、レインの耳元に唇を寄せて愛の言葉を囁いてやれば、過剰供給された愛情にレインの体が更なる絶頂を重ね

る。一回分の射精でレインの子宮を再度完全マーキングし終えたあと、キリトが腰を引いて肉棒を抜いてやると、レインの蜜壺から溜まっていた精液がどっぷりと溢れ出し、その下にいるセブンの雌穴から逆流した精液と混ざり合っていく。

誰もがうらやむアイドル姉妹による極上姉妹丼。それを食べ尽くしたキリトは、続いてサチへと襲いかかる。

「あっ♥　キリ――んむんっ♥♥」

後ろから覆い被さり、有無を言わさずサチの唇を奪う。彼女の小さな手に自身の掌を重ね、包み込むように指を絡める。愛を確かめ合うロマンティックな体位であり、オスの力と体重を使ってメスを固定し、絶対に逃がさないというメッセージを理解させるハードな体位。

その事に気付いているのかいないのかはわからないが、サチは抵抗せずキリトの下に体を納め、唇の隙間から声になれなかった吐息を溢れ出せる。一気にスパートへと向かったキリトの腰使いに、サチは全身を震わせ、甘イキを繰り返すことで返答する。

交尾相手のオスにしか聞くことを許されない吐息を聞き、サチの舌に自らの舌を絡めてまで彼女を捕まえたまま、キリトは彼女の一番奥に射精を叩きつけた。

「――んうぅっ♥♥うぅぶぅうぅうっ♥♥　んっむぅうぅうぅうぅうぅうぅうぅうぅう♥♥♥」

体も、心も。全てを抑え込まれた状態で、サチが膣内射精される悦楽に震える。長く重たい射精が続く間、サチは幾度も幾度も潮を吹かされ全身を痙攣させられるが、キリトに拘束されているが故にどこにも逃げることはできない。

射精が終わるまでの間、ディープキスと拘束はしっかりと続いた。

そうして種付けが一区切りを迎えたキリトが、肉棒も含めた全ての拘束を外してサチを自由にする頃には、彼女は幸せな笑みを浮かべたまま完全に失神をきめていた。

まともに動けなくなったサチの頭を軽く撫でて労を労ったあと、キリトはフィリアの方へと向かう。よっぽど待ちわびていたのか、疑似蝕腕に持たせたバイブに口で奉仕し、自分の指を股に突っ込んでオナ

ニーしていたフィリアをキリトは無造作に襲い、次の獲物を待ちわびている怒張をフィリアの雌穴へと突っ込んだ。

自分のペニスにフィットするように耕しきったマンコを、容赦も遠慮もなく。一突きで、最も奥深くへ貫く。

「おぉっ――――♥」

フィリアの顔が、がくんっ、とのけぞり、股座からぷしゅっと液体が噴き出す。

一瞬、脱力したフィリアの体に腕を回して抱きかかえると、キリトは肉棒を突っ込んだままフィリアの体を起こし、いわゆる立ちバックの姿勢を取る。

そして、まだ意識のある他のメス達にフィリアの痴態を見せ付けながら、ぎゅうぎゅうと締め付ける彼女の膣内に思うまま精液を吐き出す。

「おぉっほぉおおおぉ　おぉおおおぉ　おぉおおおっ♥♥♥　おぉっひぃ、ひぃいいいいいいいいいっ♥♥」

フィリアの尻の形が歪むほど、みっちりと体と体を密着させた状態での膣内射精。フィリアを抱える腕と、下から突き上げる腰と太股に力が入りすぎたせいで、フィリアの体はぐいっと持ち上げられてしまう。結果、爪先が少しだけ床を離れた。

支えを失い。逃げ場を失ったフィリアの体がガクガクと痙攣するが、所詮メスの力ではオスに敵うはずもなく、射精中のオスがその程度でメスを逃がすはずもない。

「んひぃいいっ♥♥　おほっ、ひぃいいいいいいっ♥♥　しっ、しきゅー♥♥　おもっ♥　いぐいぐいっぐうううう♥♥」

宙に持ち上げられ、ぷしっ、ぷしっ、と断続的にイキ潮を噴かされながらの連続絶頂。興奮したオスの射精はフィリアにとって永遠に思えるほど長く、吐き出される精液は子宮が広がってしまうのではないかと思えるほどに多く、重たい。

一回分の射精が収まる頃には、フィリアは何度目かも最早分からないほどの絶頂を迎えており、全身は既に脱力しきっていた。その雌穴からチンポが抜かれると、膀胱を抑える力もなくなったのか、じょろ

じょろと黄金色の小水を漏らして床を濡らす程だった。
「ふうっ……」
軽く息を整えつつ、キリトはフィリアの体をレイン達の近くに置いた。
セブンも含め、四人分の穴から揃って逆流する大量の白濁液。メスの多頭飼いを許されるだけの『力』を持ったオスだけが見ることを許される勝利の光景。
もちろん、それだけでこの宴が終わるわけではない。
「せーんぱい♥」
「キリト様♥」
むにゅうん、という柔らかく大きな感触が、左右からキリトの腕を包む。へばる前のレインよろしく、キリトのチンポがフリーになったのを見計らって次の獲物を差し出しに来たのは、ロニエとルクスの二人だ。
そのお誘いを断る程、キリトは無粋でもないし、疲れてもいないことは、何人ものメスのマン汁と種付けを終えた精子を纏って雄々しく屹立し続けるペニスを見れば明らかだった。
更に激しさと淫靡さを増す、キリトを中心とした乱交模様。
アリス・シンセシス・サーティとイーディス・シンセシス・テンという人界最高クラスの剣士達は、床に並べられ、自分たちが排泄したばかりでまだ薄く湯気を上げている精液の中に顔面を押し込まれ、溺れさせられながら犯される。
愛しき先輩が騎士二人を犯し、膣内マーキングを完了させるまでの間、アリス達の頭を踏み付けて精液の中に沈め続ける役目を果たしていたのはロニエ。
二人の膣内への射精が複数回――先輩が満足するまで種付けが完了したのを見届けたあと、ロニエがアリス達の髪を掴んでザーメンの海から引き上げてやれば、二人は鼻と口からザーメンの泡を噴き立た

せながら失神していた。
　先輩のチンポ掃除を終えたルクスと再度合流したロニエはベッドに上がり、ルクスを上に乗せて上下に重なってマンコを捧げる。共にキリトを崇敬する者同士は、至近距離で見つめ合ったまま、交互に挿入される肉棒の感触と熱さに酔い痴れる。
　まずは前菜とばかりに、二人の雌穴の間に肉棒を突き込んで扱き上げ、クリトリスを潰して喘ぎ声を上げさせながらの外出し射精。勢いよくルクスの背と頬に降りかかり、ロニエの顔に襲いかかる。
　ご褒美射精に酔う二人のマンコを、キリトの肉棒は容赦なく襲う。どちゅっ、どちゅっ、という肉と水の音だけで、床に寝転んだメスブタ騎士二匹が追いアクメをキメる。肉襞を亀頭でごりごりと抉られる度、ベッドの上のメスオナホ達が潮吹き絶頂をキメる。
　そうして、精液を乞い願う雌穴に導かれるように、キリトは上下のマンコにたっぷりと射精を繰り返した。ロニエとルクス、どちらも二回ずつ射精された所までは覚えていたようだが――その後でどちらが先に失神したのかは不明である。
　酒池肉林の夜宴開始時、キリトのペニスを舐め回して準備を整えると同時に特殊な媚薬液を塗りたくったシノン・アルゴ・シリカのケットシー三匹。チンポの臭いと薬効によってセックスにも参加できていなかった三匹だったが、ここに来てようやく動けるまでに回復した。
　ここで回復したということはつまり、オスに襲われるということである。
　ケットシーだけが持つ性感帯である尻尾、そこにキリトが操る黒い蝕腕が這う。細長い蝕腕は支柱に絡みつく朝顔の蔓のようにケットシー達の尻尾にぐるぐると絡みつくと、上下に力強くしごき始める。男性が行う自慰行為のように力を込め、上下にごしごし、ごしごしと擦り続ける。無論、ケットシーの尻尾の感度は、男性器のそれとは比較にならないほど高い。
　やがて尻尾だけでなく、全身に黒い蝕腕を這わされ、絡め取られた三匹に、キリトのペニスが襲いかかる。媚薬で昂ぶった体。全身の性

感帯をくまなく覆う愛撫。どろどろに蕩けきった蜜壺を貫く、太い肉杭。

動物ですらも上げないような、下品で壊れた鳴き声を上げ、白旗代わりに排卵した卵子を交尾相手に捧げながら、三匹は次々に潮を噴いて絶頂を重ねる。もちろん、穴という穴から体液を撒き散らし悶える三匹を、キリトは容赦なく犯す。床に転がし、スツールに乗せ、窓際に立たせ、場所を問わず肉棒で貫きながら、重たい精液でメス猫たちの子宮を制圧する。

反射的に逃げだそうとしたアルゴも、窓ガラスに反射する己の姿を見せ付けられたシリカも、最後にはキスだけで本気アクメをキメるまで壊されきったシノンも――犯され続け、膣内射精を叩き込まれ続けた挙げ句、白目を剥いてアヘ顔気絶した所でようやく解放された。

セックスの余韻で動けないでいるストレアをベッドに移動させたついでに、キリトはその下にいるアスナとユウキの拘束と目隠しを外す。オスとメスの体液にまみれ、どろどろのぐちゃぐちゃとなったアスナとユウキ。

その退廃的な美しさに嗜虐欲求と興奮を掻き立てられつつ、ユウキの髪をひっつかんで体を持ち上げ、手近なソファに乗せてオナホールのように後ろから犯す。運ばれている間こそ朦朧としていたユウキだったが、最初の一突きで無理矢理意識を覚醒させられると、そのまま喉と体を震わせてセックスの喜びに溺れ始める。

そうしてユウキを貫いていると、両サイドにリーファとリズベットが侍ってきた。初めてのペニバンレズセックスで上手にリズをイかせることができたらしいリーファに、ご褒美としてキスをねだられてそれに応えつつ、もう片方の手でリズを抱き寄せる。

二人の豊満な肢体を全身で感じ、熱い吐息とオスに媚びる囁きを耳元に感じながら――ユウキの狭い膣内をこじ開け、最奥部にどっぷりと膣内射精。リズの指による睾丸マッサージと、リーファのパイズリによる腕マッサージを受け、ユウキの震える体を押さえつけながら極上の射精を堪能する。

そのまま数回、ユウキがトぶまで膣内射精を繰り返したあと。近く

で倒れていたアリスに半勃起状態のペニスを咥えさせて勃起状態に回復させると、交尾を待ちわびていたリーファとリズを犯す。

ダブルパイズリ奉仕を受けたあと、まずはリーファを。爆乳を揺らさせながら肉棒を叩き込み、母乳を噴き出させる。絡みついてくるリズを指で弄くりながら、リーファのポニーテールをひっつかんで暴れメス馬を乗りこなし、誰が主人なのかをしっかりと叩き込んでいく。そうして、最後は義妹の甘いおねだりを聞きながらの膣内射精。

ヒクつくリーファのマンコからペニスを引き抜き、繋がった精液の橋が落ちるよりも先に、隣で切なげな顔をしていたリズを抱え上げて力尽くの駅弁ファックでぶち抜く。ボリュームのあるケツ肉を鷲掴み、唇を貪りながら犯し、貫き、穿ち――その一番奥に濃厚な雄汁を注ぎ込む。

ぶしゃぶしゃと噴き出すリズのイキ潮と交換するように、勢いよく精液を叩き付け、他の女達と同様に子宮を制圧する。

そうして、次々に。オスの求めるままに。メス達の求めるままに。互いの体を貪り合う。

フィリアの雌穴に肉棒を突き込み、アリスと唇を重ね、セブンを愛撫する。サチに抱きしめられながら、イーディスのパイズリ奉仕を受け、レインを蝕腕で嬲る。ルクスの口付けを脚に受け、ユウキをオナホ代わりにし、ストレアとリズベットの抱擁を味わう。リーファの乳房を掴んで母乳を絞り、シリカを肉棒でビンタし、ロニエに陰嚢を舐めさせる。シノンをディープキスで蕩けさせ、アルゴを溺れさせ、アスナを抱く。

がむしゃらに、全力に、目の前の女を抱き、穴を貫き、精液を注ぎ込んでいく。キリトの全身に女達が代わる代わるまとわりつき、寵愛と快楽を受けながら睦み合う。あぶれた女達は自分で自分を慰め、あるいは女同士で絡み合って喘ぎ声を上げる。自然とベッドの上に形成された肉の宴は、混ざり合い溢れ出す体液でシーツを汚し続ける。

そうして一晩中、若さと体力の続く限り、溢れる性欲に任せたセックスパーティから、一人、また一人と脱落者が出て行く。膣内射精された精液を股の間から逆流させ、幸せな微笑みを浮かべて、あるいは

壊されきったアヘ顔を晒したままぶっ倒れていくメス達。
　十数名の肢体で作られた乱交曼荼羅の中心。そこで最後まで残ったアスナを組み敷いたまま、キリトは全力で腰を振り下ろし、射精寸前のペニスを叩きつける。
「アスナっ、アスナっ!!　いくぞっ、今日っ、最後のっ!!」
「んぅぅ〜っ♥♥　あ〜っぁはああっ♥♥　きり〜、きりとくん〜っ♥♥キリトくぅんっ♥♥♥　きてっ、きっ、きへえっ♥♥」
　互いの体を抱きしめ合ったまま、種付けプレスの体勢で腰と腰を密着させる。キリトとアスナの唇と唇が重なるのと同じように、亀頭と子宮口がぎっちりと密着する。上下で、全身で、心と心でしっかりと繋がったまま――二人は同時に絶頂を迎えた。
「――んっんんっんっん〜ぅぅ〜ぅぅぅぅぅ〜ぅぅぅぅ〜ぅぅぅ♥♥♥　んぉ〜っ♥♥　ぶふぅぅぅっっ♥♥　んぶっぅぅぅぅふぅぅぅぅ〜ぅぅっ♥♥♥」
　もはや今日何度目になるのかわからない射精。
　もはや今日何度目になるのかわからない潮吹き。
　互いの快感をぶつけ合い、求め合い、抱きしめ合ったまま――果てる。
　上からアスナを抑え込み、金玉をぐりぐりと押し当てて、残っていた精液をありったけ注いでいく。アスナの雌肉も本能的にそれに応え、雌穴でしがみついて精液を搾り取る。
　もしかしたら、今日一番長く続いたかもしれないし、そうではないかもしれない、種付け射精。それが終わる前にアスナは意識を手放していた。それにキリトが気付いたのは、射精が終わってからしばらくの後、絡めてくるアスナの舌と手足から力が抜けたあとの事だった。
　残った力で肉棒を引き抜いたキリトが、どうにかこうにか体を起こし、そのままアスナの隣へと倒れ込む。過剰なまでに心地良い疲労感に身を任せて瞼を下ろした所で――ようやく、酒池肉林の宴は終わりを迎えた。

朝まで続いた乱痴気騒ぎ、あるいはハーレムセックスパーティが終わってから約半日後。

「――ん～～～～っ……。真夏の南国も良いけど、やっぱり冬の温泉も最高……」

薄灰色の空からしんしんと降る雪が、温泉の湯面に溶けて消えていく。

源泉掛け流しを売りにする贅沢な露天の岩風呂に肩まで浸かり、その温かさを全身で感じながら、アスナは両腕をゆっくりと伸ばした。筋肉がゆったりと解れていく時の独特の感覚に、滑らかな湯の手触りが加わり、より一層の満足感を齎していく。

「きもちよさそーだね、アスナ」

「うんっ。とっても気持ちいいよ、ユウキ」

透明度の高いお湯をちゃぷちゃぷとかき分けながらやってくる少女――ユウキ。伸ばした両手をそのまま広げたアスナは、彼女を背中側からぎゅっと抱き寄せた。

昨晩行われた、南国リゾートアイランドを専有しての乱交パーティ。それから明けた翌日、一晩中続けたセックスの疲れを癒やし、またその余韻に浸るべく、参加者達はストレアがゲストハウスの横に即席で作った温泉に浸かっていた。

言うまでも無いが、アスナも、ユウキも、タオルを身につけたまま湯に浸かるという無作法を犯すような事はしない。当然、素っ裸である。

そうした温泉のマナーをしっかりと守っているのは、何も二人だけではない。アスナ達の正面、視界に映る彼と彼女らも同様だった。

「相変わらず大人気だねー、キリト」

「ほんとほんと」

キリトを中心に絡まり合う、十数名の裸の女達。一匹の雄に群がる何匹もの雌。「群れ（ハーレム）」というものはこういうものなのだとアピールするかのような光景に、アスナは恍惚の溜息を漏らす。

背中から抱きつく者。腕に身を絡める者。足を撫で回す者。唇を

捧げる者。指先にまとわりつく者。吐息を絡め合う者。視線で嬲られる者。耳を舐め回す者。男性器を弄くる者。あぶれた雌同士で絡みあう者達。その様を俯瞰的に見つめて楽しむ者。それぞれの雌がそれぞれの好む方法で、雄との混浴を楽しんでいる。

それは最早、ここにいる者達にとってはごくありふれた当たり前のような光景。

「ねーねー、アスナ。キリトの事を好きな人って、どれくらいいるのかな？」

「そうね……」

特に理由のないユウキの問いかけ。それを改めて考えてみれば今この場にいる――自分自身も含めて――面子だけでも相当な数だ。そして今この場にいなくとも、キリトの事を憎からず想って――あるいはそれ以上の感情を抱いていそうな者にも心当たりがある。

そう、例えば――。

アスナ。
リズベット。
シリカ。
リーファ。
シノン。
フィリア。
ストレア。
レイン。
セブン。
ユウキ。
アリス。
ロニエ。
ルクス。
サチ。
アルゴ。
イーディス。
プレミア。

ティア。
アリシャ・ルー。
サクヤ。
セルカ。
ソルティリーナ。
リネル。
フィゼル。
メディナ。
ドロシー。
――概ね、こんなところだろうか。
片手の指どころか、もはや両手両足の指でも数え切れないくらいだ。
己の自慢の恋人が、数多くの女性から好意を向けられているというのは悪い気はしない。それだけキリトが魅力的だという事でもあるし、その魅力を分かる人間――つまりは自分と共感できる感性の持ち主が多いという事になる。それは単純に嬉しい。
「――きっと、すっごい数になると思うよ、ユウキ」
「あははっ。確かに」
温かな湯の中で、裸身の女性達に取り囲まれる恋人の姿を見つめながら――アスナはその場にいる誰よりも幸せそうに笑う。そうして、腕の中に抱いたユウキを伴い、その群れの中へ沈み込んでいくのだった。
溺れるほどに重く、何よりも熱く激しい快楽を求めて。

この後、ここにいる女性多数＋男性1名は、結局この後も種付け乱交セックスアフターパーティに雪崩れ込むことになってしまったのだが――それはまた、別のお話。

第二部
無様チン媚び尊厳破壊セックス大好きアスナさんとＳＡＯＰ一層からエロスキル熟練度上げプレイする話

ＶＲ。フルダイブ型仮想現実空間。それは、人が手にした新しい世界。あるいは人類が開けてしまった何個目かのパンドラの箱。

かの悪名高き《ＳＡＯ》の根幹を成したＶＲ空間構築パッケージ『ザ・シード』が世界中に拡散されてからしばらくの時が流れた。ばらまかれた世界の種子は、様々な企業、あるいは個人の手によって芽吹き、数多のＶＲ空間を構成していた。

関東圏某所。桐ヶ谷和人の自宅に据え付けられたプライベートサーバマシン上に構築されたプライベートＶＲ空間も、ザ・シード規格を元に作られたものの一つだ。

「――フられたな、キー坊」

「なんだよ、藪から棒に」

ベッドに寝転んだまま、ぼんやりと天井を眺めていたキリトの視界。そこに横から入ってくるなり、アルゴは突然そんな事を言い出した。

キリト自宅のホームサーバ内に構築されたプライベート仮想世界。そこに作られた家（ラブホ）の一室。少し前まで行われていた３Ｐセックスの名残を股の間から逆流させたまま、アルゴはけらけらと笑った。

全身を包むのは、男女の交わりに伴う汗と事後の心地よい気怠さだけ。それを除けば、二人は何も身につけていない。

「とぼけるなヨ。『そろそろ第二ラウンド始めようか』って考えてただロ？」

論より証拠とでも言うかのように、アルゴはキリトの股間に手を伸ばし、そこで屹立している肉棒に触れる。次の獲物を求めて固く反り返った肉棒の裏筋にアルゴが掌をあてると、まだ温かさを残した唾液

の、べっちゃりとした感触が返ってきた。
「なのにアーちゃんってば、突然ログアウトしちまうんだからナ～。こりゃフラれたとしか言いようが無いだロ」
「いやいや、しょうがないだろ。電話かかってきたんだからさ」
「ふむふむ。つまり、アーちゃんは旦那のチンポよりミトっちからの電話を優先する薄情者だと言いたいわけだナ？　自分の嫁さんの事をそこまで言うなんてひどいヤツだナ～」
「……理屈がおかしすぎてどこからどうツッコんでいいんだかわからないんだが」
　完全にからかいモードに入ったアルゴを、キリトは適当にあしらう。
　ちなみに、アスナがフェラチオを中断してログアウトしていったのは事実だ。ミト――もとい、アスナのエテルナ女子学院時代からの友人である兎沢深澄から電話がかかってきたというのも、アスナ本人が言っていたのだから事実なのだろう。
　キリトの気合実装とユイの助力――実際は後者の力が9割だが――によって、リアルの携帯端末に着信なりなんなりがあれば、この仮想空間内で通知を受け取れるようになっている。ただ、そこから通話となると若干だがセキュリティ上の懸念が発生する。そのため、応答するためには一旦ログアウトする必要があった。
　ちなみに、キリトが持つサーバ管理者権限を使えばログを辿って誰からの着信であるか調べることも出来るが――それはさすがにプライバシーの侵害というものだ。
　掌で肉棒を擦るのにも飽きたのか、アルゴはうつ伏せになって半身をキリトの胴の上へと乗せた。慎ましやかな胸をあててくるアルゴの背に腕を回し、キリトがその体をそっと支えてやると、お礼のつもりなのかアルゴがキリトの頬をそっと一舐めした。
　犬は苦手なのに時々犬っぽい事するよな――などと、キリトは不遜な事を考えた。
「ミトっち、元気にしてるんだってネ？」
「らしいぞ。今度、一緒にＡＲのイベントに行くってアスナが言って

たよ」
「ほほー、ＡＲのイベントっていうと……もしかするとアレかナ？」
「アレ？」
「今度、でかいアウトレットモールがオープンするんだけド、オープニングイベントとしてオーグマーを使った謎解きイベントをするんだとサ。アーちゃんが言ってたのってそれじゃないかと思ってサ。
結構宣伝されてたけど知らなかったのカ？」
キリトが「知らん」と頷くと、アルゴは「これだからＶＲ過激派ハ～」と言って呆れた顔をする。誰がＶＲ過激派だ、というキリトの抗議をアルゴはさらっとスルーした。
「ＶＲといえバ、ミトっちってもうＶＲＭＭＯはやってないんだっけカ」
「そうらしい。ま……《ＳＡＯ》であんな経験したら、ＶＲから遠ざかりたくなるのもわかるよ」
「……同感ダ」
《ＳＡＯ》サバイバーがそのままＶＲＭＭＯから距離を置くことは珍しくない。いくらアミュスフィアが安全とは言え、命を脅かされた記憶と恐怖はそう簡単に拭い去れる物では無いのだから。
「……それにしても、ミトっちみたいな優秀で優良なベテランがアーちゃんの側にいてくれたのはラッキーだったよナ」
「同感だ」
アルゴの言葉に、キリトは素直に頷く。ＭＭＯをソロで始めた結果、挫折するプレイヤーは少なくない。加えて、デスゲームと化した《ＳＡＯ》での初心者ソロプレイはほぼ自殺行為に等しい。
「アスナ、《ＳＡＯ》がＭＭＯ初体験だったらしいし、オンゲーの常識とか知らなかっただろうからな……。ミトが色々教えてくれなかったら、かなり大変な目に遭ってたんじゃないか」
「同感だナ。実際、ソードスキル一つ使うのだって苦労してただろうからナ……」
最悪、どこかのフィールドでＭｏｂに殺されていたのではないか――という言葉を、残酷な想像と共に飲み込む。そうならなかった奇跡

と偶然に感謝しながら。
「それにほら、アーちゃんって美人だロ？」
「『太陽って明るいよな？』って聞くのと同じくらい自明な質問だな」
「はイはイ。ま、そういう子ほど悪いやつのターゲットになりがちなんだよナ～。
　たとえば……もし、ニュービーアーちゃんの近くにいたのがミトっちじゃなくてキー坊だったら……出会ったその日にたらし込まれて、どっかの宿屋か路地裏あたりで餌食にされてただろうからナ」
「……」
「……ン？　どシタ？　そこは『いや、俺がそんな事するわけないだろ！』って反論するとこじゃないのカ？」
　きょとんとした表情を浮かべたアルゴがキリトの顔を覗き込むが、キリトは露骨に視線を逸らす。コンマ数秒後、何かに気付いたアルゴがにんまりとしたニヤケ面を見せた。
「キー坊」
「なんだよ」
「ヤッたナ？」
「……何を？」
　アルゴのニヤケ具合が加速した。
「はっはーン。なるほどなるほどナ。初めてのＭＭＯで右も左も分からないアーちゃんのこと、だまくらかして好き放題ヤッたんだナ？」
「おい待てアルゴ、俺はまだ何も言ってないぞ！　というかだましたりはしてない！　冤罪だ冤罪！　レクチャーしただけだ！」
「ほーウ、ほーウ。じゃあ一体、アーちゃんに一体どんなことをレクチャーしたっていうんダ？」
「いや、まあ……アスナと昔の話をしてたら盛り上がっちゃって、その流れで……というかだな……」
　狼狽しつつ話題を逸らそうとするキリト。そんなキリトがどうにもできない速度でアルゴの右腕が動いた。瞬く間にコンソールウィンドウを開いたアルゴは、指先を素早く動かして動画フォルダを開く。

ただの動画フォルダではない。格納されている動画の９９％以上が、この仮想空間で何度も繰り広げられてきたいかがわしい行為を録画したもの。動画総数は既に４桁の大台を突破している、ド級のエロ動画フォルダだ。

そしてここにある動画は、ゲストユーザー――プライベートサーバなのでゲストが来ることなど基本的に無いのだが――以外のユーザーであれば誰でも閲覧できた。当然、アルゴも。

「さーってと、キー坊がこういうプレイする時に録画してないはずないシ……アーちゃんの事だからオープンなフォルダの方に入れてるだろうかラ……。

《ＳＡＯ》が始まった頃の装備を再現してると考えて『装備；フーデッドケープ』で絞り込みかけれバ……。あ、これだとオイラも引っ掛かっちまうのカ……。

まあそういうプレイをした覚えは無いからオイラが混じってるのは除外するト……」

「推理するな、探すな、タグ機能を使って絞り込むな」

「いやー、誰かさんが検索システムを整備してくれたおかげで探しやすくて助かるナー」

動画コレクションの数が余りに増えたので、オートタグ付け機能などを実装して探しやすくした事をキリトは生まれて初めて後悔した。

「――おっ、見つけタ。アーちゃんが戻ってくる前に再生再生～っ」

後悔に打ちひしがれるキリトを他所に、アルゴは目的の動画をフォルダ内から見つけ出した。そうしてキリトの腕を枕代わりにして仰向けになると、天井方向に大型スクリーンウインドウを展開。ホームシアターで動画を見るような気軽さで、アスナの痴態が記録された動画を上映し始めた。

後に《ＫｏＢ》副団長として攻略組を率い、諸悪の根源もといヒースクリフ団長が７５層でキリトとのデュエルに敗北し、攻略組が下層

に戻れなくなってからもメッセージのやりとり等で《ＫｏＢ》を支えた傑物――アスナ。

文武両道。才気煥発。立てば芍薬、座れば牡丹、戦う姿は狂戦士（バーサーカー）。天に二物与えられてなお努力を重ねて更に十物ほどを手にしてきた彼女。

そんな彼女が実は箱入りお嬢様で、《ＳＡＯ》開始直後はオンラインゲーム全般における常識が欠けていた事を知る者は少ない。

「――今日は私の方が二体多く倒したから、私の勝ちでいいわよね」

「へいへい」

《ＳＡＯ》第一層。夜の帳が鋼鉄の浮遊城を覆う頃。

迷宮区の入り口から市街区へと続く道を、少年と少女が歩いている。細剣を携え、頭をすっぽりと覆うフードがついたケープで全身を覆った少女・アスナ。ロングコートの背に片手用両刃剣を背負った少年・キリト。

攻略組の最前線にいるプレイヤーである二人は、朝から今までぶっ通しで迷宮区に篭もってのレベリングを終えて、ようやく帰路についていた。

「というわけで、宿代とご飯代はそっちの奢りね」

「仰せのままに、女王陛下」

「うむ、よろしい」

つかず離れずの一定距離を保ちながら、二人は並んで歩く。迷宮内モンスターとの戦闘を繰り返した事による疲労はあるが、足取りは軽い。やがて『圏内』へと戻ってくると、二人の距離は自然と縮まり、どちらからともなく手を繋ぐ。周囲に他のプレイヤーがいれば冷やかしの一つでも飛んでくる所だが、拠点としているこの辺りはまだほとんど認知されていない穴場だ。

今日も今日とて誰にも見とがめられることなく、二人は宿屋へと辿り着いた。

「今夜もいつもの宿屋ですがよろしいですか、女王様」

「許します。ここのお風呂、結構気に入っているもの。……というか、そろそろ女王様はやめて」

「仰せのままに」
「それも」
一泊８０コルとリーズナブルでありながら、ワンフロア貸し切り、風呂付き、牛乳飲み放題サービス付きと値段の割に至れり尽くせりなこの宿屋は、ここしばらく二人の活動拠点となっている。
キリトはシステムメニューを開き、今晩の宿代を払う。８０コルが財布から消えるのと同時に、扉のシステムロックが外れる音がした。木製の扉を押し開け、アスナを中に招き入れてから扉を閉めて鍵をかける。
――これで、朝まで二人きりだ。
「ふぃーっ……今日もおつかれさん、アスナ。一番風呂どうぞ」
「ありがとう。でも……」
ケープのフードを下ろしたアスナが、細い指先を素早く動かしてシステムメニューを操作する。メニューの奥深くに隠された秘匿中の秘匿――『ハラスメント防止コード』。圏内で女性プレイヤーを守る絶対防御障壁。アスナは特に躊躇うことなく指を動かし、一部では『倫理コード』とも呼ばれるそのバリアをあっさりと解除した。
男と二人きり。外に悲鳴も届かず、自身では鍵を開けられない密室の中で。自らを守る最強の盾（じゃまなもの）を投げ捨てた。
「どうせなら、一緒に入らない？」
無用になったウィンドウを閉じたアスナは、抱擁を求めて両手を伸ばす。そのリクエストに応え、キリトは彼女を正面から抱きしめる。
満足げな「むふーっ」という吐息がどちらから発せられたのか、あるいは二人同時だったのかはわからない。確かなのは、倫理コードはしっかり解除されており、本来なら出るはずの通報ウィンドウは微塵もその姿を見せなかったという事だけだ。
――――きっかけは、些細な偶然だった。
それでも、振り返れば長い話になる。《ＳＡＯ》はまだ第一層すら突破できていないというのに。
《鼠》のアルゴの名を騙った何者かによるデマの拡散。その調査を

手伝うべく、キリトがアルゴと共に西の森奥地に向かった所、デマに引っ掛かった初心者（ビギナー）――もとい、アスナがモンスターに襲われて死にかけていた。

さっくりとモンスターを倒したキリトは、どうにか一命を取り留めたアスナをアルゴに託して去ろうとしたのだが、アスナに背を向けた瞬間、不意に天啓とでも言うべき直感に襲われた。

『こいつ（アスナ）をほっといたら、何日もぶっ通しで迷宮区に篭もってレベリングし続けた挙げ句、最後は集中力と体力を使い果たした所でモンスターに囲まれて死んでしまうのではないだろうか？』

まるで未来を見たかのような直感に襲われたキリトが立ちすくんでいると、アルゴからもらったポーションを飲んで回復したアスナが、キリトの裾を掴んで言うのだ。

強くなりたい、と。

デスゲーム開始直後、見捨ててしまったプレイヤーの事が頭をよぎった。また見捨てるのか、と内なる己がキリト自身を詰る声が聞こえた気がした。

結局、アスナの切なる願いを振り切って歩き出せる程の冷徹さを、キリトは持ち合わせていなかった。

その場にいたアルゴから攻略本を５００コルで――無料配布されていた事を知るのはしばらく後のことだ――買い、プレイヤーネームを聞いたら本名を公開するほどの超初心者・結城明日奈――もとい、アスナに渡して読ませる。

キリトとしては、とりあえずアスナが最低限の知識と実力を備えるまでは面倒を見て、そこから先の事はおいおい考えるつもりでいた。しばらくアスナのトレーニングに付き合っても、自身のレベリング速度に影響は出ないはずだ。なんなら夜の間にこっそり迷宮区あたりに行って追加でレベリングすればいい――そう考えていたキリトだったが、すぐに自らの考えの甘さを知ることになる。

『ふーん……ソードスキルってそうやって使うのね……。私の装備は《細剣》だから、こう構えて、こう突けば――できた！　これがリニアーね！　なーんだ、意外と簡単じゃない』

『もうコツ掴んでるよこの人……』

誤算その1。

アスナの成長具合は、キリトの予想より遙かに著しかった。

乾いた大地に水が染みこむかのように、アルゴの攻略本を読んでこれまで不足していた知識をぐんぐん吸収したアスナは、キリトが瞠目せざるを得ない程の速度で実力を付けていった。アルゴ曰く『このまま行けば間違いなくトッププレイヤーの一人になるヨ、この人』との事だったが、それにはキリトも同意せざるを得なかった。

『なるほど、これがスイッチ……こうやって連携することで、ターゲティングされる人を切り替えたりお互いの隙をカバーしながら戦うのね……。

キリトくん、もうしばらくここで練習していかない？。ポーション、まだまだあるでしょ？』

『そ、そうですね……。おかげさまでここまでかすり傷一つ負ってないので……』

誤算その2。

戦闘経験を積み、実力とレベルを伸ばし、装備を更新したアスナと暫定パーティを組んで戦っていると、狩りの効率が大幅に上昇したこと。それこそ、ソロの時とは段違いに。

一人でモンスター10体を倒すより、二人で30体倒した方が効率がいいのは当然の話である。しかも、アスナもキリトも成長していくため、二人で倒せる数は日に日に増えていくのだ。森に湧くネペントの群生だろうが、第一層迷宮区に湧くコボルト軍団だろうが、これまでとは比べ物にならない効率の良さで殲滅できるようになった。

『えーとですね、アスナさん。これはあなたの身を守るために必要な知識なので必ず覚えておいて欲しいんですけど……』

『なにいきなり畏まってるのよ』

『いやそのー、男子からすると少々話しづらい話題と言いますかー……。

と、ともかく。《ＳＡＯ》には、女性プレイヤーを守るシステムとして倫理コードっつうものがありまして……』

『倫理コードって、メニューにあるこれのこと？』
『そうそうそれそれ……え？　メニュー？　は!?　なんだよそれ!?』
誤算その３。
アスナが倫理コードの存在を知っていたこと――ではなく、倫理コードのオン・オフを管理するボタンがメニューの奥底に存在していたこと。そしてそれをアスナが知っていたこと。
βテスターのキリトですら存在を知らないボタンを、なぜアスナが知っているのかと聞いてみた所、曰く「『アーちゃんのおかげで５００コル儲かったから少し還元してやるヨ』って、アルゴさんが教えてくれたのよ」と宣った。
『そ、そうなのか……まあ、とりあえずオンのままにしてもらって……』
『――あっ。切(オフ)っちゃった』
『へ!?』
『……あれ？　なんか……新しいスキルが手に入ったみたいなんだけど、キリトくんこれ知ってる？　アルゴさんは何も言ってなかったと思うんだけど……』
『は!?　あ、新しいスキル!?』
誤算その４。
アスナが倫理コードを解除した途端、ユニークスキル『性行為』が手に入ってしまったこと。
そう。エクストラスキルではなく、ユニークスキル。《ＳＡＯ》にログインしているプレイヤーの中で、たった一人だけが習得できる超レアスキル。
アスナにメニューを見せてもらい、『性行為』のスキルメニューを開く。表示されたのは、大抵のスキル同様、熟練度５０ごとにＭｏｄ取得の機会が用意されたスキルツリーと、スキルそのものに関する説明文。
長々と書かれていたそれらの内容を要約すると――。
『性的興奮(えっち)を伴(なこと)う行為で経験値を獲得できる。熟練度も上がる』

『性行為中は疲労の蓄積が大幅に抑えられる』
『特定のプレイヤーをパートナーとして設定できる。パートナーとの性行為時、経験値の取得量が増加し、パートナーも同量の経験値を獲得する』
『一度設定したパートナーはパートナーの生死に関わらず変更不可』
『スキル保持者限定のクエストが発生する場合がある』
――ということになる。スキルツリーにもよるが、基本的には経験値ブースト用のパッシブスキルのようだ。とはいえ戦闘中に発動する類のものでもないし、ユニークスキルの割にはぶっ壊れ性能というわけではなさそうだ――そんな印象をキリトは抱いた。
このスキルの扱いをどうするか、アルゴには秘匿すべきか、そもそもスキルが覚醒した条件はなんだったのか云々――などとキリトが思案していると、突然目の前にメッセージウィンドウが開いた。そこに記されていた文言は実にシンプル。
『Ａｓｕｎａのパートナーに設定されました』
――という一言だけ。Ｙｅｓ／Ｎｏの選択肢すらでない絶対的決定事項。事情が分からないプレイヤーがこれを見ても、何のことか分からないに違いない。約五秒前に事情を知ったキリトすら、理解するまで数秒のタイムラグを必要としたのだから。
『……え？』
『よろしくね、キリトくん』
『えっ!?　はい!?　へっ!?　はい!?!?』
『その、《はい》は《Ｙｅｓ》と受け取っていいのかしら？』
『いえっ!?　えっ、はっ!?　いっ、いやそういうことではなくてですね!?』
『――《Ｎｏ》って言いたいわけ？』
『いや違う！　そういうことでもない、いや、なくてですね!?』
『……あー、もう！』
事の成り行きについていけていないキリトに業を煮やしたのか、つかつかと歩み寄ってきたアスナは、その勢いのままキリトを部屋のコーナーへと追い詰める。嫋やかな両手をキリトの顔の左右に伸ば

し、両の掌を壁にドンっと叩きつけてキリトの逃げ場を奪う。
　はしばみ色の瞳が、キリトを真っ直ぐに見つめ、射貫く。その眼光は、細剣の鋒よりもなお鋭い。
『キリトくん。何か……ものすっごく勘違いしてるみたいだから言っておきますけどね』
『は、はい……』
『私はこのゲームを一刻も早くクリアしたいの。全力で前に進んで戦い抜きたいの。こんなデスゲームなんかに負けたくもないし、諦めを抱えてどこかでゆっくり腐っていくなんてこともしたくないの。わかるわよね？』
『はい！　しっかり存じ上げております！』
『そのために利用できるものは何でも利用するってだけよ。アルゴさんの情報も、キミの力も、このふざけたユニークスキルだってそう。……キリトくんをパートナーにしたのも、現時点で一番信頼できる人だからよ。ただそれだけ』
　そこまで言い切り、アスナは深く息を吐く。目を合わせられなくなったのか、両手はそのままに頭だけをこてんと倒し、キリトの胸板に預ける。顔ごと視線を下に向けたまま、アスナはぽつぽつと言葉を紡ぐ。
『しょうがないじゃない、他に頼れそうな人なんていないし、キリトくんと同じくらい信用できて、私の事をわかってくれる人もいないんだし……。それにこれから先、キリトくん以上に信頼できる人間なんて現れない気もするし……』
『……うん？　ほんのり褒められてないか？　気のせい？』
『別に……私の命を助けてくれてありがとうだとか、戦闘の時はいつでも私のカバーに入れる位置に居るように気を使ってくれる優しさが嬉しいだとか、負けず嫌いのくせに私の奢りが続かないように時々トドメを譲ってくれるのはズルいよとか、なのに自分が奢りの時はなるべく美味しい物を買うためにお財布気にせず色んなお店回ってるよねとか、あのクリーム補充するためにこっそり買い物に行くんだったら一緒に連れてってよ、水くさいじゃない……とか、思ってないん

だから』
『あ、めちゃめちゃ褒められてるやつだこれ。……あと最後のはごめん』
言うだけ言ったあと、アスナはゆっくりと頭を上げた。二人の視線が、再び正面から絡み合う。刺突の様に鋭いはしばみ色の視線を、キリトは正面から受け止めた。その態度に何かを感じ取ったのか、アスナは壁に当てていた手を引っ込める。
キリトの左右に自由なスペースが出来たが、今更逃げ出すようなことはしない。丹田に力を込めるように軽く息を吐いて、改めて答えを返す。
『アスナ。さっきの答えだけど、い――』
『待って』
『んぐっ!?』
答えを言葉にしようとしたキリトの唇に、アスナの人差し指が触れた。
『散々焦らされたお返し。答えは……言葉じゃなくて、態度で表して』
キリトの言葉を封じ、アスナは人差し指をキリトの唇から離し、両手を後ろに回して眼を閉じた。どちらかといえば鈍い方のキリトだが、この状況で彼女がどんな答えを待っているのかは流石にわかった。
『アスナ』
もう一度名前を呼び、アスナの細い顎に手を添えて、ほんの少しだけ上を向かせる。言葉になるはずだった想いを全て届けるように、キリトはアスナと唇を重ねた。

――それから四日間。
二人の姿は街でも、フィールドでも、迷宮区内でも、どこだろうと一切見かけられることはなかった。
四日間、どこで何をしていたのか。その答えは至極簡単。セックスしていたのだ。ただ只管に、理性なき獣のように、滾る性欲と快楽に身を任せ、お互いの体を味わい肉欲を貪り尽くしていたのだ。

システムの防音効果を貫通しそうな程に激しく声を上げ、ベッドをぶっ壊す程の激しさで体を重ねていたのだ。

最後にして最大の誤算その5。

ＶＲ空間内でのセックスは、キリトやアスナが想像していたより遙かに気持ちよかった。理性の糸を容易く引きちぎり、男女の仲を一気に深め、繁殖という生物的本能を全開にしてしまう程に。

三日三晩、二人はぶっ通しで交わった。日頃のレベリングで鍛えた体力全てを使って、ただ只管にセックスを続けた。

『性行為』スキルによる疲労低減効果は、その文字列から受ける印象より遙かに強力で、二人は体力の続くまでただひたすらに男女の営みを続ける事ができた。システムが許す限りのありとあらゆる行為をした。

アスナの穴という穴全てに、キリトの精液が流し込まれた。無垢で穢れを知らなかったアスナの体は、頭の先から足の先までキリトの精液でマーキングされ尽くした。自慰行為すら経験していない初心なアスナは、キリトの唇で、指で、舌で、掌で、吐息で、太く長く雄々しい肉棒によって貫かれ、犯され、抱かれ、弄られ、狂わされ、幾度となく絶頂を味わわされた。誰が快楽を与えてくれる存在なのかを体に刻み込まされた。

宿屋のベッドルームも、風呂も、二人の体液で汚され、どこも例外なく性交の臭いが染みついた。

四日目の朝。とっくに気絶していたアスナと、精根尽き果てたキリトは、日の出と共に折り重なるようにベッドの上にぶっ倒れ、そのまま数日ぶりの睡眠を貪った。

二人が目を覚ました時、外は既に夜。汗と性臭とセックスの残滓を流すため一緒に風呂に入り――そこでまた欲情してしまい、交わりを重ねた。風呂場でアスナは散々陵辱され、ベッドルームでキリトの肉棒は貪欲に貪られた。朝方の睡眠によって回復した体力を使い、二人は再び明け方近くまで交尾を繰り返した。そして、また倒れるように眠った。

五日目の朝――と言い張るには少し遅めの時間帯。

再び目を覚ました二人は、辛うじて復活してきた理性を総動員してどうにか欲求を抑えつつ、一緒に入浴して互いの体を綺麗に洗い――別々に入るという発想は出てこなかった――今度こそセックスの残滓を全て洗い流すと、四日ぶりに宿の扉を開けて外に出た。

四日ぶりのまともな食事を摂取しつつ、お互いのステータスを確認する。二人揃って大量の経験値を獲得しており、レベルが数個上がっていた。さすがに経験値の稼ぎ具合としては日頃のレベリングの方に軍配が上がるが、かといってそれほど大きな差があるわけでもない。しかも、モンスター相手の戦闘とは違ってリスクはほとんどない。

今後、『性行為』スキルで獲得できる経験値量が増加するのか、増加するなら、レベルを上げるために必要な経験値量の増加においつけるのかという疑問はあるが――仮に追いつけるのであれば、これは相当なアドバンテージと言えるだろう。

なにせ、部屋に篭もってセックスしているだけでレベルが上がるのだから。

こうして、二人の日課は変わった。

日中はフィールドや迷宮区でモンスターを倒してレベリング。クエストやイベントがあればそちらの攻略も進める。迷宮区内やフィールドの安全地帯で休息しながら数日ぶっ通しで連戦――などという無謀な事はせず、体力的な安全マージンを確保しながら撤退。溜まったドロップ品を街で換金するついでに食料を買うなり、店で食事を済ませるなりしてから、いつもの宿屋へ。

そして、あくまで『効率よくかつ安全に経験値を稼ぐため』、明け方まで只管セックスする。

明け方まで、と限定しているのはなにも体力がそこらへんで尽きるからではない。やろうと思えば最初に体を重ねた時のように何日でもぶっ通しでセックスできた。そうしないのは、セックスに溺れてダンジョン攻略を疎かにしたり戦闘の腕が鈍るのを防ぐためだ。

カーテン越しにさし込む朝の光を合図に、同じベッドの上で数時間の睡眠を取る。ユニークスキルのご加護のおかげか、あるいは《ＳＡ

Ｏ》のシステム判定がゆるいのか、それだけで十分に体力回復ができた。

そしてまた、迷宮区へ。

こいつは十分にぶっ壊れスキルだった――そう、キリトは思い直さざるを得なかった。

戦闘。休息。性交。睡眠。そしてまた戦闘。休息。性交。睡眠。

《ＳＡＯ》の最前線で戦い続け、このデスゲームをクリアするためのデイリー・ルーティーン。

体を重ねるのだって、互いに互いの愛を求めた果ての結果ではなく、最高効率で己を強くしていくため。そう、ただそれだけのことなのだ。

少なくともアスナにとってはそれだけのこと――だったはずなのだ。

「――んうっ……♥　んぢゅうっ、ふうっ……♥」

溢れる吐息。絡み合う舌。こぼれ落ちる唾液。深く、溺れるようなキスの音が、バスタブに流れ込むお湯の音に混じってバスルームに響く。壁に付けられた獅子頭の口から溢れる湯は、二人分の体重を含んだバスタブには入りきらず、そのまま溢れ出ていく。

猫足のついた白いバスタブの中。バスタブに背を預けるキリトに正面から覆い被さりながら、アスナは彼の唇を貪っていた。両腕をキリトの首に回し、両胸が潰れるほど強く抱きつきながら、互いの舌と唾液を絡ませ合い、互いを味わう。

「んふっ、ふうっ……♥♥　っんむっ♥」

唇の端から零れた唾液が湯に落ち、混ざる。肉棒を雌穴に突っ込む前の、蕩けるように甘ったるいディープキス。その感触に、アスナの脳が沸騰する。子宮が疼き、自らがメスであることを再認識させる。

湯の中に浸かった二人分の体。下側にあるキリトの体がアスナを支え、アスナは股を大きく開いた状態でゆったりと上下させる。恥じ

らい無く開かれたヴァギナとアナル、下から屹立するキリトの肉棒に擦り付け、浅ましく交尾をねだる。明らかにお湯より粘度の高い液体が、肉棒に擦り付けられながら湯の中に溶けていく。

「――ぷはあっ……♥♥」

唾液の交換にようやく満足し、アスナは唇を離した。とろりとした唾液の橋が二人の間に架かり、ぷつりと千切れて落ちていく。

キリトの掌がアスナの背中と尻に回り、嫋やかにして肉感的な女体を自らの方へぐっと引き寄せる。十代の少女の体に残っていた僅かな幼さを連日の性交によって塗りつぶされた結果、今やオスによって育てられた立派なメスのそれとなったアスナの肢体。

均整の取れたスタイルの中に肉感的な魅力を織り交ぜた理想的な体、その肩から下を湯の中に沈めたアスナは、男の腕の中に抱き込まれながら甘い息を吐いた。

「……見て、キリトくん。今のでまた、『熟練度』が上がったみたいだよ」

アスナはシステムウィンドウを開き、自身のスキルデータを開示する。

「どれどれ……おっ、本当だ。スキル熟練度１９３……もうすっかり俺の『片手剣』スキルより高くなってるのか……」

「私の『細剣』スキルよりも高いよ。……半分はキミのせいなんだからね？」

アスナがくすくすと笑うと、入浴用に解いた髪がバスタブの中で揺れる。

血を呑む吸血鬼のようにキリトの首筋に唇を這わせたアスナは、汗と湯が入り交じった液体を舐め取りつつ首筋に口づける。どこか契約めいた仕草をしつつ、アスナは指でウィンドウを動かし、スキルツリー画面を表示した。

《ＳＡＯ》に存在するスキルは、大抵の場合、熟練度５０ごとに『Ｍｏｄ』と呼ばれる追加機能を獲得できる。各段階に至る度、複数の『Ｍｏｄ』選択肢が提示され、その中からプレイヤーが望む形式だ。『性行為』スキルもその例外ではなく、アスナは既に３つの『Ｍｏｄ』を取

得していた。

熟練度５０では、『精液変換』。

『圏内』にいる間だけ発動できるアクティブスキルで、一定量までの液体をパートナーの精液に変換できる。変換可能量の上限を確かめる機会は今のところ無いが、バスタブいっぱいのお湯を精液に変換する程度は可能であることは分かっており、アスナが時折ザーメン風呂に入浴する際に活用されている。

ちなみに、アスナのストレージの奥底に隠されたアイテム『エール用大型ジョッキ』は、このスキルを獲得したその日に購入したものだ。その名前に反して、現在までジョッキに酒が注がれたことはなく、専らアスナがジョッキザーメン一気飲みショーを披露したり、裸土下座している所に上からザーメンをぶっかけてもらう際に使用されている。

熟練度１００では、『決闘（デュエル）ルール追加』。

《ＳＡＯ》内の決闘システムに勝敗ルールを追加できるパッシブスキルだ。パートナーに対して決闘を申し込んだ時にしか発動しないという制限があり、完遂すれば微量の経験値とスキル熟練度が手に入る。Ｍｏｄとしては微妙な効果だが、他の選択肢は更に微妙だったため消去法でこれが選ばれた。

現状、このスキルで追加されたルールは以下の三つだ。

一つ目は『絶頂決着』。

相手より先にイッた方が負けという非常にシンプルなルールだ。このルールの特徴として『勝敗が決しても、勝者側がイクまで決闘が続く』というものがある。そして、その間の絶頂回数はそのまま敗北回数としてカウントされる。

たとえばキリトが一度射精するまでの間にアスナが１０回潮吹きアクメをキメた場合、アスナの１０敗（＝キリトの１０勝）としてカウントされる。

二つ目は『射精決着』。

これも単純なルールで、開始から２４時間以内に射精できれば男の勝ち、射精させられなければ女の負けとなる。これは『絶頂決着』と

は異なり、男側が射精すると決闘終了となる。

三つ目は『隷属決着』。

これはアスナが１００敗目を迎えた際に解禁された新たなルールだ。内容は少し変わっており、『パートナー（キリト）への隷属行為』をしたら、スキル保有者（アスナ）の負けというものになっている。

スキルの説明文によると、仮にアスナが１００勝していれば『パートナーへの支配行為をすれば、アスナの勝ち』というルールになっていたようだが、今更詮無いことだ。

このルールは『射精決着』同様、パートナーが射精したら終了となる。また、決闘開始前に『隷属行為の具体的な内容』を設定する必要があるが、その際『その隷属行為１回あたりが何敗分にあたるか』という設定をすることもできる。

現在、アスナが設定している隷属行為と敗北数は以下の通りだ。

１敗：キス（ペニス、金玉、アナル、足）。裸土下座（踏み付けてもらえたら＋１敗）。顔面踏み付け。フェイシング（自分の顔を男に擦り付けること。特にペニスや金玉など）。奴隷のポーズ披露（まんぐりがえし状態でヴァギナとアナルを開く）。マーキング（浴尿）。

３敗：ザーメンジョッキ一気飲み。全裸ペットプレイ（屋内）。飲尿。各種宣言（人権放棄、永久隷属、専属オナホ化、専用子宮とマゾ卵子で妊娠予約、リアル人生完全献上ｅｔｃ）。

５敗：アナルゼリー排泄。全裸ペットプレイ（屋外）。無様芸披露（エアセックスショー、ケツ振りレイプおねだり、チン媚び雑魚まんこ卑下、腋見せガニ股腰ヘコダンスｅｔｃ）。

ちなみに、追加された各種ルールを適用した決闘におけるアスナの戦績はというと――現時点で　５２戦　０勝　７０８敗　である。

熟練度１５０では、『ハンティング』。

飼い主の為に獲物を運んでくる猟犬のように、他のメスをパートナーに献上するためのアクティブスキルだ。アスナが献上したい女性プレイヤーを選ぶと、その女性プレイヤーの倫理コードシステムが、アスナとキリトに対してのみ無効化される。また、遠隔で装備を全解除することもできるようになる。

装備一式を奪い、通報できなくさえしてしまえば、あとは好きなように犯し放題になるというシンプルなスキルだ。ただ、今のところアスナのお眼鏡に適う女性プレイヤーはアルゴくらいしかいない。そのアルゴがなかなか隙を見せないため、スキルの出番はしばらくなさそうだ。

そして、もうすぐそこに迫った熟練度２００。そこで取得しようと考えているのが『アイテム生成（出産）』だ。

このスキルを取得すると、まずこれまでパートナーとセックスした回数に応じて現在の受精確率が設定される。そして一日に一度、受精確率に応じた抽選が行われる。そこで受精判定を引くと、妊婦モードが解禁される。妊婦モードを選択すると、アバターは臨月の妊婦めいたボテ腹に改変され、アイテム生成という名の出産が可能になる。出産が完了するとアバターは元の姿に戻され、受精確率は０％にリセットされるという仕組みだ。

生産されるアイテムはランダムで、ただの素材の事もあれば、『性行為』スキルの熟練に役立つアイテムの時もあるという。

「私の子宮でキリトくんの役に立てるのは嬉しいけど……」

「やっぱり不安か？　初めてで、最低十つ子確定だからなあ」

現在、『アイテム生成（出産）』Ｍｏｄの説明欄に表示されている受精確率は１０２１％。１００％につきアイテム一つが確定するため、アスナの出産予定数は１０～１１個となる。しかも今後セックスする度にその確率は増えていくのだ。

Ｍｏｄ未取得のためまだ大きくなることもないアスナの腹部を、キリトの手がそっと撫でる。湯の温かさと共に伝わる掌と心遣いの暖かさがアスナには何よりも嬉しい。

「不安ってわけじゃないわ。システム的に失敗はありえないし、『快楽出産』モードも選べるみたいだから、痛いどころか気持ちよくなっちゃいそうだもの」

「じゃあ、他に理由が？」

「やっぱり……せっかく産むんだったら、アイテムじゃなくてキリトくんの赤ちゃんがよかったなーって思っただけよ。

……ま、それは現実に帰ってからのお楽しみって事にしておきましょ」

アスナがそう囁くと、股の間に挟んだキリトの肉棒が、ぐぐっと動いた感触が伝わってきた。

（あっ……♥♥）

オスの交尾欲求の更なる高まりを肌で感じる。火を入れた蜜のような興奮が、子宮からアスナの脳髄へと奔る。

「も～っ……♥　今、想像したでしょ？　現実の結城明日奈に、種付けして、孕ませて……♥

キリトくん専用のメスだぞ～っ……って私の体にわからせちゃうところ♥♥」

キリトの体に抱きつき、耳元に唇を寄せて囁く。オスの理性を砕き、金玉で煮えたぎる精子をもっともっと増産させる。

「私はいいよ？　キリトくんの赤ちゃんだったら何人だって産んであげるから。それにキリトくん以外の男とセックスするくらいなら死ぬつもりだし。

たとえば、１０人くらい産んで……私とキリトくんと子供達で、６×２のレイドパーティ組むのも楽しそうだよね♥

キリトくんの濃くて重た～い精液なら私を孕ませるなんて簡単にできちゃうだろうし、おちんちんがムラついてセックスしたくなった時はいつでも声かけてくれていいんだけど……できれば、事前に教えてくれると嬉しいかな。

キリトくんのつよ～い精子達が、私の雑魚卵子を何個もまとめてレイプできるように……♥　海外からやっば～い排卵薬取り寄せて、許容量なんて無視してまとめ飲みしておいてあげるから♥♥」

結城明日奈は美人だ。自惚れではない。エテルナ時代の口さがない同級生達に『結城さんといるとナンパしつこそう』、『結城さんといると自分が引き立て役になったみたいで自信なくす』――と、影でこそこそ言われ続ければ誰でも自覚する。家族の付き合いで社交の場に出て、年上の男達から欲望の篭もった視線を向けられれば嫌でも自覚する。

そうして自覚した自分の美貌を、男の欲求を刺激して止まない肢体を、身についた可憐な仕草を、研ぎ澄まされた貪欲な思考を――今、たった一人の男を堕とす為だけに使う。

「もちろん、仮想世界でしたことは、全部現実でもしていいんだからね？

私の顔をキリトくんの足で踏み付けたり、おしっこでマーキングしたりとか……♥　裸に剥いた私の体中に、えっちな落書きいっぱいして……夜の公園までお散歩させるとか……♥♥

キリトくんのお部屋で『仮想世界でいっぱいバコハメしてもらった即イキ処女まんこ、キリトくんのリアルでかぶとちんぽ様で、永久敗北確定れ～ぷしてくださ～い♥』って、おねだりダンスショーさせても楽しそう♥♥」

自らの尊厳を切り売りし、磨り潰し、捧げる。己がどれだけ浅ましい表情を浮かべているかは、湯に映る自分の顔を見ずとも簡単にわかる。

「……あ、でもね。一つだけお願いしたいことがあって……」

「？」

「仮想世界のファーストキスは、キリトくんにあげたでしょ？　だから、現実世界のファーストキスは……キリトくんのちんぽにあげたいなーって……ダメ？」

おねだり代わりに、股の間の肉棒に自分を擦り付ける。熱く固くきり立つ肉槍の感触が心地よく、子宮が疼きを重ねる。排泄のためだけの器官であるならば、不便という他ない大きさ、太さ、長さ。であるが故に、そのサイズそのものを以て、メスを支配し、孕ませ、優秀なオスたる己の遺伝子を植え付ける事を第一とする器官であると証明する。

「『私は、女の子の大事な大事な、一生に一度しかないファーストキスを、キリトくんのおちんぽ様に捧げたド変態淫乱オナホ女です』……って♥♥

毎朝、鏡を見る度に思い出して……そして、誓いなおすの。『おちんぽ様に捧げたファーストキスを以て、私は、キリトくんの為に全てを

捧げる事を誓います』、『キリトくんがむらむらして、おちんぽ様がイライラしたら、いつでもどこでも喜んで股を開くデリバリーおまんこの務めを果たします』って♥♥

だから……ダメ？」

「うーん……さて、どうしたもんかな……」

アスナの尻を揉み拉きながら、キリトがわざとらしく思い悩んでみせる。無論、キリトに断るつもりがないことはアスナもわかっている。マゾメスのアスナがもっと気持ちよくなれるように、わざと焦らしているのだ。

「アスナの提案も悪くないんだけどな……。もう一声、何かあればOKしてやってもいいんだけどな」

「そんな……♥　もう少しって言われても……♥　これ以上あげられるものなんて……♥♥」

心と体と命は捧げた。一生分の卵子も真っ先に献上済だし、子宮も未来の赤ちゃん達で予約がいっぱい。人権と生存権はもちろん放棄済。財産権として現実の結城明日奈の貯金と、明日奈が将来得るであろう財産もお貢ぎ済。

（これ以上差し出せるものなんて……でも、どうにかしないとチンポキスさせてもらえないし……）

受験勉強時の数百倍、脳味噌を稼働させてアイデアを絞り出し、そしてはたと閃く。

――自分に差し出せるものが無いのなら、自分以外を差し出せばいい。

「……そ、そうよ！　それなら、私の学校の……エテルナの子を紹介……ううん、差し出すから！　私とおんなじ、女子校育ちの純粋培養でオス様に免疫ないまんこ穴、キリトくんが欲しいだけ用意して『おちんぽ様にご奉仕させてください』って土下座させるから！」

「エテルナか……確か、お嬢様学校なんだっけ？」

「そうそう！　一応エリート女子校だから、可愛い子も綺麗な子もよりどりみどり！　キリトくんの優秀なお精子様で孕ませる価値のある子だっていっぱいいるわ！

それに、意外とゲーム好きな子もいるのよ？　たとえば私の友達とか……そうだ！　今度紹介するから、味見代わりにレイプしてみない？　ね？」

必死になって友達を売り飛ばす。かけがえのない友人を、たかだかチンポにファーストキスを捧げる権利のためだけに。自らの存在を貶めていくその感覚が、マゾヒスティックな快楽に変わる。

やがて、アスナの懇願が功を奏したのか、キリトはようやく頷きを返した。

「そこまで言われちゃ仕方ないな。わかったよ、アスナ」

「キリトくん、わがまま聞いてくれてありがとう！」

「その代わり、ちゃんと可愛い子紹介してくれよな。……まあ、いくらエテルナでもアスナより可愛い子がいるとは思えないけど……」

「もー、そんなことありませんよ―。私より可愛い子、ちゃんと紹介するから楽しみにしててね♥」

お礼の代わりと言っては余りにささやかだが、アスナは再びキリトと唇を重ねた。甘く、重い、恋人達だけに許されるディープキス。互いの舌を絡ませ、唾液を攪拌しながらの睦み合い。

どれくらいそうしていただろう。どちらからともなく唇を離せば、いつものように唾液の橋が架かり、落ちる。

獰猛な光を湛えたキリトの瞳の中に、湯の熱と行為の熱に浮かされ、蕩けた媚笑を浮かべるアスナ自身の姿が映り込んだ。

「アスナ。続きはあっちにするか」

「……うん♥」

今日はベッドルームでセックスしようという合図に、アスナは肯定の意を返す。

「そうだ、アスナ。ハメる前に、現実（あっち）のファーストキスの練習しないか？」

「いいの？　キリトくんのおちんちん、『早くオナホまんこで射精させろ～』って興奮したまま、いっぱい我慢してくれてるのに……♥」

「我慢するよ。それに、そんな期待に満ちた顔してるアスナを放っておくほうがよっぽど悪い」

アスナの下から抜けたキリトが先にバスタブから出ると、湯の中にあるアスナの体を抱え上げてバスタブから出す。ほんの一瞬、互いの体が離れた寂寥を埋めるようにそのまま正面から抱きしめ合い、もう一度唇を重ねる。

（当たってる……♥　熱くて、おっきいのが……♥♥）

アスナの下腹部にぐいぐいと押し当たる肉棒の感触。

パブロフの犬がベルに反応するように。オスのペニスが孕ませる価値のあるメスに反応するように。アスナも、アスナの体も、アスナの子宮も、その全てを捧げたオスとそのペニスに反応し興奮する。今この場で挿入されたとしても何の支障も無い程に。

仮想世界のシステムとは便利なもので、ある程度の時間風呂の湯から出ているだけで自然と体が乾く。その時間が過ぎるのを待つ間――それを過ぎても尚、二人はキスを続けた。

メインベッドルームに鎮座するベッド。アスナは風呂上がりの裸のまま、その横の床に正座した。

「キリトくんは、そこにどうぞ」

ぽんぽん、とベッドの上を叩いてキリトを促す。アスナが丁寧に三つ指をついて姿勢を整える間に、キリトはベッドに腰を下ろして両脚を軽く開く。アスナがこれからすること――『現実（リアル）でのファーストキスの練習』をするために。

玉座に君臨するかの如く、ベッドに座る。自然、アスナの眼前に突き出される、ぎちぎちに勃起したキリトの剛直。見ているだけで子宮が疼く。既に十回以上の妊娠出産予約済の体が、もっと孕め、もっと使われろと叫ぶ。

（ああ……♥　素敵……♥♥　カッコいい……♥♥♥）

ペニス越しにキリトを見上げ、肉棒越しにキリトに見下ろされる。オスは上に、メスは下に。立場をはっきりと理解させてもらえる喜びが、マゾメスの全身を駆け巡る。

アスナの顔より長いキリトの肉杭は、その太さを以てアスナの視界範囲を削り、雄々しい陰を作る。風呂から上がったばかりだというのに、キリトのペニスからはオスのフェロモンがたっぷりと匂い立っていた。

本当なら今すぐにでも裏筋を舐め、玉袋をしゃぶり、顔を擦り付け、幾度も幾度も口付けを捧げ、肉棒を咥え込みたい。ただ、それをするのは大事な『練習』が終わってからだ。

天井方向へ反り返ったペニスの下に顔を持っていったアスナは、肉棒に触れるか触れないかのぎりぎりまで鼻先を近づける。肺の中の空気をたっぷりと吐き出し、鼻から思い切り吸い込む。

「……～～～～っっっ♥♥♥」

男性器独特の香りが鼻腔を撫で回し、気道を通ってアスナの肺へ充満する。毛細血管で二酸化炭素と交換されたオスの香り付き酸素は、高鳴る心臓の鼓動によって送り出されアスナの全身を駆け巡っていく。それを二度、三度と繰り返し、体内をオスの香りでセルフマーキングしていく。

オスの臭気を満足するまで吸い込んだあと、アスナは息を止めたままゆっくりと頭を下げて床に付けた。一分の隙も無駄も無い、美しく崇高な裸土下座。チンポ臭に満ちた空気を肺の中に溜めたまま頭を下げ続け、オスへの敬意を態度で示す。

「……っ♥」

肺の中の酸素が消費されていく。そのまま息を止められる限界まで頭を下げ続け、息が尽きる寸前になってようやく頭を起こし、再びチンポ臭に満ちた空気を取り込む。

酸素を求めて暴れる心肺に、オス様のフェロモン付きの新鮮な空気を送り込み、再び全身に届けさせる。そうして呼吸を整えたあと、ペニス越しにキリトを見上げながらアスナは口を開いた。

「宣誓(せんせ～い)♥」

厳かに、しかし甘ったるく。セックスすることとチンポのことしか考えていないことが伝わるように、声に欲情を絡ませながらアスナは誓いの言葉を紡ぐ。

「私、結城明日奈は、これからキリトくんのオスチンポに支配されるメスマンコ共を代表し、ここに誓います♥
私達は、キリトくんに私達が持つありとあらゆるものを捧げます♥
♥
キリトくんがむらむらして、おちんぽ様がイライラしたら、いつでもどこでも喜んで股を開いておまんこ奉仕するデリバリーオナホ穴としての務めを果たします♥♥」
顔はペニスの下に。胸は金玉より下に。体と心と立場はオスの下に置いて、アスナは誓いの言葉を捧げる。今はアスナ一人だけを相手にして満足しているこのチンポだが、その程度で収まるような器ではない。十人以上のメス達を好きなように犯し、使うようになるまでそう時間はかからないだろう。何より、アスナが捧げると誓ったエテルナ女子達の件もある。
そういった未来の『穴』達の代表が、たまたまアスナだったというだけだ。
「その証として、私の、大事な大事な、一生に一度しかないファーストキスを……キリトくんの逞しいおちんぽ様に捧げます♥」
アスナは静々と体を引いて、顔を肉棒の先へ持っていく。子宮口を抑え込み、子宮に精子を叩き込んで支配する為に存在する亀頭。その正面に己の顔を差し出し、鈴口と唇の高さをそっと合わせる。
同時に、キリトの両膝に自分の手を置く。アスナのために開かれた脚の内側に掌を滑らせ、膝と足の付け根の中間付近で手を止め、アスナ自身の体を支える柱代わりにする。
そうして目を閉じ——顔をほんの少しだけ、前へ。
「んっ……♥♥」
婚姻の口付けを交わす穢れ無き花嫁のように、アスナは勃起したペニスの先端に唇を捧げる。艶やかで美しい唇は、グロテスクで醜悪なオスの欲望に穢される。
たっぷり数十秒、チンポとの口付けを交わす。そうしてから少しだけ顔を引き、唇を離せば、唾液の代わりに我慢汁が糸を引く。アスナがゆっくりと瞼を上げれば、見下ろすキリトと視線が絡んだ。

「ファーストキス、もらってくれてありがとう♥　……それじゃ、いつも通りおちんちん気持ちよくしてあげるね♥」

キリトを見上げながら、アスナは口を大きく開けて舌を伸ばす。オーガニック野菜中心の健康指向かつ高級・高品質なメニューばかりを供され、繊細さと上品さ、そして美食家はだしの正確な味覚を育てられた薄ピンク色の舌。その先端から、たちり、たちりと唾液が落ちる。

男性器を舐め回すことなど一切想定されていないその舌の表面を、アスナは目の前にある肉棒の先端へ、べっとりと押し当てた。

（はあんっ……♥　キリトくんのチンポ……美味しい……♥♥）

それはさながら、契約書にハンコを押印する時のような厳かさ。アスナの柔らかな舌は、張り詰めた亀頭を優しく受け止め、迎え入れる。これまで味わってきたどんな料理よりもアスナの舌を喜ばせる肉の感触。本能を刺激し、メスを簡単に狂わせる味を舌の上で堪能する。

はしばみ色の瞳で愛しいオスを見上げたまま、アスナは舌先を持ち上げるようにして亀頭から裏筋へと続くラインに舌を這わせる。

（いただきまぁす……♥♥）

伸ばした舌をガイドレール代わりに使いながら、アスナは上体を軽く倒して顔を前に進め、長いペニスを少しずつ飲み込んでいく。柔らかな唇で肉棒を包み込み、吸い付き、匂いそのものをこそげ取るように咥え込んでいく。

「んぉ〜……んぶふぅっ……♥♥」

（ちんぽ、ぶっとすぎ……♥　喉だって、何回も入れてるのに……みしみしってこじ開けられる……♥）

体を、顔を前に進める度に、杭のようにぶっとい肉棒がアスナの細い首を内側から拡張する。えづきながらもなんとか飲み込めているのは、夜ごとの研鑽の賜物だ。

（――あっ♥♥）

半ばまで咥え込んだところで、キリトの両手がアスナの頭に触れた。命令に従えたペットを褒めるような手つきで頭を撫でられ、アスナはそれだけで達しそうになる。

この手はアスナがよく奉仕出来ていることへの褒賞であり、そして、『これからイラマするからアスナは自分の手を好きにしていていいぞ』というサインでもある。

了解の意を表すために、アスナはキリトの内ももに置いていた手を戻し、自分の股間へ持っていく――のを待たず、キリトの手がアスナの頭を力強く引き込んだ。

「んごぶぅ〜〜ぅ〜〜っっっ♥♥♥」

チンポの形にこじ開けられる喉。膣穴と異なり、ペニスを受け入れる前提で進化している穴ではないというのに、アスナの喉はキリトのペニスによる蹂躙を喜んで受け入れる。簡単に白旗を揚げ、心からの従属を以て隷属する。

「ぶふぅっ!?」

（ちんぽ、のっ、根元までっ・・・・・・♥　力尽くで、押しつけられて……息、できなっ……♥♥）

肉杭の太さと硬さによって食道が押し広げられた対価として、気道が絞られ呼吸量が下がる。鼻先はキリトの下腹部へと埋められた事で、更に空気の流入量に制限がかかる。

先ほど、アスナがチンポキスに費やしたのと同じくらいの秒数、キリトの手はアスナの頭をしっかりと抑え込み、オスの股座へと押し込み続ける。最初のチンポキスを恋人達の甘酸っぱいバードキスだとしたら、このイラマチオは発情しきったオスとメスによるディープキスだ。

（しっ、死〜〜ぬっ♥死んじゃうっ♥　ちんぽに窒息させられて死んじゃう♥♥　ダメ、だめだめダメ♥♥　こんな幸せな死に方だめ♥♥♥　死んじゃったらキリトくんの赤ちゃん産めないし、セックスできなくなるからだめぇっ♥♥

いっ、息っ、しなきゃ♥　キリトくんの汗と、ちんぽ汁の匂いまみれの空気吸って、生きなきゃっ♥♥）

「んふーうっ♥　ふぶぅーっ♥♥　ぶひゅーっ♥♥」

股間に顔を固定されたまま、アスナは文字通り必死に呼吸を繰り返す。半ば反射的に動いた舌は、口の中を制圧した肉棒に媚びるように

這い滑り、艶やかな唇の端からは溢れた唾液がぼたぼたとこぼれ落ちていく。ようやく目的地に辿り着いた両手の指で、自分の雌穴をぐちゅぐちゅと掻き回し、チン媚び窒息イラマオナニーしているアスナの姿は、これを無様と言わずしてなんと言おう。

粘つく水音と荒い呼吸音をＢＧＭに、アスナはキリトを見上げる。マゾヒスティックな悦びを覚えたはしばみ色の視線と、サディスティックな光を湛えた黒い視線が空中で絡み合う。

その視線の絡み合いを、あるいはアスナのマゾオナニーが一度目の甘イキを迎えたのを合図に、キリトはアスナの頭を抑え込んでいた手の力を弛め、アスナを己の股間とは逆方向に引っ張って解放――するような事はせず、叩きつけるように前後させ始めた。

「んぶぉっ♥　ごぼぺえっ♥♥　んぶぉっ、っっんぶふぉお〝っ――お〝ぉおぉっ♥♥」

脳がシェイクされる。喉奥が突かれ、ごりごりと抉られる。舌が裏筋に踏み潰される。ローション代わりの唾液が溢れ、飛び散る。アスナの口も喉も全て、キリトのペニスを気持ちよくするための道具として使われる。

鼻先はキリトの下腹部に、下顎はキリトの金玉に。顔の構造をもオナホの付属品として使われ、呼吸を遮られ苦しむ姿すらオスを興奮させる材料（オカズ）として使われる。

（ザーメンコキ捨てたくて、イラッイラしてるオスチンポさま♥　すき♥すてきっ♥　メスのこと、精液出すための穴扱いする王様ちんぽっ♥　こんなっ、こんな乱暴にっ♥おくちまんこ使われたら……だめぇ、惚れ直しちゃう♥♥もっともっと好きになっちゃう♥♥

ぜったい、絶対キリトくんのオナホおよめさんになるっ♥♥　いつでも使い放題のまんこ穴にしてもらうんだからっ♥♥

だって、だって、こんなでかちんぽおしゃぶりさせられて、オス様のこと好きにならないメスまんこなんているわけないんだからぁっ♥♥♥）

脳神経に快楽が回り、脳細胞にチンポ臭が染みる。人間の尊厳を捨てて初めて立ち入ることの出来る、快楽の奈落に堕ちていく。

フェラチオの時はもちろん、シックスナインの時もある程度はアスナにコントロール権があった。顔を擦り付けるためにペニスから口を離したり、金玉をマッサージする間にチンポキスに移行する事も出来た。

だが、こうしてイラマチオされてしまった今、アスナに出来ることはほぼない。あるとすれば、喉を必死に開いて太い肉の柱を受け入れ、肉棒が通りやすくなるように唾液をどばどばと分泌し、裏筋を舌でマッサージしながらちんぽをしゃぶりつつオナニーすることぐらいだ。

「おぶふっ♥♥　ぶふぇっ♥♥　んごぉっ♥♥」

「あー……一回出すぞ、アスナ」

射精予告の直後、アスナの顔を前後させるペースが一気に加速した。文字通りのオナホールとして使われ、精液を吐き捨てるための穴へと堕ちたアスナの喉の中で、限界寸前の肉棒が更にぐぐっと膨張する。

（くるっ♥♥くるぅぅっ♥♥　喉まんこぶち抜きお射精来ちゃうぅっ♥♥♥）

オナニーに耽っていたアスナの雑魚まんこが、ペニスより一足先に絶頂を迎え、床に向けて潮を噴き出す。

それを合図にしたかのように、キリトはアスナの顔をより一層深く引き込み、喉奥深くへと突き込んだペニスから煮え立つ精液を解き放った。

「ん〝っ――ぶう〝っ!?　ぶぅぅうっ♥♥　ん〝ぐぅぅうぶっっう〝ぅうぅ〝ううぅっ♥♥♥」

アスナの細い喉をみしみしと再拡張しながら、どくっ、どくっと蠕動するペニス。そこから容赦なく吐き出される精液を、アスナは必死になって飲み下していく。

（～～～～♥♥♥　おほっ、せーえき、すごひぃっ♥♥　おぼれっ♥おぼれるっ♥♥　重たくて、濃くて、いっぱいで……♥♥　こんなに飲んでるのに、それ以上に射精がすごくて♥♥　おくちっ、のどまんこっ、おぼれちゃう〝ぅうっ♥♥）

酸素不足。気道圧迫。食道封鎖。大量精飲。押し寄せる快楽信号のオーバードーズがアスナを狂わし、壊す。

アスナの胃袋に直に精液を流し込むような、深い、深い、ディープスロート。アスナが必死に飲み下すよりも、多く、勢いのある射精。

普段のシックスナインやフェラチオなら、口の中に精液を溜める段階を経ることで全て飲み込むまでの時間を確保したり、射精のタイミングをアスナがコントロールすることで対応できた。ただ、今回のイラマチオは完全にキリトの手によるもので、アスナにそれを制御する術はない。

まるで膣内射精をされた時のように、飲みきれなかった精液が僅かな隙間から逆流して口から溢れだし、あるいは気道を駆け上って鼻から逆流する。そうして溢れ出たアスナの唾液交じりの精液は、そのままキリトの肌に、ペニスに、あるいは金玉にべっちゃりと付着する。

「んぐぉっ♥♥　んぶぉっ♥♥　ぶふっ――んおぉっ♥♥　んぶごおぉっ♥♥♥　ごぎゅっ、ごぎゅうっ♥♥」

苛烈な精液臭と呼吸阻害によって意識と理性が朦朧としていく中、アスナは反射的に精液を飲み下し続ける。砂漠を何日も彷徨った旅人がやっとオアシスを見つけた時のように、ごくっ、ごくっと喉を鳴らし、一滴でも多くの精子を迎え入れるべく必死に飲み干していく。

喉粘膜に絡みつく特濃精液。それを飲み干そうとする必死の動作が、肉棒を刺激しより精液を吐き出させる。

そうして、アスナにとっては永遠とも思えるほどの時間が過ぎたあと。

どくんっ、と。最後の一跳ねを為し、ようやく一発目の射精が終わった。

（おぉっ……♥♥　いっぱ、い……♥♥）

精液に、酔う。酔わされる。オスの股座にぴったりと顔を押しつけられ、命を握られ、呼吸を封じられながら――アスナはもう一度、絶頂に達した。

酩酊した瞳でキリトを見上げていると、一発分を出し切ったキリトの腕がゆっくりと動き、アスナの口から肉棒が引き抜かれた。

「――うぶっはあっ♥♥　ごほっ、はあっ、はあっ……♥♥」

しばらくぶりに味わう新鮮な空気。精液の匂いが絡みついた酸素を吸い込みながら、アスナはどうにかこうにか呼吸を整える。目の前には相変わらず勃起したままのペニス。アスナの唾液と、アスナが飲みきれなかった精液をまとう肉の柱。キリトの股間部も同様の有様で、溢れた唾液と逆流した精液がアスナとキリトの間に幾筋もの橋を作っていた。

「はあっ、はひっ……♥　はーっ、はあっ……。ぶっ、ぶっ濃い精液、ごちそうさまでした……♥♥

アスナの、はあっ、おくち、まんこ……♥　でかちんぽ様でご利用いただき、ありがとうございま～す♥♥」

胸元には溢れ出した精液の溜まりを。鼻には逆流した精液で作った風船を。好き放題イラマチオされたことがはっきりとわかる無様な姿のまま、アスナはキリトに対して礼の言葉を述べた。

もちろん、使ってくれたペニスへの感謝を込め、亀頭の先に優しくキスすることも忘れない。ちゅっ、ちゅっ、と優しく二度。

「きっ、げほっ……♥　げぷぅっ……♥　きれいに、するね？」

「頼むよ、アスナ」

許可を得て、アスナはキリトの股座に顔を埋める。まずはペニスの根元と金玉に付着した液体の掃除。根元部分に舌先を伸ばして痕跡を舐め取ったあと、金玉にはキスする時と同じように唇を触れさせていく。先ほど亀頭にしたものと同様、これは掃除というより、どちらかといえばたくさん射精してくれた事への感謝を示す意味合いの方が強い。

キリトの手に頭を撫でられつつ、股座部分の掃除を終える。そのまま、ペニス部分に付着してた精液を丹念に舐め取り、飲み込む。どうせすぐにまた汚れるのだから掃除は最低限でいいが、射精してもらった精液をそのままにする事はできない。全て丁寧に舐め取り、飲み干す。

最後に、自分の胸元に出来た精液だまりを掬い取って飲む。そうして口の中をぐるぐると舐め回し、僅かな痕跡すらも残さずこそげ取

る。そして、アスナは自分の口に指を突っ込むと、左右に大きく広げて口内に何も残っていないことをアピールした。
「おひょうひ、ふぁんひょ～……♥」
「よくできました」
ご褒美代わりにキリトが唾を吐き出す。下方向へ勢いよく飛んだそれは、狙い過たずアスナの口の中へ。今し方飲み干した精液とはまた異なったオスの体液を下賜された悦びと共に、受け取り、味わい、自身の口内全体に行き渡るように舌を動かした。
そうして、アスナが満足したのを見計らい、キリトは彼女の体を抱え上げるとそのままベッドに仰向けで寝かせ、後頭部に枕代わりのクッションをあてがう。キリトが何をしたいのかをアスナが察するには、それだけで十分だ。
「……キリトくん……♥」
自分の膝裏に自分の腕を回し、引っかけるようにして持ち上げる。自分で自分の脚を閉じられないようにして、イラマ中にイッたマゾメス穴を晒す。厳しく育てられた良家のお嬢様が、興奮と期待に蕩けた笑顔を浮かべ、荒く早まった呼吸と共にしていい姿勢ではない。
そんなアスナの上にキリトが覆い被さる。そっと、しかし力強く、アスナの体を押さえ込む。するりと抜けたアスナの腕と入れ替わるようにメスの膝裏に両腕を回し、脚の間に上体を通し、絶対に逃げられないように固定する。
メスとしての本能なのか、あるいはマゾヒズムの発露なのか、それとも単なる嗜好なのかは不明だが、アスナはオスに抑え込まれる体位を好んだ。
アスナの好みを満たす体勢のまま、キリトは剛直の先端を雌穴の入り口に宛がう。ぐちゅり、という粘ついた水音が響き、ほんの少し触れただけでも愛液が溢れ出す。
「アスナ」
甘く優しい挿入予告。
もう自分の脚を押さえる必要もなくなったアスナは、空いた両腕をキリトの体に回して抱きしめ、肯定の意思を伝える。

凶暴な性能のペニスとは正反対の気遣いに喜ぶアスナの耳元で、キリトは囁く。

「――あと１０人、孕ませてやる」

「っ♥♥♥」

処刑宣告。

その言葉でアスナの脳が灼けるのと共に、キリトのペニスがアスナの膣穴に突き込まれる。オスの力と体重をしっかりと載せた一撃は膣道をいとも容易くぶち抜き、子宮をぐりっと押し上げた。

「お〝――っお〝おおぉおお〝おおっっうっ♥♥♥♥♥」

（――――～～～～～～～～♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥）

キリトの下でアスナの体が跳ねる。悶える。その動きも全て、キリトに抑え込まれる。

種付宣言に灼かれた脳に流れ込む、子宮が陥落する快楽信号。視界が明滅し、思考が吹っ飛ぶ中、セックス慣れしたマゾメスの体はあっさりと絶頂してみせることでチンポへの白旗を上げた。

「おーおー、エグい顔しちゃって……。おーい、アスナー」

舌をだらりと伸ばし、瞳の焦点も定まらないアスナを抑え込みつつ、キリトはゆっくりと腰を引く。アスナの口が付けた唾液と、アスナの膣穴が付けた愛液で根元までコーティングされた肉棒が露わになる。

「――帰って、こい！」

そして再びアスナの中に消える。

どちゅんっ、という金玉がアスナの尻にぶつかる音。そして、膣内イキの酩酊状態からペニスで子宮をぶん殴られ、無理矢理覚醒させられたアスナが上げる悲鳴の音。

「――お〝っっっっぎひぃぃぃっっっっ♥♥♥　ひぃっ、ひぃぃ〝いいぃ〝っっっ♥♥」

絶頂の中に突き上げられていたアスナの意識がどうにかこうにか降りてくると、キリトは彼女と唇を重ねた。抵抗しないアスナの唇を開き、舌をねじ込み、上から一方的に唾液を流し込む。

「ん～～～むっ♥♥　んぶむうっ♥♥　んぷっ♥♥　む～っむううっ♥♥♥　」

（～～～♥♥　はんそくっ♥　これ、反則ぅっ♥♥　ぐちゅぐちゅのディープキスしながら、チンポで子宮ぐりぐりするのずるぃいいっ♥♥　メスまんこ、堕ちる♥♥　こんなの簡単に堕ちちゃうぅうっ♥♥

すき、しゅきしゅきしゅきぃっ♥♥　キリトくんのっ、キスハメデカチンセックス♥♥　すきすきすきぃいっ♥♥）

もし《ＳＡＯ》に好感度レベルパラメータがあったら、アスナのそれは今凄まじい勢いでレベルアップしているだろう。もっとも、とっくにカンストしているので数値上の変化は無いだろうが。

アスナにたっぷりと唾液を飲ませたところで、キリトがキスを中断する。

「お帰り、アスナ」

「おひいっ、いひぃっ……♥♥　た、ただいま……♥♥」

そうしてアスナが『戻ってきた』ことを確認したキリトが、再び腰を前後し始めた。単純な肉棒の出し入れ。その動きだけで、アスナはあっさりと堕ちていく。

「お〝っ♥お〝っほお〝ぉ♥お〝っおお〝っおおお〝おおぉ〝おおっっっ♥♥♥　きり〝っ、きりとぐん〝っ♥♥　だめ、いま、だめえ〝っ♥♥　いっ、イっだばっかり〝だかりゃあ〝っ♥♥　またすぐイっぢゃうかりゃああ〝ぁ〝あっ♥♥」

（どちゅんっ♥どちゅんっ♥ってデカチンピストンすごいいいっ♥♥　おまんこどんどんバカになるぅうっ♥♥　最強ちんぽにバコられて雑魚まんこまたイく♥イくっ♥♥　イっ――♥）

絶頂寸前のアスナにキリトが腰を密着させ、もう一度ポルチオを責めた。度重なるセックスで開発されきった性感帯を責められて、アスナが耐えられるはずもない。

「――イっ♥♥いぃひぃっ♥♥　いぐイぐいっっっぢゃうぅうう〝ぅうう〝ぅうう〝ぅうっっ〝っ〝♥♥♥」

外からはキリトの体、内からはキリトのペニスによってがっちりと

抑え込まれたまま、アスナの体がガクガクと痙攣する。キリトに抱え込まれた両脚、その爪先がぴんっと伸び、小刻みに揺れる。股座から噴き出した潮をキリトの下半身にびちゃびちゃと浴びせ、焦点の合わなくなった瞳で無様なアヘ顔を晒しながらキリトの耳元で喘ぎ声を上げる。

「お゛っぅふう゛ぅうう゛ぅうぅっっ♥♥♥　いぐいぐいっ――ぎゅうぅうう゛ぅうぅ゛ぅうぅっッ♥♥♥」

「またイッたのか、アスナ。何回でも気持ちよくしてやるからなー」

一方で、キリトの方は相変わらず余裕の状態だ。メスがイッた時独特の膣内のうねり、その感触をペニスで堪能しつつ、体と両腕でアスナをがっちりとロックする。

こうなってしまえば、もはやアスナに状況をどうこうする手立ては残っていない。

「お゛ぅぅ♥♥　お゛っ♥　お゛っ……♥♥　はひゅーっ、はひゅーっ……♥♥」

（～～～～っ♥♥　まっ、また、イッた♥イッちゃった♥♥♥　ながくてぶっといチンポで子宮どちゅどちゅされて♥　カリ高チンポでおまんこごりごりされて♥　簡単にイかされちゃった♥♥♥　完全にイキ癖つけられちゃった♥♥♥）

キリトの下に組み敷かれたまま、荒い呼吸を繰り返す。乱れた髪を汗の浮いた肌に貼り付かせ、股の間からびしゃびしゃと潮を噴き出しながら。

肉棒に容赦なく陵辱され、絶頂へと登り詰めさせられる。そうしてアスナが全身をひくひくと痙攣させて無様にイキ散らかしている間、キリトは腰の動きを抑え、アスナがそこから降りてくる為のインターバルを作る。そうして、快楽の中に溶けていたアスナの意識がどうにか帰ってくると――再び、肉棒を使ってアスナを責め立てる。

陵辱。絶頂。休息。メスをよがらせ、狂わせ、壊すためのセックス。

愛しいオスに全身まるごと抑え込まれ、あらゆる快楽情報を全身で受け取らされるセックス。

絶頂する度に、アスナはよりイキやすくなる。アスナがイく度に、

キリトはインターバルの時間を少しずつ削っていく。それを繰り返していけば、アスナに待ち受けるのはただ只管イかされ続けるだけの幸せな時間だ。

「お〝ぉ〝っお〝っ〝お〝ほぉおおぉお〝おぉ〝おおっっっ♥♥♥ふひゅっ♥　いぐ♥イっでりゅ〝♥♥　たしゅけ、たしゅけへえ〝っ♥♥　お〝ぅ♥あ〝ぅっ♥♥　しきゅー♥どっちゅ♥♥どっちゅ♥♥　だっ、め、だめえぇ〝え〝ぇっ♥♥　いぐいぐいぐうぅうぅうっ♥♥♥」

（あ〝っ、だめ〝♥♥　これ〝♥　さっきから、ずっと♥♥　い〝っ、イッてる〝のに〝♥♥　キリトくん♥ぜんぜん、にがして、くれない♥♥）

（ちんぽで、ぶっこわされちゃうやつ♥♥　すき♥すき～～～っ♥♥　いっぐ♥イくっ♥　イってるのにまたイく♥♥　いまも♥さっきも♥　いっぱいいっぱいイってるのにまたイぐいっぐイ〝っぐうぅ〝ぅう〝ぅう〝うっっっ♥♥）

（――――～～～♥♥♥　お〝ほっ、ひぃっ♥　まっ、また……トんじゃってた♥♥

キリトくんのでかちんぽで、おまんこの奥まで、どっちゅんどっちゅん♥杭打ちパワーピストンされてぇ♥♥　おもた～い金玉を、ばっちんばっちんってお尻に叩きつけられてぇ♥♥　イッたばっかりでふわふわしてるあたま♥♥　ちんぽでたたき起こされるのきもちいい♥すき♥しゅきぃ♥♥）

ドが付くほどに下品な喘ぎ声を上げながら、脳味噌の隅々まで行き渡る本能的な快楽を味わう。メスとしての至上の喜びを与えられながら、体を震わせ、イキ潮を噴き出す。

幾度も幾度も絶頂を繰り返すアスナを犯し続けるキリト。そのピストン運動の動きが加速する。アスナのまんこを隅々までカリで抉る為のロングストロークから、Gスポットを連続で殴りつけるハイスピードストロークへ。

（あっ♥くるっ♥くるうっ♥♥　本気の種付けお射精♥♥　きちゃううっ♥♥♥）

淫水を噴き出すアスナの体を押さえ込みながら、キリトは最後の一突きをアスナの膣奥へ深々と突き刺し――餓えた子宮に、大量の精液を叩き込んだ。

「――お゛ッッッほぉおぉおぉ゛お゛ぉ゛おお゛おおお゛お゛っっっ♥♥♥　イ――っぐぅうっぅうっぅぅっううっぅううっうっ♥♥♥　お゛っお゛っおぁああ゛っあ゛ぁ゛っあ゛ぁ゛あ゛ぁ゛ぁあ゛あぁぁあっっっ♥♥♥　イ゛っで、いっ゛てる゛ぅう♥♥　いぎじに゛ゅ゛っ、いっぐぐうぅうぅう゛ううう゛ぅう゛う♥♥♥」

（――～～～～～～っっっ♥♥♥♥　あ゛っあ゛っあ゛っぁあ゛ぁああ゛っ～～～～っ♥♥♥♥

んぎいっ♥♥　ぎっ、と、ぎとの♥♥　特濃、オスさま、ザーメン♥♥♥　しきゅーに、どくどくっ♥どぷどぷっ♥♥　なっがい、ぶっといオスちんぽ様♥♥　びくびくって動かして♥♥　孕ませるって、まんこ征服して負けさせるって♥♥♥　勝利宣言マーキングしてるぅうぅっ♥♥♥

子宮、しきゅー、灼ける♥♥　あっつあつどろっどろの孕ませ汁でおなかいっぱいにされて♥　雑魚卵子集団レイプされて♥　マゾ子宮よろこんじゃうぅう♥♥　あっ♥　やあっ♥またイク♥♥　ず～～～っとイってるのに♥せーしどくどくどぷどぷされてまたイク♥

イっ――っくぅうぅうう～～～～♥♥♥）

子種を乞い願ってびくびくと締め付けるアスナの絶頂媚肉。その締め付けの中、ただでさえ太い輸精管は拡張・収縮を繰り返し、金玉で濃縮された精液を大量に運び出し、吐き出し続ける。アスナの尻肉を叩く鈍器だった金玉は精液を絞り出すように押しつけられ、その感触だけでアスナを絶頂させる。

瞬く間に子宮は満たされ、収まりきらなかった精液が結合部から逆流する。一人、いや、最低でも二人は孕まされたと子宮で理解出来てしまうほどに重たく濃い精液を注ぎ込まれながら、アスナは絶頂に次ぐ絶頂を重ねる。

口からは獣でも上げないような下品なアクメ声を上げ、全身をガクガクと痙攣させ、オス汁を溢れさせる膣穴からメス汁を噴き出しなが

ら、女としての幸せを享受し続ける。
やがて――そのチンポと同じくらい長かった射精が、ようやく一区切りを迎えたころ。
「――おぉっ……♥♥　ほぉっ……♥♥　はひゅっ、はひょお……♥♥」
「……ふうっ……」
息も絶え絶えといった様子のアスナの上で一息ついたキリトが、吐精を終えた肉棒をアスナの中から引き抜く。
なるべくゆっくりと体を動かし、アスナを刺激しないように気を使った動作だったが、全身過剰性感状態のアスナが追いアクメをキメるにはその動きだけで十分だった。
本日はまだ二回しか射精していないペニスは全く満足しておらず、相変わらず勃起状態のまま。アスナの体温と精液の熱さによって温められた肉棒は、オスの精液とメスの愛液で余すところなく塗りつぶされており、膣口と亀頭の先には数筋の精液が吊り橋のように繋がっていた。
「さて、と……」
キリトはベッドの上に座り直すと、ひっくり返ったカエルのように四肢を投げ出し、無様な姿で絶頂に浸り続けるアスナを抱き起こす。
「アスナ」
優しく呼びかけ、唇を重ねる。細い腰に腕を回して支え、頭を撫でて髪に触れる。愛情深い触れあい、もしくは次のセックスに備えた前戯で、アスナの意識をゆっくりと引き戻す。
（……あ、れ……？　……あ、そっか……♥♥　せっくす、してたんだっけ……♥♥
きりとくんのきす……♥　キス、されながら、ぎゅーってされるの……♥　すき……♥♥
もっとしたい……♥♥　キスも、セックスも……♥♥　いっぱい、いっぱい……♥♥）
性欲に溺れた頭ではベッドインからどれくらい時間が経ったかはわからないが、夜明けまではまだまだ遠いことは確かだろう。

第二ラウンド開始のおねだり代わりに、アスナはほとんど力の入らない腰をかすかに動かせば、キリトはそれに気付いてアスナの体を持ち上げる。

第二ラウンド開始の合図代わりに、アスナは精液塗れの蜜壺を広げ、更なる射精を求めて猛る固い肉棒を受け入れた。

そうして、二人はいつものように互いを求め合い、貪り合い、『性行為』スキルの熟練度上げと経験値稼ぎを続けた。アインクラッドに夜明けが訪れたのは、第十二ラウンドが終わって少しした後のことだった。

当然と言えば当然だが、その後も二人の関係にさしたる変化はなかった。《ＳＡＯ》をクリアするためにセックスを繰り返し、熟練度と経験値を稼ぐごくありふれた日々。

変化した点を強いて上げるなら、『性行為』スキルの熟練度が２００を越えた事と、半ば存在を忘れていた「性行為」スキルの最後の効果が発動したことくらいだろうか。

「こういう『スキル保有者限定クエスト』って、もう少し上層で出てくるもんだと思ってたけど……まさかここにもあるとはなあ」

アインクラッド第一層。アスナお気に入りの例のクリームが報酬となるクエストが発生する牧場。モーモーと声を上げて鳴く牛達の寝床、つまりは牛舎の中をキリトは歩いていた。

現実世界同様、こういった施設には独特の臭気が付きものだ。前回訪れた際にそれを経験して懲りているキリトは、今回は店売りのハーブ系アイテム――食べるとミントに似た香りで鼻が満たされる――を使用済みだ。

キリトの後ろに続くアスナも、もちろんそのハーブを使用済みだった。

「そう……だね」

特筆すべきはその格好だろう。キリトがいつも通りの装備である

のに対し、アスナのそれは明らかに異常だった。牛を思わせる白黒のまだら模様が入ったロンググローブとタイツで腕と脚を覆ってはいるものの、本来隠すべき体の中心部分は布きれ一枚身につけていない。

また、頭には牛の耳と短い角を模した飾りが付いたカチューシャが付けられている。牛耳の部分には金属製のタグがついており、アスナの家畜っぷりを更に強調している。タグにはアスナのリアル情報に繋がったバーコードと、『０９３０』という識別番号――実際はアスナの誕生日だが――が黒々とした加工で刻印されている。

それらに加えて、首には紅い革の首輪がしっかりとはめ込まれており、そこから伸びた鎖は前を行くキリトの手にしっかりと握られていた。

「さて、アスナ。まずは先輩達にちゃんと挨拶しとかなきゃな」

「先輩達って……この乳牛達のこと？」

「そうだろ？　だって、これからアスナも同じ仕事をするんだからな」

そのクエストが始まったのは、アスナお気に入りのクリームを補充すべく、二人で第一層にある牧場を訪れたある日のことだった。

本来、このクエストは農場主の困りごとを解決し、その対価としてクリームをもらうという仕様になっている。以前キリトが訪れた際も同様だった。

しかし、『性行為』スキルを持ったアスナが訪れたことで、スキル保有者専用クエストが発生。クエスト内容はもちろん『アスナ自身が雌牛となって、クリーム作りに必要な母乳（ミルク）を生産する』というものだ。

現在アスナが装備している『家畜のカチューシャ』、『雌牛の首輪』、『乳牛のロンググローブ』、『乳牛のタイツ』はクエスト開始と同時に支給されたものであり、それらを全て装備することで『母乳産出量大幅アップ』というバフが入るという特殊効果がついていた。

裸よりもなお恥ずかしい格好に加えて、アスナは四つん這いの姿勢で歩くことを強制されていた。まあ、それも当然だろう。二本脚で歩いて立つ雌牛などいないのだから。

「ほら、新入り。先輩達にちゃんと挨拶して、これから何するか説明し

ろ」
　アスナの首輪に繋がった鎖を、キリトがぐいっと引く。崩れかけた姿勢をなんとか維持しつつ、アスナはどうにか引き攣った笑顔を浮かべた。
「……せっ、先輩雌牛のみなさ～ん♥　おはようございま～す♥　新入り雌牛まんこのアスナで～す♥♥」
　四つん這いの姿勢から腰を高く上げ、自らの女性器がよく見えるよう姿勢を変える。そのまま媚びるように尻を左右に揺らせば、雌穴から溢れ出した愛液が床へと飛び散っていく。
「今日は～、私の旦那様で、飼い主様であるキリトくんにいっぱいミルクを絞ってもらうために来ました～♥♥
　ぶっっっとぉ～い飼い主ちんぽでマゾまんこバコバコされながら搾乳される予定なので、うるさくしちゃったらごめんなさ～い♥♥♥
　ぶもっ♥ぶも～っ♥　発情雌牛アスナ、雌汁びちゃびちゃこぼしておちんぽ様期待しながら通りま～す♥♥♥
　……これでいいかしら？　飼い主様？」
「よくできました」
　かがみ込んだキリトがアスナの頭を撫でる。ただそれだけで嬉しくなってしまう己の単純さを喜ぶべきなのか悲しむべきなのか、アスナは少し迷った。
「それにしても……もうこんなに興奮してるんだな。アスナ」
　通路に残ったアスナの淫水の痕をしげしげと眺め、キリトが言う。雌牛アスナが宣言した通り、既にアスナの蜜穴からは大量の愛蜜が溢れ出している。
「……しょうがないじゃない。今朝は……朝からあんなことしちゃったんだし……♥」
「まあ、正直俺も興奮してるんですけどね……」
　普段、迷宮区に行く日の朝は性行為を控え、別々に入浴し身支度を調える事にしている。一緒に入浴するとかなりの確率でどちらかが我慢できなくなってしまうからだ。
　しかし、今日は迷宮区には行かずここのクエストを進めると決めて

いた。故に、朝の様相は普段と違っていた。

先に起きていたアスナは、キリトの朝勃ちしたペニスを見つけるなり咥え込み、じゅぽじゅぽと音を立ててしゃぶり回し、いわゆる目覚ましフェラを遂行。キリトが目を覚ましたのは、アスナの口の中に精子をたっぷりぶちまけた後だ。

チンポを咥え込み、飲みきれずに逆流した精液で鼻提灯を作りながらピースサイン付きドヤ顔で勝ち誇るアスナ。そんなものを見せられてはキリトも黙っていられるわけがない。

アスナを風呂場に連れ込みつつ、愛撫を開始。シャワーを浴びつつ、フェラチオの余韻でサカっているアスナの体を弄くり、開かせた股の間に指をさし込む。普段のセックスで耕されたアスナの雌穴は、男の指の侵入に耐えきれるはずもなく、あっさりと潮吹きをキメて白旗を上げた。

そうして最後は風呂場にオブジェクト化したマットの上でシックスナインをして、お互いの性器に舌と口を這わせ、しっかりとイカせあった。そのおかげで普段よりかなり長風呂にはなったが、互いの欲求をどうにか落ち着かせ、また一日中ぶっ通しでセックスするような事態は回避できた。

とはいえ毎晩のようにがっつりと体を重ねている二人にとって、今朝のアレ程度では『生殺し』でしかない。その流れのままベッドルームに戻っておっぱじめなかったのは奇跡に等しい。

「ね、早く行こうよ……♥」

装備の布越しに股間を押し上げるキリトの逸物に、アスナは顔を擦り付ける。ペニス独特の硬さは、衣服越しでも心地よい。

「そうだな、行こうか」

キリトに鎖を引かれるまま、アスナは牛舎の中を進んでいく。尻を高く上げた四つん這いの姿勢のままで進むその姿は、畜舎にいるどんな牛よりも無様だ。アスナがそれを自覚していないはずもなく、それに興奮していないはずもない。

荒い息を吐きながら全身でチン媚びする新入り雌牛が、ベテラン雌牛たちの間を進んでいく。そうして少しばかり進むと、正面に扉のつ

いた壁が現れた。
「この扉、前に来た時は確か『故障中』って書いてあったような……？　クエストフラグが立つと開放されるのか」
　キリトは部屋の扉を開け、アスナを中に引き入れる。畜舎を仕切るための簡易な建て付けらしく、天井はない。向こう側には同じように扉付きの壁があることから、おそらく同じような仕切りが続いているのだろう。
　壁と壁の間には、頭と両腕を載せるためのくぼみが設けられた木製の手すり――いや、枷だ。よく見れば部屋の壁には上下を逆にしたようなパーツが立てかけられており、明らかに固定するためのはめ込み穴まで用意されている。またその近くには、絞ったミルクを入れるための大型ミルク缶が、数十本まとめて置かれていた。
「なるほどね……セルフサービスってわけか」
「キーリトく～ん♥　はーやーく～♥」
　両手を――否、『前脚』を手すりに引っかけるようにして上体を倒したアスナが、尻を突き出して交尾をねだる。キリトはミルク缶を引きずってアスナの近くに置きつつ、枷の上パーツを持ち上げて手すりに重ねる。かちゃん、という音と共に上下のパーツが組み合わさり、アスナの首と両手首を拘束する穴を形作った。
「苦しくないか、アスナ」
「大丈夫だよ、キリトくん。見て、全然抜けない……♥　完全に捕まっちゃった♥」
　アスナが軽く体を動かしてみせるが、しっかりとハマった木枷はびくともしない。
　さながら、ギロチンにかけられた貴族のように。三つの穴で完全拘束されたアスナは、逃げ出す代わりに尻を突き出してオスに媚びる道を選んだ。
　その背後に陣取ったキリトは、どろどろに濡れたヴァギナにペニスを宛がうと――ゆっくりと力強く、アスナの中に逸物を押し込んだ。
　それから、約三十分後。

「――んお〝お〝おお〝お〝おおっ♥♥　んも〝っ♥　んも〝お〝おおっ♥♥　もっも〝お〝おおおおおっ♥♥♥」

「よーし、三缶目できあがりっと」

バックの体位で肉棒をぶち込まれ、雌牛のように喘ぐアスナ。そして、アスナの胸から母乳を搾り取る職人芸を身につけたキリトの姿がそこにはあった。

「一缶は納品用にするとして……ストレージの空きからすると、あと4，いや、5缶くらいは持てるな。

クリームへの加工はここでやってもらえるみたいだし、どうせなら貰えるだけ貰っておこうか。アスナ」

「ま〝っ、ま〝ってぇ♥♥　お〝っ♥ひいっ♥♥　そんな、そんないっぱい絞られたら♥　しっ、しんじゃう♥♥」

「死なない死なない。ここ《圏内》だし、ＨＰ減ってないだろ？」

「ちがうの♥ちがうのぉっ♥♥　おっぱい、しぼられながらぁ♥　キリトくんのちんぽでごりゅっ♥ごりゅっ♥されるの、きもちよすぎてこわれちゃうのおっ♥♥

だから、ゆる――ひぃいいいいいっ♥♥」

アスナの懇願を聞き流している間に満タンになったミルク缶をストレージに格納し、空のミルク缶と入れ替えたキリトが搾乳を再開する。

この三十分ほどで既に乳搾りのコツは掴んでいる。効率よく母乳を絞るには、実際の乳搾りのようにアスナの胸を弄って乳首の先から絞り出すように指を動かせばよいことも、単純に男根を突き込んで膣を虐めてやれば面白いように母乳を噴き出すことも把握済だ。

一方で、アスナに出来ることと言えば――普段のセックス以上に何一つない。ただひたすら、拘束された体を悶えさせ、汗と涙と唾液と愛液と潮と母乳を噴き散らかしながら気持ちよくなることだけが許されている。

「お〝ぉ〝っ――おほお〝おおおお〝おおっ♥♥　みるっ、みるく♥♥　とまん〝に〝ゃ――いひい〝いい〝いっっっ♥♥

お〝っお〝ぉ〝っおおおお〝っ♥♥　んも〝っ♥♥　も〝おお

おっ♥♥♥」

「……待てよ？　クリーム加工はともかく、この装備さえあればどこでもアスナのミルク絞りたい放題なんじゃないか？

宿に帰ったら試してみようぜ、アスナ」

「～～～っ♥♥　やっ♥やああ〃ぁあ〃ぁっ♥♥　そんな、いっぱい♥しぼっちゃ、らめぇっ♥♥　お〃っおお〃おおおっ♥♥

きりと、くんのっ♥♥　あかち〃ゃん〃の〃ほぉっ♥♥　あかちゃんの分、なくなっ――いっひいい〃ぃ〃いっ♥♥」

Ｇスポットを殴りつける太いペニスと硬い亀頭の感触。丹念にアスナの乳首を責め立てる乳搾り愛撫。その波状攻撃を食らって、アスナは本日何度目かの絶頂を迎える。ぴん、と伸びた脚の間からびしゃびしゃとイキ潮が舞い散り、それに負けない勢いで乳首の先から母乳が噴き出す。

みるみるうちに、ミルク缶に白く濃い母乳が溜まっていく。その勢いは、本物の乳牛にも引けを取らない程だ。

「いやあ、こ の量を出せるなら全然大丈夫だと思うぞ、アスナ。

赤ちゃんといえば、Ｍｏｄにアイテム出産機能もあったな……あれも次に試してみるか」

アスナの耳元で、アスナをイキ壊す算段を囁く。小屋に鏡がないせいでアスナ自身は気付いてはいないのだが、計画を聞かされたアスナの顔は、期待と興奮とセックスの快感によって緩みきっていた。

その雰囲気を感じ取ったのかどうかは不明だが、キリトは腰の速度を速め、アスナの膣奥深くへと肉棒を突き込むと――まるでトイレで小便をするかのような気軽さで、溜まった精液を解き放った。

「――――お〃っお〃おおお〃おおお〃おおお〃お〃お〃っっっ♥♥　も〃ぉおおおおおおぉっっ♥♥♥

しぎゅー、やげり〃ゅ〃ぅうぅっっ♥♥♥　イっ――ぐ♥♥　いっぐイぐぃ〃ぐぅうぅぅ〃ううぅ〃ぅう〃ぅう〃ぅうう♥♥♥」

腰と腰を密着した状態で、長く太いペニスに膣道を塞がれ、逃げ場を失った子宮にどっぷりと叩きつけられる、熱く重たいオスの精液（ミルク）。

畜舎中に響く嬌声を上げながら、アスナは今日もっとも深い絶頂に

叩き込まれイキ潮を噴き出す。同時に両方の胸からはメスの母乳（ミルク）を噴き出し、乳牛としての役割を果たしながらミルク缶を満たしていく。

メスとして、性処理の道具として、家畜として使われる。人間としての尊厳を粉々にされる悦びが心を満たし、意識をスパークさせた。

「お〝ひ……♥♥　あ〝っ、あ〝ぁあ〝あ〝っ……♥　おっお〝お〝っおおぉお〝お〝っ……♥♥」

「ふうっ……」

熱い溜息と共に、キリトがアスナの頬に手を触れさせ、そのまま口付けを交わす。絡み合う舌と舌、吐息の中で、キリトの指先から漂う母乳の香りがアスナの鼻腔を擽る。もう片方の手が手かせを乗り越え、アスナの手の上に重なった。

どぷっ、どぷっ、と重たく長いキリトの射精。それが終わるまでの間、そうして睦み合う。メスとして扱われていた数秒前とは真逆の甘い時間。子宮で感じる種付けの悦びに、愛される喜びが溶け合い、混じり合う。

そうして、射精が終わってからもしばらく唇を重ね続けたあと。久々に唇同士が離れた。

「アスナ」

「……？」

「産んでくれるか」

「しょうがないなあ……♥♥」

重なった手を動かし、アスナはシステムウィンドウを呼び出し、スキルメニューを開く。表示される『性行為』スキル。『アイテム生成（出産）』Ｍｏｄの説明欄には『現在の出産確率：３１０９％』という表示と共に、ボテ腹（しゅっさん）モードをＯＮにするボタンが表示されている。

キリトの指を重ねたまま、アスナは『ＯＮ』ボタンをそっと押した。

最終的に、溜まったミルク缶の数は六個半だった。納品分の一缶を除いた残りが加工され、最終的にアスナお気に入りのクリームが３５個、そして《アスナのミルク》という食品アイテムが２０本手に入っ

た。

また、『アイテム生成（出産）』Ｍｏｄによって生成されたアイテムの数は３１個に上った。鶏卵に近い形状のカプセルとして出産されたアイテムのうち、そのほとんどはインゴットやその他素材類だった。

とはいえ、珍しいアイテムも１０個に１個程度の割合で含まれていた。そのうち『肌噛みの荒縄』はどこかでオイル系のアイテムを手に入れて『慣らし』をしなければ使えそうになかったが、低温で融ける『紅の蝋燭もどき』、そして『連なりの肛虐宝珠』は、翌日の夜からアスナに使われることになった。

「――ミトっちが見たら気絶するナ、コレ」

「そうかもな……まあ、見ることはないから大丈夫だろ」

「エ？　見せないのカ？」

「いや見せねえよ！　ワンシーンだって見せられるわけないだろこんなの！」

アスナの痴態の一部始終、その上映会を終えたアルゴが相変わらずの調子でキリトをからかう。呆れた様子でキリトがため息を付けば、アルゴはその矛先を、キリトの上にいる人間に向けた。

「キー坊はああ言ってるみたいだけド、アーちゃん的にはどうなんだイ？」

「……ふえ？　わ、わたしは……」

騎乗位で繋がったままキリトの上に寝転んでいるアスナの反応は普段より何百倍も鈍かった。

まあ、無理もない。深澄との電話で席を外し――外していたのは席ではなくベッドだが――て戻ってみれば、そこで上映されているのは自分の過激なセックス映像。とはいえいつもの事なので気にせず、中断させられてしまっていたフェラを再開。たっぷり舐め回して隅から隅まで綺麗にした所で、映像の中の自分に触発されてついつい騎乗

位。画面の中のアスナにも負けない淫乱っぷりを披露し、結局二回も膣内射精され、そのままキリトの上に倒れ込んで今に至るのだから。

「わたしは……ミトになら、いいかな……♥　みられるの、きもちよさそうだし……♥」

「おっト、これはさすがのオネーサンも予想外な答エ……。アーちゃんも相当ぶっ飛んじまってル……こりゃあ間違いなくキー坊の悪影響だゾ。なア、キー坊？」

「――今、必死に否定材料を探したけどどこにもないな……」

「責任取ったれヨ」

「ああ」

「ついでにオネーサンもナ」

「もちろん。ついでにするつもりはないけどな」

「……大人のジョークのつもりだったけド……。即答されるとそれはそれで恥ずかしいナ……」

セックスの快楽に酔うアスナとはまた異なる照れ笑いを浮かべ、アルゴがもじもじと身動ぎをした。恥ずかしそうにしつつも、キリトの腕枕から逃れようとしないあたりは意外と素直である。

そんな風にしていると、キリトの上に覆い被さったままのアスナが何かを思いついた顔でアルゴを見た。

「……そうだ♥　アルゴさんも、混ざる？」

「混ざるっテ……あれにカ？」

「そう。アレ♥」

アレというのはもちろん、ループ再生が始まったアスナの痴態――《ＳＡＯ》低層階を思い返すあのプレイである。

「そーいヤ、あっちのアーちゃん達はもうすぐ第二層だったカ……。あの辺りで起きてたことって言うト……」

一瞬だけ思考を巡らせたアルゴだったが、すぐさま何かを思い出してにやりと笑う。そうして、その唇をキリトの耳元へ。

「キー坊。第二層であった『強化詐欺』事件、覚えてるカ？」

「ああ」

キリトにとっては好き好んで思い出したい類の思い出ではないが、

忘れてもいない。
「あの事件が解決する前あたり、タランの宿屋でキー坊が謎の白くて濃くて固体と液体の中間くらいのクリーム状の白濁液を薄着のアーちゃんにしこたま飲ませた事があったロ？」
「いかがわしい言い方は止めなさい。……あったけど」
キリトにとっては好き好んで思い出したい類の思い出であるし、忘れてもいない。
なんなら最近もよくやっている。やらせている。まあ、当時のあれはタラン名物饅頭の中に入っていたごく普通のクリームであったし、ここ最近でアスナやアルゴ達に飲ませているのはごく普通にいかがわしいものだが。
「オネーサン、確かその時アーちゃんに抱きつかれて同じベッドに入ってた気がするんだよナー……」
「だからいかがわしい言い方は止め……いや、入ってたな。そういえば」
「だロ？」
アルゴが「こんな感じデ」と両手でピースを作ってみせる。アルゴのあのドヤ顔ダブルピースはそうそう忘れられるものではない。
「それでダ。もしあのタイミングでアーちゃんのスキル『ハンティング』を使われたラ……オネーサンはどうなっちまうんだろうナ？」
「ほう、ほう……」
油断。密着。拘束。密室。いくら隠蔽（ハイド）と身のこなしに長けたアルゴであっても、あの状況下でアスナに『ハンティング』されては回避できるはずもない。倫理コードを外され、装備を外され、アスナによって拘束されてしまっては——あとはもう、捕食者の思うがままだ。
そう考えたのはキリトも、アスナも同じだった。
「——試してみる？　アルゴさん♥」
どうにかこうにか腰を浮かせ、雌穴から肉杭を抜き外す事に成功したアスナは、そう言うなりキリトを挟んでアルゴの反対側へ転がり落ちる。頭をキリトの腕に預けたアスナは、胸板越しにアルゴを見つめ

た。
「――それもありだナ」
　キリトの上に出来たスペース。そこによじ登るように、アルゴが入り込んでくる。先ほどまでのアスナのように、うつ伏せの体勢でキリトと向かい合う体勢で。
「悪いナ、アーちゃん。お楽しみ中だったのニ」
「大丈夫。その分はキリトくんに身体的に払ってもらうから。ね、キリトくん？」
「俺かよ……いいけど。それで、どういった支払いをご所望で？」
「来週、深澄とＡＲのイベントに遊びに行くんだけど、会場が駅からちょっと遠くて……。だから、もし予定がなかったらでいいんだけど……近くまで送ってくれない？
　キリトくんのバイクで」
「なんだ、そんなことか。ああ、全然ＯＫだよ」
「やったぁ。ありがとう、キリトくん♥」
「詳細は後で教えてくれよな。……ところで、だ。なんでそんなにニヤニヤしてるんですかね、《鼠》さんは」
　二人の会話を間近で聞いていたアルゴのニヤケ面に、ついにキリトが気付いた。
「いヤ、アーちゃんも結構可愛いとこあるんだナー……って思っただけだヨ」
「アスナの可愛くない所を探す方が大変だという話は一旦置いといて……どういう意味だ？」
　ふふん、と鼻を鳴らし、アルゴが答える。
「アーちゃんが言ってるＡＲイベント、まあ十中八九例のアウトレットモールのオープンイベントだと思うんだよナ。あってるカ？　アーちゃん」
　アスナがこくりと頷く。その表情はきょとんとしており、アルゴが何を掴んだのか分かっていないようだ。
「確かにあのモールは駅から近くなイ。デカさを確保するためだろうナ。

たダ、知ってるかキー坊？　そのアクセスの悪さをカバーするために最寄り駅から無料の送迎バスが出るんだヨ」
「なんでアルゴがそこまで知ってるんだよ」
「全部宣伝されてたからに決まってんだロ」
　本日二度目の『これだからＶＲ過激派ハ～』という煽りを挟み、アルゴは推理を続ける。
「さて問題ダ。確かに会場は駅から遠イ。しかしバスが出てル。ということは『足』には困らなイ。なのにアーちゃんはバイクで送ってくれと頼んできタ。なんでだと思ウ？」
「……バスが出てるのを知らなかったから、か？」
「アーちゃんに限ってそんなワケないだロ～。キー坊じゃないんだからヨ」
　どういう意味だと言い返したい衝動をぐっと堪え、キリトはアルゴに続きを促した。
「オイラの見立てでは答えはひとツ……いヤ、ふたつとみタ」
「二つ？」
「キー坊のバイクに乗せてもらいたかったというのがひとツ。
　それと――バイクを駆って自分を送ってくれるカッコいい彼氏をミトっちに自慢したかったというのがひとツ。
　……というのがオネーサンの見立てだガ、どうダ？」
「いやいや、それは流石にアルゴの邪推しすぎだろ……な、アスナ？」
　同意を求めてキリトはアスナの方を見る。解答を求めてアルゴもアスナの方を見る。
　二人の視線の先では――ぷるぷると体を震わせたアスナが、顔を真っ赤に染めていた。セックスしている時よりよっぽど紅く。
「マジか」
「ナ？　大当たりだロ？」
「マジですか、アスナさん……」
　図星であることは火を見るより明らかだった。羞恥心に焼かれきったアスナはどうやら開き直ったらしく、がばりと上体を起こすと様々な感情がない交ぜになった笑みを浮かべながらキリトを見下ろ

す。
「ええ、マジです。大マジですけど何か文句でも？　キリトくんのバイクに乗せてもらうチャンスだと思ったし、あわよくば深澄にキリトくんのカッコいいとこちょっと見せて自慢しようかなって思ってましたけど……何か文句でもございますか？　キリトくん？」
「い、いえ……ナニモゴザイマセン……」
　怖ろしくも可愛らしい笑みを浮かべたアスナの圧に、キリトはあっさりと白旗を揚げた。こういう時に反論するのはバカのやることである。
「よろしい。では、もう一つ聞いて欲しいお願いがあるんだけど」
「なんなりと」
「ここまで知られてしまった以上――アルゴさんをただで帰すわけにはいかないわよね？」
「――確かにな」
　アスナとキリトの瞳にギラリと妖しい光が奔る。
　危険を察知したアルゴが飛び退る――よりも、キリトがフリーになった両腕でアルゴをがっしりと抱え込む方がコンマ数秒早かった。最前線で情報をかき集めていた《鼠》と、《二刀流》を獲得した最前線攻略組の間にあるほんの僅かな反応速度の差が命運を分けた。
「き、キー坊……なんか目が怖くないカ……？」
「気のせいだろ」
「違ウ！　絶対気のせいじゃなイ！　レアなＭｏｂ見つけた時と同じ目すんナ〝ァ〟！」
　アルゴの悲鳴を無視し、キリトは彼女を抱き寄せたまま体ごと回転。アルゴを己の下に組み敷きつつ、彼女の足の間に両脚をさし込み、ジャッキのような力強さで股を開かせる。
「もしかしてこレ……詰みカ？」
「詰みだな」
「ア、アーちゃんの可愛いとこみれた口？　せめて手加減し」「手加減しなくていいからね、キリトくん」
「――ア、終わっタ」

アスナの冷徹な笑みを背中に感じたまま、キリトは引き攣った笑みを浮かべるアルゴに覆い被さり、彼女の体を貪り始めた。

その後のアルゴがどうなったかは――まあ、言うだけ野暮だろう。男の体重と筋力で抑え込まれ、長い肉棒で子宮を虐め抜かれ、たっぷりと膣内射精を喰らって失神し――そんな事で逃げられると思ったら大間違いだとばかりに、ペニスバンドを着けたアスナによるアナルファックで叩き起こされ、鳴かされ、狂わされ、子供を産むことを誓わされ、意識を飛ばされ、また無理矢理覚醒させられ、愛液と潮を何度も何度も噴かされ続ける事になるのだが――それはまた、別のお話。

ついでに、週末。

キリトはしっかりとアスナをバイクの後ろに載せ、イベント会場であるアウトレットモールに送り届けた。タイミング悪くその光景を深澄が見ることはなかった――と、アスナもキリトも思っていたのだが、実際その様子は当人達の与り知らぬ所で深澄にばっちりと目撃されてしまうのだが――それもまた、別のお話。